キモオタの国盗り物語

はしゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キモオタの国盗り物語

【Ｎコード】
Ｎ５７３７Ｏ

【作者名】
はしゃまくんくん男

【あらすじ】
時代が戦国から安土桃山へと変わっていく夜明け、尾張に簗田政綱なる武将がいた。彼は桶狭間の戦いで、主君信長から勲功第一の論功行賞を受ける。しかし、凡将だった。むしろ、キモオタだった。だが、彼は信長の天下統一事業に大きな役割を果たす。失恋や裏切りにめげながらも、戦場では逃げ惑いながらも、木下秀吉に騙されながらも、簗田「牛太郎」政綱は信長や明智光秀、徳川家康といった大物たちに一目置かれていく。なぜなら、彼は現代からタイムスリップしてきた男だったから。

いざ、戦国！（前書き）

＞ｉ１７０８０―１９３９＜

→砺波釉二さん＞ｈｔｔｐ：／／ｍｙｐａｇｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／６６６４０／＜がなぜかつくってくれましたｗ

いざ、戦国！

うーむ。

ここがどこかと思って見渡してみたけど、すごい田舎なんだよね。

いや、田舎っていうより、現代じゃないような……。

馬が走っている。そこに人が乗っている。着ているのは着物。

どうやら、タイムスリップしちゃったみたいｗ　ワロスｗｗｗ

いやいや、ワロスやっている場合じゃない。大昔ということは、ネットの環境とかが整ってない。ていうか、ＰＣすらないでしょ。じゃあ、どうやって、アニメを見るんだよ。どうやって、桜高軽音部の中野梓ちゃんに会うんだよ。

てか、どうやって生きんの？

いや、ちょっと、待て。

生きるって何？

２５年間、彼女なし、童貞キモヲタ、職業フリーター（コンビニの深夜バイト、週に二日。店長はもうちょい出てくれって言うけど、深夜バイトに三日以上とか無理っス。おれ、体質的に運動会の徒競争ビリとかのレベルだし）、夢なし、希望なし、しいて言うなら二次元の世界に行って、中野梓ちゃんことあずにゃんをぺろぺろしたいぐらい。

生きるしかばねのようなおれ。

でも、そんなダメダメキモオタがタイムスリップ。この状況だと、選択肢はデッドオアアライブのみ。このままニートがいいとか、就職するなら事務職キボンヌとか、そういう幅の広さは確実に期待できない。うーん。そうなると、体育の授業のサッカーでキーパーをやらされていたおれだからなあ。デッドが濃厚でしょ。

でもさ、タイムスリップってありがちだろ。よくあるストーリーっぽくなれるんじゃないの。活躍できるんじゃないの、この時代で。

きっと、この時代って、ありがちに戦国時代だろ。で、おれは戦

国武将。歴史を知っているおれは時代を先読みできるから、豊臣秀吉みたいに成り上がれる。そして、天下人のおれは姫たちに囲まれてデュフフ。

時代を先読みできるのは、神のごとし、強力な力だ。

そうすると、おれという武将を『信長の野望』のステータスにすると、

知力１００
政治９８
武力１１
魅力３

ぐらいだろうな。

武力と魅力はいかんせんゴールキーパーレベルのおれだから仕方ない。

いざ、ゴンロク！

とか、なんとか、野望をみなぎらせていたら、あっちから馬が走ってきている。すごい速さで。大群。あれって、合戦の雰囲気だよね。おれは思わず涙目。多分、なんとなく踏みつぶされて死亡し、そのまま野望終了。

と、思ったら、馬の数はほんの五頭だった。なんだよ。おれ、ビビりすぎだろ。だいたい、あの人たち甲冑とか着ていないじゃんか。

まあ、とにもかくにも怖いから見つからないようにしないとな。おれは鼠みたいにして草葉のかげに隠れた。ドキドキするおれの前を人馬は駆けていこうとする。けど、目が合っちゃった。一番、先頭を走っていた若い奴に。

Uターンしてきた。

ヤバス。

マジでヤバス。

ヒヒーンって馬を鳴かせながら若い奴は手綱を絞り、おれを高いところから睨んでくる。

おれ、ガクブル。だって、刀抜いているんだもん。

「乞食！」

切っ先を鼻の先に向けられた。オワタ。首ちょんぱ濃厚。

「ひいいいっっつ」

ううっ。だせえ。この時代にかけては、おれって雑魚レベル。いや、いつもそうなんだ。おれは雑魚なんだ。いつだって雑魚。

「ひいいいっっつ」

「妙な出立ち。いずこのモンだ！」

「ひいいいっっつ」

「答えんか！　さもなくば斬るぞ！」

「ご勘弁くだせえ！　あっしは、あっしは……」

あっしは、って、泣けた。おれ、すっかり雑魚に染まっているし。

「なんだ！　答えんか！」
「あっしは、あっしは、未来から来たモンでごわす」
「何い」
若い奴、刀の握りをぐっと強くする。あかん。うち、斬られるパターンや。なんで、言ってしまったんだろ。そんなこと言ったら斬られるに決まっている。
「おやかた様、斬ってくれましょうぞっ！」
そう言ったのは、おやかた様のお付きみたいな、いかつい中年の奴。何を煽ってんだよ。氏ね。
「我が家中を惑わそうと、忍び込んできた類！　今のような時期ならもっともなこと！　この権六、おやかた様の代わりに斬ってくれましょうっ！」
ちょ、ゴンロクってｗｗｗ　偉そうなわりに百姓ネームｗｗｗ

いざ、家来！

「待て。斬るな」
あれれ。おやかた様が馬から降りてきちゃったよ。刀は納めてくれないけど、その刀を肩に乗っけて、おれに顔を近づけてきて笑う。
「おもしろいじゃねえか。未来から来たなら、述べてみい。今後の天下の情勢を述べてみい。だが、つまらんことを抜かしてみろ。そのときは斬る」
と、言われましても。
「と、言われましても」
「なんだ」
「あっしは、こ、こ、ここがどこで、い、いつの時代なのか、わわわかりません」
「ほう。ならば、今の時代の何を教えてやれば、わかる」
「えええーっと。えええーっと。あのう、あのう、ゆ、有名な人とかを言ってくれればわかります。えええーっと。あのう、そのう、あのう、と、徳川家康とか、源義経、義経っ？　いや、ああ、その、頼朝っ？　あ、あ、あと、の、信長とか、お、お、織田信長とか」
「何？」
「いやっ、わ、わかりません！」
「信長と申したな。今」
「へ？」
「信長と申したろうが！」
「申しましたっ！」
「やはり、不埒な奴っ！　斬ってくれましょう！」
あちゃー、ゴンロク、刀を振り上げちゃったよ。
「待てっ！　お前を叩き斬るぞ、権六！　おさめろ！」
「は、はあ」
ゴンロクしょぼーん。ざまあｗ

「おい、牛」
牛？　おれのこと言っているの？　なんだよ、そのあだ名。むしろ、豚だろ。
「なぜ、俺の名が源氏の棟梁のように後世に残る」
「え？　あ、あのう、の、の、信長さんッスか？」
しーん。おやかた様は何も答えず。おれを睨むだけ。
「いや、あの、だから、その、だからっ！　いや、あ、あのう、有名じゃないッスか。信長さんって。は、覇王みたいな感じで」
「覇王？」
「そ、そうッス。は、は、覇王ッス」
そうしたら、おやかた様はきゃきゃきゃって笑い声を上げた。きゃきゃきゃって。結構ね、甲高い声。これが本当に信長さんだったら、びっくりするね。だって、声、高いもん。
で、おれも、ははははって笑った。愛想笑いで。
「俺が覇王とは笑わせる。尾張の芥子粒ごとき俺が。今まさに踏みつぶされんとしている俺がな！」
すると、おやかた様、おもむろに腰を上げて、刀をおれに振りおろしてきた。
えっ、ウソだろってな思いで、おれ、目をつぶることすらできなかった。
でも、刀は首元ぎりぎりのところで止まった。
「おもしろい。下道め。ならば、この覇王に仕えてみい」
え？　おれ、助かったの？
てか、おしっこ漏らしそうだった。

てか、誰？

「なんともまあ、醜い牛だな」
　馬上から蔑む目。氏ね。てか、誰？　マタザとか言われていたけど。知らねえよ。少なくとも信長の野望・天下創世にはマタザなんていう武将はいなかったからな。言っておくが、こいつはただの百姓侍（ケメン）だ。
　殿は、このマタザに付いて行けとか言って、ゴンロク以下ｅｔｃを連れてどっかに駆けていったわけ。
「衣服もこれまた醜い」
　ユニ○ロのスウェット上下のおれ、涙目。おれだって一応オシャレとかするし。外に出るときは、レザーパンツとか履くし。言っておくが、おれはいきなりタイムスリップしちゃったんだからな。
「ふん。気にいらんが付いてこい」
「アイアイサー」
「？」
　おれだって気に入らないし（イケメン）。
　パカパカと馬を歩かせるマタザに付いていく、おれ。
「お前、後世から来たと言っていたな」
「イエッサー」
「なんだ、それは」
「後世の返事です。左様でございますの意味です」
「なら、左様と言え！　叩き斬ってやる！」
「ひいいいっっつ。ご勘弁！」
　なに？　この超絶ＤＱＮ野郎。急に槍をぶん回して、めっちゃ血気盛ん。てか、この時代の奴らって無法者すぎるだろ。治安率悪すぎ。日本じゃ考えられないヤバさ。
　くわばらくわばら。おれ、こいつらをあんまりナメてると痛い目に合うことを学習。高校時代にＤＱＮにボコられたこと思いだして

反省。。。
「おっしゃる通り、あっしは未来から来たモンでごわす」
「なら、俺はどうなる」
は？　何を言っているんスか。お前なんか名も知らんぜよ。
「無論、俺は後世にまで残る豪傑となってるだろう。どうだ？」
「ははーっ。マタザ様は後世にまで残る豪傑となっております」
「まことか？」
「槍のマタザと言えば、それはそれは、神のごとき祀られようでございます」
ワロタ。おれって口が上手かったみたい。デッドオアアライブだと、人間、キモオタでもなんでもできるもんですな。
「なるほど。ならば、今度のいくさ、一番槍だな。お前の話だと俺は死なん。たとえ、大軍と言えども、俺は死なん。あっはっはっは」
バカすぎ。今度のいくさで氏ね。あわれ、マタザ。
「気に入った。城に参られる前に、我が家に寄れ。飯を馳走してくれるわ。腹がへったろう。あっはっはっは」
単細胞うぜえええええ。

奥さん（ロリ）

おかえりなさいませえっ。
実は超絶ＤＱＮ野郎、そこそこ偉かったみたい。
三人の子分がお出迎え。給仕の女も二人。ちっ、百姓侍のくせに。
。。どうせ、運良く大将首でもあげたんだろ。
「旦那様、おかえりなさいませえ」
！？
なにこれ。
奥さん？
「客人だ、まつ。腹がへっているから、飯を馳走してやれ」
「かしこまりました」
と、奥さん、頭をぺこり。
若すぎでしょ。てか、え？　中学生ぐらいだろ？　おい。何をやってんの、マタザ。ＤＱＮのうえにロリコン？　羨ましすぎだろ。。
。
「どうだ。俺の新妻だ。どうだ」
いるよね、こういう奴って。何を求めてんの、お前。氏ね。クソッ。
「かっかっか。まあ、言葉も出ないだろうな」
うぜえ。てか、早く飯寄こせ。トンカツ食いたいわ。ブヒブヒ。
で、薄汚ねえ居間で待っていたら、奥さん（ロリ）が危なっかしい足取りで膳を運んできたってわけ。それが、まあ、質素なこと。飯と、小さい魚だけ。ワロス。ＤＱＮ野郎。めっちゃ貧乏。
で、まずい。これがまずい。まず、飯が冷たい。あと、ぼそぼそしすぎ。チン無しのレトルトご飯パック並。激まず。でも、ＤＱＮ野郎は、「俺の嫁が炊いた飯はどうだ？」みたいな目で見てくる。
うぜえ。お前は舌までＤＱＮか。クソ野郎。
魚は固い。罰ゲームですか？　氏ね。噛みちぎれん。「あらあら。

普段から廃棄のコンビニ弁当を漁っている方は心も奥歯も軟弱です
こと」みたいな笑顔で、うふふなんて笑っている奥さん（ロリ）。
ＤＱＮはバリバリ食う。飯も魚もバリバリって食う。まさに野獣。
ビースト。でも、イケメン。
そんな野獣に奥さんはうっとり。氏ね。今夜もしっぽりですか？
ド変態野郎。

トラップ！

「ところで、お前、そんな格好で城に参上するのか」
「いやあ」
首をかしげるおれ。当たり前だろ、ボケ。おれは着の身着のまま、タイムスリップしたんだ。そんな格好じゃなかったら、どの格好って言うんだ。ボケ。
なーんてことはもちろん言えず、
「あっし、これしか服がないんです」
「なら、貸してやる。まつ、何かあっただろ。俺の着物を貸してやれ」
「かしこまりました」
ほほう。あっしもこの時代のものを着れば、それなりに風格が出てくるもんよ。
「あと、髪もいかん。おい、みち。客人の髪を結ってやれ」
ほほう。ちょんまげですか。これはこれは、あっしも戦国の世にいざゆかん。
それでは、さて、変身。
「ぷっ」
マタザ殿。何がおかしいんスか。
「似合わん！」
・・・・。
わっはっは、じゃねえし。何ですか、この仕打ち。着物の袖も裾も短いし、髪もただオールバッグにしただけだし。
「お客様では旦那様のお召し物は大きすぎます」
奥さん、普通に困ってるし。なんか、萌える。いや、ふざけんな。これはＤＱＮの罠だ。絶対にこいつはわかりきっていたんだ。クソ野郎。
でも、おれ、こいつ怖い。

「いや、あっしのためにここまでしてくださって有難うございます
る」
「あっはっはっは。礼などいらねえよ。あっはっは。殿もさぞ喜ば
れるだろう。あっはっはっは」
氏ね。クソ。

レシーブ&スマッシュ

横綱の付き人みたいな格好のおれ。町の人々（てか、集落の小汚ねえ奴ら）の視線を浴びながら城へ。チクショウ。いつの時代に行っても、おれはキモオタ扱い。

しかも、ＤＱＮの馬を引く役目まで。ふざけんな。おれはこいつの子分になったつもりはねえ。断じてねえ。おれはこんな奴と一緒に戦場で死なねえ。絶対に死なねえ。

やがて、お城。

？

お城っていうか、館。観光地とかによくあるふうの、木塀の館。門も木。なにこれ。名古屋城じゃないの？　信長って。

「信長様の命で参上した。門を開けい」

「これは前田様！」

へ？　前田様？　嘘？　もしや、こいつって。前田慶次？

ぽかんと、馬上のＤＱＮを眺める、おれ。

妙に勝ち誇っている、ＤＱＮ。

いや、まてよ。前田慶次って確か、前田慶次郎利益だったよな（花の慶次より）。じゃあ、マタザってなんだ。

ん？　マタザ？

前田でマタザ？

ひょえええええっ。

前田利家かよっ。

そういや、秀吉が前田利家のことをマタザって呼んでいたわ（花の慶次より）。

・・・・。

ふざけろ。

なんで、おれが前田利家なんかに顎でこき使われにゃあならねえんだ。こいつ、所詮はただのクソジジイじゃねえか（花の以下略）。

チクショウ。チクショウ（´；ω；`）
成り上がって天下統一なんて、夢のまた夢だ。天守閣で姫様たちとデュフフなんて夢か幻だ。所詮はマタザの子分なんだ。おれって。おれって。
でも、てことは、あの奥さんは、おまつ・・・。
レシーィィィブ&スマアアアッシュ！
「おい、何をにやにやしてやがる」
あれ。いつのまに土下座してたんスか。殿。
「早くお前も膝まづけ！　この鈍牛！」
あいたた。あきまへんがな。殿。そう、髪を掴んじゃあ、いけませんがな。あっしは鈍牛。恋する鈍牛でんがな。恋は春のごとく。春は浮世のごとく。ふわふわと胸の中に流れるもんです。

又左は黙ってろ

「おう、参ったか！　牛！」
「へえ。参りました」
「頭が高いぞ！　鈍牛！」
あいたた。そこまでせえへんでも。擦りつけすぎて石ころがおでこに埋まっておりますぞ。
てか、マジで痛いんスけど。クソマタザ。氏ね。あ、当分死なないのか、こいつは。チクショウ。
「身なりが変わっているな、牛」
「左様。おやかた様の前に参上する以上、身なりは整えさせんと考えた上、俺の着物を貸し与えました」
「似合わねえな！」
「左様。俺も似合わんと思いました」
うるせえ。こいつ、本当に大嫌いだ。
「きゃっきゃっきゃ。似合わん似合わん。牛は牛なりの身なりがあるだろ。牛は人真似をするもんじゃねえ。だからな、こいつで整えろ」
そう言って、信長、じゃらって小判をおれの前にぶん投げてきた。小判が五枚。たったの。ケチ。
「おやかた様！　こんな奴に勿体なきこと！」
「良い。俺はこいつが必要だ。だが、牛だ。牛は何もできねえ。だから、施すだけだ」
「しかし」
「又左は黙ってろ」
「は、ははあ」
ざまあ。ＤＱＮとはいえＤＱＮの親分には逆らえないのは世の理。せいぜい、頭をこすりつけてろ。一生。そうやってな。まあ、そうなるんだけど。ウッシッシ。

てなことで、小判はいただき。ありがたや、ありがたや。でも、たったの五枚。信長はケチ。
「それで、牛。今度の今川とのいくさ、お前の言う通りだと、俺が勝つということだな」
「今川スか？」
「左様」
「はあ。多分。勝ちます」
「なら、どうやってだ」
って、言った時の信長の目はやばかった。これはね、めっちゃやばかった。凄え瞳孔を開けてた。殺されると思ったね。
「十万はある今川の大軍に、五千も満たない織田がどうして勝利できる」
うーん。
桶狭間って言ったって疑われるような気がしたね、おれは。
だいたいさ、まだ、合戦してねえだろ。そんな雰囲気じゃないもん。マタザとか、なんだか呑気だし。
だから、おれはうまいこと言った。
「そ、それはのの信長様だけが知っていれば、い、いいことッス」
「ふん」
って、信長は笑った。マタザがめっちゃ睨んできていたけど。

お～れは又左衛門～♪赤母衣衆～♪

はい、ボコられました。マタザにボコボコにのされました。
「俺に恥をかかせやがって」
ボフッ。ぐふっ。
「俺がしてやった恩を仇で返しやがって」
ドゴッ。ひでぶっ。
「俺はわかったぞ。俺はわかったぞ。お前はそうやってまやかしの類でおやかた様に取り入って、尾張を混乱させようと企む今川の手先だろう。俺はわかったぞ」
「違います違います！　違いますって！　そういうことってあんま言っちゃうとまずいじゃないッスか！」
「そういうことってどういうことだ。言ってみろ！　えーっ！　言ってみろ！」
「だからっ、今、そういう作戦とか言っちゃったら、いざ、いくさってときに、相手に筒抜けになっちゃうじゃないッスか！」
で、ようやく胸倉を離してくれたマタザさん。いえ、マタザ様。
「それもそうだ」
こいつ、基本的にバカなんだな。クソッ。バカのくせに。貧乏のくせに。ロリコンのくせに。
「なら、俺だけには教えろ」
「えーっ？　いやッスよお。マタザさんなんかに教えるのなんてえ」
ボコッ。あべし！
「お・し・え・ろ＾＾」
もう、ジャイアンじゃん。タケシじゃん。なんなのこいつ～。
「はいはい。わかりましたよ。教えますよ。でも、ぜーったい秘密ッスよ。絶対に。言ったら、ばれちゃいますかんね」
「わかったわかった言ってみろ」
「桶狭間ッス」

「桶狭間？」
「そうッス。桶狭間で今川軍が休憩するんス。それで、雨が降って来るんス。土砂降りの雨。それで、信長様が奇襲するんス」
「ははあ。奇襲か。それで、敵軍の大将は誰だ」
「義元ッス」
「何っ？」
「今川義元が桶狭間に陣取るところを奇襲して、奴を打ち討るんス」
「何者がだっ？」
「えーと、んーと、誰だっけかな」
知らん。誰が今川義元の首を討るのかは知らん。
「まあいい。それだけわかれば十分だ。そこにいの一番に駆け付ければ、義元の首が討れる。俺が一番槍だ。はっはっはっは。こりゃあ、凄えことになるぞ」
なんなの。本当に単細胞だな。まあ、バカがバカ笑いしているから、おれはその隙に猛ダッシュでさよならー。

どこにみゃあ付けてんでゃあ！

城下の集落に戻ってきた、おれ。
そういえば、おれって、信長から小判プラスちゃっかり家を与えられたんだった。
ラッキー。なんだけど、住処の案内をするのはマタザだったってわけ。逃げちゃってアンラッキー。
いまさら、戻るのも嫌だし。
おまつは名残り惜しいけど・・・。ジュルリ。
いや、どうせ、おまつなんて。だって、あちきはどこへ行こうとキモオタなんですよ。ほら、ご覧。城下を行きかう輩の視線を。
へえへえ。横綱の付き人みたいですね。
てかさ、この時代って全体的に貧しいわ。道はでこぼこ。家は良くて木造、茅葺がほとんど。人は皆やせ細っているし、チビだし、地黒。
そう考えると、横綱の付き人のおれってデブで色白だもんな。
そりゃ、キモイ。
つーか、どこお？　あっしの家は？　ちょー疲れたんだけどー。
訊ねてみようかしらん。でも、コミュニティ能力ゼロのおれ。勇気なし。
なんか、寂しくなってきた。さすがに。
今日は一度もあずにゃんに会えてないし。なんで。なんで。悲しいよ。涙が出てくるよ。
あずにゃんのさ、あのしっかりしてそうでいて、ちょっと抜けている感じが、おれの恋人として文句ないんだよね。
その恋人に会えない毎日がこれから続くのかと思うと。
憂鬱。
「梓・・・」
「にゃにゃしゃん・・・」

あいたっ。
どこに目え付けてんだボケえっ！
「どこにみゃあ付けてんでゃあ！」
「あ、あ、あ、す、すいません！」
目の前で尻もち付いているチビがめっちゃ怒鳴ってきたから、おれ、あわてて頭を下げたんだけど、このチビ（禿げてて、不細工で、着物はぼろぼろのくせに）、当たり屋まがいにおれに詰め寄ってきやがって。
「おみゃあ、どこにみゃあ付けてんでゃあ！　あ！？　おみゃあみてえにゃウドのたいぼきゃんきゃは、道の端歩いとりゃれえ！　おりゃあはきぎゃんが悪いんだぎゃあ！」
何を言っているか、よくわかんねえ。
でも、めちゃくちゃ怒っているから、とりあえず、小判一枚でご勘弁くだせえ。
「これでご勘弁くだせえ」
「にゃっ！？」
おれの手から小判をひったくった、禿げチビ。めっちゃ眺める。目玉をめっちゃ広げる。懐に入れる。
「これはすみゃんごでゃんした。貴公のことをきゃんちゃがいしていてやようだぎゃ」
「はあ」
だから、何を言っているかわかんねえし。
「おにゃびと言ってはにゃんだぎゃ・・・」
禿げチビはぽりぽりって頭を掻いている。
「貴公はおにゃの子が好きかえ？」
「え？」
「にゃゃっはーっ。好きかえ？　好きかえ？　そうしたらにゃあ、おりゃあがびゃっぴんなおにゃの子のところに連れたやってやるにゃ」
ぐいぐいとおれの腕を引っ張る、禿げチビ。

「いや、そんなのいいッスから」
「恥ずがしぎゃんにゃあ。こりゃも何かの縁だぎゃあ」
なに、このアグレッシブな奴。コミュ能力ゼロのおれは圧倒されるだけなんだけど。

にゃにゃしゃん（遠山さん）

「にゃにゃしゃ～ん。にゃにゃしゃんはおるきゃの～う」
て、連れられてきたのは、これまた貧しい家。でも、なに？　おれにおにゃの子紹介してくれるの？
「なんですか！」
と、奥のほうからプリプリと土間に駆けこんできたのは、あれまあ、めんこいおにゃの子。おれよりちょっと年上かなあ。
てか、似てるわ。俺の初恋の人に。中学のとき、キモオタの俺でも優しくしてくれた、卓球部の先輩、遠山ひかるさんに・・・。
「なんですか！　また来たんですか！　しつこいって言っているでしょう！　もう来ないでください！　さもないと、父上に言いつけますよ！」
遠山さん・・・。
いやいや、正気に戻れ、おれ。
「にゃあにを言っておるんだぎゃ。みゃあにも言ったぎゃ。おみゃあのおてて上には、てゃーんとりょうきゃいを得ておるんだぎゃあ。そう、恥ずかしぎゃらんでも、おりゃあはやさしい男にゃ」
「知りません！　そんな話。お前様のホラ話には付き合っておられません。さあ、さっさと帰ってください！」
「そう言うにゃなあ。ほら、おみゃあげを持ってきたんだぎゃあ。にゃにゃしゃん、これでええ着物でも買うんだぎゃあ」
は？　小判をさらりと差し出した、このバカ。
「そりゃだきゃじゃにゃあぞ。このおきゃたはにゃあ、伊勢で大商いをしているきゃたにゃあ。おりゃあ、このおきゃたに見込まれてにゃ、惚れているおにゃごがいてゃら、祝言を挙ぎゃってくれるって言うにゃあ」
ふざくんな、こいつ。おれを使って遠山さんをたぶらかそうって言うのか。なんて野郎だ。こいつ。なんで、小判が五枚（－１枚）

だけのおれが大商人なんだ、この野郎。
　でも、遠山さん、顔をぷるぷると震わせた挙句、
「なんなんですか！　お前様は私をそんな冗談にもならない話でたぶらかそうって言うんですか！　なんて卑怯者！　見損ないましたよ！　殿様のお膝下で頑張られるお前様を少しは見直していたというのに。お前様はそんな卑怯者だったんですか！　私はそんな軽々しい女ではありません！　もういいです。絶交です！」
　禿げチビざまあ。そして、遠山さん、おれの憧れッス。最高ッス。かっこいいッス。
「ちょっと、待っておくりゃれえ、にゃにゃしゃ～ん」
「こら、サル！」
　て、奥の板間からでてきたのは、みるからに鬼女。
「ぎゃっ、お母上！」
「何がお母上だい！　お前の母になった覚えはないよ！　さあ、用件が済んだらさっさとお帰り！」
「ちょっとみゃってくだされ」
「何を待つんだい。お前を連れてく閻魔様の到着かい！」
　鬼女、激ヤバ。いきなり薙刀の切っ先を禿げチビに向けてきてんだから。
「あや～。でにゃおしてみゃありま～す」
　そう言いながら、すたこらさっさと飛び出していった、禿げチビ。
で、おれは？
「あんたもだよ！」
「ひいいいいっつ！」
　にゃんで、おりゃあが！

いい旅夢気分

「いやあ、すみゃん、すみゃん」
飛び出してきたおれの前に、悪びれもなく現れた、クソ禿げチビ。
「あすこの母ちゃんにゃあ、おりゃあ、偉い嫌わているだぎゃ」
母ちゃんだけじゃねえだろ。遠山さんにも嫌われているじゃねえか。なんて、スーパーポジティブな奴なんだよ。
まあ、もう、無視。マタザみたいに強そうでもないから、ボコられもしないだろうし。無視。
さて、おれの家はどこか。
って、歩いていくおれに付きまとうのは、禿げチビ。
「それで、貴公はどこのおきゃたなんだぎゃあ？」
とか、
「みゃたことにゃあ顔だぎゃ。貴公はどこの国から来たんだぎゃのう」
とか、
「にゃにゃさんに惚れてもにゃあ、あのおにゃの子はおりゃあに惚れてゃるからにゃ。厭よ厭よも好きのうちだぎゃ」
「じゃあ、訊かせてもらいますが」
もう、めんどくさくなったってわけ。おれ。
「僕の家はどこですか」
「にゃあ？」
「僕は今日から信長様の家来になったんです。それで、家を与えてくれたんです。その家はどこにあるんですか」
「にゃっ！？」
するとね、ワロタ。こいつ、いきなりおれの前に飛び出してきて、急に土下座してきたわけ。
「申しわきゃごでゃいませんでした！　おやかた様にお仕えされるきゃたとはいでゃ知らず、とんだ不行き。どうきゃ、どうきゃ、お

やかた様のおみゃみゃにはお入りしませんよう、おはきゃらいくだてゃえ」

おれ、タイムスリップしてさ、初めて、いい旅夢気分。

「じゃあ、返してください。さっきの小判」

「は、は、はい！」

禿げチビはそそくさと出してきて、おれは奪い取る。ていうか、こいつ、ただの詐欺師だったんだな。まったく。

「で、おれの家はどこにあんだよ」

立場がはっきりしたおかげで、おれの口調もマタザ口調。

「いや、そう言われましても。拙者はあにゃた様がおやかた様のご家来とはまってゃく知らなきゃったんです」

「じゃあ、訊いてこいよ、マタザに」

「にゃあ？　マタザ殿とは前田又左衛門様でごでゃいますか？」

「そうだ。早く訊いてこい」

「いやあ、拙者は、前田様と軽々しく話せる身分でごでゃいません。あにゃた様でないと、前田様も口を利いてくれまてゃん」

むむ。口も利けないほど身分が低いのか、こいつ。なんて使えない奴。

でも、遠山さんは言ってたじゃねえか。信長の下で頑張っているって。それなのに、なんで、同じ家来で口も利けないの。バカなの。こいつ。

かといって、おれだって、マタザにはもう近づきたくないし。

「にゃっ！　だったら、奥方のおみゃつ殿に訊いてきます。前田様とは口も利けない拙者ですが、おみゃつ殿には拙者、好きゃれております。そうだぎゃ、おみゃつ殿にそりゃとなく訊いてくるだぎゃ」

えー？　どうせ、さっきみたいに追い払われるんだろ。なんで、おまつが薄汚いお前と仲いいんだよ。こいつ、本当にバカなんだな。ああ、いるいる。町内によくいる、ただの厄介者。多分、こいつってそんな奴なんだな。

おサルさん

「おみゃつ殿。おみゃつ殿」
垣根に首を突っ込んで、禿げチビが呼んでいると、ぺたぺたと足音がしてきた。なんて、萌える足音。
「やっぱり！　おサルさん。最近はめっきり遊びに来てくれないから、わらわは退屈でございました」
ちっ。なんだ。本当に仲がいいのか。ちっ。いるいる。こういう奴ってよくいる。不細工なくせに、女友達との交友関係は多いって奴。目ざわりな奴ね。
てか、おさるさんだってｗｗｗ
「いやいや、おみゃつ殿はいみゃでは又左衛門様の立派な奥方。おりゃあみてゃえにゃ下人がお会いするのも憚りぇること」
「そんなことはありません。わらわはおサルさんが好きですよ」
なんだよ。チクショウ。萌えたじゃねえか。くそザルめ。チクショウ。
「そんにゃこてゃあ言うてゃあいけません。おみゃつ殿は奥方様なんだぎゃ」
「違います。まつは誰の奥に入ってもまつです」
「ありやあ、さすがおみゃつ殿」
くそザル。めっちゃへこへこしてる。
「でゃあ、一つ、そんなおみゃつ殿におにゃがいごとがあるだぎゃ」
「おにゃがいごとですか？」
萌え～（＊´Д｀）。おみゃつ殿～（＊´Д｀）。萌え～（＊´Д｀）。
「へえ。今日にゃ、又左衛門様がご客人を連れてこられたあにゃあ。そのご客人の家がどこだきゃ、又左衛門様に訊いてくれんだぎゃなあ？」
「いいですよ。じゃあ、旦那様に訊いて参りますね。もちろん、そ

れとはなしにね」

うふふ、って言いながら、おまつはぺたぺたと離れていったみたい。ハア。めっちゃ萌える。「それとは☆なしにね」なんて、おれの胸は萌え萌えキュンだよ。。。

それがあの、超絶ＤＱＮマタザのものだなんて。クソッ。マタザクソッ。

しっかし、このくそザル。どうだ見たか、おりゃあはやっぱりおみゃつ殿と仲いいだろ、とでも言いたげなニンマリ顔でおれを見上げてきやがる。

本当にサルみたいな顔だな、このくそザル。

ん？

尾張のサル？

もしや、もしや、もしやの雪国もやし？　またしてもありがちな展開・・・ッスか？。

だとしたら、おれ、ずいぶん偉そうにしちゃったんだけど・・・。

将来の天下人に。

ねえ、消費者センターどこー？

ジャパニーズドリーム最大の体現者、豊臣秀吉。
その駆け抜けていった人生のきらめきは、まさに朝に昇る太陽のごとく。
人望、英知、運。王者のすべてを兼ね備えた、しかし、戦国武将と言うには多少の語弊もある王者。
おそらく、天命なのかもしれない。
王者として秀吉という男が迎えられたのは。
だけど、へこへこ猿。
「こう見えてぁあも、この木下藤吉郎、顔だきゃあ利くんです。何か、こうして困ってぁあときには藤吉郎を使ってくでゃあさい」
「いやいや、そんなそんな、かしこまらないでください。僕も木下さんと仲良くできれば、それでいいんですから」
戦国を生きていくんだから、今のうちにこいつにゴマをすっておかなければならない、おれ。
そう。こいつにゴマをすっておけば、いつの日か、おれにも、デュフフな日が。
そう考えると、戦国時代ってちょろいわｗｗｗ
「ここぎゃあ、おやかた様がお与えくでゃさったお屋敷です」
は？
「どうしたぎゃあ。ここだぎゃあ」
何、このボロ。カラスが茅葺屋根の上でカアカア。てか、屋根に穴空いているし。戸は傾いちゃっているし。草ぼうぼうだし。つぎはぎだらけだし。
「本当にここなんスか・・・」
「まちぎゃあにゃあです。ここは昔、前田様と喧嘩をされて斬られた者が住んでゃあいたところだぎゃ。あ、確か、ここで斬られたんだぎゃあ」

ファック。玄関を入ってすぐの板間にはうっすらと血の跡。褒美は小判と家とゴーストとの初夜ッスか。ここにきて、またしてもマタザトラップ。マタザ氏ね。いや、死ね。

それに、蛇がいるんスけど。そこ。にょろにょろって。日本でスネークが入ってくるなんてあり得ないっしょ。なんなのこのメタルギアな家。

ウウウッ。

あんだけ貧しいと思っていたマタザの家とかにゃにゃしゃんの家とかよりも遥かにボロいじゃねえか、この家よお。

しかも、曰くつき物件。悪徳不動産業者の広告にだまされた気分。

ねえ、消費者センターどこー？

「みゃの回りの物は、あとで拙者の妹に持ってこさせるだぎゃ」

「え？」

「にゃ？」

「あ、いや、本当に？」

「拙者、嘘と喧嘩は嫌いだぎゃあ」

にんまりと笑ったくそザル。よく言うよ。にゃにゃしゃんのこと騙そうとしていたくせに。おれに絡んできたくせに。

おべっか使いやがって。

いやいや、ここで文句は言うまい。

だって、こいつの妹が世話してくれるって言うんだも――――――ん！！！

――（ ゜∀ ゜）――――――――――――――――――――――――――――――――――――

メグミちゃん

ありがちなタイムスリップ。
ありがちな戦国時代。
ありがちに信長の家来。
そして、ありがちな恋物語。。。
おれはありがちという線路の上を歩くだけ。
ちょろすぎるｗｗｗ
だが、残念ながら、我が家はボロだ。しかも、殺人現場。おれは怖くて動けない。ずっと板間のすみっこ。心なしか、こっちを見て笑っている奴がいるような、いないような。
こんこん。
ひっ！
「ごめやあす」
ひっ！
「居ないやかあ？」
あ、もしかして。
デュフフ。
「は～い＾＾　はいは～い＾＾」
引き戸を開けると、そこには、
「こんばんわ。木下藤吉郎の妹のあさひです」
白い歯を見せて笑っているおにゃの子。
「兄に頼まれて、来たんやけど」
「あ、あ、はい。聞いてます。聞いてますよ」
にこって笑った。今ね、おれににこって笑ったよ。おれににこって笑ってくれたよ！　やったよ、母さん！　おれ、にこって笑われたんだよ！
てかさ、てかさ、ノーチェンジ。おまつとか遠山さんほどじゃないけどさ、なんか、こう、初々しい可愛らしさっていうの？　はつ

らつっていうの？　決して美人じゃない。美人じゃないけど、健康的なおにゃの子。そんなに可愛くはないくせに、可愛すぎる女子サッカー選手ってマスゴミに言われちゃう的な感じ？
　正直、半信半疑だったよ。あのくそザルの妹だろ。どうせ、サルの妹はサルって具合でさ。期待なんてこれっぽっちぐらいしかなかったよ。
　しかし、なんなの、この天からの恵み。いや、おサル様からの恵み。
「兄さんは寄り合いに出てしまったもんで来れーへんの」
「あ、ああ、そそうなんだ。へえ。残念だなあ＾＾」
「ほんで、大したもんじゃないんやけんど、煮物。はい」
　ぼろぼろの鍋を差し出されて、それを取るとき、きゃっ、手が、触れた。
「ほんで、はい」
　手が触れたけど、メグミちゃん、あんまり気にしなかったみたい。てか、はいって渡されたけど、なんなんでしょうか、この藁の大きな巻き物は。
「ほんじゃあ」
　へ？
　帰っちゃっうの？　帰っちゃうの？
　帰っちゃった・・・。
　ま、まあ、いい。おれだって、まさか、そんな丹念に世話されるだなんて思っていないし。思っていないし。
　おれの恋人はあずにゃんだし。
　てか、なんなの、これ。とりあえず、紐を解いてみますか。
　ゴザ。
　はあ？　もしかして、これで寝ろってこと？
　・・・・。
　体の半分ぐらいしかないし。
　もうやだ、戦国時代。

長い一日が終わりました

寒い。寒い。
怖い。怖い。
戸ががたがた音を立ててるよ。隙間風がひゅうひゅう入ってくるよ。蛇がしゃーしゃー鳴いているよ。
あったかい布団で寝たい。穴の空いていない部屋で寝たい。蛇の恐怖に怯えずに寝たい。
ウウッ。どうして。どうして。おれなんかが戦国時代に。
ありがちな展開なら、もっと、イケメンだけど根暗な少年とか、可愛いけどさえない少女とか、そういう奴らがタイムスリップするんだろ、普通は。そうして、そういう奴らが、活躍して、恋とかして、夢落ちでした。でも、成長しました。ってのがありがちな展開じゃねえか。
なのに、なんで、ありがちなキモオタのおれが。
おれはただのキモオタなんだ。バイト先のコンビニでも、夜中に徘徊しているＤＱＮ女子に「キモいんだけどｗｗｗ」とか罵られるようなキモオタなんだ。
親には「今日はハロワに行かないのかい＾＾」とか言われる駄目人間なんだ。だって、ハロワの職員って、おれを一目見ただけで、仕事のやる気をなくしているんだもん。あの、職員。クソッ。曽根とかいうババア。氏ね。クソッ。「今まで定職に就いたことのない方はちょっと・・・ハア・・・厳しいなあ」じゃねえよ。クソッ。
定職に就けなかったのは、おれが高校を中退しているせいだ。高校を中退したのはＤＱＮグループにボコられたからだ。すべてはあいつらのせいなんだ。なら、曽根よ、国から金をもらっている身分なら、あのＤＱＮグループを排除してくれ。いや、排除しろ。この世から。抹殺しろ。
ぐう。考えれば考えるほどイラついてきた。

こんなときは気分を変えて、ニコ動でも・・・。
チクショウ！　戦国時代だったんだ！
ウウッ。何もできん。何もできん。
「おーい。おきてゃいるきやあ」
この声はくそザル。
「おーい、おーい」
なんだよ、うるせえな。めっちゃテンション高めじゃねえか。
はいはい。なんでござんしょ。
うわっ。百姓がいっぱいいる。
「おりゃあの足軽組の連中を連れて酒を持ってきましたぎゃ。歓迎するだぎゃあ」
なに、この粋な計らい。
え？　てか、なに勝手に上がってきてんの。てか、おまえら全員酒臭えぞ。おい。なに勝手に明かり点けてんの。なに、勝手に座り込んで、酒飲み始めてんの。
「さあさあ、飲むだぎゃ、飲むだぎゃ」
うっ。このくそザル、相当酔っ払っているじゃねえか。うえっ。酒まじい。てか、おれ酒飲めねえし。
「さあさあ、おみゃあら、今日はこの藤吉郎が死ぬまで酒を飲ましてやるだぎゃ」
うおー！　じゃねえし。なあ、歓迎会なんだろ。なあ。
ま、いっか。寂しかったし。

意地っぱり！

ズドーン！

えっ！　なに！？　うえっ。頭痛え。なんか気持ち悪いし。

「いつまで寝てんだ、この鈍牛！」

目覚めからマタザかよ。人生始まって以来の最悪な朝。

てか、さっきの音は、戸を蹴り破った音ね。さすが超絶ＤＱＮ。

誰が直すのさ、それ。

「んー？　こいつ、サルだな」

「むにゃむにゃ。いきゃんだぎゃ。にゃにゃしゃん、そんなとこ触ったらいきゃんだぎゃ」

「起きろ！　このエテ公！」

「あいたっ！　何すんだぎゃあ！」

どうやらサルだけが酔いつぶれて泊まっていったみたい。全然、記憶がないけれど。あわれサル。マタザに見つかるとは。

「サルのくせに酒なんか飲みやがって。なかなかいい身分のサルだな。えーっ？」

「あいやっ！　こりゃあ、前田様」

そして、サル、えらいスピードで土下座。得意技なんだな。きっと。でも、数十年後には立場が逆転するんだもんな。あわれマタザ。

「申しわきゃごでゃいませんでした！　前田様とはいでゃ知らず。とんだ無礼を！」

「ふん。調度いいじゃねえか。サル。お前も牛と共に付いてこい」

「にゃあ？」

「付いてこいって言ってんだろうが！」

「は、はいっ」

で、マタザに引きずられるようにして連れてかれるサルと牛。これからどちらに？　鬼退治ですか？

「やあ。又左衛門」

マタザの馬に付いていっていると、そうやって、変な坊主頭が気安く声をかけてきた。なに、こいつ。集落の奴らはみんな、マタザに道を譲るのに、こいつは通せんぼしたわけ。

「なんだ、拾阿弥。ぬけぬけと話しかけてきやがって。ぶち殺されたいのか」

「おお怖っ。さすがは桃太郎じゃな！　あっぱれ！　しかし連れているのが猿と牛だけでは、いささか心細かろう。なんなら、このわしが雉か犬にでもなってやろうかの？　きび団子をくれたらの話じゃがな！」

ワロス。マタザ、顔真っ赤。

「とうとう斬ってほしいようだな、拾阿弥」

「おう。斬れるものなら斬ってみい。お前はいつだって斬る斬ると言って斬らんからな。わしはお前のおかげで命が一つで事足りているわ」

「前田様、行きゃあしょう」

って、サルが言うけど、マタザは無視。ぷるぷる震えているだけ。

「おうおう、お前も言うようになったな、サル」

ぺしぺしって禿げ頭叩かれている。

「そういえば、先日、お前の妹を見かけたぞ。ありゃあ、お前にそっくりなサルだったな」

「いや、はっは。おりゃあの家系はみなサルですぎゃ」

「ふん。なんともまあ。顔色一つ変えんとは、さすがサルよ。人の意地がない！」

うわあ。こいつ、性格悪っ。てか、なんでこの坊主、こんなに偉そうなのよ。それにメグミちゃんはサルに似ていないじゃねえか。めっちゃいい子じゃんか。すぐ帰っちゃったけど。

と、馬の後ろでおれがひっそりと思っていたら、マタザ、馬から降りたわけ。で、槍をきらめかす。切っ先を坊主に向ける。

「てめえのことならともかく、大事な妹御を罵るとは」

「なんだ、斬るのか？　又左。嫁に辱めを与えられても斬れなかっ

たお前が、サルの妹ザルのためにわしを斬るのか～。え～っ？　斬るのか～？　え～っ？　斬れるのか～っ？」

「愚かモンが。そこまで言われりゃ、俺にも意地があるってもんよ」

で、マタザ、坊主の首、斬っちゃった。

おえっ。おれ、まともに見れず。

でも、なぜか、集落の奴らから拍手喝采。って、どういうこと？

坊主頭の頭を槍先に突き刺すと、マタザは馬に跨り、こう言ったわけ。

「すまんな、牛。お前に猪でも食わせてやろうかと思ったが、これからおやかた様の下に参らなければいけねえ」

へえ。猪ね。まあ、どうせ、何かのトラップを仕掛けていたんだろ、どうせ。

「前田様！　ちょっと待ってくだてゃりゃりあ！」

サル、馬の脚元で土下座。今日、二度目。

「城に行って、どうなさるおつもりだぎゃあ」

「ふん。サルには関係ねえだろ」

「おおありだぎゃあ。おりゃあ、おりゃあ・・・。前田様の心意気を無碍にしたくにゃあだぎゃあ。だから、だから、腹切りだきゃあ、しないでくりゃれえ」

別に、マタザは腹とか切らねえから。どうせ、生きているんだから。だいたい、ただの荒くれ者なんだろ。だいたい、今回ばかりの話じゃねえんだろ。だいたい、治安率低いじゃんか。

って、おれは冷めた目。

でも、サルが叫んでいたら、なんか、集落の野次馬たちもマタザの下に駆けよって来て、

「そうだ、前田様！　腹切りだけはしないでくれ！　前田様は何も悪くはねえんだ！」

「そうだ、そうだ。わしだって、いつか誰かがこのクソ坊主を斬ってくれねえかと思っていたんだ。前田様はわしの願いをかなえてくれたんだ」

そうだそうだ。そうだそうだ。

って、マタザ、とたんに人気者。なんだよ、これ。おれはどうでもいいんだけど。二日酔いで頭痛いんだけど。ホラーまで見せられ

て、すげえ気持ち悪いんだけど。
「もういい！　俺は俺の生き方をするまでだ！　お前ら、どけ！　斬って捨てるぞ！」
静まり返った野次馬の群れを引き裂くようにして、馬を歩かせるマタザ。なんか、かっこいいんスけど・・・。
さて、おれは帰って寝ますよ。あー、気持ち悪い。
「牛殿！　貴公も行くだぎゃ！」
サルに捕まるおれ。
「おりゃあらは証人だぎゃ。前田様は悪きゃにゃあと言うんだぎゃあ」
なんでだよ。別にいいじゃん。お前だってマタザにいじめられているじゃん。なんなの、みんなしてマタザマタザって。
しかし、サルに連れて歩かされるおれ。前には肩に槍を担いで、ゆうゆうとしている馬上のマタザ。集落の人々の憧れるような眼差し。凱旋気分ですか。けっ。
やがて、通りの向こうから猛烈に馬をすっ飛ばしてくる奴が。
あ、ゴンロク。
「又左、お前！」
「これはどうされた柴田様。そんなにあわてて。おれは今からおやかた様の下へ首級を運びに行くとこよ」
「このうつけが。かぶきおって」
「恐れながら柴田様！　前田様は悪くないだぎゃ！」
サル、今日三度目の土下座。おれ、知らんぷり。ただ、立っているだけ。
「良いも悪いもあるか！　又左、拾阿弥を斬ったからには、覚悟せい」
なーんか、嫌な予感。

ご沙汰！

城の中の庭に、昨日のように膝まずかされた、おれ。同じく、サル、マタザ、あと、坊主の首。

縁側には信長。足をもう一方の足に乗っけていて、着ているのは草みたいな模様の入った羽織一枚だけ。片側の肩だけをはだけさせて、いかにも信長。ただ、意外に色白。筋肉はムキムキだけど。

昨日と違うのは、信長の後ろにやたら中年連中が並んでいるところ。ゴンロク以下ｅｔｃ。

おれさ、これってマタザと坊主のただの喧嘩だと思っていたけど、どうやら、相当重大事みたい。マタザ、相当やばいことをしちゃったみたい。

マタザは清々しい顔。サルがべしゃくしゃいろいろと、起きたことを話しているあいだ、信長はむっつりと黙っているだけ。

「前田様は、おりゃあの妹が馬鹿にされてゃあのを、黙って見過ごせずにいてやんです。だから、前田様と拾阿弥様との過去には何の関係も・・・」

「もういい。サルは黙れ」

で、ぎろりとおれを睨みつけてくる、信長。視線をあわててそらす、おれ。

「で、又左の言い分はなんだ」

ホッ。

「ありませぬ」

「なにい？」

「喧嘩に言い分はありませぬ」

そしたら、中年連中の一人が血相を変えて立ちあがったわけ。

「何を抜かすか、このかぶき者め！　おやかた様の前でかぶき通せると思ってか！」

「前田又左衛門！　お主と拾阿弥の喧嘩は決着がついていたはずじ

ゃ！　おやかた様の前でしっかりと決着をつけたはずじゃ！　それをこともあろうに反故にするとはなにごとじゃ！　まして、その態度！」

「黙れ！」

と、信長、甲高い声を挙げると、左手をすっと横に出す。そこに小姓がすうっと刀を差し出す。あわわ。歴史が変わっちまう。そして、おれもとばっちりであぼーんですか。イヤっ！　そんなのイヤっ！

「又左、何も言い分がないのなら、俺に斬られるがまでだ」

しゃきーん！　オワタ。

「待ってくだてりゃれえ！　おやかた様！」

マタザと信長の間に入り寄って、地べたに額をこすりつける、サル。

「斬るならおりゃあを斬ってくだてりゃれえ！　この一件、落ち度はおりゃあにあります。それに、前田様は織田家にとって大切な家臣。おりゃあはただの足軽組頭。にゃんにゃら、織田家のために、この能のないサルの首を斬って、織田家のためにしてくだてりゃれえ」

そしたら、また、中年ども、「無礼者、さがれ！」とか、「お主の首が拾阿弥の代わりになるか」とかとか、ぎゃあぎゃあ、騒ぎ立て、でも、サルはめげずに「斬ってくだてりゃれえ。おりゃあを斬ってくだてりゃれえ」と、めげない。

サル・・・。いい奴なんだな。でも、お前が斬られたら、おれはデュフフできない。だから、あんまり信長を煽るな。頼むから、斬られるのはマタザ。お前が斬られろ。秀吉がいれば、そこまで歴史は変わらないだろ。

なのに、マタザは唇を噛みしめているだけ。おいおい、何しているの。お前が志願しろよ。早く斬られろよ。

「黙れ！　貴様ら黙れ！」

しーん。

「どけ！」
と、信長に顔面を蹴っ飛ばされた、サル。吹っ飛んだサル。無念。
信長は刀の切っ先をマタザの鼻先に突きつけ、
「前田又左衛門。命だけは許してやる。だが、俺の前から消えろ。家中から消えろ。今すぐにだ！」
そう言ったあとに、信長は坊主の首を蹴飛ばすと、ずかずかと去っていった。

サル知恵！

ここからはサルから聞いた話。

マタザに殺された拾阿弥とかいう坊主は、踊りとか茶とか歌とかを披露したり教えたりする、信長の側近だったみたい。

ただ、相当、性格が悪くて、家臣とか、城下の人間とかをいじめていたそう。

で、マタザが拾阿弥を怒っていた理由は、なんでも、拾阿弥がおまつにちょっかいを出していたみたいで、挙げ句には騙しておまつの親父の形見を盗んだらしく、マタザが激怒。

信長の前にひっ立ってて、斬る斬るって騒いだみたいなんだけど、信長が大目に見てやれと言って、マタザはぐぬぬ。

そうしたら拾阿弥、さらに調子に乗って、マタザと会うたびにさんざん愚弄したみたい。

で、堪忍袋の緒が切れて、ブスリ。さよなら、拾阿弥。

「しっかし、せいせいしたぎゃあ。あの茶坊主、おりゃあもでえ嫌いだったぎゃ」

信長の前での態度とは打って変わって、ちゃらんぽらんしているサル。

「で、でも、なんでそんなに嫌われているのに、信長様は拾阿弥の肩を持つんですか」

と、おれ。サルとはちょっと仲良くなっているんで、わりかし話しやすい。

「そぎゃあ、拾阿弥はおやかた様の恋人だったぎゃ」

へ？

おホモだちって奴ッスか？

うわあ・・・。森蘭丸が信長のおホモだちっていうのは知っているけど、信長って、あんな坊主ともそうだったのかよ。

「ただぎゃ、昔は前田様もそうだったぎゃ。だから、おやかた様は

前田様を斬ることはにゃあ」
は？
マタザも？　おホモだち？
なんなの、信長。なんなの、マタザ。
「でも、の信長様は、マタザさんを斬ろうとしていたじゃないですか」
「違うにゃあ。ああなった以上、体裁としておやかた様は前田様を斬るしかにゃあ。にゃけど、信長様は前田様を斬りたくにゃあ。でゃから、誰かが止めりゃあ、信長様も矛をおさめられるだぎゃ」
あーあー、そういうことですか。あれはお前の作戦だったわけですか。
「おやかた様はああ見えて、神経質な人だぎゃ。人を斬るにも、いろいろと考えるおきゃただぎゃ」
「でも、マタザさんに出ていけって言ったじゃないですか」
「でゃから、そりゃあ、体裁だぎゃ。二年か三年もすりゃあ、前田様も許されて、戻ってくるだぎゃ。拾阿弥もそうだきゃど、前田様もおやかた様のお気に入りだぎゃ」
ふーん。なるほどね。それで、このサルはああやって泣き叫んで、マタザに恩を売ったってわけね。ふーん。やっぱ、天下人になる人間は怖いね。
だってさ、城から出たあと、マタザはサルに
「すまん」
と、神妙に頭を下げていたもの。
こういうことね。将来、マタザとサルの立場が逆転しちゃうのは。
で、サルと共にやって来たのはマタザの家。まあたですか。まあた、こいつはマタザに恩を売るんですか。
で、門をくぐったら、ビビったね。庭には大勢の百姓侍が並んでいたんだもの。

出奔！

百姓侍たちは、全員で二十人ぐらいいたかな。そいつら、全員、マタザの家来みたいで、口々に「殿！」「殿！」って言ってた。

マタザって実はすげえ奴だったみたい。すげえＤＱＮの親分だったみたい。

「こうなった以上、仕方ねえ。俺は清州から出る。だけど、いつかは戻って来る。戻って来るから、それまでは、すまねえ、兄者にも取り計らってくれるよう申し込んでおくから、頑張ってくれ」

うっうっ、って家来たちは泣いている。

まあ、戻って来るし。どういうふうに戻って来るのかは知らんけど。

「皆の衆、泣くのはおよし」

ありゃ、縁側におまつ。めっちゃキリリッてしている。

「男が涙を流すのは、母御が亡くなったときと、いくさに勝ったときだけですよ」

うわあ。かっけー。なんなの、もう。おれ、感動しているわ。純粋に。だって、まだ子供じゃないの、おまつ。

「ささ、旦那様、いくさの支度ができましたよ。旅いくさの支度」

「すまんな、まつ」

「なぜ謝られましょう。いくさに行った亭主を待つ覚悟ぐらい、祝言を挙げたときから覚悟してましてよ」

あれ、なんか目の前がかすんでいるんだけど。ウッウッ。おまつ、かっけー。かっけーよ、おまつ。結婚してください。

「おりゃあも前田様の帰りを待ってゃあおります！」

あちゃー。飛び出していったサル。せっかくの場面も台無し。今日、何度目かわからないぐらいの土下座。

「それまでゃあ、おそれながら、奥方様のお世話、この藤吉郎にお任せくだてりゃえ」

こいつ、本当に図々しい奴だな。
「ふん。そうだな。おまつとサルは仲が良いからな。おまつ、何か困ったことがあれば、サルに頼め」
「そうですね。おサルさんがいれば、寂しくもありませんわ」
さて、と、言って、マタザは刀を脇に差すと、
「それでは行って参る」
って、従者一人と共に門の外に出て行こうとしたんだけど、おれの存在に気づいて足を止めやがった。
「そうだ、牛」
おれに顔を近づけて、小さい声で言う。
「桶狭間だな」
あわてて、うなずくおれ。にやりと笑うマタザ。
で、去って行った。
何が「桶狭間だな」だよ。お前はもう織田家の家来じゃねえだろ（戻ってくるけど）。
そうそう、もう帰ってこないでくれ、マタザ。たった一日の付き合いだったのに、おれは散々だった。戻って来るのが歴史の事実だけど、できることならどこかで野垂れ死んでくれ。

で、いつから国盗りすんの？

ブヒーッ。ようやく帰ってこられた。ボロ家に。

あ、戸が壊れたままだった。くそマタザ。直してから去れよ、クソッ。

でも、おれ、大工のスキルとかねえから、戸なんて直せねえ。ま、あとでサルにやってもらおう。

サルはなんだか、足軽組頭とは別に台所奉行とかいう訳のわからない仕事をしているらしく、城に戻っていった。ほんと、訳のわからない奴。

そういえば、おれも家来になったんだから、何か仕事しなくちゃならないんだろうな。でも、何も言われてない。ただ、小判と家を与えられただけで、信長には何も命じられていない。

多分、マタザの家来とかにさせられるところだったのかな。あいつ、朝っぱらから来たし。ま、さよならだけど。

二日酔いで気持ち悪いし、横になろ。

てか、今って、戦国時代のどのへんなんだろ。桶狭間の戦いの前っていうことはわかるけど、じゃあ、桶狭間の戦いまで、あとどのくらいなんだろうな。

豊臣秀吉（くそザル）はまだペーペーだし。あいつといくら仲良くなっても、デュフフな日を送れるようになるまでは、あと、二十年以上かかるってわけか。

となると、おれはそれまで、信長にいじめられるんじゃなかろうか。いや、むしろ、信長はどんどん恐ろしい奴になっていくんだから、あらよって斬られちゃう可能性も大。

だって、おれがデュフフな日を送れるようになれている人物だったら、歴史上の人物になっているはずだろ。

ということは、斬られる、もしくは戦場で殺られるんだ。きっと。

・・・・。

逃げよう。
「ごめやあす」
あれっ！　メグミちゃん（＊。Д、；）　がばっと跳ね起きるおれ。二日酔い？　忘れた。
「食いモンと着物、持ってきたがやあ」
「えっ、えっ、えっ。そんな、いっ、いいんですか」
「さっき、長屋の人に聞いたんや。牛殿はなあんも持ってねえって。ほんで、はい」
にこって笑いながら差し出してきたよ。にこって笑いながら差し出してきたよ！　ううっ。目から汗が。。。なんて優しい子。こんな優しい子があのサルの妹だなんて考えられん。
おれ、メグミちゃんに惚れた（＊´Д`＊）
「これ、戸が真っ二つじゃないやか。昨日はほんなに酔っ払っていたんやか？」
「あ、いや、そうじゃないんだけど、まあ、なんか、暴れていたのが一人いて」
「ほんだら、兄さんに直させるきゃ。あとで兄さんに言っておくがや。兄さん、手先だけは器用だがやあ」
うふふってメグミちゃん笑う。カワユス。テラカワユス。
「ほんじゃあ、また」
帰っていくメグミちゃん。。。手を振るおれ。
・・・・。
イヤッホォォォッッッツ！！！

お呼ばれ

メグミぃメグミぃかわいいよかわいいよかわいいよお。
メグミぃメグミぃメグミぃぃぃぃんん。
ううっ。うわーん。うはあ。メグミてゃん・・・。うはあああ。
カワユスカワユスカワユス！
きゅんきゅん。メグミぃにきゅんきゅん。
ああっ！　ハーハー。うびゃあらっ！
ううっ！うおーっ！メグミぃ・・・。うわーん！メグミぃ！
ハアハア。ハアハア。
・・・・。
ぐうぐう。
「牛殿！　牛殿はここか！」
？
うっせえな。今度はなんだよ、チクショウ。
「森三左衛門可成と申す！　おやかた様がお呼びだ！　早速支度を整えよ！」
うっせえな。マタザの次はサンザかよ。そんな大声出すなよ、もう。
支度っつったって、何もねえし。横綱の付き人スタイルだし、おれは。
って、もう外は夕暮れどき。はて。メグミちゃんの妄想をしていたら、いつのまにやら寝てたみたい。
おれ、馬上のサンザに付いていく。サンザの馬の回りには三人の家来。どうやら、マタザなんかとは違って、結構な重役っぽい。ゴンロクに近い感じ。着物もしっかりした感じ。
こんな偉い人がわざわざ来るなんて、なんだよ。普通、使いっぱしりじゃないの。たかだか、おれを呼びに来る役目なんて。
てか、信長が何の用。

はっ！　まさか・・・。
おホモだちの拾阿弥もマタザも失って、まさか、おれを、次の餌食に・・・。
清廉な夜の営みの儀式を行うから、わざわざサンザを寄越したんじゃ・・・。
やばい。。。おれ、女も知らないのに、先に男を知る羽目に。。。
ウウッ。
「何を泣いておるのだ」
「ウウッ。僕は、僕は、二十五にもなって、女も知らないんです。だから、だから、せめて、ウウッ」
「はあ？」
「僕は、僕は、まだ、そのようなことは。だいいち、マタザさんみたいにイケメンでもないし。ただのデブだし。信長様のお気に召されるはずがないのに」
「何を勘違いしておる」
「ほら、だから、信長様に付き合わされるんでしょ。いや、突き合わされるんでしょ」
「うつけが！　おやかた様がお主みたいな醜い牛の相手をするか！」
えっ？　そう？
「言葉には気をつけい！　この牛男め！」
そ、そこまで言わなくても、いいんじゃないんスか。

作戦会議？

今までは庭に這いつくばわされていたけど、今晩は、城の居間まで通されたおれ。

信長は相変わらずの着流し。酒を飲んでいて、傍らで顔色の冴えない女（って言っても、遠山さんとかメグミちゃんとかとは比べ物にならない綺麗な着物）が酌をしていた。

「来たか、牛」

「へ、へえ」

なんか、機嫌悪そう。やっぱり、今日の一件のことか。おホモだちがいなくなっちゃったからか。

「牛殿！　頭が高いぞ！」

「へっ、へえ！」

と、サンザに怒鳴られて、あわてて土下座。

「うるせえ。うるせえぞ、三左。お前はいつもうるせえ。もっと声を小さくして話せ」

「はっ、申し訳ありませぬ」

ざまあ。

「濃、酌はもうよい。去れ」

「それでは」

へえ。あれが濃姫ね。あんまり可愛くないわ。幸薄そうな感じ。覇気も色気もなし。でも、逆上したら出刃包丁とか持ち出しちゃうようなタイプ。

「して、牛。今日の俺は虫の居所が悪い」

は？　なんスか、それ。

「お前にはいろいろと訊きたいことがあるが、妙なことでも言ったら斬ってしまうかもしれん。覚悟しろ」

ジコチューすぎだろ！　おい！

「おい、三左。こいつに話してやれ」

「はっ。牛殿、昨日、今川とのいくさで我らが勝利するとおやかた様に申したそうだな」
「へ、へえ」
「その詳細について、おやかた様はお主の話を聞きたいと言うのじゃ」
「は、はあ」
「忍びの者の伝えによると、駿府の今川は、上洛の機会を伺い、いくさの準備をしている。その数は三万から五万に及ぶとの報せ。大軍を率いて上洛ともなれば、この尾張を狙うのは必須じゃ」
「ま、まあ、そうです。そうなります」
しーん。信長もサンザもおれをじいっと見てくる。なんか、怖いんですけど。
「俺はな、お前を信用してはいねえ。だが、五万の大軍を打ち破る策もねえ。だから、聞いてやる。どうして、俺は今川に勝てる」
「そ、それは、信長様が奇襲を行うからです」
「奇襲だと？」
「い今川軍は桶狭間で兵隊を休めます。そ、そのとき調度、大雨が降って。視界もさえぎるほどの大雨。そ、そのとき信長様は山を駆け下りて今川軍の陣に突撃して。そこに総大将の今川義元がいるんで、義元を殺して、はい、終わり」
しーん。信長も三左も面食らった感じで無言。信じられないというふうに、眉間にしわを寄せて、考え事。
「今の話、三左、どうだ」
「は、はあ」
サンザはうーんと唸る。
「あまりにも的確すぎて、返って疑う他ありませんが、ただ、今川に勝利するには、奇襲しかないのも事実」
「そうだな。籠城しても野戦を仕掛けても勝利はない」
「ただ、こやつの話は、罠かもしれませぬ。おやかた様を桶狭間に向かわせ、そこで今川が待ち構えているという策略かもしれません」

そりゃそうだ。そうやって疑うだろうから、おれはあんまり言いたくなかったんだ。

「ただ、桶狭間の狭地であれば、今川が大軍を自由に操ることも難しいと存じます」

「すべてはそのときになってみなければわからぬということか」

信長はずずっと酒をすする。サルが神経質だと信長のことを言ったのも、なんとなく頷ける気分。ジコチューの感じはすっかりなくなっている。

頑張れ、おれ

「もう一つ、教えろ」
「は、はい。いくらでも」
「お前は俺と会った時に、四人の名を出したな。頼朝公、義経公、俺、そして、徳川とかいう者だ」
げっ。覚えていたの？　そこを突っ込まれると、ちょっとまずいかもしれん。
「その徳川とかいう者は、これから先に現れる者なんだろう。一体、何者だ」
「えーと、それは、その」
徳川家康は、それはもちろん、徳川幕府の初代将軍なんスけど、でも、それを言うと、秀吉のことも言わなくちゃならなくなるかもしれないし、信長が明智光秀に殺されることも言わなくちゃならないかもしれん。
そうすると、信長は警戒して、歴史が変わっちゃうだろ。
「何者だ」
「えーと、まあ、松平元康のことで」
「松平？」
信長はサンザに視線を向ける。
「三河の松平の嫡男でしょう」
「ああ、あの松平の小倅の竹千代か。あいつが徳川何がしと名を変えるのか」
「は、はい」
「それで、今川の人質の竹千代が、なぜ、後世に名を残す者になるのだ」
「い、いや、それはその」
頑張れ、おれ、頑張れ。ここで歴史を変えられると、おれはデュフフな日々を送れなくなる。歴史通りに行ってこそ、おれは生きて

いけるんだ。だから、頑張れ、おれ！

「元康は、今川義元が殺されたあと、ど独立するんです。それで、の、信長様と同盟を、さ、されて、の、信長様の天下統一の事業を果たすための、さ、最重要人物、として、後世に名を残すのです。い、いわば、頼朝の弟の義経みたいなもんです」

「ほーう。なかなか珍奇な話だな。なあ、三左」

「左様にて。にわかには信じられぬ話です。松平の先代とおやかた様のお父上の信秀様は何度も争った間柄。まったくもって珍奇です」

「まあ、しかし、俺が天下統一の事業とはな」

信長はぐいっと酒を飲み干す。

「まさに夢まぼろしのごとくだ」

祝！　フリーター脱出！

その日から、おれの仕事が決まった。フリーター脱出。うっほほーい。

与えられた職業は珍奇衆。仕事の内容は、毎日、夕方に城に参上して、信長に話を披露するというお役目。なんて楽な仕事ｗｗｗ

怠け者のおれにはぴったりｗｗｗ

で、次の日から毎日、清州城に行き、酒を飲んでいる信長にいろんな話をしてやっている。

信長は好奇心旺盛で、後世はどんな世界なのかといろいろ訊ねてくる。

だからおれは、萌えという文化があることや、インターネットの話などをしてやる。信長はさっぱりわかっていない様子。

信長が理解できない話をすると、「つまらん、今日は帰れ」と言われる。

ある日、信長は「お前の時代は、何という者が世を治めているんだ」と難しいことを訊かれた。

おれは誰かが治めているわけではないと答える。

信長は首をかしげる。

「なら、今のような戦国の世なのか」

「違いマッスル」

国民が選んだ代議士が国を治めていると答える。つまり、民主主義というものだ。

「ほう。それでうまく治まるものなのか？」

「まあ、今の戦国時代よりかは」

憲法というものがあって、後世の日本はうまいことそれにおさまっている。突出した力のある者が現れない仕組みになっている。国会、行政、司法。権力はそれぞれにわかれている。

と、おれはとても頭の良い奴のように説明してやると、信長は感

心した。
「そのようなことができるもんか」
信長は不思議なことに、自分がこれからどういうふうにして天下の覇者になるかの興味よりも、未来がどういう仕組みで動いていて、人々がどういう生活をしているか、そういうことのほうに興味があるみたい。
で、仕事を終えてボロ家に帰宅すると、メグミちゃんがご飯を作って待っていてくれる（＊´д`）アハァ
おれの下心ははち切れんばかりだけど、二十五年も童貞をやっていると、何もできん。メグミちゃんが作ってくれたご飯を食べて、はい、さようなら。
すると、ある日、サルがやって来て、
「毎日、あさひに世話をさせてやっているだぎゃあ、でやから、たまにはあさひに着物でも買ってやってくれだぎゃあ」
と、ほざいてきた。
わかった、じゃあ、明日、メグミちゃんと二人で城下の仕立て屋に行くと言うと、
「何を言うているだぎゃ。あさひはまだ生娘だぎゃ。そんにゃ妹を男と二人で歩きゃせるわきゃあいかにゃあ」
なんてやつ。毎晩、メグミちゃんをおれと二人きりにさせているのはよくて、町を歩かせるのは駄目なんて。
「それににゃ、この前直した戸の修理費、屋根の修理費がまだだぎゃあ。合わせて二両、受け取らせてもらうだぎゃ」
おれ、言葉を失ったね。こいつ、本当に腹黒いわ。どうせ、遠山さんに貢ぐんだろ。さすが天下人になる男。図々しさも天下一品。
で、次の日にはこいつの着物が新しくなっていたってわけ。メグミちゃんはサルが二両持っていったことなんて、何も知りませんでした。

市姫に萌え。でも、なんだろう、このシリアスな気持ちは・・・

冬、真っ盛り。北風びゅうびゅう吹いている。
でも、メグミちゃんがこしらえてくれた半纏のおかげで、横綱の付き人スタイルは脱出。
ただ、半纏なんかで城にやって来るから、城内の人にはくすくす笑われてっけどね。
で、いつものように居間にやって来たってわけ。
すると、おれは目を疑ったね。信長のはす向かいに、えれえ可愛いおにゃの子がいるんだよ。
澪たん・・・。まさに、けいおん！の秋山澪たん。澪たんを三次にしたら、絶対にこんな感じ。綺麗な黒髪、伏し目がちで、どことなく照れているような眼差し、小さい顔、華奢な肩、透き通るように白い肌。
おまつと同じぐらいの年齢だろうけど、おまつとは華やかさが違ったよ。とろけちゃいそうな萌えを、そのおにゃの子には感じたよ。
「牛。これは俺の妹の市だ。お前の滑稽話を聞きたいと申してきかねえ」
ああ、このおにゃの子が、あのお市の方なのか。
おれの珍奇衆の仕事では、信長一人に聞かせてやるときもあれば、信長の他にもう一人か二人いるときがあって、信長の嫁さんたちだったり、おホモだちだったり、家来ではサンザだけかな。
でもさあ、信長さん、こんな可愛いおにゃの子がいるんだったら、早く紹介してくんねえかなあ。
で、市姫はおれが座るなり、くすくすと笑みを着物の袖で隠している。
「市、何がおかしい」
「いえ、牛殿は、兄様がおっしゃった通り、まんまるなんだもの」
あっし、市姫にまんまると形容されて嬉しいでごわす。なんて可

愛らしいお言葉。この戦国にやって来て、早、三か月ほど。牛、鈍牛などと罵られてきたあっしのすさんだ心をまんまるにさせてくれます。

「して、牛。今日はどんな滑稽話だ」

「いや、じゃあ、その」

訊きたいことがないときは、結構、過酷。信長はおかしな話を期待しているけど、おれ、そんなスキルないし。それに、「今日はつまらん」とか言うときの信長の顔って結構怖いんだよ。いつ、短気を起こすか、気が気じゃない。

「じゃ、じゃあ、あの、姫君は後世のど、どんなことを訊きたいですか」

「わらわが？」

市姫は信長のほうにちらと視線を向ける。信長は微笑を浮かべながら、顎をくいっと出す。

「わらわは賢うないので、よくわからないもの」

「ふん。なら、市の将来でも話してもらえ」

え？　いや。

「そんなの恐ろしゆうて聞きとうない」

「何が恐ろしいものか。おい、牛、市は後世に伝えられているのか」

え？　伝えられているけど、でも、言いたくないよ、そんなの。こんな可愛い子が、翻弄される運命にあるだなんて、言いたくないよ。

「つ、伝えられて、お、おりません」

「なんだ、そうか」

「つ、伝えられてないということは、し、幸せな生涯を送ったという、こ、ことです」

「本当！？」

「まあ、そうだろうな」

と、信長はつまらなそうに酒をするけど、嘘です。ごめんなさい。嘘です。

「あっ！　兄様。雪が降ってきているんじゃないの。妙にしんしんとしているわ」

って、市姫は腰を上げ（それはまるで話を反らすかのようだった。実は市姫は自分の運命を感じとっていたのかもしれなかった）、俺の脇をそろそろと通り抜け（ただ、このとき、めっちゃいい匂いがしたけどね。めっちゃ萌えたけどね）、居間の戸をそろりと開けた。

「あっ！　やっぱり！　兄様！　牛殿！　雪が降ってきているわ！」

「寒いから閉めろ」

「そう言わずに。雪見酒も乙なものなのでしょう？」

市姫はそう言いながら縁側に出ていった。ふわふわと降ってくる粉雪に手を出す姿におれは釘づけ。

「あいつはまだまだ幼いな。嫁がせるにはまだ早い。なあ、牛よ」

「そ、そうですね」

嫁ぎ先、信長はもう決めているのかな。でも、どのみち、市姫には過酷な運命が待っているんだ。

市姫に萌え。でも、なんだろう、このシリアスな気持ちは・・・（後書き）

ふざけた小説をここまで読んでくださった方、ありがとうございました。これにて、序章終了です。

次からはいよいよキモオタ君が歴史の表舞台（？）へと駆け上がっていきます。

もちろん、シリアスな展開にはなりませんｗ

桶狭間には行きたくない

タイムスリップしてから半年以上が経ったけど、その間、おれは一度も元の時代に戻りたいって思わなかったね。だって、すげえリア充なんだもん、おれ。

定職には就いているし（といっても、珍奇衆の仕事は週に二日ぐらいに減っていて、多分飽きちゃったみたい信長）、メグミちゃんという恋人（勝手におれが思いこんでいるだけだけど）もいるし、なんで今さら、戻りたいと思っちゃう？

でも、今川の大軍が駿府を出たっていう噂を聞いたときには、さすがにおれも元の時代に戻りたくなった。

半年もいると、戦国の時代に明るくなってきちゃったわけ。

今川義元って奴は、元の時代では馬鹿扱いされているけど、本当はどうやら、相当の名君らしい。頭が切れるし、政治は完璧だし、戦争も強い。三河を支配できるようになったのも義元の時代から。

そんな今川義元が、万を持して上洛するってわけ。

もちろん、今までも、尾張勢とはなんどか小競り合いがあったみたいだけど、そんなのはやるやる詐欺みたいなもんで、本番はこれから。義元自らが動き出すってのは、やるやる詐欺のあとに出てくる、真打ち登場ヤクザ屋さんみたいな感じ。

でも、おれは知っているんだよ。義元が桶狭間で殺されるのは。

なのに、今、ここから逃げ出したいのは、どうやらおれも合戦に繰り出されそうな雰囲気だから。

「牛殿が申したことなのだから、お主ももちろん桶狭間に出陣するのじゃぞ」

と、サンザ。最悪。おれを巻き込むな。

で、どこからどうやって回り巡ってきたのか、今川軍がこの尾張に迫ってきているって噂が、城下の奴らの耳にも入ってきたわけ。

で、誰しもが、信長が勝てるわけないと思っているから、引っ越

しを始めちゃって。城下町はがらんどう。
メグミちゃんもお母さんとどっかに疎開。
ああ！　ジュリエット！　どうして君は何も言ってくれなかったの！　私も一緒に疎開したかったのに！
それで、城では毎日、いくさいくさいくさ、の話かその準備。各々の足軽組はいまさら訓練、中年幹部連中はいまさらおろおろ。
まあ、どっちみち、織田家が勝つ。ただ一つの不安は、おれが駆り出されるかどうか。それだけ。
織田家はどうやら総動員態勢の様子。そりゃそうだ。三万から五万の大軍に対して、織田の兵隊は五千に到達するかどうかなんだもん。
ということは、おれも駆り出されるよね？　でも、おれって役に立たないよ。ただの噺家だもん。
拙者がいると足手まといになってしまう。ゆえん、織田家のために出奔しよう。そう、これはおやかた様を思ってのことでござる。織田家に仕えて、まだ、半年とはいえ、拙者、おやかた様には果たしきれぬ恩がござる。
だから、足手まといの拙者は去らねばならぬ。
さようなら、おやかた様。さようなら、尾張。
拙者、メグミちゃんの疎開先に向かうでござる。
で、夜、おれは泥棒みたいに我が家（ボロ）をこそこそと出た。
こういうとき、ありがちな展開でサルなんかに見つかりそうだから、ぬき足、さし足、しのび足。
「おい、牛」
はい、ありがちな展開、いただきました。
「久しぶりだな」
夜の闇にのそっと現れたのは、ジャイアン、もとい、前田ドザエモン利家。ちっ。マジでドザエモンになってほしかったぜ。こいつだけは生きていてほしくなかったぜ。

チッキン、プリィーズ！

「牛。いよいよ、いくさだ」
と、マタザ。勝手におれの家に上がり込み、おれとメグミちゃんの愛のゴザの上に勝手に座り、まるで自分の家かのように酒を飲んでやがる。
マタザと一緒に出ていった従者も勝手に上がり込んできていて、勝手に囲炉裏に火をおこして、鳥の姿焼き。
焼き鳥っ？
ああ、おれは戦国に来てからこのかた、肉なんて一口も食べていない。食べ物はいつも、偽物のお米か草、それ以外としても、どうせ穀物穀物穀物、穀物三昧の日々。メグミちゃんが作ってくれる物だから、文句は一つも口にしなかったが、どれほど、マクドナルドのテリヤキマックバーガーが恋しいか。
おかげで、おれはダイエットに成功したんだが、デブでもいい。
Ｃｈｉｃｋｅｎ　ｐｌｅａｓｅ！！！！
「俺はいくさが始まるまで、この家に居座る」
と、マタザ。そんなことはどうでもいい。ハアハア。チキンください。チキン。
「牛は城に参上したさい、絶えず情報を持ってこい。おれは一番槍をあげる。そして義元の首を討る。だから、誰よりも早くいくさ場に駆けつけなければならねえ。牛、おやかた様が動くときを、誰よりも早くおれに報せろ」
へえへえ。御意御意。だから、チキン寄越せ。
あっ。おれの恋人のチキンがマタザの手元に。がぶり。むしゃむしゃ。うわあ。まさにビースト。
ぽいっ。残ったのは骨。あと、それにひっついている食いカス。
ううっ。食いカスでもいいから口にしたい。でも、おれにだって戦国武将（社内ニート）の意地がある。人の捨てた物にかぶりつく

ほど、おれは落ちぶれちゃいねえ！
「あのう、マタザさん」
「なんだ」
「ここにいるっていうことは、織田家に復帰ってことですかね」
　すると、マタザ、罰が悪そうにして無言。ふーん。復帰してないってことね。そのくせ、いくさには参加ですか。いいのかなあ、いいのかなあ。信長は許してくれるのかなあ＾＾
「こたびのいくさで手柄を立てれば、おやかた様も殿をお許しくださるはず」
　従者は黙ってろ。お前の価値観で物事を決めるんじゃねえ。と、言わんばかりに、おれは従者をぎろり。
　ふふ。半年もいれば、おれもそこそこの身分にいるってことぐらいわかってくるもんよ。なにしろ、おれは信長のお側にいる嘶家だ。
　しかし、従者、おれにぎろり返し。
「あっ、いやっ」
　視線をあわてて反らすおれ。やっぱり、認められていないおれ。やっぱり、キモオタ扱いのおれ。従者ごときに。チクショウ。チクショウ（´；ω；`）
「もういい。おれは寝る。疲れてんだ」
　って、マタザ、追及を逃げてごろり。すぐにいびき。くそっ。いい身分だぜ。このバカ。しかも、おれとメグミちゃんの愛のゴザで寝やがって。くそっ。氏ね。
「では、わしは」
　と、従者、なぜか、そろりと立ち上がる。こそこそとおれにささやく。
「奥方様に伝えてきて参ります。今、旦那様は牛殿の家におられると、伝えてきてまいります」
　あっ、そう。どうぞご自由に。
「くれぐれも、旦那様にはご内密に」
　従者はそろそろと家を出て行った。

・・・・・。

チャーーーンスっ！

おれはかじりついたね。チキンに。うめえ。めっちゃうめえ。涙が出てくるわ。うますぎて。

ありがとう、マタザ殿。ありがとう、従者殿。この肉の味、生涯忘れませんぞ。

ピリピリ

清州城では毎晩のように軍議。
もち、おれがそんなのに参加できるわけないんだけどね。
ただ、珍奇衆の仕事のときに、信長の脇にいるサンザがおれに教えてくれた（サンザはおれをあんまり信用していないみたいで、渋々って感じ）。
つい最近、大将の今川義元が三河に入ったみたいで、軍議はめちゃくちゃ。籠城派と野戦派に別れて大ゲンカ。落ち着いていたのは信長だけ。だって、桶狭間しかないもんね。信長の頭の中には。
信長は結論を何も出さずにさよなら。スパイや忍者が潜んでいるかもしれないってことで、何も明かさず。
「今川は沓掛城に入った模様じゃ」
って、サンザは言うけど、ふーん、どこにあんの、それ。
「忍びの報せによると、そこから先方隊として松平元康率いる三河勢が出陣するらしい。人質にとらわれていた松平の出陣ゆえん、三河勢はここで手柄を立てようと血気盛んじゃ」
「ということはだ、牛、話が違え」
へ？　信長さん、口調は冷静ですが、静かな怒りが感じられます。その矛先って、もちろん、おれですよね？
「今川の大将は出陣しねえ。後ろで高見の見物だ。義元は、竹千代だけに尾張を攻略させる腹積もりだ。確かに、三河勢は今川の別働隊にすぎねえ。だがな、今の三河勢と織田では、五分と五分、むしろ負けだ」
「そんなのは無視していればいいんです」
「何い？」
強気に出たおれだけど、信長に凄まれて、逃げ腰。
「こ、今回のいくさ、い、いくさは、あくまで、き、奇襲。あ、あくまで、よ、義元の首だけで、で、です」

じいっと睨まれるおれ。あーあ、やっぱ、調子に乗らなければ良かったかもしれん。これなんだよね、おれの駄目なところって。すぐに調子の乗っちゃうところ。だから、高校のときにＤＱＮにボコられたんだよね。チクショウ。

「おやかた様、確かに、我らの勝利にはそれしか道がないのも事実です」

ナイス！　サンザ！

「一点に集中する他ありません」

そう言われて、信長はずっと、眉間にしわを寄せていた。板床のどこか一点をじっと見続け、しばらくの間、無言。あとは運に任せるか、どうか（おれを信じるのかどうかってのもあるけど）、決断するしかないだけ。

「わかった。もはや、腹をくくろう。ただ、どうにも信じ切れねえ。サンザ、念には念を押す。三河に流言を流せ。今や信長は怖じ気づいて、朝廷、幕府、さらには各大名に救援を求めていると。すぐにだ。今夜中にだ」

「わかり申した！」

「あと、声を小さくしろと言ったはずだ。直せ」

「は、はい・・・」

今日の解説は前田又左衛門さんです

ボロ家に帰って来ると、マタザが愛のゴザの上に寝そべって、従者にマッサージをさせていた。クソッ。人の気も知らねえでよ。
「おお、牛。どうだ。新しい情報はあるか」
「今川義元がなんか、沓掛城っていうところに入ったとか、なんとか。それで、松平元康を先方部隊で投入するみたいッス」
「沓掛城か」
マタザは従者にマッサージをやめさせると、体を起こし、おれに向かってにやっと笑ってきた。
「桶狭間は目と鼻の先じゃねえか」
ふーん。そうなんだ。じゃあ、いくさは近いってことね。
「沓掛城に入り、先方隊を送る。ってことは、松平は丸根か鷲津の砦を攻めるだろう」
そんな講釈、どうでもいいんスけど。
「その先にある今川の大高城と沓掛城は一つの行路で結びつくが、この丸根と鷲津の砦が遮っている。三万の大軍だ。先に道を作っておかねえと、安全に進軍することができねえ」
お前、どうせただの猪武者だろ。池上彰の学べるニュースばりに解説してんじゃねえよ。
「牛、お前の予言は的中だな。桶狭間はまさに大高と沓掛を結ぶ中間にある」
予言じゃないんですけど。
「おやかた様はどうされるおつもりだ」
「三河勢は無視ッス」
「おやかた様は天運が桶狭間にあることをご存じなのか」
「ご存じッス」
「しゃああっつ！」
って、いきなり立ち上がり、吠えたマタザ。うるせえ。どんだけ、

興奮してんだよ。お前は闘牛かっての。あ、牛はおれか。

「牛！　いくさの支度をしろ！　明朝、俺たちはおやかた様に先じて桶狭間に向かうぞ！」

はあ？　俺たちって、誰を含めて、たち、なの？　こいつ、マジで死んでくれよ。いきり立つのは一人だけでやってくれよ。おれは絶対にご免だ。絶対に。

さらば、清州

鼻息が荒いマタザ、槍の手入れ中。
従者はマタザの兄貴の家へ。預けていた馬を連れてくるとかなんとか。まさか、この家に入れるわけねえよな。
「マタザさん、出陣する前に、どうしても会っておきたい人がいて」
と、逃げ出したいおれは口からでまかせ。
「会っておきたい人？　誰だ」
「えーと、まあ、その、女の子です」
しらーっ。マタザ、疑いの目。いや、確かに会っておきたいってのは嘘だけど、おれにだって恋人（？）はいるんだからな。
「お前に女？　にわかには信じられねえな。誰だ、言ってみろ」
「いや、そんなの言う義理あんスか？」
そしたら、マタザ、槍をびゅんって振り回してきた。はいはい。ジャイアニズムね。言えばいいんでしょ、言えば。
「木下藤吉郎殿の妹さんです」
「なにぃ＾＾」
すると、マタザ、槍を置き、立ち上がった。
「なら、俺も付いていってやろう」
「いやっ、何をおっしゃっているんスか！　マタザさんは、出奔されている身。今、家の外に出たら、今川の手先かと怪しまれます！」
マタザ、しばらく黙っておれを見つめていたあと、着席。
「まあ、それもそうだな」
つまらなそうに、また、槍の手入れ。
ふう。危ねえ、危ねえ。おれの計画が台無しになるところだった。だいいち、メグミちゃんは疎開しちゃってんだから、清州にいないってことがマタザにばれると、またボコられちまう。
「じゃ、すんませんけど、マタザさん。あっしはちょっくら時間をいただきます」

「明日は早え。さっさと帰ってこいよな」
「へいへい」
バーロ。お前は寂しがり屋かっての。おホモだちにでもされかねん勢いだぜ、まったく。
ということで、おれはボロ家からさよならー。また会う日までー。て言っても、桶狭間が終わるまでは森にでも閉じこもっているぐらいだからねー。早く帰って来るよー。じゃねー。

アンチメロドラマ隊

雲間にお月様。
いやあ、いいですねえ。綺麗ですねえ。さすが、大昔。空が澄み渡っている。
警戒モード突入の城下を上手いことすり抜け、田んぼ道に出たおれ。カエルの唄が聞こえてくるよ。ぐわぐわってねｗｗｗ
タイムスリップして以来、清州にずっと閉じ込められていたから、清々しいね。ようやく得た自由。これで馬でも盗んでれば、尾崎豊ｉｎセンゴクＶｅｒ。
（二）十五の夜ううぅぅっつ！　Ｈｏｏｏ！
「私は清州から離れませんよ」
！？
あわてて、地べたに這いつくばるおれ。さしずめ、牛ガエル。
「にゃにを言っているきゃあ。今川が来てりゃあ、侍どもはおんにゃ子供まで容赦せんだぎゃあ」
これは明らかにサルの声だろ。ぐぬぬ。あいつ、誰かと密会してやがる。まさか、遠山さんか。遠山さんかっ。遠山さんかあっつ！
チクショウ。妹を疎開させて、おれとの間を引き裂いたくせに、自分だけはギリギリまでいい思いをしやがって。てか、いつから、そんな仲になったんだ。あんだけ怒鳴られていたのに、いつから、あんなことやこんなことを・・・。
邪魔してやる。邪魔してやる！
おれはグリーンベレーも真っ青の歩腹前進で声の在り処のほうへ。むむっ。月明かりに照らされて人影が。軍曹！見つけました！目標を確認しました！どうやら、二人並んで小川に顔を向けている様子！好機あらば、攻撃の許可を！
「どうしてお前様は今川公に負ける前提なの。今からいくさに向かうんでしょう。最初から負けるつもりでいくさに向かう男がいます

か」
「そんにゃこと言ってもだにゃあ、五万の大軍におれりゃが勝てるわけにゃあだぎゃろうぎゃ。おりゃあは、にゃにゃに生きていてもらいたいんだぎゃ。辛い目に会ってほしくないんだぎゃあっ」
ぬう。やっぱり、相手は遠山さんか。しかも、呼び捨ての仲にまで発展しているじゃねえか。おのれええぇ。
「じゃあ、お前様はいくさに行かないのかい」
「行かないわけにゃあだれりゃあっ。おりゃあ、おやかた様にどこみゃでも付いていくと決めたんだぎゃあ。おやかた様はおりゃあみたりいな百姓あぎゃりを、足軽組頭まで抜擢してくださったんだぎゃあっ」
ほほう。サルは信長だけには義理堅い様子。
だが、今は関係ない。おれへの義理はまったくないからだ！
「なら、お前様。できることなら負けるいくさには行かないで」
「にゃっ？」
「絶対に勝って帰ってきて。私はお前様に死んでほしくない。だから、絶対に勝ってきて」
「にゃあ・・・。わかった。この木下藤吉郎、勝って帰ってこよう。そして、生きて帰ってきたときには、・・・ねね殿。おれと契りを結んでくれ」
は？　なに、その賢者モード。
柔らかい沈黙が二人を包み込んでいる間、初夏の風がすうっと吹いた。
そして、ねねはこくりと頷く。黙ったまま。うつむくように。
攻撃を許可する！
「ぐわっぐわっぐわっ。げろげろ。ぐわっぐわっ」
「何モンだぎゃあっ！」
のそりと起き上がったおれ。
「藤吉郎殿。いい身分だのう。えーっ？　藤吉郎殿ォっ！」
「あ、いや、う、牛殿でにゃあか」

おれの初恋の人を。ウウッ。

毒きのこ

今川とのいくさ、織田が勝つ。
織田が勝つ、すなわち、サルと遠山さんは結婚。いや、にゃにゃさん。いや、ねね。
そうか。そうだったのか。遠山さんは秀吉の奥さんのねねだったのか。
これが歴史。
おれは引き下がるしかなかった。歴史の重みの前に。
「聞きましたよ、藤吉郎殿。おめでとう、藤吉郎殿。そして、ねねさん。お幸せに」
おれはそれだけを言い残し、再び足を進めた。いいんだ。これでいいんだ。遠山さんの幸せはおれの幸せ。男たる者、引き際も肝心よ。
「牛殿」
いいんだ、サル。礼はいらねえよ。おれはお前らを見守る。おれの役目は恋の防人。
「どこへ行くんだぎゃ」
「あ、いや」
そういや、おれ、こっそり逃げ隠れるはずだった。
「今川は目と鼻の先まで来てりゃ言うという話だぎゃ。いつ、出陣の命が来るきゃ、わからんだぎゃあ」
「いや、その、きのこ狩りに行こうと思って」
「今の季節、きのこなんて毒きのこぐらいしか生えていませんよ。よしたほうがいいわ」
と、遠山さん。はあ。おれにとっては、あなたたちのメロドラマこそ毒きのこの気分なんだけどね。
「怪しいだぎゃ」
にやにや笑っていやがる、このくそザル。

「もしかして、逃げるつもりだったんでやなあかあ？」
「な、何を無礼な！　と、藤吉郎殿だって、負けいくさになるとか言ってたじゃんか！」
「そりやあそうだきゃども、おりゃあは、逃げるつもりなんてりゃあ、ないだぎゃあ」
「あ、あっしだって何も逃げるつもりなんか。ただ、腹が減って。そう、秀吉ど、いや、藤吉郎殿があさひ殿を疎開させたせいで、あっしは何も食べていないんだ」
「にゃら、うちに来れりゃあいいだぎゃ。にゃにゃさんが振る舞ってくれるだぎゃ。にゃあ、にゃにゃ？」
ぬぬ。にたにたと笑いやがって。
「ええ。構いませんよ。腹が減ってはいくさはできませんからね」
ウウッ。遠山さんまで、おれをいくさに駆り出させるつもりですか。
「で、でも、今、あっしの家にはマタザさんが来ているんです。だから、帰らないと」
「にゃあ？　前田様ぎゃ？　そうなんきゃあ！　前田様がいるんにゃら、おりゃあも行くきゃあ。前田様といろいろと積みゃる話をしたいだぎゃ。にゃあ、にゃにゃ。お前も来るんだぎゃ。前田様に御馳走を振る舞えだぎゃ」
どうあがいても、サルには勝てないみたい。
で、ボロ家に帰らされたおれ。サルと遠山さんも一緒。酒はサルの家から、御馳走とは名ばかりの何らかのぬか漬けは遠山さんの家から（鬼女に見つからないようにして）。
家にはなぜかおまつがいた。萌え～（＊´Д`＊）。あらやだ。見ないうちに若干大人っぽくなったみたい。
「前田様！　お久しゅうございますだぎゃ」
「ん？　おお、サルか」
「あら、おサルさん！」
「ついそこで、牛殿に会ったんですぎゃ。にゃんでも、前田様が居

られりゃあ言うて、おりゃあも顔を見せにゃあいかんと思いましたりゃあ」

「ああ、そうなのか。それで、牛はお前の妹御と会えたのか？」

「にゃあ？」

あ、いや。その。

首をかしげるサル。にやにやと笑い始めたマタザ。

「なんだ、サル。聞いてないのか。牛は、お前の妹御に会いに行くと言って家を出て行ったんだぞ」

「にゃ・・・、にゃんですとおっ！？」

サルにぎろりとされたおれ。あかん。どっちに転んでもあかん。

「よいではないですか、おサルさん。貴方も人の娘御の寧々様と契りを結ぶんでしょう。なのに、自らの妹君の恋には反対だなんて、自分勝手にもほどがありますよ」

おまつ様はね、大人なんだよ。おい、サル。お前とは違って、大人なんだよ。だいたい、メグミちゃんに散々おれの世話をさせといて、付き合うとするとふてくされるだなんて、何かたくらみがあって、そうしているとしか思えねえだろ。

「違いますりゃあ、おみゃつ殿。おりゃあは、にゃにゃのてうえに了解をもらっているだぎゃ。でも、牛殿はおりゃあに了解をもらっていないだぎゃ。おりゃあと牛殿は違うだぎゃ」

「じゃあ、今、ここでお前様が了解すれば済む話じゃないんですか」

「おみゃあは黙ってりゃれえ！」

「あー、そうですか。なら、いいですよ。私とお前様の仲はなしということで。だいたい、忘れたんですか。母上がお前様のことをえらく嫌っていらっしゃるのを」

「にゃあ・・・」

「どちらにしろ、サルも牛も、二人揃って甲斐性がないっていうことじゃねえのか！？」

あっはっはっは、ってマタザは笑うけど、なんで、お前はいつまで経っても愛のゴザからどこうとしないの。

「前田様、おそれながらも申しあでりゃあございみゃあすぎゃあ、おりゃあには甲斐性があるだぎゃども、牛殿にはそんにゃものないでぎゃあ」

おれはむっとしたね。なんで、サルなんかにそんなこと言われなくちゃならないのかと。

「何を言ってんスか、藤吉郎殿。甲斐性がないのは藤吉郎殿じゃないですか。藤吉郎殿は何か言葉を発するたびに、今回のいくさは負

ける負けると言うじゃないですか」
「そんなこと言っていないだぎゃ！牛殿はおりゃあを陥れりゃあつもりきゃあ！？」
「陥れようとしているのは、あんたでしょ！いつだってそうだ！最初に会ったときもそうだ！寧々さんを紹介してくれるとか言っておいて、実はあっしが金持ちだと勘違いして、寧々さんに金の力で口説こうとしたじゃないか！」
「しーっ。しーっだぎゃ、牛殿」
「お前様は意地汚いんですよ。まったく」
「意地汚いとはなんだぎゃ！将来の亭主に向きゃって意地が汚いとはなんだぎゃあ！」
「あら、お前様と契りを結ぶことはまだ決まっていませんよ。お前様がいくさから帰ってきたらの話でしょう。将来の亭主だなんて、勝手なことを言わないでください」
「にゃ・・・」
「さすがのおサルさんも、寧々様には肩無しですね」
あっはっはっはって、一同の笑い声。ちっ。おれはおもしろくないんだけど。なんなの、この戦国ヌクモリティ。明日、明後日にはおれは殺されるかもしれんのに。おれだけは。
「牛、なーに、難しい顔をしているんだ。酒が足らねんじゃねえのか」
ふん。いい気なもんだよ。はいはい。酒でも飲まねえとやってられませんわ。

常に逃げられない、ありがちな展開

むにゃむにゃ。
むーん。
ありゃ、今、何時だろ。ま、起きる時間なんて何時でもいいんだけどさ。社内ニートだし。
ううっ。頭痛え。気持ちも悪い。
あーあ、昨日はさんざんやけ酒飲んだからなあ。
って、マタザの姿がないんだけど。そういや従者も昨日からいなかったな。
ラッキー＾＾
これで、桶狭間には行かなくて済みそうだぜ。
といっても、いくさは近そうだし、サンザあたりが迎えに来そうだから、さっさと逃げないとね＾＾　二日酔いもなんのその、今日が生きるか死ぬかの分かれ目よ。
「こんにちは」
むっ。また、この展開スか。でも、この黄色い声は誰？
「牛殿。藤吉郎殿に言われて、朝食の支度を持ってまいりましたよ」
と、遠山さんっ。
遠山さんはおれの前に膳を置き、
「藤吉郎殿が言ってましたよ。牛殿は一人では何もできない人だって。今はあさひ殿も清州にいないからって、私に世話をしてこいと申していましたけど、牛殿、その齢にもなって食事の支度ぐらいはできないといけませんよ」
ハアハア（＊´Д｀；）　たまらん。遠山さんに叱られるなんて、たまらんでごわす。
「とは言え、もうすぐ、いくさですものね」
うめえ。うめえ。遠山さんは料理もうめえ。
「牛殿。藤吉郎殿共々、生きて帰ってきてくださいね」

ウウッ。たまらん。「帰ってきてね☆」なんて。ウウッ。サル、テラ羨ましすぎる。

「ま、まあ、し、心配しないでも、藤吉郎殿は無事に帰ってきます。あっしにはわかります。藤吉郎殿は死にません」

「そう？　本当に？」

あーあ、遠山さんのつぶらな瞳がおれに訴えてきちゃったよ。やっぱ、なんだかんだでサルに惚れてんのか。あーあ、やんなっちゃった。

「そういや、マタザさんは、やっぱり出て行っちゃったんですかね」

「はい？」

「いや、いくさに」

「は？　前田様なら昨晩、御自宅に帰られましたよ。といっても、酔いつぶれた前田様を、あとから来た御従者の方がおまつ様と一緒に連れていってしまったんですけどね」

え？　そうなの？

「なんでも、おまつ様は御従者の方に聞いていたみたいで、前田様がいきり立っているって。清州の殿様に御帰参が許されていない身分でいくさに出られたら、それはまずいでしょう？」

ほほう。あわれマタザ。今頃、自宅で軟禁状態ッスか＾＾　従者も従者で、マタザに隠れてこそこそと動いていたってわけか。プププ。

そうすると、おれは晴れて自由の身。ようやく、ようやく、逃げられるってわけよ。

「御免！　牛殿はおるか！」

って、思っているそばからサンザですか。お前、うるせえんだよ。直せって言われたばっかりだろ。クソッ。

「おやかた様がお呼びだ！　拙者と共に至急城内に参上せい！」

オワタ。

人間五十年の歌

マタザの言っていた二つの砦が、昼中、松平元康に攻撃され、またしても軍議は大揉め。しかし、信長はむっつり。そりゃそうだ、今川義元が動き出すまでには、信長も動けん。

で、城に軟禁されていたおれ、軍議が終わっての夜中に、ようやく信長に呼び出されたわけ。

「牛。お前だけには正直に言おう。俺は恐ろしくてたまらん」

今日の信長はさすがに酒を飲んでいなかった。腕を組んで、じっと目を瞑っていて、ようやく口にしたと思えば、それ。意外。

信長がそう言うと、傍らのサンザが口をきゅっと絞って、なんだか悲しそうな顔。

「できることなら、俺は織田の嫡男には生まれたくなかった。俺の親父は豪傑と言われた男よ。その親父の嫡男は病気がちで頼りのない子供」

へえ。信長ってそうだったんだ。マッチョなのに。

「だが、嫡男は嫡男。家督を継ぐのは俺だ。だから、俺はうつけを演じた。弟が家督を継げば良いとな。しかし、今、こうして織田の当主として居る。逆らえなかったのじゃ。天命にな」

そして、と、信長は続ける。

「お前が現れた。俺が覇王になるとのたまった。さらに今回のいくさ。東海一の弓取りと真っ向から勝負しなければならない今回のいくさ。巨人に踏みつぶされ、さっさと露に消えていけばいいものの、お前は言う。俺が勝つとな」

ええ。勝ちますとも。それが何か？

「諦めるとなれば簡単だ。だが、勝つのが天命ならば、絶対に勝たなければならねえ。俺はそれが恐ろしい」

何を言ってんのかさっぱりわかんねえや。気難しいんですね、要は。

「牛、最後に訊ねよう。織田三郎信長とは何者だ」
は？　何を言っているんですか？
「信長様は信長様だと思いますけど」
すると、信長は微笑を浮かべた。何に納得したのかはわからないけど、急に腰を上げ、
「濃！　鼓を持てい！」
「持ってきております」
って、すうっと障子戸が開いて、微笑の濃姫。あれ、そこにいたの？
で、信長、濃姫が太鼓を打つ調子に合わせて、人間五十年の歌。すげえ甲高い声で。唇を噛みしめるサンザ。うとうとと眠くなってきている、おれ。
で、変な歌が終わると、
「濃！　三左！　いくさの支度じゃ！」
「御意！」
三左は板間を飛び出て行き、濃姫があらかじめ準備していたのか、信長に具足やら甲冑やらを着せていく。女中が膳を手にして入ってきて、支度が整った信長がお茶漬けみたいなのをえらい速さで口の中にかっこむ。
おれはその間、ぽかーん。
「濃、そいつの支度もしてやれ」
「で、でも、旦那様」
「なんだ。早くしろ！」
「この御仁の体格に合う召し物はありませぬ」
・・・・。
まあ、おれってダイエットに成功しているけど、まだ、全然デブだし。
「なら、縄か綱でも巻きつけてやれえ。刃先ぐらいは防げるだろ」
ということで、女中四人がかりで額に縄を、体に×印に綱を巻きつけられたおれ。なに、この格好。ただの変態じゃん。

おれの支度が終わると、笑いをこらえながら、立ち上がった信長。
「牛、ついて参れ。出陣じゃ！」

綱男のフルマラソン

門前には馬が用意されていて、信長はそれに跨る。
で、おれの馬は？
「おやかた様！　まだ間に合いませぬ！」
「猶予があるかあ！　サンザは皆のものに伝えて参れえ！　熱田大神に戦勝祈願だ！」
「あのう！　信長様！」
と、綱男のおれ。
「あっしの馬はどこでしょう！」
「お前の馬などあるわけねえだろうが！　牛が馬に跨るなんて話、聞いたことがねえぞ！　お前は走って付いてこいや！」
そんなあ（´；Д；`）
で、馬を駆け出させた信長。あわわ。
「おやかた様！」
と、どこからともなく二騎飛び出してきて、信長の後を追う。あわわ。
「何をやっておる！　牛殿！　おやかた様に付いていけい！」
うわーん！　ママァー！
って、泣き叫びながら、走り出すおれ。門の外へ飛び出していく。
背後にした城からはブオーンってホラ貝。一騎、また一騎と城から駆け出てきて、何かがなり声を上げながらおれの両脇を抜けて行く。いくさだ。本物のいくさだ。うわーん！
でも、このまま逃げるっていう手も。信長の姿なんてとっくに無くなっているし、そもそも、どこに行けばいいのかわからん。
と思ったおれがバカだった。城下にはたいまつの明かりがどんどんと増えていって、足軽長屋からは大勢の百姓侍たちがあわてふためく感じで飛び出してくる。
「行き先は熱田神宮じゃあ！　遅れるな！」

「いくさじゃいくさじゃいくさじゃあ！」
「一番槍は我が組のもんじゃぞ！　功名じゃあ！　功名を上げるんじゃあ！」
怒号。おれはもみくちゃ。皆、血なまこ。いや、血まなこ。
「牛殿でにゃあか！　にゃんて格好をしているんだぎゃあ」
はあはあ。はあはあ。もう声とか出せませんよ。おれ、運動会の徒競争でビリだったんだから。
「牛殿は逃げる恐れがあるだぎゃ！　おみゃあら、牛殿をしっきゃり見張りゃれえ！」
くそう。くそう。このサルだけは。くそう。
で、追い立てられる牛のように、サルの足軽組の連中に周りを取り囲まれながら、熱田神宮までなんとか走ってきたわけ。
すっかり朝。死ぬ。殺される前に死んじゃう。
境内は千人以上の兵隊たちのおしくらまんじゅう状態で、圧巻。
でも、おれ、付いた途端にバタンキュー。
「我ら織田はこれより今川と雌雄を決する！」
軍勢の前に立っている信長が例の甲高い声で叫ぶと、百姓侍たちはうおーって歓声。
で、信長は拝殿に向けて柏手を打つ。すると、拝殿の中から、ポンポンって、小太鼓の音。
うおおおおっつ！
なんか、大騒ぎ。どしたの？
「きゃっきゃっきゃ！　聞いたか皆の衆！　なんとめでてえ！　ここに居られる天照大神も我らのいくさに奮い立っておるぞ！」
百姓侍たちは槍やら刀を振り上げて大盛り上がり。なに、このやらせ儀式。こういうもんなの？　いくさって。
「我らには戦いの神が付いておる！　このいくさ、我らの勝利ぞ！」

闘牛じゃねえんだぞ、いくさはｗｗｗ

徹夜の強行軍の挙げ句、善照寺砦というところでハーフタイム。ただ、中には入らせてもらえないおれ。木下組の連中十二人と一緒に束の間の食事。食い物は干し柿。まずい。氏ね。いや、死ぬ。

「丸根と鷲津の砦が松ナントカって奴に攻撃されているらしいぜ」

「じゃあ、そこに援軍かな。どうなんでしょう、組頭」

「そんにゃのは、おやかた様が決めることだぎゃ。おりゃあらはそれに従うだけだぎゃ」

「無視ッスよ、無視」

と、おれ。清州からここまで、足軽組の連中に「さっさと走らんかい、この鈍牛！」とか「牛がどうして人より遅えんだ！　てんで使えねえ牛じゃねえか！」とかって、さんざんいじめられてきたので、おれは、お前ら百姓侍なんか屁でもないってところを見せたいばかりに言った。

「今川は大高城と沓掛城の行路を確保したいんスよ。でも、その行路を確保させれば、今川は油断し、そこに横槍を入れるってのが、信長様の作戦ですよ」

「何を言ってんだ、この牛」

「それは牛の了見だろ。闘牛じゃねえんだぞ、いくさは」

ぎゃっはっはって、百姓侍たちに笑われるおれ。ぐぬぬ。クソッ。クソッ。その通りになるのに、クソッ。どうせ、その通りになっても、どうせ忘れちまうんだろ、このノータリンどもは。

「だいたい、なんなんだよ、その格好は」

「待て、おみゃあら」

と、サル。神妙な顔でおれの前に立ちはだかると、

「その話、本当なんだぎゃあ？」

ふっ。やっぱり、天下人になる人間は目の付けどころが違え。

「本当ですとも。このいくさに勝つ手段はそれしかないって、信長

様もサンザ様も言ってましたよ」
「そうきゃあ。そうでやったのきゃあ」
と、しばらくの間、何事かを考えるサル。また、サル知恵ですか。
どうせ、汚ねえ手柄でも上げようって企みだろ。
「ちょっと、おみゃあら待っていりゃれえ。おやかた様に会ってくるだぎゃ」
って、砦の中に入っていったサル。十分ぐらいですぐに戻って来て、
「牛殿！　一緒に来るだぎゃ」
へ？　もう歩きたくないんですけど。
「どこに行かれるんですか。俺らも付いていきますよ」
「おみゃあらはいい。多勢ではいきゃん。おりゃあと牛殿で十分でやあ」
そういうことで、半ば無理やりにサルに付いていかされるおれ。
ねえ、どこに行くのー。お腹空いたし、くたくただし、死んじゃうよー。

おりゃあのものはおりゃあのもの

サルと二人でかなりの間歩いて、やって来たのはどっかの小さな集落。

いくさは始まっているっていうのに、やけにのんびりとした村。清州から離れているせいなのか、人々に危機感ゼロ。

ただ、いくさ姿のサルと変態のおれがやって来たせいか、女子供が家の陰から恐れの視線。いくさが始まるっていうことぐらいはさすがに耳にしているんだろうね。

「にゃあ、めんこいおんにゃの子だぎゃ。にゃあ、村長さんはどこかえ？」

「あっち」

「にゃら、案内してくれんかえ？」

「ええよ」

こいつは女子供に好かれるのは本当に天下一品。案内をしてくれる幼女のあとをついていくサルと牛。

案内されたボロ家にはすでにジジイが軒先に出てきていて、あと、若い男も村長を守るかのようにして両脇に二人。すげえ警戒の目。

「にゃあ、村長殿。おりゃあは織田家の木下藤吉郎と申す者だぎゃ」

「お侍様がこんな村に何の用でしょう。はっきり申し上げて、我らは主人が織田様であろうと今川様であろうと構わんのですぞ」

と言うと、両脇の若者がくわを出してきて、構えのポーズ。うわあ、おれら、超嫌われ者。

「そんにゃ、水臭いことを言うなだぎゃ。にゃあにゃあ、おりゃあらは何もおみゃあらに何かしようと思って来たわけじゃないんだぎゃ」

「じゃあ、何の用です」

「酒を届けてほしいんだぎゃ。この村にあるありったけの酒を今川の殿様に届けてほしいんだぎゃ。調度にゃ、今川の殿様がこの近く

に来るようだぎゃ」
「酒なんて、我らの村にはありませぬ」
「にゃあにゃあ、そんにゃこと言うにゃだぎゃ。お願いしますだぎゃ。にゃあ。これはほんの餞別だぎゃ」
と、サルは懐から小判を一枚。
ん？　小判？
途端に目を輝かせたジジイ。小判一枚ごときで。てか、それっておれからむしり取って行った小判じゃね？
で、無理やり、村長の手に小判を握らせるサル。わなわなと震えるおれ。
こいつ。人からむしり取った金で、手柄を立てようとしてやがる！
金の力で酒を届けるのを約束させると、意気揚々と村を去るサル。
「にゃっはっは。こりゃで今川の者どもは酒に酔っていくさぐらいじゃなくなるだぎゃ。本隊のあいつりゃ、油断していりゃるから、酒をがびゅがびゅ飲むだぎゃ。おやかた様もおりゃの案に大喜びだったぎゃ！」
「でも、藤吉郎殿。あれはあっしの金じゃ」
「にゃあ？　にゃにを言っているんだぎゃ？　ありゃ、牛殿の家の修理費でもらった小判だぎゃ。にゃら、あれはおりゃあの小判だぎゃ」
ぐぬぬ。
で、善照寺砦に戻ってきたおれとサル。
って、あれ？　土煙がもうもうと上がっているんですけど。歓声がごうごうと上がっているんですけど。
「ありゃあっ！　乗り遅れたぎゃあ！　まずいにゃあっ！　行くだぎゃ、おりゃあらも行くだぎゃあ！」
えー？また走るのお？　もういや。でも、渋々付いて行かされるおれ。
ややもすると、隊列と合流。
「組頭！どこに行っていたんですか！」

「すみゃんすみゃん。で、とうとう、やり合うんだぎゃにゃ？」
「それがわかりませんわ！　行き先は不明！　ただ、皆がおやかた様に付いていっているだけですわ！」
そして、また、百姓侍たちに取り囲まれるおれ。もういや。

キモオタ、桶狭間に立つ

小高い丘陵の頂上に織田勢はずらりと並んでいた。
並んでいた？
わかんねえ。だって、雨がすごい降っていて、全然見えねえ。
で、おれは喉がからからだから、空に向かって口をあんぐり。こんなことやっている奴は他にいないけど。
「サル！　サルはいるか！」
雨で信長がどこにいるかわからないから、ただ叫ぶだけ。
「ここにいますだぎゃ！」
「手はずはどうであった！」
「首尾よくいきましたぎゃ！」
「よくやった！　皆の者！　今川勢は今まさに目の前にいる！　そしてこの雨！　我らがここにいることなど知らずに具足を脱ぎ捨て酒に酔っているところだ！　よいか！　雨がやみ次第、丘を駆け下り、義元の首を討ち取る！」
うおーっ！
ひいいっ！
「いいか！　雑兵には目をくれるな！　義元の首だけを狙え！」
ウウッ。ついに来ちまった。ついに来ちまった。なんだかんだで戦場に来ちゃったよお。
振り返れば、タイムスリップしてからの半年とちょっと、なんだかんだで平穏な日々だった。リアルが充実している日々だった。キモオタのおれには味わえない刺激的な日々、幸せな日々。ありがとう戦国時代。ありがとうメグミちゃん。
でも、今だけは思う。
帰りたい。平和な元の時代に帰りたい。本当は今頃、あずにゃんにぺろぺろして、コーラをがぶ飲みして、新しく始まった深夜アニメにネット上でケチをつけていたはず。

それなのに。それなのに。
おれは、今、殺し合いの場に。
あーあ、雨がだんだんと弱くなってきた。視界が広くなってきた。
丘の下に陣幕が見えてきた。今川家の家紋みたいなのがはっきりと見えてきた。
雲間に、太陽が。
「全軍、俺に続けえ！」
信長の声のあとに百姓侍たちの雄叫びが上がり、地鳴りが駆け巡った。馬も人間もごった返しで丘陵を駆け下りる。おれも兵隊どもの雪崩に逆らえず駆け下りていく羽目。
「いくぞ、うわりゃあああっ」
「どけいっどけいっどけえええいいっ」
うわー！おれは死ぬんだー！殺されるんだー！
そのとき、おれの頭上を馬が跳んでいった。すごい光景だった。
こんなこと本当にあるんだと思った。馬は軍勢の一番前に降り立ち、馬上の武将はなぜか赤いマント。なに、あのヒーロー。正義の味方？
「赤母衣だ！前田又左衛門だ！」
うわあ。マタザ、やっぱり来たんだ。なんなら全員やっつけちゃってくれよ。

桶狭間の死闘

もうね、何がなんだか。

おれは逃げ惑っていただけ。めちゃくちゃなんだもん。怒号と悲鳴。鍔迫り合いに血しぶき。

戦況がどうのなんてわかんねえよ、もう。

こっちで斬られたと思いや、あっちで斬られ、馬はぶっ倒れて、それに潰される奴も。

で、逃げ惑っていたおれの前を槍がびゅんと伸びてきて、おれ、ガクブルのまま、尻もち。

「その奇怪な姿！　名のある者と見た！　覚悟！」

名なんてないよ。おれはただの牛だよ。勘弁してよ。ああ、オワタ。もう、本当にオワタ。

で、恐怖のあまり、目を瞑ったおれ。

「何をしているんだ、牛！」

あれ？　目を開けてみると、げっ、さっきの奴、首がなくなっている。って、首を片手にしているのは馬上の赤マント。

「うろうろしてんじゃねえ！　死ぬぞ！」

ああ、ありがとう、マタザ。初めてキミに感謝。

なーんて、思っているそばから、敵の奴らが続々と集まってきた。そんな目立つ格好しているからだよ、バカ。

「又左！　助太刀いたす！」

ラッキー。サンザが来てくれた。

「我の名は森三左衛門可成！　今川の者ども、我が槍を存分にくれてやるわ！」

って、サンザが名乗っている隙に、サンザの家来たちが駆け付けてきて、今川の奴らを不意打ち。ひでえｗｗｗ

じゃ、おれもこの隙に戦場から離れなければ。

赤マントが目立つバカの近くを離れて、陣幕のところまで。ここ

をめくれば、とりあえず、主戦場からは離れられますよっと。
あれ？　なんか、縦に長い黒帽子を被った人が二人ばかしいるんですけど。
「おのれえ、この奇人めえ！　おやかた様！　戦況は我らに不利！　早く脱出を！」
あわわ。こ、ここは今川義元のいるところじゃんかあ。
「よ、義元だあっ！義元はここだあっ！」
おれは思わず叫んだね。おれは思わず助けを呼んだね。早く来て、マタザ。早く来て、サンザ。助けて。殺される！
そのとき、槍を構えながら今川義元めがけて突っ込んでくる奴が現れた。
「拙者、織田家馬廻衆、服部小平太なりぃ！　今川義元殿、御覚悟ぉっ！」
誰だか知らないけどナイス！　おれ命拾い！
でも、義元は服部ナントカの槍をひらり。そして、刀でズバッと反撃。すっ転ぶハットリ君。何やってんのお前。てか、今川義元、強すぎ。
でも、ハットリ君、めげずに義元に飛びかかり、足を掴んで、義元もすっ転ぶ。
「小平太！　助太刀いたす！」
新手が参上。誰だか知らないけど、頑張れ。
で、義元の側近の長帽子が、義元を助けようとおれに背中を見せた。
チャーーーンゥスッ！
おれ、そいつの背中をずぶり。ありゃ、手元が狂って太ももに。うわあ。刺しちゃった。やな感触。
「お、おのれえ」
すっ転んで、もがく側近。恨まないでね☆
「今川義元公、その首いただく！」
と、おれと側近の泥仕合をよそに、新手の奴、刀を振りかざしな

がら義元に駆け寄っていった。でも、義元はハットリ君の顔面を蹴り飛ばし、新手の刀を横転してひらり。そして、義元も刀を構え、

「若者たちよ！　この治部大輔の首が取れたら一国一城の主よのう！　しかしのう！　そう簡単に国も城も取れるものじゃないぞよ！」

カッケー。いやいや、早く死んでくれ。

しかし、おれの願いもむなしく、新手の奴に刀を振り下ろす義元。だがしかーし、その刀を鍔で受け凌ぐ新手の奴。

うへえ。すげえ。でも、早く斬ってくれえ。おれが殺されちまう。

で、鍔競り合いの押し引き。早くっ。早くっ。

そうしたら、義元にハットリ君が体当たり。揉み合いの中倒れ込むハットリ君と義元。

「新助！」

新手の奴がそこに飛びかかる。でも、義元は抵抗。二人対一人で泥レスリング。揉みくちゃ。あわわ。義元は寝技も相当な様子。あわわ。お、おれも助太刀しなくちゃ・・・。

で、槍を構えて、そろりそろりと近づいているとき、ぶしゃ。

あ。

「討ち取った・・・。　討ち取ったぞ。　毛利新助良勝！　今川義元公の首を討ち取ったぞおっつ！」

修羅モード突入

新助とかいう奴が雄叫びを上げた直後ってのは、本当に時間が止まったよう。

ここにいる全員の、敵も味方も関係なく、時間が止まった。歴史的瞬間っていうのかな。なんとも言えない複雑な気持ちが流れていたね。

その瞬間ってのは喜びとかなかったし、多分、敵も無感情だった。なんか、無の境地だった。その瞬間だけは。

ただ一人、新助とかいう奴が一人で興奮していて、「取ったぞお！　取ったぞお！」って騒ぎながら、義元の首を掲げていただけ。

で、だんだんと震えてきたわけ。本当にぶるぶると震えていた。すごい寒かった。でも、心の中では、小さく、やった・・・、やった・・・。って、呟いているわけ。

おれだけじゃない。皆、そうだったと思う。皆、言葉が出ていなかった。

そんな空気を切り裂くようにして、馬に跨った信長が颯爽とおれとか新助とかハットリ君の前に駆け出てき、

「このいくさ、我らの勝ちじゃあっ！」

と、例の甲高い声を飛ばし、刀を天高く突き上げた。

そのとき、緊張が爆発した。うおーって叫んだ。皆、叫んだ。おれも自然に叫んでいた。

うおーっ、うおーっ、うおーって。

「して、者ども、よく聞けい！　これより、織田上総介は斬り捨て御免の修羅道に入る！」

で、信長、馬をいきり立たせて、駆け出させると、（おれに）足を刺されてもがいていた側近に襲いかかり、一振りで首ちょんぱ。

そして、立ち止まることなく陣幕を蹴破っていき、一人、また一人と殺していく。まさに修羅。

おれはすっかり腰抜け。今日、一番恐怖を感じたのは、信長の凄まじさ。でも、おれ以上に恐怖していたのは今川勢。修羅モードの信長にビビって悲鳴を上げながら逃げ出していく。

そして、信長に続けと、幹部連中も修羅モード突入。ここからはもはや虐殺。逃げ惑う今川勢を狩り立てる鬼畜。足軽隊もどさくさに紛れて、槍をぶん回す始末。

「やったな、やったな、新助」

「小平太こそ、大将に一番槍じゃねえか」

新助とハットリ君は肩を貸し合いながら歩を進め、涙を流している。

じゃあ、おれも一つ手柄を。

信長が斬り捨てた側近の首。きっと名のある者に違いない。これでおれも百姓侍にいじめられなくて済む＾＾

で、拾おうとそこに近づいたんだけど、手を伸ばした瞬間、そいつのあまりにもぐろい断末魔の表情に手を引っ込めたおれ。

むしろ、そいつに手を合わせ祈った。おれのこと決して呪わないでくれ。あっしは悪くありません。やったのは信長という悪魔です。

お楽しみイベント

鬼畜どもの狩りは桶狭間を抜け、沓掛城まで続いたけど、もうすでに、城は空っぽ。で、ようやく狩りは終了。

ようやく清州に帰れるわと思いきや、なんだか、勝利のあとのお楽しみイベントがあるみたいで、城の門前でたむろする足軽雑兵たちはどこかそわそわ。中では何かを用意しているみたい。

ぐふふ。芸者コンパニオンでも呼ぶんですかね。

で、西の空はすっかり夕焼け。

「お前、いくつ首を取った？」

「三つだ。ほれ」

「なんだそれ。どこの馬の骨かわからねえじゃねえか。俺なんて、ほら、これは絶対に侍大将級だ」

「なんだ、こんな年寄り。そんなんで手柄を立てたつもりかよ、お前は」

などと、鬼畜どもの井戸端会議。

チッ。おれも、あの側近の首、持って帰ってくればよかった、と、今さら後悔。

「牛殿！　牛殿でにゃあか！」

って、どっからか抱き付いてきたサル。

「良かったにゃ。良かったにゃ。生きてて良かったにゃ」

あれ。なんか、感動。そこまで喜んでくれると、まあ、お義兄さんって呼んでやってもいいかな。

「牛殿なんきゃは絶対に死ぬと思っていたぎゃ。いにゃ、殺されりゃあどころか、転げ落ちて死んでいるって思っていたぎゃ」

感動、撤回。お前が氏ね。くそザル。

「で、今から何が始まるんですか」

「そりゃ、おみゃあ、今度のいくさの論功行賞だぎゃ。今川軍も尾張からすっきゃり逃げたみたいだれりゃ、領地もまた増えたぎゃ」

ふーん。まあ、おれには関係ないだろうね。なんにも持って帰ってきてないし。

「まあ、おみゃあには関係にゃあけど」

クソッ。いちいち言うから腹立つんだよ。クソッ。

「次ぃ、木下組ぃ！」

「来たにゃ来たにゃ。牛殿も付いてくるにゃ。おみゃあはもうおりゃの組みたいなもんよ。組頭の出世の瞬間、よおく見ているだぎゃ」

うぜえ。まじでうぜえ。なんでおれがこいつの組なんだよ。おれは珍奇衆だぞ。クソッ。

城の中には織田家の家紋が入った陣幕が張られてあって、小者どもがずらりと並んでいる。その向かいに信長以下幹部連中が小さい椅子に座っていて、信長の隣に立っている背の低いジジイが、巻物を読みながら、一人一人の名前を呼んでいく。

「馬廻衆、服部小平太一忠！　敵総大将に一番槍にて候！」

「よくやった、小平太」

と、信長。ハットリ君ははーっと土下座。

「お主のような者を馬廻衆としている俺も鼻が高い。小平太、俸禄を百貫増やしてやる」

おおーって、小者どもから驚きの声。何がすごいんだか、おれにはわからん。

「有難き幸せ！」

「服部小平太一忠、百貫の加増！　大儀であった！　次！　馬廻衆、毛利新助良勝！」

「はっ」

「召し取った首級、一！　内訳、敵総大将、今川治部大輔義元の首！　指を噛みちぎられながらも執念の格闘にて、こたびのいくさの一番手柄にて候！」

うおーって、さっきよりも更に大きな驚嘆。まあなあ、大将首だもんね。てか、指噛みちぎられていたって、義元、どんだけやべえんだよ。

「もはや言葉はいらぬ」
と、信長。新助ははは―っと土下座。
「黒母衣衆に入れ。俸禄も三百貫加増じゃ」
うおおおって、驚嘆の嵐。まあ、おれは何がすごいのかわからん。
「黒母衣衆、毛利新助良勝、三百貫の加増！　大儀であった！　次！　木下藤吉郎足軽組！」
はいはい。サルの出番ですか。って、にやにや笑っていやがる、このくそザル。

歴史の表舞台へ？

木下組の連中十二名（＋１）が信長の前に整列、土下座（なぜか、おれも）。

で、足軽組は、さっきのハットリ君や新助と違って、おのおのが信長の前に首を並べていく。その数は十一。だせえ。途中からは弱い者狩りをしていたのに、十二人で十一ｗｗｗ　あんだけ、おれに偉そうなこと言っておいて、こいつら激弱ｗｗｗ

「検分せい」

信長が言うと、巻物ジジイが首を一つ一つチェック。

「皆、雑兵にてございます」

がっくりとうなだれる面々。ワロタ。ざまあ。出世なしｗｗｗ

「情けねえな、サル」

「も、申し訳ありませんりゃあっ！」

勝ちいくさで怒られるサル、あわれｗｗｗ

「ふん。まあ、今回のいくさ、機転を利かせ、敵に酒を飲ませた。勝利に導かせた手柄もある。木下藤吉郎、お主は足軽大将に昇格せい。石高も二百にしてやる」

「にゃ？」

へ？

「足軽大将、木下藤吉郎！　二百石に加増！　大儀であった！」

「おりゃあが、おりゃあが足軽大将ですきゃ？」

「木下藤吉郎、大儀であった！」

「ありがてゃりゃあございます！　ありがてゃりゃあございます！　拙者、一生を懸けておやかた様に付いていきますだぎゃあ！」

サル、泣いている。よっぽど嬉しかったみたい。どんだけすごいことなのかわからんけど、まあ、どうせ、例のおべっかだろ。氏ね。

「次！　山田権九郎足軽組！」

「待て」

と、信長。
「牛、お前、いつから足軽組になった」
やばっ。木下組の連中と一緒に腰を上げようとしていたところを、信長の鋭い声で金縛り。
「サル、どういうことだ」
「にゃっ、いにゃっ、その、た、たみゃたみゃ、一緒だったですぎゃ」
「勝手なことするんじゃねえっ！」
ひいっ！　おれ、再び土下座。無論、サルも。サルの組の連中も揃って土下座。
盛り上がっていた陣内がしーんと静まる最悪の展開。バカ。サルのバカ。調子に乗っているからだ、バカ。
「ふん。まあ、いい。今日は勝ち戦だ。大目に見てやる。それで、牛はどうだったんだ」
と、信長は巻物ジジイに問いかけるも、ジジイは困惑。
「珍奇衆筆頭、ヤナダマサシは・・・。手柄は無きにて候」
ぷっ、ってどこからか笑い声。おそらく幹部連中のほう。くう。きっと、サンザだな。堅物のくせに、お茶目に笑いやがって。
ただ、信長は首を傾げながら、ジジイの巻物を覗き込み、
「簗田政？　なんだ、それは。牛、お前の名か」
あれ？　言ってなかったっけ？
「ま、まあ、あっしの名前です」
「政とは諱か」
「？」
「諱でございます」
と、巻物ジジイ。てか、お前、どんだけの物知りジジイなんだよ。
「二文字のほうがいいだろ」
「？」
何のことを言っているのかさっぱり。
「ならば、褒美は名じゃ。おい、五郎左。こやつの名をつけてやれ」

ゴロザ？　また、新たな「ｔｈｅ」ですか？　Ｔｈｅマタ、Ｔｈｅサン、Ｔｈｅゴロ、もういい加減、わからなくなってきたから。で、ゴロザ、どんな奴かと思いきや、幹部連中の中から出てきたのはチビデブヒゲ。いかにもマリオ。

「い、今でございますか」

「そうだ。今、決めろ。早く決めろ」

「え、えーと、それでは・・・」

顎に手を当てながら、おれをじっと見るゴロザ。てか、なんで名前を勝手に変えられようとしているのさ、おれ。滅茶苦茶だろ。

「マサツナとはどうでしょうか。今の名の政に綱をつけて、政綱でいかがでしょう」

は？

ふざけんな！　おれが綱男だからって、一生、この変態武勇伝を残そうって気か！　ふざけんな！　絶対に駄目だ！　ふざけんな、マリオ！

「良い名だ！　牛、今日からお前は築田牛太郎政綱を名乗れ！」

サンザの、笑いを吹き出しそうな顔。ぐうう。サンザ、マリオ、お前ら絶対に許さねえぞ。

「して、築田牛太郎。今回のいくさ、今川本陣の在り処を俺に伝え、総大将の居場所を発見した手柄、あっぱれであった。勲功第一とする。今日からこの沓掛の城主となれ」

え？　え？　なに？　なんだって？

城主？　なにそれ？

驚いたのはおれだけじゃない。ここにいる全員が、ぽかーん。唯一、サンザだけがおれにウインク。きめえええぇっ。

「珍奇衆筆頭、築田牛太郎政綱！　沓掛城城主に任ずる！　大儀であった！」

城主、初日！

おれはその日、夢を見た。

東京ドームの屋根の上で、ハローワーク職員の曽根に殺される夢だ。

なぜ、曽根っ？

理解しがたかったが、曽根は片手に包丁を携え、とんでもない形相で追っかけてきて、おれは東京ドームの屋根の上まで逃げた。

しかし、東京ドームの屋根の上はぽよんぽよんしすぎていて、おれはこける。

「あんたなんか、ごく潰しよっ！　死ねっ！　死ねっ！　死ねえっ！」

めった刺し。ひでえ。おれがお前に何したって言うの。おれは無害じゃねえか。ウウッ。

ハッ、て目覚めると、そこは八畳ぐらいの広い板間。おれは固い枕に頭を乗せ、体は掛け布団の中。

あれ？　と、思った。ゴザは？

ああ、そうか、おれは住み処を変えたんだ、と、すぐに納得。というか、むしろ、城主。

まあ、城と言っても、清州城を小さくした程度。板塀に張り巡らされ、小じんまりとした館。でも、ボロ家よりははるかにマシ。

戸を開けると、え？　庭には大勢の雑兵たちが寝転がっている。

なんなの、こいつら。家なき子？

おれは見なかったことにして、戸を閉める。もしかして、おれはあいつらの世話をしなくちゃならないんだろうか。城主とかいって、出世はしたものの、後始末を押し付けられた気分。

てか、なんで、おれが城主なんだ。

あんだけ泣いていたサルは、去り際に、おれに向かって舌を打ちやがった。幹部連中も気分が良くないらしくて、特にゴンロクの睨

みは怖かった。
　マタザは、あ、そっか、マタザ。
　どうやらマタザは首を六つぐらい持って帰ってきたみたいで、論功功賞の場にアポなし突撃をくれたみたいだけど、信長には結局許されなかったみたい。どうやら、おホモだちを殺された恨みは根深い。
「おお、簗田殿、起きていましたか」
　って、戸を開けたのは、ゴロザ。いや、マリオ。
「昨夜はすぐに寝てしまいましたな。よっぽど疲れていたんでしょう」
　口調は丁寧だが、おれを死ぬまで綱男扱いにさせた張本人。許さねえ。
「まあ、いくさは終わりましたが、簗田殿はまだまだ忙しいですぞ。足軽たちの住まいも見つけなければなりませんし、それにこの城は今川との前線に近い。今川もいつ弔い合戦を仕掛けてくるかわかりませぬ。早急に対策のほどを」
　うだうだうるせえな。
「あっしは何もできませんから、ゴロザ殿がやってくだせえ。ゴロザ殿が切り盛りしてくだせえ」
　と、おれはやる気なし。
　そもそも、信長以下ｅｔｃが清州に帰って、マリオだけが残っているのは、城主にしたと言っても、さすがにおれだけなんかに沓掛城を任せるのは危険だから、マリオが目付役で残ったというわけ。
「あっしは清州にいたときから社内ニートの身。自由気ままに生きたいんです。それではおやすみなさい」
　おれは布団を被って、逃亡。
「いや、簗田殿、そういうわけにはいきませぬ。簗田殿がこの城の主なのですぞ。五百の兵を持つ将なのですぞ」
　しーん。おれ、無視。
「簗田殿っ」

だいたい、おれ、城主になんてなりたくなかったもん。褒美なんていらなかったもん。たまたまさ、タイムスリップして、たまたま、桶狭間の戦いを信長に言っただけ。なのに、こんな面倒くせえ仕事を押し付けられるなんて。

ほんと、珍奇衆として、適当なことを言っているだけの仕事のほうがよかったよ。

センチメンタルな気分

沓掛城主、簗田牛太郎政綱、やる気ゼロ。

いくさの直後だっていうのに、板間でずっとごろごろしているだけ。ま、いくさで疲れているし。怖い目にあったし。仕方ないのさ。

外ではマリオの声が響いたり、雑兵たちがなぜか喧嘩していたりと騒がしかったけど、おれは知らん。

むしろ、城から逃げ出したい気分。いくさも終わったことだし、メグミちゃんも清州に帰ってくるだろう。なのに、おれはこの男臭い城に軟禁状態。

そうなんだ。ひどく男臭いんだ。ＡＸＥでも推奨したいぐらい臭いんだ。

普通、城には女中とかいるはずだろ。なのに、なんで、ここには女っけがまるでないんだ。

信長の趣味？　いや、違う。信長はおホモだちもいるが、嫁さんもいっぱいいる。あいつは両刀使いだ。

じゃあ、なんで、ここには汚い男ばっかりなんだ、クソッ。おれは城主だぞ。

で、夕飯を運んできたのも、男。といっても、八歳ぐらいの子供。チッ。昼食のときもそうだった。普通、女中だろ、こういう役目は。そうして、女中とにゃんにゃんして、デュフフって具合だろ。

なのに、なんで、男の子？

で、その子はおれが（まずい）飯を食っている間、ずっとそこで正座している。じっと黙ったまんま、正座している。

正直、目ざわりなんで、おれは、しっしっ、って手で追い払った。でも、男の子は幼いせいなのか、意味をわかってないみたいで、じっと正座。

うぜえ。おれはセンチメンタルな気分なんだ。一人にさせろ。

「君、もう下がっていいよ」

って、苛立ちを我慢の器量の大きいおれ。
「はい」
と、男の子。しかし、立ち去らない。なあ、お前、今、頷いたよな。なのに、なんで動こうともしないの。
もういい。無視。
おれはむしゃくしゃと飯をかき込んだ。その間、ずっと男の子は正座。ほんとにうぜえ。
飯を食い終わると、おれは立ち上がった。風呂に入りたいと思った。清州のボロ家にはそんなものはなく、体を洗うには水をぶっかけるか、たまに、サルの家の風呂を借りるかだったけど、さすがに城ともなればあるだろうと思った。
「どちらに行かれるんですか」
と、あどけない声で、男の子。
「風呂」
「お風呂ですか？　じゃあ、ちょっと、僕、訊いてきます」
って、誰に？　何を？　板間を出て行く男の子。しばらくすると、代わりにマリオが。
「風呂なら今から沸かします。しばし待ってくだされ」
ふん。寝転がるおれ。城主となったからには、織田の幹部と言えどもでかい態度。というか、マリオには恨みがあるから、そんな態度。
「簗田殿。兵たちの住居はとりあえずおさまりました」
「あっそう」
「あと、忍びの報せによると、どうやら岡崎では三河勢が揉めている様子。義元公が亡くなられたこれを機に、独立の気運が立ち込めているとか」
「あっそう」
どうでもいいよ、そんなこと。おれは歴史を知っているんだ。今川はもう尾張には攻めてこない。松平元康は独立して信長と同盟する。ここが前線だろうとなんだろうと、もう、いくさはないんだ。

「あと、簗田殿、明後日あたりに従者を付けて、一度、清州のおやかた様の元へ参られたほうがよろしいのでは」
「じゃあ、手配しておいてください」
「はあ」
と、マリオ。気のない返事を残して部屋を出ていく。あいつ、本当に真面目バカだな。まったく。

アーッ！

で、風呂。

このとき、ようやく城主になったことへの有難さを痛感。

なにしろ、風呂がちゃんと部屋になっている。もちろん、二畳ぐらいほどの小さい風呂場で、湯船もぼろぼろだけど、今までの湯に比べれれば。。。ウウッ。サルの家の桶風呂でさえ一大イベントだったのに。

ありがたやありがたや。

で、足をそろり。うむ。いい湯加減じゃ。肩までゆるりと浸かり、おきらくごくらく。

「湯加減はどうでしょうか」

なんか、外から男の子の声。一瞬イラッとしたけど、ああ、薪を燃やしているのか。

「いい湯じゃ。もうよいぞ。下がってよろしい」

と、おれ、殿様気分。

ああ、やっぱり、城主ともなると、贅沢できるわ。飯はまずいのがあれだが、明後日、清州に行ったときに女中をスカウトしよう。ついでにメグミちゃんを連れてこよう。ふふ。城主ともなれば、拒まれることもないだろう。ぐふふ。サルも逆らえないだろう。くっくっく。

なーんか、見えてきたな。デュフフな毎日が。政治はよくわかんねえからマリオにやらせて、おれは女中たちとエロ百人一首の日々ｗｗｗ

と、妄想していたら、板戸ががらりと開いて、男の子。

・・・。

着物を脱いで真っ裸なんですけど。

「お、お背中、流します」

湯けむりで表情ははっきりと判別できないけど、裸なのはわかる。

あと、手拭いで股間を隠しているのもわかる。ただ、勝手に入ってきている理由が不明。
「い、いや、いいよ。やめろよ」
困惑するおれ。突っ立っている男の子。
「に、丹羽様が、と、殿様のお背中を流してきなさいって」
丹羽様？　まさか、丹羽長秀？
「に、丹羽って誰だ。き、君は何者なんだ」
「丹羽様は、あの、丹羽五郎左衛門様で、ぼ、僕は、太郎でございます」
マリオのことか。マリオは丹羽長秀だったのか。
いや、そんなことは今はとりあえずいい。今はこの変な状況だ。すごく変だ。この状況は明らかにおかしい。
「殿様のお背中を流さないと、丹羽様に怒られちゃうんです」
むうう。なんか、ちょっと可哀想だから、背中ぐらいは、まあ、いいだろう。まあ、背中ぐらいはな。こいつもきっと嫌なんだから。しょうがない。
それで、おれは湯船を上がり、木製の風呂椅子に座って、太郎に背中を洗わせる。小さな手でデブの背中を一生懸命洗う太郎。力が入りすぎて痛い。でも、まあ、健気だから、よしとする。
「あ、あの、殿様」
「ん？」
「あ、あの、太郎は、ど、どうすれば」
「どうすればって？」
「あの、に、丹羽様が、と、殿様のお、おちんちんを召しあがりなさいって／／」
アーッ！
おれはおもむろに腰を上げ、風呂場を飛び出した。あわてて着物を身につけていると、太郎が風呂場から悲しそうな顔で見上げてくる。
「殿様・・・」

やめろおおぉっ。やめてくれえぇぇっ！

悪魔の館

おれは風呂場から猛ダッシュで板間に逃げ込んだ。勘弁してくれ。ここは魔の巣だ。悪魔の館だ。あかん。おれ、あかん。

「簗田殿」

と、マリオが板間に。

「あの子はお気に召さなかったのですか」

なに、この当たり前の感じ。やばい。ここは本気でやばい。桶狭間よりもやばいかもしれん。

おれはもうね、我を忘れて怒った。とりあえず、ここは声を張り上げないと気が狂いそうだった。

「だって！　なんで、男なんスか！　女でね、それも十五歳から二十歳ぐらいのピチピチギャルならね、あっしだってそりゃ喜びましたよ！　でも、なんで、男なんスか！」

「何を言っておるのですか。この最前線に女などいるわけないでしょう」

「いようといなかろうと、あっしはそっちの趣味はありません！」

「左様ですか。やはり珍奇なお方ですな」

ハア、と、マリオは溜め息。なんで？　なんで珍奇？　マジで戦国時代っておかしいんじゃないの。当たり前なの？　ねえ？　突き合うのって当たり前なの？

「もういい！　清州に帰る！　沓掛城なんていらねえ！」

「ちょ、ちょっと待ってくだされ、簗田殿。こ、ここは一つこらえてくだされ。そのようなことをしたら、おやかた様の逆鱗に触れますぞ」

ぐうう。それはやばい。あの修羅モード信長を目の当たりにしたおれは、今まで以上に信長を恐れている。信長を怒らせたら、それこそやばい。

「わかりました。わかりましたよ！」

おれはどかっとそこに座り、すぐにふてくされて寝転んだ。
「では、太郎には暇を与えさせまするゆえ。申し訳ありませぬ」
いや、それは可哀想だろ。
「それはいいです。あの子供はそのままで。あの子供は別に悪くないんですから。そのうち大人になったら、この城の兵隊にでもすればいいんじゃないんスか。それでいいでしょ、それで」
「は、はあ」
納得しないまま、マリオは部屋から出て行く。
ウウッ。清州が恋しい。サルなんかはやっかんでいたけど、こんなことなら、ボロ家でメグミちゃんのご飯を食べていたほうが全然いい。
珍奇衆の仕事は週に二日あるかないか。ラッキーデーだと信長の美人の奥さんたちや市姫を拝める。でも、今は、出世したというのに小うるさいマリオに振り回される始末。
しかも、おホモだちがいっぱい（´；ω；`）
桶狭間以前のおれだったら、すぐに逃亡をしていた。でも、信長の恐ろしさを知った今では、逃亡を企むことすらできず。
「と、殿様、申し訳ありませんでした」
戸の向こうから太郎の声。可哀想に。大人のオモチャにされかけていたというのに、声を震わせているんだから。
「別にいいんだ。おれはそういうことが好きじゃないんだ。別にいい。だから、もう、寝なさい」
「はい・・・」
去っていった様子の太郎。ハア。こっちが溜め息つきたいわ。
これはもう、早々と嫁さんをもらわねばなるまい。

愛馬獲得

次の日の朝も膳を運んできたのは太郎。しかし、すぐに去っていったので、ホッと胸を撫で下ろす、おれ。

ただ、代わりに朝食の間はずっとマリオがいることに。うぜえ。

「築田殿、やはり、自ら指揮を取らなければいけません。何もやっておらず、この五郎左に任せているという話がおやかた様の耳に入れば、おやかた様は黙っておられませんでしょう」

むう。それは確かにまずい。

いや、待てよ。こいつ、信長をちらつかせれば、おれが真面目に働くとでも思い始めたんじゃねえのか。

チッ。こざかしい奴。さすが、綱男の呪縛をおれに与えた奴だ。

でも、目付役だから、こいつ自身が信長に告げ口する可能性は大だからな。

「ゴロザ殿、そうは言っても、あっしはせいぜい信長様にお話しをしていただけの人間なんです。何をしていいのかわかりません」

「なら、今日は城下でも一通り回りましょうか」

ほほう。それは良い案じゃ。城下と言っても、この周りは清州とは比べ物にならないぐらいの田舎だが、村を回って、嫁を探しに行くのも悪くはない。

まあ、メグミちゃんっていう恋人がいるけど、この時代は嫁さんが何人いてもいいらしいんでｗｗｗ

「じゃあ、そうしましょう」

「かしこまりました」

と、初めて晴れやかな顔。この真面目バカ。先生かっていうの。

チクショウ。

「それと、太郎のことなんですが」

もういいよ、その話は。

「築田殿の小姓として仕えさせてはいかがかと。なにしろ、築田殿

は家臣を一人も持っておりません。いずれは仕える者もおやかた様から与えられるにせよ、何かと不便ではありましょう」

別に不便じゃないんですけど。ネットがないのも慣れたし、基本的にごろごろしていたいだけだし。

「というかですね、あの子は誰なんですか。兵隊ばっかりのこの城に、なんで、子供が一人いるんですか」

「まあ、実は」

と、マリオ、なんだか喋りにくそうに、咳払い。なんなの。お前のおホモだちとかなんだろ、どうせ。

「古くからの知人の息子でして。ただ、太郎の父親は先日の丸根砦の襲撃で討ち死にしまして。母親も病弱ゆえ、勝手ながら奉公先を探している最中なのです」

それでちょうどおれがいたってわけね。おれの下の世話をさせれば、おれも喜ぶだろうと思ったわけね。動機はまともだが、太郎を大人のオモチャにさせようとしたんだから、人の良さげなツラしておいて、実は鬼畜。

「ここは是非、簗田殿に仕えさせたいと願います」

「まあ、そういうことだったら別にいいッスけど、ただ、言っておきますが、あくまでもただの小姓ですよ」

「かしこまりました。太郎にもそのように伝えておきます」

つーか、てめえで養えよ、バカ。

で、朝食を済ませたあと、早速、出かける支度。といっても、横綱の付き人スタイルは変わらず。

外に出ると、太郎が待っていて、その隣に馬の手綱を持つ中年。

え＾＾　まさか＾＾

「ゴロザ殿、これは何でしょう」

「これは今川の捨て馬でございます。といっても、なかなかの駿馬。簗田殿は馬をお持ちでない様子なので、用意させました」

「はあ」

やった。やったぞ。ついにおれにも馬が。牛には馬なんていらな

いなんて信長に言われて、さんざん死にそうな思いをさせられたおれに、ようやく馬が。

城主になってよかった。ありがとう、マリオ。

で、おれは中年の手を借りて、馬上へ。

ヒヒーン！

って、おい、ちょっと！　馬、突然、前脚を宙に掻き出し、大暴れ。後ろ脚を蹴り上げられ、あっさりと振り落とされる、おれ。

で、馬、元通りおとなしくなる。

「あ、あの、旦那」

と、中年。

「馬に跨られたことは？」

・・・・。

スーパーマリオ

「や、簗田殿は、ひとまず、駆け馬の鍛錬がひ、必要かな・・・」
と、マリオ。すげえ罰の悪そうな顔。ぐうう。
「だ、大丈夫ですか、殿様」
と、八歳の太郎にまで心配される有様。情けねえ。情けねえ。馬を与えられても振り落とされる始末。
おれだって一応、普通自動車免許は持っていたのに。
って、おれが自分の情けなさを痛感していたら、閉ざされた門の脇にある通用口から門番の雑兵が入って来て、
「丹羽様」
と、おれの前を素通りして、マリオの元に駆け寄っていく。城を与えられても兵隊にシカトされる始末。情けねえ。
「赤母衣を着た者がお目通りを願いたいと。おそらく、前田又左衛門様かと」
「なんだと」
急に表情を険しくさせたマリオ。どうやら、こいつもマタザが嫌いらしい。
「又左衛門がこんな場所に何の用だ」
「いや、とにかく、城主殿にお目通りを願いたいの一点張りでして」
あのう。城主はここにいるんですけど。なんで、おれに訊ねてこないんスかあ。
「又左が簗田殿に？　簗田殿、前田又左衛門とは面識がおありでしょうか」
「ありますけど」
むしろ、おおあり。なじられたことあり。バカにされたことあり。罠にかけられたことあり。ボコられたことあり。
ま、助けられたこともあるけど。ただ、そこはあんまり気にしちゃいかん。

「簗田殿、いかがいたしましょう」
いかがいたしましょうって言ったってなあ。嫌なんだけど。何の用件なのか不明だし。でも、結局、前田利家は織田家臣に戻るんだから、今、ここで追い払ったりすると、あとの仕返しが怖い。
「いいんじゃないんスか」
「かしこまりました。おい、又左衛門を入れてもいいが、門は開けるな。何か、裏があるかもしれんからな」
で、通用口から入ってきたマタザ。なぜか、一昨日の甲冑姿、赤マントのまま。左手には槍。入らせてやったというのに、雄々とした足並みで、歩み寄って来る。
まさか、やる気？
マタザは俺を振り落とした駄馬の前で足を止めると、馬を見上げ、
「牛、えらく出世したもんだな」
と、相変わらずの口調。
「前田又左衛門！　言葉を慎め！　一介の浪人風情が、沓掛城の主を牛呼ばわりするとは打ち首同然だぞ！」
「ふん。五郎兄ィが牛の世話人か。やかましいのに取りつかれたな」
「又左衛門！　控えんか！」
と、ずんずん詰め寄るマリオ。ＤＱＮのマタザに意外と強気。まあ、今のマタザは野良犬だから、こんなもんなのかな。
「五郎兄ィは黙ってろ！　俺はこいつに用があんだ。てめえと話しに来たんじゃねえ」
大人の喧嘩に太郎はビビりまくり。俺もビビりまくり。こいつ、嫉妬して、おれを殺しに来たんじゃねえのか。
「言わせておけば、その態度。斬ってくれる！」
マリオ、刀をキラリ。おい、やめろよ。どうせ、お前じゃ勝てないだろ。そんなら、城内の兵隊を掻き集めてこいよ。
しかし、ときすでに遅し。マリオに向かって槍を振り回したマタザ。おれ、逃げる準備。けど、マタザの槍先がぴょーんって飛んでいった。え？　なに？　あ、マリオがマタザの槍の柄の部分を切っ

たみたい。物凄い速さで。
刀の切っ先をマタザに突きつけるマリオ。
「お主の負けじゃ、又左衛門。即刻、立ち去れ」
あわわ。マリオ、見かけによらず、相当の腕前。おれ、ちょっと怖くなってきた。今まで、マリオに横柄な態度を取っていたことを。
「ふん。まさか、牛に鬼五郎左が付いているとはな」
え？　鬼ゴロザって何？　この人って丹羽長秀でしょ。丹羽長秀って、信長の野望・天下創世では大した奴じゃなかったんスけど。
「能書きはいらん。さっさと立ち去れ」
すると、マタザ、マリオの言葉を無視し、おれの前に突然膝を付き始めた。
いやいやいやいや。急にどうしちゃったの？　頭、おかしくなっちゃったの？
おれがあたふたとしていると、マタザは頭を地面にこすりつけながら言った。
「頼みがある！　この前田又左衛門利家を召し抱えてくれ！」
え？　マジで＾＾

厄介者

「おい、マタザ、マタザはおるか！」
「はっ、只今参りました」
「只今参りましたじゃねえよ！　只今参ったことぐらい見ればわかるだろうがっ！」
ドカッ。ボコッ。バキッ。
「も、申し訳、ありませぬ」
「で、最近、おれの足が乾燥肌で大変だ。なめろ」
「え？」
「え？　じゃねえっ！　このボケッ」
ドカッ。ボコッ。バキッ。
ぷぷぷ。マタザが家来になったら、そーんなことが、可能じゃんか。ぷぷぷ。それに合戦のときはおれの盾。
とまあ、妄想に浸ってしまっていたら、なんだか、土下座しているマタザにずさずさとマリオが歩み寄ったわけ。
そして、刀をぽいと投げ捨て、
「そこまで落ちぶれたか！」
と、マタザの顔面をパンチ。ドゴッみたいな音がした。チビデブのくせにヘビー級並のハードパンチャー。吹っ飛ぶマタザ。
「お主の意地はどこにいった！　お主はそのちっぽけな意地とやらで拾阿弥を斬ったんじゃないのか！」
と、マリオキック。マタザの体にキックキックキック、キックの応酬。まさに鬼。マリオ、いや、ゴロザ殿。今まで、横柄な態度を取ってごめんなさい。
「つまらぬ意地でかぶいておるから、このような目に合うのだ！」
マタザ、ボロボロ。顔面血まみれ。さすがのおれも、ヤクザ顔負けのボコりにドン引き。
「意地を通したのなら貫き通せ。天下の赤母衣衆筆頭だろうが」

しばらく呻いていたマタザ、ゆっくりと立ち上がると、切られた槍を拾い、通用口へすごすごと歩いていく。

あ、あの、家臣にはならないのかな？

「又左。おやかた様には柴田様と森様が取り計らってくれておる。しばし、辛抱しろ」

恨めしそうに一度振り返ったマタザ、通用口から城外に出て行った。

「簗田殿」

「は、はいっ」

「とんだ醜態、面目ない」

「い、いや、そんな。面目ないだなんて。あっしは別に」

「拙者が十五でおやかた様に仕えたとき、マタザはまだおやかた様の小姓でございました。そのときから、マタザは拙者を兄と慕い、また、拙者は本物の兄のように、うつけ者の又左を叱りつけてきましたが、簗田殿に迷惑をかけていた様子。申し訳ありませぬ」

「い、いや、そんな、別にいいですよ。あっしは、別に迷惑なんか」

かけられている。

「かけられていませんし、な、なあ、太郎」

あわてふためくおれに太郎はきょとん。首をかしげるだけ。

「左様でございますか。なら、拙者も一安心です。先ほども申したように、柴田様や森様がマタザにお許しが出るよう、おやかた様に取り計らってくれている最中です。そんなときに簗田殿の家臣にでもなってしまえば、おやかた様の怒りを買うどころか、柴田様や森様にも泥を塗る羽目に」

まあ、そうだな。マタザをおれの家来にしちゃったら、信長はおホモだちを取られたと勘違いするに違いない。

どちらにしろ、マタザはおれにとって厄介者っていうわけだ。

（一昨日、助けられたけど）

家臣獲得！？

恐ろしい邪魔者が入ったが、気を取り直して、おれはマリオと太郎の三人で城下見聞（嫁探し）へ。もちろん、徒歩。

で、内容は言うまでもない。田舎すぎ。人少なすぎ。挙げ句には、ここ一帯は一昨日のいくさの最前線だったから、さびれすぎ。

「見てくだされ、築田殿。こたびのいくさのせいで、田畑は兵や馬の足に荒らされ、ここ沓掛では今年の収穫もままなりませぬ。それに、村人は今までいくさに怯えていた日々。身も心も疲弊しきっております」

そんなこと言われてもさあ。どうしたらいいのよ、おれ。

ていうか、嫁探しが無駄に終わって、おれはやる気なし。

マリオは隣でぺらぺらと講釈を垂れているけど、おれの耳にはなーんも入ってこない。

「功名が辻功名が辻功名が辻功名が辻・・・」

と、前から歩いてくるのはあきらかに怪しい奴。従者を二人従えていて、おそらく武士なのだろうけど、身なりは三人ともぼろぼろ。呟いている奴の顔つきは若いけど、明らかに流浪中。

「功名が辻功名が辻功名が辻功名が辻・・・」

で、おれたちの隣を通り過ぎていったんだけど（このとき、そいつのあまりの怪しさに、マリオは刀の柄を握っていた）、そいつはおれのほうをパッと振り向き、血走った目でおれをガン見。

「浪人、何用だ」

と、マリオ。かなり警戒。危ねえ奴だからさっさと斬ってくれ。

そして、太郎も健気に、おれを守るようにして、おれと浪人の間に立ち、脇差に手をかける。さすが、武士の子。幼いながらもわきまえている。

そして相手の従者二人も刀に手を。

で、おれも刀を・・・。って、城主のおれだけ、刀無し。ちょっ

と待てよ。そういえば、おれは槍しか持っていなかった。しかも、善照寺砦で、砦の中の奴に貰った大量生産品。

むう。太郎ですら刃物を持ち歩いているというのに、おれは出世しても横綱の付き人かよ。

「そのでっぷりとした体躯。貴公は、先日の桶狭間で一番手柄を上げたと言われる牛殿だ」

刀を抜いたマリオ。それを真似た太郎。同じく刀を抜いた相手の従者。

「この方はいかにも沓掛城主、簗田牛太郎殿だが、お主ら浪人風情が何の用だ」

「いや、刀を納めてください、名のあるお方。俺はただ・・・」

「納めてほしいならば、お主の脇の輩から先に納めさせい」

すると、若者は従者二人に目配せし、従者二人は渋々刀を納める。で、マリオも律儀に刀を納める。いや斬っちゃえよ、危ねえから。鬼のくせに変なところで真面目なんだから。で、太郎も真似る。お前はいいから。

「ただ、なんだ。言ってみろ」

「いや、俺は、見ての通り流浪の身。仕官先を探している身。情けながら従者を二人も連れているというのに、流浪の身。もし、もし、よければ、これも何かの縁と思って」

若者はゆっくりと、なんか渋々膝を地面に付き、両手を付いて、おれに頭を下げてくる。

「わ、若っ」

「お前らも頭を下げろ」

すると、従者二人も土下座。

ちらりとおれを見てくるマリオ。おれは興味なし。

「別にいらないッスよ。家来なんて」

「そ、そこをなんとかっ！」

と、おれにしがみついてきたのは、若者ではなく、従者の片方。

「なんとか、扶持のほどを。いや、無禄でもいい。いくさにて手柄

を上げてからでいいです。ですから、なんとか、なんとか」
いや、だって、家来とか抱えちゃったら、ますます清州に戻れなくなるし。
「浪人」
と、マリオ。
「大人を二人も従えているとは、その辺りの素浪人とは訳が違うと見る。お主、名は何と申す」
「や、山内伊右衛門一豊」
「なんと。黒田城代であった、山内殿の息子か」
「ああ」
「しかし、お主の父は我らがおやかた様に殺されたも同然。その仇の家に仕えたいと申すのか」
「関係ない。今は戦国の世。たとえ、親の仇であろうと、功名を上げることこそが最大の親孝行」
ふーん。山内イエモン一豊ね。イラネ。
あ、でも、確か、山内一豊って秀吉の家来だったような気が。そうだ、サルに押し付けちゃお。あいつも出世したから、家来を増やしたいところだろ。ふむ。こいつを餌に恩を売っておこう。あいつ、おれが城主になったから嫉妬しているだろうし。

凱旋

イエモンを雇うことにしたおれだが、給料とかよくわからないので、そこは結局マリオにお任せ。とりあえず、最初の俸禄は二十貫みたい。安っ。

新助とかハットリ君が三ケタだったんだもん。まあ、奴らは、とんでもない活躍をしたけどさ。

ちなみにコネ入社の太郎は十五貫。贔屓しすぎだろ、マリオ。

イエモンは、どことなくマタザの匂いがする奴だが、まだ若いっていうのと、親父の代からの家来とかいう従者が二人いるので、マタザほど非常識ではない。

ま、どちらにしろサルに押し付けちゃうけどｗｗｗ

で、翌日は清州。もちろん徒歩。しかし、マリオは馬。氏ね。

イエモンは徒歩のおれをずっと不思議がっていて、

「なぜ、殿は馬に乗らないんだ」

と、殿にタメ口。こいつの従者二人は沓掛に残し、荒れた田畑を直させて酷使させているので（おれの提案）、自由なイエモンは礼儀知らず。

おれは無視。太郎は喋りたそうにしていたが、おれを真似て無視。

清州城に到着すると、門の前に太郎と無礼者を残し、おれはマリオと共に城内へ。庭でしばらく待たされたけど、結局、信長は来ず。来たのはサンザ。

「おお、五郎左に牛殿！　よう参った！」

へえへえ。声の大きさは直ってない様子で。

「今、おやかた様は多忙の身だが、牛殿！　前のように夕刻過ぎに城内に参上せよとのことじゃ！　まあ、今日は清州に泊まっていけ！　前の家はそのままにしてあるからな！」

ということで、一時帰宅。

「では、拙者も我が家に顔を出したいので、今日はこれにて」

と、マリオ。さよなら。明日はいらない。おれは今晩、信長に直訴するつもりだからな。

で、おれはイエモンと太郎を先にボロ家に向かわせようと、ボロ家までの道のりを教えてやったが、そのとき、おれはふと思った。

イエモンと太郎を二人きりにさせるのはまずいんじゃないか。

もしかしたら、イエモンも例のあれかもしれない。幼い太郎はなすすべがないだろう。

「いや、やっぱり、太郎はあっしと付いてこようか」

「はい」

「なら、俺も殿に付いていくが」

「キミはいい。キミは元の家に行って、先に掃除でもしててよ」

「掃除っ？」

「なんだよ。嫌ならクビね」

ちっ、って舌打ちしやがった。こいつ、雇い主に向かって舌打ちしやがった。この野郎。

ま、喧嘩じゃ勝てないから、あとでマリオに告げ口して解雇。

いや。そっか、サルに押し付けるんだった。だから、こんな奴はどうでもいいんだった。

さて、さっさとサルを見つけて、イエモンを押し付けよう。

で、太郎を連れてサルの家に行ったんだけど、誰もおらず。もちろん、メグミちゃんも。チェッ。そこらへんも期待していたのに。

足軽長屋の木下組の奴に訊ねようと思ったが、どうせ、百姓侍たちにバカにされるので、太郎にそんなところは見せたくない。

しょうがない。悔しいが、遠山さんのところに行こう。

「清州は賑やかですね」

と、太郎。ずっと、きょろきょろしっぱなし。

「そうかい」

タイムスリップしてきたおれからしてみれば、清州だって田舎町。人はまあいるけど、それでも、城下町というには、小さい。

「清州はどうだい。いいところだろ」

「はい。人がたくさんいて、とても楽しそうです」
「そうかそうか。なら、清州に移ったほうがいいよな」
「えっ。でも、殿様は沓掛の城主・・・」
「別にそんなのどうだっていいんだよ。こっちにだって家はあるし。あんなところはマリオ、いや、五郎左殿に任せておけばいいんだよ」
「でも」
「いいのいいの。今日、信長様にそう言うからさ」
まあ、仕方ないな。太郎がそう言うんじゃな。それに太郎をあんな魔の巣にいつまでも置いておくわけにはいかないしな＾＾
で、遠山さんが住んでいる長屋の一角まで来たおれだったが、ふと、鬼女を思い出した。あのババアのことだから、もし、おれを覚えていたら、サルの仲間だと認識しているに違いない。
そこで太郎をパシリに使った。
おれの初めての命令を受けた太郎は、遠山さんの家を訊ね、しばらくしたのち、遠山さんを引っ張り出してくることに成功。
ハアハア。遠山さん。相変わらず美人ス。
「あれ、牛殿。来られていたんですか、清州に」
「ええ、まあ」
「なんだあ、もう。こんな可愛い子が急に私を呼びにきたから、何事かと思いましたよ。ああ、そうそう、遅れましたが、このたびのご出世、おめでとうございます。なんでも、沓掛城の城主様になられたんですってね」
「いや、まあ、それほどでもォ」
ぐへへ。やっと、城主メリットが。
って、おれは頭を掻いていたが、太郎がシラーっとした目で見上げてくる。オホン。おれは思わず咳払い。
「あ、あの、ちょっとですね、藤吉郎殿の居場所をご存じかと思いまして」
「藤吉郎殿ですか？　あの方なら、多分、夜にはお戻りになるんじゃないでしょうか。なんだか、いくさから帰って来た途端、いろい

ろな所へ出歩っていて」
　ふーん。何やってんだ、あいつ。また、腹黒いことを企んでいるのか。
「じゃあ、申し訳ないんですが、藤吉郎殿に伝えてもらえませんか。今晩、我が家で待っていると。あ、いや、なるたけ遅めで良いんで。夕方、信長様に呼ばれているんで」
「はい。じゃあ、伝えておきますね。でも、清州の殿様にお呼ばれなんて、今や牛殿も織田家の重臣ですね」
「いや、そ、そんなことはないッスよ。てへへ」
　太郎はシラーッとした目。このガキ。そういうところだけは、ませているんだか、素直なんだか。まったく。
「それでは。じゃあね、小さいお侍さん」
　って、遠山さん、太郎の頭を撫で撫でしたあとに去っていった。
　太郎、おれのほうをちらり。そしてにんまり。なんだよ、それ。意味がわかんねえぞ、その笑い。

軍師気取り

夕方過ぎ、清州城へ。
桶狭間の戦いの直後とあってか、信長は機嫌も良さそうに晩酌。
ただ、珍しく二人きり。サンザもいない。
「今夜は無用な話はなしだ。次の一手について、お前に訊ねよう」
ふむ。まあ、そうくるとは思っていた。
「次は信長様が攻める番です」
「どこにだ」
「美濃です」
すると、信長は瞼を鋭くさせた。
「どのようにだ」
え、えーっと・・・。どのようにかな。軍師を気取って格好をつけていたおれだけど、美濃を取る、おれはそれしか知らない。
けど、そんなこと言ったら、ちょっと怒られそうな雰囲気。
「と、とりあえず、三河の松平と同盟を結び、背後を安定することが先決だと」
「美濃攻めをするなら確かにそうだ。だが、それだけで勝てるはずがねえ」
で、でも、歴史的には勝つし。そんなこと言われたってねえ。
あ、そっか。
「あ、あと、浅井とも同盟を」
「浅井？」
「婚姻同盟を」
「誰の娘が誰の元に嫁いでくる。そんなものはこっちだけの考えじゃどうにもならねえ」
「いや、市姫様を浅井長政に嫁がせると」
「なにい！」
急に立ち上がって、形相を変えた信長。や、やべえ。なんか、怒

っている。
「お前、本気で言っているのか。市を浅井なんかの人質にさせるのか」
「い、いや、でも」
実際、そうなるんだもん。おれは事実を言っているだけだもん。勘弁してよ。なんでそうやって怒るのさあ。
ただ、信長はバカじゃないから、おれが言っていることはあくまでも歴史の事実であることを理解しているので、納得いかないながらも怒りをおさめ、再び着座。
「そんなもの、俺に鬼か悪魔にでもなれとでも言っているもんじゃねえか」
信長は盃に酒をどぼどぼと注ぐど、それをぐいっと飲む。
「そこまでして、俺は覇王にならなければいけねえのか。なあ。言ってみろ、牛」
「い、いや、でも」
「信じられねえ。信じられねえ。俺が覇王になるなど、まったくもって信じられねえ。だがな、だがなあ、俺は今川に勝った。お前の言う通り、勝った」
信長は宙を仰いだ。
「しかし、勝ったことで、また、勝たなければいけねえじゃねえか」
信長の気難しさが全開になってしまったので、おれは沓掛城を放棄したいことを切り出せず、清州城の門を出たところで溜め息をついた。
外はすっかり夜の闇。かがり火が赤々と燃えている。
「殿様」
駆け寄って来る太郎。
「ああ、待たせてごめんね。怖くなかったかい」
「いいえ」
ハア。明日もう一回来ようかな。ハア。それともサンザに掛け合ってみるかな。ハア。

帰り道、溜め息連発のおれに太郎は不思議そうな顔。
「牛殿！　牛殿！」
我が家の近くで、サルとばったり遭遇。
「今、おみゃあの家に行くところだったぎゃあ。調度良かったにゃ。なんだぎゃ、急に呼び出して。先に言っておくぎゃな、いくら出世したとはいえ、あさひは寄越さにゃあからにゃ」
チッ。クソザルめ。まあ、今日はいい。その話じゃないから。
で、ボロ家に帰ってきたら、イエモンが愛のゴザの上で寝転がっていたわけ。
クビ決定。

サルと牛の連携コンボ

「あっ」
と、跳ね起きたイエモン。あっ、じゃねえよ。
「も、申し訳ない」
申し訳ありません、だろ！　この野郎オォ。マジでゆとり社員じゃねえか、こいつぅ。戦国も元の時代も変わらねえようだな。
「なんだぎゃ。この者は。それに、牛殿、子供も連れているでにゃあか」
「ま、とりあえず、座ってくだせえ。おい、イエモン、お客さんに茶を出せ、茶を」
「茶？」
あぐらのままで首をかしげるイエモン。ぐぬぬ。こいつ、礼儀知らずどころか、何の役にも立たねえ。
「とにかく、何か、酒でも出せよ」
「酒なんてあんのか？　こんな家に」
ふぬうううぅっつ。
そうしたら、サルがぎゃっはっはって笑い出す。
「牛殿は城主ににゃっても牛殿だぎゃ。ぎゃっはっは」
下唇を噛んじゃうおれ。おのれ、イエモンの野郎、恥をかかせやがって。
まあいい。まあいい。どうせイエモンとは今日でおさらばだ。まあいい。
「いや、藤吉郎殿のおっしゃる通り、あっしは家来もろくに扱えなくて」
「にゃら、おりゃあに寄越すかえ？」
ナイス！　てめえの口から言いやがった。ふふ。このサル、欲張りだから、自分の口から言いやがって。ざまあ。押し付けられるのはこんなバカなのに、欲張りやがって。ふふ。

「おりゃあ、足軽大将に上ぎゃったにゃあけど、人手が足らんだぎゃ。いろいろ探しているんだりゃあ、にゃかにゃか上手くいきゃにゃあ」

どうせ、そんなことだろうと思ったぜ。お前みたいなサルの下に付きたいなんて思う奴はいねえよ。

「それなら、イエモンは藤吉郎殿に譲ったほうがいいかな＾＾　なあ、イエモン。キミも、あっしなんかより、藤吉郎殿の下で働きたいだろ＾＾」

「いや、しかし」

「にゃあにゃあ、イエモンとにゃら、おりゃあの下に来れりゃあ、おりゃあがいろいろと世話をしてやるだぎゃ。飯の世話も嫁の世話もおりゃあがしてやるだぎゃ」

なんか、その話はおれの胸にやたら引っかかるが、まあ、今はいい。

「にゃあ、牛殿、おみゃあはこの者にどんだきゃの俸禄をやっているだぎゃ」

「あ、太郎、いくらだっけ、イエモンの俸禄」

「二十貫です」

「にゃら、イエモン、おりゃの下なら四十貫出してやるだぎゃ」

「なっ。それはいい条件じゃないか。イエモン、それなら藤吉郎殿に甘えちゃえよ。従者も二人いて二十貫じゃ、キミの生活もかつかつだろ。なあ＾＾」

「にゃあ？　従者が二人もいるにゃか？　にゃら、五十貫にしてやるだぎゃ」

「馬鹿にするのもほどほどにしろっ！」

と、イエモン、いきなり立ち上がり、吠える。ちょ、ちょっと。

イエモン君？　途端におれもサルも怯み腰。

「お、俺は昨日、と、殿の家来になったばかりだぞ！　そ、それを昨日の今日で、ほ、他の者に仕えよと申すのか！」

「い、いや、そ、そういう意味じゃ、いう意味じゃなくて、ね☆」

「俺は、俺は、殿のために頑張ろうと思っていたのに」
で、泣き出してしまったイエモン。
「あ、いや、違うんだ、イエモン君」
「じゃ、おりゃあはこれで」
「ちょ、ちょっと、藤吉郎殿！」
「いにゃあ、そこまで牛殿に惚れているんにゃら、おりゃあも忍びないだぎゃあ。じゃ、おりゃあはこれで」
あ、あ、ちょっと。逃げやがった。
・・・・。
そして、ヒジョーに気まずい空気に。
「殿様」
と、太郎がむっつり顔。
「イエモン様に謝ってください」
な、何を言ってんだ、このガキ。
「イエモン様が可哀想です」
くっ。くうう。キリッと睨んでくる太郎。逆らえないおれ。泣きながらも眼光を鋭くさせるイエモン。
じりじりと後ずさりするおれ。
「ご、ごめん。許して」
なんでおれが。泣きたいのはこっちだよ。なんの目的も果たせてねえよ。なんだよ城主って。なんなんだよ殿様って。ブワッ（´；ω；`）

サルと牛の連携コンボ（後書き）

ありがとうございました。

これにて第二章は終わりです。

キモオタの次の活躍の場までは結構な年月があるので、その間の出来事は番外編ということで、よろしくお願いします。

寧々の嫁入り（1）（前書き）

いっときの間だけ物語の舞台はとある平和な時代。

謎（？）の僧侶が昔話に華を咲かせます。

寧々の嫁入り（1）

お久しぶりです、大御所様。
拙僧などお呼びになられて、何事かと思いましたが、どうやら、そちらにおられるのは竹千代様。これまた物騒な談義でもさせられるのかと、びくびくしておりました。
で、今日は？
ははあ、昔話を、ですか。
ならば、伊達殿をお呼びになられては？　左京大夫殿は数々の武勇伝をお持ち。竹千代様に聞かせるならば、勇ましい奥州武者の話のほうがおもしろいでしょう。
へ？　飽きた？
ふうむ。拙僧の昔話など眠たくなるようなものばかりですが。まあ、ご要望であれば仕方ないでしょう。しかし、子守唄には打ってつけですぞ。
では、何の話が良いか。
若かりし頃の秀吉公の話などどうでしょう。
いや、そんなものではありませぬ。秀吉公と高台院殿の馴れ初めです。
また、それが、高台院殿が秀吉公に嫁ぐときは修羅場でございました。
高台院殿は、そのとき、寧々という名でございました。そして、秀吉公がまだ藤吉郎の名しか持っていなかったころです。
寧々と藤吉郎は、桶狭間の戦いで藤吉郎が無事に帰ってこられたならば、契りを結ぶという約束をしておりまして。
で、無事に藤吉郎は桶狭間から帰ってきたのです。
ところがです。契りを結ぶ約束を交わしたというのに、寧々の反応はいまいち。
「おみゃあは嘘をついたのきゃあっ？　おみゃあは、あのとき、お

りゃあに契りを結ぶと言ったじゃにゃあかっ！」
「結ばないとは言っていませんでしょう。ただ、もう少し待ってくださいと申しておるのです」
「にゃんでだぎゃ！　にゃにを待たなきゃならんだぎゃ！」
「母上です」
「にゃ・・・」
寧々の母は薙刀を振り回す鬼のような女でして。実は拙僧も突きつけられたことがあるのですが。
まあ、それは置いておいて、なんでも、寧々の母は百姓上がりの藤吉郎を良くは思っていなく、また、藤吉郎のその図々しい性格。寧々の母からすると、藤吉郎のような男はもっとも嫌いな人間。
「母上がわかってくれるまでは、契りは結べませぬ」
「にゃあ・・・・」
寧々の母の話が出ると、さすがの藤吉郎もおとなしいサル。いや、もとい、ただのおとなしい男。すごすごと引き下がるしかありません。
それで、サル、、、いやいや、藤吉郎は拙僧に泣きついてきたのです。
「頼みがあるだぎゃ。おみゃあは、おやかた様と二人きりで話せる立場にいるだぎゃ。だきゃら、おやかた様に命を下さりゃれるよう、嘆願してほしいだぎゃ。おりゃあとにゃにゃに契りを結ばせると」
ふざけんな、このサル。誰がお前の恋のアシストなんかするか。
と、まあ、拙僧は他人の恋愛には厳しかったものでしたが、ふと、閃いたのです。ならば、言う通り、信長公に頼みこんでやろうと。
藤吉郎は簡単に考えているが、「そんなことにこの俺を使いやがって」と、信長公は激怒するに違いない。そうしたら、大騒ぎ。藤吉郎の企みが全部表沙汰になってパー。フヒヒ。
で、幾日か経っての夜、お話役の拙僧は信長公のいる清州城へ。
その日は信長公の他に、まだ嫁ぐ前であったお市の方がおりました。何かおもしろい話をせいと言われ、拙僧は、藤吉郎がこのよう

なことを抜かしておりますなどと、実におもしろそうに話しました。
「ほほう。それはおもしれえじゃねえか」
え？　なんで？　怒らないの？
「なあ、市」
「いいえ。そんなの、サル殿が兄様の力に頼っているだけでございましょう。むしろ、兄様に頼るとは、サル殿を見損ないましたわ」
「何を言っている。これだから女は駄目だ。色恋沙汰とはな、皆で大騒ぎするからおもしれえんだ」
「わらわにはわかりませぬ」
拙僧にもわかりかねました。信長公のことだから、てっきり激昂するかと期待していたのに、むしろ、盛り上がる有様です。
「よし、ならば、俺がサルを手助けしてやろうじゃねえか」
あーあ、信長公が出てきてしまったら、藤吉郎と寧々の婚姻は確定です。余計なことをしなければ良かったと拙僧は悔やんだものでした。

寧々の嫁入り（2）

「さて、サルめにどうやって一泡吹かせてやろうか」
はて？　信長公は藤吉郎と寧々の契りを結ばせようとするんじゃなかったのか。むしろ、信長公の瞳は悪戯好きの少年のように輝いているのです。
「そうじゃ。その寧々とやらを何者かが見染めたということにすればいい。そうじゃ、サルが逆らえないような者が寧々を見染める。すると、サルはどう出るか」
きゃっきゃっきゃ、と、信長公は甲高い声、まるでトンビの鳴き声のような声で笑ったのです。
「すると、その役目、誰がいいかの。どうじゃ、市。誰がいいか」
「知りませぬ」
と、お市の方はつまらぬ表情。お市の方は悪戯などを好まなかった人です。
「誰がいいか、誰がいいかの。権六かの。それとも三左かのう」
「信長様がよろしいのでは」
と、拙僧はある企みを持って、そう言いました。
信長公の計画で事を運べば、藤吉郎が絶対に逆らえない人とは、唯一信長公です。さすれば、信長公に寧々をゆずるという失態を藤吉郎が犯し、藤吉郎の企みはすべてパー。フヒヒ。
「そんなものはつまらん。サルが俺に逆らうはずがない」
と、一蹴されてしまった拙僧。しょぼーん。更にお市の方からも軽蔑の目。言わなければ良かったと後悔。
「そうじゃ。佐々内蔵助と対決させよう。それがいい。あいつは腕っ節が強いうえ、サルも悩みどころじゃ」
きゃっきゃっきゃ、という笑い声が城中に届かんばかりでした。
さて、佐々内蔵助成政をご存じでしょうか。
ええ、大御所様はもちろんご存じでしょうな。

佐々内蔵助は槍一つで肥後の大名になった男であります。当時は信長公の馬廻衆に属しており、まあ、尾張に聞こえの高い猛将でございました。

拙僧は信長公の命を受け、翌日、内蔵助の居城、比良城に赴きました。

当時、内蔵助の齢は二十半ば。拙僧や藤吉郎などと近い年頃でしたが、口だけ達者の拙僧や藤吉郎とは違い、内蔵助はその体躯に血気をみなぎらせ、一目でわかる荒武者でございました。

「お前のような者が俺に何の用だ」

と、内蔵助はとにかくこざかしい者を嫌っておりまして、拙僧が顔を見せると出し抜けにその言葉です。

「いや、あ、あの、のの信長様から、し、指示をもらいまして」

拙僧はことの成行きをかくかくしかじか伝えました。

すると、内蔵助はにやりと笑い、

「それはおもしれえ。サルの奴、身の程をわきまえねえでおやかた様に泣きを入れやがって。前から気に入らねえと思っていたところだ。ぎったんぎったんのめったんめったんにしてやる」

そして、指をボキボキと鳴らし始める始末。あちゃー。信長公も意地が悪い。よりにもよって、このような荒武者を選ぶとは。

で、内蔵助は共も連れずに、拙僧と二人ですぐさま比良城を出、清州へ。

清州に到着すると、他には目もくれずに真っすぐに寧々の家へ。

「頼もう」

と、内蔵助。

「寧々殿はおるか」

すると、出てきたのは鬼母。また、寧々を口説こうとしているどこぞの男なのか、とでも思っていたのでしょう。薙刀を手に持ち、形相は鬼か般若でございました。

「寧々はおらん！　帰れ！」

ところが、荒くれ者の内蔵助、鬼母の薙刀を力ずくでぶんどると、

それをいとも簡単に真っ二つに折ってしまいます。
内蔵助は折った薙刀をぽいっと捨て、
「客人に刃を見せるとはなんたる無礼。だが、寧々殿の顔に免じて許してやる。今すぐ寧々殿を連れてこいっ！」
猛将内蔵助の凄みにさすがの鬼母も腰を抜かし、あわてて奥の居間に逃げ込んで行きました。
あわわ。拙僧も内蔵助に怯え通し。とんでもないことになってしまった、と。

寧々の嫁入り（3）

しばらくしたのち、玄関にやって来たのは寧々ではなく、寧々の父親、杉原助左衛門。

「これはこれは佐々殿。我が家などに何の御用でございましょう」

助左衛門は、鬼の女房とは違って、大らかな人物。猛将の内蔵助を前にしても、にこにこと笑っておりました。

「寧々殿に婚姻を求めに来た。寧々殿を寄越せ」

と、内蔵助はまるでイノシシ。もっと、何か、言い様があるだろうと、溜め息をつく拙僧。

「これはまた。寧々などを佐々殿の嫁になどは勿体ない。佐々殿であれば、もっと器量良し、家柄良しの女房を見つけられるはず」

「関係ねえ。俺は寧々殿に惚れているんだ」

「いやあ、まあ、そう言われましても、寧々には心に決めた男がおるとかおらないとか」

「誰だ。言ってみろ」

「それは、拙者の口からは申せませぬ」

「ふん。なら、その口、斬ってくれてやろうか」

と、内蔵助は刀を抜き、切っ先を助左衛門に向ける有様。なんて、馬鹿な奴なんだ、と拙僧が呆れ果てていたところ、

「無礼者！」

あ、遠山さん。いや、寧々が大声を上げながら玄関に。

「人の家の中で刀を抜くなど、尾張武士にあるまじきこと！　お前様のその振る舞いはまるで野盗のごとく！　清州の殿様に恥を欠かせるおつもりなら、今すぐ、その刀で自らの腹をお切りなさい！」

「あ、いや」

さすがの内蔵助も寧々の迫力に負けて後ずさり。そして拙僧も寧々と目が合ってしまって、これまたまずい雰囲気。

「こ、これはほんの脅しで」

「なら、今すぐ立ち去りなさい！　杉原の寧々は脅しで契りを結ぶような女じゃありません！」

さあさあ、出て行きなさいと、内蔵助は家の外へ押しやられ、拙僧も、一度睨まれてから、寧々に押し出されました。

玄関戸をぴしゃりと閉められ、茫然と立ちすくむ内蔵助と拙僧。参ったなあ。計画の実行はおろか、内蔵助に恥を欠かせてしまう始末。きっと、八つ当たりを受けるに違いないと思った拙僧は、内蔵助が茫然としている隙にそろりと逃げ去ろうとしたのです。

すると、内蔵助がぼそりと呟いたのです。

「なんて、気高いおなご／／」

あーあ。

その夜、拙僧と内蔵助は信長公の元へ報告に行きました。

かくかくしかじか、事の顛末を伝えると、信長公は興味津々に、

「ほう。杉原助左衛門の娘とやらは、そこまでの気丈夫か。その気丈夫がサルに惚れているとは、世の中、わからぬもんだな」

「お、おやかた様」

と、内蔵助はもじもじ。

「なんだ」

「あ、あの、俺も寧々殿に惚れてしまいました」

「なにい？」

「この命を受けた時は半ば遊びだったものですが、まさか、寧々殿があのような美しく逞しいおなごとは思わず」

「そこまでの女か、杉原の娘は」

「は、はい」

「なら、俺も見てみようじゃねえか。　それで、もし、この上総介を射止めるような女であったら、きゃっきゃ、俺と内蔵助とサル、三人で喧嘩だ」

「いや、そ、それは」

なーんか、雲行きが怪しくなってきた、と、拙僧はこの計画から脱け出したい思いでございました。

寧々の嫁入り（4）

そして、また、翌日、信長公は杉原助左衛門と寧々を清州城に呼び付けました。

助左衛門など、信長公に直接呼び出されるなど、生涯初めてのこと。さすがに緊張しきりでいましたし、呼びつけられた理由はきっと昨日のことであろうと思っておりました。

きっと、こう言われるに違いない。寧々を内蔵助に譲れ、と。

もう二十も半ば近くの寧々。しかし、助左衛門が寧々を今まで嫁に出さなかったのは、己の惚れた男に娘を嫁がせたいという親心からでした。

しかし、尾張に住む人間の、誰が、信長公に逆らえましょう。

「寧々、すまんが、わしは腹を切るしかないかもしれん」

「何を言っているんです」

「きっと、おやかた様がわしを呼びつけた訳は昨日のことであろう。しかし、お前は藤吉郎に惚れておる。お前の行く末はお前の心のままにしてやりたい。だから、わしの命と引き換えに、お前を佐々殿とは婚姻させん」

「無実の人に腹を切らせる殿様だと、私は思いません」

そうこうしているうちに、縁側に信長公が小姓を従えてやって来ました。助左衛門と寧々は地面に深々と平伏し、

「表を上げろ」

と、言われて、初めて、寧々は信長公に顔を見せました。

「お前が巷で評判の寧々か」

「男勝りと評判の寧々でございます」

ふっ、と、信長公は微笑しました。

「昨日の一件、珍奇衆筆頭から聞いておる。巴御前も舌を巻くほどの大立ち振る舞いであったそうじゃねえか」

「恐れながら、私は尾張武士の在り方を教えて差し上げただけのこ

とです」
　きゃっきゃっきゃ、と、信長公は大笑いしました。
「惚れたわ！　上総介はお主に惚れた！　寧々よ、俺の側に上がれい」
「いやっ、しかし、おやかた様っ」
「親父は黙っていろ。娘の行く末は娘自身で決めるもんだ」
「ならば、おやかた様」
　そう言いながら、寧々は深々と頭を下げました。
「なんだ、言ってみろ」
「お断りさせていただきます。私の行く末は私自身で決めさせてください」
　娘の大胆な発言に助左衛門は狼狽しました。しかし、信長公は優しげな表情を浮かべるのです。
「左様か。さすが俺の惚れた女だ。そして、お前は木下藤吉郎に惚れておるそうだな」
「あ、いえ、それは」
「なんだ、急におなごになりおって。良いではないか、サルと祝言を挙げろ。お互い、いい齢だ。身を固めろ」
「あ、有難き幸せっ！　助左衛門、このご恩は決して忘れません！」
　地面を舐めるがごとく、平伏する助左衛門。
　ただ、寧々は浮かない顔です。
「おやかた様、恐れながら、私は藤吉郎殿と契りを結べませぬ」
「なぜだ」
「母上が許してはくれませぬ」
　寧々は藤吉郎との婚姻に踏み切れない理由を話しました。母は身分の低い藤吉郎との婚姻を認めてくれないこと、どうせなら自分の嫁入りを晴々と見届けてもらいたいこと。
　すると、信長公はみるみるうちに血相を変えました。それはただ単に怒っているときの信長公の表情ではございませんでした。怒りを噴き出しているときの信長公の表情だったのです。

「お前の母は何をくだらんことを申しておる。サルは我が家中の足軽大将。その者を身分の低い者と嘲るとは、馬鹿にしておるのか！」

急に機嫌を損ね出した信長公に、助左衛門も寧々も頭を下げる他ありませんでした。

「そもそも身分など誰が決めているんだ？　あーっ？　お前の母とやらはそこまで高貴な人間なのか！　どうなんだ！　申してみろ、寧々！　お前の母はそこまで高貴な人間か！」

「ち、違いまする」

「娘の行く末は娘自身で決める。そこに身分などねえ！」

寧々の嫁入り（5）

ちなみに、その日の夕刻、拙僧は小姓と共に居城への帰り支度を整えていたのですが、我が家に佐々内蔵助が押し入ってきまして、なんでも、「寧々殿とはどのようなおなごなんだ」とか「寧々殿とサルを引き裂く案はねえか」とか「おやかた様が寧々殿に惚れてしまったらどうしよー。ああ、どうしよー」などと、一向に帰らない様子。

そんな内蔵助に拙僧と小姓がうんざりとしていたとき、朝日様・・・、いや、藤吉郎の妹が来たのです。

「寧々さん知れへんか!?　寧々さんがいなくなってしまったんや。ここに来てないやか!?」

アハァ（＊´д｀＊）　今日はやっぱり居城に戻るのやーめた。などと拙僧は呑気でしたが、内蔵助がおもむろに腰を上げ、

「城から戻ってきてねえのか!?」

「いや、戻ってござったみてえなんやけど、急に家を飛び出して行ったそうなんや」

「なんだと!」

イノシシのごとく飛び出して行った内蔵助。内蔵助と共に飛び出して行ったメグミちゃ・・・、いや、藤吉郎の妹。それを追いかける拙僧。残ったのは呆れ顔の小姓。

「殿様はわかっていないんだ。頑張っても殿様には無理だよ。太っちょじゃん。無理無理」

小姓は溜め息をつくと、てくてくと、拙僧のあとを追う振りで、城下を行きました。

すると、小姓は弓衆長屋の辺りで、ばったりと寧々に出くわします。

「あら、可愛いお侍さん。どこへ行かれるの」

はて?　と、小姓は首を傾げました。あれだけ騒いでいたという

のに、当の寧々は至って普段の寧々。
「皆様が貴方様を探しておりました」
「どうして？」
「貴方様が家を飛び出して行ったって」
「あらやだ。そんな大騒ぎになっているの？　別に大したことではないのに。じゃあ、ご主人様に伝えておいて。寧々はどこにも行っておりませんよって」
「わかりました」
「よろしくね」
そう言って、寧々は小姓の頭を撫でると、とある一軒の家に入っていきました。
小姓はそこに突っ立ったまましばらく考えておりました。そして、寧々の入った家に近づき、そっと中を覗き始めました。拙僧の小姓は、雇い主への報告よりも自分の興味を優先させるふざけた子供だったのです。
で、家の中では、中年の夫婦と寧々が何やら話しております。
「左様か。おやかた様にそう言われたのか」
と、夫のほう。
「それでも、あの妹は藤吉郎とは契りを結ばせんと言うの？」
と、妻のほう。
「何を考えておるのかしらね。結局、妹は藤吉郎が嫌なんじゃなくて、寧々を手放したくないだけなのよ」
「そう？　それなら、いつかはわかってくれるのかな」
「あの子は昔からそうなのよ。私がここに嫁に来たときもそう。ずっと駄々をこねていて。聞く耳も持たないんだから。行っちゃ嫌、行っちゃ嫌ってね」
「要は家族が恋しいのだ。あやつは」
「でも、じゃあ、どうしたらいいのかな。もう、藤吉郎殿を待たせるわけにもいかないし、でもそうすると、母上が藤吉郎殿に迷惑をかけそうだし」

「なら、寧々、私の娘になりなさいよ」
「は？」
「一度、私ら夫婦の子供になりなさい。そうしたら、形としては、あの子は母親じゃない。母じゃない人間が藤吉郎に迷惑をかけるのだったら、私が母としてあの子を叱りつけてやる」
「でも・・・」
「形としてですよ。実の母は実の母。いずれかはあの子もわかってくれるわよ。ねえ、それでいいでしょ、旦那様も」
「別に構わんよ。そうしたら、藤吉郎を待たせずに済むだろうな」
それを聞いていた小姓は、機転を利かして藤吉郎の足軽長屋に向かいました。拙僧のところではなくて、藤吉郎のところに向かった。とんだ裏切り者です。
藤吉郎は調度城から戻ってきたところで、まだ寧々が行方不明になって大騒ぎになっていることを知りませんでした。
「なんだぎゃ、おみゃあ、今日は主人と一緒じゃなあきゃあ？」
「木下様にお伝えしに参りました」
「なんだぎゃ」
「寧々様が誰かの養子に入るそうです」
「な、なんぎゃとお！？　そりゃあ、どういうことだぎゃっ！」
すると、にんまりと笑う小姓。
「そりゃあ、木下様と契りを交わすからに決まっているからです。寧々様は今、弓衆長屋にいます」
「そ、そりゃあ、おみゃあ、あにゃつの叔母御のところでねえきゃあ！？」
「そう言われればそうかも」
「で、でかしたぞ、小僧っ！　おみゃあ、大きくなったら、おりゃあの家来にしてやるからにゃあっ！」
「はーい」
荷物を放り捨てて駆け出していった藤吉郎。口笛を吹きながら我が家に戻る小姓。ちなみにそのとき、主人の拙僧はというと、藤吉

郎の妹を見失い、内蔵助にさんざん振り回されていたところでございました。

ということで、寧々はようやく藤吉郎と契りを結ぶことができましたが、藤吉郎は事の成り行きをまったく知らないまま、寧々の掌で立身出世していくこととなるのです。

そして、佐々内蔵助と秀吉公の仲が悪くなったのもこの時期から。女一人のことで、二十年以上も対立する羽目になるのです。

はて？　竹千代様はお眠りですか。やはり、つまらなかった話でしたな。

あ、大御所様はあまり聞きたくなかったでしたか。ま、大御所様が御苦労されていたとき、尾張はこのようにのんびりしていたということで。

お～れは又左衛門～♪浪人中～♪（1）

いやあ、金沢はすっかり雪に閉ざされた様子。
この有様では、拙僧のこの老体、春を待つまでは金沢に閉じこもらなければならぬなあ。
いやいや、大丈夫。拙僧が金沢に来ていることなど、駿府はおろか、江戸の者どもも知らん。
たとえ、疑われたとしても、拙僧は長く生きすぎた。こんな干からびた首などいつでもくれてやるわ。
そうだ。拙僧は昔から口だけは達者だからの。
しかし、長生きはするもんじゃない。息子には先立たれてしまったし、竹中半兵衛、明智十兵衛はもちろん、秀吉公まで拙僧を置いていった。ああ、つい先日には伊右衛門も逝ってしまったな。
あのころは皆、若かった。まさか、思いもしなかったよ。拙僧が、こうして、お豪と話をするとは。
なにしろ、拙僧はお豪の父上が大嫌いだったからな。
あっはっは。
お豪が物心ついたころには、もう、又左衛門はおとなしくなっておったから知らんかもしれんが、あの人にはよくいじめられたものよ。何度、殴られたことか。
槍の又左が歩けば、皆が道の脇に反れていた。人間だけではないぞ。猿も牛も道を譲っておったぞ。
お豪の父上は、そんな荒くれ者であったわけよ。
なにしろ、喧嘩で相手の首を斬ってしまうのだからな。
まあ、そのせいで、又左衛門はずいぶん苦労をし、おかげで、おとなしくなれたもんなのだが。
いや、お豪の父上は一度、織田を出奔しておるのだ。
まあ、又左衛門のようなものなら、仕官先は苦労せずに見つけられたものの、信長公に義理堅くてな。

桶狭間で首級を上げても、信長公には許されず。それでも、又左衛門は織田に戻れるその日まで耐えに耐えていたのだ。

桶狭間が終わったのち、又左衛門は実家にもまつ殿の元にも帰れず、尾張のあちこちをうろうろとしておった。

そんな又左衛門を助けていたのが、坪内喜太郎利定という者でな。こいつは尾張と美濃の調度境目にある松倉城を根城にしている豪族だったが、まだ若かった。ゆえん、かぶき者の又左衛門に興味があったらしく、喜太郎利定は自分の根城に住まわせてやった。

しかしな、招いてはみたものの、噂に聞いていた槍の又左は、どうにも覇気がない。なんだかなあ、牙を抜かれた虎のようであった。

毎日、縁側でぼおっと空を眺めているのだ。前田又左衛門利家といえば、男の意地で信長公の茶坊主を斬ったかぶき者よ。それが、ぽかーんとしてしまっているのだ。

清州では柴田権六郎や森三左衛門が又左衛門の出仕お許しを信長公に嘆願していると聞くが、喜太郎利定が見ている限りでは、そこまでの男には見えん。

ああ、そうだ、話はちょっと変わってしまうが、桶狭間にて今川を撃退した信長公は、このとき美濃攻めを考えておった。

喜太郎利定のいる松倉城は、美濃攻めには重要な拠点。木曽川一帯の豪族を取りまとめることを、喜太郎は信長公に指令されておった。

木曽川一帯の豪族どものほとんどは信長公に仕えており、川並衆と呼ばれていたが、こやつらがまた生来の曲者揃いで、なんといっても土着の豪族よ。顔の表では信長公にへつらっているものの、腹の中は何を考えておるか知れぬ。戦況次第では斎藤方についてもおかしくない連中であった。

喜太郎も似たような人間であったが、信長公から川並衆を取り仕切るよう命じられておる。これが上手く行けば、一介の豪族から濃尾平野中に名を馳せることも可能な、千載一遇の好機であった。

ただ、こやつは頭がいいほうではなかった。それは己自身でもわ

かっておった。己自身で頭が弱いとわかっている奴は実は頭の良い奴で、喜太郎は、川並衆を取り仕切る知恵を貸してくれる人間を探したのだ。

そして、目に留まったのが、出世街道をまたたく間に駆けあがっている男、木下藤吉郎、のちの秀吉公よ。

お～れは又左衛門～♪浪人中～♪（2）

藤吉郎は身分の高い織田の重臣などにはあまり好かれていなかったが、生来の快活な性格から、女子供、足軽雑兵や土豪などには愛想の良い男として人気があってな。

「あいや、坪内殿、久方振りだぎゃなあ。見ない間にずいぶんと立派ににゃられた様子だぎゃ。坪内殿のようにゃおきゃたがおれば、斎藤勢もおちおちしておられんにゃあ」

と、足軽大将になったとしても、おべっかは忘れん。

「いや、木下殿、それがですね、その斎藤勢のことで、おやかた様に命じられまして」

「にゃあ？」

喜太郎利定は川並衆をきっちり織田方に固めさせておかなければならないこと、それについて藤吉郎の助力を得たいことなどを伝えた。

藤吉郎は頼まれごとをされたときには、即座に返事をする人間でな。

「わかったぎゃあ。おりゃあに任せりりゃあ、坪内殿はゆるりとしているだぎゃあ」

まあ、藤吉郎にしてみれば、川並衆の心を抑えることなど、朝飯前であった。

で、早速、木曽川沿いをめぐろうと、藤吉郎は松倉城をあとにしようとしたが、はて、縁側に見たことのある背丈の高い男が座っている。

「ありゃあ？　前田殿でにゃあか？」

藤吉郎の図々しさは天下人級よ。浪人生活にくたびれている又左衛門に遠慮なしに歩み寄っていった。

無論、こざかしい藤吉郎に見つかった又左は、嫌な顔。

「やっぱり、前田殿でにゃあか。にゃんだ、前田殿は坪内殿の元に

おったのきゃ」
「お、おう、サル」
「にゃあ、元気そうでなによりだぎゃ」
と、全然元気そうじゃない又左衛門の肩をぽんぽんと叩く藤吉郎。
この辺は、足軽大将に出世した自分の立場を全開に出しておったな。なにしろ、足軽大将ともなれば、織田の武士として認められているということじゃ。それまでは、又左衛門にへーこらしていた藤吉郎だが、もはや、遠慮など無用だ。
「この間のいくさでは残念だったにゃあ」
「ふん」
藤吉郎などに気安く話しかけられて、おもしろくない又左衛門。
「おみゃつ殿は元気でしているだぎゃ。心配せんでも、また、いくさに出られるだぎゃ」
「ふん。俺はもういくさには出ん」
「にゃあ？　そんにゃこと言っても、これからは美濃を攻めるっていうときだにゃ。斎藤勢は手強いゆえ、前田殿の力なしでりりゃあ、織田も劣勢だぎゃ」
「俺は織田の者ではない。つまらんことを申すな」
「にゃあ・・・」
槍の又左衛門も今では槍のないうつけか。そうともなると、藤吉郎は更に遠慮なかった。
「槍の又左も落ちぶれたものだにゃ。おみゃつ殿やかつての家臣どもは首をなぎゃくして、おみゃあの帰りを待っていると言うのにゃあ。もはや、ただの居候だぎゃにゃ」
「なんだと！　もういっぺん言ってみろ！」
と、又左衛門もさすがに腰を上げ、藤吉郎の胸倉を掴み上げた。
「この野郎、おやかた様に目をかけてもらっているからって、偉そうな口を叩きやがって」
「にゃんだ？　目をかけてもらえないことが、そんにゃに悔しいのかえ？」

「言わせておけば！」
そして、又左パンチ。そこは腐っても又左衛門。右こぶしの威力は藤吉郎を庭に叩き落とすほどの威力であった。
ネズミのように丸くなって、頬をすりすりする藤吉郎。
「お前のようにこざかしく生きておる者に、言われて黙っておられるほど、俺は落ちぶれてねえ！」
「にゃあ。相変わらず血気盛んの様子だぎゃ。体力が有り余っている様子だぎゃ。いくさはしにゃいぎゃ、喧嘩はするとは、相変わらずのかぶき者だぎゃな」
「黙れ！　次は叩き斬るぞ！」
「又左」
と、藤吉郎は腰を上げ、キリッとした目で又左衛門を見上げた。
「いくさはしないが喧嘩はする。ならば、喧嘩の華を咲かしてみい。この藤吉郎に付いて参れ。思う存分暴れさせてやる」
突然の賢者モードに、唖然とする又左衛門。
「さあ、付いて参れ！」
サルの化けの皮が剥がれた瞬間であった。又左衛門はそのとき、藤吉郎に、男としての豪気を見たのじゃ。

お～れは又左衛門～♪浪人中～♪（3）

藤吉郎に付いて行くと、そこは木曽川の船着き場であった。
荷出しをする水夫たちの荒々しい声が、ゆるやかな木曽川の水面に跳ね返っておった。
その中で、屈強な水夫たちを居丈高に指示しておる熊のような男がおってな、藤吉郎はそそくさとそやつに歩み寄っていった。
「蜂須賀殿、久方振りでにゃあ」
「ん？　おお！　サルか！　久しぶりだな！　相変わらず猿のような顔じゃ！　どうした、こんなところに何の用だ。聞けば、お主、信長の下で大将になったというそうじゃねえか」
「いにゃいにゃ、大将といえど、足軽をたばねる長みたいなものだぎゃ。ただ、いろいろとおやかた様の耳なり口になりということが多くなってだにゃ」
水夫の頭目の蜂須賀小六は、土豪といえど、なかなかの切れ者で、藤吉郎の遠回しな言葉もすぐに理解しおった。
それで、蜂須賀の目つきも変わってな。
「ほう。信長の耳口か。そんなお主が俺の元に来るとは、なんの用だ？」
「おやかた様に一族未来永劫忠誠を誓えという話しをしにきたんだぎゃ。そして、それを誓う蜂須賀殿の言葉を聞きに来たんだぎゃ」
藤吉郎の言葉に蜂須賀は少々面食らった。というのも、藤吉郎はそのような偉そうな物言いをする男ではなかった。
ふん。こやつも出世して、勘違いし始めたのか。とでも、蜂須賀は思っていたに違いない。
「なら、サル、言わせてもらうが、俺たちは信長に仕えているんじゃねえ。かといって斎藤に仕えているわけでもねえ。俺たちは、この川に住まわれる木曽川大明神に仕えておるのだ」
蜂須賀と藤吉郎のやり取りを見ていた水夫たちも、頭目がそう言

うと、笑い声を上げたり、「そうだそうだ」などと囃し立てたりし始めた。

「そうきゃあ。にゃら、その、木曽川大明神とにゃらが、おやかた様に仕えよと申せば、おやかた様に仕えるんだにゃ？」

「ああ、もちろんだ」

「そうきゃそうきゃ。実はにゃ、今日はその木曽川大明神を連れてきているんでにゃ。こちらにおられる方が、その木曽川大明神だぎゃ」

と、藤吉郎に紹介されてしまった又左衛門。

蜂須賀以下、水夫たちも怪訝な眼差しを又左衛門に向けてくる。

「なんだと。サル。お主、俺たちをナメているのか」

「そうだぎゃあ！　ナメているだぎゃあ！　おみゃあらのような腕っ節だけの者などナメているだぎゃ。だぎゃにゃ、この木曽川大明神にその腕っ節とにゃらで勝ってみい。そうしたら、おりゃあは、おみゃあらに腹を切って詫びてやるだぎゃあ！」

「言ったな、このサル」

「さあ、大明神様。この者たちをぎゃふんと言わせてくださりゃれえ」

な、何を言っているんだ、このサル。水夫は全員で十五人はいるじゃねえか。しかし、又左衛門が考える躊躇もなく、蜂須賀の右こぶしが又左衛門の頬をヒット！

「どうした、大明神。やってくれるんだろう」

瞳孔を広がせて、笑みを浮かべる蜂須賀を前に、又左衛門も闘志にスイッチオン。

「やってやろうじゃねえか！」

そうして、又左衛門のスピーディーなアッパーカットが熊の蜂須賀にクリーンヒット。吹っ飛ぶ蜂須賀。色めき立つ水夫たち。

「この野郎ォ！」

「ぶっ殺してやる！」

「あっはっはっは。者どもまとめてかかってこい。全員、木曽川の

藻屑にしてやらあ！」

マタザ無双発動。マタザパンチ。マタザキック。マタザ背負い投げ。次から次へと河原に叩きつけられていく水夫たち。そして、くらってもくらってもビクともしない又左衛門。

そして、藤吉郎と言えば、いつのまにか土手の上に避難していて、

「どうしたぎゃあ、お前ら！　大明神に負けたときには、おやかた様に忠誠を誓ってもらうだきゃらにゃあ！」

「ふざけんな、サル！」

「おい、あのエテ公を引きずり降ろしてこい！」

「おい、待て、お前の相手は俺だぞ」

バッコーン。吹っ飛ぶ水夫。

さすがに、又左衛門の猛獣のような強さに、そろそろ怯んできた水夫たち。なんなんだ、こいつ。めっちゃ強えけど、どこのどいつだ。なんて、不良漫画の雑魚よろしく呟く水夫たち。

「こ、こいつ、前田又左衛門じゃねえのか！？」

一人の水夫の声により、途端に後ずさりを始める水夫たち。この辺りも不良漫画のシーン。

あ、いや、漫画というのはだな、お豪・・・。す、すまん、拙僧も熱くなってしまった。

ま、まあ、いい。それでだな、前田又左衛門と聞いて、黙っておられなかったのが頭目の蜂須賀小六よ。

「なんだと、お前、本当に赤母衣衆の前田又左衛門なのか」

「だから、どうした。俺は今、浪人中の身。赤母衣衆などではない、ただの男だ。煮るなり焼くなり殺すなり、何をしても咎めなどねえ！」

「この野郎、おもしれえじゃねえか。なら、望み通り、殺してやらあ。前田又左衛門の首を取ったからには名も馳せるもんよ」

と、蜂須賀、刀をキラーン。あわわ。土手から高見の見物をしていた藤吉郎も狼狽する始末。実は、喧嘩をさせても、人は斬らせてはならないと、又左衛門には刀を持ってこさせていない。

「前田又左衛門、覚悟ォ！」
そうしたら又左衛門、刀の柄を握る蜂須賀の手を蹴り上げるという荒技を繰り出し、返す刀でパンチ。吹っ飛んだ蜂須賀の手から刀を奪い取ると、その切っ先を蜂須賀の喉元に突きつけて言う。
「お前の負けだ。おやかた様に忠誠を誓え」
「わかった」
と、蜂須賀もまた豪気な男。負けを認めて、潔い眼差しに。
「だが、お前は信長に処分を受けた人間。それなのに、お前は信長に仕えよと俺に申すのか」
「そうだ」
ぽいっと刀を捨てる又左衛門。
「俺は生涯、織田家に仕える身だ」
はははっと笑う蜂須賀。
「左様か。なら、同じ織田家中の人間として、今夜は拙者と酒を酌み交わしてくだせえ」
「友が良いと言うならな」
と、又左衛門は土手の上に視線を向ける。そこにはほっと胸を撫で下ろす藤吉郎の姿。

お～れは又左衛門～♪浪人中～♪（4）

川並衆の中でも有力な土豪には、喜太郎利定、蜂須賀、その他に三人いたのだが、うち、二人を藤吉郎は又左衛門に喧嘩をさせる同じ手段で、信長公に忠誠を誓わせ、最後の一人、前野将右衛門長康は、又左衛門が暴れまわっているという噂をすでに聞いておったから、あっさり観念。で、藤吉郎がちゃっかり、将右衛門を自分の家来にしたのだが。

川並衆の一件を機に、大事も小事も動き始めた。

大事はというと、美濃攻めが本格的に始まったということだ。

なにしろ、斎藤の当主、義龍が突然、亡くなり、跡を継いだのは十三歳の龍興であったからな。

ただ、信長公は桶狭間の大勝があったとはいえ、元来、慎重な性格の人。川並衆を手中にしたとはいえ、美濃には、まだまだ斎藤道三に恩を持つ者、ゆえん、斎藤家に忠義を果たそうとする武将が多い。

そんな斎藤方を、信長公は様子を見るのもあって、小競り合いを仕掛けたのだ。

しかし、あっさり負けた。桶狭間の大勝はいったいなんだったのだというぐらい、あっさりと負けた。

そのころは、まだ織田方の誰もが知らんかった。竹中半兵衛重治という恐ろしい小僧が斎藤方にいるということを。

まあ、話は逸れたが、信長公も、あっさり負けたとはいえ、美濃攻めは大きな課題目標。おめおめと引き下がるわけにもいくまい。

それで、信長公が再び美濃を侵攻するという報せが、藤吉郎の口から又左衛門の耳に届いたのだ。

そう、動き出した小事というのは、藤吉郎と又左衛門の間だ。

あの一件以来、又左衛門と藤吉郎は仲が良くなっていた。互いが互いを認め合ったということだな。

「又左、今度のいくさ、おやかた様は森部の辺りに入っていくそうだ。お主、今度のいくさで手柄を上げてみい。帰参のお許しが出るまたとない好機よ」

藤吉郎は又左衛門と喋るときは、すっかり化けの皮を剥がしていた。つまり、藤吉郎は食わせ者だったわけだが、本性を自分だけに見せる藤吉郎に、又左衛門も心を開いておる。

「しかし、だからといって、おやかた様が許してくれるかどうか」

「何を弱気になっておる。拾阿弥の首を斬り落としたときのことを忘れたのか」

藤吉郎に叱咤された又左衛門だったが、どうにも自信がない。

ということで、又左衛門はひそかに拙僧の元にやってきおった。

「お久しぶりです」

へ？　又左衛門の拙僧に対する態度が打って変っておったので、拙僧は寒々しい気持ちになったものだ。

「もし、よろしければ、お人払いをしてくれませんか」

むーん。何か企んでいるんじゃなかろうか。とはいえ、脇にいるのは小姓だけ。どちらにしろ役に立たないから、拙僧は小姓を外させ、又左衛門と二人きりになった。

二人きりになってから、やや、沈黙の時間。拙僧、少し怖くなってきていた。

「聞きたいことがある」

と、やはり、二人きりになったら、元の態度。チッ。おもしろくねーの。

「今度、おやかた様が美濃に侵攻するという噂を聞いたのだが、それは本当か？」

「そうッスね」

と、拙僧。なにしろ、藤吉郎に美濃侵攻の情報を流したのは拙僧だ。というのも、拙僧はそのころ、南美濃の調略を信長公に託されておってな。だが、拙僧にはそんなことはできんゆえ、木曽川沿いに縁を持つ腹黒藤吉郎と共に動いていたのだ。

「俺はそのいくさに参加しようと思うのだが」
ラッキーへへ　マタザが来ればまた助けてくれるわあ。今度のいくさ、拙僧も駆り出される雰囲気だったから、拙僧にとってはもろ手を広げたいぐらいであった。
「是非、参加するべきッスよ」
「しかし、たとえ手柄を立てたとはいえ、織田に戻れるかどうか」
「戻れマッスル」
拙僧にはある確信があった。なぜなら、拙僧は、みら・・・、いや、勘が鋭いのだ、昔から。
「本当か？」
拙僧は又左衛門に、例の拙僧の勘の鋭さがその根拠であることを教えてやった。
すると、又左衛門の表情は明るくなり、
「そうか！　お前が言うなら間違いねえ！　今度のいくさ、是が非でも手柄を立ててやる！」
と、単細胞・・・、いや、豪快な性格を復活させて、拙僧の家を飛び出して行った。

お～れは又左衛門～♪浪人中～♪（5）

で、その年の春、南美濃の森部でいくさが起こった。

拙僧は丹羽五郎左衛門に引きずり出され、もちろん、戦場の真ん中には行かなかったのだが、山内伊右衛門の馬鹿垂れが功名欲しさに突っ込み出し、拙僧も連れ出されてしまった。

丹羽五郎左衛門とその家来たちのおかげで、拙僧どもはなんとか優勢に立っていたのだが、斎藤方に「脛取り足立」の異名を持つ、足立六兵衛とかいうとんでもない奴が現れた。

その者は上半身裸の巨漢で、坊主頭がぼこぼこしている変態なのだが、持っている槍はすこぶる長く、振り回す槍は、織田の足軽たちに地を這うように襲いかかり、まこと、敵兵の脛や馬の脚を斬りつけるかまいたちのような槍であった。

なんせ、一振りするごとに、四、五人の大人たちが悲鳴を上げながらすっ転ぶのだからな。

拙僧は恐れおののいた。兵馬を斬り裂きながら、どんどんと、拙僧のほうに向かってくる。

「イエモン！　イエモン！　あいつを討ち取って功名を上げろ！」

「あ、あのような奴、俺には無理だ」

かーっ。情けない。あれだけ鼻息を荒くして突っ込んできたくせに、この有様。

「拙者が相手してやろう！」

と、馬を駆けさせたのは五郎左衛門。そうだ。こっちには鬼五郎左がいるんだ。あんな変態、鬼五郎左にかかればひとひねりよ。

「我は丹羽五郎左衛門長秀！　脛取り足立、その首、斬り取ってくれるわ！」

ところが、五郎左衛門の刀が襲いかかる前に、脛取り足立の槍が五郎左衛門の跨っている馬の前脚に襲いかかり、五郎左衛門は振り落とされる。

「かっかっか！　鬼五郎左！　覚悟せいやあぁぁっっつ！」
脛取り足立の槍が五郎左に襲いかかろうとしたそのとき、一瞬にして脛取り足立の首が吹っ飛んだ。
風のごとく駆け出てきたのは、馬上に翻る赤母衣。
「我は織田家赤母衣衆筆頭、前田又左衛門利家！　我が来たからには織田の勝利も目前よ！」
又左衛門の登場に、丹羽五郎左の兵や、拙僧の兵どもは歓声を上げおった。で、山内伊右衛門の荒い鼻息も復活。
「よっしゃあっ、斎藤の奴ら、覚悟しろおっつ！」
と、伊右衛門、またも突撃。よっしゃーじゃねえよ、クソッ。お前はいつまで経っても名が上がらないだろうな。まったく。
ただ、脛取り足立を失った斎藤勢は怖じ気づき、更に又左衛門の登場だ。逆に、斎藤勢の兵馬の中を斬り裂くように進軍していき、ついには、その勢いが斎藤勢全軍に波及していった。
で、森部でのいくさは、織田方の勝利よ。
さて、いくさのあとのお楽しみイベント、論功行賞だ。
巻物ジジイの声が次から次へと飛んでいく中で、又左衛門は信長公の前に突然現れた。
「おやかた様！　こたびのいくさも参らせて頂きました！　首級は一つ。なにとぞ、帰参のお許しを！」
又左衛門は脛取り足立の首を信長公の前に差し出す。
「また、お前か。ふん。まったくもって、お前が来ると、勝ち戦にも水が差されるものよ」
「おやかた様っ」
と、信長公の前に飛び出し、又左衛門と共に平伏したのは、丹羽五郎左。
「こたびのいくさ、この脛取り足立に苦しめられ、拙者もあやうく殺されるところでございましたが、その危機を前田又左衛門に救われました。ゆえん、前田又左衛門にどうか恩赦をお与えくだされ」
信長公はむっつりと黙ったまま、又左衛門、丹羽五郎左をつまら

なそうに見つめ続ける。
「おやかた様！　拙者からもお頼み申す！」
と、大きな声で幹部席から出てきたのは、森三左衛門。
「こたびの勝利、前田又左衛門なくしてはなかったもの！　なにとぞ、帰参のお許しを！」
森三左衛門にまで言われてしまえば、さすがの信長公も考えなくてはならん。で、信長公、脇の巻物ジジイに訊ねる。
「おい、又左衛門なしでは、こたびの勝利はなかったか」
「ま、まあ、なかったかもしれませぬな。この脛取り足立は生涯千人の脛を斬ったと噂される豪傑。この者を斬らねば、もしや、我が家中は負けていたかもしれませぬ」
「ふん。左様か。又左、表を上げろ」
「はっ」
「帰参を許す。また、元の俸禄に加え、四百貫の加増とする」
「ま、まことでございますか！」
「まことだ」
「有難き幸せ！　この前田又左衛門利家、生涯、おやかた様に付いて参りまする！」
「前田又左衛門利家、四百貫の加増！　大儀であった！」
というわけで、又左衛門はようやく信長公に帰参を許されたわけだ。
拙僧か？　拙僧はなしよ。何の活躍もしておらんからな。
まあ、あのころは、後々のことを思えば、信じられないほど泥臭い日々であったな。又左も秀吉公も、五郎左も。
ところで、お豪、八丈島に流されているお主の旦那と息子、年が明けたら金沢に来られるよう手配しておいたぞ。
まあ、駿府や江戸の目を盗んでのことだが、この雪の中、まさか、八丈島からお主の旦那や息子が金沢に来られるとは思ってもいるまい。
ただ、すまないが、居られても一週間だ。これ以上はさすがに拙

僧の力でも無理だ。拙僧はどうなっても構わないが、この金沢の連中に迷惑はかけられるまい。

おいおい、泣くな。拙僧は、お豪の父上にさんざん助けられたからのう。

感謝するなら、あの世の又左にしなさい。

ここで登場人物のおさらい

『キモオタ（簗田牛太郎政綱）（牛）』
この物語の主人公。なぜかタイムスリップをして、戦国時代へ。織田信長の家来になり、桶狭間の戦いでは、戦場を逃げ回っていたものの、信長に決戦場を桶狭間に進言した手柄で、沓掛城主に。

『太郎』
キモオタが城主になった折、丹羽長秀が沓掛に連れてきた子供。身寄りがないため、キモオタの小姓に。しかし、太郎には、本人も知らない隠された事実が・・・。

『サル（木下藤吉郎秀吉・きのした　とうきちろう　ひでよし）』
言わずと知れた、のちの太閤豊臣秀吉。桶狭間の戦いで足軽大将に出世。奥さんは寧々。妹はメグミ（あさひ・朝日姫。のち徳川家康と政略結婚）

『マタザ（前田又左衛門利家・まえだ　またざえもん　としいえ）』
戦国時代の不良。信長親衛隊の赤母衣衆で筆頭を務めていたが、信長のおホモだちを斬ってしまって、一時、浪人の身になるが、森部の戦いで手柄を立てて、復帰。（のちの豊臣五大老。加賀百万石の祖。奥さんはまつ）

『イエモン（山内伊右衛門一豊・やまうち　いえもん　かずとよ）』
父親を信長に滅ぼされて浪人中、キモオタに出会い、家来に。まだ、若く、礼儀を知らない。（のち、土佐藩の祖）

『マリオ（丹羽五郎左衛門長秀・にわ　ごろうざえもん　ながひで）』

織田家の中堅武将。鬼五郎左の異名を持つ猛者だが、内政も得意。沓掛城主となったキモオタの目付役に。

『佐々内蔵助成政・さっさ　くらのすけ　なりまさ』
信長親衛隊、黒母衣衆。のち筆頭。サルが大嫌い。（のち、豊臣政権下で大名になるものの、内政の失敗を秀吉に責められ、切腹させられる）

『サンザ（森三左衛門可成・もり　さんざえもん　よしなり）』
重臣中の重臣。キモオタの理解者？　声がでかい。森蘭丸の父親。

『織田信長（通称・三郎・さぶろう、上総介・かずさのすけ）』
文字通り織田信長。

いざ、結婚！？

おれ、人生最大の大いくさに挑むことになった。
これは男を懸けた大いくさ。だから、太郎もイエモンもボロ家から追い出して、沓掛城に戻らせた。
メグミちゃんをおれの嫁にする。
思えば、ずいぶんとメグミを待たせてしまったものだ。マタザには子供ができ、サルは遠山さんと結婚。周りが次々と幸福になっていく中で、ごめんね、メグミちゃん。気付かなくて。君の寂しさに。
「ごめやあす」
キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――！！！！
「今日はじゃがいもの煮っ転がしだがや」
にこにことしながら板間に上がり、囲炉裏にぼろぼろの鍋を置くメグミちゃん。
「なんか、いつもごめんね。ずっと面倒見てもらっちゃって」
「いんやあ。どうってことないだがや」
メグミちゃんも今年で十九歳。おれはついに三十歳。お互い、決断のとき。
「メグ・・・、いや、あさひ殿」
「なんかえ？」
「お、おれの、おれの人生も煮っ転がしてくれないかな」
「？」
「け、結婚しよう。い、一緒に、く、沓掛に来てくれ」
おれのとびっきりの一太刀に茫然とするメグミちゃん。
胸が張り裂けそうなほどのおれ。生まれて初めての告白。いや、告白を飛び越えてのまさかのプロポーズ。大胆になったもんだ、おれも。それもこれも、戦国の世がおれを変えてくれたんだな。元の時代にいたときには、絶対にできなかったことだ。
ありがとう、戦国時代。ありがとう、メグミちゃん。

「わっち、中村の五作さんのところに行くことになったがや・・・」
へ？　なに？　そういや、おれ、ここ最近、耳掃除してなかったな。
「お腹ん中には子供もおんの」
と、自分の腹をさするメグミちゃん。えーと、どこの言葉で喋っているのかなあ。もしかして、ウラルアルタイ語とか？　あちゃー。おれ、バイリンガルじゃないんだよねえ。参ったなあ。
「兄さんも許してくれたがや」
ほうほう。あのサルが許してくれた。そりゃ、どえりゃあことだな。
「そやから、ここに来られるのも最後かもしれん」
おもむろに腰を上げたメグミちゃん。え？　なんで、最後？　よく、わかんなーい。
「今まで、楽しかったがや。ほんじゃ、さよなら、牛太郎さん」
我が家を出ていったメグミちゃん。
えーと、要するに、おれは駄目だったってことかな。
・・・・。
うわーーーーん。
オワタァァアアッ！　人生オワタァァアアッ！ふりみだれるううううぅぅぅぅイヤッホーーーーいいいいぃぃ！
メグミ！メグミ！メグミ！
メグミぃぃぃぃぃゃぁぁあああぁぁあああああ
メグミメグミメグミメグミぅぅうぅわぁあああああ！！！
メグミゃぁぁあああぁぁあああああん
うぇうぇうえっうううううえーーーーーん！！
この、クソビッチ野郎ォォォオオオっっっつ！
なんだよ、お腹の中に子供がいるって。なんだよ、お腹の中に子供がいるって。やっちゃった婚ってやつスか。ズッ婚バッ婚ってやつスか。
ファック。この世の中のすべてのビッチにファック。

「牛殿ォ。迎えに来たぎゃあ。そろそろ時間だぎゃあ」
玄関にサルの姿。ふーん。どこに行くの？　ねえ。どこに行くの？　おれは許さんよ。中村の五作は認めて、おれを認めなかったお前をおれは許さんよ。

ううっ。ちべたい。もう日も暮れているっていうのに、腰まで川の水に浸かっているおれ。

もう、何回目だよ。ううっ。毎度々々、南美濃にこっそり侵入しては、地元の連中に裏切りを勧めて回るも成果なし。くそザル。一人でやれっての。

美濃は信長のものになるっていう歴史だけどさ、いったい、いつになったら取れるのさ。最初に攻め入って以来、もう、五年も経つよ。なんなの、この埒の開かない戦い。

メグミちゃんには袖にされるし。もう、いい。このまま川の藻屑に消えてしまいたい。

「なに、とろとろしているだぎゃ。もうすぐ、岸だぎゃ」

「今日はどこに行くんスかあ。もう駄目ッスよお。もう裏切ってくんねえッスよお」

「今日は違うだぎゃ。下見だぎゃ」

下見？　うわあ。また、いくさッスか。もう嫌。何度殺されかけたことか。正直、生きているのが奇跡。それでよくね？　奇跡を起こしているんだからさ。

で、ようやく岸に上がれたと思ったら、今度は田圃の中のぐちゃぐちゃ道を進んでいく始末。こんなの忍者の仕事だろ。おれはただの噺家だぞ。クソッ。

「まあ、この辺だぎゃな」

って、立ち止まったサル。遠くのほうには、斎藤方の城のかがり火がかすかに見える。

なんスか。まさか、本当に忍者やるの？

「牛殿、一週間後、この辺に城を建てるにゃあ」

ふーん。頑張って。

「ここに城を建てるのは織田家の悲願だぎゃ。だきゃど、今まで何

回も失敗したぎゃ。築城中に斎藤勢に攻められて、何度も挫折しているだぎゃ」

「じゃあ、無理じゃないッスか」

「でも、建てにゃあ、いつまで経っても稲葉山に行けんだぎゃども、ここに建てりゃあ、形勢は一気におりゃあらのもんにゃ」

「でも、無理なんでしょ」

「無理だきゃあども、おりゃあはやる。おやかた様に言ってしまったにゃ。やるって」

あっそう。やけに自信たっぷりだけど、無理なものをどうやってやるっていうのさ。てか、なんで、おれもここにいるの。もしや、巻添えにされているって話?

「でやからの、牛殿にも頼みがあるんだぎゃ。一週間後、沓掛中の男どもを根こそぎここに連れてきてほしいんだぎゃ」

「嫌だって言ったら?」

「あさひはやらないだぎゃ」

氏ね。いや、死ね。この野郎、おれをバカにしやがって。ああ、そっか。おれは今まで、メグミちゃんを餌にいいように使われていたってことか。ああ、そっか。ああ、わかったぞ。

「断る」

「にゃっ!?」

「おれはもう藤吉郎殿には騙されない。だってな、あさひ殿が嫁に行くことぐらい、おれだって知ってんだぞ!」

「しーっ! 声がでかすぎるでにゃあか」

「そうやって、また、ごまかしやがって!」

「わかったにゃ、わかったにゃから、静かにしてくれだぎゃ」

ブルル。おれは今、まさにスペインのマタドールに襲いかかる闘牛のように鼻息が荒い。許してたまるか。こんな奴。いくら天下人になるからって、おれは絶対に許さん。

「堪忍してくれにゃあ。おりゃあだって、あさひが身ごもっていたにゃんて青天の霹靂だぎゃあ。おりゃあだって、あさひは牛殿に嫁

がせたいと思っていたんだぎゃ」
「そんなこと言ったって、この五年間、そんな話なかったじゃないか」
「そりゃあ、だってにゃ、そういう時期ではなかったりりゃあ」
「いや、もう騙されん。おれはもう騙されない」
「わかったにゃ、わかったにゃ、違うおにゃの子を紹介するだぎゃ」
ブルッ？
いや、でも、待て。昔、紹介するからって言われて、結局は騙されたことがあったような気がするぞ。
「なんか、嘘っぽいんだけど」
「本当だぎゃ。紹介するだぎゃ。にゃ。おりゃあの顔の広さを知らないわきゃでにゃあやろ」
「うーん」
確かに交友範囲は広いけど。確かに女子供には好かれているけど。
「美濃の女を紹介してやるだぎゃ。近江の武士の娘での、父が戦死したから、今は母方の実家の石川小四郎の元におるおにゃの子だぎゃ。おみゃあも知っているにゃあろ。石川小四郎のところに一緒に行ったでにゃあか」
よく覚えてない。だって、おれ、寝返り工作しているときは外で待機させられているだけだもん。
「じゃあ、明日、行くぎゃあ。一緒に石川小四郎の元に行くだぎゃ」
「ま、まあ、いいッスけど」
「そんかわり、今日はここで野宿だぎゃ」
いっつも野宿じゃんかよ！

雰囲気だけ悪者の密談

石川小四郎とかいう奴の家はすげえ遠かった。朝日が昇ってから日没まで、丸一日歩いた。

で、着いた家がボロ。とんでもないボロ。清州のおれのボロ家よりボロ。つきはぎだらけでブラックジャック先生状態。

「ごめんだぎゃあ」

というサルと共に入ると、玄関入って二秒で居土間。ろうそくが二本あるだけのお化け屋敷。そこには四人のお化け。ジジイお化け、ババアお化け、おふくろお化け、きゃわわお化け。

って、ん？

暗がりでよく見えないけど、まさか、あのきゃわわっ娘が、おれに紹介してくれるって人？

「木下藤吉郎だぎゃ。久しぶりだぎゃ、石川殿」

「あ、ああ、木下殿ですか。これはこれは」

「今日はそら豆を持ってきたぎゃ。皆で食うだぎゃ」

あ、それは途中で民家の軒からパクッってきたやつ。

「ああ、いつもいつも、拙者どもなんかにすいません。ほれ、千代、すぐに茹でなされ」

「はーい」

ほう。きゃわわっ娘はチヨというのか。なんか、この時代に珍しく髪の長さが耳たぶぐらいまで。着物は水色で爽やかさ全開。猫目。まつ毛長し。鼻筋細し。唇ぷるぷる。

「木下さん、いつもありがとネ」

って、サルの盗品を受け取ったんだけど、きゃわわああっ！　めっちゃ、ルンルンしてるし。きゃぴきゃぴしてるし。サル、デレデレしてるし。

おい、ちょっと、ふざけんなサル。おれはまた騙されようとしているんじゃないか。

「まあ、ここは女どもがやかましいゆえ、奥の部屋に」
と、ジジイに促され、奥のボロクソの板間に。ジジイが鉄皿の上のろうそくを点け、雰囲気は悪者たちの密談。
「木下殿、いつもいつも、ありがたいことこの上ありませんが、こちらのほうはなかなか進展しませんでして」
ジジイは腰を下ろすなり、面目ない、と、サルに頭を下げる。
「いや、石川殿、やめてくれだぎゃ。おりゃあも、早々に事が上手く行くとは思っていないだぎゃ」
「いや、まあ、あちこちに手は伸ばしてはいるんですが、拙者どもは所詮、浪人同然の身。何をしようにも、この明智庄の人間は先の道三様と義龍殿のいくさで負けた者たち。現役の家臣はまったく相手にもしてくれないのが実情で、我らは百姓まがいの日々で食いつなぐのが精一杯。主の十兵衛様がおったら、少しは違ったのかもしれませんが」
「いいだぎゃ、いいだぎゃ、時が来れば、槍を持ってくれればよい。おりゃあが期待しているのはそこだけだぎゃ」
要するにこの石川ってジジイや、この近辺の連中は落ち武者みたいなものってことなんだな。
まあ、別におれはそんなの興味ないし。
「ただにゃあ、その時が近いっていう話でもあるんだぎゃ」
「というと、ついに織田様が？」
「いや、まあ、決まってはおりゃにゃあけど、今の斎藤家の様子にゃら、まあ、時も近いぎゃあ」
「左様ですな。斎藤家の現状はまったく嘆かわしい。道三様は何と思われていることやら」
さすがに五年もいくさを続けていると、おれもその辺りのことは知っている。
今の斎藤家の当主のタツオキは、とんでもないバカらしくて、酒びたり、女びたりの羨ましい毎日を送っているらしい。
そんな、タツオキに愛想を尽かした小僧の竹中半兵衛がクーデタ

ーを起こし、十五、六人で稲葉山城を乗っ取るとんでもないことをしたみたい。

でも、半兵衛はバカだから、稲葉山城をタツオキに返して、現在浪人中。今どこで何をしているやら不明。

ま、半兵衛がいなくなったおかげで、やばいいくさがなくなったんだけど。

半兵衛がいたときは、おれは本当に何度も殺されそうだった。てか、織田勢は何度もぼろ負けした。

草っぱらから兵隊が突然出てきたこともあったし、いざ、決戦ってなったのに、あれ、今斬ったこいつって織田軍じゃね？　みたいなこともあって（まあ、おれは逆にゴンロクのバカ野郎所属の兵隊に斬られそうになったんだけど）、竹中半兵衛が出陣しているっていう噂が立つと、皆、やる気ゼロになるぐらいヤバい奴だった。

でも、竹中半兵衛は現在行方不明中。会ったことないから、どんな奴なのか知らないけど、多分、ニート癖があるんだろ。頭のいい奴にはよくあることだ。おれみたいに。

「だぎゃにゃあ、その時が来たりゃあ、真っ先に疑われるのは、この明智庄だと思わんかえ？」
「・・・それは、木下殿の言う通りかもしれませぬ。誰がどう見ても、我らがここで、道三様の娘婿である信長殿に付くのは明白」
「だからにゃ、今日は一つ、案を持ってきただぎゃ」
ガラッ。
「豆が茹であがりましたよー」
きゃぴっ☆　チヨタン。カワユス。キャワユス。
「こらっ、千代っ。何も言わずに入って来る娘がおるかっ」
「そーんなこと言われましたって、おじいさま、会話が筒抜けなんだから、いいでしょー。ネっ、木下さん」
「にゃはあ／／　そうだぎゃなあ／／」
この野郎。遠山さんっていう女房がいるくせに、鼻の下伸ばしやがって。こいつ、絶対に紹介する気なんてねえだろ。まあたか。まあた、俺は騙されたんか。
「でね、そちらの方はどちらさま？」
「あはあ／／　あっしは簗田牛太郎政綱と申します／／」
「こいつは、おりゃあの家来だぎゃ」
は？　今、なんて？
「くその役にも立たにゃあ奴だぎゃ、運だきゃあいいんで、おりゃあもこいつの運にあやかりたくて、連れて回しているんだぎゃ」
「は？　何言ってんスか、あんた」
「えー？　木下さん、嘘ばっかり。だって、簗田牛太郎さんって、五年前の桶狭間で勲功一番だったお人でしょ？　で、今は沓掛城の城主様。でしょ？」
「にゃ、いや、にゃ、そ、そうだぎゃ。にゃ、にゃかにゃか物知りだぎゃな、千代殿は。何も知らにゃあと思って、冗談を言ってしま

ったぎゃ」
　ざまあ。マジでざまあ。サイコーにざまあ。こんなメシウマな気分になれたのは久々だぜ。いやあ、本当にうまいぜ、このそら豆。
「いやあ、木下殿、この娘は、自分が男に生まれたらなんとやらが口癖でして、おなごのくせに天下の情勢をやたら知りたがるのです」
「にゃ、そうにゃんか。いやあ、にゃっはっは。こりゃあ、千代殿に一本取られたぎゃあ」
　ふっ。お前にはチヨタンは無理だ、サル。お前の黒い腹の中なんて、チヨタンみたいな賢い子には見え見えなんだよ、このクソバカエテ公。
「で、今日は、天下の簗田さんもお目見えしてどうされたの？」
「こらっ。お前は下がっていなさい。どうして、そう首を突っ込もうとする」
「いいじゃーん。ネっ、簗田さん」
「ええ／／　いいですよ／／　全然っ、いいですよ／／」
「わーい。簗田さん、大好きい」
　と、おれに抱きついてきたチヨタン。ああ、いい匂い。ああ、柔らかい。ああ、なんスか、このアグレッシブガール。ああ、とろけちゃう（＊´д`＊）アハァ　おれ、とろけちゃうよおおぉぉうぅぅっつ！
「千代っ！　いい加減にせいっ！」
　と、ジジイに引き剥がされたチヨタン。ジジイに外に突き飛ばされたチヨタン。ああっ。やめて。もっと、チヨタンに触れたいのにっ。
　サル、隣でシラーっとした目。
「申し訳ありませぬ、簗田殿。うちの孫娘が無礼な行いを」
「いやあ、いいんですよお。別にい」
　ごほん、と、サルが咳払い。うぜえ。
「まあにゃ、千代殿も申していたぎゃ、今日、こいつを連れてきたのはにゃ、その時ぎゃあ来れりゃあ明智庄も戦火の中っていうこ

とだぎゃ。だからにゃ、明智庄の女子供をいったん移住させたらどうきゃっていうことだぎゃ。こいつの居城の沓掛ににゃ」

は？　なんで？　そんなの無理に決まってんじゃん。だって、その女子供ってどんだけいるんだよ。マリオが許すはずねえだろ。何をとんでもねえこと言ってんだ、こいつは。

「いやっ、木下殿、明智庄には先のいくさで残った者は少ないとはいえ、元明智家臣の女子供だけでも百はおりますぞ。それに、百人が大移動すれば、稲葉山に怪しまれるに決まっております」

いや、ちょっと待てよ。百人が沓掛に来るってことは、その中の一人にチヨタンがいるってことだよな。そうだよな。

サル、ナイス。

「そりゃ、そうだぎゃ。だきゃら、ちょっとずつ移住させていけばいいんでにゃあか。その先陣として、物知りの千代殿などを向かわせてはどうきゃの」

サル、恩にきるよ。恩にきるよ。お前は腹黒いが、頼りになるときはなる。ありがとう、サル。許してやるよ。

ということで、大きな成果を上げて、石川家を後にする、おれとサル。

てか、もう夜の闇も深いんスけど。

「藤吉郎殿。なんで、泊まっていかなかったんスか。泊まっていけって言っていたじゃないスかあ」

「そんなの無理に決まっているだぎゃ。おみゃあ、絶対に千代殿にいたずらするだぎゃ」

「そんなのしないッスよ！　あさひ殿にだって、指一本触れていなかったんスからね！」

「にゃーにゃー、わかったにゃ。もうその話はいいだぎゃ。おりゃあが悪かったぎゃ。ただにゃ、沓掛に連れていくことにゃあ、おみゃあに任せたきゃら、あとは自分でやるんだぎゃ。あと、築城のことも忘れるでにゃあぞ。六日後だぎゃあ」

「わかってます。わかってますって」

ま、イエモンたちをこき使うだけですけどね。沓掛中の連中を駆り出すなんて、マリオが絶対に許してくれないし。こいつにはマリオが許してくれなかったって言えばいいだけのことだし。

「にゃっ！」

と、急に、腰の刀に手をかけるサル。なんだ？　サルらしくない。

「牛殿、刀を取れい。そこの家の陰に人影が見えたぞ」

と、賢者モードのサルですが、あいにく、あっしはノーカタナなんです。

「後を付けられていた様子。最悪、散り散りに逃げるしかないな」

うわあ。勘弁してよ。なんで、最近、こんなのばっかなの。殺されかけてばっかじゃん。てか、殺されそうなのか。うへえ。

で、人影がゆらーっと民家の陰から出てきたわけ。月明かりもないから、顔色なんて伺えない。ただ、わかるのは、戦国時代の人間

らしからぬ、すらっとした長身っていうだけ。
刀を抜くサル。弱そう。こりゃ駄目だ。おれ、逃げる準備。
「刃を見せるなど、物騒な。拙者はただの世捨て人。貴公たちの後など付けてはおりませぬぞ」
「なら、何者だ。名を名乗れ」
「斎藤家にゆかりのある者。いや、ゆかりのあった者ですな」
「お主、竹中半兵衛だな！」
えっ？　マジで？　こいつが行方不明中のニート？
「さすがは木下藤吉郎秀吉。きっと貴公は天下の数多の武将たちもご存じなのでしょう」
「な、何の用だ」
「貴公に用はありませぬ。用があるのはあすこの家の石川殿です」
「なっ、石川殿を殺す気か！」
「なんで、またあ。美濃三人衆の件を石川殿に伝えに来たんですよ」
って言って、ニート君、刀を握るサルを相手にもせず、すたすたと脇を通り過ぎて行く。
「三人衆の件とは、どういうことだ！」
相手にされないで吠えるサル。
「それは石川殿に訊いてくだされ。拙者は木下藤吉郎とは何の因果もありませぬ」
闇に消えていくニート君。アウトオブ眼中されて茫然とするサル。
「牛殿。このこと、おやかた様には黙っておくんだぞ」
別に言わないけど。どうせ、ニート君はお前の家来になるんだし。

チビマリオ

翌日、清州には寄らずに、真っすぐに沓掛城に戻ってきたおれ。だいぶ歩いたけど。でも、五年もこの繰り返しだと、なんだかんだで逞しくなるもんだ。多分、箱根駅伝で区間賞取れちゃうレベル。

沓掛城は相変わらず男臭い。松平元康改め、徳川家康と同盟を結んだんだから、どこかに攻められる恐れはまったくないというのに、相変わらず女っけなし。

だが、近いうちに、この城はおにゃの子たちで溢れ返るんだ。フヒヒ。

ラッキーなことにマリオは清州に行っているらしい。

とりあえず、今のうちに明智庄から来る女子供の寝床を確保しておかないとな。ぐへへ。おれって名君。

日没後、おれは太郎の目を盗んで（十三歳になった太郎は近頃ませてきていて、マリオにチクる恐れがあるので）城下へ。イエモンの従者の祖父江勘左衛門が住んでいる長屋に。

「こ、これは城主殿。いつ、お戻りに」

「いや、ちょっとソフエに頼みごとがあって」

「は、はあ。ま、まあ、どうぞお上がりくだされ」

お人好し中年のソフエはイエモンの家来には勿体ないぐらいの出来る奴で、田畑の開墾や城下の復興もこいつが頑張っていた。そう、おれは実は見ていないようで家臣に目を配っている名君。

「どうされたんでしょう。直々にお頼みごととは」

「実は、まだ、内密なことなんだけど、今、美濃攻めの調略を任されているじゃん、おれ」

「ええ」

「それでさ、その調略の流れで、美濃の斎藤方の裏切り者たちを一時の間、沓掛にかくまうことになったんで」

「それはなんと。大手柄ですな」

「だろだろ。でも、それが総勢百人ぐらいになりそうなんだよね」
「百人！？」
「だからさあ、申し訳ないんだけど、だいたい五十世帯分の寝床を確保してもらいたんだよね」
「五十ですか・・・。まあ、幸い、古い足軽長屋をまだ取り壊していないですが、それでも二十ぐらいしか」
「あとの残りは村の連中にお願いしとけよ」
「むーん・・・」
「頼んだよ。期待しているかんね。ただ、あくまで内密だから。斎藤方に漏れたら大変だからさ。イエモンにも内緒だよ」
「は、はあ・・・」
シシシ。ソフエはお人好しの頑張り屋だからきっとやってくれるはず。
で、城に戻るおれ。
「殿様！」
うえっ。太郎がお出迎え。キリッとした顔。
「聞きましたけど、一度、城に戻られていたそうじゃないですか。一体、どこに行っておられたんですか」
むう。うるさい小僧め。お前はおれの小姓だろうが。まったく。背が伸びていくごとにうるさくなっていくんだから。
「どこだっていいじゃないか。それよりも風呂。ずっと野宿だったから風呂に入りたい。さっさと用意しなさい」
「今日はお風呂の日じゃありません」
は？　なんだ、それ？　お風呂の日とかあったっけ？
「沓掛城は倹約を徹底しております。風呂を焚くさいの薪も馬鹿にはなりません。なので、お風呂の日は週に二度とさせていただきました」
「そんなの誰が決めたんだよ」
「太郎が決めました」
「な、なんで、お前が勝手にそんなの決めてんだよ」

「お風呂など贅沢です」

キリリッ。ぐう。基本的にキモオタのおれは、元の時代では勉強運動何をやっても駄目だった奴だから、こういう学級委員長的な奴には逆らえず。

それにしても、マリオがいないっていうのに、もう一人、マリオがいるような感じ。まさにチビマリオ。クソッ。

沓掛天国＾＾

そういや、いつ、築城するんだっけか。忘れちゃった。ま、イエモンたちを向かわせるだけだから、どうでもいいんだけど。

午前中は太郎と一緒に城下見聞（強制的に）。ま、おれも目的があるけど。ほほう。ソフエが駆けずり回っている。なかなか、良い家来だ。

ただ、城下を回っているにつれ、おれはつまらない気分に。

元の時代で言うところの中学二年生の太郎は、近頃、生意気。なかなかイケメンな顔立ちになってきやがって、村の女どもに人気がある。城下に出ると、おれのことは無視して、太郎に投げかけられる黄色い声。太郎はすまし顔。ふん。出会ったころは可愛げがあったのに、まったく、嫌な奴になってきたぜ。

そうだ、太郎は元服させよう。十五歳ぐらいが通例らしいが、二歳若くてもいいだろ。元服させて、足軽長屋にぶち込んでサヨナラ。

それにマリオもそろそろ出世するころだろ。一応、丹羽長秀だし。マリオもいなくなって、チヨタンがやって来て　ここは沓掛天国＾＾って、城に戻ってきたら、マリオの馬が。

うぜえ。もう戻ってきたのかよ、クソッ。

チヨタンが来るまでは、どうにかバレないようにしないとな。来ちゃえばこっちのもんだし。

で、廊下を行っていると、マリオ、城内の居間で、なんかの帳面を捲っている。ハア。真面目バカめ。

「うーん。このままだと兵糧が足らなくなるかもしれん」

おれはマリオに見つからないようにして、こそこそと自分の板間に戻ろうとしたんだけど、太郎のバカが、

「丹羽様、只今、戻りました」

「ん？　おう、太郎か。簗田殿も一緒か」

「はい」

「築田殿、ちと、話が」
「ううっ。あっしはちょっと腹痛のため、さっさと厠に行かないと」
「ちょ、築田殿！」
「丹羽様！」
と、門番が庭先にやって来て、平伏。てかさ、城主はおれなんだけど。
「なにやら、門前に十人ほどの女子供が参って来ておって、なんでも、明智庄からやって来たとか。城主殿に会わせろと騒いでおります」
「明智庄！？」
早っ。もう来たの？　いや、でも、都合がいいわ。来てくれたんなら、もはや、マリオにもごり押しできる。
で、おれ、駆け足で廊下を戻り、門前へ。腹痛？　知らない。
そこには、チヨタン、いた＾＾　あと、ｅｔｃの女子供。
「わー、築田さーん。ようやく会えたあ」
おもむろにおれに飛びついてきたチヨタン。ああ、とろけちゃう。やめて。とけちゃうよ、チヨタン。
「な、や、築田殿、こ、これは一体」
「ま、とりあえず、城内に入ろっか／／」
と、おれはチヨタンにべたべたされながらも、マリオを無視。マリオは「築田殿、どういうことじゃ」と何度も騒いでいるが一向に無視。そして、むっとしている太郎。こいつ。おれが女と絡んでいるのがよほど気に入らないらしい。なんなんだ、まったく。
「築田殿！　いい加減にせいっ！　状況を話さんかっ！」
うっ。鬼マリオがキレぎみなので、とりあえず、チヨタン以下ｅｔｃを庭先に待たせて、おれとマリオは板間に。なぜか、太郎も。まったく、小姓のくせにでしゃばりやがって。
「どういうことだ、あのおなごどもは」
「いや、まあですね、先日、美濃に入ったさいに、調略の流れで、明智庄の女子供たちを一時、預かることになったんですわ」

「な、そ、そんなの聞いておりませんぞ！」
「急なことだったので」
「むう・・・」
フヒヒ。美濃攻めの攻略に関わることを匂わせれば、マリオも黙るしかない。
「本当なんですか、殿様。本当にあの者たちは明智庄の者たちなんですか」
と、主人を疑うクソガキ。この野郎。言わせておけば、ぬけぬけと。
「そう思うんなら、木下殿に聞いてこい。本当か嘘か知りたいんなら聞いてこい。だいたいな、おれは、お前が尾張でのんびりとしている間、藤吉郎殿と一緒に川を渡り、ぐちゃぐちゃ道を行き、毎晩野宿をして調略をしているんだかんな。それをなんだ、お前は。その言い草は」
太郎、しょんぼり。
「すいません」
「だからといって、簗田殿、軽率すぎますぞ。だいたい、いつまであの者たちを預かるのだ」
「そりゃ、美濃攻めが終わるときまでですよ」
「本気か！」
「ゴロザ殿。これは美濃攻めに関わる大事なことなんですけど」
「むう・・・」
フヒヒ。鬼マリオ、肩無し。真面目バカだから、美濃攻めの裏やり取りには全然絡んでないマリオ。まあ、ここはおれの勝ちですな。

魔法使いとコン棒と

ガラッ。
「おはよー！」
うーん。なに。むにゃむにゃ。早いよお。
「起きて起きて起きて！　早起きは三文の得！　一に健康、二に健康、三四がなくて、五に健康！　起きて起きて起きて！」
うー。チヨタン。カワユス。。。でも、眠い。
引っ張り起こされるおれ。てか、なんでチヨタンが城内にいるの。ソフエが手配した長屋に住むんじゃないの。
そんなことを思っている間に、縁側まで引っ張り出されるおれ。
「はい、これ」
にこっと笑いながら差し出してきたのは細いコン棒。なんスか、これ。今から、バラモス退治ッスか。でも、おれって三十年間童貞を守り続けた魔法使いだから、装備できないよ。
「ほら！　打ち込み打ち込み！　武将たる者、毎日の鍛錬が必要だよ！」
えー？　なんで、おれが。
渋々、こん棒を受け取ると、庭先に降りて、素振り開始。チョウチョが止まるぐらいのスピードで。
「もっと早く！　早く早く！　腰を入れて！」
ハア。なんスか、これ。チヨタンってめっちゃ面倒臭い子じゃん。あー、いたいた。こういう子って。クラスに絶対にいる元気すぎるでしゃばりっ娘。
「もー。簗田さん、違うでしょ」
と、庭先に降りてきたチヨタン。あーあ、うざいうざい。って、え？　おれの拳を握り・・・、おれの腰に手を添え・・・、てか、お、おっぱいが当たっているんですけど・・・（；´Д`）
「こうでしょ。もっと、こう」

ああ、チヨタンが動くたびに、触れる。当たる。堅くなっちゃう。
あかーん！　おれ、あかーん！
「もっと頑張って！　打ち込み百回！　頑張って！」
百回なんて無理だよ。だって、おれ、堅くなっちゃったんだもん
／／
「もー。頑張ったら、ちゃんとご褒美あげるからあ」
「え！？　なに？　ご褒美って」
色めき立つおれ、チヨタンを凝視。そうしたら、チヨタン、唇をつぼめて、チュッっておれに投げキッス。
・・・・。
うおーーーぉぉおおおっっつ！！！　打ち込み始めえええぇぇぃぃぃっつ！
「あれ？　殿様？　どうしたんですか」
ふん。太郎め。今さら起きてきやがって。主人を見習え。戦国武将たる者、毎日の鍛錬が必要なんだ。少しは見習え。
「鍛錬をしているの☆」
「ほ、本当ですかっ？　殿様がっ？」
「太郎ちゃんも一緒にやったら？」
「は、はいっ！」
チヨタンに促されて、どっかに駆けて行った太郎。おれは汗だく、ギトギト醤油とんこつラーメン状態。
「ほらっ、簗田さんっ。腕が振れてなくなってきているよ」
ううっ。腕が。腕が。
「ほら、ガンバ☆　ご褒美ご褒美」
うおーーーぉぉおおおっっつ！！！
「殿様！　太郎も共にやります！」
ぜえぜえ。うう。キス。チヨタンのキス。
「あ、太郎ちゃん、簗田さんに手合わせしてもらったら」
「あっ。そうですね。是非、そうしてください、殿様」
ぜえぜえ。うう。キス。チヨタンとキス。チヨタンとセックス。

フヒヒ。
「では、参ります」
ん？　なに？　なにやってんの太郎。おれはコン棒なんて装備できない魔法使いなんだぞ。パパスの子供的なお前なんかとやったら――。
「てやぁぁあーっ」
「お、おい、ちょっと！」
あべし！
「ううぅ」
太郎のコン棒が腹を直撃。死ぬ。もう死ぬ。駄目だ。おれ、ダウン。おれのＨＰは６しかないんだから。もう駄目。
「と、殿様っ！」
頼む、揺すらないでくれ。太郎ちゃん。いい子だから揺すらないでくれ。気持ち悪くて駄目だ。揺すらないでくれ。
「はーい。ここまでー。それじゃ、ご褒美の朝ごはんを作ってくるね☆」
「殿様っ！　殿様っ！」
ご褒美・・・。朝ごはん・・・。ずるい。ずるいよ、チヨタン・・・。ウウッ。

すりすりタイム

太郎に攻撃されて、重傷のおれ、布団の上でダウン中。腹痛い。腹が焼けるように痛い。太郎の奴。なかなかの腕。――いや、なに関心してんだ。思い切りやられたんだぞ、おれは。

「殿様、大丈夫ですか。大丈夫ですか」

「だ、大丈夫なわけないだろ・・・」

ガラッ。

「はーい。朝ごはんできたよー。太郎ちゃんのぶんもあるからネ。たーんとお食べ」

ううっ。ご飯山盛り。いらねえ。痛え。

「あれ？　どうしたの？　早く食べないと冷めちゃうよ」

どうしたのじゃねえだろ、クソアマ。太郎なんかと闘わせやがって。太郎はいつのまにかめちゃくちゃ強くなってんだぞ。この野郎。しかも、ご褒美とかいって、ただの朝飯だしよ！

と、言いたいところだけど、お腹痛すぎ。

「殿様がさきほどの一撃で・・・」

「えー？　そうなの？　どれどれえ」

歩み寄ってきて、おれの着物をめくるチヨタン。うへえ、棒の跡状に綺麗に腫れあがっているじゃねえか。くそう。もうやめてくれ。おれに関わるな、クソアマ。

「うーん。ちょっと、すりすりしてみよっか」

と、チヨタンの綺麗な手がおれのでぶっ腹に。

すりすり・・・。すりすり・・・。あはん。すりすり・・・。ああっ。

「どお？　痛くなくなってきた？　痛くなくなってきたでしょ？」

「う、うーん／／」

太郎、いつものシラーッとした目。おいっ、さっきの心配ようはどうした？　あ？　なんでお前はいつもそうなんだ？　おれがモテ

るのがそんなに嫌なのか？　あ？
「ほら、ダーメ☆　安静に安静に。痛くなーい、痛くなーい」
「あ、はい／／」
「ほーら、痛くなくなったあ。じゃ、朝ごはん、いーっぱい食べましょうネ」
「はーい」
ああ、幸せ。すりすりされて幸せ。チヨタンサイコー。もう、おれ、いい。何を失ってもいい。チヨタンがいればなんでもいい。
メシもうまい。魚がうまい。ほっかほかの焼き魚。脂のりのり。ああ、こんなにうまいメシを食ったのは久々だ。今までは沓掛城では太郎の作ったまずいメシ。清州ではメグミちゃんの穀物三昧。南美濃では雑草を食っている始末。「おみゃあは牛だから大好物だぎゃあな？」くそザル。氏ね。
あ、サルといえば、築城しなくちゃ。そうだそうだ。そろそろイエモンを森部に向かわせないとな。
「ねーえ。簗田さんも墨俣のお城作りに参加するんでしょ」
と、チヨタン。ん？　なんで知ってんの？
「あの日ね、木下さんと簗田さんが帰ったあとに、竹中様が来てね、二人が墨俣にお城を作るんだって。お城ができれば、美濃も織田様のものになるかもって言ってたよ」
ふーん。ニート君、どっからその情報を仕入れてきたのかな。まあ、あいつは元天才軍師だから、いろんなコネクションがあんだろ。
「竹中様、期待してたよ」
ニート君は斎藤を滅ぼしたがっているのか。腹黒い奴。ま、サルの家来になるんだから、類は友を呼ぶってやつね。
「でもさあ、墨俣にお城を作るって言ったって、今まで駄目だったんでしょ。どうするの、簗田さん。それこそ、一日で完成させないと、稲葉山の殿様に邪魔されちゃうよ」
「一日でなんか無理だよ」
「でも、作れば明智庄は平和になるでしょ？」

「まあ、そうかな」
「そうしたら、私もお嫁に行けるんだけど」
と、チヨタン、なぜかおれの目を見つめて、微笑。え？　お、おれの元に？　え？　そういうことだよね。これって、遠回しの逆プロポーズだよね。
「私、出来ないことを達成する人って好きだな」
うおーーーぉおおおっっつ！！！
「太郎！」
ご飯もそこそこに、腰を上げたおれ。
「イエモンに伝えろ！　沓掛の兵たちを今すぐ集めろって伝えてこい！　いや、兵たちだけじゃなく、沓掛の村々の男たちも駆り出してこい！」
太郎、無視してご飯をぱくぱく。
「太郎っ！」
「そんなの無茶です。沓掛から男たちを消えさせるなんて、無茶です。丹羽様が絶対にお許しになりません」
「あ、お前、もう忘れたのか。主人を棒きれでぶん殴ったことを」
「あ、あ、いや、そ、それは」
「じゃあ、さっさと、イエモンに伝えてこい！」
「知りませんよ！　どうなっても知りませんよ！」
悪態を残して出て行った太郎。ふん。おれがモテるからってひがみやがって。
「頑張ってね、簗田さん☆」
ええ、頑張りますとも。この簗田牛太郎政綱、墨俣の地で不可能を可能にしてきましょう。そして、千代殿、美濃を平定した暁には・・・。ハアハア。

成長のあかし

「簗田殿っ！」
チッ。うるせえのが来やがった。
城内にぞくぞくと集まってきた足軽たちや村の男たち。それを目の当たりにして、血相を変えるマリオ。
「どういうことだ、これは！」
「いや、今から墨俣に行くんですよ。城を作りに」
「な、その築城は木下藤吉郎が任されているはずだぞ。どうして、簗田殿が兵を集めているのだ」
「手伝いに行くんですよ。だって、一日で築城しなければ、斎藤勢に邪魔されますから」
「殿。ある程度集まったぞ」
と、イエモンが近寄って来てタメ口。まあ、この短時間に集めたから大目に見てやる。実際はソフエがやったんだろうけど。
「ちょ、待たれよ、簗田殿」
と、マリオの凶暴な力で板間に引きずり込まれるおれ。で、板間に放り捨てられるおれ。うう。やべえ。マリオが結構、怒っている。毎日のように会っていると忘れがちだけど、こいつは、鬼の五郎左衛門と呼ばれるほど恐ろしいやつ。
「このようなこと、あまりにも横暴すぎるぞ！」
「横暴も何も、美濃攻略にはやらなければいけないことッス」
「では、この沓掛の守りはどうするのだ。村の男たちまで駆り出して、村の仕事はどうするのだ。こんなことをしたら、各々から不満が出るぞ！」
「しかし、美濃攻略は至上命題！」
と、時代劇ばりのおれ。
「我らが行かなければ誰が行く！」
むう、と、おれに押されるマリオ。おれも自分で自分に驚く。鬼

マリオを圧倒させていることに。ま、治安率激悪の戦国の荒波に揉まれていれば、口ぐらいはうまくなるわな。

「マリ、いやゴロザ殿。あとは任せました」

しばし、押し黙るマリオ。そして、うなずく。

「わかり申した。しかし、村人たちは置いておくこと。あと、足軽の半分も残していく。これだけは譲れないぞ」

むう。まあ、仕方ないかな。本当にそこは譲らないだろうし。あんまり駄々をこねると、戦場バージョンの鬼マリオになっちゃいそうだし。

「わかりました。そうしましょ」

大人のおれが折れて、マリオと共に再び庭先に。

「墨俣に向かう者はこの中の半数だ。それと村人はもう帰ってよし。墨俣には行かん」

と、マリオが声を上げると、ほっとする顔の村人たち。あー、良かった、なんて、抜かしている奴も。あの野郎。今年の秋は年貢を絞り取ってやる。

「それと、伊右衛門。お主も従者共々残れ」

は？　なに、勝手に決めちゃってんの。イエモンを一番酷使させるつもりなんだぞ。その腐ったゆとり根性を叩き直してやるんだぞ。

「いや、俺は行くぞ」

「駄目だ。お主だけが唯一、築田殿の家臣。わしだって、いつもこの沓掛にいるわけではない。お主は沓掛を守れ」

「いや、でも」

「そうですよ！　なんで、勝手にそんなこと言っちゃってんスか！」

と、目玉を剥き出したおれ。しかし、マリオの目がぎらり。ううっ。無言の圧力。やばい。ついに鬼マリオの兆し。

「わ、わかりました。イエモンは沓掛に残します」

ただし、と、おれは言う。太郎をぎろり。驚く太郎。

「こいつは連れていきますよ」

「な、何を言っておる。太郎はまだ小姓の身分だぞ」

「じゃあ、元服させましょ」
「そんな馬鹿な。太郎はまだその齢ではないし、それに太郎をどこかの家の養子にしなければ、元服などできぬ」
「じゃあ、ゴロザ殿の養子になればいいじゃん」
「いや、そ、それは」
あたふたとするマリオ。まあ、マリオには息子がいるからそれは無理だろうけど、それにしても、あたふたしすぎ。
「太郎は行きたいです」
ほほう。なかなか健気な子供だ。
「ゴロザ殿、太郎の主人はあっしですよ。それに太郎が行きたいって言っているんですからね」
「しかし・・・」
「時間はない！　者ども行くぞ！」
ふふ。おたおたマリオを無視して、百人ほどの兵（＋太郎）とともに城を出たおれ。待ってろよ、墨俣。待っていろよ、斎藤。待っててね、チヨタン。

現場監督の心得

対岸に薄闇の美濃。

木曽川の岸辺を賑わす木下築城隊＆沓掛応援軍。総勢、二百五十人ほど。

夜明けとともに渡川。川並衆の船が上流から材木を運んでき、沓掛応援軍が陸上での材木運搬と城周りの穴掘り（涙）。木下築城隊が城砦の建設。スピード＆チャージをモットーに、工期は明日の夜明けまで。

「いいか、おみゃあら！　一番早く仕事を終えた組には金十両がおやかた様から与えられるだぎゃあっ！」

サルの言葉に、鼻息を荒くする大工と足軽。

「斎藤勢は、来ても明日の昼前だぎゃ！　まさか、一日で完成できるとは思ってにゃあ！　ここでおみゃあらの職人魂を見せてやるだぎゃあ！」

うおーっ！

そして、空は明け始めた。

「行くだぎゃあ！　おみゃあら、付いて参れっ！」

チヨタンチヨタンチヨタン。おれの鼻息もオーバーヒート寸前。水の冷たさもまったく感じず。

「と、殿様はいつもこのように渡られていたんですか」

太郎が何か言っているが、耳に届かん。どれだけ早く動けるかが勝負の分かれ目。対岸に着いたら、こいつらを馬車馬のごとくこき使わなければ、おれの未来はない。

美濃の地に足を踏み入れると、沓掛応援軍は運搬組と穴掘り組の二手に別れ、キャプテンのおれはとりあえず、木曽川と建設予定地の中間辺りに陣取り。

落ちていた枯れ木を振り回し、雑兵どもを酷使酷使酷使。岸辺に行って、運べ運べ運べ。建設予定地に行って掘れ掘れ掘れ。

「殿様も手伝ったらどうなんですか」
とかなんとか言って、自分も手伝っていない太郎。
だったら、お前が手伝ってやれ！
と、いつものおれだったら言っているが、昼間のパパはちょっと違うｂｙ息野清志郎。
「だったら、お前が手伝ってやれ！　今から見本を見せてやるから、よく見てろ！」
何往復もさせられてヘタレ気味のとある雑兵を押しのけ、材木を担ぐおれ。うっ。重い。
だが、ヘタレている暇はない。ヘタレに未来はない。
「お前ら、遅いぞ！　運べ運べ運べ！」
三社祭の担ぎ手級の荒さで材木を運ぶおれ。そんなおれに圧倒されて、あわてて材木を担ぎ出す太郎。
建設予定地に材木をぶん投げると、木下築城隊の大工が素早くやって来て、寸法担当が長さを測り、ねじり鉢巻き男が目にも留まらぬ速さでノコギリ投入。ふんどし一丁男がカンナを掛け終えると、三人でわっしょいわっしょいと基礎が出来上がりつつある建物へ。
金がかかっていると、動きも違う。だが、おれは金じゃない。おれが求めているものは明るい未来、愛しの未来だ。
おれはその足で穴掘り現場へ。さぼりぎみのジジイから鍬を奪い取り、懐かしのファミコンソフト、ロードランナーのヘルメット小僧気分。
あわてて太郎は桶を担いで残土運び。
「殿様がここまでやられるなんて」
「殿、あんまり無茶をしなさんな」
おれを見くびっていた雑兵たちも、見る目をさすがに変えている。
「何を言っている、お前ら！　明日の朝までだぞ！　無駄口叩く暇があったら穴を掘れ！　掘れ掘れ掘れ！」
「はいっ」
フヒヒ。大将自らが現場に立てば、士気も上がるものよ。

で、おれは元の中間地点に行き、休憩。草の上にごろり。ふー、いい汗かいたぜ。

「殿様！」

と、泥だらけの太郎。

「もう休憩ですか！」

「まあまあ、お前も休みなさい。どうせ、奴らは夕方過ぎごろには動きも遅くなるんだ。それまでに体力を取っておきなさい」

「でも、皆、必死に頑張ってくれています」

「太郎！」

と、おもむろに起き上がったおれ。

「現場を指揮する者はな、先を見なくてはならん。目の前のことにとらわれていては、目的は達成できない。現場監督が考える第一のことは、目的を達成させるということ、それだけだ」

「はあ」

「藤吉郎殿を見てみろ。騒いでいるだけで何もやっていないじゃないか」

「まあ」

「お前もいずれは武士になる男なんだから、そこのところをよく考えなさい」

「はあ」

てことで、おれはひと眠り。おやすみー。

不思議ちゃんを演じる悪者

「余裕ですね」
うーん。なに。むにゃむにゃ。
「働き手を鼓舞したかと思えば、誰の目にも届かないところで戦線離脱。桶狭間の勲功一番とは思えませんね」
ぶつくさ、うるせえな。
と、思って、目をこすりながら顔を上げると、ハア～、そこには溜め息の出るようなイケメン。
戦国の男とは思えないほどの色白で、瞼は涼しげな切れ長。細い顎。細長い鼻。薄い唇。すらりとした背。華奢な肩。大勢のオカマにぼろぼろになるまで襲われそうなタイプの優男。
おれは体を起こし、しばらくの間、ぼやーっと寝ぼけていたけど、なかなか開かない目で、優男を睨みつけてやった。
「お前こそサボってんな。さっさと仕事をしろ」
「拙者は貴公たちと関係ありません」
と、優男は微笑。なんだ、こいつ。てか、どっかで見たことあるような。
「ただ、興味があるんです。貴公に」
「おホモだちならノーサンキューですが」
「？」
「お尻のお突き合いはしないってことです」
「ははっ。そんなんじゃありません。むしろ、拙者こそ勘弁願いたい」
「じゃあ、何の用ですか？」
優男は何も答えず、そこに生えていたタンポポをちぎり取り、その種子ふうっと飛ばす。種子は大して飛ばずに、目の前にふわふわと落ちていく。
おれに顔を向けてくる優男。

「飛びませんでした」
にこっと笑う。ふん。のんびりしてやがんな。でも、こういう奴がモテるんだろうな。ま、おれがこいつの真似しても気持ち悪いの一言で終了だけど。
「築田牛太郎殿」
優男はにこにこと笑ったまま。
「貴公は後世から来たそうですね」
おれはそのとき初めて目の前の奴を危険に思った。こいつは、多分、漫画とかによく出てくる、不思議ちゃんを演じる悪者だ。主人公の生涯の敵となる、とんでもない野郎だ。
おれは辺りを見回した。むむ。太郎はおろか、配下の雑兵たちの姿もまったくない。ピンチ。
「しかし、それを知っているのは、ごく一部の者だけ。信長と一部の重臣のみ」
「さてと。仕事に戻ろうかな」
と、立ちあがろうとしたおれの腕を、優男ががっしりと掴んでくる。優男はいつのまにか笑みを消していて、その切れ長の瞼でおれをきつく見つめてくる。
「貴公は何を企んでいる。貴公はなぜ、そのような人間でありながら、こんな泥くさい真似をしておる」
「そ、そりゃ、まあ、そ、そんだけ自分に能が、能がないからッス」
「何者っ！」
と、太郎の声。ああ、太郎ちゃん、ありがとう。太郎は脇差を抜いていて、優男に今にも襲いかからんばかりの構え。でも、勝てるかな・・・。
「殿様からその手を離せっ！」
「ああ、小さな鬼が来てしまったか」
え？　なに？
「築田殿。稲葉山は堅固な城です。ただ、勝負は搦手門ですから。拙者の本当の用はそれだけ。また、お会いしましょう」

おれから手を離した優男。ゆっくりと腰を上げる。
「くせ者っ！　動くなっ！」
「くわばらくわばら」
と、言いつつ、太郎を無視して、すたすたと消えていく優男。おい、太郎。なにやってんだよ。なに固まってんだよ。まったく。使えない小僧。おれだけには強いんだから。
しかし、あいつを生かしておくのは今後を考えると非常にまずい。おそらくおれの生涯の敵となり、おれに生涯災難を起こさせる奴になるだろうからな。

で、陽が沈み、やっぱり、雑兵どもの動きは遅くなった。くたびれて休んでいる奴が続出。

「十両だぎゃあっ！　十両だきゃらにゃあっ！」

サルの煽りになんとか手足を動かすものの、連中のＨＰは限界に近い。

運搬は終わっている。柱も立っている。築城隊の残された仕事は床と壁。大工たちが釘を打つ音が夜の闇に響き、左官工が粘土だか泥みたいなものを延々と塗っていく。沓掛応援軍はというと、城を取り囲む掘の完成のみ。

昼間休憩を取ったおれは、自ら進んで穴を掘った。掘って掘って掘りまくった。生まれて初めてこんなにも働いた。それもこれもすべてが明るい未来のため。

おれに触発されて、雑兵どもの動きもマシになる。

太郎も頑張る。

やがて、おれのぶよぶよの腕は悲鳴を上げ始める。握力がなくなっていく。打ちおろしても打ちおろしても、鍬が土に跳ね返されるようになっていく。

腰の痛さは背骨が外れてしまうような感覚。足の痛さは地球に引っ張られているような感覚。

ううっ。腕が振れん。情けない。これがおれが今までダラダラと生きてきた証拠か。

ウウッ。情けなくて涙が。

「殿様、ちょっと休みましょう」

太郎が心配そうに声をかけてきたが、おれは無視。おれは十分休んだんだし、休んでいる暇なんてあるか。明日の朝までに作らなくちゃいけないんだ。おれが休んだら、こいつらも休む。だから、おれは休んじゃならないんだ。

でも、とうとう、おれの手は鍬を握れなくなった。力がまったく入らなくなった。足もがくっと折れてしまった。ウウッ。情けない。情けない。もう、動けない。

「殿様、休憩も必要です」

と、おれの肩に手を回してくる太郎。

ウウッ。くそっ。くそっ。

おれは土を手で引っ掻いた。ワンワン。

「殿様・・・。そこまでして、千代さんを」

「殿、どいてくだせえ！」

おれは雑兵に押しのけられ、地面の上に転ぶ。雑兵は物凄い迫力で土を掘っていく。それは今日一番の動き。

見渡せば、かがり火の中、皆が、額に汗を噴き出して、懸命に働いている。

おれも、おれもやらなくちゃ。ワンワン。

振り返ればおれは、戦国時代に来るまではダラダラと日々を過ごしてきていた。コンビニのバイトも「深夜バイトに週三日は無理ッス＾＾」とか言って、ただの体裁だけでアルバイトをしている状態だった。

おれは何をやっても駄目。だから何もやらない。それがおれの信条だった。

だが、今のおれは違う。おれは見たい。自分で築き上げた城を。

未来のハロワ職員曽根よ。見ているか。おれはこんなにも頑張っているんだ。お前はおれを一目見たとき、すでに目の前の男の人生を諦めていたが、おれは今、必死に戦っている。

どうせ、お前なんかがタイムスリップしたら、木曽川を渡る時点で溺れていただろう。お前は未来という時代や国という囲いに守られた、ただのババアだ。

おれは違う。おれは今、プロジェクトXみたいな感じなんだ。どうせ、お前はプロジェクトXを見て、感動していたクチだろ。そのプロジェクトXにおれが出ているんだからな。よく、見とけ。お前

が諦めた男はプロジェクトXなんだからな。中島みゆきの地上の星が良く似合う男なんだからな。

そして、延々と穴を掘り続けた。ま、おれは犬をやっていただけだから、役に立たなかったかもしれんが、とりあえず、雑兵どもを鼓舞し続けた。

で、夜明け前、新しい一日に向けて空が白むころ、サルの声が轟いた。

「完成だぎゃあっ！」

バカなサル。一人屋根の上に昇っていて、万歳している。

「斎藤の者ども！　見たきゃあっ！　これが織田信長様の墨俣城だぎゃあっ！」

疲れ果てている築城隊&応援軍はサルの姿に失笑。でも、それはなんだかほのぼのとした失笑。泥まみれの顔を朝焼けの空に浮かび上がらせ、やがて来る次のいくさまでの、ほんのわずかな至福の時間――。

てかさ、なんで、おれたちも墨俣に待機してなくちゃなんないの。
「おやかた様の命令だぎゃ」
本当かよ、クソザル。チクショウ。沓掛に戻らないとチヨタンに会えないじゃんか。
「常に先手を打たなきゃいかんだぎゃ。次は斎藤方の武将をこちらに寝返らせるだぎゃ」
それはさ、毎度失敗してきたことじゃん。もうさ、いいから攻めろよ。いい加減、信長攻めろよ。
「家臣の心は一日ごとに当主の龍興から離れていっているだぎゃ。それに、お市様が浅井の元に嫁ぐ話が出てきているだぎゃ。それが適えば、形勢は一気におりゃあらのものだぎゃ」
ああ、市姫もとうとう結婚するのね。あの、可愛い市姫が、ついに翻弄される運命の流れに突入していくのね。ああ、なんか、切ない。
「牛殿、おみゃあは竹中半兵衛を当たりゃあ。いや、おみゃあに内応工作など期待してにゃあ。ただ、竹中の行動を追ってくれていればいいんだぎゃ。竹中は裏で何かと動いている様子。危ない奴だきゃらにゃ」
と、一方的に言うサル。あのさ、一言言わせてもらっていいかな。
「藤吉郎殿、あっしはあなたの家来じゃないのに、なんでそんなに命令されなくちゃいけないんスか」
と、おれ、怒り気味。しかし、あからさまに首を傾げるサル。
「にゃあ？　何を言っているんだにゃあ？　石川小四郎の件、おみゃあ忘れたのきゃあ？」
うっ。おれは即座に太郎の横顔をチェック。太郎はシラーッとした目でおれを見つめてくる。やめてっ。そんな目でおれを見つめないでっ。

「にゃら、おりゃあは清州に戻るだぎゃ。寧々に顔を見せにゃあ、寂しがるきゃらにゃあ。牛殿も早く千代殿と結ばれたらいいんだぎゃにゃあ。にゃっはっは」

そう言って急ごしらえの板間を出ていったサル。横では相変わらず太郎のシラーッとした目。

「じゃ、とりあえず、竹中君のところに行こうかな」

太郎、シラーッ。

「おい」

「なんとなく読めましたよ。明智庄からわざわざ沓掛に来るなんて、なんかおかしいと思っていたら、木下殿と何か取引していたんですね」

「無駄口叩くなっ。行くぞっ」

「何処へ？」

あ。まあ、何処に行くんだろ。ニート君って何処にいるんだろ。川並衆なら知っているだろ。

ということで、サルの留守を任された前野将右衛門に訊ねたところ、どうやら竹中半兵衛は岩手村というところで隠居生活をしているらしい。あいつの若さで隠居って、ただのニートだろw

墨俣築城のさいの疲れが癒えてないから、また、遠くまで歩くの嫌だなと思ったが、岩手村は墨俣から近いらしい。ラッキーということで、おれは、翌日、岩手村へ。

敵地をほっつき歩くのは危険が伴うので、子供の太郎はやっぱり残して行くことに。

岩手村に到着し、ニート君の居所を村人に訊ねると、失職前は菩提山城の城主だったらしいが、今は、山の中に庵を建てて、そこに引きこもっているらしい。

引きこもっているって言っても、この前、明智庄に現れたけどな。ニート癖に加えて放浪癖もあるんだろ。気難しい奴なんだろうな。

で、村人に教えてもらった菩提山へ。

山道をちょっと上がると、林の中に小さな建物。まるで仙人の家。

引きこもるには打ってつけの静かな環境。
とりあえず、玄関にお邪魔。
「ごめんくだせえ」
しーん。返答なし。誰もいないみたい。
出かけているのかもしれないので、一時、待機。と思って、玄関から出たところ、調度、山道を上がってくる奴。あ、ニート君が買い出しから帰って来たのかな。ところがどっこい、姿を現したのは、あの悪者イケメン。
「はて？　簗田牛太郎殿ではないですか」
「あのう。あなたが竹中半兵衛さんですか？」
「左様。何かご用ですか？」
むむう。悪者イケメンがニート君だったなんて。どうりで、どこかで会ったことあると思ったぜ。
しかし、天才軍師のニート君がおれの生涯の敵となると、かなりヤヴァい。

ニート君の家に上がらせてもらい、ニート君自ら湯呑みを出してきてくれる。中身はただのぬるいお湯だけど。まあ、喉が渇いていたからありがてえ。

ニート君の部屋は汚い本が多数積まれていて、手紙だか何かの巻物で散らかっている。典型的な引きこもりの部屋。てか、たった一人でこの家に住んでいる様子。変人ですな。

「築田殿がわざわざ来るとは、用件は西美濃三人衆のことですね」

「いや、まあ」

別にそういうのはどうでもいいんだけどな。おれの用件はニート君の動きを探れっていうことだけだし。

「三人衆がそちらに寝返るまでには、さほど時間を要さないでしょう」

ニート君は腰を上げると、ぶん投げられている巻物を手に取り、おれに見せてきた。って、おれ、こんなミミズ文字、読めないんですけど。

「これは安藤平左衛門殿からの文です。ここでは龍興様の近頃の行いについて愛想を尽かしておられる。むしろ、離反をほのめかしております」

「へえ」

「近いうちに木下殿が再度赴けば、安藤殿は寝返るかもしれませんな」

うーん。おれは腕組み。

「いや、なんか腑に落ちないんスけど。あのとき、明智庄で会ったときに言ってたじゃないスか。三人衆のことで石川さんに話があるって」

「ええ」

腰を下ろし、湯呑みを口に運ぶニート君。ずずっと啜る。

「あなたが裏から手を回したんじゃないんスか。だったら、なんか、罠っぽい」
「ふふ。貴公は正直に物を言う御仁なんですね」
まあね。ニート君と駆け引きしたところで、おれじゃかなわないし。目の前にいる奴は織田軍をあれだけ苦しめた策士だし。
「残念ながら裏などありません。拙者は単に石川殿の仕事を手伝っただけ。拙者はもはや斎藤の人間ではない。この美濃が良き方向に向かえばそれでいいのです」
じゃあ、お前も織田方につけよ。って、心では思ったが、口には出さず。ニート君は信長直々の伝言で織田家に誘われているらしいけど、無視しているから。
「それよりも、拙者こそ貴公に訊ねたいことが山ほどありますが」
うっ。また、あのことッスか。
「後世から来た貴公は、この戦国の世がどのように進んでいくか、御存知なのですね」
しーん。お湯を飲むおれ。無視。
「信長の下におられるということは、信長が覇権を握る。そうなのでしょう。実際、美濃を手中にすれば、甲斐の武田や越後の上杉を差し置いて天下にもっとも近くなる」
「それを知ってあなたはどうするのかって話ですよ。半兵衛さん」
うざったいあまりに口調を強くすると、ニート君は、ふふ、と笑った。
「そうですね。拙者には関係ないことだ。ただ、人の心情とでも申しておきましょうか。やはり、この世の中がどうなるのか、知りたいと思うのです」
と、なんだか、憂いの帯びた表情のニート君。そこまで悪者じゃなさそうな切ない表情。うーん。やっぱり、あれだけ天才的な策士なのに、表舞台から引っ込んでいるから、くすぶっているのかね。
「だから、貴公に訊ねてみたい。信長の時代になったら、一体、この世の中はどうなるのか」

「信長の時代にはなりませんよ」
「では、なぜ、貴公は」
「成り行きです。ただの成り行き。信長の下にいるのは、たまたまのことです」
おれはなんだか、ニート君と話しているうちに、ニート君が無欲な人間であることをわかってきた。ニート君はあれだけの才能を持っていながら、稲葉山城をタツオキに返しちゃったり、信長が優勢だとわかっているにも関わらず、信長になびくこともしない。
おれはニート君を警戒しすぎたけれど、こいつは結局、まだ青年。ただ、頭が良すぎるってだけだ。
「簗田殿。となると、信長の時代が来ないというなら、やはり戦乱の世はまだまだ続くのでしょうか？」
「いや。天下を統一する人間が近いうちに現れますよ」
「だ、誰ですか？　武田信玄ですか？」
「木下藤吉郎秀吉です」
「えっ！？　まさか」
ニート君は一瞬面食らったが、すぐに表情を整えて、笑い出した。
「そんな馬鹿な。冗談もほどほどにしてください。どうしたら木下殿が天下を取れるのです。なにしろ、木下殿は一介の足軽大将。それに、あの男が信長に刃を向けるなど、到底考えられませんよ」
「あっしがいつも一緒にいるのは藤吉郎殿ですよ」
おれが目をキラーンと光らせると、半兵衛は笑うのをやめて、唖然とした。

今さら気づく重大な真実

ニート君の家に泊まることになったおれ。

ニート君は意外といい奴で、メシも作ってくれた。まずかったけど。基本的にこの時代のメシはすべてまずいから仕方ないけどさ。あーあ、早くチヨタンの料理にありつきたい。

なんて、恋しい沓掛を思いながら、おれは寝そべっていた。沓掛も恋しいけど、なんだか、ニート君の家ではリラックスできる。きっと、ニート臭が全開だからだろう。元の時代のおれの家にいる感覚。マリオもいないし、サンザが呼びに来ることもない。サルに振り回されることもなく、だらだらと寝そべっていられる。

ただ、ニート君は、ニートのくせに真面目なようで、おれが寝そべっていることには眼中にも入れず、行燈の明かりを頼りにして汚い本をずっと読んでいた。

うつらうつらとおれがしていると、ふいにニート君が言った。

「簗田殿、拙者はこの戦乱の世を憂いておりました」

ふーん。あっそ。社会を憂うのは若者にはありがちなことだ。

「だから、拙者はこの戦乱の世を終わらせたいと思って、腕っ節のない拙者ゆえん、あらゆる兵法書、史書を読みあさりました。しかし、思い知らされたのです。結局、拙者のような者では何もできないと。当主一人の心も変えることができなかったのですから」

で、挫折。ニート中ってわけね。

「だから、拙者は信じられませぬ。これは拙者の甚だしいおごりかもしれませんが、拙者ができなかったことを、あの、木下藤吉郎が達するなど、信じられませぬ・・・」

「運だよ」

と、言って、おれは起き上がる。

「秀吉には運があるから。まあ、それだけじゃないけどさ」

「拙者には運がないのですな」

と、寂しそうに笑う半兵衛。
「あるかないかは、そのうちわかるさ」
で、再び寝転がるおれ。眠い。
「拙者が今後どうなるかも、簗田殿は知っておられるんですね」
「知りたいなら言うけど」
「いや、お断りします。正直、拙者が今後どうなるかなど恐ろしい。そのようなことがわかってしまったら、拙者はその中の範囲でしか己の力を出せなくなってしまう」
ふーん。やっぱり、単細胞のマタザなんかとは違うな。そういえば、信長も、詳しいところはあえて訊いてこないな。次はどうするのか、将来はどんな世の中なのか、それだけだもんな。
「簗田殿は恐ろしいお方ですよ」
半兵衛、笑っている。
「おれはキミのほうが恐ろしいけど。何度、いくさで殺されかけたことか」
「では、簗田殿も運がいいほうなんでしょうね」
確かに。いいほうかもしれない。おれなんか、とっくのとうの昔に殺されたっていいぐらい。でも、死なない。運がいい。
そもそも、最初からそうだった。タイムスリップしたあのとき、おれを見つけたのが信長じゃなかったら、おれは殺されていたか、よくて飢え死んでいた。変人の信長に見つけられたおかげで、おれはこうして戦国時代でもやっていけているんだ。
・・・・。
てか、待てよ。今川との戦いで桶狭間の奇襲を勧めたのはおれだ。そうして、桶狭間の戦いが起こった。そのあと、次に攻めるのはどこかと訊かれたとき、美濃を進言した。信長は渋っていたけど、松平と同盟し、浅井に市姫を嫁がせればいいっておれは言った。
これらの一連の動きって、要は、五百年後の社会の教科書に載る出来事だよな。信長の野望っていうゲームになることだよな。
ちょっと待て。訳がわからなくなってきたぞ。

おれはなんで信長の家来なんだ？　おれはなんで秀吉と仲がいいんだ？

知った者にしかわからない憂鬱

翌日、ニート君の案内で、菩提山の頂上へ。

「ここも冬になると雪に覆われます。ただ、秋はなかなか良いですよ。紅葉がとても美しい。秋にはもう一度来てくださいよ。心が癒されますから」

ニート君とおれはすっかり友達。戦場で恐れられている竹中半兵衛重治の面影がまったくない、優しい奴。斬った張ったのこの時代で、これだけ穏やかな奴も珍しい。いや、元の時代でも、ここまでおれに優しい奴はいなかったかな。

菩提山の眼下には濃尾平野が果てなく広がっている。ここで六年もの間、殺し合っているなんて嘘みたいにのんびりとした風景。

「天下の趨勢にとらわれがちなときもありましたが、こうしてこの穏やかな景色を眺めていると、誰が天下に近いのか、誰がこの世を支配しているのか、どうでも良くなってきます。ただただ、この平穏な景色があればいい。平穏な世があってくれればいい。そういう気持ちになっていきます」

そうだなあ。おれだって、正直、どうだっていいんだ。信長がどうなろうと、秀吉がどうなろうと。ただ、野垂れ死にたくないだけなんだ。

「ただ、武将の子としてこの世に生まれてしまった以上、自分の宿命は果たさなければならない。そんな気にもなります。力の世を終わらせるには力しかありません。歴史はそうやって繰り返されてきたのですから」

そう言うと、ニート君はおれに顔を向けてきて、にこって笑う。

「築田殿ならわかるでしょう。拙者のこの気持ちが」

「宿命ですか？」

「ええ。拙者の宿命。築田殿の宿命」

こいつ。もしかして、わかっているのか。なんとはなしにおれが

やっていること、それが歴史を動かしているってことを。
いい奴なんだが、正直、その頭の良すぎるところが怖いんだよ、お前は。
「一つ、簗田殿に訊ねたいことがあります」
「なんでしょ」
「木下藤吉郎が天下を取ると言いましたが、なぜ、彼が主人である信長を差し置いて、天下を統一できるのでしょうか」
「それは、まあ」
とても恐ろしいことだ。なぜ、サルが天下人になれるか。なぜ、信長が天下人になれないのか。今、それを口にするのは、恐ろしすぎる。
それをもし、この頭の良いニート君に言ってしまったら、歴史が変わりそうな気もする。だけど、ふと思う。ニート君が天下を取ればいいんじゃないか。ニート君が天下を取れば、サルが作る日本よりも、もっといい国になるんじゃないか。
でも、ニート君の寿命は短いんだ。ニート君は本能寺の変のときまで生きられない。
運がない。本当に運がない奴だよ、お前は。
「それは、まあ、秀吉に会えばわかります。秀吉に付き従っていけばわかります。きっと、キミなら」
「言いたくはないということですね」
「はい」
「木下藤吉郎はそれを知っているんですか。自分が天下の覇者になれると」
「知らない。まったく」
「信長も？」
「もちろん。秀吉が天下人になるだなんて、誰も知らないですよ」
「左様ですか」
ニート君はそう呟くと、しばらくの間、ぼんやりと景色を眺めていた。その繊細な横顔からは、歴史を変えてやろうとかいう野心は

感じられない。
ただ、目に見えない宿命というものを受け入れなければならない。宿命の中で生きていかなければならない。宿命は変えようもないからこそ宿命。それは知った者にしかわからない憂鬱。ニート君の横顔はそんな繊細さだった。
「興味本位で聞かなければ良かった」
と、ニート君は微笑。そして、涼しげな眼差しをおれに向けてきて言った。
「このことは拙者も簗田殿も黙っていたほうが良さそうですね。言ってしまったら、そこですべてが終わる。この世のすべてが終わりそうな気がします」

おしっこ漏れちゃうよー（、；ω；、）

ニート君は別に大した動きをしていない。ただ、石川小四郎の手助けをしてやっているらしい。その旨をサルに伝えると、

「あの竹中半兵衛みゃでもが龍興を見限っているんにゃら、西美濃三人衆もいずれはおやかた様になびくぎゃあにゃあ」

ということで、サルの調略はいっそう熱を帯び始め、信長にも西美濃三人衆が近いうちに織田方につくと言っちゃったらしい。

で、久しぶりに清州の信長に呼び出されたおれ。

「お前の言う通り、事はすべて運んだ。あとは三人衆を落とし、稲葉山を攻略するだけだな」

久しぶりに会った信長は、雰囲気がちょっと変わっていた。すごい、ピリピリした感じ。酒も飲んでいない。まあ、いくさが近いからかもしれないけど。

「しかし、牛殿」

と、これもまた久しぶりのサンザ。

「藤吉郎は自信ありげの様子だったが、果たして、三人衆は寝返るかのう。確かに奴らは龍興に愛想を尽かしているかもしれんが、頑固で評判の連中だぞ。特に稲葉彦四郎などはな」

西美濃三人衆は、稲葉良通、安藤守就、氏家ナントカの三人のことで、皆、斎藤道三のときからの重臣たち。西美濃三人衆と言われるだけあって、こいつらが信長に寝返ったら、墨俣辺りから稲葉山城までの行路がかなり安全。なおかつ、斎藤家の古くからの重臣だから、影響力も高い。

「あっしの情報だと、安藤守就などは、離反もほのめかしているらしいですけど」

「お前の情報だと？」

と、信長、眉をしかめる。あのう。桶狭間とか進言したのっておれじゃないッスか。

「それはどこからの情報だ。お前の情報こそサルよりも当てにならねえ」
「いや、確かです。だ、だって、ニート君、いや、竹中半兵衛が見せてくれましたもん。その手紙」
「なんだと!?」
「お、お主、竹中半兵衛と誼を通じておるのか?」
「あ、いや、その」
言わなきゃ良かった。
「なら、牛、半兵衛を我が家中に引き入れろ。あいつこそ織田に来れば、稲葉山など屁でもねえじゃねえか」
ほら、やっぱり。そう言うと思った。
「いや、でも、竹中半兵衛はニート同然、いや、世捨て人同然でして、今はどこの家中にも入らない仙人状態なんですよ」
チッ、と、信長は舌打ち。
「まったく。しょうがねえ奴だ。それに、だいたい、お前な、沓掛に明智庄の女子供を入れているらしいじゃねえか。五郎左が憤っておったぞ。どういう了見でそんなことしてやがるんだ」
うわあ。マリオ、ふざけやがって。なに、チクッてやがんだよ。
「そりゃ、まあ、調略の流れで・・・」
「どういう了見だと、俺は聞いてんだ! 答えろ!」
ひいいっつ。なんなんだよ。めちゃくちゃ機嫌が悪いじゃねえか。
「あ、あの、明智庄の者どもは、の、信長様が稲葉山にせせ攻めたときには、きょ、挙兵する、するんで、その、その、女子供は危ないからってことで、その、い、今のうちに、あっしがかくまうことに、なりなりまして」
「それがどうして沓掛だ? あーっ? 清州でいいじゃねえか? あーっ?」
「うっ、いや、その」
「答えんか! 牛殿!」
ウウッ(´;ω;`) 信長とサンザにここまで迫られたら、お

しっこ漏らしちゃうよー（´；ω；`）　信長の部屋なんかで漏らしちゃったら絶対に斬られるよー（´；ω；`）

も、もう、謝るしかない。ウウッ。

「も、申し訳ありませんっ！　その中に、か、可愛いおにゃの子がいたんで、つい。ううっ。つい、あっしの居城に。ううっ」

シラーッ。

サンザにシラーッと横目を流す信長。サンザも呆れ顔。

「どうせ、そんなことだろうと思ったわ、この助平牛が。お前のせいで五郎左がどれだけ苦労しているか。与える兵糧もままならぬと嘆いておったわ。このうつけめ」

「も、申し訳ありませぬ！」

「そんなに嫁が欲しければ、俺に申してくればいいものを」

「え？　本当ですか＾＾」

「表をあげて良いとなど言ってねえぞ！」

「ひいいっつ！」

「まあ、おやかた様、こうなってしまった以上は仕方なきこと。牛殿は墨俣城の築城に関わってもおりましたゆえ、勘弁して差し上げたらどうでしょう」

ウウッ。ありがとうサンザ。お前だけが頼りだよ。お前がいれば信長に斬られなくて済むよ。ありがとうサンザ。

「許さん」

えっ（´；ω；`）

「お前は美濃の切り取りが終わるまで尾張に帰ってくるな。明智庄の連中を戻せるよう、さっさと美濃を攻略してこい。よいか！　美濃をさっさと攻略してこい！」

そんなあああ。なんで、おれが。。。あんたがさっさと攻めればいい話じゃんかよお。

「早く行けっ！　この助平牛め！」

うわーーーん！　チヨターーーン！

お願い、半兵衛！

追い立てられる牛のようにして（もう何度目のことだか）、尾張を追い出されたおれ。

美濃を攻略って言ったって、どうすればいいのさ。三人衆を寝返らせればいいことなんだろうけど、おれなんかが出来るわけが・・・。

ん？　おれには心強い友がいるじゃないか。フヒヒ。三人衆を寝返らせるのは簡単だよ。ニート君にかかれば簡単だよ！

清州を追い出されたときにはもう夜だったけど、おれは墨俣には寄らずに、真っすぐ菩提山に向かった。斎藤勢に見つからないかとビクビクしていたけど、獰猛な野犬に追いかけられるぐらいで済んだ。

菩提山に到着したときは、もう朝。おれはくたくた。でも、あんまりうかうかしていると、信長の八つ当たりに合いそうなので、朝っぱらなんてお構いなく、ニート君のいる仙人の館へ。

ニート君は調度朝の鍛錬中だったらしく、庭先で刀を振り回していた。

「あれ、簗田殿ではないですか。こんな朝早くにどうされたのですか」

ぼろ雑巾状態のおれは、とりあえず水を求めた。優しいニート君はすぐに持ってきてくれて、がぶ飲み。

「何か、大変なことでも起こった様子ですね」

心配そうな顔のニート君に、おれは事のあらましをかくかくしかじか伝えた。明智庄のことで信長に怒られたこと。美濃を攻略しないと尾張に戻れないこと。美濃を攻略するには三人衆の裏切りが必要なこと。そのためにはニート君の力が必要なこと。

おれの話を聞いて、ニート君は、あははと笑う。

「そんなことですか。何事かと思いましたよ。てっきり、拙者は、

簗田殿が織田を出奔されたのかと思ってしまいましたよ」
　笑いごとじゃねえ、チクショウ。
「まあ、お上がりください」
　ということで、ニート君の部屋へ。一週間ぶりに来たけど、相変わらずニート臭全開。
「昨日、お目当ての稲葉殿から文が届きましたよ」
　と、ニート君は巻物を見せてくれたが、読めないんですよ、こんなミミズ文字は。
「なんて、書いてあるんでしょう？」
「木下藤吉郎という者がしきりに寝返りを促してくるが、我は道三公の時代から斎藤家に仕えていた身。果たして、天下の者どもは我をどう見るであろうか、と」
「何て答えたの？」
「いえ、まだ、返答は出しておりませぬ。ただ、頑固で評判の稲葉殿が、拙者などにこのような文を送ってくるとは、なかなか迷っておられる様子です」
「じゃ、じゃあ、半兵衛さん、頼みますよ。稲葉殿を織田方に付かせてください」
　半泣き状態でお願いしたおれだけど、ニート君は唇を絞り、渋い表情。
「実は拙者も稲葉殿と同じような気持ちです。あくまで、拙者は稲葉殿と今の斎藤家を嘆いているまでなのです。それが、決定的に寝返りをさせるとなると、拙者も、斎藤家に仕えていた身として、天下にどのように判断されるか、気になるのです」
　ぬーっ。ちまちましたことで躊躇しやがって。男だろ？　男ならもっと勇敢に生きろよ。
「じゃあ、いい！　おれが稲葉に直接会いに行くわっ！」
「いや、簗田殿。それは危険すぎます。稲葉殿の元に行くなど、斎藤方の中心に乗り込むのと一緒ですぞ」
「そんなこと言ったって、にっちもさっちも行かないじゃんよ！」

「まあ、落ち着いてください。命は一つだけですぞ。たとえ命懸けとは言っても、たった一つの命なら落とさないに越したことはありません」

ぬう。言っている意味がよくわからないが、たしかに冷静に考えてみればおれなんかが単身乗り込んだところで、雑兵に斬られて終わりなのはわかりきっている。

ただ、さっさとしないと、信長に八つ当たりされるし、チヨタンにも会えないんだよ。そこのところ、わかってくれよ、半兵衛。

「仕方ありません。この家に来てくれるよう、稲葉殿に文で頼んでみましょう」

そうだよ。そうしてくれよ。半兵衛から頼んでみてくれよ。そうしたら絶対にうまくいくって。

運命の脇差

半兵衛の家に居候して、早三ヶ月。菩提山はすっかり秋の気配。稲葉彦四郎良通、いまだ来ず。

半兵衛同様、仙人状態のおれ。いや、むしろ、やることがなさすぎて、廃人同然。居候を始めて以来、墨俣にも戻っていない。

もういいかな。アハハ。沓掛、清州、尾張がどうなっているのかもわからん。皆、おれのこと忘れちゃっているだろうな。アハハ。むしろ殺されたとでも思っているのかしら。

「戦略は気の長さ、戦術は気の短さが重要です」

と、半兵衛は言うけど、意味がわからない。

「桶狭間以来六年。ここで気を短くしてしまうと、すべてが水の泡となってしまいますよ」

なんか、ごまかされている感が否めないが、まあ、半兵衛が言うなら。

そんなある日、おれが庭先でぼけーっとしていると、真っ赤に染まった木々の葉が一面に降り注ぐ山道を、従者をつけた誰かが登ってきた。うおーっ。ようやく来たあ。

稲葉彦四郎は頑固で評判と聞いているが、そんな感じは全然ない。綺麗な花柄の羽織を纏っていて、背筋はしゃんと伸びていて、目尻が切れ上がっている割りには、優しそうな瞳をしている。

「お訊ねしますが、ここが竹中半兵衛の今の住まいでしょうか」

ゆっくりとした口調で、なかなかの紳士。こいつが頑固者だとは思えないが、土下座で頼みこめば寝返ってくれそう。

「ええ、そうですが」

「すると、貴方が簗田牛太郎殿ですか？」

「は、はい。そうですけど」

「これは、これは」

と、おれに深々と頭を下げてきた。あれえ＾＾　なんか、すぐに

寝返ってくれそうじゃんｗｗｗ　きっと半兵衛が頑張ってくれたんだな＾＾

「申し遅れました。拙者、明智十兵衛光秀と申します」

　は？　明智？　稲葉じゃないの？　なんだよ、クソッ。どおりで紳士野郎すぎると思ったぜ、クソッ。期待して損したぜ。

　って、え？　明智？　光秀？

「石川小四郎から聞いております。明智庄の女子供を貴方の居城にかくまっていただけていると。拙者、今でこそ浪人同然の分際ですが、明智庄の者ども、元は拙者の配下の人間。主として御礼申し上げたく、菩提山の半兵衛のところにおられると石川から聞いていたので、不躾ながら、お訊ねさせていただきました」

　これが、あの、明智光秀かよ。おれ、ちょっと震えた。だって、こいつこそ歴史を変える張本人だろ。

　でも、この紳士野郎がクーデターを起こすだなんて、信じられん。

「じゅ、十兵衛様っ」

　と、半兵衛。あわてて駆け寄って来ると、明智光秀の手を取り、とても喜んでいる。

「十兵衛様、お久しぶりでございます」

「久しぶりですな。もう、かれこれ、七、八年でしょうか。風の便りに聞いていますよ。お主もずいぶんと立派に活躍されているそうじゃないですか」

「いえ、そんな。拙者は今や隠棲している身。活躍など」

「英気を養っているのでしょう？」

「いや、それは拙者にもわかりませぬ。英気を養っているのか、ただ隠遁しているのか。それより、十兵衛様は今どこで何を？」

「拙者は今、越前の朝倉様の客将として禄を食んでおります。幕府再興のために動き回ってはいるのですが、なかなか、難儀なものでしてな」

「幕府再興ですか・・・」

「ふふ。お主からしてみれば馬鹿げたことをしておると思うでしょ

うが、拙者は土岐源氏の流れを汲む者ゆえん、道三様亡き今、己の生きる道を考えた末のことなのです」
「左様ですか。それで、今日はどうしてこのようなところに？」
「簗田牛太郎殿に御礼を申し上げたく、立ち寄りました。明智庄の女子供をかくまってくれていると聞きましてな」
「簗田殿は素晴らしきお方です」
「左様。私利私欲ばかりのこの乱世で、女子供に気を掛けるとは仏のごとき心の持ち主ですな」
あのう。おれも私利私欲に走った結果なんスけどね。なんか、すごい買い被られているみたいだけど。でも、まあ、半兵衛とか明智光秀みたいな奴らに褒められるのって、悪くないわｗｗｗ
「簗田殿」
と、言って、帯から脇差を鞘ごと抜く光秀。
「浪人同然の身ゆえ、大したこともできませんが、明智庄の主として、この刀、貰ってください」
「え、でも、これって」
光秀がおれに差し出してきた脇差は、すげえピカピカで、鞘と鍔に、光秀の着物と同じ花柄の紋が入っている、極上の代物。これって、絶対に家宝級だよね。
「一族を代表してのお礼です。どうか、受け取ってください」
「簗田殿、十兵衛様は律儀なお方。受け取ってあげてください」
「じゃ、じゃあ」
脇差げとーッ！　ラッキーへへ　チョーカッケーじゃん、これ！
うへへ。これでおれもいっぱしのサムライってか。ありがとう、光秀。勘違いしてくれてありがとう！

壊れかけのキモオタ

極上の脇差を装備したおれは、戦場に出たくて仕方なくなった。
だが、おれは弱い。戦場にはマタザやマリオみたいな猛者もいるし、脛取り足立みたいな変態もいる。
だから、おれは腕を磨かなければならん。この退屈な時間を利用し、この精神と時の部屋でスーパーキモオタにならなければならん。
ということで、朝と夕に半兵衛に稽古をつけてもらうことに。半兵衛は優しいので、赤ちゃんに物事を教えるぐらい丁寧に、おれに稽古をつけてくれた。もちろん、脇差は稽古なんかに使わず、半兵衛の部屋の床間に飾ってある。
半兵衛が読書中のときは、おれは半兵衛に内緒でこっそりと無双奥義を会得する鍛錬。フヒヒ。無双奥義さえ会得すれば、マタザもマリオも目じゃねえ。戦国無双だと、あいつらただのモブキャラだしなｗｗｗ
菩提山はすっかり冬景色。稲葉ボンクラはいまだに来ないが、来ないなら来ないで別にいい。技を磨く時間が十分にあるということだからな。
おれは木々の枝からずり落ちる雪を棒で引っぱたく。ふむ。おれは氷の属性が合うかもな。
なぜなら、おれはクールな男だ。歴史を知っている宿命を抱えながらも、クールに生きている。そんなおれに似合う属性は氷。
雪の積もった大木の幹を蹴る。すると、ざざざあっと大量の雪が落ちてくる。ていやーっ！　チェストーッ！　はかなくも、おれの斬撃に散っていく雪の結晶たち。フッ。ついに修得してしまったか。使うにはあまりにも恐ろしい技。
氷　我　炎　如　斬
ククッ。氷の我、炎の如き斬るっ！
「殿様！」

むう。なにやつ。拙者、歴史を知る男ゆえ、常に狙われているこの命。この技を繰り出すには忍びないが、我、これより斬り捨て御免の修羅道に入る！

「氷　我　炎　如　斬　！」

パシッ。

あれ？　おれの無双奥義が手で受け止められちゃった。しかも、太郎。しかも、片手。

「何を、何をこんなところで遊んでいるんですか！　太郎がどれだけ心配したことか！」

で、すごく怒っている太郎、おれの棒を奪い取り、膝でバキッと折る。ぽいっと投げ捨てると、おれを両手で突き飛ばし、

「ずっと帰ってこないから、もう、死んでしまったのかと思ってましたよっ！　ウウッ」

あ・・・。泣いちゃった・・・。

「何事ですっ！」

と、玄関から飛び出してきた半兵衛。

「いや、そのお、うちの小姓が・・・」

「な、簗田殿の小姓が？」

泣いている太郎に駆け寄ってくる半兵衛。

「ぼ、ぼろぼろではないか。お主、一人でここまで来たのか？」

こくりとうなずく太郎。むう。そういえば、この寒いのに蓑も被っていないし、草履は片方しか履いていないし、着物はぼろぼろだし・・・。いや、着物には血のりがあるんですが・・・。

「よくもまあ敵地の中で無謀なことを。しかし、無事で何よりだ。さあ、上がりなさい。温かい湯漬けでも召し上がりなさい」

優しい半兵衛が作ってくれた湯漬けを泣きながら食べていた太郎。着物には血のりがべったりと付いているけど、太郎が怪我をしている様子はなし。

「お主、それは返り血だな」

と、半兵衛。こくっと頷く太郎。うへえ。太郎もいつのまにか無

双奥義を編み出していたのかよ。
「もしや、斎藤方を斬ったのか」
「いえ。違います。岩手村に来る途中、野盗に襲われました」
「その様子だと、相手は一人じゃないな」
「四人でした」
「四人もの相手を、脇差一つで斬り捨てたのか」
こくっと頷く太郎。
ちらりとおれに目を向けてくる半兵衛。え？　なんスか？　その意味深な目。
「とにかく、今日は泊まっていきなさい。風呂で血を洗い流し、ゆっくりと眠るのです」
「はい。有難うございます」
そうして半兵衛は腰を上げ、おれの肩をぽんと叩いた。
「簗田殿、話があります」
食事中の太郎を置いて、庭に連れていかれたおれ。半兵衛はすごく神妙な顔。
「簗田殿、あの鬼の子をどうされるつもりなのですか」
「え？　鬼の子？」
もしや、邪気眼とかの持ち主なの、太郎って。だとすると合点が合う。太郎は邪気眼みたいな特殊能力を使って、子供のくせに四人もの野盗を斬り伏せた。むむ。そうすると、太郎はいずれおれに災いを運んでくるというのかっ。
「知らないのですか？　簗田殿は？」
「いや、太郎が邪気眼の持ち主なんじゃないかとは、うすうす気付いてはいたが、まさかっ」
「は？」
「え？」
「何を言っているのかはよくわかりませんが、簗田殿はあの子供が丹羽五郎左衛門の隠し子だとは知らなかったんですか」
えっ!?　太郎がマリオの隠し子？　鬼の子って、鬼五郎左の子

供ってこと?

太郎のこと

どおりで太郎が強すぎると思っていたら、マリオの隠し子だったなんてな。

てか、そんなことまで、なんで半兵衛が知っているのって話だよ。

「鬼五郎左の妻は織田信広の娘。つまり、信長の腹違いの兄の娘です。信長と鬼五郎左は義理の兄弟。実際、二人は兄弟のように仲がいいと聞いております」

初耳でした。おれ、なーんも知らないんだね。

「拙者はまだ斎藤にいたころ、織田の調略のために、ありとあらゆることを調べました。もちろん、信長に見込まれている鬼五郎左の身辺も探りました。そして、鬼五郎左には、町娘との間に出来た子供がいることがわかったのです」

それが、ここですやすやと眠っている太郎っていうことか。

「町の娘に手を付けるなど、よく聞く話です。しかし、鬼五郎左は織田の女を嫁にしています。信長はそういったところには寛容な男ですが、この子供を種に、織田一門と鬼五郎左の間に亀裂を走らせようと思えば可能です。鬼五郎左はそれを警戒し、この子供の素性を隠しているのでしょう」

マリオの奴。それで手に余る太郎をおれに押し付けたってわけか。しかも、大人のオモチャにまでさせようとして。なんて、鬼。まさに鬼マリオ。

「だけど、太郎は知っているのかな、それを」

と、おれは太郎の寝顔を見ながら言った。ずいぶんと大人らしくなったな。最初に会ったときにはチビだったのに。

「おそらく、知らないでしょう。鬼五郎左が教えるはずがありません。この子供がやがて丹羽五郎左衛門の子だと名乗りでたら、その家は大変なことになりますから」

可哀想なチビマリオ。正直、六年も一緒にいると、情も入ってく

る。

「まあ、しかし、鬼五郎左にしてみれば、この子も自分の息子。ゆくゆくはそれなりの家の養子に入れたいと考えているでしょうが、ただ、町娘の子ゆえ、引き取り手を見つけるのはなかなか難しいかもしれませんな」

そうか。こいつはどこかの家に入らないと元服できないのか。どこの馬の骨だかわからない身分不明の子供なんだもんな。養子に入れなかったら、武将にもなれずに、足軽雑兵が関の山か。

次の日から、おれに加えて太郎も半兵衛の家に居候することに。半兵衛はニートのくせに、暮らしに余裕がある。というのも、この菩提山にある実家の城に無心に行っているから。典型的なニートｗｗｗ

太郎は天下の竹中半兵衛重治の家に居候できることが嬉しかったらしく、半兵衛から剣術や学問を熱心に教わった。

おれは太郎のその姿を日々目にすることで、悩んだ。このまま行くと、太郎は結構な武将になるに違いない。でも、太郎を武将にさせて表舞台に引っ張り上げるにはどうしたらいいものか。

まあ、とりあえず、おれは目の前のことを片づけなければいけない。無双奥義を完成させ、美濃を攻略し、一日でも早く沓掛のチヨタンのところに戻らなければ。

そんなこんなで、雪解けの季節。

ようやく、稲葉彦四郎がやって来た。

半兵衛の台本通りにやってみます

稲葉彦四郎良通は、評判通りの頑固オヤジって感じ。口をへの字に曲げて、動作の一つ々々もいちいちいかめしい。

「こうして顔を合わせるのは久方振りだな、半兵衛」

「はっ。稲葉様も御息災でなによりです」

板間に両手を突いて、深々と頭を下げる半兵衛。むう。ニート臭全開だった部屋も、綺麗さっぱりになっている。その辺を見ると、稲葉彦四郎はかなりの大物っぽい。織田方で言ったらサンザかゴンロクぐらいだろうか。

「こちらにおられるのが、文にも書いた沓掛城主簗田牛太郎殿であります」

「お、お初にお目にかかります。簗田牛太郎政綱です」

と、おれも半兵衛の真似。うー。いちいち堅苦しいぜ。

「して、簗田殿、拙者のような者に何用だろうか」

たくっ。そんなの半兵衛から聞いているだろ。鬱陶しいんだよ。妙にかしこまっちゃってさ。

「率直に申し上げます。今度のいくさ、稲葉殿に当家に寝返っていただきたいのです」

「ふむ」

何が、ふむ、だよ。まどろっこしいなあ。こういう場ってやけに緊張するしさあ。もう、変な汗が出てくるよ。

ただ、ここは正念場。半兵衛と何度も練習したセリフをなんとか述べていく。

「噂に聞くと、斎藤家当主、龍興公は酒色にふけり、政治をかえりみず、道三公以来の重臣を遠ざけ、己の意のままに動く者ばかりを重用しているとか。そのような斎藤家にあって、稲葉殿の才は埋もれているも同然」

稲葉彦四郎は腕を組み、両目をつぶって、ガンコ親父よろしくじ

っと聞いている。
「しかし、当家の織田上総介は才ある者を身分に関わらず登用し、先の桶狭間のいくさでは、功のあった者に平等に褒美を与えました。古くからの重臣一族も昨日雇った足軽雑兵も、活躍の場を等しく与え、手柄に等しい褒賞を与える。それが織田上総介でございます」
「ということはだ、例え、わしが上総介に寝返ったとしても、足軽と同じ扱いだということだな」
うっ。その屁理屈は台本にはねえ。口下手のおれ、ピンチ。
「左様でしょう」
と、半兵衛。おい。
「しかし、稲葉様の寝返りは織田方に多大な功績を残します。ゆえん、足軽と同じ扱いを受けるということはありません。それに、築田殿が申すように、信長は家柄や身分よりも個人の才能を重視しています。たとえ、稲葉様がそれ以降、織田に属しても、新参扱いされることはないでしょう」
ナイス、半兵衛！
「しかしだな、果たしてそれでいいものか。わしは織田方に何度も口説かれ、何度も断ってきたが、何度も悩んだのも事実だ。天下が果たしてわしを許してくれるかどうか。わしは一度、主君道三様に刃を向けた男。こんなことを言うのはなんだが、道三様がどんな顔をすることか。一度ならず二度までも、主を裏切る男をな」
「稲葉殿、恐縮ではありますが」
と、おれは言った。
「信長は天下を取る男です。天下を取る男に付いていき、どうして、天下が稲葉殿を許しはしませんでしょうか」
「なんと」
ガンコ親父はがっはっはと笑った。
「抜かしてくれるわい。上総介が天下を取るとは、また豪快なことを言う。今川を破ったことは確かにあっぱれ。しかし、それだけのことで天下を取るとは、おこがましいにも程があるぞ、築田とやら」

「信長が美濃を手中にすれば、京の都は目前。更に、織田は浅井と婚姻同盟を結んでいます。尾張と美濃の二国を治める信長に、上洛への障壁となる六角は敵ではありません」

と、おれは半兵衛の受け売り。半兵衛直伝の論理に考え込むガンコ親父。

「天下の足がかりとなる美濃を信長のものにさせるのは、稲葉殿、貴公しかおりません」

「しかしだな――」

「天下の統一は成さねばならぬこと！　それができるのは、今の時点で信長だけです！　そうではありませんか、稲葉殿！」

決まった。おれの会心の一撃が決まった。半兵衛から教わった通りの素晴らしい会心の一撃だった。さすがのガンコ親父もぐうの音も出せずに、考え込んじゃっている。

「条件はなんだ」

ん？

「寝返るにはそれなりの待遇があるだろう。上総介が出している条件はなんだ」

「あ、えーと、それは、その」

「それは木下藤吉郎と話してみてください。彼の者がこの件を仕切っていると伺っておりますから」

ありがとう半兵衛。最初からお前がやればよかったことだ、まったく。まあ、しかし、おれはやるだけのことはやった。あとはおべっか使いのサルに任せておけば、ガンコ親父も寝返るだろう。

そのとき歴史がキタ――――――（ ﾟ∀ ﾟ）――――――!!!!!

「どうやら、三人衆は織田方に付くことで意見がまとまったようです。まだ、木下藤吉郎にはその旨を伝えていないようですが、簗田殿、そろそろ墨俣に戻られたほうがよろしいでしょう。この長い間、消息が不明でいて、更にいくさに出ないとなると、せっかくここまでやってきた努力も認められなくなってしまいます」

半兵衛の言葉を受けて、おれは太郎とともについに菩提山を下りることに。

フッ。この間、無双奥義を編み出したからな。桶狭間のときのような醜態は晒さねえ。しかも、極上の脇差まで装備している。ククッ。うずくぜ。体がうずくぜえ。

約十カ月振りの墨俣城。おれと太郎の帰りに、雑兵どもが幽霊でも見るかのごとく唖然。

「と、殿、生きておられたんですか！」

「あたぼうよ。ちっとばかし武者修行に出ていてな。フッ」

雑兵にサルを呼びに行かせて、おれと太郎は庭先で待機。しばらくすると、サルが大きな音を立てながら駆け出てきて、

「牛殿！　牛殿でにゃあか！　生きておったきゃあ！」

「ご心配をかけて申し訳ありませぬ」

「良かったにゃあ。良かったにゃあ。おりゃあはてっきり、野犬に追われて、そのまま川に落ちて死んだんじゃにゃあかと思っていたぎゃあ。良かったにゃあ」

このクソザル。相変わらず、みくびりやがって。ふん。今度のいくさ、目にもの見せてやる。小便ちびんなよ、サル。

「牛殿、調度いいところに来ただぎゃ。たった今、三人衆の連判で、奴らがおやかた様に内応するとの文が来たところだぎゃ。これで斎藤とのいくさ、一気にカタがつくだぎゃ。おみゃあも一緒についてこい。おやかた様に伝えに行くだぎゃ」

ということで、太郎を残し、サルと二人で尾張清州へ。道中、サルは三人衆を寝返らせた自慢を延々としていたが、本当はおれが（半兵衛が）裏で手を回してやっていたのにさ。なんか、貧乏くじ引いた気分だぜ。

でも、半兵衛と仲良しだって言うと、うるさくなりそうなので、おれは我慢。この鬱憤は稲葉山のいくさで晴らしてやる。

で、清州城の庭先に二人揃って平伏。急な訪問だったので、結構待たされることに。

「なんだ、急に呼びつけやがって」

と、現れた信長は不機嫌。

「ん？　牛ではないか！　お前、無事であったか！」

「おやかた様！　恐れにゃがら、急ぎの用ですにゃあ、積みゃる話はあとにして、まず、これを拝見くださりれえ」

三人衆の連判状を信長に差し出したサル。水を差され、再び機嫌を悪そうにして、巻物をばさりと広げた信長。

そして、信長は顔に表していた感情を消していく。

「なるほど。そういうことか」

と、言うと、信長は連判状をぽいと捨ててしまい、サルがあわてて拾う。

「サル、お前は今すぐに墨俣に戻れ。兵を迎え入れる準備をしろ。牛は沓掛から兵を呼び寄せてこい」

「しゅ、出陣ですきゃあ？」

「さっさと動け！　猶予はねえぞ！」

そのまま、ずかずかと城内に戻って行った信長。

あわてて、腰を上げるも、一度、お互いに顔を見合わせるサルとおれ。

ついに・・・、

キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――!!!!!

ウウッ。ようやくだ。ようやくこの日が。

桶狭間の戦いから七年。調略をやらされてから五年。尾張を追い

出されてから約十カ月。
長かった。
そして、ついに報われる。おれのこの長かった戦国生活、虐げられてきた人生、ついに報われるときが！

じゃあ、なんか教えろ＾＾

サンザに頼んで、沓掛城に早馬を出させたおれ。とりあえず、イエモン以下ｅｔｃが清州に来るまで、ボロ家で待機。正直、チヨタンに会うために沓掛に戻りたかったおれだが、出陣は明後日の朝らしく、馬に乗れないおれは沓掛に戻るのを断念。

城下は騒然としている。出陣要請を受けている侍大将及び足軽大将の人数が、これまでの美濃攻めを凌いでいる。突然の出陣準備に雑兵たちが追われており、更に時間が経つごとに、尾張の各居城の武将たちが数百数千の兵を連れて、ぞくぞくと清州に集まってくる。

おやかた様は今度のいくさでカタをつけるつもりだ。町人たちでさえ鼻息が荒くなる始末。それだけ、この清州は熱気に包まれ始めている。

桶狭間の戦いのときとは訳が違う。あれから七年、信長はおれとかサルなんかに調略をさせている一方で、富国強兵にも力を入れてきた。桶狭間の戦いのときには総力を挙げて五千人にも満たなかった兵数が、今回のいくさでかき集める兵数はおそらく一万五千。更に、三人衆の寝返りも約束されている。

機が熟すのをこれでもかというぐらいに待って、ようやくの総攻撃。勝ったも同然。

だが、そんないくさに何のおもしろみも持てないおれ。いや、もちろん、美濃を手に入れられれば、幸せな未来がやって来る。

けれども、この一年、おれは学んだ。戦国武将としての振る舞い方を。

男は戦場に立ってなんぼ。戦場で活躍してこそなんぼ。信長は完璧すぎるほどの勝利を目指しているが、おれは生と死の狭間で戦いたい。このアケチソードと完成された無双奥義を武器に、ヒリヒリしたいんだ。

「何をブツブツ言っているんだ、お前」

「何奴っ！」
「久しぶりじゃねえか、牛太郎」
げっ。玄関でにやにやしているのは、マタザに肩を並べる超絶ＤＱＮ野郎の佐々内蔵助。相変わらずのデブマッチョ。着物がピチピチ。むしろ、マタザよりもタチが悪い、最悪のＤＱＮ。
「お前が生きていたと城内で話題になっていてな、顔を見せてやったところだ」
デブマッチョはにたにたと笑ったまま、草履も脱がずに板間に入ってきて、
「相変わらず汚ねえ牛小屋だな」
と、悪態。おれはその隙に、脇差をさりげなく帯へ。「いいもん持ってんじゃねえかあ＾＾」なんて、ジャイアニズムを発揮されちまうからな。
「なあ、お前よお」
佐々内蔵助はおれの肩に熊みたいな手を置いて言う。てか、力が強すぎて痛いんですけど。
「サルの築城を手伝ったそうじゃねえか」
うっ。こいつは、遠山さんをサルに取られて以来、女々しい嫉妬でサルを敵視している。ま、あのときはピエロだったしｗｗｗ　怒っても仕方ないかな＾＾
「てことは、お前はサル派だってことだな」
うへえ。派閥を強要するなんて、本当にＤＱＮな奴だな。
「そういうんじゃありませんよ。あっしはただ、墨俣城ができれば美濃侵攻に一役買うって思っただけです」
「じゃあ、たまには俺にも一役買ってくれたらどうなんだよお！」
「え？」
なんスか、急に情けない声出しちゃって。
「又左衛門に聞いたかんなあ。お前、又左衛門に桶狭間が決戦場だって先に教えてあげたみたいじゃんかよお。なあ、たまにはさあ、おれにも手柄立てさせてくれよお」

「いや、だって、内蔵助さんはそんなこと言わなくたって十分に強いんだし」
「あ、そうやって、おれには何も教えてくれないんだ。あ、やっぱ、お前、サル派だね」
「いやいやいや、だから、そんなんじゃないですって」
「じゃあ、なんか教えろ＾＾」
うぜえ。こいつ、うざったさでも超絶してんなあ。寧々さんのときもかなりうざかったしよお。
「なあ、なんかあんだろお。お前、美濃でずっと調略してたじゃねえかよお」
そんなのねえよ。だいたい、今回のいくさは勝って当たり前なんだから、大した手柄をあげる奴なんていねえよ。まったく。
あ、でも、そういえば半兵衛が言ってたな。
しょうがねえ。こいつに恩を売っておくか。一応は強いし。今後、役に立つときが来るだろ。
「じゃあ、まあ、一つだけ、役に立つかどうかわかんないスけど」
「おお。なんだ」
鼻息を荒くして顔を近づけてくるウザノスケ。口臭くせえ。うぜえしくせえし最悪な奴だな。
「稲葉山城は堅固な城らしいですけど、裏手の搦手門は守備が薄いらしいッスよ。表に比べて裏は急勾配の山道とほとんどは崖だから、籠城のときはそこを手薄にしているみたいッスよ」
「ほっほう」
にやけながら腰を上げたウザノスケ。
「そりゃいいことを聞いたぜ」
「でも、内蔵助さんは黒母衣衆の筆頭なんだから、信長様の下から離れられないんじゃないんですか」
「いいのよいいのよ、手柄さえ上げればよ」
はっはっは、なんて笑いながら家を出て行ったウザノスケ。やっぱ、教えなければ良かったかな。あいつ、絶対に恩とか感じない奴

っぽいもんな。

ついに来たか・・・。ククッ・・・。

「簗田様、お久しぶりでございます」

と、真っ先に頭を下げてきたのはソフエ。清州城下のとある寺の境内に沓掛勢が集合し、墨俣築城には参加せずにいた雑兵どもの目は、なかなかどうして、ぎらついている。マリオに鍛えてもらったのかな。

てか、肝心のイエモンがいないんだけど。あいつこそ、真っ先におれの下に来るべきだろ。あいつは俺の唯一の家来なのによ。

「イエモンは？」

「あ、いや、うちの主人なら・・・」

ソフエの視線を追ってみると、雑兵たちの中にこっそりといた。なに、隠れてんだ、あいつ。

まあいい、ほっとこ。どうせ、タメ口だし。むかつくし。なんなら、ソフエを抜擢しちゃうか。そうだ。美濃攻めが終わったら、ソフエをイエモンから引き剥がして、おれの直属の家来にしちまおう。

ということで、信長本隊に先んじて、一路墨俣へ。沓掛勢を連れて行くのは森部の戦い以来だが、あのときとは兵士たちのいくさに対する姿勢がどこか違う。

そこのところをソフエに訊いてみたら、やっぱり、マリオに訓練されたらしい。あらゆる面で鬼のマリオの訓練は、相当厳しかったみたい。

ちなみにマリオはというと、清州でお留守番ｗｗｗ

あと、もう一つ、ちなみになんだが、おれの武者姿は相変わらず綱。。。ぐうう。本当は甲冑を作るつもりだったんだが、おれの場合は特注しなくちゃならないらしくて、その金をマリオが出してくれない。あの野郎。馬はくれたくせに（乗れなかったけど）、甲冑は駄目なんて。命名のときといい、絶対におれに恥を晒させたいためだろ。

で、墨俣到着。そんなにいっぱい入れないから、雑兵どもは外で待ってろ。おれだけは中。だって、おれが造った城だし＾＾　まあ、築城応援隊と合流して、奴らも水入らずみたいだから、外で騒いでいろ。

城内ではサルがぎゃあぎゃあ言いながら駆け回っていて、帳面を片手に、兵糧や武器のチェックをしていた。なにしろ、墨俣付近にはすでに五千人以上が集まっている。美濃攻めの番頭役みたいになっているサルだから、大わらわ。

「殿様！」

と、何度も聞いた言葉。駆け寄って来たのはもちろん太郎。って、なんでお前、鎧を装備してんの。

「今度のいくさ、太郎も連れて行ってください」

「何を言ってんだ。駄目に決まってんだろ。太郎は墨俣で待機！」

「でも、半兵衛殿にいろいろと教わりましたし、足手まといには絶対になりませんから」

「駄目！」

「どうしたんですか、簗田殿」

と、にこにこしながら現れたのは、サルの弟の小一郎。サルの弟とは思えないサワヤカイケメン。ただ、メグミちゃんには似ている。だから、こいつとはあんまり顔を合わせたくないおれ。

「いや、太郎が戦場に出ると言って聞かないんだよ」

「それはいけないなあ。太郎、お前はまだ元服前なのだから戦場には出られないじゃないか」

「足軽で構いません！」

「主人の簗田殿が駄目って言っているんだから駄目だよ。俺も留守役だから、一緒に待っていよう。な？」

小一郎に説得されて、黙ってうつむく太郎。まったく。おれの言うことは聞かないくせに、よそ様の言うことは聞くんだからな。

で、おれは太郎を小一郎に任せて、城の大広間に。そこには、サルはもちろんのこと、信長に先んじて出陣してきた武将たちが勢ぞ

ろい。
　おれはそそくさと列の端に。
　床の間を背中にして、真ん中に陣取っているのは、先発隊の総大将、佐久間出羽介信盛。脂ののった三十九歳。鼻の下からぴょーんって長い細髭が二本。狐目。
「皆の者、御苦労であった」
　ははーっと、皆で平伏。なにしろ、出羽介は偉い。サンザやゴンロクたち重臣の中でも筆頭格。信長の次に偉い。おれが会うのは初めてだけど。
「長年、斎藤には苦しめられてきたが、ついに決着のときじゃ。して、我ら先発隊はおやかた様が小牧山城から出陣するのを待たずに、稲葉山周辺の切り取りを始める。本隊は機を待って出陣の予定じゃ。また、今回のいくさでは、西美濃三人衆の寝返りが約束されている。ゆえ、背後からの脅威はない。出陣は日の出。諸将、明日は積年の恨み晴らすつもりで思う存分暴れられい！」
「うおーっ！」
　フフッ。ついに真・無双奥義を繰り出すときが来たかっ・・・。
　ククッ。

沓掛隊ｖｓ木下隊の手柄取りレース

はっきり言って、おれの出番なし。

なんなの、このいくさは。稲葉山周辺の切り取りって言ったってさ、行くところ行くところ、砦も城もすぐに陥落。斎藤勢やる気なし。てか、電光石火のごとく、尾張から大軍が飛び出してきたから、迎え撃つ猶予もないみたい。

で、稲葉山は陸の孤島状態に。拠点のどこもかしこも織田織田織田。雑兵どもの間では、タツオキはすでに逃げちゃったんじゃないかっていう噂。

まあ、六年もかけたんだからな、この日のために。完璧すぎるくらい完璧すぎるわ。じゃあ、今までの殺されそうだった小競り合いは何だったのかって話だけどさ。

あ、そっか。向こう側にはあの恐ろしい半兵衛がいないのか。

だろうな。半兵衛が斎藤方にまだいたら、こんな簡単には行かなかっただろうな。

で、墨俣を出てから約一週間後、信長の本隊もやって来て、稲葉山をあっという間に包囲。稲葉山城の城下はすでに征服。つまんねー。一体、このいくさは誰が活躍しているんだってことにもなってくるぜ。サッカー天皇杯の一回戦目ぐらいだよ、このつまんなさは。

周りだって、ほら。猪武者やＤＱＮ武者がくすぶってやがる。あんだけの泥仕合をやった結果がこれだよ。あっけないね。脛取り足立が懐かしいよ。

って、余裕をかましていたら、なぜか、ちょっと、深刻な状況に。というのも、包囲したのはいいんだけど、山の頂上にある城まで兵が進めない。いや、辿り着けないことが発覚。

というのも、攻撃側は山道を登って行かなくちゃならないけれど、守備側は上から弓矢を打っていればいいだけ。それに、林からゲリラ兵が出てきたりもしている。

最後の最後で立ち往生の織田勢。

伝え聞いたところによると、本陣の信長がかなり怒っているらしい。で、あわてふためいて、出羽介が兵隊を突っ込ませたみたいだけど、撃沈。更にヒートアップした信長は、精鋭揃いの馬廻衆を突っ込ませたらしいけど、ゲリラ戦法に合い退却。ここは拙者が、と名乗り出たのは、やっぱりマタザ。赤母衣衆を率いていったが、鉄砲に兜を射抜かれて退却ｗ　ワロスｗ

「にゃあ。こりゃあじゃあ、おりゃあらのせっかくの苦労も水の泡だぎゃ。なんとかならんきゃあにゃあ」

と、サルはそわそわと歩きながら、ときたま禿げ頭をかきむしる。

フフフ。そういうことだったのか、半兵衛。

おれは側近のソフエを呼び、こそこそと打ち合わせ。イエモンが煙たそうな目で見てくるが、テメーが一番最初に突っ込むんだからな！

ということで、おれは沓掛勢を連れて、稲葉山城の裏手へ――行こうとしたら、サルにバレて、サルは足軽隊を連れて走って追いかけてきた。

「おみゃあ！　何かするつもりだぎゃにゃ！　ここまで一緒にやって来たのに抜け駆けは許さんだぎゃあっ！」

この野郎。さんざんおれをこき使ってきたくせに、ここまで一緒にやって来ただと。

勘のいいサルのことだから、裏手に回るのもどうせバレる。なので、おれはおもむろにダッシュ。

「お前ら、付いてこい！　一番槍を上げさせてやるぞ！」

おれの言葉に顔色を変えた沓掛勢。でも、サルの足軽隊にも聞こえちゃって、皆がおれに付いてくることに。

で、稲葉山の裏手に回り、木々が鬱蒼と茂った道なき道を登っていく。

「そうきゃあっ！　おみゃあっ、搦手を攻めるつもりだぎゃにゃあっ！」

むむ。バレちまったら仕方ない。ここからはもう競争だ。ただ、おれは運動会の徒競争でビリだったから、あとはこいつらに任せる。

「お前ら！　木下隊に手柄を寄越すな！　搦手は守備が薄いからな！　がんがん強気で行っちゃっていいかんな！」

「おみゃあらっ！　沓掛の田舎侍には絶対に負けるにゃあっ！　一番槍を上げた奴にゃあ、百貫の加増だぎゃあっ！」

ぬーっ！　サルの奴、得意の金にもの言わせる汚ねえ戦法使いやがって。木下隊の奴ら、猪のように登っていっているじゃねえか。

「沓掛勢は二百貫の加増だぞっ！」

「本当ですかっ、殿様っ！」

「おれをナメるな！　その辺の足軽大将とは違うんだ！」

「何を言うとるだぎゃあっ。おみゃあらの主人はただの棚からボタ餅城主だぎゃあっ！」

あの野郎。とうとう本音を出しやがって。

で、城の建っている頂上まで木下隊とのデッドヒート。半兵衛の言っていたとおり、守備兵とまったく遭遇せず。いくらなんでも、手薄すぎだろ。

と、思って、林を抜けたら、おれは愕然とした。愕然としたね。そこには聳え立つ崖。高さが十メートル以上。稲葉山城はその向こう。

うわ・・・。無理・・・。こりゃ、確かに守備いらない。天然なのか、人口なのかはわからないけど、とんでもないところに城建てちゃって。クソッ。

でも、愕然としたのは一瞬で終了。だって、先にロッククライミングしている奴らが十人ほどいるんだもん。しかも、揃いも揃って黒マント。ゴキブリｗ

「おう。お前ら、ずいぶん遅かったじゃねえか」

と、ゴキブリ連中を下から指示している奴。ゴキブリの親玉、ウザノスケ。にたにたしてやがる。

登れ登れ登れ！

あ、ゴキブリが一羽落ちた。
「おい、大丈夫か！」
と、駆け寄って行ったウザノスケ。
「だ、大丈夫です。なんとか」
「なら、早く立て！　さっさと登れ！　寝ているんじゃねえ！　登れ登れ登れ！」
と、ウザノスケは刀を振り回しながら、子分ゴキブリのケツをキックキックキック。うわあ。どこかで見たことあるような光景だけど、さすがに引くわ。さすが最恐ＤＱＮ。
「佐々内蔵助っ！　こんにゃところで何をやっているんだぎゃあっ」
「なんだと、このサル。誰に口をきいているんだ。あ？」
「おみゃあは黒母衣衆でにゃあかっ！　おやかた様の身辺を守るおみゃあが何をやっているんだぎゃあっ！」
「城攻めだ。何か文句でもあるのか。あ？　だいたい、黒母衣衆の半分以上は本陣に残しているぞ。だいたい、お前がそのようなことを言えた身分か。あ？」
ここで仲間割れッスかｗ　火花バチバチｗｗｗ　いっそのこと殺し合え～＾＾　てか、この隙に、
「イエモン！　イエモン！　出てこい！　お前も登れっ！」
「え？　なんで俺が」
「なんで俺がじゃねえだろうがっ！　功名を上げたいんだろっ！　登れ登れ登れ！」
「なんで。嫌だよ。だったら、殿が手本を見せてくれよ」
むきーっ！　この野郎。マジでふざけやがって。もう、あったまにきたわ。本当に頭にきたわ。
キラーン。アケチソード抜刀。
「イエモン、登るか、首を切られるか、どっちかにしろ」

「拙者が登ります！」
と、崖に飛び出して行ったのはソフエ。お前・・・。イエモンをかばってやるとは、なんて、いい家臣なんだ。それに比べて、このガキ！
「お、おみゃあらも登りりゃあっ！　い、一番槍には、に、に、二百五十・・・、いや、三百貫の加増だぎゃあっ！」
やけくそぎみのサル。しかし、その言葉に鼻息全開の木下隊。エサに飛びつくハイエナのようにして、我先にと崖にしがみついていく。
「お、お前も登れ、イエモン！」
「俺らはどんだけの加増なんだ」
ぬぬ。この野郎。ぐぬぬ。
「沓掛勢は三百十貫の加増だ！」
「うおーっ！」
「本当だな、殿。言ったからな。証人はここにいる全員だからな」
「約束は約束だ！　とにかく、一番槍をあげろ！　いいからあげろ！」
「お前らは本当に意地の汚ねえ連中だな！」
と、ウザノスケ。崖レースの開始に苦々しい顔。
「金に物をいわせてでしか下の者を動かせない、下賤な武将よなあ！」
「おみゃあに言われたくにゃあだぎゃあっ！　女を取られたことをいつまでも根に持つおみゃあにだけは言われたくないだぎゃあ！」
「誰が女を取られただと！？　なに、根も葉もないことを言ってやがんだ、このエテ公！」
ウザノスケ、刀をキラーン。おいおい。何やってんだよ、こんなときに。
「にゃんだ、おみゃあ。斬るにゃあか？　斬れるものなら斬ってみるだぎゃ。でも、おみゃあ、いくさの最中に味方を斬るなんて、軍紀違反で、おみゃあも切腹だぎゃあっ」

「何を言ってやがる。いくさ場でお前を斬ったところで、敵に斬られたことにしちまえばいいことよ」
「おみゃあっ！　ここにはどんだけの証人がいると思っているんだぎゃあっ！」
「なあに。全員、斬り殺すまでだ」
いや、あのう。マジでウザノスケ、笑っているんスけど。マジでこいつ、ヤバいんスけど。刀を斜に構えたまま、じりじりとサルに近寄ってきているんですけど。
てか、こいつなら、この場の全員を斬り殺すのもやりかねない。ヤバい。なにやってんだよ、こいつら！
って、焦げ臭いんスけど。
あれ？　崖の上から火の手が。さすがに、サルとウザノスケも喧嘩を中断。てか、まだ、誰も崖を登り切っていないんですけど。
まさか、揉めている間にいくさは終わっちゃったってことかな。

いざ、天下布武！

稲葉山城にはすでにタツオキがいなかった。それに気付かずに、織田方も斎藤方も戦っていたわけだけど、時間が経つにつれ、さすがに斎藤方の下級武将、籠城兵たちに、タツオキが逃げたことが広まり、戦意喪失。下級武将、籠城兵は次々に降伏していき、最後は、タツオキの代わりに城を守っていた重臣が火を放って自害したというわけ。あんまり燃えなかったみたいだけど。ボヤ騒ぎレベル。

で、おれたちは何もしていなかった。駆けっこをしていただけ。

なんなんだよ、このとんちんかんな終わり方は。ここに来るまでに、どんだけ、苦労したことか。それが全部パーみたいなものだよ。

まあ、でも、結果オーライ。信長はついに美濃を獲得したわけだ。そして、おれは沓掛に戻れる。明智庄の女子供は地元に戻れる。で、石川小四郎に挨拶。娘さんをください。デュフフ。

ちなみにウザノスケは勝手に本陣を離れた罰により、謹慎五日の刑。ざまあｗｗｗ　あんなゴリラは五日どころか五年ぐらい檻の中に入れとけｗｗｗ

ただ、素直に喜べないことが一つ。またしても、おれは合戦の後片付けをさせられることに。もう、その日に沓掛に帰ろうかと思っていたのに、信長のバカ、稲葉山城が気に入ったかなんだかで、一部の重臣と親衛隊を稲葉山に留まらせ、あと、尾張に戻る必要のない家臣を無期限の拘束。

調略どころか、最後には行方不明だったおれは、もちろん、尾張に戻ったところで別にやることのない家臣の一人。サルも同じく。ウザノスケは強制送還だけどｗｗｗ

で、稲葉山城の最上階で祝勝会みたいなのをやるみたい。ボヤ騒ぎが起きたところで、よくもやるよ。ま、下っ端のおれには関係ないけどね。

と、思っていたら、サンザから呼び出し。珍奇衆だから。あー、

そういえば、おれってそんな仕事に就いていたなあ。
渋々、宿営地の城下から稲葉山城に上がり、信長のおホモだち（小姓）の案内で最上階へ。あれ、中はずいぶん綺麗じゃん。ボヤが起きたんじゃなかったっけ。
おホモだちが言うには、信長が稲葉山城をたいそう気に入って、占領の翌日には最上階と大広間、信長の居室を改装したみたい。
確かに障子戸の向こう、縁側は見晴らしがいい。なるほど。濃尾平野が一望できる。尾張と美濃を征服した者には打ってつけってか。
ただ、祝勝会にしては人が少ない。いるのは長髭の佐久間出羽介とサンザ、ゴンロク以下ｅｔｃ三人。加えて、稲葉ガンコ親父とおそらく安藤守就、氏家ナントカ。それにサルとおれ。
向かい合わせに膳が並べられていて、上座から偉い順に家来が並び、もちろんサルとおれは端っこ。
出羽介とゴンロクがべらべらと喋っているが、ちょっと、この面子だと肩身が狭い。さすがのサルも縮こまっている。だって、マタザすらいないんだもの。
「牛殿、とうとうやったな。藤吉郎もようやった」
と、こそこそ話しかけてきてくれたのはサンザ。
「いや、でも、なんで、おりゃあたちみたいな者がこのようにゃ場に」
「それは、お前、今回の美濃攻めにおいて、もっとも働いたからに決まっているだろう。おやかた様直々であるぞ。有難く思え」
とかなんとか話していたら、信長登場。なぜか、お坊さんも一緒。皆、平伏。
「皆の働き大儀であった。頭を上げろ。今日は無礼講だ。ただ、宴の前に話がある。俺はな、この稲葉山を居城にすることとした。ということで、軍団をここに移す。ここにいる全員が、居城とは別に稲葉山に屋敷を構えろ。わかったな？　お前たちの女房子供も清州と小牧山からここに移してこい。いいな？」
「はっ」

えーと、じゃあ、おれはどうすればいいのかな。清州のボロ家を移してくるっていうだけのことなのかな。てか、信長の奴、こっちには有無も言わせねえな。

「あと、名も変える。ここはこれから岐阜と呼ぶ。この城も岐阜城だ。これは宋恩殿が決めてくださった」

「岐阜の岐は岐山の岐」

と、お坊さん。何を言ってんだ、こいつは。すると、サンザが大きな声を出す。

「周の文王ですな！」

「さすがは森殿」

意味がわからん。

「そしてだな、これからおれは天下布武の判を使う。今日、この日からな」

「これは天下に武を布くと書いて、天下布武です」

そうしたら、一同、おおっていうどよめき。意味がわからないのはおれだけ。サルはどうせわからないくせに、驚いているふり。

「牛！」

「は、はいっ」

「いよいよ、お前の言った天下統一の事業だ。次はどうする。ん？」

え？　この場でですか。なんで、軍師みたいな立場になってんのさ、おれ。てか、視線の集まり方がやばすぎる。うーっ。おしっこ漏れちゃいそう。。。

「恐れながら！」

と、声を上げたのは、稲葉ガンコ親父。

「今回のいくさ、拙者がまだ心に迷いを持っていたとき、築田殿はこう申しました。おやかた様は天下を取る男。天下を取る男に付かないことこそ、この天下への裏切りである、と」

あのう、それは半兵衛の台本だし、それにちょっと言い回しが変わっちゃっているんですけど。

ただ、おれに向けられる幹部たちの熱い視線。あと、嫉妬のまな

ざしも。それはもちろんサル。あと、なぜかゴンロクの睨み。
「そして、簗田殿は拙者に言いました。美濃を手中にすれば、京の都は目と鼻の先。その障壁となる六角はもはやおやかた様の敵ではない」
　すると、長髭オヤジがにやにやとしながら、
「となると、武田、上杉を出し抜いて、我ら織田が上洛を果たせるということじゃな。かっかっか。そのときは甲斐の虎、越後の龍もさぞ悔しがるじゃろ」
「馬鹿もんが」
　と、信長だけがいつのまにやらキリッとした表情。
「上洛が目的じゃねえ。天下に武を布く。それが目的だ。武田、上杉を出し抜くぐらいでにやけていては天下統一など戯言よ！」
　しーん。信長、清州のころはあれだけ気難しかったのに、美濃を取ることが実現して、どうやら吹っ切れた様子。
　でも、尾張だけの織田だったら、天下布武なんて笑いごとだったよな。でも、美濃と尾張の二カ国を支配している信長は、一躍、強国の仲間入り。
　ここからついに信長の時代が来るのか。
　今まで覇王の信長なんて漠然としか考えられなかったけど、ここにきてようやく現実味が出てきた。

お前が言い出したことはお前がやれ

岐阜城の最上階から見える満月。
いい眺めだな～。
綺麗な夜景を見ているときっていつも思うよね。こんな綺麗なものを見るのは一人じゃ勿体ない。できることなら、好きな人にこの景色を見せてあげたいって。
チヨタン・・・。
「稲葉山が気に入ったか、牛」
信長とサンザが入って来て、おれはあわてて平伏。
「今回はよく働いたな。まさか、お前が墨俣築城を手伝い、稲葉を口説くとはな」
ま、表向きはサルの手柄になっちゃっているけど。
「して、牛殿、次はいよいよ上洛じゃが」
「左様でございます。迷うことなく京に攻め上る時期でございます」
「だがな、牛、おれはよく考えてみたが、ただ単に上洛を果たすだけでは天下に大儀が立たねえ。都は腐っても都。将軍もおれば、天子もおる。ただ攻め上るだけは容易だが、天下のすべてを敵に回すのも必至じゃねえのか」
「恐れながら、新しき将軍を担ぎ上げれば大儀名分が立ちます」
「新しき将軍？　誰だ」
「足利義秋様です」
「そいつはどこにいる」
「あ、えーと」
「連れて来い」
「あ、でも、どこにいるのか」
「お前が言い出したことだ。お前がその手で連れてこい。あとな、竹中半兵衛だ。あいつも連れてこい。それが適うまで、俺の前に姿を見せるな、いいな」

「いや、でも、あっしは珍奇衆としてのお役目が」
「そんなものはもういらん！　さっさと行け！」
うーっ。なんで、最近、こんなのばっかりなんだよお。信長、おれに厳しすぎじゃね？　もうちょっとゆっくりさせてくれたっていいじゃんか、クソッ。
泣く泣く、最上階を下りていく、おれ。すると、階段のふもとで突っ立っている濃姫が。何やってんだ、このオバサン。邪魔だ、どけ。
「築田殿、ちょっと」
「は？」
濃姫に手を引かれ、階段の陰に連れて行かれるおれ。ほわあ。しなやかな手。まさか、不倫ッスか。でも、あかん。そんなのあかん。信長に叩き斬られる。
しかし、おれの腰にすっと手を伸ばしてくる濃姫。駄目ッス。駄目ですって、奥さん！　すぐ上に御主人がいらっしゃるじゃないッスか！　駄目！
「やはり、これは」
と、腰じゃなくて、脇差に手をかけた濃姫。
「桔梗の紋。どうして、貴方がこれを持っていられるの」
なんだ、そんなことか、チェッ。熟女の筆下ろしを期待しちゃったぜ。クソッ。
「これは、旅人に貰ったんです」
「旅人？　その者、名は何と申しておった？」
「明智光秀ッスけど。何か？」
「やっぱり。貴方は十兵衛にお会いになられたのね。十兵衛は今どこで何をしているの？　どんな様子だったの？」
「さあ」
忘れちゃった。てか、なんで、こんなに食いついてくるのよ。もしや、明智光秀の元カノ？
「そう。なら、もし、また十兵衛に会うことがあったら、伝えてお

いて。濃が会いたがっていると」
　はいはい。わかりましたよ。まあ、どうせ、そのうち、明智光秀は信長の家来になるんだから、そのうち会えるでしょ。
　ん？　もしかして、光秀が信長を裏切るのは、昼ドラばりのどろどろの恋愛事情でか？
　でも、信長って濃姫のことあんまり相手にしていないそうだしな。おホモだちはいっぱいいるし、美人の奥さんもいっぱいいるし、男女関係なしの最強のヤリチンだからな。濃姫みたいなオバサンはどうでも良さそうな感じ。
　ま、そんなことはどうでもいいとして、足利義秋と半兵衛を捕まえてこないと。じゃないと、おれは稲葉山に来れなくなるんだし。
　いや、ちょっと待て。
　稲葉山に来る必要なくね？　別に信長になんか会いたくないし。むしろ、今のおれって自由になれたんじゃね？
　ぐへへ。指令なんか無視して、沓掛に戻ろっと＾＾

せいてんのへきれき

城を下り、岐阜城下の仮住まいに戻って来たおれ。稲葉山のふもとに屋敷を造らされる予定だけど、もう戻ってこないから、そんなのいらない。

家では太郎が遅めの夕飯の支度。

そうか、そろそろ、こいつの処遇も決めてやらないとな。いつまでも、小姓にさせておくのも可哀想だ。それに、チヨタンと結婚するんだから、こいつも夫婦の間にいると気まずいだろ＾＾

「太郎。そろそろ元服しよっか」

「え？　本当ですか？」

「お前も男だし、戦場にも出たいだろ。もうすぐ十五歳になるしな」

「でも、元服と言っても、太郎は武士の子ではないゆえ・・・」

「それはおれがどうにかしてやるよ。誰かに頼んで、養子に入れさせてやるよ」

「本当ですか！？」

「本当だとも。おれがお前に嘘をついたときがあったか？」

「・・・・・」

チッ。この野郎、せっかく、お前のためにやってやろうとしているのに。可愛げがねえんだからよ。

「ごめんください、簗田様！」

「あ、見て参ります」

と、太郎。ここぞとばかりにさっさと居間を出て行く。あいつ。誰のおかげでここまで来れたと思ってんだ。

で、こんな遅い時間に誰かと思っていたら、ソフエだった。ほほう。いいタイミングだ。調度、ソフエを直属の家来にしようかと思っていたからな。

「太郎、酒を持ってきてやりなさい」

「酒なんてありませんよ」

ぐう。恥を欠かせやがって。なんで、用意しておかねえんだよ。本当に気の利かないガキだ。バカ。

「いや、今夜はお気持ちだけ受け取らせていただきます。築田様。折り入って大事な話をしに参りました。どうか、拙者のお頼みごとを聞いてくだされ」

頼みごと？　なんだ、こいつもイエモンに愛想を尽かし、おれの家来になりたいってか。

「実は我が主人の山内伊右衛門なのですが」

もう付いて行けません、だろ？

「実は、大変申し上げにくいのですが、木下藤吉郎様の下に移りたいと申しておりまして」

「なんだとお！」

おれは怒った。血の気がぐわーんって頭に昇ってきて、おもわず立ちあがったね。イエモンの野郎、おれのために働きたいとか言って、最初は泣いていたくせに、今さら、恩も忘れて、サルの下に付きたいだと？

「も、申し訳ありませぬ！　拙者もそのようなこと築田様の恩に仇を返すことと言ったのですが、主人は勝手に木下殿と話をつけてしまって」

ふざけやがって！　いや、もしかして、あいつ、稲葉山城の崖のとき、おれに脇差を向けられたことを根に持っているのか。

むう。なら、仕方ない。そもそも、あいつのことは嫌いだし。あんな奴、こっちから願い下げだ。

「それに、それに、まことに申し上げにくいのですが」

「もういいや。勝手にしな」

「いや、これだけは築田様に伝えておかなければ・・・」

「なんだよ」

「実は、主の伊右衛門は、明智庄の石川千代殿と契りを結ぶことになりまして・・・」

は？　何を言っちゃってんの？　誰と誰が結婚するって？　は？

「簗田様！　主の婚約、どうか御認めくだされ！　どうかお願いします！」

えーと、そのー、どういうことかな？　何を認めてほしいのかな、ソフエは。政綱、よく、わかんなーい。

「簗田様！　お願いいたします！　伊右衛門は父を亡くし、一族は滅び、不幸の連続でありました！　山内伊右衛門を、どうか、どうか、お許しくだされ！」

泣いて頼みこんでくるソフエ。状況が飲み込めないおれ。いや、飲み込みたくないおれ。助けを求めるようにして、太郎にちらりと視線を向けると、太郎は目を瞑り、なぜか、うなずく。

「殿様。男なら、伊右衛門殿の門出を祝ってあげてください」

ぐうう。どういうことだ。これは一体どういうことだ。なんで、イエモンとチヨタンが結婚するんだ。なんで、イエモンとチヨタンが。

あ。あの野郎、そういえば、おれが行方不明中の間、沓掛にずっといやがった。あいつが沓掛に入る間、おれは一年近くもいなかった。そうか。そうなのか。おれがいない隙に、イエモンはチヨタンを手込めにしたってわけかあああっっっつ！

「イエモンを呼んでこいっ！　ふざけんな！　当の本人がいなくて、何がお許しくださいだ！　今すぐ呼んでこいやあっつ！」

失恋したときって悪あがきでカッコつけたくなるよね？

ソフエが家を飛び出して行ったあと、怒りのおさまらないおれは壁にパンチ。

「殿様！　何を怒っているんですか！　色恋の沙汰など仕方ないことじゃないですか！」

「ガキは黙ってろ！」

おれはアケチソードを抜刀。殺してやる。イエモンなんか殺してやる。

「そのようなことはやめてください！」

「黙れ！　黙れ黙れ黙れ！」

「なら、太郎を斬ってから、伊右衛門殿をお斬りください！」

おれの前に立ちはだかる太郎。何を言ってんだ、こいつは。

「女を取られて家臣を斬るなど、そのような人には付いていけません。しかし、太郎は殿様に返しきれない恩がございます。ならば、この太郎、この世にはもうおられませぬ！」

「ふざけんな、太郎。お前には関係ないことだ」

「おおありです！　伊右衛門殿を斬るなら、太郎も斬ってください！」

「ふざけんな、バカ・・・」

おれは力なくアケチソードをぽいっと捨てる。イエモンは殺せても、太郎を殺せるわけないじゃんか。太郎のことは、こんなに小さいときから知っているんだ。生意気だけど、ずっと一緒にいたんだ。そんな太郎を殺せるわけないじゃんか。

もうやだ。泣きたい。死にたい。生きたくない。

「簗田様！」

玄関からではなく、庭からソフエの声。気力を失ったおれは、顎をくいっと向けて、太郎に障子戸を開かせる。

夜の帳が下りる庭には、ソフエとイエモンが平伏している。こい

つ。今になって、頭を下げやがって。クソッ。
「殿。申し訳ないが、俺と千代殿の契りを認めてくれ」
「お前、気まずくなって、藤吉郎殿の下に移るんだな」
イエモン、何も答えず。
「わかった。もういい」
おれは腰を上げ、箪笥の引き出しを開け、三枚の小判が入った包みを手に取る。そう、初めて戦国時代に来た日に信長から貰った小判。二枚はどっかの泥棒に取られちゃったけど、残りの三枚は、使い道のわからないおれだから取っておいた。俸禄ももらっているし。もういらない。
小判をイエモンの前にぶん投げるおれ。
「祝儀だ。持っていけ」
月明かりをきらきらと照り返す小判に、唖然とするイエモンとソフエ。小判三枚は、実はびっくりするほどの大金。戦国時代に七年もいればわかることだけど、金三両は家一軒建てられるぐらいの価値。しかも、そこそこの屋敷を。
「しかし、殿、こんな大金なんて」
「お前にくれてやるんじゃない。千代殿にくれてやるんだ。わかったらさっさと帰れ」
そう言って、障子戸をぴしゃりと閉めたおれ。ウウッ。何カッコつけてんだ、おれは。結局、おれはまたしても駄目だったんだ。それなのに、カッコつけやがって。ただの負け惜しみ。ただのキモオタ。ウウッ。
「殿様。有難うございます」
と、太郎も涙。ウウッ。
「太郎は一生、殿様に付いて参ります」
「当たり前だ、バカ！」
泣きながら、笑う太郎。ウウッ。おれは笑えねえよ、バカ。
逃げよう。半兵衛の家に逃げよう。もうおれは何もしたくない。
太郎を連れて、半兵衛の家で再びニート生活をしよう。

パパになりますか？

この世のすべてから逃げるようにして、菩提山に再びやってきたおれ。太郎は半兵衛に会えるから喜んでいるが、おれの心はどよ～ん。もう、おれ、出家しようかな。そうすれば、おれはもう何も求めずに済む。何もやらずに済む。戦国なんか関係なく、ぼんやりと修行。

で、仙人の館へととぼとぼ歩いていたんだけど、途中、急に目の前に影が横切った。

足を止める太郎。太郎に袖を引かれるおれ。

「くせ者です」

と、太郎がこっそり囁いてきたけど、どうでもいいや。殺してくれ。お先真っ暗なおれをひと思いに殺してくれ！

ってことで、おれは無視してとぼとぼと歩く。そして、影が隠れたところに目を向ける。すると、茂みに紛れて、どこかで見たことのある禿げ頭。

「何やってんスか」

尻を隠して、頭かくさず。どっかのくそザル。

「バレているんスけど。藤吉郎殿。出てきたらどうなんですか」

「おみゃあこそ、こんなところに何しに来たんにゃあ？」

と、言いながら、茂みから出てきたけどさ、そもそも、なんで隠れたのさ？　ん？

「おみゃあ、まさか、またおりゃあに抜け駆けして、竹中半兵衛を引き抜きに来たんじゃないだぎゃなあ」

やれ、居丈高な物言いで着物についた葉っぱを払いながら、茂みから出てくるサル。

「あのう、あっしは信長様に命じられたんですけど」

「にゃ、そうにゃのか。そうにゃらそうと、早く言ってくれだぎゃ」

「ていうか、なんで、隠れたんスか。今、隠れたっしょ」

「いんにゃ。隠れてないだぎゃ。じゃ、おりゃあは忙しいから、まただぎゃ」
「やけによそよそしいじゃないですか」
「すみゃん。急いでいるだぎゃ」
くそザル。腹立つな。完全に逃げただろ。
あいつ、美濃攻めの働きも評価されて、今では木下藤吉郎秀吉の名前もそこそこ売れてきているっていうのに、だいたい、なんで、従者も付けずに一人でこそこそ動いているんだよ。
斬られちゃえよ。もう、殺されろ。秀吉の時代が来なくたってどうでもいい。氏ね。
「殿様、まだ、やっかんでいるんですか」
太郎が呆れ顔。おれはむっとする。
「なんだ、その言い草。今のは藤吉郎殿のほうがおかしいだろ。明らかにおれを避けているじゃんか」
「気まずい思いをしていることぐらい理解してあげればいいじゃないですか」
「黙れ。お前はどっちの味方なんだ。まったく」
「太郎は殿様のことを思って率直な意見を申しているだけです」
「うるさいうるさいうるさい。もう、そっとしておいてくれ」
再び歩き出すおれ。後ろからは溜め息。クソッ。
仙人の館に到着し、家の中に入ると、半兵衛は読書中だったみたい。
「ああ、簗田殿ですか。いやあ、今日は来客が多い日ですね」
「あっしは客じゃない。また、厄介になりに来たんだ」
すると、半兵衛は一瞬驚いたけど、すぐに笑った。
「どうしてまた。美濃も攻略できて、一息ついたはずでしょう？」
「もういい。あっしは世を捨てた。もういいんだ。あっしは当分ここに住み、菩提山に寺を建てて出家する。もういいんだ」
半兵衛は別段嫌な顔もせずに、げらげらと笑い上げる。
「で、太郎も一緒に出家ですか？」

「いや、こいつは半兵衛殿の養子にしてくれ。太郎は武士にさせたい。半兵衛殿の子供にしてやってくれ」
で、おれは太郎に顔を向けたんだけれど、太郎はそう言ってもらえて喜んでいるだろうと思いきや、ひどく呆れた顔をしている。いや、むしろ、苦虫を噛み潰したような顔を向けてくる。
「何を無茶なことを」
と、半兵衛は鼻で笑う。
「不躾にもほどがありますよ、殿様」
太郎はまた溜め息。こいつ。本当に生意気な奴だな。おれがどれだけお前のことを思ってやっているか、わかってんのか。くそったれ。こんなガキのために言うんじゃなかった。クソッ。
「拙者はまだ、子供を迎えるような年齢でもありませんし、浪人ですから。いくらなんでも、それはばかりは」
浪人の半兵衛だから、正体不明の太郎を押し付けようと思ったんだよ。そこんところわかれ。
「簗田殿の子にすればいいじゃないですか」
「え？」
「簗田殿は妻子をお持ちでないようですし」
いや、でも、それは・・・。いずれ、できるかもしれないし。できない可能性のほうが高いけど。でも、できるかもしれないし。できるかもしれないのに、突然、パパ？　しかも十四歳の。やだよ、絶対。
「太郎もそれがいいんじゃないのか？」
半兵衛に問われ、太郎は無言。ちらりと、おれを向いてくる。なに、その、何か言いたげな目。何か言えよ。すげえ嫌そうだっていうのはわかるけどさ。何か言ったらどうなの。
でも、おれも何も言えず。無言。ビミョーな空気。
「まあ、この話は置いておいて、とりあえず、お上がりください。いろいろお訊ねしたいこともあるので」
おれは何とも言えないビミョーな気持ちかつ無言のまま、半兵衛

の家に上がった。

時期的にクリスマスイヴのおもひで＼（＾Ｏ＾）／

太郎と共にニート臭全開の部屋で待っていると、半兵衛が持ってきたのは、いつもの湯呑み。
「とにかく、太郎は築田殿が迎える。それがいいじゃありませんか」
腰を下ろし、お湯をずずっと啜る半兵衛。
おれと太郎はだんまり。
「素直じゃありませんね、お互い」
と、半兵衛はくすくす笑う。
「半兵衛、素直じゃないとかそういう問題じゃないよ。あっしは嫌なんだ。で、太郎も嫌なんだ。そういうことなんだ」
「それが素直じゃないということですよ。なあ、太郎」
太郎はぶすっとしているだけ。
「だいたいね、あっしはもう浪人同然の身なんだ。何もかもを捨てて菩提山に来たんだ。だから、息子を持てる身分でもないんだから」
「何をおっしゃっているんですか」
半兵衛はずっと笑っている。
「そのようなこと、信長が許すはずありませんよ」
むう。確かに。
おれが職務放棄して、菩提山に逃げ込んだとなれば、信長は牛狩りを行うに違いない。
「太郎は近いうちに築田殿の片腕となれる器です。しかし、今のまま元服できずに足軽止まりとなるならば、築田殿、貴公が迎え入れるしかないでしょう」
「いやいや、そりゃね、そうかもしれないが、太郎の気持ちだってあるでしょ。そもそも、こいつはあっしを見下しているんだ。なあ、太郎。そうだろう」
「そんなことはないです」
「そんなことあるだろ。どう考えたって」

おれはシラーッとした目を太郎に向けるが、太郎はぷいとあっちを向く。ほら。これだよ、ほら。ただ、こんなことでいちいち目くじら立ててられないから、あんまり言わないだけさ。

しかし、くだらない話だ。逃げ込んできたっていうのに、半兵衛はとんでもないことを言い出しやがる。おれは苛立ちを抑えるように湯呑みを取る。うん。まずい。ただのお湯だ。

ただのお湯に更に苛立ったおれは、湯呑みを置くと、言った。

「それにだよ、半兵衛、これはあっしと太郎だけで決められるような問題じゃないでしょ。太郎の家族――、いや、父親は――、まあ、いないかもしれないけど、母親にもきちんと話さなくちゃ。そうだ、太郎、お前、お母さんはどうしたんだよ。そういえば、お前、ずっと沓掛か墨俣だったじゃないか。おいおい。ちゃんとお母さんに会えよ。いや、むしろ、お母さんと一緒に住みなさい。うん。それがいい。お母さんもきっと喜ぶ」

「母はいませんけど」

「え？」

病弱の母親がいるんじゃなかったっけ。最初、お前と会ったとき、お前の本当のパパが言ってたぞ。

「殿様の小姓になって一カ月もしないうちに亡くなりました」

しれっと言う太郎。むしろ、ふてくされぎみ。

いや、だって、そんな素振り見せたことないじゃん。太郎が沓掛に来たのはもう七年前、八歳のころ。その一ヵ月後に母親が死んだって、じゃあ、八歳だったこいつは、そんな素振りも見せずに、淡々と小姓をやっていたってわけ？

おれ、少し、気が沈む。

沈黙。半兵衛もただただ湯呑みを啜っているだけ。

「太郎は天涯孤独の身です」

と、仏頂面。

・・・・。

おれは、ぽわーんと思い出してしまった。返り血を浴びた太郎が

菩提山にやって来た去年の冬の日のこと。
おれを突き飛ばして泣いていたっけ。
そのとき、ああ、こいつ、おれのこと心配してくれていたんだなって思ったけど、反面、おれって、太郎のことを何も知らない。
おれは太郎のことを思ってやっている気でいたけど、実は、あんまり行き届いていなかったみたい。気配りとか、思いやりとか、よくわかんないけど、そういう関係のやつが足らなかったみたい。
そうかもな。おれはいつも足らないんだ。気持ちが足らない。
だから、うまくいかなかったのかな。めぐみちゃんもチヨタンも。
だって、おれは経験値が低いんだ。恋するとか愛するとか、そういうキャリアがないんだ。クリスマスイヴはいつだって一人さ。一人なのに、ＰＣの画面のあずにゃんの前にケーキを置いて、一人じゃないなんて思っていたんだ。でも、一人。リアルな恋も愛も持ったことがないおれ。
いや、クリスマスイヴに一人じゃなかったときもあった。ずっと、ずうっと昔。親父とおふくろと三人で行った、近所の洒落たイタリアンレストラン。
あのときのクリスマスプレゼントは「漫画・日本の歴史」全二十巻。
「太郎、おれの養子に入れ」
ぼそっと呟いたおれ。
「え？」
「いや、だから、おれの子供になれよ」
「いや、でも」
「なんだよ。これは主人としての最後の命令だ」
「いや、でも、そうしたら殿様、御婚姻が出来なくなってしまうかも」
「そんなのはもういい！　もういいもういいもういい！　逆に踏ん切りがつく！　もういいんだ！」
やけくそ気味のおれを心配そうに眺めてくる太郎。もういいから。

そんな顔しないでおくれ。もういいんだ。太郎が息子になる。甲斐性なしのおれが嫁さんなんかもらうより、太郎みたいな立派な奴がおれなんかの息子になる。実はそっちのほうがいいのかもしれないんだ。

「太郎」

と、言ったのは半兵衛。厳しい眼差しで太郎を見つめる。

「このようなご厚意を無碍にするような人間は、結局ろくな武将にはなれませんよ」

その言葉にしばらく黙りこくる太郎。嫌で黙っている感じじゃない。眼差しに大人の力強さが帯びているといった感じ。現実味が出てきたという感じ。

いや、むしろ、これを期待していたのかも・・・。

「かしこまりました」

と、太郎がうなずき、にこっと笑った半兵衛。

「良かったですね、太郎。これからは簗田殿を父上と呼ぶんだよ。簗田殿も、父上と呼ばれるんですからね」

「・・・・」

独身、童貞のまま、突如、十四歳の男の子のパパになったおれ。。。

オワタ＼（＾Ｏ＾）／

簗田左衛門太郎広正

簗田左衛門太郎広正。

が、太郎の元服後の名前。元服の儀式って正式なものとかがあるらしいけど、所詮親父はおれで、子供は身元不明の太郎。だから、立会人は半兵衛だけという簡素なもの。

しかし、これで、おれはとうとう人の親に。ウウッ。子作りを一度もしたことがないのに。

勢いで親父になってしまったような気もするが。多分、ここでやっぱりヤメタなんて言うと、太郎に殺されるかもしれない。

後戻りはできないのだ。

ちなみに太郎のちゃんとした名前を付けたのは半兵衛。公式名の広正の「広」は、マリオの奥さんの親父の織田信広から一字。遠回しな嫌がらせｗｗｗ　半兵衛もなかなか意地の悪い奴ｗｗｗ

で、通称名の左衛門太郎。これはもっとひどいｗｗｗ

太郎っていう名前の奴はいっぱいいるから変えようって半兵衛が言い出したけど、太郎の前に左衛門を付けただけ。でも、実は太郎の本当の父親のマリオの通称名が五郎左衛門だから、左衛門太郎。あてつけｗｗｗ　うぇっｗｗｗ

太郎を捨てたマリオ、これを聞いたらどんな顔をするだろう。ざまあ。そして、ナイス半兵衛。さすが天才軍師ｗｗｗ

「竹中様に烏帽子親になってもらうなんて、簗田左衛門太郎広正、果報者でございます」

キリッとした顔つきで平伏する太郎。何のことだかよくわかんないけど、左衛門太郎が出来た息子ということで万事オッケー。

万事オッケー。そう。それでいいんだ。

「そんなかしこまられても困りますよ、太郎。そういう真似はここではよしなさい」

「はい」

今までは名無しの太郎だったっていうのに、長ったらしい名前を付けただけで、ずいぶんと大人びるものなんだな。

てか、おれの牛太郎っていうのもいい加減に変えてほしいがね。で、太郎は半兵衛に酒を盃なみなみに注いでもらい、ぐいと飲み干す。途端に渋い顔。ワロス。まだまだ子供。

「しかし、簗田殿、太郎は成人したのですから、いつまでも小姓感覚で連れ回すわけには行きませんね。そろそろ、従者の一人や二人は雇いませんと」

「そのうち考えるよ」

なぜなら、今はそういうことを考えたくない。イエモンに裏切られたばかりだから。

「そういえば」

と、言いながら、太郎の盃に酒を注ぐおれ。太郎は嫌そうな顔だが、さっさと酔いつぶれてくれ。半兵衛とは突っ込んだ話をしたいから、太郎がいると何かと面倒。

「訊ねたいことがあるって言っていたけど、なんだろ」

「ああ、実は、簗田殿がやって来る直前に、木下藤吉郎がここを訊ねてきたんです」

腰を下ろし、お湯をずずっと啜る半兵衛。なぜか酒は飲まない。多分、飲めないんだろう。

「信長の下に付かないか。用件はそれです」

「入ればいいじゃん。織田に」

あ、でも、半兵衛が織田家に仕官したら、おれが居候できなくなっちゃうのか。

「信長の家臣になるなど、願い下げです」

ほっ＾＾

でも、いつかは仕官するんだもんな。どちらにしろ、おれは流れ者。なら、半兵衛を信長のところに連れていったほうが、おれの手柄になるけれど、説得するのは容易じゃなさそう。

だから、いいや。

「ただ、木下藤吉郎には興味があります。簗田殿が話していた通りの器なのかどうなのか」
ちらっと太郎を見る半兵衛。太郎は恐る恐る盃に唇を近づけていて、顔はすでに真っ赤。
「あの者がどこまで行くのか、傍で見てみたいというのも率直な思いです」
ふーん。てことは、半兵衛の登用もサルの手柄になるってことだな。チェッ。ま、半兵衛はサルの片腕になる男だし。。。チェッ。
「とりあえずは断りましたが、また来ると申しておりました。百姓上がりだけあって、ちょっとやそっとのことは気にしない男なのでしょうな」
「まあね」
気にしなさすぎっていうのもあるけど。まあ、今日はさすがに悪びれていた様子だけど。
「木下藤吉郎が予想通り、いや、想像以上の人物であったら、拙者は織田に仕えてもみようかと考えています」
「ああ、そう」
つまらなそうな顔のおれをじっと見つめてくる半兵衛。やがて、ふふと笑う。
「まあ、簗田殿にはすべて見通されているのですからね。それを思うと、拙者の言葉も、どこか虚空の中のような気がしてしまいますが」
「そんなことはないよ。何も見通せてなんかいないよ」
わかっているのは、信長が死んで秀吉が天下を取るっていうだけ。それだけだもん。半兵衛が言うようにすべてを見通せていたら、失恋はしなかったし、信長に追い立てられることもないんだから。
「おれは大変なんだ。ようやく美濃を攻略できたっていうのに、息つく暇もなく次の命令だよ。足利義秋って知っている？」
「ええ。先代の将軍、義輝公の弟君ですね。なんでも、悪党の松永弾正と三好の者どもが義輝公を殺害したとき、その義秋様は危うい

ところを京から脱出できたとかで、今では越前の朝倉に身を寄せているみたいですよ」
「知っているの？」
ラッキー＾＾　さすが半兵衛。
「実は、今朝にも来客がありまして、それが明智十兵衛様だったんです」
「ああ、おれの心の友の十兵衛ね」
「なんでも、信長のことについて、知っていることがあったら教えてくれと。まさか、仕官するおつもりかと訊ねてみたら、いや、実は、都でのさばっている松永弾正や三好の者どもを追い払い、かつ、将軍家を再興できるような人物かどうか知りたいと。なんでも、十兵衛様は義秋様と親交を持っているそうで」
なあんだ。グッドタイミングじゃん。じゃあ、十兵衛は今まだ美濃にいて、もしかしたら、もうすでに信長のところに行っている可能性も大なんだな。
「ただ、拙者は、信長など取るに足らぬ者と申しました」
は？
「都の悪党を追い払っても、将軍家にとってはより強大な悪党となるのが信長であると、拙者は申しました」
「なにやってんだよお」
ハア、と、思わず溜め息。隣の太郎は首を垂らして寝息。もうつぶれたのかよ。
「おれはね、信長に命令されているのよ。義秋を連れて来いって。これからの信長の狙いは上洛なんだよ。それで将軍を担ごうとしていんだよ」
「それはきっと信長の狙いではなくて、簗田殿の進言ですね」
口端を緩ませて、いやらしい笑みを浮かべる半兵衛。これが軍師半兵衛のもう一つの恐ろしい一面。優しい人間だけど、一方で血も涙もない策略家。
「そ、そんなことより、おれはそう命令されているの。だから、十

兵衛がそうやって言っているんだったら、おれからしたら願ったりかなったりな訳なんだよ。それで十兵衛はどこに行ったのさ」

「ひとまず、明智庄に寄るとおっしゃっていましたが」

明智庄か。

行きたくねえええぇぇ。

カオスな予感

明智庄には足を踏み入れたくないおれは、一旦、岐阜に戻ることに。

「父上」

・・・・。

「父上！」

「なんだよ」

「なんで何も答えないんですか」

「そ、そりゃ、慣れてないからだろ。そんな急に親父扱いされたってよくわからないじゃんか」

すると、太郎はにやにやと笑う。

「ははあ。気恥かしいんですね」

「馬鹿者！」

と、おれは親父気取り。あ、親父か。

「父親を軽んじるようなことを言うんじゃない」

太郎はにやにや。父の威厳ゼロのおれ。むう。そりゃそうだ。子作りを一度もしたことのないおれが父親の威厳なんて出せるわけねえ。

「で、なんだよ。何か用があるんだろ」

「いや、太郎は父上の息子になったんですから、おやかた様に伝えなくてはいけないんじゃないんですか？」

「いいよ、そんなの」

目的が達成するまでは戻るなって言われているし。

「そういうわけにはいきません。太郎は今までの太郎ではないのですから。簗田家の跡継ぎなのですから」

「何を出しゃばってんだよ、お前。いいか、おれが結婚して子供が産まれたら、お前なんて追い出すからな」

「はいはい。その日が来てくれたら、太郎も幸せですけどね」

ぐぬぬ。息子になったらなったで生意気に拍車をかけやがって。こいつ、いっぺん、がつんと叱ってやらねえとな。クソッ。

で、道中、親子喧嘩を繰り返しているうちに岐阜の城下に到着したおれ。

とりあえず、明智十兵衛を捕まえなくちゃいけないんだが、明智庄には行きたくない。越前にも遠いから行きたくない。まあ、十兵衛が明日明後日に美濃を出るわけはないだろうし、もしかしたら岐阜に立ち寄るかもしれない。岐阜に待機していれば十兵衛と会えるかもしれないし、岐阜にいれば十兵衛の情報も取れるだろう。

岐阜の城下はあちこちから大工作業の音が聞こえてくる。信長が岐阜城を居城にすると決めたんで、武将の妻子や家臣、兵隊たちも岐阜に在住するってことで、城下は急ピッチで復興中。

「へい、旦那！　今だったらこの刀、百銭で売るよ！」

「奥さん奥さん！　これは将軍家お墨付きの西陣織ってやつだよ！　今なら織田様の戦勝記念で安くしておくよ！」

銭ゲバの商人たちも戦争が終わった途端に大挙してやって来て、岐阜はなかなかの騒がしさ。路上では日常生活品や戦争の武器の叩き売り口上が盛ん。

「なんだ、これは。わらわは西陣織というものを見たことがあるが、このような粗悪な反物ではなかったぞ」

「いや、奥さん、何をおっしゃいますやら。この繋ぎ、どう見たって西陣のものでないですか」

「奥さんだと？　わらわが誰かの女房だと？」

「いや、その」

なーんか、揉めているところに出くわしてしまったんだけど、素通りしようと思ったら、因縁をつけている女の格好がやたら変態チックで、足を止めてしまったおれ。

「こんな粗悪品で織田の女房連中をだまそうとしても、わらわの目が黒いうちは狼藉も用意に働かせんぞ」

「いやあ、勘弁してくださいよ、奥さん」

「奥さんって言うな！　わらわは誰の女房でもない！」
前髪ぱっつんのオカッパ頭。顔は可愛いけど、着物が見たことない派手なやつで、ちゃんと羽織っていない。いわゆる、今の時代で言うかぶき者。変態。てか、ＤＥＳＩＲＥのときの中森明菜にそっくり。
「なんなんだ、あの女」
と、遠くからこっそり呟くと、太郎がきょとんとする。
「え？　知らないんですか？　あの方は柴田権六郎様の妹君の梓殿ですよ。父上、知らないんですか？」
「え！？　あずにゃん！？」
思わず声を上げて、太郎にシラーッとされるおれ。
ゴ、ゴホン。
「いや、梓という女など知らんな」
「まあ、父上は最近ずっと尾張に戻っていなかったですもんね」
太郎の話によると、梓の名をかたる不届き者のデザイナ（ＤＥＳＩＲＥのときの中森明菜）は、上も下も女姉妹だらけのゴンロクの一番下の妹で、二十七、八歳ぐらいの行き遅れ。というのも、彼女が十五歳のときに、ゴンロクと仲がいいマタザと婚姻する話が出たんだけども、マタザがあまりにも偉そうでむかついたらしく、デザイナがマタザの股間を蹴り上げて破談。
十八歳のときにはゴンロクの子分のウザノスケとの婚姻話が出たんだけど、ウザノスケにお前の息は臭いと言ったところ、ウザノスケがキレた。でも、デザイナは股間を蹴り上げた挙げ句、木刀でボコボコにして破談。
で、そんな、じゃじゃ馬ムスメなんて誰ももらいたくなくて、行き遅れ。しまいには変な格好をし始めて、五年前ぐらいからは清州では有名なかぶき者になってしまったらしい。
柴田家の面汚しと、約二十歳年上の兄貴のゴンロクも頭を抱えているらしい。ざまあｗｗｗ
まあ、そんな危なっかしい女には関わりたくないんで、こそこそ

と背後を通り抜けていくおれと太郎。
「おい、牛！　牛じゃねえか！」
うっ。なんだよ、そんな大声で呼んで。誰だよ。って、体を縮ませていると、馬がパカパカと歩み寄って来る。
「お前のでかい図体、すぐにわかったぞ。久しぶりだな、牛」
馬上を見上げてみると、お久しぶりです、マタザさん。最悪ですけどね。
で、馬なんか乗っていて目立っているから、デザイナの視線もこちらに。
マタザにデザイナ。ＤＱＮ連中が集まって、なんか、カオスのかほり。

織田の女番長

馬から降りてくるマタザ。いや、いいから降りなくたって。さっさと行ってくれよ。

「昨日、お前の家を訪ねたんだぞ。まったく、忙しい男だな、お前は」

うーん。久しぶりに会ったマタザは雰囲気がやや変わっている。なんか、落ち着いた感じ。なんでも、子供が三人もいるらしいからな。クソッ。お楽しみやがって。クソッ。おれなんて、お楽しみも知らずに十四歳の父親（´・ω・`）

「今からどこかに行くのか、牛」

「いや、別に、家に帰るだけッスけど」

「じゃあ、俺の家に来いよ。久しぶりだ。まつもお前に会いたがっているしな」

「じゃあ、わらわもお邪魔してよろしいかしら、又左衛門殿」

うっ。いつのまにか馬の陰から前髪ぱっつん女のデザイナが。にたにたと笑っていやがる。

「うっ」

と、デザイナを発見してうめいたのはマタザ。

「こ、これは、あ、あ、梓殿。お、お久しぶりですなあ」

「あら。わらわは先日、拝見したぞ。馬小屋の裏で立ち小便をしておったでないか」

「うっ。こ、これは梓殿にお恥ずかしい姿を見られたようで」

にたにたと笑いながらマタザに近寄るデザイナ。腕輪をじゃらじゃら鳴らして。そして、背丈のあるマタザを見上げると、小さい握りこぶしでいきなりの金的パンチ。股間を押さえて悶えうつマタザ。

うわあ。ヤバい。マジでヤバいよ、この女。

「拾阿弥を斬ったそなたともあろう人が、この前のいくさではおめおめと逃げてきたそうではないか」

「うう。堪忍してくだされ、梓殿」
「尾張のかぶき者も人の親となってしまったかあ」
と、にやにやしながら、おれに顔を向けてくるデザイナ。ヤバい、マジでヤバい。太郎もビビっているところを見ると、目の前のオカッパ女は相当ヤバい。小顔で目がくりくりしていて、花のつぼみのような唇。相当の美女。でも、相当の女番長。
「そなたが例の珍奇衆筆頭か」
「は、はいっ」
と、直立不動のおれ。
「く、沓掛城主、簗田牛太郎政綱でございます！　お、お初にお目にかかります！」
「へえ。そなたがねえ」
と、おれに近づいてくるデザイナ。で、細い指で二重顎をぐいっと持ち上げられる。う～ん、いい匂い。
「どこからどう見ても、織田を惑わす者とは見えんがなあ」
「ど、どういうことでございましょっ？」
「ふん。おやかた様の犬の兄上が言っているだけのこと」
ううっ。そんなに顔を近づけられると、どきどきしてくるよ。めっちゃ可愛い唇しているし。ううっ。襲いかかりたくなるぐらい色気ムンムンじゃねえか。変態のくせに。
「そなた、明智庄の女子供を居城に預かっていたそうじゃないか」
「え、いや、それは、その」
「それを聞いたときは、なかなかの男だと思ったが、実際見ると、これも聞いた通りのただの牛」
そう言うと、きゃっきゃっきゃと笑い上げたデザイナ。ううっ。まるで信長の女バージョンじゃねえか。
「そなたの織田を惑わす話とやら、わらわも聞いてみたい。今度、そなたの家に邪魔するぞ」
と、おれの顎から手を離したデザイナ。いや、来ないでください。てか、どうして、おれの周りにはこんなＤＱＮばっかり集まってく

んのよ。
「では、又左、まつによろしくと伝えておくのだぞ」
「ぎょ、御意っ」
つかつかと去っていくデザイナ。
額の汗をぬぐうマタザ。マタザまでこの有様なんて、デザイナってもしかして織田家最恐？
やっぱり、岐阜に帰ってこなければよかったかな・・・。

つかの間の休息？

「モーモー！　モーモー！」
ウウッ（´；ω；`）
「姉上ばかりずるい！　犬千代も乗りたい乗りたい乗りたい！」
「モーモー！　モーモー！」
ウウッ（´；ω；`）
どうしておれがガキどもの遊び相手に。おれは天下の簗田政綱だぞ（通称は牛太郎だけど・・・）。マタザもなんで止めねえ。クソッ。
「幸、犬千代、やめなさい。牛太郎さんがお困りでしょう」
侍女と共に膳を運んできたおまつ。（＊´Д`＊）アハァ　美しさに磨きがかかっていて、マタザが羨ましい。初めて会った時のおまつは十三か十四の少女。あれから約七年。ええなあ。ええなあ！
「牛さんは働き者だもん！」
と、マタザの娘、おれのケツを棒きれでびしびしと叩く。ＤＱＮ娘め。
「姉上ばかりずるい！」
「もうよしなさい。おみつ、この子たちを連れて行ってください」
「はい。ほら、幸様に犬千代様、ご飯の時間ですよ」
「やだー。幸もこっちにいる！」
「遊びの時間は終わりだ！」
と、マタザが突然一喝。ガキどもはしょんぼり。侍女に手を引かれてすごすごと出て行く。最初から叱れよ、クソマタザ。
「遊びたい盛りでやかましくて仕方ねえな」
「ごめんなさいね。相手をしてもらっちゃって」
おまつがそう言うんなら、許す。
「大したものではありませんが、おかわりはたくさんありますからね」

戦国時代にタイムスリップした日、こうしてマタザとおまつに昼食を御馳走になったけれど、あの日に比べると、膳の上に並んだ食事も立派になっている。ご飯はちゃんとした白米。大きめの魚。野菜とみそ汁付き。そういえばマタザも森部の戦いで加増してもらったんだったな。

「牛と初めて会った日もこうしてメシを馳走したな」

「ええ。懐かしいですね」

まあ、その日、ボコられもしたけどね。マタザは忘れているっぽいが、おれは忘れていないよ。

「あのころを考えると、お前もずいぶんと出世したもんだな」

「そうッスね。マタザさんもいろいろありましたしね」

「まあな」

と、味噌汁を啜るマタザ。あんまり思い出したくないのかな。ププｗｗｗ　おれに土下座したもんね＾＾

「そういえば、あの子供は牛の家臣にでもなったのか？　あいつは元々お前の小姓だった者だろう」

「ま、まあ」

実は息子なんですけどね。アハハ・・・。

「それにしたって、お前は家臣が少なすぎるだろう。聞いたところによると、一人か二人ぐらいしかいないって言うじゃねえか。城主ともあろう者がなあ」

いや、一人もいないんスけどね。アハハ・・・。ついこの間、逃げられたばっかり。

「いつまで経っても嫁を娶る素振りもないしな」

アハハ・・・。もうやめて。心が痛い。てか、これは落ち着いたマタザの新たなイジメ手法ですか。

「お嫁さんなんて、すぐ見つかりますよ、牛太郎さん」

ウウッ。おまつに言われると、なんか救われる。マタザが本当に羨ましすぎる。

「千代さんのことは忘れて、ね。また、素敵な女性と、お会いでき

ますよ」
え？　いや、それはさあ、ぶり返さないでよ。
つーか、なんで、おまつがチヨタンを知っているのよ。
「なんだ、その千代という者は＾＾」
ほら、マタザが食いついてきた。もうやめて。もう聞きたくない、その話。イヤッ。もうイヤッ。
「あっ。いや、その」
と、おまつはしょぼーんとしているおれを見て、あわてて口をつぐむものの、マタザが茶碗を持ったまま前のめりになってくる。
「何かあったのかあ＾＾　その千代とやらと牛の間に何かあったのかあ＾＾」
「えーと、そのう、寧々さんから聞いたんですけれども」
ちらりとおれを伺ってくるおまつ。ハア。奥様方の井戸端会議、恐るべし。
「失恋したんスよ、あっしは。その千代という女に失恋したんスよ」
「失恋？　どうしてだ＾＾」
どうせマタザは引き下がらないから、事の成り行きをかくかくしかじか、泣く泣く話したおれ。
いつのまにか、おまつはそろりと逃げていた。

手柄取引

嫌な思い出を振り返させられて、しょんぼりと前田家をあとにしたおれ。

失恋って嫌だな。本当に。他人の失恋ほどおもしろいものはないけどさ。きっと、マタザはそんな気分だったんだろう。クソッ。あいつは本当にクソだ。イケメンだし、強いし、嫁は若くて可愛いし。久々に思ったぜ。マタザ氏ね、と。

明智十兵衛の居所を知るために、サマルトリア王子を探すドラクエ？の気分で城下町の人々に訊ねていきたかったが、もう、仕事の気分じゃない。

稲葉山城の頂に聳え立つ岐阜城をぼんやりと眺めるおれ。信長の野郎。無茶なことさせやがって。おれなんかのスキルで事を上洛に向けていけるわけねえじゃねえか。

上洛か。

そうだ、いつまでも尾張の連中とつるんでいるから、こんな嫌な思いをするんだ。遠い京都に行けば、おれの噂がおまつや遠山さんの井戸端会議に出ることもないはずだ。それに京都に行けば、新しい出会いも。ムフフ。ただ、太郎というこぶつきになってしまったのが痛いが。

いや、そんなのは隠していればいい。太郎は元服したんだから、岐阜か沓掛に置いておき、おれは京都で遊び回る。それがいい。こんなところ早く出ていきたい。

ならば、さっさと明智十兵衛を見つけなければな。

でも、やる気を失ったおれ、今日は帰宅。明日から本気出す。うん。

仮住まいに帰ってきたおれ。仮住まいと行っても、清州にいたときのボロ家とは訳の違う、ちょっとした屋敷。ただ、がらんどう。普通だったら、女中や従者のお出迎えなんだろうけど、そんなのい

ないおれ、寂しく帰宅。まあ、太郎がいるし。従者なんてそのうちできるだろ。明日から本気出すし。

で、玄関には見慣れない草履。誰か来ているみたい。

「おーい。太郎ぉ。帰ったぞお」

誰だかわからないので、とりあえず太郎を呼んでみる。すぐさま、太郎が水の入った桶を持ってやって来る。

「父上、お客様ですよ」

「知っている。誰？」

と、桶の中に突っ込んだ両足を洗うおれ。

「木下藤吉郎殿です」

なんだ。サルか。何の用だよ、まったくよ。とうとう詫びをいれに来たのか。フン。どうせ、遠山さんにべらべらと喋ったのもあいつだろ。おもしろおかしく喋ったんだろ、どうせ。

足を洗い終えて、サルを待たせている板間へ。

「にゃあ、遅かったでにゃあか、牛殿」

遅かったじゃねえよ。何様だよ。クソッ。サルの膝元には湯呑みとお菓子があるし。何やってんだよ、太郎は。こんなやつにこんなもの出さなくたっていいんだよ。

「何の用スか」

と、不機嫌にサルの前に腰を下ろすおれ。

「おみゃあ、太郎を養子に迎えたんだってにゃあ？」

「ま、まあ」

チッ。べらべらと喋りやがって、太郎のやつ。どうして、どいつもこいつも口の軽いペラ男なんだよ。

「牛殿もとうとう人の親きゃあ」

「で、用はなんスか」

「いやにゃ、さっき太郎と話していたところだぎゃ。元服の祝いに差し物をやろうきゃと思ってにゃあ」

「なんスか、サシモノって」

「刀だぎゃ。武将になったっていうのに、刀の一振りもなきゃあ、

格好がつかないだぎゃあな」
「そんなもんいらないッスよ」
「なんでだぎゃあ。おみゃあ、息子に恥を欠かせるのきゃあ？　戦場にだって出れないだぎゃあ」
「だって、あっしだって、刀なんか持ってないッスもん。そんなもんなくったって、今までいくさ場には出てきましたよ、あっしは」
「おみゃあは戦場で逃げ回っているだけだぎゃ」
ぐぬぬ。この野郎、おれを愚弄しに来たのか。ゆくゆくは天下人になる男だから、おとなしくしてきたけどよ、もう、マジで切れる五秒前だかんな。
「そんにゃことよりもにゃ、今日は牛殿に頼みがあって来たんだぎゃ」
「なんスか」
「いにゃ、そのにゃ、おみゃあは美濃攻めのときから竹中半兵衛に会っていたんだぎゃな。おみゃあ、半兵衛とどこまで繋がりがあるんだにゃあ？」
ははーん。この野郎、自分では半兵衛が説得できねえと見て、おれに泣きをいれてきたんだな。このクソザル。最初からそう言えばいいものを。
いや、待てよ。こいつは、おれが信長に半兵衛を連れてこいと命令されているのを知っていてもなお、手柄を自分のものにしようと企んでいるんだ。
この、腹黒サルめ。
けれど、おれも半兵衛を説得できそうにない。むしろ、半兵衛はサルの下に付くのなら考えていると言っていた。そうすると、おれとサルの得意の二人土下座で行けば半兵衛は折れる。
ただ、それじゃ、おもしろくねえ。サルに手柄をあげさせるだけだ。
「半兵衛とはそこそこ仲がいいッスけど」
なら、おれにも手柄をあげさせろって話だ。となると、明智十兵

衛か。
「まあ、別にあっしからも説得したっていいッスよ。そうしたら多分、半兵衛は仕官するかもしれませんけど。ただ、一つ、条件がありますが」
「にゃ、にゃんだ」
急にあわてやがって。フン。イエモンとチヨタンを引き剥がせなんていう女々しい真似なんかしねーよ。クソッ。
「明智庄の石川小四郎を岐阜に連れてきてくれねえッスか？」
「にゃ？　石川きゃ？」
「はい」
「そんにゃこと、別に構わんぎゃ。けど、何をするつもりだぎゃ。まさか、千代殿――。いんにゃ、なんでもにゃあ。わかったぎゃ。連れてくるだぎゃ」
「半兵衛のことは、石川殿を連れてきてからってことで」
「わかったにゃ。早速、明智庄に行ってくるだぎゃ」
と、言って、板間を出て行ったサル。行動力があるところだけは認める。それ以外のところは何も認めねえ。何も認めねえよ。

よかだぎゃよかだぎゃ！

次の日の夕方には石川小四郎を連れてきたサル。腹黒さと素早さだけは天下一。

で、サルを一旦帰らせて（聞かれると、サルの手柄にされちゃうから）、石川小四郎に明智十兵衛の消息を訊ねる。チヨタンのじい様だから、あんまり頼みたくなかったけれど、四の五の言ってられん。

石川小四郎の話によると、ついこの間、明智十兵衛は従者とともに明智庄にやって来て、そのまま、十兵衛一族の居城だった長山というところにあるホッタテ小屋に居座っているらしい。

いつ、また、いなくなるかはわからないということで、おれはすぐさま手紙を（太郎の手を借りて）書き、それを明智十兵衛の元に届けてくれるよう頼んだ。

もう、陽が暮れていたけれど、石川小四郎はおれに恩を感じているらしく、夜道も関係なく明智庄に戻って行ってくれた。

で、半兵衛を説得しなきゃいけないから、次の日、朝早くから我が家に押しかけてきてぎゃあぎゃあうるさいサルと二人で菩提山へ。

道中、サルは、出来れば半兵衛を自分の与力にしたい。だから、牛殿もそこのところを加味してくれと言ってきた。

あのあとにもう一度、半兵衛のところに行ったそうで、あえなく断られたらしい。

「でも、そんなこと、信長様が許してくれるんですか。信長様が半兵衛を連れて来いって言っているんですよ」

「そんにゃの、どうにでもなるだぎゃ。あんにゃ、おりゃあには、あいつぐらいの頭のいい奴が必要なんだぎゃ。岐阜攻めの功で、おりゃあもそれなりの足軽隊を率いるようになったぎゃ。でも、おりゃあは百姓上がりだから、頭が悪い。軍略のにゃんも知らん。だからにゃ、竹中半兵衛はどうしても欲しいんだぎゃ」

自分をわかっている素直な奴なんだな、サルは。ただ、自分勝手だけどね。

そうこうしているうちに菩提山に到着。仙人の館に行ってみると、半兵衛はやっぱり読書中。

「ああ、簗田殿。この間ぶりですね。あ、木下殿もですか。またですか、木下殿。三顧の礼でも習ってですか？」

「サンコノレイ？」

と、サルが首を傾げる。ふふ、と、笑った半兵衛。おれもサルを馬鹿にするようにして笑ったけど、実はおれもよくわからん。

「まあ、おあがりください。お二人が揃って来たということは、だいたい、わかります」

相変わらずのニート部屋に、サルとおれが並んで、向かいに半兵衛。

「用件は一つ、織田に仕官せよとのことですね。木下殿に簗田殿」

「うん。そう」

「半兵衛殿！」

と、急に大声を上げながら、両手を床につき、頭をこすりつけたサル。あーあ、得意の土下座ですか。でも、おれはしないよ。やっぱ、おれはしない。だって、おれの仕事はもう済んだから。

「頼む！　頼むきゃら、織田の下に来てくれだぎゃ！　いんにゃ、おりゃあの知恵になってくれだぎゃ！　おりゃあは馬鹿な百姓上がりだから、おみゃあみたいな賢人が必要なんだぎゃ！　頼む！　頼むだぎゃあっ！」

「いいですよ」

「え？」

「にゃ？」

あまりにもあっさりとした答えに唖然とするサルとおれ。

「拙者が言うのもなんですが、拙者は裏でこそこそとされるのが嫌いです。その点、木下殿は正面からぶつかってきてくださった。ただし、条件を一つだけ付けさせてください」

「にゃ、にゃんだぎゃ」
「もしも、木下殿が天下の覇者となったとき、ここにいる簗田殿に百万石の領地をお与えくだされ」
え？　マジで？
「にゃ、にゃ、お、おりゃあが天下の覇者？」
「左様」
半兵衛は大真面目。お前って奴は・・・。
「にゃっはっはっは！　よかだぎゃよかだぎゃ！　おりゃあが天下人になれるものにゃら、牛殿には百万石、いんにゃ、天下の半分をくれてやるだぎゃ！　にゃっはっはっは！」
「その言葉、しかと聞きましたぞ」
「よかだぎゃよかだぎゃ！　半兵衛にはその半分をくれるだぎゃ！　それで、おりゃあは明国に攻め入ってやるだぎゃ！　にゃっはっはっは！」
サルはわかっていない。いや、わかるはずもない。自分が天下人になれるだなんて。でも、サルだけが信じていないし、サルだけが笑っている。半兵衛は笑わないし、おれはワロえない。
自分が天下人になったら、天下の半分をおれにやるだと？　こんな恐ろしい与汰話があるかよ。だって、天下人になるんだもん。そのときが来たら、サル、お前、本当にどうするつもりなんだよ。

やりきれないほど退屈なときがあるわ

半兵衛獲得に貢献したおれ。夕刻、西日が揺れる中、サルと共に岐阜に戻ってくると、明智十兵衛からの返事が来ているかどうか気になり、サルがまた我が家に来いと言い出したのを振り払い、帰宅。で、玄関には見慣れない草履。誰か来ているみたい。

って、誰？　サルとは先ほど別れたばかりですけど。今度はマタザかウザノスケ辺りだな。クソッ。腹黒のあとはＤＱＮかよ。クソッ。

「おーい。太郎ぉ。帰ったぞお」

と、まあ、誰だかはわからないので、とりあえず太郎を呼んでみる。すぐさま、太郎が水の入った桶を持ってやって来る。が、顔がかなり引きつっている。

「ち、父上、お、お客様です」

桶を持つ手が震えている。え？　誰？　なんでそんな怯えているの？

「し、し、柴田様が。柴田様が来ていらっしゃいます」

うえっ。どうしてゴンロクが。。。ま、まさか、この前のデザイナとの絡みの件で？　お、おれ、なんかやっちゃったのかな・・・。

「と、とりあえず、落ち着こうか、太郎。とりあえず、な、足を洗わせてもらおうか、太郎」

どうして、ゴンロクなんかがおれの家に。むう。悩みながら、両足を洗うおれ。正直、ゴンロクとはまったく絡んだことがない。唯一あるのは、タイムスリップした日に斬られそうになったっていうだけ。あとは度々睨まれるだけ。ヤバい。ヤバス。

「太郎、おれに何かがあったら、沓掛のマリオ、いや、ゴロザ殿のところに行け。いいな？」

「は、はい」

遺言を残し、重い足取りで廊下を行くおれ。ううっ。ゴンロクは

絶対におれを嫌っている。そして、この前、デザイナと関わってしまって、もしや、ゴンロクの逆鱗に触れるようなことを言ってしまったのかもしれない。最低でもボコり。最悪、斬首。オワタ。

で、居間をそろりと覗いてみる。と、あれ？　真っ赤な着物が寝そべっている。おかっぱ頭。

なんだ、デザイナか。太郎のやつ、ビビらせやがって。

「ようやく来たか、牛」

デザイナは頬杖をついたまま視線だけをこちらに向けてきて言う。

「お主は玄関に入って来てから、どれだけわらわを待たすのだ」

「い、いや」

おれはとんでもない勘違いをしていたかもしれない。どうして、客がデザイナだからって、ほっとしてしまったんだ。ゴンロクのほうがよかったんじゃないのか、実は。

「さっさと入らんか」

「は、はいっ」

あのう、おれの家なんスけど、ここ。

「入ったらちゃんと戸を閉めんか」

「は、はいっ」

障子戸をきっちりと閉めるおれ。てか、なんで、おれが躾を受けてんのって話。

「なにをぼうっと突っ立っておる。さっさと座らんか」

「は、はいっ」

寝転がっているデザイナの前にそろりと腰を下ろすおれ。

「で、な、何の御用でございましょ」

「話を聞きに来たのだ」

「は、話ですか？」

「兄上が言っていたぞな。お主は後世の世から来たとか抜かしている物狂いの者だと」

「あ、ま、まあ、物狂いみたいなもんス。アハハ」

「ほーう」

と、言いながら、体をゆっくりと起こしたデザイナ。そうして、長い睫毛を被った黒い瞳でじっとおれを見てくる。いや、あの、そんな見ないで。

「お主は自分を物狂いと認めるのか」

「いや、ど、どうでしょう」

「兄上はお主のことを何も話してはくれん。だが、お主はおやかた様にずいぶんと気に入られている。なぜ、あのおやかた様がお主のような者を」

「いやあ、どうしてでしょう」

「とぼけるな！」

ひいっ。怒った顔はまさに鬼女。

「お主、おやかた様に取り入って、何を企んでいる」

ううっ。結局はデザイナもゴンロク同様、おれを怪しんでいるってわけね。でも、何も企んでいないし、成り行き上こうなってしまったことだし、説明のしようがないよ。

「ああ見えて、おやかた様は心優しき御人。又左のときもそうだ。結局はお許しを与えてくださった。わらわからすれば、お主はそのおやかた様の優しさに付け込んで、何かを企んでいるとしか思えんぞ。違うか。ん？」

「た、確かにあっしは信長様に目をかけてもらっているかもしれませんが、そ、そこまで優しくもされていないかなあ。てか、信長様って結構厳しいじゃないッスか」

すると、更に睨みを与えられるおれ。じっと睨まれる。延々と睨まれる。

「フン」

と、鼻先を突き上げると、腰を上げたデザイナ。

「なら、良い。お主も所詮犬であることがわかった」

障子戸をがしゃんっと開けたデザイナ。

「忙しいところに邪魔して悪かったな」

と、捨てゼリフを残し、去っていったデザイナ。

あのう。なんだったの？　何がしたかったの、デザイナは。要は気難しいってことなのかな。どこかのおやかた様みたいに。

お菓子なんか食べたいと思ったばかりに・・・

十兵衛からの手紙が来たのは翌日。
中身を太郎に読んでもらったところ、近々、この家を訪れるって書いてあった。
ま、あいつにとって、おれは恩人だしな＾＾　むしろ、近々じゃなくて、さっさと来いって話だ。
で、暇になった。
やることはない。とても退屈。半兵衛のところにいたときもこんな感じだったけれど、あのときは日々修行していたしな。だからといって、今さら鍛錬なんてしたくない。真・無双奥義を極めているし。
とりあえず、お菓子ないかな。
炊事場を覗いてみたけど、どこに隠してあるのかわからない。太郎にすべて任せちゃっているし。
太郎に訊こうかなと思ったんだけど、太郎は書斎で読書中。どこにあるのかなんて訊いたって、どうせ教えてくれないだろ。なにしろ、たかが饅頭、たかがようかんが、この時代だと超贅沢品。
ってことで、町に繰り出すことに。でも、どこに売っているのかわからないおれ。復興作業にやかましい城下町をうろうろ。
「旦那！　旦那！　今なら一太刀五十貫だよ！」
「ちょっと、旦那様、ちょっと、聞いてくんねえかな。この油ね、傷口に塗るとすごいんだよ。ちょっと、聞いてくんねえかな」
しーん。無視。立ち止まると騙される。おれって押しに弱いし。
清州はこんな奴らあんまりいなかったんだけどな。まったく。いくさが終わったどさくさに紛れてやって来やがって。
つーか、どうせ、お菓子を売っているところを見つけたところで、つまんねえものしかないんだもんな。おれはさ、ピザポテトとか食いたいんだよ。あと、コーラ。

ハア。金は貯まる一方だけど、結局は使い道がないから。ラーメンとか食いたいよなあ。カップラーメンでいいからさあ。

諦めた。帰ろ。

「あれえ？」

うっ。

「簗田さんじゃなーい。お久しぶりっ☆」

ううっ。チ、チ、チヨタン。ウウッ（；ω；）　カワユス。テラカワユス（´；д；`）

「昨日ね、こっちに来たばっかなの。あのね、ずうっと会いたかったんだ。簗田さんに」

にこっと笑ったチヨタン。ずるいよ。そんな顔してずるいよ。なんで、そんなこと言うんだよ。おれは、おれは、会いたくなかったよ！

「け、結婚したんだってね。イエモンと」

「うん。そうなの～☆」

ウウッ（´；ω；`）

「簗田さんのおかげ。私、沓掛に行かなかったらどうなっていたことやら。旦那様も言ってたよ。簗田さんが自分を拾ってくれたから今があるって」

ウウッ（´；ω；`）　おれはそんなつもりなんて全然なかったんだよ。むしろ、あんなやつ大嫌いなんだよ。

「それと、簗田さんがくれた黄金三両」

と、下をうつむくチヨタン。

「あれ、やっぱり返すね。旦那様は貰っちゃったみたいだけど、私は、気持ちだけで十分だから」

「いいよ。あげるよ」

「でも、簗田さんには十分よくしてもらったよ。だから、ダイジョウヴ☆」

ウウッ（´；ω；`）　おれはこの明るいチヨタンを一人占めしたかった。おれはこの明るいチヨタンとずっと一緒にいたかった。

でも、あんまりいれなかった。実際、会えていた日は二日ぐらいしかなかった。

それなのに、それなのに、おれは。

「いいんだ。あげる。だって、おれは、おれは、チヨタンが好きだったから。チヨタンがいたからおれも頑張れたんだから」

「えっ？」

「ウウッ。ごめん。サヨナラ」

チヨタンの脇をすり抜けて走り出したおれ。勘弁してくれ。もう、勘弁してくれ！　なんでおれが、こんな真似を！

もう恋なんてしない！

ひーっ。ひーっ。ひんひん。
ぐわあああっつ。うわあああっっっつ。
ううっ。ウウッ。
太郎。太郎。太郎太郎太郎ォオ！！
タスケテ。こんな父上をタスケテ。
「太郎ォオっ！」
って、ん？　また、草履が。
そういえば、屋敷の外に馬と馬丁がいたような。
「どうしたんですか、父上、そんな声を上げて」
と、桶を持ってきた太郎。
「えっ。なんて顔をしているんですか」
「見ればわかるだろ。泣いてたんだよ」
「はあ。どうかしたんですか」
「いや、訳はあとで話す。それより、来ているの誰？　明智十兵衛？」
「違います。森三左衛門様です」
なんだ。サンザか。早く十兵衛を連れて来いって催促しに来たのかな。めんどくせ。だいたい、おれはそんな気分でもねえんだ。勘弁してくれ。
「サンザさんには日を改めてくれるよう言っておけ」
「はあ？　そんなの無理に決まっているじゃないですか。何をおっしゃっているんですか」
「今は人と会いたくない」
「駄目ですよ。森様がわざわざ来てくださっているんですよ」
うるさいなあ。なんでこう堅物なんだよ。父親似なのか？　たくっ。
「じゃあ、とりあえず用件を聞いてこい」

「だから、無理ですって。立場をわきまえてください、父上」
クソッ。どいつもこいつも。クソッ。
仕方なく、おれはサンザの待つ板間へ。すると、サンザの膝元にはお菓子。ふざけんな。やっぱりあるじゃねえか。チクショウ（´；ω；`）だったら外に出るんじゃなかった。ウウッ。
「すまんな！　突然押し掛けてしまって」
うるせえ。こいつはいつになったら大声を直すんだよ。
「で、どうしたんスか。急に。先に言っておきますが、足利義秋さんのことならもうちょっと待ってもらえないスかね」
「いや！　今日はそのことじゃない。実はあの子供のことだ」
えっ？　あの子供のことって太郎のことだよね。なんで？　サンザがうちにわざわざやって来て太郎のことってなんで？
「聞いた話によると、あの子供、元は牛殿の小姓だが、近頃養子として迎えたらしいな？」
「は、はい」
うっ。まさか、太郎の実の親はマリオだっていうことをサンザは知っているのか？　それで、サンザはおれと太郎を引き剥がしに来たのか？
そんな。チヨタンならず、太郎までもいなくなってしまったら、おれはどうすりゃいいんだよ。
「名は何と申す？」
「あ、えと、左衛門太郎っていいます」
「ふむ。左衛門太郎か。実はな、牛殿の小姓は清州の女たちに人気があって、武芸にもなかなか優れていると、拙者の従者から聞いたことがある。その辺りどうなのか？」
「あ、まあ、女の子たちに人気があるかは知らないスけど、てか、ないと思いますけど、多分、ちょっとは強いと思います」
なにしろ、鬼の子だからな。四人の野盗を脇差だけで殺したこともあったしな。
「ふむ。そうか。で、牛殿は左衛門太郎をどうするつもりじゃ」

「へ？　どうするつもりと言うと」
「見るところこの屋敷に同居しているそうだが、沓掛に戻す気はないのか？」
「いや、何も考えていませんけど」
「なら、話は早い。いやな、その左衛門太郎を馬廻衆に入れてはどうかと思ったのじゃ。何も考えていないのなら、その子は無禄であろう？　馬廻衆に入ればある程度の俸禄も入る。もちろん、拙者がおやかた様に推薦するからな」
「はあ」
　馬廻衆かよ。なんか、嫌だな。馬廻衆って言えば、ハットリ君とか毛利新助が元々いたところだろ。あいつら、桶狭間の戦いで今川義元を討ち取ったからいいものの、あの激闘を目の当たりにしたおれからすると、太郎をあんな危ない目に合わせたくないんだけど。
「手柄を上げることができれば、赤母衣、黒母衣を着られるかもしれん。牛殿、息子が母衣衆になれば、これほど名誉なことはないぞ」
　それはもっとやだ。だって、そこの親分はウザノスケとマタザじゃねえか。絶対駄目。太郎をあんなＤＱＮに染めたくない。
「父上！　拙者は入りたいです！」
　と、太郎が障子戸を開けてきた。てか、盗み聞きしてんなよ。じゃあ、いつも、盗み聞きしてたんだな、お前は。
「太郎、お前はちょっと外してろ」
「よいよい。太郎とやらも聞きなされ」
「はっ、失礼しまする」
　あーあ、もう駄目だ。太郎の目がキラキラ輝いている。あーあ、もう駄目だ。

砂糖と鼻クソ

就職した太郎は次の日から早速岐阜城へ。
なんでも、信長に挨拶に行くって。
おれは？　いらないって。クソッ。それで結局はさ、サンザは足利義秋を早く連れてこいって捨て台詞を吐いていきやがった。クソッ。
で、十兵衛はいつ来るんだよ！
マジで退屈。かといって、外には出たくない。恐ろしい事件が待ち受けているからな。
「ごめんなすってえ！」
庭先から声が。なんだよ。なんで庭に入ってきてんだよ。どこのどいつだよ。
「すいませんすいませんすいませーん！」
うるせえな。なんだって、岐阜の屋敷には毎日々々客が押し掛けてくるんだ。沓掛とか清州のときは誰も来なかったじゃねえか。
でも、おれは無視。根本的にフリーターのおれだし。元の時代にいたとき、親の実家に寄生していたおれは、家に誰か来てもガン無視。それが身に染みついているからね。
「あのう」
って、なんだよ、お前！　何、勝手に障子を開けてんだよ、このチビスケ！　てか、誰だよ！
「ほら、やっぱりいるじゃないですか」
と、にたにた笑う謎のチビスケ。髪はボサボサ、羽織を一枚着ているだけ。明らかに不審者。この野郎、ふざけやがって。
おれは床の間の脇差を手に取り、抜刀。
「勝手に入ってきやがって。叩き斬ってやる！」
あ、そうだ。こいつ、弱そうだし、試しに真・無双奥義を使うか。
ククッ。バカが。飛んで火に入る夏の虫め。

「い、いや、いや、旦那様、あっしはそんな怪しい者じゃないッス。ただ、ちょっと、いいもんが手に入ったんスよ」
はあ？　どういうこと？　てか、なに、このおれと同じ匂いのする奴。
で、チビスケは腰に巻いていた袋から、変な丸い鼻クソみたいなのを取りだし、おれに見せてくる。
「これ。これこれ。砂糖ってやつッスよ、旦那。明国からの輸入品。見たことありますか、旦那」
なんだ、こいつ、ふざけやがって。おれをナメてんだな、この野郎。砂糖がこんな鼻クソみたいなはずねえじゃねえか。
「この、インチキ野郎」
と、おれは脇差を構える。
「砂糖がそんなもののはずねえだろうが。だいたいな、砂糖っていうのはな、もっと結晶みたいな粒で出来ているんだぞ」
「い、いや、旦那、そんなはずはねえッスよ。だって、これは砂糖だから売ってこいって言われてんスから」
なんか、ちょっと様子がおかしいような。
「お前、それ舐めてみたのかよ」
「いや、そんなこと。あっしは売り物に手を出すような商人じゃありません」
なんだ、この馬鹿は。
「じゃあ、おれが買ってやるよ。それをお前に食べさせてやるから味見してみろよ」
「え？　いいんスか？」
「いいよ。いくらだよ」
「へえ。一個、十貫になります」
高え。なんだ、そのボッタクリ。この鼻クソ一個が十貫だって？　イエモンにやっていた俸禄の半分じゃねえか。
まあいい。この馬鹿に現実ってものを見させてやる。
で、十貫払ってやった金持ちのおれ。で、鼻クソもあげてやる。

「本当にいいんスか？　いやあ、あっし、砂糖を食うなんて初めてなんスよお。いやあ、良かったなあ、旦那のところに来て。じゃ、いただきま～す＾＾」

と、鼻クソを口の中に入れたチビスケ。味をしっかりと確かめるようにもぐもぐ。で、すぐに渋い顔。

「うえーっ！」

ぺっと鼻クソを吐き出したチビスケ。てか、何やってんの、部屋の中で。

「これ、本当に鼻クソッスよ！　うえーっ！　ぺっ！　ぺっ！」

ワロスｗ　本物の馬鹿ｗ　いい退屈しのぎになったぜｗｗｗ

てことで、床を拭いたあと、さっさと帰れや。十貫は可哀想だからくれてやるわｗ

「ウウッ。そんな」

と、膝を折り、がっくりと床に手をつくチビスケ。

「あっしは、あっしは、騙されたっていうのか。ウウッ」

あのう。うなだれるのは家を出てからにしてもらえませんかね。

そもそも、鼻クソを砂糖だと思ったお前が悪いんだよ。馬鹿すぎるんだよ。

「三河から持ってきた大事な金を、こんな鼻クソに使っちゃった。ウウッ」

で、泣き出したチビスケ。もう、勘弁しろよ。

「じゃあ、取り返せばいいじゃんか」

「で、でも、あっしがこれを買ったのは都にいた商人からなんス。その商人っていうのが、あの松永弾正様の御用聞きってことで、あっしも信用したんですが。ウウッ。松永弾正様の商人では、あっしなんて取り返しに行ったところで斬り殺されて終わりッス」

「そんなこと言ったってしょうがないだろ。とりあえず、十貫もくれてやったんだから、それでやり直せよ」

「無理なんですう！　あっしは三河から五百貫持ってきたんです。その全部をこの砂糖、いや鼻クソに使っちゃったんですよお！　そ

れも、自分のもんじゃないんスう！　徳川様の、徳川家康様から預かった大事な金なんですう！」

　知らねえよ、そんなこと。なんか、巻き込まれる予感アリだからシラネ。触らぬ神に祟りなし。シラネ。

　つーか、家康もこんな馬鹿に金を預けるなんて、結構間抜けなんだな。

「ウウッ。もはや、こうなったら」

　って、おれの手から突然脇差を奪い取ったチビスケ。そして、腹を出し、刃先をそこに向ける。って、おい！　汚すな！　おれの脇差を、おれの部屋を汚すな！

「あ、あっしは、武将になりたかった。だから、せめて死ぬ時ぐらいは」

「ふざけんな、こらっ！」

　脇差を奪い返したおれ。

「し、死んでどうする！　死んで家康殿に報いることができるとでも思ってか！　なら、五百貫稼いでみろ。商人ならそのぐらいの意気込みを見せてみろ！」

　キリッ。決まった。なにしろ、この部屋から死体を出すわけにはいかねえからな。

四郎なの？　次郎なの？

で、チビスケ、なんでおれの家に居座っているの？
「あっしは三河から都に出たんですが、織田様が美濃を攻め取ったという話を聞いて、これは好機と美濃に流れてきたんです。ただ、都の借家も捨ててしまったし、もちろん美濃にも住む場所なんてありません。だから、ちょっとの間でいいから、こちらに住まわせてもらえないスかねえ」
と、城から帰って来た太郎に泣きつくチビスケ。太郎は腕を組んでしかめっ面。
「だったら三河に帰れよ」
と、おれ。なんで、こんな正体不明の馬鹿を住まわせてやらなくちゃならねえんだっつうの。
「だって、旦那は言ってくれたじゃねえスか！　五百貫稼いでみろって！　だったらそれまでは三河になんか帰れねえッスよ！」
「だからって、なんでおれの家に居候しようとしているんだよ！　おかど違いも甚だしいじゃねえか！　だいたい、お前にくれてやった十貫があるだろ！　それでなんとかしろよ！」
「たかが十貫じゃ何もできねえッスよ！」
なんだとォ。たかが十貫だとォ。
「まあまあ、父上、落ち着いてこの者の話を聞こうじゃありませんか」
チッ。だいたい、こんなやつの話なんて聞いている場合じゃねえんだ。おれは城に行っていた太郎が、今日どうだったのか、それが聞きたいんだよ。
「別にいいじゃねえスか。ここには旦那と息子さんしか住んでないんでしょ」
この野郎。馬鹿のくせに図々しいな。おれの周りにはもうちょっとまともな奴はいねえのかよ。

「なら、父上に仕えなさい。それでどうでしょう」
「え？　いいんスか？」
いいんスか？　じゃねーよ！
「おいおい、太郎。何を勝手に決めているんだよ。こんな奴を雇ってどうする気だ。くその役にも立たない馬鹿じゃねえか。それどころか鼻クソを掴まされる馬鹿野郎だぞ」
「そこまで言わなくたっていいじゃないスかあ！」
「まあまあ、父上。調度よいじゃないですか。この家には拙者と父上しかいないんですし、父上の面倒を見る人間もいないじゃないですか。だったら、しばらくこの者に家事を切り盛りさせてやればよろしいじゃないですか」
「そんなの駄目だ。今まで通り太郎がやればいいことだ」
「拙者だって、馬廻衆に入った身ですから、今まで通り家事を見るのは難しいですよ」
「えっ！？　若君はその若さで信長公の馬廻なのですか！？」
と、急に声をあげたチビスケ。
「今日からですがね」
「なんともまあ。旦那様はいい息子様を持ったんスねえ」
まあ、実の子じゃないけど。てか、急におべっか使い始めてんじゃねえよ。
「てか、ついつい忘れていたんスけど、お名前を伺っていなかったスね」
「拙者は簗田左衛門太郎広正。父上は牛太郎政綱と申します」
「えっ！？」
って、突然、言葉を失ったチビスケ。なに？　おれが親の仇とか？　だったら、返り討ちにしてやんよ。あ、でも、おれって人を斬ったことなかった。
「あの、沓掛の、綱鎧の簗田殿ですか？　あの、桶狭間の勲功第一だったと言う」
「そうだけど。それがどうかしたかよ。てか、なんだよ、そのツナ

ヨロイの簗田って。ふざけんな。おれだって好きでやっているわけじゃないんだ」

「申し訳ござんしたァっ！」

と、急にチビスケ、姿勢を正して平伏。え？　なんで？

「あの簗田様とは知らずに、あっしの振る舞い、どうかお許しくだせえ！」

訳がわかんなくて、太郎と顔を見合わせるおれ。

「しかし、あっしは果報者ッス！　長年のいくさで朽ちかけていた沓掛を見事に立ち直らせた沓掛城主の簗田様にこうしてお会いできるとは果報者ッス！」

あ、あのう、もしかして、沓掛を復興させたのはおれってことになっているのかな。それって全部、丹羽五郎左衛門っていう人がやったことなんだけどね。アハハ。

「簗田様！　どうかあっしを雇ってくださいッス！　簗田様の下で働いているとなれば、三河の者たちにも顔向けできるッス！」

ま、まあ、沓掛って三河と目の鼻の先だしね。

「父上」

と、太郎。にやにや顔。

「いいんじゃないんですか。雇ってあげても」

まあ、いいかな。ずいぶん尊敬されているし。勘違いだけど。従者ぐらいにはしてやるかな。うん。

「よろしい。そこまで言うなら仕えてみろ（キリッ）」

「あ、有難うございますっ！」

「よかったですね。一所懸命やるのですよ。いつかは三河に錦を飾れるようにね」

「うっ、ウウッ。わ、若君っ！　有難うございますっ！　このご恩は一生忘れません！」

「そういえば、お主の名を聞いていませんでしたね」

「あっ、はい。あっしは中島四郎次郎清延と申します」

「え？　なんて？　もう一回言ってよ」

「中島四郎次郎清延ッス」
「いや、だからどっちなのよ。四郎なの？　次郎なの？」
「いや、どっちもッス」
胡散臭い奴だな。なんなんだよ、その変な名前。一人二役ってこと？　パペットマペットかっていうの。

妙案？

中島四郎次郎が五百貫貯まるまで、この馬鹿を雇うことになったんだが、家事は意外と出来るやつだった。

朝飯はうまかったし、掃除もちゃんとやったし、買い物も一応商人ということできっちり値切ってくる。思ったよりも使えるやつ。

「おい、四郎次郎。お前の名前呼びづらいから、今日からシロジロな。わかったな」

「しろじろッスか？　別にどっちも同じような気が」

「いいんだ」

「はあ。それより、殿様、あっし、ちょっくら疑問に思ったんスけど、いいスか？」

「なんだよ」

「あのう、若君は馬廻衆でお勤めに上がっているじゃないッスか。で、殿様は何をしているんスか。なんか、何もしてないように見えるんスけど」

「なんだとォ？」

「いや、でも」

「馬鹿が。だからお前は馬鹿なんだ。おれはな、信長様から密命を受けているんだよ。で、ある人を待っているわけだ。何もしてないわけじゃない」

「密命ッスか？　そ、それってなんなんスか？」

「教えない」

「えーっ？　いいじゃないッスかあ？」

「ダーメ。教えてあげないよ、ジャーン」

シロジロはイエモンなんかと比べるとなかなか愛いやつだな。おれより弱そうだし、馬鹿だし。唯一の家来が商人上がりっていうのが、ちょっとあれだが、まあ、堅物の太郎と二人きりだと息が詰まるしな。

「ごめんください！」
チッ。また、今日も誰か来やがった。なんなんだ、一体。
「築田様ァ！　石川小四郎でございます！　明智様を連れて参りました！」
な、なんだって！
玄関に迎えに行こうとしていたシロジロを庭に突き飛ばして、あわてて駆けて行くおれ。
「築田殿、お久しぶりでございます。訪問が遅くなり、申し訳ございませんでした」
と、玄関には、頭を深々と下げてきた明智十兵衛。あと、石川小四郎。
「い、いえいえ、こちらこそ、わざわざ岐阜まで来て下さって。と、とりあえず、お上がりください」
むう。突然、十兵衛が来て、ちょっとヤバい。こいつを口説き落として足利義秋を岐阜に連れてくる文句を何も考えていなかったぜ。とにかく、丁重に扱わなければな。
で、みずから桶に水を汲んできて、十兵衛と石川小四郎に足を洗わせた。シロジロは何をやっているかというと、庭先に転んでいた。いざっていうときに使えないやつなんだからよ！　だから、鼻クソなんて掴まされるんだよ。
十兵衛と石川小四郎を居間に通し、ようやく起き上がったシロジロに小湯とお菓子を持ってこさせる。
「いや、築田殿、こうしてお会いするのは菩提山以来ですな。御息災でなによりです」
「いやいや、こちらこそ、十兵衛殿と再会できてなによりです」
「で、早速ですが、ご用件とはなんでしょう」
むむ。ここからが正念場だ。半兵衛の馬鹿たれが、十兵衛に信長は大悪党だなんて言っちゃっているからな。
ん？　ちょっと、待てよ。そういえば、濃姫が十兵衛に会いたがっていたよな。どんな関係なのかは不明だが、おそらく元カレ元カ

ノの関係だろう。濃姫は斎藤道三の娘だし、十兵衛は道三の子分だったんだし。

てことは、濃姫から十兵衛に頼みこませたほうが、いいような気がするな。おれだと失敗する可能性大だし。

「いや、実はですね、濃姫様に頼まれていまして」

「き、帰蝶殿からですか？」

ほほう。紳士な十兵衛がこんな反応をするなんてな。やっぱりおれの目は節穴じゃねえぜ。

「濃姫様がですね、実は十兵衛殿がどこで何をしているか知りたいと。いや、ぜひとも会いたいと言っておられるのです。ほら、あっしは十兵衛殿から脇差を頂いたじゃないですか。それを見て、濃姫様があっしと十兵衛様が何か関わりがあるのかと思いまして」

「そ、そうなんですか」

湯呑みに唇を近づける十兵衛。うろたえてるうろたえてる＾＾

だって、濃姫は道三の娘、十兵衛は道三の子分、義理堅い十兵衛のことだから、恩のある道三の娘が会いたいって言っているなら、逆らえないはずだろ。いくら別れた関係だって言ってもな＾＾

「し、しかし、帰蝶殿は織田上総介殿の奥方。一方で拙者は浪人同然の身分。それでは帰蝶殿が会いたいと申しておりましても、いくらなんでもそれは・・・」

「いやいや、あっしがなんとかしますって。だから、それまで二三日、我が家に泊まっていってください。これもどうか、濃姫様のことと思って」

「うーん。まあ、簗田殿がそこまで言うのなら」

よし。あとは濃姫に頼み込むだけだな。フヒヒ。

太郎・・・、まさか、お前・・・。

といっても、だ。

濃姫にどうやって会うの？

岐阜城に行って、濃姫に用があるから会わせてなんて、さすがのおれでも言えないし。信長にかくかくしかじか言ったとしても、十兵衛は奥さんの元カレだろ、激怒するに決まっている。

誰か、濃姫に接触できるやついないかな。

サルはおれと似たりよったりの身分だから駄目だし、マタザは元ＤＱＮだから話にならないし、うーん、マリオが一番良さそうだけど、あいにく岐阜にはいない。多分、あいつは今、清州か沓掛のどっちかにいるから、わざわざ尾張を往復したら、十兵衛を待たせてしまう。そんなことしていると、そのうちに十兵衛が帰っちゃいそうだし。

女なら女でってところだけど、おれの知っている女っていったら、遠山さんかおまつ。どっちも駄目だな。濃姫に会えるような分際じゃないだろ。二人とも旦那が旦那なんだから。あとは――、デザイナ・・・。論外。

じゃあ、誰だよ。もう。

あっ！　サンザがいるじゃんか。サンザなら信長の側近中の側近だから濃姫に会うことなんて訳ないだろうし、あいつは結構おれに優しいところがあるから、サンザに頼めばいいだろう。

てことで、サンザの家へ向かおう。玄関で草履を履くおれ。

って、サンザの家ってどこにあんの？

クソッ。いつもサンザがおれの家に来るだけで、あいつの家になんか行ったことがねえからわかんねえ。ぐぐ。

「あっ、父上。ただいま帰りました」

と、太郎。おかえり。で、隣の少年は誰かな。友達？　なかなかの美少年だけど。まさか、太郎・・・。忌々しくて思い出したくも

ないが、お前には前科があるからな・・・。
「出かけられるんですか？」
「いや、出かけようと思ったけどな・・・。で、そちらの子は誰かな」
「あ、こちらは森三左衛門様のご子息で勝三殿です」
なんだって？　グッジョブじゃねえかよ、太郎！　ただ、おホモだちだったら許さないけどな・・・。
「初めまして、森勝三です」
ふむ。見た目は小学生だけど、なかなか礼儀正しいやつ。
「太郎さんが戦国策を貸していただけるとおっしゃったんで、お邪魔しました」
「センゴクサク？」
「去年、菩提山にいたとき、半兵衛様が持っていた書を写させてもらったのです」
「ふーん。そっか。まあ、それはいいとして、なんでキミたちは知り合いなのかな」
まさか、尻合いとかじゃねえだろうな！
「あー、若君、お帰りなさいませ。あーあー、お友達もご一緒ッスか。どうぞどうぞ、足をお洗いくだせえ」
と、いちいち現れたシロジロ。
「ああ、四郎次郎殿。いいんですよ、こちらの方はただ立ち寄っただけなので。それより、拙者の部屋から戦国策という写本を持ってきてもらえませんか」
「はい。わかりました」
「なんだよ、シロジロ。センゴクサクってなんなのか知っているのかよ」
「はあ。知っていますけども」
なんなの？　そんなに有名な本なの？　戦国とか言うだけあって、流行っているのかな。チッ。めざましテレビとか見てないからわかんねえよ、流行なんてよ。

いや、そんなことはどうでもいい。今はとりあえず、サンザの家に行かなければならないんだ。

「太郎、ちょっとな、お客様が来ているから、お前はお客様の相手をしてなさい。おれはこの子を送っていくから。な？」

「お客様ですか？　どちら様ですか？」

「明智庄の殿様だ。偉い人だから、いろんな話を聞いておけ」

「え？　それって、ただ父上が明智庄の人と関わりたくない――」

「減らず口叩いてないで、さっさと足を洗えっ！」

はい出ました、太郎のシラーッとした目。まったく。馬鹿息子め。

モテ期到来？　いやいや、まさかな。

サンザの家は稲葉山の中腹にあるらしく、まだ、出来上がったばかりらしい。ちなみにおれの屋敷も稲葉山の出入口に建築予定だけれど、無期限の施工停止中。岐阜なんかにはいたくないから、そのままうやむやにするつもり。

サンザの家に向かう道中、サンザの息子のカツゾウ君にいろいろと訊ねてみる。どこでうちの息子と知り合ったのかと訊くと、昨日、城内でらしい。サンザに連れられた太郎と城内でばったり出会い、サンザに紹介されたらしい。

で、キミみたいな子供がどうして城内にいたんだいと訊いたら、

「一昨日の晩からおやかた様とご一緒だったので／／」

アーッ！

こいつはいかん。太郎をこんなやつに近づけてはいかん。太郎には前科があるからな。いや、もしや、太郎のやつ・・・。まさか、おホモだちとしてお近づきになってお突き合いしたいんじゃないだろうな、カツゾウ君と。

帰ったらこってり絞り上げなければ。あ、それに、もう結婚させちまおう。おれより先に結婚するのはむかつくが、先に女を知っておけば、男に興味を示すこともないんじゃないかな。あいつ、イケメンだし、すぐに結婚できるだろ。おれより先ってのは腹立たしいが、これも可愛い息子のためだ。我慢我慢。

そうこうしているうちに、稲葉山の中腹、サンザの家に到着。おれの仮住まいの倍以上の広さ。さすがは信長の側近。

「送っていただき、有難うございました」

「あ、いや、実はキミのお父上にお会いしたいんだが」

「父上ですか？　まだ、お城から戻っていないかもしれませんが」

「じゃあ、ここで待つよ。ちょっと、話があってね」

「なら、せっかくですから、上がってお待ちください」

じゃあ、お言葉に甘えて。それにしても、礼儀正しいし、可愛い子供だな――。

うっ。いかん。これがショタの魔力か。ふう。正気に戻れ、おれ。正気に戻れ。そうだそうだ、可愛いっていうのは、世間一般的な感覚での可愛いであって、変な意味での可愛いじゃない。

屋敷に入ると、ババアの女中に居間まで案内され、そこでサンザを待つことに。てか、畳ですか。イグサの匂いがかぐわしい。畳の部屋なんて久々だな。清州城にも岐阜城にもあるらしいが、そこには入れてくれないし。ずっと板間の生活だから、畳の柔らかさにびっくり。

そうだ、おれの家も畳を入れようかな。でも、きっと高いんだろ。この時代って、元の時代では当然だったことが、べらぼうなことになっているからな。

「失礼します」

ん？　こ、この美人熟女は、だ、誰？　ま、まさか、この美女がサンザの奥さん？　ぬう。羨ましからん。ただ、カツゾウ君のお母さんと言われると、納得。

「わざわざ、勝三を送っていただき、有難うございます」

「い、いえいえ、そ、そんな。あっしは別にサンザさんに用があったので、ついでにって感じで」

「そうですか。夫はもうすぐ戻られると思いますので、いましばらくお待ちください」

「は、はいっ」

ふう。まったく、童貞のおれは美女を前にするとすぐに上がっちゃうんだからな。こんなことだったら、元の時代にいたときにソープランドで筆下ろししておけば良かったぜ。

って、奥さん、なんで、まだそこにいるの。てか、ぽわーんとした目で見つめられているんですけど。いや、あの、奥さん？

「あ、ごめんなさい。あの、いや、綱鎧の簗田殿のお話は何度か聞いておりまして。つい、どんな方なのかと。ごめんなさい」

チッ。そんなことか。クソッ。どんな変態牛野郎なのかってことなんだろう。チクショウ。

「はいはい。重々承知していますよ。あっしは綱を巻きつけている奇人ですよ」

「いえっ、そんな意味ではなく、ほら、簗田殿は明智庄のおなごたちや子供たちを沓掛にかくまわれていたのでしょう？　だから、こんな戦国の世で、そんな優しきお方とは、どんな御仁かと。きっと、優しい顔をされた布袋様のような人かと、私は想像しておりましたの」

／／。

「そうしたら、想像通りのふっくらとした優しそうなお方だったものですから、つい。ごめんなさい。もうすぐ、夫が戻ってまいりますから」

なんだか、恥ずかしそうにして部屋を出ていった奥さん。

・・・・。

なんかさ、実はおれって知らないところでは英雄扱いされているのかな。おれの周りにはサルを筆頭に太郎とかマタザとかイエモンとか、おれを馬鹿にしてくる連中ばかりだから気付かなかったけど、なんかさ、最近、こういうことってあるよね。

シロジロも勘違いしていたし、サンザの奥さんも勘違いしている様子。そういえば、デザイナも言っていたな、明智庄のこと。

沓掛の政治のことはともかくとして、確かに明智庄のことは、サルとの裏取引やおれのスケベ心があったのを知っているのは、サルと信長とサンザだけ。サルは口軽ペラ男っぽいけど、どうせペラペラと喋っているのは奥さんの遠山さんにだけだろ。で、信長とサンザは口が堅そうだ。

すると、明智庄のことは、同じ女の人が見たら、この戦国の世で女子供を気遣うなんて、なんて気の利いた心優しい男性なんだろう☆（ゝω・）ｖキャピとでも思うのかもしれん。

ということは・・・、

モテ期到来ッスか＾＾

いや、まさか、このおれがな。アハハ。

畳に頬をすりすりしていたら、サンザが部屋に入って来て、あわてて起き上がったおれ。
「どうしたのだ、牛殿！　急に押し掛けてきて！」
「あっ、いやっ、そのっ、サンザさんにお願いごとがありまして」
「お願いごとォ？」
と、眉間にしわを寄せ、あからさまに嫌な顔。えー？　なんでー？
「牛殿の頼みごとなど、どうせろくなものじゃあるまい」
「いや、そんな。話だけでも聞いてくださいよ」
「とりあえず、話だけな」
むう。サンザの中でのおれは相変わらず低評価の様子。クソッ。祝勝会のときに褒めてくれたじゃないかよ。
「で、なんじゃ」
「そのですね、結論から言うと足利義秋公と接触が図れるかもしれないんですが」
「ふむ。しかし、拙者に頼むこととはなんだ」
「あのう、濃姫様に橋渡し役になってもらいたくて」
「奥方様？　なぜじゃ。どうして、奥方様が橋渡し役なのだ」
「話せば長くなるんですけどね、そのう、実は今、明智十兵衛というやつが足利義秋公を担げる大名を探している最中なんです」
「明智十兵衛？」
「あのう、明智庄の親分だったやつらしいんスけどね。知らないですかね、サンザさん」
「明智庄の明智十兵衛・・・」
と、サンザは顎に指をかけて、しばらく考え込む。
「道三公の存命中まで長山城に居を構えていた、土岐源氏の流れを持つ一族のことであろうかのう」
「多分、そうです」

「ということはだ」
で、また、うーん、と、考え込むサンザ。
「確か道三公の女房の出はナントカとかいう土岐源氏の支流であったのう。すると、あれか、その明智十兵衛とやらと奥方様は縁戚なのか？」
「あっ、いや、そうなんスかね？」
「なにぃ？　だから、奥方様に橋渡し役になってほしいと申したのではないのかァ？」
「いや、ど、どうなんスかね。あっしはてっきり明智十兵衛は濃姫様の元カレなのかと」
「モトカレ？」
「いや、あの、その、なんて言うんでしょうか。まあ、その、付き合っていた人とでも言うんでしょうか」
「まったく」
ハア、と、溜め息をつくサンザ。
「もっと、しっかりとした情報を持ってきてからにせい。そんなあやふやな話では頼まれても何もできないではないか」
「す、すんまそん」
「まあよい。なら、その明智十兵衛とやらを明日にでも拙者のところに連れてくるがよい。奥方様が出るまでもないであろう」
それはまずい。
「あっ、いやっ、でも」
「なんじゃ」
だって、十兵衛には濃姫が会いたがっているからって言っているのに、そこに突然サンザが出てきて、どうせこいつのことだから話を飛ばして足利義秋のことを突っ込む気なんだろ。それじゃ駄目だ。そんなことしたら十兵衛を怒らせて、すべてがぶくぶく水の泡だ。
「なんじゃっ！」
「いや、そのお、サンザさんはとりあえず濃姫様に取り計らってもらえませんかねえ」

あわてふためているおれを見て、シラーッとした目をするサンザ。
「お主、何か隠しておるな」
「いや、そんな、隠しごとなんて」
「何を企んでおるっ！」
ひいいいいっっっつ！
「すいませんっ！　何も企んでないですう！　ただ、その、十兵衛には伝えてないんですう」
「どういうことじゃ」
ううっ。もはや、隠しきれなくて、全部をゲロッたおれ。濃姫が十兵衛に会いたいと言っていたこと、十兵衛には濃姫と会わせてやるとしか言っていないこと、そして、濃姫に十兵衛を説得してもらおうと考えていたこと。
「馬鹿モンが！　そのようなことで奥方様を利用しようとしおって！　なんてけしからん奴だ！」
「す、すいませんっ！　でも、あっしじゃ十兵衛を説得できないと思ったんですう」
「なら今すぐ十兵衛とやらに伝えてこい！　今からおやかた様に会わせてやると伝えてこい！」
「えっ！　そ、それはでも」
「いいから、連れてこんか！」
ウウッ。やばいよー。やばいよー。サンザの馬鹿野郎。そんなことしたら、おれのせっかくの上洛計画がパーじゃないかよお（´；Д；`）

サンザの家を追い出されたおれは、とぼとぼと日暮れの稲葉山を下山。

じゅ、十兵衛に何て言えばいいんだ。濃姫に会わせてやると息巻いてみせたものの、いざ、家に戻ったら今から信長に会わせてやるとでも言うのか？

まあ、別に変な話でもないか。ひょんな流れでそうなっちゃったって言えばいいだけのことだし。

ただ、そうしたところで、十兵衛が信長上洛の話に乗るかどうか。そこなんだよ。半兵衛の馬鹿たれが余計なことを言うからさ。それがなければ、すんなりとまとまった話じゃねえかよ。

こうなったら半兵衛も巻添えにしてやる。あいつに説得させればいいことだ。

と、思ったものの、半兵衛の岐阜の家がわからないので、とりあえずサルの家へ（行きたくなかったけど）。すると、家にいたのは遠山さんだけ。

「あら！　もう、何年ぶりでしょうか、牛殿のお顔を見たのは。あのね、いろいろと訊きたかったこととかあるんですよ」

なんか、遠山さんがにたにたと笑っているように見えるのは気のせいでしょうかね。どうせ、あのことだろ。だから、来たくなかったんだよ！

「いや、ただ、あっしは聞きたいことがあっただけなんで。寧々さんは知っていますかね。今度、藤吉郎殿の配下になった竹中半兵衛ってやつ」

「竹中殿ですか？　ええ、亭主が言っていましたよ。竹中殿という賢いお方が配下になってくださったって」

「その竹中半兵衛の住まいは知ってますかね」

「だって、竹中さんはまだ岐阜に来ていませんよ」

なんだよ！　じゃあ、用なんてねえ。サヨナラ！
くそう。半兵衛のやつ。ニート癖が抜けないんじゃねえのか。
まあ、ぼやいていても仕方ない。とにかく、おれだけで十兵衛を説得せにゃならなくなったんだ。
うー。どうぴよ。頭をかきむしるだけで、アイデアはなーんも浮かんできません。
ハッ！
おれの脳裏に、今、禁じ手が閃いてしまった。こ、これは、あまりにも恐ろしい技だ。ハルマゲドン……。これはまさに人類を滅亡に追い込むぐらいのハルマゲドンレベル……。
やってしまうのか……。これをやってしまうのか……。それでいいのか……。それでいいのか！　政綱ぁぁあああっっつ！
ウウッ。だが、しかし、おれは戦国の世を生きる人間。戦国武将たる者、踏み入れてはならない場所にも踏み入れなければならなくなるときがある。
それが今。
信長が上洛を果たさなければ、すべては進まないんだ。
おれは覚悟を決めると、サルの家に戻った。
怪訝な顔で出てくる遠山さん。
「どうされたのですか。黙って帰ったと思ったら、また来て」
「いや、寧々さん、実はイエモンの住まいを教えてもらいたいんですが」
「えっ！？」
ぐぬぬ。そりゃ、驚いて当然だ。おれだってイエモンなんかには会いたくない。でも、仕方ないんだ。やらなくちゃならないんだ。
「な、何をされるおつもりなんですか」
「実は、藤吉郎殿には黙ってもらいたいんですが」
おれは遠山さんにかくかくしかじか、明智十兵衛という男を口説きたい旨を伝えた。
「そうなのですか。牛殿はそんな大事を任されていたのですか」

「だから、別に変なことを起こそうってわけじゃないんス」
「わかりました。寧々も協力いたしましょう。案内させてください、伊右衛門殿の家まで」
ウウッ（´；ω；`）　遠山さんはやっぱり遠山さんだ。卓球部のときも優しくしてくれた。やっぱり、遠山さんはなんだかんだでわかってくれる。本当にサルには勿体ない嫁だよな、チクショウ。
で、イエモンの家へ。可哀想なことに足軽長屋の一角。愚か者め。おれの家来でいれば、もうちょっとマシな家に住ませてやったっていうのに。口先だけの詐欺師の家来なんかになるからこんな目に合うんだ。
「伊右衛門殿ォ。おりますかァ」
と、玄関の戸を叩く遠山さん。おれは心臓ばくばく。
「はーい。はいはーい☆」
うっ。戸の向こうからチヨタンの声。ウウッ。どんなツラして会えばいいんだよ。
ガラッ。
「旦那様ならまだお戻りではないですよお。藤吉郎様と一緒じゃないんですかあ？」
そして、目と目が合ってしまったおれとチヨタン。途端にチヨタンは明るい表情に陰。ウウッ。やっぱり、そうなるよね。
「築田さん……。どうしたんですか、寧々様と一緒なんて」
「千代ちゃん」
と、遠山さんが諭すような優しい声。
「牛殿の気持ちもわかってあげてちょうだい。牛殿はね、織田家のためにあなたにしてもらいたいことがあるの」
「私に、ですか……？」
「牛殿」
あとのことは自分から話せと言わんばかりに目を向けてくる遠山さん。
「ち、千代殿、じじじ、実は、あ、あ、あっしの家に、ち、千代殿

の、ち、千代殿の」
「もう！　じれったいんですから！」
と、声をあげた遠山さん。
「あのね、今、牛殿の家に千代ちゃんのおじい様と、あなたたちの昔のご主人の明智、明智、明智ナントカっていう人が来ているんですって」
で、結局は遠山さんが説明。
チヨタンのじい様の石川小四郎と主人の明智十兵衛がおれの家に来ていて、明智十兵衛は織田家が京の都に上洛する鍵を握っている。だから、明智庄の人間で、今は織田の人間でもあるチヨタンに十兵衛を説得してほしい。
だから、チヨタン、おれの家に来てくれ。
「で、でも、私は十兵衛様とお会いしたことがありませんし」
「いいんだ。千代殿。あなたが今、幸せであることを、あなたのおじいさんと十兵衛殿に言ってくれればいいんだ。頼む！　お願い！　あっしの力になってください！」
しかし、うつむくチヨタン。ウウッ。やっぱり、おれがチヨタンのことを好きだったなんて言っちゃったから、駄目なんスか。ウウッ（；ω；）
「千代ちゃん！　貴方は牛殿にお世話になったでしょ！　恩返ししてあげなさい！」
「そ、そうですねっ」
と、遠山さんに言われて、にこっと笑いながら顔を上げたチヨタン。
「私、簗田さんにたくさんのご恩があるから。ううん。明智庄のみんなが簗田さんにご恩があるもの。だから、恩返しするね、簗田さん☆」
ウウッ。嬉しくはない。切ない。ただ、切ない。でも、これも上洛のため。お願い、チヨタン。十兵衛を説得しておくれ。

チヨタンと二人きりなりたくないのをわかってくれていたのか、寧々さんもくっ付いてきてくれて、ようやく我が家に戻って来た。
「おーい、太郎ォ！　じゃなかった。シロジロォ！　帰ったぞォ！」
「はいはいはいはい。って、あれ？　ど、どうしたんスか、こんな別嬪な方をお二人も連れてきちゃって」
「やだー、別嬪だなんて～☆」
「私たちは人の女房ですよ」
むむむ。この女どもめ。今から瀬戸際の攻防だっていうのに、緊張感ゼロじゃねえか。てか、チヨタンも遠山さんも、結婚する前の若々しさが若干失われているような気が……。
「いやいや、本当にどうされたんですか、旦那様」
この野郎。おれが女を連れてきたのがそんなに驚きか。クソ野郎。
「いいからさっさと足を洗わせろっ！　あと、十兵衛殿と石川殿は何をしているんだ。話があるから居間に通せ！」
「いや、そんな怒鳴らなくてもいいじゃないッスかあ。それにお客様なら若君と居間でお話しされているところッスから。もう」
「じゃ、牛殿、私はここで帰りますね」
「えっ！？　寧々さんもいてくれるんじゃ」
「私はもうよろしいでしょう。あとは頑張ってね。千代ちゃん」
と、帰ってしまった遠山さん。
気まずくなってしまったような、そんな雰囲気。
「と、とりあえず、千代殿、居間にいるらしいので」
と、言った自分がすたこらさっさと居間に逃げ込んでいく。
居間ではシロジロの言った通り、十兵衛、じい様、太郎の三人。
「ああ、父上。お帰りなさいませ。今しがた、十兵衛様のお話をずっと聞かせていただいてました。十兵衛様は拙者の知らないこと――、って、そちらの方は、ち、千代殿っ」

「お久しぶり、太郎ちゃん☆」
「あ、あ、お、お久しぶりでございます」
「な、なんだ、千代。お前、どうしたのじゃ。あ、いや、こちらは拙者の孫娘でして。千代と申します。つい先日、織田様の家中の山内伊右衛門殿と婚約をしまして」
と、十兵衛に説明する小四郎。
「初めまして、十兵衛様。石川小四郎の孫娘で、今は山内伊右衛門の家内、千代と申します」
「おお。小四郎にこんな美しい孫娘がおりましたか」
「美しいなんて、十兵衛様は意外とお世辞が上手なんですね☆　もっと、お堅い方かと思っていたら」
「こらっ、千代っ。お前はどうしていつまで経っても」
「ははは。これはこれは。千代はなかなか肝の据わったおなごなのですな」
「ふふ。だって、私、男子に産まれたかったですもの」
すると、十兵衛はあっはっはって爆笑。何がそんなに面白いのか、戦国時代の奴らのギャグのツボはわからないが、掴みはオッケー。
てか、チヨタンに任せておけばいいかな、あとは。
「太郎、お前はシロジロと一緒に夕飯の支度をしなさい。今日は大勢いるからな。シロジロだけじゃ大変だ」
「かしこまりました」
と、まっとうなことには素直な太郎。部屋を出て行き、残ったのは四人。車座になって向かい合い、勝負はここから。
「じゅ、十兵衛殿」
と、おれはにこにこしている十兵衛に切り出す。
「実は濃姫様の件、信長様の側近の森三左衛門という者に頼んできたのですが、ひょんなことから、十兵衛殿と信長様を面会させろという流れになってしまって」
「ま、まことですか？」
と、突然の切り出しに表情をこわばらせた十兵衛。

「すいません。十兵衛殿は足利将軍家の方と面識のある方だと話したらつい」
「そ、そうですか」
本当はそんなスマートな流れじゃないけどね。それに、十兵衛は腕組み。やっぱり、半兵衛の悪口が効いちゃっているのかな。
「信長様は上洛を考えているんです。今、京で我が物顔の三好や松永を追い出し、幕府の再建を考えているのです」
「簗田殿」
と、十兵衛が厳しい目を向けてきた。
「上総介殿の本当の目的など拙者には見えておりますぞ」
うっ。十兵衛の見たこともない怖い顔。
「上総介殿の使っている朱印は天下布武と彫られてあるそうですな。それにこの地を岐阜と改めたのは、古代の周王朝が岐山で天下に号令したのに習ってでしょう。そのような野心をお持ちの方が、幕府を再建しようと考えているなど、笑止。三好三人衆や松永弾正と同様、自らが実権を握られるおつもりなのでしょう」
駄目だ。あまりにもお堅い男だ。これじゃチヨタンが泣きついたって、無理だ。
「確かに拙者は義秋様の上洛を手助けしてくれるような方を探しております。しかし、上総介殿は野心が大きすぎる。武田も同様。ならばと拙者は越後の上杉輝虎殿を当たろうかと考えております。武田、北条と和睦させれば、上杉殿はためらうことなく京に上れるでしょうから」
「いや、でも」
「恩人の簗田殿には伝え申す。今すぐ上総介殿から離れなされ。織田もやがて、武田か上杉に攻め込まれましょう」
は？　なに、暴走しちゃってんスか。そんなの、日本の歴史にはないんですけど。てか、十兵衛ってやばくね？　穏やかそうに見えて、実際は黒幕になろうとしているじゃねえか。
「黒幕気取りですか、十兵衛様」

と、突然、キリッと言葉を放ったのはチヨタン。いや、何を言っちゃってんのかな、この子。

チヨタン無双

「千代っ！」
もちろん、小四郎は激怒。
「お主、何ていうことを言うのじゃ！　そもそも、どうして男の話に入ってくる！　いや、こういう大事な話のときには黙って部屋を出るものじゃ！　出てけいっ！」
「おじい様こそ出ていきなされっ！」
チ、チヨタン？　眉毛を釣り上げて、物凄い剣幕なんですけど。
「おじい様は忘れたか！　ここにいる簗田様にご恩があること！　そして、龍興公の脅威から解放させてくださった織田様のことを！」
「わ、忘れてはおらん。だから、今、明智庄の人間は織田の配下にあるではないか」
「忘れているっ！」
小四郎、圧倒されて口をぱくぱく。ワロスｗｗｗ
「なぜ、ここで何もおっしゃらない。今、十兵衛様は織田を武田上杉に攻め上がらせるとおっしゃったのですよっ！　ならば、我々の敵ではないか！　おじい様、その腰に差している太刀はなまくらですか！」
「な、な、な、何を言うかっ！　この無礼者め！　わ、わ、わしがお主を斬ってやる！　お、お主の死んだ父親の代わりに、わ、わしが斬ってくれてやる！」
って、片膝を立てて柄を握った小四郎。でも、涙。
「小四郎、やめなされ」
と、十兵衛が静かに手を伸ばし、小四郎の刀を鞘に戻させる。
「確かに千代の言い分もわかる」
「わかるなら、引き下がりなされ、十兵衛様」
「千代っ！」
「よい。言わせてあげなされ、小四郎。おなごの言うことじゃ」

ふーふーと吐息を荒げながらも、しばらく千代を睨みつけていた小四郎。何とも言えない緊張感が漂っていて、しーんとしていたけれど、小四郎ががっくりとするように着座して、十兵衛がゴホンと咳払い。

「千代、お主の言うこともわかる。だが、わしは天下の趨勢を見定めなければならん。義の心も人が生きていくには重要な心だが、しかし、今は戦国の世。この世を終わらせるにはそれ相応の血を見なければならないのも事実なのだ」

「それであなたは明智庄を見捨てたのですね。天下の趨勢などという理由で、あなたを守ってきた家臣一族を放ったらかした。目の前の貧者ではなく、あなたが手を伸ばしたのは、空に流れる雲。ただ、その雲を掴んだとしても、目の前の貧者を相手にしなかったものが、どうして天下を定める空となれるでしょう」

チヨタンの目っていうのは、本当に恨みがこもっていたね。実際、チヨタンは十兵衛を憎んでいたのかもしれない。でも、おれは鳥肌立っていたけど。ずけずけ言いすぎ。もう、十兵衛がいつ怒るんじゃないかと思うと、震えが止まらん。

「そのような男が戦国の世を終わらせるなど、それこそ笑止千万」

「違う、千代、お主は何もわかっておらん」

「わかっていないものですか！　なぜ、信長様は稲葉山城を岐山になぞらえたのかお考えなされっ！」

いや、ただ、気に入ったからでしょ？

「稲葉山に城を築いたのは、斎藤道三様ではないですか？　違いますか？　信長様はその娘婿でありますよ」

「それはただのこじつけだ」

「ええ、こじつけかもしれません。ただ、あなたは明智庄、簗田様のみならず、道三様までにも唾を吐くことになりましょう。そして、道三様に最後まで仕え、死んでいった、あなたの叔父上や一族。皆の無念を反故にしましょう」

すると、黙りこくる十兵衛。え？　効き目あったの？　なんか、

チヨタンが一方的に言っているだけだったんだけど。
「上杉武田を呼応させ、美濃にまた再び戦乱を招くおつもりなのですか、十兵衛様」
唇を絞る十兵衛。弱ッ。てか、チヨタンがずるいのかな。そういう、泣き所を責め続ける一方だったし。チヨタンって本当は切れ者だったりして。
いやいや、それは考えちゃいかん。もしも、チヨタンが切れ者だったら、おれは……、操られていたことになる……。
「簗田殿」
「は、はいっ」
「申し訳ありませんが、一晩考えさせていただきませんか」
は、はあ。まあ、いいッスけど。サンザには伝えときますんで。

マジでふざけている。マジでふざけている、このオッサン。↓「採用っ！」

で、サンザの家に再び訪問。

十兵衛が迷っているからなどとは言わず、もう日が暮れてしまっているから、信長にも迷惑をかけるので、明日にしましょうと言ったおれ。

すると、うつむきがちのサンザ。

「実はのう、牛殿」

声もいつもより小さい。何か不穏な予感。

「拙者、すっかり忘れておったのだが、おやかた様は今日の昼に清州に向かわれてしまったのじゃ。当分の間、岐阜には来ないようなことも言っていたかな……」

Ｆｕｃｋ　ｙｏｕ！

マジでふざけている。マジでふざけている、このオッサン。さっき、あんだけおれのことを怒鳴り散らしたっていうのに、もう岐阜にはいないだと？

でも、そこは重臣中の重臣。とぼとぼと帰宅するしかないおれ。

で、信長が清州に行ってしまったことを十兵衛に伝えると、

「左様ですか。なら、拙者も越前の義秋様のところに帰りましょう」

Ｆｕｃｋ　ｙｏｕ！

別に清州に向かえばいいだけのことじゃねえかよ。なによ、チヨタンに言われたこと忘れちゃったのかよ、この裏切り者！

「冷静に考えてみれば、拙者一人の独断で決められることではありません。義秋様のご意向もあることですし。ただ、ご安心くだされ。拙者は義秋様に上総介殿を推薦しようかと思っておりますので」

本当かよ。その間に心変わりしないだろうな。こいつ、だいたい、腹の底では何を考えているかわからない危ない奴だからな。

ということで、上洛計画はとん挫。最悪。やっぱり、おれには荷が重いのかな。てか、信長、なんで清州に行っているんだよ、クソ

ッ。

翌日、十兵衛と小四郎が家を出て行き、ハルマゲドンを起こして精神が尽き果ててしまったおれは、縁側でぽかーんと空を見ているだけ。もう、どうでもいいや。

おれの前で目ざとく竹ぼうきをかけているシロジロ。

「旦那様、そう落ち込まなくても大丈夫ッスよ」

「うるさい。黙って仕事してろ」

「そういう旦那様こそお仕事はされないんスか」

「黙れ。おれはいろいろと忙しいんだ」

ハア。忙しくないけどね。やることもない。ハア。

「ごめんくださーい☆」

うっ。この声は。

「シロジロ、おれならいないと言っておけ」

あわてて居間に逃げ込み、障子戸を閉める。ウウッ。ただでさえチヨタンなんかには会いたくないのに、昨日の失態まで晒したくねえ。

玄関からはチヨタンのキャーキャーとした騒ぎ声。本当はいるんじゃないのかみたいなことを言っている。やだ。会いたくない。

しばらくすると、チヨタンの声が聞こえなくなって、ほっとしながら再び縁側に出るおれ。

で、庭先に戻って来たシロジロ。って、え？　隣のおにゃの子は誰？　ちょっと可愛いんスけど。高校生ぐらい？

「旦那様あ」

と、シロジロが困り顔。隣のおにゃの子はにこにこ顔。

「なんか、押し付けられちゃったんスけど」

「初めまして。って、旦那様、やっぱりいらっしゃったんですね」

「いや、あのう、キミは何者なの」

「あいりです。明智庄の出身です。沓掛にも行ったことがあります。千代様の侍女として岐阜に来たんですけど、山内家は貧乏で私を雇っていられないんです。だから、千代様のお考えで旦那様の下で働

くことになりました。よろしくお願いします」
　いや、だって、誰が決めたの、そんなこと。チヨタンが強引に押し付けてきただけじゃね？　まあ、女中はいたほうがいいかもしれないけど、おにゃの子が近くにいると、また恋とかしちゃいそうだし、それに太郎が何て言うかわからないし。
「どうします、旦那様」
「どうしますって言われてもなあ。あのさ、キミはちゃんと働けるのかい。なにができるんだい」
「変な顔です」
　と、あっけらかんに言ったおにゃの子。ま、まさかの天然ちゃんですか。チヨタンは貧乏が理由じゃなくて、手に負えなくなっておれに押し付けてきたんじゃないのか。
「やりましょうか？」
「あ、ああ、い、一応見ておこっか」
「じゃあ、やりますね」
　そう言って顔を両手で隠したおにゃの子。で、手を離すと、
（。∀。＊）
・・・・・・。
　きゃわわあっっつ！
　あまりの可愛さに思わず腰を上げると、（。∀。＊）の顔をまだやっているおにゃの子を指差して、
「採用っ！」

女運なし（牛ω牛）

「父上っ！　そのようなこと聞いておりません！」
「だって、言ってないもん」
と、おれは耳をほじりながら、板間にごろ寝。耳くそを吹き飛ばし、
「なあ、シロジロ。放っとけないもんなあ」
「いや、ま、まあ」
「何を言っているのですか、父上っ。当家の家事の面倒は四郎次郎殿だけで十分です。なのに、どうして、そんな無駄な扶持を増やすのですか。扶持を与えるなら、武士を配下に付けることが先決のはずではありませんかっ」
「おい、太郎、何てひどいことを言うんだ」
と、起き上がったおれは、顎をくいっとおにゃの子のほうに向ける。おにゃの子はしょぼーんとうつむいちゃっている。可哀想に。
「あいりんに謝れ」
「謝れって。し、しかし。いや、拙者が話をして参ります。千代殿に会って来ます」
「駄目だ。それにあいりんは凄い特技を持っているんだ。あいりん、例のやつをやってあげてよ」
（。∀。＊）
「プッ」
「あ、笑ったなー。今、笑ったよなー、太郎。笑ったからお前の負けだ。わかったなー」
「それとこれとは話が違います」
「いい加減にしろっ！　この家の当主はおれだ！」
押し黙る太郎。フン。あんまりそういうことは言いたくないけどな。あまりにも駄々をこねるからだ。馬鹿息子め。
「じゃ、あいりんはこれからこの家の掃除とか炊事をやるんだよ。

わからないことがあったらシロジロに訊くんだからね」
「はいっ。有難うございますっ」
「父上」
なんだよ。まだ、駄々こねる気かよ。あんまりうるさいと沓掛に飛ばしちゃうからな。
「一つだけ言っておきますが、変な気を起こさないように願います。あいり殿、もしも父上が野蛮なことをしようとしたら、すぐさま拙者に伝えてくるように。よろしいですか」
「あ、はい」
「太郎っ！　お前、前々から言おうと思っていたが、父上をそんな目で見ていたというのか！　あ？」
「左様でございますが、何か？」
シラーッとした目。ぐぬぬ。おれが何をしようと勝手じゃねえか。ぐぬぬ。
「頼もう！」
なんだよ、こんな時間に。本当に来客の多い屋敷だな。もう、引っ越しちゃおうかな、まったく。
「あ、私が行って来ます」
と、部屋を出て行くあいりん。ほほう。率先して動くとは、なかなか健気なおにゃの子じゃのう。
「それはそうと、太郎。信長様が清州に移ったみたいだけど、なんでだ」
「岐阜城を改修するみたいだからですよ」
なんだよ、それ。気に入ったんじゃねえのかよ。気難しいうえに気分屋かよ、信長は。その気分屋のせいで、パーになっちゃったんだもんな、クソッ。
で、部屋に戻って来たあいりん。
「旦那様、文のお届けです」
と、手紙を渡されたおれ。でも、どうせ読めないから、そのまま太郎に渡す。

「誰から？　半兵衛？」
「いえ、丹羽様からのようですが」
えっ？　マリオが何の用？
封を開け、幾重にも折り畳まれた紙を広げながら、書いてあることを読み上げていく太郎。でも、読んでくれても、戦国時代の手紙はおれには訳がわからないので、毎度、通訳してもらうことに。
「要は何て言っているんだ」
「美濃攻めも終わったというのに、ずいぶんと沓掛に戻ってこないが、どうなっているのかと。一度ぐらい顔を見せるべきじゃないかと書かれてありますが」
うっ。そりゃそうだ。沓掛には墨俣城以来帰っていない。兵隊の半分は返したが、沓掛のことは全部、マリオにぶん投げてしまっている状況。信長から上洛工作を指令されているとはいえ、一度ぐらいは帰らないとまずいかもしれん。
「父上、いつまでも丹羽様に任せていては、父上の名誉にも関わってきますよ」
ぬう。そんなことを言われたって、おれだって忙しいんだよ。最近は暇だけど。でも、美濃攻めのときは沓掛のことなんて見ていられる状態じゃなかっただろ。まあ、最初から見てもいなかったけどw
「おやかた様も清州に移ったようですし、父上も当分は沓掛に腰を据えたほうがよろしいんじゃないんですか？」
「いや、だったら太郎が行けよ。お前、馬廻衆だろ。それこそ信長様の近くにいないと駄目だろうが。お前が沓掛城主の代理になれ。息子なんだから、お咎めもないだろ」
「それは無理ですよ。だって、拙者を入れて、一部の馬廻衆は、柴田様や佐久間様の軍と共に岐阜に滞在するよう命じられているんですよ」
「そんなの聞いてない」
「だって、今、言ったんですもの」
むう。その辺だけはおれの息子ってわけか。汚ねえところだけ真

似しやがって。
「とにかく、一度、沓掛に戻ってください。四郎次郎殿、申し訳ないが、明朝、父上と共に沓掛に向かってください」
「かしこまりました」
おい。ちょっと待て、太郎。あいりんはどうするつもりだ。
「あいり殿はこの家に残って家事を見てください。よろしいですか」
「はいっ。頑張ります」
「おいっ！」
と、許せなくなって、立ち上がったおれ。
「さっきからお前が勝手に決めているけど、なんでシロジロは連れて行って、あいりんは岐阜に残すんだ」
すると、お得意のシラーッとした目。
「何を言っているのですか、父上。あいり殿は家事を見させるために雇ったのでしょう。では、男と女、どちらを旅の共にさせるかと考えたら、当然、四郎次郎殿に決まっているではありませんか。道中、危険な目に遭うかもしれないんですよ」
「バカ言え。危険な目に遭うかもしれないだなんて、いいか、おれはまだこの美濃が斎藤のものだったときから、一人であちこち動き回っていたんだぞ」
「じゃあ、一人で行けばいいじゃないですか」
お、おのれ。ああ言えばこう言いやがって。くそう。くそおう。せっかく、可愛いおにゃの子を雇ったっていうのに、一日もしないうちに引き剥がされるだなんて。チクショウ！
そもそも、マリオがこんな手紙を寄越さなければ良かったんだ。
「太郎、一つだけ言っておく。変な気を起こすなよ。野蛮なことをしたら、ただじゃ済まさないからな」
「父上じゃありませんから、ご心配なく。さあさあ、四郎次郎殿にあいり殿、父上が沓掛に向かう支度をしましょう」
で、一人、居間に取り残される。
ぽつーん。

お、おれは息子の掌で転がされているのだろうか……。

二つの親心

おれは思う。

この展開は前にもあった。

おれが沓掛を離れている間にチヨタンをイエモンが手込めにしたのだ。

そ、そして、今度はあいりんが太郎に奪われるのではないか。

ま、いっか。太郎はおホモだちの疑惑があるから、むしろ、あいりんと結婚してくれ。

恋心より親心。おれ、父親の鏡ｗ　どっかの鬼畜とは違うし。

で、清州で一泊したのち、沓掛の鬼畜のところへ。

沓掛に戻って来たのは約一年ぶりのことだけど、なんか城下の雰囲気がちょっと変わったな。岐阜や清州ほどではないにせよ、人で賑わっている。宿屋が増えているし、背中に荷物を背負った行商人もちらほら。

そして、なぜかこそこそしているシロジロ。

「さっきから何をこそこそしているんだ」

「いや、だって、三河の人間がいるんじゃないかと思うと、気が気じゃないんスよ」

「いないって。こんな田舎町に三河の人間が来るかよ」

「そうでもないじゃないッスか。だいたい、沓掛は街道の要所ッスよ。今、勢いのある織田様の清州の一歩手前ですし、岐阜には商人が大挙しているんスから、東海の人間たちが西に向かうときは必ず沓掛を通るッスもん」

ふーん。そうなんだ。桶狭間のいくさの直後はあれだけ廃れていたっていうのに、ちょっと町おこししただけで、これだけ賑やかになるものかね。

だったら、おれでも簡単に復興出来たんじゃねえのかって思っちゃうけど、まあ、あんまり調子に乗ると、痛い目に遭うのがおれの

歴史だからな。
で、一年ぶりの沓掛城。
門が開けっ放し。まあ、西は織田、東は徳川で脅威がまったくないからな。
「あっ、殿様」
と、門番はおれの顔を覚えてくれていた様子。よろしい。
門をくぐるおれ。しかし、おかしなことに気づく。女の姿がちらほら。むむっ。悪魔の館になぜ女の姿が。てか、女だけじゃない。心なしか兵隊も増えている。
そして、全員、おれの姿を見るなり、その場にあわてて平伏。
ほほうw　教育が行き届いているじゃないか。
で、誰かが呼んできたのか、マリオが庭にまでお出迎え。
「おお、簗田殿、ようやく来てくれたましたか」
なんか、あんまり怒っていなそう。ちょっと安堵。
「お久しぶりでございます。ご迷惑をかけて申し訳ございませんでした」
「いやいや、こちらこそあのような文を送ってしまって」
ん？　なんか、様子がおかしいな。やたらへりくだっている感じがするけど。
「で、そちらの者は？」
「ああ、こいつは新しくあっしの家来になった中島です」
「お初にお目にかかります。中島四郎次郎ッス」
「ほうほう。そうか。すると、太郎とは一緒ではなかったのですか」
「ええ。太郎は馬廻衆に入ったため、岐阜から離れられません」
「馬廻衆っ？」
「はい。サンザさんの推薦で、馬廻衆に入りました」
「そ、そうか。太郎が馬廻衆か。ま、まあ、立ち話もなんですから、中へ」
おかしい。マリオの態度がおかしい。それに沓掛の町も城も変貌している。まるで浦島太郎の気分。

六年もの間美濃の調略に取りかかっていたとはいえ、何度か沓掛にも戻って来ていた。ずっと離れていたのはこの一年だけ。その一年だけで急に変貌しやがった。

むう。なんか、蚊帳の外にされている気分だぜ。マリオの野郎、何を企んでやがる。

で、城内の居間に。って、畳っ！？　ちょｗｗｗ　無期限施工停止中の稲葉山の屋敷でも畳の部屋は計画していなかったというのに、いつのまにｗｗｗ　しかも、めっちゃ新しい。めっちゃ、緑ｗ　イグサの香りがぷんぷんするｗ　なんスか、この贅沢ｗｗｗ　あのケチなマリオが。そんなに儲かっているんスかｗｗｗ

いや、ちょっと待て。なんだ、この変貌ぶり。

「おい、シロジロ、お前は庭で待っていろ」

「はあ」

シロジロを居間から追い出し、マリオと二人きりになると、おれはマリオをぎろり。

「ゴロザ殿、一体どういうことッスか」

「な、何がです」

表情が急にあわてふためき、何かやましいところがあるに違いない。馬鹿め。おれはずっと調略にいそしんでいたんだ（何の成果もなかったけど）。竹中半兵衛のところに一年近くいたんだ。おれの目は節穴じゃなくなっているんだぞ。

「久しぶりに帰って来てみたら、ずいぶんと城の様子が変わっているではないですか。女中もいるし、兵も増えている様子。それに城の中も綺麗になっている」

「それはやはり、沓掛にも余裕が出てきて。女子供を置けるぐらい平和になったし、かといって、遠征の機会も増えたから兵も増やさなくてはなりますまい」

「ふーん」

「な、なんじゃっ、そんな目をして」

「だって、徳川と同盟したのはずっと昔だし、余裕が出てきたのも

ここ最近じゃないでしょ。それに、一年前、ブーブー言っていたの覚えていますけど。明智庄の女子供を連れてきたとき、沓掛にそんな余裕はないって。おやかた様にも言ったそうじゃないッスか」

「い、いや、それはな」

「何を企んでいるんスか、ゴロザ殿」

「いや、何も企んじゃいやせん」

「じゃあ、余裕があるなら、あっしの甲冑も買ってくださいよ」

「甲冑？　あ、ああ、甲冑ぐらいよいとも。そうですな、いつまでも綱巻きでは危険ですもんな」

この野郎。あれだけ買ってくれなかったのに、ころりと了解しやがった。こいつ、まさか、横領しているんじゃねえだろうな。沓掛城の収入を懐に入れちゃっているんじゃねえだろうな。この城のものはおれのものだぞ。

「そ、それはそうと、太郎を養子にしたと風の便りに聞いたのですが、まことですか？」

フン。太郎の実の親がお前だっていうことを、おれが知らないとでも思っているのか。

「ええ。太郎は見所のある者ですが、保護者がいないので、このまま足軽雑兵にしてしまうには勿体ないと思い、養子にしました」

「そうかそうか。築田殿に迎え入れられるとは、太郎も果報者ですな」

こいつ、いけしゃあしゃあとのたまいやがって。

「しかし、築田殿は妻子もおらん。このままで行くと、太郎が跡目を継ぐことになってしまいますが、それでもよいのでしょうか」

「別にいいッスけど、そんなの。この城だって棚からぼた餅ですし」

「そうか。まあ、そうですな」

なに、納得してんスか。

てか、待てよ。こいつ、まさか、太郎がおれの息子になったことを知って、沓掛城を変えたんじゃないのか。太郎がおれの跡を継ぐと見越して、沓掛城に女中を置き、兵隊も増やしたんじゃないのか。

なんて意地汚いやつ。だったら、最初から言えよ。太郎は自分の息子だってさ。太郎が今までどれだけ苦労したか。天涯孤独の身でどれだけ寂しかったことか。

まあ、いいや。マリオがそういう腹積もりなら、おれも利用してやる。

「それで、ゴロザ殿。なかなか言いにくいことなんですが、あっしはまだ家臣も少ないため、この城を見られません。だから、これからもゴロザ殿に沓掛の面倒を見てもらいたいんですが」

「そうですな。そればかりは致し方ありません。それに沓掛は街道がひしめく要所です。他国の侵入を見張る役目もありますからな」

取ってつけたようなこと言いやがって。まあいい。おれが沓掛を見るより、マリオが政治をやったほうが、沓掛も栄える。太郎のためにもなるってことだ。むかつくけど。

今度こそ愛馬獲得

沓掛にいると気分が悪いので、一泊したのち、早々と岐阜に戻ろうとしたら、清州からおれに早馬。

伝言男は、なんでも、一度、岐阜の屋敷に行ったみたいだけど、沓掛に行っていることをあいりんから聞いて、あわてて沓掛にすっ飛んできたらしい。

「至急、清州のおやかた様の下へ参上せよとのことです」

げっ。嫌な予感。この前の失態がバレちゃったのかな。いや、それどころか、濃姫を利用しようとしていたことがバレたのか。

そうなると、かなりヤバい。

いや、でも、サンザがそんな告げ口をするはずないし。そもそも、あいつだって馬鹿やっちゃったんだし。もしも信長に怒られたらサンザのせいにしちゃお。

で、出かけようとしたら、マリオが門の前まで追っかけてきた。

「簗田殿、実は渡したいものがあります」

と、言うマリオの後ろからねじり鉢巻き男がパカパカと栗毛の馬を引いてくる。いや、あのさ、渡したいものってあいつかな。あのさ、知っているじゃん。おれ、馬に乗れないの知っているじゃん。

「いや、簗田殿、この馬は以前、簗田殿を振り落とした馬の仔です」

「だからって、乗れないんスけど」

「大丈夫。この馬は赤子でも跨げるほどに訓練してありますから。それに、この馬の弟もおります。弟は気性が荒い馬ですが、太郎なら乗れるかもしれません。なので、今度是非太郎と一緒に馬を取りに来て下され」

フン。

「いや、馬なんていいッスよ。いらねえッスよ。あっしはずっと歩きでやってきましたからいいッスよ」

マリオからの頂き物なんていらないし、それに、どうせ跨ったと

ころで、また振り落とされるのがいつもの展開だろ。赤子でも乗れるのに、簗田殿は乗れないのか。ぷぷぷ。っていうのがいつもの展開だからな。フン。イラネ。

「いや、旦那様、この仔は相当の目をしていますよ」

と、シロジロが馬のおでこを撫でながら、しったかぶり。鼻クソを掴まされる野郎の目利きなんて信用できるか。

「せっかくなんだから貰っておけばいいじゃないッスか。歩きの殿様なんてカッコ悪いし」

こいつ、言わせておけば。

「簗田殿、この馬丁も付けますゆえ、馬の世話もこの者が見ます。ご安心くだされ」

「いや、いいッスって。お気持ちだけ頂戴しておきますよ」

「じゃあ、あっしが貰っていいッスか？」

「ふざけんなっ。なんで、お前が馬に乗るんだ。だったら、おれが貰う。どけっ」

と、ねじり鉢巻きの手を借りて鞍に跨るおれ。ううっ。怖い。

って、あれ？　おとなしい……。この仔、おれが乗ってもぴくりとも動かない。ほほう。あのじゃじゃ馬の仔とは思えないほど、愛い奴。

「どうでしょう、簗田殿、乗り心地は」

「う、うん。なかなかのもので」

「この仔は生まれたときから仕込まれています。この馬丁がずっと世話をしてきたので、この者に任せておけば大丈夫です」

フン。なかなか粋な計らいじゃねえか、マリオ。だが、何のためにこの馬を仕込んできたのかは不明だがな。どうせ、太郎にあげるためだろ。

てことで、出発。おれは上に乗っかっているだけで、ねじり鉢巻きがずっと口輪を持ってくれているから、馬の操縦はこいつがしてくれるみたい。

だけど、沓掛城を出てからしばらくもしないうちにケツが痛くな

ってきた。なんか、歩いていたほうがいいような気がしてきた。
「あのさ、もうちょっとゆっくり歩かせてあげないかな。ケツが痛いんだけど」
と、ねじり鉢巻きに言うと、
「いや、旦那、馬の歩きと一緒に体も上下に揺らさねえと。だから、ケツが痛くなんだよ」
は？　なんスか、この横柄な奴は。まあいい、職人肌なんだろ。おれは心の広い男だからな。
で、馬がパカパカするのに合わせて、おれも上下に揺れる。まあ、ちょっとはマシかな。でも、意外と疲れるな。
「おい、ねじり鉢巻き。この馬の名前はなんていうんだ」
「決まってねえ。最初から旦那に乗ってもらうつもりで世話をしろと丹羽様に言われたからな」
あ、そうなの。なんだ、マリオ。いいやつじゃん。
「お前はこの馬をなんて呼んでいるんだ」
「クリだ」
なんだよ、そのエッチな名前は。
「ただ、それは呼び名だ。名前なんて旦那が決めればいい」
「じゃあ、何にしよっかな」
「綱鎧の簗田の馬だから、それにあやかった名前にすればいいんじゃないッスか」
と、シロジロ。
「お前は黙っていろっ」
ふざけやがって。何が綱鎧だ。シロジロは本気でそんなあだ名が格好いいと思っているのか。ただの汚名じゃねえかよ。変態綱男を天下に知らしめているようなものじゃねえか。
「栗綱っていうのはどうだ？」
と、ねじり鉢巻き。
「馬鹿にしているのか、お前らは」
「馬鹿になんかしてねえよ。それでいいじゃねえか。良い名じゃね

えか」
「ていうか、お前は何者なんだよ。お前こそ名を名乗れ」
「俺は栗之介だ」
氏ね。

「武田だ」

へ？　唐突になんスか？　信長さん。

「牛、甲斐に行ってこい」

えっ？　甲斐って山梨のことだよね？　で、ここは名古屋。名古屋～山梨。新幹線とか通ってないよ、ねえ？

ちなみに、いつもならおれが信長のところに行くのは陽が落ちてからなんだけど、今日はなんだか急ぎのことらしくて、庭先に平伏させられているおれ。で、あとは誰もいない。

「実はな、今度、奇妙丸が武田の娘を娶ることになった」

奇妙丸？　あ、信長の息子のことか。てか、信長と武田信玄ってチョー仲が悪いんじゃないの。

「ただ、その娘は尾張に来ねえ。それはいい。武田の機嫌を損ねさせるわけにはいかねえからな。それでだな、その礼として、調度品を贈ることになった。だから、牛も共に行け」

「な、なんで、あっしが？」

「武田の虎の顔を拝んでこい」

「で、でも、あっしは足利義秋様と信長様をお会いさせる任務が」

「それもそうだが、上洛よりも先に武田との友好が先だ。武田に攻められては上洛もへったくれもねえ。今は上杉などと争っているからいいものの、いつ和睦をするかもわからん。武田の虎も最終目的はおれと一緒だ。いつ、尾張美濃に牙を向けてくるかわからん」

まあ、黒幕気取りの十兵衛がこそこそ動いている可能性もあるしな。その辺りの情勢は信長も見越しているってわけだな。

でも、なんで、おれが？

「牛。もしも、おれが将軍を担いで上洛を果たしたとしても、それを良くは思わねえ連中が出てくるはずだ。その連中は、おれよりも強大かつ野心を持つ男だ。それは唯一、武田の虎しかいねえ。上杉

は将軍家に義理堅いと聞いているから、そんな野心はないが、武田の虎は実の親父を追い出してまで当主になった野心家だ。そして、天下無双の騎馬隊を持っている。なら、おれは武田を手なずけなくてはならねえだろ」

「ま、まあ。でも、武田信玄はもうすぐ死にますよ」

「なんだと？」

「で、息子の勝頼が跡を継ぐんですけど、信長様の鉄砲隊で追い払うんです。武田の騎馬隊を」

「鉄砲隊？　火縄銃のことか？」

「はい。すんごい数の火縄銃で」

すると、信長、眉間にしわを寄せ、腕組みをして考え中。

「武田の騎馬隊を滅ぼすほどの数の火縄銃か。あいにく、今の当家にはそこまでの数はないが」

「まあ、武田信玄が死んでからの話ッスから」

と、おれは軽い感じだったんだけど、信長がぎろり。

「いつ、死ぬのだ」

「あ、いや、いつだっけかな。そ、そのうちです。そのうち」

「お前と言うやつは、いつだってそうだ、肝心なところで使えねえ。どちらにしろ、今は媚びてなくてはならないってことだ。虎が死ぬまでは虎を飼い慣らしておかなければならねえってことだ。まったく。お前の話はいつもあやふやで腹が立つ」

「す、すんまそん」

「とにかく、お前は甲斐に行ってこい。ついでに虎の顔色でも見てこい。もうすぐ死にそうなのかどうか見てこい」

「で、でも、あっしなんか行ったって、何の役にも」

「馬鹿が。天下でもっとも覇王に近い男は武田の虎だぞ。ならば、見てみろ。本物の覇王をな。そして、この尾張のうつけを見定めろ。覇王の資質があるのかどうか見定めてこい」

意味がわかんねー。なに、気難しさ全開になっちゃっているのよ。結局のところ、覇王になるんだから、それでいいじゃん。なんなの

よ。山梨なんて行きたくねえよ。
「それとだ、武田の虎に会うというのにお前の普段の服装で出すわけにはいかん。駄賃だ。これで礼服をこしらえろ」
と、じゃらっと小判が三枚、おれの前にぶん投げられた。
「え？　い、いいんスか？」
「お前は無駄遣いをしないと聞いているから構わん。出立は明朝だ。さっさと支度せい」
ラッキーヘヘ　でも、なんで五枚じゃないのかな。なんで、三枚なのかな。ケチだな。美濃を支配するようになったんだから、どうせ儲けているくせに。十枚ぐらいくれよ。
ってことで、城を出て、シロジロ、ねじり鉢巻き、あとクリツナ（仮）と共に清州城下の呉服屋へ。
何も言わずに呉服屋に来たものだから、驚くシロジロ。小判を貰っただなんて言っちゃうと、こいつらに食い散らかされる恐れもあるからな。
「どうしたんスか、呉服屋になんて。旦那様らしくないッスね」
「馬鹿。明日、清州を出て甲斐に行くことになった。武田信玄に会いに行くんだ。だから、ちゃんとした服を着ておかないとまずいだろ」
「た、武田信玄っ！？」
「旦那、本当に言っているのか！？」
と、ねじり鉢巻きまで興奮。なんだよ、お前らのぶんまで買ってやらないからな。
「た、武田の騎馬隊を間近に……。武田の騎馬隊を……。赤備え。武田の赤備え……」
なんだ、こいつ。ねじり鉢巻きはただの馬オタクなのか。

男だらけの旅行ってエロとか期待しちゃうよね

甲斐まで行く連中っていうのは、せいぜいおれも合わせて五六人ぐらいかなと思っていたんだけど、全然そんなものじゃない。使節団は総勢百人ぐらいの大集団で、なんだか、でっかくてピカピカの箱を持った奴が何人もいて、あと馬の上にも貢物を載せていて、足軽兵、弓兵もぞろぞろいるし、思っていたよりも豪勢な旅。

使節団の親方は、信長の一族の織田カモンノスケ忠寛とかいうおっさん。掃部助と書いてカモンノスケと読む変態チックな名前だが、足軽兵の話によると、カモンは口がかなり上手いらしい。媚を売るのもおべっかを使うのも、織田随一。サルなんか全然適わないぐらいジジイ殺しの饒舌家みたい。

カモンのおべっかは誰にでも向けられるらしく、おれにもおべっかを使ってきた。

「貴公の馬は素晴らしい馬だのう。毛艶といい、表情といい、その体躯といい、武田の騎馬隊にもひけを取らぬ。なんと美しい栗毛馬じゃ」

すると、ねじり鉢巻きがやたら誇らしげ。別におれは嬉しくもない。おれにおべっかを使えよ、まったく。

で、尾張から美濃、信濃と入っていくわけだけど……。

小判三枚じゃ割に合わねえ……。

まず、遠すぎる。次に山道だらけすぎる。次に天候がやばい。山の天候はころころ変わって、さっきまでピーカン晴れだったのに、突然の嵐。しまいには雪まで。最悪。そして、慣れない馬なんかに乗っているからケツが痛え痛え。

ただ、ラッキーなことに、シロジロが気を利かせて蓑や笠の防寒具一式をいつのまにか揃えていた。

でも、その金って。おれは一応懐を確かめてみるが、金はちゃんとある。じゃあ、なんで持っているの、シロジロ。

「丹羽様からお預かりしていたんです」
あ、そう。ならいいや。
夜は武田家の城に泊まらせてもらうことに。おれは一応城主なんで、城の中の布団で＾＾　こういうとき、城主でよかったなって思う。面倒なことはたくさんあるけど、腐っても城主。で、シロジロとねじり鉢巻きは城外の陣幕の中。くれぐれも凍死するなよ＾＾
「簗田殿、夜は気をつけい」
と、カモン。なんで？
「寝床に女を寄越してくるかもしれんが、武田にはくせのある忍びの者が多いゆえん、口を軽くして変なことを申すではないぞ」
むむ。そ、それはくのいちでしょうか。しかも、エロの。胸がざわつく。この旅行にはそんなお楽しみがあるなんて＾＾
そりゃそうだ。こんな山道を歩かされて、なんのお楽しみもないなんてふざけている。小判三枚じゃ割に合わなすぎる。
おれは期待を胸に、用意された小部屋の寝床へ。うーっ。ドキドキするわあ。もぞもぞするわあ。うーっ。たまらん。
「ごめんください」
キタ━━（ﾟ∀ﾟ）（Ｙ（（ﾟA。）（Ｙ（（ﾟ∀ﾟ）（Ｙ（（ﾟA。）（Ｙ（（ﾟ∀ﾟ）━━！！！
なんということでしょう。か細くも透き通った声。ぐへへ。くのいちめ。織田のおれをたぶらかしにくるんだから、相当の美女、いや、美少女に違いない。
「旅のお疲れを癒しに参りました」
癒し？　どんな癒し？　フーッフーッ。癒して。ぽくちん癒して（；´Д`）ハァハァ
「よろしいでしょうか」
「どどど、どうぞっ」
「では、失礼いたします」
すうっと開いた戸板。むほほお。きゃ、きゃわゆい。しっとりとした黒髪、つぶらな瞳、鼻が若干大き目だが、それを差し引いても

なかなかのくのいち。しかも、真っ白の着物、朱の帯。エロい。
「さゆりと申します。酌を注がせていただきとうございます」
さゆりんね。ふむふむ。ちこう寄れ。
盃を受け取り、酌を注いでもらうと、それを唇に近付けるおれ。
いや、待て。こいつはさゆりんという名のくのいちだ。もしかしたら、毒が入っているかもしれない。ふう。危ない危ない。舞い上がりすぎて、罠に引っ掛かるところだったぜ。なにしろ、おれの目的はくのいちの毒牙を避けつつ、童貞卒業っていう手段だからな＾＾
「飲めん。そういえばおれは酒を飲めなかった」
と、盃を床に置くおれ。
「ふふ。そうは見えませんけど」
と、盃を手に取りおれの手を握りながら渡してくる。むむ。妖艶な眼差し。だが、おれはこいつに怪しさを感じた。こいつ、信濃の人間のくせに、ほんのわずか、関西訛りがある。
「お前、信濃の生まれじゃないな。訛りが消えてないぞ。くのいちとしてはどうなんだ、その辺」
おれのキリッとした目に、すうっと笑みを消すさゆりん。
「わかってしまったん？」
「おれの目は節穴じゃない」
「なんや。つまらんわ。わかってしまったんなら、もう用はありません」
と、急に素に戻り、酒の膳をそそくさと持ち出すさゆりん。
「ちょっと、待て。お前は織田の内情を知りたいんだろう。なら、教えてあげるよ。や、ヤラせてくれたらね☆」
すると、戸を開けようとしていた手を止めたさゆりん。静かに振り向き、おれをじっと見つめてくる。
「尾張武者さん、お名前は？」
「簗田牛太郎だ」
「下衆なお方やな。よおく覚えておくわ」
ピシャッ。部屋を出て行ったさゆりん。え、えーと。とりあえず、

一人ぼっちのおれ。
調子に乗っちゃったかな……。乗っちゃったよね……。

山県三郎兵衛尉昌景

尾張清州を出発して一週間ぐらいかな。

ようやく甲府へ。ううっ。尾張美濃に比べると、山に囲まれて、僻地って感じ。こんなところに武田信玄がいるなんて、信長に比べると運がないのがよくわかる。だって、尾張美濃には田んぼがいっぱいあるもん。

で、山のふもとというか裾野に街並みがある。使節団はそこに向かったんだけど、途中ナントカ川を渡ったところで、異様な連中が使節団をお出迎え。三十人ぐらい、馬に乗ったやつらがいるんだけど、全員真っ赤。馬まで赤い鎖帷子を着ている。どう見ても目立ちたがり屋の集団。

「あ、赤備えだ」

と、ねじり鉢巻き。若干、ビビっているけど、若干、目を輝かせている。

「いやあ、勇壮ッスね」

目立ちたがり屋の集団は有名らしい。あのままでいくさ場に出ているのかな。あんなの着ていたら目立って仕方ねえじゃん。すぐに目標にされてあぼーんじゃねえの。

あ、そっか。あいつら長篠の戦いで目標にされるのか。

「遠路はるばる、御苦労だったな、掃部助」

馬に乗ったままカモンに声をかけてきたやつは、さすがに甲冑姿じゃなかった。カモンと知り合いなのかな。てか、めっちゃ偉そう。ダンディな面構えが更に腹立つ。どことなく渡辺謙。

と、思っていたら、ワタナベケンに視線をぎろりと向けられたおれ。

「そなたは初めて見る顔だな」

「こちらは沓掛城主簗田牛太郎政綱でございます」

「ほう。なかなか覚えやすい名。すぐに体と名前が一致する」

と、ワタナベケンがにやにや。うぜえ。

「わしは山県三郎兵衛尉昌景。武田の家政を見ておる。今日は城下の支城にて体を休められい。躑躅ヶ崎には明日案内しようぞ」

やまがたさぶろうびょうえのじょうまさかげ。役所の出生届に引っ掛かりそうな長ったらしい名前だが、一言一句もれずに覚えたぜ。いずれ、お前の体に銃弾をぶち込んでやる。

で、翌日、ついに武田信玄と面会の日。尾張の呉服屋で値切りに値切った（シロジロが）礼服に着替え、しゃきーんとした気分。

でも、ちょっと怖くなってきたな。あの、武田信玄に会うんだもんな。おれも一言二言何か喋らなくちゃいけないのかな。怖いな。カミナリオヤジみたいな感じなんだろうな、武田信玄って。

外に出てみると、むむ、どす黒い雲が甲府盆地を覆っている。寒風もびゅうびゅう吹いている。いやーな予感。

山県クソサブロウ率いる目立ちたがり屋集団を先頭に、使節団はぞろぞろとツツジナントカっていう館に向かう。城下町の住人は両脇にずらりと平伏。うへえ。清州では見られない光景。どうやら甲斐の人間は住人までも武田に忠誠厚い。

なぜなら、目立ちたがり屋集団の前では平伏しているが、それが通りすぎ、使節団の列になると起き上がって、悪口とか言っている。

「織田の兵隊はだっちもねえ連中だなぁ」

「尾張モンなんかちょうすいてっがら、おやかた様もやっちめえばいいのによ」

あのさ、貢物を持ってきたのにさ、相当の嫌われようじゃないの。清州の住人だったら大喜びするはずだぜ。うわあ、信長様にこんな貢物が来てるじゃーん。やっぱ、信長様は違うなあって。

「あれが織田の武将けぇ～。牛が馬に乗っているずらぁ」

ふざけやがって。どうせそのうち言われることだろうとは思っていたけど、礼服を着ているっていうのに、この有様。

このぶんだと、武田信玄もふざけたやつなんだろう。偉そうで、がさつで、土建屋の社長みたいに茶色いサングラスにパンチパーマ

の半分ヤクザみたいなデブオッサンなんだろうな。
なんか、鬱々としてきた。空もどんより。風雨じゃなくて、吹雪の予感。すげえ寒いもん。
ツツジナントカ館に到着すると、そこからは下馬。家臣や兵隊たちは外で待機。おれとカモンの二人が山県クソサブロウに案内されて中へ。
ツツジナントカ館は土建屋の社長の家の割には、雰囲気のある館。お掘が三重に巡らされていて、水がせらせらと流れている。お掘端には木々が生い茂っていて、紅葉が鮮やか。まあ、曇り空で見応えがないけど。
で、正門。ぬぬ。門の両隣の高いところに小屋が立っていて、そこに弓を持った兵隊たちがずらりと並んでいて、そこからおれたちを睨んできている。中には弓を引き絞っているやつまで。
なんか、敵地の中心まで来ちゃった感じ。生きて帰れるのかしら。門をくぐると、神社の神主が住んでいそうな造りのでかい家。ものものしい清州城なんかとは違って、落ち着いたシックな家。
どうやら、派手好きではないようだな。土建屋の社長の割には。ま、山県は目立ちたがり屋だけど。
「ここで待っていろ」
と、縁側の庭先まで来たところで山県に言われて、カモンが地面に膝をつける。おれも真似して土下座。山県は突っ立ったまま。ふざけやがって。
しばらくすると、太鼓がどんどんって鳴った。なんだ？　で、縁側にいかつい連中がぞろぞろと登場。
「これっ、築田殿」
あっ。おれは注意されてあわてて平伏。いつのまにか山県も平伏している。ううっ。いよいよ武田信玄と面会ッスか。おしっこ漏れそう。

隠れた策士？

「遠路はるばる大儀であったのう」
と、誰かの声。頭が上げられないので確かめられないが、おそらく武田信玄。庭先には緊張感全開。そのくせ、武田信玄の声は意外と優しい感じ。
「もったいなき御言葉、有難き幸せにございまする。織田上総介も甲斐大僧正様のお顔を拝見したいと常々申し上げておりまする。まさに、昨今の御取り計らいはまるで父に接しているようだと、上総介も大変な喜びようでございます」
「はっは。そうかそうか。わしも上総介とは一度会ってみたいのう。なにしろ、あの美濃のマムシが認めたという男じゃからなあ」
「有難き幸せ。上総介に代わって、大僧正様のお言葉、しかと受け取らせていただきます。して、今回は我が家中の奇妙丸と松姫様の御婚姻の御礼として、尾張の調度品をお持ちいたしました」
と、カモンは頭を下げたまま、礼服の懐から書状を取り出し、それを近くにいた山県へ。山県がささっと武田信玄に駆け寄り、書状を渡す。
しばらくの間、それを眺めていると思わしき時間。
「なるほど。尾張は豊かであるのう。まして、美濃まで手に入れたのだからな。上総介の勢いはまるで昇る朝日のような勢いじゃのう。なあ、修理亮」
「はっ。上総介の勢い、まるで京の都に手をかけんとする勢いでございます」
「滅相もありませんっ。上総介が上洛などと恐れ多いこと。もしも、上総介が上洛を企てるのならば、それは大僧正様の先陣としてでしょう。そのときには障壁なく大僧正様を京の都にお迎えにあがるときでございます」
「まあ、そうは言っても、甲斐と信濃の二国と尾張美濃の二国では

比べ物にならんからのう」
　なんていう腹の探り合い。信玄は優しい声だけど、明らかに信長を警戒しているし、カモンはその警戒心をほぐそうと必死。てか、すげえ腰の低さ。
「して、掃部助。そちらの者は見たことないが」
「はっ。申し遅れました。この者は沓掛城主簗田牛太郎政綱でございます」
「や、や、簗田牛太郎政綱でございますっ。お初にお目にかかりまするっ」
「沓掛の簗田牛太郎政綱か。聞いたことがあるな」
　えっ？　すると側近の誰かが言う。
「桶狭間の勲功一番の男でございまする。綱鎧の簗田の異名を持ちますが、聞くところによれば隠れた策士との噂も」
　遠く甲斐でも、おれの名前が……。てか、おれが隠れた策士？　なんで？　なんか、まんざらでもないんですけど＾＾　武田家っていい人が多いよね＾＾
「隠れた策士とはのう。簗田とやら、表をあげい」
　策士でもなんでもないんスけど。ま、まあ、命令されたし。で、おそるおそる顔をあげるおれ。
　うっ！　これが武田信玄……。ハゲてる……。てか、あんまり怖い人じゃない。太ってもいないし、目も小さくて可愛い。口ひげを生やしているから、表情がよくわからないけど、物腰も柔らかそう。
「簗田とやら」
　目尻にしわを寄せて、どうやら笑っている。
「お主の師は誰じゃ」
「し？」
「師匠じゃ」
「師匠ですか」
　そんなのいないけど。だって、策士じゃないし。なんで、策士なの。誤情報もいいところだぜ。

「師匠なんていません」
「いない。なるほど。ならば、天賦の才か」
「？」
「おもしろい奴だのう。上総介は良き配下に恵まれているようじゃ」
何がなんだかよくわからん。
「まあ、せっかく甲斐にまで来たのじゃ。ゆるりと休んでいけ。山県、簗田牛太郎殿を、しっかともてなすのじゃぞ」
「はっ」
まあ、何はともあれ、無事に済んだということで。武田信玄も大したことない奴だったな。気難しい信長に比べるとちょろいぜ。

おもてなし

甲府には志摩の湯っていう温泉があるらしく、山県クソサブロウに案内された使節団。とは言っても、全員を連れて行くわけにはいかないので、カモンとおれ、それに二人の家来衆。ま、おれにはシロジロとねじり鉢巻きしかいないけど。まあ、家来とも言えない奴らだが（涙）

武田信玄と面会したあとの山県の態度は急変。すげえ、ぺこぺこ。もてなせって言われたからだろう。温泉のある湯村山に向かう道中、山県はこれから行く温泉の説明をべらべらと喋った。

なんでも、大昔にコウボウダイシっていう偉い人が発見したみたいで、傷が治るすごい温泉みたい。武田信玄もそこで戦場の傷を治したんだって言う。どうでもいい情報だけど。

「それにしても、そなたが隠れた策士とはな。能ある鷹は爪を隠すとはよく言ったものだ」

と、山県がおべっか。なんなんだ、このおべっか三昧の日々は。いい加減、うんざりしてきたぞ。自分の利益のためだけにおべっかを使っているのがバレバレなのに、それを臆面もなく言うんだから。うざったいったらありゃしない。

そういうことで、山県のおべっかなんか相手にしないおれ。いずれ、ぶち殺す野郎にへらへら笑っていられるかっていうの。

で、湯村山に到着。信玄が使っているというちょっとした屋敷があって、今日はここで一泊していくという流れに。

「簗田殿、貴公の配下の者も中に入れてはどうだ」

山県に言われて、うちのぼんくらどもをちらりと見る。シロジロはあやかりたそうにしているが、ねじり鉢巻きは興味がなさそうなので、やめた。

「せっかくですが、勿体ありません。あっしだけで十分です」

「しかし、この者たちも甲府の湯に浸かりたかろう」

「いいです。結構です。いりません」
強い口調で言うと、山県は一瞬眉根をひそめたが、わかり申した、と言って、渋々、屋敷の中にまで案内。
なんか、本当に温泉宿に来た感じ。湧水の音も聞こえてくる。
「とりあえず、湯に浸かる前に一献交わしましょう」
と、山県の従者が酒を持ってくる。酒かよ。飲めないし、いらねえよ。
ま、招待されているわけだし、形だけ。飲んでいる振り。
で、くだらない話。尾張はどういったところなのか、斎藤とのいくさはどのようなものだったのか、と山県が訊ねてくるのに対し、カモンは当たり障りのない答え。
「簗田殿、飲みが足りんじゃないか」
と、山県。うぜえ。おれは酒が飲めないんだよ。
「いや、あっしは酒が飲めないんで、そろそろ温泉にでも」
「そうか。なら、案内しよう」
部屋を出て、山県に案内される。結構、遠い。やがて屋敷の外に。寒い。暗い。行燈の火がなければ迷子になるほどの暗闇の深さ。なんか、熊でも出るんじゃねえの。
ようやく、硫黄の匂いが立ち込めてくる。ううっ。寒すぎて、今すぐにでも飛びこみたいぐらい。てか、これで酒を浴びていたら、死んでいたよ。
暗闇に湯煙の立ち込める場所があって、そこだけはどうやら屋根が被っている。山県が火皿のろうそくに火を灯し、目の前には待ちに待った温泉が。
「簗田殿、これが秘湯、志摩の湯だ」
うっほー。寒い寒い寒い。おれは着物をそそくさと脱ぎ、ざっぶーん。
ほう。熱くもなければぬるくもない。いい湯加減。体がぽかぽかしてきて、ビバノンノ。
「わしも共に馳走しよう」

え？　山県はそこに突っ立っていろよ。キモイから。って、着物を脱いでいるし。うげっ。マッチョ。しかも、刀傷がいくつかある。むむむ。戦国武者のオーラがびしびし伝わってくるぜ。まあ、鉄砲でそのうち殺すけど。

「どうじゃ、簗田殿、湯加減は」

と、お湯に足を入れてくる山県。

「ええ、最高ッスね」

「そうじゃろう。旅の疲れも癒されるじゃろう。そうだ。お主、尾張から甲府までの長旅、さぞ疲れておるだろう。体をほぐしてやる」

体をほぐすって、まさか……。ここにもいたのか、おホモだちが……。どおりで、おかしいと思った。山県自らが案内し、一緒に入ってくるなんて。

「いや、大丈夫ッスよ。あとで部下にやらせますから」

「まあ、そう遠慮するな」

と、湯をかき分けながら近寄ってくる山県。おいおい。やばくねえか。にたにた笑っているんですが。イチモツも心なしか……。

「いや、いいッス。本当に大丈夫ですって」

と、後ろ足に下がっていくおれ。

「そう案ずるな。我々は友ではないか」

こ、これは絶対に突かれる。

「やめてくださいっ！」

あまりの恐怖におれは立ちあがり、唇を震わせながら怒鳴り散らす。

「な、何をする気なんスかっ！　あんた、なんか怪しいぞっ！　そもそもおかしいと思ったんだよっ！」

すると、足を止め、キモい笑みを消して、じっとおれを見つめてくる山県。

「帰るっ！」

おれはお湯をザバザバとかき分けながら山県の脇をすり抜けて行く。いや、抜けて行こうとしたとき、山県が飛びかかってきた。と

いうより、乗っかってきた。
アーッ！
やばいやばいやばい。突かれる。やだ。こんなのやだ。男に目覚めるなんてやだ！
もがくおれ。しかし、山県の力はハンパじゃなくて、頭をひっつかまれ、そのまま顔面をお湯の中にぶち込まれる。うーっ。おれは抵抗して、なんとか頭をお湯から出す。しかし、またぶち込まれる。やべえ。なんか、やべえ。おれは山県の腕を両手で掴み、それを頭から引き剥がす。あっ。髪の毛が抜けた。
って、そんな場合じゃねえ。だって、呑気に構えていたら、山県が右ストレートを放とうとしているじゃねえか。
と、そのとき、山県、すってんころりん。ザッバーン。まあ、ぬるぬるしているもんね。下。
「お、おのれえ」
と、自分から転んだくせに恨み節。てか、様子がおかしいよね。これっておホモだちじゃなくて、おれのこと殺す気だよね。
事のやばさに気付いたおれはあわててお湯の外へ。腰を打ちつけたっぽい山県は、ウウなんて言いながら起き上がってくる。物凄い剣幕。
おれはお湯の外、安全なところから怒鳴り散らす。
「お、おれが何をしたっていうんだ！」
「おもてなしだ」
ぞっとした。鳥肌が立った。「しっかともてなすのじゃぞ」って、殺せって意味だったのかよ。
「こ、こんなことしてただで済むと思っているのかっ！　織田と武田は同盟関係だろうがっ！　武田は天下の信を失うぞ！」
「お前、本当に策士か？」
と、言いながら、山県は鼻の穴の片方を押さえて、もう片方から水鉄砲。
「温泉で酔って溺れたとなれば、何の疑いもねえだろうが」

築田牛太郎、最大の危機

こんなことがあっていいのだろうか。
どうしておれが狙われるのだろうか。
武田はヤバい。まさに伏魔殿。いい顔しておいて、腹の探り合い。いい顔しておいて、目障りな奴は暗殺。しかも、事故に見せかけて。CIA並みだろ、このヤバさ。
とにかくおれはダッシュで逃亡。しようとしたが、その前に閃いた。明かりを全部消しちゃえ～＾＾　真っ暗。山県クソサブロウ。ざまあ。お前が溺れろ。
で、唯一の明かりの行燈をゲットして、逃亡。
しかし、＾＾なんてやっている場合じゃない。こんなところにいると、いつか間違いなくおれは殺される。さっさと甲斐から脱出しないと、暗殺される。
恐怖と寒さで息を切らしながら、ようやくさっきの居間へ。山県の従者がいたが、別に変な様子はない。おそらく、従者は暗殺計画を知らない。
で、カモンをそれとなく外に連れ出し、今しがた、殺されそうになったことを説明。若干、酔っ払っていたが、おれの話を聞いて酔いから覚めたらしい。
「ま、まことか、築田殿」
「まことですよ。本当ですよ。見て下さいよ、この頭」
「うーむ。確かに禿げている」
ウウッ。山県の野郎。絶対許さねえ。
で、騒ぎを聞きつけたのか、最初から外で待っていたのか、シロジロとねじり鉢巻きも駆け寄って来る。
「どうしたんスか、旦那様。あっしらを温泉に入れてくれないから罰でも当たったんでしょ」
「ふざけろ！　今は冗談言っている場合じゃねえっ！」

と、言って、おれはこの馬鹿どもに事情を説明。すると、馬鹿どもも真っ青。そうだよ。お前らも温泉に入っていたら、おれと一緒に殺されていたんだよ。

「築田殿」

と、カモンがごくりと唾を飲む。

「とにかく、お主は逃げなくてはならん。武田は確実にお主を仕留めようとするはずじゃ」

「でも、なんでおれなんかが」

「おそらく、策士という噂があるからであろう。信玄は、今後武田にとって厄介な人間を闇に葬る気なのじゃ」

武田信玄……。なんて恐ろしい子っ！

「わしは何度も甲府に来ているがこのような目に合ったことはない。おそらく、一門衆のわしを狙いはせぬだろう。だが、築田殿、貴公は逃げなければならぬ。今すぐにだ」

「しかし、掃部助様っ」

と、声を震わせるシロジロ。

「そんなこと言ったって、美濃まで相当な距離ッスよ。一週間はかかったんスよ。しかも、美濃まではずっと武田領じゃないッスか」

そうだ。そうなんだ。絶望的じゃないの。

「左様なことを申しても、今は逃げるしかない。おそらく、事を大きくしないはずじゃ。軍勢を出すことはないであろう。おそらく、築田殿を狙いに来るのは忍びの者じゃ。もしかしたら、忍びの者であればなんとかなるかもしれん。遭遇しても金銭をちらつかせればどうにかなるかもしれん」

どうにかなるかもってなんだよ。殺される可能性のほうが高いってことじゃねえのかよ。

「それと岐阜にひそかに早馬を出そう。岐阜には佐久間と柴田の軍勢がおる。そこから十人ほどの精鋭を出させて、築田殿と合流させ護衛に付けさせるのじゃ」

「なら、おれが行く。おれが栗綱と行く」

と、ねじり鉢巻き。
「栗綱なら並の馬よりも早く駆ける。夜通し駆ければ二日で岐阜に到着できる」
「よし。ならばお主が岐阜に行け。今は猶予がないからな。すぐにだ。佐久間や柴田がいなくても、森三左か前田又左は常駐しているはずじゃ。くれぐれも、気をつけてな」
「かしこまった」
と、言って、ねじり鉢巻きはのんびり雑草を食っているクリツナ（仮）のもとへ。額を撫でて、何か話しかけたあと、ひょいとクリツナ（仮）に跨り、前脚を宙に掻きあげたクリツナ（仮）。あののんびりとした馬が豹変。ねじり鉢巻きの手綱のもと、凄まじい勢いで闇の中に消えていった。
ねじり鉢巻きってなかなか頼りになるな。
「なに、ぼさっとしているんスか、旦那様。あっしらも早く甲府から出ないと」
そ、そうだ。湯冷めして風邪でも引きそうだけど、そんな呑気なこと考えている場合じゃない。甲斐の虎に狙われたおれ、最大のピンチ。

もう駄目かな。

「一体、武田の目的はなんなんだろうな」
「そりゃ、もちろん、旦那様を仕留めることッスよ」
「違う。そんなんじゃない。信長様の腹積もりがわかっているくせに、おとなしくしている理由だ」
「あっ、旦那様、足元には気を付けてください」
「大丈夫だよ、このぐらい。おれをナメるな。美濃のときはもっと苦労したんだからな。それより、武田信玄はなんてひどいやつなんだ。顔ではにこにこしておいて、裏では使者を殺そうとするなんてよ」
「それが甲斐の虎と言われるゆえんじゃないッスか」
「お前、ずいぶん軽いな。怖くないのかよ」
「そりゃ怖いッスよ。こんな暗闇の中、いつ忍びが襲ってくるか」
「その割には緊張感がないじゃんか」
「生まれつきの性分ッス」
「おいっ！　あんまり離れるなよ。怖いじゃんか」
「もうちょっと早く歩いてくんないスか。ちんたらしているとすぐに追手にやられちゃいますって」
「おれに合わせろっ。誰のおかげでメシが食えていると思っているんだ」
「まあ、旦那様のおかげでこんな目に合っているんスけどね」
「しっ！」
「なんスか」
「今、ガサガサって聞こえたぞ」
「え？　聞こえてないッスよ」
「馬鹿。止まれって」
「大丈夫ッス……。うわあっつ！　なんかいるっ！」
「おいっ。おいっ！　早く早く！　逃げろっ！　おいっ、逃げろっ

！」
「ひい。ひいいっっつ！」
「走れっ！　走れ走れ走れ！」
「ひいいっっつ！　追っかけてくるっつ！」
「　死　　ね　」
「うわあああああぁぁっつ！！！」
グサッ。
「旦那様あっ！　旦那様あっ！　……様あっ。……様ァ。旦那様ァ。いつまで寝ているんスか」
うう。
「早く起きてくださいよ。早く行かないとまずいッスって」
夢オチか。すると、きっとここは元の時代。タイムスリップは夢だった。そうか、やっぱり夢だったんだ。
「本当によくそんなに寝れますよ。あっしは臭くて臭くて、鼻が曲がりそうッスよ」
あれ？　シロジロじゃん。お前って元の時代にいなかったよね。って、夢オチじゃねえ。やっぱり、おれがいるのは戦国時代。夢だったのは忍者に殺されていたところだけかよ。
そうだ。思い出した。昨晩、湯村山を下りたのはいいものの、どこに向かっていいのかわからず、とりあえず朝を待つことにしたんだ。とある牛舎で。そうだ。臭い。
「旦那様、早く行きましょう。もう朝が来ますよ。早くしないと人が来ますって」
「わかったよ。わかったって。うるさいな」
おれだって殺されたくなんかないんだ。言われなくたって先を急ぐわ。
てか、だるいな。なんか、気持ちが悪いんだけど。目も重い。
「シロジロ、ちょっと、手を貸して」
と、おれはシロジロの手を取り、自分の額に。
「ちょ、ちょっと、旦那様っ。熱がすごいッスよ！」

「やっぱり」
ハアと思わず溜め息。風邪引いちゃったわ。体が重くて仕方ねえ。
それに牛の糞が臭え。
「さんざんだ」
と、思わず弱音。もう駄目かな。この体で岐阜までなんて、到底無理だ。かといって、ゆっくり休んでもいられないよ。どちらにしろ駄目だ、もう。
「だ、旦那様……」
シロジロも泣きそうな顔。
「と、とりあえず水を汲みに行って参ります」
「馬鹿。よせ」
「でもっ」
「動いたらすぐに捕まる。今頃、忍びもわんさか出ているはずだ」
「そんなこと言ったって」
「シロジロ。お前は三河に戻れ。おれはもう駄目だ」
「何を言っているんスか」
「そうや。情けないこと言うて、しょーもない」
え？　声のほうに振り返ると、牛の背中からひょこっと顔を出している女の子。
「牛小屋なんか、臭くてしゃあない。もっとええとこあるから、おいで。薬も飲ませてやるから」
おさげ髪に汚い半纏。どこからどう見たってただの町娘。でも、顔は間違いなくあのときのくのいち。あのとき、おれを罵倒したくのいちのさゆりん。
これって、どうすればいいの？

もっとええとこって言っても、廃屋。ま、清州に住んでいたときのボロ家と同じぐらいかな。

カビ臭くてぼろぼろながらも布団があって、おれはその中。牛舎に比べると天国。

で、さゆりんは水を汲みに行っているわけだが。

「旦那様、あの女、何者なんスか。あれって忍びのもんじゃないんスか」

「多分、そうだ」

「じゃあ、なんで」

「どちらにしろ殺されるんだからいいじゃんか」

と、おれは発熱で朦朧ぎみ。

「そうは言っても」

板戸ががらっと開いて、びくっと体を硬くするシロジロ。

「水、汲んできたわ」

警戒するシロジロをよそに、さゆりんはおれの枕元に座り、桶の中に浸した布を絞り上げ、それをおれの額に乗せてくる。

「安静にせんとあかんよ」

ううっ。惚れてまうやろおぉっつ！

「あと、これ。甲賀流の丸薬や。これ飲んで寝れば、効き目ばっちりやから」

「ちょっと待った！」

と、声を上げたシロジロ。

「甲賀流って、あんたやっぱり忍びの者なんスね」

「そやけど」

「信用できるかっ」

「もういいっ。シロジロは黙ってろ」

と、体を起こしたおれは、さゆりんの手から丸薬を取り、水で押

し流す。
「ああっ」
「殺すならとっくに殺しているだろ」
「そやそや。いさぎがええなあ。私、いさぎがええ男、好きやわ」
「そう？　なら、ヤラせてよ」
「アホか。誰があんたなんかと。冗談言うとらんで、さっさと寝いや」
ええなあ。さゆりん、ええなあ。さゆりんなら殺されてもええわあ。
で、寝るおれ。おやすみ。
「あんたも寝たら。どうせ、一睡もしとらんのやろ」
「その間にあんたはどうする気なんスか。どうせ、武田の人間を呼んでくるんでしょ。で、あっしらが起きたときには囲まれているっていうオチだ」
「あんなあ、私は武田の忍びやないから。甲賀の人間や」
「じゃあ、なんで、あっしや旦那様を助けたんスか」
「命令やから」
へ？　朦朧としていたおれも思わず耳を立てる。
「あんたらの護衛やわ。私らの親方が織田上総介から命令されてるんや」
そ、そうなの？　なんだ、じゃあ、信濃の城で会ったときは、ただ単に酒を注ぎに来たってだけかよ。
「せやから、安心しい。岐阜までの安全な道を案内してあげる。って、言うても、武田の忍びは大した格闘もせん。諜報だけや。街道を避けていけば、武田の目に捕まることもない」
じゃあ、最初っから護衛で付いておけよ。信長も意地が悪いんだからよ。
「今はゆっくり休みい。起きる頃には直っているやろ。そうしたら出発や。脱出は夜道のほうがええかんな」
と、言いながら、さゆりんはおれの額の布を取り、また、桶に浸

す。水を絞り上げ、元の場所に。盗み見るようにうっすらと目を開けると、さゆりんは優しい眼差しで微笑む。

「早く寝いや」

やばい。冗談抜きで惚れちまう。駄目だ駄目だ。あかんあかん。もう恋なんてしないんだ。したってどうせ、嫌な結末になるんだ。だから、抑えろ、おれ。

間接キス

甲賀流の丸薬。やばい。目が覚めたら本当に治っていた。風邪なんか引いていた？　ってぐらい、体が全開。エリクサー並。

「出発の前に腹ごしらえせんとあかん」

さゆりんがいつのまにやら作ってくれたヒエのとろろめしを三人で食べて、いざ、出発。

外はすっかり陽が落ちていて、吐く息は白く、相変わらずの寒さだけど、空には月が出ている。

「夜明けまで歩くかんなあ」

さゆりんを先頭に、笠を深く被って進み出す。

人目につかない畑道や林の中を歩いていき、かなりの距離を歩いたところで、見上げると、山。月明かりの空を背景にして、連なった山々が真黒に浮かび上がっている。

「休憩や。山越えは天候が落ち着いているうちに一気にせんとあかんし、夜の暗いうちに越えんとな。昼間に山道を歩いておったら、向こう側から登ってくる武田の者にすれ違う可能性もある。今夜で一気に越えんと。せやから、今のうちに休憩や」

本当なら、山越えの前に、ふもとの里で一泊するんだけどな。甲斐まで来たときはそうだった。でも、状況が逃亡だから、体に鞭打たなくちゃいけないみたい。

山道に入る口で足を止め、道端のほこらの前に腰を下ろす。

「干し柿や」

うっ。足軽雑兵たちの食い物。久々。あんまりうれしくねえ。

シロジロは美味しそうにしゃぶっているけど。

で、ほこらの中のお地蔵さんにも干し柿を供えているさゆりん。おれたちと同じく姿格好は笠と蓑。あと、半纏にモンペみたいなズボン。どう見ても百姓か町娘。お地蔵さんに手を合わせている姿を見ると、くのいちとは思えん。

「清州を出たときからずっと付いてきていたの？」
と、おれが訊ねると、首を振ったさゆりん。
「信濃で待ち伏せしていたんや。調度、信濃に忍び込んでおったから。ほんで、甲賀の親方から命令が来たんや」
「でも」
と、言ったのはシロジロ。
「甲賀流は六角の配下のはずッスけど」
「確かにそうや。六角様の配下の忍びもおる。でも、うちの親方は見限ったんや。上総介が稲葉山を落としたときにな」
さゆりんは竹筒の中の水を喉に流し入れると、それをおれに渡してくる。ま、まさかの、か、間接キス……。
「そうは言うても、表には見せておらん。甲賀は伊賀モンと違って、掟が厳しいからな」
間接キス……。しちゃった／／
「ただ、うちの親方はいずれ上総介が六角様を攻め滅ぼすと思って、裏でこそこそ動いているんや。そうやろ？　牛太郎さん」
「え？」
「上総介や。上洛するんやろ。いつするんや」
「いや、それは、いつだろう」
「なんで、せえへんのかな。浅井と組んでおるし、武田にも媚を売っておる。そんなら、いつ攻め入ってもええやろ」
「そりゃ、大儀名分がないからだよ」
「大儀名分？」
「信長様は次期将軍を担ぐつもりだから。そうしたら、上杉も武田も下手に動けなくなるだろ」
「そんなん、三好や松永と同じやんか」
「いや、信長様が担ごうと考えているのは前将軍の弟だ。今の支流の出の将軍じゃない。だから、上杉も武田も信長には逆らえても、正統な将軍には逆らえないだろ。って言っても、今のところはまだ、うまくは行ってないんだけど」

「旦那様。そうすると、前に行っていた待ち人ってのは、前将軍の弟君なんですか」
「ま、まあ、そんなとこかな」
違うけど。待ち人は十兵衛だけど。で、失敗しちゃったんだけどね。
「本当ッスか！　すごいッスね、旦那様っ！　それはすごいッスね！」
「そっか。せやから、武田のたぬきオヤジは牛太郎さんのことを亡き者にするつもりなんかも」
えっ。でも、それに関しては隠密裏に動いているつもりなんだけど。
「武田の忍びは格闘は大したことないんやけど、諜報は抜群や。たぬきオヤジの知るところ、道に落ちているゼニの額までって言われているぐらいや」
てことは、おれを隠れた策士って言っていたのは、上洛計画で動いていることを知っていた上での発言なのか。
「たぬきオヤジは上総介の上洛を阻止したいんや。でも、上杉、北条と争っている今は動くに動けんのやろ」
そう言うと、腰を上げたさゆりん。
「そういうことなら、さっさと行かんと。武田は今頃血まなこになって探しているはずや。せやけど、牛太郎さんを殺させるわけにはいかへん。あんたが死んだら全部が台無しになってしまうわ」
た、頼もしい……。おれ、生きて帰れるかも＾＾

間接キス→成長しました／／

山越えって言っても、一つの山を越えても、またすぐに次の山があるんだから、もう参っちゃうよ。

で、朝日が昇ったら、山と山の間の里で、さゆりんが見つけてきた廃屋で睡眠。

陽が暮れたらまた出発。

「ここからは険しくなるかんな。気いつけてな」

言われた通りの険しい山道。崖道。けもの道。忍びの人間ぐらいしか知らない道だと、さゆりんは言ったけど、こればかりは忍びじゃなければ絶対に通らない道。普通の人間だったら遭難確実。はっきり言って、今、どこを歩いているのか、どこに向かっているのか、まったく見当つかない。

道なき道を、夜通しかけて登ったり下ったりしていると、ようやく空が明けてきて、ああ、今日はどこで眠るんだろうと思っていたら、ちょっとした休憩だけで終わり。

「え？　そろそろ眠る時間じゃないの」

「ここは人里離れた山奥やから、人とすれ違う可能性もないんや。せやから、行くよ」

「えーっ！」

「えーっ！」

おれもシロジロも泣きそうな顔。

「あと丸一日かければ美濃や。もうすぐなんやから踏ん張りい」

丸一日ってさ、二十四時間ってことなのかな。日没から夜明けまでひたすら歩いて、また更に丸一日？　死ぬ。殺される前に死ぬ。二十四時間テレビのマラソンよりひどい。武道館からの熱い声援もなし。負けちゃいそう。

「無理だよ。せめて、もうちょっとだけ休ませてよ」

「しゃあないな。ちょっとだけやかんな」

ハア。もう、くたくただよ。メシも干し柿ばっかりだし。干し牛になっちまうよ。

そのとき、おれはふと思ってしまった。干し牛のことを。干し牛ってどんなのだろうな、と。きっと干からびているに違いない。で、おれは可笑しくてにやにやと笑ってしまう。やべえ。テンションがやべえところに向いている。

「何を笑っているんスか、旦那様」

「いや、ちょっとね」

「気持ち悪いな。何をにやついとんねん。どうせ、しょーもないこと考えているんやろ」

「なんでもないって」

「ほんま、けったいな人やな。あんたもなんで牛太郎さんなんかに付いているん。あんた、商人やろ」

「いや、それはいろいろな事情があったんス」

「なんなん？　事情って」

すると、鼻クソ事件のことをかくかくしかじかと述べたシロジロ。

「アホやな」

さゆりん一蹴。うつむくシロジロ。

「そんでも、牛太郎さん、見直したわ。そんな人やとは思いもしなかったわ」

「いや、違うんスよ。最初旦那様はあっしを雇うのに大反対だったんスよ。でも、御子息の若君が旦那様を説得してくれたんス」

「なんだよ、それ。じゃあ、おれには恩がないって言うのかよ」

「ちょい待ってや。牛太郎さん、息子がおるの？」

「一応ね」

と、おれはおもしろくない顔。実は女の子にはあんまり言いたくない。

「立派な若武者ッスよ。馬廻衆なんスけど、学問にも秀でていますし、性格もよいし、城下のおなごにも人気ッス」

「シロジロ、べらべら喋りすぎじゃないのか、ん？」

「別にいいじゃないッスか。自慢の若君じゃないッスか」
「あんなやつ、まだまだだ」
「そうなんかあ。そんなにええ男なんかあ」
さゆりんが見たこともないニヤニヤ顔。なんだよ、その婚活女子っぽい感じ。いや、肉食系ってやつ？　見たことも会ったこともないのに、聞いただけの男のステータスに舞い上がるバカ女。ふざけやがって。
「そんなら、私も牛太郎さんの専属になろっかな。美濃まで送り届けたら、やることないし。なあ、牛太郎さん、私を雇ってや」
と、急に肩にもたれかかって来て、甘えてきたさゆりん。ぐぬぬ。太郎の話を出した途端、なんだ、この女狐ぶりは。
「太郎が目的ならお断りだ」
「いや、それは冗談やって。ほんまに、美濃に送り届けたら私はやることがないんや。甲賀に戻ったって、戦火に巻き込まれるかもしれんやろ。だったら、牛太郎さんのところにいたいわ。な？　私、結構使えるで？　知っているやろ？」
ちらとシロジロに目を向けるおれ。
「いいんじゃないッスか。でも、忍びの者を雇うには俸禄とは別に、その者が所属している忍びの家にも契約金を払わなくちゃいけないって聞いたことあるんスけど」
「そうや。でも、私は下忍やから、牛太郎さんが払えない額じゃないで」
「いくらだよ」
「三百五十貫や。で、俸禄は百貫や」
「ええっつ！」
と、大声を上げたのはシロジロ。ちなみにシロジロの俸禄は十五貫。あいりんは十貫。ねじり鉢巻きは太郎に会わせていないからまだわかんない。決めるのは全部太郎だから。
珍奇衆筆頭のおれは、信長から貰っているのが五十貫。あと、沓掛城の収入の何割かがおれの手元に（てか、現金自体は沓掛城のど

っかに保管）。それはいくらだか知らない。マリオが横領しているかもしれないし。

「百貫なんて高すぎッスよ」

シロジロがちょっと怒っていてワロタｗ　だって、こいつが百貫も貰えれば、半年ぐらいで三河に戻れるんだものｗｗｗ

でも、こいつは知らない。信長に貰った黄金の小判をおれが持っていることを。

「太郎にちょっかい出さないって約束なら雇ってやるよ」

「ほんま？」

「旦那様っ！　若君が絶対に許してくれませんよ！」

「だからお前は駄目なんだよ。いいか？　さゆりんはおれたちの命の恩人なんだからな。金じゃないんだからな」

すると、押し黙るシロジロ。馬鹿め。こいつだけは本当に可愛いやつだ。おれより弱いからな。すべてにおいて。

「そんなら、私は今日から牛太郎さんの専属の忍びな」

「いいよ。ただ約束は破るなよな」

「わかってるって」

「主人はおれなんだからな。おれの命令だけを聞くんだからな」

「わかってるって。なんでも言うこと聞くって」

と、言って、ほっぺたにチュッ。

／／。

ハア、と、シロジロが溜め息。無言で腰を上げている。やっかみですか＾＾

あと三秒やから

ほっぺたチューのパワーで丸一日を猪のように歩いたおれ。ぐへへ。もうすぐ、美濃。もうすぐ、岐阜。無事に帰れる。武田の奴らにも遭遇せずに無事に。ぐへへ。岐阜に帰ったらさゆりんと……。ぐふ。

「ここを下れば上総介の支配下の岩村城や」

ということは、もうほとんど織田領に入っているってことか。空は白んでいるが、まだ陽は登っていない。今のうちに岩村城に突っ走れば、脱出成功。

「ちょっと、さゆりさん」

と、シロジロはふてくされている。こいつは、さゆりんが家来になるってなったときから、この調子。さゆりんにずっと刺々しい。

「旦那様の家来になったんだから、おやかた様を呼び捨てにするのもやめないと」

「なんやて？」

「だから、おやかた様を上総介なんて呼び捨てにしちゃ駄目だって言っているんスよ」

「上総介は上総介やんか」

「ちょっと、なんなんスか！」

プスッ。

「痛ッ」

え？　なになに？　え？　痛いって、どうしたの、シロジロ。

って、え？　さゆりん、何やっているの。なんですか、その手にしている筒は。てか、吹き矢？　え？

「牛太郎さん、ありがとな。いろいろと教えてもろて。それに楽しかったわ。一生忘れへん」

「は？」

プッ。

痛ッ。首に針が。なにこれ。ちくってしただけど。なにこれ。
「最後に教えてあげる。私は武田の忍びやない。でも、上総介なんかに頼まれてもおらん。私の親方の主は観音寺城の六角承禎様や」
「う、嘘でしょ」
「かんにんしてな。でも、言うたやん。甲賀流の掟は厳しいて。そう簡単に主人なんか変えられへんのよ。あ、あとな、牛太郎さんの命はあと三秒やから」
「え？　え？　ちょ、ちょ、ちょっと」
「二ぃ」
にやにやしながら指を折っているさゆりん。え？　嘘だろ？
「一ぃ」
うわああっっつ！　だまされたあああっっつ！
「零」
オワタ＼（＾ｏ＾）／
って、あれ？
なんともないんだけど。シロジロもなんともない。首を傾げるおれとシロジロ。なんだったのかな。お遊びみたいなもの？
「あかん。毒を仕込むのを忘れとった」
と、あわてて半纏の袖から何かを取りだそうとするさゆりん。や、やっぱり殺す気なのかな。
「旦那様っ。今のうちにっ」
状況がつかめないんだけど。
「早くっ！　旦那様っ！」
「父上ぇっ！」
山道を駆けあがって来るのは、た、太郎？　笠を被っていてよくわかんないけど。あと、もう一人いるし。
「若君！　早くこやつを斬ってくだされっ！　六角の忍びの者です！」
すると、二人は駆け上がってくるままに笠を脱ぎ捨て、太刀を抜く。やっぱり、太郎。あと一人は誰？

「なんや。うっとうしい」
プッ。
そのとき、おれは太郎と一緒に走って来た正体不明の若者に飛び付かれ、地面に転がって、すんでのところで吹き矢をかわす。
「うおりゃあああっつ」
太郎がさゆりんに太刀を浴びせていく。
ああっ！　さゆりん！
しかし、さゆりんもすんでのところで交わし、斬られたのは片方のおさげ髪だけ。
「なんや、こざかしいっ」
口の前に筒をあてがうさゆりん。しかし、おれに乗っかっていた若者がナイフみたいなものをさゆりんに投げつけ、それがさゆりんの脇腹にぐさり。
「ううっ」
姿勢を崩したさゆりんに、太郎が斬り捨て御免の構え。
「覚悟っ！」
「やめろ太郎っ！」
おれの声とともに、刀はさゆりんの首ぎりぎりのところで止まった。
「やめろ、太郎」
「どうしてですっ！」
「とにかくやめてくれ」
脇腹のナイフに表情を歪めながら、さゆりんがおれに視線を向けてくる。
「命の恩人なんだ。そいつがいなかったら甲斐から戻ってこられなかった」
「何を言っているんスか、旦那様っ！　殺されそうになったんスよ！　こいつは旦那様をだましてきたんスよ！」
「そんなことわかっているけどさあ」
だってさ、さゆりんって、命の恩人じゃん。薬も毒じゃなかった

し。看病してくれたし。あのとき、優しく笑ってくれたし。
ああ、なんか目から汗が。なんだろ、これ。おかしいな。
「父上、女の忍びの狙いは惚れさせることです」
そう言って、太郎は唖然としているさゆりんから筒を奪い取る。
それをぽいと捨てると、また刀を振り上げる。
「父上、諦めてください」
「やめろォっつ！」
太郎は無視。振り下ろされる刀。
だけど、さゆりん、転げ回って、太郎の刀を回避。
「私は甲賀流や。そう簡単にやられるほど、半端な鍛錬をしてきてへん」
「おのれっ。女狐めっ」
「牛太郎さん。あんたのこと忘れへんから。また、会えたらええな」
にこっと笑ったさゆりん。襲いかかる太郎。しかし、木々の茂みの中に飛び込んで行って、さゆりんは消えてしまった。

ちょっと休憩（作者が）

「おやかた様！　お楽しみのお邪魔をして申し訳ありませぬ！」
「うるさい。もっと声を小さくせい」
「は、はっ。申し訳ありませぬ」
「で、わざわざ岐阜から駆け付けてまで何用だ」
「そ、それが、まことに申し上げにくいのですが、牛殿が武田の武将、山県三郎兵衛尉に襲われたと」
「なんだとっ！　それで、牛は……ど、どうなったんだ」
「配下の者と二人きりで無事に岐阜に戻って来て参りました」
「襲われたのは牛だけなのか」
「左様でございます。掃部助様以下、他の者どもは無事でおります」
「あの、たぬき入道めっ！　なぜだ！　なぜ、牛だけが狙われた！」
「しっかとした理由は判別できませんが、おそらく、牛殿が上洛のために動いているので、信玄はそれを知っていたのではないかと」
「フン。牛を殺せば上洛も頓挫すると思ってのことか。まったく、食えねえ奴だ。だが、しかし、今の状況では、たぬき入道にはへつらっておかなければならん。三左、このことは伏せておけ。牛たちにも口外するなと伝えておけ」
「はっ。そちらはすでに言い聞かせておりますゆえ」
「しかし、あの牛が甲斐からよく帰ってこられた。その配下の人間とやらは、あの五郎左の隠し子のことか？」
「いえ」
「すると、あいつ、いつからそのような猛者を配下にしたのだ。甲斐信濃と逃げてきたのはよっぽどのことだ」
「いえ。配下の者はただの商人くずれでございます」
「商人くずれ？」
「何の役にも立たなそうな者です。まさに奇跡としか言いようがありません」

「あいつ、よっぽどの運を持っているな」
「左様」
「それで牛は今日は一緒じゃないのか」
「それが……」
「なんだ」
「寝込んでおりまして。いや、何かの病にかかっているわけでもなく、襲われた傷があるわけでもないのですが、甲斐からの道のりに心身ともに疲労してしまっているのか、屋敷で一日中寝込んでいるようで」
「しょうがないやつだ」
「面会も拒絶しております。仲の良い又左や藤吉郎にも会わないそうで。拙者でも、部屋まで通しただけで、顔を見せようとはしません」
「道中、女にでも袖にされたんじゃねえのか」
「まあ、牛殿のことですから、それも無きにしもあらずですが」
「あいつはどうも甲斐性がない。五郎左の隠し子を養子に迎えて男を上げたと思っていたんだが、女となるとまったく駄目だな。それに男色も好まないらしいしな」
「左様でございます。ただ、牛殿も年齢が年齢ゆえ、そろそろ身を固めなければ。恐れながら、おやかた様、牛殿にどこぞの姫君でも見繕っていただけないでしょうか」
「牛のような男に嫁ぐ姫か……」
「なかなか難儀ではございますが」
「村井のジイさんにでも聞いてみるか」

アポなし信長

おれは一体、何を頼って生きていけばいいの（´；ω；`）

一度ならず二度までも、二度ならず三度までも。どうして、世間の風はこんなにおれに冷たいんだ。

太郎が枕元で言っていた。「父上、千代殿やあいり殿ならともかく、どこの馬の骨かわからぬおなごなど相手にしてはいけません。まして、美女など。そのようなものは忍びに決まっておりまする」

氏ね。だったら、先に言え。馬鹿息子。

思えば、戦国にタイムスリップしてきて、ありがちな展開で信長の家来になり、ラッキーなことに太閤秀吉と仲が良くなった。（まあ、腹黒だけど）。でも、サルにこのままくっついていれば、天下の半分は冗談としても、おれの夢見たデュフフな生活は送れるかもしれん。

でもな、おれ。

ここまで散々な目にあったおれが、デュフフな生活を送れるか？

たとえ、一国一城の主、大名になったとしても、おれは今のままなんじゃないか。

そうだよ。そうなんだよ。おれは戦国時代で何年か生きてきて勘違いしていたけど、おれはキモオタなんだよ。元の時代で結婚なんてできた分際か？　だから、ＰＣのあずにゃんにぺろぺろしていたんじゃねえか。

もう駄目だ。死にたい。でも、死ねない。どうせなら、山県クソサブロウに殺されても良かったんじゃねえの。でも、むかつくな。あいつ。クソッ。山県の野郎、本当にむかつくぜ。クソッ。あいつだけはおれの手でぶち殺したい。

クリツナ（仮）を飛ばしていったねじり鉢巻きも、目立ちすぎて武田の兵に襲われたみたいだし。弓矢がかすったぐらいで、馬共々無事だったらしいけど。

そうだ。おれの生きがいは武田だ。山県クソサブロウだ。あいつを殺すことを目的に生きていこう。あいつらを滅ぼすことを目的に生きていこう。もう、他はいらない。おれは復讐に燃えた鬼。あいつらを殺せるなら、この命なんかいらねえ。

って、なんか、部屋の外がうるせえな。誰か来たのかな。どうせ、マタザかサルだろ。もしくは、そろそろウザノスケ。

ガッシャン。

うるさいなあ、もう。

「登城もせずに不貞寝か！　報告はどうした、このうつけがっ！」

こ、この甲高い声は……。

ひいいっっっつ。

布団を跳ね飛ばし、あわてて平伏したおれ。

「も、申し訳ありませんっ！」

「お、おやかた様っ。し、し、しばしお待ちくださいッス」

と、縁側ではシロジロも平伏。あいりんも平伏。ぶるぶると震えながら。

「構わん。すぐに帰る」

な、なんで信長がおれの家なんかに。もしかして、おれを斬りに来たのか？　おれ、十兵衛のことでも失敗したし、甲斐でも揉めたし、だから、おれを……。

「牛」

と、信長は平伏しているおれの前にしゃがみ込み、顔を覗きこんでくる。

「ずいぶんと顔色が良いじゃねえか。ん？」

「も、申し訳ありませぬっ。ほ、報告に、登城しようとして、体がすぐれなかったんですが、甲斐の山県に」

「ごちゃごちゃうるせえっ」

「申し訳ありませんっ！」

「罰として、権六の妹と契りを交わせ」

「かしこまりましたっ！」

って、え？　思わず顔を上げてしまったおれ。信長はにやり。お咎めなし。

「権六にはおれ自ら言っておいてやる。いいな」

「えっ、で、でも。し、柴田様の妹って、だ、誰なんスか」

「詳細は村井のジイさんから聞け」

腰を上げた信長は、縁側まで出て行き、震えているあいりんとシロジロに、

「驚かせてすまなかったな」

と、言葉を残して、去っていった。

で、縁側でにこにこと笑いながら突っ立っているジイさんがいる。うーんと、どこかで見かけたことがあるな。あ、いくさのあとのお楽しみ会のときに、信長の後ろに座っている幹部の一人。

「おやかたの計らいじゃ」

にこにこと部屋に入ってくるジジイ。あわてて布団を片づけようとすると、あわてて飛んでくるあいりん。

「す、すいません。お見苦しいところを」

「よいよい」

どっこいしょ、と、その場に座るジジイ。シロジロがあわてて座布団を運んでくる。

「そう、気を遣わんでもよい」

「あ、あのう、早速なんですが、誰と誰が婚姻をするんですか」

すると、あっはっはっはと笑い声を上げたジジイ。

「お主と梓じゃ」

あずにゃん？　ん？　柴田の梓？　デ、デザイナ！？　う、嘘でしょ？　なんで、おれがあんな恐ろしい女と！　だいたい、デザイナがそんなの納得するわけねえ！

村井のジイさん

あいりんがジジイに小湯を出して、ようやく落ち着く。
湯呑みをずずっと啜るジジイ。
「ふむ。お主は茶の湯を嗜まないのか？」
「茶の湯ですか？」
「覚えたほうがいい。お主、美濃攻めの折には調略を働き、つい先日には武田に行ったのじゃろ。茶の湯はよい。親睦にも調略にも使えるからな」
そんなのおれの柄じゃねえし。ジジイの趣味とは違うんだよ。
「なら、わしが教えてしんぜよう」
いや、いいし。めんどくせえ。でも、このジジイは幹部だから適当にあいづち。
「それで、婚姻のことなんじゃが」
「村井様、お言葉ですが、どうしてデザイ……、いや、梓殿などと。絶対にあっしを良く思っていないッス、あの人は」
「なんじゃ、面識があるのか。なら、話は早い」
「いや、早くないッスって。だって、梓殿はマタザ殿とも駄目だったんだし、ウザノ、じゃなかった。内蔵助殿とも駄目だったって聞いていますよ。それも梓殿が気に入らなかったからって」
「確かにそうじゃがのう、わしはおやかたに頼まれたのじゃ。お主の伴侶を探してくれと」
え？　信長が？　意外と優しい……のかな？
「それで、お主と相性が良かったのが梓なのじゃ」
「絶対に良くないッスって」
「いや、良いのじゃ。ちょっとな、紙と筆を用意してくれんか」
そう言われて、あいりんを呼び、紙と筆を用意させる。
「あのな、お主の年齢にお主の姓名の字画を掛けて、そこにおやかたの姓名の字画を――」

なんか、訳のわからない計算を書いていってるんスけど。なんなの、これ。

「で、梓の年齢と字画、更に生まれたときの産声の回数をこうしてみると、ほれ、お主との相性はぴったりじゃ」

何が？　どこがどうなってぴったりなの？　ただのもうろくジジイなんじゃねえの、こいつ。

「お主と梓は末永く付き合っていける」

おれは言葉がなかったね。こんなのってありかよ。おれの胸の内もデザイナの胸の内も考えずに、そんな得体不明の計算だけを根拠にして結婚しろだと？　どんだけ、人権無視の世界なんだよ、ここは。

あ、でも、おれにも前科が……。市姫を浅井に嫁がせろって信長に言ったのは、何を隠そうこのおれだ。人権無視。言えた義理じゃねえ。。。

「の、信長様はなんておっしゃっているんですか」

「喜んでおる。お主も梓も行き遅れだからの」

ファック！　結局はそれが理由なんじゃねえのか。クソッ。おれだって好きで行き遅れているわけじゃねえのによ。

「安心せい。梓もおとなしくお主に嫁いでくるじゃろ。なにせ、おやかた直々のことじゃ。又左衛門や内蔵助のときとは話が違う。むしろ、光栄に思わんとな」

ぐう。何の利得もねえ政略結婚。ただの押し付け婚。しかも、それが実際になったら、おれはゴンロクの義理の弟。最悪。絶対にいじめられるし、先々のことを考えても最悪。だって、ゴンロクはサルに攻め滅ぼされるんだからよ。じゃあ、おれも殺されちゃうじゃねえかよ、サルに。

「ま、今日はここまでじゃ。祝言の日取りなどは権六郎と決めるんじゃな。あと、清州に来るときはわしの屋敷に寄るんじゃぞ。茶の湯を教えてやるからの」

そう言って、帰っていったジジイ。行かねえ。絶対に行かねえ。

クソッ。
　ジジイを見送ったあと、部屋に戻って溜め息。どうすんだよ、本当に。ゴンロク&デザイナなんかとは関わり合いたくねえよ。
「旦那様」
　にこにこしながらにじり寄って来るシロジロ。
「おめでとうございます。柴田様の妹君と御婚姻なんて、これで旦那様も重臣家の一族ッスね」
「梓様が旦那様のお嫁さんかあ」
　と、なんだか、浮かれているあいりん。
「そうしたら、私は梓様の侍女になるんですかねえ」
　何が嬉しいのか、よくわからないけど、そういえば、おれはあいりんに訊かなくちゃいけなかったことがあった。
「あのさ、あいりん、そんなことはどうでもいいんだよ。あのさ、おれが居ない間に太郎が変なことしていなかっただろうね」
「変なこと？」
「大人の事情だよ」
「し、していませんっ！　若君がそんなことするはずないじゃないですかっ！」
　若君がそんなこと、ねえ。していても嫌だったけど、していなくても、なんだか複雑な気分。むしろ、おれなんかより、太郎の嫁でも探してやってくれよ。

簗田家の食卓

「父上っ。梓様との御婚姻などという噂が城内、いや、城下にまで渡っていますが、まことですかっ」
帰って来るなりその話かよ。うるせえな。
「そうだよ、だからどうした」
「だからどうしただなんて、父上、大丈夫なんですか」
「大丈夫もへったくれもないだろ。信長様が勝手に決めちゃったことなんだから。それより、あいつはどうした。ねじり鉢巻きは」
「ねじり鉢巻き？　ああ、栗之介のことですか？　栗之介なら栗綱の世話をしていますよ」
「呼んでこい。メシだメシ」
ねじり鉢巻きがやって来て、全員揃ったところで、いただきまーす。
「でも、良かったッス。旦那様の気分も良くなったみたいで」
「もういい。その話はするな。メシがまずくなる」
思い出したくもない。何もかも。さんざんだったからな。何もかも。

ちなみに、美濃に到着する直前にさゆりんに襲われたことは、あのとき現場にいた者だけの秘密。あのとき、太郎と一緒にいた奴は毛利ナントカっていう奴で（桶狭間で活躍した新助とは別人）、太郎と同じ馬廻衆みたいだが、内緒ってことにしてくれた。なにせ、くのいちにべらべらと喋っちゃって、そのまま取り逃がしちゃったんだから。もしかしたら、今頃、さゆりんは六角の殿様にべらべらと喋っているのかもしれない。結構やばいが、もう知らん。そんなことは思い出したくもない。
「しかし、栗之介殿もすごいッスね。無事に岐阜に到着できたんスもんね」
「栗綱のおかげだ」

「だから、もうそのことは喋るなって言っているだろっ」
しーん。
ひそひそ。どうしたんだ、旦那は。ひそひそ。いや、いろいろとあったんス。ひそひそ。帰ってきてからずっと泣いていらっしゃいましたよ。ひそひそ。いや、いろいろとあったんス。
「ひそひそするなっ」
しーん。
「父上。そんなことより、本当に梓様のことをどうされるおつもりなんですか」
「だから、仕方ないって言っているだろ。くどいんだよ」
「いや、柴田様にお会いしなければいけないでしょう」
「む」
それはちょっと、気持ちが萎えるな。信長直々のこととはいえ、絶対にゴンロクはいい顔していないはずだし。おやかた様をたぶらかしやがって、なーんて怒鳴られるのかな。最悪、キレちゃったりして。
「とりあえず、サンザ殿に相談しに行こう」
「またですか？」
「またってなんだ、またって」
「そういう余計な根回しとかしようとするから、いつもうまく行かないんじゃないんですか」
「うるさいな。また、説教か」
「説教なんてしませんよ。言ったって聞かないじゃないですか、父上は」
「じゃあ言うなよ」
「聞かないけど、言わざるを得ないんですよ、父上は」
「どういう意味だよ、それ」
「はいはい。旦那様に若君。おかわりありますよ」
と、あいりんに割って入られて、おれも太郎もむっとして押し黙る。いつのまにか喧嘩仲裁の術を覚えているあいりんにも驚きだけ

ど。
「でも、本当にどうなるんスかねえ。梓様がこの屋敷に来るんスかねえ。そうしたらどうなるんだろ。こうやって皆でご飯なんか食べられるんスか。柴田様の妹君みたいな格の高いお方が」
「格なんか高くないよ、あんなの。ただのかぶき者だ」
「かぶき者か。じゃあ、馬にも乗るのか」
「お前は本当に馬のことしか考えてないな。馬みたいな顔になるぞ、そのうち」
「俺は別にそれでいいけど」
ねじり鉢巻き（していないけど）の言葉に笑い上げる一同。おれはおもしろくないけどね。タメ語だし。忌々しい奴を思い出すし。
「ごめんだぎゃあっ」
うわ。うぜえのが来た。どうせ、デザイナとの婚約話をどこからか聞いてきて、いても経ってもいられなくなって素っ飛んで来たんだろ。
「あいりん、今、夕飯を食っているところだから帰ってもらいなさい」
「え？　でも」
「いいんだ。いてもうるさいだけだ。帰ってもらいなさい」
「にゃあ？　おみゃあんところのメシはずいぶんうまそうだぎゃあにゃあ」
ハア。なんで、勝手に上がり込んできているんだよ、このクソザル。あ、小判をちゃんと隠してあるよな。危ないからな、こいつだけは。
「頼もう！」
また、玄関から声。これはおそらくマタザ。なんなんだよ、いったい。
「上がるぞ！」
おいおい。マタザまで勝手にかよ。なんなんだよ、こいつら。
で、太郎以外の三人は、サルやマタザの無法者ぶりに唖然。むし

ろ、あいりんなんかは不安そうな顔。
「にゃあ、牛殿。おみゃあ、本当に梓殿を娶るのきゃあ？」
やっぱり。うぜえ。
「おい、牛っ！」
どかどかと部屋に乗り込んできたマタザ。
「お前、梓殿を娶るって本当か！」
うぜえ。どいつもこいつもうぜえ。

で、いつ上洛するの？

翌日、おれはすべてのうざったさから逃れるために、ひっそりと竹中半兵衛の家に逃げ込んだ。なにしろ、我が家にいると、常に誰かがやって来る。しかも、デザイナとの婚約話に盛り上がっている連中がひっきりなしに。

だから、おれはこの世の中で唯一落ち着ける場所へ。

おれが甲斐から帰ってきた三日前に、半兵衛は岐阜に引っ越してきていたみたいなんだけど、それから日は全然経ってない。なのに、屋敷の中の半兵衛の部屋はニート臭全開。本は散らかり放題、筆は出しっぱなし、服は脱ぎっぱなし。

なんで、こんなだらしないやつが天才軍師なんだか、いつも疑問になる。

「聞いています。まるでお祭り状態のようですね」

半兵衛は切れ上がった目尻にしわを集めて、くすくすと笑った。

「笑いごとじゃない。何か案がないのかよ」

「案とは？」

「破談にする案だよ」

「何を言っているのですか。破談など勿体ない。あの柴田権六郎の妹御ですよ。しかも、聞くところによると、なかなかの美女だというじゃないですか」

「お前は何も知らない。あいつの恐ろしさを」

「へえ。面識があるんですか？」

と、目を大きくする半兵衛。なんだか、半兵衛もおもしろがっているふうがある。そもそも、物知りの半兵衛が知らないはずがない。デザイナがとんでもない跳ねっかえりだっていうことを。

「あの女は、おれの目の前で、あのマタザの金玉を殴ったんだぞ」

「本当ですか！？」

「本当だとも。マタザでさえ頭が上がらない女なんだから」

「ははあ。噂には聞いていましたが、まさかそこまでとは。拙者も見たかったですよ。あの槍の又左がおなごに腰を低くしているところを」

「おいおい、おれは冗談を言っている気分じゃないんだ。頼むから、な？　何かいい案を出してくれよ。半兵衛なら思いつくだろ？」

「いや、しかし、そこまで言われたとしても」

半兵衛は苦々しい顔。

「信長の命令は絶対ですよ。どうやったら信長の命令が覆るのか、拙者も知りたいぐらいですよ」

むう。こいつ、いつになく投げやりじゃねえか。考えているふしなんてちっともねえじゃねえか。稲葉山城を乗っ取ったやつとは思えないほど、諦めが早いじゃねえかよ。

「むしろ、拙者は羨ましいですが。素行は悪いかもしれませんが、その素行の悪さも理由があってのことだと思いますよ。聞くところによれば、柴田梓は前田又左衛門との婚姻話が出る前までは、非常に優美な少女だったらしいですぞ」

つったって、そんなのは昔の話だろ。デザイナが十五か六ぐらいのときの話だろ。小学校のときのアイドルが思春期でグレ始めて、コンビニの前でたむろっているなんてよくある話じゃねえか。元の時代では。

てか、なんで、半兵衛はそんなことを知っているんだよ。太郎の素性も知っていたしよ。いつもそうなんだけど、聞くところによると、って、どこから聞いてくるんだよ。

「まあ、簗田殿、そういう色恋の世界、拙者は得意ではありません。そういうことは、あの人に頼んでみればよいではないですか」

「あの人？」

「拙者の殿ですよ」

半兵衛の主人？　ああ、サルのことか。って、誰があんなやつに頼むかよ。

でも、確かに菩提山に引きこもっていた半兵衛に、破談の方法と

か聞き出そうとするのが間違いだった。おれと似たようなもんだからな、半兵衛は。もう話にならん。帰る。

「ああっ。ちょっと、簗田殿」

「なに？」

「一つ忘れていました。十兵衛様のことなんですが」

「えっ？　十兵衛っ？」

「近いうちに清州に登城するとの文がありましたよ」

「ど、どういうこと？」

「信長さえよければ、来年には上洛です」

「ほ、本当に？　足利義秋を担げるってこと？」

こくりと頷く半兵衛。

「しかし、まだ口外してはなりませんぞ」

わかっている。わかっているって。誰が言いふらすかっていうの。甲斐信濃とさんざんな目にあったばっかりなんだからさ。

「有難う、半兵衛。恩に着るよ！」

「御見送りしますよ」

「いやいや、いいって」

爽やかな笑顔で半兵衛の部屋を後にしたおれ。そうだ。デザイナのことで頭がいっぱいだったが、なによりも、上洛だ。しかも、失敗したと思っていたのに＾＾　十兵衛はやっぱり義理堅いやつなのかな。それとも、半兵衛が裏で根回ししていてくれたのかな。

おれはスキップしながら屋敷の廊下を行く。サルの部下にしては広い屋敷。そこに一人で住んでいる半兵衛。従者や女中もいないんだから、変人。だけど、いいやつ。半兵衛だけは本当にいいやつだよな。おれと同じく元ニートだしｗｗｗ

草履を履くと、門の外に出るおれ。さて、上洛計画もかなり現実味が出てきたし、今日はみんなでパーティでもやろうかな。うちの馬鹿連中どもにたまにはいい物を食わせてやろうかな。

あ、でも、この時代って大した食い物が何もないから、いいや。食い物よりも着物がいいかな。うちの馬鹿連中は貧乏ばっかりだ

からな。あいりんなんかは特に喜ぶだろうな。
「ずいぶんと上機嫌だな。亭主殿」
ん？
門の柱に寄り掛かって腕組みをしているのはデザイナ。ぱっつんオカッパ頭に小袖の崩し着。一目で誰だかわかるほどの派手な女。おれの婚約者。
って、なんでこんなところに！？　思わず股を押さえてしまうおれ。

嘘八百のプロポーズ

「兄上がそなたを探しておるぞ」
うっ。それはまずい。本当はおれから伺わなくちゃいけないのに、昨日の今日で動き出しているゴンロクって、どんだけせっかちなんだよ。
てか、デザイナは他人事。どうかしているんじゃねえの。
「ず、ずいぶんとあっさりしているんスね、梓殿は」
「何がじゃ」
「いや、婚姻するのがあっしなのに、ずいぶんと」
「仕方ない。戦国の女の定めじゃ。しかも、おやかた様の命令とあらばな」
しかし、と、デザイナは付け足しながら、黒目をぎろりと光らせる。
「指一本触れさせんからな」
ううっ。やっぱりそういうことスか。仮面夫婦ってやつスか。どちらにしろこうなるとは薄々感じていたけどよ。ううっ。
「行くぞ」
「え？」
「兄上のところに行くぞ」
い、いや、ちょっと、タイムアウトを取らせてくれないですかね。もう一回、半兵衛に相談させてくれないですかね。
「ぼやぼやするなっ」
「は、はいっ」
どうしてこうなった……。
どうしてこうなった！？
どうしてこうなった！　どうしてこうなった！
「あらっ。ねえちょっと、梓様よ」
「ほんと。隣にいるのは、あーあ、簗田牛太郎。梓様も可哀想に。

よりにもよって、あんなのに嫁がされてねえ」
「でも、簗田牛太郎だって捨てたもんじゃないでしょ。明智庄のこと、知っているでしょ？」
「そりゃそうだけどねえ。でも、所詮は太った牛じゃないの」
「まあそうね。あれが本当に梓様の亭主になるだなんて思うと、むしろ腹が立ってくる。養子の左衛門太郎様だったらよかったのにねえ」
「ほんと！　左衛門太郎様と比べたら月とすっぽん。あ、月と牛ねぇ^^」
　ババア氏ね！　全部聞こえてくるじゃねえか！　くそうくそうくそう！　城下の人間の好奇の視線が突き刺さってくる。そして、どいつもこいつも言うことが、デザイナが可哀想。不憫。相手はただの牛。それどころか、いっぱしの城主を簗田牛太郎と呼び捨て。どうせなら、聞こえないように話せよ！　岐阜の住人はなんて不忠な連中なんだ。おれも一応な、この町が信長のものになることに貢献したんだぞ！
「すいぶんな言われようじゃな、そなた」
　くすくすと笑っているデザイナ。笑っている顔は可愛いよね。
「しかし、城下の人々は正直なものじゃ」
　てことは、あんたも同じことを思っているってわけだよね。なんだよ、この夢のない結婚。終わっているよ。
　で、稲葉山へ。幹部連中の屋敷は岐阜城をてっぺんにして、稲葉山の上から下へと偉い順に屋敷が建てられていっているわけだけど、なんだかんだで、出来上がった屋敷の数が増えてきている。
　もちろん、岐阜に常駐している佐久間ヒゲオヤジやゴンロク、サンザの屋敷は真っ先に造られたわけだけど。
　ちなみにマタザとかサルは稲葉山のふもと。おれの屋敷の予定地と同じ辺りに建てられるみたい。てことは、同レベル。
　正直、おれとゴンロクなんて、そのぐらいの隔たりがあるわけだよ。サンザは何回も会っているからあれだけど、佐久間ヒゲオヤジ

やゴンロクと面を向かい合わせるなんて、小便ちびっちゃうぐらい恐れ多いんだよ。
「顔色が悪いぞ」
「いや、まあ、そりゃ、顔色も悪くなりますって」
「兄上がか？」
「そりゃそうです」
「情けない。たかが権六ではないか。そなたは武田信玄にも会ったのだろう。甲斐の虎と顔を合わせたものが、兄上ごときで」
「事情が違いますって」
「事情？」
「だって、梓殿を貰いに行くってことでしょ。可愛い妹さんをあっしみたいな人間にやるなんて、よく思っていないはずです」
　すると、きゃっきゃっきゃと笑い上げるデザイナ。
「可愛い妹などと思っているわけがなかろう。むしろ、兄上はせいせいしておるわ」
　そうして、デザイナはちょっと一休みしようと言った。山道の脇、休息所みたいな小さな掘ったって小屋に入る。なんだか、田舎によくある、バスの停留所みたいなところ。
　木製の長椅子に座るデザイナ。腰に巻きつけていた竹筒の中の水を飲む。おれは突っ立ったまんま。
「座らんのか」
「いや」
　だって、おれも座ったら、密着しちゃうじゃん。指一本触れるなって言われたしさ。金玉殴ってくるでしょ。
　てことで、おれはその場にあぐら。
「遠慮しているのか」
「いや、そういうわけでは」
　怖いだけです。殴られるのが。
「そなたはずいぶんと女子供に優しいのじゃな」
「いや、そういうわけでは」

「明智庄のこととといい、天涯孤独の小姓を養子に迎えたこととといい、見上げた人間じゃ」

う、うーん。成り行きなんだけどなあ。でも、デザイナにそう思われているとは意外。

「おやかた様をたぶらかそうとしているとは到底思えん。兄上はそなたに嫉妬しているだけかの。わらわとそなたの婚姻話も、すぐに了承したそうだしな」

「そ、そうなんですか？」

「まあ、おやかた様の命ということもあるのじゃろ。おやかた様の命を拒むなどもっての他じゃ」

まあ、そうだわな。信長は絶対だからな。

「そなたはどう思うのじゃ」

「いや、それは信長様があっしのことなんかを目にかけてくれて、厳しいスけど、優しいかなとも思います」

「違う。わらわをじゃ」

「えっ」

「わらわとそなたは二三度会っておった。わらわを知らぬわけじゃなかったろ。そなたはどう思ったのじゃ。この話をおやかた様から聞かされたとき」

「い、いや、そ、それは、有難き幸せかと」

「嘘を申せ」

「いや、嘘じゃないッス」

と、あわてて嘘。じゃあさ、嫌いだった。お前との婚姻なんてまっぴらごめんだなんて言ったらどうなるのよ。よくよく考えれば、おれとデザイナだけの話じゃないじゃんか。そりゃさ、破談にできるんだったら破談したいけど、そうしてしまったほうが、実はゴンロクは激怒しそうだし、信長だってキレるだろう。

だったら、穏便にする他ないじゃないか。半兵衛ですら無理だって言うんだし。おれは大人なんだよ。お前なんかと違って。

「あっしは果報者です。梓殿を娶ることができて」

真っ赤な嘘だけどね。でも、いいんだ。嘘をついていじめられなくて済むんなら、この仮面夫婦の生活、おれはずっと嘘をついていくよ。もう、後戻りはできなさそうなんだからな。

「よくもまあ、そのような出まかせをのたまえるな」

しかし、デザイナはキレ気味。

「この世に数千数万といるおなごの中でわらわを娶り、よくもまあ果報者だとのたまえたものよ」

「運命です」

「なんじゃと？」

「数千数万といるおなごの中で梓殿を迎えることになったのは運命です。あっしのような者が梓殿という運命を与えられて幸せです。むしろ、そのような運命に恵まれないと思って生きてきたあっしですから」

「なるほど、そのようにしておやかた様もたぶらかしたのじゃな」

「そう思われるならそう思ってください。たぶらかしているとわかったそのときには、これであっしを斬ってくだされ」

と、腰から脇差を外し、それをデザイナに差し出す。

「ただ、あっしは斬られようとも梓殿を愛します。梓殿への愛は信長様へのご厚意に対する忠義でもあり、天があっしに梓殿をお与え下さった運命に対する信義でもあります（キリッ」

おれってさ、瀬戸際になると口がうまくなるわｗ　まあ、稲葉ガンコオヤジを説得するときに半兵衛とさんざん練習したのも活かされているんだろうけどｗｗｗ

多分、どうでもいいときは口達者になるんだな。本気になるとどもっちゃうんだからさ。

「そ、そのようなこと……」

と、デザイナは手を震わせながら脇差を手に取る。

「そのようなこと抜かしても指一本触れさせんわっ！」

ガンッ。痛ッ。

脇差をぶん投げてきやがった。ううっ。

「行くぞっ！」
腰を跳ね上げ、ずかずかと歩いていくデザイナ。ううっ。頭を押さえながら後を追いかけて行くおれ。

飾りじゃないのよ涙は

柴田家の屋敷に着くと、迎えの女中も振り払って、家の奥へとすぐさま消えてしまったデザイナ。

おろおろする年増の女中。で、おれを一目。

「あ、もしかして、簗田牛太郎様でいらっしゃいますか」

「は、はい。柴田様があっしを探していると聞いたんで」

無理やり連れてこられただけだけど。

「これはこれは、このたびは何と申したらよいやら。あいにくですが、旦那様は今、登城しておりますが、すぐに戻られると思いますので、中でお待ちください」

なんだ。いないのか。じゃあ、帰ろうかな。でも、帰ったら怒られそうだから、仕方なく、女中に案内されて、屋敷の居間に。

床の間には甲冑が飾られてあって、飾り物だか本当に着る物だかは不明。立物って呼ばれている兜の飾りが、鹿の角みたいにやたら長い。あんなの邪魔くさくて仕方ないだろ。ゴンロクもしょせん目立ちたがり屋のようだ。

そういえば、おれの甲冑はどうなったんだ。マリオのやつ、買ってくれるとは言っていたけど、おれの場合、サイズとか測らないと駄目だろ。うやむやにする気か、あの野郎。

近々、十兵衛が清州の信長を訪れるとか言っていたし、そろそろ上洛に向けて戦争だろ。すると相手は観音寺城の六角か。やだな。おれがさゆりんにべらべらと喋っちゃったから、もしかしたらやばいことになるかもしれないし。

「簗田様」

と、居間に入ってきた女中。

「お召し上がりください」

小湯のみ。ふざけろ。お菓子はないのか。それとも、柴田家にはお菓子すら置いていないのか。それとも、差別ですか。家中では下

っ端のおれだから。
「簗田様、このたびはなんと申したらよいのやら」
と、女中。さっきも聞いたよ、それ。
「梓様は見ての通りのお転婆ですが、本当は心優しいお人です。どうか、梓様をよろしくお願いいたします」
床に手をつき、深々と頭を下げてくる女中。
「いや、そんな。頭を上げてください」
「梓様が簗田様に嫁がれるとあれば、私も共に参ることとなります。梓様共々、よろしくお願いいたします」
えっ？　こ、この女中も雇うの？　え？　やだよ。最近、おれの家は人が増えてきているんだから、金はないことはないけど、これ以上うるさくなるのはやだよ。
そうだ。デザイナとこいつは沓掛城に押し込めちゃおうかな。マリオに押し付けちゃおうかな。そうすれば今まで通りじゃん。どちらにしろ仮面夫婦なんだしさ。
「わかりました。我が家中の者は気の良い連中です。すぐに馴染めることでしょう」
「あ、有難うございますっ。そう言っていただけると、梓様も心おきなく嫁ぐことができます」
ま、沓掛城に飛ばしちゃうけどねヘヘ
「ただ、梓様は見ての通りのお転婆」
だから、それはさっきも言ったよね。このババア、ボケているのかな。
「ですけれども、本当は心優しいのです。なので、簗田様、梓様をどうか見限ることなく、優しく接してあげてください」
うぜえな。なんなんだよ。何回、同じことを言うんだよ。でも、今のところはまだ柴田家の女中だからな。あんまりきつくすると、ゴンロクが怖い。
「あのさ、女中さん。あのさ、なんで、梓殿はあんなふうなのかな。昔は普通の可愛い女の子だったって聞いたことがあるけど」

「あっ、いや、それは」
と、わざとらしい演技。
「ふーん。何かあったんですね」
「あっ、それは」
「なんなんですかあ＾＾」
「それはその……。あ、あのっ、絶対に内密にしてください。梓様にも他の方々にも絶対に言わないでください」
「ええ、もちろん。で、なんなんですかあ＾＾」
「じ、実は、梓様は、ほ、本当は、おやかた様の側にお上がりになることになっていたのです」
「えっ？」
側に上がるって、側室ってことで、信長の元に嫁ぐってことだよね。マジで？
「もう、十年も前のことなんですが、旦那様がおやかた様とお話をされて、内々で決まりかけていたことだったんです。梓様も、実はおやかた様を好いていらっしゃったので、喜んでいたのですが」
「ですが？」
「ある日、おやかた様が、そのころはまだ馬借業の人であった生駒様の娘御を見染めてしまい、それでその吉乃様が側に上がり、梓様との御婚姻は立ち消えとなったのです」
吉乃と言えば、おれがまだ珍奇衆として清州城に行っていたとき、ときたま信長と一緒にいた、えらい美人の奥さん。そうだったのか。あの奥さんって、馬借屋の娘だったのか。さすがヤリチン信長。
「その吉乃様も去年、まだ稲葉山攻めが始まっていないころに亡くなられてしまったそうなのですが」
「えっ？」
あの美人の奥さんが。だから、機嫌が悪かったのかな。あのころの信長って当たりが厳しかったからな。てか、おれって相変わらず何も知らねえｗ
「おやかた様と梓様の縁談が破算になったあと、旦那様はおやかた

様の弟君の信勝様を立てるようになり、一時はおやかた様の信をだいぶ失くされました。おやかた様に反故にされた梓様はひどく傷心されていたのですが、旦那様がおやかた様を裏切ろうとしたことにたいしても、だいぶ心を痛まれておりました」

ぬぬ。なかなか泥臭い話。好きだった信長を馬借の娘に取られちゃったあげく、それが引き金でゴンロクの暴走。確かに、そんなことがあったら、グレて、コンビニの前にたむろしてもしょうがねえ。

「それ以来です。梓様の奇行が始まったのは。前田様や佐々様との縁談を自ら破談にしてしまったのも、辛い過去があったからのことなのです」

「でも、じゃあ、あっしとの結婚も、破談にするではないですか。裏切られた信長様の命を、梓様がそのまま受け取るとは思いません」

「いえ。梓様はいまだにおやかた様を好いておるのです」

そうして、ぐすぐすと泣き始めた女中。

「だから、梓様はあのようなかぶいた真似をされるのです。遠くからおやかた様に知らせたいのです。かぶけばおやかた様の目に入るとでも思っているのです、梓様は」

馬鹿なやつ……。もう、二十七だか八のデザイナを信長が見染めるわけねえのに。信長は女にも男にも困っていないヤリチンだっていうのに。

しかも、その信長の命でおれとの婚姻か。いとあはれ。

「だから、簗田様っ。梓様をどうか、どうか、幸せにしてあげてくだされ」

そ、そんなこと言われても……。童貞のおれが、女の傷を癒せるスキルを持っているわけねえじゃんか。おれは魔法使いだぜ。僧侶じゃねえんだから。

恐怖の時間

柴田権六郎勝家。

タイムスリップしたときにおれを真っ先に斬ろうとしたクソオヤジ。そして、おれのことが大嫌い。

まあ、それで良かったんだけど。どうせ、こいつは本能寺の変のあと、サルと対立して滅ぼされるんだから。

でも、何の因果か、おれの義理の兄貴になってしまう予定。最悪。何もかもが最悪。ゴンロクという奴がおれの兄貴になってしまうことも最悪だし、おれが柴田家に巻き込まれそうな予感なのも最悪。

「わしはお前のことなど真っ先に斬り伏せたいぐらいだ」

開口一番、それ。もみあげと顎ヒゲを繋げているあたり、野蛮さがぷんぷんする。おれだってお前なんて大嫌いだ。

「しかし、おやかた様の命とあらば、お前を斬りたくても斬れん。まして、わしの義弟となってしまうのだからな」

「有難き幸せでございます」

全然、幸せじゃありません。

「ゴンロク様の義弟となったからには、息子の左衛門太郎共々、全力で尽力いたす所存です」

「フン。口上もずいぶんと達者になりおって。まったく気に食わん男よ」

あーっ。腹立つなあ。何を言ってもそれかよ。

「とはいっても、お前がおやかた様に進言したことはことごとく織田の発展の一因となっている。気に食わんがそこは認めざるを得ん」

「有難き幸せ」

当たり前だ、クソ野郎。いや、進言しているだけじゃねえんだぞ。桶狭間でも美濃攻めでも、どれだけおれがひいこら働いことだか。

そのとき、お前は何をしていたって言うのさ。ゴンロクは桶狭間にも美濃攻めにも参加してねえぞ。いつもお楽しみ会だけじゃねえ

か。そのくせ偉そうなんだからよ。信長もなんでこんなやつを幹部にしているのかわかんねえ。

「初めて会ったとき、お前は後世から来たとのたまったな」

うっ。そのことはもういいよ。あんまり言うとやばくなるからな。半兵衛にも言うなって言われているし。

「そんなことがあるのかどうか信用できないが、しかし、そうでなければ桶狭間での勝利はなかったかもしれんと、近頃思うようになった」

ゴンロク、なんだか、渋い顔。腕組みをして、何か考え事。

「牛。いや、牛太郎。ならば、今後、どうなるのじゃ」

「わかりません」

「なんだと？」

「あっしはただ信長様に取り入りたいだけで、ただ、珍妙なことを言っただけです。そうすれば、好奇心旺盛な信長様のこと、あっしを取り入れてくれるだろうと思ったのです」

ゴンロクの眼差しがにわかに熱を帯び始めてきていて、ちょっと、やばいかな。でも、こうでも言わなくちゃ、後々面倒だし。

「桶狭間は、あっしのただの進言です。決戦を桶狭間に持ち込めば、今川を破れると、常々から考えておったのです」

両の拳をぎゅうっと握るゴンロク。心なしか額の血管もぴくぴくしているような。

「本気で申しておるのか、貴様」

「今でこそ申せる話です」

「何と食えん奴。とぼけた顔をして、腹ではしたたかにはかりごとは」

「申し訳ありませぬ」

頭を下げ続けるおれの前で、わなわなと震えるゴンロク。で、無言。ピリピリとした空気が流れる、やばい雰囲気。まあ、殴られるぐらいだったらいいや。でも、ゴンロクはおれを斬ることはできない。ここでおれを斬ったら、どう見ても妹の結婚に逆上した結果だ。

信長に会わせる顔がなくなるからな。
「恐ろしい。なんと恐ろしく忌々しい男よ。この権六だけならず、おやかた様、織田の者ども、すべてをお前のはかりごとの道具とするとはな」
「恐れながら――」
「黙れいっ！」
ひいっ。急に怒鳴り散らしたゴンロクに、おれも思わず怯み腰。殴られてもいいかなんて思っていたけど、ゴンロクの凄まじさに今さらながら後悔。
「梓を娶ろうというのもはかりごとか！　これもお前が仕組んだ出来事か！　何が目的だっ！　柴田の家に取り入って、何をしようと企んでおるっ！」
「そ、そ、それは、あっしは何も。こればかりは、の、信長様が、き、き、決めたことでして」
「読めたぞ。わしは読めたぞ。行き遅れの梓なら、すぐにでも婚姻できると踏んだのであろう。そうして、この柴田家を乗っ取ろうという気だなっ！」
「ち、ち、違います！」
「さてはお前、武田に丸めこまれたな」
は？
「おかしいと思ったのだ。武田の家臣に襲われ、命からがら脱出してきたとは言うものの、甲斐信濃とたった二人で無事に逃げ帰ってきたとは、おかしいと思ったのだ。そうだ、お前、武田の回し者であろう！」
な、なんだよ、その勝手な妄想は。前から感じていたことだけど、こいつ人を疑いすぎだろ。最初は今川の手先とか言っていたし、今度は武田の回し者かよ。
「斬って捨ててやるっ！」
おもむろに太刀を抜いたゴンロク。ひいいっっつ。予定外。想定外。おれはゴンロクを甘く見ていた。こいつは相当の馬鹿だ。

ガラッ。
「兄上、何をしておる」
あ、デザイナ。
「大声を出して何事かと思って来てみれば、わらわの亭主殿に刀を抜いているとは、どういうことじゃ」
「あ、梓は控えておれいっ」
「これを目の前にして控えられる女房がおるかっ！」
すると、ゴンロクの目がきょろきょろと泳ぎ出す。どうしたの？
デザイナはゴンロクに歩み寄ると、指先だけでゴンロクの刀を摘み、
「手を離せ」
と、あのゴンロクに上から目線。ゴンロクはおとなしく刀を離し、デザイナがそれをぽいっ。
そして、ゴンロクの左頬に平手打ち。バチンッ。て、凄い音。返す手でゴンロクの右頬にもう一発お見舞い。そのあとに顔面にキック。後ろに倒れるゴンロク。で、ゴンロクの顔面を何度も踏みつけるデザイナ。
「や、やめろ。やめてくれい、梓」
ゴンロクは丸くなってデザイナの攻撃に耐えるだけ。さすがのおれもガクブル。ざまあ、のはずなんだけど、こいつがおれの嫁になると思うと、震えが止まらん。
「わらわの亭主殿を斬ろうとはどういうことじゃ、えーっ！？　どういうことなのじゃあっ！？」
「すまん！　すまん、梓！　もうせん。もうせんから！　勘弁してえっ！」
と、ゴンロクが泣きわめいて、ようやく恐怖の時間は終了。ゴンロクは血だらけ。織田家臣なら、誰もが恐れるあのゴンロクが血だらけ。
ふーっふーっと、デザイナは凶暴な猫みたいな息遣い。
お、おれは、いずれ殺されるかもしれない。デザイナに。

ガクガクブルブル

「どうしたのですか、父上。食べないのですか」
お、おれはゴンロクをボコッたデザイナの恐ろしさが脳裏から離れず、箸もろくに掴めないでいる。
「どうかされたのですか、父上」
怖い。怖い。あんなのがこの家に来たら、いったいどうなってしまうんだ。そう考えると、この食卓がなんて平和なことか。すまない、皆。あとわずかでこの平和なひとときは終わりを迎えてしまうのだ。
「旦那様、食欲がないのなら粥にしましょうか」
と、あいりん。ウウッ。なんて優しい。デザイナのあとだと、あいりんが聖母にさえ見えてくる。
「馬の糞でも踏んだのか、旦那」
「お前はなんでそう馬のことばっかなんだよっ」
「ああ、よかった。いつもの旦那様ッスね」
あっはっはと笑う一同。馬鹿が。この平和もあと残りわずかなのも知らずに。
「そういや、旦那。沓掛にはいつ行くんだ？　栗綱の弟、貰いに行かねえと」
「なんですか、栗之介。栗綱の弟とは？」
「若君のために育てた馬が沓掛にあるらしいんスよ」
「えっ？　拙者のために？　栗之介がか？」
「そうだ。栗綱に比べると気性はすこぶる悪いが、若君なら乗りこなせるに違いねえ」
「へえ。栗綱の弟ですか。それはまた楽しみですね。父上、今度是非、沓掛に見に行きましょう」
「う、うん……」
ん？　そうだ！　沓掛に逃げよう！　デザイナを沓掛に飛ばすん

じゃなくて、おれが沓掛に逃げよう。そうすれば、ずっと会わなくて済む。

そして、太郎。申し訳ないが、お前はデザイナの餌食になってくれ。

「そうだな！　よし！　明日行こう！　シロジロ、ねじり鉢巻き、食事が終わったら支度をしろ。明日、朝一番で向かうぞ！」

「いや、父上。明日だなんて、拙者は明日も登城しなければなりません」

「わかったわかった。お前は岐阜に残っていろ。沓掛からクリツナ（仮）の弟を連れてきてやるから」

おれは沓掛から帰ってこないけどね＾＾

「亭主殿はおるか！」

え？　げ、玄関から聞こえてきたのは……。

ひいいっつ。

「ちょっと、見てきます」

「いいっ。あいりんっ、行かなくていいっ」

「亭主殿って、もしかして梓様ッスか」

「そうだそうだ！　だからいい。行かなくていい」

「何を言っているんですか、父上。あいり殿、梓様を呼んできてくだされ。せっかくですから、一緒に食事をしてもらいましょう」

「ば、馬鹿っ。なんてことを言っているんだ。お前だって知っているだろ、あいつの恐ろしさを」

「それはそうですが、そうも言っていられないではないですか。あいり殿、父上は構いませんから、早く行ってください」

「は、はい」

「太郎ぉ。お前ぇ。知らないぞ。どうなっても知らないぞ」

「何をそんなに怯えているんスか。所詮、おなごじゃないッスか。甲斐信濃ではあれだけ女にだらしなかったっていうのに」

「やっぱり」

と、シラーッとした目で見てくる太郎。

「そ、そのことはもういいだろっ」
なんて、揉めているうちに、デザイナの姿が。やばいやばいやばい。
で、デザイナの姿におれ以外の一同は平伏。
「よしてください。頭を上げてください」
あれ？　様子が違うんですが。格好は同じだけど。
「わらわはただ、亭主殿に話があって来たのじゃ」
「なら、梓殿。調度、食事中だったので、ご一緒に」
「いや。ならば、食事が終わるまで待っておる」
「そんなこと言わずに」
と、シロジロ。
「せっかくですから、一緒に食べて行ってくださいッス。どうせ、ゆくゆくは一緒になるのですから」
「そうだ、姫君。簗田のメシはうまいからな」
ほんと、わかってねえ。太郎はともかく、シロジロとねじり鉢巻きは会ったこともないからわかってねえ。
「今日は長良川で釣れた魚の煮付けです。うちの栗之介さんが釣ってきたものなんですけど、いっぱい釣って来ちゃったんです。だから、食べて行ってください」
あいりんまで。むしろ、あいりんなんかはにこにこ。そういえば、昨日もデザイナの話をしていたときは浮かれていたな。
「そこまで言われては仕方ないな」
と、にこっと笑ったデザイナ、車座に座っている中に入ってきた。うわ。頼むから、シロジロ、ねじり鉢巻き、粗相を起こさないでくれ。お前らの失態は全部おれに回ってくる。すると、おれは血だるま。
「しかし、梓殿」
と、太郎が言う。
「日暮れにおなごが一人外を歩くなど危険すぎます。自重してください」

うわあ。なんてことを。デザイナにまで説教垂らしやがって。なんてことを。太郎、お前、死んだぞ。

案の定、無言のままに太郎をじいっと見つめるデザイナ。

「そなたが息子か」

「左様でございます。左衛門太郎でございます」

「わらわの息子にもなるのだな」

すると、デザイナは笑顔を見せた。優しいけど、どこか儚い笑顔。

おれは不覚にもどきっとしてしまう。だって、すごいギャップなんだもん。

太郎も顔が真っ赤。

簗田家の取り柄

クリツナ（仮）の弟は気性が荒いうえにとんでもない馬だそうで、ある朝、ねじり鉢巻きが世話をしに馬房に行くと、クリツナ（仮）の弟は後ろ脚で耳を掻いていたらしい。絶対に嘘だろう。そんなわけない。と、食卓は盛り上がったが、ねじり鉢巻きは嘘じゃないと言い張り、そういう芸当ができるのは体が柔らかいからだ。稀に見る名馬だと大真面目に言う。

「そのような馬、わらわも是非見てみたい」

「見せるとも。いずれ、岐阜に連れてくる。若君のために育てた馬だからの」

「へえ。太郎殿のためにか」

おれの心配をよそにデザイナは上機嫌。ねじり鉢巻きのタメ口もあまり気にしていない。なんなんだろうな、一体。多重人格なのか。

「姫君は馬に乗られるのか」

「わらわは怖くて馬など乗れん」

「でも、栗綱なら乗れるッスよ。だって、旦那様でも乗れるんですから」

「えっ？　父上、乗れるんですか？」

「知らなかったんスか、若君」

「いいえ。だって、父上は――」

と、調子に乗って、太郎はおれが馬に振り落とされた過去を暴露。それ以来、馬には頑として乗ろうとしなかったと話し、一同、げらげら。ぐぬぬ。

「正直、あのとき拙者は、この人に付いていって大丈夫かと不安になりました」

「別に今からだっておれの下から離れたっていいんだぞ」

「あのときはって言っているじゃないですか」

「今だってどう思っているか。口を開ければ説教。父上をなんだと

思ってやがる」
「はいはい、旦那様。柿の皮を剥きましたよ」
むう。あいりんになだめられて、柿の実を口に放り込む。
「梓様もどうぞ」
「ありがとう。そなたは気が利くのじゃな。牛太郎殿のところは長いのか」
「いいえ。つい最近です」
あいりんは元は明智庄の人間で、イエモンの元に嫁いだチヨタンの侍女として岐阜にやってきたことをデザイナに話した。
「つい最近とは。そうは見えなかった」
「旦那様も若君も皆さん優しいので。旦那様はお忙しいのでこうして皆で一緒にいることはあまりありませんが、賑やかで退屈しません」
「それだけが簗田家の取り柄ッスね」
「黙れ。おれがここまで来るのにどれだけ苦労したと思っているんだ」
「父上は大した苦労などしていないじゃないですか」
「なんだよ、その言い草。まるでお前が苦労してきたような言い草じゃないか」
「拙者は苦労してきましたよ。父上がいつもふらふらとされているから苦労してきましたよ」
「梓様、毎日この調子なんです。一つ、ぴしゃりと叱ってあげてください」
あいりんがそう言うと、デザイナはくすくすと笑う。
「よいではないか。喧嘩するほど仲が良いのじゃ。羨ましい限りじゃ」
「でも、良かったッス。梓様が物わかりの良い方で。あっしは柴田様の妹君と聞いたから、てっきり、堅苦しい姫様かと思って」
「わらわも良かった。そなたたちが温かい人たちで」
なんか、すっかり馴染んでいるんですけど。なんか、すっかり心

を許しちゃっているんですけど。デザイナも、うちの連中も。
どういうことなんだよ、一体。昼間のデザイナは凶暴な猫、いや、猛獣だったぞ。
「もう遅いから、今夜は泊まっていったらどうだ」
と、ねじり鉢巻きが余計な一言。
「いや、遠慮しておこう。柴田の家の者どもにも何も伝えてきておらん。さすがのわらわでも、夜通し帰ってこないとなると、心配もされるであろう」
「なら、拙者が送って差し上げましょう」
と、腰を上げようとした太郎を、デザイナが制す。
「いや、よい。わらわは牛太郎殿に話があって来たのじゃ。送ってもらえるなら、牛太郎殿に送ってもらおう」
え？　まさか、おれと二人きりになって、ボコリとか？
デザイナは信長に惚れているらしい。ゴンロクはおれを武田の回し者と疑う。デザイナがあのときの話をもしも聞いていたとなると、ゴンロクの代わりにおれを成敗するとか……。自分の亭主は自分の手で殺す。デザイナが考えそうなことだ……。
しかし、送り届けたくないとは言えずに、稲葉山までデザイナと二人きりの羽目に。怖いので、逃げるときのためにクリツナ（仮）も同行。クリツナ（仮）の口輪を取りながら、デザイナと肩を並べて行く。
満月が夜空を群青に染めている。岐阜の城下の隅々にまで月光が渡っている。
「は、話ってなんでしょ」
「大したことではない」
なら、明日か明後日でもいいじゃねえか。わざわざ乗り込んでくるなよ。だいたい、おれだって、一人で夜道なんか歩きたくねえんだ。武田か六角の忍びに襲われたっておかしくないんだからよ。
「詫びを入れたかった。兄上が愚かな真似をしてしまった詫びを」
「そんなこと別にいいッスよ」

本当だよ。そんなことはおれにとっちゃ日常茶飯事。そんなことでわざわざ詫びを入れられたんじゃ、おれの家の前には詫びを入れなくちゃいけない連中で行列ができるっていうの。

サル、マタザ、イエモン、マリオ、山県、挙げて行くだけでもキリがない。今さら、ゴンロクに刀を向けられたところで、大したことじゃない。怖かったけど。

「お貞に聞いたであろう」

「オサダ？」

「わらわの侍女じゃ。今日、いたであろう」

「ああ、あの方」

「お貞がそなたにわらわのことを話しているとき、わらわは聞いておった。べらべらと喋りおって」

「あ、いや、なんのことだか」

「とぼけおって」

とか言いつつ、デザイナは口端を緩めている。

「確かにわらわはおやかた様に輿入れするはずであった。わらわは乙女心におやかた様に憧れておった。だから、わらわは喜んだ。嬉しかった」

夜の城下は静か。クリツナ（仮）の足音が響き渡るぐらい静か。

「しかし、吉乃様に取られてしまった。仕方ない。吉乃様は誰もが知っている美しい方であったから」

「あ、梓殿は今でも信長様を」

「さすがにそれはないわ」

確か、アンチメロドラマ隊だったはずじゃ……

月光をまぶした雲がゆるやかに流れ、澄んだ空気は頬を刺すほどの冷たさ。

風は木々を枯らした。でも、今日だけは誘うような風だった。舞い散った木の葉も囁くように路上をすべっているだけ。

クリツナ（仮）が引かれるままに歩く。とてもいたいけな瞳。こいつは、おれなんかに引かれていても、従順でいてくれる。でも、知っているんだろう？　おれがどうしようもない奴だなんて。

お前は賢いからな。

「夜になるとさすがに冷え込むな」

「こいつの側にいれば暖かいですよ」

おれが言うと、デザイナはクリツナ（仮）の体を小さな手で撫でた。クリツナ（仮）は別段気にもせずにただ歩く。

「確かに暖かい」

にこっと笑うデザイナ。

「名は栗綱と言ったな」

「うちの者が勝手に言っているだけです。名前はまだ決めていません」

「なら、栗綱でいいではないか」

「あっしが嫌なんです」

「なぜじゃ」

「確かに栗毛の綺麗な仔ですけれども、綱というのは、あっしのあだ名からきているんです。あっしは嫌なんです。綱鎧の簗田なんて。まるで、馬鹿ではないですか」

「わらわは好きじゃがな」

「え？」

思わず足を止めてしまったおれ。クリツナ（仮）も立ち止まる。おれの一歩前で立ち止まったデザイナは顔だけを振り向けてきて、

笑顔を浮かべている。月明かりを受け止めた白い肌が、雪のように浮かび上がっている。

おれはよくわからなくなってきた。

顔を戻すと、デザイナは再び歩を進め、おれとクリツナ（仮）も後を付いて行くようにして歩み出す。

彼女の後姿は、思った以上に小さい。しかし、月の下に映えている。静寂の岐阜の町並みを背景にして、まるで切り取った一枚の絵のように映えている。

「綱鎧の簗田とは、たとえ、綱巻きの貧相な身であっても、戦場を駆け抜けようとするそなたを敬って付けられたあだ名のはずじゃ」

「そんなはずありません。皆、あっしを馬鹿にして呼んでいるのです」

「わらわは馬鹿にはせんぞ」

と、夜空の月を見上げたデザイナ。

「わらわは綱鎧の簗田の女房じゃ」

おれはよくわからなかった。むしろ、震えた。この雰囲気がなんなのかわからない。この気配におれはどうすればいいのかわからない。

あっ。

クリツナ（仮）が頬ずりしてきた。嘘だろ。おれの心の内がわかるっていうのか、この馬。

「どうした」

と、振り返って来るデザイナ。

「いや」

ぐいぐいと顔を押し付けてくるクリツナ（仮）に戸惑うばかりのおれ。

「ふふ」

デザイナはクリツナ（仮）に歩み寄り、馬面を撫でてやる。

「そなたは皆に好かれておるようじゃな」

すると、クリツナ（仮）はデザイナの顔をペロッと舐めた。

「やめい」
ペロペロと舐められて、無邪気にはしゃぐデザイナ。その笑顔は、本当に無邪気だった。少女だった。多分、信長に憧れていたときの、少女の顔。本当の彼女の笑顔。
どうして、どうして。そんな顔ができるのに。
うちの連中にも優しかった。太郎にも優しかった。むしろ、自分の息子になるのだなと言ってくれた。
そんなことが言えるか？　おれでさえ、躊躇したことだ。突然、十四の息子を持つことになるなんて、おれだって躊躇した。
それなのに、この子は、たった一言、わらわの息子にもなるのだな。
「梓殿」
クリツナ（仮）とじゃれ合っているデザイナにおれは言った。
「やっぱりやめましょう、こんなこと。あっしとの婚姻なんて。あっしなんかと一緒になったら幸せになれません」
クリツナ（仮）の顔を抱いたまま、おれを見つめるデザイナ。
「きっと、梓殿を幸せにする男が現れます。だから、やめましょう。信長様もあっしから言えばきっとわかってくれるはず」
「なぜじゃ」
うつむくしかないおれ。
「なぜじゃ」
「だって、どうしてあっしなんかで良いかわかりません」
急に風が吹いた。木の葉が舞った。
うつむくだけ。沈黙だけに包み込まれる。
「わらわはそなたで良い。たとえ、おやかた様の命でなかったとしても」
沈黙を破ったその言葉に、思わず顔を上げてしまったおれ。
「そなたは優しい。皆に優しい」
嘘だ。優しくなんかない。
「そなたの家の者も皆、そなたを慕っておる。家の者だけではない。

サルや又左、家中の者も。それに言うてくれたではないか。わらわを死んでも愛すと」

嘘だ嘘だ。おれの言ったことも嘘。こいつの言っていることも嘘。おれがこんな思いをできるはずがない。全部まやかしだ。まやかしなんだ。

「そのようなことを言われたのは、わらわは初めてじゃ。だから、牛太郎殿――」

「やめてくださいっ」

おれは思わず顔を隠してしまった。知らなかったんだ。誰かに好かれるっていうことが、こんなことだとは思わなかったんだ。どうせなら、こんなことからは目を背けていたかった。

そう、太郎が菩提山にまでおれを探しに来たとき、おれは目を背けた。太郎がおれを心配してくれていた。そんなことからは目を背けたかった。

だって、どうすればいいかわからないじゃんか。おれは今までずっと好かれたことなんてなかったんだ。ただのキモオタだったんだ。キモイ。それがおれの存在意義だったんだ。本当は、それでいいんだ。キモオタっていうことがおれのたった一つの取り柄なんだから。

「あっしは今まで誰かに好かれたことなんてありません。だから、あっしはどうしたらいいのかわかりません」

「わらわもそうじゃ」

見上げると、月明かりの下、微笑むデザイナ。

「だが、そなたは言うたじゃないか。運命じゃと。ならば、好くも好かれるも、運命じゃ。だから、わらわは決めた。運命のままに、そなたを愛すると。それが、わらわにそなたを与えてくれた天への信義じゃ」

嘘だろ。なんて人だよ、この人は。

チュッ。

えっ。い、今、く、口に……。

「女房からの褒美じゃ。情けない亭主殿へのな」

あ、あずにゃん……／／
「も、もう一度してくれませんかね。ちょっと、よくわからなかったので」
「駄目じゃ」
と、クリツナの口輪を取って歩いて行ってしまうあずにゃん。あわてて後を追いかけるおれ。
「も、もう一回。お願いします。もう一回」
「なら、条件がある。約束しろ。もう二度と情けないことを抜かさないとな」
「はいっ！　約束します！」
チュッ。
（＊゜∀゜）＝3
あ、あずにゃん……／／
ぬわあああああああっ！
初キスキタ――――（゜∀゜）――――――！！！！！　結婚キタ――――（゜∀゜）――――――！！！！！　本当にキタ――――（゜∀゜）――――――！！！！！

ここで登場人物のおさらい2

『牛（簗田牛太郎政綱）』

主人公。沓掛城主。忘れがちだけど珍奇衆筆頭。最近、重要な任務を貰っているけれど、行く先々でごたごた。危険な思いをする回数が増えてきている。が、なぜか、いつも助かる強運の持ち主w

信長のはからいで念願の嫁ゲット。

『太郎（簗田左衛門太郎広正・やなだ　さえもんたろう　ひろまさ）』

牛太郎の小姓だったが、天涯孤独だったのと、才能に溢れているので、牛太郎の養子に。実は丹羽長秀が町娘の間につくった隠し子。その真実を知っているのは牛太郎と竹中半兵衛、丹羽長秀、信長と森可成。本人は父親が誰か知らない。

森可成のはからいで信長直属の精鋭部隊馬廻衆に。脇差一つで野盗四人を斬り伏せた実力がある。竹中半兵衛に教わった軍略を発揮する日が来る？

『あずにゃん（簗田梓・やなだ　あずさ）』

牛太郎の嫁。柴田勝家の末妹。少女時代、信長に輿入れするはずだったが、尾張随一の美人に信長を取られた挙げ句、そのせいで兄の勝家が信長を寝返ろうとしたので、グレる。奇抜な格好で城下を練り歩き、男勝りの性格は織田の猛将たちも震えあがらせている。ただ、城下の女性たちには人気。

本当に信長のことをふっ切れたのか、本当に優しくなったのかは謎のまま牛太郎に嫁ぐ。

『シロジロ（中島四郎次郎清延　なかじま　しろうじろう　きよのぶ）』

三河出身の商人。徳川家康から五百貫を与えられて京都に上ったが、松永弾正の御用商人に騙されて、牛太郎に拾われる。五百貫貯まるまでは三河に帰れないが、現在の俸禄は十五貫。

『ねじり鉢巻き（栗之介　くりのすけ）』

簗田家の馬丁。元は沓掛城にいて、おそらく丹羽長秀の馬丁だった。丹羽長秀の命令で、馬に乗れない牛太郎のためにおとなしい馬（クリツナ）を育てる。クリツナが牛太郎に譲られたときに、そのまま簗田家に仕えることに。馬オタク。

『あいりん（あいり）』

変顔を気に入られて簗田家の女中に。元は山内千代の侍女だったが、山内家では養えないので、簗田家に押し付けられる。牛太郎がちょっかいを出そうと考えていたが、その暇もなく梓と結婚してしまったため、今のところキモオタの毒牙には触れられていない。

『さゆりん（さゆり？）』

甲賀流のくのいち。武田信玄に命を狙われた牛太郎の脱走を手助けするふりをしておいて、実は織田家の動向を探るために牛太郎を惑わす。美濃岩村城目前で、牛太郎とシロジロを殺そうとするが、吹き矢に毒を仕込むのを忘れて失敗。再び現れ、牛太郎をまた翻弄する日も近い？

『半兵衛（竹中半兵衛重治・たけなか　はんべえ　しげはる）』

牛太郎の親友。かつては斎藤龍興に仕え、美濃に侵攻してくる織田軍を神がかり的な鬼謀で何度も蹴散らした。だが、龍興に愛想を尽かし、浪人に。その間、美濃調略に勤しんでいた牛太郎を間接的に支援する。牛太郎が後世から来た人間であることを知っているが、別段、それを利用するふしもない。部屋が汚い。

『サル（木下藤吉郎秀吉・きのした　とうきちろう　ひでよし）』
織田家の足軽大将。近頃、めきめきと頭角を表している。信長に忠義を持っているが、他の場面では腹黒全開。稲葉山城の戦いで牛太郎と手柄の取り合いをする。牛太郎とは仲が良いのか悪いのか不明。佐々成政とは犬猿の仲。天才軍師、竹中半兵衛を与力に迎えて有頂天。

『マタザ（前田又左衛門利家・まえだ　またざえもん　としいえ）』
信長親衛隊赤母衣衆の筆頭。尾張の超絶ＤＱＮだったが、出奔期間に苦い思いをしたのと、三人も子供が出来てしまったので、更生。森部の戦いまでは無双ぶりを発揮していたが、稲葉山城の戦いで逃げてしまって、そのことを梓にぼろかすに言われる。汚名返上を虎視眈々と狙っている？

『ウザノスケ（佐々内蔵助成政・さっさ　くらのすけ　なりまさ）』
信長親衛隊黒母衣衆の筆頭。尾張比良城主。織田家最恐のＤＱＮ。サルの奥さんの寧々に惚れてしまったせいでサルを敵視。稲葉山城の戦いでは牛太郎の助言で裏手を攻めるものの、勝手に信長のもとを離れてしまった軍紀違反により、五日間の謹慎処分に。部下を蹴り飛ばしたり、合戦中に味方を斬ろうとするなどの無法者。ただし、梓にボコボコにのされた苦い過去あり。

『十兵衛（明智十兵衛光秀・あけち　じゅうべえ　みつひで）』
元々は斎藤道三の配下であったが、下剋上に巻き込まれて一族離散。現在、越前の朝倉義景の客将ながら、足利義秋を次期将軍にさせようと各地を転々として奮闘中。一族の領地であった明智庄の女子供を助けた牛太郎に感謝し、その印として、桔梗紋入りの脇差を牛太郎に譲る。義理堅いが、冷徹な戦略眼もひそませている。

『山県クソサブロウ（山県三郎兵衛尉昌景・やまがた　さぶろうび

ょうえのじょう　まさかげ）』

武田四名臣の一人。武田騎馬隊の赤備え隊を任されている猛将。武田信玄の命で牛太郎の暗殺を謀るも、温泉のぬめりに滑って失敗。それを根に持っている牛太郎によって宿敵扱いに。

『マリオ（丹羽五郎左衛門長秀・にわ　ごろうざえもん　ながひで）』

織田家の中堅幹部。信長に信頼を置かれている武将の一人。何もできない牛太郎に代わって、陰から沓掛の内政を仕切っている。隠し子の太郎が牛太郎の養子になったことで、つまらない要塞だった沓掛城を住み心地のよい城に改修。牛太郎に引け目を感じているのか、ガミガミうるさかったのがなりをひそめている。

『サンザ（森三左衛門可成・もり　さんざえもん　よしなり）』

信長の側近。奥さんが美人で、子供も美少年。牛太郎の理解者でもあるが、ときには厳しい。息子の勝三は太郎と仲が良いが、牛太郎は太郎が男色の気があるのではないかと思い、勝三を煙たがっている。

『村井のジイさん（村井吉兵衛貞勝・むらい　きちべえ　さだかつ）』

物語中では今のところ謎の老人だが、とりあえず信長の家来。牛太郎の嫁を正体不明の計算で梓に決めた。牛太郎に茶の湯を勧めている。信長をおやかた呼ばわり。

『武田信玄（たけだ　しんげん）』

甲斐の虎。現在、信長のなだめ外交に応じてあげてやっているが、腹の中では信長を警戒。牛太郎を隠れた策士と勘違いして、山県昌景に暗殺を指示。面と向かっては甲斐大僧正と呼ばれているが、陰ではたぬき入道呼ばわり。

『織田上総介信長（おだ　かずさのすけ　のぶなが）』

文字通り織田信長。

上洛開始！　そのとき牛は……

年明け、明智十兵衛が清州の信長の下に参上。
足利義昭（義秋から改名）が上洛の意を示し、道中の警護に信長を指名。その旨を十兵衛から伝え聞いた信長は、水面下で行われていた上洛計画に本格的に乗り出す。
雪解け、越前の足利義昭を岐阜の立正寺に迎えた信長は、京への途上にある大名、浅井・六角との調整に入る。
盟友である浅井長政はこれに応え、夏、信長はついに馬廻衆二百五十騎を連れて、南近江の佐和山城に入城。
で、一連の流れにおれは関係なし。十兵衛がおれに報告に来たぐらい。あと、馬廻衆の太郎が信長に連れて行かれたことだけ。
「若君は無事でしょうか」
と、ここ最近、あいりんは口をつけばそのこと。ちょっと、おもしろくない。太郎に気でもあんのか。
「しつこいぞ、あいりん。メシがまずくなるじゃないか」
「でも……」
「大丈夫じゃ。今度のはいくさではない。いくさであれば、もっと大勢の兵を連れて行くはずじゃ。太郎は無事に帰ってくる」
にこっと笑うあずにゃん。渋々うなずくあいりん。
「それにしても、亭主殿」
と、あずにゃんがギロリ。うっ。
「そなたは女心がわからんのか。もうちっと言い方があるではないか」
「はい。すんません」
現在、おれは女どもに囲まれて肩身の狭い思いの毎日。
いくさにはならないと言っているのに、ねじり鉢巻きは太郎のためにクリツナの弟を連れてくると先走って沓掛城に行ってしまい、

シロジロはみたらし団子の研究のために京都に出向中（ある日、シロジロがみたらし団子のことをぽろっと漏らして、おれがむしょうにみたらし団子が食べたくなったから）。

「あいりちゃんは恋煩いをしておりますようで」

お貞がにやにやと笑いながら言うと、あいりんが真っ赤な顔をして、お貞の肩を叩く。

「私はそんなふうに思ってなんかいませんっ。お貞さんっ、そんな恐れ多いこと言わないでくださいっ」

ふん。おもしろくない。おもしろくないけど、太郎はおホモだちの疑いがあるから、あいりんがそういう気持ちでいるのなら、親心として我慢してやってもいい。

「別にいいんだよ、あいりん。太郎が良ければの話だけど」

「えっ？」

「ただ、太郎は女に興味がないかもしれないけどな」

捨てゼリフを吐いて席を立つおれ。庭先に出、馬屋のほうへ。ねじり鉢巻きが放ったらかしにしやがったから、主人自らがクリツナの世話をする羽目に。うんこを掃除してやり、新しい藁を敷いてあげて、餌を食わせてやる。クリツナは賢い馬で、餌を食べる前に、ちゃんとおれに頬ずりしてくる。可愛いなあ。よしよし。

で、お風呂。ちなみに、結局、稲葉山城のふもとに新しい屋敷を建てた。武将の新家屋の建設費用は信長から出たから構わなかったけど、これでおれの自由は失われた。しかも、建物の形から部屋数まで全部信長の指示。ただ、風呂だけはこだわって、結構ゆったりできる湯船を作ってもらった。

あれ？　水なんだけど。

「旦那様」

素っ裸のおれに臆面もなく声をかけてきたお貞。

「今日はお風呂の日ではありませんけど」

ぐぬぬ。そういえば、ケチの太郎がこの屋敷でもそんな決まりを作っていたな。

「そんなのいい。すぐに薪を焚きなさい」
「かしこまりました」
言うことを聞かないこの家の中で、お貞だけは従順。やっぱり、柴田家から来ただけあって教育が出来ている。主人の命令は絶対だ！
だいたい、おれはデブで汗っかきなんだから、毎日風呂に入らないと、お嫁さんに嫌われちゃうじゃないか。貧乏性の太郎なんかとは違うんだ。まったく。
あいつは元々天涯孤独の野良犬だったせいか、どうもケチケチしすぎている。武将っていうのはもっと豪快に生きなくちゃ駄目なんだ。
ふむ。ようやく湯気が立ってきた。それでは馳走しようかの。ふむふむ。おきらくごくらく。やっぱり、一日の終わりは風呂を浴びないとな。今日一日、おれは何もしていないけどｗｗｗ
それにしても、今日こそはあずにゃんを……。
祝言を挙げてからもう半年以上が経っているというのに、おれはいまだに童貞記録更新中。ふざけやがって。新屋敷は馬鹿みたいに部屋が多すぎて、せっかくの新婚生活も寝室は別々。
そりゃいいよ。お偉いさん方は奥さんが一人じゃないからさ。たとえ、奥さんが一人の奴でも女中なんかに手を出しちゃっているからさ。でも、おれの奥さんは浮気なんか到底できない恐ろしい奥さんなんだよ。だから、女をとっかえひっかえするために、部屋なんて幾つも必要ないんだよ。
しかも、半年間、おあずけ状態。誘ってもうまくかわされてしまうし。しつこくするとボコボコにされそうだし。
ただ、今日だけは違う。フヒヒ。子だくさんのマタザから、奥さんを寝床に誘い込む術を教わってきた。最近マタザはすっかり丸くなって、おれにも優しいからな。ぐへへ。
風呂から上がり、台所に向かう。目当てのものをごそごそと探していると、あいりんがひょっこり顔を出してくる。
「どうしたんですか、旦那様」

「いや、酒を探しているんだけど、どこにあるのかな」
「えっ？　旦那様はお酒を嗜まないんじゃ」
「おれだってたまには飲みたくなるんだ」
「はあ。そうですか」
あいりんは徳利を取り出すと、ついでに盃を出してきて、お盆に載せていってくれる。
「お部屋までお運びします」
「いや、いいよ。自分でやるから。それより、梓殿を部屋に呼んできておくれ。いや、たまには夫婦で酒を交わしたいからな」
「奥方様もお酒は苦手ですよ」
「いいんだ。さっさと呼んできなさい」
まったく。あいりんは太郎病か。気が利かないんだからよ。お貞を見習えよ。だいたい、あいりんも明智庄から出てきて、ついでにチヨタンの侍女になったようなもんだから、女中としての作法がわからないんだろ。
ま、それはお貞に教育しておくよう言っておくとして、おれは今からお楽しみなんだから、あんまりカリカリしちゃいかんﾍﾍ

これなんてエロゲ？（前書き）

※下ネタ注意！！

嫌いな人は読まないでください。ストーリには大して関係ないかもしれないので。

これなんてエロゲ？

「なんじゃ」
と、部屋にやってきたあずにゃん。白地の寝巻姿。ジュルリ。
毎日、お貞にハサミを入れさせているぱっつんオカッパ頭も、心なしか妖艶さを醸し出していなくもない。
「ちょっと、たまには夫婦水入らずで一献と思って」
ジローッ。くりくり瞳を訝しそうに細めてくる。さ、さすがに下心丸見えかな。で、でも、夫婦なんだから、下心があったっていいじゃない！
「まあ、よい」
後ろ手に戸を閉めると、おれの前に腰を下ろす。お盆の徳利を取り、おれが手にした盃にちょろちょろと注いでくる。
「あずにゃんも一献」
ギロリ。
「いや、あ、梓殿も」
にこっ。
ふう。なかなか一筋縄ではいかないぜ、うちの奥さんは。おれはおぼつかない手であずにゃんの盃に酒を注ぐ。
それでは、乾杯。ちびちび。うん。まずい。
そんなおれを、盃には口をつけずに、まじまじと眺めてくるあずにゃん。
「で、どうするつもりじゃ」
「ど、どうって？」
「いや、それは、その、そういうつもりなのじゃろ」
えっ？
「素直に言ってくれれば、わらわだって……」
酒をちびりと舐めて、そのままお盆の上に置くあずにゃん。
「だけどな、わらわは……、その、しょ、処女だから」

えっ？
「う、う、嘘だ」
「本当じゃ」
潤んだ瞳でおれをじいっと見つめてくるあずにゃん。すると、そのまま唇をきゅって中に押し込めた。あ、あ、あ。
これなんてエロゲ？
「優しくせんと、離縁じゃ」
キラウェアが活火山活動を開始しました。
「で、でも、おおおれも、は、は、はは初めて」
「じゃあ、お互いに後にも先にも一人しか知らん」
うつむくあずにゃん。
／／
いや、まて、築田牛太郎。落ち着け。いいか、よーく、考えろ。おれは今までに天国から地獄へと叩き落とされたことが何度となくあったんだぞ。
そして、今回も、まさかまさかの土壇場で地獄に叩き落とされる可能性だってなくはないんだぞ。
落ち着け。冷静に行け。半兵衛も言っていたじゃないか。戦略は気を長く、戦術は気を短くって。
「と、とりあえず、あずにゃん」
「なんじゃ？」
ううっ。可愛いやんけ。わいの嫁さん可愛すぎるやんけ。あずにゃんって言っても、ギロリしなかったやんけ。
いや、落ち着け。牛太郎、落ち着け。フーッ、フーッ。
「と、とりあえず、握手しましょう」
「こうか？」
ああっ！　なんてすべすべのお肌！　もっちもち！　もっちもち！　ああっ！　キラウェアがあ！
いや、落ち着け。牛太郎、落ち着け。フーッ、フーッ。落ち着いてくれ、キラウェアよ。

「つ、次はどうするのじゃ」
「え、えーと、そのお、えーと、じゃあ、好きって言ってくだされ」
上目づかいにじいっと見つめてくるあずにゃん。
「嫌じゃ」
「ええっ？」
「好きじゃ」
きゅん。
もう駄目。おれバブルスライムになっちゃう。もう駄目。溶けていっちゃう。
「間抜けなところが好きじゃ」
「ま、間抜けなところですか？」
「泥臭いところも好きじゃ」
「ど、泥臭いですか？」
「あと、優しいところじゃ」
「や、優しいですか？」
チュッ。
あっ。柔らかい。唇って柔らかい……。すごく……、溶けてく……。
だが、その瞬間、キラウェアが噴火。溶岩が、溶岩が、溶岩が流れ出てしまっている……。
おれ、なんていう童貞。
……。
避難しろーっ！　これは演習ではない！　本物だ！
「？」
もぞもぞとしているおれに、あずにゃんは首を傾げる。どうしよう。どうしよう。今すぐにでも避難しないと、おれは、おれは、このままだと先出し亭主の汚名を一生被ることに。
「ちょ、ちょっと、厠に……」
「厠？」
いい雰囲気に水を差されて明らかに不満げなあずにゃん。

「ご、ごむぇん！」

そして、ふんどしを交換して帰ってきたときには、あずにゃんはもはや寝室から姿を消していた。

緊急招集

「あ、あずにゃん、昨日は、ご、ごめん」
ギロリ。
「あ、いや、梓殿」
「何だかよくわからんが、恥を欠かされたような気分じゃっ」
「どうしましたあ」
廊下をとことこと歩いてきたあいりん。なんて間の悪い。
「いや、なんでもない、なんでもないんだよ、あいりん。だから、あっち行っておくれ」
「フンッ」
あ、あずにゃん……。そんなあ。おれは悪くないんだ。キラウェアが激しすぎたんだ。あずにゃん。行かないでおくれえ。
「奥方様、御機嫌斜めですね。どうかされたんでしょうか」
「あいりん。触れないでくれ……」
まあいい。仕方ない。夫婦生活にはよくあることだ。あずにゃんが性というものを知らなすぎることにはびっくりだが、まあ、再度アタックすればいいことだ。
「簗田様あ！　簗田様あ！」
誰だ？　近頃、屋敷を訪れてくる人間はめっきり少なくなったけれども、おれを様付けで呼ぶやつなんて珍しいな。
調度、廊下でうろうろしていたおれは、自ら玄関に出迎えに行くと、げっ。カツゾウ君。た、太郎ならいないぞ。
「簗田様、突然押し掛けて申し訳ありません。父上が至急登城せよとのことで」
ええっ？　サンザが一体何の用だよ。しかも、至急。信長は岐阜にいないはずだぞ。
まあ、ぐちぐち言っていても仕方ない。カツゾウ君を先に帰し、部屋に戻ると、お貞の手を借りつつ着替え。さすがに沓掛城の城主

だからと、この前、あずにゃんが呼んでくれた仕立て屋に作らせた他所行きのまともな羽織を身にまとって、出発。

「どうしたのじゃ」

玄関で草履を履いていると、あいりんとお貞の脇にいつのまにかあずにゃん。

「いや、サンザさんに呼ばれまして」

「急ぎなのか？」

「そうみたいです」

「もしかして若君の身に何か」

と、あいりんはまた太郎のことですか。まったく。

「それはない。サンザさんに呼ばれるのは前まではよくあったことだ。大丈夫だよ」

そう言い残し、屋敷を出たおれ。稲葉山を登る。

それにしてもなんなんだろうな。本当に太郎の身に何かあったのか。でも、そうしたら、サンザはおれの家に来るだろうしな。

「牛殿！　おみゃあもかあ！？」

うっ。この声は。すたすたと走り登ってきたのは、サル。隣には弟の小一郎。弟を連れて歩くなんて珍しい。

「おみゃあも森様に呼ばれたきゃあ？」

「そうッス」

「にゃあ。どういうことだぎゃあにゃあ。また、二人で調略でもやれっていうことときゃあ？」

そう言って、にんまりと笑ってくるサル。嫌だ。それだけは絶対に嫌だ。こいつと一緒に動くとさんざんな扱いをされる。

「でも、本当に兄さんの言う通り、また、調略かもしれませんよ、築田殿。京に居座る三好や松永は希代の悪党。足利義昭様を担いでいるとはいえ、一筋縄では行きませんでしょう。」

むう。小一郎が言うと、まともに聞こえてくるから不思議。じゃあ、調略なら小一郎とさせてくれないかな。うん。

「しかし、おみゃあ、うまく行っているきゃあ。奥方とは」

サル、にやにや。
「おみゃあみたいな亭主が、あの奥方をうまく手なずけられているのきゃあ？」
あずにゃんがおれの家に入ってきて以来、サルはまったく家に来なくなった。それはあずにゃんを恐れているからだ。
ところが、こうやって外で顔を合わすと、にたにたと笑いながら、夫婦生活を探ってくる。
こいつはおれがゴンロクの末妹を嫁にしたことを妬んでいるので、こうやってにやにやと期待しているのは、どうせ、おれがボコボコにされていればいいなっていうことだ。
「そういう藤吉郎殿こそ、寧々さんとうまく行っていないそうじゃないですか」
「そ、そんにゃことはにゃあ」
「おまつ殿から聞きましたよ。なんでも、子供ができないことを寧々さんのせいにしているそうですね」
「にゃ、にゃ、そ、そんにゃことでっちあげだぎゃ。お、おりゃあと寧々は、こ、子供はまだ早いって決めているんだぎゃ」
「勘弁してあげてください、簗田殿」
と、小一郎が苦笑。
「にゃ、か、勘弁するも何も、にゃーんも、そんにゃことはにゃあからな」
「ま、そういうことにしましょ」
そのとき、おれたちが道を歩いているというのに、馬をすっ飛ばしてくる馬鹿が。
「邪魔だ邪魔だ邪魔だ！」
ウ、ウザノスケ。
「危にゃあじゃにゃあか！　この糞ころがし大王ぎゃあ！」
サルの声に敏感に反応して、馬の手綱を引き絞ったウザノスケ。
「なんだと？」
あちゃー。また喧嘩ですか。でも、糞ころがし大王はワロタｗ

まあ、ゴキブリだけどね。ちなみに今日はいくさじゃないからゴキブリ姿じゃないけど、それでも言われちゃうんだからワロタｗｗｗ
「今、言ったのはサルだな」
「そうだぎゃっ。この糞ころがし！」
「無礼者が。斬ってくれてやる」
「まあまあ、佐々殿」
と、小一郎がサルとウザノスケの間に割って入る。爽やかイケメンの割りに意外と度胸がある様子。
「いさかいは後にして、森様のところへすぐに行かねばなりますまい」
「フン。愚兄賢弟の見本だな。小一郎も不憫じゃ」
ペッとサルに向かって唾を吐き、その唾はサルの禿げ頭にしっかりと着地。
「こ、この、無礼者っ！」
「小一郎の言う通り、構っておられんわ」
そう言うと、再び馬を走らせて去って行ったウザノスケ。
「小一郎！　にゃんで止めるんだぎゃあっ！」
ハア、と、小一郎は溜め息。
「兄さん。むしろ感謝されたいぐらいですけどね」
「にゃにを言っているだぎゃ。あんなやつ、おりゃあにかかればひとひねりだぎゃ」
「簗田殿、行きましょう」
ハア、と、もうひとつ溜め息をついて、足を進める小一郎。その気持ち、わかるよ。おれもサルにはさんざん振り回されたから。

馬のこと

ど、どうしたの？　とでも疑いたくなるほど、岐阜城の大広間には岐阜在住の幹部から足軽大将まで勢ぞろい。

上座にサンザ、ゴンロク、佐久間ヒゲオヤジの三名が並び、そこから縦に偉い順から二列に整列。

おれはサルの隣。端っこ。向かいにはマタザとウザノスケ。サルとウザノスケはここでも火花バチバチ。

おれもゴンロクから睨まれているんですけどね。あんまり、睨むとやっちゃうよ！（あずにゃんが）

「忙しいところ御苦労！」

と、いつもの大声でサンザ。

「しかし、べらべらと話している暇はない！　結論から言おう。六角承禎・義治親子との交渉が失敗された。おやかた様は急ぎ佐和山城から岐阜に戻ってくる。軍勢を率いて、六角攻めじゃ！」

マ、マジ？　それって、もしかしておれのせいかな。いや、違うよな。絶対に違う。

「おやかた様は総動員で六角に挑む考えじゃ。徳川、浅井も援軍として駆け付ける。皆の者、よく聞けい。これから織田は出陣態勢に入る。居城を持つ者は地元に戻り、兵を整えて岐阜に集まれ。岐阜に兵を置く者は武具兵糧の支度じゃ。よいな、ただちに取りかかれ！」

うわあ。めんどくせえ。沓掛に戻らなくちゃいけないのかよ。だったら、ねじり鉢巻きを引き止めておけばよかった。

しかも、六角……。さゆりんトラップがあるかもしれん。不安。

武将たちがいきり立ちながら広間を出て行く中（中には一触即発の馬鹿二人もいたけど）、おれはとぼとぼ。

「どうした、牛。いくさだっていうのにその覇気のなさは」

マタザが話しかけてきた。いくさが始まるもんだから、こいつは

口端に笑みを作っている。どうせ、またおめおめと逃げるんじゃねえの。

「いやあ、あっしはあんまりいくさが好きじゃないんで」

「何を言っておる。息子の初陣ではないか。評判だぞ、お前の息子は。ここで活躍すれば赤母衣を着せてやりたいぐらいだ」

いや、それは丁重にお断りさせていただきます。

「牛殿！」

と、背後からサンザの声。

「お主、沓掛に戻ったら、丹羽五郎左の兵と共に来い。今回、沓掛勢は五郎左の指揮下にするからな」

だったら、おれはいらなくね？　なんてことは言えず、素直にかしこまりました。

で、帰宅。どうしよう。シロジロもねじり鉢巻きもいないのに、一人で沓掛に行くのお？　クリツナにも一人で乗ったことないから怖いし。

まあ、つい昔はたった一人で敵地の中を菩提山に行ったり、清州に行ったりしていたけれど、やっぱさ、人間って贅沢を覚えると、それ以上の苦労をしたくないよね。

でも、サンザの命令じゃな。ハア。

「どうしたのじゃ、亭主殿」

部屋で一人荷づくりをしていると、あずにゃんが顔を出してきた。

「城で何かあったのか」

「出陣ッス」

「はあ？」

「沓掛に行って、兵隊を連れてくることになりました。六角といくさです」

「ま、まことか？」

「はい」

「亭主殿まで出陣するのか？」

「はい」

「と、とにかく出立前に腹ごしらえしなされ」
「はい」
「今、お貞とあいりに支度をさせるから」
「はい」
「栗之介にも支度をするよう伝えておくから」
「えっ？　帰って来ているの？」
「ついさきほど帰って来たぞ。馬屋におる。猛獣のような馬と一緒じゃ」
なんだよ。それならそうと、早く言ってくれよ。まったく。あずにゃんったら。
で、庭先に出、馬屋に向かったおれ。
「こらあっ！　おとなしくしねえかあっ！」
うわあ……。見ちゃいけないものを見てしまったかもしれない。真黒な馬が鼻息を荒くして、跳ね飛んだり脚を上げたりして暴れていて、口輪を取るねじり鉢巻きは体をぶんぶん持ってかれている。
それをよそに、クリツナは藁をむしゃむしゃ。
「だ、旦那っ。手伝ってくれっ！」
やばい。気付かれた。てか、無理だろ。めちゃくちゃ暴れているじゃん。涎とか出しちゃっているじゃん。
「いや、おれは用があるから」
と、クリツナのところに行き、鍵板を外して、クリツナを外へ。よしよし。お前はいい子だねえ。
「ちょっと旦那っ」
「ていうかさ、その馬に乗って来たんだろ。だったら一人で大丈夫じゃないかよ」
クリツナの背中に鞍をよいしょっと。
「違うんだ。こいつは小屋の中に入りたがらないだけなんだっ」
ブルルッ、ブルルッ、ってずっと暴れている様子を見ると、なんだか、それだけが理由じゃないような気も。目も血走っているような気がするし。

黒い馬をぼけーっと見つめているクリツナ。
「ああっ」
と、口輪から手を離してしまったねじり鉢巻き。やばっ。黒い馬がいななきながら前脚を上げて立ち上がる。
それをぼけーっと見つめているクリツナ。
首を上下に激しく揺らし、涎をまき散らす黒い馬。
それをぼけーっと見つめているクリツナ。
ブルル……。
え？　黒い馬が急におとなしくなって、自ら馬屋の中へ。てか、隠れるようにして馬房の隅っこに。遠いところからこちらをじっと見つめてくる。
「なんだ？」
「そうか。こいつ、クリツナのことをすっかり忘れていやがったみたいだ」
ねじり鉢巻きが黒い馬のところに行き、馬面を撫でてやる。
「こいつは自分の新しい住処に他の馬がいたから喧嘩を吹っかけたんだ。そうしたら、観念しないとわかって引っ込んじまった。馬鹿だなあ。兄貴のことを忘れやがって」
そうなの？　どう見てもクリツナのほうが弱そうなんだけど。今もぼけーっとして、どこを見ているんだかわからないし。馬の世界はよくわからん。

いつ真・無双奥義やるのー

一日かかって沓掛城到着。
結局、一人旅。徒歩で。
黒い馬は走ってきたばかりだから連れ出せなくて、じゃあ、クリツナに乗ってねじり鉢巻きが沓掛に来ればよかったんだけど、あの凶暴さを目の当たりしたら黒い馬の世話をしたくなくて、おれが出かけることに。補助なしでクリツナに乗ったことのないおれなので、その不安から徒歩。
シロジロが早く帰ってくればいいことなんだよ。いつまで、みたらし団子の研究をしてやがるんだ。本当は都で遊んでいるんじゃねえのか。
とにもかくにも、沓掛に戻って来たおれは、早速、マリオのもとへ。
「丹羽様なら、清州に戻られていますよ」
と、マリオの家臣のやつ。ふざけんな、クソッ。
仕方なく、家臣のやつに清州のマリオのもとへ早馬を出させるよう指示し、ついでに沓掛城の兵を集めさせる。
それと、甲冑はないのか訊ねてみる。
「なんのことですか？」
マリオの野郎ォ。あいつ、絶対におれを綱鎧のままでいさせる気だろ。
城内にぞくぞくと兵が集まり、家臣のやつがすべて揃ったとの報告。総勢何人なのか訊ねると、五百人。は？　増えてね？　稲葉山城攻めのときは二百人しかいなかったはずだぞ。
「この日のために、沓掛勢を鍛えて参りました。簗田殿のご嫡男の初陣にふさわしい武者たちでございます」
ふーん。マリオの魂胆が見え透いているけどね。
で、おっさん、チミはさっきから仕切っているけど、誰なの？

「大島新八郎光義と申します。沓掛勢の訓練を丹羽の殿から命じられて常駐しておりますが、もしも、出陣となったときにはそのまま拙者が付いて参るようにも、丹羽の殿から命じられております」

ふーん。マリオの魂胆が見え透いているけどね。稲葉山城攻めのときには武将なんか付けてくれなかったくせに、太郎が元服したらこれかよ。

なんか、やる気なくした。元々ないけど。あとはおっさんが勝手にやってくれ。

で、やる気なしの出陣。

だが、おかしなことにおれは徒歩。大島新八郎のおっさんは馬。クソッ。やっぱり一人ででもクリツナに乗って来るべきだった。クソッ。

「殿様」

道中、軽々しく話しかけてきた雑兵たち。

「柴田様の妹様と御婚姻されたそうじゃねえですか」

「まあな」

「清州や岐阜では有名な姫君なんですよね。やっぱ、えらい美人なんでしょ。今度、沓掛に一緒に来て下せえ」

ほほう。どうやらこの田舎者たちは、あずにゃんが有名な本当の理由を知らないらしいな。ふむふむ。沓掛の連中はいいやつらだなﾍﾍ

まあ、変な格好とおかっぱ頭をやめれば普通に美人だろうしな、おれの嫁さんは。こいつらの言うこともあながち間違いじゃない。

「あれが俺らの殿様なのかよ」

む。遠くのほうからよからぬ声。

「なんで、おれらと同じで歩いているんだよ。それになんだよ、見てくれも弱そうな太っちょだしよ」

ぐぬぬ。そんな悪口を言うなんて、沓掛勢は腐り切っているじゃねえか。何が鍛錬だ。心の修行が全然なってねえ。

「おい、テメーッ！」

と、なんだか怒鳴り声。ボコってパンチの音。おい。おいおい。今からいくさだっていうのに何やってんだよ。

「何も知らねえやつが偉そうな口叩いてんじゃねえっ！　テメーは俺らの殿様がどれだけすげー人だか知らねえだろうがっ！」

え＾＾

「墨俣の一夜城のときにな、皆、疲れて動けない中で、ぼろぼろの殿様は鍬が持てなくなっても、爪で土を掘っていたんだぞ！　テメーは殿様と同じことができんのかあっ！」

ほっほっほ。なんだか知らないが、古参の奴らには敬意を持たれているじゃねえか。なんていい奴らなんだ。沓掛の連中は。

「殿様」

さっきのやつが笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「俺ら、今度のいくさは頑張りますよ。なんたって、太郎の――、じゃねえ、左衛門太郎様の初陣だからな」

ほっほっほ。なら、今回、おれは高見の見物かな。ほっほっほ。

いやっ。今回もこいつらに見せてやろうじゃねえか。おれの凄さを。

ククッ。ついに来たな。真・無双奥義を繰り出すときが。ククッ。

織田の武威

清州で一泊し、翌日マリオ隊と合流。
「簗田殿、馬はどうした」
と、徒歩のおれに怪訝な顔のマリオ。
一人だと乗れないなんていう格好悪いことは言わずに、いざ出陣のときのために休憩させているという嘘をつくおれ。
「それより、ゴロザ殿、あっしの甲冑はどうしたんスか」
「そ、それは、簗田殿が沓掛に戻ってこなかったゆえ、寸法を測れないであろう」
なんか、言い訳じみた口調だが、まあ、おっしゃる通りでもある。新婚気分に浮かれていたおれは、沓掛に戻るなんて微塵も考えていなかった。むしろ、沓掛城主だなんて忘れていたぐらい。あずにゃんに夢中だったし、みたらし団子に夢中だった。
それにしても、マリオ隊は沓掛勢の何倍もの人数。大島のおっさんに訊くと、二千人以上はいるらしい。むう。なんか、腹が立つ。
とはいっても、マリオは織田の中堅だからな。中の上ぐらいだもんな。考えてみれば、おれがわがままを通せているのが不思議なぐらいだからな。
で、岐阜に到着。すっかり夜更け。とある寺の境内に軍勢を押し込めて、帰宅。
したかったんだけど、真面目バカのマリオが登城すると言い出し、夜中だっていうのに、渋々、稲葉山へ。
すでに信長が岐阜城に帰って来ているみたい。岐阜の城下も稲葉山もかがり火が焚かれていて、馬や雑兵が行き交ったり、荷車が走って行ったりと、物々しい雰囲気。
「おやかた様は三好と松永に織田の武威を見せつけるつもりなのだろう」
マリオがそう言ったけれど、確かに、今回の出陣態勢は半端ない。

岐阜は眠らない町状態。稲葉山の中腹から見てみると、城下の隅々にまで火の光が行き届いている。

「いよいよ天下布武だな」

天下布武か。ククッ。腕が……、うずくっ……。

城内に参上すると、小姓（おホモだち）に案内され、信長の居間へ。

小部屋では信長が一人で大きな地図を眺めている。

「丹羽五郎左衛門並びに簗田牛太郎、参上つかまつりました」

眠たげな目を向けてくる信長。

「こんな時間に来なくたっていいじゃねえか」

「おやかた様がご就寝であらば引き返すつもりでしたが」

「お前は本当にくそ真面目だな。まあ、いい、座れ」

で、地図を隔てて、信長の前に腰を下ろすマリオとおれ。

「六角の馬鹿が、三好松永にたぶらかされやがった。こっちが下手に出ていれば勘違いしやがって」

「六角を失えば三好松永もおめおめと逃げうせるでしょう。奴らは評判の悪党。恥を忍ばず自分の命を惜しむような輩です」

「そんなことはわかっておるわ。だから、総力を挙げて六角を叩きつぶすんじゃねえか。わかりきったことを言うな、このクサレ真面目バカが」

マリオ苦笑。ワロスｗｗｗ

「だからといって、こんないくさで兵を一人でも失うのは惜しすぎる。いずれ、武田上杉と雌雄をまみえるときも来るであろう。そのときのためには将一人、兵一人たりとも失いたくはねえ。つったって、六角は籠城するであろうし、奴らも命懸けだからな。一人とて失いたくないといってもなかなか厄介だ」

と、言って、じいっと地図を食い入る信長。地図はどうやら観音寺城周辺の支城の配置図。何をそんなに真剣に悩んでいることやら。こんな大軍勢で行くんだから、有無も言わさず叩き潰せばいいじゃねえかよ。

前からそうだったけど、信長って、びっくりするぐらい慎重だよ

な。美濃攻めのときだって、なかなか腰を上げなかったし。
「ん？」
と、おれのほうに顔を上げた信長。
「なんだ、お前、いたのか」
「は、はい」
い、今、気付いたの？　ちょっと悲しいかな。アハハ。
「いたのか。そうか」
と、また、地図に食い入る信長。あんまり相手にしてくれないんだね。ちょっとセンチメンタル。
「ん？　そうか、牛か。そうだ、お前、何かないか」
「え？」
「そうだ、お前が確か上洛の進言をしてきたのだったな。何か案があるのだろ。言ってみろ」
え？　え？　おれ、そんなこと言ったっけ？　え？
「おいっ」
「いや、あの、その」
隣からマリオが不安げな顔でおれを見てくる。むしろおれを気の毒そうに思っている目。
「あ、いや、ご、ゴロザ殿は何かいい案がありませんかね」
「おれはお前に訊いているんだっ！」
ひいっ。やべえっ。
「あの、その、あっしは、その、あ、あっ。半兵衛ッス。竹中半兵衛がきっといい案を持っているはずです」
シラーッとした目の信長。
「半兵衛ッス。半兵衛です。あいつならきっと、上手い方法を編み出すはずですっ」
と、おれは必死。ていうか、そうだろ。こんなときのための竹中半兵衛だろ。
「お前はまったく……。よい。連れて来い。竹中半兵衛を明朝にでも連れて来い。今日はもう呆れてしまった。帰れ」

ホッ。

難を逃れて、信長のもとを去るおれとマリオ。

「なんだ、築田殿」

と、廊下を歩きながらマリオが言う。

「何か大口でも叩いてしまっていたのか」

「いや、そういうわけでは。ただ、上洛を進言したってのはありますけど」

「おやかた様は何十年前のことであろうと、一言一句まで忘れぬお方であるからな。安易な考えで言葉にせんほうがよいぞ」

うーむ。ちょっと怖くなってきた。てか、信長はいちいち細かいんだよ！　もっと覇王らしくしろや！　六角なんて力でねじ伏せちゃえよ！

この人、誰？

「おやかた様が織田の兵を結集させていることは、六角親子の耳にも入っているはず」

半兵衛は信長のもとに来ると、挨拶口上もそこそこにそう言った。

「拙者が仕入れた情報によると六角の総兵数はせいぜい一万、三好松永の援軍があったとしても二万には満たないでしょう。対して織田の総数は五万」

そ、そんなに違うの？　と、びっくりしたのはおれだけではなかった。サルも口をあんぐり。てか、なんでお前まで付いてきたんだよ。うぜえ。

「よって、六角はおやかた様が力攻めの攻城戦で来ると踏むでしょう」

「そんなことはわかりきっている」

と、信長は肘掛けに体を預けながら憮然とした表情。

「俺が聞きてえのはいくさをどれだけ早く終わらせ、どれだけ被害を少なくできるかだ」

「一日で終わらせましょう」

「なんだと？」

思わず体を起こした信長。にやりとする半兵衛。てか、半兵衛の目がやばいんですけど。なんか、いつもの涼しげな感じがない。ダークサイドに堕ちたような目つき。

半兵衛は大地図の傍らに置かれてあった凸の形をした木の玩具みたいなのを地図の上に並べていき、

「本陣は愛知川のこの辺りに取り、すべての兵を本陣近辺に結集させましょう」

信長は腕組み。サルは首を傾げ、おれはきょとん。

「さすれば、六角は、愛知川の向こう岸、すぐ目の前にある和田山城に攻撃を仕掛けてくると踏み、兵の半分以上を和田山城に配置す

るはずです」
「確かに和田山城の背後には観音寺城だ」
「実際、和田山城には」
木の玩具をすすっと動かす半兵衛。
「先発隊を差し向けましょう。更にそれを追い越す形で観音寺城に第二隊。先発隊は稲葉彦四郎殿。第二隊、つまり敵本拠の攻撃に柴田権六郎殿と森三左衛門殿、付け加えて赤黒の母衣衆もここに割きましょう。稲葉殿を前線の和田山城にぶつけ、本拠に柴田殿と森殿をぶつけるということは、我らの大将格を当たらせているということです。つまり、相手は総攻撃の第一波と考え、ここに守りの重点を置くはず。ふう」
「第二波はどうする」
「第二波ではありませぬ。時を同じくして、おやかた様本隊並びに丹羽五郎左衛門殿、滝川彦右衛門殿、木下藤吉郎を箕作城に向けます。ふう」
大地図をじいっと見守る一同。てか、半兵衛の様子がちょっと変だけど……。
「ここは手薄。六角も本隊が迂回してくるとは思いませんでしょう。そして、長期の籠城戦に持ち込もうとし、三好松永の援軍を待つ六角の士気は削げ落ちましょう。ここからはいくさをする必要はありませぬ」
「なぜだ」
「一日で落とすからです」
本気で言っているのか、こいつ、という感じの訝った視線を向ける信長。
すると、半兵衛が白い歯を見せて、にったりと笑う。
「箕作城の攻撃は巳の刻（午前十時）。攻城は夕刻まで続けて、続けて、ふふ、これは空攻撃であります。空攻撃。実体は虚実。見せかけの攻撃でございます。これは見せかけ。あくまで見せかけっ！」
急に大声を出し、瞳孔を広げながら、地図をバンッと両手で叩い

た半兵衛。
　おれとサルはぽかーん。信長は眉間に皺を寄せる。
　地図に向かって、あははっ、と目玉を剥き出しにして笑う半兵衛。
「攻めあぐねた我らは夕刻に一旦退却。しかし、その日の子の刻（午前零時）、一気に総攻撃。敵は思いもせぬ。昼中、あれだけ攻めあぐね、くたくたになった兵が、まさか夜に攻撃を仕掛けてくるとは思いもせぬ」
　あのー、やばいんですけど。半兵衛、タメ語になっているんですけど。
「そうじゃ。たいまつだらけにしよう。箕作城は山城。山肌一面にたいまつをこしらえておき、子の刻、攻撃と同時に火の海にしてしまおう」
　地図の一点に眼差しをぎらぎらと注ぎながら、くつくつと笑う半兵衛。
「なんてことだ！　山城が火に囲まれておる！」
　この人、誰？　半兵衛だよね？　マジで狂っている。一体、なんなの。もしかして、トリップしちゃった？
　狂い出した半兵衛の前に、サルも、さすがの信長でさえも唖然と口を開けっぱなし。
「それに流言も仕掛けよう」
　もはや、半兵衛はぶつぶつと独り言をしている状態。
「織田は一日で六角を叩きつぶすとほざいている。この籠城戦を一日で終わらそうという馬鹿げたことを吹いている。六角承禎曰く、何を馬鹿げたことをほざいているのか、ぐわはっはっ。しかし、その通り、たった一日で城一つ失ってしまったら、そのときの六角承禎の衝撃はどうであろう。いくさなどする気も失せてしまう。なんていうことだ。なんていうことだ」
「もうよい」
　と、信長が苦々しい顔。
「すると、懸命に防戦していた和田山城の将はどうであろう。箕作

城がたった一日で落城した。まして、夜の闇に、業火のごとく、紅い海が広がっていた。それを伝え聞いたとき、和田山城ではどうであろう」

「サル、今回の箕作城攻めの指揮はお前に任せる。この奇人の女男をうまいこと手なずけ、箕作城を一晩で落としてみせろ」

「かしこまりましたぎゃあ」

と、信長もサルも半兵衛をシカト。それでもなお、半兵衛は地図に向かってぶつぶつと独り言。

そんな半兵衛を信長は苦々しく見つめる。

「お前の与力ぐらいにさせておいてよかったわ。こやつはいくさ馬鹿の奇人じゃ。恐ろしすぎる」

信長は腰を上げ、気色悪い半兵衛から逃げるようにして部屋を出て行った。

なんとも言えない空気。互いに顔を合わせるおれとサル。初めてかな。サルと気持ちが通じ合ったのは。

「堅固な城を持つ者は籠城戦になるとおごる。弱体な城の者は命を懸ける。桶狭間がまさにそうだった。ふふ。六角承禎はおごっているであろうな」

一人の世界。あんまり触れたくない。しばらくの間、放っとこうか？　そうだにゃあ。というか、おみゃあはこんなやつだって知っていたのきゃあ。いや、知らないッス。

みたいなことを、おれとサルは目と目で話した。

この家の主人は……。

「そういえば、太郎の初陣ですね、簗田殿」
と、稲葉山を下りる途中で、声をかけてきた半兵衛。いくさ狂いの半兵衛はいなくなっていて、元の涼しげな半兵衛に戻っている。
「う、うん」
「実は拙者も太郎の初陣を目の当たりにしたいと思い、今回は我ら木下隊と信長本隊の行動を共にさせてしまいました。無論、簗田殿のいる丹羽隊もですがね」
「そ、そうなんだ。ありがとう」
なんか、変な霊にでも取りつかれたわけじゃないみたいだな。半兵衛は作戦を考えるときになると、あんな危ないやつになっちゃうのかな。
「しかし、信長に見え透かれてしまったでしょうかね、殿」
「にゃ、にゃあ？」
サルもさっきの半兵衛を目の当たりにして、あんまり半兵衛とは関わりたくない様子。そもそも、普段あれだけうるさいサルが一度も口を開いていない。
「本攻撃の箕作城攻めに殿を向けさせるというのは、手柄を取ろうとしている野心でも出してしまったんじゃないかと。気難しい信長のことですから、そこを勘ぐられてしまったかと思って」
「い、いや、そんにゃことはにゃあぎゃあ。お、おみゃあの立案は、み、見事だったぎゃあ。さすが半兵衛だぎゃあ。おみゃあの凄さにおりゃあは言葉が出なかったぎゃあ」
違う意味で言葉が出なかったんだろ。てか、サルの禿げ頭に汗がびっしょり。こいつ、もしかして、半兵衛を引き入れたことが怖くなっちゃったのかな。
でも、おれだって怖いわ。ちょっと、距離を置こうかな、こんな危ねえやつとは。

そんな気も知らずに、半兵衛は広く渡った濃尾平野に眺め入る。
「風に秋の香りがほのかにありますね。信長もむごいなあ。わざわざ収穫の時期にいくさをしなくてもいいものを」
お前が言うなよ。お前みたいないくさ狂いがよ。つうか、どうなっちゃうのよ、その箕作城を実際に攻めるときには。さっきのダーク半兵衛が全開になっちゃって、ついには発狂でもしちゃうんじゃないの。
ふもとでサルたちとようやく別れ、ひとまず、自宅へ。
「旦那様、お帰りなさいませ」
お貞が出迎え。あいりんがそそくさと桶を持ってきて、おれは足を洗う。
「旦那様が登城されてからすぐに四郎次郎殿が帰ってこられましたよ」
「今、台所で例のお団子を作っておられます」
あいつ、すいぶん呑気だな。京から帰って来たんだから、信長が六角を攻めることぐらい町の噂で聞いているはずだろ。それなのに団子作りかよ。命令は命令だけどよ、もうちょっと空気読めよ。
「そんなことより、太郎は帰ってきてないの？」
「いえ。帰ってきておりません」
「じゃ、じゃあ、な、何かあったんじゃないんでしょうか」
と、すぐにあいりん。いや、帰って来てないんだったらないで、馬廻衆だから、家にも帰ってこずに戦闘態勢に入っているだけなんだろ。
岐阜出立は明後日ってことになっているけれど、信長のことだから、気が変わって急に出陣しかねない。だから、親衛隊の馬廻衆は気を抜けないんだろうよ、きっと。
てことを、あいりんに説明するのも面倒になって、
「何かあったらあったで、誰かが素っ飛んでくるだろ」
と、ちょっと、語気を荒げたあとに、おれは台所へ。あいりんの言った通り、シロジロが台所に立って、なんだかコネコネしている。

「おいっ、シロジロ！」
と、チビの背中に声をぶつけると、びくっとしたあとに振り返ってきたシロジロ。
「だ、旦那様。お帰りなさいませ。今、ちょうど、みたらし団子を作っていたとこッス。早速、旦那様に食べてもらいたいと思って」
「お前なあ、噂ぐらい聞いているだろ。明後日には六角攻めで出陣だぞ」
「そうッスね。帰って来る道中で耳にしたッスけど」
と、すごい軽い感じ。そんなことよりもみたらし団子ッス、とか言いそうな軽い勢い。
「お前、団子なんか作っている場合か？　そんなことやっているんだったら出陣の支度ぐらいしろよ」
「だって、旦那様の支度なんて、お貞殿かあいりちゃんがやってくれるじゃないですか。なんであっしにやらすんスかあ」
「何言っているんだよ。お前の支度をしろよ、お前の支度を。まさかお前、その格好でいくさ場に出るだなんて言うんじゃないんだろうな？」
「え？　あっしも出るんスか？」
「当ったり前だろうが！　主人のおれが出て、なんで、家臣のお前が出ねえんだよっ！」
「いやいや、だって、あっしは商人ッスよ」
「なんだと」
「商人のあっしなんか出たって足手まといになるだけじゃないッスか」
「そういう問題じゃねえっ！」
「何を騒いでおるのじゃ」
と、眉根をひそめながらあずにゃんが台所に入ってくる。台所の出入口にはお貞とあいりんが心配そうな顔で覗いてきている。そうか、急にいさかいを起こし始めたから、あいつらがあずにゃんを呼んだんだな。

「せっかく無事に四郎次郎が帰ってきたというのに、どうしてそうやって怒鳴りつけているのじゃ」
「いや、だって、こいつ、出陣しないって言うんですよ」
「出陣せんじゃろ。四郎次郎は将ではなく、奉公人なんじゃから」
「いや、あっしはこいつを奉公人だとか商人だとかで雇っていませんよ。こいつはあっしの家来として雇っているんスよ」
「亭主殿。何を無茶なことを言っておるんじゃ」
「無茶なんて言っていませんよ」
「なら、どうして将たる者などに団子の研究などさせておるのじゃ！」
うっ。
「槍を持たせる者に団子の研究などをさせているというのか、亭主殿は！」
ううっ。
「横暴もいい加減にせい」
と、言って、台所を出ていったあずにゃん。
ウウッ（´；ω；`）
シロジロやあいりん、お貞が気まずそうな顔でおれを見つめてくる。
お、おれはこの家の主人のはずだぞ……。
うわああーーーん・。・（つД`）・。・
グレてやる……。グレてやるううぅぅっ！
おれは泣きながら家を飛び出した。止めにかかってきたお貞とあいりんを振り払い、家を飛び出した。もう、帰ってきてやるもんか。
帰ってきてやるもんかあ！

大人になりたいと思います

家出しちゃったし、とりあえず、唯一心の休まる場所、半兵衛の家にでも行くか。

……。

いや、駄目だ。あいつは危険なやつなんだ。

しょうがない。行く先がないから、沓掛勢が野宿している寺に行こう。どうせ、明後日には出陣なんだし。

ということで、岐阜城下のとある寺に。

沓掛勢は境内で丹羽勢とごっちゃになってたむろっていて、槍を磨いて血気盛んなやつ、寝転がってのほほんとしているやつ、博打に興じたふざけたやつと、思い思いにくつろいでいる。

「どうしたんですか、殿。出陣は明後日の朝だって聞いていますけど」

と、ある真面目そうな若者が訊ねてきた。

「いや、その、お前たちの様子でも見ようかと思って」

「ご覧の通り、英気を養っていますよ」

英気なんですかね、これが。

「それより、キミは？」

「拙者は美濃可児の才蔵と申します」

「美濃？　美濃の出身なの？」

「はい。この前のおやかた様の美濃攻めのときまで斎藤龍興の兵卒でしたが、その後は美濃尾張を転々としたあとに、大島殿の知己を得まして、今は殿の兵卒、沓掛の足軽組頭です」

ふーん。まだ、二十歳前ぐらいなのに足軽組頭ねえ。まあ、他の足軽雑兵たちに比べるとしっかりしているし、おれの許可無しだが、まあ、いいんじゃないの。

「で、これはなんなの」

と、おれは背中に指している長い草が不思議になった。ちょっと

変態チックだし。
「これは笹でございます。いや、拙者、旗指物に憧れておりまして。ただ、大した物を持っていないので、笹を指しております」
と、照れ臭そうに話したサイゾー。
旗指物ねえ。そういえば、旗を背中に指している連中もたくさんいるな。沓掛勢にはいないけど。おれがやっていないからかもしれないけど。
「殿は桶狭間のいくさのとき、決戦場を桶狭間に進言したと沓掛の兵どもが話しておりますが、どうして、桶狭間に来るとわかったんですか」
え？　そ、そりゃあ、知っていたからだよ。
「もし殿とお話しできる機会があれば、拙者は常々から、お聞きしたかった。あれほどの番狂わせを仕掛けた戦史など、古今東西、聞いた覚えがありません。事前に何か報せを受けていたのでしょうか」
「いや、ど、どうかな」
「拙者は思っております。現世随一の策略家は武田信玄でも毛利元就でも竹中半兵衛でもない。桶狭間を仕掛けた殿だと」
ほっほっほ。そりゃそうだ。桶狭間の戦いのおかげで今の織田家があるんだからね。てか、沓掛勢って本当にいいやつらだな。
それに比べて岐阜のうちのやつらといったら……。
そうだ。このいくさが終わったら、沓掛に行こう。沓掛ではおれは英雄。皆がおれの言うことを聞くだろうしな。
そんなかんなで、すっかり陽が暮れるころに。
おれは寝不足もあったので、寺の縁側で雑魚寝していたんだけど、なんだかいい匂いがしてきた。
起きてみると、雑兵どもがメシを食っている。どうやら、城下の女どもが炊き出しをしているみたい。で、おれも匂いに釣られて腰をあげようとする。
「殿様の分なら、ここにあるんやけど」
ん？　そりゃそうだ。おれは城主。足軽雑兵どもとは扱いが違っ

てあたりまえやからな。
どれどれ。雑兵どもの食い物だから大した物でもないんだろうけど、明後日には出陣だからきちんと腹ごしらえしないとな。
「どうや？　うまいやろ？」
ん？　なんで、岐阜の人間が関西訛りなんだ？
柄無しの白桃色の着物にポニーテール。どこにでもいる町娘。でも、その特徴的な鼻は……。
「さ、さ、さゆりんっ？」
「そんな大きな声を出したらあかんて。私、殺されてしまうやないか」
こ、殺されてしまうやないかって、おれのことを殺そうとしたじゃねえか！
おれは助けを呼ぼうとして腰をあげた。けど、さゆりんが後ろから抱きついてきてしまった！
「会いたかったわ。あのな、あんときな、助けてくれたこと、ずっと忘れられへんかった」
さゆりんは誘惑してきた！　おれは五のダメージ！
「なあ、なんで助けてくれたん？」
さゆりんの甘い息！　おれはとろけてしまった！
「簗田さん、卑怯やわ。殺そうとした人間を助けてしまうなんて。どれだけ格好いいねん」
さゆりんは誘導してきた！　おれは溺れてしまった！
「そ、そりゃ、助けてくれた恩があったからだよ」
「なら、あれは恩返しやったの？」
「そ、そうだ」
「そんなら、私も恩返しさせて」
お、お、恩返しって何？　てか、背中に柔らかいものが当たっているんですけど。キラウェアが活動しそうなんですけど。
「私、助けられたのなんか初めて。初めてなんや」
ううっ。なんて意味深いハジメテの言葉。で、でも、騙されてた

まるか。おれはこいつに殺されそうになったんだ。それに、こいつは織田の状況を探りに来たに違いない。おれは絶対に気を許さないぞ。

「なあ？　ここは人目につくから、他にいかへん？」

「そんなこと言って、ど、どうせ、またおれをたぶらかす気だろ」

「たぶらかしたのはどっちや」

そんなことを言いながら、息を吹きかけつつ耳たぶを噛んでキタ

――――――――（ﾟ∀ﾟ）――――――――!!!!!

（；´Д`）ハァハァ　アカン。　（；´Д`）ハァハァ

「私に恥、欠かせんといて」

ごめん、あずにゃん。おれは、今から大人になりたいと思います。

キモオタレクイエム

ランランラララランランランラン
ランランラララ
ランラン
ランラララランランランラン
ラララララランランラン
おいで、篠田さん
イヤッ、来ないで！
おいで
来ちゃダメ―ッ！
篠田さん。篠田さん。篠田さん
イヤーッ！
ランランラララランランラン
ランランラララ
ランラン
ランラララランランランラン
ラララララランランラン
やはり。（童貞の）蟲に取りつかれていたようや
らめえぇぇっ！　連れて行かないでーッ！（大人の世界に）
……。

辺りはすっかり闇。
おれのぶよぶよの首に腕を巻きつけてくるさゆりん。
こんなものだったのか。大人とはこういうものだったのか。
何が何だかよくわからなかった。気持ちよかったのか、はたまた、
気持ちよくさせたのか。そんなことなんてわからない。
しかし、一つだけわかる。おれは魔法使いから賢者になった。
ある悟りを開いたおれの目に映る月は、やけに神々しい。岐阜の
とある寺の裏手に広がる雑木林、どうやらここが、世に言うダーマ

の神殿だったようだ。
「簗田さん」
甘ったるい声を吹きかけてくるさゆりん。
「私、簗田さんとずっと一緒にいたいわ」
「なら、おれの嫁になればいいよ」
「そんなのあかん。だって、私は甲賀流やもん。甲賀流を脱け出したら、簗田さんにも迷惑をかけてしまう」
「迷惑なんて。さゆりんがいてくれれば、おれはどんな迷惑も迷惑と思わないよ」
「そんなの、男の勝手やわ。女の気持ちも考えて」
オトコの勝手。なんてリア充な響き＾＾
「なあ、簗田さん。甲賀に来いやあ」
「そ、それは無理だよ」
「なんでや。簗田さんは私と一緒にいたくないんの？」
「そんなことはないけどさ。でも、織田を飛び出すなんて無理だよ」
そう言うと、さゆりんはおれから離れるように体を起こし、うつむき加減に着物の襟を直す。
「甲賀はしまいや。私も終わりや」
「な、なんで」
「明後日には上総介は出陣するんやろ。五万の大軍なんやろ。そんなのしまいや。六角様もろとも、甲賀も滅びるんや。そうしたら、私も死なないかん。甲賀に生まれた女として」
おれもあわてて体を起こす。
「じゃ、じゃあ、逃げればいいじゃんか。岐阜に。このまま岐阜に居座ればいいじゃんか」
すると、さゆりんは儚げな眼差しでおれを睨みつけてきた。
「私にも意地がある」
「そんなこと言ったって。生きてなんぼだろ。人生は死んだら終わりじゃないか」
「そんなら、私に生きる道を教えて」

「それはだから――」
「甲賀流が生き残る道や」
と、おれの言葉を制し、さゆりんはその眼差しを屹立とさせる。
「私には簗田さんしかおらん。甲賀流の生き延びる道は簗田さんしかおらんのや」
ぐう。それは一体どういうことなんだ。甲賀流の生き残る道ってのはなんなんだ。おれはどうしたらいいのかわからん。抱いてしまった女に何かを求められて、それを反故にできるほど、おれはヤリチンじゃないんだ。
「六角承禎様だって、本当はいくさなんてしたくないんや。でも、観音寺城の重臣たちや、悪党の三好松永についついのせられてしまったんや。だから、だから、このいくささえ凌げば、六角様は上総介と和睦することだってあるんや」
虫の鳴き声が聞こえてくるほど、おれは沈黙の中へ襲われた。
それほど、さゆりんの言葉のはしばしには必死さがあった。これは、くのいちの罠というより、哀願。
さゆりんは甲賀流を生き延びさせるために必死なのだ。
「簗田さん。あんたは実は織田ではなかなかの席次に着いている人や。なあ、知っているんやろ。上総介はどういうやり方で攻めてくるんや」
必死だから、おれに抱かれたのか。
「信長は――」
おれはごくりと唾を飲み込んだ。
「和田山城を攻める。和田山城を五万の大軍で一気に取り囲み、そこを占領したあと、和田山城を拠点にして、観音寺城を攻略するつもりだ」
「そっか」
おれはうなずいた。さゆりんの目も見られずに。
ヤリ捨て御免。
本当は、そう見せかけて、信長の本隊は迂回して箕作城を火ダル

マにする計画なんだ。
さゆりんはきっとこのことを観音寺城に伝えるんだろう。そうしたら、六角勢はますます和田山城に重点を置くに違いない。
「ありがとな、簗田さん」
ほっぺたにチューされたおれ。でも、なんの感慨も湧かない。
暗闇の中に消えていったさゆりん。なんとも言えない気持ちのおれ。なんとも後味の悪い童貞卒業式。

いざ、上洛！

このいくさ、完全に織田の勝ちだな。
しかも、半兵衛の作戦通り、一日で終わってしまうかもしれない。
なぜなら、おれが最強の罠を吹き込んだから。
もっとも、サルや半兵衛がさまざまな調略を仕掛けているんだろうけど。
家出人兼賢者のおれは、沓掛の連中の中で一人ぼうっとしながらそう思った。ついに上洛か。ただ、悲しい犠牲も必要としてしまったけれど。
ま、さゆりんは大袈裟に言っているだけだろ。そもそも、あの女狐はおれをたぶらかすために、甲賀流が残るか滅びるかなんていうことを言ったんだからな。
ポジティヴな気分になりつつ、寺の境内でまた一晩を過ごすおれ。むかつくのは家の連中がおれを探しているふしがまったくないところ。まったく心配していないというのかね、あずにゃんは。
つっても、今は顔を合わせずらいヤリチンのおれ。
で、翌日の朝は早かった。
あれだけだらだらとしていた沓掛勢は、朝になってみるとどの顔も心なしか引き締まっていて、ややもすると大島のおっさんの指示のもと、隊列を組み始めた。
いよいよ上洛決行か。
「あのう。簗田殿」
と、なぜか申し訳なさそうにおれに歩み寄って来た大島のおっさん。
「丹羽の殿が来たら出立なんですが、簗田殿は、その、身支度のほうは？」
あ。
そ、そういえば、おれは着のみ着のままで家出してきたもんだか

ら、羽織一枚という、出陣にはとんでもない姿。
あかん。こんな姿じゃ、マリオどころか、信長に激怒されちまう。
むう。いくさの身支度って言っても、おれはこの上に綱を巻くだけの変態スタイルなんだが、その頼みの綱すらない。
「殿！」
と、駆け寄って来て、おれの前に片膝をついたのは笹の葉のサイゾー。
「殿の従者と名乗る者が馬を引き連れて来ておりますが」
すると、軍勢の中をかき分けて近づいてきたのは、具足を着たねじり鉢巻きとクリツナ。
「あ。そうだ。おれの従者だ」
なんだ＾＾　ちゃんと来たじゃんか。シロジロの姿がないのは気に入らないけどよ。
ただ、サイゾーはきちっと頭を下げているというのに、おれと顔を合わせてもぼけっと突っ立っているだけのねじり鉢巻き。
「旦那、槍と鎧のほう、ちゃんと持ってきたぞ」
鎧つってもどうせ、クリツナの鞍から垂れているのがそれだろ。
槍は相変わらずの既製品だし。
で、サイゾーやねじり鉢巻きに縄と綱を公衆の面前で巻いていってもらうという辱め。
どこからかくすくすという笑い声が。ぬう。沓掛の連中、やっぱり教育がなってねえと思いきや、どうやら笑い声は丹羽勢の連中から。
クソッ。綱鎧の築田って言ったら有名なんじゃねえのかよ。やっぱり、笑われ者的なあれで有名なんじゃねえのかよ！
ただし、クリツナだけは連中の目を引いている。並んでいる他の馬に比べても、栗色の馬体は朝日に映えていて、名馬のオーラがビシビシと出ている。クリツナ自身はいつものようにぼんやりとしているけれど、なぜか、オーラを放っている。
「旦那、あと、これ。奥方からだ」

お守り。
あずにゃん……。やっぱり、あずにゃんは……。
てか、待てよ。当日の朝になってねじり鉢巻きがクリツナをのほほんと連れて来て、あずにゃんから預かったお守りを持ってきているということは、おれがここで野宿をしていたことを知っていたってことじゃねえか！
くそう。放ったらかしにしやがって。
もしかしたら死ぬかもしれないっていうのに。
「若君にも馬とお守りを届けておいたからな」
あっそ。てか、タメ口やめろ。ふざけやがって。
で、軍勢の大将、マリオが、馬に乗った家来をぞろぞろと連れて仰々しく到着。勿体ぶったあげく、格好つけやがって。
「簗田殿、思い残したことはないか」
と、武者姿のマリオ。なんで？　おれを死地に飛び込ませる気ですか？
「ないことはないですけども」
「ならば、その念、今すぐに捨てい」
と、マリオは厳しい表情。ぐう。戦場に出るとあって、鬼マリオモード。さすがに、我がままを聞いてくれるような沓掛モードじゃない。
だったら、甲冑ぐらい買ってくれって話だけどよ。クソッ。
「皆の衆っ！」
二千人以上の軍勢の隅々にまで轟くほどの大声を出した鬼マリオ。
「我ら、これより岐阜を出立するっ！　行き先は南近江、六角観音寺じゃ！　道中、心して進軍せいっ！」
マリオ。おれになめたことを言ってくれたが、おれは森部の戦いのときのおれじゃねえ。真・無双奥義、目の前にして小便ちびんなよ＾＾

どっかで見かけたことがあるようなデブ

岐阜を出るころには、ぞくぞくと他の隊列と合流。やばいぐらいに膨れ上がった軍勢の列は前にも後ろにも延々と続いていて、田圃で稲刈りをしていた百姓も、その手を止めて唖然と見送っている。

サルやウザノスケ、それにいくさに狂った半兵衛と鉢合って、そのまま南近江まで行くのは面倒だなって思っていたけど、とんでもない。兵と馬があまりにも多すぎて、他の武将たちと顔を合わせるなんてことがない。

ま、この分だと楽勝だな。牛太郎トラップも仕掛けているし。それに今回は初めての馬だから、すげえ楽チン。甲斐まで一週間かけて行ったおかげで、クリツナに跨るのも慣れたし。

で、ちょっとした山越えをして、愛知川っていうところに着いたのは岐阜を出て三日後。めっちゃ楽チン。おれは一週間かけて甲斐まで行き、そこから岐阜までとんでもない山越えを経験した男だからな。

夜、かがり火があちこちに燃え盛る中、軍議ということで、信長本陣へマリオに連れられて行くことに。

本陣に到着し、ねじり鉢巻きの手を借りてクリツナから降りていると、なーんか、どっかで見かけたことがあるようなデブが、おれと同じようにして馬に跨りながら本陣にやって来た。で、おれと同じように従者の手を借りながら馬から降りたのだけれども、

「痛ッ。イタタ。くう。痛い」

と、ケツを押さえているんですが。

「大丈夫ですか、殿」

一緒に連れ添ってきた、トンデモ兜（飾りの立物が炎型で、それが二本長く突き出している目立ちたがり）を被った男が心配そうにしてデブに手を差し伸べる。

「だ、大丈夫じゃないが、大丈夫じゃ。うん。大丈夫じゃない」

なんだ、こいつ。甲冑だけは大したものを着けているけど、ほっぺたぶくぶくだし、ぎょろ目だし、胴長短足だしで、かなり見ばえの悪い武将じゃねえかよ。むしろ、キモイ。

「これは三河殿。わざわざご足労でありました」

と、キモブタに笑顔を向けたマリオ。ん？　マリオが笑顔を作るなんて珍しいな。

「ああ、これはこれは丹羽殿ではないですか。イタタ。いやいや、お恥ずかしいところを。あー、痛い」

太郎ばりのシラーッとした目を向けているおれ。

「三河殿、たしか、こちらの者とは初めてですな」

「あ、ああ、そうでございました。いや、挨拶が遅れまして申し訳ありませぬ。拙者、徳川三河守でございます。以後、お見知りおきのほどを」

徳川？　は？　はあ？　徳川なんたらって、徳川家康しかいねえだろ。こ、こ、こいつが徳川家康だと！？　嘘だろ？　こんなキモブタが徳川家康？　嘘だろ！？　まるで、おれじゃねえかよ。

「こちらは沓掛城主の簗田牛太郎政綱でございます」

「お、お初にお目にかかります。簗田牛太郎政綱でございます」

「あー、あの、桶狭間勲功第一の簗田殿とは貴公でしたか」

そう言って、キモブタはおれに歩み寄って来て、腰も低く、おれの手を取って握手。

「いやあ、貴公があの簗田殿でしたか。いやはや、いつかはお目にかかりたいと思っていたのですが、これはこれは運がいい。あ、こっちの者は拙者の家臣の本多平八郎でございます」

「本多平八郎忠勝にございます」

ぼそっと言いながら頭を下げてきたファイヤー兜。むう。このファイヤー兜が本多忠勝か。

それにしても、本多忠勝は思っていた通りの猛者っぽいやつだけど、家康はただのキモブタ……。

よそう。こいつは将軍になる男だ。偏見の目で見てはいけない。

こいつにもいろいろとおべっかを使っていかなければいけないはずだ。

でも、たとえこいつが家康だったとしてもさ、戦場で働けるのかよ。ケツが痛いってさ、痔とかなのかよ。どう見たっておれより若いはずなのに、なんなんだよ、このブタは。

とにかく、マリオ、キモブタと共に本陣の中へ。

中は小さい椅子が並べられていて、かがり火もいっそう焚かれている。こんなにぼうぼう燃えていたら、あっちいよ。一つでも倒れたら大火事じゃねえの。いくら電球がない時代だっていってもさあ、こりゃあっちいよ。

諸将が集まってくる中、信長がなかなかやってこないので、おれは汗だく。で、キモブタ家康も汗だく。むう。どっかで見かけたことあるなと思ったら、おれに似ているのか。クソッ。

「牛殿」

と、隣に座ってきたのはサル。なんか、疲れ切った感じ。

「大変だぎゃあ。半兵衛がやっぱり狂い出したぎゃ。ぶつぶつ独り言をしたり、一人で薄気味悪く笑っていたり、ここに連れてこようと思ったぎゃあけど、さすがにおやかた様に怒られるかと思ったぎゃあ」

さすがのサルも弱音。向かいのウザノスケが睨みつけてきているのがどうでもいいぐらい疲れ切っている。

そのとき、信長が入って来て、一同、揃って頭を下げる。

織田の家紋を真後ろにして腰を下ろした信長は、回りくどい挨拶もせずに例の甲高い声で言った。

「出陣は明日だ」

じいっと信長を見守る諸将一同。張り詰めた空気が流れ、信長は一同を睨みつけるように見回して行く。

「策はすでに講じてある。それを述べる前に、今回のいくさは近江と三河から援軍が来ておる。新九郎、三河守殿、よくぞ参られた」

すると、キモブタが立ちあがろうとしたんだけれども、もう一人、

離れたところの青年が立ちあがったので、キモブタはそそくさと座る。だせえｗｗｗ　本当にあの家康なのか信じられなくなってくるわ。

「浅井新九郎長政でござる。今回、義兄上の上洛行軍と聞いて駆けつけて参った。近江武者の力を見せたいと思う所存でおる。皆の衆、よろしく頼み申す」

あれが市姫の旦那か。むかつくほどのジャニーズ顔のイケメンじゃねえか。でも、ちっとも気が悪くならないのだから不思議。口調も偉そうなのに。

多分、頼もしさがぷんぷんするからだろうな。織田の陣中だからってまったく引け目を感じていないところもまた清々しい。

それに比べて……。

「徳川三河守家康でございます。イタタ。今回、上総介殿の上洛行軍と聞いて駆けつけて参りました。三河武士の力を見せたいと思っておりますんで、足手まといにはならないよう努める所存でございます」

長政と言っていることが同じじゃねえかよ。

信長、秀吉、そしてキモブタ

浅井長政とキモブタの紹介も終わったところで、本題に。
「三方面を攻める」
と、信長。
「先鋒は稲葉彦四郎。和田山城を攻城しろ」
「拙者が先鋒でございますか」
「そうだ」
「あ、有難き幸せ！」
一番最初に死地に飛び込むことの何が有難いんだかよくわからないけど、稲葉ガンコオヤジの顔が頑固親父らしからぬ笑み。
「同時に佐久間と権六、三左は赤黒の母衣衆を率いて観音寺城だ」
ゴンロクとサンザが顔を見合わせ、次いで、マタザやウザノスケに目を向ける。赤マントのマタザはにやり。
「俺は一万五千の兵を率いて箕作城を攻める。五郎左、滝川、サル、それに新九郎と三河守殿は共に付いて参れ」
半兵衛の作戦そのまんま。
「このいくさ、明後日の明け方までに終わらせる」
一同、えっ？　みたいな顔。さすがのゴキブリの親玉のウザノスケでさえびっくりしている。
「以上だ。各々、明朝に備え、体を休めておけ」
それだけを言い残して信長は去っていったけど、各武将は信長の最後の言葉に戸惑っていて、なかなか腰を上げられない。
「おやかた様は本気でおっしゃっていられるのだろうか」
と、きょどる佐久間ヒゲオヤジ。すると、ゴンロクがしかめっ面。
「全軍総動員ならまだしも、三方面に分けての城攻めで明後日までとは、いささか無理がすぎんか。先を急いてむやみに兵を殺させることになりかねん」
「違いましょう」

と、腰を上げ、中央の大地図の前に進み出たのは浅井長政。
「和田山城、観音寺城に主戦を置くと見せかけて、義兄上の本隊が迂回して箕作城を攻めるということなのでしょう。力で攻めるのは容易でありますが、兵は詭道なり。策を講ぜずにむやみにいくさをするような義兄上だとは思いませんが」
若武者に諭されて、うーむ、と、唸るヒゲオヤジとゴンロク。てか、この二人って織田家の最高幹部のくせに、いちいちネガティブになるなよ。桶狭間のときも野戦に反対していた連中だったし。
「しかし、明後日の明け方とはなあ。いかにも」
「まあ、いいじゃないですか」
と、生意気な口を叩いたのはウザノスケ。
「俺と又左が前線に出るだなんて、これ以上の幸運はない。鬱陶しい人もどきと共に戦わずに済みますしな」
にやつきながらちらっとサルに目を向けたウザノスケ。
「にゃんだとお」
「やめんか！」
と、サンザが制止。
「お言葉ですが、言わせてもらいますだぎゃ」
挑発されたサルが顔を真っ赤にしながら腰を上げる。
「おりゃあはおやかた様と共に箕作城に向かいますだりゃあ、仰せの通り、おりゃあが明日一晩で箕作城を片づけてやりますだぎゃあ。でやから、皆様もおやかた様の命じられた通り明後日にまでには片づけられい」
「お前みたいな人もどきに言われる前に叩き潰してやるわ。むしろ、お前こそその言葉忘れんなよ。おめおめと逃げ帰ってこねえようにな」
と、ウザノスケがにやにやしながら捨てゼリフを吐いて、外へと出て行く。
「偉そうな口を叩きおって。人真似しかできんから身の程をわきまえることも知らん」

ゴンロクもつまらなさそうにしながら外へ出て行く。ひどい言われようw　ま、そのゴンロクもおれの前を通っていく途中、おれからそそくさと視線を外したけどwww

ゴンロクが出て行ったことで、各武将もぞろぞろと出て行く。

「まあ、落ち着け、藤吉郎」

マタザになだめられるサル。

「おりゃあは落ち着いているだぎゃ。しかし、揃いも揃って頭の足りにゃあ連中に嫌気がさしただけだぎゃ。おやかた様が無策であのようなことを言うわけにゃあだぎゃ。織田の武将が脳無しで、新九郎殿にだけ先見の明があるとは、情けないかぎりだぎゃ」

「藤吉郎、言葉を慎め」

地獄耳だったのはマリオ。サルは不服そうに頭をぺこり。

「お主の言いたいこともわかるが、いくさは全軍一丸とならなければいかん。内蔵助ごときにそう熱くなるな。お主のほうが賢いのは皆が知っておる」

「丹羽様にそう言っていただけると有難いですりりゃあ、おりゃあは本気だぎゃ。本気で明日中に終わらせてみせるだぎゃ」

「わかったわかった。お手並み拝見としよう」

マリオになだめられながら外に出て行くサル。おれも後ろに付いていく。

「木下殿は意外と血気盛んなのですなあ」

なんだよ、キモブタ。汗臭そうだからひっついてくんなよ。

「今、上総介殿の下でもっとも勢いのある木下殿ですからなあ。拙者もそのお手並みを拝見させてもらいましょうかな」

汗だくの顔をにこにこさせるキモブタ。つーか、お前も戦えよ。

なんだよ、その高見の見物的な物言いは。

「いやあ、しかし、暑かったですなあ、簗田殿」

シラーッとするおれ。今の発言は、まさしく、似たようにして汗だくのおれを同類と見なした発言。

でも、一応、徳川家康だしな……。

「そうですね。暑かったッスね。川で水でも浴びたいぐらいッスね」
「あっ、そうだ。水浴びしましょう。築田殿、これから川で水浴びしましょう」
何を言っているの、こいつ。
「平八、おい、平八」
陣の外で待っていたファイヤー兜を手招きするキモブタ。
「なあ、平八、わしは今から築田殿と川で水浴びをすることになった。お主も共をせい」
「殿、愛知川の向こうは六角領ですぞ。まして、夜半に水浴びなど危険すぎます」
「わしは暑いんだ。なあ、築田殿？」
「いや、ファイヤーさん、じゃなかった。本多さんの言う通り危険ですよ」
「何を言いますかあ。天下の築田殿とあろうお方が川遊びが危険などと。よく言いますよ」
気安く肘で小突いてくるキモブタ。てか、水浴びから川遊びになっちゃっているんですけど。
「何をしておる、築田殿」
と、マリオが引き返してきた。ふう。口うるさいマリオが今回ばかりはありがたい。
「いや、丹羽殿、今から川で水を浴びようかと思ってですな」
にこにことしているキモブタをシラーッと、いや、むしろ軽蔑の眼差しを向けるマリオ。
「拙者も止めているのですが」
と、ファイヤー兜が困り顔。てか、キモブタってバカ殿なの？
だって、家康って言ったら、桶狭間の戦いの直前、織田をさんざん苦しめたじゃん。それなのに、このバカ殿っぷりはどういうことなのよ。
「水浴びならいくさが終わったらにしてもらいましょうか、三河殿」
ぎろりと目を光らせたマリオ。

「あ、あ、そ、そうですな。そうしましょう」

アハハと笑いながらそそくさと逃げていったキモブタ。マジで信じられない。あいつが徳川家康だなんて、マジで信じられない。タイムスリップして以来、一番の驚きだよ。

見せかけの攻撃開始

翌日、夜明けとともに出陣。

箕作城攻撃軍の進軍は、先頭が木下勢二千、次に丹羽勢二千（＋沓掛勢五百）、滝川勢三千と続き、最後に信長本隊一万五千（＋浅井勢三千、徳川勢千）。

出陣ともなると、ちんたらした行軍ではなくなり、着陣まで具足をかちゃかちゃ鳴らしながら半ダッシュ。おれは馬。走れ走れ～＾＾で、三時間ぐらい後には箕作城のある小高い山から一？ぐらい前方の付近に到着。途中、小競り合いも予想されたのに、何もなし。六角はすっかり引きこもり状態。

「なかなか堅固な山城だな」

と、馬上から山を眺めるマリオ。

「これをたった一日で落とすとは、藤吉郎め、言ってしまったの」

すでに軍勢は左右に広がって展開している。信長本隊の到着を待つ間、命令を待つばかり。嵐の前の静けさというか、ひりひりとした緊張感が漂っている。

山城の六角勢もぴたりとなりを潜めている。まさに引きこもり状態。あそこから引きずり出すことがどれだけ至難のわざであるかは、元ニートのおれなら知っている。

と、思っていた矢先、何発かの銃声が静寂を破った。発砲はどうやら自軍から。

「何事だ！　おやかた様はまだ到着しておらんぞ！」

と、あわてふためくマリオ。

「どうやら、銃声は木下勢からです！」

「なんだと！　藤吉郎は何を勝手な真似をしておるのだ！」

まさか、半兵衛が先走ったんじゃなかろうか。

山城からも銃声が届いてくる。弓矢も降って来ている。しかし、すべて届かずじまい。

しばらくすると、銃声はぱたりと止んで、また、しーんとした空気が流れる。
「様子見のようですな」
と、大島のおっさんがマリオに言うが、マリオは苦い顔。
「藤吉郎め、昨日の軍議で血が昇ったままここに来ているのではないだろうな。あいつらしくない。簗田殿、藤吉郎の陣に行き、冷静になるよう伝えてきてもらえぬか」
面倒だな。渋々、ねじり鉢巻きに目配せして、クリツナを動かそうとしたら、
「おやかた様、ご到着！」
と、伝令がやって来た。馬に跨ったまま声を大きくする。
「丹羽勢は木下勢と共に攻城せよとのご指示！　ただし、足軽兵の突撃は極力少なくし、麓から弓矢、火縄銃を撃ちかけるにとどめよとのお言葉！」
「なんだと」
「以上！　武運を祈る！」
と、言い残し、伝令はまたどっかに駆けていく。
「どういうことだ。一日で落とすのではないのか。弓矢を射かけるだけでは、何の意味もないではないか」
困惑するマリオ。
「しかし、殿、おやかた様のご命令です。ただちに攻撃の下知を」
あーあ、見てらんないや。
「ゴロザ殿、これは見せかけの攻撃です」
と、おれは思わず口をはさむ。
「竹中半兵衛の策です。夕刻まで見せかけの攻撃に徹し、敵方を油断させたのち、夜中になってから総攻撃を開始するそうです」
「まことか？」
「あの竹中半兵衛ですよ。とんでもないことをやるに決まっています」
「左様か。ならば合点がいく」

マリオは馬をパカパカと歩かせると、展開している軍勢の前まで出て行って、右手を掲げながら大声を上げる。

「進軍開始！　騎馬足軽の者は弓衆鉄砲衆の守備を固めろ！」

で、ようやく前進。弓衆鉄砲衆が走り始め、その周りを騎馬足軽が取り囲んでいく。ちなみに沓掛勢は弓も鉄砲も大した数じゃないから、警護役。おれも後ろのほうで高見の見物。

山の麓から二百m前後まで来たところで撃ちかけ開始。木々が鬱蒼と茂った山目がけて当てどもなく撃っている感じ。そもそも、櫓がところどころから頭を出しているだけで、どこに敵がいるのかも判別できない。

敵も敵で山の中から応戦してくるも、まったく当たらず。

しばらくの間、空虚な戦争。雑兵たちも退屈そうな顔になってきている。

すると、右手のほうで鐘や太鼓の音がじゃんじゃんと鳴り響き、兵たちの声がどっと沸き起こった。目を凝らしてみると、木下勢が山の中に突っ込んでいく。

「簗田殿！　なんだあれは！」

「い、いや、わかりません」

おれがあせっていると、縦に長い帽子を被った一人の男がどこからか馬を駆けてやって来て、マリオの前に来ると馬から降りた。どうやら、半兵衛。

「お初にお目にかかります。木下藤吉郎の与力、竹中半兵衛重治でございます」

片膝をついて頭を下げた半兵衛。あれ。狂っていないんですけど。

「口上はよい！　これは一体どういうことだ！」

「木下勢の兵卒には端々までに伝えております。これは本決戦ではないと。しかるに、敵と出くわしたら槍の一太刀も浴びせて逃げてこいと。もしも、退却時に追撃してくるものなら、麓まで誘い出し、弓と火縄銃の的にせよとの指令です」

「我らはどうするのだ。このような無意味なことを続けては兵の士

気が持たん」
「日没までは、木下勢と同じような動きをしてくだされ。決戦は深夜でございます。ある程度、兵力は温存しておいてくだされ」
「勝算はあるのか！」
「ございます。ある程度、攻めていただければ、なおのこと勝機あり。敵方の配置、戦力をぬかることなく調べ上げられます」
しばらくの間、黙って半兵衛を睨み続けたマリオ。
「わかった。お主の言う通りにしよう。足軽を前方に向けろ！」
「有難き幸せ」
と、半兵衛は言い、再び馬に跨る。そうして、おれに目を向けてきて、にやっと笑った。あわわ。やっぱり、狂い始めている。

いくさ祭り

攻撃しては退却。攻撃しては退却を日没まで繰り返して、辺りが闇に染まると、一旦、後方に退いて、そこに陣を置いた。

「竹中半兵衛は一体何を考えているのだ」

マリオはぶつくさと不満げ。

「確かに敵方は夜半に急襲を受けるとは思っていないであろうが、我らだって攻めなくてはならんのだぞ。この闇の中、月明かりだけで攻城するなど無謀すぎるではないか」

「でも、半兵衛は火の海にするって言っていましたよ」

と、おれが言ったが、それでもマリオは不満そうな顔。

「火の海になど、どのようにするのだ。頂上までの道のりをどうやって照らす。昼中、いつ、どうやって火計の施しをこんな広い山に仕掛けたと言うのだ」

いちいち愚痴が多いが、確かにマリオの言う通り、麓だけを燃やしたって、本拠は頂上にあるんだから、どうしようもない。

本陣の伝令が伝えてきたところによると、山が燃えた瞬間を合図に総攻撃を仕掛けるということだけど、山が燃えるってなんだよ。

まあ、マリオが愚痴っていてうるさいから、陣を抜けて沓掛勢のところへ。

「殿様、夜中に攻撃をするっていう話みたいだけど、あっしら沓掛の者はたいまつを大して持ってきていやしねえですよ」

むう。おれに言われても。

「道もわかんねえしよ。なあ？　むざむざと敵の的になりに行くもんだ」

うるっせえなあ。

「なーんもしねえで死にたくなんかねえなあ。なんなんだろうな、このいくさは」

「黙れ！　黙れ黙れ黙れ！　べしゃくしゃと喋っている余裕がある

んなら、攻撃に備えて寝てろ！　あんまりうるさいと沓掛から叩き出すからな！」

おれが怒鳴りつけてやると、今にも舌打ちしそうな不服な顔つきの連中。

クソッ。おもしろくねえな。なんだか、おもしろくなくて、おれは不貞寝。

なんで、おれがああだこうだと言われなくちゃならないんだ。目にもの見せてやりたいわ。

半兵衛ならきっとやってくれるはずだ。きっと。

で、野宿生活をひたすら体験してきたおれは、すやすやと眠りこけていたんだけど、サイゾーに体を揺らされて起こされた。

「殿、そろそろ合図のときですよ」

むにゃむにゃ。なんだっけ、合図って。あーあ、体が痛い。いくら野宿には慣れているとはいえ、布団の中じゃないと体が痛くなって仕方ない。

「皆の者はすでに隊列を整えています。殿も馬上に跨ってください」

うーん。面倒だな。おれは目をこすりながらクリツナのもとへ。ねじり鉢巻きがあぐらを組んで座っている。いや、寝ている。

あの野郎。おれは起きたっていうのに。

と、そのとき、夜闇の静寂を引き裂くようにして、銃砲が一発、鳴り響いた。

「なんだ？」

誰もが顔を上げた。

瞬間、山の麓から火の手がぽつんと上がった。まさか、あんなのが火の海って言うんじゃねえだろうな。

いや、違った。火の手は暗闇の山に蜘蛛の巣状に放射されていき、それが飛び火するかのようにあちこちで炎が上がった。

茫然とする暇もなかった。炎は瞬く間に山一面、山頂にまで広がっていき、夜空の下に箕作の山を赤々と浮かび上がらせた。

「すげえや」

雑兵の誰かが言った。山が燃えているんじゃない。山を照らしている。しかも、隅々まで。これは火の海というより、なんかのお祭りにあるような光景。

うおおっ、と、歓声が上がった。

そして、どこからかマリオの大声が飛んでくる。

「全軍、突撃い！」

法螺貝が鳴った。太鼓が鳴った。鐘が鳴り響いた。武者押しの声が天地に轟いた。

おれはねじり鉢巻きを蹴飛ばして起こすと、あわててクリツナに跨る。すでに沓掛勢が大島のおっさんを先頭にして走り出している。

お、おれも真・無双奥義を繰り出さなくては。

「鉢巻きっ！　早く走れっ！」

「旦那っ！　クリツナの脇腹を軽く蹴ってくれ！」

ん？　こうかな。おれは言われた通り、クリツナの脇腹をぽんと叩く。

すると、クリツナの野郎、変なスイッチが入ったらしく、小走りに走りながら首を高く上げていななきだした。や、やべえ。普段はおとなしいクリツナが妙なことに。パンドラの箱を開けちゃった。

で、クリツナは首をぐいと前に出し、重心を低くしたかと思うと、急に物凄いスピードで駆け始めた。ねじり鉢巻きの姿はもうない。

やべえ。やべえ。おれはしがみつくのが精一杯。しかも、前方には左右に広がってダッシュしている沓掛勢。ぶ、ぶつかる。

顔をクリツナの首に埋めたおれ。しかし、クリツナは大ジャンプ。軍勢を飛び越えて、一気に先頭へ。お、おい。駄目だ。先頭だけは駄目だ。

おれは今まで見てきた馬の止め方を思い出し、手綱を自分のほうに引っ張る。すると、クリツナは首を振り上げて暴れてしまい、おれは地面に振り落とされる。

ううっ。なんて馬だ。スイッチを入れてしまったばっかりに。

そして、背後からは大地を揺らしながら丹羽勢と沓掛勢が大波の

ように迫ってくる。
「続けっ！　おれに続けっ！」
と、おれは見っともなさをカバーするかのように、制御不能のクリツナを置いて走り出す。
「殿に続けえっ！　一番槍は我らのものだあっ！」
おれはダッシュする振りをして、沓掛勢におれを追い越させる。ふう。ここまで来ればあとは後ろからやんややんやと騒ぎ立て、敵の中でも弱そうな奴に真・無双奥義を披露するだけだ。
だが、しかし、背後から地震か津波かのような大きな地鳴りが押し迫って来た。振り返ってみると、暗闇の中に浮かび上がる旗指物の大軍勢。
の、信長の本隊が突撃してきている。
あばばば。おちおちしていると踏み潰されかねない勢い。あわてて走り出すおれ。
「ヒャッハー！　祭りだ祭りだ！　いくさ祭りだ！」
と、叫び上げながら、単騎、右往左往にうろちょろしながら、馬上で棒をぶんぶんと振り回しているやつがいた。
縦長帽子。半兵衛……。サルのところを離れて、何やってんだよ……。

絶好のチャンス

半兵衛は見なかったことにして、おれは山の麓に到着。ところどころの木の幹にたいまつが縛り付けられていて、焚き木があちこちで燃えさかっている。暑い。めちゃくちゃ暑い。

すでに上のほうからは怒号と銃声。

「木下勢に遅れを取るな！」

マリオが馬から降りて、兵たちを雑木林の中に突入させる。沓掛勢もそれに付いて行こうとしたが、

「大島殿！」

と、おれが大島のおっさんを引き留めて、山道から突破するように指示。なぜなら、林の中はおれが登りづらいから。

「しかし、簗田殿、正面は危険すぎる！」

「すでに木下勢が中腹まで攻め上がっているでしょうが！　敵方の戦力は減っているはず！」

「むう」

ということで、沓掛勢は山道から突撃。すると、やばいことに坂の上で待ち構えていた敵。十人ぐらいが銃口を並べていて、こっちの姿を確認するやいなや一斉射撃。あわわ。やべえ。何人か撃たれてもだえている。

「おのれえ！」

弓を取り出した大島のおっさん。矢をセットして弓を引き絞ると、発射。敵の額にヒット。すぐさまおっさんの従者が次の矢を渡して、発射。敵の額にヒット。す、すごい。

これはいけると思い、

「押せ！　押せ！」

と、沓掛勢を突撃させる。しかし、どこからか弓矢が雨のように降ってきて突撃組の何人かが呻き声を上げる。あばば。どうやら、櫓から撃ってきたみたい。

そうこうしているうちに坂の上の鉄砲隊が発射準備完了の構え。
やばい。
そのとき、黒い馬が沓掛勢を吹き飛ばしながら影のような速さで坂道を駆け上がっていった。銃弾を交わしたあとに、鉄砲隊の顔面を前脚の蹄で踏み潰すと、今度は後ろ脚を蹴り上げてバコーン。馬が鉄砲隊の三人を蹴散らしたかと思えば、ついでに馬上の奴も槍を振り回して二人を殺害。
「沓掛勢！　何をもたもたしておるか！」
「あれは！」
と、声をあげた雑兵。そう、太郎。太郎ちゃん。我が息子、左衛門太郎様。しかも、あの凶暴な黒い馬に跨っている。あの黒い馬を操っている。
太郎にビビった鉄砲隊が逃げていく。
「太郎だ！　左衛門太郎様だ！」
「沓掛勢よ！　我に遅れを取るな！」
一気に熱を帯び始めた沓掛勢は更に登っていく太郎の後ろを付いて行く。むう。いいところを取られた。しかし、あれじゃかなわない。あの強さにはかなわない。
そうして、更に坂道を駆け上がって来たのは馬廻衆。おれは道の端に避難。どうやら、太郎が飛び抜けてきたみたい。
くそう。真・無双奥義を披露する絶好の機会だっていうのに、信長本隊に追いつかれちまった。
この様子だと、サルの軍勢は頂上付近にまで登っているに違いない。
ならば、近道だ！　知らないけど。
おれは山道を外れ、一人、林の中へ。ふかふかした地面に足を取られながらも、木の枝なんかを掴んでいきながら、火の粉の降る中を進んでいく。進んでいくうちに、何体かの死体が落ちている。ぐえ。南無阿弥陀仏。
石垣をよじ登り、目の前には二m余の更なる石垣。その上では怒

号と悲鳴、刃物と刃物がぶつかり合う音がしている。あっ。また人が落ちてきた。「母上、母上」って呻いている。見なかったことにしよう。

おれは石垣をクライミング。なんとかよじ登ると、ちょうど、広いところで織田勢と六角勢が向かい合っている場所。幸運なことに織田勢の後ろに転がり出せたおれ。

こいつら、どこの軍勢かは知らんが、仕方ない。助太刀してやろう。てか、旗指物が水戸黄門のマークなんだけど。

「我は徳川三河守の家臣、本多平八郎にて候！」

顔を確かめる間もなく敵に突っ込んで行ったのは確かにファイヤー兜。長くてぶっとい槍を一振りすると、うげえええっ、一気に三人の首が吹っ飛んだ。

ファイヤー兜に続いていった雑兵たちも敵を滅多斬り。つ、つ、強すぎる。敵の槍を刀で薙ぎ払い、すぐさま具足の上から袈裟斬りにしてしまう芸当の持ち主もいれば、乱戦中に背後から襲いかかってきた敵を構えていた鉄砲が撃ち抜く。戦いのすべてがぬかりない水戸黄門マークの連中たち。

「立ち止まるな！　続け！」

と、敵を倒した余韻に浸ることもなく、また更に上へと登っていくファイヤー兜とその面々たち。

お、おれって、いらないかな。アハハ。

「や、簗田殿では、ないか」

と、下から兵たちに周りを守られてどすどすと走って来たのはキモブタの家康。一丁前に肩に鉄砲を担いでいる。こいつ。槍働きは自分には向いていないと思って、鉄砲なんかを担いでいるんだな。どうせ、使い道がねえくせに。でも、その考えはデブには最適だ。次のいくさからはおれも鉄砲を使うことにしよう。

「ど、どうされました、こ、こんなところにお一人で」

ハアハアと肩で息を切らしながらのキモブタ。

「こちらのほうがいくさの主戦かと思いまして」

と、おれ自身でもよくわからない発言。沓掛の連中に置いてかれたなんて言えないし。

「さ、左様でございますか。それは心強い」

「功名だあ！　功名が辻だあ！」

ハッ！

家康の後ろを横切って行くのは、憎きイエモンとその従者たち！

あの野郎、サルの手下のくせにこの辺りをうろちょろしているっていうことは、迷子にでもなって乗り遅れたんだな。あの馬鹿のことだからあり得ることだ。

「家康殿、その火縄銃、貸してくだされ！」

「え？　これですか？」

とろとろしているキモブタから鉄砲を奪い取り、上に駆け上がっていこうとするイエモンの背中目がけて銃口を向ける。

イエモン氏ね！　いや、死ね！

カチッ。カチッ。あれ？

「どうしたんでしょう、簗田殿。これはここの縄に火を点けなければ発砲できませんぞ」

と、キモブタに言われているうちに、イエモンの姿はなくなっていた。くそう！　絶好のチャンスを逃しちまった！

お苦しみ会

夜明け前に箕作城は落城した。

一気に燃え広がった炎の原因は、やはり、サルや半兵衛が事前に調略を行っていた成果みたい。箕作城周辺の村人や山の猟師などを懐柔しておいて、一度、休戦していた夜の間、闇に紛れてたいまつや焚き木を仕掛けていったそう。

信長を迎え入れたサルは大はしゃぎ。半兵衛は高笑い……。

クリツナを拾ってきたねじり鉢巻きと合流し、終戦まもない箕作城内で一時の休息を取ることに。沓掛勢とも遭遇し、状況を訊いてみると、重傷を負った人間はいるものの、命を落とした人間はいないらしい。しかも、サイゾーが十以上の首を召し取ったらしく、その首を笹の枝に数珠繋ぎに通すというグロテスクなことまでやっていた。

太郎はというと、いない。でも、沓掛勢の話題は太郎の武者ぶり、黒い馬の凄まじさでいっぱいだった。おれの話題はというと、当然なし。むしろ、どこにいたの？

まあ、一息ついたらすぐさま観音寺城に向かい一気に叩き潰すということなので、騒ぐのもそこそこに仮眠。

と、思って、仮眠から目覚めてみたら、いくさは終わったという噂が流れてきた。

おれはマリオとともに本陣の信長のもとへ。緊急の軍議。箕作城攻めを担当していた将が居並ぶ中、信長が登場。

「今、確認を取った。いくさは終わった」

「ほ、本当ですきゃあっ？」

サルが椅子を飛ばしながら立ちあがり、信長はにんまりと笑う。

「夜明けには稲葉のもとに和田山城が降伏を申し入れてきたそうだ。ついさっきには観音寺城も開城したという報せも入り、第二隊が入城している。どうやら、六角親子が城から逃げたらしい」

「なんと……」
と、呆気に取られたのは浅井長政。
「我が祖父、我が父があれだけ苦戦してきた六角をたった一日で破ってしまうとは。夢でも見ているかのようだ」
「新九郎。お前の働きあってのことだ」
「いえ、滅相もございませぬ。拙者は何もしておりませぬ」
「とにかく、おれは観音寺城に入る。お前らは箕作に待機し、戦後処理をしておけ」
ということで、六角との戦いは終了。
箕作城の戦後処理はマリオが陣頭指揮を取ることになった。織田の兵たちに麓の集落で強盗やレイプの禁止、それを破ったら斬首という令を出すと、すすまみれの城をぶっ壊したり、箕作城周辺の集落を巡って新領主が織田家であることを伝えたりし、あとは残党狩り。鬼畜係は滝川彦右衛門一益がやった。
鬼畜係の伝えによると、六角親子は甲賀に落ち伸びたそう。むう。もしかして、甲賀にも攻め入るのかなと思っていたら、どうやら、放っておく様子で。
「主家が滅びた忍びの里に害はないでしょう。とはいえ、忍びは忍び。攻め入るとなったらなかなか難儀でもあります」
と、半兵衛が説明してくれた。すっかり、正常の半兵衛に戻っていて一安心。
浅井長政とキモブタ家康も自分の国に帰り、箕作城攻めから五日後、軍勢は観音寺城のある山の麓に移動。和田山城の稲葉ガンコオヤジの第一隊も合流し、全軍が集まったところでようやく戦後恒例のお楽しみ会。
勲功第一が誰とかはなかったけれど、褒賞の高さからして、サルが一番の手柄取り。足軽大将から侍大将に昇格し、サルは嘘泣きで大喜び。
これでサルは織田家中の幹部に。むう。なんか、おもしろくない。本当は半兵衛の力なのに。でも、あとからサンザに聞いた話だと、

半兵衛は危険だからサルの与力に留めておくという信長の考えみたい。たしかに。

あと、ちゃっかり、太郎の俸禄も増えていた。太郎はどうやら首を五つ持っていたみたいで、その中に首級が一つあったらしく、新しい俸禄は百貫。ぐぬぬ。おれは珍奇衆として五十貫なのに、その二倍。ぐう。

もちろん、おれは何もなし。むしろ、おれの配下のサイゾーに褒賞が与えられるという始末。首級はなかったものの、その豪傑ぶりが評価されて、サイゾーはサンザの与力に異動。ぐぬぬ。なんで、こんな強い奴を手放さなければならないんだと思っていると、牛の下には勿体ないという信長の言葉。ぐぬぬ。

てか、サイゾーは実は宝蔵院ナントカっていう槍の名人に槍を習ったというとんでもない奴だったらしく、それを先に知っていれば……。もうちょっと、唾をつけたというのに……。

おれにとってのお苦しみ会が終わったあと、日没にすぐさま軍議。

「京から三好三人衆が逃げ出したそうだ」

信長が上機嫌にそう言うと、佐久間ヒゲオヤジがげらげらと笑い上げる。

「あの悪党狐たちも、六角を一夜にして滅亡せしめたおやかた様に尻尾を巻いて退散しましたな」

「残るは大悪党の松永弾正のみですな」

と、ゴンロク。こいつもにやついている。まったく。戦前にはあれだけぴーちくぱーちくうるさかったこの二人が上機嫌なんだもんな。

「今朝、松永弾正忠久秀から降伏を申し入れてくる書状が参った」

信長の言葉に一同、顔を引きつらせた。てか、松永弾正って前々から名前が出ているけど、そこまで言うほどの大悪党なのかよ。先代将軍を殺しただけだろ。そんなの戦国時代では当然なんじゃないの。と、冷ややかな目のおれ。

「これは、松永弾正の罠かもしれませんぞ」

と、マリオが珍しく軍議で発言。
「降伏の姿勢を見せておいて、上洛されたおやかた様と公方様（足利義昭）を迎え撃つ可能性もなきにしもあらず。なにしろ、あの希代の大悪党と呼ばれる男なのですから」
「悪党悪党とうるせえな。この下剋上の世で悪党じゃねえやつがいるっていうのか、あーっ？」
上機嫌だったのに、すっかりキレぎみｗｗｗ　信長にビビって一同もうつむき顔。
「希代の悪党を手なずけてこそ真の悪党だ」
しーん。
「明後日には軍を動かす。入洛だ。心してかかれ」
はっ、と、結局は頭を下げて従う連中。
希代の大悪党ねえ。信長の言う通り、おれからすればどいつもこいつも悪党にしか思えんけど。

信長の野望

軍議が終わり、本陣をあとに山を下りていこうとしたけれど、信長のおホモだち（小姓）に呼びとめられる。なんでも信長がおれを呼んでいるとか。

本陣に戻り、信長の寝屋へ。稲葉山城のときは早速入城したというのに、なんで無血開城した観音寺城には入らないのか不思議。

信長は陣羽織と鎧をすでに脱いでいて、羽織一枚に脛当てだけを装着している格好。おれは小さい椅子に腰かけている信長の前に平伏する。

「今回のいくさ、情けねえかぎりだったらしいな」

げっ。何事かと思えば、説教ですか。ウウッ（´；ω；`）

「聞いた話によれば、自分の軍勢から置いていかれ、かと思ったら、いつのまにか三河タヌキの軍勢に紛れこんでいたらしいじゃねえか」

「そ、それは、その」

「息子は馬廻衆の中でも一番の活躍だったというのにな」

ウウッ（´；ω；`）　堪忍してえ。もういじめないでえ。

「もっとも、お前のその体たらくは予想通りだ。お前に槍働きなどは求めてねえ。むしろ、命を落とさずしていくさを終えたことを褒めてやる」

「あ、有難き幸せっ」

「それでだ、牛。お前には言った通り槍働きなど求めてはいねえ。だが、入洛以降は馬車馬のごとく働いてもらう」

ま、まさか、また武田に行けとか言うんじゃ。

「お前は竹中のいくさ狂い、明智のキンカ頭と、なぜだかわからんが、織田にとって重要な駒を揃えてきた。その能力を買ってやる」

どういうことでしょう。

「京、摂津、和泉は尾張美濃とは訳が違う。織田の息がまったくかかっていない土地、さしずめ、畿内の連中は将はおろか、百姓の端

々まで、織田を尾張の田舎武者と嘲るだろう」
　まあね。ゴンロクとか佐久間ヒゲオヤジなんて典型的な田舎で偉そうにしているやつらだもんな。
「我らにとっては未知の土地だ。だから、お前の正体不明のその能力で畿内の将を口説きまわれ」
　えっ？
「無論、一人でとは言わん。明日には明智のキンカ頭が公方を引き連れて観音寺に到着する予定だ。おれはキンカ頭を入洛の先鋒とさせ、サルや村井のジイさんと共に京に駐在させるつもりだ。お前はキンカ頭や村井のジイさんの援護を受けて、畿内を飛びまわれ」
「で、でも、誰を口説きに行くんだか、あっしにはさっぱり」
「そんなことは京に入ってから、キンカ頭にでも聞け」
　なーんか、また、危険そうなお役目。敵地に忍び込み相手を口説きまわるなんて、ぷんぷんするよ、やばい展開の匂いが。
　てか、キンカ頭ってなんのことなんだろ。
「牛」
　と、信長は体を前のめりにさせ、口元に微笑を浮かべる。
「お前がおれの配下になってから十年近くなるが、お前の言う通り、尾張の小倅からこのざまだ」
「そ、そうッスね」
「京に入ったとしても、公方もいるし天子もいる。東に武田上杉、西には三好毛利と邪魔者も多い。それでも、覇王とやらに段々と近づいていっておる」
「そ、そうッスね」
「だが、おれは前々から思い始めた。覇王とはなんぞや」
「え？」
「覇王とは天下を叩き壊す者か、それとも、天下を復興せしめる者か」
　まーた、よくわかんねえことを言い出した。
「お前の時代は民衆主義とかいう世の中だそうだな」

「いや、民主主義です」
「そうだ、民主主義だ。おれはな、お前のその話を聞いてから、そんな世を見たくなった」
　えっ？　何を言っちゃってんの？
「身分も関係なく、民衆に選ばれた者が政治を司る。世襲などという馬鹿げた規律のない世界。無能な者は選ばれない世の中。おれはな、そんな世の中に憧れている」
「いや、でも――」
「おれは戦乱の世を終わらせ、忌々しくもくだらない古い秩序を叩き壊す。幕府も朝廷も神も仏もすべて薙ぎ払う。そうして、作ってみせようではないか、民主主義とやらを」
「で、でも、そうしたら、信長様はどうされるんスか」
「おれはあらかたの仕事をやったら隠遁する」
　な、何を言い出してんだ、このお方は。
「それがおれの夢だ。牛、これはお前だけが知っている内密の話だ。よいな、誰にも言うんではない。言ってしまったら、我が家中の者は自分の身分を剥奪されると思って反旗を翻す。どいつもこいつも古いしきたりに縛られた連中、古いしきたりの中で功名を上げようとする野心家だ。だから、これはお前とおれの二人だけの秘密だ。よいな」
「は、はい」
　信長は自分の夢を語ったことで上機嫌だった。でも、無茶苦茶だ。信長が何を考えているのかよくわからない。ますますわからなくなってきている。天下統一を果たした当の本人が、自分の立場を捨てて引退？　あとのことは民主主義？
　滅茶苦茶だ。でも、信長は本能寺の変で死ぬんだから、どうでもいっか。

あっさり上洛

信長の言った通り、上洛の先鋒部隊は明智十兵衛光秀。

ちなみに十兵衛は信長から俸禄を貰っているものの、信長の配下にはなっていない。あくまでも、足利義昭の配下ということになっている。だから、軍勢を持っていない十兵衛に、信長は千人の兵を与えた。

なんで、先鋒部隊が十兵衛なのかわからなかったけれど、十兵衛と一緒に行動をしてきたという細川ナントカ藤孝とかいう義昭の配下の真面目そうなおっさんが、

「京を良く知り、都の教養も嗜んでいる十兵衛だからこそ、上総介殿は先鋒に選んだのでしょう」

ふーん。

十兵衛の軍勢に沓掛勢も加わる。これからは十兵衛と一緒に動けという指示だから。

京の都までの道中、十兵衛はしきりに信長への恩を口にした。

「入洛の先鋒とは、拙者はこの上ない果報者です。織田の将校を差し置いて、拙者を選んでくださるとは」

ちょっと涙ぐんでもいる。

「ここまでこぎ着けるまで、ずいぶんと長い道のりでした」

十兵衛はなんでも、美濃を出て以来、京、越前、近江と各地を転々とし、行く先々でひどい扱いを受けてきたみたい。越前では朝倉の重臣に大した仕事もしないで俸禄を食んでいるごく潰しなんていじめられたし、義昭を担ぐための工作で六角を訪れたさいも門前払い。

そのくせ、武田上杉を和睦させようなんて企んでいたのかよって話だけどさ。

「これもひとえに簗田殿のおかげ。あのとき、石川小四郎の娘に諭されていなかったら、拙者は今頃、どうなっていたかもわかりませ

ん」
あんまり思い出したくないけど。
「簗田殿」
馬を並べながらのまま十兵衛は言う。
「かつて、簗田殿の屋敷で顔を合わせた嫡男殿は、先ごろのいくさで大いに活躍されたそうな」
「まあ、そうみたいッスね」
「齢十六だそうで」
「ええ。まだまだ小僧です。生意気で仕方ない」
「実は拙者には同じぐらいの齢の娘がおります」
「へえ」
「左衛門太郎殿に貰っていただけないでしょうか」
「えっ？」
「簗田殿にはいろいろと面倒を見ていただきました。今後も親しくさせていただきたい。是非ともこの明智十兵衛を簗田殿の縁戚に加えていただきたい。それに左衛門太郎殿は文武に長けた若武者。一人の父親としても、左衛門太郎殿のような男に娘を嫁がせたい」
な、何を唐突に言ってやがんだ。おれでさえこの前に結婚したばっかりだっていうのに、太郎に娘を嫁がせたいだと。
いや、それどころの話じゃない。太郎を十兵衛の娘と結婚させてしまったら、後々とんでもないことになる。明智十兵衛光秀は本能寺の変で謀反を起こし、その後、サルに滅ぼされるんだ。
ということは、おれと太郎の親子は本能寺の変の巻添えを食らわされる。
「前々から考えていたのですが、いかがでしょう」
「いや、ちょっと、急に言われても」
「左様ですな。申し訳ございません。ただ、是非とも考慮していただきたく存じます」
ぬう。考えるまでもなく、絶対に駄目だ。でも、どうやって断ればいいのかわかんねえ。むしろ、立場的に断っちゃ駄目なのかもし

れねえ。おれは一介の田舎城主、十兵衛は足利義昭の直臣で、上洛軍の先鋒の大役を任された人物。立場的に上の家から嫁を貰ってくれと言われて、ごめんなさいと言えるような世の中じゃねえ。

参ったな。本気で。

で、悩みの種を抱えたまま、京に到着。至って、何もなし。松永トラップもなし。せいぜい、京の民衆たちが野次馬気分で集まっている程度。

十兵衛は兵に命じて、京の町のあちこちに、織田軍は強盗とかレイプとかありとあらゆる乱暴をするなという旨の札を立てさせた。信長の命令らしいけど。

やがて、信長が到着。信長は東寺というところに入り、足利義昭を清水寺に入れた。

おれは十兵衛と共にするということなので、清水寺の近くの寺に十兵衛と同じ屋根の下で寝泊まりすることに。

翌日、何をすればいいのかわからないから、とりあえず、十兵衛のところに挨拶をしに行くと、

「松永弾正忠の屋敷に行きましょう」

ということで、十兵衛とその付き人と共に市中の松永弾正の屋敷へ。

信長に降伏を申し入れてきた松永弾正の真意を確かめ、その後、信長のもとへ引っ立てるということらしい。

希代の大悪党と呼ばれるやつに会うと思うと、ちょっと、緊張。きっと、ゼネコン汚職の政治家みたいなツラをしているんだろう。でも、十兵衛がいるし、大丈夫だろ。

そういえば、シロジロが騙された商人も松永弾正の御用商人だとか言っていたな。

松永弾正の屋敷はかなりの大豪邸。まるで老舗の旅館。門番に織田上総介の使いだと十兵衛が言うと、あっさりと開門。中の庭も広い。綺麗に刈り込まれた木とか変な岩とかが置かれてあって、なるほどな、今の今まで権力を握っていたやつらしい屋敷。

でも、兵隊がいないのがちょっと不思議。
「上総介殿に降伏を示すため、軍勢はすべて大和の国に戻したのでしょう」
で、庭を歩いて行ったところ、大きな玄関の前で何人かが突っ立っていて、おれと十兵衛の姿を確認するなり、その場に平伏。というより、土下座。
「お待ちしておりました。松永弾正忠久秀にございます」
土下座連中の一人がそう言った。むむ。希代の大悪党らしく、強いやつにはこびへつらう姿勢に溢れている。まるで骨川スネ夫だ。
「拙者は足利幕臣、明智十兵衛光秀に候。こちらは織田上総介の家臣、簗田牛太郎政綱。我らはただの使いにすぎん。弾正忠、そのような真似はよせ」
十兵衛がぴしゃりと言うと、松永弾正はゆっくりと顔を上げた。
ん？　なんか、石原軍団にいそうな渋いおっさんだな。想像していたゼネコン政治家とは風貌が違う。

松永弾正は口数の少ない男だった。

「上総介は貴公を迎え入れたいと申しておる。公方様がどうおっしゃるかはまだわからんがな」

と、十兵衛が言っても、松永弾正は再びゆっくりと頭を下げるだけ。

十兵衛がちらりとおれに視線を向けてくる。え？　何？

「弾正忠。拙者に頭を下げても何も始まらん。上総介にその心中を申せ」

「恐れながら」

と、弾正は平伏したまま澄んだ声で言った。

「貴公の来訪は公方様のおはからいでしょうか、それとも織田上総介殿のおはからいでしょうか」

「なんだと？」

にわかに眉尻を釣り上げた十兵衛。

「お主は何が言いたいのだ」

「どちらのおはからいなのか、お訊ねしただけの所存でございます」

十兵衛の目がみるみるうちに厳しくなっていく。おれには何なのかわからない。でも、確かに、こっちは足利義昭の使いなのか信長の使いなのか、どっちかはっきりしない。

「どちらもだ。拙者は幕臣、隣にいる者は上総介の家臣。どちらもということだ」

「しかし、拙者が下げる頭は一つしかありませぬ」

「何が言いたいのだ！」

「頭は一つだけということでございます」

十兵衛が歯ぎしり。

「とにかく、東寺に参れ。お主は上総介に降伏を申し入れたはずだ。ならば、上総介に頭を下げい」

「ということは、公方様には頭を下げずともよろしいということですな」

十兵衛は右手で刀の鞘をぐっと握った。わなわなと震えながら、弾正を睨みつけている。弾正はけろっと平伏。

「屁理屈ばかり並べ立ておって」

十兵衛は太刀をぐいっと腰帯に押し込めた。

「簗田殿、行きましょう。こやつの処置は上総介殿に任せましょう」

「お待ちくだされ」

「なんだ！」

「拙者、上総介殿の御使者と面会する予定があります」

「おのれえっつ！」

と、ついに太刀を抜いてしまった十兵衛。すると、弾正の両隣で平伏していたやつも素早く立ち上がり、抜刀。弾正だけは平伏したまま。

「ちょっ、十兵衛殿」

と、あわてて止めるおれ。さすがにまずいだろ。おれまでとばっちりを受けそうだし。

吐息を荒くしながら、おれに目を向けてくる十兵衛。唇を噛みしめながら、太刀を鞘に戻す。

「弾正忠。この件、しっかと公方様にお伝えするからな。覚悟しておけ」

「仰せの通りに」

「簗田殿、拙者は先に東寺に参るゆえ、弾正忠のくだらぬ御託を聞いておいてくだされ」

い、いや、おれ一人でこいつの相手を？

てか、十兵衛は頭に血が昇ってしまっているのか、さっさと門のほうに行ってしまった。

取り残されてしまったおれ。ど、どうしよう。

「それでは、御使者を居間まで案内して差し上げなさい」

と、弾正は腰を上げ、玄関の中にすうっと消えて行く。

やばい。十兵衛に頼るだけの予定だったのに、希代の大悪党と呼ばれるやつとサシで話し合う羽目に。

まさか、弾正のやつ、おれがてんで駄目なやつだっていうのを一目で見抜いて、後々、自分に有利な証拠を残そうと、最初からおれとマンツーマンで話し合うつもりだったんじゃ。

そもそも、弾正が屁理屈を並べたように、信長が弾正を許すのか、義昭が弾正を許すのか、流れがまったく見えねえ。そもそも、信長と義昭の関係ってどういうふうになっているのかもわかんねえし。

実際は信長が上洛の理由に義昭を担ぎ上げたってことだけど、建前としてはどういう関係なのってことだよ。信長は義昭の家来になっているのか、それとも、信長が義昭を助けてあげただけのことになっているのか、どうなのよ、そこのところ。

そこを弾正に突っ込まれたら、おれはどうしていいかわからん。なんて、一人、考えていたって、何の解決にもならず、案内されるがままに居間に通されたおれ。

居間は日当たりのいい畳敷きの部屋で、鳥の絵が描いてある掛け軸や生け花が床の間に飾られてある。窓の障子も埃一つない。むう。大悪党と呼ばれるわりになかなか風雅のある部屋。

「お待たせいたしました」

と、部屋に入って来た弾正、いつのまにか礼服に着替えていて、おれは目をぱちくり。両手に木箱を抱えていて、おれの前にゆるりと座ると、その木箱の中から変な竹筒を出してきた。

「こちらの茶器を、拙者の首と引き換えに上総介殿に献上しようかと思っておるのです」

おいおい。こんな竹筒を弾正の首と引き換えにだと。おれをナメているんだな。この竹筒が茶器だなんてよ。さゆりんやあずにゃんが持っていた竹筒と一緒じゃねえかよ。

「いかがと思われますか」

鳶色の瞳でじいっとおれを見つめてくる弾正。ふざけやがって。

そういや、シロジロがこいつの御用商人に騙されたんだ。この野

郎。砂糖と偽って鼻クソを掴ませようっていうのと同じ腹積もりでいるんだな。

「ふざけるな！　信長様を見くびっているのか、松永弾正！」

と、おれが片膝を立てて迫り寄ると、弾正は今までの涼しげな態度とは打って変わって、両手を前に出して、あわてて言う。

「い、いえ。み、見くびるなどとんでもない。上総介殿は茶の湯を嗜むとお聞きしたので、我が家の家宝を」

「これがお前の家宝だと？　おれはな、お前の詐欺師ぶりを良く知っているんだぞ。お前の御用商人がな、田舎者の商人に砂糖と偽って鼻クソを掴ませ、五百貫の大金をせしめたことを知っているんだぞ。しかも、その商人はおれの家来だからな！」

「そ、そんな馬鹿な。せ、拙者は確かに悪党と呼ばれていることぐらい承知しておりますが、そのようなこざかしい真似をさせた覚えはございません」

「お前に覚えがなくても、おれには覚えがあるんだ。いいか。信長様のところに連れていくことぐらい簡単だが、まず初めにおれを信用させてからだ、信長様に許しをお願いするのはな！」

弾正、おれの言葉に唇をぎゅうっと絞る。くっくっ。先手必勝、騙される前に押し出しちまえば、こっちのもんだ。そもそも、こいつは信長に命乞いする立場なんだから、何もビビらなくたっていいんだ。おれのほうが偉いんだ。

ツクモ・ナス

おれの押し出しにビビって、弾正は一時退散。このまま居間で待っていてくれとのこと。

何が希代の大悪党だよ。どいつもこいつも名前だけに尻ごみしているだけじゃねえか。いざ、会ってみれば、大悪党どころか、おれぐらいのやつに見透かされる詐欺師程度の小者じゃねえか。

サルや武田信玄のほうがよっぽど大悪党だぜ。

で、しばらくすると、松永弾正が再びやって来た。今度は大きい木箱を両手に抱えている。ふむふむ。今度はちゃんとしたものを持ってきたんだな。

ただ、ちょっとばかり、弾正はしかめっ面。フン。出し惜しみするからだろ。どうせ、だまくらかした金でがっぽり儲けているんだろうから、最初からさっさと出せよ。

「簗田殿、これで拙者の誠意を汲んでいただかなければ、拙者は腹を切るしかございません」

と、言って、弾正は木箱の横板をすうっと上げた。

ぐえええっ。

おれは思わず後ずさりした。だって、だって、木箱の中に首が入っているんだもん。しかも、白目を剥いているし、舌がべろーんって出ているし、なんなんだよ、このS級ホラー劇場は。

「この者は先ほど申された拙者の御用商人でございます。問いただしたところ、確かに申された通りの悪行を働かしたようなので、斬首と処しました」

そして、弾正が廊下に向かって、おい、と、呼ぶと、家来だか小姓だかの男二人がそれぞれ袋と木箱を抱えて入ってくる。

袋と木箱を置くと、男二人は部屋を出て行き、弾正はまず、袋のほうをずずっと畳の上を滑らせながらおれに差し出してくる。

「こちらには五百貫入っております。存ぜぬところでの出来事だっ

たとはいえ、拙者の配下の者がやったこと、この五百貫は代わりにお返しさせていただきます」

い、いや、でも。

「それと上総介殿にはこちらの茶器を」

木箱のほうから変な焦げ茶の壺を出してくる。

「この九十九髪茄子を上総介殿に献上いたします」

ツクモ・ナスだと？　壺なのにナス？　ふざけやがって。いや、でも、いっかな。弾正の目が心なしか血走っているような気もするし。それに、生首から血が畳の上に流れてきているし。

「わ、わかりました。信長様のもとへ行きましょう」

「有難き幸せ」

で、従者に門まで五百貫入った袋を持ってきてもらい、クリツナのケツの上に縛り付けてもらう。

「なんだ、これは」

と、ねじり鉢巻きが不思議そうな顔。

「いい。気にするな」

これはシロジロに渡さずにおれのものにしてしまおう。おれのものはおれのもの、配下の者はおれのもの。

で、松永弾正以下その家来とともに東寺へ。

「簗田殿はずいぶんと立派な馬をお持ちなのですな」

弾正がクリツナをまじまじと眺める。お世辞ではなさそうな感じ。まあ、おれには乗りこなせないけどね。宝の持ち腐れってやつだな。

「簗田殿は茶器だけではなく馬にも目が利くとは。正直、上総介殿の配下に貴公ほどの御仁がおられるとは思いもせんでした」

何を言っているのかな？　おれがいつ茶器の目利きをしたっけ。

「正直、上総介殿の配下は田舎武者に寄せ集め程度の家臣団かと侮っておりました。実際、明智十兵衛などという浪人上がりの幕臣気取りを入洛の先鋒に任ずるとは耳を疑いましたが」

なんか、ずいぶんとべらべら喋るな。もしかして、また、なんか

騙そうとしているんじゃないだろうな。
「簗田殿も先鋒部隊だったそうですな」
「もう、よしましょう。それより、自分の心配をしたらどうですか。まだ、信長様の許しを得たわけではありませんよ」
すると、弾正はにやっと笑った。初めて悪党らしい笑みを見せてきた。
「恐ろしい人だ。九十九髪茄子まで出させておいて」
何を言ってんだか。むしろ、そのふざけた壺こそ、信長の怒りに触れちゃうんじゃないのか。
で、東寺に到着。奥間の信長の前に松永弾正を差し出した。
信長は、先に十兵衛から屁理屈を並べていたことを聞いていたらしいんだけど、怒るどころか、弾正の顔を見るなり笑い飛ばした。
「お前はずいぶんと意地っ張りのようじゃねえか」
「意地ではありませぬ。拙者は公方様に仕えているのではなく、征夷大将軍、義栄様に仕えております。義栄様御存命の中で、将軍と偽る者に幕臣として仕えることはできませぬ」
「抜かせ、この悪党が」
と、信長の表情が豹変。
「だが、おれは坊主だろうが悪党だろうが、使えるやつは使い、使えぬやつはいらぬ。悪党松永、もう一度、問う。お前は誰の幕臣だ」
例の甲高い声を鳴らし上げ、ぎろりと弾正を睨み下ろす信長。
弾正はしばらくの間、平伏したまま黙っていたけど、頭をさらに低くして言った。
「足利幕臣でございます」
「ならよい。義昭殿に仕えい」
「ははっ。尽きましては、足利幕臣として、足利家と織田家、今後の友好のために、上総介殿に献上品がございます」
弾正は家臣に目配せすると、家臣が弾正と信長の間にささっと例の木箱を置き、横板をすうっと上げる。
「天下の名器、九十九髪茄子でございます」

「なんだと?」
弾正の家臣から壺を手渡され、まじまじと眺める信長。
「なるほどな」
フッ、と、鼻で笑った信長。
「抜け目ない悪党め」
うーん。御満悦の信長。何がなんだか、あっしにはよくわかりません。

牛太郎の企み

「九十九髪茄子を！？」

外にいた十兵衛に中での出来事を知らせると、十兵衛は目を剥き出しにして驚いた。

「なんと……、あの名器を……。あの悪党めが持っているという噂はありましたが、しかし、なんとこざかしい真似を」

あ、あれって、そんなにすごい物なのかな。そういえば、これを出してきたときの弾正の目も血走っていたしな。あいつにとって相当の宝物だったのかな。ちょっと、やべえ。

とにかく、ツクモ・ナスがそんなにすごい物なのか十兵衛に訊ねてみると、それを聞いておれはますます怖くなった。

ツクモ・ナスは幕府の三代目の将軍、足利義満が宝物にしていた超有名な茶入れみたいで、足利将軍家に代々伝わってきたものらしいけど、いつのころか、流出してしまい、それが流れに流れて松永弾正の手に入ったというわけ。

松永弾正にとっても、命よりも手放したくない茶器なんだろうけど、十兵衛の言うところによると、それを足利幕臣として信長に献上したということは、信長が次の統治者だということを弾正が暗に含めたということ。

なので、足利幕府の復興にむきになってきた十兵衛は怒り心頭。

「幕臣などにさせてたまりましょうか。公方様が許すわけがござらぬ」

むう。そろそろ本能寺の変ですかね。でも、まだ早いよね、きっと。

ぷりぷりする十兵衛と共に東寺を出るおれ。すると、後ろから声が。

「父上！」

振り返ってみるまでもなく、太郎。健気に走り寄ってきて、笑顔。

やっぱり、箕作城で見かけたときとは顔つきが違うね。あんな鬼みたいな顔じゃなくて、まだまだ子供。
「父上がこちらに来られると耳にしたので、休暇を頂きました」
「いいよ、別に。しっかり訓練していろよ」
「左衛門太郎殿、お久しぶりですね」
「あっ、明智様。お久しぶりでございます」
十兵衛にこにこ。ぷりぷりしていた様子も出さずに言う。
「先ごろのいくさ、獅子奮迅の活躍だったそうではないですか」
「そうでもありません。いくつか手傷を負ってしまいました。大したものではありませんが、拙者もまだまだ未熟です」
「ふむ」
と、十兵衛は父親のような笑顔でうなずく。むむ。そういや、娘を太郎の嫁にしたいとか言っていやがったんだ。まさか、十兵衛の野郎、すっかりその気でいるのか。
「簗田殿、親子水入らず、市中でも回ってきなされ。拙者は先に清水寺に戻っておりますから」
それでは、と、頭を軽く下げると、東寺の門の外へと出て行った。
十兵衛の後姿をぼんやりと眺めていた太郎。
「何をぼけっとしているんだよ」
「いやあ、やはり十兵衛様は上品なお方だなと思いまして、つい」
上品なんかじゃねえよ。ついさっき、松永弾正に刀を抜いていたんだぞ。まったく。外見だけで人を判断しちゃっているから、まだまだ子供なんだよ。
しかし、無邪気なもんだよ、クソッ。おれは松永弾正に余計な押し出しをかましちゃって、もしかしたらあいつに恨まれているかもしれないし、それに十兵衛が娘を嫁がせたいって言い出すし、ここから更に畿内の武将たちを説得しなくちゃいけないっていうのにさ。
頭が痛いぜ、まったく。
「父上、栗之介も来ているんでしょう。どうせなら、三人で市中見物に行きましょうよ」

ん？　ちょっと待てよ。今、閃いたぞ。十兵衛の娘を太郎に嫁がせないためには、太郎を誰かと結婚させちまえばいいんだ。

「やあ、栗之介。久しぶりですね」

でも、太郎と誰を結婚させればいいんだ。この前、おれが結婚したばっかりだから、誰かの娘を貰うわけにもいかないし、だとすると、身近なあいりんしか思い浮かばないけど、あいりんはただの女中。

女中と結婚するから、十兵衛の娘はごめんなさいなんて言えるはずねえ。

「ああ、若君じゃねえか。どうだった、クロの乗り心地は」

ただの女中と十兵衛の娘じゃ、天秤にもかけることがおこがましいぐらい。

じゃあ、どうすればいいんだよ。やだよ、本能寺の変の巻添えを食らわされるなんて。

「いやあ、最初はどうなることかと思ったけれど、クロも拙者を理解してくれたようで、箕作城攻めではずいぶんと助けられましたよ」

だったら、あいりんを一度どっかの養子にさせて、太郎と結婚させるしかねえんだけど、あいりんなんかを養子にしてくれるやつなんているかよ。そもそも、おれの息子の結婚にそこまで力を貸してくれるやつなんているのかよ。

「それにしても、弟とは違って、クリツナはおとなしいなあ」

おれと仲がいいやつなんてのは、サルかマタザぐらいしかいねえ。でも、あいつらじゃ養子を取るには若すぎるし、義昭直臣の十兵衛とは比べ物にならないぐらいの小者。

「丹羽様にも礼を言わないといけませんね。こんな良い馬を二頭も譲ってくれたのですから」

ハッ！

そうだ、マリオだ。マリオにあいりんの養父になってもらおう。そうだそうだ。あいつなら、話に乗るかもしれない。あいりんの養父になって、あいりんが太郎と結婚すれば、形状、マリオは太郎の

義理の父親だ。そうだそうだ。あいつのことだ、喜んで太郎の義父になるはずだ。だって、おおっぴらに太郎の父親だって言えるんだからな。義理の、だけど。

マリオだったら織田の中堅幹部。十兵衛もそうやすやすと文句を言ってこないはずだ。

「父上、何をぶつぶつ言っているんですか。行きましょう」

あとはこの馬鹿があいりんとの結婚を承諾するかだな。しかも、あいりんに惚れているってことにしなきゃなんねえ。むう。それが一番の難所だ。なにしろ、太郎はカツゾウ君とおホモだちかもしれないから……。

あのな、太郎、そのだな、あのだな

「うん、おいしい。なんとも言えない味わいですが、おいしいです。さすが京の都ですね。こんな珍しい団子は生まれて初めてですよ」

ま、岐阜に帰ればシロジロが作ってくれるんだけど。

さて、おれも久々のみたらし団子を。

もぐもぐ。

むむっ！　う、うまい！　そして、なんて、懐かしいことだろう、この味。この食感。もちもちとした団子に、甘じょっぱいみたらしが口の中で溶けていき絡み合う、口の中のハーモニー。

「どうぞ、栗之介も一つ食べてみなされ」

と、太郎に一串もらったねじり鉢巻き。みたらしをまじまじと眺めながらしかめっ面。

「どうしたのです、おいしいですよ」

「いや、俺はいいや」

と、太郎に突き返す栗之介。

「変な物はあんまり食いたくねえ」

「食わず嫌いだなあ」

「よせよせ。どうせ、鉢巻きのことだから、うええ、まじい、ぺっぺっ、とかやるに違いない」

「そんなことありませんよ」

「いや、旦那の言う通りだ。おれは変なものは食いたくはねえ」

「勿体ない。じゃあ、拙者がいただきますよ」

と、太郎が勝手に二串目突入。

「おい、太郎。一個、おれのぶんを残しとけよ」

「わかっていますよ」

「いや、やっぱり二個だ」

「えー？　拙者だって食べたいですよ」

駄々をこねる太郎の手から串を奪い取り、そそくさと食べちゃう

おれ。
　久々のシラーッとした目。
　って、じゃれ合っている場合じゃない。太郎をあいりんと結婚させる手はずを整えなくちゃ。
「すいませーん。みたらしをもう一本くださーい」
「おい、鉢巻き。おれは太郎と大事な話をしなくちゃいけないから、クリツナを連れて先に帰ってろ」
「大事な話？　それは十兵衛殿のむす――」
「いいから帰れっ！」
　ふう。あの馬鹿、こっそり耳を立てていやがったんだな。素知らぬふりをしておいて、ちゃっかり聞いていやがるんだからな。危ない危ない。
「なんですか。十兵衛様がどうかされたんですか」
「いや、十兵衛殿がむすっとされていたからな。その、あの、今日、松永弾正にからかわれてな、十兵衛殿が」
「松永弾正忠が十兵衛様を？　どうしてでしょう？」
「いろいろあるんだ。大人の事情ってやつだ。馬小僧のお前にはどうでもいい話だ」
「なんですか、馬小僧って。ずいぶんな物言いではありませんか」
「はい、お客様ぁ。みたらし団子、お持ちしましたよぉ」
　と、茶屋の娘が団子を持ってきてくれたので、話が折れた。危ない危ない。今日はあんまり太郎と喧嘩しないようにしないとな。
「父上は、もう団子はよろしいのですか」
「ああ、いいよいいよ。太郎が食べなさい」
　と、おれは良きパパ。
「それじゃ、お言葉に甘えて」
　団子を口に放り込む太郎。もぐもぐして、目尻を柔らかくする。
ふむ。団子パワーで太郎の機嫌も良さそうだ。
「それでな、太郎、大事な話というのはだな」
「なんでしょう。どうせ大した話ではないと思いますが」

と、もぐもぐしながらさらりと言う太郎。むかっとくるおれ。いや、駄目だ駄目だ。今日だけは喧嘩しちゃいかん。

「あのな、太郎、そのだな、あのだな」

おれがなかなか切り出せないでいると、じろりと目を向けてきた太郎。

「どうせ、母上と喧嘩をしたから、拙者に仲を取り持ってほしいということなんでしょう」

「違う。そんなみみっちいことじゃない」

「じゃあ、なんです」

「その、あの、あれだよな、結婚っていいもんだよ、太郎」

得意のシラーッとした目。

「なんなんです。何が言いたいのかさっぱりわかりません。拙者も婚姻せよとのことですか」

「そ、そうだ」

「どなたとです。そういう話が父上に来ているのですか」

「いや、そうじゃないんだけど」

「なら、拙者にはまだ早い話です。なにしろ、拙者は馬廻衆としてこの前に初陣したばかりの未熟者。嫁を娶るなど、拙者のような小僧には早い話です。だいたい、なんで急にそんなことを言い出したのです」

や、やばい。断固拒否の姿勢。しかも、逆質問されて、答えるに答えられないおれ。

「いや、その、あのな、どうやら、あいりんがお前に惚れているらしいんだ」

「えっ？」

えっ？

なに、その反応。一瞬硬直したよね。今、硬直したよね＾＾　もしかして、太郎もあいりんのことが……＾＾　こ、これは意外な展開だが、ナイスな展開。

「そ、それでは、父上が言いたいのは、拙者にあいり殿を娶れということなのですか」
おれがこくりと頷くと、太郎は串を持ったまま神妙な顔をして視線を路上に伏せた。
「それはしかし……」
「お前がいいんであれば、おれはあいりんを誰かの養女にしてもらうつもりだ」
「まことですかっ？」
目を大きくしてきた太郎。
「まことだ」
「で、でも、だって、父上こそ、それでよろしいのかと」
「何が」
「だって、父上はあいり殿を好いておられるのでは」
「馬鹿者め。あいりんはおれにとってただの女中。おれは梓ひとすじだ」
「本当でしょうか」
と、なぜかここでシラーッとした目。ドキッ。
いやいや、おれの浮気なんて太郎が知るわけない。
「本当だ。そんなことよりお前はどうなんだってことだよ。いいんだな？　あいりんでいいんだよな？　もう、ここまで来たら嫌だとは言わせないからな？」
おれが詰め寄ると、唇を押し込める太郎。なんなんだよ、もう。
「何も言わないってことはいいんだな？　そういうことで話を進めるからな？」
「かしこまりました」
しゃぁああっつ！！　これで本能寺の変の巻添えは回避！
あとはマリオに話をするだけだが、あいつのことだから簡単だろ。

一番の難敵はこのガキだったからな。よしよし。
「やはり知っておられたのですか、父上は。拙者とあいり殿の間柄を」
ん？
「拙者はてっきり、父上があいり殿を好いておられると思っていたのですが、最初から父上の預かり知るところだったのですね」
悟ったようなませた笑みを浮かべる太郎だけど、何のことを言っているのかさっぱりわからないんですが。
太郎は腰かけから立ち上がると、おれの前に立ち、頭を下げてきた。
「父上、有難うございます」
「な、なんの風の吹きまわしだよ」
「だって、父上が拙者とあいり殿の間柄を認めてくださっていたなんて、拙者もまだまだ未熟だったと」
あ、間柄って何？　そ、それってどういうことなんだよ？
ま、まさか、あのとき……。おれが甲斐に行っていた間……。
「それで、あいり殿をどなた様の養女にしていただくおつもりなんですか？」
「ちょ、ちょっと待て。まさか、お前、すでにあいりんと、やっ、いや、ま、まく、枕を一つに、し、し、した、のか？」
「そんなことはしておりません。しておりませんが」
「してないが、なんだよ」
「お互いに好いております／／」
氏ね！　ふざけんな！　氏ね！
いや、落ち着け、牛太郎。そりゃそうだ。十代の太郎とあいりんが一つ屋根の下で毎日暮らしていれば、恋心が芽生えても仕方ないこと。仕方ない。
「で、い、いつからだ。いつからなんだ。その、間柄ってなったのは」
「そ、それは……」

「いつだよ！」
「あ、あの、墨俣築城が終わったあとぐらいから。いやっ、知り合ったのはそのぐらいのときからっていうことで」
（　。Д。）ハア？
（。Д。）ハア？？
（　。Д。）ハァ？　（　。Д。）ハァ？　（　。Д。）ハァー？
「もしかしたら、父上はそこまで知らなかったかもしれませんが……」
おれが呆気に取られていたせいか、太郎の表情は一転してまずそうな顔。
だって、おかしいだろ。なんで、墨俣築城の直後のときにあいりんと太郎が知り合いなんだよ。
おれがあいりんと会ったのは岐阜に来てからだぞ。あいりんは明智庄の出身だけど、明智庄の女子供が沓掛城に移ってきたとき、おれと太郎は、チヨタンに会っただけで、すぐさま墨俣に行っちゃったから、おれも太郎もあいりんとはそのとき会っていないぞ。
で、墨俣築城のあとは、おれは清州に行き、半兵衛の仙人の館でニート生活をして、その冬に太郎が追いかけてきて……。
まさか、こいつ、おれが菩提山にいる間、沓掛城に戻っていたりしたのか？　それでそのときあいりんと知り合ったのか？
おれは腰を上げて清水寺方面に向かうことにした。
「ち、父上、どちらに行くんですか？」
口もききたくない。息子を無視して歩いて行くおれ。
「父上っ、あいり殿の養父は誰にするつもりなんですかっ？」
「丹羽五郎左衛門だっ！　お前の顔なんか見たくもないっ！　どっか行けっ！」
くそう。くそう。くそう！
読めたぞ。どうして、チヨタンがあいりんをおれのところに押し付けてきたか、読めたぞ。
チヨタンのところは貧乏なことは貧乏なんだが、すべての理由は

それじゃない。きっと、あのアマ、でしゃばって、太郎と好き同士のあいりんをくっつけたがって、おれに押し付けてきやがったんだ。

「父上っ」

しかし、おれの手がつけられることを太郎は恐れて、あのとき大反対したんだ。何もしないようにくどいくらい迫って来たのも、あいりんに触れられたくなかったからだ。

そうだ。あいりんが簗田家に馴染むのがやたら早かったのもそういうことだ。

ということは、ということは、おれは玉乗りピエロだったわけだ！　クソッ！

チクショウ。そういうことなら、結婚なんかさせたくねえ。でも、でも、それしか十兵衛の魔の手から逃れられるすべがないんだ。ウウッ。チクショウ……。

「お客様っ、お駄賃を頂いておりませぬ」

えっ？

あ、おれじゃなかったか。

どっかの茶屋から出てきたマッチョなやつと、そいつの着物の裾を引っ張る店の主人。

「駄賃だと？　おれから金を取ろうって言うのかあ？　いいかあ？おれは織田上総介の軍の者ぞ。お前らを三好松永の悪党から救ってやった織田の兵から駄賃を取ろうというのかあ？」

うわあ。めっちゃ田舎侍もろ出しじゃん。そういう乱暴をしちゃいけないとも言われているのにさ。

でも、強そうだから無視しよ。

「お主、何をしておる！」

あ、太郎の馬鹿。いつのまに。

「なんだ、テメーは？」

「馬廻衆簗田左衛門太郎だ！」

「あっ、いやっ」

「名を名乗れ！」

「い、いやっ」
マッチョが一瞬でビビるほど、太郎の名前って知れ渡っているのか。クソッ。
「名を名乗れぬような者が織田の名をかたり、おやかた様のお顔に泥を塗るとは何事だ！　乱暴狼藉禁令の下知を知っていてもなおそのような振る舞いか！」
「い、いや、こ、これには深い理由が」
「おやかた様に恥を欠かせる理由などあるかっ！」
と、太郎、渾身の右ストレート。更に左ボディ。フックフックフック。あわわ。まるで、マリオがマタザをボコッたときのような光景。
そして、地面に這いつくばって呻くマッチョ。体を震わせる茶屋の主人に代金を立て替えた太郎は、
「父上、こやつをおやかた様の前に引きずり出します。申し訳ありませんが、またお会いしましょう」
「う、うん。そうだね」
そそくさとその場を去ったおれ。そうだな。十兵衛の魔の手から逃れられるんだから、太郎とあいりんの門出を気持ちよく送りださないとな。うん。

君をのせて（1）（前書き）

ちょっとだけ昔に戻って、番外編で～す。

君をのせて（1）

竹中半兵衛のもとへ行って来ると言い残し、主人が墨俣城を出てから三ヶ月以上。

墨俣守備隊への炊き出し、城内の清掃、ときたま槍術の鍛錬と、あわただしい日々を送っていたものの、主人は戻ってこない、どころか、何の音沙汰も聞かなくなってしまった。

太郎は心細い。心配だとか、不安よりも、心細い。

父は生まれたときからいない。母は五年前に死んでいる。

天涯孤独。

そんな中で唯一、身内とも言えるのが主人、簗田牛太郎政綱である。

なんのことはない、ただの凡将である。むしろ、愚将だ。内政のいっさいは目付役に任せてしまい、考えていることといえば、その日のメシのことか、女のことだけ。

主人のしようには呆れかえる毎日であった。

しかし、これだけ顔を合わせていない、これだけ音沙汰を聞かないとなると、心のどこかをチクチクと刺される思いである。

また再び、一人になってしまうのか。太郎は思う。いや、母上が亡くなってしまった今、殿がいなくなってしまえば、本当の本当に一人になってしまう。

一人は心細い。

「どうしたんだい、太郎」

小一郎だった。

「箒を持ったまま、突っ立ってしまって」

墨俣守備隊長木下藤吉郎の弟であるが、この男は雑兵の下々にまで偉ぶった態度を取らず、雑用係の太郎にまで弟を見るような優しい眼差しを注いでくれる。

「稽古でもするかい？」

「いや、まだ、掃除がおわっておりませんので」
と、言いながらも太郎はうつむく。
「牛殿のことかい」
「はい」
「大丈夫さ、死んじゃいやしない」
そう言って、小一郎は太郎の肩にぽんと右手を置いた。
「口さがない連中は死んだ死んだなんて言っているけど、おれはあの方がそう簡単に死ぬとは思わないよ」
「どうしてそう思われるんですか？」
「愉快な人だからさ」
小一郎は満面の笑顔だったが、太郎には意味がわからない。
「愉快な人をそう簡単に死なせてしまったら、世知辛い世になってしまうだろ。おれはそう思う」
「そんなに都合のいいものなのでしょうか」
「ああ。都合がいいものさ。おれの兄さんだってそうさ。どれだけ危ない思いをしたって、兄さんは死なない。あれだけ都合のいい人なんていないと思わないか？」
まあ、そう言われてみると納得できなくもない。
「牛殿もきっとそうさ」
太郎は視線を落とす。そうあってはほしいが、果たして主人は藤吉郎ほどの人間であろうか。
そもそも、なぜ、美濃攻めの調略に、我が主人なのだ、と思う。何もできない人間じゃないか。桶狭間の勲功だって、何かの偶然が重なり合っただけに違いない。なにしろ、勲功一番の男が、沓掛城で怠惰な生活を送っていたことがおかしい。
しかし、まったくの駄目な主人でも、太郎には身を寄せる場所が簗田牛太郎一人しかいない。
「太郎、あんまり考え込むのはよしな。大丈夫さ、清州に一度戻っていたという話もあったじゃないか」
そうらしい。竹中半兵衛のいる菩提山に向かったあとに、一度、

主人は清州の信長のもとに参上しているらしい。
その後、どこかに消えた。
美濃攻めの調略を命じられたそうだが、消息はそこからぱたりと聞かなくなった。
美濃攻めの調略に出かけたとあれば、清州から必ず墨俣に立ち寄るはずだ。だから、死んでしまった、という噂が、墨俣に駐屯している沓掛勢に流れている。
だが、希望的観測としてではあれ、主人は小一郎の言うように、あっさりと死んでしまうような男ではないような気もする。
もしかしたら、とんでもない馬鹿をやらかしているかもしれない。例えば、野盗の一味になってしまっていたり、例えば、道中見染めた女に入り浸ってしまっていたり。
主人なら有り得る話だ。
ならば、と思い、太郎は竹箒を持つ手を動かし始めた。自ら探しに行こうか。もしも、どこかに引きこもってしまっているんであれば、自分の手で引きずり出さなければ。

君をのせて（2）

夜、太郎は陣笠と蓑を纏い、密かに墨俣城を出た。

子供の自分が城を出るなど、反対されるに決まっている。大ごとにもしたくない。これは主人と自分だけの問題にしたい。

清州に向かう。何かしらの手掛かりがあるだろう。

夜道とはいえ、太郎は進んだ。月明かりが平野を照らしている。それに、木曽川と墨俣城の間は、例の築城のときに何度も往復したから、勝手を知っている。

そうだ。築城したんだったな。太郎は一度振り返り、月光を浴びてひっそりと浮かび上がっている墨俣城を見て、感慨にふけった。

まさか、小姓の自分が敵地での築城に参加するとは。

ただ、あれで男としての自信がついたのは確かだ。筋骨隆々とした男たちが汗水を流す中に混じって、食らいつくようにして材木や残土を運んだ。

あの、太っているだけが取り柄の主人も必死だった。泥臭かった。しかし、どの男よりも輝いていた。あそこまで必死になっていた動機は別としても、人はここまでやれるものなのかと、土の上を這いつくばっていた主人のあの光景が蘇り、太郎は足を速めた。

もう一度、墨俣一夜城のような一日を、主人とともに送りたい。

朝日に浮かび上がった一夜城を見たときの感動を太郎は思い出していた。

一晩かけて清州に到着した太郎は、主人の清州宅を訪れてみた。

主人のことだから、周囲の心配などおかまいなしに寝転がっているかもしれない。そんな淡い期待を持って板戸を開けてみたものの、誰もいなかった。

疲れた。

太郎は部屋に上がり込むと、その場に崩れるようにして横になる。ゴザがあるが、使用するなとうるさかったっけ。太郎は陣笠を取っ

ただけで、蓑を纏ったまま眠りこけた。
目が覚めたのは日暮れ前である。昼中に主人の情報を聞いておこうと考えていた太郎は、あわてて清州の城下に出た。
向かった先は木下藤吉郎の屋敷。無論、主の藤吉郎は墨俣に詰めていて、不在であるが、妻の寧々が目的だった。
寧々とは面識があるし、どうやら女たらしの主人は寧々にも憧れの念を抱いているようである。清州に来ていたとあれば、藤吉郎の目を盗んで寧々に会っている可能性もある。
藤吉郎の屋敷までやって来る。小さな木の門前まで来て、太郎は足を止めた。玄関口からなにやら、寧々の怒声が聞こえてきたのだ。
「亭主がいないからってうちに来るとは、貴方様はどこまで助平な卑怯者なのですかっ！」
太郎は口元を緩ませた。主人に違いない。
ぴしゃりと戸の閉まる音がして、太郎は悠々と門をくぐって入っていく。
しかし、戸の前でおろおろとしているのは、あの見っともない格好の主人ではなく、着物越しにでも筋肉の盛り上がりが判別できる大きな背中であった。
男は背後の太郎に気付き、顔を振り向けてくる。思わず太郎はごくりと唾を飲み込んでしまう。佐々内蔵助成政であった。
「なんだ、お前は」
内蔵助は、今までおろおろとしていたのが嘘のように、厳しい眼差しを送ってき、獣が唸るような声を吐き出してくる。
「ん？」
と、首を傾げながら、内蔵助は歩み寄ってくる。
「確か、お前は牛野郎の小姓だな」
「は、はいっ。太郎でございます。お久しぶりでございます」
「ここに何の用だ」
なんてやつ。内蔵助が言えたことかと太郎は思ったが、もちろん、口に出せるはずもなく、主人について寧々が知っているかもしれな

いからということを述べた。
「ふーん。そうか」
内蔵助はただ頷く。拍子抜けした。内蔵助のことだから、牛野郎は死んでいるに決まっているじゃねえか、などど高笑いするものだと思っていたのだ。
「そうすると、お前らは墨俣の守備を放ったらかしにして、牛野郎一人のために人数を割いているってわけか」
「いえ。拙者一人で探しております」
「お前一人で？　じゃあ、沓掛から来たのか？」
「いえ、墨俣からです」
「本気で言っているのか？」
「はい」
内蔵助がぎらついた瞳でじいっと見つめてくる。
「見上げた馬鹿だな。俺が思うところ、牛野郎は清州にはいねえ。だからといって、もう美濃には行くな。死ぬぞ」
そう言って、内蔵助は太郎の脇を抜けていく。
「そうだ」
と、内蔵助は立ち止り、再び太郎に歩み寄って来る。
「これを寧々殿に渡しておけ」
鮮やかな花柄の反物だった。確かに助平だな。太郎はにやついた顔を隠しながら反物を受け取った。
それにしても、主人の簗田牛太郎はともかく、佐々内蔵助までもが女の尻を追いかけている事実に太郎は解せない。
女なんてものは、この戦国の世を渡っていくうえで、生死を懸けた一個の男児の覚悟を揺るがしかねない愚物だと、太郎は常から考えている。
ただ単に、子供を作るためにあるものだ。
実際、自分がそうだ。自分の母は物心ついたときから病弱だった。まったく、自分を作るために生まれてきたような人だった。なんの幸福もなく、なんの平穏もなく、ただただ、我が子だけには笑顔を

見せる人だった。

見ず知らずの父親が憎いか？　憎くはない。それが戦国の男だ。非情が戦国の常だ。女子供に情けをかけていては、生死の覚悟は定まらない。

君をのせて（3）

内蔵助とは違い、寧々は太郎をこころよく家の中へ上げた。
「墨俣から一人で来るなんて。ご飯は食べたの？」
首を振ると、寧々は笑みを浮かべた。
「じゃあ、食べて行きなさい」
そう言って、寧々は台所に入っていった。女中たちと楽しげに話す声が居間にまで届いてくる。
木下藤吉郎らしい家である。
皆が明るい。
たとえ、主の藤吉郎がいないとしても、明るいのだ。
家とはこうあるべきだな。太郎はしみじみと思う。ただし、自分には縁のない世界である。
夕飯は寧々と女中、家の従者たちで作る輪の中に入って馳走した。
食事の間、連中はしきりに墨俣一夜城のことを太郎に訊ねてきた。どういう段取りだったのか、なぜ一夜で造れたのか、藤吉郎の様子はどうであったのか、と。
「出来上がったとき、木下様は屋根の上に登って踊っておりました」
皆が爆笑した。我が家の主らしい振る舞いである、と。
いいなあ。太郎は素直に感じた。連中は毎日、こうしたうまい夕飯のときを過ごしているのだろう。
「そんなことより、太郎さんは牛殿のことなんですよ」
寧々が言った。
「何か知っていることはないのですか」
すると、皆、首を傾げたり、黙りこくったりした。
寧々が申し訳なさげに視線を向けてくる。
「いいんです。もし、手掛かりがあったらということだったので」
「でもなあ」
と、従者の男が呟いた。

「こうまでして何も音沙汰がないとなると」
死んでいる。
さすがにそこまでは言わなかったが、そう思っても仕方ない。見る者からしてみれば、調略とは戦場よりも危険の伴う仕事である。戦場ではいかんしがたいことをするのが調略なのだから。
従者の咳きに、さすがに座は静まった。
「こんなことも言うのはなんですが」
女中が口を開く。
「太郎さん、ここに留まっていたらどうなんでしょう。簗田様を探しに回るなんて危険ですし、それに、殿だったら、藤吉郎様だったら、きっと、太郎さんを迎え入れてくれるはずです」
「何を言っているのですか」
と、寧々が眼差しを厳しく向ける。
「そんなことを思う御仁だったら、たった一人で探しまわることなんてしないでしょう。そういうことを言うのはおやめなさい」
「いいんです、寧々様」
太郎は箸を静かに置いた。
「いいんです。そのお言葉だけでも有難いです」
太郎は頭を下げると、腰を上げ、傍らに置いていた脇差を腰に差す。
「おいしかったです。有難うございました」
「どうしたのです？」
「沓掛に向かおうと思います。もしかしたら、簗田は沓掛に立ち寄ったかもしれません」
「今からですか？」
「はい」
「それはなりませぬ。日はすっかり暮れていますよ。食事を出しておいて、貴方様を一人、こんな遅い時間に沓掛に向かわせるわけには行きませぬ」
「とはいえ、これ以上迷惑をおかけするわけにはいきません」

「誰が迷惑だと申しました」
　屹とした視線を寧々は向けてきた。
「沓掛に行くのは自由ですが、この家に上がった以上、お客はお客としてもてなしますよ。太郎さん、今晩は泊まっていきなさい」
　寧々の凄味に太郎は何も言えない。なるほど、この人でなければ藤吉郎の嫁は務まりそうもない。
　藤吉郎の屋敷には客間を設けているらしく、夕飯後、しばらくして、太郎はそこに案内された。すでに布団が敷かれてある。
　用意されていた寝巻きに着替え、布団の中へ入ろうとすると、戸の向こうで声がした。寧々であった。
　寧々は床に腰を下ろし、あわてて姿勢を正した太郎を制した。
「いいんですよ、かしこまらなくたって。私なんて、所詮、百姓上がりの亭主の妻なんですから。でもね、太郎さん、お気持ちはわかりますが、無茶はしてはいけませんよ」
「無茶はしません。正直、どうでもいいのですから」
　太郎は正座を組んだまま、唇を押し込める。
「本当は殿様のことなんてどうでもいいんです。ただ、自分のたった一人の殿様なので、失いたくないだけなのです。でも、失ったら失ったで、きっと、どうでもいいのです」
　不思議と本音が出てしまったのは、寧々だからだろう。彼女にはそんな器量がある。男を受け入れてくれる器量があるから、思わず言ってしまったのだろう。
「自分はただ心細いだけなのです。一人でいるのが」
「それは、牛殿に生きていてほしいということなのでしょう、可愛いお侍さん」
　太郎はうつむいた。可愛いお侍さん。その言葉が幼いころの自分をありありと思い出させた。
　どこからともなく現れた丹羽五郎左衛門の言われるがままに、主人の相手役となろうとした。あのとき、どれほど恐ろしかったことか。何をされてしまうのか、何を失ってしまうのか、わからなかっ

たが、幼いなりに理解できたのは、失ってしまうものがとても大きいということだった。

しかし、主人にそういう性癖はなかった。むしろ、小姓に上がった。

なぜ、主人は自分を小姓に上げたのだろうか。

「太郎さん、疲れているんでしょう。もう寝なさい」

寧々の手によって、太郎は掛け布団にくるまれていく。

寝れない、と思った。

「寧々様」

天井を見つめながら、太郎は呟く。

「自分はどうしてこうも果報者なのでしょう」

ふふ、と、寧々は笑った。

「果報者には、己の今を果報と思える人しかなれません」

「でも、自分は」

太郎は枕元の寧々の顔を見つめた。目の前が霞んだ。寧々の笑顔は母のように優しかった。

「でも、自分は、今まで、自分を果報者だと思ったことなどないんです」

「なら、それでよろしいんでは？」

寧々は笑みを浮かべる。太郎は泣いた。寧々の懐の深さと、自分のあまりの世間知らずさに泣いた。

「駄目ですよ、太郎さん。男の涙は母御が亡くなったときといくさに勝ったときのためだと、どこぞの誰かが言っていたそうですよ」

と、寧々が太郎の頭を撫でてくる。太郎は涙が止まらない。

「自分は、自分は、母上を亡くしております。でも、でも、は、母上が亡くなったときも、自分は、泣きませんでした。なのに、それなのに、今、とても悲しいです」

「それは男を上げたからです」

太郎は体をうつ伏せに返すと、むせび泣いた。非情になれるものか。自分はなんて愚かだったのか。何も知らなかったのだ。何も知

らないくせにたった一人であることにとらわれ、そのくせ、心細くなっていた。

自分は生かされている。天や運命ではなく、この人たち、寧々や牛太郎、丹羽五郎左衛門、そして、母に生かされている。

太郎は寧々の腕の中にくるまれて泣いた。素直になればいい。素直になればわかってくる。今、もっとも必要な人は、主人なのである。だから、自分は墨俣を出たのだ。

君をのせて（4）

太郎は沓掛に入った。

沓掛は簗田牛太郎の拠点という点でも、主人の情報を得られる期待が高いが、街道ひしめく交通の要衛でもある。北の長久手、岩崎などからの街道と、京と駿河、果ては鎌倉までを結ぶ東海道が交差する場所だ。

たとえ、沓掛の者ではなくとも、この道を行き来する馬借、商人、僧侶などが、もしかしたら、主人の動向を知っているかもしれない。

しかし、すでに日はとっぷりと暮れてしまっている。探索は明日にするとして、寝床はどうしようか。

沓掛城に戻るわけにはいかない。丹羽五郎左衛門に引き留められるに決まっている。主人の唯一の家臣、山内伊右衛門は口の軽そうな馬鹿だ。

呼び子の声を聞きながら、宿場ひしめく通りを当てどもなく歩いていると、女が大騒ぎしながらこちらに向かって走って来る。

「キャーッ！　痴漢！　痴漢よっ！」

「何が痴漢だ！　このくせ者！　今日こそ、その化けの皮を剥がしてやるからな！」

まずいなと思った。この声は山内伊右衛門である。太郎は笠を目深に下ろすと、道端に反れようとした。

しかし、

「助けてください、お侍さん！」

と、女が太郎の背後に回り込み、両肩を掴んできた。太郎はちらと振り返った。追われているはずなのに、なぜかにたにたと笑っているのは、主人を垂らし込めたあの石川千代であった。

本当にまずい。

「おいっ、お前、そこをどけっ！」

肩で息を切らしながら、伊右衛門が太郎の行く手を塞ぐ。

チッ。

太郎は思わず舌を打ってしまう。主人や自分がこれだけ苦労しているというのに、主人を追い立てた張本人の女と、主人の留守を任されているはずの男が、こうしてじゃれ合っていると思うと、はらわたが煮え立ってくる。

だからといって、素性を明かし、怒鳴りつけるわけにもいかない。ここはここで、表情を笠の下に隠したまま乗り切らなければならない。

「どけって言っているだろうがっ！」

「拙者は今、苛立っている」

と、太郎は声色を変えた。

「ゆえん、理由はどうであれ、お主を斬る」

顔を隠す太郎は、伊右衛門の足元だけを見つめたまま、脇差をゆっくりと抜く。

「こ、この野郎っ。脇差なんかで。な、なめやがって」

そう言いながら、伊右衛門はあわてて太刀を抜いた。通りの旅人や呼び子から悲鳴とも歓声とも取れる声が上がる。

「名を名乗れ、この野郎っ！」

「名無しの権兵衛」

「ふざけやがって！」

「キャーッ！」

千代がそそくさと逃げていき、伊右衛門の左足が地面を擦った。

こんなやつ、このまま斬ってくれてしまおうか。

「ぶっ殺してやるっ！」

伊右衛門の踏み込んだ足が太郎の間合いに入ってきた瞬間、太郎は斜に進み入って、振り落とされた太刀を交わし、そのまま脇差の刃を伊右衛門の腰帯に入れた。

途端、伊右衛門の着物がはだけ、締めていた脇差や吊るしていた竹筒などがばたばたと地面に落ちた。

「弱すぎる。去ね」

と、太郎は脇差を鞘に戻す。
野次馬から喝采と笑い声があがり、伊右衛門は落ちた物をそそくさと抱え込むと、チクショウ、などと叫びながら走り去っていった。
情けない。あれが主人の唯一の家臣だとは。そもそも、主人を心配している様子のかけらもないじゃないか。
ハア、と、溜め息をつくと、太郎は歩を進めた。
それでも、嘆くばかりでもないか。戦乱の世にあって、この沓掛が平和な証拠だ。ならば、この平和な城下で野宿だな。
太郎は笠を目深にしたまま通りを行く。
「ちょっと！」
太郎が顔をしかめながら足を止めた途端、千代が、恥じらいというものを知らないのか、背中に飛び乗ってきた。そうして、笑いを含ませたような声で言う。
「強くなったじゃないの、太郎ちゃん☆」
「何を申している。拙者は権兵衛だ」
「ふーん。じゃあ、この笠、取っちゃおうか」
太郎は黙りこむ。
「ねえ。どうして顔を隠しているの。簗田さんはどうしたの」
「殿様は行方が知れないのです。だから、こうして探し回っているのです。だから、太郎の勝手にさせてくだされ。それに早く背中から下りてくだされ」
「そんなこと言ったって、また、あの人が追っかけてくるかもしれないじゃん。このまま、長屋まで送っていって。ネ☆」
「もう、追いかけてきません。だから、下りてくだされっ」
「そんなこと言ったら、みんなに教えちゃうよ。太郎ちゃんが帰ってきたって」
チッ。なんて勘の鋭い女だろう。へらへらしておきながら、頭の中身は悪戯めいた企みを懸け巡らせているのだろう。
きっと、男に生まれていたら、三好三人衆や松永弾正忠を凌ぐ大悪党になっているに違いない。

君をのせて（5）

千代が住まいにしているのは、当初は取り壊す予定であった足軽長屋である。

狭い。囲炉裏の火、やかんから出る蒸気だけでも暖かい。

「とりあえず泊まっていったら？　どうせ、宿無しなんでしょ」

太郎は笠を外さなかった。泊まれるわけがないだろう。なにせ、ここに住んでいるのは千代だけではない様子。囲炉裏の前には、突如、現れた男の姿に戸惑っている娘が一人いる。

「嫁入り前のおなごと共に寝るなどできませぬ。失礼」

と、太郎は長屋から出ようとしたのだが、

「言っちゃおうかなあ」

足を止めるしかない。

「千代さん、この太郎はそういう盛りの男ですよ」

「そうだけど、そういう変なこともしたら言っちゃう」

「犯したあとに斬ってしまうかもしれませんよ」

「どうぞ、ご自由に」

からかってくるような笑みを浮かべてくる。千代は人を見る目があるらしい。太郎がそういった類のことを一切できない人間だということを見抜いている。

「かといって、そちらの方は身構えていますよ」

「そうなの、あいりちゃん？」

千代が振り返ると、あいりと呼ばれた娘は顔を伏せた。

「と、殿方のおっしゃる通りだと思いますが。私も千代さんも嫁入り前の娘です。皆に知れてしまったら……、大変です」

「でも、この子は泊まるところがないのよ」

子供呼ばわりである。若干むかっ腹が立ち、その恐れ知らずに呆れもしたが、大した女だなと感心もした。よほど、自分に自信がある女であろう。

それに子供呼ばわりしていたことで、あいりの表情からもやや硬さがなくなった。
「泊まるところがないのですか」
「この子はご城主の簗田さんの小姓よ。なんだか、訳ありみたいだけど」
そう言って、太郎に顔を向けてきてにやにやとする。自分に自信を持っていて、退屈を嫌う女。主人の牛太郎などには手に負えないであろう。今頃、どこで何をしているか知れないが、今もなお、この女のことを思っているならば、主人には憐れみさえ覚えてくる。
「じゃあ、仕方ありませんね」
「はいっ、決まり！　はいはい、上がった上がった」
千代に手首を掴まれると強引に引き寄せられた。
「いや、ちょっと、草鞋を脱いでおりません」
「あら。行儀が悪いこと」
千代はきゃっきゃとはしゃぎ、あいりも笑う。すっかり、千代の思うがままにされてしまって、太郎は苦々しい思いで草鞋の紐を解いていき、笠を外し、蓑を脱ぐ。
「あいりちゃん、この子は簗田さんの小姓の太郎ちゃんね。格好いいからって好きになっちゃ駄目だよ」
「そ、そんなふうにはなりませんっ」
「太郎ちゃんもね。あいりちゃんが可愛いからって駄目だよ」
「な、何を言っているのですかっ」
太郎は柄にもなく焦った。そもそも、泊まらせてくれる千代の魂胆がわからない。間違いなく何かを企んでいるはずだが、もしかしたら、本気でそんな冗談を言っているのかもしれないのだ。
なんだか、千代という人が計り知れない。
「そういや、太郎ちゃんっていくつなの」
「十四ですが、何か」
「そうなんだあ。じゃあ、太郎ちゃんのほうが年下ね。言っておくけど、あいりちゃんは太郎ちゃんの二つ上、私は五つ上、だから、

お姉さんたちの言うことはちゃんと聞くんだからねえ」
「何をおっしゃっているやらさっぱりわかりません」
「とりあえず、座れば」
むう。自分に自信がある女、退屈を嫌う女、そこにまた一つ加わった。自己中心的な女。
「そんなことよりですよ、千代さんっ」
太郎は千代の言いたい放題にさせまいと、声を大きくしてしまう。
「どうして、あなたが伊右衛門殿に追いかけられていたのですか」
向かいのあいりがやかんの中の湯を欠けた椀に注ぎ込み、太郎の傍らまでやって来て、手元に差し出してきた。
「お体、温めてください」
幼さの残る横顔で、つぶらな瞳が愛らしい。
「あ、有難うございます」
「見とれちゃって」
「み、見とれてなどおりませんっ。そんなことより、千代さん、質問に答えてください」
「質問？」
「だから、どうして、伊右衛門殿に追いかけられていたっていうことですよっ」
「ああ、あれね。私ね、あの人のことからかったの。私は忍びの者だって。そうしたら、本気にしちゃって」
「そ、そんなことを言って、な、何をしているんですか。目付役の丹羽様は忍びに敏感な人なんですよ。城に女中を置かないのは、忍びを警戒しているからですよっ」
「知っているよ。だって、丹羽様にそう言われたもん。だから、あのお馬鹿さんをからかってあげたの」
もうよそう。何がなんだかさっぱりわからない。千代のお転婆ぶりを相手にしていると疲れる。

君をのせて（6）

なるたけ、千代やあいりとは遠ざかって寝た。

ところが、若い女と同じ部屋の中で横になっている状況に、さすがに寝付けない。あと、いびきがうるさい。千代の。

太郎はそろりと長屋を出た。徘徊しているうちに眠くなるだろう。

城下は灯も落ちて、寝静まっている。

主人がこれを知ったら怒るだろうなと太郎は思った。

おれが命懸けで調略をしているときに、お前はチヨタンと一緒に寝ていただと？　う、裏切り者！

耳元にありありと聞こえてくるようで、太郎は思わず笑ってしまう。

そうだな、あの人が簡単に死ぬわけない。主人の声を思い出しただけで、不思議と、確証めいた期待が湧いてくる。

暗愚な将である。が、説明できない何かを主人は持っているような気もする。賢さや逞しさ、そういったものとは別次元の、おそらく低俗な、しかし、巨大な何かを主人は持っている。

あの人は天に生かされているんじゃないか。なんとなくではあるが、時代の流れの主流にいるようでさえある。

あの愚かさであるのに、桶狭間で勲功を上げ、信長と面を向き合わせられる立場であり、美濃攻めの調略も手掛けている。それが成果を上げているかどうかは別としても、もしも、織田勢が美濃を攻略できたとしたら、信長は一挙に天下に近くなる。

そうなったらだ。桶狭間、美濃攻めと、織田信長の変革的事業に関わっている主人は、時代の主流に乗っている。

かつて、時代の主流に乗った人物は、死ななかった。もちろん、それは後世の太郎から見た結果ありきの考察であるが、源頼朝、足利尊氏と、主流に乗った人物は、その奇跡的な天運で、どんな苦難に陥っても、どんな敗北があろうとも、死ななかった。

信長はそうなりうる人物かもしれない。そうすると、主人の簗田牛太郎もその時流に乗っている。

それを思い、十四歳の太郎は少々身震いがした。太郎は少年にして、物事を多角的に見識する聡明さを、口に出すことなくあざといまでに隠しているが、命を懸けた攻防や、それこそ戦場を経験していないため、もろい。

経験のあるいくさ人であったら、自分の予見に自信を持ち、その将来に突っ込んでいくことで男を奮い立たせるであろうが、太郎は少年である。結局、予見は予見でしかないから、先の見えない将来である。そこに突っ込んでいく術を知らない。

だから、もし、その予見の中に、時代の主流という激流の中に、自分も関与していると考えると、その激しさに太郎は恐れおののいた。

おそらく、自分はそこまでの人間じゃない。簗田牛太郎が持っている何かを、自分は持っていない。

心細い。

太郎は踵を返し、長屋に足を向けた。一人は心細い。もしかしたら、自分は主人が持っているその何かに、この脆弱な心を守られていたのかもしれない。

太郎は欠けた月を見上げる。

「どこかで独りよがりなのかなあ」

そう呟いたとき、足音と人影に気付いた。太郎はあわてて腰に左手を回したが、ふらりと出てきたせいで脇差を帯びてはいない。

いや、警戒することはなかった。月明かりの中にじいっと目を凝らしてみたら、女。あいりだった。

「あっ。た、太郎さん？」

「どうしたのです。夜更けに出歩いていたら危ないですよ」

「いや、気付いたら太郎さんがいなくなっていたので、出て行ってしまわれたのかと思って」

「そうとはいえ――」

危ないじゃないか、と、言いかけて、太郎は口をつぐむ。自分がいなくなったことで、あいりはあわてて探しに出てきた。そんな事実が太郎を妙な気持ちにさせる。
「申し訳ありません。ちょっと、風に当たろうかと思って」
「どうかされたんですか」
「いや、まあ、寝付けなかったんです。おなごと共に寝るとなると、どうも、落ち着かなくて」
「そんな、気にされなくてもいいのに」
「気になりますよ」
あいりは笑う。
「お優しいんですね、太郎さんは」
なんなんだろう。この澄んだ空気が胸に切ない。かといって、ここを離れたくはない。
「風邪をひいてしまいますよ。戻りましょ」
「ええ」
長屋への帰路を辿るが、すぐに気付いた。あいりが若干ながら右足を引きずっている。
「足、怪我をされているんですか」
「はい。お恥ずかしいことに、昨日、城下を歩いていたら捻ってしまって」
それを聞いてしまって、何かが胸に込み上げてくる。その足で探しに出てきたのか、と。
太郎は何を言葉にすればいいかわからず、あいりに軽く頭を下げたが、あいりはその意味がわからず、微笑みを浮かべたまま首を傾げてくる。
参ったな。太郎は素直に悟った。主人の気持ちがどことなくわかった。
なにしろ、あいりが愛しい。その健気さと、その素朴さが。
太郎はあいりの前に背中を向けてしゃがみ込み、一度、唇を絞ったあとに呟いた。

「背負いましょう」
「えっ？」
「い、いやっ、足を怪我されているんであれば」
顔がやたらと熱い。参ったな。どうしてこんなことを言ってしまったんだろう。
「お優しいんですね」
そう言うと、あいりが背中に乗ってきた。太郎は両手を拳にして背中のあいりを持ち上げる。彼女の髪が耳に触れる。太郎はただただ唇を引き絞ったまま歩を進める。
「初めてです。誰かにこうしてもらったことなんて」
温かい。そして、やたら甘い。
「ち、父上などにしてもらったことはないのですか」
「父はいないんです。母も。物心ついたときにはおりませんでした。戦火に巻き込まれたとかで。私は祖母に育てられたんです。その祖母も二年前に亡くなってしまいました」
「そうなんですか」
「太郎さんはこういうふうにしてもらっていたんですか」
「いえ。自分もおりません。生まれたときから父もおらず、母上もずいぶん前に逝ってしまわれた」
「同じですね」
「ええ。同じです」
そこから長屋までの間、会話はなかった。しかし、する必要もなかった。背中越しに彼女を感じている。それだけで、たくさんの会話をしたような気分だった。

君をのせて（7）

結局、寝られなかった。

あいりがすぐそばにいるとなると胸が高鳴ってしまっていて、瞼を閉じれど閉じれど、また目が開いてしまった。

あと、千代のいびきがうるさかったのもある。

重たい目をこすりながら、太郎は密やかに城下を回った。馬借、商人、僧侶などの旅人に、尾張や南美濃辺りで、上背のある太った男を見なかったかと訊ね回った。

しかし、まったくと言っていいほど、大した手掛かりは得られなかった。

夕暮れどき、さすがに眠くなってきて、長屋に戻った。

あいりが夕飯の支度をしている。千代はいない。

「千代さんはどこに行かれたんですか」

あいりは苦笑しながら首を傾げる。

「千代さんは活発な人なんで、いつもどこかに出かけているんですが、どこに行っているのかは教えてくれないんです」

女が一人、見知らぬ町で何をやっているのだろう。少々、呆れる。

囲炉裏の前に腰を下ろした太郎は、なんとはなしに棒をざくざくと刺して炭を起こす。

「どうでした？」

と、あいりが太郎の向かいに座った。椀にやかんの湯を注ぎながら言う。

「何か、ご城主様のことはわかりました？」

「いえ、まったく」

「そうですか……」

椀が太郎の前に差し出され、それを啜る。温かさに吐息が出た。

冷えた体に優しい。

「どこに行かれてしまったんでしょうね」

「まるで雲隠れでもしてしまったかのようです」
太郎は自分で言って自分で笑った。雲隠れ、主人にぴったりの言葉だ。
「どんな方なんですか、ご城主様って」
「そりゃまあ」
と、太郎はぼんやりと天井に視線を向ける。
「ひと言で表すなら、甲斐性なしでしょうか。あ、それと不器用。不躾。無様」
「ひどい言われよう」
あいりがくすくすと笑う。
「会えばわかります。あんな御仁には滅多にお目にかかれません」
あいりはよっぽど可笑しいらしい。ひとしきり笑ったかと思うと、咳まで込んだ。太郎は少し楽しい。饒舌になる。
「多分、殿様は、あいり殿を見かけたらすぐに好いてしまうでしょう。可愛らしいおなごには目がない。それしか考えていないのです。いくさのことも沓掛のこともちっとも考えません。そのくせ、うまく行かないのです。最後には誰かに振り回されて終わりです」
「よほどなんですね」
「ええ。よほどです」
「太郎さんはご城主様とよほど仲がよろしいのですね」
「い、いや、まさか。喧嘩ばかりです」
「ご城主様と喧嘩できるほど仲がよろしいなんて羨ましい」
「そ、そんなことありません」
太郎はあわてて椀に手を伸ばし、湯を飲んでごまかす。
「自分は殿様のためにいつも言ってあげているのに、殿様は聞く耳を持たず。だから、いつも喧嘩になるのです」
「立派なご城主様」
「まさか。城主らしいことなんて何もしていませんよ」
「だって、太郎さんと喧嘩したって、それで終わりなんでしょ。本当なら、喧嘩なんてできませんし、しようものなら城から追い出さ

れてしまうではないですか」
まあ、それもそうだ。佐々内蔵助みたいな人間だったら首を斬り落とされる。
「家族みたいなものなんですね」
家族か。太郎は静かに椀を置く。主人の調略活動が活発になる前は、毎日のように顔を合わせていたからな。もしかしたら、家族みたいなものなのかもしれない。
喧嘩ばかりの毎日。お互いがお互いを馬鹿にし、蔑み合う毎日。でも、それがぱたりとなくなってしまって、心細い。
失ってから初めてわかるとはよく言ったものだ。
「羨ましい。太郎さんが」
そうだった。あいりも自分と同じく天涯孤独。それを思い出すと、なんだか饒舌になっていた自分が恥ずかしい。
子供だな。おれは。
太郎は押し黙る。あいりもあいりで同じような思いを持ったのかもしれない。表情に影を落とした太郎の様子に、あいりもまずそうな顔をした。
「そ、そろそろ千代さんも戻って来るでしょうし、夕飯を作りますね」
「あ、あいり殿」
「はい？」
「一緒に暮らしましょう」
「え？」
あれ？
太郎は一瞬にして汗を噴き出した。何を言っているだろう。何を言ってしまったんだろう。違う。言いたかったのは違う。もしも、主人が見つかったら、あいりは女中として雇ってもらえばいい。そうすれば、あいりの言う、家族のような暮らしができるかもしれない。
しかし、口をついた言葉は、とんでもなく飛躍していた。太郎は

焦る。額の汗をぬぐう。弁解の言葉を探そうとするが、気が動転してしまって、何ら考えることができない。

「へえ」

ぎくっとして、振り返った。いつのまにやら、玄関口に千代がいる。

「へえ。太郎ちゃん、そうなんだあ。へえ」

「違う。違いますっ」

太郎はあわてて手を振り、あいりは顔を真っ赤に染め上げている。

「何が違うのかしらん。てか、似ているよねえ、そういうところ。篠田さんに」

「違うんですっ。誤解ですっ。自分が言いたかったのは――」

「はっきりと聞こえたよ。いっ・しょ・に・く・ら・そ・うって。ネ、あいりちゃん☆」

あいりはくるりと背を向けてしまう。

終わった。太郎はがくりと首を垂らす。そういう類のことをもっとも知られてはいけない人間、今までは主人の牛太郎だけだった。しかし、昨日から一人増えた。それは、この千代だ。

君をのせて（8）

なんとも気まずい空気の食事中、千代だけが終始にやにやとしており、

「花ぐはし葦垣越にただひと目、相見し児ゆえ千遍嘆きつ」

と、急に呟いた。

気まずさに耐えられなくなっていた太郎は、つい訊ねてしまう。

「な、なんでしょう」

「万葉集だけど？」

鼻先を突き上げながら、どこか高飛車に答えた千代に、あいりも注視する。

「い、意味がよくわかりませぬ。歌はまったくできないので」

「知りたい？」

「はあ」

「葦の垣根越しに見かけたあの子に僕は一目ぼれ。目と目が合ってドキドキわくわく。でも、あれ以来、あの子を思って千回も嘆いているよ、っていう意味だけど？」

太郎は顔を火照らせた。なんて意地の悪い女。思わず顔を伏せてしまう。もはや、あいりの表情を確かめることなどできない。

「いい歌よねえ。すごく共感できる。そう思わない？」

太郎は無視して粥を口の中に押し込んでいく。

「ねえ、あいりちゃんもそう思うでしょ」

あいりも無視。

「恋っていいわ。本当にいい。私も恋をしてみたい。本当にしてみたい」

なんて執着心だろう。いや、粘着力だ。ひどい粘り気である。剥がれる気配がまったくない。

「ところで、太郎ちゃんは恋をしている？」

「もういい加減にしてください」

「何が？」
太郎は睨みつける。が、てんでとぼけている。
「ほっといてください。色恋など人の勝手ではないですか。しつこすぎますっ」
「ふーん」
と、千代は目を白々しくさせる。
「じゃあ、やっぱり好きなんだねー。あいりちゃんのことが」
「そ、それは」
何を言っても駄目だ。何を言っても千代の粘り気は弱まらない。無視をしていても雀のようにうるさいし、反応したらしたでここぞとばかりに食らいついてくる。お手上げだ。
「ねえ、どうなのどうなのどうなの」
太郎はちらりとあいりを伺った。嫌な思いをしているだろう。しかし、あいりもちらりと伺ってきた。目が合ってしまう。お互い、顔を伏せてしまう。
千代がうるさいから、余計、意識するようになってしまっている。
「でもさあ、やめてよね。夜這いだけは」
「そ、そんなことしませんっ！　するわけがありませんっ！」
「私、そういうはしたないことって嫌いだから」
何をいけしゃあしゃあと。はしたないのはどっちだと言いたい。
食事が済むと、早々に寝床に入った。行燈の火を消すさいにも千代はやかましかったが、耳を塞いだ。
闇に包まれて、ようやく静けさを取り戻す。
すぐに千代のいびきが聞こえてきた。なんてはしたないいびきだろうか。
うるさくて眠れない。と、思いたいところだが、実際はあいりが近くで寝ていることに興奮してしまっていて眠れない。
おれは男だ。太郎はぎゅうっと瞼をつむる。おれは戦国の世を生きる一個の男児だ。女などに気を取られてしまうわけにはいくか！
そうか、女が愚物というわけではなく、そこに気を揺るがす男が

愚物なのだ。
そもそも、目的を忘れそうである。主人を探すのである。女じゃない。主人なのである。
太郎は体を起こすと、物音を立たせないよう、支度を始めた。脇差を帯び、蓑を纏い、笠紐を結ぶ。
「太郎さん」
あいりの囁きがあった。
「どこに行くんですか」
太郎は草履の紐をきつく締め上げていく。
「太郎さん」
「また、お会いしましょう」
千代のやかましさがそこまで嫌だったわけではない。どんな反応を示せばいいかわからなかった。むしろ、今、思えば、心のどこかでは囃し立ててくれることを願っていたようでもある。
だが、それがいけない。男児として。
太郎は戸をそろりと開けた。
「太郎ちゃん」
千代だった。ついさっきまで大いびきをかいていた千代の声に耳を疑う。
「あなたには運があるの？」
何を言っているのだろう。どちらにしろ、引き留めにかかっているだけであろうと、太郎は足を戸外に出そうとした。
「運がない人は死ぬわ。あいりちゃんを悲しませることはしないで」
思わず足を止めてしまう。
「自分にはそれがないと言うのですか」
「ない」
「ならば切り開きます」
「それができたら英雄よ」
「それならば」
と、太郎は初めて振り返った。あいりは上半身だけを起こしてい

て、千代は布団にくるまったまま目だけをこちらにぎらりと光らせている。

それならば自分は英雄になる、と、言おうとしたが、闇の中に妙にぎらついている千代の眼差しに太郎は臆してしまった。

「どう考えても、簗田さんはもうこの世にはいない」

「それでも自分には確かめる必要があります」

すると、千代は寝返りを打ちながら布団をかぶってしまった。

「私は太郎ちゃんみたいな男は嫌い。死に急ぐ男なんて大嫌い」

口元が緩んだ。なんだ、千代も女じゃないか、と。

太郎は、ただただ見つめてくるだけのあいりに頭を下げると、外に出、戸を閉めた。

君をのせて（9）（前書き）

※ここだけ残酷な描写あり

君をのせて（9）

清州、沓掛と手掛かりが見当たらなければ、もはや、菩提山に行くしかない。

主人、簗田牛太郎は、墨俣築城のあとに一度、菩提山を訪れ、その後に清州の信長のもとに参上し、行方不明となったのである。

菩提山しかない。

竹中半兵衛重治。

その名を言葉に発するだけでも、震えてくる。美濃を侵攻する織田方を頭一つでさんざん苦しめ、難攻不落の稲葉山城をたった十六人で乗っ取ったさいの首謀者。

天下広しと言えども、はたして今の世に竹中半兵衛のような作戦家がいるだろうか。

太郎の中では源義経のような存在である。雲の上にいるような存在だ。

そんな竹中半兵衛のもとへ行くとなると、ためらいがぬぐえない。尾張美濃だけではなく、天下にさえ名が知れ渡っているのではないかと思われる竹中半兵衛が、主人の牛太郎など気にも留めてないのではないか。

まして、敵地の真っ只中である。

とはいえ、頼りは菩提山しかないのも事実。

長屋を出たあと、太郎は城下外れの民家の納屋に忍び込み、そこで一夜を過ごした。

翌朝、雪だった。鉛色の空を見上げて、太郎は迷ったが、むしろ、地上はしんとしている。敵地を行くには好都合かもしれない。

太郎は沓掛をあとにした。

道中、千代の言葉を振り返った。

運がない人間は死ぬ。

つまり、それは死んだ人間には運がない。この戦乱の世に消えて

行った者には運がない。だが、それは結果論にすぎない。要は生き残れば運があったということなのだ。

ならば、牛太郎には生きていてほしい。主人を勝手に亡き者にした千代に一泡吹かせてほしい。千代の思っていたところ、それは所詮女のつまらぬ考察であったことを知らしめてほしい。

清州の主人の家で一晩を過ごすと、次の日には、一日中降っていた雪が積もっていた。相変わらずの曇り空であるが、雪は止んでいる。

足をかじかませながら、太郎は行く。吐く息は白い。

木曽川の水かさは増していた。墨俣に向かうときと、墨俣から戻って来たとき、太郎は二度この大きな川を渡っているが、今回は水が胸まで浸かった。まして、流れに勢いがある。こんな日に川を渡っている人間など、太郎ぐらいしかいなかった。

運がない人間は死ぬ。太郎は何度か川の流れに襲われた。気を緩めたら、途端にからめ取られそうだった。そして、冷たい。無茶だったかもしれない。

でも、運とは自らが切り開くものだ。死ぬわけにはいかない。川面を切り開き、運を切り開き、もう一度、会うのだ。主人に。あいりに。

「殺せるものなら殺してみろ。おれはまだ絶対に死なない」

なんとか、岸に辿り着いた太郎は、川の水を拭うことなくまた進んだ。立ち止まったら、終わりそうだった。この魂を、いや、意地を突き動かさなければ死んでしまいそうだった。

ただ、さすがに水が冷たかった。それに夜が近い。

生きる死ぬ以前に風邪を引きそうだと思って、太郎は枯れ木を集めてくると、備えてきていた火打ち石と硫黄を塗った付木で火を起こし、焚き火にあたった。身の物を剥ぎ取り、冷めた衣服と体を火にかざす。

寒い。だが、今が困難であればあるほど、行く先は明るいのではないか。

そう、信じたい。火を見つめながら太郎は思う。
すると、ぼんやりと火を見つめているうちに、雪を踏み鳴らす音が聞こえてきた。話声もする。木曽川を渡れば南美濃である。織田領ではない。
太郎はまだ乾ききっていない衣服を着こんだ。草履を履いていると、足音が近づいてくる。
「やっぱり誰かいるな」
まずいと思って太郎は焦った。火を起こしていたから斎藤方に見つかった。
「おい」
と、薄暗闇の中に人影があった。数えれば四人。すべて大人である。
「どこのモンだ」
火の明かりに照らされた連中は、斎藤方の武者にしては見てくれが乏しかった。雑兵か、それとも野盗か。
太郎は腰に差した脇差を抜く。
「なんだ、お前。そんなものでやろうっていうのか？」
「まだ、子供じゃねえか」
「大したもの持ってなさそうだな」
「いや、子供が一人こんなところで妙だ。どっかのご子息かもしれねえぞ。さらっちまえばいいじゃねえか」
会話からすると野盗のようだった。大した連中ではなさそうだが、一人、体躯のよい人間がいる。あとの三人は向かい合えばなんとか倒せそうである。
「おい、答えろ。お前はここで何をしてやがるんだ」
と、体躯のよい男が詰め寄ってきた。脇差を抜いているのに、子供だと思ってあなどっているのか、隙だらけである。
こいつさえ殺せば、運は切り開けそうだ。
しかし、手が震える。人を斬ったことなどない。
「うわあぁぁあっ！」

無我夢中だった。手にした脇差がその男の首を貫く。噴き出した血が太郎の頭から降り注ぎ、それは実に生温かくて臭い。

男は白目を剥いた。即死だった。

「テメーェッ！」

太刀を振りかざす。しかし、その動きは緩慢このうえない。雑魚め。亡骸の首から脇差をぐいと抜きざま、襲ってきた男の懐に入り込み、胸を一突きする。

血しぶきが顔面に浴びせられる。

朱に染まった顔の中で、太郎は残った二人に目玉だけをぎろりと向けた。その眼差しに容赦はない。

一瞬にして二人の男の人生を終わらせてしまった少年に、野盗の二人は太刀を構えながらも後ずさりする。

太郎は屍の胸からぬるりと脇差を抜いた。その間、二人から視線を外さない。常にてらてらと標的を追っている。

「こ、この野郎ォ！」

「お前らが殺したんだな」

太郎は野盗にゆっくりと詰め寄り、野盗はじりじりと後ずさりする。

「お前らみたいな輩が罪のない女子供の親を殺したんだろォっ！」

続けざまに二人を斬った。太郎の脇差の刃先のすべてが急所を貫いていた。四人すべてが、命乞いをする間もなく命を絶った。

息遣いだけを荒くして、血が滴り落ちる脇差を握ったまま、太郎は己がそうさせた亡骸たちの前に突っ立っていた。

雪が真っ赤だ。

何の因果もない人間を殺した。徐々に我に返っていく。何も知らない人生をこの手で終わらせてしまった。

これが、戦乱の世。

もしかしたら、この者たちも女子供がいるかもしれない。

すると、なぜか、あいりの顔が太郎の脳裏によぎった。会いたい。あいりに今すぐにでも会いたい。会って、許してもらいたい。人を

斬ってしまったことを。
太郎はふらふらと歩き始めた。おれもとうとう修羅道に入ってしまった。
ただ、一つだけはっきりとわかる。今はとにかく、主人を見つけなければ。

君をのせて（１０）

寒い。
空は朝日に染まっているというのに。
ひどく寒い。
足が重い。体中が冷たい。石像にでもなってしまったんじゃないか。
太郎は思わず笑う。石像も意地があれば動くらしい。
白く染まった山々が朝焼けに浮かび上がっている。静かだ。まるで浄土だ。
だが、あまりの清浄な空気の中で、太郎は狂おしくなった。もしも、あの山のどれかに主人がいなかったら、この石像はどこに行くのだろう。
穢土である。
幼き頃に出会った旅の僧が言っていた。
人は目の前の世界をありのままに見ていないんだ。
だから苦しいんだよ。だから辛いんだよ。
だけど、この世界は何度も何度も同じことの繰り返し。
だから、苦しいんだ。辛いんだ。
そして、この世界は延々に終わらない。
ありのままに見れないことと、世界が繰り返されること、世界が終わらないこと、これが絡み合ってね、人を縛りつけながらぐるぐる丸くなって、ぐるぐると転がっているんだ。
本当はこの世界には何もないんだ。それが浄土なんだ。でも、何もない世界の中で人はぐるぐると転がっている。それが穢土とは知らずにね。
太郎は思う。例えば、こういうことなのだろう。
静かな朝の静かな雪原の中、どこにあるのかわからないものを、ただただ追い求めて歩き続ける自分。

血の匂いが取れない。
気付けば遠くの集落から来たらしき人影がこちらに歩いてくる。
老婆である。視線を足元に伏せ続け、何事かを呟いている様子である。
「す、すまぬが」
と、太郎の姿にいっさい気付かないでいた老婆の足を止めた。ただ、凍えてしまっているせいか、声がなかなか出ない。
「ぼ、菩提山とは、ど、どこにあるのか」
老婆は始めて顔を上げた。途端、太郎の姿を確かめるなり、腰を抜かして尻をついた。
「お、お助け、お助けくだせえ」
老婆は肩をひどく震わせながら、太郎に向けて両手を合わせ、お助けくだせえ、お助けくだせえ、と、ひたすら命乞いしてくる。
「ち、違う。おれは違う。菩提山を教えてくれ」
「ぼ、菩提山は、あ、あの、あの山でございます」
老婆は顔を伏せたまま、連なる山々の一つを指差した。
「ありがとう」
太郎は歩を進めた。
「鬼じゃ。鬼じゃ。お助けくだせえ。お助けくだせえ」
離れて聞こえなくなるまで老婆の呟きがあった。
太郎は嗚咽した。どうして自分が、あんな弱き者に怯えられなくてはならないのか。なぜ、自分はこんなにも返り血を浴びているのか。
腕を磨くことに意味があるのだろうか、生きることに意味があるのだろうか。
「あいり殿……。あいり殿……」
太郎にはそれしかなかった。だから苦しい。だから辛い。こんな思いをしてまで沓掛を出てくるのなら、いっそのこと、女に揺れ動いていたほうがよっぽどよかった。
――。

生き残った運のある英雄もいれば、運なく死んでいった英雄もいる。源義経、楠木正成、それに、今川義元、斎藤道三。

彼らは何を思い死んでいったのだろう。英雄として運なく死んでいった彼らは、何を得たのだろう。

なんのためにそうまでして生きていたのであろう。

一個の男児として生涯を駆け抜くことの厳しさ。英雄たちは何を糧にして駆け抜けていったのだ。

太郎には苦しくて、辛い。憧れは遠く果てしない。

いつのまにか、山を登っていた。何も見えなくなっていた。終わることのない道を終わることなく歩いている感覚であった。

気付けば、そこには、ひっそりと佇む庵があった。鬱蒼と茂った木々の中で、この世のすべてから遠ざかっているような静寂の中で、木の枝から雪がさらさらと落ちていた。

棒きれを振り回している主人がいる。

生きていた。

「殿様！」

考えるより先に声が出た。

生きていてくれた。まるで、英雄だった。自分さえ信じられなくなっていた太郎の前にいたのは、運だけで生き抜いている何の取り柄もない英雄だった。

「氷　我　炎　如　斬　！」

……。

何をやっているんだろう、この人は……。

今までの苦労はなんだったのだろうか……。

見事なまでに緩慢な動きで振り下ろしてきた棒きれを受け止め、太郎は思わず叫んだ。

「何を、何をこんなところで遊んでいるんですか！　太郎がどれだけ心配したことか！」

憎さのあまり、図体だけの主人を突き飛ばしてしまう。

主人はというと、太郎の顔を眺めながら、ただ呆気に取られてい

た。

「ずっと帰ってこないから、もう、死んでしまったのかと思ってましたよっ！　ウウッ」

でも、死んでいなかった。今は、それだけが嬉しい。

イライラ牛

「鉄砲をあなどってはなりませぬぞ。太刀を振り回すのとは訳が違います。まずは発弾したときの衝撃に耐えなければなりません。的を射ることよりもまず、体を安定させた構えを身につけることです」

と、十兵衛がいちいちうるせえ。どうでもいいからさっさと撃たせろよ。

「そんな構えでは体が飛ばされます。片膝をつけて、腰を入れて、もっと、こうぐいっと。そうです。そうそう。それでは点火しますぞ」

おれは銃口を山県三郎と書かれたかかしに目掛ける。クソサブロウめ。積年の恨み、ここで晴らしてやるわっ！

ズドーン！

ぱりーん。

「ああっ」

やべえ。寺の瓦の一枚が粉々になって降ってきている。てか、明後日の方向もはなはだしい。

「簗田殿……。だから、言ったではないですか。衝撃に振られては銃口も振られてしまうんですよ」

確かにナメていた。大砲をぶっ放すぐらいの反動だった。

「簗田殿、やはりやめましょう。市中で練習するものではない。その火縄銃は譲りまするゆえ、岐阜に戻ったら、存分に鍛錬してくだされ」

な、なんか、見限られたような気分。

でも、キモデブの家康が出来て、おれが出来ないわけないんだ。くそう。くそう。

「旦那様、それはあっしが預かるッス」

と、手を出してきたシロジロに、泣く泣く火縄銃を渡すおれ。

「ちゃんと手入れしておけよ」

「それより築田殿、いくさの鍛錬もよいですが、今は腕より口です。明日の出立の支度はできているのでしょうな」
「できているのか？」
と、シロジロに訊ねると、頷くシロジロ。
「できています」
「わかりました。住職には拙者から謝っておくので、明日のために今夜は体を休ませておいてくだされ」
そう言って、寺の御堂へと去っていく十兵衛。
うるせえんだよ、まったく。いちいち学校の先生みたいでさ。
とはいっても、太郎の件で十兵衛には引き下がってもらった手前、素直に従うしかないおれ。
「火縄銃を譲ってくれなんて、十兵衛様は懐が深いッスね」
と、手にしている火縄銃をまじまじと眺めるシロジロ。
「一体、いくらするんスかねえ」
「それがお前の仕事だろ。飯ばっか作っているだけだから、いつまで経っても五百貫貯まらないんだ。もうちょっと、おれの役に立つようなことをしろよ。そうしたら太郎に頼んで俸禄を上げてやるからさ」
なんて、その五百貫はおれが隠し持っているんだけどw
「飯ばっか作って、って、あっしは旦那様の言われた通りにみたらし団子を作れるようになったんスよ。お役に立っているじゃないッスか。それにわざわざ岐阜から京までやって来たというのに」
「なんだよ。何か不満なのか？　ん？」
「そういうわけじゃないッスけど。もうちょっといたわって下さいよ」
「アーアー、わかったわかった。いたわってやるよ」
と、シロジロがうざったくなったので、境内から離れの部屋に向かう。でも、後を付いてくるシロジロ。
「そもそも、おれはイラついているんだ。わかるか？」
「わからないッスよ。なんで苛立っているんスか」

ハア、と、おれは溜め息をつく。
「ちょっと考えればわかるだろうが。おれはあずにゃんと結婚して一年も経っていないっていうのに岐阜にはもう二カ月戻っていないし、あいりんを太郎のものにさせちまったし、さんざんだ」
「だって、旦那様が家を飛び出しちゃったじゃないんスか」
むう。それもそうだ。忘れていたが、おれは家出したんだ。
「それに、なんで若君とあいりちゃんの婚姻が苛立つんスか。旦那様が決めたことじゃないッスか」
むう。それもそうだ。忘れていたが、太郎の結婚はおれのささやかな陰謀だったんだ。
「たまにわからなくなりますよ。旦那様の考えていることが」
「いろいろと忙しいんだ。お前なんかと違ってな」
「ほら、いたわってないッス」
うるせえなあ。本当にうるさい。ねじり鉢巻きとクリツナを岐阜に戻して、代わりにシロジロを寄越したのは間違いだった。ねじり鉢巻きはずっと馬丁だったから、タメ語ながら自分の立場ってものをわかっているけど、こいつは馬鹿でどうしようもないドンクサ商人。商人のくせにドンクサだから何もできない馬鹿。
でも、五百貫返したら、身の回りの世話をするやつがいなくなるんで返さなーい＾＾
「おーい、牛殿」
ぐえ。この声はサル。振り返ってみると、なぜか甲冑姿で、その上に襟がきらきら光る陣羽織を着ている。何やってんだ、あいつ。侍大将になったっていうのに、一人でほっつき歩いて。
「これ、いいだぎゃあろ。西陣の呉服屋に作らせたぎゃあ」
と、陣羽織の襟をひらひらと摘みながら、満面の笑み。自慢しに来たのか。その格好で市中を練り歩いてきたのか。馬鹿だな。いや、変態の域に入っている。
「にゃあ？　その火縄銃はどうしたんだぎゃ」
「十兵衛殿に貰ったんです」

「貰ったにゃあ？　おみゃあ、火縄銃ぐらい自分で買ったらどうなんだぎゃ。にゃっ、そうきゃ、そうきゃ、すまんかったぎゃあ。おりゃあとおみゃあは貰っている俸禄が違っただぎゃあにゃ」

ぐぬぬ。なんていうスネ夫。

天狗サル

サルの自慢大会開催。

出席者は弟の小一郎、半兵衛、マタザ、無理やり連れて来られたおれ。

てか、明日は摂津に行かなくちゃいけねえっていうのに、サルはきらきら陣羽織を着たまま、酔った勢いに任せて武勇伝を連発。桶狭間の戦いで酒工作を仕掛けたこと、西美濃三人衆を口説いたときのこと、そして、箕作城でのこと。

「おりゃあはな、半兵衛の策を聞いた時、閃いたんだぎゃ。これは、早速、箕作山の猟師を引き入れなくちゃにゃらんて」

「まったく。浮かれやがって」

と、マタザが酒の椀を手にしながらぼそり。

「にゃんだぎゃ、又左。おみゃあ、六角攻めでも手柄を挙げられなかったきゃらって、嫉妬するにゃだぎゃあ」

「嫉妬なんかしているもんか。くだらねえ。お前な、そんなに浮かれているといつか寝首を取られるぞ」

「そうですよ、兄さん」

と、小一郎。

「今までのことは、たまたまうまく行っただけのことですよ。いつまでも浮かれていないで、もうちょっと自重してください。その陣羽織といい、まったく、無駄遣いばかりして」

「にゃんだとお？　おみゃあ、誰のおかげでこうしていられると思っているんだぎゃあ？」

あーあ、すっかり酔っちゃって。目が据わっちゃっている。

「殿」

と、半兵衛が苦々しい表情。いくさじゃないので、ノーマル半兵衛。

「そういった発言はおやかた様がもっとも嫌いになられる発言です

がね」
「にゃっ？」
「だったら、殿は誰のおかげでここまで来られたのかという話ですぞ」
「そ、そりゃあ、おやかた様のおかげだぎゃ」
「何を申されますか。ここにいる小一郎殿、又左衛門殿、簗田殿のおかげではないですか。それに、これまでに死んでいった兵たちをないがしろにするおつもりですか」
半兵衛にぴしゃりと言われて、サルはしょぼーん。グッジョブ。さすが、ノーマル半兵衛。
「おみゃあはうるさいんだぎゃあっ！」
唐突に、まさかの逆ギレ。
「おみゃあは黙っていりゃれえっ。おみゃあがうるさいと酒がまずくなるだぎゃあ」
そうして、盃の中をごくごくと飲み干すサル。（なぜか、サルだけが盃で、他は皆、椀）。
「相手にしていられん。おれは帰る」
マタザが苦虫を噛み潰したような表情で、ずかずかと部屋を出て行った。
「フン。又左は嫉妬しているだぎゃ」
「兄さん、まだ、そのようなことを言っているんですか。いい加減にしてください」
「おみゃあも黙っていりゃれえ！」
ハア、と、溜め息をつく小一郎。
「その点、牛殿は違うだぎゃ。にゃあ？　おみゃあはおりゃあと苦労を共にしてきたからにゃあ」
「アハハ。そうッスね。アハハ」
手柄のほとんどが取られちゃったけどね。そこのところ、この馬鹿はわかっているのかね。酒工作はおれからぼったくった金のおかげだし、西美濃三人衆の寝返りはおれが（半兵衛が）ガンコオヤジ

を説得したからだし、箕作城攻めは、そもそも信長のもとに『おれが』半兵衛を連れて行ったからだし。

『おれが』なんだよ。全部、おれのおかげなんだよ。

むう。それを思うと、ただでさえまずい酒がますますまずくなってきた。おれもきらきらの陣羽織が着てえ。

小一郎が口だけを動かして、申し訳ございません、と、頭を軽く下げてくる。

「いにゃあ、それにしても、次はどこといくさをするんだぎゃあにゃあ。三好三人衆かにゃあ。早くこの陣羽織で戦場を駆け巡りたいものだぎゃあ」

「殿、そんな悠長なことを言ってもおられないかもしれませんよ」

「にゃあ？」

「近々、おやかた様は岐阜に戻られましょう。そのとき、京に駐在される配下の方々は明智十兵衛様と殿ではないかと拙者は思います。おやかた様が岐阜に戻ったことを機に、本圀寺に移られた公方様を亡き者にしようとする者が現れるかもしれません」

「おみゃあっていうやつは」

じろりと半兵衛を睨みつけるサル。

「こんなときにでもそんな話だぎゃあか？　おみゃあはいくさのことしか考えていにゃあで、たまには羽目を外したらどうなんだぎゃ」

てか、いくさのことを言い出したのはお前なんだけどね。

「殿が羽目を外しすぎなのです」

「もう寝るだぎゃあっ！　おみゃあらと話していたってつまらんだぎゃ！　おりゃあだっていろいろと考えているんだきゃら、いちいちうるさいことは後で話すんだぎゃあっ！」

そう言っておもむろに腰を上げ、甲冑をかちゃかちゃと鳴らしながら部屋を出て行ってしまったサル。

「簗田殿、申し訳ございません」

手をついて、頭を下げてくる小一郎。

「きつく言っておきますゆえ、今夜のことはどうか水に流してくだ

され」
「いや、いいんだよ。慣れっこだしさ」
「簗田殿、拙者が送って行きましょう」
と、腰を上げた半兵衛。
ひたすら頭を下げる小一郎を慰めつつ、半兵衛と共に部屋をあとにしたおれ。
境内に出ると、肌寒い。さすがに秋も深くなってきて、木の葉がかさかさと舞い散る音。
「それにしても、最近の殿は目に余るものがあります。本当に殿が天下を取るのかと、簗田殿を疑わしく思えてきますよ」
と、笑いながら言う半兵衛。うーん。おれもそう思う。二段跳びぐらいで出世の階段を駆け上がっていくサルだが、今日のサルはいかにも凋落寸前の成金野郎の兆しが。
「ちょっとばかり、こらしめてやらなければなりませんね」
「こらしめるって、何をするつもりだよ。大袈裟なことはしないでくれよお。巻添えを食らいそうだから」
「簗田殿に害を与えたりはしませんよ」
でも、サルをこらしめるっていうのはおもしろそうだなｗｗｗおれなんて、今までさんざんな目に合わされてきたからな。
寺の門を出ると、前から走って来る提灯が。
「殿っ！」
と、提灯がおれの前に片膝をつく。見たことないけど、沓掛勢かな。髪を結ってもいなく、短髪の無造作ヘア。結構若くて美男子。
「奥方様が病にてお倒れになったとの早馬がっ。急ぎ、帰り支度をっ！」
えっ？　う、うそだろっ？
思わず半兵衛に視線を向けたおれ。
しかし、半兵衛は若武者をじいっと見つめる。
「お主、名は何と申す」
「吉田早之介でございます」

「くせ者め」
急に太刀を抜いた半兵衛。えっ？　何？　どしたの？
「沓掛の者にどうして畿内の訛りがあろうかっ！」
すると、若武者が素早く後ろに飛び跳ねる。口にあてたのは吹き矢。

こりない男

ぷっ。

「危ないっ」

半兵衛に飛びつかれ、地面を転げ回ったおれ。

やべえ。これはやべえ。どこかで出くわした展開。この若武者は間違いなく忍者。

「今日こそは逃がさへん。観音寺での恨み、晴らさせてもらうわ」

えっ？

「抜かせっ」

太刀を斜に斬り上げる半兵衛。若武者は更に後ろに跳ね跳んだが、吹き矢筒の先端が切れている。

「ちいっ」

腰巾着から新たな筒をすぐさま取り出した若武者だったけど、半兵衛が一歩踏み込んで太刀を振り下ろす。若武者はそれも交わす。

「なかなかやるやないか」

「お主、くのいちだな」

そうだ。その特徴のある鼻。男装しているが、こいつはさゆりんだ。

「それを知ったところでなんにもならん。死ぬんやからな！」

吹き矢筒を口の前にあてがったさゆりん。まずい。半兵衛の太刀の長さからして、距離を開けているさゆりんに殺されるパターン濃厚。

と、そのとき、さゆりんの頭にどこからか細長く降り注いでくる水が。いや、お湯？

「はにゃあ……」

注がれてくる先に目を向けると、サルが塀の上から小便を垂らしてやがる。しかも、まったりとした表情。泥酔しているせいか、こちらの死闘にはまったく気付いていない。

「いやあああぁぁあっつ！」
と、叫び上げた小便まみれのさゆりん。湯気がもくもく。
「にゃっ？」
「兄さん！　そんなところで何をやっているのですかっ！　早く下りてくだされ！」
と、塀の向こうから小一郎の声。
「よかだぎゃよかだぎゃ。にゃっ？　足がおぼつかないだぎゃ…。にゃあっ！」
と、塀の向こうに落ちていったサル。ばさりと音がして、残念ながら植え込みに助けられたみたい。死ねばよかったのに。
「いやっ、いやっ！」
さゆりんは断末魔の表情で狼狽中。すぐさま、半兵衛が矢筒を奪い取り、そのままさゆりんを薙ぎ倒して地面に押さえ付ける。
「ウウッ。なんでや。なんでこんな目に合わないかんのや……」
「拙者が訊ねたいぐらいだ」
と、半兵衛は羽織の袖を歯で引き裂き、さゆりんの両手を縛りつける。
「観音寺の恨みなどと言っていたが、それで簗田殿を狙うとは勘違いもはなはだしい」
「あんたなんかにわかるか！　私はこいつに騙されたんや！　こいつのおかげで私は、私は……」
ひっくひっくと泣き出したさゆりん。むう。おれのせいで騙されたって言っても、おれだってキミに騙されているんですけど。
さゆりんを組み伏せたまま、おれに振り向いてくる半兵衛。
「いかがいたしましょうか、簗田殿」
「と、とりあえず、連れて行こうか。おれの宿場に」
それにしても臭い。
なので、寺に戻ると、離れの建物の裏で半兵衛に何度も桶で井戸水をぶっ掛けられたさゆりん。さゆりんは土下座させられたまま、ずっと泣いている。なんか、可哀想になってくる。なにしろ、おれ

が唯一抱いた女だし。
「どうしたのです、簗田殿。そのような顔をして」
ぎくり。
「忍びに対して同情は禁物ですぞ。それとも、何かの事情がおありなのですか」
「いや、事情っていうか、その」
「こいつはたぶらかして私を抱いた男や」
さゆりんが急にぎろりと睨み上げてくる。
「婚姻をしたばかりだというのに、奥方には目もくれずに私を抱いた下衆な男や！」
すると、半兵衛がその口を塞ぐようにして水を思いきりぶっ掛ける。その勢いに倒されてしまったさゆりん。泣きじゃくるさゆりん。ううっ。おれはどうしたらいいんだ。
「お主になど訊いておらん。黙っておけ」
ううっ。半兵衛もなかなか鬼。ノーマル半兵衛だというのに。
「簗田殿、何があったのです」
「い、いや、その、こ、この子がおれに六角攻めのさいの作戦がどういうものなのか訊いてきたんで、嘘を」
「嘘？」
おれはついた嘘を半兵衛に説明した。本当は箕作城攻めが主戦だったのに、和田山城を総攻撃するという嘘をついたことを。
「左様なことで恨みを募らせるとは何様のつもりだ」
「私はそのせいでひどい目に合ったんや！　いたぶられた挙げ句、甲賀衆を追い出されてしまったんや！」
「男をたぶらかすくのいちが、自分が騙されたとなると恨みを持つなど言語道断であるな」
太刀をきらりと抜いた半兵衛。
「それがお主ら忍びの者の宿命であろうが。ただ、女ということで情けをかけてやる。痛みを覚える前に、一瞬にして斬り伏せてくれよう」

「ちょっ、まっ、待って」
半兵衛が太刀を振りかざしたままじろりと視線を向けてくる。
「同情は禁物ですぞ。生かせばそれだけ危険にさらされるのです」
「そ、そうだけどさ」
やっぱさ、一度は惚れた人の生首って見たくないよね。てか、そんな状況に置かれているおれってめちゃくちゃおかしいんだけど。
「簗田殿、そこをどいてくだされ」
「待てよ、半兵衛」
キリッと目を向けるおれ。
「おれはどうしようもないやつだけど、たった一つだけ、これだけは曲げないと決めていることがある。それはどんなことになっても、女子供だけには手を出さないってことだ」
「女ではありません。こやつは忍びです」
「おれにとっては女だ（キリッ」
唇を引き絞る半兵衛。フッ、キマッたぜ。

どういうことなんスかあ？

渋る半兵衛を帰らせたおれは、シロジロに寺の小坊主に風呂の支度を頼むよう伝え、再び、さゆりんのもとへ。

両手を縛りつけているだけだったから、もしかしたら、逃げているかなと思っていたけど、いた。抜け殻みたいにして、ただ横たわっている。

おれは、さゆりんの手首に巻き付けられてある布きれをほどいてやった。

「なんでや」

「言ったじゃんか、おれは女子供には手を出さない」

「馬鹿な男やな」

と、立ち上がったさゆりん。そうして、急に襲いかかって来た。両手で首を絞められた。

「何度助けられようと、私はあんたを殺すだけや！」

目が血走っている。

あかん！　カッコつければ、

や、簗田さんって男らしいわ／／

なんて、おれになびくと思っていたけれど、全然そんなことはない。ライオンをサーカスに仕込もうとして檻から出したら、途端に牙を剥き出してきたようなもんだ。

ぐぶぶ。苦しい。そもそも、なんでこんなに恨まれなくちゃいけねえんだよ。かなりの力強さだし。ほどこうとして手を掴んでも、びくともしない。

「私には帰るところなんてない。何もかも失ったんや。だから、あんたを殺すことだけが私の生きる目的や」

な、なんて、ジコチュー。こいつって絶対にB型だろ。

ああ、なんか苦しさを通り越して気持ちよくなっていく。目の前が薄らいでくる。オワタな……。

しかし、死ぬ直前に手が離れて、オワてなかった。ゴホッゴホってむせ返る。涎がだらだら。うげえ。これでさゆりんに殺されかけたのは三度目だ。

二度ならず三度までも。ぐぬぬ。いい加減にしやがれ！　仏の顔も三度までだ！

アケチソードを抜いたおれ。

「ぶっ殺してやる！」

って、あれ。アケチソードを振りかぶったけど、さゆりん、ど、どしたの？　突っ立ったまま頬に涙を伝わらせているけど。

「悔しい。悔しいわ。何にもならん。何にもならん」

むう。一人の女を泣かせてしまったか。ようやく、おれの優しさがしみ入ってしまったか。フッ、罪な男だ、おれって。

おれはゆるりとアケチソードを鞘に戻す。

「あんたなんか殺したって何にもならんことなんてわかっているんや」

「さゆりん」

ヤリチンモードに入ったおれはさゆりんを胸に抱き寄せる。

「おれのところに来ればいい。行くところがないんならな」

さゆりん、胸の中で号泣＾＾　ま、いいじゃないですか～。よろしく、ヤリましょ～う＾＾

「なんでや。なんで、あんたは」

「いいんだ。今は何も言わなくていい」

くっくっく。あっはっはっはっは。都での愛人ゲット！　なんてヤリチン＾＾　なんてイケメン＾＾　なんてエロゲ＾＾

そりゃそうだ。何度となく殺されかけても愛を注ぐおれ。これに落ちない女がいるっていうのか？　ん？

ギャッハッハッハッハ！

……アハハ。むにゃむにゃ。アハハ。むにゃむにゃ……。

アッハッハッハ！

素晴らしい朝だ。リア充の朝の太陽は実にまばゆい。

だが、しかーし、おれはそんじょそこらの野暮なヤリチンではない。傷心のさゆりんを自らのヤリたさで襲いかかるような獣ではない。

シロジロの目には触れないようにさゆりんを風呂に浸からせ、シロジロの目には触れないように寺の小坊主に布団を持って来させ、そっと寝かさせてやったおれ。

無粋な真似はしない。それが簗田流女の落とし方。ぐふふ。

「旦那様ァ」

縁側で充実さを満喫していたら、シロジロがなんだか不服そうな顔で登場。て、てか、隣にいるのはさゆりんっ。ちょっ。あんだけシロジロの目を盗んでいたっていうのに何をやってんのよ。

「なんなんスか、この者は。昨晩から旦那様の家来になったとか言って、荷物を持っていこうとするんスけど」

「聞けば、殿は今日から摂津に向けて出立されるとか」

と、片膝をつきながらさゆりん。は？　え？　シロジロ、気付いていないの？　そりゃまあ確かに男の格好だし、声も変えているけどさ。

「ならばこの吉田早之介、御同行、差し上げたく存じます」

「どういうことなんスかあ？」

おれが訊きたいんですけど。どういうことなんスかあ？

よろしく、ヤリましょ～う＾＾

摂津の有力豪族に池田八郎三郎勝正という、シロジロみたいな名前のやつがいるらしい。

信長にビビって、摂津の豪族のほとんどは降伏しているんだけど、この池田八郎三郎は馬鹿みたいに抵抗しているらしく、十兵衛とおれはこいつを説得するための使者だってさ。

たかが豪族、とっとと潰せばいいのにって思うんだけど、十兵衛の話によると、今はそういうことをするのは難しいみたい。

上洛してまだ日も浅いし、降伏してきたとしても松永弾正を筆頭に信用できない輩が多い。信長の登場で畿内のパワーバランスはごっちゃごちゃになっているから、迂闊に兵を出したら、逆に危険な展開になりかねないだとさ。

「畿内の情勢は元々から混沌としておりました。都という権力の中枢に近いため、それぞれが己の欲に駆られた行動をしていたのです。そんな中で三好三人衆や松永弾正が台頭してきたのも無理はなかったのでしょうな」

畿内は元々、足利幕府の管領職細川家が牛耳っていたらしいけど、細川家の家臣の三好長慶っていう野心家が知的な下剋上を起こして、幕府及び畿内を牛耳った。だけど、その三好長慶っていう人が死んだあとに、めちゃくちゃになったみたい。

長慶の一族や重臣だった輩が三好三人衆って言われている三好ナントカと三好ナントカとナントカカントカってやつで、そいつらが同じく長慶の重臣だった松永弾正と組んで、悪事を働かせた。

けど、三好三人衆と松永弾正の仲が悪くなって、今度はこいつらが火花バチバチ。畿内の豪族たちはこいつらに振り回されて、畿内は不安定になったと。

で、こちらも長慶の配下だった池田八郎三郎は三好三人衆派だったみたいだけど、そういうのもあってか、今だ信長と敵対関係の三

好三人衆と共に抵抗してきているってわけ。
「池田八郎三郎は魑魅魍魎の中を生き抜いてきた男。利害が一致すればこそ上総介殿の軍門に降るかもしれませんが、容易になびくような男ではないでしょう」
てかさ、十兵衛が池田八郎三郎を落とすにあたって、何のツテもなさそうなのが不安なんだけど。
確かに、おれも美濃では半兵衛と仲良くなり、稲葉ガンコオヤジを落とした功績があるぜ。でもさ、あのときは半兵衛っていうツテがあったからなんだよ。
それが、抵抗の姿勢むんむんのやつのところにのこのこと行くなんて。
「まあ、一筋縄では行きません。なので、池田八郎三郎の配下の者から当たっていくとしましょう」
うまく行くのかねえ。十兵衛って真面目キンカだからな。
で、この真面目キンカは馬で敵地に行くとなると目立つから、前々から摂津には徒歩で行くと言っていた。真面目キンカは従者二人に荷物を抱えさせて、別にあわてることもなく道中を行く。
「それよりも、拙者はてっきり、あの四郎次郎という者を供に連れて来ると思ったのですが、いつのまにやら配下の者を付けていたのですな」
そこはあんまり触れないでほしい。おれはさっきから、吉田早之介を名乗るさゆりんが、いつ女だってバレてしまうかにビビっている。
「ま、まあ、沓掛勢の兵の中でも見所があった者なんで」
と、もっともらしい言い逃れを用意していたおれ。
「ほう」
と、吉田さゆりんをじろじろと見つめる十兵衛。妙に詮索っぽい視線の十兵衛に吉田さゆりんも視線を伏せる。
「その身のこなし方、そなたは忍びの出であるな？」
げっ。もうバレているじゃんか。十兵衛もただの真面目馬鹿だっ

たじゃないってことか。結構、ヤバス。
「はっ。父が甲賀流の忍びだったため、幼き頃から忍びの術の手ほどきを受けてまいりました」
「左様か。築田殿、徳川三河守殿にも服部なる忍びの子が家中で重きを成しているそうですが、なかなかどうして、そういった類の者は使えるらしいですぞ。そういった者は大事にするべきですな」
ホッ。やっぱり真面目馬鹿。よかった。
摂津に入ると、すでに信長にぺこぺこしているやつの城で一泊することに。
用意されていた部屋に入り、荷物の紐を解いていく吉田さゆりん。
ジュルリ。
「し、しかし、十兵衛の目までたぶらかすとはなあ。さすがくのいちだけあるよな」
と、緊張をほぐすために当たり障りのない言葉をかけるおれ。
ちらりと視線を向けただけで無視する吉田さゆりん。恥ずかしがっちゃって。愛いやつだのう＾＾
「荷物はどうでもいいから、ちこう寄れ、さゆりん」
ちらりと視線を向けてくるさゆりん。依然、無視。
「そう恥ずかしがるなって」
「何を言うとんのや」
と、寝巻きをぶん投げてきた。おれの顔にクリーンヒット。
「勘違いするのもやめえ。私はもう女やない。あんたの家来や」
腰を上げたさゆりんは戸を開ける。
「それに、奥方のことを少しは考えたらどうなんや」
軽蔑の目。なんで？
戸をぴしゃりと閉めて部屋を出て行ったさゆりん。なんでよ。どこで寝るつもりなのよ。おれの愛人だろ。なんなんだよ。
くそう、おあずけ食らったせいで、ムラムラだけが残って生殺しだぜ。
チッ。仕方ないからシコシコするか。

そのとき、戸がバタンと開いた。
「忘れモンや。――って……、何をやってるんや……」
ハア、と、さゆりんに溜め息をつかれた。一気に張りを失ったおれのおいなりさん。

摂津はこういうところです

翌日、摂津の茨木城に到着。

城主は茨木重朝とかいうやつで、なんか、目がぎらぎらした悪人面。しかし、こいつもすでに信長にぺこぺこしているやつなので、十兵衛とおれに腰を低くしてもてなしてきた。

「池田の八郎三郎など己の私欲だけで生きているようなものです。たとえ上総介様に降ったとしても、いつまた反旗を翻すかわかりませぬぞ」

と、悪人面で言う。お前もな、って言いたいところ。

どうやら、この悪人面の話を聞けば聞くほど、摂津の情勢っていうのはかなり複雑。

たとえば、信長が美濃攻めをやり始めたときは、尾張一国のほとんどは信長のもので、各所の豪族上がりの配下も、信長に絶対臣従していた状態だった。

でも、この摂津はそれぞれの豪族どもの力が結構強くて、管領細川家や三好長慶に体面として服従はしていたけど、なにぶん力を持っているから、細川家を裏切ったり、長慶が死ねば豪族同士で争ったり、三好三人衆と手を組んだり、松永弾正と手を組んだり、まったくもって仁義なき戦い。

で、茨木城主の悪人面の親父は管領細川家の中で力を持っていた人だったみたいで、池田八郎三郎などが配下みたいなものだったんだけど、三好長慶と争って地位は没落し、今では池田八郎三郎に脅かされる日々。

だから、信長にいち早くぺこったわけか。

それに面倒なのが、この悪人面みたいな大きい豪族もいれば、村単位でのさばっている小さい豪族もいること。

あと、それらを更にめちゃくちゃにさせているのが、一向一揆衆。むう。悪人面からその言葉が出た途端、おれはちょっと尻込み。

信長を苦しめたと言われるあの本願寺ですか。
「まったくもって遺憾であります。己らは仏に仕えていると申しておきながら、手にしているのは数珠と槍。石山の寺社などは塀を張り巡らし櫓を構え、まさに城郭そのもの。大名気取って諸国の有士とも交流している始末です」
　各地の豪族も一向一揆に手を焼いていて、この悪人面もその一人らしい。
「とにかく、足利将軍家の復興には摂津の安定が重要課題です」
　と、悪人面と別れて寝室に案内される途中、十兵衛が言う。
「いくら京の都を平和に保とうとしても、目と鼻の先の摂津がこれだけ各々の野心渦巻いているとなると、いつまた、三好や松永弾正のような輩が現れるかわかりませぬ」
　そのためには、と、おれの肩をぽんと叩く十兵衛。
「簗田殿のお力が必要です」
　ぐう。おれの力って大したものじゃないんだけど。むしろ、他力本願に近いような。
　てことで、茨木城を拠点に、十兵衛とおれと二人で別れて、各地の豪族を説得することに。
　って、おれ一人でかよ……。
　とりあえず、十兵衛は伊丹親隆っていう伊丹城の大豪族を担当し、おれは茨木城近くの福井村にいる中川清秀とかいう小豪族のところに行かされることになった。
　翌朝、吉田さゆりんと二人で早速出発。ちなみに昨晩も不発に終わった。この二日間、さゆりんはおれに対して終始冷たい態度。なんなのよ、もう。
　そういう態度なら、おれだって。
「早之介」
　と、茨木城を出たあと、おれはキリッと口を開いた。
「お前は中川清秀とかいう豪族のことをちゃんと調べているんだろうな」

「は？」
「なんだ、調べていないのか？　ん？　お前はおれの家臣だろう。ならば、言われなくても仕事をするのがお前の役目じゃないのか。んーっ？」
「なんなんや、急に」
「なんなんや、急に、じゃない！　お前はおれの家臣だろう。なんだ、その態度。それともなんだ、家臣をやめて、女中にでもなるか？　んーっ＾＾」
　じろーっとした目をぶつけてくるさゆりん。
「なんだ、その目は」
「そんなら、教えてやるわ。中川瀬兵衛清秀は豪族やない。池田八郎三郎の配下の者で齢は三十手前の若武者。いくさばえのする男で、なかなか腕が立つと評判やけど、金銭に汚いって話や。池田八郎三郎に納める米俵勘定もごまかしているって噂の小者や」
「く、詳しい情報ありがとう」
「あんたこそなんも知らんやないか。偉そうな口叩くなや」
「はい……」
「で、どうするつもりなんや。のこのこと中川瀬兵衛のところに出向いてどうするつもりなんや」
「え、えーっと」
「思った通りや。何も考えておらん。ほんまに阿呆な人やな。瀬兵衛に殺されてしまえや。せいせいするわ」
　ウウッ（´；ω；`）　ひ、ひどいよ……。そこまで言わなくたっていいじゃないか……。

ゼニゲバ瀬兵衛

で、昼過ぎには福井村に到着。
うーむ。今までは百姓が農道を行き交うほのぼのとした光景だったのに、あそこにある集落が村なのかね。櫓が立っているし、遠目に見ても雑兵が何人かうろちょろしているし、なんか村っていうより、ちょっとした要塞なんですけど。
「何をぼさっとしておるんや」
と、振り返ってきたさゆりん。
「まさか、あんた、怖じ気づいたんか」
「そ、そんなんじゃないっ」
くそう。このアマ。ナメやがって。おれだって数々の戦火を潜り抜けてきた猛者だぞ。数々の命のやり取りを渡り合ってきた男だぞ。って、その命のやり取りのほとんどって、このアマとだった。クソッ。ぺちゃパイ。女男。団子鼻。クソッ。
とはいえ、集落に近づいてくるおれとさゆりんの姿に気付いた雑兵たちがすぐさま駆け寄って来て、おれはガクブル。
「なんだ、貴様らは！」
すっかり取り囲んできて、揃いも揃って槍先を突きつけてくる雑兵たち。
「織田上総介配下、簗田牛太郎政綱にて候」
と、さゆりんこと吉田早之介が堂々と声を上げる。さすがくのいち。その風貌といい声といい、女には見えない。でも、おれはガクブル。
「中川瀬兵衛様に折り入って話がしたいため、参上つかまつった」
「上総介だと」
なんとも言えない戸惑いの表情を見せる雑兵たち。
「とにかく、誰か殿にお知らせしてこい」
ということで、一人が集落の中に駆けこんでいく。その間も雑兵

たちは槍を下ろさず。ううっ。なんていう緊張感。確かに、何も考えていなかったおれは阿呆だったかもしれん。

やがて、駆け戻ってきたさっきの雑兵。

「とりあえず顔を見せろとのことだ。付いて参れ」

ホッ。第一の関門突破。雑兵たちに周りをぞろぞろと囲まれて、まるで容疑者みたいな扱いで集落の中を連れていかれるおれとさゆりん。

集落の中央に、塀に囲まれた大きな屋敷。中川瀬兵衛の家みたい。チッ。田舎武者丸出しじゃねえか。そのくせ、こんな目に合わせやがって。

門前にはきちんとしたなりの中年がいて、そいつが中川瀬兵衛かと思ったら、ただの家来らしい。

「遠路はるばる御苦労であった。とりあえず、主人に会わせる前に、腰の物を預からせていただくとしよう」

腰の物？　ちらりと見ると、さゆりんは太刀と脇差を外している。あ、そういうことね。おれも脇差をくくりつけている紐をほどく。って、なんで、さゆりんは持っているのよ。おれは脇差だけだし。むう。

で、脇差を中年に渡したんだけど、おれのアケチソードをまじまじと眺める中年。そうして、おれを見る。何？　明智十兵衛に貰ったものだけど、何？

「それでは中へ。お前たちは下がってよろしい」

と、雑兵たちを追っ払った中年のあとを付いていく。庭先で平伏させられるのかと思いきや、屋敷の中に上げてくれるみたい。まあ、そうだな。おれは信長の使者なんだからよ。

屋敷の奥に案内されると、部屋にはすでにごつい男が床の間を背にして座っていた。

廊下で膝をついたさゆりんに習って、おれも平伏。

「織田上総介配下、簗田牛太郎政綱でございます。このたびはお目通りをお許しくださって、有難き所存」

と、さゆりんがなかなか使者らしい口上。そういうインチキ芝居も訓練されたのかな。インチキとはいえ、実にさまになっている。
「遠路はるばる御苦労であったと言いたいが」
と、中川瀬兵衛の声はごついくせに鶏みたいな声だったので、おれは笑いそうになっちゃう。
「突然の訪問に諸手を広げて迎えられるわけにもいかねえな。用件はなんだ」
「ハッ」
と、頭を更に深くするさゆりん。
「中川様に、池田八郎三郎様に進言して頂きたい。三好を見限り、織田上総介の庇護をお受けせよと」
「フン」
と、鼻で笑った瀬兵衛。
「ずけずけと申しやがって。まあ、どうせ、そんなことだろうと思ったわ。頭を上げろ。ちこう寄れ」
部屋の中に入るおれとさゆりん。
すると、さっきの中年が瀬兵衛の傍らに歩み寄り、何やらこそこそと耳打ち。
「ふーん。そうか」
と、何かに納得した瀬兵衛はなぜか笑みを浮かべながらさゆりんに視線を送る。ま、まさか、女であることがバレて、この鶏野郎、さゆりんを襲う気じゃ。
「者どもは出払え。誰も近づけるな」
そう言って、部屋の外に待機していた家来たちに戸を閉めさせる。
ううっ。やっぱり、このスケベ、やる気だ。
でも、おれも残っているってことは3P？
にやにやとしている瀬兵衛。なんだか、いやらしい顔つき。体がごついから、ことさらいやらしい。
「簗田牛太郎政綱と申したな」
「ハッ」

「はいっ」
なんか、ちょっとした違和感が。おれはさゆりんに視線を向ける。お前は吉田早之介だろ。おれが簗田牛太郎だろ。
「お主の持っていた脇差に桔梗の紋が入っていたらしいが、土岐源氏の末裔か？」
おれに戸惑いの瞳を向けてくるさゆりん。おれも何を言っているのかさっぱりわからない。
「なかなかたいそうな家柄ではないか」
返事もしていないのに、瀬兵衛は勝手に解釈。
「俸禄もたんまりと頂戴しているであろうな」
腕組みをし、うんうんと一人でうなずく瀬兵衛。なんなの？
「羨ましい。実に羨ましい。おれなんか、摂津の田舎武者。主人は田舎豪族だしよ。家柄も乏しければ扶持もたいしたことない。そうだなあ、上総介の庇護を受ければ、今よりはましな暮らしもできるのだろうなあ」
シラーッ。
「まあなあ、おれも時代は上総介に傾いていると思っていたんだが、なにしろなあ、暮らし向きが悪い。明日の食いぶちもままならない。わかるか、簗田殿？」
と、さゆりんに向けて両目を広げた瀬兵衛。てかさ、勘違いしているらしい。さゆりんが簗田牛太郎だと思っているみたい。
ぐぬぬ。確かに女男のさゆりんのほうが見栄えがあるけどさ。なんか、腹立つ。おれをただの下僕だと思っているんだろう。くそう。
「先立つ物がないということでしょうか？」
と、さゆりんもさゆりんですっかり簗田牛太郎。くそうくそう。おれを置いてけぼりにしやがって。
「そうだ。そうなんだ。先立つ物がない。せっかく、上総介の庇護を受けたとしても、返って迷惑をかけてしまうかもしれん」
「それならば」
と、突然、おれの着物の袖に手を突っ込んできたさゆりん。あん

っ。ダメッ（＊´д`；）…

って、おいっ！　さゆりんが小判三枚をジャラリと並べやがった！　そ、それは、武田信玄のところに行くときに信長から貰ったものを、シロジロに奪い取られないよう、あずにゃんに奪い取られないよう、サルに騙されないよう、肌身離さず持っていたおれのへそくりだぞ！

「ほんの三両ですが、お近づきのしるしに」

なんで、なんで、さゆりんはおれが肌身離さず持っていたことを知っているんだよ……。

ハッ！　もしかして、六角攻めの前日のヤッたとき……。

ぐぬぬ。ちゃっかりチェックしていたってわけか。ふざけやがって。

「いや、まあ、そういうわけで申したわけではねえんだけどな」

と、瀬兵衛はにんまり。ぐう。銭ゲバ野郎め。おれのへそくりを。おれのへそくりを。

疑心暗鬼

先立つ物がないって言っていたくせに、瀬兵衛は酒を持ってきて、簗田牛太郎（さゆりん）とその従者（おれ）にちょっとしたおもてなし。

「いやあ、貴公のような話のわかる者を使者に寄越すとは、さすが上総介殿だ」

と、瀬兵衛ご満悦。さっきまで呼び捨てだったのに、すっかり「上総介殿」。

おれは酒どころじゃない。へそくりを奪われて、はらわたがふつふつと煮えくり返っている最中。幸いなのは、松永弾正に貰った五百貫をねじり鉢巻きに岐阜に持って帰らせたこと。中身はヤバい物だから、クリツナの馬屋の中に隠しておけと伝えている。

あいつのことだから、中を見たりしないだろう。じゃらじゃら鳴っているからバレバレかもしれんが。

と、おれが金のことばかりを考えている間、ゼニゲバ瀬兵衛とニセモノ牛太郎がいろいろと話していた。

「とはいえ、我が主人の考えを変えさせるにはおれだけでは捻じ伏せられないだろうな」

「そうなると、どなた様のお力が必要でしょう」

「荒木信濃守の息子、村重だな。とんだ臆病者だが、父親の信濃守が出来る男だったゆえ、信濃守が亡くなった今でも、村重は池田の主人に物を申せる立場にある」

「中川様からご紹介いただけないでしょうか」

「そうだな。文を書いておくとしよう。おれからの書状を持っていけば、村重も貴公に面会するであろう。なにしろ、臆病者だからな」

ゼニゲバ瀬兵衛に紹介文を書いてもらい、福井村をあとにしたおれとさゆりん。

「池田に向かうのは明日にしよか。十兵衛にも報告せなあかんしな」

じろっとさゆりんを睨みつけるおれ。

「なんや」
「なんなんだよ、あれは」
「は？」
「おれのふりをしやがって。挙げ句にはおれのへそくりまで取り出しやがって」
「そんなら、あんたはどうするつもりやったんや」
ぐう。
「だいたいな、使いもしないで金を袖に隠し込んでおって、器が小さいんや。なんなんや、金なんて使ってなんぼやないか。それに、私があんたのふりをしていたわけやない。あんたが口を開かんからや。ほんま、何をしに来たんやって話や。この、ド阿呆」
「うるさいうるさいうるさい！　いいか、お前はおれの家来なんだからな。ド阿呆とかそういう口を叩くと打ち首にするからな！」
「してみい」
ぐっ……。
「してみいや」
ううっ。くそう。
「ま、まるで、命を救ってやった恩を忘れたような物言いじゃないか。しかもな、二度も助けてやったんだぞ。二度も！」
「だったら、打ち首にしてみいや。ほれ」
アケチソードに手をかけるおれ。しかし、結果は目に見えている。どこからか取り出した吹き矢で殺されるに決まっている。
くそうくそうくそう！
せっかくの愛人が、こんなクソ生意気な小娘だったとは。しかも、強いし、ずる賢いし、変装もできるから、余計、手に負えない。ヤラせてくれないし。
おれの胸の中で泣きじゃくっていたあの日の夜はなんだったんだ。もしかして、あれも芝居だったっていうのか。だとしたら、さゆりんはまた何か企んでいる。
殺すか……。

茨木城に戻ったが十兵衛は戻ってきていないらしい。死んじゃったのかな。それもそれで好都合だけど。本能寺の変が起きないから。

茨木城の女中が用意してくれた夕飯を口にし、嬉しいことに風呂まで沸かしてくれていたらしい。さすがペコペコ城主。もてなし方が素晴らしい。

風呂を浴びて、再び部屋へ。さゆりんが矢筒の手入れをしている。ぐぬぬ。

「それでまたおれを殺そうって気なのか。そうなのか？　ん？」

帰って来る道中も食事中も一言も口をきかずにつんけんとしていたから、おれの言葉もついつい刺々しい。

「死にたいんなら殺してもええけど」

「どうせ、いつかまた殺そうとするんだろ」

「なんなんや急に。鬱陶しい」

「いちいちうるさい。いいから、お前も風呂に入ってこい」

「私はええ」

「小便臭いから行ってこい」

バンッと矢筒を叩き置いたさゆりん。ぎろりと睨んできながら腰を上げ、おれを突き飛ばすと部屋を出ていった。

ことあるごとに刃向かいやがって。太郎もそんな感じだが、太郎とは決定的に違うのは、さゆりんはおれの命を二度も狙っているっていうことだ。それに正体不明のくのいちあがりだっていうことだ。

おれは布団を敷き、アケチソードを鞘から抜くと、それを抱えたまま布団の中にもぐった。

しばらくすると、さゆりんが戻ってくる。さゆりんは何も言わずにおれから離れたところに布団を敷き、行燈の火を消した。

夜の沈黙がおりる。

さゆりん、すまないが、おれはお前を信用できない。おれのふりをするし、おれのへそくりを奪うし、何を企んでいるかわからない。それに、ヤラしてくれない。

愛人失格。ということは、危険なお前にもう用はない。

おれはアケチソードをぎゅうっと握り締めると、こそこそと布団を出た。そろりと寝ているさゆりんの枕元に立ち、アケチソードの刃先をさゆりんの胸に目掛けた。

拒絶反応

突き刺そうとして覚悟を決めると、さゆりんが目を開けてこちらをじいっと見ていた。
うっ。決心が鈍る。
「何をしとんのや」
何をしているって、そりゃ、殺そうとしているんでしょうが。でも、さゆりんは微動だにせず。
「やるならやりいや」
ぐぐっ。なぜ、無抵抗なんだ。
暑くもないのに汗がだらだらと噴き出るデブのおれ。いや、デブだからって出ているわけじゃない。
「捨てた命や。好きにしい」
柄を持つ手がぶるぶると震えてくる。おれは無抵抗の女を殺せるほど鬼畜なのか？　いや、そんな根性ない。てか、本当にさゆりんはおれにとって危険なのか？　ぐう。じゃあ、どうすりゃいい。
「何をしとんのや。早くしい」
「なんでだよ。寝ていると思ったのに」
「殺気でわかるんや。不憫なもんやなあ」
と、闇の中でかすかに白い歯を見せるさゆりん。
「なんでだよ……」
「知らん」
チクショウッ！　おれはアケチソードをぶん投げてしまう。
「なんや、やらんのか」
「そういうつもりならいい。ただ、一つだけはっきりとしておきたいことがある」
「なんや」
「お、おれのことをどう思っているかっていうことだ」
「阿呆か」

「なんでだよ。はっきり言ってもらわくちゃわからないだろ。おれのことを今でも殺す気なのか、そうじゃないのか、はっきりしろよ。じゃないとおれだってどうしたらいいかわからないだろ」
「阿呆か」
と、寝返りを打って顔を背けるさゆりん。
「殺そうと思っていたら、隙だらけのあんたなんかとうに殺しておるわ」
「本当か」
「本当や」
「どうせ、また騙そうってわけじゃないだろうな」
「本当にあんたって人は」
さゆりんはハアと溜め息をつく。
「そんなら、騙そうとしている人間が私はあんたを騙しますよって言うか？」
「じゃあ、ヤラせろ」
「はあ？」
「何を言われても信用できない。だからヤラせろ」
じろーっと軽蔑の目を見つめてくるさゆりん。
「好きにせえ」
と、ぷいとそっぽを向く。
そ、それは、いいってことだよね。ぐへへ。このツンデレめ。最初からそう言えばいいものを。ぐへへ。
じゃ、お言葉に甘えて好きにさせてもらいますよっと。
おれは布団をそろりとめくり、その中にもぞもぞと突入。ハアハア。とりあえず足でさゆりんの体をロック。逃がさないよ。ぐふふ。で、首筋をぺろぺろ。ハアハア。顔を背けて拒むさゆりん。いいじゃねえかよ。ハアハア。
「やっぱ、あかん」
「嫌よ嫌よも好きのうちだろ」
「ほんま、やめて」

ハアハア。ぺろぺろ。
「ほんまにやめてや。やっぱり嫌や」
「いいからいいから＾＾」
「ほんまやめいやっ！」
と、肘打ちを食らわされて、んがっ。でも、おれは負けることなくハアハア。すると、さゆりんは体をこちらに向けてきて、首絞め。
「やめいって言っているやろうがっ！」
ぐぐぐっ。こ、ここで引き下がるわけにはいかねえ。首絞めに抵抗してさゆりんを引き寄せようとするおれ。
「来んな！　こっちに来んな！　気持ち悪いんや！　ほんまに殺すかんな！」
……。
すげえ拒絶反応。なんで？　一回はヤッたじゃん。なんで？　ひどいよ。気持ち悪いなんてひどいよ。
なんだか悲しくなってしまったおれは、さゆりんの布団から一時退散。
「あんたなんかに抱かれるなんて気持ち悪くてしょうがないわ！もう絶対にこっちに来んなや！」
布団でがばっと顔を覆ってしまったさゆりん。
ウウッ（´；ω；`）　好きにしろって言ったじゃん。ひどいよ。
しかも、気持ち悪いだなんて……。

ヘタレ村重

次の日の朝になっても、十兵衛は帰ってきていないようだった。
本当に死んじゃったのかな。
「明智十兵衛はあんたなんかと違って旅に慣れておる。どこかで宿を取っているだけや」
一言余計なんだよ。
「紹介状も書いてもらったことやし、池田に行かな」
ということで、池田に向かうことに。
さゆりん情報によると、荒木村重は、親父の自称信濃守を受け継いでいるみたいで、年齢はゼニゲバ瀬兵衛と同じぐらいの三十前。大した武功もなければ、大して賢くもない。ただ、親父の配下をそのまま引き継いでいるので、勢力としては池田八郎三郎の配下でも強大。
「荒木信濃守を落とせば、池田八郎三郎に近づけるやろ。瀬兵衛の感じだと、信濃守はそう難しい男でもなさそうやな」
「あっそう」
道中、おれはおもしろくない。キモいと罵られた挙げ句、おれのことのすべてをさゆりんが決めている状況。
おもしろくない。
池田に到着。なかなか賑わいのある町。遠目に見える小高い丘陵に、土塁や柵で幾重にも囲まれた館がある。あれが池田城らしい。
ひとまず茶屋で休憩。さゆりんが茶屋娘に荒木信濃守の住まいをそれとなく訊ね、また出発。おれはただひっついていくだけ。おもしろくない。
荒木信濃守の屋敷は池田八郎三郎の幹部だけあって、大きな屋敷。門前にはやはり雑兵。おれとさゆりんが近寄って来ると、すぐさま槍先を向けてくる。
「何者だ」

「簗田牛太郎政綱にて候！」
と、さゆりんの口を先んじたおれ。フン。今回はニセモノをやらせてたまるか。
「簗田牛太郎だと？　何者だ！」
「あ、いや、その」
「織田上総介の使者であります」
と、さゆりんがでしゃばる。チッ。ゼニゲバ瀬兵衛からの紹介状を懐から取り出し、それを雑兵に渡す。
「中川瀬兵衛殿の取り計らいで参った。荒木信濃守様にお会いしたい」
紹介状を手にすると、あわてて屋敷の中に駆けていった雑兵。ぐぬぬ。
「おいっ」
「なんでしょう」
と、澄ました顔の吉田早之介さゆりん。
「お前は何もするな。これはおれの仕事だ。おれの役目だ。下僕のお前はでしゃばるな」
「殿がそれでよろしければ」
鼻先を突き上げて見くびってくる吉田さゆりん。クソが。相当ナメてやがる。でしゃばり小娘が。
しばらくすると、雑兵とともにあわてふためいた様子で駆け寄って来る若者。そうして、ヘッドスライディングをするかのごとく、おれの足元にずざざっと平伏。
「え、え、遠路、遠路、はるばる、きょ、きょ、恐縮で、恐縮でございます！」
なんだ、こいつ。
「せ、せ、拙者が、あ、荒木信濃守村重にてござ、ございます。か、上総介様には、い、いつか、いつか、いつの日か、その御前に参上つかまつろうかと思っていたところでございます！」
そういえば、ゼニゲバ瀬兵衛が荒木信濃守は臆病者だと言ってい

たけど、これは……、稀に見るヘタレ＾＾
てか、すでに落ちているじゃん。ワロスｗｗｗ
「と、とりあえず、屋敷にお上がりく、ください」
おれはさゆりんを一目見て、にやりと笑う。どうだ、見たか。おれの威光を。
荒木信濃守だなんて名前が勿体ないぐらいのヘタレ村重に居間まで案内されると、速効で酒と膳が運ばれてきた。
「た、大したもの、ものではございませぬが、ゆりると、いやっ、ゆるりとしていってください」
ヘタレ村重自ら酒を盃に注ぐ。だが、おれはむっとした。どうして、さゆりんのほうが先なんだ。ん？
「村重殿」
と、おれは仏頂面。
「その者はあっしの配下の吉田早之介という者ですが」
「あっ、あっ、こ、これは、も、も、も、申し訳ございまぬ！　せ、拙者もそ、そんな気がしておったのです。ハハ」
このヘタレ野郎が。愛想笑いですらヘタレてやがる。三十手前だっていう話なのに子供みたいな顔つきで、目玉が常にきょろきょろと落ち着かない。
「そ、それでは、高田牛太郎殿との出会いを祝して」
「ちょっと待ってください。あっしの名は高田ではなく簗田です」
「あっ、あっ、こ、これは、た、た、大変失礼しました」
と、ヘタレ村重はまたしても平伏。こいつはどうやらただの馬鹿息子らしい。部屋の外に待機している家臣や従者も苦々しい顔をしている。
「そ、それでは、簗田牛太郎殿との出会いを祝して」
「ちょっとお待ちくだされ」
と、吉田さゆりん。おれはギロリ。でも、さゆりんは無視。
「このような宴席を頂戴して有難いことですが、その前にこちらの来訪の訳を申しておりませぬ」

「あっ、あっ、そ、そうであったな。そ、そうでございましたな、簗田殿」

盃を膳の上に戻すヘタレ村重。

「それで、用件はなんでございましょう」

さゆりんが冷たい目を向けてくる。むかっ腹の立つ冷たさだったけれど、おれは一つゴホンと咳払い。

「えーと、まあ、信長様の庇護をお受けするよう、池田八郎三郎殿を説得してほしいということなんですが」

「かしこまりました！」

早っ。ヘタレっていうより、どうでもいいと思っているんじゃねえの。

まさかの伝令

「せ、拙者に任せて頂ければ、しゅ、主人も首を縦にふ、振ります」
本当かよ。信じられないな。こんなやつが池田八郎三郎の配下の中でも発言力があるだなんて。
「あ、明日にでも、早速、主人を説得しに参ります。そっ、それよりですな、い、い、一点、お訊ね申し上げたいのですが」
「なんでしょ」
「あの、あの、ま、松永弾正忠殿が、あの、九十九髪茄子を上総介様に献上、さ、差し上げたという噂を耳にしたのですけど、ほ、本当なのでしょうか」
「ええ。そうッスけど。てか、そうするよう、弾正の野郎に言ったのはあっしですし」
と、村重のあまりのヘタレさに自慢しちゃうおれ。隣のさゆりんが睨みつけてくるけど、だって、事実だもん。
「ま、まことですかっ！」
飛び跳ねるヘタレ。そうさ。あの希代の大悪党に宝物を出させたのはこのおれさ。
「じゃ、じゃあ、築田殿はあの九十九髪茄子にお目にかかれたというのですかっ？」
「え、ええ。まあ」
「な、なんて、羨ましい……。で、それで、天下の名器とはどのようなものだったのでしょう」
目をきらきらと輝かせるヘタレ。どのようなものだったのかって言われても、よく覚えてない。タヌキの下ッ腹みたいな形だったと思うけど。
「いやあ、じ、実は拙者も茶の湯には目がなくて。そ、そうだ。是非、拙者の収集物をご覧くだされ」
そう言って意気揚々と腰を上げ、家来か従者に持ってこさせれば

いいものを、自ら廊下を踏み鳴らして行くヘタレ。
うーん。多分、あいつはボンボン息子みたいなものなんだろうな。しかも、馬鹿でヘタレ。ここに来た意味があったのかと疑問になる。
「信濃守殿は重要なお人ですよ」
と、さゆりんが心の内を読んだかのように囁いてくる。いいから。お前の助言はいらないから。
「お、お待たせしました、簗田殿」
仰々しい漆塗りの箱を抱えて戻って来たヘタレ。おれの前に座ると、漆箱の板を開き、中から茶器を取り出してくる。
なんだ？　この、小学生が陶芸教室で作ったような茶碗は。むしろ、道端に落ちていたやつじゃねえの。
「拙者の、じ、自慢の一品です。み、見てくだされ、こ、この、わびさびを。まるで、朽ちたような静けさを醸し出していると思いませぬか」
「う、うん」
「堺の商人などは、派手な茶器を好んでいるそうですが、し、しかし、茶の湯の真髄は無我の境地にあると思いませんか、簗田殿」
「う、うん」
うぜえ。こんな土くれの塊を有難がっているなんて、気が狂っているとしか思えないな。てか、騙されたんじゃないの。
「それで、村重殿はこれをどちらで手に入れたのでしょうか」
「ええ、そ、その懇意にしているとある商人に二百貫で譲っていただきました。いや、一目見て気に入りまして」
ここにも馬鹿が。もしかして、その商人って松永弾正の御用商人じゃ。
いや、やめておこう。こいつには夢を見させておいてやろう。シロジロなんかとは訳が違う。こいつは一応は摂津攻略のキーマンなんだからな。
「殿っ！」
と、どたどた足音がしたと思ったら、部屋の前で片膝をついた家

来か従者。
「な、なんじゃっ。い、今は客人をもてなしているんだぞ。あとにせい」
「しかし、池田城のおやかた様から伝令が！」
「な、お、おやかた様から？　な、な、なんじゃ」
「昨日の朝、織田上総介の軍勢一万五千が京を出立し、狙うは我が池田との報せであります！　急ぎ、いくさの支度を整え、池田城に参上せよとのお言葉！」
　えっ？　おれはさゆりんと目を見合わせる。さゆりんもびっくりしている。
「や、や、や、簗田殿。こ、これはい、一体、ど、どういうこと、な、なんでしょうか」
「いや、それは、その」
　聞いてねえよ。なんなんだよ、それ。上洛したと言っても情勢が不安定だから、軍勢を出せなかったんじゃねえのかよ。
　てか、何、この敵地にいるにも関わらず、戦争が始まってしまうパターンって。全然、ありがちじゃないんだけど。先が読めないんだけど。
「や、簗田殿っ！」
　と、ヘタレの顔も真っ青。おれは汗がだくだく。
「ご安心ください、信濃守殿」
　さゆりんが口を開いた。
「おそらく、公坊様の命によるものなのでしょう。しかし、軍勢が摂津に入る前に池田様をご説得なされば、上総介は降伏を受け入れるはず。なにしろ、松永弾正をも受け入れた男ですから」
　ナイスさゆりん。さすが、くのいちあがり。口から出任せがお上手。
「そ、そ、そうだな。うん。そうだ、それまでに説得しよう。おやかた様を説得しよう。そ、そうだ、簗田殿も一緒に来て下され」
　えーっ。でも、断る理由がないし。大丈夫なのかなあ。

掌返し

甲冑に着替えたヘタレ村重やその家来従者たちと一緒に池田城に上がる。

池田城の城郭の中はすでに大騒ぎ。雑兵や馬があちこちを走り回り、櫓に登っているやつもいたり、柵を打ち直していたりするやつもいる。

むう。一気に戦闘モードですか。怒号が飛び交い、すげえ緊迫している。こんな状況で果たして池田八郎三郎を説得できるのかよ。頼みの綱のさゆりんは連れてこられなかったし。

池田城に参上するのは、人質的な感じでおれ一人。うぇっ。しかも、説得者はヘタレ。駄目だ。きっと無理だ。丘陵の頂上の館に到着し、すでに庭先には陣幕が張られてある。ううっ。戦闘態勢完了。

「あ、荒木信濃守だ」

と、陣幕の前の雑兵に告げると、雑兵が幕を上げ、家来従者を残して館の広間へ土足で上がり込む。

広間には家来が四人ほどスタンバイしていて、一番奥には池田八郎三郎らしきマッチョな中年男が。髭がもさもさで、ぶっとい眉毛が吊り上がっている。い、いかにも豪傑。ちょっとブルッちゃうおれ。

「あ、荒木信濃守に、ご、ございます。ほ、本日は良き晴天にめぐ、恵まれ、こ、これもおやかた様の日頃の思し召しの、お、おかげかと」

平伏したヘタレ村重だけど、うわあ、こいつって本当の馬鹿なんだな。

「当然だ」

と、八郎三郎。むう。まさか、こいつも。

「で、隣に従えている者は誰だ」

「あっ、あっ、あの、その、こ、こちらは、た、高田牛太郎殿にご

ざいます」
　こいつ……。
「か、か、か、上総、殿の、し、使者にございます」
「なんだと！」
　ひいいっっつ。おもむろに立ち上がり、怒声を発した八郎三郎。
ヤバス。本気でヤバス。
「上総介の使者が何の用だ！　降伏を申し入れに来たのなら帰れ！」
　ううっ。開口一番それですか。何も言葉が出ません。
「し、しかし、お、お、おやかた様、わ、我ら池田が、上総、殿と戦っても、目に、目に見えて」
「ほざけっ！　信濃守ィ、お前もおれの目を盗んでこのようなやつと面会していたというわけだな」
「ち、ち、違います！　こ、こ、こやつが押し掛けてきただけでございます」
「ちょっ。村重殿、話が違います」
「こ、こやつが勝手に、勝手に。拙者を脅して」
「殿っ！」
　と、一歩進み出たのは、ゼニゲバ瀬兵衛。い、いたの？
「引っ捕えてしまいましょう！」
　は？
「ちょっ、瀬兵衛殿っ」
　思わずすがりつこうとしたおれだけど、立ち上がった瀬兵衛に顔面蹴りを浴びせられ、ダウン。
「見ず知らずの者が人の名を軽々しく呼びやがって」
　と、瀬兵衛、太刀をキラーン。ちょ、ちょっと！　なんなんだよ、これ！
「おいっ！　この醜い鈍牛を縛り付けて牢にぶち込んでおけ！」
　瀬兵衛の声とともに庭先に立っていた雑兵たちが駆け寄って来て、痛い痛い痛い、おれを乱暴に縛り付けていく。
　嵌められた。いや、嵌められたのか？　おれを人質にしたところ

で何のメリットが。
　ヘタレ村重もゼニゲバ瀬兵衛も突然のことに八郎三郎を説得する暇がなくて、ころりと変心してしまった感じが。
　それにしても、あいつらの掌の返しようときたら。
　アケチソードを含め、身の回りのものをすべて剥ぎ取られ、館から離れた座敷牢にぶち込まれたおれ。
　ウウッ（´；ω；`）
　どうなっちまうんだ、おれ。
　八郎三郎はどうやら徹底抗戦の構え。信長の軍勢はおそらく茨木城を本拠にして池田に攻撃。そのとき、おれの生首だけが、ただいまーって信長の陣中に届けられるっていうパターンじゃないだろうか。
　ぐう。今まで何度も命の危険にさらされてきたが、そのたびになんとか逃げ回り、誰かの助けに救われてきた。でも、今回は敵地の中での座敷牢。逃げられないし、助けも来るわけない。
　死にたくねえええ。こんなとこで死にたくねえええ！
　ウッウッ。おれ、マジ泣き。
　だから、調略なんて嫌だったんだ。おれなんかが、あんな悪党どもと渡り合えるはずなかったんだ。美濃のときはサルもいたし、半兵衛もいたからなんとかなったんだ。
　今回は、真面目キンカの十兵衛という頼りない奴と一緒だったから。
　てか、十兵衛は何をやってんだ？
　もしかして、十兵衛も同じように牢屋にぶち込まれたのだろうか。きっと、そうだな。なんて頼りないやつ。クソッ。
「おい、おれが見張っておいてやる。休憩してろ」
　と、誰かの声。牢屋番が出て行き、おれの前に顔を見せたのはゼニゲバ瀬兵衛。
「すまねえな、簗田殿」
「どういうことだっ！　ふざけんなっ！」

と、格子越しに詰め寄った涙目のおれ。
「小判をあげてやったのに裏切りやがって！」
「す、すまん。おれはてっきり、お主を簗田殿とは思わなかったため、つい」
「言い訳になってねえだろうがっ！」
「ま、まあ、落ち着け。俺だって、上総介殿と争いたくなんかない。上総介殿とやり合ったところで、勝てる見込みなんてない。だから、俺がな、主人を説得するから、な？」
「信用できるかよ。お前は昨日もそうやって言って、おれを蹴飛ばしたんじゃねえか」
「いや、だから、その、それは勘違いしてしまってだな。それに、今のところ、主人の頭に血が昇ってしまっていてな」
「じゃあ、さっさと説得してこいよっ！」
「いや、ただ、先立つ物がなくてな」
ふ、ふ、ふざけてる。こいつ、マジでゼニゲバだわ。
おれは怒りのあまり、格子の隙間からパンチ。もちろん、当たらず。
「そう興奮するなって。いやな、俺もこのいくさを本当は止めたいんだ。ただ、先立つ物は必要だろ？」
「そんなこと言って、裏切ったんだろ」
「いや、だから、あとででいい。その先立つ物はいくさが止められたあとでいい。だから、簗田殿さえ良ければ、このいくさを終わらせてやるから」
ぐう。あとでいいって言うんなら、考えてやっても。
それに当然ながら命は金より惜しい。

次は西日暮里

夜が来た。

メシも出されず、うんこと小便は牢屋の中、ひどい待遇。

唯一の頼りが瀬兵衛。しかし、ゼニゲバが唯一の頼りだというこのうえない不安。

生きて岐阜に帰れるんだろうか。どちらにしろ、池田八郎三郎は信長に負ける。でも、その間に首を切られちゃうんじゃないか。

あずにゃんに会いたい。

もしかして、これは天罰？　さゆりんにうつつを抜かしていた神のお怒り？

いや、それよりも何よりも、おれはどうしてこんなところにいるのかっていうことだ。

忘れがちだが、おれは元々この時代の人間じゃない。タイムスリップしてきたんだ。

よく考えてみれば、タイムスリップしてから今まで、奇跡的な道のりだったな。ただのキモオタのはずが、織田信長に出会い、城主になり、子供を迎え、家来を揃え、武田信玄に命を狙われ、結婚し、童貞脱出。

戦国のビッグネームと渡り合いながら（逃げ惑いながら）、一家の主。元の時代では夢にも思わなかった日々。

冷静に考えれば出来すぎていたのかもしれん。

もういいや。さんざん頑張って来た。もういい。疲れた。

寝よう。夢オチであることを願いながら。

翌朝、自分のうんこの臭さに目覚めたが、やはり夢オチではなく、ちょっとがっかり。臭えし、腹も減ったし、喉も乾いたし、ウウッ。

ひと思いに殺してくれ！

でも、その日も丸一日座敷牢に詰められたままだった。メシも出てこなかった。瀬兵衛も来なかった。

地獄。発狂寸前。
「次は西日暮里～、西日暮里～。ＪＲ山手線、東京メトロ千代田線はお乗り換えで～す」
「何を呟いておる」
と、牢番が近寄って来る。
「静かにしてろ」
「次は西日暮里～、西日暮里～。ＪＲ山手線、東京メトロ千代田線はお乗り換えで～す」
「奇人め」
ぷっ。
そのとき、牢番が白目を剥いて倒れた。
え？　何？
「よかった。生きておったか」
そ、その声はさ、さゆりんっ！　ウウッ。雑兵の姿で現れたさゆりんに、ぼろくそに泣きながら、格子に掴みかかるおれ。
「出してくれ！　早く出してくれっ！」
「それはあかん。そこでしばらく生き地獄を味わえや」
「な、なんだとっ！　どういうことだよっ！」
「嘘や嘘や。冗談やないか」
と、さゆりんは笑いながら懐から何かを取り出し、牢屋の中に放り込んでくる。目を向けてみると、干し柿……。
「なんだよ、これは。出してくれるんじゃないのかよっ」
「もうちょい辛抱せえ」
「ふっ、ふざけんなっ」
「ちょっとは話を聞きい。私も大変やったんやから」
さゆりんはこれまでのことを話してきた。どうやら、おれが捕まったあとにさゆりんもヘタレ村重の屋敷で取っ捕まりそうになったが、そこは元くのいち。難なく脱出して、一度、茨木城に戻ったらしい。
そこで悪人面の茨木重朝と面会したところ、なんということでし

ょう、明智十兵衛は伊丹城の城主をとっくに説得し終えていて、軍勢を迎え入れる準備をしているってふざけた話。

あの野郎……。もしかして、最初からそういう段取りだったんじゃねえのか。おれを生け贄に使ったんじゃねえのか。

「あのキンカ野郎！　おれを騙しやがったんだな！」

「ちょっと待ちい。十兵衛も知らんかったようや。私も伊丹におった十兵衛に会うてきたけど、急に出陣の報せを受けたようや」

「そんなの信じられるか！　どいつもこいつも、悪党ばっかだ！」

「そんなら、そこで一生過ごしいや」

「うっ。そ、それは」

「瀬兵衛にも村重にも会ってきたわ。どういうことや、って、短刀をちらつかせてやってきたわ。そうしたら、本意やないって、怯えておった」

けらけらと笑うさゆりん。ぐぬぬ。笑い事じゃねえだろ。牢屋に入っている主人を目の前にしてよ。

「それにあんた、瀬兵衛と取引きしたそうやないか。そんなら、今、ここであんたを逃げさせるわけにはいかん。瀬兵衛のつまらん欲のおかげで終わるいくさになるんやからな。阿呆やな。じっとしていれば助けてやったのに」

「そんなことはどうでもいいから助けろ！　どうせ信長がぶっ潰すんだ。助けろ！」

「私はいくさなんて嫌いや。どうせなら、やらんほうがええ」

「じゃ、じゃあ、何しに来たんだよ！」

「それや」

と、さゆりんがちらと視線を向けた先には干し柿。

「腹が減っていると思ったからや」

「こ、こんなもの」

「さっさと食べいや。この牢番は死んだわけやない。仕込んでおったのは眠り薬や。起きる前に食べときや」

「もうちょっとマシなもん持ってこいよ！　くそっ！」

「ま、瀬兵衛と信濃守が企んで八郎三郎を口説くらしいけど、それがもし失敗しても、あんたのことは助けてやるかんな。首を長くして待っているんやな」

そう言って、軽い感じで去っていったさゆりん。

ウウッ。そうだ。おれの配下にはくのいち上がりがいたんだった。さゆりんならこうやってさらっと来て、おれを助けられたはずだったんだ。

それなのに、ゼニゲバと無駄な取引きをしちまった。

脱出成功？

次の日もさゆりんは干し柿を持ってやって来た。
「あかんかもな」
瀬兵衛と村重が説得できていないらしい。当たり前だ。あんなゼニゲバとヘタレが説得できるわけない。八郎三郎にとってはもっとも信用できない家臣じゃないか。
「上総介は伊丹城に入ったそうや。明日か明後日には池田城攻めやろ」
「じゃあ、早く出してくれよ」
「それはあかん。ギリギリまで待たな」
じ、実はこいつ、おれを見殺しにする気じゃ。
さゆりんが去ったあと、干し柿をしゃぶるおれ。悔しいが、今の腹ペコのおれにはうまい。自然、涙が出てくる。こんなひもじい思いをさせられている現状に。
「うーっ」
牢番が眠りから覚めて、あわてて干し柿を口の中に押し込む。
「また、寝ちまったのか。最近駄目だなあ」
「疲れているんでしょ」
「確かにな。毎日毎日、あんたのお守りで疲れちまったよ。さっさと首を斬ればいいのによ。忘れられているんじゃねえのか」
むかつくやつ。
翌日の昼になって、おれも牢番も寝転がっていたんだけど、銃声が聞こえてきて飛び跳ねた。あわただしい声も聞こえてくる。
「は、始まっちまった」
呟いた牢番。目を泳がせながら、格子の向こうのおれを何度も振り返り、
「お、俺はまだ死にたくねえっ！　じゃあな！」
と、走って消えていった。

おいおい。逃げるんなら、せめてここを開けてからにしてくれよ。てか、さゆりんは何をやってんだよ。助けに来てくれるんじゃねえのかよ。

銃声や怒号はそのうちエスカレート。刃物と刃物がぶつかり合う音まで聞こえてくる。むむう。織田勢はすぐそこまで来ているのか。

それに、池田の連中からおれはすっかり忘れられているような。なら、ここが一番安全な場所かな。

「父上っ！　父上っ！」

あ、太郎。左手に太刀を持ったまま、甲冑をかちゃかちゃと鳴らしてやって来た。後ろにはぞろぞろと馬廻衆。

「ここだ、早く出せっ！」

「生きてくださいましたか。やっぱり父上は運に恵まれております」

「どうでもいいから早く出せっ！」

で、閂木を外され、脱出。といっても、ずっと牢屋にいたものだから、足がふらふら。太郎や馬廻衆に抱えられる。

「く、臭っ」

ぐぬぬ。貴様は確か、甲斐から逃げ帰ってきたときに、さゆりんから助けてくれた毛利ナントカってやつ。くそう。むかつくが、助けてくれたから我慢してやる。

外に出ると、うへえ、日差しが目に痛い。しかも、戦争の真っ只中。弓矢や銃弾が飛び交って危険地帯。

「吉田殿、父上をお任せしましたぞ」

「かしこまりました」

で、吉田殿に肩を借りるおれ。って、さゆりんじゃねえかよ。クソッ。にやにやしてやがる。

「危機一髪やったな」

「テメー、話が違うじゃねえかよ」

「助けに来てやったやないか。それに、私が来るより、息子が来たほうが盛り上がるやろ」

結局、こいつはおもしろがっていたんだな。いくさは嫌いだとか

言っておきながら、すげえにやついているじゃねえかよ。
「簗田殿！　簗田殿！」
駆け上がってきた馬から飛び降りたのは、やはり甲冑姿の十兵衛。
「生きておったか。生きておったか」
おれの手を取りながら、半泣き。おれはギロリ。
「申し訳なかった。本当に申し訳なかった」
まあいい、これで太郎の件についての十兵衛への借りも帳消しだ。
明日からさんざんいじめてやる。
「さあ、上総介殿も身を案じられておる。早速、本陣に向かいなされ」
そ、そういえば信長のやつ。
まさかおれが捕まっているのを知っていて、池田城を攻めているのか。
あの野郎……。
おれとさゆりんは城郭を駆け上がっていく兵隊たちに逆流して、丘陵のふもとへ。城下の町はところどころで火事が発生。町民たちが逃げ惑う中、足のおぼつかないおれはさゆりんに背負ってもらう。
「あんた、重いわ。臭いし」
「さっさと助けないからだろ。どちらにしろ瀬兵衛も村重も駄目だったじゃねえかよ」
「阿呆。あんたの首が撥ねられなかったのは瀬兵衛と信濃守が八郎三郎を止めておったからや。まあ、あの二人も今度のいくさで亡き者やろうけどな」
ざまあ。命を救ってくれたことには感謝するが、そもそもあいつらが掌を返したりしなければ、こんなことにはならなかったんだ。
てか、おれの言うことを聞いていれば、あいつらは生きていられたんだ。だから、瀬兵衛も村重もとっとと死ね。いや、もうすでに死んでいたりしてｗｗｗ
で、城下外れの本陣へ。見張りの雑兵に名を告げると、雑兵はあわてて中の信長のもとに報せに行く。ふふ。ようやく帰ってこられ

たぜ、威張れる場所に。
　許しを得て、中へ。椅子に座っていたのは黒い変てこな鎧の信長と佐久間ヒゲオヤジだけ。サンザとかゴンロクはいない。戦場に出ているのか、それとも今回は来ていないのか。
　おれとさゆりんは平伏。
「築田牛太郎、只今帰って来ました」
「なんだ、死ななかったのか」
　きゃっきゃっきゃっと笑う信長。こ、こいつ、おれの命を鼻くそぐらいにしか思ってねえ。
「まあ、死なねえとは思っていたけどな。お前はとことん悪運だけの男だからな」
「は、はあ。有難き幸せ」
「それにしても、お前は何をやっていたんだ」
　うっ。
「お前らの調略の手助けに、せっかく軍勢を出したっていうのに、池田八郎三郎はまったく折れる気配がなかった。伊丹城は降伏したというのにな」
「の、信長様が早すぎるんです」
「なんだと？」
「あっ、いや」
「なら、もう少し猶予があったなら、池田を落とせたというのか？　あーっ？」
「い、いや、そ、そういうわけでは」
「なら、もういっぺん行って来い！　池田を落としてこい！」
　えーっ！

いざ、突撃！

どう考えても無理だろ。織田勢が城郭を攻め上がり、池田勢が応戦、この状況下でどうやって池田八郎三郎に会いに行けって言うんだよ。

本陣から眺める池田城は至るところから煙が上がっている。

「阿呆が。どうしてあんな余計なことを言うんや」

下唇を噛みしめるしかないおれ。何の反論もありません。阿呆です。

「どうするんや」

どうするって言われても、チクショウ。そもそも、足がふらふらだから歩きたくもない。かといって、逃げたら信長に怒られるだろうし。

「行くしか…ないじゃん…」

「どうやってや！」

「おぶってけ！」

「冗談やろ……」

がっくりと頭を垂れるさゆりん。

「命令だ。おぶってけ！」

「死ぬで」

「とりあえず行った振りだ」

そう。とりあえず行った振りさえしておけばいい。どうせ無茶なんだから。その後は信長に平謝りすればいいんだ。

おれはさゆりんに背負ってもらい、再び池田城へ。火の粉が飛ぶ城下を潜り抜け、城郭の丘陵に差しかかる。

「あかん。もう疲れた。あかん」

「もうちょっと登れって。他の奴らに見られるようなところまで登れって」

攻撃部隊のほとんどは座敷牢のあった下部から、城郭の中腹にま

で侵入しているらしく、おそらく今の決戦場は頂上の一歩手前。その辺りまで行けば馬廻衆とかの目に留まり、とりあえずは頑張っていたという報告が、あとのお楽しみ会で披露されるに違いない。

「私を牛車みたいに扱うなや！　あんたがどんだけ重いかわかってんのか！」

うっ。鬼の形相で詰め寄られて、おれは後ずさり。だよね、さゆりんって女の子だったもんね。

仕方ない、自力で歩いて行くか。でも、さゆりんに肩だけは貸してもらうけどね。

それしても信長の鬼野郎。何のいたわりの言葉もなく、戦場に差し向けるなんて、とんだ鬼畜野郎だ。氏ね。本能寺の変より前に死ね。

あっ。

「ちょ、さゆりん、待った」

「なんや」

「いいものを見つけた」

おれが苦しめられていた座敷牢の建物の近くで、首を上下に振り乱している黒い馬を発見。あれは、太郎の凶暴馬だ。

乗り捨てていったようだが、様子を見ると、どうやら太郎の帰りをちゃんと待っているらしい。結構な量の涎を垂らしているが、躾が施されたんだろう。

「あれに乗っていく」

「あれって、左衛門太郎の馬やないか。あんたがあんなのを乗りこなせるわけないやんか」

「大丈夫だって。おれはあの馬の兄貴に乗っているんだから」

ぐふふ。相当ヤバい馬だけど、スイッチの入ったクリツナにだって跨っていたおれだ。あのときはビビって振り落とされちゃったけど、ビビらなければ大丈夫。それにあの凶暴馬に跨って行けば、かなり目立って、頑張りアピールができる。

で、凶暴馬にそろりそろりと近寄って行くと、凶暴馬は興奮して

いて気付かないのか、ずっと首を上下に振っているだけ。
「あかんて。絶対にあかん」
「いいから乗せろ」
さゆりんが渋々と出してきた手に足を乗っけて、凶暴馬の鞍の上にジャンプ。すぐさま手綱をキャッチ。短めに握って、落馬対策。
すると、案の定、ヒヒーン、と、凶暴馬が暴れ出し、前脚を高く掻きあげる。フン、凶暴馬め、そんなことは想定内だぜ。と、思いきや、予想以上に高く立ち上がって、や、ヤバ。
「あかん！　早く降りんか！」
うん。やっぱ降りよう。でも、この体勢じゃ降りられないから、綺麗に振り落とされよう。
と、そのとき、凶暴馬が着地、すぐさま駆け出した。あわわ。何の指示も出していないのに、物凄い跳躍で勝手に城郭を駆け上がっていく凶暴馬。おれはへっぴり腰。しがみつくのが精いっぱい。
凶暴馬は前を走っている味方の織田勢もお構いなしに蹴飛ばしていく。悲鳴が前から後ろへと風のように流れていく。
「おいっ！　牛！」
声のほうに目をやったら、どこかで見かけた赤マント。でも、止められません。さよならー。
で、土塁をジャンプ。味方を前脚でキック。凶暴馬の勢いにビビった味方が波を割るようにして道を開けていく。
頂上に到着すると、調度、丸太で大手門をぶち破った直後らしく、織田勢が館の中へなだれ込んでいっていたけど、そんなのも蹴散らして、凶暴馬とおれは館の中へ突撃。
中には池田勢の兵隊がうじゃうじゃ。でも、凶暴馬が前脚と後脚の連続攻撃で薙ぎ倒す。おれは馬の上でぶるんぶるんとロデオしているだけ。
「父上っ！　何をしているのですかっ！」
ううっ。太郎。こいつから早く降ろしてくれ。でも、太郎もそれどころじゃないらしい。なだれ込んできた織田勢と池田勢がもみく

ちゃになって死闘中。
こ、ここまで来たなら、啖呵切ってやる。
「お、おれは簗田牛太郎政綱だいっ！　い、池田殿っ、さっさと降伏しろぉ！　すべての者の命と所領はそのままにしてやるからよ！」
声を振り絞ったまではカッコよかったが、ロデオに力尽きて、あえなく落馬。
「待て！　お前ら、待て！」
と、どこからか雑兵をかき分けて現れた男。
「我は中川瀬兵衛清秀！　簗田殿、その話、まことであろうな！」
あ、やべ。口から出任せ言っちゃった。

久々のボコリ

おれの口から出任せの降伏申し入れによって、滅亡直前だった池田八郎三郎はすんなり降伏。おれは信長の前にぶるぶると震えながら平伏。

「ずいぶんと勝手な真似をしてくれたじゃねえか、あーっ？」

「す、すいませんっ！　つい！」

佐久間ヒゲオヤジや稲葉ガンコオヤジ、マタザやウザノスケといった居並ぶ将たちもシラーッとした視線をおれに浴びせてくる。

「命ばかりか所領まで安堵させるとは、牛はずいぶんと寛大な人間だな。あーっ？」

「ま、まあ、それはそのときの勢いで言っちゃったってことで、やっぱり所領は没収ってことで」

「たわけっ！」

がつんと何かを投げつけられたおれ。ウウッ。痛いよお。

「そのような天下の信を失うようなことができるかっ！　このうつけがっ！」

で、信長のキックキックキック。おれは耐える亀。久々にボコられた。チクショウ！　信長氏ね！

「恐れながら、おやかた様っ！」

「なんだ！」

マタザが声を出して、信長のボコリが一時中断。

「牛の処置は不幸中の幸いかと。なにしろ、摂津の情勢は不安定でございます。ならば、攻め落としてもなお、池田八郎三郎の所領のすべてをそのままにさせたとなれば、池田八郎のおやかた様に対する恩義も計り知れないものになりますし、摂津国内の他の諸将もおやかた様の度量の広さに心服いたしましょう」

マ、マタザ……。とうとうお前も、ただのジャイアンから映画のジャイアンになってくれたか（´；ω；`）

「言うようになったじゃねえか、マタザ」
おれから離れ、椅子にどかっと座った信長。マタザ、ありがとう。
これで、お前のボコリもチャラにしてやるよ。
「だが、気に入らねえのはこいつが勝手に仕出かしたってことだ」
「軍紀違反として謹慎ですな」
顔を伏せたまま視線を向けると、やっぱりウザノスケ。にやにやしてやがる。
「そんなもの当然だ。その足で岐阜に帰れ。一カ月間、己の屋敷から一歩も外に出るな。いいな！」
あ、そんなものでいいんスか。むしろ、それって好都合なんだけど。
「それと、牛。今後、池田の連中が変な動きをしたら、そのときは覚悟しておけよ」
むう。それはちょっと怖い。あいつら、すぐに掌を返すからな。
でも、今は岐阜に帰れるってことでラッキー＾＾　しかも、一カ月も引きこもれるじゃん。フヒヒ。
で、陣中からそそくさと退散。
「父上、大丈夫でしたか？」
早速駆け寄って来た太郎。ふらふら足のおれに肩を貸してくる。
「大丈夫大丈夫。今から岐阜に戻れだとさ」
「それにしても、どうしてあんな危ない真似を。ただでさえ馬に跨れないというのに、クロに乗るなんて」
「ただでさえ跨れないって、ちゃんとあの凶暴馬に跨っていただろ。何を言ってやがるんだ、お前は」
「しがみついていただけじゃないですか」
「しがみついていても跨っていることは跨っていたんだ。そんなことよりな、あいりんと仲良くやっているのか。ん？」
「仲良くやっているも何も、岐阜に戻っていませんから、会っていませんよ」
「手紙とか書いてやればいいだろ。可哀想に」

「言われなくても書いておりますよ。そもそも、父上は何もやっていないじゃないですか。丹羽様に取り計らうのも全部拙者に押し付けてしまって」
「自分の結婚は自分でやれ。おれはそういう主義だ」
「よく言いますよ。面倒なだけのくせに」
「うるさいっ。それより、さゆり――、吉田早之介はどこに行ったんだ」
「そこにおりますが」
「どけっ」
おれは太郎を突き飛ばし、さゆりんの背中に乗っかる。さゆりんの舌打ちが聞こえたが無視。
「お前は馬廻衆なんだからさっさと自分の持ち場に戻れ。おれはこいつと岐阜に帰るからな」
シラーッとした視線の太郎。うっ。
「なんか、今朝会ったときから思っていたのですが、吉田殿はどこかで見覚えのある顔なんですが」
「か、勘違いだ。こいつは京で拾ったやつだ。ちゃんとこいつの俸禄を決めておけよ。あんまり安いと駄目だからな」
早く逃げろ、と、おれはさゆりんの耳元で囁き、さゆりんはおれを背負ったままそそくさと太郎から逃げる。
「いつか知れてしまうで」
「構うもんか。あいつはおれの子供なんだから何も言わせん」
「だったらええけどな」

恐ろしい女房

茨木城で二日間休んだあと、さゆりんと共に京へ。摂津さよなら。もう二度と来るもんか。

京に着くとシロジロと合流。一泊して、うざったいサルに捕まらないうちに岐阜へ。ついでに、マリオの了承を得て沓掛勢も連れてく。

「摂津はどうでしたか、旦那様」

「シラネ」

にやにやと笑うさゆりん。話したくもない。どうせ馬鹿にされるからな。

沓掛勢もようやく故郷に帰れると表情も朗らか。

のろのろと歩いていたから、岐阜に到着するまで四日かかった。

その間、おれは重大な事態に気付く。

おれはさゆりんをこのまま岐阜の屋敷に連れて行くのだろうか。

むむ。一応は吉田早之介という家来ではあるが、さゆりんは女だ。しかも、この数日、ずいぶんと密着した生活を送って来た。キモイと罵られたものの、同じ部屋で寝たし、数々の困難を乗り越えてきた。ピンチの中での男と女には恋愛感情が生まれると聞いたことがある。それに、おんぶもしてもらった。おれのおいなりさんのぬくもりをさゆりんはその背中に受け止めているんだ。

さゆりんがおれに惚れていたらどうしよう。あずにゃんの前で、とち狂った行動を起こしそうだ。

一気に家庭崩壊。ヤバい。

「とりあえず、早之介は沓掛勢と一緒に沓掛城に向かうんだ。沓掛城の政務を見なくちゃな。うん」

「沓掛の政務なら大島殿に任せておけばいいんでは？」

ぐっ。なんで、そんなことを。

てか、そうか、大島のおっさんが付いてきやがっているんだった。

すっかり忘れていたが、大島新八郎というマリオの下僕が沓掛勢を見張っているんだった。

「で、でも、お前はおれの唯一の配下だから。お、おれも大島殿にあんまり任せているのは気が引けるし」

「拙者はいくさしか知らぬゆえ、政務などは見れませぬ」

ぐっ。なんでそういう意地悪を。きっと、さゆりんはわかっているんだ。おれが岐阜から遠ざけたがっていることをわかって意地悪をしてきているんだ。

おれに惚れてやがるな。

「別にいいじゃないッスか。大島殿がいるんなら。それにせっかくなんだから、奥方様にも紹介するべきッスよ」

馬鹿だ。本当に馬鹿だ。シロジロはさゆりんに一度会っているだろ。なんで、わからねえんだ。わからないままのほうがいいけどさ。

「是非、紹介してください。殿の奥方様を」

にやにやしてやがる。何を企んでやがんだ。

おれはなんとか時間を引き延ばそうと、沓掛勢の寝床を例の寺の住職にお願いし（大島新八郎が）、その後はサルの屋敷に行って遠山さんに再会し、サルは無事だとか元気でやっているだとかいうどうでもいい談笑をしたあと、次はマタザの屋敷に行き、おまつにマタザは無事だとか元気でやっているだとかいうどうでもいい談笑をしたあと、マタザのガキどもの遊び相手をしてやり、外に出たころにはすっかり日暮れ。

「何をやっているんスか。いい加減、屋敷に戻りましょうよ」

「お前は馬鹿だな。普段、お世話になっている女房方々に挨拶をするべきだろうが。次は森三左殿の屋敷に行くぞ。その後は柴田様の屋敷だ。一応、おれの義理の兄貴のところに顔を見せなくちゃな」

「なんなんスか。普段、絶対にそんなところに行かないのに」

「帰りたくないんじゃないんですか」

吉田さゆりんがにやにや。くそう。すっかりおれの胸の内は筒抜け。

「ははあ。そういうことッスか。そういえば、旦那様は家出したまんまッスもんね。だったら大丈夫ッスよ。奥方様は怒っていないッスから」

そういう問題じゃねえし。うざってえ。

「さあさあ、挨拶なら明日にでもして、帰りましょう」

シロジロに背中を押されるおれ。

「そうです。殿はおやかた様に蟄居を言い渡されたのですから、おとなしくしていなければなりません」

「なんスか。蟄居って」

「殿は摂津で軍紀違反を起こしたため、謹慎処分の身なのです」

「そ、そうなんスか？　何をやらかしちゃったんスか？」

「ちょっとばかり活躍しちゃっただけだ。そんなのはいいから、もういい。帰る。素直に帰る。ただし、余計な真似はするなよな、お前ら」

と、シロジロにも言ったように見せかけて、さゆりんをギロリ。

シロジロは首を傾げているけど、さゆりんは澄ました顔。

頼むから、頼むから何もしないでくれ。おれは胸をばくばくさせながら稲葉山の山道を行き、やがて見えてきた我が家の門。怖い。逃げられるものなら逃げたい。

門をくぐると、玄関に入り、

「帰りましたぞーっ！　殿がお戻りになったッスよーっ！」

と、シロジロ。余計な真似をするなって言っているだろうが。クソッ。

で、どかどかと廊下を踏み鳴らす音。わちゃー。喜び勇んじゃって。いや、本来ならおれも喜びたいところだよ。あずにゃんに抱きついてチュッチュしたいところだよ。でも、隣にはおれの愚行の証が……。

「だ、旦那様っ！　お帰りなさいませっ！」

と、お貞が平伏で出迎え。あいりんはしばらく目を潤ませたままおれを見つめていたけど、思い出したようにして平伏。

「お、お、お帰りなさいませ。ウウッ」
泣いて喜んでくれるとは。おれも泣いて喜びたいところだが、隣にはおれの愚行を暴きかねないやつが……。
暴かれたら、次の日にはきっと、おれは、家畜扱いにされる……。で、あずにゃんは？　いないならいないでいいけど。
「とりあえず、足を流させてもらおうか」
「は、はいっ」
ふう。上がりかまちに腰を下ろし、何とも言えない溜め息。無事に帰って来られたことを喜ぶべきか、嘆くべきか。
「殿はなかなか家の者に好かれているようですな」
さゆりんが笑みを浮かべながら言ったけど、すべてが何かの企みを含んでいるようにしか聞こえない。
「そりゃそうッスよ。家の者というより家族みたいな――、あっ、奥方様っ」
シロジロがその場にあわてて平伏。げっ。さゆりんも片膝をつけている。
振り返ると、おれをじいっと睨みつけてくる女。えっ。あずにゃん？　髪が伸びているし、着物もちゃんとしているし、脱デザイナしている。てか、お美しい……（＊´д｀；）
「亭主殿、まずはわらわに申すべきことがあるのでは」
「えっ？」
脱デザイナしていても、性格は変わっていないようで。いや、もしかして、バレている？
「えっ、じゃあるまい。忘れたか、何も言わずに家を出て行ってしまったことを」
「あっ、そ、そうでしたね。どうも、すいませんでした」
あずにゃん、ギロリ。ううっ。そういえば、おれはあずにゃん恋しさに脳内補正しまくっていたが、あずにゃんは恐ろしい女房だったんだ。
「軽々しい。そんな顔、見たくもないっ」

で、奥にすっ込んでいっちゃったあずにゃん。さゆりんが笑いをこらえているのか肩を揺らしている。

うーん。と、とりあえず、良かったのかな。

牛太郎の野望

久々に簗田家揃っての夕飯。太郎がいないけど。あと、梓様。
「ということで、おれは謹慎一カ月になったから、一カ月間はずっと家から出られない」
「なら、これも不幸中の幸いかと思って、ゆっくりと休んでください」
と、一家唯一の年寄りのお貞。
「今まで旦那様は働きすぎました。摂津でも牢獄に入れられるとは思いもしませんでした。疲れを癒し、体を休ませてあげてください」
お貞はさすがだよ。本当にお前だけはおれの心の恋人だ。心だけの。
「それにしたって、あいりちゃんを丹羽様の養女にして頂くとは、まことなのですか」
「そうだ。まあ、おれの知らないところで太郎とあいりんは出来ていたっていう話らしいからな。そうなんだろ、あいりん。ん？」
「も、申し訳ございません。ただ、別に、そういう変なことは」
「いいじゃないッスかあ。決まったことなら決まったことで。むしろ、柴田様とも縁戚、丹羽様とも縁戚ともなると、この簗田家もずいぶんと格が上がるもんスよ」
お前が言うなよ。お前が。どれだけ人が苦労してきたかも知らないで。だいたい、おれはそんなみみっちいことであいりんを養女にするわけじゃねえ。苦肉の策だ。苦肉の。
「そんなことよりよ、旦那」
と、ねじり鉢巻き。どうせ、あの凶暴馬に乗ったことだろ。
「あのクロに跨ったって本当なのか。おれは信じられねえ。並大抵のやつじゃあれを乗りこなせるわけねえ」
ほら。
「乗りこなしておりましたよ」

吉田さゆりんがにやにやと笑いながら言う。こいつはずっとにやにやし続けている。こっちは、いつお前がボロを出して女ってバレるかどうかはらはらしているっていうのに。

「まさに一騎駆け。殿の手綱さばきに恐れをなして、味方さえも道を譲っておりましたよ。ねえ、殿」

嫌味にしか聞こえねえ。おれだって、あの馬を操っていたなんて思ってなんかいねえんだから。

「まあ、そうだな」

「実に豪快でありましたよ」

「吉田殿。別に遠慮しなくたっていいんスよ。簗田家は遠慮をしないのが家風ッスから」

いつからそんな家風が出来たんだよ。むしろ、遠慮しろよ。

「それよりも、吉田殿とはどこかで会ったような気がするんスけど」

「どこにでもある顔だからだ。てか、お前はさっきから言いたい放題言いやがって。何を浮かれていやがんだ。黙ってろ」

「なんなんスかあ。あっしにだけそんな」

「お前がうるさいからだっ！　黙ってろっ！」

しーん。

ひそひそ。せっかくお戻りになられたのに、どうしたのですか、旦那様は。ひそひそ。きっと、奥方様に怒られたからッスよ。ひそひそ。梓様もお待ちかねしていたというのに、あんな受け答えをするから。ひそひそ。いや、本当はきっと、クロに乗りこなせなかったんだ。それがあんな嘘をついて。ひそひそ。

「ひそひそするなっ！」

くそう。せっかく戻って来てやったっていうのに、このざまだ。どこまでこいつらは主人を馬鹿にするつもりだ。おれがあれだけ苦労をしてきたから、今のこいつらがあるっていうのに。さゆりんもくすくすと笑っているし。くそう。

「風呂だ風呂っ！　お貞、風呂を沸かせ！」

「かしこまりました」

さっさとむかつく食卓をあとにし、お貞に薪を焚かせて、湯船に浸かる。

くそう。くそう。よく考えてみれば、おれは貧乏くじを引いているような気がしてならない。謹慎処分を受けたとはいえ、おれは池田城で活躍した。牢屋にまでぶち込まれてもなお、生還し、一人で敵の前線に突っ込んでいったんだ。

それなのに、あの活躍を目にした者は一家の中では新参者のさゆりんしかいないという事実。太郎も目にしていたけれど、どうせ、あいつのことだから、欠点だけを並べ立てて終わり。沓掛勢は池田城攻めには参加していないし、どうせ沓掛勢がいたところで、一家の連中とは接点がないから、おれの素晴らしさを知らずじまい。

沓掛の連中はおれを神のように崇めているっていうのに。

それに六角攻めのときだって、おれのおかげで半兵衛の策が信長に披露できたんだ。

なのに。それなのに。

おれは貧乏くじを引いている。美濃攻めだって。上洛の計画だって。おれが水面下で動いていたから全部達成できたんじゃねえか。クソッ。

でも、まあ、上洛計画はちょっと失敗しちゃったし、六角攻めもいいところなしだったな。むう。美濃攻めもサルにいいところを持っていかれちゃったし、池田城攻めもゼニゲバとヘタレにいいように騙されたし。

なんか、ここぞというときに、チャンスを取りこぼしているような気がするな。

おれを馬鹿にしている連中をなんとかぎゃふんと言わせられないだろうか。あと一歩でおれも大手柄取りなんだ。いつも、あと一歩なんだ。

手柄を取るにはいくさだ。となると、次のいくさは朝倉・浅井連合軍との戦いか。朝倉を攻めた信長が浅井長政に裏切られて窮地に陥る。そこでおれは大活躍。ふふ。そうだ。窮地に陥った信長を助

ければおれの評価もうなぎ昇り。
でも、どうやって、信長の窮地を救うんだ、このおれが。何の取り柄もないおれが。
いや、おれがやらなくたっていい。沓掛勢がキモブタ家康の兵隊たちみたいにめちゃくちゃ強ければいいんだ。
そうだ。キモブタ家康は自分自身は大した奴じゃないのに、ファイヤー兜みたいな猛将もいれば、雑兵までが鬼のように強いから、あいつはそこそこ威張っていられるんだ。
おれもあいつを見習って、下の者を屈強な連中にすれば。
だけど、沓掛勢って、マリオのおかげで今でも相当訓練されているしな。おれが何かやったところでこれ以上強くなるとは思えない。
山県クソサブロウの目立ちたがり屋集団を一撃必殺するような連中にしたいけど。
山県クソサブロウ？
そうか。鉄砲か。沓掛勢をイメチェンして、鉄砲隊にしちゃえばいいんだ。そうだそうだ。なぜか織田家の兵隊は鉄砲隊が大して活躍していない。長篠の戦いであれだけ活躍するっていうのに。
フッ。そうか、おれが歴史を変えるのか。ククッ。おれは覚えているぞ、漫画・日本の歴史戦国時代編を。長篠の戦いでは三段撃ちという画期的なことをやって、武田勢をぶっ倒したんだ。
今の織田軍に三段撃ちをしている様子はない。すると、おれが沓掛勢に三段撃ちを覚えさせて、長篠の戦いで大活躍させるってことか。
そうしたら、おれはこの家の連中にぐうの音も言わせられないほどの大大名だ。ククッ。

怒りのデザイナ

布団に入ったけれど、興奮して眠れない。鉄砲隊を率いるおれの雄姿を妄想してしまうと、にやにやが止まらない。

信長様ァー、拙者にお任せくだされー！

なんて、信長の窮地を三段撃ちで救い出し、

う、牛、お前はいつからそんな芸当を身につけた。

いやあ、なんか閃いちゃったんス＾＾

でかした！　お前を鉄砲衆の筆頭にしてやる！　それでもって百万石与えてやる！

フヒヒ。

ついでにヘタレ村重とゼニゲバ瀬兵衛もどさくさに紛れて殺し、山県クソサブロウも蜂の巣＾＾

ち、父上はさすがです！　こんなことを思いつくとは天才です！

フヒヒ。

拙者の頭では思いもしませんでした。さすが簗田殿。

と、半兵衛も舌を巻き、

おみゃあは鉄砲術の第一人者だぎゃあ。でやから、おりゃあのおにゃの子を半分わけてやるだぎゃ。

と、天下人のサルからおすそわけ。

フヒヒ。

「しかし、太閤殿下、拙者には梓とさゆりんがいるので、御遠慮願いましょう」

カッケー。おれ、カッケー。

あずにゃんとさゆりんもおれの見る目が変わり……。

あ、やっぱ、そのときには年取っているから、サルにおすそわけしてもらおう。

そうだ、シロジロに鉄砲開発をやらせて顎でこき使ってやろう。

ねじり鉢巻きには馬上に跨ったままの鉄砲の撃ち方を編み出させよ

う。

おれが歴史を変えるか。ククッ。

でも、鉄砲っていくらするんだろう。おれのへそくりは五百貫。それだけで沓掛勢の兵隊分五百丁を揃えられるとは思えない。まさか一丁一貫ってことはないだろ。

ということは、ついに沓掛の隠し財産を暴くときが来たか。マリオのことだから太郎のためにしこたま貯めているに違いない。

ならば、くのいち上がりのさゆりんに泥棒させよう。ついでにマリオの横領が発覚したらあいつを沓掛から追い出しちゃおう。金を自由に使えないっていうのは不便だからな。

それでシロジロに鉄砲調達の旅に出かけさせよう。でも、あいつだけだと鼻クソを掴まされる危険があるから、やっぱりおれも一緒に行く。

とりあえず、謹慎期間中にさゆりんを暗躍させて、沓掛城の隠し財産を盗み出させるんだ。

フヒヒ。ついでに甲冑も。兜も。

「愉快そうじゃな」

うっ。あずにゃん。いつのまに。

「何も言わずに家を出て、帰って来たと思ったら女房を放ったらかしにして、わらわがどれだけ亭主殿の無事を祈っていたか」

「いや、違うんだ」

「わらわは忘れておらん。亭主殿が稲葉山の休息所でわらわに誓ったことを」

ん？　誓い？　なんだっけ？

「と、とりあえず寒いから中に入りましょう。ね。ねっ」

戸を閉めて、あずにゃんをそろそろと招き入れ、布団の上に腰を下ろさせる。おれは床に正座。

「言っておくが、今夜はそんな気分ではないぞ。亭主殿には言いたいことが山ほどある」

ううっ。嫌よ嫌よもいいのうちになだれ込もうとしたけど、出鼻

をくじかれた。チクショウ、脱デザイナのあずにゃんを前にして、おあずけですか。

「お貞から聞いたぞ。摂津では牢獄に放り込まれた挙げ句、太郎の馬に跨って一騎駆けをし、ゆえに蟄居を申し渡されたそうじゃな」

説教ですか。ハーア。眠い。

「なにゆえ、そのような危うい真似をするのじゃ」

「い、いや、別に好きでそうしたわけじゃ」

「栗之介にも聞いたぞ。六角攻めの折りにはクリツナでも一騎駆けしたと言うではないか。なにゆえ、亭主殿のような男がそのような無茶な真似をするんじゃ」

「い、いや、だから、別に好きでそうしたわけじゃないんスけど」

「生きて帰ってこられたのが奇跡じゃ」

ギロリと睨み続けてくるあずにゃん。

「身の程知らずが」

くそう。あずにゃんまでおれをボンクラ扱いしやがって。くそう。鉄砲隊を率いることになったら、ひいひい言わせてやる。クソッ。

って、あずにゃんの目がきらきらと潤んでいるような。

「そなたが死んでしまったら、わらわは、わらわは、悲しゅうて仕方ない。そなたは、わらわのたった一人の亭主なのじゃ」

あ、梓……。

「でも、無事に帰って来てなによりじゃ」

「あっしは死にませんよ」

イケメンモード突入。

「なぜなら、あっしは梓殿をお与え下さった運命に対して信義を貫いております。ならば、運命はあっしを殺しはしません。梓殿を愛し続けている限り、あっしは死にません」

「馬鹿……／／」

いやー、男はつらいのう。つらいのう。ほら、梓、涙をぬぐってやるからな。うんうん。艶やかな肌だのう。抱きしめてやるぞよ。うんうん。華奢な肩だのう。いい匂いがするのう。

「あっしも梓殿に会いたかった」
そろりと押し倒す。ぐへへ。なんだかんだ言って、ぐへへ。
「あずにゃん」
しかし、唇を近づけようとしていたら、あずにゃんがギロリ。えっ。なぜ。
「そなた、家を留守にしている間、女を抱いたな」
ドキッ。
「扱いが上手くなっておる」
「い、いや、まさか。いくさばかりでそんな暇なんてありはしませんでしたから」
「嘘じゃ」
「嘘じゃない。嘘じゃありません。断じて嘘なんて。あっしはずっと梓殿ひとすじだったんスから。京にいるときも、摂津にいるときも、牢屋に入れられているときも。梓殿を忘れたことなど一秒たりともありません」
「本当か？」
「本当です」
「嘘であったらどうする」
「は、は、腹を切ります」
「なら、切れ」
あ、あずにゃんの、ど、瞳孔が、憎しみに広がっている。そうだった。あずにゃんは又左に金的を食らわせ、ウザノスケをボコボコにした織田の女番長だったんだ。
ドン、と、突き飛ばされたおれ。あずにゃんは枕元のアケチソードを手に取り、それを鞘から抜いて、刀だけをおれの前に叩き置く。
「亭主殿、腹を切れ」
膝がガクガク、肩がブルブル。マジで？　うん。マジっぽい。あずにゃんの気迫が喉元に突き刺さるようなやばい空気。
どうしよう。
素直にバラしてごめんなさいするか。いや、そんなことしたら、

このアケチソードでめった刺しにされる。だったら、何か言い訳を。実は女じゃなくておホモだちだったとか。信長に犯されたとか。ぐう。そんなの絶対に信じるわけねえ。信長がおれを襲うはずねえ。

「嘘じゃ」

と、急ににこっと笑ったあずにゃん。おれは汗がだくだく。

「わらわは亭主殿を信じておる。ただ――」

血相を変えて、おれのおいなりさんをぎゅうっと握ってきた。

「次に浮気をしたら、握りつぶしてやるからの」

あわわわ。お、おれのおすそわけ計画は早くも挫折。

だから、盗んでこい

謹慎処分中のおれは一歩も外に出られないらしい。
どこが処分なのかわからない。おれにとっては久しぶりの休暇。
お貞やあいりんはいつものように掃除に洗濯にといそしむ。そうか。あいりんが正式にマリオの養女になると、女中は年寄りのお貞しかいなくなってしまうのか。
増やさなくちゃな＾＾
あ、でも、浮気したらオカマにされちゃうんだった。くわばらくわばら。女中の増員はあずにゃんに任せよう。そうすれば変な疑いも持たれずに済む。
あいりんのことをあずにゃんに話そうと思って部屋の前まで来てみたけれど、戸が閉まっているからやめた。なんか怖い。
シロジロは何をやっているのだろうと探してみたけどいない。あいりんに訊ねてみると、ねじり鉢巻きと釣りに行っているらしい。ふざけやがって。鉄砲の調査をさせようと思ったのに。
ただ、ねじり鉢巻きもいないとなると都合がいい。馬屋を訪ねてみた。クリツナもいない。連れて行っているんだろう。おれは小屋の中に入り、藁を掻き上げてみた。ほうほう。ちゃんと隠しているじゃないか。
「何をしているのですか、殿」
うっ。袋にあわてて藁をかぶせる。振り返ってみると、早之介こととさゆりんがにやにやとしている。
「小屋の掃除なら拙者がやりますよ」
「なんなんだよ、暇しやがって」
おれはそそくさと小屋を出て、鍵板を閉める。
「だいたい、なんで屋敷に住みついているんだよ。さゆりん、じゃなかった、早之介は雑用係じゃないんだから、どこか城下の長屋にでも住めよ」

「住まいは四郎次郎殿に任せております」
「ああ、そう。ああ、そう。そんなことよりさ――」
と、おれはさゆりんの背中を庭の隅っこまで押して行く。
「そんなことより、キミに頼みたいことがあるんだ」
「なんや」
「しっ。家の中では早之介でいろ。バレたらあずにゃんに殺される」
「なんや。なんかあったんか＾＾」
「だから、早之介でいろって言っているだろ」
「はいはい。かしこまりました。それで、なんでしょう、頼みごとというのは」
「実はな」
おれはよりいっそう声をひそませる。
「沓掛城にはマリオが貯め込んだ金がある。それを盗んできてほしい」
「まりお？」
「あ。ああ、丹羽五郎左だ。沓掛城の帳簿は全部あの野郎が握っているんだ。ああ、あいつはおれの城の収入なのに、甲冑さえ買ってくれないケチだ。だから、相当貯め込んでいるはずなんだ。それを、盗み出してきてくれ」
「そんなのは無理です」
「なんでだよ。できるだろ、お前ならそのぐらい」
「できますが、丹羽様は何かのお考えがあってそうされているのでしょう。あの方は他人の所領の収益を自分のものにするような御仁ではありません」
なんか、調子狂うな。いやいや、そんなこと言っている場合じゃない。
「何かの考えって、太郎のために決まっているだろ。そんなのに付き合ってられねえんだ、おれは」
「太郎？　左衛門太郎様のことですか？」
首を傾げる早之介。あ、そっか。太郎のことって大多数の人間は

知らないんだ。ちょっと、口が滑ってヤバス。
「意味がわかりませんが」
「いや、と、とにかく、沓掛の金はおれの金だ。だから、盗んでこい」
「なんで、盗まなくてはならないんですか。それならそうと、丹羽様に申せばよいではないですか。どうせ、くだらない使い道だから言えないのでしょう」
「くだらなくない。おれは沓掛勢を鉄砲隊にするために金が必要なんだ。まっとうな動機だ。だから、盗んでこい」
「なら、丹羽様にそう言えばいいじゃないですか」
「言ったってあいつのことだからビタ一文も出さないっつうの。あいつはな、ずっと、ずうっと、おれの甲冑を買ってくれなかったんだぞ。だからな、いいか、盗んでこい。これは命令だ。盗んでこい」
「無理です」
ぐぬぬ。聞きわけのねえやつ。たかだか忍び風情のくせして。
「そもそも、沓掛勢に火縄銃を装備させるだなんて、なんなんですか急に」
「おれは革命を起こすんだ。いいか、もう一度言ってやる。おれは戦場に革命を起こすんだ。だから、盗んでこい」
「革命っ？」
ふっ、と、鼻で笑う早之介。
「何が革命ですか。火縄銃なんかは戦場でとっくに使われているでありませんか」
馬鹿がっ。本当に馬鹿だ。ただ単に鉄砲を撃つだけじゃないっていうのによ。クソッ。おれがタイムスリップしてきた人間だって、これほど言いたくなったときはねえ。
「だいたい、火縄銃の相場を存じているのですか」
「いくらだよ」
「人によりけりですが、一丁百貫から三百貫ですよ。ということは、沓掛勢五百に装備させたら、五万貫から十五万貫は必要なんですよ」

「いや、そのぐらいはあるだろ、沓掛城には」
「あるか！」
「ある、絶対にある。五郎左は相当なドケチだから絶対にある」
「なら、盗みはせんけど、調べてきてやるわ。どのぐらいあるか隅々まで見てきてやるわ。それで、五万貫なかったら諦めるんやからな」
てか、熱くなるのはいいけど、さゆりんモードに入るなよ。めっちゃ怖いやん。思わず辺りを見回してしまう。誰もいないな。よし。
たくっ。甲賀を追い出されたのって、本当はこういうふうにボロを出しちゃうからなんじゃないの。半兵衛にも見抜かれていたしな。あいつらクラスだったらすぐにわかっちゃうだろ。
頼りになるんだか、ならないんだか。
「わかった。とりあえず、調べてこい。ただ、嘘はつくなよな」
「そんなことするか。現実を突きつけてやるわ」
と、早速、おれのもとから去っていったさゆりんだが、おれは冷静に考えた。あいつにはまだまだ修行が必要なようだ。

涙のおままごと

それにしても、鉄砲一丁で百貫から三百貫だなんて。
おれの馬屋へそくりだけじゃ二丁買えるか買えないかじゃねえか。
そんなものを十兵衛は譲ってくれたっていうのか。あいつって諸国をうろうろしていた貧乏人じゃねえのかよ。それとも、おれに相当な恩を持っているか。
あんまり、関わりたくないけどな。
ピカピカに磨かれたアケチライフルを庭先に持ち出し、撃つ真似。むう。練習をしたいが、使い方がいまいちわかっていないし、こんな庭でぶっ放せるわけがない。川の土手にでも行きたい気分だけど、謹慎中。
なんか、外に出たって大丈夫な気もするが。
試しに門のところまで来てみる。うっ。見たことのない顔の雑兵が一人立っているんですが。しかも、こちらをちらりと見てきただけの、すごい事務的な動き。
いや、あいつはきっと頭がおかしい人だ。たかが雑兵だ。うん。おれは一歩外に出てみる。
すると、雑兵はつかつかと歩み寄ってきて、槍の柄でおれを門の中まで押し込んでくる。
「簗田殿、謹慎中ですぞ」
と、雑兵のくせにギロリ。なんて、融通の利かなさそうな面構え。見張りがいるなんて。
おれはすごすごと庭先に戻り、縁側に座り込む。牢屋に監禁されたあとは自宅に軟禁ですか。まるで反体制運動をしている活動家だ。ま、おれもそこまでの人物になったってことか。
ヘマこいちゃっただけだけどさ。
それにしても、さゆりんのあの様子だと、沓掛城にはそこまでの財産はないのかな。相当な自信だったもんな。

だいたい、自分の領地の収入をわかっていないっていうのがヤバいわな。うーん。やっぱり、そういうことを出来るやつを家来に置かないと駄目かな。

でも、この時代のやつらってことごとく信用できないしな。ゼニゲバ瀬兵衛みたいなやつを代理にさせたら、すぐに横領するに決まっている。

吉田早之介はさゆりんだから、無理だし。

おれはよくわからないから無理だし。むしろ、仕事したくないし。やっぱり、太郎が大人になるまではマリオに任せるしかないな。

でも、ここぞというときに、マリオが財布の紐を握っているとなると、すげえ面倒。あいつはドケチ。本当にドケチ。

お金稼ぎしよっかな。

へそくりの五百貫があるから、何かやろうと思えばできるだろう。シロジロは五百貫で何か商売をしようとしたんだから、できるんだろう。あいつは騙されたけど。

商売か。うーん、どちらにしろ、へそくりの使い道は特にないから、ドブに捨てたと思って、シロジロに何かをさせてみようか。もちろん、おれの厳しい監視下で。

「亭主殿」

にこにことしながらやって来たあずにゃん。昨日のことはもう水に流してくれたのかな。

「暇じゃろ。わらわの部屋に招いてやる」

え＾＾　どうしたんスか、手まで引いてくれちゃって。真昼間からムフフですか＾＾

で、部屋に上がると、あれ、なんか部屋の様子が……。

畳……。床の間……。掛け軸……。

ピカピカの壺みたいなのが。花瓶が。なんかいい匂いが。

「さあ、座りなされ」

なんだか納得できないままに座らされたおれ。こんな部屋ってあったっけ？

「こんなものは持ってくるな」
おれからアケチライフルを取り上げると、一度、部屋の外に出ていったあずにゃん。やがて、お貞を連れて、茶道具一式を持ってきた。
うわあ……。マジかよ。
「亭主殿が留守の間、姉上の嫁ぎ先で習ったのじゃ。まあ、あんまり女がやるものではないみたいだけどな。しかし、見ているうちに自分でもやってみたくなっての」
茶の粉をでっかい耳かきで茶碗に入れるあずにゃん。
「あ、あのう」
「わらわが茶を立てている間、客は喋ってはならん」
「ちょ、ちょっと待ってよ」
ギロリ。
ううっ。な、何をやっているんだ、このお方は。
まあいい。気が済むまでままごとに付き合ってやる。その後に問いただしてやる。この部屋の改装と、その茶道具。何の金でこしらえたものなのかと。
柄杓で茶碗にお湯を入れ、泡立て棒でしゃかしゃかタイム。得意気な顔のあずにゃん。
そうして、澄ました顔で茶碗を差し出してき、それを持ったお貞がおれの前に出してくる。お貞が頭を下げてくる。
飲めってこと？　右手を出したおれ。
「亭主殿。お貞に頭を下げてから両手で取らんか」
ぬう。うるせえな。渋々、頭を下げて、茶碗を両手ですくうように手に取る。
「亭主殿。左手は茶碗の下、右手は横に添えるんじゃ」
ぐぬう。うるせえ。
「まったく。何も知らんな。京で何をしていたんじゃ。お貞、手本を見せてあげなされ」
で、お貞がいちいち仰々しく茶碗を手の中で回したり頭をまた下

げたり、めんどくせえ。
「飲み干したあとは、懐から紙を取り出し、唇をつけたところと御自身の指を拭くのです」
こいつらはおれが牢屋に入れられていたころ、こんなお遊びをしていたってわけか。金をかけてまで。
おれはお貞がやったようなことをそれなりにやって、茶碗の中の緑の液体を口にする。苦っ。激マズ。
「何を戻しておるんじゃ」
「一気に飲み干さなくては無礼に値しますよ」
こ、こんなものを飲み干すだなんて。ううっ。我慢してごくり。うえっ。
「け、結構な、お手前でした」
あずにゃん、にこり。ままごとに付き合ってもらえて御満悦。
「おやかた様も家臣たちに茶の湯を推奨していると聞くぞ。亭主殿もわらわと一緒にしっかりと学び、京や堺で恥を欠かぬようにしなくてはな」
「いや、梓殿」
てか、みたらし団子がそこにあるんですけど。早くくれないかな。口の中がまだまずい。
「なんじゃ」
「いや、その、別に茶会をやろうとどうしようと結構なんスけどね、この部屋の改装とか、その茶道具とかってどうしたんですか」
「案ずるでない。馬屋に置いてある袋の中から頂戴させてもらったから大丈夫じゃ」
は？
「その、馬屋に置いてあった袋というのはなんでしょう？」
「亭主殿が京から栗之介に運ばせてきた銭じゃ。そなたが言ったのであろう？　盗まれないように藁の下に隠しておけと」
ま、まさか……。そういえば、さっき確認したとき、中身を見忘れていた。まさか……。

「で、でも、あれは、その。てか、い、いくらぐらいあの袋から使ったのですか」
「いくらであったかの。お貞、いくらじゃった？」
「二百貫ぐらいでしょうか」
おい……。なんで、勝手にそんなに使っちゃうんだよ……。ただでさえ金が必要だっていうのに。
「どうしたのじゃ。顔色が悪いぞ」
「い、いや、だって、なんで勝手に使っちゃうんですか」
「亭主殿は銭を使わんでないか。それとも何か、あれは使い道のあるものであったのか？」
あずにゃんに悪びれた様子はない。むしろ、不思議そうな表情さえしている。
そうか。そうなのか。この人は柴田家の末娘として育ってきたから、金銭感覚がとんちんかんなのかもしれない。
「別に、使い道は……。ハア」
それにしても、ねじり鉢巻きの野郎……。
「そんなことより、亭主殿、茶菓子を食べなされ」
みたらし団子を目の前に差し出され、噛みちぎるように団子を食べるおれ。くそう。うまい。クソッ。目から汗が。

ワル経営者の常套手段

クリツナとともに釣りから戻って来たねじり鉢巻きに対して、おれの怒りは大噴火した。

「なんで、袋のことをあずにゃんに言ったんだっ！」

「なんでって、当たり前じゃねえか。あんなにたくさんの銭を置いておくだなんて、奥方に言うのは当然だろ」

「たくさんの銭って、なんのことスか？」

うっ。そういえばシロジロも一緒に釣りに行っていたんだった。

「いや、なんでもない。どうでもいいから、さっさとその釣ってきた魚をさばけ」

「京から持って来て、馬屋に隠しておけって旦那に言われたから置いてあるんだ」

と、ねじり鉢巻きが余計な一言。そうして、おとなしいクリツナを馬屋に入れる傍ら、顎でくいくいと藁を差す馬鹿な真似を。

首を傾げながら馬屋に入っていくシロジロ。

「おいっ」

「なんスか？」

「は、早く、夕飯の支度をしろ……」

「別にいいじゃないッスかあ」

まずい。シロジロだけには見られてはまずい。なぜなら、それはシロジロに渡さなければならない金だからだ（しかも、あずにゃんが勝手に使ってしまって、減っている）。

藁をどかしていくシロジロ。イヤーッ。やめて！

「うわっ！　ど、どうしたんスか、こんなにたくさん。百貫以上はあるじゃないッスか！」

「どっかの屋敷に行ったときに貰ってきたんだったよな、旦那」

やめろ。ねじり鉢巻き、それ以上口を開くな。

「誰だったけか。旦那、誰の屋敷に行ったときだったけか」

……。
「足利義昭様だ」
「えっ！　旦那様、本当スか！」
「だよな、鉢巻き」
「そうだっけか？」
「そうだ。足利義昭様に褒美として貰ったんだ。そうだよな、クリツナ」
　クリツナは藁をむしゃむしゃ。ナイスな無言の解答。さすが、クリツナだ。
「すごいじゃないッスか、旦那様！　公方様から褒美を頂けるなんて！」
「ま、まあな。おれだって、まあ、そのぐらい活躍したしな。むしろ、少ないぐらいだからな。うん」
　命拾いした～。別にシロジロに真実を知られたってどうでもいいが、しかし、横取りしようとしていたってなると、太郎やあずにゃんが怒るだろうし、それにおれの家の中での立場はひどいものになっちまう。
　助かった。ねじり鉢巻きが馬のことばっかり考えているやつで助かった。
「でも、なんで、こんなとこに隠しているんスか。家の中に置けばいいじゃないッスか」
「い、いや、よく言うだろ。馬の糞の匂いがついた金には御利益があるって」
「さあ。聞いたことないッスけど」
「そ、それよりさ、シロジロ君。その金で商売でもやってみないかね」
「えっ？　あっしがですか？」
「まあ、別にそんなものを持っていたって、おれには使い道がないしな。うん。むしろ、その金を増やしてくれたまえ。れ、練習だ。三河に帰るための。うん。うまくいったら、俸禄も上げてやるよ。

うん」
「で、でも」
本当はシロジロに渡したくなんかないが、シロジロの気分がそっちに向いたおかげで、この金の出所がうやむやになるのなら、それでいい。どうせ、これだけじゃ鉄砲なんて買えないし。
「あっしなんかが商売をやっても」
「岐阜で団子屋でもやればいいじゃねえか」
と、クリツナの前脚を拭いてやっていたねじり鉢巻きが言った。
「お前の作った団子を女たちがうまいって食っているじゃねえか。団子屋ぐらいなら、お前にだってできんだろ」
「で、でも」
ちらりとおれに目を向けてくるシロジロ。
「団子屋なんて。ねえ、旦那様」
「やれ」
確かに岐阜で団子屋をやれば、まだ地方では物珍しいみたらし団子が売れるかもしれない。それに、商売をさせるわけじゃない。シロジロには団子を作らせておけばいいだけで、騙されるリスクもほとんどない。
「何かをやる前から何もやらなかったら何も始まらない。だいたい、お前は商人なんだから、それらしいことをするべきだ」
金の出所の胡散臭さから目を反らさせるためにね。
「じゃ、じゃあ、旦那様がそこまで言うんなら。でも、若君がなんておっしゃるか」
「あんなやつのことなんか気にするな。どうせ、当分は戻ってこないんだから」
「わかりました。でも、失敗しても怒らないでくださいよね」
「おれはそんなちっぽけな人間じゃない。思う存分やってみろ！」
「あ、ありがとうございます！　旦那様、この恩、絶対にお返しします！」
ふう。なんとかごまかせたぜ。あとは勝手にやってくれ。そんな

に期待していないから。
で、早速、台所でみたらし団子を作り始めたシロジロ。てかさ、団子じゃなくて、夕飯を作れよ。カスが。
それにしても、よくよく考えてみると、甲冑を買う金に当てれば良かったんじゃないかと、今さら後悔。でも、シロジロのうきうきした背中を見ると、断念。
てか、おれって自分のために金を使ってないな。まあ、使い道がわからないっていうのがあるんだけど、太郎がいないこの間に、まずは太刀とか甲冑を早々と買うべきだったことに、どうして気付かなかったんだろう。
結局、あずにゃんに使われちゃって、シロジロにあげちゃって、おわり。沓掛の隠し財産を当てにするしかないけど、さゆりんには鉄砲のためって言っちゃった手前、個人的なことに使っちゃうと、さゆりんが裏切ってマリオに告げ口しそうだしな。
宝くじでも当たればなあ。てか、この時代に宝くじなんてねえし。ん？
宝くじ屋さんやろうかな＾＾
一等百貫とか言って紙切れをばら撒けばいいだけだろ。一枚一貫の紙切れを二百枚売りさばけば、当選金に百貫渡しても、百貫の儲け。
ワロスｗ　おれって天才かもしれないｗｗｗ
でも、そんなことをやって銭儲けしていると信長に知れてしまったら、恐ろしいことになる予感も。
シロジロの団子屋だってそうだ。おれがやっているとなると、武将のお前が商いの真似事か、あーっ？
なんて、どつかれるかも。
あくまでもあの馬鹿が勝手にやっているってことにしないとな。
元いた時代では、部下が勝手にやっていましたってのは、ワル経営者の常套手段だったからな。

翌日、シロジロは早速城下に繰り出したようで。

もちろん、団子屋を始めるための行動で、どうやら出店する場所を探しに行った。あと、吉田早之介の住まいも。

で、おれは今日も地獄の茶会。あずにゃんとお貞に作法とかをぐちぐちと仕込まれて、おれはノイローゼぎみ。何が楽しくてこんなものにはまっているんだよ。

「奥方様、よろしいでしょうか」

と、戸の向こうからあいりんの声。

「なんじゃ」

「旦那様にお客様でございます。大島新八郎殿とお坊様でらっしゃいます」

「亭主殿は蟄居中の身ゆえ、外の者には会えぬと伝えておきなさい」

別にいいじゃん。何の用なのかは想像つかないけど、大島のおっさんだってそれをわかって来ているんだろ。あずにゃんったら、茶会をやりたいあまりにそう言っているんだよ、きっと。

「私もそう申したのですが、沓掛勢が滞在している件でどうしても旦那様に会いたいということなのです」

「じゃ、仕方ないね」

と、立ち上がったおれ。あずにゃんはむっつり。ふう。地獄からの解放。

大島のおっさんとどっかの坊主を居間に通し、向かい合ったおれ。

「謹慎中ということで、簗田殿にお会いするのは如何なものかと思いましたが、なにゆえ、拙者だけではいかんしがたいことゆえ。それに見張りの兵にも懐を温めさせておいたので、なんとか内密には」

見張りの兵に金を渡したってことか？　むう。あいつも金に汚いやつだったとは。

「まあ、いいですよ。信長様や五郎左殿には内緒にしておけば。そ

れで、何の用なんでしょう」
「実はこちらの方は沓掛勢を滞在させて頂いている天台宗願福寺の住職、光才殿でいらっしゃるんですが、簗田殿に折り入ってお話ししたいことがあると」
光才とかいう坊主は、見た目は相当なジジイで、袈裟は汚くて、頬も痩せこけている。ふーん。こんなやつの寺に置いていたんだ。
「なんでしょう、光才殿」
「はい。まことに申し上げにくいことなのですが、願福寺は先の織田様と斎藤様の争いのときに、寺の堂のほとんどが焼けてしまい、本堂もすすまみれの状態でございます」
ふーん。あっそ。
「あのいくさからそれなりの歳月が経ち、城下もいくさの前よりも賑わってきたというのに、当寺では復興もままなりません」
坊主はひどくくたびれた雰囲気で、喋っているあいだはずっと視線を落としたまま。
「このようなことを申すのは仏に仕える者として甚だ愚かしいことではありますが、簗田殿の軍勢を境内に置いている手前、いくばくかの寄付を頂けないでしょうか」
「そういうことなら大島殿」
と、おれは腰を上げた。
「すぐにでも沓掛勢を沓掛に出立させてください。ていうか、なんで、すぐに出なかったんスか」
「いや、それは、岐阜に来てすぐに出立となると兵の士気も」
「あっしは、大島殿がそういうお方だとは思っていなかったスけどね」
まったく。どいつもこいつも金金金。ふざけんな、クソッ。ただでさえ空っぽの財布だっていうのに、寄付金だと？　寺のことなんか知るか。むしろ、全部燃やせ。
おれはむかむかしたまま戸を開けたが、なんと、ジジイ坊主がすがりついてくる。

「そ、そこをなんとかお願いしますっ、築田殿っ！　当寺は伝教大師最澄様が創建された歴史と由緒のある寺。ここで願福寺を朽ち果ててしまうわけにはいかないのですっ！　お願いします。ほんの少しでいいのです。お願いします」

「そんなこと、信長様に頼んでくださいよ。あっしだって火の車なんだから」

「の、信長様にも頼んだのですが、ウウッ、信長様は仏に関心がないようで、ウウッ」

「とにかく大島殿、沓掛勢を今すぐにでも沓掛に引っ込めさせてください」

「しかし、築田殿」

「いいからっ！　言っておくけど、沓掛勢はあっしの兵隊ですかんね！　五郎左殿の兵隊でも、あんたの兵隊でもないんスからねっ！」

唇を引き絞った大島のおっさんは渋々と腰を上げると、泣きわめいているジジイ坊主を見捨てて居間を出ていった。

おい。こいつも連れてけよ。

「もはや、頼るべきは築田殿しかおりません。ウウッ」

「なんでおれなんだよっ！　どけっ！」

おれはジジイ坊主を蹴り払い、居間を出て行こうとしたが、あずにゃん出現。おれを通せんぼ。

「な、何をしている、亭主殿」

目が怒っている……。

「救いを求めている者に、なぜ、そのような真似をしたのじゃ。まして、仏に仕えている者に。なんという愚か者じゃっ！」

ボコッ。

「わらわは悔しくてたまらん。悔しくて悔しくてたまらん！」

ボコッ。ボコッ。ドスッ。

「わらわはそなたが優しい人だと思っていたのに！」

ガンッ。ガンッ。バキッ。

だらーん。

「大丈夫でしたか、お坊様。亭主の愚行、どうか、どうかお許しくだされ」
「いえ、拙僧は、拙僧が悪いのです。拙僧こそ愚かなのです」
お、おれ、死にそうなんスけど……。
「お坊様、お困りであれば、この簗田家が力になりましょう。お寺の再興のために、わらわが金銭を工面いたしましょう。だから、涙を拭いてくだされ」
あずにゃんが着物の袖でジジイ坊主の頬を拭ってやっているが、おれの出血もどうにかしてくれないでしょうか。すごい出ているんですけど。
「ああ、まるで、まるで、奥方様は菩薩のようです。ありがとうございます。ありがとうございます。ウウッ」
おれこそ泣きたい。ウウッ（´；ω；`）

災い転じて福となす？

あいりんに手当てをしてもらったが、口の中がずたずたで夕飯もろくに食べられない。

「願福寺には寄付をすることにした」

「ちょ、梓殿。なんなんスか、それ――」

痛ッ。むきになると鼻が痛い。すさまじい鼻血だったけど、もしかして折れているんじゃないの。

「ただし、お貞や四郎次郎と話したところ、皆の者に払っている俸禄を考えたらそのような余裕などない。なので、沓掛城の収入に頼ることにする」

は？

「わらわが丹羽五郎左殿に掛けあう。よいな、亭主殿」

「いや、そんなの――」

痛ッ。ぐう。反論したところであずにゃんに適うわけないだろうけど、自分の考えすらも述べられない。

DVだ。これはドメスティックバイオレンスというやつだ。

それにしても、寄付だなんていくら注ぎ込むつもりなんだ。沓掛城の隠し財産は鉄砲を購入するための資金なんだぞ。

夕飯が終わると、おれは早々に布団の上にダウン。ろくに食べられないし、あちこちが痛すぎる。マタザや信長がどれだけ手加減してくれたことかと、今になって気付くおれ。

「旦那様」

そろりと部屋に入って来たシロジロ。ひどく冴えない顔。

「お具合は大丈夫ッスか」

「これが大丈夫に見えるか？」

「見えないッス」

「じゃあさっさと帰れ」

「いや、実は、その、やはり団子屋はやめようかと思っていまして。

奥方様の願福寺の寄付の件、あれは旦那様が公方様から頂いたものでまかなえばいいかと思って」

と、頭を垂らしながらのシロジロ。

むう。悔しいが、どうせドブに捨てるんなら、被害を最小に食い止めるためには、そっちのほうがいいかも。

そもそも、あのクソ坊主が来なければこんなことには。

できることなら、願福寺なんて攻め潰したい。でも、そういうことをやると寺の仲間に攻撃されるんだろ。自分が弱いときは仏を振りかざし、もっともらしい理由でたかりにやって来て、強くなったらなったでぎゃあぎゃあわめく。

この時代の寺社ってのは、豪族なんかよりもたちが悪い。なにしろ、それを信仰している連中がいるっていうことが、奴らの最大の武器だ。

おれはそんなものに屈したくなかったが、あずにゃんのＤＶの前に成す術もなかった。

あずにゃんみたいに寺の坊主を有難がっているやつがいるから、あいつらはやりたい放題だ。

「旦那様、どうしましょう」

でもな、金を渡したら渡したで、これっきりっていう保証なんか０パーセントに近いんじゃねえのか。味をしめて、どんどんたかりにやって来るんじゃねえのか、あのクソ坊主。

あずにゃんは馬鹿だからどんどんと寄付しちゃって、簗田家は破産。

宝くじでも当たれば気にもしないのに。ま、宝くじなんてないんだけどさ。

ん？

もしかして、願福寺に宝くじ屋をやらせればいいんじゃないのか。仏の御加護で一等百貫とか言って、坊主を有難がっている連中に宝くじを買わせればいいんじゃないのか。

仏を振りかざして寺がやっていることなら、信長もおいそれとは

言えないんじゃないのかな。
そして、出資金を出したおれは売り上げの半分ぐらいをゲット＾＾
災い転じて福となす。フヒヒ。まさに福が願う寺ｗｗｗ
「シロジロ」
「はい」
おれは痛みをこらえて口を開く。
「寄付じゃなくて、出資しろ。願福寺に金儲けをさせろ。それで、売り上げの何割かをおれが頂くってことにしろ」
「えっ。そんなことできるわけないじゃないッスか。坊主に商いができるわけないッス」
「宝くじだ」
「？」
宝くじのない時代にそんなこと言ったってわからないらしい。おれはシロジロにその仕組みを教えてやった。博打は博打だけど、御加護のある紙切れを買わせるという建前にすれば世間体も悪くないってことを。
「あいにく、おれは謹慎中で動けない。だから、シロジロが願福寺の住職と交渉しろ。もちろん、あずにゃんには寄付っていうことにしておいてな」
「で、でも、そんなものを果たして城下の人々が買ってくれるんスか」
「買う。絶対に買う」
１００パーセントの確率で売れる。むしろ、願福寺には行列ができる。タイムスリップしてきたおれだからこそ断言できる。
「で、でも、旦那様。考えは本当にすごいんスけど、しかし、そんな罰当たりなこと」
「罰当たりなものか。売れるっていうことは、民衆が願福寺に寄付するっていうことになるんだからな」
「ま、まあ、そうスけど。でも、博打には変わりないじゃないッスか」

「博打じゃない。くじだ。仏の御加護を誰が受けるかっていうくじだ。いいか、そこのところをあのクソ坊主にちゃんと説明しろよな。あと最低でも利益の二割ぐらいはおれに入ってくるようにしろよな」
「で、でも――」
「命令だ！」
痛ッ。
ちくしょう。謹慎中で、この体。本当ならおれ自身でクソ坊主と交渉をしたいところだが、今はシロジロしか頼りにならん。不安は大きいが、シロジロに奇跡を起こしてもらわなければ、おれはこの先ワーキングプアになってしまう。
「太郎が戻って来る前に話をまとめろよな。うまく行ったら俸禄も上げてやるから」
「わ、わかりました。頑張ります」
表情を真剣なものに変えて一礼すると、部屋を出て行ったシロジロ。
てか、シロジロって団子屋の話のときといい、今度の話といい、計画の実行を全部任せると、まともな顔つきになるし、素直にもなるな。
騙されるってのが心配だけど。

次の日もおれは布団の上でぐったり。あいりんが手当てをしに来てくれるけど、当のあずにゃんには無視されている。

シロジロ、頼むからあずにゃんにだけはバレないように動いてくれ。切実にそう願いながら天井を眺めていると、戸の向こうから声が。

「吉田早之介です。只今、戻りました」

「入れ」

部屋の中に入って来て、すうっと戸を閉めるさゆりん。

「で、どうだった？」

「その前に、どうしたのですか。何者かに襲われたのですか」

「まあ、ちょっと、奥さんに……」

「なんや、知られてしもうたんか？」

にわかににやつくさゆりん。

「やめろっ。違うことだ」

「左様でございますか」

「それで、沓掛城の金はどうだったんだよ」

「残念ながら、備蓄されている米俵、武器、すべてを金銭に替えたとしても、沓掛城の資産は七千貫です」

そんな馬鹿な。嘘だ。さゆりんは嘘をついている。盗み出したくないばかりに嘘をついている。

「なんでそんなに少ないんだ。ちゃんと調べてないだろ」

「少なくなんかありません。むしろ、よく七千貫も蓄えていると感心したほどです」

「嘘だ嘘だ嘘だ。絶対にそんなことはない。絶対にもっとある」

「ありません。あのな、沓掛の足軽のほとんどは専門兵ですよ。いくさのときだけ駆り出される百姓と違って、俸禄が支払われているんですよ。それが三百人以上いるんですよ」

むう。そりゃそうだが。
「それに城の女中や馬丁、その他の奉公人に支払わなくてはいけない俸禄があるんですよ。それにも関らず、七千貫分の蓄えがあるのはよっぽどですよ」
「じゃ、じゃあ、その七千貫を盗んでこい。それでありったけの鉄砲を買ってこい」
　すると、さゆりんはハアと溜め息をつく。
「あんたはほんまに阿呆や」
「家の中ではやめろって言っているだろ」
「はいはい。申し訳ございません」
「とにかく、ごちゃごちゃ言ってないで盗んでこい。これは命令だ。いいな」
「無理です。そんな外道の真似をするわけには行きません」
「なんで外道なんだ。沓掛城の金はおれの金だぞ」
「じゃあ、殿、来年の収穫がまったくなかったらどうするのですか。俸禄も支払えない、兵糧もままならない。どうするのですか」
「そんなの知ったこっちゃねえ」
「ほら、外道じゃないですか。殿の城なのにまったく考えていないじゃないですか。だから、丹羽五郎左に目を付けられているのです。そこのところ、おわかり？」
「黙れっ！」
　くそうくそうくそう。どうしてだ。なんですべてがうまく行かないんだ。鉄砲隊さえ作り上げられれば、そこからはおれの独壇場の日本史が始まるっていうのに。ウウッ。しかも、鉄砲を買うどころか、ワーキングプアになりかねない状態に。ウウッ。
「諦めるのですな」
「諦めてたまるか。鉄砲さえあれば、一発逆転できるんだぞ」
「金がないんじゃ仕方ありません。諦めてください」
「ないなら稼げ。そうだ。お前もシロジロと一緒に願福寺の坊主を騙してこい。お前なら騙すことなんてお茶の子さいさいだろ」

「なんですか、願福寺の坊主を騙すって」
おれは事のあらましをさゆりんに説明した。
「なるほど、名案じゃないですか」
にやりと笑ったさゆりん。だろ、そうだろ！　さすがさゆりん、元くのいちだけあって仏に有難みなんて持ってないから、聞きわけがいい。
「殿がそこまで頭を働かせるとは意外ですね」
「シロジロだと不安だけど、お前が行けばあんなジジイ坊主なんて騙せられる。ただ、障害が二つある。それは梓と太郎だ。この二人にだけはバレないようにしてくれよ。知られてしまったら、これが上手くいったとしても、金を没収されかねないからな」
「なんだか、おもしろそうじゃないですか」
腰を上げたさゆりん。
「早速、四郎次郎と二人で願福寺に行ってきましょう」
さゆりんが部屋を出ていくと、おれは自然とにやにや。
頼もしい。さゆりんはおれを三度も殺そうとした悪党だから、こういうことに関しては得意分野だろう。
宝くじ事業が当たれば、おれは一気に大金持ちになれる。そうだ。フランチャイズ化して、各地の寺と契約を結ぼう。ククッ。そして多角経営に乗り出し、団子屋、鉄砲の鍛冶屋、やがて簗田ホールディングス設立。信長や秀吉の力を後ろ盾にして、おれは財界の首領へ。
そうしたらあずにゃんを黄金の茶室に閉じ込めて、ＣＥＯ簗田牛太郎は政界の首領のサルとおにゃの子のおすそわけ合い。ぐふふ。

新たな指令

さゆりんという騙し屋のバックアップを受けたシロジロは、願福寺のクソジジイを丸め込めたらしい。いや、むしろ、さゆりんの煽りで、クソジジイはすっかりその気。一度きりの寄付を受けるよりも、季節ごとに開催して、半永久的に収入を得られる宝くじ事業に涎を垂らすぐらいの喜びようだったとか。

で、宝くじ事業を、実際はどういうふうにしたらよいのかとシロジロにアドバイスを頼まれたおれ。

ふむふむ。ちょうど年の暮れも近いことだし、年末ジャンボ宝くじということで発売しましょうか。

紙切れ一枚を買うと、それはそれで願福寺に寄付することになるけれど、その中でも幸運な人は仏の御加護を受けて、金を貰え、ハッピーな正月を迎えられる。

「寄進札という名にしましょう」

と、さゆりん。建前としては、それを買うことによって願福寺に寄付をするということ。それならば、購入者の後ろめたさも解消される。外れてもなお、仏のためにしていること。

よき考えではないか＾＾

で、札は一般庶民も買いやすい値段に設定し、一等賞金はなんと百貫。百貫もあったら、百姓町民連中は突然の金持ちだ。

なんて、夢のある紙切れなんだろ。

とりあえず、今回は願福寺の檀家や信者の連中に願福寺の坊主どもが無理やり売りつけて、次回への評判を高める作戦に。

シロジロとさゆりんが金儲けに走る中、傷も癒えてきたおれは再び茶会地獄。あずにゃんの自己満足に毎日付き合わされてへとへと。てか、寄付の金って茶道具を売り払った金にすればいいんじゃねと思うが、何も言えない。

「亭主殿もさまになってきたな。そろそろ、主人役も務めてみても

いいんではないか。招かれる立場にもなれば、招く立場にもなるだろうし」

別にいいよ、そんなの。おれが茶会だなんて、柄じゃないだろ。

「奥方様」

と、戸の向こうであいりんの声。ラッキー＾＾

「なんじゃ」

「旦那様に早馬が来ております」

あずにゃんは不服そうな顔だが、早馬となれば、ぐうの音も出ないよね。ふふ。誰の早馬かな。サンザかな。

おれは茶室を出て居間の前の縁側に。庭先には甲冑姿の伝令が片膝をついていて、その姿にちょっと嫌な予感。

「おやかた様からの伝令です。簗田殿の謹慎は本日中に解くゆえ、至急、京に上洛せよとのことです」

むう。いいのか悪いのか判別できん。

どのみち、信長の命令とあれば京に行かなくちゃいけない。なんなんだ今度は。おれはあいりんを呼びつけ、早速、出かける支度をさせる。

「どうしたのじゃ」

あずにゃんがやって来て、眉根をしかめている。

「おやかた様からの伝令で、謹慎は今日までで、至急京に上れっていうことです」

「すいぶん急であるな。また、いくさじゃろうか」

「いくさじゃないとは思うんですけど」

沓掛勢を率いてこいとは言われてないし。

「残念じゃな。せっかく、ゆっくりと過ごせる時間であったというのに」

ま、まあ、ゆっくりとは過ごせなかったかな。謹慎は謹慎でも、おれにとっては、あずにゃんっていう獰猛な虎がいる檻の中に軟禁されているようなものだったしな。

「京に到着したら文を出しておくれ。心配でたまらん」

あずにゃんは瞳をうるうるさせる。ハア。こういうときは本当に可愛いんだけどな。これだけの人だったらおれは本当に幸せ者なんだろうけど。ハア。

あずにゃんを部屋に残して、馬屋に行き、ねじり鉢巻きに京に行くことになったことを伝える。ついでに、ここにこっそりお貞を呼んでくるようお願いする。

「どうされましたか、旦那様。支度は整ったみたいですが」

「あのな、お貞」

と、おれはお貞の肩を抱きながら庭の奥へと連れていく。

「あのな、おれはいつまで岐阜を離れるかわからないけど、シロジロと早之介は岐阜に残すから、奴らには今の計画がうまく行ったら京に来るよう伝えておいてくれ」

「計画？」

「お貞は別に知らなくたっていい」

「かしこまりました」

「あと、家の金のことだ。あずにゃんには絶対に使わせるな。もしも、何かに使いたいって言い出したら、おれの許可を得てからってことにしろ。お貞がちゃんと管理するんだからな。いいか」

「それは、しかし、奥方様は――」

「太郎がそう言っていたってことにしろ」

「は、はあ」

「おれはこの家の中で唯一頼れるのはお貞だけなんだからな。しっかり見張っておいてくれよ」

「かしこまりました」

後顧の憂いをなくしたところで、お貞とあいりん、それに何も知らないあずにゃんに見送られ、クリツナに跨って出発。

「早く戻って来られたらいいな、旦那」

いや、いいよ。当分は戻ってこられなくても。

二日かけて京へ。早々と信長のいる東寺を訪れる。小姓（おホモだち）に案内されると、信長の他にサンザもいた。

「頭は冷やせたか、牛」
信長は仏頂面。今日も機嫌が悪いようで。
「は、はい。すっかり冷やせました」
「ならよい。明日にでも摂津池田に向かえ」
「え？　池田城ッスか？」
「牛殿」
と、サンザが間に入ってくる。
「摂津の豪族どものほとんどはおやかた様の軍門に降りたが、しかし、いまだ三好もこざかしい真似をしておるし、隣接していた豪族同士、敵味方にわかれていた連中じゃ。いつまた心変わりをするかわからん。なので、牛殿には池田八郎三郎の目付けをしてもらいたい」
いや、それは、嫌だな。おれごときがあいつらを手なずけられる自信がない。
「わかったな、牛」
信長がおれの心中を見透かしたかのようにギロリと目玉を剥き出してくる。
「池田を生かしたのはお前なんだからな。きちっとけじめをつけろ。いいな」
「は、はいっ」
参ったな。また騒動が起きそうな予感。暗澹たる思いで信長のもとから去ろうとすると、
「ちょっと待て。言い忘れていた」
ま、まだ、何かあんのかよ。
「池田に行く前に小谷城の新九郎と市を訪ねろ」

なんでおれが浅井長政のいる北近江に行かなくちゃならないのか。サンザの話だと、この前の六角攻めのねぎらいの使者だと言うけれど、そんなのはおれの仕事じゃねえだろ。そもそも、もうすでにねぎらいの言葉をかけているだろ。あれから三カ月近く経っているぜ。

で、岐阜から京への道を戻り、浅井領の佐和山城で一泊。

そこでは城主の磯野員昌というやつが城主をやっていて、すでに信長からおれが来ることを聞いているらしく、おれのことをもてなしてくれた。

「箕作城攻めのときに貴公が乗られていた馬は実に猛々しかったと聞きますが」

磯野カツオは、サザエさんのお調子者のカツオとは正反対の武骨な男で、口数も少なく、口を開いたと思えば武骨者らしいいくさのことだった。

「まあ、あっしはあんまり活躍できなかったッスけど」

「しかし、池田城でも敵本陣まで一騎駆けをされたとか。馬術がめっぽう得意なのですな」

「いや、そんなんじゃないッス。ハハ」

「いずれは戦場で共にしたいですな」

まあ、いずれカツオとは敵対するんだからな。あんまり無用な殺生はしたくないが、カツオもおれの三段撃ちの餌食となるのか。

礼服に着替えて佐和山城を出ると、琵琶湖をぐるりと回る感じで北へ。

小谷城は琵琶湖を望める山の頂上にあるらしい。なかなか堅固な山城。土塁に囲まれた山道を登りつつ番所を何度も通過したあとに、ようやく小谷城本丸に。

ここでもすでにおれの訪問を聞いていたらしく、浅井長政自らが

重臣たちと共におれをお出迎え。
「箕作城攻め以来ですな。さあさあ、城内に上がってくだされ」
ほほう。軍議のときは信長の義弟ということで偉そうな感じではあったけど、客を迎えるときはきちんと礼儀正しい好青年。しかも、行く先々で散々な目に合わされるおれからすると、大名の長政にこうまでしてもらえるとは、なかなか良い気分。イケメンは嫌いだけど長政だけは許してやる。
「箕作のときにも一目見たが、簗田殿の馬は大層立派な馬ですな。面構えがいい」
「そうですか。のんびりしているだけじゃないッスか」
「いや、目が良い。奥深い目をしている」
ふーん。ま、スイッチが入ると暴れ馬に変身するしね。てか、そんなに褒めちぎってくれてもあげないよ。一万貫くれるなら売ってやってもいいかな。
で、城内の広間に案内され、腰を下ろし、長政や重臣どもと雑談。京の情勢だったり、摂津の情勢だったり。
雑談と言っても、訊かれたことに答えるだけだけど。
浅井の連中は情報に飢えているのか、質問がとめどない。信長の軍が入って京は本当に混乱していないのか、足利義昭と信長の間は本当にうまく行っているのか、松永弾正は本当に信長に心服しているのか。
そんなことをおれに訊かれてもね。まあ、おれからすると、足利義昭と信長の間はうまく行かないんだけどね。でも、言わない。うまく行っているという嘘をつく。
「よい。堅苦しい話はもうよいではないか。膳を持て」
長政が言うと、女中だちが膳を抱えながら入ってきて、軽い宴会。
うーん。信長に小谷城に行けって言われて来たものの、何をしに来たのかな。なんかの目的があって、おれをここに寄越したんじゃないのかな。なんだか、こんなに遊んじゃっていると、あとで信長に怒られそうな気が。

「それよりも築田殿はずいぶんと不思議な人だと市から聞いておる」
と、長政。
「なんでも、後世から来たと申しているそうな」
げっ。や、やべえ。
「後世から来たとは」
重臣たちも驚いた様子。苦笑しているやつもいるが、長政がまともな表情なので、おれを嘲笑う様子もない。
そうなんだ。最初のうちはタイムスリップしてきたことを隠していなかった。で、それをおもしろがった若かりし信長に珍奇衆としていろいろな話しをしていたけど、その中に市姫もいたんだった。
これはまずいパターン。
「市からその話を聞いたときには、わしも信じられんかったが、しかし、築田殿の経歴をよく考えてみると、実に辻褄が合う。桶狭間でのいくさも、義兄上の上洛も、それに浅井と織田の同盟も、すべて築田殿の進言だそうじゃないか。すべてがうまく行っておる」
「いやあ、た、確かにあっしの進言ではありますけど」
この展開だと、ではこの浅井は将来どうなるのかと絶対に訊かれる。そのときにおれは何も言えない。なにしろ信長に滅ぼされるんだから。
おれは着物の袖で額の汗をふきふき言う。
「後世から来たっていうのは、ただ、信長様に取り入るために話をおもしろおかしくするためで。あっしはただ、その、まあ、嘘つきなのです」
シーン。
「あっはっはっは」
静寂を破るように長政が大笑い。
「なるほど、そういうわけであったか。しかし、己を嘘つき呼ばわりするとは、なんて愉快な男だろうか、築田殿は」
すると、長政自ら徳利を持ち、おれの盃に酒を注いでくる。
「しかし、名軍師であることに変わりはない。なんなら、わしの配

下になってほしいものです」
「そ、それは信長様が許してくれないかと」
「冗談ですぞ、簗田殿」
当然だ。ビビらせるな。

で、宴会も終わり、おれは小谷城に一泊することになったんだけれども、市姫がおれに会いたがっているということで、市姫の侍女に部屋まで案内される。

どうやら、侍女の話によると、信長がおれを小谷城に向かわせた目的は、市姫が信長におれに会わせろという手紙を送ったからしい。

おれに会いたいだなんて、なんなんだろうな。絶対にデュフフな展開にならないだろうし。

「奥方様、簗田様をお連れしました」

侍女が障子戸越しに言うと、おれは廊下で平伏し、

「お久しぶりです、簗田牛太郎政綱でございます」

「お入りくださされ」

と、障子戸の向こうから瑞々しいお声。むふう。なんか、声も艶っぽくなっているな。市姫に会うのは、清州城以来、六年か七年ぶりぐらいだから、どんな女性になっているかという期待感はとてつもない。

で、侍女が障子戸を開けて、おれは顔を伏せたまま中へ。いい匂いがするなあ。

「お顔をお上げください」

そう言われて初めて頭を上げると、ふわあ、マジで絶世の美女。あまりの美女っぷりにおれはきょどって視線の置き場に困る。なんだかなあ。あずにゃんやさゆりんだって可愛いのに、奴らと比べるのがおこがましいぐらいの美女。つぶらながらも艶やかな黒い瞳、切れ長に伸びた瞼、すらりとした鼻筋、つぼみのような唇、さらさらの絹糸のような黒髪。

おれは、おれは、ここにいるだけでもとろけてしまいそう。

ただ、腹がやたら出ている。妊娠しているらしい。

「お久しぶりです、牛殿。お忙しいのに、勝手を申しましてごめんなさい」
「い、いやっ、そんなっ。い、市様に呼んでいただけるなんて光栄この上ない光栄です。この簗田牛太郎、天下一の果報者でございますっ！」
　すると、市姫は着物の袖を唇にあてがって、くすくすと笑う。はにゃあ。お美しいだぎゃあ。おりゃあは幸せだぎゃあ。
「牛殿はお変わりがないようで、安心いたしました」
　それにしても、長政の野郎、こんな美女とあれやこれやと毎晩お楽しみとはな。クソッ。なんか、あのイケメンがむかついてきたな。
「あ、あっしも市様がお幸せそうで安心いたしました」
「ありがとう、牛殿」
　あかーん。あかーん。めっちゃきゅんきゅんするわー。チクショウ。チクショウ。こんなことなら、あのとき信長をだまくらかして、市姫をおれのものにすれば良かった。
　いや、そんなの無理だな。一言でも口にしたら、殺されるに決まっている。何気にあの野郎、妹思いだからな。おれが市姫を浅井に嫁がせろって言ったときも激怒していたし。
「実はですね、牛殿。なんでも摂津で御活躍されたという噂を聞きまして、急に牛殿にお会いしたくなったのです。そういえば、清州にいたころ、牛殿がおっしゃっていたな、と。市は幸せになると」
　むう。ちょっと心が痛い。
「市は見ての通り幸せでございます。貴方が兄上に市の嫁ぎ先を浅井と進言したと聞いたときには、貴方を恨みはしましたが、しかし、浅井の家は、市を大切にしてくださいます」
　そりゃそうだ。人質とはいえ、信長の妹なんだから。ないがしろにする訳ない。それに美人だし。
「それで、貴方に一つお訊ねしたいことがあるのです。牛殿は後世から来たのですな？」
　うっ。またそれですか。

「いや、後世から来たっていうのは信長様に取り入るための嘘でして。信長様であれば、おもしろおかしい話しに興味を示してくれると」

「それが嘘でございましょう」

ふふ、と市姫が笑う。

「それが本当であれば、兄上は牛殿をお抱えになっていらっしゃらないはず。兄上はそういったことを見抜くのが得意でございますもの」

「いや、信長様はそういったところを含めて、あっしを――」

「わかりました。牛殿は後世から来たということを秘密にすることにしたのですね」

うっ。さすが信長の妹だけあって鋭い。

「そういうことであれば、この話はやめましょう。牛殿を困らせるわけにはいきませんからね」

にこっと笑った市姫。

池田城での牢屋生活、岐阜での恐妻生活、そして市姫。まるで、おれの荒んだ日々に盛られた一服の清涼剤のような胸キュンの笑顔。

だけど、おれはすぐに複雑な気分に陥る。いつだってそう。市姫に会うと憂鬱になってくる。

もしも出来るなら、天使のような市姫を救い出したい。いずれ浅井と織田は喧嘩をすることになると教えてあげたい。

でも、それをやったところで何になるんだ。むしろ、歴史を大きく変えてしまう火種になってしまうかもしれない。

おれは歴史のレールの上でせこせこと生きていき、歴史を大きく変えない程度にいい思いをするだけだ。

じゃないと、歴史を大きく変えてしまうと、おれが元いた時代が消滅しかねない。すると、おれも消滅しかねない。

だから、市姫を救い出すことはできない。

タイムパラドックス（後書き）

第六章おわりです。

ここまでどうもありがとうございました。

良き友

年賀の挨拶に池田城の池田八郎三郎勝正を訪れ、八郎三郎以下、池田の家来どもに丁重に出迎えられた目付役のおれ。

「それにしても、昨年は簗田殿に大変世話になりました」

と、中年マッチョの八郎三郎。当然だわな、こいつらの命と所領が許されたのはおれのおかげだ。

「何度も申し上げたことではございますが、牢に放り込んだにも関わらず、その足で我らをお許し頂けるとは感謝してもしきりませぬ」

八郎三郎がそう言うと、池田の家来どもも頭を下げてくる。若干二名ほど、信用の置けないやつがいるけどな。

案の定、池田城を降りるとき、信用の置けないやつの一人がおれを追いかけてきた。

「簗田殿、例の件なんだが」

「なんスか、瀬兵衛殿。例の件って」

「そりゃ、あれだろ、牢でのやり取りのことだ」

「だって、あんなの約束通りになってないじゃないッスか。牢屋から出られたのは信長様の軍勢が攻めてきたからッスよ」

「出られたのはそうだが、それまでの間、簗田殿の命をお守りしたのは何を隠そう、この瀬兵衛だぞ」

本当にゼニゲバだな。クソッ。おれだって財布の中身はすっからかんだっていうのによ。だいたい、こいつは池田城攻めのときにおれに命を救われたやつだっていうのに、図々しいったらありゃしねえ。

「ほんのわずかの誠意でいいんだ。おれも先立つ物がないんでな。頼んだぞ、簗田殿」

そう言って、館に戻っていった瀬兵衛。氏ね。何が先立つ物だ。

おれは池田城下の仮住まいの屋敷に戻ってしばらくすると来客。

もう一人の信用の置けない男。

「や、簗田殿、な、何か、お困り、お困りごとがあれば、な、な、なんなりと、この信濃守に申してくだされ」
「別にないッスよ。八郎三郎殿には奉公人を貸して下さいましたし。不自由していません」
「ま、まあ、し、しかし、これから、いろいろと出てくるであろうし」
うぜえな。ヘタレ村重の顔なんて見たくもないんだよ。さっさと帰ってくれ。
ん？
そうだ＾＾
「あ、村重殿、そういえば困ったことがありまして」
「な、なんでございましょう」
ヘタレはここぞとばかりに表情を明るくさせた。多分、こいつはおれを裏切ったことを帳消しにしたいんだろう。
「実は瀬兵衛殿に金をたかられて困っているんです」
「せ、瀬兵衛に、で、ですか？」
「そうなんです。実はあっしもうっかりしておりまして、牢屋に入れられていたときに瀬兵衛殿と約束してしまったんです。牢屋を出してやるからその代りに金を寄越せと。その約束を今でもごちゃごちゃ言ってくるのです」
「な、な、なんと。せ、瀬兵衛は、金に汚いと、き、聞いておりましたが、そ、そこまでとは」
「しかし、約束は約束です。でも、あっしも先立つ物がございません。どうしたものかと悩んでいまして」
「そ、そうですか」
と、視線を落とすヘタレ。なんなんだよ。お前、瀬兵衛より偉いんだろ。どうにかしろよ。
「か、金の、や、約束とは、難儀な、も、ものです」
くそう。こいつ、はぐらかそうとしやがって。
「なんとかしてくれませんか、村重殿」

「な、なんとかと言われ、言われましても、せ、拙者が、できること、と言ったら、と、殿に申しても、お、怒られるだけですし、瀬兵衛に申しても、に、睨み返されるだけ、だけですし、せ、拙者のできること、といえば、や、簗田殿に金銭をお貸しすることしか」
「じゃあ、くれませんか」
「あ、いや、拙者は貸すと言ったので」
「ください。その代りと言ってはなんですが、今度、茶会を開いてください。あっしは謹慎中に岐阜で茶の湯を学んできたのです」
「なんと！」
飛び跳ねるように表情を明るくさせたヘタレ。
「簗田殿も、茶の湯をっ？」
「ええ。しかし、まだまだ、あっしは勉強不足でして。ならば、せっかく池田にいるのであれば、村重殿に御教示願おうかと思っていたのです」
「左様でございますか。拙者で良ければ、いつでも簗田殿に茶の湯を披露しましょう」
「じゃあ、お金もくれるっていうことで」
「構いませぬ、構いませぬ。友のためなら、金など惜しみませぬ」
ククッ。馬鹿が。お茶の相手をしてくれるだけで金をくれるなんて。どうせならふんだくってやろう。
「じゃあ、二百貫ほど頂けないでしょうか」
「に、二百貫、で、ですか」
「御存知だとは思いますが、なにしろ瀬兵衛殿はがめつい人で」
「さ、左様、でございますな。た、確かに、せ、瀬兵衛はがめつい。か、かしこまりました。な、な、なんとか致しましょう」
「有難うございます、村重殿」
頭を深々と下げたおれだが、にやにやが止まらない。駄目で元々で言ってみたら、なんていう良き友を見つけたことか。

急報

ゼニゲバ瀬兵衛に支払う金を貰ったので、ヘタレ村重のお茶に付き合わされるおれ。

ちなみに瀬兵衛に支払った金は五十貫。不服そうだったが、おれの俸禄は五十貫しかないんだということで納得させた。で、残りの百五十貫はへそくりとして隠すことに＾＾

「結構なお手前でございました」

ヘタレ自慢の茶器を畳の上に置くと、ヘタレは二百貫分の笑顔。

「簗田殿はなかなかどうして身のこなしが実に粋でございます。貴公のような大きな体で茶を嗜まれる姿は見ていて清々しい」

どうやら、ヘタレは茶室に入ると賢者になるらしい。顔つきもキリッとしていて、茶の湯馬鹿だ。

「あっしこそ、御自慢の茶碗で楽しませていただき、岐阜への土産話ができました」

なんて、おれも饒舌。なにしろ、二百貫も貰っちゃったんだから、おべっかの一つや二つも言っておかないと。

「岐阜と言えば、上総介殿は去年の暮れに軍勢を連れて岐阜に引き上げたそうですな」

「そうなんスか？」

と、何も知らないおれ。

「はっきりとはわかりませんが、先日の年賀の集いのさいに、他の配下の者が耳にしたと話しておりました」

なんだ。岐阜に引き上げたのか。じゃあ、この後はどうするつもりなんだろう。伊勢でも戦争しているらしいからそれかな。誰とやっているかは知らないけど。

「京に残られたのは村井貞勝殿と明智光秀殿、それに木下秀吉殿であると。この三方が京の上総介殿の代理として駐在するらしいのです」

ふーん。十兵衛なら建前は足利幕臣だからわかるけど、サルと村井のジジイっていうのが意味不明だな。

「上総介殿が京に残したということは、この方々は幕府や公家との折衝がお上手なのでしょうな」

それにしても、こいつ、茶室だとやたらべらべらと喋るな。詮索したがりだし。

「殿っ！」

と、戸の向こうから切羽詰まった声が。

「何用だ。今は簗田殿を招いている最中であるぞ。無粋な真似をするではない」

「おやかた様からの下知ですっ！　急ぎ出陣の支度をせよとのことですっ！」

「な、な、しゅ、出陣、じゃ、と？」

途端にヘタレに切り替わった村重だけど、おれもヘタレを笑っていられる状況じゃない。まさか、またしても、信長が池田城に攻めてきたんじゃなかろうか。おれもヘタレ同様きょどってしまう。

「な、なにゆえだ。なに、なにゆえ、しゅつ、出陣なの、だ」

「斎藤龍興が三好三人衆と共に挙兵したとの急報が入ったようです」

斎藤龍興って、稲葉山城のタツオキ？　どこで何をやっていて、どうして今さら挙兵なんだよ。

「しょ、承知、し、した。今すぐに、支度、支度する……」

腰を重たそうに上げるヘタレ。おれも重たい腰を上げる。

「いく、いくさのようですな、や、簗田殿」

「そ、そうみたいッスね」

ハア、と、おれとヘタレは揃って溜め息。

おれには出陣要請が来ていないけど、もちろん、出陣しないと駄目だよな。

てことで、ヘタレの屋敷前でクリツナと共に待っていたねじり鉢巻きにいくさが始まることを伝え、仮住まいの屋敷に戻って支度。

といっても、綱を巻くだけ。

てか、新天地でこの姿を見られたくないな。やっぱり行くのやめようかな。

居間で行こうかやめようか悩んでいると、池田八郎三郎の家来が庭先にずかずかと入ってきて、

「簗田殿！　京に軍勢が向かっているという報せが入ってきましたぞ！」

知っているよ、クソッ。

仕方なく、クリツナに跨って池田城へ。

信長が岐阜に戻ったっていう話だけど、多分、三好三人衆はその隙に京を奪還しようっていう腹積もりなんだろうな。どこまでこざかしい連中なんだ。どんな奴らなのかは知らないけど。

法螺貝が鳴り響く池田城下は大騒ぎで、各地の諸将が軍勢を率いてくる列が土煙を上げたり、足軽長屋から雑兵が素っ飛んでいったり。町民はまたいくさかと騒ぎながら逃げ惑う。

ついこの間に激戦を繰り広げた城内の庭にははち切れんばかりの兵隊が押し寄せてきていて、口輪を取るねじり鉢巻きに導かれて、クリツナとおれは雑兵どもをどかしていく。

クリツナから降りて、かつて裏切りに合った広間へ。

「一体どういうことじゃ！　三好はどこに攻め入る気なのじゃ！」

「京だと言っているだろうが！　上総介のおらぬ間に京を手中にする気なのだ！」

「しかし、何を狙っているのか読めんではないか！　それに、大和の松永弾正の動きはどうなんだ！」

広間は家来たちの怒声が飛び交い混乱中。

「殿！　我らが出陣する義理などありましょうか！　いっそのこと我らも三好と共に行動すればよいのではないですか！」

おいおい。な、何を言っちゃってんだよ。勘弁してくれよ。おれが来ていることに気付いていないのかよ。

「たわけがっ。ここにきて何を申すか。ここは上総介殿、そして簗田殿の恩を返す好機。急ぎ京に向かうぞ。恐らく三好の狙いは公方

様だ」
腰を上げた池田八郎三郎。おれと目が合って、この中年マッチョはもさもさ髭の下でにこりと笑う。
「簗田殿、見ていてくだされ。三好の輩など蹴散らしてくれましょうぞ」
うん。頑張って。おれはあくまで見ているだけね。

本圀寺の友情

全軍態勢が整った池田勢は京に向かって強行軍。ダッシュダッシュダッシュ。馬に跨っているやつは鞭をビシビシ、雑兵たちが疾走する馬に食らいついていくというサディスティックな進軍。

途中、先に京に走らせていた斥候が戻ってきて、タツオキ・三好連合軍は足利義昭のいる本圀寺を攻めにかかったらしい。少ない手勢で十兵衛が奮戦しているらしいけど、劣勢。サルは？

また、他の伝令が飛んできて、伊丹城の伊丹親隆もタツオキ・三好連合軍を討つために出陣したらしい。

これを聞いて、池田勢は更に加速。同じ摂津衆の伊丹勢に手柄を取られまいと鼻息も荒くする。

ま、おれはクリツナの上で楽チン。いくさにも参加しないし。見物客みたいなものだし。

ヘタレ村重は顔面蒼白。

ゼニゲバ瀬兵衛は血気盛ん。どうせ、手柄を立てて俸禄を上げてもらおうっていう魂胆なんだろ。

で、池田勢は夜通し走り、市中に到着。おれは眠たい。

「本圀寺は近い！　皆の者、気を引き締めてかかれ！」

池田八郎三郎の激が飛んだけれども、本圀寺に到着してみたら、いくさなんてしていなかった。ただ、燃えたあとがところどころに。

「どういうことだ」

「引き上げてしまったのかもしれませんな。我らが向かってきているという報せを受けたのでしょう」

ラッキーヘヘ　ヘタレ村重も密かににやり。

「追撃しましょう！」

と、ゼニゲバ。

「待て。とにかく今は境内に詰めよう。それに兵を休ませたい」

八郎三郎の言葉にゼニゲバは不服そうな顔。てか、こいつはどん

だけ自信があるんだよ。そこまで強くはねえだろ、どうせ。
本圀寺の境内には矢があちこちに落ちていて、負傷者の手当てをする光景も。
そこに甲冑姿の十兵衛がやって来て、池田勢をお出迎え。八郎三郎も馬から降りて、十兵衛の前に片膝を付く。
「摂津池田城主、池田八郎三郎勝正にてございます。危急の事態と聞き、参上つかまつりました」
「池田殿、助かりました。摂津衆が出陣されたという報せを受けて、斎藤龍興と三好三人衆は引き上げました。ただ、いまだ京に残っているとの報せもあるので、恐縮ではありますが、しばし、ここに兵を留めておいてはくれまいか」
「無論、仰せの通りにいたしましょう」
じゃ、おれは以前の宿寺に行って寝ようかな。
「簗田殿ではないか！」
ぐう。ねじり鉢巻きに伝える前に見つかっちまった。
「どうしてここに」
仕方なしにクリツナから降りて、十兵衛に今は摂津池田に派遣されていることを伝える。
「左様か。忙しさにかまけていて、まったく知らないでいた」
「それより、藤吉郎殿は来ていないんですか」
「木下殿？　おられますぞ」
なんだ。やっぱり来ていたのか。
サルにしては珍しい。あいつのことだから、応援が来たとなると真っ先に飛び出てきそうなものだけど。
で、駆け付けてきた池田八郎三郎を義昭に会わせたいということで、十兵衛と八郎三郎は本堂へ。おれは呼ばれない。多分、変態綱鎧だから。将軍との面会なんて面倒だから別にいいけど。
「た、助かり、ま、ましたな、や、簗田殿」
いつのまにか隣にいたヘタレが、安心しきった顔で呟いてくる。
「せ、拙者はいくさが、き、嫌いゆえ、気が気でありませんでした」

なんか、やたらすり寄ってくるようになって、返ってうざいな。
でも、良き友だから合わせておかないとな。
「あっしも嫌いです。だいいち、こんな身なりでいくさに出ようなんておかしい話じゃないスか」
「ま、まあ、そうですが、ど、どうして、甲冑を着込まないのです」
「いや、買ってくれないんですよ。沓掛城の財布は丹羽殿に握られているし、あっしの俸禄ですら、息子に握られているんですよ。信じられないでしょ」
「さ、左様ですか。な、ならば、こ、購入されては。せ、拙者がお貸ししますゆえ」
「えっ？」
マジで＾＾　心の友じゃ～ん＾＾
「で、でもなあ、借りても、いつ返せるかわかんないもんなあ」
「そ、それは、もう、い、いつまでもお待ち、します。や、簗田殿はせ、拙者の親友ですから」
「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかなあ」
「ええ。ええ。ぜ、是非とも。池田に戻ったら、早速、しょ、職人を呼び寄せましょう」
「いやあ、持つべきものは友ですなあ」
フヒヒ。なんていいやつなんだろう。まさか、おれをここまで気に入ってくれる人間がこの世の中にいるとはな。

そんな時代もあったよね

さて、疲れたからひと眠りしようかと、それぞれの武将だけに用意された部屋に向かっていると、縦長帽子を被った半兵衛と木下小一郎の二人とすれ違った。

「築田殿、来ていたのですか」

甲冑姿だというのに、ノーマル半兵衛の様子。

「ああ、そうだった。築田殿は今、摂津池田におられるんでしたね」

「これはちょうど良かった。築田殿、兄さんに声をかけてやってもらえませんか」

サルなんかには会いたくない。

「いや、でも、おれは夜通し突っ走ってきたもんだから眠くて眠くて。申し訳ないけど、寝させてくれないかな」

「ちょっとでいいんです。ちょっとで」

と、やたら懇願してくる小一郎。

「どうしたの。何かあったの」

「いや、実はですね」

小一郎の話によると、サルは現在布団の中にくるまって怯えているらしい。

実は、信長が岐阜に戻った理由の一つに、サルの進言があったそうで、自分がいれば京は安心だとかなんだとかと大きなことを言ってしまって、信長を岐阜に戻してしまったらしい。

で、信長が京を離れた途端にこのざま。

さすがにいくさの最中は必死になっていたが、タツオキ・三好連合軍が引き上げたあとは、死傷者を出してしまったこともあって、部屋に閉じこもって泣きべそ。

ざまあｗｗｗ

「呆れたものですよ」

半兵衛が苦笑しながら言う。

「どうせ、おやかた様は殿の進言などで岐阜に戻ろうと決めたわけではないのですから。おやかた様だって殿の法螺吹きなど真に受けておりませんのに」

「そういうこともあって、簗田殿から慰めの言葉でもかけてもらえませんか。簗田殿が来たとあれば、兄さんも元気になりましょう」

確かに元気になるかもしれないけどね。おれを馬鹿にして。

でも、いい機会だ。馬鹿にされる前に今までのサルの悪党ぶりを並べ立てて攻撃してやろう。

ということで、サルが引きこもっている部屋へ。小一郎の言った通り、一枚敷かれた布団がこんもりと盛り上がっている。

「兄さん、簗田殿が来られましたよ」

「にゃあ？」

布団の裾からちらりと目を覗かせてくるサル。

「にゃんで牛殿がいるんだぎゃ」

「簗田殿は今、摂津池田におられるって前にも半兵衛殿に教えてもらったじゃないですか」

「そうだったにゃ」

と、サルは布団の中に頭を引っ込めてしまう。

「どうせ、おみゃあは馬鹿にしに来たんだぎゃあろ。おりゃあの不手際を馬鹿にしに来たんだぎゃあろ。でもにゃあ、おみゃあが摂津で呑気に正月を迎えている中、おりゃあは大変だったんだぎゃ。おみゃあには死んでもわからにゃい苦労があるんだぎゃ」

イラッ。おれだって牢屋に入れられたりして大変だったっていうのに。

「まあ、調子に乗りすぎていたってことッスね、藤吉郎殿」

「にゃんだと？」

再び目を覗かせてくるサル。

「おりゃあがいつ調子に乗っていたって言うんだぎゃあ」

「調子に乗っていたから信長様に大法螺吹いたんでしょ。あーあ、信長様、怒っているだろうなあ。切腹かなあ。ま、よくて謹慎一カ

月でしょうね」
「にゃあ……」
再び頭を引っ込めるサル。
「牛殿は卑怯だぎゃ。おみゃあはおりゃあに数々の恩があるっていうのに、そうやって言うだなんて卑怯だぎゃ」
「何が数々の恩ですか。それはこっちが言いたい言葉ですよ」
「にゃんだと？」
「だって、そうじゃないッスか。桶狭間のときに近くの村の百姓に小判を渡したのだって、あれはあっしからぼったくったお金じゃないッスか」
「そんな証拠なんてにゃあっ！」
「墨俣城のときだって、あっしの手伝いがなかったら完成しなかったじゃないッスか」
「ありゃあ、おみゃあにおにゃの子を紹介してやったからだぎゃ！　手伝うのは当然だぎゃ！　それなのにおみゃあは千代殿を伊右衛門に取られたからって、おりゃあのせいにして言語道断だぎゃあ！」
ぐう。墨俣城のことは言わなきゃよかった。そういうところだけはきっちりと覚えてやがって。
「だいたい、おみゃあは昔のことを今さらうるさいんだぎゃあ」
優勢に立ったと思ったのか、サルは上半身を起こし、唾をがんがん飛ばしてくる。
「昔のことを言い出したら、おみゃあのほうこそキリがないだぎゃ。おみゃあがまだ清州の野良牛だったころに、いろいろと世話をしてやったのはおりゃあだぎゃあ」
清州の野良牛だと……。
そういえば、言われてみれば野良牛みたいなそんな時代もあったよね。なんか、あの頃がありありと蘇ってくるな。懐かしいな。清州のボロ屋で、ゴザ一枚の生活。清州のボロ屋で、マタザやおまつ、遠山さんやサルと宴会した日。
いや、ちょっと待てよ。

「いろいろと世話をしてくれたのはあさひ殿じゃないッスか！　しかも、あれは藤吉郎殿の差し金でしょう！　あさひ殿を差し向けて、あっしをいいように扱おうとしていたんでしょう！」
「にゃっ……」
「ほら！　その通りじゃないッスか！　それに寧々さんと結婚したいから信長様にお願いしてくれって頼みこんできたり――」
「そ、それは言うなっ！」
布団から飛び出してきたサルは、おれの背中に腕を回して、部屋の隅まで連れていく。
「兄さん、今の話、本当なんですか？」
「すまなかった。すまなかったから、それだけは言わないでくれ」
と、小一郎を無視して、なぜか賢者モード。
「牛殿の言うことはよおくわかった。おれも反省する。だから、そのことだけは言わないでくれ」
ほほう。サルの弱味はそれだったか。ふむふむ。メモっておかないとな。

出番なし

その日の夜から雪がちらつき始め、次の日には京の都が白く染まった。まあ、さすがにタツオキ・三好連合軍も退却しただろうと思ったけど、しぶとく、市中郊外に陣取っているらしい。

本圀寺の本堂では諸将が居並び緊急会議。

「どう出るべきか」

と、十兵衛。

「皆様の意見を聞きたい」

「恐れながら」

声を上げたのは伊丹城主の伊丹親隆。

「大和の松永弾正と呼応する向きもあるのではないでしょうか。三好と弾正はかつて仲たがいしたとはいえ、どちらも悪党中の悪党。これを機に京を奪還したいと考えているのは三好だけではないはず」

「だったら、弾正忠はすでに挙兵していると思いますがね」

池田八郎三郎が口端を歪めながら言う。同じ摂津で、所領が隣接している同士、伊丹親隆とは仲が悪い。

「しかし、今後も弾正が反旗を翻さないという理由もない。ならば、さっさと討って出るべきではござらんか」

「伊丹殿は血気盛んでございますなあ。よおく考えてくだされ、我らが討って出たら本圀寺の守りはどうするのですか。それこそ、公方様及び上総介殿をよく思わない連中の思うつぼではないですか」

「なら、池田殿はどうあるべきだとお考えだ」

「それをここで決めようとしているのではございませんか」

「にゃあにゃあ、御両人とも、落ち着くだぎゃあ」

サルがなだめに入って、むすっと口を閉ざす摂津衆の二人。サルもサルで、おれと言い争ったせいか、けろりとしている。

「おりゃあは半兵衛の意見が聞きたいだぎゃ。半兵衛はどう考えるだぎゃ」

サルに振られて、終始目を瞑って黙りこんでいた半兵衛は、うっすらと目を開く。いくさなのになぜかノーマル半兵衛。
「おやかた様の御到着を待つ他ないでしょうね」
「しかし、半兵衛」
と、十兵衛。
「上総介殿が岐阜を出立されたのは昨日の夕刻であるぞ。岐阜から京まではどれだけ早くても三日はかかる。しかも、この積雪だ。進軍も鈍くなる。その間に斎藤・三好が再び攻め込んでこないとは限らん」
「むしろ、攻め込んでくるでしょうな」
伊丹親隆が再び発言して、池田八郎三郎があからさまに眉をしかめる。
「上総介殿の到着の前に本圀寺を落とす。子供でも考えることです」
「左様でございましょう」
しかし、と、言葉を繋げた半兵衛。
「攻めては来ませぬ」
「なぜだ」
「斎藤・三好に与する輩がおりませぬ。畿内の有力者のほとんどは義昭様に従っております。彼らもそれはわかっております。だから、手勢の本圀寺に攻め込んできたのでしょう。しかし、予想外に摂津衆の動きが早かったため、一度、退き、態勢を整え直しているのでしょう」
「態勢を整え直しているのであれば再度攻め込んでくるということではないか」
「来ませぬ。態勢が整わないからです。松永弾正が動きませんから、態勢は整いませぬ」
「そんなのはただの希望的観測ではないか」
「弾正を侮ってはなりません。奴は時流の匂いを瞬時に嗅ぎ取れる男です。今、ここで京を奪還したとしても、何の得にもならないことぐらい、奴はわかっております。だから、弾正はおやかた様に降

伏してきたのです」
うーん、と、腕組みする一同。半兵衛の言っていることはもっともだが、かといって根拠があるわけでもない。
「それに、おやかた様は明日にでも御到着されるでしょう」
「そんな馬鹿な」
と、失笑する伊丹親隆。さすがの十兵衛も怪訝そうな目。
「明日になればわかりまする。もしも、おやかた様が御到着されなかったら、そのときは討って出ましょう」
結局、結論は一日待ってみて、明日もう一度考えるってことで軍議は終了。
相変わらず、出席しても出番のないおれはあくびを欠きながら部屋に戻る。それにしても、いくさ狂いの半兵衛はどこに行ってしまったんだろうと思って振り返ってみると、調度、半兵衛とサルが本堂を出てきたところだった。
「おみゃあ、あんなことを言って本当に大丈夫なんぎゃろうな」
おれは思わず失笑。お前が言えたセリフかよ。
「殿はおやかた様を御存知じゃないのですか」
「にゃんだぎゃ、知っているに決まっているだぎゃあろ」
「おやかた様は人一倍早く駆けます。ですよね、簗田殿」
首を傾げるおれ。言っている意味がよくわからない。

牛太郎の不満

翌日、信長が市中に入ったという報せは、一同を仰天させた。あわてて信長を迎え入れる準備を始めたが、それも整わない間に、信長が本圀寺に到着。しかも、周りにいるのは十人ぐらい。太郎も凶暴馬に跨っている。

一同が境内に平伏する中、信長は馬から降りて、一言。

「大儀であった！」

一同揃って有難き幸せ。意外。怒っていると思っていたのに。特にサルに。

「池田と伊丹の両勢の迅速な動きがなければ、公方様は亡き者であった。礼を言おう」

その間、ぞくぞくと馬廻衆や足軽雑兵たちが境内の中に入ってくる。どうやら、十人だけで来たわけではなくて、信長がめちゃくちゃ飛ばしてきたみたいで、付いてこられなかった奴が大勢いるらしい。

「上総介殿、義昭様がお待ちかねです」

片膝をついていただけの十兵衛が信長に言うと、

「今は賊軍の討伐が先だ。後にしろ。今から軍議を始める。兵どもには一刻休んだのち出陣と伝えろ」

で、休憩を挟んで、討伐軍出陣。桂川というところでタツオキ・三好軍と相まみえたけど、信長本隊の軍勢の多さで、戦争は呆気なく終了。

「進軍の速さこそおやかた様の戦いでしょう」

と、半兵衛。ふむ。なるほど。

ただ、岐阜から京への雪道の強行軍は、凍死者まで出したほどだったと、ちゃっかり軍勢に付いて来ていたさゆりんに教えてもらった。

「まあ、拙者などは慣れていますから死にませんが」

「そんなことより――」
おれは桂川から本圀寺へと引き上げる道中、気が気じゃなくてクリツナから降り、ねじり鉢巻きに聞こえないよう、さゆりんに声を潜めて訊ねた。
「願福寺の件はどうなったんだよ」
すると、さゆりんはにやりと笑う。
「上々です。百貫の儲けでした」
むう。三百貫近く投資して、百貫の儲けかよ。願福寺の取り分が多すぎるんじゃねえのか。
「次はもう少し稼ぎが多くなるでしょう」
まあいい。戦略は気長に、戦術は気短に、だ。何もしないで金が入ってくるだけよしとしてやる。
本圀寺に戻ってしばらくするとお楽しみ会。でも、別に領地を獲得したわけでもないから、面々に浮かれた様子はない。
案の定、大した行賞はなし。
ただ、池田八郎三郎が足利幕府から摂津守護に任ぜられた。信長の取り計らいらしい。
おれは複雑な気分。池田勢を生かしたのはおれ。そのあと、信長にボコられたのもおれ。しかし、行賞はおれが生かしてやった八郎三郎だけ。クソッ。
当然、八郎三郎はおれに感謝の言葉をかけてきたが、おれはおもしろくない。おれだって本圀寺に駆け付けたのに。
おもしろくないのはおれだけじゃなく、同じ摂津衆だった伊丹親隆も表情が不服そう。なにしろ、八郎三郎が摂津守護になったとなれば、伊丹親隆は配下クラス。あと、なにげに茨木城主の悪人面の茨木重朝の姿もあって、あいつも同じような苦々しい表情。そもそも、最初から仲が悪い同士だし。
また、一悶着ありそうな予感。まあ、でも、おれは八郎三郎が変なことを起こさなければお咎めないしな。これだけ恩を受けた八郎三郎が信長を裏切ることはないだろう。

それにしても、おもしろくない。
おれも十年ぐらい織田家に仕えているんだから、そろそろ俸禄を上げてくれたっていいんじゃないのか。
池田勢は明朝、摂津池田に引き上げるらしい。おれも付いていく予定。もう少しゆっくりしたっていいじゃんか。こき使いやがって。
「どうしたん。勝ちいくさだっていうのに、そんなむっつりして」
祝杯の宴席から部屋に帰ってきたおれを見るなり、素のさゆりんが言ってきた。
「そりゃ、むっつりもするわ。おれには何の御褒美もないじゃんか」
「あるわけないやんか。何もしてへんのやから」
「何もしてないわけないだろ。池田勢の目付役はおれなんだぞ。それなのに、なんで池田八郎だけ偉くなって、目付役のおれは偉くなれないんだ」
「いややなあ。ずいぶんとがめつくなったやないか。瀬兵衛と一緒や」
言われてみると、確かに考えががめつくなっているような気がする。でも、おれには鉄砲をこしらえなくちゃいけないっていう目的があるんだ。何がなんでも金金金なんだ。
「そういや、丹羽五郎左は一緒に来ていないのか」
「来てへん。岐阜に残っておる。この前、暮れにあいりに顔を見せに来たわ。左衛門太郎も一緒やったで」
チッ。おれの知らないところで着々と準備をしているってことか。クソッ。
いや、でも、マリオがあいりんの父親になるっていうことは、マリオはあいりんに、嫁ぐときの支度金を渡すってことだよな。それは太郎の金になるわけじゃない。築田家のものだ。
「太郎は来ていないのかよ」
「栗之介と一緒に馬を見に行っているわ」
「太郎を呼んでこい」
「なんや、そんな怖い目をして。急にどうしたんや」

「いいから呼んでこい」
おそらく、おれは岐阜に戻れる暇がない。マリオに会えない。となると、太郎に支度金をふんだくらせなければならない。

高すぎる壁

「何を言っているんですかっ！」
支度金の話をすると、それまでにこにこしていた太郎は途端に血相を変えて吠えてきた。
「そのようなことを口にするなんて、父上は御自身を恥ずかしいと思わないのですかっ！」
「恥ずかしくなんてない」
開き直っているおれ。
「築田家は貧乏、丹羽家は金持ち、なら、大目に寄越せって言うのが当然だ」
聞いていたさゆりんも呆れ顔。ねじり鉢巻きまでおれを白々しく見てくる。
「父上は最初からそういう魂胆だったのですね」
「そうじゃないけど、考えてみたらそれが当然だって思ったからだ」
「話になりません。馬廻衆のところに戻ります」
「ちょっと待て！　おれだって別に遊びたい金欲しさで言っているんじゃない！　おれにだっていろいろと考えがあるんだ！」
「考えがあっても無理です。それではおやすみなさい」
戸をぴしゃりと閉めていった太郎。ぐう。話にもならねえ。
「そんじゃ、おれも自分のところに戻っから」
ねじり鉢巻きもおれを見下した感じで出ていく。
「何を言い出すかと思ったら、ほんまに阿呆やな。仮にも武将やったら、武将らしく戦場で手柄を上げて金を稼ぎいや」
「そんなこと無理に決まっているだろ。だから鉄砲が必要なんだ」
「知らん。寝るで」
くそうくそうくそう。おもしろくないおもしろくないおもしろくない。頭でっかちの能無し連中が！
で、翌日、摂津池田に。

摂津守護に任ぜられた池田八郎三郎の軍勢はまさに凱旋といった感じで、どいつもこいつも胸を張っていた。

仮住まいの屋敷に戻り、派遣奉公人が用意してくれた夕飯。お風呂。寝る。考える。どうやって鉄砲を仕入れるかを。

鉄砲一丁につき百貫から三百貫。その差額の開きの大きさが意味不明だが、たとえ百貫としても五百丁仕入れるのに五万貫。無理。五万貫って言ったら、その辺の大名でもなかなか出せない額なんじゃないの。

そもそも、おれの俸禄は五十貫。そのうち、五人の下僕どもに俸禄を支払っているから、むしろ赤字。なんで、今までやってこられたのかわからないけど、多分、沓掛城の収入が岐阜に流れて来ているんだろう。シロジロや太郎に任せていたから、自分の家の家計の状況すらも知らなかったおれ。どうかしているぜ。

そう考えると鉄砲隊なんて無茶な話なのかな。

五万貫ともなると、さすがにヘタレ村重にせびることもできん。

ハア。やっぱり、所詮、おれはおれなのかもしれない。城主という時点でも、おれの中では大成功の部類、いや、奇跡の部類に入るのかもしれないんだから。

身をわきまえるしかないのか……。

次の日、己の身をわきまえて縁側で放心していると、ヘタレ村重の使いの人間がやって来て、早速、茶会だとさ。ボンボン野郎め。遊ぶことしか知らねえ。

とはいえ、おれの金づるだから、渋々、ヘタレの屋敷へ。

「茶は心が落ち着きますな、簗田殿」

「そうッスね」

と、茶のあとのお菓子を食べながら、おれは心ここにあらず。なんだか、目的に挫折してしまったせいで、心が空っぽ。いくら銭稼ぎに勤しんだところで、鉄砲隊結成の壁は高すぎるんだもの。

「どうしたんです。浮かない表情をして」

茶の湯賢者の村重は、ヘタレモードのときとは違って、相手の表

情を判断できるらしい。
「いやあ、まあ」
「甲冑のことなら遠慮せずともよろしいですぞ。今朝、早速、職人を手配しましたから」
「いやあ、まあ、そのことではないんですがね」
「何か迷いごとでも？」
「迷いごとっていうか、なんか、こう、無理なものはいくらやっても無理なのかなあって」
「何があったのです？　この信濃守に遠慮なくお話しくだされ。拙者が何かお手伝いできるようなことかもしれません」
「いやあ、まあ、その、あっしはですね、そのお、五万貫ほしいんですよ」
「五万貫っ？」
さすがの茶の湯賢者も飛び跳ねて驚く。
「五万貫など、何に使うためにです」
「鉄砲が欲しいんです。火縄銃を五百丁」
「はあ……。火縄銃を五百ですか」
おれは村重に鉄砲をたくさん欲しい理由を話した。斬新な鉄砲戦術があることを話した。だから、五百丁揃えて、沓掛鉄砲隊を結成したいと。
「なるほど。確かに三段に構えれば、間断なく火縄銃を放てますな。玉込めや点火に要する時間が火縄銃の欠点ですが、その簗田殿のお考えであれば、それらの欠点を補えますな」
「真似しないでくださいよ」
「いや、拙者はいくさ嫌いゆえ。五万貫もあったら、茶室に茶道具を」
こいつは本当に馬鹿野郎だな。へらへら笑っているけどさ。道楽の中で野垂れ死ねばいいんだよ。
「まあ、でも、簗田殿。五万貫は難しいかもしれませんが、火縄銃を安く購入できるかもしれませんぞ」

「えっ？」

「堺に知人がおります。その方の口添えで、堺の会合衆に取り計らえるかもしれませぬ。堺は火縄銃だけではなく、全国のあらゆる品物が集まります。それに、先日、上総介殿が公方様から堺を直轄地にするお許しを貰いましたからな」

ふーん。そうなんだ。信長の直轄地ねえ。ということは、強奪しちゃってもいいのかな。

堺

村重の助言を聞き、和泉国の堺へ。

「とと屋」というところの田中与四郎っていう奴を訪ねろと言われ、紹介状も書いてもらった。村重も一緒に付いてきてくれと言ったのだけれど、池田の外は危険だから行きたくないというヘタレっぷり。

結局、クリツナ&ねじり鉢巻きと、やることのないさゆりんという、いつもの簗田一行の面々。

「信濃守がとと屋の知り合いだったとは驚きです」

と、さゆりんは言ったが、おれはとと屋のタナカなんていうやつにはまったく期待していない。名前からしてしょぼい。しかも、たかが、ヘタレ村重の知り合い。

「どうせ大した奴じゃねえだろ」

おれが吐き捨てると、さゆりんは何か言おうとしたが、すぐに口を閉ざしてにやにやとするだけ。何が可笑しいんだか。

まあ、堺の商人だったら、そういうコミュニティがあるのかもしれないから、一応は行ってみる。

「堺か。やっぱり、駿馬がたくさんいるんだろうな」

相変わらずのねじり鉢巻き。無視。

で、港町の堺に到着。むう。なんか様子がおかしい。建物がぎっしり並ぶ町なんだけど、町の周りが掘に囲まれていて、大勢の人が出入りしている渡し橋には番所。甲冑姿の雑兵がうろうろしている。しかも、なんだかそいつらは織田の雑兵っぽくない。

素知らぬ振りで通過しようとしたら、雑兵が凄い剣幕で駆け寄って来た。

「お前ら、どこの武将だ！」

「馬から降りろ！」

やんややんやの勢いに、クリツナから降りるおれ。

「どこの人間だ。手形を見せろ」
訳がわからなくて、さゆりんに目で助けを求める。
「織田上総介の配下、簗田牛太郎であるが」
と、さゆりん。
「なんだと？」
すぐに通過が許されると思いきや、信長の名前を出すと、困惑気味にお互いの顔を見合わせる雑兵たち。
「荒木信濃守村重の紹介で、とと屋の田中与四郎殿を訪ねたのだ」
さゆりんがそう言いながら紹介状を雑兵に見せると、雑兵たちは怪訝な顔つきで紹介状を何度も眺め、
「なら、入って構わん。ただし、下馬したままでいろ」
と、ようやく折れた。
なんなんだ、一体。この町は信長のものじゃねえのかよ。しかも、信長の名前じゃ駄目で、ヘタレ村重の名前だったら通過が認められる意味が不明。
「堺は誰の所領でもありません。一つの独立勢力です。最近までは」
不思議がっているおれにさゆりんのわかりやすい説明。
「公方様から堺を直轄領にする許しをおやかた様は得ましたが、堺の会合衆はそれに抵抗しておりました。おやかた様が堺を攻撃したのはついこの間のことです。殿は本当に何も知らないのですな」
一言余計だけど、確かに何も知らなすぎっていうのは、近頃ひしひしと痛感しているので、おれは反論できない。
「堺にはおやかた様への反感がいまだにあるのかもしれません」
ちなみに会合衆っていうのは、商人たちの集団らしい。そいつらが堺の政治を決めていたんだと。あっそ。どうせ、信長に屈服したんだろ。
さらにちなみに、そのさい、信長は会合衆をカツアゲして二万貫を奪い取ったらしい。むむむ。気難しいだけだった信長がＤＱＮ大名へと変貌していく兆しなのか。それにしても、信長でさえ、奪い取った額は二万貫。おれが欲しいのは五万貫。アハハ。言っていた

おれが恥ずかしい……。
堺の町は非常に活気がある。馬や荷車が行き交い、軒並み商売の声。武士もいれば、もちろん商人だったり、ふんどし一丁の奴だったり、たまに外人もいる。清州や岐阜も活気がある町だけど、比べ物にならないぐらいの賑わい。それに、落ち着きのある京の市中とはまた違った感じ。とにかくエネルギッシュ。
さゆりんが町の人間にとと屋の場所を訊ね、きょろきょろしているねじり鉢巻きを怒鳴りつける。
「ここみたいですね」
めちゃくちゃでかい建物。店というより倉庫。商人の怒号が飛んでいて、大勢のふんどし野郎が何かを担いで運び入れたり、運び出していたり。
ただ、魚屋っていう紋があるけど……。
「魚屋って書いてあるけど」
「サカナヤじゃありません。トトヤと読むんです」
さゆりんがいちいち苦い顔。
そんなのわかるかよ。はいはい、無知ですんませんでしたー。
「もしもし」
背後から声をかけられたので振り返ってみると、小男の中年がいた。仕立ての良さそうな羽織を着ていて、人の良さそうな顔をしている。
「こちらはあなた様の馬でしょうか」
「そうッスけど」
「品がありますなあ」
ぼんやりとしているクリツナに目を細める小男。ねじり鉢巻きが誇らしげ。
「旦那様！　お帰りなさいませ！」
そう言いながら倉庫の中から番頭っぽいやつが走り飛んできて、小男が抱えていた荷物を預かる。
「おお。すまない。それより、見なさい。実に品のある馬だと思わ

んか」
「ははあ。そうですなあ。綺麗な毛並みですなあ」
「毛並みじゃない。顔つきだ」
「あのう」
と、さゆりんがそろりと訊ねてみる。
「田中与四郎殿でしょうか」
「左様でございますが」
頷いた小男を見て、おれは密かににやりと笑った。こいつならちょろそうだ。

「荒木信濃守様のご紹介でございますか」
紹介状を見終えた後、タナカは頬を緩めながら言う。
「簗田牛太郎様と申されましたな」
「はい」
「ここには簗田様は実に茶の湯に真剣に取り組まれているとあります。今度は是非とも私の茶席にも加わってくれませんか。信濃守様がおっしゃる人であれば間違いありません」
い、いや、遠慮しようかな……。村重は多分、買いかぶりすぎているだけだろうし。
店の人間がやって来て、おれとさゆりんにお茶とお菓子が出てきた（ねじり鉢巻きは外で待機中）。お茶と言っても、あの苦い抹茶じゃなくて、普通のお茶。普通のお茶は久しぶり。
「そちらは茶葉を煎じたものでございます。私どもはお客様が来られたさい、軽いものとして出させてもらっております。どうぞお召し上がりくださいませ」
おれは大して遠慮もせずに湯呑みを手にするが、さゆりんはそういうものを知らないから戸惑っている。フン。無知な女。いや、ここでは男。
「御家来殿、煎茶に作法はいりませぬ。ささ、どうぞ」
「は、はあ」
そろりとお茶を飲むさゆりん。可愛いもんだな、ん？
「さて、ご用件はなんでございましょう」
「いや、用件っていうか、その、村重殿に悩みを相談したところ、タナカさんを訊ねてみなさいって言われたものですから。はい」
「悩みとは？」
「まあ、その、火縄銃をですね、手に入れたいんです。安く」
「なるほど。火縄銃を」

頷きながら、何事かを考えているタナカ。
「しかし、それならば、織田様に申されてみれば手っ取り早いのではないかと。御存知でしょうが、織田様は遠里小野の丹南鋳物師をお持ちになられたばかりですから」
オリオノのタンナンイモジ……。なんのことかさっぱりわからねえ。鉄砲に関係なさそうな文字並びじゃんか。でも、なんのことなんスか、なんて、恥ずかしくて訊けねえ。
「ま、まあ、その、独自に仕入れたいんス。信長様は忙しいんで、ちょっと、ね」
「独自にと申されましてもなあ」
タナカは困った顔。おれはなんだか、縮こまっていく気分。おれはとんでもなく馬鹿げたことを言っているんじゃないだろうか。でも、ヘタレ村重がここに来ればなんとかなるって言ったから来たんだ！
「それに一丁や二丁を仕入れるだけでは、安くしろと申してみても、足元を見られるのが落ちかと思うのですが」
「いや、一丁や二丁じゃないんです……」
「何丁で？」
「いや、その……」
「五百丁でございます」
と、急にさゆりんが口を開いた。慣れない接待に戸惑っていたくせに、あっけらかんと言いやがった。
案の定、タナカは口をあんぐり。
「ご、五百丁でございますか」
タナカはようやく言葉を声にしたっていう感じ。隣のさゆりんが口元を歪ませながら、おれに横目を向けてくる。だから、言ったやろ、阿呆って、とでも言いそうなぐらいの腹立たしい目つき。
「五百丁でございますか……」
タナカっていい人なんだろうな。一応は、考える振りをしてくれている。

「失礼ですが、お手持ちはいかほどかと」
さゆりんがちらりと目配せしてくる。自分の口から伝えろと目が言っている。
「いや、あの、その……」
「百貫でございます」
まあた、さゆりんがあっけらかんと言っちゃってさ、もう！　やめてよっ！　これ以上、辱めを与えないでよっ！
タナカ、アハハ、と、苦々しい笑い。さすがのタナカでも、目がどことなく軽蔑の色に染まっている。はいはい、おれは無知でしたよ、すいませんでした。
「お話しになりませんな」
「お話しにならないそうですよ、殿」
ぐぬぬう。そこまで言われると、恥ずかしさを通り越して怒りが込み上がってきたぞ。そもそもな、おれだって気付き始めていたんだ。おれの野望が無謀だって。でもな、あのヘタレ野郎がここに来ればなんとかなるって言ったから来たんだよ。
それを、この仕打ち……。
「あっしはどうやら騙されたんですね……」
そうだ、騙された気分だ。鼻クソを掴まされたような気分だ。おれは、ヘタレ野郎がなんとかなるって言ったから来たんだ。
「あの、荒木村重のクソ野郎に騙されたんですね。あのヘタレ野郎はあっしをからかったんスね」
「いや、簗田殿、それはしかし、信濃守様は何か勘違いを――」
「勘違いなんかじゃないっ！　村重だってあっしが金を持っていないことぐらい知っていたんスからっ！」
「いやっ、簗田殿っ、別に手立てがないわけじゃ。別に可能性がないわけじゃ」
「じゃあ、なんスか」
と、おれはタナカをギロリ。
「タダでくれるって言うんですか」

「ちょっと、殿っ。控えてくださいっ」
「い、いや、簗田殿、私はただの倉庫業ゆえ、火縄銃など持っておりません。ただ、まあ、遠里小野の代官を紹介するぐらいなら……。そ、そこで交渉してみたら如何かと」
だったら、最初からそう言えや。さんざん馬鹿にしやがって。このクソ茶人気取り。氏ね。クソッ。

今井会長

タナカに書いてもらった紹介状を奪うように取り、忌々しいととと屋をあとにし、今井彦右衛門とかいうやつのところに行くことに。

「なんなんですか、あの態度は。脅迫ではないですか」

さゆりんがいちいちうるさいが無視。別にいいじゃねえか。信長だって恐喝したんだろ。そもそも、おれは脅迫なんかしていない。ちょっと、ギロリしてみただけだ。

「田中与四郎はおやかた様に茶頭として雇われたばかりの人間なんですよ。あの方は商人というより、おやかた様のお抱え茶人で、殿みたいな無法者の配下に茶の湯を教える人なんですよ」

えっ？

「な、なんで、それを先に言わないんだよ」

「あんなことをすると思いますか？」

や、ヤバいかも。信長にチクられたらどうしよ。

「今から行く今井彦右衛門も茶頭ですからね。いや、田中与四郎よりも格上ですよ。いいですか、今井彦右衛門にそんなくだらない話を持ちかけるだけでもおこがましいぐらいですからね。今井彦右衛門は商人ではいますが、おやかた様の取り計らいで摂津住吉の代官、今では堺の権益を牛耳っている人物ですからね」

ぺらぺらうるせえな。全然頭に入ってこねえよ。

「おれだって珍奇衆筆頭で沓掛城主だ」

フン、と、鼻で笑うさゆりん。

「世迷言専門の見せかけ城主ということでしょう」

もううるさいから完全に無視。どうしてこうもおれの下僕どもはこうなるんだ。太郎といいさゆりんといい。すぐに軽蔑。すぐに説教。

ねじり鉢巻きぐらいだ。こいつは黙って馬を引いているだけで説教なんかかましてこない。盗み聞きはしているけど。

で、今井彦右衛門の屋敷へ。堺の町に何軒か店を構えているらしいが、要は会長職ってことなんだろ。

屋敷構えは会長らしく豪邸。見てくれはいっぱしの館。商人の住まいとは思えない。腹黒の予感がしてきて、ちょっとビビるおれ。でも、ギロリまでしておいて、引き下がれないし。

さゆりんが門番に紹介状を見せ、会長に伝えにいった門番をしばし待つと、少年と一緒に戻ってきた。

少年は奉公人らしい。会長のもとまで案内すると言う。

館の中庭は松の木とかが植えられていて、落ち着いた感じだった。館の中に上がり、客間に通され、しばしの間、待ってくれと言って、少年は障子戸を閉めていった。

「そんで、彦右衛門に会ってどうするんや」

二人きりになって、素のさゆりん。冷たい視線を向けてくる。

「会う意味があんのか？　どうせ、また、恥を欠くだけやろ。いい加減、火縄銃のことは諦めて、顔を拝見しに来たとでも言っとき」

そうしようかな……。井戸の中の蛙とはよく言ったものでさ、堺っていう外の世界に来たら、これもんだよ。いかにおれが無知で、いかにおれが与太者だったか。

「彦右衛門と知り合いになっとくだけでも損はあらん。それだけにしとき」

おれは渋々頷く

やがて、障子戸が開き、会長がやって来た。ぼてぼてした腹に、銀色にぴかぴか光る羽織、いかにも会長職。

「お待たせしましたな」

と、一言出しただけで、おれとさゆりんの前に着席。実に偉ぶっている。話をする前から軽蔑の眼差しを向けてきていて、こんな奴を引き上げた信長をちょっと疑う。信長が嫌いそうな顔つきじゃないか。

「急な来訪は断っているんですがな。それで、とと屋からの文によりますと火縄銃を五百丁こしらえたいそうですな」

あ。
　タナカのやつ、余計なことまで紹介状に書いたらしい。知り合いになっておくだけで終わるはずが、結局、またしても恥を欠くのかよ。クソッ。
「織田様の配下だそうですな。これは織田様のお達しなのでしょうかな。お達しなのであれば、織田様の判を見せて頂きたいのですがな」
「いや、その」
　おれはさゆりんに助けを求めるが、クソッ、さゆりんはあっちを向いてしまっているじゃんか。こいつ……。
「判がなければ、こしらえられませんぞ。五百丁など、大商いですからな」
「いや、実は、その――」
　おれがもじもじしていると、会長はジトーッとした目つきでおれをなぶってくる。
「なんでしょうか」
「これは、信長様の命ではなくて、あっしの個人的な、その」
「おたく様が個人的に五百丁欲しいということですかな」
「ま、ま、まあ、そういうことなんですけど、ちょっとですね、あっしは間違っておりまして。あっしは火縄銃のことをあまり――」
「五百丁もこしらえて、おたく様は何に使うつもりなのです」
「あ、いや、それは、やっぱり、いくさのときに」
「なにゆえ、五百丁なのです。一つの軍団でも五百はありませんぞ。おたく様は何人の兵をお持ちなのです」
「五百でございます……」
　すると、会長は口を閉ざしておれをジトーッと睨みつけてくる。怒っているのかな。いや、怒っているんだろうな。会長はきっと忙しいんだよな。それなのに、持ち込まれたのがこんな馬鹿げた話なんだもんな。あーあ、もう、何を言われるのか、ううっ。
「五百すべての兵に火縄銃を持たせたら、いくさでは一瞬にして壊

滅されますぞ。おたく様は火縄銃を御存知じゃないのですか。弾を込め、縄に着火させなければならないのです。五百の兵すべてがそのようなことをしていたら、騎馬にでも突撃されて終わりです」

「いや、実は、あっしは、その、恥ずかしながら、ちょっとした戦術を思いつきまして、それで、その――」

「戦術とはなんです」

「その、三段撃ちというんですが」

おれは三段撃ちを説明した。会長はぶすっとした顔でおれの話を聞いていた。聞き終わると、また、黙りこくって、おれのことをジトーッと睨みつけてくる。

「ま、ま、まあ、でも、あっしには火縄銃を買えないってことがわかったんで。あっしは火縄銃が高価なものだなんて知らなかったので。はい。き、聞かなかったことにしてください」

「お名前は何と申されましたかな」

「あ、はい。や、簗田牛太郎と申します。一応、尾張沓掛っていうところの城主をさせてもらっています」

「簗田牛太郎殿――」

ほう、と、会長はにんまり笑いながら、一つ頷いた。

「とと屋からの文を見たとき、聞いたことのあるお名前かと思ったら、尾張沓掛のご城主でございましたか」

会長は若干ながら頬を緩ませている。目の意地汚さもなくなっている。

「沓掛城のご城主と言えば、織田様に桶狭間への奇襲を進言されたお方ですな」

「知っているんですか？」

と、言ったのは、さゆりん。この野郎、会長の機嫌がちょっと良くなった途端にしゃしゃり出てきやがった。

「存じていますとも。この堺におれば、全国各地の武将たちの話が入ってきますからな。中でも、織田様が今川公を破ったいくさは、この堺でも驚天動地でしたからな。十年前のこととはいえ、あのと

きの衝撃は今でも忘れられませぬ」
ほうほう。おれは有名人ってことか。良いではないか。なかなか、話のわかる男ではないか。
「解せました。お貸ししましょう」
？
会長が微笑んでいるんですが。
「ただ、さすがに五百丁も無料でお貸ししたら、当方も破産してしまいます。百五十。これで精一杯です」
なになになに。どういうこと？

おれの心は沸々と、キタよ

「ただし、条件がございます。その三段撃ちとやらを、三年のうちに完成させ、いくさ場で披露してください。もしも、結果が出せなかったら、そのときはお代を頂戴させて頂きます。無論、結果が出ましたら、百五十丁はそのままお譲りいたしましょう」

会長は終始微笑みを絶やさなかった。しかし、爽やかさとは程遠い、腹黒の匂いのする笑みだった。

こんなうまい話があるかよ。タダほど怖い物はねえって言うじゃねえか。

「しかし、そんなのは話があまりにも良すぎます」

と、さゆりんも同じことを思っていたらしく、率直だった。

「そうでしょうか」

会長の声音はやけに冷えている。顔では笑っているというのに。

「結果が出せなかったら、百五十丁分のお代は頂戴すると申しておるのですぞ。当方の売り値は他と比べても安い値でありますが、一丁七十貫は頂いております。およそ一万貫、もしも三段撃ちとやらが失敗したら、三年後には催促させてもらいますぞ」

「とはいえ、殿はこう見えても戦国の武将。いくさ場で死なぬとは限らないんですよ」

「そのときはそれまでということで」

あっさりと言う。何を企んでいやがるんだ。どう考えても、どう見ても腹黒。わーい、ラッキー、なんて、両手を上げて喜ぶほど、おれは甘っちょろい生き方をしてきてねえ。

「それでは、早速、証文に印を頂きましょうかな」

会長は奉公人の少年を呼び、筆と紙を持ってくるよう伝える。

「あ、あっしは」

おれは意を決して訊ねる。

「い、今井さんが、な、何かを企んでいるとしか」

「そりゃあ、もちろん、企んでいますとも。私は商人でございますからな」

少年がやって来て、硯と筆を会長の傍らに置く。

「私の生業は銭儲けでございます。もしも、簗田様が三段撃ちとやらを成功させたら、全国の大名、武将、皆がこぞって火縄銃を求めるでしょう。値が張ってしまうというのもありますが、扱い方が慣れていないゆえ、いまだ火縄銃の購入にためらわれる御仁は多い。しかし、簗田殿が火縄銃の威力を戦場で発揮してさえくれれば、これからの世、火縄銃はなくてはならない道具になりましょうな」

「今井殿は殿の話を鵜呑みにされているのですか」

さゆりんが余計な一言。

「殿の戦術に可能性があると思われていらっしゃるのですか」

怪訝なさゆりんに、筆でみみず文字をすらすらと書きつつ、じっとりと見上げた会長。

「そう思ったからこそ、お貸しするのでは？」

さゆりんは会長の静かな迫力に口を噤む。フヒヒ。どうだ、見たか。わかる人間にはわかるんだ。お前みたいな野良猫上がりには、おれのすごさなんてわかるまい。

「私はあくまでも商人。物を売るだけの人間です。火縄銃売りたさに、今の戦法を口上したとしても、所詮は商人の能書き。ならば、実際にいくさ人にやってもらったほうが労せずに銭儲けができます。それに――」

会長は書き上げた証文をこちらに向けた。

「私の商売術は博打です」

会長、カッコよすぎる。腹黒さをここまで全開にされると、かえって清々しい。サワヤカ腹黒。さすが、会長職だけある。

そんな会長に、証文の文面を説明してもらったあとに、おれはサインした。

これで、沓掛鉄砲衆が結成できるとなると、筆を持つ手が震えた。これで、おれは鉄砲戦術の第一人者。これで、おれは下僕どもに何

も言わせなくできる。これで、おれは大出世。
そして、宿敵、山県クソサブロウを蜂の巣にしてやる。
で、レンタル品の百五十丁の鉄砲は、早々にオリオノのタンナンイモジという鉄砲鍛冶集団に造らせ、沓掛城に届けておくということになった。
キタね。キタ――――――ね。おれの心は沸々と、キタよ。
会長に礼を残し、意気揚々と引き上げる。
「あんた、とんでもない約束をしてしもうたな」
庭先を戻っていると、何もわかっていないさゆりんは、半ば怒っている。
「知らんからな。ほんまに知らんからな」
「まあ、黙って見ておけや」
こうなると、摂津なんかで村重と呑気に茶会なんかやっている場合じゃねえ。沓掛に戻り、雑兵どもに三段撃ちの特訓をさせねえと。

雲行き

それにしたって、どうやって摂津池田から脱出するのか。

信長の命令で目付役として留まっている以上、信長に許してもらえないと脱出できない。

れっきとした理由はあるんだ。鉄砲隊を結成するための特訓をする。だから、沓掛に戻してくれと。

でも、三段撃ちのことを信長に教えちゃったら、手柄を取られちゃうし。

こっそりと鉄砲隊を結成して、突然、いくさで活躍する。それがおれのサクセスストーリーのプロローグだ。

じゃあ、どういうでたらめを抜かして、信長に許しを得るか。

おれはずっと考えた。池田に戻ってもずっと考えていた。ヘタレ村重が依頼した甲冑職人がやって来て、おれのサイズを測っているときも考えていた。

「なんや、あれ」

甲冑職人が帰ったあとに、さゆりんがおれのところにやって来て、眉をひそめながら言った。

「まさか、甲冑を作るつもりなんか？」

「そうだけど」

「そんな銭、どこにあるんや。左衛門太郎に怒られるで」

「関係ない。村重が買ってくれるんだ」

「はあ？」

さゆりんは嫌悪感をあからさまに表情に出した。

「ほんまに言うておるんか？」

「ほんまだ」

「あんたって人は、やっぱり下衆やな。初めて会うたときもそうやったけど、どんどん下衆になっていくな。瀬兵衛以上や」

「村重が買ってくれるって言って聞かねえんだから仕方ねえだろ」

「知らんで。ほんま。あとでどうなってもな」
さゆりんが悪態を残して部屋を出ていこうとするが、おれは呼び止めた。
「なんや」
「おれはどうすれば沓掛に戻れるんだ」
「上総介に訊いてみい」
「そんなこと無理に決まっているだろ。何か沓掛に戻れる正当な理由を教えろ」
「知らんわ、そんなもん。そもそも、はりきりすぎや。身の程をわきまえて、のんびりとしてればええのに、あんたみたいのが背を伸ばしていると今に落とし穴に落ちるで」
「なんだと」
「だいたい、あんたが沓掛に戻って、その三段撃ちっていうのを将兵たちに教えることができるんか。あんたこそ、火縄銃なんて使ったことなんてないやないか」
「あるさ。明智十兵衛に教わって、一度使ったよ」
「一度きりやんか」
ぐだぐだとうるせえな。さゆりんは何か勘違いしているが、今のさゆりんはくのいちのさゆりんじゃなく、おれの家臣の吉田早之介だぞ。それなのに、どうしておれの言うことを聞かない。黙って、はい、って言っていればいいのによ。
「黙って、はい、って言っていればいいんだよっ！」
「じゃあ、なんや」
さゆりんは瞳孔を広げておれに詰め寄ってくる。
「何を命令するんや。何に対してはいって言えばいいんや。大した命令なんてできもせんやないか」
ぐう。なんだかキレているし。どっちが主人で家臣なのかわからねえ。
「だ、だったら、お、お、お前が行ってこい！」
「どこへや」

「沓掛だ！　お前が沓掛の奴らに三段撃ちを教えてこい！」
「そやな」
さゆりんは鼻先をつんと突き上げながら言う。
「そうすれば、しばらくはあんたの汚らしい顔を拝まずに済むわ。そうや。そっちのほうがせいせいするわ。あんたなんかと一緒にいたくないかんな」
この野郎……。一回だけヤラせてくれたくせに。
「そんなら、早速、沓掛に行くわ」
「おいっ！　ちゃんと訓練させろよ！　やっている振りとか絶対に駄目だからな！」
「フン。あんたが教えるよりも、数百倍、まともにしてやるわ」
「三段撃ちだからな！」
「わかったって言っているやろ！　でも、言っとけど、そんなものでいくさで勝てるとは思えんからな！」
怒鳴り散らしながら去っていったさゆりん。そんな大声出して、派遣奉公人とかねじり鉢巻きに聞こえたらどうすんだよ。バカが。
おれの戦法に否定的なさゆりんが本当にきちんと三段撃ちを覚えさせるか不安だけど、確かにおれが教えるよりは、さゆりんのほうがマシだろうから、ここはあの野良猫を信じるしかない。
で、おれは冬の間、摂津でぶらぶらとしているだけの日々だった。さゆりんがいなくなったので、代わりにシロジロを呼ぼうとして、派遣奉公人に手紙を書いてもらったが、岐阜から返ってきた手紙には忙しいから岐阜を離れられないと書いてあった。
シロジロが忙しいなんてあり得るかとおれは憤ったが、手紙の続きには、春先に奇進札を再び販売することになったらしく、また、ふざけたことに、去年の暮れに儲けた百貫で勝手に団子屋を始めたらしい。
あの野郎、おれの許可もなしに……。
でも、おれの怒りをシロジロは見越していたのか、さらなる手紙の続きには、奇進札をやる前にはそういう話だったから、やらせて

もらっている。それに、若君や奥方様の了承も得た。
抜け目ないことしやがって、クソッ。
追伸、奥方様がお怒りです。
追追伸、若君とあいりちゃんの祝言の日取りが決まりました。
おわり。
いつ、祝言を上げるのか、書いていない。それに、あずにゃんが怒っているってどういうことだよ。理由を書けよ、クソッ。
とりあえず、岐阜に戻るのは避けよう。また、ボコられる。
怒りのあずにゃんが岐阜にいることに比べて、摂津池田での生活はほのぼのとしていた。
池田八郎三郎が朝廷から筑後守の官位を貰ったお祝いに挨拶しに行ったり。信長の取り計らいらしいけど。どうしておれには何もないんだよ。くそう。鉄砲隊が完成するまでは我慢我慢。
ヘタレ村重の茶会に付き合ったり、そこに招かれたとと屋のタナカにギロリしたり。
村重の道楽に付き合うのはうんざりだったけど、茶会に同席したタナカなどの客が、雑談で世の中の情勢を話してくれる。今までは何も知らない無知な男のおれだったが、村重の客には堺の人間が多いので、ありとあらゆる情報が入ってくる。
「織田様と公方様の仲が悪くなっているそうです」
タナカが表情を暗く落として言う。
「本圀寺の件以来、織田様が二条城を築造されて、そこに公方様を移しましたが、公方様は家臣に知行を乱発しているとか。今の幕府の所領などは、織田様が貸し与えている所領にすぎないのに。織田様は嫌気が差しているようですな」
それに、と、タナカは声を小さくする。
「織田様は越前攻めを考えておられるそうですぞ」
「となると、拙者も駆り出されるのでしょうかな……」
と、ヘタレ村重が表情を暗くさせる。
おれはというと、ちょっと不思議になった。今までの戦いで、信

長はおれに助言を求めてきた。美濃攻めに上洛。あれはおれの進言だ。

でも、その後は進言を求められていない。

と、思っていたら、数日後、信長の使いがやって来て、即刻、岐阜城に登城しろとのことだった。

あずにゃんが怒っているらしいから岐阜には戻りたくないけど、仕方なく準備をする。

もう、春だった。

信長の暴走

あずにゃんが怒っているということなので、稲葉山を登るさい、ねじり鉢巻きにクリツナをちょっとだけ早足にさせるよう言って、おれの屋敷がある稲葉山の麓をさっさと通り過ぎた。

信長に会ったら、すぐに摂津池田に戻るつもり。太郎の祝言やら、シロジロの団子屋やらが気になるが、死んでは元も子もない。

岐阜城に入り、信長と面会。広間ではなく、小部屋。サンザもいる。久々。

「牛殿、はるばる摂津から御苦労であった」

サンザがねぎらいの言葉をかけてきてくれたけど、信長はむすっとしている。うーむ。機嫌が悪い。というより、おれと会うときはいつも機嫌が悪くなっている。

「池田筑後守の様子はどうであるかな」

「何も変わりはありません。逆に、信長様に恩を感じている様子です」

「そんなことはどうでもいい」

口を開いたかと思ったら、信長はそれ。この野郎、おれの扱いがどんどんひどくなってくるじゃねえか。

「話が違うぞ、牛」

え？　なんの話？

「公方が言うことを聞かん。どころか勝手な振る舞いをしている。どういうことだ」

いやいやいやいや。それが史実なんだから。信長と足利義昭は仲違いする。それが歴史なんだから。

「そ、そうなる予定なんです」

「なんだと？」

「あ、いや、所詮、義昭は上洛だけの名目でありまして」

「それはいい。だがな、あいつは木偶人形どころか、おれの手に余

る状況だ。こういうことになると、お前は知っていたって言うんだな？」

「はい」

「ふざけやがって」

えっ？

「知っていてなお、義昭を担がせたというのか。おれはな、義昭など担がずに、天子を担げば良かったと後悔している。天子なら何の口出しもしねえ。だが、お前はそれを知っていたにも関わらず、それを言わなかった」

やべえ。すげえやべえ。まさか、殺されちゃうんじゃないのか。

「まあいい。今さら言っても後の祭りだ」

ホッ。だったら、そんなに怒らないでよ。

「それでだ、次は越前朝倉を攻める。どうやら、公方は朝倉と密かに何事かを企んでいるらしい。目障りだ。それについて、どうだ。後世から来たお前の歴史とどうなんだ」

いや、その通りッスけど。

ただ、浅井長政が裏切る。朝倉を攻めている途中、浅井長政が裏切って、信長がピンチに陥る。

おれは、これを言ったほうがいいような気がしてきた。歴史を変えちゃうことになるかもしれないけど、この信長の感じだと、また、あとでおれは怒られる。知っていたのに、どうして言わなかったんだと。

しかも、裏切るのは市姫の旦那。訳が違う。そのときこそ、おれは本当に殺されるかもしれない。

「あ、朝倉攻めは危険です」

おれは唾をごくりと飲み込むと、続けた。

「浅井長政が信長様を裏切ります」

「馬鹿を言え」

信長が笑っている。

「どうして新九郎がおれを背く。確かに、朝倉との不戦協定を同盟

のときに押し付けられたが、新九郎は違う。あいつは古い浅井の人間じゃねえ」
「いや、でも、裏切るんです」
「それが事実なら、そうさせないようにすればいい。だいたい、どうしてお前は新九郎が裏切ることを知っていて、市を嫁がせたんだ。あ？」
「あ、あ、あっしは、れ、歴史通りに進言するしかできません」
「なら、変えればいい。新九郎が裏切るなら、裏切らないようにすればいい。それが天下布武への近道じゃねえか」
信長は腰を上げ、
「越前だ。牛、支度をしておけ」
おれの言うことにまったく耳を貸さずに部屋を出て行ってしまった。
信長は驕っているんじゃないだろうか。それとも、義昭を担いだことに後悔して、おれを信用しなくなったか。
「牛殿」
残っていたサンザが口を開いた。
「まことなのか、浅井がおやかた様を裏切るのは」
おれは頷く。
「市様はどうなる」
「市様の身には何もありません。浅井を滅ぼしたときに、市様はおやかた様のところに戻ってきます」
「ということは、結局は浅井も朝倉も、裏切られはすれど、織田が滅ぼすということなのか」
「はい。ただ、そこまでの道のり、とても大変な思いをすることになります」
「なら、やはり、越前攻めは控えなくてはならんということか。結果はどうあれ、無用ないくさはせぬほうがよい」
サンザは一つ吐息をついた。
「おやかた様らしくないな。のう、牛殿」

おれは何も答えず、うーん、と唸るだけだった。らしくないと言っても、信長らしい信長っていうのが一体なんなのかわからない。

蚊帳の外

サンザが言うに、朝倉家の当主、朝倉義景が信長の上洛要請に応じれば、いくさは回避できるらしい。ただ、義景はこれまでに上洛要請を何度も断ってきている。

「最後通告を出し、それでも朝倉が動かなければ、出陣じゃ。もしもいくさとなっても、一カ月はあるだろう」

ただ、信長は言い始めたら動くのが早い。いかなるときでも軍勢を出せるよう、手はずを整えておけということだった。

池田筑後守も大丈夫だろうということで、摂津池田の目付役も外され、おれは沓掛に戻った。もちろん、岐阜の自宅には立ち寄らずに。

沓掛城ではすでに鉄砲隊が結成されていた。大島のおっさんが反対したらしいが、さゆりんが口説き落とし、五百人のうちの百五十人が鉄砲隊として、毎日、三段撃ちの訓練をしている。

ただ、百五十丁の火縄銃はすでに届けられているものの、弾とかを使うのが勿体ないということで、鉄砲隊の面々は火縄銃のとりあえずの知識を得、火縄銃の形に似せた木の模造銃で三段撃ちの練習。

ちなみに、さゆりんは火縄銃の勉強のため、摂津池田を出たあと、素性を隠して、紀伊のナントカとかいう武装集団の寺で火縄銃を勉強したという徹底ぶり。

「目にもの見せてやるわ」

それが最近のさゆりんの口癖。あれだけ否定的だったくせに、よほどおれに一泡吹かせたいらしい。

沓掛での暮らしは最高だった。太郎もあずにゃんもいない。さゆりんは訓練でほとんどいない。おれをとやかく言うやつは誰一人としていない。唯一のたんこぶであるマリオも、ここ最近は忙しいらしくて、沓掛にはほとんど寄らず、政務のほとんどは大島のおっさんが見ているらしい。

沓掛ではおれは英雄だから、城内の奉公人や女中もおれにはひれ伏す。

おれはしみじみと思う。これこそが、おれが歩んできた軌跡の結果だと。

最初、沓掛に入ったときは、城主であるにも関わらず、雑兵に無視をされている有様だった。そこから、なんとかこつこつと身を立てていき、人々を認めさせていった。

努力は報われるものだ。おれは縁側に立ち、庭先に芽吹いた若葉を眺めながら思った。

だが、ここで満足してはいかん。おれを見くびっている連中がまだいる。しかも、あろうことか、おれに一番近しい者どもだ。そいつらをぎゃふんと言わせるために、おれは戦わなければならん。

いや、ちょっと待てよ。

たかだか百五十丁の鉄砲隊でおれは活躍できるのか。今井会長がケチったせいだけど、さすがにもっと寄越せなんてことは言えない。だったら、購入するしかない。

会長のところでは七十貫で火縄銃を売っているとか言っていたな。……。

思い立ったおれは、城内の奉公人や女中たちに帳簿を握っているのが誰か訊ね回った。

「収支は中島殿に申告しておりますが」

は？　誰？

「中島四郎次郎殿ですよ」

嘘だろ、おい……。

どうして、岐阜で団子屋なんかをやっているシロジロが沓掛の帳簿を見ているんだ。おれのまったく知らないところで、シロジロが沓掛城の金を見ていたなんて、な、なんか、裏切りのにおいが。

疑心暗鬼に陥りかけのおれは、訓練から戻って来たさゆりんをすぐさま問いただした。さゆりんは沓掛城の隠し財産を暴いたから、全容を知っているはずだ。

「そうや。四郎次郎が収支を見ておる。更にそれを監督しているのは左衛門太郎や。四郎次郎を問い詰めたら白状しおった。ただ、あんたには内緒にしてくれって言われたから内緒にしといた」

おれはぶるぶる震えた。あまりの怒りにしばらく声がなかなか出なかった。

「ふ、ふ、ふざけんなっ！　そ、それは、ど、ど、どういうことなんだよっ！」

「あんたに教えたくなかったと違うん？　くだらないことばっかりに使おうとするかんな」

「おいおい、ちょっと待て。だいたいな、おかしいだろ。この城は丹羽五郎左が見ているんだ。おれはあいつが帳簿を捲っているのを見たことがあるぞ。ずっと前だけど」

「五郎左は忙しいんやろ」

大したことでもないといったふうに部屋を出て行こうとするさゆりん。

「ちょっと待てよ！　じゃあ、お前もおれを騙していたってことなんだな！　お前は太郎派なんだな！　そうなんだな！」

「私はあんたのためにしとるだけや。あんたのために、沓掛城の帳簿はあんたに扱わせたくないだけや」

部屋を出ていったさゆりん。

おれは一人、拳を握り、ぷるぷると震える。なんてことだ。なんていう馬鹿のされようだ。さゆりんの言葉をわかりやすくすれば、能無しのおれに帳簿を扱わせたくないっていうことじゃねえか。

それは、きっと、太郎もシロジロも思っていることに違いない。

そして、マリオも。

どういう流れでそうなったかは不明だが、おそらく、マリオは忙しくなってきたので、沓掛城の政務を見られなくなった。で、政治と軍事は大島のおっさんに見させ、大まかな収支の流れなどはさすがに簗田家に見させなければと思ったけれども、牛太郎は能無しだから、太郎に見させよう。どちらにしろ、太郎の城にさせたいし。

うん。そっちのほうが太郎の城にさせやすくなる。でも、太郎はまだ若くて馬廻衆だから、そうだ、牛太郎の従者に商人上がりがいた。実務はあの商人上がりに見させて、太郎が監督するようにしよう。

ただ、そうなると、牛太郎がうるさいから、あいつには黙っていよう。

シロジロはクビだな。もう、許さん。あいつは何か勘違いしている。簗田家の当主はおれであって、太郎じゃない。それなのに、おれに内緒で太郎には帳簿を見させて、挙げ句にはおれの儲けを勝手に使って団子屋を始める始末。太郎に許しをもらったからっていうふざけた理由で。

どおりで、下僕どもがおれの言うことを聞かないと思ったぜ。結局は、こういうことだったってわけか。クソッ。

「殿っ！　岐阜から早馬でございます！」

はらわたが煮えくり返っているおれは、奉公人が持ってきた書状を奪い取り、開いてみたが、もちろん読めないので、奉公人に突き返す。

「なんて書いてあるんだ」

「は、はあ。えーと、出陣の支度をし、早急に岐阜に参陣するよう、森三左衛門様の名で書かれてあります」

なんでだよ。なんでなんだよお。おれはつい、頭を抱えてしまった。シロジロをクビにしたいっていうのに、なんで、出陣なんだよ。

甲冑デビュー

大島のおっさんを呼び出し、兵たちを呼びよせるように指示。
で、おれはねじり鉢巻きに、摂津池田から持ってきた甲冑を用意させる。
フフフ。変態綱男となってから早十年。ついに、ついに、おれも念願の甲冑デビュー。ねじり鉢巻きに奉公人、女中なども加わって、おれに甲冑のそれぞれのパーツを着せていく。
てか、初めて着てみるけど、パーツが多すぎじゃねえのか。ぎゅうぎゅう縛り付けられて痛いし。
ま、まあ、でも、これで戦場の中心に突っ込んでいっても安心さ。
最後に、おれがこだわった覆面と兜を着用。
「鏡を持ってこい」
女中があわてて立て鏡を持ってきて、甲冑ファッションショー。
ほほう。まるで戦国武将じゃないか。
て、ちょっと待てよ。おれは鏡に近づいてよく見てみる。兜の丸い飾りの中に彫られてあるやつって、まさか、綱巻きの牛。しかも精巧に彫られている匠の技。おれ、こんなの依頼していないよ。まさか、ヘタレ村重のやつ……。
余計なことしやがって。ちゃんとチェックしておけばよかった。
まさか、こんなお茶目なことをされるなんて思いもしねえだろ、クソッ。
とは言っても、今になって騒ぎ立てるわけにもいかず、部屋を出て、城内の庭先に向かう。
むう。重い。歩きづらい。よくこんなものを着たまま槍を振り回せるな。クリツナがいなかったら、おれはきっと戦場まで辿り着けないよ。
庭先に集まった兵たちの前に登場すると、大島のおっさんがまず驚いた。

「おお。見事な武者構えでございますな。簗田殿の体躯だと威風堂々たるものです」
フッフッフ。おれもそう思う。見るからに猛将。敵も一目見ただけでビビって退散すること間違いなし。
それに、集まった軍勢の中から多数の火縄銃の銃口が天に突き出ている。おれの血と涙の結晶。ここまで来るのに大変だった。金策に走り、でもうまく行かず、タナカには馬鹿にされ、しかし、理解者が現れてくれた。
会長、ありがとう。
「準備は整いましたぞ、殿」
さゆりんがおれに伝えてきて、おれは兵たちに向けて号令を発した。
「これより岐阜へ参る！　敵は越前朝倉だ！　者ども、気を引き締めてかかれい！」
オーッ！
快感っ……。マジで武者震いしてきた。
おれは大島のおっさんやさゆりんと共に門まで歩いていき、クリツナを従えて待ち受けるねじり鉢巻きの元へ。
「鉢巻き、行くぞ（キリッ」
「あいよ」
ねじり鉢巻きが差し出してきた手に足をかけ、クリツナに跨る。
いや、跨れない。甲冑が重くて、いつものような具合にいかない。
「もうちょっと、足を上げてくれよ」
「わかってるって。黙れ」
何度もチャレンジするが、跨れない。おれは汗がだくだく。周囲はシラーッとした空気。
で、見かねた大島のおっさんやさゆりん、雑兵たちまで集まってきて、おれをうんしょうんしょとクリツナの上に跨らせる。
「それでは、者ども、岐阜へ向かうぞ！」
しーん。

「殿、似合わないことをするべきではございませんな」
と、馬に跨ったさゆりんがにやにやと笑ってくる。ぐう。
「旦那、クリツナじゃなかったら暴れていたぞ」
ねじり鉢巻きはしかめっ面。くそうくそうくそう。どうしてこうなるんだ。チクショウッ！
岐阜に着いたら、クリツナに跨りやすいように折り畳み式の階段を作らせよう。
で、すっかり、権威を失ったおれは、士気が下がりぎみの沓掛勢を引き連れ、清州で一泊したあと、岐阜へ。いつもの願福寺に沓掛勢を押し込めて、ついでに住職の光才に、寄進札の取り分の少なさについて文句を言おうとしたが、大島のおっさんも付いてきてしまったのでやめた。
「お久しぶりでございます。築田殿のおかげで、当寺にも復興の兆しが見えてきました。まことに感謝しきれません」
大島のおっさんの前で、このジジイがうっかり銭儲けしていることを言ってしまいそうな雰囲気だったので、おれはさっさと引き上げた。
いや、自宅に帰れないおれは願福寺に泊まることになる。だったら、ジジイをこってり絞り上げて、取り分も絞り上げてやる。
とりあえず、到着したことを信長かサンザに伝えるために登城しなくちゃいけないから、ボロの本堂から境内に出ると、なんだか、雑兵どもが妙にざわついている。というより、色めき立っている。
「旦那」
ねじり鉢巻きが歩み寄って来て言う。
「奥方が来ているぞ」
オワタ。

恐妻、再び

甲冑に覆面姿のおれにあずにゃんは気付かないでいてくれたけど、さゆりんが指差しして教えてしまったので、ずかずかと歩み寄って来た。あずにゃんの傍らではお貞がおろおろしていたけれど、あずにゃんの眉尻がめちゃくちゃ吊り上がっている。

おれは本堂の中に逃げた。しかし、慣れない甲冑のせいで、仏像の前でがっしゃんと転んでしまい、

「逃げるとは、わらわをなんと思っておるのじゃ！」

駆け付けざまに足で踏みつけられた。二度、三度、顔面をがつがつやってくる。痛い。でも、覆面と兜を着用しているから、なんとか、気を失わずにはいられる。

「どうして、そなたはわらわをこけにするんじゃ！」

こ、こけになんかしていないじゃんか。どうして、怒っているのか意味がわからない。

やがて、お貞や大島のおっさん、ジジイの光才までやって来て、怒り狂っているあずにゃんをおれから引き剥がす。

「やめなされ！　何があったかは知らぬが、兵どもの前でやめなされ！」

大島のおっさんの一言に、ちょっとだけ落ち着いたあずにゃん。

「それなら、今夜は亭主を我が家に連れて帰る」

「い、いやっ、梓殿、あっしはお城の信長様のところに行かないといけませんから」

ぶっ倒れたままのおれが言うと、あずにゃんは目玉を剥き出して、まさに鬼。

「それなら、わらわも行くまでよ！　そなたはまたいつ逃げ出すかわからんからの！」

「ちょ、ちょっと待ってください。なんで、そんなに怒っているのか、訳がわからないんですけど」

「なんじゃと！」
あずにゃんが身を乗り出しておれに襲いかかってこようとするが、大島のおっさんや光才のブロックで、おれはセーフティーゾーンのまま。
すると、お貞が言った。
「奥方様は旦那様からの文が来ないことに憤っておられるのです」
「それだけではない！　そなたは一度岐阜に戻って来たそうではないか！　なのに、さっさと沓掛に行ってしまったそうではないか！　女房に顔も見せないとはどういうことじゃ！」
むう。たったそれだけのことで、ここまでの激怒っぷりとは、なんて厄介な女房だろう。女番長のくせに、ちまちましたことで怒りやがって。
おれはむっくりと起き上がり、セーフティーゾーンにいるので、強気の発言。
「あっしだっていろいろと忙しいんですよ！　岐阜でお茶遊びをしている梓殿とは違うんだ！」
「なっ！」
「それはひどいではないですか、旦那様！」
と、なぜかお貞までも怒りぎみ。
「奥方様は毎日、旦那様の身を案じておられるのですよ！」
うるせえババア。身を案じておられるって、だったらなんでボコッてくるんだよ。シラネ。さよならー。
おれはブロックされているあずにゃんを尻目に境内へと逃げ去り、クリツナの前まで来て、例のように皆に担いでもらう。
「早くしろ！　早く！」
クリツナに跨ると、ねじり鉢巻きに岐阜城へ向かうよう伝え、願福寺を脱出。
なんてこったい。手紙を出さなかったぐらいで手を上げてくるなんて、命がいくつあっても足りないじゃないか。かといって、おれとあずにゃんの結婚は信長が決めたことだから離婚できるはずがな

いし。
　このままだと、出陣→岐阜に集合→ボコリの負のスパイラルがずっと続いてしまう。
　いや、今日、どこに逃げ込むかを考えるのが先決だ。半兵衛か十兵衛のところに逃げ込むのがもっともな安全策だけど、半兵衛が岐阜に戻って来ているのかどうか不明だし、十兵衛は京に駐在しているし。
　そうこう悩んでいるうちに、城に到着。諸将が広間に集まりつつあるということで、おれも兜と覆面を脱いで大広間に。
　広間には京都駐在の武将や伊勢方面に行っている連中以外の幹部はいたけれど、ゴンロクや佐久間ヒゲオヤジといった奴らは甲冑姿じゃない。キモブタ家康もいる。キモブタは甲冑姿。
「どうしのだ、簗田殿、その姿は」
　列席に加わるなり、甲冑姿のマリオが言ってきた。
「買ったんスけど」
「そ、そうか」
　マリオはつまらなそうな顔。やっぱり。綱巻きでいさせたいために、あいつは甲冑を買ってくれなかったんだ。ふざけやがって。
　それに、おれに内緒で太郎に帳簿を握らせやがって。あとでさんざん問い詰めて、慰謝料代わりにあいりんの支度金を吹っかけてやるからな。
「格好だけで、どうせ逃げ回るのが落ちだろ」
　ウザノスケが言うと、列席の面々が笑う。氏ね。なんなら、お前らこそ三段撃ちで蜂の巣にしてやりてえぐらいだ。
「そういえば、牛太郎」
　ゴンロクが珍しく声をかけてきた。むう。あずにゃんのことかな。
「お前、今井彦右衛門から百五十もの火縄銃を借りたそうだな。どういうことだ」
「い、いや」
　ここで三段撃ちを教えちゃうと、手柄を横取りされるから伏せて

おかないと。
「百五十！？」
佐久間ヒゲオヤジが素っ頓狂な声を上げて、同じようにざわつく面々。ウザノスケでさえ、唖然。やべえ。連中の興味がおれに注がれてしまっている。
「どういうことだ、簗田殿。借りたというのはどういうことだ」
マリオが猛然と問い詰めてくる。
「牛、お前、いつから今井彦右衛門などと誼を通じていたんだ」
と、マタザ。いたの？　最近、存在感が薄いからわからなかった。
「そうだそうだ。お前、何を勝手に今井彦右衛門などと通じておるのだ」
ウザノスケが囃し立てて、騒然とする大広間。
「いやっ、それは、摂津池田の荒木信濃守に紹介してもらって――」
「何を騒いでおる！」
サンザが広間に入ってきて、しーん。ホッ。

明日まで凌げば…

信長がやって来て軍議が始まる。

信長の出陣中に隙を狙ってくる奴らへの対策として、重臣連中は岐阜と京に残ることに。

実質は越前朝倉攻めだけど、浅井との協定もあるので、越前の隣の若狭国に攻め入るという建前で出陣するらしい。

いくさに参加するのは信長親衛隊（赤母衣衆、黒母衣衆、馬廻衆）の面々とキモブタ家康。沓掛勢は信長本隊に組み敷かれることに。あとマリオ勢も信長隊の中。

一度、京に入り、サル、十兵衛、池田筑後守、松永弾正と合流し、琵琶湖の西側を回って越前入りする予定。

結局、おれが物申したところで、歴史通りになるってことか。

でも、どうなんだろ。歴史を変えるって豪語した信長だけど、確かに、前もって警戒し、念押ししておけば、浅井長政は裏切らないかもしれない。

ま、どっちにしたって、おれが活躍するのは間違いなし。浅井長政が裏切ろうと裏切らなかろうと、沓掛鉄砲隊の銃口が火を吹くってわけだ。

浅井長政が裏切るかどうかなんていうよりも、今のおれの懸念は、明日の出陣までにどこに隠れているってことだ。

軍議が終了し、城から出たくはなかったけれど、いつまでものんびりしていると、火縄銃のことをまた問い詰められそうだから、おれはさっさと出て行こうとする。

「築田殿、お久しぶりでございます」

むう。キモブタ家康。相変わらず汗だく。前よりも太ったんじゃねえの。てか、おれはさっさと逃げ隠れなくちゃいけねえっていうのに呼び止めてきやがって。

「いやあ、甲冑姿、お似合いでございますなあ。さぞかし、敵も一

目見ただけで逃げてしまうでしょうなあ」
「あの、キモ――、家康殿、あっしはすぐにでも逃げなくちゃいけないんで、またあとで」
「逃げる？」
「あ、いや」
「何者かに追われておるのですか」
「いや、その、実は女房が怒り狂っているので、見つかる前にさっさとどこかへ」
「なんと、簗田殿は恐妻家でございましたか。あっはっは」
馴れ馴れしく肩をぽんぽんと叩いてくるキモブタ。うぜえ。あずにゃんの恐ろしさを知らないからそんなに笑っていられるんだ。
ん？
「そ、そうだ、家康殿、あっしを匿ってもらえないですか」
「なんと、拙者がですか？」
「お願いします。この通り。あっしの女房は織田の中でも一番恐ろしい悪鬼なんです。捕まったら出陣なんてとてもじゃないほどボコボコにされてしまいます。お願いします」
「いやあ、全然構いませんよ。なんなら、今晩は一献酌み交わそうではないですか」
ラッキーへへ　なぜか知らないけど、家康がおれに懐いてくれていて助かったわ。話も早いし、物わかりもいいしよ。さすが、将軍になる男は違うわな。
てことで、おれはキモブタと共にそそくさと城を出、待ち構えていたファイヤー兜に挨拶。その後、周囲を伺いながらねじり鉢巻きのところに行き、キモブタと酒を飲むことになったから、お前はクリツナと一緒に屋敷に帰っていろと命令。
「明日の朝になったら、願福寺に来いよ。いいな」
「奥方はどうするつもりだ」
「仕方ないだろ。家康殿に誘われちゃったんだから。そういうふうにあずにゃんに伝えておけよ」

「知らねえぞ。どうなっても」
フン。知るか。明日になったら出陣、越前まで行って、いくさが終わったら、京か摂津に居座っておしまい。
「父上っ！」
うわあ……。むすっとしながら歩み寄ってきた太郎に右腕をがっちりと掴まれて、捕縛されてしまったおれ。
「何をこそこそと話していたのですか。母上がお怒りですよ。今日こそは屋敷に戻ってきてもらい、母上に謝ってもらいますからねっ」
「や、やめろっ」
太郎の手を振りほどこうとするが、力が強くて離せない。
「お、おれは今から、家康殿のところに行くんだ。大人の事情ってやつだ。だから離せっ」
「いいえ、屋敷に行きますよ。三河守様のところに行くだなんて、どうせ、父上が泣きついたのでしょうからね」
「ち、違うっ。言いがかりはよせっ。離せっ」
「どうされましたか、簗田殿」
ファイヤー兜を従えてどすどすと歩いてきたキモブタ。太郎はあわてて片膝をつき、顔を伏せる。
「お初にお目にかかりまするっ。織田家馬廻衆、簗田左衛門太郎広正にてございますっ」
フヒヒ。小僧が。さすがに大名家康の前ともなると。太郎はただの小者だからな。格の違いってやつだ。おれとお前との。
「ほうほう。簗田殿の倅殿でございますか。六角攻めに池田攻めの御活躍、噂に聞いておりますぞ」
「有難き幸せにてございます」
「じゃ、家康殿、酒を飲みに行きましょうか」
「そうですな」
「お、お待ちくださいっ。恐れながら、父は自宅に戻らなければならぬ理由があるため、今夜はどうか、父を連れて帰らせてもらえぬでしょうか」

「おい、太郎。誰に物を言っているんだ。ん？　家康殿の御厚意を反故にしろって言っているのか、お前は」
　すると、太郎、おれをちらりギロリ。
「むう。しかしなあ。築田殿とお会いするのは久方ぶりであるしなあ」
「そういうことだ。さっさと帰れ」
「し、しかし、父はもう半年以上も家に戻ってきておりませぬ。家の者も父の身を案じております。恐れ多いこととは存じておりますが、どうか、父を連れて帰らせてくださいませ」
「参ったなあ」
　と、キモブタ、下膨れのほっぺたを右手でぽりぽり。おい。折れるなよ。強気で行けよ、強気で。
「どうしましょう、築田殿」
「いやいやいやいや、こんな小僧の言うことなんかに耳を傾けないでください。せっかく、家康殿があっしなんかを招いてくださるというのに、反故にできません」
　すると、ファイヤー兜がキモブタに身を寄せた。
「殿が築田殿のお屋敷にお伺いするというのは如何でしょう」
　ふざけんなっ！　こいつ、事情を知らないくせに何を言ってやがんだ。それじゃ、結局、おれはあずにゃんにボコられちまうじゃねえか！
「それはいい。それがいい。拙者が築田殿に招かれよう」
（　。Д。）
「そ、そうしましょう。我が家にお出で頂くとは光栄でございます。是非ともそうしてくだされ！」
　で、太郎に睨みつけられたおれ。そのまま、がっちりと腕を組まれ、連行。

ＶＩＰ

おれと太郎はさんざん揉め、門前に来るとおれはなんとかして逃げようと、散歩を終わらせたくない犬みたいに中へ入ろうとしなかったが、騒ぎを聞きつけたあずにゃんが中から出て来て、おれの姿を見るなり右ストレート。そのまま首根っこを掴まれて家の中まで引きずられていく。

「ちょ、ちょっと、待ってください！　お客様が、来ているんです！」

「客などどうでもいい！」

「母上っ。三河守様がお出でになられているんですっ。控えてくだされっ！」

太郎の言葉に、首根っこを離したあずにゃん。門前ではキモブタとファイヤー兜が唖然。

「あ、こ、これは、お見苦しいところを。何もない家でございますが、どうぞ、お上がりくださいませ」

ふう。さすがの女番長も、信長の盟友には野蛮じゃないようで。

この隙におれはすぐさまキモブタの傍らに引き返し、むしろ背後に回って、キモブタの丸い背中を押して行く。

「さあさあ、何もない家ですが、ゆっくりとしていってください。いや、むしろ、泊まっていってください」

「お、恐ろしい奥方ですな。出迎えに拳とは」

「お願いします。お願いします。家康殿がいなかったら、あっしは殺されてしまいます」

で、家康を無理やり玄関に押し込めているうち、お貞やあいりんも出てきて、膝をついているあずにゃんに並んで、ＶＩＰに平伏。

家康がいれば、なんとか凌げる。家康の表情があずにゃんを目の当たりにしたあとから不穏になっているけど。

「旦那様ァー、聞いたッスよー、堺に行っておられたー―」

飛び出てきたと思ったら、急に凍りついたシロジロ。なんだ、こいつ。さっさとＶＩＰに頭を下げろよ。

「あっ」

太郎が声を漏らした。

？

「四郎次郎！　中島四郎次郎ではないか！」

キモブタが急に声を上げて、おれもようやく気付いた。おれは手が震えた。やばい。シロジロは元々、家康の御用商人だったんだ。

「どういうことだっ！　中島ァ！」

ファイヤー兜がどかどかと玄関に上がってきて、激怒。

「何の報告もなくここにいるとはどういうことだっ！」

「も、申し訳ありませぬっ！」

シロジロが土下座。頭をこれでもかというほど擦りつけて、申し訳ありませぬの連発。やべえやべえやべえ。騙されて家康から預かっていた五百貫を失くしたのはシロジロのせいだけど、それを知っていて、おれがここに居座らせていたとなると、泥棒を匿っていたのと同じだ。

「申し訳ないで済むかっ！　来いっ！」

ファイヤー兜が土足のまま上がって、シロジロの首根っこを掴み、引きずり下ろす。

「お待ちくださいっ！」

太郎がファイヤー兜にしがみつく。

「四郎次郎は訳あって、簗田家におりまする。処罰を加える前に、どうか、理由だけでも聞いてやってください」

「左様だ、平八郎」

キモブタはむすっとしている。

「これは四郎次郎と徳川だけの問題ではない」

やばいやばいやばい。あずにゃんにボコられるほうがよっぽど可愛いぐらいの、大問題の予感。

なんで気付かないんだよ、太郎の馬鹿たれ！

非常に気まずい空気の中、居間にキモブタとファイヤー兜を通し、シロジロを廊下に土下座させたまま、太郎が理由を話す。
「なんていうことだ」
と、キモブタは首を振った。シロジロが砂糖を鼻クソと間違えたことに呆れていた。ファイヤー兜も怒りではなく溜め息。
「お主がそこまで馬鹿者だったとは、わしすら情けなくなってくる」
「そ、それでこの馬鹿はあっしの居間で腹を切ろうとしたんで、と、とりあえず五百貫貯まるまではなんとか生き延びてみろってことで、はい。あっしのところで預かっているってわけです」
「三河守様にお伝えするべきことでしたが、四郎次郎のことを考えると、ご報告できませんでした。これはすべて拙者の責任。このことはおやかた様に伝え、拙者になんなりと処分を下してください」
おいっ。何を言っちゃっているのよ、太郎ちゃんは。お前だけの処分になるわけねえだろ。おれだって処分されるだろ。馬鹿がっ。
シロジロを引き渡せばそれで済むのに。馬鹿がっ。
「そうは言っても」
がっくりと頭を垂らすキモブタ。
「そのようなことを上総介殿に伝えたとしても、わしの失態が世間に晒されるようなもの。そのような者に五百貫も預けたなど、天下の笑われ者」
ハア、と、キモブタは深い溜め息。
「申し訳ございませぬっ！」
「もうよい。もうよいもうよいもうよい。わしは四郎次郎などという者などは知らん。簗田家の中島四郎次郎などとは縁もゆかりもない」
キモブタはそう言うと、もう一つ、ハアと息をこぼした
「簗田殿、腹が減りました」

キュピーン

夕飯を食べた後に、酒を少々飲んで、キモブタは宿営地に帰っていった。

泊まっていってほしかったけれど、シロジロの件もあったので、引きとめられず。

で、あずにゃんにボコられると思いきや、あずにゃんはどうしてか姿を現さず、代わりに太郎からくどくどと説教を受ける。音信不通でいたことや、甲冑や火縄銃のこと。

すでにさゆりんとねじり鉢巻きから聞いていたらしく、ヘタレ村重にたかり、今井会長に借りを作るとはなんてことをしてくれたんだと。

「だったら、言わせてもらうけどな」

おれは太郎が沓掛城の帳簿を密かに握っていることを問い詰めた。すると、一瞬は怯んだものの、開き直って、父上に任せられるものかと言い出す始末。

「結局、沓掛城の収入を父上に任せてしまっていたら、無駄に火縄銃を買い込んで、すっからかんになっていたということではないですか」

やかましいので、おれは寝室に逃げた。

今に何も言わせなくしてやる、クソッ。

それにしても、せっかく家に帰って来たっていうのに、説教三昧。あずにゃんはおれの嫁で、太郎はおれの息子だぞ。どうかしている。あなた～、とか、パパ～、とか、そういうぬくもりがまったくない。おれを見つけた途端に目くじらを立てやがって。

だいたい、シロジロだってあいりんだっておれに報告することがあるだろ。それなのに、シロジロは落ち込んで引きこもり。話しにならない。あいりんは太郎の説教タイムに見て見ぬ振りでどこにいるのかわからない。

いつもそうだ。岐阜に帰ってくると、不愉快な気分になる。チクショウ。

「亭主殿」

「なんだ！」

戸の隙間から長い睫毛を覆ったあずにゃんの目がじっとしている。

「あっ、いやっ」

おれはあわてて駆け寄り、あずにゃんの手を取って、中に引き入れる。って、徳利と盃が置かれた盆を抱えている。

「ど、どうしたんスか」

おれは盆を受け取り、あずにゃんを布団の上に座らせる。

「別段、理由などない。ただ、忍びなかっただけじゃ。だから、一献、注いでやろうかと思った」

あずにゃんは布団の上から降り、おれに盃を突き出してくる。うーん。どういう心境の変化なんだろう。さっきまであれだけ怒っていたというのに。

おれはあずにゃんが注いでくれた酒を飲み干し、あずにゃんに盃を返す。徳利の中を注いでやると、あずにゃんもそれを一口で飲み干す。

盃を盆の上に戻すあずにゃん。

「わらわは短気じゃ」

あずにゃんは視線を伏せながら唇をきゅっと結んだ。

いや、短気とかのレベルじゃないと思うんだけど。

「口より先に手が出てしまう。考えるより先に手が出てしまう」

おれは腕を組み、うんうんと頷く。

「そんな梓を許してほしい」

……。

「梓は、勝手な女じゃ」

潤んだ瞳で見つめられるおれ。一体、どういうことなんだ。どうして、急に、こんなにしおらしくなっちゃったんだ。

「ど、どうしちゃったんスか」

あずにゃんはまるで少女のように目で訴えかけてくる。
「いや、あっしが悪かったんで。はい。手紙を書かないで申し訳ありませんでした」
すると、あずにゃんがぽろりと一粒、涙をこぼし、声を震わせながら言った。
「や、やるせない。亭主殿はいつもおらん。どこで何をしているかわからん。でもな、でも、わらわは皆の前ではそのようなことなど言いたくない」
鼻を啜り、着物の袖で涙を拭くあずにゃん。
「わらわは、どうしていいのかわからん」
おれこそどうしたらいいのかわからない。こういう場面の対処の仕方なんて、おれのスキルにはない。
「心細い」
「ちょ、ちょっと待ってください」
整理しなくちゃならない。おれは額に手を当ててよく考えてみる。何がどうなってこうなっているのかよくわからない。
おれとあずにゃんは夫婦だ。でも、その夫婦関係はとんでもなく虐げられた関係だ。おれはあずにゃんに逆らえない。ささやかな抵抗といえば、あずにゃんから逃げることぐらい。
なにしろ、半殺しにされる。そこにさ、好きとか、愛だとかないだろ。おれからすると、もはやあずにゃんは恐怖の対象でしかない。
そんな恐怖の対象に心細いだけって言われちゃったら、おれはどうすればいいんだ。
あーあ、もう、よくわからない。おれは徳利を盃に注いで、ぐいと飲み干す。駄目。まったく酔えない。頭の中が冴え冴えとして、鬱陶しいこの事実に考えが集中してしまう。
「どうしたのじゃ」
あずにゃんの表情はまったくもって、普段の恐ろしさのかけらもない。むしろ、おれに向けてくる眼差しが涙の中に健気すぎて、狂おしくなってくる。いたたまれなくなってくる。

「よくわかりません！」
おれは徳利を掴み取った。そのまま口の中にぐびぐびと流した。酒が喉元をごくごくと通っていき、徳利をドンと置いたときには、熱いものが体中を駆け巡って、目も据わっていた。
「おれは、あっしは――」
何かを言いたいけど、何も出てこない。言いたいことが多すぎて、何も出ない。今までおれが味わってきたこと、元の時代ではさんざんな人間であったこと、こっちの時代でもさんざんな人間であること。
そんなおれが、あずにゃんっていう綺麗な奥さんがいること、太郎っていう出来た息子がいること、おれなんかにはまったく相応しくない人生を送っているっていうこと。
「あっしは、おれは、大した人間じゃございません」
「わらわこそ大したことない」
「いや、あっしのほうです。あっしこそ大した人間――」
あずにゃんが涙ながらにキスしてきて、おれは口を塞がれた。突然のことに目玉がキュピーンってなった。あわわ。しかも、チュッぐらいの程度じゃない。長い。あずにゃんの柔らかい唇の感触を受け止めている時間がとてつもなく長い。天国に昇っていけるほど長い。で、自然と瞼が閉じていってしまうおれ。
ああ、なんなんだろ。あずにゃんの思いが唇から伝わってくる。あずにゃんが言葉に出来なかったことがおれに注がれてくる。
どうやら、あずにゃんはおれのことが好きらしい。
ああ、駄目だ、おれもあずにゃんが好きすぎる。
唇が離され、うっとりと見つめ合う。なんだか、おれがおれじゃない。
駄目だ。おれはぎゅうっとあずにゃんを抱き寄せる。で、もう一度キス。もう駄目だ。愛し合っちゃっている。

一生死にたくない

これはね、純愛っていうやつだろうね。

欲情を突き抜けた何かがあったね。一つになっているっていう実感が延々と続いていたね。一緒に何処かへ行こうとする深いものがあったね。

言葉はまったくいらなかったよ。そのとき、おれはあずにゃんのすべてがわかっていたもの。で、あずにゃんもおれのすべてをわかっていた。

そんなあずにゃんが愛しくて愛しくてたまらなかった。どんなに力強く抱きしめても、それだけじゃ足りないくらい愛しかった。

おれは本当に突き抜けていた。

あずにゃんの小さい顔を腕の中に抱えつつ天井を眺めながら、おれは間違っていたんだな、と、賢者モードに入っていた。

こんなことなら、別に焦って童貞喪失しなくても良かった。むしろ、さゆりんと愛のないHをしてしまったことが愚かしく思えてくる。

いや、それ以前に、おれが今まで誰かを好きになっていたりしていたことって、すごいちっぽけなことだったのかもしれないと考える。

メグミちゃんも、チヨタンも、さゆりんも、上辺だけの好きだった。発情期の獣みたいな感覚で好きだったような気がする。無いから欲しがったり、寂しいから欲しがったり、やりたさのあまり欲しがったり。

おれの一方的なエゴ。だから、物凄く奥深い場所での人間同士の触れ合いを無視していた。

恐怖の対象でしかなかったあずにゃん。でも、おれにとってのその恐怖は、あずにゃんからすると、狂おしくなったうえでの激情だったっていうわけだ。

あずにゃんが今まで生きてきた上での甘さや苦さ、おれとの生活の中での寂しさ、心細さ、そんなものがぐちゃぐちゃになってしまって、でも、あずにゃんはそういったことを言葉にうまく表せないから、右ストレートやキックをしてきて、どうにか、おれに思い知らせたかった。

でも、あずにゃんがそうであるように、おれも適当な言い逃れしかできない。どうにかしてごまかし、自分が理解できないことからは目を背ける。

そんなおれを、あずにゃんは追いかけて来てくれたってことだ。暴力でだけど。

「今までごめんなさい」

おれは傍らのあずにゃんに素直に謝った。

「梓殿のこと、何もわかろうとしなくて」

「そんなことない。わらわも、亭主殿のことをわかろうとしなかった。亭主殿が繊細な心の人であることを知らなかった。今まで、わらわは女房としてそなたに何もしてやれなかった」

あずにゃんがおれのほっぺたに頭をこすりつけて甘えてくる。

「でも、わらわは幸せじゃ」

ああ、胸がドキドキするわ。夢でも見ているかのよう。こんなおれといられて幸せって言ってくれるなんて、おれこそ幸せすぎて、もうこのまま一生死にたくない。

「なあ、亭主殿。梓を好いておると言っておくれ」

「好いています」

「本当か？」

「本当です。すごくすごく好きです」

「なら、いくさに行っても、どこに行っても、ずっと梓のことを思っていて。わらわも、亭主殿のことをずっとずっと思うから」

「はい。ちゃんと毎日、手紙も書きます」

「できぬことは約束せんほうがいいぞ」

「いや、書きます。その日、起こった出来事、その日、思ったこと、

全部、書きます。だから、梓殿もあっしに手紙を書いてください」
あすにゃんは耳たぶを噛んできた。
夢のような一夜が過ぎて、あずにゃんに起こされたおれ。
「おはよう。そろそろ支度しないとならんぞ」
あずにゃんは人が変わったかのように優しい表情をしていて、おれにチュッてしてくると、襟を直しながら部屋を出ていった。
はあー。おれはぼんやりとしてしまう。いくさに行きたくない。
あずにゃんから離れたくない。どうにかしてバックレたい。
だって、まだ、胸がドキドキしているもの。もう、あずにゃんの愛に骨抜きにされちゃった感覚。
おれは布団の上でごろごろしているだけで、一向に支度をしようとはしなかった。行きたくない。離れたくない。あずにゃんとチュッチュしていたい。
で、枕にチュッチュしていたら、
「何をしているんや」
ううっ。甲冑姿のさゆりん。一気に現実に引き戻された。
さゆりんは部屋の中に入ってきて、おれの周囲をじろじろと見まわしたあとに、おれの襟首を思い切り掴み上げてきて、目玉を剥き出して唸った。
「いくさや。はよせい」
おれは捕獲されたグレイのように連れて行かれ、居間にセットされていた小さい椅子に座らされる。あいりんやお貞、ねじり鉢巻きに回りを取り囲まれ、甲冑セットを無理やり着けさせられていく。
あずにゃんが湯漬けを持ってきて、渋々、それをかき込んでいくおれ。
「亭主殿、くれぐれも無茶はするでないぞ」
家の人間の前とあってか、その表情にラヴラヴあずにゃんの面影はなし。ううっ。もう一度、チュッチュしたいよお。
しかし、ねじり鉢巻きに覆面を渡され、ぐう。仕方なく装着。
すると、居間に幽霊が入ってきた。いや、シロジロ。力なくおれ

の前で平伏し、「旦那様」と、か細い声で言う。
「こんなときに言うのもなんなんスけど、一晩考えたんス。あっしに暇を与えてくれないッスか」
皆がシロジロに注目し、沈黙の時間。あずにゃんがちらりとおれを見てきて、おれは兜の顎紐を結ぶと腰を上げた。
「五百貫貯まったらクビにしてやる」
「いや、でも、あっしは――」
「騙されたのは仕方ないけど、約束ぐらい守れ。おれが帰って来たときにお前の姿がなかったら承知しないからな」
ウウッ、と、泣き出すシロジロ。馬鹿が。行く先なんてないくせに。ここを出たら、またどうせ騙されるんだからおとなしくしてろ。
おれは居間をあとにすると、玄関に降り、平伏している連中に別れの挨拶。
「では、行って参る」
「ご武運をお祈り申し上げます」
おれはあずにゃんに視線を向ける。あずにゃんは唇を引き絞って一つ頷く。
むう。行きたくない。あずにゃんと離れたくない。でも、皆、すっかりお見送り状態。
「殿っ！　早くして下さい！」
ぐう。背後の門からさゆりんの声が。
「呼んでいるぞ、亭主殿」
ウウッ。あずにゃんはやっぱり戦国の女。表情は覚悟を決めている。むしろ、いつまでもじもじしているんだっていう目。
「何をしているんですかっ！」
さゆりんがかちゃかちゃと駆け寄ってきて、そのままあずにゃんから引き剥がされていったおれ。おお、ジュリエット！

拝啓　梓殿

あずにゃんから引き剥がされて放心状態のおれは、クリツナにただ乗っているだけ。なんか、風が夏だなあ。木々が青々としているなあ。ぼんやり。

岐阜から京まで四日間かけて到着。

京は織田の軍勢が終結してもものしい雰囲気だけど、おれは宿営地のお寺であずにゃんに手紙を書く。しかし、手紙なんて書いてことないから、大島のおっさんに一応教えてもらったものの、中身をどう書けばいいかわからず、結局、

拝啓

あつくなりそうです。

ずっとこんな季節だと過ごしやすいんですけどね。

さて、あっしは京の都に到着しました。

大きないくさになりそうで、

好まないことでもあります。

きをつけて行って参ります。

敬具　　築田牛太郎政綱

追伸

返事待ってます。あと、お金を使うときはお貞と相談してからに

してください。

おれの密かな思いを縦読みに託した。いや、縦書きで手紙を書いたから、横読みか。気付くかな。気付いてくれたらいいな。

それにしても、越前に行きたくないな。浅井長政が裏切った場合、信長はピンチに陥るわけだから、信長指揮下に入れられちゃった沓掛勢は相当な危険な目に合うってことだ。

死にたくない。ふむ。この苦しみも愛ゆえにか。

「殿」

手紙を封していると、さゆりんがやって来た。

「松永弾正忠様がお見えですぞ」

松永弾正？　むう。何の用だろう。嫌な予感しかしないんだけど。

手紙をさゆりんに渡し、書斎を出る。

「なんや、奥方に叱られて健気に書いておるんか」

「まあ、そんなところだ」

にやにやとしているさゆりんと共に寺の縁側を歩いていき、先に弾正が待っているという客間へ。

「お久しぶりです、簗田殿」

甲冑姿の弾正は姿勢も正しく頭を下げてくる。

「どうしたんですか、急に」

「いや、かねがね、お顔を拝見したいと思っていたのですが、簗田殿はご多忙ゆえ、こういう機会でもなければお話しもできないかと」

なんか、怖いな。ダンディな顔つきのぶん、本当に何を考えているかわからないやつだから余計怖い。

とりあえず、おれはさゆりんを部屋から出させ、弾正と向かい合わせに着席。

「摂津池田では大変であったそうで」

「ああ、知っているんですか」

「それはもちろん。拙者も過去には池田筑後守に煮え湯をさんざん飲まされました。摂津衆は日和見なところがあって、なかなか食え

ない者が多い」
　よく言うよ。一番食えない人間はお前だって、誰もが口を揃えるじゃないか。
「一応ながら言っておきますが、摂津衆、とくに池田筑後守は警戒していたほうがよろしいですぞ。上総介様の軍門に降る前は、三好三人衆と組んでおりましたから。三好の輩は今でもなお、暗躍しているそうですしな」
　いちいち、こんな忠告のために訪ねてくるなんて、相当怪しいな。何を企んでいるんだ。
「それより、簗田殿は今井彦右衛門に百五十丁もの火縄銃を借り受けたそうですな」
「ええ。早いッスね、情報が」
「まあ、拙者も、堺の会合衆とは誼があるため。しかし、どうして、今井彦右衛門のような強欲商人が、無償で貸したのでしょうかの。どう口説き落とされたのですか、簗田殿」
　実に興味津々に瞳を光らせる弾正。ほほう。強欲なこいつは、自分も今井会長の恩恵を受けたいから、ここに来たんだな。
　でも、真実を言ったら、こいつこそ絶対に手柄を横取りしそう。
「実は、摂津池田の荒木信濃守っていうやつがとと屋のタナカっていうやつと知り合いで、そのタナカが今井さんと仲が良かったので、話が盛り上がって、だったら、火縄銃使ってみればみたいな感じで貸してくれました」
「とと屋の田中与四郎ですか」
　じいっとおれの目を見つめてくる弾正。な、なんだよ。
「簗田殿、今度は是非、拙者の茶会にも出席してくだされ。このいくさが終わりましたらお招きするゆえ、拙者の手前、ご覧くだされ」
　そう言って、腰を上げ、一礼を残してから部屋をあとにしていった弾正。なんなんだよ、あいつ。何が目的なのかさっぱりわからん。
　それとも、ただ単におれと仲良くしたいだけなんだろうか。
　いや、絶対にそれはないな。信長に降伏するときの、あのこざか

しい真似はよく覚えている。あいつは絶対に私利私欲だけのモンスターだ。

「けったいな人物やな」

さゆりんが部屋の外で盗み聞きしていたらしい。

「深入りしたらあかんで」

言われなくたって、わかっているわ。あんなやつを手なずけられるのなんて信長ぐらいだけだろ。

越前侵攻

二条城での軍議が終わり、明日、越前に向けて出立ということになる。

「お前、また、そんな浮かない顔をしてやがるのか」

誰かと思ったらマタザ。

「武具も揃えたことなんだし、見っともない真似をするなよ」

こっちのセリフだ。まったく。マタザは森部の戦い以来、いくさになると影が薄くなっているじゃねえか。あれだけのかぶき者だったくせに、今じゃただのパパ。

でも、まあ、その気持ちも、今のおれならわからなくもない。物凄い気持ちで死にたくはない。無事に帰って、元気な姿をあずにゃんに見せてあげたい。

「あっしもようやくマタザさんの気持ちがわかってきましたよ」

「はあ？」

「いや、なんでもないッス」

マタザと別れ、クリツナのところに戻って来ると、今度は十兵衛が声をかけてきた。

「聞きましたぞ。なんでも、百五十もの火縄銃をこしらえたそうで。ずいぶんと思いきったことをしましたな」

十兵衛はにこにことしている。おれの鉄砲の師匠だけあって、おれが火縄銃に着目したことを喜んでいるのかもしれん。

「上総介殿も感心しておられるみたいですな」

えっ？　マジで＾＾

「そうなんスか？」

「ええ。噂を聞いて、簗田殿らしからぬことを仕出かしたと喜んでいたそうですよ」

ほっほう。あのツンデレめ。直接言ってくれればいいものを、恥ずかしがっちゃってさ。

「今回のいくさ、築田殿の鉄砲隊、とくと拝見させてもらいましょう」

にやり。やっぱり、十兵衛や信長は、頭でっかちの馬鹿たちとは違う。今井会長とどうして通じているのかっていうことよりも、おれが火縄銃を仕入れたことに対して興味を持っている。まあ、見ていてくれや。革命を起こしてやんよ。

「とはいえ、拙者は朝倉家に世話になっていたこともあり、心境は複雑ですが」

ぼそりと呟いて、おれの前から去っていく十兵衛。どうやら、彼は根暗らしい。

翌日、出陣。

と、その前に、あずにゃんから手紙は来ていないのかね。

「来るわけないやんか。昨日、飛脚に渡したばっかりや」

チッ。不便な世の中だぜ。ケータイがあったら、四六時中にゃんにゃんできるのに。さゆりんもどこか白々しい目をしているし。嫉妬してんのか。ケータイがあったら、こそこそにゃんにゃんできんのに。

で、出陣。

琵琶湖沿いの山々をぬうようにして進軍。聞いたところによると、織田勢は三万の大軍らしい。朝倉勢は不明だけれど、だいたい一万前後じゃないかって話。

五日間かかって、越前朝倉領に侵入。敦賀の妙顕寺というところに本陣を構えた。朝倉領の寺に腰を下ろすだなんて図々しいなと思っていたら、なんか、ここから見える小高い山が城郭になっているんですけど。

多分、あそこに朝倉勢が潜んでいるんだな。むう。おれは少々困った。城攻めで鉄砲隊が役に立つのか不安。

「ここに両立している金ヶ崎山と手筒山がある」

軍議で、サンザが大地図に棒きれを差しながら言う。

おれはサルの隣をちらり。いくさ狂い半兵衛はいない。やはり、

連れて来なかったらしい。正解だと思う。おそらく、朝倉領に入ったあたりから発狂を始めているに違いない。

「将は朝倉一門、中務大輔景桓とされる。我らの越前入りを知り、一乗谷から援軍が来ることは必至。早急に攻め落とさねばならぬ」

説明しただけで腰を下ろしたサンザ。

「サル！」

と、信長が腕組みをしたまま甲高い声を上げた。

「竹中の小僧は何と申している」

「にゃっ、その……」

サルは周囲をちらちらと見まわしながら、もじもじ。

「時間をかけにゃあ、落とせないと申しておりましたぎゃあ。大昔、足利尊氏公の家臣がここを守る新田義貞を攻めたときに、力攻めを跳ね返され、兵糧攻めでなんとか落としたと言って聞かないですぎゃあ」

だったら、六角攻めのときみたいに火の海にすればいいじゃんとおれは思ったけど、誰もそんなことを言わない。おれにはよくわからない。

「恐れながら！」

十兵衛が声を上げた。

「拙者は金ヶ崎城をたびたび訪れたことがございます」

「申してみろ」

十兵衛は大地図の前に立ち、棒きれで差し始めた。

「手筒山の裏手は沼地であります。朝倉勢はこちら側の守りをおろそかにしております。さらに、手筒山の水源がここにあります。これを堰き止めれば、手筒山の兵たちは士気を失うでしょう」

「もう一方はどうする」

「手筒山城と金ヶ崎城は二対が一個になっての要でございます。二つの要ではございません。片翼が折れれば、もはや、飛べない鳥のごとしでございます」

十兵衛、複雑だなんて言っていたくせに。

「わかった。ならば、又左、内蔵助、お主らが正面から先陣を切れ」
「あ、有難き幸せっ！」
「しかし、見せかけじゃねえからな。お主らは何も考えずに正面から突破してみろ。サルがその後に続け。裏手に回るのは五郎左と牛だ」
えっ。裏手って、沼地って言ってなかったっけ。そ、それじゃ、火縄銃が。
「俺と三河殿は手筒山が落ち次第、金ヶ崎をただちに包囲する。いいな。早期に落とすんだからな」
信長の指令に声を上げて従った連中だが、それだと、おれの活躍の場が制限されてしまうんですが。

沼地にて半べそ

マタザやウザノスケ、サルたちが手筒山の正面から突っ込んでいき、その後、しばらくしてから、マリオとおれが沼地を進軍開始するという手はずだった。

「さすが十兵衛様。ぬかりなく調べておられる。やはり、戦場というのは下調べが重要だ。奇策とはそこから生まれてくるもの。机上の算段だけでは――」

なんだか、ぶつぶつと呟いている縦長帽子を見かけたが、サルも苦々しい顔だったし、見なかったことにしよう。

おれは沓掛勢のところに戻り、軍勢をちょっと移動させてマリオ隊と合流する。

「作戦はどういったものなんですか」

さゆりんが訊ねてきたので、おれは不本意ながら作戦の説明をする。

「まあ、もともと攻城戦には役に立ちませんからな」

あっさり。ということは、最初から鉄砲隊の活躍は諦めていたってことだよな。まったくよ。

「宝の持ち腐れというやつだな」

マリオが珍しく嫌味を言ってくる。なんなんだ、こいつ。おれが鉄砲や甲冑を調達したことが相当気に入らないんだろう。太郎に借金をこさえさせてしまったとでも思っているに違いない。馬鹿が。今日はともかく、そのうち大活躍するんだからな。ぐうの音も言わせなくしてやる。

赤母衣、黒母衣の親衛隊連中が動き始めたところで、丹羽&沓掛勢もこそこそと山の麓を回っていく。途中、銃声や怒号が聞こえてきた。始まったらしい。おれは密かにウザノスケの死を願いながら進軍。

戦場の喧騒がだんだんと遠退いてきたところで、クリツナの足元

がべちゃべちゃしてきた。人の背丈よりも高い草が生い茂っていて、周囲の連中がすっぽり隠れてしまっている。

べちゃべちゃは進めば進むほど深くなっていき、足を深みに持っていかれる雑兵や馬が現れ、進軍は難攻。さずがのクリツナもなかなか進めない。ねじり鉢巻きが叱咤激励するけれど、当のねじり鉢巻きも足が膝までずぼずぼ入っちゃっていて、実に頼りない。

「降りるしかありませんな、簗田殿」

大島のおっさんが言ったけれど、むう、おれのことだ。降りたら、そのまま埋まっちゃう気がする。

「殿、降りましょう」

さゆりんがそう言って、ひょいっと馬から降りた。大島のおっさんも降りた。馬に乗っている連中は、皆、降りた。けれど、見事なまでにずぼずぼと埋まっていく。

「具足を脱ぐしかありますまい。ここで立ち往生していても意味がない」

と、言って、鎧の紐をほどいていく大島のおっさん。いやあ、それは出来ないだろ。おれは相変わらずクリツナの上から離れないが、周囲の連中は鎧を脱ぎ、兜を捨てて、籠手や肩パットだけの軽装になっていく。

で、泥まみれになりながら、どんどんと進んでいく。丹羽勢も同じことをしている様子。

「殿！」

さゆりんが下から怒鳴り散らしてくる。

「殿も早く具足を捨てなされ！」

そ、そんなことできるはずがねえだろうが。初めて甲冑を着て戦場に出てきたっていうのに、捨てるなんてこと、できるはずがないじゃんか。

それに鎧とか着ていないと危ないし。

「殿！　何をしているんですかっ！」

「旦那！　もうこれ以上、クリツナは進めねえ！　戻らねえと、死

ぬまで出られなくなっちまう！」
　ぐうう。クリツナを取るか、甲冑を取るか。もちろん、クリツナを取るけれども、甲冑だって捨てたくねえ。どっちも取るってことを考えられる賢者はいないのかよ！
「もう、いい加減にしてくだされ！」
　堪忍袋の緒が切れてしまったさゆりんにクリツナの上から引きずりおろされ、沼地にべちゃっと倒れる。
　おれがもがいている間に、さゆりんとねじり鉢巻きがおれの鎧の紐を解いていく。ううっ。せっかくの甲冑デビューが、どうしてこんなことに。
　牛のマークの兜もぽいとどこかにぶん投げられて、さゆりんに引き起こされる。
「くそう。お前ら、覚えていろよ」
「甲冑と勝利、どっちが大切なんですか！　阿呆！」
　ウウッ。神様はどうしてこんな仕打ちを与えるんだ。おれは甲冑を着ちゃ駄目だって言うのか。一生、綱鎧のままでいろっていうことなんですか。ウウッ。
「クリツナのことは任せたぞ、栗之介」
　で、さゆりんとともに沼地を進むおれ。いや、進めない。足が抜けない。
「殿！」
「そんなこと言ったって、抜けないんだから仕方ないだろお」
　おれはもはや半べそ。大島のおっさんに連れられて沓掛勢はどんどんとおれを追い越していく。さゆりんの指揮下にある鉄砲隊だけが、おれの脱出を待っている状態。
　おれはなんとかしてもがくけど、足が全然抜けなくて、しまいには前のめりに転倒。顔面泥だらけ。
「もういいっ。栗之介！　殿のことも任せたぞ！」
　えっ？
「鉄砲隊は我に続け！」

そう言って、おれの元から去って行くさゆりんと鉄砲隊。置いてけぼりをくらったおれは、ねじり鉢巻きに体を起こしてもらうだけが精いっぱい。

おれは、おれは、一体なんなんだ。ねじり鉢巻きに手伝ってもらいながら、元来た道を戻っていく。

おれは、一体、何をしにここに来たのだろうか……。

おれの虚しさをわかってくれたのだろうか、クリツナがぺろぺろと舐めて来てくれる。ウウッ。こんなことなら、甲冑も捨てなければ良かった。

おりゃあと牛殿なら、天下無双だぎゃあ

正面から攻城を始めた母衣衆は苦戦したみたいだけど、沼地を突破した丹羽勢＆沓掛勢が登山後、背後から手筒山城に襲いかかり、敵は混乱。それに乗じて母衣衆、第二隊のサルが大活躍して、手筒山を占拠した。金ヶ崎城に逃げ込んだ中務大輔景桓だったけれど、水源を押さえこんだことにより、朝倉勢は降伏。

朝倉勢との第一回戦は一日で終わった。

おれはというと、一度、こっそりと正面に戻り、手筒山を占拠したところで、山を登っていき、沓掛勢とちゃっかり合流。

いやー、沼地の突破はなかなか苦労したなあ。うんうん。沓掛勢には死人もいないようで、皆の衆、よくぞやってくれた。

まあ、さっきから、誰も声をかけてきてくれないのが気がかりなんだけど。

で、お楽しみ会、と、思いきや、早々と軍議。お楽しみ会は朝倉勢の本拠の一乗谷を攻め落としてからだってさ。うむ。おれにもまだまだチャンスが残っているってことか。

「金ヶ崎を攻略したことで、どうやら朝倉勢は敦賀群を放棄した模様だ」

例のように、サンザが大地図の前に立って説明をする。

「このまま一乗谷まで攻め上がれる態勢は整っているが、朝倉勢はどうやら狭地である木ノ芽峠に軍勢を展開している模様である。これに関して何か意見のある者は遠慮なく申せ」

「ただ単に突っ込んでいくだけでは相手の思う壺でしょうな」

と、マタザ。戦功を上げたからって、口もなめらか。調子に乗っている様子。

「そんなことはわかっている」

信長が目を大きくして言う。

「だから、意見を申せと言っているんじゃねえか」

マタザがしょぼーんとして、信長がきゃっきゃっきゃと甲高く笑い上げた。

「まあ、いいわ。いくさの直後は頭も回らん」

目的通り一日で金ヶ崎城を落とせたとあってか、信長は上機嫌。信長がはしゃいでいると、諸将も晴々とした表情になる。おれもとばっちりがないと思うと、ほっとする。

「敵の前線である敦賀を押さえたとなれば、そう焦ることでもねえだろ」

それに、と、信長は言葉を繋いだ。

「新九郎の動きが気になる」

「浅井殿でございますか？」

キモブタ家康が不思議そうに首を傾げ、諸将も戸惑った顔をする中、信長はおれに目を向けてきた。唐突だったので、おれは若干きょどってしまう。

「気にしている奴がいるから、俺も一応気に留めている。俺の義弟とはいえ、浅井と朝倉は盟友。朝倉領への不侵協定も結ばされた。新九郎が俺を裏切ると思わねえが、浅井の中には古い人間も多い」

結局、おれの言ったことを信じていなかったわけじゃなかったのか。だったら、どうして、朝倉攻めを決心したのかってことだけれどさ。

「三左、新九郎の動きはどうなんだ」

「忍びの報せによると、敦賀に入った昨日も、北近江に変わりはないようです」

「ならいいが、朝倉ともども、少し様子を見よう。十兵衛、お前は三河殿とともに木ノ芽峠まで進軍しろ。先鋒だ。いつでも畳みかけられるようにしておけ。サル、お前は明日にでも木ノ芽峠に行ってこい。調略だ。牛も連れてけ」

えっ？　また？

「お任せくだされだぎゃあ。木ノ芽峠に閉じこもっている将はことごとく寝返らせてきますぎゃあ。おりゃあと牛殿なら、美濃のとき

のようにうまく行きますぎゃあ」
「吹きやがって」
信長が口端を歪めて笑い、おれも密かに相槌。
信長が退室すると、サルはすぐさまおれに歩み寄ってきて、肩まで組んでくる。
「おりゃあと牛殿なら、天下無双だぎゃあにゃ？」
「アハハ……」
うぜえ。マジでうぜえ。どうせ、また、草とか食わされ、騙され、さんざんな思いをさせられるんだろ。チクショウ。信長もなんで調略ってなるとおれを使おうとするんだよ。クソッ。絶対にまた牢屋とかに入れられちゃうんだよ。チクショウ。
「確かにお前ら二人は小賢しさでは天下無双だな」
ウザノスケが帰り際に吐き捨てていく。
「おみゃあは本陣で槍でも磨いているんだぎゃあにゃ」
「そうだな。いつか貴様をぶった斬るために切れ味を良くしておかねえとな」
「やめんか、まったく」
マリオが眉をしかめたけれど、悪びれた様子も見せずに去っていくウザノスケ。
「だいたい藤吉郎も藤吉郎だ。物見遊山に行くわけではないんだぞ。もう少し引き締めてかからんか」
「まあ、それが木下殿の良きところでございましょうな」
キモブタ家康が言うと、サルは高らかに笑い上げた。
「にゃっはっは。やっぱり三河殿はおわかりですぎゃあ。にゃっはっは」
こいつ……。諸将の前だっていうのにずいぶん調子に乗っているけど、そうか、ゴンロクがいないからでかい態度を取っていやがるんだな。

ククッ。おれには天才軍師という親友がいるんだ。

中務大輔景桓があっさりと開け渡した金ヶ崎城は、傷一つもなく綺麗なもので、武将にはそれぞれの部屋が用意された。ちなみにだけど、信長は中務大輔景桓及びその兵隊たちを、開城と引き換えに命を許して逃がしたらしい。

信長の考えていることがよくわからん。だったら、なんで池田筑後守のときにはおれのことをボコッたって話だ。気難しくて仕方ない奴。まったく。

で、おれは沓掛の連中がおれと一言も喋ってくれないことが気掛かりになって、用意された部屋ではなく、沓掛勢のところに行こうとしたんだけれど、サルがへばりついてきてやかましい。

「朝倉は一枚岩でにゃあことは確かだぎゃあ。あにゃつらは古臭い連中が多いからにゃ、一門衆の間でくだらにゃあ権力闘争をしているんだぎゃあ」

どうでもいいから、そんなことは。

「それにしても、おみゃあと二人で調略とは、南美濃以来だぎゃあにゃあ。あのころが懐かしいだぎゃ」

「すいません、藤吉郎殿。あっしはちょっと沓掛勢にねぎらいの言葉をかけたいんで」

「ねぎらい？　おみゃあ、いつも、そんなことしないでにゃあか」

「いや、あっしだってそのぐらいはしますよ」

「築田殿」

と、誰かの声がして、サルにへばりつかれているおれは助かったと思ったのだけれど、振り返ってみると、げっ、ゼニゲバ瀬兵衛。

「聞いたぞ。沓掛勢は甲冑を脱ぎ捨ててまで獅子奮迅の活躍だったそうだな」

どうやら、沓掛勢以外は誰もが知らない様子。将校のおれだけが沼地を突破できなかったことは。マリオ隊も離れていたから、知ら

れていないのかもしれない。
「論功も弾むに違いないな」
相変わらずのゼニゲバだし。まあた、たかろうっていう腹積もりか？
「こちらはどなただぎゃあ」
「申し遅れました。拙者は池田筑後守の配下、中川瀬兵衛清秀にございます。木下藤吉郎様でいらっしゃいますな？」
「にゃあ。おみゃあ様が摂津の豪傑と噂される中川殿ですきゃあ。いかにも、おりゃあは木下藤吉郎秀吉だぎゃあ」
サルは大袈裟なおせじを振りまきながら、瀬兵衛の手を取り、握手。むう。ゼニゲバとサルが仲良くなると、危険な予感がする。
「木下殿も活躍されたそうですな。いや、いくさとなると、毎回の御活躍とお聞きします。それにその陣羽織も洒落ており、さぞかし上総介殿の覚えもめでたいのでしょう」
「にゃっはっは。そんなことはにゃあだぎゃ。中川殿に比べれば、大したことにゃあ」
「どうでしょう。お近づきのしるしに一献。まあ、いくさの最中ゆえ、深酒は禁物ですが」
「そうだぎゃあにゃ。一献ぐらいは酌み交わそうだぎゃあにゃ。にゃっはっは」
サルと瀬兵衛は肩を組み合いながら、奥へと消えていく。まさか、瀬兵衛のやつ、今度はサルにたかろうとしているんじゃ。
だとしたら、サルもサルでお調子者だから、金をばら撒くに違いない。フヒヒ。ケツの穴の毛までむしり取られちまえ。
で、おれは庭先へと向かうが、今度は小一郎と半兵衛の二人に出くわした。
「簗田殿、兄さんがどこに行かれたかご存知ですか？」
「藤吉郎殿なら、中川瀬兵衛殿と酒を飲んでいますよ」
「酒え？」
半兵衛と顔を見合わせる小一郎。ちなみに半兵衛はノーマルに戻

っていて、苦笑しながら首を傾げる。
　小一郎は溜め息。
「まったく。将兵たちに何も伝えずに酒とはどうかしております」
　小一郎はもう一度溜め息を吐くと、サルを探しに奥に消えていく。
「簗田殿、軍議ではどういう結論であったのですか」
「いや、まあ、十兵衛と家康が木ノ芽峠ってところまで進軍して、おれとサル、いや、藤吉郎殿が調略ってことになった」
「左様ですか。ならば、我が隊は一休みですな。それにしても、簗田殿、今回はずいぶんと御活躍されたそうで。なんでも具足を脱ぎ捨ててまで、朝倉勢と向かい合ったみたいではないですか」
　半兵衛はにこにことしている。完全にノーマルモードらしい。スイッチが入る基準が不明なのはともかくとして、おれは半兵衛にだけはおれの失態を教える。
「だから、沓掛の連中がおれと一言も口をきいてくれないんだ」
　半兵衛は笑った。
「器量の狭い連中ですな。大将は腰を据えているだけでよいのです。戦闘を行うのは兵です。気にすることありません」
「そう言ったってなあ」
　おれは溜め息をつきながら庭先へと向かう。
「あいつらは田舎者だから、どうせ、そんな頭はないだろ。マタザみたいに槍を振り回している奴が格好いいって思う輩なんだ」
「まあ、口でなんと言おうと、聞きはしませんでしょうな」
「じゃあ、なんとかしてくれよ。おれはいっつもそうなんだ。すんでのところでヘマをおかすから、結局は皆がおれを馬鹿にする。今じゃ、ひどいもんだぜ。太郎も、家の連中も、よってたかって、おれをナメてかかってきやがる。沓掛の帳簿すら、家の連中だけで勝手にやっている有様だ」
「帳簿？」
「沓掛城の帳簿だよ。今までは丹羽五郎左が仕切っていたんだけど、いつのまにか、五郎左が太郎とおれの奉公人に任せていて、おれは

そんなことを全然知らなかったんだ。おれの知らないところで勝手に何かをやっているんだ」

「左様でございますか」

半兵衛は顎に手をかけ、切れ長の瞼をきつく閉じながら、うーん、と唸った。

「どうにかしてくれ。半兵衛も太郎を知らないわけじゃないんだから」

「そうですね。まあ、ひとまず、太郎から事情を聞きましょうか」

おれは小さくガッツポーズ。ククッ。おれには天才軍師という親友がいるんだ。太郎め、シロジロめ、鉢巻きめ、さゆりんめ、ぐうの音も言わせなくしてやる。

困ったときは半兵衛

「お久しぶりです、半兵衛様。長らく顔も見せずにいてしまい申し訳ございません」

太郎の野郎、半兵衛にはきっちり平伏してさ。おれのときと大違いじゃねえか。

「堅苦しい挨拶はよいです。表を上げなさい」

で、表を上げた太郎。太郎をにこにことしながら眺める半兵衛。

「菩提山に一人で来たときが懐かしい。逞しくなりましたね」

「有難うございます。しかし、拙者もまだまだ未熟者です。これからも是非ご指南のほどよろしくお願いします」

「ふむ」

椀を手に取り、お湯をすする半兵衛。

「まあ、もはや、指南をすることなどないでしょう。お主は馬廻衆の中でも名の通った将であるし、簗田家の当主として家政を切り盛りしているそうですからな。拙者など槍働きは愚か、家のことすら見ることのできない無精者ですからね」

おい。何を言っているんだ、この馬鹿は。簗田家の当主はおれだろ。それに説教をするんだろ。何をとち狂っているんだ。

「いえ、拙者はそんな。槍を振り回すことしかできませんし、それに、当主だなんて。父上がおりますから」

ちらりとおれを伺ってくる太郎。当たり前だろうが、このドラ息子！

「あ、そうでしたな。当主は簗田殿でございました。ついつい」

へらへらと笑っている半兵衛。こいつ。なんなんだ。なんか、腹が立ってきたぞ。

「それにしてもまあ、思い出しますね。お主が菩提山に来たときを。あのときは真冬でしたな。返り血を全身に浴びていて。確か、あのときにはもう簗田殿の息子だったか？」

「いえ、小姓でございます」
「ああ、そうか。そうであった。太郎は簗田殿の小姓であったんだ。それが今では簗田家の当主なんですからな。大したものです」
「おいっ」
おれは我慢できずに思わず割って入った。
「おれを馬鹿にしているのか、半兵衛」
「何か気に障ることでも言いましたか」
「言っているだろうが。おれが当主でこいつはただの息子だ。何を言ってんだ、お前は」
「ああ、申し訳ありません。最近、物忘れがひどくて。申し訳ございません。小姓上がりの太郎を当主と間違えてしまいまして。それでは乗っ取られたのと同じようなものですからな」
はっはっはと笑い上げる半兵衛。むう。頭がおかしくなっちゃったのか。
「恐れながら、半兵衛様」
太郎が視線を伏せたままか細い声で言う。
「拙者は別に乗っ取ったつもりなど」
「はて。家政は太郎が見ていると簗田殿から聞いたが。簗田殿の預かり知らぬところで、太郎が仕切っているという話であったが」
「それは確かにそうですが。しかし、それは簗田の家のためを思って」
「太郎」
と、半兵衛は表情も声音も一変させた。厳しい目つきで太郎を見据え、突き刺すような声を投げかける。おれでさえ、ちょっとビビっちゃう。
「簗田の家とやらは、そもそも元からあったものか」
押し黙る太郎。
「簗田殿が裸一貫から興した家ではなかろうか。違うか」
「左様でございます」
「簗田殿が自らの手で切り開いてきた証だ。太郎はそれを傍で見て

きたはずだ。それなのに、なぜ、今、簗田殿をないがしろにされる」
「ないがしろになどしていません」
「それは太郎が一方的に思っていることだ。相手がないがしろにされていると思っていれば、ないがしろにしている。そのようなことでは、お主は家臣はおろか、一兵卒すら従わせることすらできんぞ」
「しかし――」
「しかしではない。勘違いするな。お主は簗田殿がなかったら、ここにいない。お主は自分で己の道を切り開いているかと思っているみたいだが、簗田殿がなければ、その切り開く道すらなかったのだ」
「ま、まあ、その辺でいいんじゃないかな」
不覚にも、厳しく言われすぎている太郎が可哀想になってきちゃって、おれは割って入る。
「太郎も頑張っていることだし。まあ、おれも、まあね、お金のこととかに疎いから、うん。太郎が見てくれるんだったら助かるし。乗っ取っているだなんてね。乗っ取ったってしょうもない家だしさ」
「簗田殿」
と、厳しい視線の矛先がおれに向けられてきちゃう。
「そのように優しくするからいかんのです。簗田殿は常に厳しくない。甘い。将として、長として、甘いのです。すべてが甘いのです。我々は常に命のやり取りの中にいるんですぞ。そこのところ、しかと認識されなされ」
ううっ。
「半兵衛様。父は悪くありません。すべては拙者が驕ったゆえんです。ご勘弁ください」
「いいえ。拙者は許せん。簗田殿も太郎も許せん。もしも、簗田殿が拙者の父だったらその情けなさに家から追い出しておる。もしも、太郎が拙者の息子であったら、その傲慢さに腹を切らせておる。拙者はどちらも許せん」
ちょ、ちょっと。なんで、おれにまでとばっちりが。
「太郎の烏帽子親になった以上、責任を持って、お二人のために夜

通し説教をさせてもらいます」

いざ、風雲急！

十兵衛とキモブタの軍勢は早朝に金ヶ崎を出発した。
おれとサルも調略に行かなくちゃいけないので、朝飯を食ったあとに、城の広間へ。ちなみにおれは太郎と二人、半兵衛に延々と説教を食らわされたおかげでぐったり。太郎も相当こたえたらしく、半兵衛がいなくなったあとも、おれに謝罪してきた。
サルは二日酔いらしい。瀬兵衛にとことん飲まされたんだろう。それで、ちゃっかり、金もむしり取られることになったんだろうな。ざまあ。
広間には軍議さながら、諸将が集まっていて、どうやら、おれとサルを見送ってくれるみたい。
「二人とも、なんだ、その覇気のなさは」
と、サンザに突っ込まれて、そんなことはないとあわてて首を振るサルとおれ。
「サル」
上座で小さい椅子に座っている信長がギロリ。
「酒くせえぞ」
「いにゃっ！　お、おりゃあは元々こういう臭さですぎゃあ」
「貴様あ」
額に血管を浮き上がらせながら腰を上げた信長は、平伏しているサルの頭を踏み潰す。あわわ。サルの額をごりごりと押し付ける。
「ふざけやがって！　陣中で酒を飲むなど、調子に乗りおって！」
「も、申し訳ありませんぎゃあ！」
「貴様はすぐに調子に乗りやがる！　調子に乗るから本圀寺のようなことになるんじゃねえのか、あーっ！」
「申し訳ないですぎゃあ！　申し訳ないですぎゃあ！」
「おやかた様！　軍紀違反で謹慎にしましょう！」
と、言ったのは、やっぱり、ウザノスケ。

「当然だ、このうつけがっ！　即刻、兵を残してお前だけ岐阜に帰れ！」
「あいやあ、しかし――」
「去ね！」
「にゃあ……」
「おやかた様！」
突然、広間に甲冑姿の若者が飛び込んできて、彼に白い目を向ける諸将。赤マントなので、どうやら赤母衣衆っぽいけど、血相を変えてかちゃかちゃと、諸将の前をかまわず横切っていく。
「なんじゃ、お前は！」
「軍議中だぞ！」
「おやかた様、小谷城から早馬です！　お市様からこのような物が！」
諸将の声を無視した若者は、信長の前にひざまずき、運動会の玉入れ競争で使うような布のボールを信長に差し出した。
おれはそれに目を見張った。ついにきた。浅井長政の裏切りだ。
「市からだと」
信長は布のボールを掴み取り、しばらくそれを見つめたあと、わなわなと震え始めた。
「信長様……」
おれが囁くと、信長はボールを床に叩きつけた。
「おのれえっ！　袋の鼠だ！　新九郎めえっ！」
諸将は半ば戸惑い、半ば呆然としている。
「し、しかし！」
と、サンザが唇を噛みしめながらも言う。
「忍びの報せによると、一昨日の時点では北近江に変わりはないと！」
「たわけっ！　ならば市がこのようなものを送りつけてくるかあっ！　その忍びも浅井の者だったんだろうがっ！　計られたわっ！」
「し、しかし、おやかた様」

ウザノスケが声を震わせながら言う。
「あ、浅井様が本当に裏切るでしょうか。市様が嫁がれておるのですぞ」
信長がぎゅうっと拳を握り締める。で、なぜか、近くにいたおれが殴られた。吹っ飛ばされて、おれは半べそ。
「それが本当であれば、危険です」
と、マリオ。
「敦賀にいる我らは北近江からの浅井と一乗谷との朝倉に挟まれてしまい、たとえ軍勢の多さで優位に立とうとも、壊滅させられてしまいます」
「んなことは、わかっているわっ！　退却だ！」
「だったら、信長様！」
半べそのおれは、頬の痛みをこらえながらも言った。
「あっしにしんがりを務めさせてくださいっ」
「なんだと？」
フヒヒ。キタね。大手柄を上げるときがキタよ。ほっぺたが痛いけど、三段撃ちが火を吹くときがキタよ。
「お前がしんがりだと？」
「何を言っているんだ、牛！」
マタザが立ち上がる。
「お前、死ぬぞ！」
「お、おりゃあにもしんがりを務めさせてくだされ！」
こちらも涙目のサル。そうだよ。お前がしんがりをやれば、生き残れるんだよ。サルがしんがりを名乗り出たっていうのは有名だからな。フヒヒ。
「今日の醜態、これで帳消しにしてくだされぎゃあ！」
「拙者も残ります！」
立ち上がったのは池田筑後守。え？　なんで？
「簗田殿には恩がございます。拙者も簗田殿とともに、上総介殿のしんがりを務めさせてくだされ」

三人を交互に睨みつけて行く信長。
「わかった。しかし、俺は単騎で京に向かう。全軍にはしばらく伝えるな。大勢での退却は目立つ。又左、内蔵助、弾正、お主らが供をしろ。五郎左と三左は俺が出立してからしばらくのち、全軍の退却を開始しろ。それと、牛。お前の息子も連れて行くからな。馬廻衆の中から五六人、支度をさせろと伝えろ」
「太郎ですか？」
「早くしろっ！」
おれはあわてて広間を出て行く。太郎に警護の人間を選ばせるってことなのかな。太郎ってそんなに偉いのかな。

なぜか、今生の別れ

全軍には伝えるなと言っていたので、おれは太郎を人の気配のないところにこっそりと呼び出す。

「どうしたんですか、血相を変えて」

「浅井長政が裏切った。信長様は今から密かに退却するから、お前は馬廻衆の中から六人ぐらい連れて来て、信長様と一緒に京に逃げろ」

「えっ！　ほ、本気で言っているんですかっ！」

「しいっ。静かにしろ。味方にも知られないうちに、信長様は退却するんだ。あんまり騒ぎ立てるな」

「まさか。本当にですか。信じられませぬ……」

「信じるか信じないかは支度を整えてからにしろ」

「しかし、勝ちいくさであったのに」

太郎は唇を無念そうに押し込め、拳をぎゅうっと握る。

「そんなものはない。負けいくさだ。忘れろ」

「かしこまりました」

そう頷くと、太郎は眼差しを確かにさせて、おれをキリッと見つめてくる。

「それで、父上はどうされるんですか。父上はいつ退くのですか」

「おれはしんがりだ」

「え……」

「しんがりだ」

「そんなっ！　おやかた様が父上をしんがりにするはずが！」

「自分から名乗り出たんだ。いっつもお前らに馬鹿にされているから、おれも出来るってことを見せてやりたいからな」

「何を言っているんですかっ！　何を馬鹿なことを言っているんですかっ！　死んでしまったら何もかもおしまいじゃないですかっ！」

「おれだけじゃない。藤吉郎殿も二日酔いだから自ら名乗り出た。

池田筑後守もおれに恩があるからとか言って名乗り出た。いいか、太郎。おれと藤吉郎殿はずっと一緒にやってきた。池田筑後守は一度捨てた命をおれに拾われて、ここでおれと共に捨てるつもりだ」

太郎は何も言わずにただじっとおれを見つめてくる。

「いくさ人っていうのは、そういうものだ」

「本気で言っているのですか――」

太郎は首を振りながら、目に涙を滲ませる。

「本気でそんなことを。昨日の今日で、どうして、こんなことに。拙者は心を入れ替えて父上と喧嘩もせず、仲良く、自分を律しながらやって行こうと思ったのに。どうして、そんな無茶を。まさか、半兵衛様に言われたから名乗り出るなんてことをしたのですか。そんなの父上らしくないじゃないですか！　格好つけないでください！」

「格好つけてナンボだろ」

首を振る太郎。瞼をこする太郎。

「拙者が父上をないがしろにしたから、そんなことをするのですか。そうしたら、拙者は母上や岐阜の皆に何と報告すればよいかわかりません。太郎が見殺しにしたなど、言えません。今からでも遅くはありません。おやかた様に無かったことにするよう言ってきてください！」

「男に二言はない！　お前もさっさと支度しろ！」

「そんな……」

鼻を啜る太郎。

むう。なんか、おれも泣けてきた。別に死ぬ気ないのに。でも、皆、揃いも揃って、死ぬ死ぬ言うよな。だよな。サルが生き残っても、おれが生き残れるっていう保証はないもんな。

でも、おれには鉄砲隊があるし。

「かしこまりました。ただ、父上、死んだら母上が怒りますぞ」

「わかっている。もういい。信長様に怒られるから、さっさと支度しろ」

「父上、絶対に死なないでください。何があっても戻ってきてください。このまま別れては、悔やんでも悔やみきれません」
「お前の心配をしろ。信長様の心配をしろ。だから、お前は駄目なんだ」
太郎は力無く笑うと、馬廻衆の持ち場へと駆けていった。
一人たたずむおれは、しばし考えてしまう。そんなにやばいのかなって。太郎の素振りはまさに今生の別れみたいな感じだったけどさ。うーん。やっぱり、やめておけばよかったかな。でも、今さら、発言撤回なんてできるわけないし。
広間に戻ると、信長の姿はすでになかった。マタザやウザノスケ、松永弾正もいない。
「思い切ったことをしおったな、牛殿」
サンザが声をかけてくる。
「おやかた様に忠告したにも関わらずこのようになったというのに、自らしんがりを務め、死地に行くとは尾張武者の誉れとしか言いようがない」
なんか、広間には悲愴感たっぷりなんですけど。どいつもこいつもどんよりとしちゃっているんですけど。
「サル、お前もじゃ。いくら失態をおかしたとはいえな。筑後守殿も。わしはお主らのことを生涯忘れん。お主らのためにも天下布武、成し遂げてみせる」
「拙者も同じ気持ちでございます」
マリオが腰を上げ、池田筑後守に一礼すると、今度はおれとサルに向かって頭を下げてくる。
「あのとき、名乗り出られなかった己が情けない。しかし、今後必ずや、命を賭して戦うゆえ、許してくだされ」
うっうっ、と、嗚咽を漏らす声が諸将から聞こえてくる。ちょっと待って。どうして。どうしてこんな、お通夜ムードなの。
「勘弁してくだされだぎゃあ」
サルは腰を上げると、おれの頭をぺしぺし叩きながら、にゃっは

っはと笑い上げた。
「しんがりはいくさの華だぎゃあ。それに、おりゃあと牛殿が組めば天下無双。朝倉浅井などはさんざんに打ち破って、皆様を悠々と京に届けてやりますぎゃあ」
「拙者も同じでございます」
筑後守が立ち上がる。
「天下布武を見ずして、どうして死ねましょう。むしろ、京に戻ったときの論功行賞が楽しみだと上総介殿に伝えておいてくだされ」
笑い上げる諸将。おれはなんだか笑えない。連中の言っていることが冗談とも本気とも取れなくて、しんがり役っていうものの危険性をじわじわと感じさせられていく。
「まあ、いつまでも感慨に耽っているわけにもいくまい。サル、牛殿、筑後守殿、金ヶ崎城の守将はそなたらじゃ。前線には明智殿と三河殿が向かってしまっておる。どうにかせねばなるまい。そなたたちで、このいくさの道筋を決めい」
「にゃあ。それなら、筑後守殿が格から言って大将だぎゃ。筑後守殿、如何しましょうきゃあ」
「それならば、しんがり役は各々与力を集め、軍議を始めよう。明智殿と三河殿には申し訳ないが、木ノ芽峠で時間を稼いでもらうしかあるまい」

チームしんがり

諸将の中でサンザだけが残り、広間には池田筑後守勝正とサルの与力たちがぞろぞろと集まってきて軍議開始。ちなみにおれはというと、大島のおっさんとさゆりんのみ。

「浅井長政が我らを裏切った」

一言目、上座の筑後守が発すると、召集されて何事かと戸惑っていた連中の顔が一気に緊迫していった。

まあ、一気に蒼白したやつもいるけど。荒木信濃守村重ってやつだけど。

「言わなくてもわかるとは思うが、ここにいる者たちはしんがり役だ」

膝に置いていた手でぎゅうっと握ったのはイエモン。

……。

なんで、あいつが。

「昨日、上総介殿に報告した忍びによると、一昨日まで浅井の小谷城に変化はなかったということだが、つい先ほど、浅井長政に嫁いでおられる上総介殿の妹君から、両端を紐で結ばれた小豆が届けられた。つまり、忍びの者は浅井の間者であったわけだ」

「袋の鼠ということですな」

半兵衛がにやにやと笑っている。ううっ。こんなときにいくさ狂い突入ですか。昨日、あれだけこんこんと説教を垂らしたっていうのに、この変貌ぶり。本当の戦争マニアだ。

「森様。北近江から敦賀まで、早馬はどのくらいで到着するのでしょう」

「一日、もしくは二日であろう」

「二日で到着したというのであれば、二日前、早くて三日前には小谷城から出陣しているでしょうね」

と、小一郎。ちなみにサルはというと瞼をどんより重くさせ、口

をだらしなく開けている。二日酔いがこたえているらしい。
「三日前に出陣したとあれば、目と鼻の先まで来ている」
あの熊みたいな奴は蜂須賀小六か。サルの与力か。
「いえ、違いますね」
と、笑っている半兵衛。
「おそらく、小谷城からの出陣は一昨日でしょう。三日前に出陣したら、浅井勢は到着しております。なにせ、浅井新九郎はおやかた様のいくさを目の当たりにしておられる。あの若者は速攻を心がけているに違いないです」
「それならば半兵衛」
と、サンザ。
「いつ、敦賀に到着する」
「今日の日暮れでしょうな」
「日暮れとなると、全軍を退かせるまで、朝倉勢を瀬戸際まで引きつけておくということか。しかし、しんがりのお主らの退却が一歩遅くなれば、挟みうちに合い、壊滅となるであろう」
「無論、我らは決死隊であります。生き残ろうとは毛頭考えておりません」
い、池田筑後守がとんでもないことを。お前さあ、命の恩人のおれぐらいは生き残らせろよ。
村重だってがくがくぶるぶる震えちゃっているしさあ。勘弁してよ。
「とにかく、今は十兵衛様と三河守様に伝令を送るのが先決」
「左様。瀬兵衛。木ノ芽峠に伝令を送るよう手配せい」
「かしこまりました」
腰を上げ、広間を飛び出ていく瀬兵衛。さすがのゼニゲバも悲痛な面持ち。だって、筑後守が勝手に決めちゃったんだもんな。こいつらにとっちゃ、とばっちりもいいところだよ。
「さて、日暮れまでは朝倉勢を引きつけることになった。しかし、無策で挑むわけにもいくまい。むしろ、一泡吹かせてやろうではな

いか」
「恐れながら！」
うっ。さゆりん。今まで黙っていたのに、何を言うつもりだ。
「我ら沓掛勢には百五十の火縄銃がございます。進軍してくる朝倉勢にはこれを浴びせたいと思いますゆえ、沓掛勢を麓の最前に配置してくだされ」
おい……。ちょっと待て。
「何を言っているんだ、お前は！」
おれの代わりに怒鳴りつけてくれたのは蜂須賀クマ男。
「朝倉は一万の軍勢だと言うぞ。百五十の火縄銃で何ができる。むやみに兵を殺してどうするつもりだ」
「恐れながら、我らには弾が尽きるまで、四六時中射撃する戦法がございます」
「そのようなことができるものか！」
「待ってくだされ、蜂須賀殿」
クマ男を制すると、さゆりんに向けてにやりと笑った半兵衛。眼差しはすでにダークサイド。
「築田殿が百五十もの火縄銃を調達するなど、どおりでおかしいと思ったわ。お主、その戦法とやらはなんだ」
さゆりんは三段撃ちを説明する。実戦で試したことは一度もないし、実際に火縄銃を使っての訓練は一度きりだが、問題ない。一万の兵を壊滅させるのは無理だけど、怯ませるぐらいなら可能だと言う。
「ならば」
と、半兵衛は腰を上げ、城郭の全体図の前に立った。
「登山口の一ノ木戸を過ぎた上り坂の右側の木陰に木下勢の鉄砲衆を潜ませよう。ふう。同じように二ノ木戸の通過先の左側には池田勢の鉄砲衆。これで小々の被害を与えられよう。そう。しかし。しかしだな」
全体図に向けて瞳の中をてらてらと燃やす半兵衛。ううん。始まっ

た。
「そうして、そうしてだ！　二ノ木戸の坂を登った先は、米蔵がある。そう、ここはだ、広くなっておる。ここに沓掛勢百五十。ここに百五十だぞ、殿っ！」
「にゃあっ？」
サルがどんよりした顔を持ち上げる。まったく軍議に参加していないサルに、小一郎がしかめっ面。
「ここに早急に柵を作れ！　殿っ！　米蔵の前に今すぐに柵を立てるんだ！　墨俣城を立てたお主ならできるだろうが！」
半兵衛をあまり知らない池田勢はぽかんとしている。
「にゃ、にゃあ。こ、小一郎、柵だぎゃ。今すぐに柵を作るんだぎゃあ」
「早く！　小一郎！　早く！」
「は、はいっ」
「ふふ。たった百五十とはいえ、朝倉勢は狭い山道を駆け上がってくる。一万の軍勢が翼になって展開しているわけではない。ふふ。見える。沓掛勢の射撃に倒れて行く朝倉勢が見える。ふふ。そうして怯んだところを押し返すのだ。ふふ」
「わ、我ら池田勢はどうする」
「池田勢は手筒山に潜んでおれ。もしも、朝倉が手筒山に来たら、これを死守し、金ヶ崎に押し返す好機が来たら、これに合流し退却。もしも、来なかった場合、木下勢、沓掛勢が金ヶ崎から退くところを、朝倉勢は追撃にかかる。これを横から攻撃し、混乱に陥れろ」
「わ、わかった。しかし、そんなにうまくいくか」
「うまくいくと信じなければ、勝利はないっつ！」
半兵衛の咆哮に圧倒された池田筑後守。そうして、半兵衛は高らかに笑い上げる。
「負けいくさは、なんとも、ぞくぞくするわ！」
はっはっはと笑いながら、一人、広間を出て行った半兵衛。皆、無言。

不屈の将と大出世者

拝啓

あっしは死ぬかもしれません。

ずっと死にたくはなかったんですが。

さようなら。

大郎によろしくお伝えください。

好きな人と幸せにしてあげてください。

きっと、あっしも見ております。

敬具　簗田牛太郎政綱

沓掛勢が配置されるという米蔵のある場所は、確かにちょっと広くなっていて、そこに金ヶ崎城と手筒山城にあったりったけの資材で急遽柵を建設していく木下勢と沓掛勢。

鉄砲隊はさゆりんの教えのもと、何度も三段撃ちの手順確認。

「ある程度、敵が怯んだら、両側の柵の門を開けて足軽が突撃だ！その間は射撃してはならんからな！」

半兵衛が鉄砲隊に口出し。

「足軽隊はある程度攻めたら、合図とともに柵の中に戻れ。そうしたら、沓掛勢は再び射撃だ。それの繰り返しだ。いいな！」

こくりと頷く沓掛勢。相変わらずおれには何も話しかけてくれないけどね。

ていうか、こいつら、なんで甲冑を着ているんだ。沼地に捨てたはずだろ。

「退却していった本隊の者たちが甲冑を渡していったそうですよ」

小一郎に言われて納得。いや、納得できない。おれの甲冑はどこにあんだよ。

「旦那のならあるぞ」

ねじり鉢巻きは綱を渡してきた。

太陽の光が燦々と降り注いでくる。そうだな。甲冑だと暑いもんな。おれって汗っかきだもんな。

ウウッ（´；ω；`）

サルは日陰に座って、扇子で顔をぱたぱたとあおいでいる。あの野郎。二日酔いだからって、やる気ゼロじゃねえか。どう見ても、死ぬ覚悟が出来た奴だと思えねえ。

「藤吉郎殿」

見兼ねて歩み寄って行くおれ。

「やる気ないじゃないッスか。なんなんですか。金ヶ崎山は藤吉郎殿が大将なんだからちゃんとやってくださいよ」

「牛殿に言われたくにゃあだぎゃあ」

サルは扇子をぱたぱた。聞く耳持たず。

「だいたい、おりゃあがぶつくさ言ったところで、どうにもならにゃあ。いくさが始まるまでは何もしにゃあで、牛殿もゆっくりしているだぎゃあ。半兵衛に任せておけばなんとかなるだぎゃあ」

ま、それもそうだな。おれも暑いから日陰にいよ。半兵衛も言っていたしな。大将は何もしないで腰を下ろしておけばいいって。

で、サルの隣の小さい椅子に座るおれ。

「それにゃしても、ここを生き延びたところでにゃあ、これから織田は大変だぎゃあにゃあ」

「そうですね」

「公方も裏で動いているっていう話だぎゃあ」
「そうですね」
「武田信玄も動き出すんじゃなきゃろうか。そんにゃら、ここで討ち死にしたほうが楽かもにゃあ」
「どうしたんですか。藤吉郎殿らしくない」
「いんにゃ、おりゃあはここまでよくやってきただぎゃ。おみゃあもそうだぎゃ。野良猿と野良牛、よくやってきたと思わんきゃあ？」
「あっしは菩提山での約束を忘れてはいないッスよ」
「約束？」
「藤吉郎殿が天下を取ったら、天下の半分を貰うっていう約束ですよ」
「にゃっはっは。そうだったぎゃあ。牛殿に半分、半兵衛に半分くれてやって、おりゃあは明国を攻め取るんだったぎゃあ」
「だから、ここで死ぬわけにはいきませんよ」
「おみゃあ、しばらく会っていなかったうちに、ずいぶんと言うようになっただぎゃあにゃあ」
「あっしだっていろいろとありましたから」
「にゃあ。そうだったにゃあ。それでも、おみゃあは死ななかったにゃあ」
「藤吉郎殿もじゃないですか」
「そうだぎゃ。おりゃあもおみゃあも死なないだぎゃあ。そうだぎゃあにゃ。おりゃあとおみゃあが組めば天下無双だぎゃあにゃ」
すると、すっくと腰を上げたサル。扇子をパチンと留め、なぜか米蔵を登り始める。
「兄さん！　伝令ですぞ！」
「にゃんだぎゃあ！」
と、米蔵を登りながら答えるサル。
「明智様、三河守様の軍勢が朝倉勢と交戦しつつ退却を開始しました！」
「そうきゃそうきゃ」

米蔵の屋根に立ち、軍勢を見下ろす。陣羽織の金色の襟元が日差しを受けて、きらきらと輝いている。

「おみゃあらっ！　手を休めるんだぎゃあ！　よく聞くんだぎゃあっ！」

山中に突き抜けんばかりの大声を上げたサルに、手を止めて、注目する将兵たち。

「今、先鋒隊が退却を始めたぎゃあっ！　もう間もなく朝倉勢はここに来るだぎゃあ！　だぎゃあにゃ、百戦練磨の織田勢は、雪の中に閉じこもっていた朝倉勢とは訳が違うだぎゃ！　そうだぎゃあにゃあっ？」

そうだ、と、言わんばかりに歓声を上げる将兵たち。サルの大将っぷりにおれも思わず熱くなって拳を握り締めてしまう。

「おみゃあら、見てみろ！　ここには南美濃で行方不明になっても生き残り、摂津池田では牢獄から生還してきた不屈の将、簗田牛太郎がおるでにゃあか！」

え、おれ？　不屈の将？　サル……。いい響きじゃん＾＾

「それにこの大出世者の木下藤吉郎だぎゃあっ！　おみゃあら、このいくさは負けいくさじゃにゃあっ！　不屈のいくさにて、大手柄取りのいくさだぎゃあっ！」

サルの演説に沸き上がった将兵たち。興奮が金ヶ崎山を包んでいる。やばい。これはやばい。めちゃくちゃ震えてくる。

やっぱり、サルは秀吉だ。

決死線を越えろ！（1）

「兄さん、そんなところにいると撃たれますよっ！　降りてきてください！」

「馬鹿者ぎゃ！　おりゃあは死なにゃあ！　何があっても死なにゃあ！　おりゃあが死ぬときは、おみゃあらが全員死んだときだぎゃあ！　わかったきゃあ！」

二日酔いもどこへやら、扇子でぱたぱたと顔を仰ぎながら、じっとそのときを待つサル。

柵は急ごしらえで見た目も悪いけど、敵が来るまでには一通り完成。五十人ずつ、三列に並び、火縄銃を構える沓掛勢鉄砲隊。鉄砲隊を守るように大島のおっさんが率いる弓衆や足軽隊。沓掛勢の両脇には木下勢が槍や刀を握りしめている。

だんだんと、銃声や武者押しの声が聞こえてくる。十兵衛とキモブタ家康が必死に戦っているに違いない。

金ヶ崎城は皆が息をひそめてしんとしている。半兵衛ですら、瞼の中をダークサイドにしたまま黙り込んでいる。

「しんがりを名乗り出るとは思いもしませんでしたよ」

太刀を抜いたままのさゆりんがようやく声をかけてきた。

「何があったか知りませんが、殿にしては見上げたものです」

「フン。このときのために火縄銃をこしらえたんだ。ここでやらなくていつやるんだ」

「まあ、おかげで死地に付き合わされる羽目になりましたけど」

「それは申し訳ない」

「らしくないやんか。覚悟を決めたんか？」

さゆりんが突然素に戻ったので、周囲の沓掛勢がふいと視線を向けてくる。しかし、すぐに早之介に戻るさゆりん。

「我らは死ぬとは思っていませんよ、殿。沓掛勢の名を天下に轟かす最高の日です」

「当然だ、馬鹿が」
銃声、怒号がすぐ近くまでやって来る。
「伝令！　伝令伝令！」
木下勢の旗指し物を背負った雑兵がやって来て、一瞬、銃身を構えたが、
「やめろっ！　合図があるまで撃つな！」
という半兵衛の声に、銃身を下ろす鉄砲隊。
「伝令です！　明智様、三河守様は金ヶ崎山を登って来ております！」
「なんだとお」
「それでは策が決行できぬではないか！　味方まで撃ってしまうことになるぞ！」
「なぜ、先鋒隊はそのまま退却せんのだ。我らがしんがりを務めると知らせていないのか！」
「そんなはずはない！　先鋒隊は我らに加勢するつもりなのじゃ！」
「半兵衛殿！」
将兵たちがざわつく中、唇を噛み締める半兵衛。
「柵門を開けるだぎゃあ！　先鋒隊を柵の中に引き入れるだぎゃあ！　木下勢はすぐに山道の林の中に潜み、朝倉勢が来たら足止めするぎゃあ！　ちゃんと、旗指し物を確認するんだぎゃあにゃあっ！　先鋒隊が柵の中に入ったのを確かめたら、半兵衛、合図を送るんだぎゃあ！　木下勢は林の中に飛び込め！」
サルのよもやの作戦指揮に一気にあわただしくなる。木下勢は決死隊を選び、百人ほどの猛者たちが山道の林の中に潜み込む。あいつらは本当に決死隊だ。一万人が駆け上がって来るところをあの狭い山道で踏みとどまるんだ。相手を倒しても倒しても、敵はうじゃうじゃと駆け上がって来るんだ。誰かが倒されたら、また林の中から誰かが止めに入る。そいつらが倒されたら、また止めに入る。体を張って止めるとはまさにこのことじゃねえかよ。
この時代の奴らっていうのは、自分のこととしか考えていない奴ら

ばっかりだと思っていたけど、命を捨ててまで勝利を手にするような奴らなんているとは思ってもいなかったけど、腹黒ばっかりのはずなんだけど。

おれは震えた。やっぱり戦争は戦争だ。死ぬ奴は絶対にいるんだ。そして、死ぬってわかっていても、戦争をするんだ、こいつらは。

「イエモン！」

おれは柵にへばりつくと思わず声を上げた。決死隊の中にあの馬鹿野郎がいる。あいつ、弱いくせに何を考えていやがんだ。

イエモンはおれの声を探した。そうして、おれを見つけると、頭をぺこりと下げ、林の中に入っていってしまった。

あの馬鹿、与力じゃねえのかよ。なんで、決死隊なんかに。チヨタンはどうするつもりなんだよ。

「殿っ！　下がってくだされ！」

さゆりんに柵から引き剥がされるおれ。ううっ。どうせならおれの手で殺してやったのによ！

「来たぎゃあ！　おみゃあらっ、まばたきするでにゃあぞっ！　味方と間違えるでにゃあぞっ！」

一人、兵卒が入って来たかと思うと、出口から軍勢がどっと湧いて出てきた。その中にはキモブタの姿が。将兵の中には血みどろの奴もいるし、兜の飾りが折れている奴もいる。

「先鋒隊は柵の中に入るだぎゃあっ！　入るだぎゃあっ！」

「こっちだっ！　こっちに入れっ！」

濁流が噴き出したかのように一気に軍勢で埋まり、半鐘を叩く音や、しんがり軍の咆哮が響き渡る。

「落ち着けいっ！　冷静さを保ていっ！　沓掛勢は目標だけを待ていっ！」

半兵衛が優男らしからぬ大声。いくさ狂いとかのレベルじゃなく、緊迫感が切れ長の瞼に溢れ出ている。

「焦るな！　我らは勝てるぞ！　焦るな！」

さゆりんが息遣いの荒い鉄砲隊をなだめる。そこに女の面影はな

し。
　おれは黙る。ただただ喧騒の中にじっと黙る。胸が破裂しそうで、吐き気をもよおす緊張感。でも、おれはただじっと黙る。おれはこの日のために奔走してきたんだ。あとはさゆりんやこいつらを信じるだけだ。
「三河殿！　なにゆえ、戻ってこられたぎゃあっ！」
　柵の中にぶっ倒れながら入りこんできたキモブタ家康は、ぼろぼろの三河勢に囲まれて倒れ込んだまま、笑い上げた。
「放っておけませんでな！」
「にゃっはっは！　おりゃあも放っておけにゃくて、しんがりだぎゃあ！」
　こいつら、こんなヤバい展開だっていうのに、冗談飛ばし合ってやがる。
　そうだな。秀吉と家康だもんな。歴史に名を残す二人だもんな。
「三河様！　十兵衛様はいずこへ！」
「明智殿なら最前線！　引きつ攻めつの繰り返し！　銃に槍にとあっぱれな武者振りですぞ！　いずれ、あの方もここに来られましょう！」
「にゃっはっはっ！　おみゃあら、聞いたかっ！　明智十兵衛に徳川三河守だぎゃあっ！　この大手柄のいくさ、勝ったも同然だぎゃあっ！」
　喧騒をかき消さんばかりのサルの大声に、口許を緩める将兵たち。おれも口の中が乾ききった緊張の中、ふと思ってしまう。秀吉に家康、光秀までもがいるこの場って、本当にすごい場所だって。

決死線を越えろ！（2）

先鋒隊がぞくぞくと柵の中に入って来る中、十兵衛の姿があった。
「明智殿っ！」
柵に入った途端にぶっ倒れそうになった十兵衛を小一郎と蜂須賀クマ男が抱え上げる。
サルが米蔵からひょいってジャンプしてきて降りてきた。着地のときに、一度、素っ転んだけれど、すぐさま起き上がって、十兵衛の手を取り、腕をぶんぶんと振る。
「明智殿、ようやったぎゃ。あとはおりゃあらに任せるだぎゃ」
「まだまだ。拙者は朽ち果てるまで戦えますぞ」
すげえ。すげえよ、こいつら。おれはマジで感動のあまり涙が出そう。おれだけじゃない。ぼろぼろの十兵衛の姿に、他の連中も唇を噛み締めている。
「来たぞ！　木下勢、前へっ！」
半兵衛の声に柵の中から木下勢の足軽兵が飛び出して行った。林の中からは銃声が飛んできた。花が三つ並んだ朝倉の家紋の旗指し物が見え隠れする。黄色い織田の旗指し物が翻る。おれの場所からは木下勢の後姿がごちゃごちゃあるだけで、攻防が見えない。ただ、咆哮とか、悲鳴とかがさんざん飛び交っているのだけはわかる。
「落ち着け。落ち着くんだ。訓練通りやれば、何も問題はない」
さゆりんが鉄砲隊と柵の間を歩き回りながら、血気はやりそうな鉄砲隊をなだめていく。その向こうでは槍や太刀を手に取った兵たちが次々と突っ込んでいく。
「押せえっ！　押せえっ！」
「怯むな！　前へ行け！　功名を上げろっ！」
「拙者も行きます」
太刀を鞘から抜き、血走った目で柵の外へと出て行こうとする十兵衛をサルが止める。

「待つだぎゃあ。策があるだぎゃあ。まだ、待つんだぎゃあ」
「策ですと？」
三列に並んで沈黙する鉄砲隊を見つめる十兵衛。そして、おれに視線を向けてくる。
「おもしろい。お手並み拝見と行きましょう」
にやりと笑った十兵衛。おれはごくりと固唾を飲み込む。
「それでは、拙者どもは一休みですな」
どっこいしょと言って、その場にあぐらをかいて座り込むキモブタ家康。むう。兜まで脱いじゃって、汗を吹いていやがる。
「平八郎。時が来たら、任せたぞ」
「かしこまりました」
槍を握りながら、キモブタの背後に仁王立ちするのはファイヤー兜以下三河勢。退却戦をしてきたっていうのに目の色はいまだ前方をしっかりと見据えている。
「引けい！　引けえ！」
半兵衛の声とともに法螺貝が鳴った。踵を返して、柵の中へぞくぞくと戻ってくる木下勢。
「鉄砲隊、準備しろ！」
「一列目点火！」
さゆりんの声が飛ぶと、鉄砲隊は一斉に火縄に火種を点した。
「構え！」
「まだだ！」
「わかってるわ！」
すると、木下勢すべてが柵の中に戻り、柵の向こうには折れた旗や死体が転がっているだけの状態になった。朝倉勢で先頭を切ってきた奴らは木下勢と決死隊に挟まれて皆殺しにあったらしい。
でも、すぐに新手が駆け上がってきた。
「まだだ。まだだぞ。引きつけるぞ」
朝倉勢が登山口から湧き出てき、柵に向かって突進してくる中、さゆりんの沈着な声に、細い煙を揺らしながらじっとそのときを待

つ鉄砲隊。ほんの短い時間。でも、おれにはとてつもなく長かった。おれは足も震えていたし、声もまったく出なかった。

「撃てえっ！」

さゆりんが太刀の刃先を柵の向こう目掛けて振り下ろすと、五十丁の火縄銃が一斉に火を吹いた。物凄い音があられのように轟いた。突っ込んできていた朝倉勢は一気に吹っ飛んだ。

「二列目、前へ構え！　三列目、点火！」

一列目の五十人がすぐさま後ろに回り、まるで器械体操でもやっているかのような意気の合った動きで、一列目の全員が棒を銃身の中に突っ込む。

「撃てえっ！」

二列目が一斉に銃弾を放った。これも押し返されるように吹っ飛んだ。一列目に撃たれて生き残っている連中が呻いている上に吹っ飛び倒れ、更に、三列目が轟音を鳴らした。駆け上がって来ても、駆け上がって来ても、朝倉勢は鉄砲隊に跳ね返される。

中には銃弾を潜り抜けて柵まで到達し、這い上がろうとしてきた兵もいた。しかし、鉄砲隊の間に潜んでいた足軽兵の槍に突かれていく。大島のおっさんの弓矢で射抜かれていく。

さゆりんの掛け声は止まらない。鉄砲隊の規則正しい動きは一分の狂いもなく整然と繰り返されていく。

銃身が熱くなりすぎて、桶の水に突っ込んで銃を冷ましたり、銃が壊れてしまったりする脱落者ももちろんいたが、それを差し引いても、朝倉勢は柵のこちら側まで到達できない。

将兵たちはいくさをするのも忘れたかのように、沓掛勢の攻撃ぶりを見つめている。サルも、キモブタも、十兵衛も言葉を失っている。

「ぼうっとするなあっ！」

銃声が鳴り響く中、半兵衛が大声を上げた。

「敵が怯み次第、足軽は突撃だ！」

おれは両の拳を握った。ぎゅうっと目を瞑って、心の中で叫んだ。

さゆりん、よくやった。

決死線を越えろ！（3）

「木下勢、前へ！」
「撃ち方やめいっ！」
柵門が開かれる。硝煙がもくもくと上がる中を足軽兵たちが突っ込んでいく。
「すごい」
抜き身の太刀をだらりと下ろしたまま十兵衛が呟いた。
「簗田殿、このために火縄銃を調達したというのか」
そうだ、と、言おうとしたのだけれど、おれは喉がからからで声が出なく、ただこくっと頷いた。なにしろ、おれだって圧倒されてしまっている。
柵の向こうでは鍔迫り合いの音、断末魔の叫び、武者押しの声が飛び交っている。木下勢の足軽たちが勢いを得ている。
「一歩も退くなあっ！　このいくさ、勝てるぞ！」
鉄砲隊は次の射撃のために、銃身を水に冷やしたり、弾を込めたりしている。
「気を緩めるな！　相手方は蟻のごとく湧いてくるぞ！」
さゆりんが鉄砲隊の中を歩き回りながら声をかけ続ける。
「もちろん、この戦法もそうだが、鉄砲隊の一糸乱れぬ動きがなければ成せぬ技。簗田殿、ずいぶんと訓練されましたな」
十兵衛が口許を緩めた。
「これは是が非でも生き残るしかありませんな」
キモブタが腰を上げ、再び兜を被りながら言う。
「火力が物を言う時代になった暁でしょう。ならば、生き残って、このあらましを上総介殿に伝えなければなりますまい。のう、木下殿」
「そうだぎゃあにゃあ。やっぱり、おりゃあと牛殿は天下無双だぎゃあ。にゃっはっは！」

「鉄砲隊、準備しろっ！」
「各々、隊列を組め！」
さゆりんの声に元の三列に並ぶ鉄砲隊。やがて、半兵衛の合図で法螺貝がなり、柵の中に引き返してくる足軽兵。攻防が一旦無くなった柵の向こうにはおびただしい数の死体で埋め尽くされている。
「点火っ！」
朝倉勢が懲りることなく突っ込んでくる。
「撃ていっ！」
ぎっしりと並んだ銃口が火を吹き、二列目の新しい銃口が並ぶ。
「撃ていっ！」
朝倉勢は岸壁に打ちつける波のように跳ね返されていく。死体が次から次へと増えていき、息絶えない者も手を宙にさ迷わせてもがき苦しむ。柵の向こう側はさながら、地獄絵図だった。
でも、それを見つめているおれに感傷はなかった。勝ちたい、生き残りたいという思いだけだった。だから、ばたばたと倒れていく朝倉勢が人間に見えなかった。シューティングゲームを見ているような感覚だった。でも、生きるか死ぬかの瀬戸際だから、ゲームに必死だった。倒れろ。もっと倒れろ。早く倒れろ。
「し、退けえっ！　態勢を整えるんだっ！」
朝倉勢の中から声が上がった。朝倉勢の兵たちが足踏みしながらも、登山口の中へと引き返して行く。
「半兵衛！」
「全軍突撃！　このまま一気に山を駆け下りろ！」
柵の門が開き、木下勢が咆哮を上げながら津波のように走り出した。
「小一郎っ、手筒山に伝令を放て！」
半兵衛はそう言うと、馬に跨り、刀を抜いた。刃先を空に向けて高く上げる。
「我に続け！　京まで一気に走り抜けるぞ！」
「平八郎っ！　半兵衛殿に遅れを取るなっ！」

「皆の者、続け！　三河武者の槍さばき、とくと見せつけろ！」
うおーっと歓声が上がり、三河勢は柵をよじ登ってまで突進を始めた。
「旦那っ！」
ねじり鉢巻きがクリツナを引き連れてどこからかやって来た。大島のおっさんもおれに駆け寄ってくる。
「築田殿っ、我らも続きますぞ！」
「藤吉郎殿、十兵衛殿」
おれは二人に振り返った。サルも十兵衛も柵から将兵が飛び出して行く様子をただ眺めているだけだった。
「おみゃあらが全員出て行ったら、おりゃあも退くだぎゃあ。明智殿、沓掛勢は牛殿だけだと、頼りないだぎゃあ。援護してやってくれんかにゃあ」
「何を。拙者が最後まで残ります」
「いんにゃ。明智殿には従ってもらうだぎゃ。金ヶ崎の守将はおりゃあだぎゃ」
十兵衛は笑った。こいつには珍しく、声を上げて笑った。
「かぶき者だなあ、木下殿」
「いんにゃ、大出世者だぎゃ。これは大出世者の大手柄取りだぎゃ」
扇子を広げ、澄ました顔でぱたぱたと仰ぐサル。そんなサルを見て、皆が皆、笑った。
木下勢が用意してきた馬に跨る十兵衛。
「木下殿、死ぬな」
「明智殿こそ」
「築田殿、ご一緒させていただきましょう。沓掛勢よ、我に続け！京までの道、この明智十兵衛が切り開いてくれるわ！」
十兵衛の名乗りに沸き立った沓掛勢。おれもねじり鉢巻きの手を借りて、クリツナに跨る。
進み始めた十兵衛の後ろに続き、登山道を駆け下りて行った。

決死線を越えろ！（4）

将兵でごった返す山道を下りていき、金ヶ崎山を下山して、麓に出ると、木下勢三河勢と朝倉勢の交戦が行われていた。

「沓掛勢はこのまま突っ切るぞ！」

十兵衛の声に従って、戦っている連中を尻目にして沓掛勢は駆け抜けて行く。

「止まれえっ！」

しばらく走っていたら、十兵衛が馬の手綱を引き絞って、金ヶ崎山の方角に体を向け直した。

「半兵衛と三河殿が時を稼いでいる間に態勢を整えろ！　追撃を迎え撃つ！」

「鉄砲隊、隊列を整えろ！」

さゆりんの声に鉄砲隊が三列に並ぶ。

その間、沓掛勢をサル率いる木下勢が追い抜いていく。

「あんまり無茶をするでにゃあぞっ！」

三河勢と半兵衛たちが退却を開始した。それを追うようにして、大地を埋め尽くす朝倉勢の旗指し物が津波のように押し寄せてくる。太鼓の音、鐘の音、将兵たちの怒号が大きな塊となってこちらに襲いかかって来る。

クリツナの手綱を握るおれの手がぶるぶると震える。

そのとき、襲いかかって来ていた大軍の隊列がにわかに乱れた。手筒山から下りてきた池田勢が朝倉勢の横腹に突撃していった。

鉄砲隊を最前に配置している沓掛勢に気付いて、三河勢と半兵衛の木下勢が両脇に抜けて行く。

「点火！」

揉みくちゃになりながらも、押し寄せてくる朝倉勢。

「撃ていっ！」

火縄銃が火を吹いた。しかし、金ヶ崎山のときとは勝手が違い、

相手方は五十発ぐらいではびくともしなく、吹っ飛び倒れた味方を踏みつけてまで大波が襲いかかってくる。

「二列目、撃ていっ！」

銃声が響き渡るけれど、相手は怯まない。鐘の音、太鼓の音はどんどんと大きくなっていく。

「三段まで間に合わん！　迎え撃つぞ！　池田殿が引くまで持ちこたえろ！」

十兵衛の声に槍を握りしめ、決死の表情で相手方を見据える沓掛勢。朝倉の津波はすぐそこまで来ている。

「撃ていっ！」

「怯まなあっ！　織田の者どもすべて討ち取れ！」

三列目が撃ったと同時に、十兵衛が太刀を振り下ろす。

「続けえっ！」

沓掛勢が津波に突進していった。鉄砲隊が蹴散らされる。おれの周りを取り囲む足軽兵たちが朝倉の兵たちを近づけまいと奮戦する。十兵衛が取り囲んできた朝倉兵たちを馬上からさんざんに打ち破る。さゆりんが太刀を振るって応戦する。

おれは手綱を握り締めた。ここまで来たらもう、訳がわからん。ばたばたと倒されて行く沓掛勢を目の前にして奮い立つ。

おれはクリツナの腹を蹴飛ばした。

クリツナが前脚を掻き上げ、空に向かっていなないた。そうだ。おれには鉄砲隊だけじゃない。おれ自身はただの凡将かもしれんが、おれにはこのクリツナがいるんだ。

「旦那っ！」

ねじり鉢巻きが泣きそうな顔で見上げてきていた。

スイッチの入ったクリツナは朝倉勢に突っ込んでいった。狙い澄ましたかのように前脚で朝倉兵たちの頭を蹴飛ばし、踏み潰し、応戦しようとしてくる兵を後ろ脚で払いのけ、飛んでくる槍をひょいと交わす。

そのとき、おれはなぜか冷静でいれた。死ぬ気がしなかった。ク

リツナのすさまじさにビビっている相手方一人一人の表情がよく見て取れていた。おれは手綱を引いたり、押したりして、クリツナの行き先を誘導していた。

「ば、化け物だあ！」

クリツナがおもしろいように敵を粉砕していく。おれは笑った。殺せるものなら殺してみろ！

ぶすっ。

弓矢が刺さった。綱に。おれは一気に冷めた。

気付けば四方八方朝倉勢。全然、冷静じゃなかった。

やば。死ぬ。

「助太刀いたすっ！」

颯爽と飛び込んできて馬上から槍を振り回し、相手を叩きのめして行くのはファイヤー兜っ！

「我は本多平八郎忠勝なり！　三河武者の恐ろしさ見せてくれるわっつ！」

ファイヤー兜に続いて、屈強な三河勢が暴れ回る。軍勢の多さでなんとか応戦する朝倉勢。沓掛勢も息を吹き返して乱入。

「簗田殿！　池田殿は引き返されましたぞっ！　早く退きなされっ！」

十兵衛が刀を振るいながら言ってきたので、暴れ回るクリツナになんとか踵を返すよう指示を出し、乱戦から脱出。おれの無事を確認した沓掛勢も付いてくる。ねじり鉢巻きもいる。でも、付いてくる沓掛勢の人数が少なくなっている。

「何をやっとるんやあっ！　阿呆があっ！」

駆け足でクリツナに必死に食らいついてきたさゆりんが泣いていた。手にしている太刀は血を滴らせながらも曲がっていた。

「あんたが死んだら、私らはどうするんやあっ！」

「このおれがそう簡単に死ぬわけねえだろうがあっ！」

でも、小便、ちびっているっぽい。

決死線を越えろ！（5）

おれたちは必死だったと思う。

おれたちなんて言っちゃうと、語弊があるかもしれないけど、おれだって、それなりに頑張っていた。

追撃にしつこい朝倉勢をキモブタ家康が食い止め、キモブタが食い止めている間にサルが態勢を整える。キモブタが退くと、今度はサルが食い止める。サルが時間を稼いでいる間に、池田筑後守が態勢を整える。サルが退くと、池田筑後守が食い止める。そのあとは、十兵衛とおれの沓掛勢が食い止める。

そうやって、徐々に、徐々に、敦賀から退却していった。

でも、どんどん、兵の数は減っていった。肉を切って、骨は断たせぬ。そんな感じ。

やがて、日は暮れた。幸運なことに浅井長政の軍勢はおれたちに追いつかなかった。

しんがり軍は朝倉勢との交戦を止めて、一気に京を目指す。

京への道は、若狭通りっていうみたい。くねくねした山道。夜になったのも関係なく、ずっと、ずっと、走り続けた。

よく走っていられたなと思う。おれは、クリツナに乗っているだけだったから、あれだったけど、さゆりんも、さゆりんに率いられる鉄砲隊も、大島のおっさんに率いられる足軽、弓衆も。

でも、見るからに人数は少なかった。おれたちは、仲間を置き去りにしたようなものだった。だからといって、おれたちは進むしかなかった。誰も、後ろを振り返らなかった。

だって、皆、命を惜しんでまで戦場に出て来ていなかったから。

「伝令！　伝令伝令！」

行き先から大声を上げながら馬を飛ばしてきたやつがいたので、おれは一旦、立ち止まった。

「朽木元綱が織田方に開城！　しんがり役の退却地は朽木城！」

「なんとかなったわ」
さゆりんが吐息をつきながらその場に両膝をついた。
「どういうことだよ」
おれが訊ねると、朽木元綱っていうやつは、この期に及んでどっちつかずの奴だったみたいで、京までの道中、もしも、この朽木ナントカが織田方に反抗してきたら、それこそ、挟み撃ちで終わりだったということらしい。
その、どっちつかずだった朽木ナントカが織田方についたってことは、京まで行かなくても、途上の朽木城で退却戦は完了っていうわけ。
「でも、おれらに不利な戦いなのに、なんで」
おれは今までいろんな奴にさんざん騙されてきた過去があるので不信に思ったんだけど、
「どちらにしろ、そこを通るしかないんや。覚悟を決めるしかない。
と、さゆりんに言われて、渋々、覚悟を決めるしかない。
ていうか、さゆりんは退却にいっぱいいっぱいなのか、ずっと、素のさゆりんなんですけど。忘れちゃっているのかね、吉田早之介っていうことを。
まあ、沓掛勢も退却にいっぱいいっぱいで、気にしちゃいられない様子。
で、朽木城まで猛ダッシュ。追撃を振り切ったものの、浅井朝倉だって必死だから、ここで織田を叩き潰そうと考えているに違いない。ちょっとでも気を緩めていたら取っ捕まってしまう。そんな危機感が、疲れも忘れさせて、皆を延々と走らせている。
山の中に朽木城の城郭が見えてきたころには、空の真ん中にすっかり太陽が輝いている時間だった。おれも、クリツナも、沓掛勢も、汗だくで疲労困憊、朽木城の門をくぐった途端に、皆が皆、その場に倒れ込んだ。クリツナですら、四本の脚が震えていた。髪がぐしゃぐしゃのねじり鉢巻きがすぐに駆け寄って来て、クリツナの脚を触って行くのを見ていたら、おれは倒れこんではいられず、だから

といって、何かをする力も尽きていて、ただただ、ねじり鉢巻きがクリツナの馬面を健気に撫でてあげている姿を眺めていた。
「お前は本当に馬鹿だな」
おれが言うと、ねじり鉢巻きはこちらを振り向いてただ笑った。こいつの柄にはない爽やかな笑顔だった。ハハ。十歳ぐらい若返ったんじゃねえの。
クリツナがねじり鉢巻きに頬撫でしている。馬鹿だなあ。どっちも。
おれはなんだか空を見上げた。太陽がぎらぎらと輝いていて、額に照りつける。すっかり、夏の気配だ。
「ほっとしているところ申し訳ないけどな、沓掛勢はほぼ壊滅や」
さゆりんは真顔だった。クリツナの疾走にひたすら付いてきていた沓掛勢に振り返ってみると、連中の顔に安堵の表情はなかった。生き残った、しかし、仲間を失った。そんな喜びきれない思いが、疲弊しきった表情に出ていた。
火縄銃を携えている奴も、数えられるほどしかいない。
おれは、この退却戦で初めて知った。戦争は、勝敗の行方に関わらず、常に犠牲を伴うことを。
「皆」
おれは沓掛勢の前に立つと、ぐったりと頭を垂らしている連中に頭を下げた。
「おれがしんがりを願い出たばっかりに、すまなかった」
おれにとって、沓掛勢をここまで失うのは初めてのことだった。必死に奔走してまで調達した火縄銃が目の前から消えてしまったことよりも、おれをあれまで慕ってくれていた沓掛の連中がいなくなってしまったことが耐えられなかった。
「ごめん。本当にごめん」
こいつらはおれを必死に守ってくれていた。おれは泣くしかなかった。
「どうしてですか！」

誰かが立ちあがって叫んでいた。
「どうして謝るんですか！　俺らは殿の兵卒ですよ！」
「そうだ。俺たちは織田の兵卒、簗田家の兵卒だ！　殿を生きて帰らせるために、俺たちは兵卒をやっているんだ！」
「謝るんなら、朝倉に謝れよ！　首をくれられなくてすまなかったってな！」
げらげらと笑い上げる馬鹿ども。
「そういうことですよ、殿」
と、さゆりんが肩をぽんぽんと叩いてくる。お前こそ、顔がぐしゃぐしゃじゃねえかよ。クソッ。どうせなら、皆、生き残って笑っていたかったよ。
でも、これが戦争なんだな。これが、主従関係ってものなのかもな。嬉しいのやら、悲しいのやら、わからん。
やがて、木下勢が入ってきた。三河勢も池田勢も城内に入ってきた。十兵衛も無事だった。
「何を泣いているんだぎゃあ。柄じゃねえだぎゃあにゃあ」
うるせえ。黙れ、クソザル。
「簗田殿ォ、簗田殿ォ、良かった。助かって良かったですなあ」
到着した途端に馬から転げ落ちたキモブタが、おれに駆け寄って来て、抱きついてきたと思うとわんわん泣き上げる。
「拙者も、偉そうな口を叩いたものの、本当、何度も駄目かと思いましたわ。天運です。本当にこればっかりは天運ですわ」
返り血が甲冑にこびりついているファイヤー兜がキモブタの後ろで微笑んでいる。こいつこそ柄じゃねえだろうが。あんだけ暴れ回っておいてさ。
「まあ、しかし――」
甲冑がずたずたになっている十兵衛が笑っている。
「天運とは日頃の努力がなければ引き寄せられますまい」
「明智殿、おみゃあは本当に真面目すぎるだぎゃあ。今日ばかりはそんな堅苦しい話はなしだぎゃあ。なにしろ、今日は、皆々方、将

も兵も揃いも揃って大手柄の一日だぎゃあ！」
「終始そればっかりですね、兄さんは。それよりも無駄遣いをやめてもらえませんかね」
「左様。いくさに退くも大事だが、金銭に退くも大事なことよ」
小一郎、そして、池田筑後守の突っ込みにあっはっはと笑い上げる将校たち。そして、それを取り巻く雑兵たち。
ああ、いいな。仲間と笑い合うって。一つのことを成し遂げて、それを喜び合うって、おれの人生、いまだかつてなかったことだな。生きていて、本当に良かったなあ。
でも、
「あっしらのために死んでいった奴もいる。あっしらがこうやって笑っていられるのも、そいつらの、そいつらの」
おれの頭から焼きついて離れられない。金ヶ崎山を下りたあと、銃口を構えていた沓掛勢が朝倉勢に吹っ飛ばされたあの瞬間が。
「築田殿は優しすぎますからな」
と、すっかり、健全モードに戻っている半兵衛。にこにこしながら言う。
「将にとって、兵卒はいつも英雄です。真の英雄とは英雄たちのために死んでいった者たちなのです。古今、英雄は常に、真の英雄の亡骸の上に立っておるのです」
半兵衛は、門の外に向かって掌を合わせ、顔を伏せると目を瞑った。十兵衛がそれに習うと、サルもキモブタもおれも、雑兵たちも、皆、今、生き残っていられることに感謝しながら、遥か金ヶ崎山に向かって黙祷した。

決死線を越えろ！（5）（後書き）

第七章、終わりです。ここまで読んでいただいてありがとうございます。

ここで登場人物のおさらい3

『牛（簗田牛太郎政綱）』
主人公。沓掛城主。忘れがちだけど珍奇衆筆頭。最近、重要な任務を貰っているけれど、行く先々でごたごた。危険な思いをする回数が増えてきている。が、なぜか、いつも助かる強運の持ち主w
金ヶ崎の戦いで大きく成長？

『太郎（簗田左衛門太郎広正・やなだ　さえもんたろう　ひろまさ）』
牛太郎の小姓だったが、天涯孤独だったのと、才能に溢れているので、牛太郎の養子に。
森可成のはからいで信長直属の精鋭部隊馬廻衆に。
養父の牛太郎に内緒で沓掛城の帳簿を管理していたが、尊敬する竹中半兵衛の夜通し説教に改心？

『あずにゃん（簗田梓・やなだ　あずさ）』
牛太郎の嫁。柴田勝家の末妹。
茶の湯にこっていて、牛太郎の金銭を勝手に使って茶室を作ってしまい、挙げ句には牛太郎が自宅に戻って来るたびにドメスティックバイオレンスをくわえていたが、牛太郎とお互いを理解し合って改心？

『シロジロ（中島四郎次郎清延　なかじま　しろうじろう　きよのぶ）』
三河出身の商人。徳川家康から五百貫を与えられて京都に上ったが、松永弾正の御用商人に騙されて、牛太郎に拾われる。五百貫貯まるまでは三河に帰れないが、客としてやってきた家康に見つかっ

て、なんとなく許されて、今は団子屋と宝くじ事業の経営にいそしむ日々。

『ねじり鉢巻き（栗之介　くりのすけ）』

簗田家の馬丁。馬オタク。牛太郎に刃向かわないただ一人の家人だが、実は牛太郎の大事な話を盗み聞きしていて、生来の素朴さで牛太郎の秘密を悪気なくばらしてしまうことも。みたらし団子が嫌い。

『あいりん（あいり）』

変顔を気に入られて簗田家の女中になったが、それ以前から太郎とお互いに恋心を抱いていた。牛太郎のささやかな企みの結果、丹羽長秀の養女になって、太郎と婚約することになるが、太郎があるごとにいくさに駆り出されるので、祝言があげられていない。

『さゆりん（さゆり？）』

元甲賀流のくのいち。牛太郎を三度殺そうとするが、そのたびに女たらしの牛太郎に助けられて、結局は男装し、吉田早之介の名で牛太郎の与力に。元々が忍者なので、すこぶる牛太郎の役に立っている。牛太郎との喧嘩がきっかけで沓掛勢鉄砲隊を率いることになり、三段撃ち戦法に疑問を持ちながらも、想像以上の成果を上げた。くのいち時代、一度、牛太郎に抱かれてしまっている。

『半兵衛（竹中半兵衛重治・たけなか　はんべえ　しげはる）』

牛太郎の親友。木下藤吉郎秀吉の与力。織田家のいくさではその知恵で何度も勝利に導かせているが、軍事オタクなので、作戦立案のときには発狂してしまい、そのため軍議には参加させてもらえない。部屋が汚い。

『サル（木下藤吉郎秀吉・きのした　とうきちろう　ひでよし）』
織田家の侍大将。一時期、調子に乗っていたが、大法螺が招いた本圀寺の変で落ち込むも、大して反省していなく、無駄遣いを弟の小一郎に諌められることがたびたび。ただ、将来、豊臣秀吉になるので、一応、カッコいいときもある。

『マタザ（前田又左衛門利家・まえだ　またざえもん　としいえ）』
信長親衛隊赤母衣衆の筆頭。尾張の超絶ＤＱＮだったが、出奔期間に苦い思いをしたのと、三人も子供が出来てしまったので、更生。いくさではすっかり影が薄くなってしまったが、最近は牛太郎の知らないところ、内政面あたりで結構な仕事をしているっぽい。

『ウザノスケ（佐々内蔵助成政・さっさ　くらのすけ　なりまさ）』
信長親衛隊黒母衣衆の筆頭。尾張比良城主。織田家最恐のＤＱＮ。サルの奥さんの寧々に惚れてしまったせいでサルを敵視。稲葉山城攻めの軍紀違反で五日間の謹慎処分になったことを根に持っていて、最近は牛太郎や藤吉郎が失態をおかすたびに、信長に謹慎処分を助言するという小者ぶり。

『マリオ（丹羽五郎左衛門長秀・にわ　ごろうざえもん　ながひで）』
織田家の中堅幹部。信長に信頼を置かれている武将の一人。何もできない牛太郎に代わって、陰から沓掛の内政を仕切っている。隠し子の太郎が牛太郎の養子になったことで、つまらない要塞だった沓掛城を住み心地のよい城に改修。牛太郎に引け目を感じているのか、ガミガミうるさかったのがなりをひそめている。

『サンザ（森三左衛門可成・もり　さんざえもん　よしなり）』
信長の側近。奥さんが美人で、子供も美少年。牛太郎の理解者でもあるが、ときには厳しい。

『十兵衛（明智十兵衛光秀・あけち　じゅうべえ　みつひで）』
　足利幕臣。ただ、信長のいくさにことあるごとに出陣したり、信長の命令で調略に出かけたりと、ほぼ、信長の家臣状態。身の程知らずの義昭に嫌気がさしている？

『池田筑後守勝正（いけだ　ちくごのかみ　かつまさ）』
　足利幕臣。摂津国池田の当主。三好三人衆とつるんで信長に抵抗していたが、牛太郎の口から出任せによって降伏。裏切りを警戒されていたが、命の恩人の牛太郎に義理堅く、本圀寺の変にはすぐに駆け付け、金ヶ崎の戦いではしんがりに名乗り出る。

『ヘタレ（荒木信濃守（自称）村重・あらき　しなのかみ　むらしげ）』
　池田筑後守の側近。いくさが大嫌いで、常にヘタレ。牛太郎を裏切って牢獄にぶち込んだ。ただ、茶室に入ると賢者モードに入り、牛太郎に金銭を譲ったり、甲冑を買ってあげたり、堺の有名人を紹介してあげたりと、牛太郎が大好き。

『ゼニゲバ（中川瀬兵衛清秀・なかがわ　せいべい　きよひで）』
　池田筑後守の家臣。先立つ物がない、が、口癖で、ヘタレ村重とともに牛太郎を裏切ったが、そのくせ牛太郎に無心をしてくる。最近は織田家中の人間と接触するようになったので、藤吉郎をターゲットにしているっぽい。

『松永弾正（松永弾正忠久秀・まつなが　だんじょうちゅう　ひさひで）』
　足利幕臣。希代の大悪党のあだ名で日本中の人々に信用されていない悪者だが、牛太郎の無邪気なハッタリに怯んで、天下の名茶器、九十九髪茄子を信長に献上してしまう。作中でははしょっているが、

そのおかげで信長に大和国の支配を任される。ただ、何かを企んでいる。

『とと屋のタナカ（田中与四郎・たなか　よしろう）』
堺の倉庫業を営む商人にして、織田家のチンピラ武将たちに茶の湯を教える茶頭。ヘタレ村重と仲が良く、そのつてでやって来た牛太郎と知り合うが、牛太郎は、人のいいタナカがのちの千利休だとはまったく気付かない。

『今井会長（今井彦右衛門・いまい　ひこえもん）』
上洛してきた信長にいち早く取り入って、数々の利権を手に入れた経団連顔負けの豪商。三段撃ちをやりたくてしょうがない牛太郎に百五十丁の火縄銃をレンタルし、更なる大儲けを狙っている怪物。

『浅井新九郎長政（あざい　しんくろう　ながまさ）』
北近江の大名、浅井家の若き当主。信長の妹、市の旦那でイケメン。爽快な青年で、牛太郎にも快く接していたが、織田家の朝倉攻めでは信長を裏切り、敦賀群で挟み撃ちにしようとするが、信長の逃げ足の速さに失敗。

『キモブタ（徳川三河守家康（とくがわ　みかわのかみ　いえやす））』
信長の盟友。デブで汗かき。家臣のファイヤー兜こと本多平八郎忠勝など日本最強の三河武士団を率いている。金ヶ崎の戦いでは、わざわざ三河から援軍に来、負けいくさになると信長に置き去りにされて死にそうな思いをするが、人がいいのか、能天気なのか、気にしていない。なぜか、牛太郎に友情に近いものを感じている。

『織田上総介信長（おだ　かずさのすけ　のぶなが）』
文字通り織田信長。

出世と大出世

「おい」
おれはなんだか腹が立って、肩を突き飛ばしてやった。
「藤吉郎殿に俸禄を上げてもらったらしいじゃねえかよ、おい」
「そ、そりゃあ、あれだけの思いをしたんだ。あ、上げてくれなくちゃ意味がねえ」
「なんだと？」
おれはイエモンの左肩を再度突き飛ばした。イエモンがいまだタメ口であったことと反抗的な目をしてきたので、三度、突き飛ばしてやった。
「あれだけの思いだと？　よくもまあ、そんなことが言えたもんだな」
金ヶ崎の戦いで決死隊となったイエモン。
おれはそこまでしか知らなかった。おれはイエモンを見直した。
そうして、この馬鹿が安らかに死んでくれることを真摯に祈った。
しかし、小耳に挟んだ話によると、この馬鹿野郎は、決死隊に名乗り出ておいて、結局は最後まで林の中に閉じこもっていたらしい。
「お前は沓掛の連中を知っているよな。沓掛勢のほとんどはおれを守るために死んだんだぞ。それなのに、お前っていうクソ野郎は林に閉じこもって手柄を上げようって企んでいたってわけだな」
「ち、違う。飛び出す好機を失っただけだ」
「もういいじゃないですか、父上」
太郎に止められたおれは、イエモンに唾を飛ばすと、渋々、宿泊寺に向けて歩を進めた。
「伊右衛門殿はそういう人なのですから」
「あいつは本当にクソ野郎だ。一瞬たりとも、あいつのことを思ってしまったおれが馬鹿みたいだ。いつか、おれがあいつをぶっ殺してやる」

「まあ、落ち着いてください。せっかくの晴れの日に勿体ありません。沓掛勢を失ってやるせない父上の気持ちもわかりますが、生き残って初めて始まる世でもあるのですから」

そう。今日はおれにとって晴れの日なんだ。二条城から戻る途中にイエモンなんかにうっかり会っちゃって急遽怒りが湧きあがってきてしまったが、おれはとうとう牛太郎じゃなくなったんだ。

おれは天皇陛下から官位というものを頂戴した。左衛門尉（さえもんじょう）というよくわからない官位で、本当なら、左衛門尉という役目なりの仕事をしなくちゃいけないのが古いしきたりらしいが、今は戦国時代なので、官位だけ貰っておいて、幅を利かすというのが戦国のしきたりらしい。

なので、おれは左衛門尉という役柄がそのまま通称名になるそうだ。これからおれは簗田左衛門尉政綱を名乗るらしい。

＾＾

金ヶ崎の戦いの褒賞で、信長が官位をくれた。ふふ。まあ、本当なら領土が欲しかったけど、負けいくさのすえでのことだから、我慢してやるか。俸禄も二百貫に倍増してくれたし。

ちなみにサルももらった。左近衛少将とかいう、これまた意味不明な官位。

「まあ、ようやく、信長様もおれの魅力をわかってくれていたってことだ」

にやにやが止まらないおれ。なのに、太郎はシラーッとしている。

「おい。なんだよ、その目は。半兵衛に言われただろうが」

「それはそうですが、あんまり浮かれるのもよくないと思っているのです」

「いいじゃないか。今日ぐらいは浮かれさせろ。浮かれたまま、あずにゃんに手紙を書かせろ」

「今日だけですよ」

太郎も俸禄が上がった。四百貫。信長を無事に京に送り届けた褒賞で。

官位ももらったおれだが、太郎の超最高級待遇にはちょっと癪だ。なにしろ、おれより俸禄を貰っているし、馬廻衆を外れて、侍大将に大出世しやがった。なんなの、それ。太郎ってまだ十代なんだけど。役職だけだと、サルやマリオと同格。ふざけている。怪物ルーキーじゃないかよ。実は、信長にケツを差し出して、そのお返しの大出世なんじゃねえのか。サルが大出世者だなんて自画自賛していたけれど、太郎こそ、織田家一の大出世者じゃんか。

「沓掛勢を立て直さなくてはなりませんね」

太郎はおれを差し置いて張り切ってしまっている。むう。半兵衛にあれだけ説教されたことをもう忘れていやがるのか。

「じゃあ、火縄銃を調達しろよな」

と、おれは意地悪をする。

「お前がそこまで張り切っているなら、おれは何の手助けもしてやらないからな。父親として」

「それは筋道から外れているじゃないですか」

「何がだよ」

「火縄銃を調達することなんて、拙者にできるはずがありません。父上だからこそできた話じゃないですか」

「ま、まあ、そうだな」

「それに、どうするんですか」

「何が」

「あの火縄銃は今井殿から借りているものと聞いていますよ。もう、沓掛勢には四十丁ほどしか残っていないみたいじゃないですか。どうするんですか、失った分は」

むう。あんまり考えたくないところに触れてきてしまった馬鹿。でも、まだ、レンタルの期間は二年以上残っているし、大丈夫だろ。

「太郎。お前はどうしてそうなんだ」

おれは攻撃を避けたいばかりに言ってやった。

「すぐに金のことを気にしやがって。あのな、人が死んでいるんだ

ぞ、人が。それなのに、お前は人の冥福を祈るよりも金のことか。ん？」

「父上のおっしゃることはごもっともかもしれません。ただ、現実問題として避けられない話なのです。どうするか考えるべきことではないですか」

うじうじうじうじうっせえなあ。せせこましいことばっかり言いやがって。そもそも、今日はおれが官位を貰った晴れの日なんだぞ。それなのに、ネガティブになっちゃうようなことばっかり言いやがって。貧乏根性丸出しじゃねえかよ。

「どちらにしろ、この前のいくさで火縄銃の重要性は認められたんだ。サルだって十兵衛だって舌を巻いていたんだからな。お前は知らないだろうけど、家康なんかはこれからは火縄銃の時代だって言っていたんだからな。だから、今井さんだって、そこんところはわかるはずだろうが」

「そんなこと言ったって、今井殿がどう思っているかは実際に聞いてみないとわかりません」

「うるさいんだよ、お前は。いちいちいちいち。そんなこと、今日言わなくたっていいだろうが、ボケ」

「現実問題です」

ぐぬぬ。キリッとしやがって。なんで、太郎はこんな頭でっかち野郎なんだよ。本当、どっかのケチクソ野郎にそっくりな真面目馬鹿だ。

「だいたい、金ヶ崎のいくさで火縄銃が発揮できたと思うのなら、今井殿にお伝えするべきではないんですか」

「うるさい。もうやめろ。黙れ」

「やめません。なんなら、二人で今井殿の元に行きましょう。調度、京に来ているみたいですからね」

うざってえ。本当にうざい。しょんぼりしていれば可愛い息子だっていうのに、口だけはぺらぺらと。

それに、馬廻衆を卒業したとなると、太郎は束縛されなくなった

わけだから、これからずっと、おれの横でぴーちくぱーちく鳴くってことだよな。

厄介。せっかく、おれが偉くなって、ぶいぶい言わせようと思ったのに、本当に厄介な小僧。半兵衛に、この口うるささも直してもらえばよかったよ。まったく。

もらっちゃいました＾＾

「これは、誰かと思えば簗田殿でしたか」
太郎と二人、待たされていたら、今井会長が部屋に入って来て、平伏する太郎。おれはしないけどね。
「こちらの方は？」
「息子の左衛門太郎です。今井さんに礼を述べたいと言って聞かなくて」
「簗田左衛門太郎広正でございます。遅くなりましたが、このたびは当家に百五十丁もの火縄銃をお貸ししていただき有難き所存でございます」
「い、いやいや、左衛門太郎殿、お顔を上げてください」
太郎が名乗った途端、会長はあわてて太郎の肩に手をかけてきて、やたらとへこへこ。
「私などは茶頭にしか過ぎません。左衛門太郎殿に頭を下げさせてしまったなど、恐れ多くて町を歩けませぬ」
「しかし、今井殿は当家にとって恩人でございます」
「いいって言ってんだから、もういいだろうが」
おれが言って、太郎はおれに睨みをきかせながら頭を上げる。
「ええ、私は銭儲けのために簗田殿に銃を貸したのです。頭を下げる必要などございませぬ」
会長は笑みを浮かべながらも危ういことを言うから、その笑顔が本当に怖い。ていうことは、つまり、頭を下げようが、律儀になろうが、会長にとっては損得勘定ってことだ。太郎は子供だからまだまだわからないんだろう。頭なんか下げる必要ない。
「聞きましたぞ、簗田殿」
でも、会長は向かいに腰を下ろしながらそう言ってきたので、おれはちょっとビビる。火縄銃、相当数を失っちゃったってことを知っているってことだよね。

「ずいぶんと損失してしまったそうですな」
おれは会長の視線にうつむいちゃう。
「しかし」
と、太郎が口を開く。
「いくさの場ゆえん、損失も止むを得ません。まして、先日のいくさは激しい退却戦でございました」
「ほう」
会長はにたにたと笑いながら、右手で顎をさする。
「私が聞いたところによると、わずか百五十の火縄銃で、一万の朝倉勢を足止めしたということでしたが」
「左様でございます。その行賞に、父は官位を頂戴しました」
「存じております」
会長は湯呑みを手に取り、煎茶をずずっと啜る。
「実はですな、ついさきほど、織田様から火縄銃の注文を頂きました。その数は二千でございます」
えっ？
でも、驚いたと同時に愕然としちゃったね。だって、なんなんだよ、その規模。
「二千、ですか……」
と、太郎も絶句。
「まあ、築田殿のご活躍がなければ、この大商いはなかったでしょうな。どうやら、明智殿が織田様に金ヶ崎のいくさのことを報告したさい、火力の重要性を説いていただいたそうで」
ふーん。そういや、十兵衛のやつ、三段撃ちをかましていたとき、やたらとはしゃいでいたもんな。
「なので、百五十丁の銃は築田殿にお譲りいたしましょう」
「ほ、本当ッスか！」
「ええ。百五十丁の投資で二千丁もの商いが生まれたのです。私は博打に勝ったということなのですからな。そして、築田殿も」
よ、よっしゃー！　そりゃそうだろ。そういう約束のもと、おれ

は会長から火縄銃を借りてやったんだからな。三段撃ちで暴れまくったのに、約束を守らねえなんてなったら、おれは会長を市中引き回しの刑に処しているわ。

「ほ、本当によろしいんですか」

「左衛門太郎様、私はこう見えても商売人です。商人が己の言ったことを翻すときは勉強をするときだけです。ころころと文句が変わってしまえば、信頼を失ってしまいますからな」

「あ、有難き幸せっ！」

ほっほっほ。さすがは会長よ。器が違うねえ、器が。

「それよりも、簗田殿、織田様は朝倉浅井の討伐に再度赴くようですな」

「そうみたいですね。でも、織田が勝ちますよ」

「ほほう。そこまで言いきってしまいますか」

「九分九厘勝ちます」

「ずいぶんと強気ですな。その根拠を是非お聞きしたいのですが」

「根拠はまあ――」

おれはぼんやりと頭上に目をやる。

「根拠は、そうッスね、ないですけど、勝ちますよ」

「博打ですな」

「博打なんかじゃありません。九分九厘勝つんですから」

「父上っ」

「お前は黙っていろ。おれが勝つと言ったら勝つんだ。お前は指でもくわえて見ていやがれ」

「はっはっは。なら、私は今回も簗田殿に乗って、また、一つ儲けさせてもらいましょうかな」

「火縄銃ならいつでも借りますけど」

「はっは。簗田殿、この今井彦右衛門、そうそう甘くはありませんよ。二度目からはご購入して頂きます。もちろん、特価で」

……。

いや、いいや。お金、ないし。鉄砲隊を立てなおすほどの兵力も

ないし。
「機会があれば、また」
と、太郎が濁して、会長は余裕綽々でうんうんと頷く。はなから、おれなんかが買えるとは思っていない頷きかた。クソッ。ゼニゲバモンスターめ。
「まあ、火縄銃もそうですが、それよりも、簗田殿に忠告しておきたいことがございます」
なんだよ。説教？
「松永弾正忠殿にお気をつけなされ」

不穏な予感

不穏だ、と、今井会長は言っていた。

ただ、何が不穏なのかは根拠がないみたい。テメーも言っていることがおれと同じじゃねえかと思わず突っ込みたくなったけれど、ま、そこは会長だから。

「確かに大悪党と揶揄されてきたお方ですけれど」

寺に帰る道中、太郎は何度も首をひねっていた。

「でも、不穏な気配など見当たらないんですけどね。むしろ、松永様が朽木城を開城させたのですから」

なんでも、信長と共に金ヶ崎から京までひた走っていた太郎や弾正たちだったのだけれど、途中、織田方なのか浅井方なのか、どっちつかずの朽木元綱の朽木城を目の前にして、弾正が名乗りを上げたらしい。

「拙者が朽木を味方につけてきまする」

むしろ、朽木元綱は浅井勢に付く方向性だった。だから、信長はほぼ万事休すだった。

けれども、弾正は朽木元綱を説得し、織田勢に味方させた。

弾正がいなかったら、信長は殺されていたかもしれないし、信長が運良く生き残れたとしても、しんがり役だったおれやサルたちは終わっていたってことだ。

「そんな松永様が不穏だなんて合点がいきませんけど」

太郎はまだまだ子供だなあ。騙されたときがないからわからないんだ。

サルには日常茶飯事騙され、武田信玄やさゆりんからは殺されそうになり、ヘタレ村重やゼニゲバ瀬兵衛に掌をころりと返されたおれには、弾正がどうしてそこで朽木元綱の調略に赴いたか、単純明快だろ。

ただ単に、自分も死にたくなかっただけのことだ。たまたま、信

長と一緒だったから、結果的に信長を助けたことになっただけ。悪党っていうのはそういう奴らだ。

おれはそのことを太郎にくどいくらいに言ってやった。

「まあ、そうかもしれませんけれど。でもなあ、一緒にいた限り、そんな不穏な気配には見受けられなかったんですけどね」

「本物の悪党なんてのは、そういう気配を消して企んでいやがるんだ。武田信玄なんて特にそうだったからな。お前も気をつけろ」

「はあ」

あいまいな返事をすると、おれを不思議そうに眺めてくる太郎。

「なんだよ」

「なんか、変わったなあと思いまして」

「何がだよ」

「千代殿にいいように使われていたころに比べると、ずいぶんとしっかりしたなあって」

おれはむっとした。

「お前、何様だ。鼻たれ小僧のくせに。それにな、言っておくけどな、おれはチヨタンにいいように使われてなんかいないからな。絶対に使われてなんかいないからな」

絶対にだ。

「そんなにむきにならなくたっていいじゃないですか」

「だったら、冗談もほどほどにしとけ。馬鹿野郎」

馬鹿やろうとかいいつつ、太郎はおれよりも格上の役なんだけどさ。クソが。

寺に戻ると、あずにゃんに手紙を書く。

拝啓

あたらしい名前をもらいました

ずっと牛太郎だったのでちょっと

さびしい気持ちもあります

大袈裟な名前でもあります

好戦的な名前でもあります

きにいってますけど＾＾

敬具　簗田左衛門尉政綱

追伸

太郎も行賞を頂き、侍大将になりました。俸禄が上がったので生活が楽になるかもしれません。ただ、お金を使うときはお貞と相談してください。

「なんですか、その文は」

同じように誰かに手紙を書いていた太郎が、いつのまにやらにやにやと覗いてきていた。たちまち、顔が熱くなったおれは腹も立っていたので筆についた墨を太郎の顔に飛ばしてやった。

「何をするんですかっ！」

目をつぶりながら顔をこする太郎。で、墨が伸びて真っ黒。ざまあｗｗｗ

「盗み見するからだ。調子に乗りやがって」

「そりゃ、父上が文を書いているなんて珍しく思って見たくなるじゃないですかあっ」

部屋を飛び出して行く太郎。フン。親しき仲にも礼儀ありだ。

いやいや、あいつはおれの息子なんだから、もっと礼儀正しくするべきじゃねえか。

侍大将になったからって調子に乗っているんだな。だったら、俸

禄は全部むしり取ってやる。そうだ、あずにゃんの小遣いに当ててやろう。それなら、太郎も渋々でも納得するだろうしな。

にやにやと企みながら手紙を折り畳んでいると、戸が開いて、さゆりんが不思議そうな表情で入ってくる。

「なんだか知らんけど、左衛門太郎が顔を真っ黒にして走っていたわ。どうしたんや、あいつ」

「知らん」

おれはさゆりんに手紙を渡す。「またか」としかめっ面。相変わらずの嫉妬ですか。もてる男はつらいのう＾＾

「で、何の用だよ」

「佐々内蔵助が来ているわ」

うわあ……。何の用だよ。せっかくの晴れの日だっていうのに、まさか、おれの官位授与を妬んで押し掛けてきたんじゃないだろうな。

「いないって言っておけよ」

「いるって言ってしもうたから」

あっさりと居留守終了。おれは思わず舌打ち。

「ただ、連れてこようとしたら、なんか知らんけど、鉄砲隊の人間に火縄銃のことを訊いておるわ」

「じゃあ、いいだろ。おれには用がないってことだ。あいつはおれに用があったら押し掛けてくる野蛮人だからな」

「顔ぐらい見せたほうがええんちゃう？　知らんで」

で、部屋を出ていこうとしたさゆりんだったけど、ウザノスケのことはともかく、別件を思い出して呼び止める。

「なんや」

「俸禄を上げてやるよ。太郎にも了承を貰ったからな。七十貫にしてやる」

すると、急に笑みを浮かべたさゆりん。

「なんや、ずいぶんと気前がええやないか。どういう風の吹きまわしやの」

「一応、活躍したからな」
本当は太郎が早之介の俸禄を上げてやれと言い出したんだけど。あんまり、支出を増やしたくないからね。
「別にええわ」
えっ？
「私は今のままで十分やし。私の俸禄を上げるんなら、栗之介と四郎次郎の俸禄を上げてやりい」
「そ、そっちこそどういう風の吹きまわしだよ。風邪でも引いているんじゃねえのか」
「私はあんたと違って銭なんかはどうでもええ。それに私にとっては負けいくさや。鉄砲隊のほとんどを失ったからな」
むう。なんか、男らしい言葉。ただ、ゼニゲバ扱いされて不本意だけど。
「おいっ、牛野郎！」
大声とともに、突然、戸がばちんと開いて、思わず溜め息をついてしまったおれ。その間にさゆりんはそそくさと逃げだしていっちゃう。
「お前、官位を頂戴したようじゃねえか。あ？」
クソマッチョ、なんか、キレているし。なんなんだよ、もう。

大乱闘

そういえば、太郎が出世して、マタザやウザノスケが何の褒賞もなかったというのもおかしな話だなって思う。

「お前は本当に気に入らねえ野郎だ」

ウザノスケは部屋に入ってきて胡坐を組んでからというものの瞳孔を開きっぱなし。

「テメー自身ががろくでもねえ武将だから、出来のいい小僧を養子にしたんだろうが」

むう。そんなところにまで妬みを及ばせるとは、マッチョのわりに器が小さい。

「それに、今井彦右衛門までたぶらかせて火縄銃をこしらえやがって。テメーは本当にこざかしい野郎だな。あ？」

でもさ、そんな理由でキレられていたらさ、おれはどうやってやってけばいいのって話さ。そりゃあ、おれはこざかしいやつかもしれないけどな、こざかしいやつってのはウザノスケみたいにマッチョじゃないからこざかしくやっているだけだって話だろ。

「まあ、ウザ、内蔵助さん、あっしみたいな人間はそうでもしないと生きていけないんスよ」

「だから、こざかしいって言っているだろうが」

「だったら、どうすればいいんスか」

おれはね、なんだかんだで、むっとしていたんだよ。どうして、キレられなくちゃいけないっていう話さ。おれはおれなりに今まで必死こいてきたんだぜ。

「なんだと？」

「あっしは、ウザ、いや、内蔵助さんの手下でもないんスから」

「なんだと？　生意気な口叩きやがって。もういっぺん言ってみろ、あーっ？」

と、おれの襟首をがっつり掴み上げてきて、おれはガクブル。で、

でも、ＤＱＮの暴力には屈しないからな！
「す、すんません！　やっぱり手下ッス」
しかし、ウザノスケパンチがおれの頬をヒットして、吹っ飛んじゃう。ぐう。なんで、殴られなくちゃいけないんだよ。おれが何をやったって言うんだよ。
「この口先だけ野郎が！」
立て続けにウザノスケキック。ひいっ。どうして。どうして。だから、ＤＱＮは大嫌いなんだよ。ううっ。
「何をしておられるんですかっ！」
丸亀になっているところに太郎登場。ウザノスケを突き飛ばし、おれとクソ馬鹿野郎の間に割って入ると、
「どんな了見があろうと、同じ家中の者に手を振り上げるとは言語道断ではないか！」
「おお。これはこれは、侍大将様じゃねえか」
すると、太郎、にたにた笑っていたウザノスケに渾身の右ストレート。うわあ。止めに入ってきておいて何をやっているんだよ。殺されるぞ……。
で、太郎ごときのパンチじゃびくともしないウザノスケは、やっぱり、応戦。太郎に右フック。吹っ飛ぶ太郎。
「小僧が。おれを殴るとはいい度胸じゃねえか、あーっ？」
ずかずかと太郎に歩み寄るウザノスケ。やばいと思ったおれはウザノスケの膝にしがみついて、必死に泣きを入れる。
「勘弁してください！　こいつはまだまだ世間知らずの小僧なんです！」
しかし、起き上がった太郎が、ウザノスケに猛然と襲いかかり、アッパーカット。更にウザノスケにしがみつきながらのタックル。部屋の戸が外れ、廊下にまで飛び出て行って滅茶苦茶。太郎がウザノスケの上に乗り上がって、
「貴公はそれだけの武がありながら恥ずかしいと思わないのか！」
と、パンチパンチパンチの応酬。

「人を殴るということはこういうことなのだっ！」
太郎が優勢。一度、止めに入ろうと思ったおれだったが、太郎が憎きウザノスケを一方的にボコッてくれているので、静観。もっとやれ～＾＾
ところが、騒ぎを聞きつけた連中が大勢素っ飛んできてしまい、テンションアゲアゲの太郎を引き剥がす。
「左衛門太郎殿！　何をやっておるか！」
「ただの喧嘩だ！　離せ！」
太郎が三人の男の中で暴れ回る中、のっそりと起き上がったウザノスケ。顔面ボコボコｗｗｗ
「やってくれるじゃねえか、この野郎っ！」
ウザノスケ、怒号を上げると、目を血走らせながらパンチ。ただ、太郎を止めていた奴に当たり、更にウザノスケフックが太郎にヒット。他の連中がウザノスケに止めに入るが、猛獣と化したウザノスケは誰彼構わず襲いかかり、もはや、うっぷんを晴らすかのような大喧嘩。
次第に、ウザノスケにぶん殴られて頭に来たのか、他の連中もウザノスケにパンチやキック。バトルロワイヤル。おれもどさくさに紛れてウザノスケにキック。ま、ウザノスケの近くからはすぐに逃げたけど。
で、バトルロワイヤルを聞きつけて、雑兵どもも野次馬根性で集まって来て、暴れ回るウザノスケや太郎を囃し立てたり、バトルロワイヤルに参加したりと、収集がつかない事態に。
「貴様ら！　何をやっておるんだあっ！」
同じ寺に宿泊しているマリオが大島のおっさんと共に駆け付けてきたけど、お祭り騒ぎになってしまっていて、誰も気づかず。
「やめんか！　やめんかあっ！」
十五、六人ぐらいの大乱闘の中にマリオが割って入っていき、一人ずつひっ掴んでぶん投げていくけど、誰かのパンチがマリオに当たってしまい、ブチギレたマリオが鬼モード突入。結局、マリオも

参加。大島のおっさんがマリオを止めに入っていったけど、もみくちゃにされて、役に立たず。

「太郎！　行け！　そこだ！　ウザノスケを殺せ！」

と、おれは野次馬たちに混じってわいわいと観戦。マジで笑える。もっと、やれｗｗｗ　いや、もっと、ウザノスケやマリオをボコれ。なんなら、刀を抜け。

ズドーン！

あ。

どこからか放たれた銃弾が寺の木戸をぶち破って、その轟音に乱闘者の全員がぴたりと手を止めた。

銃声があったほうに目を向けると、火縄銃を持っているのはさゆりん。小さな声でぼそっと一言。

「阿呆か」

包囲網のにおい

信長から大乱闘のお叱りを受けるとおもいきや、乱闘者たちは全員、京都所司代の村井ジジイ貞勝に呼び出され、一人一人、事情聴取されていった。

で、最後に呼び出されたのがおれ。

村井ジジイは机の上に長い紙を敷いていて、そこに筆で事のあらましを書き記していく。

「ということは、牛太郎が佐々内蔵助に最初に殴られたのが事の発端ということだな」

「はい」

「なにゆえ、佐々内蔵助は牛太郎を殴ったのじゃ」

「あのう、その前にちょっといいスか」

筆を止めて、目を上げてきた村井ジジイ。

「あのう、自分はもう牛太郎じゃないんですけど。左衛門尉なんですけど」

「大丈夫じゃ。ここにはちゃんと左衛門尉と記しておる」

「いや、そこにはちゃんと書いてもらっても、村井さんは牛太郎って言っているじゃないですか」

「ふむ。確かにそうじゃな。それで、なにゆえ、内蔵助は牛太郎を殴ったのじゃ」

「いや……」

「なにゆえじゃ、牛太郎」

氏ね。クソジジイ。

取り調べが終わり、クリツナに跨って寺に戻ろうとしたけど、明智十兵衛の使い走りがねじり鉢巻きに伝言を残していたそうで、十兵衛の元に是非来てほしいということらしい。

なんだろ。火縄銃のことかな。信長が今井会長に二千丁も発注したらしいけど、十兵衛の進言だって言うから、その中の三百丁ぐら

いはおれにわけてくれるのかな。
なにしろ、さゆりん率いる沓掛鉄砲隊は未曽有の大活躍だったからな。
十兵衛は村井ジジイと共に京の執政代行官みたいなものだから、いつのまにか屋敷を構えている。そこそこ大きい。玄関で訪問を従者に告げると、従者が十兵衛を呼びに行き、わざわざ自ら出迎えにきた。
「お忙しいところ、申し訳ありませぬ。ささ、お上がりくだされ」
十兵衛に居間まで案内され、従者が持ってきた湯呑みで口を潤わせる。ただのお湯だけど。十兵衛ぐらいの大物なんだから、お茶ぐらい出せよって感じだけどさ。
「簗田殿、こたびの官位受領、おめでとうございます。これもひとえに簗田殿の日々の精進のたまものでしょうな」
「いや、まあ、金ヶ崎のいくさはあっしなんか何も。十兵衛殿や筑後守殿がいたから、なんとか生き残れたもんで」
すると、謙遜のやり合いに終始徹するのかと思いきや、十兵衛は表情を厳しくさせて湯呑みの中を固まったかのように覗き込んだ。
「実は簗田殿――」
滑りの悪い舌を濡らすためか、十兵衛はずずっとお湯を啜った。
「その筑後守殿なのですが、どうやら、よからぬ噂を聞きつけました」
え……。それって、まずいよね。池田筑後守が何か仕出かしたら、牛がケツを拭けぐらいのことを信長に言われているんだから。
「な、なんなんですか。まさか、裏切ろうとしているんスか」
「いえ、筑後守殿ではありません。筑後守殿の配下、荒木村重の背後に三好三人衆がちらついているという噂が」
ふーん。なんか、ビビって損したわ。
「そんなことスか。なら、大丈夫ですよ」
てか、三好三人衆がヘタレ村重に近寄ったところでなんだっていう話だよ。三好って馬鹿なんじゃねえの。あのヘタレ野郎に何がで

きるんだよ。
「そうでしょうか。荒木村重は摂津池田衆の中でも権勢のある人物。筑後守殿の側近ではないでしょうか。その村重が三好三人衆と誼を通じているとなると、どうも」
「大丈夫ッスよ。だいたい、側近なんかじゃないですし」
「しかし」
十兵衛は眉毛をしかめ、腕組みをして、難しい顔。まったく。戦場では前線であれだけ活躍していたのもどこへやら、ずいぶんとネガティブな思考の持ち主じゃんか。
「あいつには何もできませんって。なんなら、あっしが摂津に行って、一発、がつんとかましてきてやりますよ」
「うむ。できればそうして頂きたいのです。摂津衆は気の置けない者が多いですからな。それと、簗田殿、これは内密にしてもらいたいのですが――」
十兵衛はどんよりとした顔でしばらく黙る。なんだよ。面倒だからさっさと言ってくれませんかね。
「どうしたんスか」
「実は、義昭様が上総介殿を亡き者にしようと企んでおります」
チッ。そんなことかよ。
「義昭様は上総介殿あっての公方である立場を理解しておりませぬ。いや、理解しているからこそ、上総介殿を排除したいと思っているのかもしれませんが」
「包囲網を組もうとしているんですよね」
重々しい十兵衛におれがあっさりと言うと、十兵衛は驚いて顔を上げてきた。
「御存知なのですかっ？」
「あ、いや、まあ」
「なにゆえ、存じておられるのですか」
「あ、いや、その、予感というか、勘みたいなもので」
あわてふためくおれをじいっと見つめてくる十兵衛。

「ならば、どうされたらよろしい」
「ど、どうされたらって？」
「足利幕府、織田家、どうされたらよいと簗田殿は思うか」
そ、そりゃ、まあ、戦争でしょ。てか、それしかないんだし。やりたくないけど。

いいじゃないスか

「拙者は忸怩たる思いでおります」
十兵衛はそう言うと、溜め息を一つついた。
「幕府再興のため、目的を失った己のため、なんとか義昭様を将軍職に座らせようと奔走しました。そうして、結果、拙者の目的は果たせました。しかし、今の義昭様を見ていると、本当にそれで良かったのか、拙者は己を否定さえしてしまいます」
そう言われてみると、老けたなあ、と、おれは思った。十兵衛と初めて会ったのは、おれが菩提山に引きこもっていたときだ。
あのときの十兵衛も決して若いと言えるほどではなかったけれど、紳士的な装いが爽やかだった。あのころのほうが苦労していたんだろうけれど、それを感じさせない澄んだ男だったと思う。
でも、今の十兵衛はどうやら疲れきっている。
「義昭様は幕府を束ねるほどの器ではありませんでした。いや、それは最初からわかっていたこと。でも、上総介殿に尻尾を振るような有様であったのが、ご自身がないがしろにされていると気付くと、今までの愛想のよさがなんだったのかと疑問になってしまうほど、陰謀を働かせています」
要はさ、見限ったってことなんだろ。はっきりと言えばいいのによ。愚痴っているだけなんだろ。十兵衛は回りくどいんだよな。
「いいじゃないスか、公方なんて。どうせ、幕府はぼろぼろだったんだし。てか、公方がそんなに嫌になったんなら、十兵衛殿には行く場所なんて信長様の下しかないじゃないですか」
「しかし、そう簡単な話でも――」
「いや、いいじゃないッスか。だって、信長様の家来みたいなもんじゃないですか」
「しかし――」
「あっしが信長様かサンザさんに言っておきます。十兵衛殿がそう

考えているって」
「いや、ただ、義昭様が決定的に上総介殿と対立しているわけじゃ――」
「対立しますよ」
おれはきっぱりと言ってやった。いや、おれがタイムスリップ男じゃなかったとしても、義昭が陰謀を働かせているんだったら、もう、手遅れだろ。義昭は自分の思うがままに政治をしたい。信長はそうさせたくない。決定的じゃないか。
十兵衛は膝に置いていた両の拳をぎゅっと握り、視線を伏せたまま言った。
「もうしばらく待ってくだされ。無用な争いなどしないに越したことがありませぬ」
まあ、十兵衛の立場を考えれば難しいところなんだからな。別に、十兵衛は信長の家来になるんだし、おれがどうこうするようなことでもないだろ。
ということで、辛気臭い十兵衛宅を出て、寺に戻る。
道中、摂津池田のことを考えた。ヘタレ村重の動向なんてどうでもいいことだけど、一応、何かあったらヤバいから、池田に行かないとな。
あいつのことだから、三好三人衆に脅されて、信長に刃向かうなんてこともあり得るし。
てか、三好三人衆ってなんなんだよ。いつも、こそこそ動き回っているけど、何者なんだよ、マジで。そいつらこそ、こざかしい連中だろうよ。
でも、もしかして、実は裏で松永弾正と組んでいるんじゃ。今井会長は弾正に気をつけろって言っていたし。
ハア。なんで、こうも、面倒な連中を相手にしなくちゃなんねえんだよ。挙げ句には嫉妬している馬鹿もいるしさ。
寺に戻り、部屋に入ると、さゆりんがやって来て、手紙を突き出してきた。

「奥方から来ているで」
さゆりんがつまらなそうな顔をしている。おれは手紙を受け取り、素っ気なく出て行こうとするさゆりんを呼び止めた。
「明日、摂津池田に行くぞ」
「なんでや」
「三好三人衆と村重が通じ合っているって話を明智十兵衛から聞いてきた。ちょっと、一発、がつんと言ってやる」
「がつんって。そもそも、あんた、また謹慎食らうんとちゃうの。昨日、あれだけの喧嘩をしておいて、沙汰がないなんて有り得へんやろう」
「おれは参加していないし。喧嘩をしていたのは、ウザ、内蔵助と太郎とマリオ、じゃなくて、五郎左だろ。おれは何もしていない」
「まあ、私はどちらにしても無理やわ。沓掛の連中の処理をせんとあかん」
「そんなの大島のおっさんにやらせておけばいいだろ」
「丹羽五郎左にも大島新八郎にも、沓掛勢のことは私が任されておる」
と、言って、出ていってしまったさゆりん。
私が任されておる、だと？　またか。また、おれの知らないところで勝手に決めごとをしているのか。マリオの野郎、本当にふざけてやがるな。
だったら、いい。クソが。摂津にはねじり鉢巻きと二人で行ってやるよ。おれとねじり鉢巻きだけじゃ心細いけど、太郎は太郎で謹慎を食らうかもしれないしな。
そんなことより、あずにゃんの手紙を見ないとね＾＾
むう。みみず文字ですか……。読みづらいな……。

亭主殿

拝啓

風薫る初夏の日々、わらわは若葉のまばゆさを眺めながらつつがなく過ごしております。貞、あいり、共に変わりない毎日です。しかし、皆々、亭主殿や太郎の身に何事かないかと不安な心もちでいるのも事実です。なので、文が来たときは、皆々に向けて声にして読ませて頂きました。亭主殿の文などは初めてだったので、新鮮な気分になりました。

こちらはあまり変わりないですが、一つだけ、団子屋がすこぶる繁盛しておるので、四郎次郎が大わらわでございます。使用人も二人ほど雇ったようです。岐阜ではちょっとした評判で、各地のものを食べて舌に肥えている旅人や馬借なども立ち寄るようです。

四郎次郎は団子屋を岐阜だけではなく、尾張はもとより、京や堺にも出したいと、毎晩、夢を語ってくれます。亭主殿もいくさから無事に帰って来て、シロジロの団子屋に立ち寄ってあげてくだされ。

敬具　梓

追伸

きをつけるの、「き」は「気」と書きます。それと、太郎の「た」は「大」ではなく、「太」です。亭主殿とあろう御方が字を間違えるとは恥ずべきこと。気をつけなされ。

おれは手紙を折り畳み、懐にしまった。なんとも言えない気持ちだった。

今さら

摂津池田に向かう旨を伝えようと思い、ねじり鉢巻きを使いに走らせて信長に会うためのアポイントを取ろうとしたけれど、信長は忙しくておれと会っている暇がないらしい。代わりにサンザが会ってくれるということで、夕暮れ、信長が住まいにしている館へ。

「おやかた様はかんかんだぞ」

サンザに出し抜けに言われて、思わず震え上がるおれ。

いや、てか、なんでだよ。

「この大事なときに乱痴気騒ぎを起こすなどもっての他だ。しかも、牛殿が官位を受領した矢先の出来事ではないか」

「そ、それはだって、あっしは参加していないッスよ」

「原因はお主と内蔵助だということじゃないか」

「いやっ」

ぶすっとしているサンザに、おれはあわてふためいて両手を振る。

「あっしじゃないッスよ。内蔵助殿があっしを殴ってきたから、息子の太郎が怒って――」

「なぜ、止めん」

「と、止められるわけないじゃないッスか」

無言でじろっと見つめてくるサンザ。しばらくすると、軽く息をついた。

「まあ、それもそうだな」

ホッ。

「まあ、今回は内蔵助も左衛門太郎も五郎左もお咎めなしであろう。いくさだからな。謹慎処分などしている猶予などあらん。しかし、左衛門太郎にもよく言っておけ。この失態は今度のいくさで返せとな」

「いくさですか？」

「左様。浅井朝倉と雌雄を決する準備をおやかた様はしておられる」

むう。また、あいつらとやるんだ……。簡単には勝てないだろうな。

いや、でも、沓掛勢は壊滅状態だから、きっと参加できないよな^^

「どうせ、沓掛勢は壊滅状態だから、いくさに行かなくても済むとでも思っているのだろう、牛殿」

ぎくっ。あまりにも的確すぎて、顔にまで出たのが自分でもわかる。そんなおれを呆れた目で見てくるサンザ。

「お主の考えていることは手に取るようにわかる。わしだけじゃない。おやかた様だってそう思っているぞ」

「アハハ……」

「まあ、金ヶ崎でしんがりを名乗り出たのも意外であったがな。しかも、全滅しなかった。あれはきっと、藤吉郎や明智十兵衛、それにお主でなければ出来なかった芸当であろう」

「いやあ、そんなことはないッスよ」

さすが、サンザはわかってんじゃねえか。どっかのブタマッチョとは器が違う。ま、だったら、俸禄ももうちょっと加増してくれたっていいと思うんだけどさ。

「して、用件はなんじゃ」

「あ、はい。あの、摂津池田に行こうかと思いまして」

「池田？　なぜだ」

「あ、いや」

ヘタレ村重と三好三人衆がつるんでいる可能性があるからとは言えないよな。だって、そんなことを言ったら、ヘタレ村重が潰されちまう。おれの金ヅルがいなくなっちゃうからな。

「ちょっと、まあ、先日のいくさのねぎらいに」

「そんなのは別に行かなくたって構わん。おやかた様がすでに使者を出しておる」

「いや、でも、あっしは筑後守の目付役なんで」

「何をまた」

と、急に笑い出したサンザ。げらげらと笑っていて、その声がやたらうるさい。

「確かに牛殿は目付役を仰せつかったかもしれんがな、誰も期待しておらん。今さら、ねぎらいの言葉などどんな風の吹き回しじゃ。柄でもないわ！」

大口を開けてげらげらと笑うサンザ。ぐぬぬ。笑いすぎだろ。何がそんなにツボにはまったんだよ。なんなんだよ、一体。おれが頑張ろうとすると、笑いやがって。

「あっしだって、それなりに頑張っているんスよ」

おれはむかっ腹を立てて唇を尖らせる。

「いやいや、それはわかる。わかるがな、お主の口からねぎらいたいなど、おかしくてたまらん。そもそも、お主はねぎらいをかけるほうではなくて、かけられるほうではないか」

むかつくなあ。金ヶ崎のときはめちゃくちゃおれを褒め称えていたじゃねえかよ。尾張武者の誉とまで言われたんだからな。それなのに、なんだよ、その雑魚扱いは。

「ちょっと、笑いすぎじゃないッスか」

「いやあ、すまんすまん。まあ、それはともかく、摂津には行く必要ない。それに、また、いくさが始まる。さっきも言っただろう。謹慎処分にしている猶予などないと。だから、お主も摂津に向かわせている猶予などないのだ」

い、いや、ちょっと待てって。

「あっしもいくさに出るんですか」

「勿論」

「だって、あっしには兵隊がいないッスよ。いくさに行きたくても行けないじゃないですか」

「そんなのはただ単に牛殿の直轄部隊がなくなっただけのことではないか。お主は将なのだから、おやかた様から兵が与えられる。無論、左衛門太郎もそうじゃ。侍大将になったのだからな」

「あっしは将じゃないッスよ。珍奇衆ですよ」

「何を今さら。珍奇衆など、いつの話じゃ。そんな役目を覚えている人間なんて、織田家中にいるのか？」

ぐう。

「だいたい、お主は左衛門尉ではないか」

「そうですけど」

「左衛門尉の官位は、今でこそどこぞの馬の骨かわからぬ者が自称していたりするから有名無実だが、れっきとした武家の官位であるぞ。そんな左衛門尉がいくさに赴かないわけないであろうが」

そんなこと言ったってさ、誰もおれのことを左衛門尉だなんて呼ばないじゃないの。相変わらず牛呼ばわりじゃないの。それなのに、武家の官位だからいくさに行けだなんて、騙された気分だよ。

「どちらにせよ、池田には向かわせん。むしろ、いくさのときまでに出来る限り沓掛勢を立て直せい」

フン。じゃあ、シラネ。ヘタレ村重が三人衆に脅されて、信長に牙を向けたってシラネ。どうせ、そんなことになったって、ヘタレ村重は即刻叩き潰されるだろうけどさ。

もぐもぐコンボ

沓掛勢を立て直せって言われても、おれに出来ることなんてないんですよ。

いや、おれに限ったことじゃない。さゆりんにだって、太郎にだって無理がある。だって、大勢死んじゃったんだもん。

そんな中でも、さゆりんと太郎は二人で市中近辺の浪人や孤児をスカウトするという涙ぐましい努力をしていたけれど、でもさ、そんな急ごしらえの軍隊を持ったって役に立たないだろ。元の沓掛勢は相当の訓練を積み重ねてきた連中なんだから。

おれはノータッチだから、何も言わないでいたけど。沓掛に関することは全部ノータッチ。軍勢も帳簿も。

最初は蚊帳の外でむかついたけど、今となってはどうでもいいかな。

ただ、岐阜で繁盛しているらしいシロジロに手紙を送り、収支をちゃんと報告するよう書いておいた。あずにゃんは手紙の中でシロジロが夢を語っているなんて言っていたけど、あいつの初期費用はおれの金なんだからな。団子屋も宝くじもシロジロの権益じゃない。おれのもんだ。

「そう考えると、ぼろ儲けしているタナカさんに指導してもらいたいッスよ」

「はい？」

「いや、なんでもないッス」

おれが暇人なのを知ってか、たまたま京に来ていたタナカに茶に招かれ、まずいお茶を飲んだあと、お菓子をもぐもぐ食べるおれ。

隣にもお菓子をもぐもぐ食べている変なのがいるけど。

「しかし、織田様は休む間もなく、また出陣ですな」

タナカがそう言うと、隣のエテ公は口から食いカスをぼろぼろこぼしながら言う。

「そりゃあ、あんだけのことをやられたんだぎゃ。おやかた様が黙っているわけにゃあ」
「いいんスか？」
おれが訊ねると、サルは首を傾げる。
「何がだぎゃあ」
「こんなところで呑気にお茶なんか飲んでて。もうすぐ出陣なら忙しいんじゃないんですか」
「おみゃあだって人のこと言えにゃあろうが」
「あっしは息子がいろいろと勝手にやってくれますもん」
「おりゃあだって小一郎がいろいろ勝手にやってくれるだぎゃあ」
規模が違うだろ、おれとサルじゃ。今の沓掛勢は百人にも満たない小所帯で、与力だってさゆりんだけ。侍大将のサルとじゃ大違いだわ。
あ、でも、太郎も侍大将か。
「お忙しい最中にこうして一息入れるのも悪くありますまい。まあ、木下殿はもう少し茶の湯を学ぶ必要があるかもしれませんがな」
「にゃっ」
ワロスｗｗｗ
おれも思っていたけど、汚いんだよ。茶の嗜み方ががさつだし、お菓子はこぼすし、本当に恥ずかしいぐらいだわ。やだねえ、田舎者は。
「何を笑っているんだぎゃあ」
「いや。笑ってなんかいないッスよ」
「おみゃあだって人のこと言えにゃあだぎゃあ。おみゃあみたいな牛が茶の湯なんて柄じゃないんだぎゃあっ」
「藤吉郎殿」
おれはサルの肩をぽんぽんと叩いてやった。
「わびさびですよ。茶の湯っていうのはね、わびさびですよ」
サルはじいっと睨んでくると、相当不愉快になったらしく、おれの右腕をぱちんと払った。

「牛殿は卑怯者だぎゃあ。おりゃあが京であくせく働いているときに、おみゃあは摂津や堺で茶会に招かれてばかりだったそうだぎゃあにゃあ？　おりゃあが働いている間に茶を覚えたからって、偉そうにするにゃ」

「まあまあ、木下殿。初めは慣れなくて当然です」

ぷいと顔を背けるサル。しかめたその顔は本当に猿顔。おれみたいな牛が茶の湯だなんてとほざいたけれど、自分だって猿じゃないかよ。

てか、馬鹿サルなんか相手にしているよりも、タナカに聞きたいことがあるんだった。

「タナカさん、最近、摂津池田の荒木村重殿とお会いになりました？」

「信濃守殿ですか？　いえ。お会いしておりませんね。どうかされました？」

「いや、別に。元気かなあって思って」

「おみゃあこそ、この前まで一緒にいくさをしていたじゃにゃあか」

まあ、言われてみればそうだけど、あのときのヘタレはしんがり役に青ざめていただけで、合戦中はどこにいたのかてんでわからない。どうせ、逃げ回っていたんだろうけど。

「しかし、聞いただけの話ですが、ご両人とも大層ご立派な退却戦だったそうですな」

タナカがにこにこしながら言うと、サルがにゃっはっはと笑い上げる。

「まあにゃあ。ありゃあ、守将が良かったからにゃあ。にゃあ、牛殿」

「調子に乗っていると、また、信長様に踏みつけられますよ」

「にゃ……」

途端にしょんぼり。どうやら、武攻を上げたことを忘れられるぐらい、信長からの折檻はトラウマなのかもしれない。ざまあｗｗｗ

いや、ざまあじゃない。おれも一度ボコられている。確かにあれ

はトラウマ。
「おりゃあは今度の小谷攻めで、あのときの失態を帳消しにするだぎゃ。なにしろ、おりゃあには秘策があるからにゃ。おやかた様も大喜びの秘策があるだぎゃ。牛殿、知りたいきゃあ？　知りたいだぎゃあろ」
「いや、いいッス」
どうせ、ろくなことにならないし。
「にゃんだぎゃ。おみゃあとおりゃあは二人一組でにゃあか」
「いや、いいッス」
「そうかえ。ああ、そうかえ。牛殿は官位を頂戴したからって、おりゃあにまでそういう態度だぎゃあかえ」
「どうせ、ろくなことじゃないっしょ。だいたい、考えていることなんてわかりますよ。大方、小谷城に忍びこんで、市様を連れ出して、信長様に褒められようって魂胆なんでしょ」
「にゃ、いや」
「ほら。あっしはやらないスからね。そんな危ない真似は。だいたい、どうして侍大将にまでなっておいて、そんな忍びの真似事をしようとするんスか」
「うるさいんだぎゃあっ！　おみゃあ、尾張の野良牛だったくせに、言うようになっただぎゃあにゃあっ？」
「あんたこそ、ただの野良猿だったでしょうよっ！」
「まあまあ、お二人とも」
タナカが茶坊主に変なお菓子を渡し、茶坊主がおれとサルの前にそれを出してくる。
「それは小麦粉を溶いて焼いたものです。吟味してくだされ」
むう。おれはサルと睨み合いながらも、同時にお菓子に手を伸ばし、口に入れる。ふむ。なんか甘辛くて不思議な味だわ。パンケーキのような、それでいてソース無しお好み焼きのような。
「まあまあだぎゃあにゃ」
と、言いつつ、二切れ目に手を伸ばし、もぐもぐと食べるサル。

「まあまあッスね」
と、言いつつ、三切れ目に手を伸ばし、もぐもぐと食べるおれ。
「まあにゃ、こうして不思議な菓子を食べられるだぎゃ、茶会も悪かにゃあ」
「そうッスね。あっしも、お菓子が食べられるから来ているようなもんスよ」
にゃっはっはと笑い合うサルとおれ。タナカは苦笑いしていたけど。

第六天魔王の産声

バチンッ！

ウウッ。なんで、どうして。

「このたわけがっ。官位を受領した日に乱闘騒ぎを起こすなど大したもんじゃねえか、あーっ？」

部屋に入って来、平伏した途端に扇子で引っぱたかれたおれ。更に足の裏でごりごりと頭を踏みつけられる。

「俺はなあっ、調子に乗る奴が一番腹が立つんだっ！これだけ、目をかけてやってやがるのに、お前もサルもすぐに調子に乗るからなっ！　お前らには規律ってものがねえのか、あーっ？」

信長の野郎、めっちゃごりごりしてくる。もうさ、後頭部も痛いし、額も擦り切れそうだし、なんなんだよ、この鬼は。

「すいませんっ。すいませんっ」

「まあ、おやかた。その辺にしてやれい。牛太郎は内蔵助に絡まれただけなのじゃ」

と、村井のジジイが止めてくれて、信長は舌打ちをしながらも上座に戻る。

「血気盛んな連中じゃ。よくあることじゃろ」

ジジイがなだめてくれて、信長はフンと鼻先を突き上げながらも、怒りはどうやらおさまった様子。てか、信長はこのジジイの言うことを聞くのか。

「まあいい。じいさんは出て行け。牛と二人で話があるからな」

村井のジジイが部屋を出て行き、二人きりにさせられる。なりたくなかったけれど。また、ボコられるんじゃなかろうか。

「表を上げろ」

「は、はいっ」

顔を上げると、信長はぎろりと目を据わらせたまま、首をやや傾げておれを睨みつけてくる。

ううっ。怖い。なんか、上洛した時期から凄味が増してきている。
「お前の言う通り、新九郎が裏切ったな」
「あ、いや、そ、そうッスね」
「だったら、あのとき、越前に入らなければ新九郎は裏切らなかったと思うか」
「それは、どうか……」
「新九郎どころか市さえ裏切りおった。盟約を破棄したというのに、あいつは斬られもせんし、戻ってもきやしねえ。市は浅井に身を委ねたっていうことだ。すべて、お前のせいだ。なぜ、それがわかっていたというのに、市を新九郎に輿入れさせた」
「あ、いや……」
「なぜだっ！」
やばい。背筋が震えてきた。これはひどい状況に置かれている。これは本当に斬られちゃうじゃないの。
「答えろ。黙っていないで答えろ」
「うう。あ、あう」
信長は貧乏ゆすりを始めている。かなり苛立っている。終わったわー。こればかりは終わったわ。オワタじゃなくて、終わった。何を言っても駄目だろ。
「あ、あっしは、そのう、の、信長様のために。信長様の夢のために」
「市を敵に回してまで、俺のためだと申すのか。あ？」
やっぱり駄目だ。もう、この馬鹿は修羅モードに入りかけている。何を言っても聞く耳を持ってくれない。
「そ、そ、それが修羅道じゃないんスか」
と、開き直ってしまったおれ。
「なんだと？」
「天下布武への道は修羅の道ッス。の、信長様のやろうとしていることは、この世をぶっ壊して初めて成せる事業ッス」
信長はぐっと拳を握り、おれを殺意の目でぎらぎらと睨んでくる。

「それができないんだったら、浅井長政や市様を敵に回したくないんだったら、足利義昭に降伏するしかないッス。そうすれば、平和な日々を送れます」

「言わせておけば、ぬけぬけと」

おれはこのとき覚悟を決めた。もう、どちらにしろ殺されるんだから、言うだけ言ってやろうと思った。太郎やあずにゃん、家の連中には申し訳ないが、シスコンの信長が腹立つんで、もういいや。

で、おれは立ち上がって、吠えた。

「信長様はもう尾張一国の信長様じゃないんです！　田舎でのうのうと寝そべっている武田や上杉とは訳が違うんです！　死ぬまで戦うしかないんス！」

信長は眉間に皺を寄せ、唇を引き締めておれを苦々しく見つめてきている。

「あ、いや、すいません」

信長がなんだかおとなしくなってしまったので、おれも熱が引いて、ちょっと後悔。顔色を伺いながら、恐る恐る着座する。

信長はおれから顔を背け、すっかり憂いじみてしまった眼差しで、あっちのほうを向いている。

「変わったな」

信長はぼそっと呟いた。そうして、あっちを向いたまま口端を緩めながら言った。

「そうだな。お前もそれなりに死地を突破してきたからな。お前みたいな者など、すぐに死んでしまうかと思っていたが、なかなかどうして、運だけで生き残ってきたわけでもなさそうだ」

急に優しくなっちゃって、逆に怖いんですけど。

「牛」

「はいっ」

「修羅道に入るか」

信長はにやりと笑っていた。笑っていながらも、その目は冷たく沈んでいた。魔王に、覚醒、ですか。

「俺はもはやお前に助言を求めん。おれが戦い続けることで天下に武を布き、新しい世を創りあげられるのなら、おれは地獄に堕ちたあとでも戦い続けてやる」

それが、と、信長は言葉を繋げながら立ち上がり、おれを睨み下ろす。

「お前の言う覇王への道なんだろ」

ううっ。やべえ。適当なことを抜かしたら、信長にスイッチが入っちゃったみたい。てか、そんなことでスイッチが入っちゃうなんて、やっぱり、信長の野心ってのは並々ならないんだな。ま、民主主義国家にしたいなんていう滅茶苦茶なことを言っているけどさ。

わかんないよ、そこの感覚が。自分が王様になりたい野心じゃなくて、自分がこの国を変えたいっていう野心がわかんない。たった、それだけの野心をここまで燃やすか、普通。頭がおかしいんだろ。

きっと、織田信長っていう馬鹿の芯にあるのは少年なんだわ。気難しさの鎧を着ている超単細胞人間なんだわ。

「牛、報復戦だ。浅井を皆殺しにしてやろうじゃねえか。もはや、新九郎も市も関係ねえ。敵は全員八つ裂きにしてくれてやる」

まさか、おれの言葉で吹っ切れるなんて。なんか、関わり合いたくなくなってきたな……。

人間・織田信長

次の日、覚醒した信長は在京の将たちを集めて甲高い声を飛ばした。

「浅井を皆殺しにしてやる」

そうして、一同をぎらりと睨めつけていき、

「異存はねえな」

異存どころか、マタザやウザノスケといったＤＱＮたちでも固唾を飲んでしまう迫力。もうね、信長の背後には燃え盛る炎が見えるんじゃないかってぐらいのとんでもないオーラをびしびしと放っていたね。

「市すらも斬り伏せる。俺にはその覚悟が出来ている。お前らにその覚悟はあるだろうなあっ！」

全員が目も合わせられない。頷くこともできない。ただ、うつむきがちにこの時間を耐えているだけ。

「答えろっ！」

「ありますっ！」

誰かが声を上げると、皆、頭を下げて平伏し、従順の意を示した。おれでさえ思ったんだから、多分、皆が思っていただろう。いくさには慎重だった信長が「皆殺し」なんていう言葉を使うなんてかつてなかった。でも、その裏には物凄い悲愴な決意が隠されているのを感じる。だから信長は怒り狂っている。悲愴さを打ち消そうとして怒り狂っている。

じゃなければ、天下布武は達成できない。そんなことを暗に含めるような怒りようだ。

「総力を上げて叩き潰す」

信長は、岐阜に戻り、態勢を万全なものにすると言った。

京には村井ジジイとわずかな兵数しか残さないで岐阜に戻り、そこで軍勢を再度結集させて、北近江に出陣したいらしい。

もちろん、京に軍勢を残さないとなると、本圀寺の事件のようになるんではないかと、十兵衛が述べた。
「知らん」
信長は言いながら顎を突き上げ、目を剥き出した。
「放っておけ。京を乗っ取られたらそれまで。すぐさま取り返し、我らが痛みを数倍に返してやるだけだ」
「し、しかし――」
「黙れっ！　今度のいくさこそ、我らの恐ろしさを天下に見せつけてやるいくさだ！　俺に刃向かう奴は只では済まさぬということを、今回、はっきりと見せつけてやる」
十兵衛はもっと何かを言いたげな表情だったけれど、信長の気迫に圧倒されたのか、
「かしこまりました」
と、頭を下げた。
「いいか、お前ら」
信長は再度ゆっくりと一同を睨みつけていく。
「かつて天下の才配を握ろうとしていたのは今川義元殿であった。だが、義元殿を殺したことによって、それが俺に回ってきた。ならば、俺がやらなければ、誰がこの戦国の世に終わりを打つ」
信長がこんなことを将の前で言うのは初めてだ。それぐらい信長が燃え上っている証だった。おれたち一同はじっと耳を傾けるしかない。
それもそうだ。桶狭間の戦い以来、苦難はそれなりにあったけれど、とんとん拍子でここまで漕ぎ着けられたと言っても、あながち間違いじゃないからな。
だからこそ、浅井長政の裏切りはショックだったし、今こそ、そのショックを打ち返すしかない。
この信長の決意を一言一句までもらすまいとしている結果、将たちはじっと沈黙しているんだ。
「我らはここに至るまで、多くの者を殺した。そして、これからも、

進むべき道を邁進する我らに刃向かう者を殺していく。そんな我らがなんの犠牲もなく天下への道を進めるなど俺は思ってもいねえ。むしろ、殺される者たちよりも殺していく我らのほうが、抱えるべき苦しみは大きい」

そのとき、うつむいているだけだった諸将の目はすべて信長に向けられていた。皆、信長の見る目は変わっていた。

「何の犠牲もなくこの戦国の世を終わらせられるならとっくに終わっている。しかし、犠牲を払ってまでこの時代に終止符を打つ者が現れなかった。なぜならば、戦い続けることを恐れているからだ」

信長は眼差しをぎらつかせた。

「俺は一生涯戦い続けるぞ。浅井とのいくさの最中に三好が出てきたら、次の日には三好と戦う。三好とのいくさの最中に武田が仕掛けてきたら、次の日には武田と戦う。畿内、東海、北陸、毎朝毎晩駆け巡ってやる」

そうして、信長は腰を上げ、一同を見下ろした。

「そんな俺についてこられない人間は、坊主になって高野山にでも行け。出立は明日だ。岐阜に行くか、高野山に行くか、考えておけ」

信長はそう言い残して広間を出て行った。

静まり返った広間。信長って一体何者なんだろうと改めておれは思う。好奇心旺盛で悪戯好き。短気だけど気難しい。ときには結婚相手を見繕ってもくれる。魔王に覚醒したのかと思いきや、殺していく人間のほうが抱えるべき苦しみは大きいなんていうことを言い出す始末。

でも、人間臭いって言ったら、人間臭いかな。おれには覇王の織田信長っていう先入観があるから、信長をいまいち掴めないのかもしれないけど、本当はおれなんかと同じ人間なんだよな。おれたちと同じで弱い部分もあるんだろうな。

ただ、一つだけ、凡人のおれなんかと違うのは、覚悟ができているってことなのかもしれん。死ぬ覚悟じゃなく、どんな苦しみの中でも生き抜いてやるっていう強烈な覚悟が。

「坊主になどなる者は誰もおるまい」
サンザが口を開いた。
「言われなくても、おりゃあには覚悟ができておりますぎゃあ」
「お前になんか聞いてねえぞ」
顔に青タンができているウザノスケがちょっかいを出すと、こちらも青タンマリオが眉をしかめ、
「お主こそ口出しするな。愚か者が」
と、言われてしまって、さすがにマリオには逆らえないウザノスケはしょんぼり。
すると、マタザが急に腰を上げて、吠えた。
「喧嘩などしている場合ではなかろうが！　どうして、そう、お前たちはくだらぬことで喧嘩をするのだ！」
シラーッ。皆、出奔までしたマタザには言われたくないって顔。
「拙者は喧嘩をしてすっきりしました」
おれの隣のボコボコ顔の太郎がにっこり笑いながら言う。笑ってもボコボコだから気色悪いだけだけど。
「喧嘩をしてわかったのですが、佐々殿が坊主にならなければ、織田は常勝軍団に違いありません。なにしろ、あの暴れっぷりに浅井朝倉は適いませんでしょう」
太郎のジョークにあっはっはと笑い出した一同。
「フン。そんなことを言ったってな、いくさ場でお前のことなんか助けてやらねえからな」
「そんなことばかり言っているから、内蔵助は喧嘩になるんだろうが」
「又左にだけは言われたくねえよ」
すると、また、笑い出す一同。信長がいたときの緊張感はどこへやら。和気あいあいと、結束しつつある。
ま、おれはおもしろくないけどね。太郎が侍大将になって、こうやって顔を並べられるようにまでなったけどさ、そのせいですっかりおれの影は薄くなっている。おれだって喧嘩に参加していたぜ。

てか、ウザノスケが最初に仕掛けてきたのはおれじゃんか。それなのに、忘れられた存在だもんな。それもこれも、太郎がジョークまで飛ばすほど出世しやがったからだ。

おもしろくない。

ウザノスケ嫌いのサルもおもしろくなさそうに、ウザノスケを睨みつけていたけど。

泣いていないから

翌日、わずかな手勢を置いて、京を出立。

しようとしたけれど、信長の元に早馬が飛んできたみたい。なんでも、六角承禎・義治親子が挙兵したんだって。

なんなんだよ、一体。おれは思わず笑っちゃったよ。六角なんて、もう、過去の人間だろ。タツオキもそうだったけど、逃亡したくせに、どんだけしぶとい連中なんだよ。ある意味、尊敬するわ。

「どうやら、六角親子は甲賀流を率いているそうです」

太郎ちゃんはさすが侍大将ッスね。信長本隊だけに伝わってきた情報なのに、さすがッスね。いやあ、大したもんだよ。クソが。

「京から岐阜の途上にくさびを打つつもりなのでしょう。そうすると、おやかた様は岐阜に向かえません。おそらく、浅井と連携しているでしょうね」

信長の速攻即決の戦い方を知っている浅井長政は、報復戦に打って出る織田方の気配を察し、六角親子に時間稼ぎをさせて、越前の朝倉と共同で迎え撃つ態勢を整えたいのだろうという太郎の長い話。

はいはい。わかりやすい講釈御苦労さん。

それに、太郎の話を聞いて複雑そうな顔の男女が横に。ま、無言に徹していたけれど。

で、岐阜に戻るのはやめるかと思いきや、進路を変えて向かうことになった。琵琶湖沿いを行かずに、南近江から伊勢に抜ける山道を使うらしい。

別にどっちでもいいけど。遠回りな分だけ面倒だけど、岐阜に帰れると思えば、無駄に京に居座っているよりはいい。

あずにゃんに会えるしね＾＾　ぐふふ。

てか、いくさに行くのも、なんとかごまかしてやめようかな。太郎がいるし、さゆりんもいるんだから、適当にやらせておけばいいだろ。

いや、ちょっと待てよ。冗談じゃなく、結局のところ、沓掛勢は誰が率いるんだ。おれなのか。太郎なのか。

どちらにしろ、百人そこそこだから、どうでもいいっちゃ、どうでもいいんだけど。

市中を出て、南近江から山道へ。六角ゾンビ親子が挙兵したっていう話なので、進軍はなかなかピリピリしていた。また、岐阜に戻れば、すぐに報復戦に打って出るということなので、将から兵まで、結構な鼻息の荒さでもあった。

おれはどうでもよかったんだけど。なんかさ、金ヶ崎のいくさ以来、気が入らなくなったな。燃え尽きちゃった感じ。金ヶ崎以前は、いくさ場で活躍したいあまりに火縄銃の調達に奔走したり、金ヶ崎のいくさの最中には奮い立ってクリツナと一緒に暴れたりしたけど、なんだかなあ、気が入らない。

やっぱり、沓掛の連中をあの世にお見送りしちゃったのが、やる気を失わせているよな。結局、手柄欲しさに奔走したって、死ぬ奴が大勢いるんだもの。しかも、おれが頑張ろうとすればするほど、死んじゃうんだもんな。やるせないよ。次のいくさで、残った沓掛勢百人が生き残れる保証なんてまったくないんだから。むしろ、高い確率で死んでいくんだから。

信長はさ、犠牲を払うしかないだのなんだの言っていたけど、おれは信長になれないよ。おれを慕ってくれている奴らが目の前でふっ飛ばされていくのは、もう、見たくはないな。

でも、こんなことは口に出して言えないよ。だって、戦国時代なんだもの。

千草街道という山道を抜けて伊勢へ。そこから清州経由で岐阜に到着。

途中、千草街道で信長が木陰から誰かに火縄銃で狙われたみたい。弾はかすっただけらしいけど。きっと、下手くそだったんだな。さゆりんや、沓掛鉄砲隊なら一撃必殺だったはずだ。信長を狙ったスナイパーは姿をくらましたみたいだけど、顔洗って出直してこいや。

岐阜に入ると、本隊とは離れ、毎度おなじみ願福寺に沓掛勢を置こうとやって来たのだけれど、むう、改修工事をしている。奇進札で儲けてやがるんだな。

おれは住職に一言申したい気持ちだったが、頭カチカチ太郎がいるので我が家にさっさと戻る。

「お帰りなさいませ！」

例のようにお貞とあいりんが平伏してお出迎え。

「旦那様ァ！　お帰りなさいませえ！」

シロジロが菜箸を握ったまま駆け込んできた。

「今日は旦那様が帰ってこられるって聞いたんで、店を閉めて夕飯の支度に取りかかっているッスから！」

「御馳走みたいですよ」

うふふ、って、あいりんが笑う。

すると、勿体ぶっていたかのようにあずにゃんが登場。

「お帰り。亭主殿、太郎」

あずにゃんは目尻を緩ませていて、毎度のように怒っていない。

おれはちょっぴり幸せを感じる。これだよ、これ。労働から帰ってきたあとの、家族の団らん。

「早之介も栗之介も無事で何よりじゃ。誰ひとり欠けることなく、皆が顔を合わせられるとは、この上ない喜びじゃ」

嫉妬しているっぽいさゆりんも、無神経なねじり鉢巻きも、このときばかりは照れ臭そうに笑んだ。

「ささ、皆さん、御足の汚れを落としてください」

「お風呂も沸かせてありますからね、旦那様」

お貞とあいりんが桶を出してきて、

「ありがとう」

と、あいりんに優しく微笑みかけながら、上がりかまちに腰を下ろした太郎。

「おれはクリツナとクロを馬屋に入れてくるわ。四郎次郎、あいつらにも御馳走させてくれるんだろう」

「もちろん。クロの好物の人参も、クリツナの好物の林檎も今日のために取り寄せたッスから」
「なんじゃ、四郎次郎。あれはクロとクリツナのためだったのか。わらわはてっきり自分たちが食べるものだと思っていた」
「奥方様、この家で一番働いているのは奴らッスよ」
「あはは。母上、言われてみれば確かにそうです。拙者も父上も彼らがいなかったら、帰ってこられませんでした。良かったですね、栗之介。四郎次郎が気の利く男で」
「まあ、御馳走すぎっかな」
あっはっはと笑いが玄関先に響き渡る。
……。
さゆりんがにやにやとしながら、肩に手をぽんと置いてきた。
「殿、どうしたのです」
「どうもしねえよ！」
おれは瞼を腕でごしごしと擦った。目から変な汗が出ただけだ。泣いてなんかいねえから。清州のボロ家に住んでいた野良牛のおれが、なんとかこうして家族の団らんを味わえるようになったからって、感慨深くなっていたわけじゃねえから。
「旦那様も泣くんスね」
「泣いてなんかいねえよっ！」
おれは泣いていないから。変な汗が出ているだけだ。あいりんが勝手に泣いているけど、おれは泣いていないから。
「父上、誰かが言っていましたよ。男が涙を流すのは母御が亡くなったときと、いくさに勝ったときだって。いいんじゃないんですか。父上はいくさに勝ったようなものなんだから。勝って、ここにまた帰ってこられたんですから」
「偉そうな口叩くな！　小僧のくせによっ！」
おれは目から汗をだくだくと流しながらも、桶に足を突っ込み、ばしゃばしゃと洗ったあとに、奥の部屋の中に逃げ込んでいった。
泣いていないから。また、いくさなんだからよ！

シロジロの背信

挙兵した六角ゾンビ親子を殲滅するために、すでに佐久間ヒゲオヤジとゴンロク率いる軍勢が出撃しているらしい。

ゾンビ親子を放っておくと、浅井勢との戦いのときに挟み打ちにされちゃうみたい。

浅井との決戦は、とりあえずはゾンビを倒してからなので、岐阜に戻って来てからすぐに出陣ということにならなくてラッキー＾＾

この空いた時間を利用して、太郎やさゆりんなんかは沓掛勢の兵力を増やすため、城下にスカウトに出かけた。

おれはあずにゃんと一日中にゃんにゃんしたいところだったけれど、昨晩、あずにゃんが久しぶりに茶をたてたいとか言っていたので、おれはスカウトをしに行く振りをして我が家を脱出。

茶会は何度も経験しているから、別に構わないんだけど、あずにゃんは作法だの何だのっていちいちうるさいから気が休まらないんだよな。

それに、おれには気になることが二つある。奇進札と団子屋だ。どれだけ儲けてやがるのか突き詰めてやる。

ということで、ゼニゲバ願福寺に向かう。

岐阜の城下は明日か明後日にでも出陣ということで、あわただしい。といっても、攻め込まれるあわただしさではなく、各地から集まってきている雑兵どもが束の間の休息を利用してぶらぶらしていたり、それを相手に商売している連中が声を上げていたりと、活気のあるあわただしさ。

斎藤タツオキを追い出した直後のころを思い出すと、岐阜も賑やかになったものだと思う。なにしろ、天下の信長の本拠地だもんな。家臣団の家族の大多数がここに住んでいるわけだし。

ゼニゲバ願福寺に着くと、早速、寺の坊主に住職の光才を呼びつけさせる。

「ああ、篠田殿、これはこれは」
むう。おれにたかりに来たときはぼろぼろの身なりだったくせに、今では袈裟がずいぶんとピカピカしているじゃねえか。ふざけやがって。
「和尚、本堂を改修していて、ずいぶんと羽振りがいいじゃんか」
「いやあ、はっは。おかげさまで願福寺も見違えました。これもひとえに篠田殿、中島殿のおかげでございます」
「ふーん。で、札は全部でいくら売りさばいているのよ」
「売り上げでございますか。それなら中島殿におしらせしていますが」
「いいから言え」
「あ、え、えーと、確か、春先にやった二度目の奇進札は、およそ千五百貫だったと」
は？　千五百だと？
おれは怒りのあまり、光才の襟首を引っ掴み、柱に体を押し付けた。
「テメーっ！　どんだけ儲けてやがんだ、あーっ？　そんだけ儲けてやがって、なんで投資家のおれには百貫しか回ってこねえんだ、あーっ？」
「そ、そんなはずありません！　篠田殿には売り上げの三割を戻すと最初に決めたとおり、拙僧は三割をきっちりと中島殿にお渡ししておりますっ！」
なんだとォーっ？
おれは光才の干からびた首から手を離すと、咳込むジジイを尻目に本堂を駆け出た。
シロジロの野郎！　千五百の三割って言ったら五百じゃねえか！
それなのに、年末ジャンボ宝くじも、春のドリームジャンボ宝くじも、あいつの報告だと年末は百貫、春は二百貫しか貰っていねえはずじゃねえか！
あの野郎あの野郎あの野郎！

横領して貯め込んでいるんだな。俸禄を上げてやるっていう話を昨日してやったのに（太郎が）、あの野郎。

沓掛城の帳簿をおれの預かり知らないところで管理していたのはいい。よくないが、実質は太郎の命令でやっていることだから勘弁してやる。

だが、今回ばかりは許さん。ぶっ殺してやる！

そうだ。このさい、今まで一度も使わずに封印していた真・無双奥義で叩きのめしてやる。

願福寺を出たおれは城下を一心不乱に歩いた。腰のアケチソードを握りしめながら、瞳をぎらぎらと燃えたぎらせた。

こうなったら、団子屋もろとも破壊してやる。あの馬鹿のやってきたことは全部ぶち壊してやる。

で、団子屋はどこにあんのかな。

むう。そういや、あいつが団子屋をやっているのを知っているだけで、どこにあるのかは何もしらねえ。チッ。また、おれの管理不行きか。だから、あの野郎を好き勝手にやらせちまうんだ。クソッ。おれが甘すぎるんだ。半兵衛も言っていたしよ。

家の女どもなら団子屋の場所を知っていそうだけど、家に帰るとあずにゃんに捕まりそうだしな……。

「あれー、簗田さんじゃない☆」

ぐっ。チ、チヨタン……。可愛いけど……。

「どうしたんですかあ、そんな怖い顔をして」

チヨタンは年増の侍女を一人連れていて、そいつが持っている籠には野菜がたくさん詰まっている。木下勢のイエモンも岐阜に帰ってきているから、ご馳走でも振る舞うのか買い出しに出てきていたっぽい。

様子を見ている限り貧しさは通り越せたのかな。

「ねえねえ、簗田さん、敦賀のいくさで大活躍だったんでしょ」

チヨタンは昔と変わらないきゃぴきゃぴした目をしながら、おれの腕に腕を回してくる。い、いや、おれ、今は奥さんがいるから、

そういうのはちょっと。
「いやあ、そんなことはないよお／／　イエモンだって決死の覚悟で頑張っていたしさあ。みんな、大活躍だったよお」
「えーっ。旦那様はきっと活躍してないでしょ。旦那様ったら自慢しているんだよ。決死隊になって、朝倉様の軍勢を食い止めたなんて。でも、決死隊なのに、生きて帰ってきているなんて、おかしいもん」
　よくご存知で。なんなら、おれのところに来てもいいんだけどね。イエモンに愛想を尽かしたら、いつだって、ウェルカムだから。ま、側室だけど。
「ほんと、旦那様も簗田さんを見習ってほしい。官位も頂いたんでしょ。藤吉郎様と一緒に。すごいよね」
「いやあ、大したことじゃないよ」
　ほっほっほ。当たり前だ。イエモンなんかと一緒にすんな。ま、愛想を尽かせたら、いつでもウェルカムだけどね＾＾
「太郎ちゃんも侍大将になったんだってね。あ、さっき、太郎ちゃんにも会ったんだ。ちょっかい出そうとしたら、忙しいからって逃げられちゃったけど」
「あいつは堅物だからな」
　おっと、太郎がこの付近にいるってことか。あんまりチヨタンにでれでれしていると、シラーッとされちまうから、さっさと団子屋に襲撃に行かないと。
「そういや、うちの馬鹿がやっている団子屋ってどこにあるか知っている？」
「馬鹿？」
「あ、いや、シロジロっていう奉公人がいるじゃん」
　すると、チヨタンは連れていた侍女と顔を合わせ、お互いに首を傾げる。
「加納にある団子屋のことでしょうかね、みたらし団子とやらで近頃評判の」

「そう、それだっ。どこにあんの」
「それって、築田さんの奉公人がやっているの？」
「そう。おれの家のシロジロっていう馬鹿がやっているんだ。どこにあんのよ」
「ふーん」
チヨタンはぼんやりとおれの顔を眺めたあと、にこっと笑った。
「じゃあ、連れて行ってあげる☆　あなたは家に先に戻っていて。私は築田さんのことを案内してあげるから」

団子屋

チヨタンに案内された先には、宿屋や食堂が並ぶ中、ずらりと行列を作っている一軒の店が。

まさかと思ったら、行列の最前が団子屋だった。

嘘だろ。どうして、団子屋ごときにこんな行列ができているのよ。確かにシロジロの作るみたらし団子はうまいかもしれないけれど、そうは言ったってねえ、たかが団子じゃん。

老若男女、町人から旅人、雑兵どもまで列を成している。

「ねえ、あれでしょ。私も食べたいなあ。ねえねえっ。いつも混んでいて、なかなか食べられないんだよねえ」

チヨタンがおれの腕を取っておねだりしているんだけど、団子屋を遠目にしていたら、外の縁台に座る客に団子を運んでいる給仕の娘がすごく可愛いくて、ぼんやりと眺めてしまうおれ。

タイムスリップしてきて以来、一番可愛いかもしれん。おれのおにゃの子ランキングでは、今まで市姫が断トツのクイーンだったけれど、あの娘は市姫と五分、いや、町娘のきゃぴきゃぴしたとっつきやすさが醸し出されていて、きゃわわ度は市姫を超えている。

おれは、もうちょっと近くで見たいので、引き寄せられるようにして団子屋に近づいていく。

「ねえ、簗田さん、お団子お団子」

「はーい、お待たせしました。みたらしでーす」

ふひ。近くで見ると、より可愛い。顔が小さくて、体も華奢で、唇がぷるっと大きめで、大きな目がちょっと垂れていて、しかも、客に団子を運んでくる姿がねえ、小さいのにすっごく頑張っている。ちょこまかと笑顔で一生懸命。うーん、いいじゃないですかぁ～＾＾

「おい、ちゃんと並べよ！」

突っ立っていたら、列の中の旅人みたいなごつい男が突っかかってきたので、おれはチヨタンと共に渋々列の最後尾に。チッ。おれ

はオーナーなのに。
　でも、店が忙しすぎてシロジロを呼べるような状況でもなかったし、まあ、いいや。破壊するのもやめ。あの看板娘が可哀想だからな。
　看板娘？
　列に並んでいたら、ふと思った。列を成しているのは確かに老若男女だけれど、男のほうが多い。
　こいつら、もしかして、団子よりも、あの娘目当てで来ているんじゃねえのか。
「でもさ、ここって本当に簗田さんに奉公している人がやっているお店なの？　ここって、いつも並んでいるんだよ。すごい繁盛しているんだから」
「そうだよ。だって、みたらし団子を作らせたのはおれだし。ま、勝手に店を出しちゃったんだけど」
「ふーん。いいなあ。あいりちゃんとたまに会ってお話しするけどさ、簗田さんちってお金持ちだよねえ。奥様は茶室を作ったんでしょ。それに太郎ちゃんも物凄い俸禄を貰っているんでしょ。いいなあ。あいりちゃん、幸せだよね」
　まあ、サルに騙されて貧乏暮らしをしているイエモンなんかに嫁いだチヨタンが馬鹿だったわけだから。イエモンなんか、まったく活躍してないし。あいつの俸禄が上がったのだって、親分のサルが頑張っているおかげだろ。
　そう考えると、おれって先見の明があるよな。タイムスリップ男だからっていうのもあるけど、鉄砲隊を結成したし、宝くじを始めたし、みたらし団子を作らせたしさ。
　まあ、おれを裏切って私腹をこやしている奴がいなければ、万々歳なんだけどよ。
「ごめんなさーい、今日は品切れになっちゃいましたあ」
　看板娘の声がして、行列がぶうぶう騒ぎ始めた。
「ごめんなさい。明日また来てね」

看板娘が行列を作っていた人たちに笑みを浮かべながら謝っている。不平を垂らしていた連中、特に雑兵あたりが、看板娘のきゃわな笑顔に、

「しょうがないなあー」

とか言って、それだけで満足げな表情を作る奴もいれば、なぜか、看板娘に握手を求めている馬鹿もいる。

「お団子食べたいよお。簗田さん、主人なんでしょ。無理やり作らせてよ」

「せっかく並んでくれたのに、ごめんなさい」

行列は散ったというのに、看板娘が突っ立っていたおれとチヨタンに律儀に謝りに来た。うーむ。可愛いなあ。本当に可愛い。

「あ、あのさ、おれ、シロジロの主人なんだけど、シロジロに用があって来たんだよね」

「えっ？　簗田様ですかっ？」

「そうそう」

「で、でも、簗田様はまだお若い方だって聞いているんですが」

看板娘は怪訝な目を向けてくる。ぐう。あの野郎。もしや、自分の主人は太郎だって従業員に言っているのか。あの野郎っ！

おれは看板娘の可愛さに忘れていた怒りを再び蘇らせて、客の姿がなくなった店の中に乗り込んでやった。

「おいっ！　シロジロっ！　出て来やがれっ！」

「なんだ、テメーはっ！」

うっ。店の奥から右頬に大きな刀傷のあるスキンヘッド男が飛び出てきて、いきなり、おれの襟首を掴んで持ち上げてきた。

「また、どこぞの不逞な野郎か。こら」

ううっ。なんなの、この用心棒。

「あっ、旦那様っ！　新七、や、やめんか！」

シロジロが飛び出してきたけど、時すでに遅し、シンシチとかいうふざけた奴に鉄拳を食らっていた。

店の中の縁台を薙ぎ倒しながら、吹っ飛ばされたおれ。ううっ。

痛い。てか、こんな強い奴、団子屋でなんか雇うんじゃなくて、おれの兵隊とかにさせろよ。クソが。

「だ、大丈夫ッスか、旦那様！」

シロジロがあわてて駆け寄って来て手を差し伸べてきたけど、それを振り払う。

「大丈夫なわけねえだろうが。クソ野郎」

おれはよたよたとしながらも立ち上がり、縁台に座って、おろおろとしているシロジロに怒鳴りつける。

「頭が高えんだよ！　土下座しろ！」

「は、はいっ！」

シロジロはその場にすぐさま膝をつき、スキンヘッドも泣きそうな顔をして土下座。看板娘も土下座。

「あ、キミはいいよ。ここに座りなさい」

「え、で、でも」

困惑した顔でシロジロとスキンヘッドに目をやる看板娘。うーん。泣きそうな顔もすこぶる可愛い。その華奢な体をぎゅうって抱きしめたくなっちゃう。

「簗田さん、お団子食べたいんだけど！」

チヨタンがいつのまにか店に入ってきて騒ぎ始めたので、とりあえず土下座はやめさせて、シロジロの馬鹿に用意をさせる。奥に引っ込んだシロジロとともに、中へと逃げていったスキンヘッドと看板娘。

「でもさ、さっき、あの子に、ご主人は太郎ちゃんみたいなことを言われていたよね」

と、チヨタンがにやにや。むかっ。つうか、このアマ、案内してくれるだけだったんじゃねえのかよ。団子が食いたいだなんて、どこまであつかましいんだ。それに、今からシロジロを追い詰めるんだから、さっさと消えてくれや。

「それはそうと、キミはなんていうんだい」
「え、あ、彩です」
ほうほう。あーやね。いいじゃないですかぁ～＾＾
む。そういや、太郎とあいりんが結婚するわけだから、女中が一人足りなくなるんだったな。ならば、あーやを引き取るには調度いいな。あずにゃんにも大義名分が立つしな。
「そうそう。シロジロ、団子屋は明日で閉店だからな」
「えっ？　な、なんでですか！」
土下座をしているシロジロが飛び上がって声を出したので、おれは縁台から立ち上がると、顔面を蹴飛ばしてやった。
「なんでですかじゃねーよっ！　このゼニゲバ野郎っ！」
同じく土下座をしていたスキンヘッド男が拳を握りしめながら立ち上がろうとして、おれは睨みつけながら唸った。
「また、おれに手を出そうってのか、ん？」
スキンヘッドは唇を引き絞りながら着座。フン。おれは金ヶ崎の死闘を潜り抜けてきた男だ。団子屋の用心棒なんか屁でもねえ。
「シロジロは今日でクビだ。タコ入道、お前は沓掛勢に入れ。あーやはおれんちの女中ね＾＾」
「な、なんでですか、旦那様！　急にそんなこと言われたって、理由を聞かなきゃ納得できねえッスよ！」
「理由だと？　お前、この期に及んでまだしらばっくれる気か、あ？」
左衛門尉キック！　キックキックキック！　このカスが！　死ね死ね死ね！
「おやめくださいっ！」
あーやが泣きながらおれにしがみついてきて、むふふ。いい匂いがするのう。

「どうしてそんなことをされるのか、私にはわかりません」
こんなに泣いちゃって可哀想に。
「あーやは何も悪くないよ」
頭を撫で撫で。フヒヒ。
しかし、あーやは涙に濡らした目をキッとおれに持ち上げてきた。
「四郎次郎様はこの店のために一生懸命頑張っているんです。それなのに、こんな仕打ち、あんまりじゃないですか」
うっ。だ、だって、こいつ、横領しているんだよ。
「そうよ、簗田さん。暴力反対」
団子をもぐもぐ食べながらチヨタン。まだいたのか、このアマ。
「そうだ」
と、のっそりと立ち上がったスキンヘッド。
「俺と彩は四郎次郎様に返しきれねえ恩がある。いくらあんたが四郎次郎様の主人だって言っても、事と次第によっちゃぶち殺させてもらうぞ」
ちょっ、なんでこいつ拳をボキボキ鳴らし始めているの。おいっ。なんなんだよ、この四面楚歌。
「ふ、ふ、ふざけんなっ！　こいつはな、儲けた金をおれにちゃんと報告しねえで、自分のものにしてやがったんだぞ！」
「そんなことしてないッスよ！」
おれのボコリに伸びていたシロジロが涙目で起き上がってきて、おれは更に怒りに燃えた。
「何言ってやがんだテメー！　願福寺の光才は奇進札の売り上げの三割はおれのところに入ってくるって言ってたぞ！　あいつはこの前の売り上げは千五百貫だって言っていたからな！　テメーが報告してきたのは二百貫じゃねーか！　どういうことなんだよ、あーっ？」
「そ、それは」
シロジロだけでなく、スキンヘッドもあーやも固まっている。
「ほうほう。何も答えられねえじゃねえか。ん？」

おれはアケチソードを腰から外し、鞘ごとシロジロの前に放り投げた。

「腹、切れや」

シロジロは目をぎゅっと瞑り、唇を噛み締め、肩をぷるぷると震わせながら、アケチソードに手を伸ばす。

「さんざん目をかけてやったっていうのに、テメーにはがっかりだ。あの世で鼻クソでも売りさばいてやがれ」

「やめてっ！」

あーやがシロジロに飛びつき、アケチソードを押さえつけた。むう。まさか、シロジロに惚れているのか。

「違うんです、違うんです。四郎次郎様は私たち兄妹のためにお金を工面してくれたんです。きっと、その工面したお金は、もしかしたら悪いことなのかもしれないんですけど、簗田様のお金だったかもしれません。だから、だから――」

「いい。いいんだよ、彩。お前たちを助けてやったこととはいえ、あっしは旦那様の金に手をつけちゃったのは間違いないんだから」

すると、スキンヘッドが突然膝をついた。

「お許しくだされ！　し、四郎次郎様は俺と彩のために、そんな悪さを仕出かしたに違いねえ。だから、四郎次郎様ではなく、これは、俺たち兄妹の責任。どうか、四郎次郎様をお許しくだされ！」

なんだよ、この茶番劇は。何がなんだかさっぱりわからない。チヨタンもいつのまにかいなくなっているし。

本当なら有無も言わさず腹切りさせているところだ。だが、あーやが可愛いので、とりあえず、縁台に座り、事情を聞いてやることにする。

スキンヘッド男は大石新七郎といい、元は六角の甲賀流だったらしい。

六角ゾンビ親子が信長に追い払われると、将来に悲観した新七は甲賀流を脱け出そうとしたが、逆に妹のあーやを人質に取られた挙げ句、脱退したいなら金を寄越せと脅迫されたんだとさ。

で、新七は同じく甲賀流を脱退したさゆりんに相談した。（そこでさゆりんが絡んできていることに、おれは腹を立てたが）、さゆりんは調度奇進札を始めたころで、なら、もう少し辛抱しろ。自分が今、仕えている簗田家には中島四郎次郎という奉公人がいるから、もう少し辛抱すれば、中島四郎次郎が大金を手に入れる。そこを当たれと。

シロジロは、仲間思いのさゆりんこと早之介に口説かれたうえに、妹に不憫な思いをさせているという新七の話を聞いてしまうと、調子に乗って、おれが立て替えてやるとのたまった。

で、おれの金に手を付けたわけ。

「おい、テメー」

話を一通り聞いたおれは、終始土下座をしているシロジロの前に立ちはだかり、アケチソードを手にすると、その鞘で頭をぶん殴った。

「痛ッ。ウウッ」

「なんで、おれに一言の相談もしねえで、勝手にそんなことをやっていがるんだ。この心の優しいおれが、反対するとでも思っていたのか」

あーやのためにシロジロは甲賀流に三百貫を支払ったそうだが、おれだってな、こんな可愛いおにゃの子を雇えるんだったら、三百貫ぐらい惜しくねえんだよ！

「おれは人の情けに金を惜しむような男じゃねえぞ！」

頭に来るのでもう一回引っぱたいてやった。

「すいません。すいません」

「まあ、そういうわけなら許してやる。おれは器の大きい男だからな。ただ、どちらにしろ、テメーはおれに黙って金を勝手に使い込んだんだから、それなりの処分を受けてもらうからな」

「は、はい」

「お前の俸禄は明日から無しだ。奇進札と団子屋の売り上げによる歩合制だ。いいな。あと、このタコ入道とあーやはおれが引き取る。

おれの金を使って引き取ったんだから、お前の子分はおれの子分だ。いいな！」

「で、でも、それじゃ、団子屋が」

「もう一回最初からやり直せや、ボケっ！」

ということで、おれはタコ入道とあーやを無理やり引き連れ、自宅に帰ることに。あ、この馬鹿も家に帰るんだったか。

うっかり

大石兄妹を後ろにして、シロジロを引っ立てながら稲葉山の麓に向かっていたおれだが、途中、ふと思った。このチンピラまがいのタコ入道と絶世の美少女あーやをいきなり連れて帰ったところで、あずにゃんや太郎にはなんて説明するべきか。

シロジロが奇進札の売り上げを勝手に使ったからとは口が裂けても言えない。奇進札の実体を連中に知られてしまうと、絶対に利権を取り上げられてしまう。

スカウトしてきたってことにしておくか。

「おい、タコ入道」

そう呼ぶと、タコ入道はちょっと、むっとしている様子。こいつ、立場がわかってねえな。甲賀流に支払った金は、おれの金だぞ、おれの。

「お前は今日から沓掛勢の兵隊だからな。家の連中には城下で声を掛けられたってことにしておけよ」

「お言葉ですが」

「なんだよ」

「四郎次郎様の団子屋には繁盛を妬んで不逞な輩が来ます。そのとき、用心棒の俺がいないと立ち行かなくなるんじゃ」

「お前、何を勘違いしてやがんだ」

おれがギロリすると、タコは頬の傷を歪めて、なかなか反抗的な目。ちょっと、ビビりが入っちゃうおれだけど、超絶ＤＱＮのウザノスケに比べれば大したことない、大したことない、と自分に言い聞かせて、再度ギロリ。

「おれあっての団子屋だぞ。そのおれの兵隊が今いないんだから、用心棒どころの話じゃねえだろうが。だいたい、さゆりんもそうやって言うはずだ。元々、お前はさゆりんに相談したんだろ。さゆりんを助けてやったのはおれなんだからな。さゆりんに相談して、シ

ロジロに助けてもらったんなら、そいつらの主人のおれの言うことぐらい聞けや」
「さゆりんって誰スか？」
両手首を縛られているシロジロが振り返ってきた。ヤベ。うっかり。
大石兄妹もあちゃーみたいな苦い顔をしている。さゆりんが吉田早之介に扮装しているのは承知しているっぽい。
「さゆりんってどこかで聞いたことあるんスけど。いや、なんスか、それ。新七が相談したのは吉田殿ッスよ」
「罪人は黙ってろ！」
と、シロジロのケツを蹴り飛ばしたおれ。
「痛ッ。もう。なんで罪人なんスか。もう、許してくれたじゃないッスか」
「そうです、旦那様。縄で縛りつけて晒し者にするなんて、あんまりです。それなら、私と兄様をそうしてください。四郎次郎様は何も悪くありません」
ぐう。あーやに涙目で訴えられてしまい、苦渋の決断でシロジロの縄をほどいてやる。
「言っておくけど、お前は借金が増えたんだからな。おれに三百貫、家康に五百貫、合わせて八百貫。これ以上借金が増えたら、本気で殺すからな」
「はいはい。わかったッスよ。それより、さゆりんって甲斐に――」
左衛門尉フック！
「テメー、全然反省してねえじゃねえか！　何だよ、その言い草。もういっぺん言ってみろ！」
「ウウッ。すいません」
「今後、その名前は一切出すなよ。思い出すだけでも忌々しいからな！」
「はい……」
ふう。なんとか、ＤＶでねじ伏せたぜ。

でも、この野郎、いつだって、裏でちょこまかと勝手に動くからな。さゆりんのことも調べそうだな。太郎やあずにゃんに知られる前に、こいつにはゲロっちゃったほうがいいかもしれん。

家に戻ると、シロジロのケツを蹴飛ばしてさっさと飯を作るよう急き立てておき、出迎えに来たあいりんとお貞には、今からタコとあーやを面接すると言ってごまかし、あずにゃんに見つからないうちに二人を連れておれの部屋へ。

兄妹と向かい合わせに座り、おれはタコは兵隊に、あーやは女中になれと伝える。

「調度、さっきの若いほうの女中が息子と結婚するから、足らなくなる。だから、あーやはこの家で働きなさい。いいね」

「でも」

あーやは細い眉を八の字にしながら上目に訴えてくる。

「私までいなくなっちゃうと、四郎次郎様が」

「四郎次郎様じゃない。シロジロだ！」

「何を騒いでおるのじゃ、亭主殿」

げっ。板戸の向こうから声が。もう、見つかっちまった。

「あ、いや。今、その、面接を」

「なんじゃ、面接とは」

と、勝手に戸を開けてきたあずにゃん。ぐう。あずにゃんに見つかる前に口裏を合わせておきたかったのに。

で、急に入って来たあずにゃんに、一瞬、見とれていた大石兄妹だったけど、あわてて平伏。

「お、お初にお目にかかりますっ。お、大石新七郎と申しますっ」

なに、舞い上がってんだ、このハゲ。

「こ、こちらは、わ、我が妹の彩でございますっ」

「妹の彩です」

「妹御は目にかかったことがあるぞ。四郎次郎の団子屋で働いておったな。なんじゃ、亭主殿、団子屋に行っておったのか？」

「あ、そ、ちょっと一休みがてら。そ、それで、まあ、こいつら、

おれに挨拶したいってことで、じゃ、じゃあ、一緒に飯でも食べようかって話になって」
「そうか」
と、にっこり笑ったあずにゃん。
「それなら、ゆっくりしていきなされ。我が家の食卓は身分も関係なしに皆で囲むからの。そなたたちもいたほうがわらわも楽しい」
「あ、あ、有難き幸せっ！」
「それはそうと、梓殿。あの、今度、太郎とあいりんが結婚するじゃないですか。それで、女中が足らなくなるから、この娘を女中にしようと思うんですけど」
「それはならんであろう」
あ、いや、なぜ。
「この子は看板娘ではないか。わらわも一度見たが、団子屋が繁盛しているのはこの子のおかげじゃ。それにあいりがいなくなっても、お貞がいるから、わらわは不自由せん。そもそも、太郎とあいりが契りを結んだとしても、一緒に住めばよいではないか」
ちょっと。何を言っちゃってんのよ。
「いや、でも、そういうわけにはいかないと。太郎もあいりんもあっしたちと一緒に住みたくなんかないと」
「なぜじゃ。太郎がそんなことを言っていたのか」
「あ、いや、言ってませんけど」
「なら、太郎に訊ねればよろしい。どちらにしろ、この子は女中にはせん。堅苦しい真似をされるよりは、団子屋でのびのびと働いていたほうが、この子のためじゃ。そうじゃろ？」
あずにゃんに問われると、あーやは顔を上げ、はつらつとした笑顔で言った。
「左様でございます、奥方様！」
チッ。まあ、いいや。団子屋に入り浸ればいい話でもあるしな。
実はそっちのほうが、あずにゃんの目をかいくぐれて、あーやに会えるからいいのかもしれないし。

「お、奥方様！」
タコ入道が急に顔を上げながら声を出した。
「せ、拙者は元は南近江の武者でございましたが、訳あって、四郎次郎様の店にて用心棒をやらせてもらっていました」
「ほう。南近江で」
何が武者だよ。忍び風情だったくせに。
「し、しかし、今日、旦那様に、用心棒をやっているのは勿体ないという御言葉を頂き、今時分から簗田様の与力とさせて頂くことになりました。ふつつか者ではございますが、簗田家のために命を賭して戦いたいと思っております。よろしくお願いいたします」
おい。何を先走っているんだ、こいつは。与力にするだなんて、おれは一言も言ってねえぞ。沓掛勢の兵隊にするって言ったんだ。雑兵にするって言ったんだ。なんだよ、与力って。おいっ！
「左様か。それは実に心強い。そなたは見た目からして強そうじゃ。確かに団子屋の用心棒より、亭主殿の用心棒になってくれたほうがいい。新七郎と言ったな」
「はっ」
「亭主殿をよろしく頼みましたぞ」
「はっ。天地神明に誓って、簗田様、及び、奥方様をお守りさせて頂きます！」
「良かったな、亭主殿。頼もしい者が増えて」
あずにゃんは終始笑顔だったけど、なんだよ、このハゲ。頬に傷跡を残しておきながら、あずにゃんに向けている目尻がでれでれじゃねえか。妹のあーやも隣で呆れ顔だし。こいつ、人の嫁にちょっかい出す気じゃねえだろうな。
ふざけやがって。まあ、いいや。どうせ、ケチの太郎が、与力なんか早之介だけで十分って言うだろうからな。

「そんなことより、どうしたのだ、四郎次郎、その顔は」
「いや、その」
おれにちらりと視線を向けてきたシロジロ。
「まさか、父上ですか」
太郎は眉間を固め、なぜか箸を置いた。おれは意に介さずにご飯をかきこみながら言う。
「こいつがふざけたことをしたから折檻してやっただけだ」
「なんなのです。ふざけたこととは。そんなことまでする必要があることなんですか」
「お前は黙ってろ」
「黙っていられないから言っているのではないですか。それとも、理由もなく殴ったから何も言わないのですか」
「理由はある」
おれは大石兄妹に目をくれ、二人が揃って視線を伏せると、今度はさゆりんを睨んだ。しかし、さゆりんはマスの身を箸でほじくっていて、こちらのことは無視。
「父上。なぜ、今、この者たちと早之介を見たのです」
「それは、まあ、いろいろとあるからだ」
「だから、なんなんですか、いろいろとは」
「太郎っ！」
急にあずにゃんが大声を上げたので、一同、びっくりして肩を揺らした。あずにゃんはデザイナ時代を思い出させるような鋭い目つきで太郎を睨みつける。
「子が親をやたらに追及するものではないぞ」
「しかし――」
「家臣が主人に殴られて何がおかしいのじゃ。亭主殿は四郎次郎が失態を犯したから罰を与えたのであろう」

おれは思わずニヤリ。あずにゃんがおれの味方をしてくれるとは意外だが、まあ、あずにゃんは性根が暴力女だからな。
「しかし、そんなことを言ったら、父上は暴力ばかり振るうようになってしまうかもしれないじゃないですか」
ゴンッ！
「痛ッ！」
「おい、太郎。何だ、そのおれに対する信用性の低さは。お前は半兵衛に言われたことをもう忘れやがったのか。あ？」
「いや、そういうわけでは」
「いいか。この家の主はおれだ！」
しーん。
「その通りじゃ」
と、あずにゃんがうなずく。
「もっとも、いまさら言うことでもなかろう」
あずにゃんはさらりと言うと、なんでもないことだったかのように味噌汁のお椀に唇をつける。
かっかっか！　とうとう来たか、この日が！
そうだ。そうなんだ。あずにゃんは暴力女で茶室を勝手に作っちゃう箱入り娘だが、坊主を蹴飛ばしたおれに怒り狂ったり、茶の湯の作法だったりと、ある程度の礼節にはいちいちうるさい。
そして、この馬鹿どもはおれには逆らっても、あずにゃんには逆らわない。あずにゃんの理解を獲得し、味方に引き入れたおれは、とうとう家長として君臨できるんだ。
「聞いたか、太郎。この家の主はおれだからな。梓殿も言っただろ。もういっぺん言ってやろうか。この家の主はおれだ。わかったな！」
「そんなことは重々承知しております。いちいち怒鳴られなくてもわかっております」
太郎は呆れたような溜め息を生意気につきながら、まずそうな顔で箸を進める。フン。ボスの座を追われたからって、悔しがっちゃって。小僧が。

「ただ、拙者は、理由を聞きたいのです。どうして、四郎次郎に折檻を与えたのですか」
「おいっ」
おれは箸の先を太郎に突きつけた。
「何べんも言わせるな。お前が知ることじゃねえっ。お前は信長様が誰かを殴った理由をいちいち信長様に訊ねるか？」
「旦那のことだから、どうせ、金だろ」
突然、黙々と食事をしていたねじり鉢巻きが声を上げた。
「おおかた、四郎次郎が団子屋の金をせしめたんだろ。いつまでもうるせえんだよ、あんたら親子はよ」
むう。こいつ、ただの馬丁のくせに。でも、普段は口数の少ない鉢巻きに言われると、なんだか黙らされてしまう。
で、隣の太郎も同じようにふてくされている。
「そうじゃ。栗之介の言う通りじゃ。亭主殿も太郎もいつまでもうるさいぞ。そのようなことは二人きりでせんか」
タコ入道がこわもてらしからぬ表情であずにゃんに見とれているし。だいたい、なんでこのエロハゲまで一緒にメシ食っているんだよ。図々しいんだよ。遠慮しろよ。
「若君、あっしが悪かったんス。だから、もう、この話はよしてください」
「四郎次郎さんもこう言っていることだし、いいではないですか、若君」
あいりんになだめられる太郎だったが、それでもなお、むすっとしている。
さゆりんが味噌汁を飲む振りをして、密かに太郎やシロジロにちらちらと目を向けて、タコ入道やあーやに睨みを送っているが、あーやは唇を絞って顔を伏せるだけ。タコ入道はでれでれしちゃっていて、役立たずの元甲賀流同士。
「まあ、父上が四郎次郎を殴ったのはよしとしましょう」
そう言いながら太郎は茶碗を置くと、シロジロをギロリと睨みつ

けた。

「しかし、四郎次郎、金に手を出したというのは、栗之介のただの妄言であろうな。もしも、それが本当ならば、許さんぞ。はっきりと言え。そこまで人を殴ることなど今までなかった父上を、怒らせた理由はなんだ」

どうやらむすっとしていたのはねじり鉢巻きがそんなことを言い出したからしい。相当怒っている。それもそうだな。太郎は沓掛城の収支の管理をシロジロに任せているんだからな。

「太郎、よいではないか。四郎次郎はすでに亭主殿から罰を受けたのじゃ」

「よくありません。このさい、はっきりと言わせてもらいますが、四郎次郎が団子屋をやっていることが、そもそもおかしいのです。父上がそうさせたのかもしれませんが、簗田家は商人の家ではありませんぞ。おやかた様から俸禄を頂戴しているにも関わらず、なぜ、商いの真似事などしているのです」

しーん。さすがのおれももっともらしい太郎の言葉に口が出せない。ただ、もっともらしいかもしれないけれど、こいつは誰に似たんだか、頭が堅すぎるんだよ。そんなことをこの中で思っているのは太郎だけだろうが。

「四郎次郎が楽しそうにやっているので黙ってはおりましたが、もしも、父上と四郎次郎のいざこざが団子屋に関してのことだったら、四郎次郎を追い出すか、団子屋を潰すか、どちらかにしてもらわなければ、拙者は納得できません」

「おいおい、太郎。もう決着はついたんだ。お前はいちいち堅苦しいんだよ」

「堅苦しいことなどありますか。父上も拙者もいくさ場に出て禄を食んでおるのです。この家のため、織田家のために命を賭しているのに、なぜ、商い風情を真似ているのです。我らはいくさ人ですぞ」

この馬鹿息子が……。何もわかっちゃいねえ。何も。だからといって、このカチカチ頭には何を言ったところで駄目だ。

「お言葉ですが、若君」
さゆりんがようやく口を開いた。
「元は商人の四郎次郎を家の中で遊ばせているなら、こやつを働かせて家のために稼がせようと旦那様は考えていらっしゃるのです。何も、旦那様が商人の真似事をしているわけではありません」
ナイス、さゆりん！　おれの味方になるとは意外だが、もっと太郎を追い詰めろ！
「元商人だろうがなんであろうが、四郎次郎はこの家の奉公人として雇ったのだ。奉公人には奉公人の仕事がある」
太郎の睨みに、口を噤むさゆりん。おい。早々と負けているんじゃねえよ。おい。
「亭主殿の言う通り太郎は堅いのじゃ。皆が楽しく過ごせればよいではないか。水に流すことも必要じゃ」
「柴田家からやって来たお方の言葉とは思えませんね」
「おいっ！　このドラ息子！」
おれは腰を上げると、この馬鹿の髪を掴み上げた。
「もういっぺん言ってみろ！　誰にその口叩いてやがんだ、テメーは！　もういっぺん言ってみろ！　梓殿はテメーの母上だろうが！　テメー、何様のつもりだっ！」
茶碗をひっくり返して怒り狂ったおれは皆に割って止めに入られたけど、あまりに腹立たしくて、皆の腕の中でぎゃあぎゃあわめいた。
「おれのことはいいけどな、母上のことは承知しねえぞ！　勘当だ！　お前なんか出てけ！」
「もうよしてください！　あっしが悪かったんス！　若君、あっしが旦那様の金に手をつけてしまったんス！　もうやめてください！　あっしが、あっしが、全部悪いんス！　あっしが出て行きますから、旦那様も、もう、もう、やめてください」
シロジロがおいおい泣き始めてしまって、すっかり冷めてしまったおれ。

「わ、若様！」
握り拳を作ってわなわなと震える太郎の前にあーやが飛び出てきて平伏する。
「四郎次郎様は、私たち兄妹のために旦那様のお金に手をつけてしまったんです。四郎次郎様は悪くはないんです。悪いのは私たち兄妹なのです」
「何がなんだかわからん！　なんなんだ。一体なんなんだ！」
太郎はやけになったかのように大声を上げると、そのうち、ウウッと嗚咽を漏らしながらぽろぽろと泣き始めた。シロジロに裏切られたことに泣いているのか、おれにどやされたことに泣いているのか、それとも、訳がわからないままに暴れ回ったことを後悔して泣いているのかは不明だったが、太郎の涙を見るなんて、おれ以外は皆初めてだったので、ただただ、太郎のすすり泣きを聞くだけだった。
「もうよい。団子屋は終わりじゃ」
えっ？　あ、あずにゃん、急に掌返しちゃって、どうしたの。
「金が絡むとろくなことにならん。せっかく、皆、こうして集まれたというのに、金のせいで、このざまじゃ。わらわは悲しい。もうよい。もうよい」
あずにゃんはそう言い残すと、一人、居間を出て行ってしまった。

「と、とりあえず、太郎」
気まずーい空気の中、おれは唾をごくりと飲み込んでから言った。
「このことはおれに任せておけ。な。お前の言い分もわかるけど、ま、まあ、シロジロを追い出すか団子屋を潰すか、それと、この兄妹をどうするかは決めておくから。お前はちょっと休め。疲れているんだろ」
太郎は目頭を袖でごしごしと拭うと、
「かしこまりました」
ぼそりと呟き、おれに頭を下げてくる。
「生意気な口を叩いてしまい申し訳ございませんでした」
「ああ、もういい。わかればいいんだ。すぐにいくさなんだから、お前はもう休め。おれは別にあんまり働かないけど、お前には頑張ってもらうつもりだからな」
「かしこまりました」
とぼとぼとおれの脇を通り抜けて行く太郎。
「クロとクリツナのところに行って参ります」
幽霊のように居間を出ていった太郎。おれはあいりんを睨みつけながら、くいくいと顎を動かす。
「でも」
「ああ見えて、太郎はまだ子供だ。お互い好き同士なんだから慰めてやれよ」
あいりんは顔を赤く染めながらも、そそくさと太郎の後を追って出ていく。
「風呂を沸かしといてくれ」
着座しながらお貞にそう言い、お貞も居間を出て行く。
ようやく裏事情を知っている五人だけになり、おれはめそめそしているシロジロの頭を引っぱたく。

「泣いている暇があんなら、茶碗とか直せっ。このグズ野郎っ」
「す、すいません」
シロジロはひっくひっくと嗚咽を漏らしながら、ひっくり返った茶碗や皿を直していく。タコ入道とあーやがシロジロを手伝い、さゆりんは憮然としているだけで無視。
「だいたい、テメーがおれに最初から言っておけばこんなことにはならなかったんだ。テメーみたいな小者が勝手な真似をするからこんなことになったんだ」
「すいませんすいません」
「それに――」
おれはさゆりんをギロリする。
「黒幕はさっきから知らんぷりしているけどよ。お前が一番の悪党じゃねえか。お前は、えーっ、おれにバレなければ構わないって魂胆でいたのか、えーっ？」
さゆりんは口を閉ざしたまま、あっちの方向に目線を向けていて無視。
「聞いてんのか」
無視。
ぐぬぬ。
でも、さゆりんだけは、あんまり責めると、ちょっと後が怖いからな……。弱味を握られているようなもんだし……。
「とにかく、団子屋はおしまいだ。じゃないと、示しがつかねえ。シロジロ、いいな」
シロジロは無言のまま首をこくりと縦に振る。
「でも、お前は信用ならないから、これからはずっとおれと行動を一緒にしろよ。今度のいくさも付いてこいよな」
「えっ？」
「えっ、じゃねえよ！　テメー、自分の立場わかってんのか！」
「は、はい。すいません」
「タコもおれの兵隊だ。与力じゃないからな。兵隊だ」

「いや、でも、奥方様は」
「この家の主はおれだ。与力になりたいんなら、活躍しろ。で、あーやはとりあえず、この家の女中ね。仕方ないね、奥さんが団子屋をやめろって言っちゃったから」
「はい……」
「ということで、お前らは片づけとけ。早之介、お前はちっとおれの部屋に来い」
さゆりんは渋々腰を上げる。悪びれた様子はまるでないけど。ふざけやがって。
廊下を行っていると、あずにゃんの部屋から話声が漏れていた。耳を当ててみたら、太郎の声だった。なんだ、あいつ。馬のところに行くって言っていたのに。
自室に入ると、顎を動かして、さゆりんをその場に座らせた。
「ふざけやがって。おれに黙ってこそこそこそこそこそ。なんで、おれに一言言わないんだよ」
すると、さゆりんは顔をぷいと背け、さも当然のようにのたまった。
「金にうるさいあんたが承服するわけないと思ったからや」
「なんだと？」
「三百貫で新七郎を引き入れたと思えばええやんか。新七郎はそれだけの価値のある男や。配下が増えたんや。それでええやんか」
「いいわけねえだろうが。おれの金を勝手に使っといて、何、開き直ってんだよ」
「なんや」
と、突然、さゆりんが睨み返してきて、ちょっと、びっくりしちゃうおれ。
「なんや、あんた。私が何も知らんと思ってんのか？」
「ど、どういうことだよ」
「人の金を勝手に使い込んだのなんだの、さっきからずいぶんと偉そうな口を叩いているけどな、あんた、私が何も知らんとでも思っ

てんのか？」
「だから、なんなんだよ」
さゆりんは突き刺すような視線をおれに向けてきて、おれはたじろいでしまう。ううっ。なんだよ。おれが何をしたって言うんだよ。そりゃ、確かにさゆりんとやっちゃった過去はあるけど、それとこれとは別次元の話じゃねえか。
「あんた、私があんたの与力になる前、松永弾正から五百貫を受け取っているやろうが」
げっ。
「栗之介や四郎次郎はごまかせても、私はごまかせられんで。あの五百貫は四郎次郎が騙し取られた五百貫やないんか。違うか？」
「そ、それは違うっ」
「ふーん。そんなら、四郎次郎が騙し取られた五百貫を私が松永弾正から取り返してきてやるわ。そうしたら、今回、私と四郎次郎が勝手に使い込んだ三百貫は帳消しや。それでええやろ」
うっ。ううっ。人の弱味に付け込んで、自分を棚に上げようとするなんて、なんて女狐なんだ。
「そ、それは駄目だ……」
「なんでや。松永弾正には催促できんからか？　それなら、信長に直談判してやるわ」
「だ、駄目だっ！」
「なんでや？　んーっ？　なんでや？」
クッソオォッツー！　チクショウチクショウチクショウ！　ついつい忘れかけてしまうが、この女狐は、元々、おれを三度も殺そうとした意地の悪いくのいちだったんだ。最近、築田家の配下っぽい振る舞いだったから、油断しっぱなしだったけれど、こいつは元々くのいちだから、おれの秘密なんてなんでもかんでも把握していやがるんだ。
まあ、おれが五百貫をこっそり自分のものにしていたことをシロジロに暴露しなかっただけでも有難いと受け止めておくべきなのか、

どうなのか。
だいたい、寄進札だって、あの五百貫の中から始めたから、筋道を通されてしまうと、結局は売り上げの全部は四郎次郎の金ってことになっちまう。あずにゃんの茶室代にも使われてしまったし。
クソッ！
「小ざかしい真似をするからしっぺ返しをくらうんや。ま、黙っといてやるわ。言ってしまったら、あれだけ大層にしていたあんたが可哀想な目に合うからな」
さゆりんはうなだれるおれの肩をぽんぽんと小気味よく叩いていき、部屋を出て行った。ウウッ。チクショウ。簗田家の当主として君臨していたはずが、ここでさゆりんを怒らせて暴露されちまうと、ただの泥棒になっちまう。
それにしても、さゆりんの野郎、どうやら常にアンテナを張り巡らせているんだな。知らないところでいちいち詮索してやがるんだな。女狐め。
でも、金ヶ崎の戦いでは一生懸命だったし、裏切ることはないだろ。多分、おれに惚れているんだろうからな。
「旦那様、お風呂が沸きましたよ」
戸の向こうからお貞の声がして、おれは腰を上げた。
「旦那様、本当に四郎次郎殿がお金に手をつけてしまったんですか」
風呂場に向かう途中、お貞が心配そうな顔をして訊ねてきたので、おれは首を傾げた。
「うーん。どうかな。まあ、そうかな。でも、いいじゃないか。反省しているようだし。誰にだって、そんな気分になっちゃうときはあるさ。それに、あいつはあのツルッパゲと女の子のために使ったみたいだしな。まあ、家来も増えたし、いいんじゃないかな」
「しかし、果たしてそれでいいのでしょうか」
「いいんだいいんだ。お貞は気にするな。おれは心が広いんだ」

招かれザル客

風呂を上がって部屋に戻って来ると、あずにゃんが酒の膳を整えて待ち構えていた。

「太郎が謝りに来おった。ぼろぼろ泣いておった」

あずにゃんはしんみりと盃に酒を注いでくる。徳利を置くと、か細い吐息を長くつきながら、口許をほのかに緩めた。

「可哀想な子じゃ」

おれはまずい酒をちょびっと啜りながらあずにゃんを見つめる。何があったのかは知らないが、あずにゃんの目尻には若干の母親らしい影が差している。もしくは、お姉さん的な。

「一人で生きてきたんじゃろうな、太郎は。亭主殿もわらわも、父、母と呼びはすれ、結局は他人じゃ。あの子にとって、母はこの世に一人しかおらん。いや、皆、そうじゃ」

「わがままなんですよ」

「それだけのことではあるまい」

あずにゃんは微笑を浮かべ、ぼんやりと、膳の上に視線を落としたまま、囁くように言う。

「きっと必死なのじゃ。もがいているのじゃ。元々がみなし児だったから、人より野心が大きいのじゃ。でも、まだ若いから空回りしてしまうんじゃ」

ふーん。太郎は幸せだな。あずにゃんが優しくて。普通だったら自分の子供でもないんだし、まして、おれの実子でもないんだから、たんこぶ以外の何ものでもないだろ。

「もう少し、あいりと共にいれる時間が多かったら、太郎の憑き物も落ちるんであろうが」

「ま、いくさいくさいくさですからね。心も荒むもんじゃないんスかね。あっしは梓殿がいるから救われていますけど」

「口達者じゃな」

あずにゃんはふふと笑った。うーむ。デザイナ時代の面影がほとんどないな。まあ、お貞の話によると、元は心優しい女の子だったみたいだからな。

「いくさから帰って来て、亭主殿は変わられたな」

「そうスか？」

「男らしゅうなった。太郎に食ってかかるなど、いくさに行く前では考えられぬことだったではないか。正直、わらわはあのとき、ちょっとだけ嬉しかった」

ほっほっほ。そりゃ、死地を経験したからな。一回りも二回りも大きくなるものよ。フヒヒ。惚れ直されて当然だわ。

ふむ。ならば、少しぐらい調子に乗っても大丈夫かもしれん。おれは盃を置くと、寝転がり、あずにゃんの膝に頭を乗せた。

「なんじゃ」

「いや、ちょっとだけ」

「太郎のことを言えんではないか。亭主殿も子供じゃな」

「男は皆子供です」

あずにゃんはくすくすと笑いながらおれの頭を撫で撫でしてくる。はにゃあ。いいなあ。おれって幸せ者だなあ。

で、そのまま寝ちゃった。

目が覚めたら、朝。一人、布団の中。ぐう。やることやらずに寝ちまったのか。まあ、あっちこっちを駆けずり回って、悩みの種がたくさんあるから、疲れていたんだろうな。

部屋を出て、あくびをかきながら家の中をぶらぶらと行くと、庭先でシロジロがタコ入道と棒きれを振り回している。何をやってんだ、あの馬鹿。いや、あんまり責めるのはよそう。泥棒には泥棒の気持ちがあるからな。

「殊勝な心がけだな、シロジロ」

「あ、旦那様っ。おはようございますっ」

シロジロとタコ入道は即座に平伏。ふむ。一晩明けて、ちょっとは改心したのかね。ただ、シロジロには戦場でおれの盾になっても

らい、そのまま浅井の兵隊に殺されてもらうから、あんまり武芸を磨かなくてもいいんだ。

「ま、せいぜい頑張れや」

台所では女中たちがきゃあきゃあ騒ぎながら朝ごはんを作っていた。ふむ。お貞もあいりんも、ちゃんとあーやと仲良くやっているな。よしよし。

「太郎はまだ寝ているのか」

「若君なら、栗之介殿と一緒にクロとクリツナを連れて早駆けに出かけましたよ」

好きだねえ。嫌でもいくさに向かわなくちゃいけないんだから、ゆっくりすりゃいいのに。

てことで、おれは部屋に戻り、二度寝。

「亭主殿、朝食じゃ」

むにゃむにゃ。まだ眠い。てか、朝メシはいいや。どうせ、今日一日ゆっくりできるんだし。あとで食べる。今日だけニートしてる。

「亭主殿、いつまで寝ているつもりじゃ」

あずにゃんに体を引っ張り起こされて、目をこすりながら居間に向かう。うーん。わざわざ、あずにゃんがおれを起こしに来たということは、なんだか、今日ばかりは茶の湯に付き合わされそうな気がするぞ。

なんか、理由をつけて、今日も城下に出かけるか。

居間に入ると、すでに皆が集まっていて、おれがなかなか来なかったから、朝飯を前にしてお預けを食らっている状態。

いや……、なんか、一人だけご飯をがつがつと口の中に掻き込み、魚の身をぱくぱく食べ、あさげをずるずると啜っている無礼者が……。

太郎やあずにゃん以下、家の皆も、その無礼者を前になんとも言えない苦々しい笑み。

「なんで、ここにいるんスか、藤吉郎殿」

「にゃあ、牛殿、遅いでにゃあか。皆の衆が、腹を空かせて待って

いるだぎゃあ」
　当たり前のように振る舞われたおれは、寝起きということもあって、意味がわからず首を傾げながら、サルと太郎の間に座り、掌を合わせて、いただきます。
　お椀を口につけ、漬物をぼりぼりと食べながら、人の家の朝食にがっついている隣のサルを見つめる。
　サルがいるので、おれ以外の皆は箸をつけられない。
「にゃあ。遠慮しにゃあで、食うだぎゃ。あ、おにゃの子、おかわりはあるきゃあ？」
「あ、はいっ」
　あいりんに茶碗を差し出すと、シーシー言わせながら小指で歯クソを削るサル。
「遠慮するでにゃあ。食べるだぎゃ。ほれ」
　サルに言われて、ようやく箸を取る家の皆。
　おれは図々しい他所者をじいっと睨みつける。
「なんだぎゃあ」
「なんだぎゃあじゃないでしょうよ。なんで、ここにいるんスか。なんで、当たり前のようにメシを食っているんですか。あんたの家はここじゃないでしょうよ」
「水臭いことを言うなだぎゃ」
　にゃっはっはと笑いながら、おれの肩をぽんぽんと叩いてきたサル。なんだ、この野郎。山から下りてきた猿でさえ、こんなに図々しく人間のメシにありつかねえぞ。
「おい、お貞」
　腹に据えかねておれは言った。
「藤吉郎殿の家に行って、寧々さんを連れて来い」
「ちょ、ちょっと待つだぎゃあっ。お、おりゃあが何をしたって言うんだぎゃ。メシを頂戴しているだけじゃにゃあだぎゃ」
　あわてておれの袖を引いてきたサル。おれはニヤリ。
「なんスか、藤吉郎殿。もしかして、寧々さんに怒られて逃げ出し

てきたんじゃないでしょうね」
「い、いにゃっ。そ、そんなんじゃにゃあ」
おれは腰を上げると、縁側に飛び出し、大声で叫んだ。
「寧々さーん！　藤吉郎殿なら簗田にいますよー！」
フヒヒ。サルの屋敷はそこそこ近いからな。きっと、聞こえるに違いない。
「ちょ、やめろだぎゃあっ！」
「寧々さーん！　寧々さーん！」
「お、おみゃあは血も涙もない鬼だぎゃあっ！」
捨てゼリフを吐くと、そそくさと玄関へと逃げ出して行ったサル。
馬鹿が。いつまで経っても野良猿。あれが木下勢を率いている侍大将なんだから、さすがのおれでさえ呆れるわ。
「な、なんだったんでしょうかね」
と、皆が唖然とする中、太郎が苦笑しながら言った。
「おおかた、悪さでもして寧々さんにどやされたんだろ。あの人は昔からああだったからな」
おれが席に戻ると、あずにゃんがくすくすと笑っている。
「亭主殿もそう変わらんではないのか？　ついこの間まで、わらわから逃げ回っておったではないか」
むう。確かに。
「そういえば、木下殿がよく言ってますね」
さゆりんがにやにやしながら言う。
「俺と牛殿が組めば天下無双だと。確かに相性がいいんでしょうな、殿と木下殿は」
「違いねえ。旦那と木下の旦那の奥方への怯えようは天下に並ぶ者はいねえな」
ねじり鉢巻きが言うと、げらげらと笑いだした連中。ぐう。おれはこの家に君臨する長だというのに、なんだ、この言われようは。
でも、まあ、いいや。この馬鹿どもが仲良くやっていられるんなら。

死闘への進軍。でも、緊張感なし

「北近江へ向けて、明朝、出陣しろ」
へ？
おれとサルは信長の出し抜けの言葉に首を傾げた。北近江って浅井長政の領土だよね。おれとサルだけで行けってこと？　おかしくね？
「先に着陣し、鎌刃城の堀二郎秀村を調略してこい」
「かしこまりましたぎゃあっ」
おい。クソザル、即答しすぎだろ。沓掛勢は百人ぐらいしかいねえんだぞ。木下勢だって二千人そこらだろうが。そんな兵数で北近江なんかに行ったら、浅井長政に蹴散らされて終わりだろうがよ！
「調略が成功するまで帰ってくるな。掘秀村を引き入れるまでは俺は動かぬ。わかったな」
信長の前から去り、岐阜城を下りるおれとサル。
「なんで、あんなすぐに返事なんかするんですか。あっしと藤吉郎殿の兵数だけじゃ、浅井にすぐにやられちゃうじゃないですか」
すると、フン、と、鼻先を背けるサル。
「おみゃあのせいで、今朝はさんざんだったぎゃ。結局、カカアに捕まって、くどくどくどくどと説教三昧だったぎゃ。おみゃあなんて、浅井にやられてしまえばいいんだぎゃ」
なんていう逆恨み。それとこれとはまったく関係ないしよ。
「怖じ気づいて逃げ出さぬようにするんだぎゃあにゃ」
蔑むような目をおれに残し、馬に跨ると従者と共に去っていったサル。ぐぬぬ。お前こそ氏ね。クソザル。
ということで、翌朝、あずにゃんたちに見送られて出立。願福寺で沓掛勢に号令をかけたけれど、太郎とさゆりんがスカウトに勤しんでいたにも関わらず、兵数はほとんど増えていない様子。使えねえ奴等だな。

で、サル率いる木下勢と合流し、一路、北近江へ。
途中、火縄銃を担いでいるシロジロにどこからそんなものを持ってきたのか訊ねたら、十兵衛に貰ったやつだと言う。
「なんで、お前が装備しているんだよ」
クリツナの馬上から釘を刺すと、
「いや、これはいざというときに旦那様にお渡しするつもりッスよ。あっしはただの従者ッスから」
おれはシロジロから火縄銃を奪い取ると、代わりにねじり鉢巻きに持たせていた槍を渡す。
「テメーも槍働きしろ。沓掛勢は兵数が少ないんだからな」
「あっしなんかすぐに殺されちゃうッスよお」
「いくさってのはそういうもんだ。死を覚悟して戦え」
「御安心ください、四郎次郎様。何かあったら、俺がお守りいたします」
長い槍を担いでいるタコ入道が割って入って来たので、おれがシロジロじゃなくておれを守れと注意していると、前を歩いていた馬上の太郎が兜の下の目をギロリと向けてきた。
「何を無駄口ばかり叩いておるのだ！」
ぐう。まるで、おれまで一緒に怒られた気分。
というか、太郎と一緒に出陣するのはこれが初めてか。今までは馬廻衆だったから、いくさに出ても、別々に動いていたしな。やかましいのがいると、ただでさえ嫌いないくさが、更に息が詰まる思いにさせられるわ。
軍勢は岐阜から北近江に繋がる東山道を進軍し、その途上に堀二郎秀村が守る鎌刃城があるみたい。おれはいつ浅井勢が突撃してくるかとビビっていたけれど、その気配もほとんどないまま、低い山に囲まれた野原に陣取り。
シロジロが言っていたけど、関ヶ原というらしい。ふーん。ここで将来、天下分け目の戦いをするわけか。ま、おれはどうせそのときにはジジイになっているか、死んでいるかだろうから関係ないけ

ど。
で、おれと太郎とさゆりんはサルの陣に呼ばれて、軍議。
小さい椅子に座っているサルが信長みたいに上座の位置にいるのがちょっと気に入らなかったけれど、おれもゴンロクとかが座る列の最前の位置を与えられたので、よしとしてやる。
「あ、あの、父上」
隣の太郎が耳元で囁きながら、視線の先を縦長帽子に向ける。そうか、太郎はいくさ狂いを見るのが初めてなのか。
「あんまり気にするな。あいつは戦場に来るといつもああなんだ」
今日は一人でくつくつと笑っている半兵衛。見なかったことにしたいけれど、木下勢の軍議なんだから、発言するよな。うん。やっぱり今日もヒャッハーするんだよな。
木下勢の与力が全員集まって（イエモンのクソ野郎もちゃっかり参加していて）、蜂須賀クマ男が腰を上げる。
「今さら言うべきことでもないが、先鋒隊の我らは鎌刃城の攻略を任されておる。とはいえ、我らだけの兵数で攻城しても、小谷城から援軍を差し向けられて終わりだ。おやかた様からは城主掘二郎の調略を任されておるが、誰か舌に自信のある者はおらんか」
「藤吉郎殿じゃないッスか」
おれの発言に「にゃっ」と言って飛び跳ねたサル。
「お、おりゃあは動けにゃあだぎゃ。い、いくら調略のおりゃあだからって、今回は一軍を率いているだぎゃあ。一人で動くわけにゃあいかにゃあ。で、でやから、おみゃあが行け。牛殿が寝返らせてくるだぎゃあ」
「いや、あっしが動くときは藤吉郎殿も動くときでしょ。二人一組だっていつも言っているじゃないッスか。なんなんスか、いつもは率先して動くくせに、信長様がいないとなるとそれスか」
「お、おみゃあ、言いがかりをつけるのきゃあっ」
「ちょっと、父上、軍議ですよ。喧嘩はよしてくださいよ」
「拙者が行きます」

ダークサイドに堕ちている半兵衛が口を開き、口を噤んだおれとサル。また発狂が始まるのかと思って、皆が皆、身構えたけれど、半兵衛は懐から紙切れを出し、サルの前に広げた。

「掘二郎の家老に樋口三郎左衛門という智将がおります。拙者は浪人時代にこの者と親しくさせてもらっておりました。三郎左衛門を当たるゆえ、殿は掘二郎に勧誘の文を書いてくだされ」

「にゃ、にゃあ」

意外と発狂していない半兵衛に肩透かしを食らわせられながらも、サルは弟の小一郎に筆を用意させ、半兵衛の言われた通りに文面を作っていく。

「それにしても、調略だけだったら兵を出さなくても良かったのに、どうしておやかた様は我らをこの地に向かわせたのでしょう」

太郎が言うと、サルやおれは首を傾げ、与力の連中も腕組みをして考え込んだり、太郎に同意して頷いたりしたが、突如、半兵衛がけらけらと笑い出して、陣中は一気に変な空気に包まれた。

「太郎！　疑問に思うのであれば、考えなければならんぞ！」

太郎は半兵衛の狂いっぷりに唖然。

「進軍していて気付かぬか。浅井は小谷城から出てこぬ。越前の朝倉と合流しない限り、ひたすら籠っている気だ。信長もそれをわかっている。だから、我ら手勢を囮に差し向け、小谷城から引っ張り出そうとしているのだ。金ヶ崎でしんがりを務めた我らならば、ある程度食い止めるであろう。その間に岐阜から出陣し、野戦に持ち込む気なのだ」

半兵衛はサルの手元から手紙を野蛮な手つきで引っ手繰ると、それを雑なまでに折り畳みながらけらけらと笑う。

「しかし、信長も信長で甘い。浅井長政という男は信長のいくさを知っているからな！」

信長呼ばわりしていることには誰も触れず、むしろ、絶句し、けらけらと笑い上げながら陣を出ていく半兵衛をそっと見送る。

「と、殿」

クマ男が見てはいけないものを見てしまったあとのような顔でサルに視線を向ける。
「だ、大丈夫なのでしょうか。半兵衛に調略などを任せてしまって」
「にゃあ……」
サルは頭をぽりぽりと掻くだけで言葉にならず。
うーん、と、皆でつい考え込んでしまう。いくさ狂いの半兵衛でも、今までは作戦を立案し勝機を運んできてくれたが、さすがに寝返り工作となると、今のあいつが行ったら相手もびっくりして寝返りどころじゃなくなるだろ。
「でも、あいつはわからないぎゃあ。半兵衛の頭がおかしくなる基準がわからないだぎゃあ。狂っているときもあれば、普段の半兵衛のときもあるだぎゃあろ」
「それならば、当家の吉田早之介も共に向かわせましょう。早之介は摂津で父と共に調略に走っていた実績がございますから」
太郎の言葉に、えっ、という顔をしたさゆりん。おれはにやにや顔をさゆりんに向ける。そうしろそうしろ。流れ的におれが半兵衛と一緒にさせられそうな予感がしたが、お前が行けばおれは行かなくて済む。それに元はくのいちなんだから、調略なんてお手の物だろ？
「そうだぎゃあにゃ。半兵衛一人だけだと不安だからにゃあ。摂津で動いていた男ならば、安心だぎゃあ」
男じゃないけどね。くすくす。さゆりんはおれを睨みつけてきてるけど。金ヶ崎では仲良く戦っていたとはいえ、半兵衛と一緒に行くのが嫌なんだろうな。半兵衛に水をぶっ掛けられた苦い過去があるもんな。ざまあ。

相撲

「なんで、私があんないくさ狂いなんかと……」

ぶつぶつとごちながら、町人の格好（男装）に扮装して調略に出かけていったさゆりん。頑張れよ～＾＾

鎌刃城が寝返るまでは、浅井が攻めてこない限りやることもないので、おれは日傘の下で真夏の日差しを避けつつ、寝転がって扇子を仰ぐ。

「父上」

太郎がむすっとした顔で現れる。言われようとしていることはだいたいわかっているので、寝返りを打って、太郎に背を向ける。

「父上がそのような体たらくでは兵の士気が落ちます」

「じゃあ何をしろって言うんだよ」

「将兵を見回ったり、情勢を把握したりと、いろいろとあるじゃないですか」

おれはパタパタと扇子を仰ぐ。

「そういうのはお前に全部任せているんだ。おれはただのお飾りだからな」

別にすねているわけじゃない。事業化しているだけだ。数千の兵の指揮権を持っている侍大将の太郎がいるんだから、おれが軍事をとやかくやる必要はない。おれは最終的な決断をするだけ。

てか、なんか、昔にもこんなことがあったような気がする。

「お飾りだなんて、誰も思っていません。沓掛の兵は父上に付いてきているのです」

「おい、太郎」

と、おれは体を起こし、むっつりと突っ立っている太郎を睨みつける。

「ずっと前にもこんなことがあったよな。お前はそのときおれが言ったことを忘れたのか」

「何を言っているのですか。父上と戦場に出るのはこれが初めてです」
「違う。墨俣築城のときだ。お前は忘れたのか。あのときもお前はおれがサボっているとかなんとかごちゃごちゃうるさかったけれど、結局は先頭を切って働いたのはおれだろうが。いいか、太郎。大将ってのはそういうもんなんだ。わかったか」
太郎は不服そうに眉をしかめながらも、黙って引き返していった。まったく。半兵衛の言うことは聞くくせに、相変わらずおれの言うことには納得のかけらも見せないんだからよ。
だいたい、半兵衛だって言っていたんだ。大将は何もしなくていいって。
ま、厳密に言うと、大将じゃないけどさ。この軍勢の頭はサルだけど。
でも、こんな暑い中、いちいち気を張っていたら、いざ、戦争ってなったときに何もできなくなっちまうじゃねえかよ。そういうメリハリが必要なんだよ。太郎は頭が堅い学校の先生タイプだから駄目なんだよな。
とはいえ、寝そべっているだけも退屈だな。
で、おれは腰を上げ、陣幕をめぐり、思い思いに訓練をしている沓掛勢の中からシロジロの姿を探す。いない。と、思ったら、一人離れたところの木陰に座ってだらけていた。上半身裸で、布切れで顔を仰いでいるというひどい有様。
「おい、何をサボっていやがんだ」
「いや、ちょっと暑かったんで。それにあっしなんか訓練したところで役立たずッスよ」
「ふーん。そうか。なら、おれの退屈凌ぎになれや」
「退屈凌ぎって何をするんスか」
おれは木の棒を拾うと、地面に大きな円を描き、棒きれを放り投げ、シロジロを手招いた。
「相撲だ」

するとと、シロジロは不敵な笑みを見せながら腰を上げた。フン。そう来ると思ったぜ。相撲となれば、この馬鹿はおれに対する日頃の恨みを全力で晴らしに来るに違いねえ。馬鹿な奴。体格だけ取ってもおれは横綱の付き人級、この馬鹿の体格はせいぜいちびっこ相撲。しかも、おれは小学生のときにデブだったという理由だけで相撲クラブに在籍していたんだからな！

「手加減無用だからな」

「旦那様こそ、あとで怒ったりしないでくださいよ」

身の程知らずが。ぎったんぎったんにしてやる。

間合いを取り、向かい合ったシロジロとおれ。両手を地面に突き、はっけよーい、って、おい！　仕切りもせずに不意に掴みかかってきたシロジロ。この野郎、そこまでしておれをぶん投げたいっていうのか。

だが、テメーの不意打ちごときに戸惑う横綱の付き人じゃねえ！

怒涛の上手投げじゃあ！

ぐしゃっ。

「ううっ」

「おいおい、シロジロ。口ほどにもねえな。しかも、不意打ちなんていう汚ねえ真似までしたくせによ」

「ふ、不意打ちなんてしてないッスよ」

「したじゃねえか。お前、ちゃんと仕切りを取れよ」

「なんスか、仕切りって」

と、言いつつおれの膝目掛けて突っ込んできたシロジロ。この野郎、ふざけやがって。むかついたんで、禁じ手の膝蹴り。シロジロの顎が上がったところを突っ張り突っ張り、最後に豪快な上手投げで、転げ回るシロジロ。ワロス。シロジロは涙目。

「どうした。ん？　かかってこいや」

「あんまりッスよお。だって、旦那様とあっしじゃ体の大きさが違うじゃないッスかあ」

「おいおい、あんだけやる気になっていたくせに、今さらなんだよ

その言い訳は。退屈凌ぎにならねえじゃねえかよ。オラ、立て、コラ」

「もういいッスよお。勘弁してくださいよお」

泣きごとをほざきながらいやいやするシロジロを引き掴まえて、外掛けを食らわせ、後頭部を地面に打ち付けるシロジロ。

「オラオラ、これも訓練の一貫だぞ。立てや、コラ」

シロジロの髪を掴み上げていると、

「何をやっているんですかっ！」

と、甲冑をかちゃかちゃと鳴らしながら太郎がやって来た。チッ。

「相撲で訓練をつけてやっているところだ。お前はどっか行ってろ」

「相撲？」

「わ、若君とやればいいじゃないッスか。そうッスよ。あっしみたいな弱い奴じゃなくて、若君とやってみてくださいよ」

ほほう。この馬鹿は太郎に復讐させるつもりでいるんだな。剣術では太郎には到底適わないけどな、相撲ってのはデブ御用達の武芸なんだよ！

おれはシロジロを放り投げると、太郎に向けて右手をくいと動かした。

「太郎、かかってこいや」

「何を言っているのですか、馬鹿馬鹿しい」

太郎は踵をくるりと返す。

「なんだ、逃げるのか。ん？」

ぎらりと振り返ってきた太郎。

「逃げてなんかおりません。父上に怪我をさせてはいけないと思ったまでのことです」

「お前が怪我をするのが怖いんだろう。ん？」

「そこまで言うなら、拙者も男です。お手合わせ願いましょう。しかし、恨みっこなしですからね」

挑発に乗って、太郎は甲冑を外し始める。フン。身の程知らずの馬鹿息子め。その鼻っ柱をへし折ってやる。

おれが腕組みをして待ち構えていると、主人とその息子が決闘をしようとしているものだから、騒ぎを目にした雑兵どもがぞろぞろと集まってきた。

「おいっ、殿と若の手合わせなんて滅多に見られねえぞ！」

「殿、あんまり無茶しなさんなよ」

土俵の周りには野次馬たちがぞろぞろと集まったけれど、むう、木下勢の連中もいるじゃねえか。これは絶対に負けられない。

甲冑を脱ぎ捨てた太郎が、羽織もまくり上げると、歓声が湧いた。むむむ。腹筋が彫刻のように割れ上がったなかなかの細マッチョ。だが、相撲はマッチョのスポーツじゃねえ。

「手加減しませんぞ、父上」

「首根っこへし折るつもりでこいや」

なぜか行司役になっているシロジロの掛け声とともに掴み合うおれと太郎。ぐぬぬ。なかなかのパワーじゃないか。めざとく足を掛けようとしてきやがる。おのれえっ。ここで負けたらおれの面目丸つぶれだ。たかだか馬小僧なんかに負けてたまるか。

上手投げっ！　上手投げっ！　上手投げっ！

チッ。さすが凶暴馬を乗りこなしているだけあって、なんていう足腰。全部こらえやがった。

「どうした、殿！　早く投げちまえよ！」

「殿のほうがでかいだろ！」

ぐう。うるせえ野次馬どもだな。太郎も太郎でどんだけ負けず嫌いなんだ。それにもう疲れてきたし。だいたい、おれはシロジロとやったあとにこいつと取り組んでいるんだぞ。ハンデをくれてやっているもんじゃねえか。

なんで、おれは思わず耳打ち。

「太郎、この勝負は最初からお前に有利だ。だから、わざと負けろ。兵隊の前で情けない真似をさせん――」

と、話もそこそこにぶん投げられ、地面に叩きつけられたおれ。

「何か言いましたか、父上」

ご満悦の表情でおれを見下ろしてくる太郎。クソッ！　この馬鹿息子がっ！

「もう一回だ！」

「思う存分お相手しますよ」

密書

おれと太郎の対決は一勝三敗ということで、とりあえずの面目は保てた――と、思う。

ただ、張り切りすぎて、体中が痣だらけ。次の日からはずっと日傘の下で扇子を仰ぐだけ。陣幕の外ではわいわい騒いでいる声がしていたけれど。どうやら、雑兵どもの間で相撲がブームになってしまった。

それにしたって、さゆりんと半兵衛は何をやっているんだか。鎌刃城に出かけてから三日経っている。岐阜からの伝令によると、ゴンロクと佐久間ヒゲオヤジはとっくに六角ゾンビ親子を蹴散らして、今日にでも岐阜に戻って来るらしい。

さっさと掘ナントカを寝返らせないと、信長に怒られそうな気がするけどな。こうしている間にも、おれらが前線に出てきたことは浅井も把握しているんだから、朝倉と共同して態勢を万全に固めるだろ。

ま、おれがあれこれ考えたってどうにもならないけど。

西の空にでっかい入道雲がそびえている。雲行きが怪しくなってきた。

「父上」

うるさいのがやって来た。また、なんか文句でもあんのか。

「怪しい者を捕らえましたが、どうやら父上に面通りを願っておるようです」

「怪しい者？」

「園城寺の修験僧を名乗っておりますが、おそらく浅井の者と思われます。いかがいたしますか。斬り伏せましょうか」

「別に殺さなくたっていいだろ。会いたいって言っているなら通せ」

有無も言わさずに斬り伏せるだなんて物騒だな。でも、おれに会いたいだなんて物好きな人間だな。どこのどいつなんだろ。もしも、

本当にナントカ寺の奴だったら、寄進札のことを嗅ぎつけたのか。
それだったら、即刻斬り伏せちゃったほうがいいな。
で、ややもすると、雑兵に手荒に引っ立てられながら、一人の山伏がおれの前に突き出された。
「簗田牛太郎殿とお見受けいたす」
山伏は両手を地面につけるとそう言ったが、おれはむっとした。
「何を言っているんだ貴様は。おれは簗田左衛門尉だ。ふざけるな」
「こ、これは失礼つかまつりました」
「何の用だ」
すると、山伏は変てこな三角帽子を脱いだ。帽子の紐には紙が結えつけられてあったらしく、それをちまちまと解いていくと、ぐしゃぐしゃになった書状らしきものをおれに差し出してきた。
「浅井新九郎長政様からの密書にてございます」
「貴様ァっ！」
途端に太郎が咆哮し、太刀を抜いて振りかぶった。
「やめろっ」
「何を言っているのですか、父上っ。この首、小谷に送り返さずにどうするつもりなのですっ」
おれは太郎に書状を突き出した。
「とりあえず、読んでからにしろ」
ミミズ文字は読みにくいからね。代わりに読んで。
太刀をおさめた太郎は渋々おれから書状を取り、くしゃくしゃになっている紙を掌で伸ばしてから文面を読み上げる。
書いてあることは要するにこうだった。
自分が義兄の信長と戦うのは不本意だ。しかし、隠居したはずの父や家中の老人たちに押し出されてしまい、結果的に金ヶ崎に兵を差し向けることとなってしまった。今、まさに織田家との決戦の火ぶたが切られようとしているが、織田家と戦ったところで勝ち目はない。浅井が滅びるのはおろか、何の罪もない市やその子たちまでも殺めてしまう。

自分は織田家との決戦を避けたい。もはや手遅れかもしれないが、自分は簗田殿なら何かをしてくれるような気がしてならない。どうか、知恵を貸してくれないだろうか。

太郎は書状をぐしゃぐしゃに丸め潰すと、地面に叩きつけた。

「何を勝手なことを！　金ヶ崎では我ら沓掛勢が壊滅まで追いやられたことを知ってのことか！」

太郎は再び太刀を抜くと、おれが止める暇もなく、密使の首を斬り落としてしまった。ううっ。ぐろい……。

切っ先から血をぽたぽたと滴らせながら、鮮血を頬につけたまま、太郎はおれを睨みつけてくる。

「父上、たぶらかされてはなりませんぞ。我らが敵を調略しているように、敵も我らを謀ってくるのですからな」

「う、うん」

太郎は今しがた斬り落とした首を掴み取ると、

「木下殿に報告して参ります。お前ら、死体は片づけておけ」

と、言い残し、かちゃかちゃと陣を出ていった。

おれは青ざめた顔を醒ますかのように扇子でしきりにぱたぱたと顔を仰ぎ、務めて冷静に死体処理の様子を眺める。

太郎は鬼だ。ぱたぱた。何のためらいもなく斬っちまった。ぱたぱた。怖すぎる。てか、本当に調略にかけられていたのかどうかも不明だ。去年の年末頃に小谷城で会ったときの浅井長政は、手紙に書いてある通りの好青年だった。本当に助けを求めていたのかもしれないし。ぱたぱた。

でも、だからといって、おれがどうにか出来るわけないしな。やっぱり、調略なのかもしれないし。太郎のやったことは戦国武将にとって当然のことなのかもしれないし。

死体処理が済んだけど、血がべったりと残っている。ううっ。空模様は怪しくなってきて、遠くの空で雷鳴が。

「旦那様あ。雨が降って来そうだから、蓑を被ったほうが――。ひいっ。なんスか、これっ」

シロジロが血溜まりに気付いて跳ね跳んだ。
「太郎が密使の首を斬りやがった」
「うう。若君がですか」
シロジロは顔をしかめながら、血を見つめている。そのうち、ぽつぽつと雨が落ちてきた。おれは傘の下にいるから平気。ただ、人殺し現場にはいつまでもいたくないな。
「強くなりそうッスよ。どこかの民家の屋根を借りたほうがいいんじゃないんスか」
てかさ、雨が降って来てようやく気付いたけれど、なんで決戦でもないのに野っ原に陣取ってんだ。どっかの寺とかあんだろうが。クソザル。
「殿！」
どこかに避難しようとしていたら、陣幕を捲り上げて飛び込んできたのはタコ入道。肩でやたらと息を切り、どこに行っていたの？
「吉田早之介殿から伝言をお持ちいたしました。鎌刃城城主、掘二郎秀村の寝返りは万事整ったとのことゆえ、早急に岐阜のおやかた様の元へご報告を」
「いや、でも、早之介はどうしたんだよ」
「竹中様と吉田殿は寝返りを確実にさせるためと鎌刃城に留まるそうです」
シロジロが不安そうな顔つきでおれを見上げてくる。
「わかった。藤吉郎殿のところに行こう。タコ入道、お前もついてこい」

激流の中へ

信長が岐阜を発ったという報せが入ってきたのは、調略成功の早馬を出してから四日後だった。その間、いつになったら信長は来るんだよとやきもきしていたけれど、出陣したその日に関ヶ原に到着するという素早さで、あわてて出迎えの支度を始めたおれとサル。

果てしなく続いている軍勢の先頭はゴンロクで、おれとサルはてっきり軍議かと思っていたんだけれど、ゴンロクが早急に出陣の支度をしろと怒鳴り散らしてきた。

「おやかた様の下知じゃ！　このまま鎌刃城まで向かうぞ！」

で、鎌刃城に調略を仕掛けていた木下勢が先頭となって進軍。鎌刃城近辺に入ると、なぜか城付近、織田勢のいないところで誰かと誰かが小競り合い。

「どういうことなのでしょう、あれは」

太郎が馬上で呟いていると、どこからともなくさゆりんの声が。

「木下様はどこにおられるかあっ！」

いや、サルじゃなくておれだろ。ちなみにサルならおれのすぐ近くにいるけど。

で、さゆりんはサルに事の次第を報告。鎌刃城では城主の掘秀村の寝返りに最後まで従わなそうな連中がいたので、半兵衛と家老の樋口ナントカが謀略を働かせて反乱分子を追い出しているらしい。

ということで加勢に向かおうと兵を走らせた木下勢だったけれど、織田勢の到着にビビった反乱分子がたちどころに逃げ出して、鎌刃城はあっさりと開城。

まあ、ビビるわな。聞いた話によると、信長が引き連れてきた軍勢は三万から四万人だって。おれもビビった。今までのいくさにはない大軍勢だもの。復讐に駆ける信長の意気込みがひしひしと伝わってくる。

鎌刃城で召集した軍議の面々を見ても総力戦の様相を呈している。

佐久間ヒゲオヤジやゴンロク、サンザ、それに稲葉ガンコ親父などの西美濃三人衆、その他マリオを筆頭に中堅幹部もぞろぞろ。

もちろん、マタザもウザノスケもいる。相変わらず、軍議の始まりはサルとウザノスケの睨み合いから。

「掘二郎秀村、よくぞ我らについた」

信長が甲高い声を発すると、掘二郎は、ははあっと平伏した。城主って言うからおっさんなのかと思っていたら、太郎と同じぐらいの若さ。

半兵衛やさゆりんがどんな手段を使って寝返らせたのかは不明だけれど、あのぐらいの小僧だとな、こんな大軍が前線にまでやって来るってなったら掌返しちゃうよな。

「して、堀殿、小谷城からの指示はなんだったのじゃ」

サンザが訊ねると、掘二郎は傍らにいた樋口三郎左衛門に目配せをし、代わりにそのおっさんが答える。

「越前朝倉が到着するまで、鎌刃で持ちこたえろとのことでした。実は、木下殿の軍が関ヶ原に着陣したとき、小谷城からは何度も越前に援軍の要請を送っていたらしいのですが、朝倉はどうにも腰が重いようで、昨日までの報告によると、いまだ朝倉勢は一乗谷から出てこないようです」

フン、と、つまらなそうに鼻先を突き上げた信長に、ゴンロクが身を乗り出して意見する。

「ならば、今こそ絶好の機会かと。朝倉勢の到着を待たずして、一挙に小谷に攻め上がりましょうぞ」

「権六、本気で言っているのか」

唸りながらゴンロクを睨みつけた信長の様子に、戸惑う一同。いや、ゴンロクの言う通りだろ。

「十兵衛、小谷城を落とすには幾日かかるか、このうつけどもに教えてやれ」

十兵衛は頭を軽く下げたあと、ちょっとまずそうな顔で周囲を見やりながら、また、軽く頭を下げた。

「拙者は上総介殿が京から岐阜へ戻られたのと同時に、つい先日まで単独で小谷の諜報をしており――」
「前置きなどいい。幾日だ！」
「はっ。どんなに早くても二年はかかると思われます。小谷城は天然の尾根を利用した一大城郭、尾根の各所に支城を配置し、構造はまったくもって見事という他ない堅固さでございます。今の状況で攻城戦などはもっての他、攻め方の我らは散々に打ち破られてしまいます」
「そういうことだ」
信長に睨みつけられたゴンロク。はあ、と、しょんぼりするゴンロク。フヒヒ。
「結局は新九郎を引っ張り出さなければ話にならねえ。だが、朝倉が動かねえなら、新九郎も動かねえ。どちらにしろ、我らも朝倉を待つしかねえってことだ」
「雌雄を決する戦いになるであろう」
サンザが諸将をキッと見渡しながら言う。
「ここで勝つのと負けるのとでは天と地との差じゃ。それは浅井も同じこと。兵数では我らが勝っているとはいえ、浅井は背水の陣で挑んでくるであろう」
「とりあえず、ここで二日待つ」
信長はそう言いながら腰を上げた。
「二日経っても朝倉に動きがなければ、進軍だ。小谷の城下に火を放ち、新九郎を引っ張り出す。それまでに各々英気を養っておけ」
乱暴狼藉が御法度の織田軍が城下に火を放つだなんて。
「おやかた様の浅井に対する恨みは相当根深いですね」
鎌刃城の広間を出ると、太郎が言った。お前もな。密使の首を即刻斬り落としちゃったじゃん。
「それにしたって、朝倉は何をやっているのでしょうかね。浅井は朝倉のためにおやかた様を裏切ったというのに、いざ、浅井が朝倉に援軍要請を申し出ても、まったく動かないと言うのですから」

「日和見主義なのです」
背後から声がして、びっくりして振り返ると十兵衛がにこにことしていた。
「拙者が客将として朝倉にいたときからそうでした。もっともそれが古い人間たちの考えなのですがな」
十兵衛はぽんぽんと太郎の肩を叩く。
「一軍の将になったからと言って、張り切りすぎるのは禁物ですよ。今度のいくさは金ヶ崎ぐらいの、いや、それ以上の死闘になるでしょうからな」
「か、かしこまりました」
「とはいえ、簗田殿が付いておられるから、いらぬ忠告でしたな」
そう言い残し、おれと太郎の前から去っていった十兵衛。
むう。あいつ、太郎にはいつも優しいな。決着はついたっていうのに、まだ、義父の座を狙ってやがるのか。
太郎は織田家の怪物ルーキーだからな。唾をつけときたいってことなのか。
「おい、太郎。十兵衛にはあんまり気を許すなよな」
「なぜですか」
太郎は訝しげに眉をしかめる。なぜと言われたら説明のしようがないので、
「なんとなくだ」
と、言っておいた。もちろん、太郎は納得しなかったけれど。
で、信長は、二日、鎌刃城に滞在した。
朝倉は依然、越前から出陣していないということだった。滞在二日目の夜、再び軍議が召集され、明朝、小谷城に向けて進軍することが諸将に伝えられた。
鎌刃城から小谷城の途上にある浅井方の横山城には西美濃三人衆が後詰めとして包囲し、本隊はそこを迂回して小谷城前線にまで進軍。サンザを筆頭に七人の将は小谷城を西に望む雲雀山に着陣、残りの将と信長本隊は小谷城を北西に望む虎御前山に着陣し、そこを

拠点に小谷城下を焼き払って浅井勢を城から出張らせるということになった。

「おやかた様は本気で皆殺しにするつもりだぎゃあ」

軍議が終わったあと、サルが密かにおれに呟いた。

「町民にまで手を出すなんて、今までにないことだぎゃ」

残虐非道（な描写あり）

昨年末に小谷に来たときから、信長と浅井長政がやり合うことはわかっていたことだけれど、まさか、こんなことをしようとは思いもしなかった。

ほぼ、総出だった。たいまつを手にした雑兵どもが次から次へと家屋に火を放ち、小谷城下の空は黒煙に覆われ、乱暴狼藉が御法度だったはずの連中は、ここぞとばかりに家屋に押しかけて強奪、強姦、殺人を繰り返し、けたたましく笑い上げる織田兵、悲鳴を上げて逃げ惑う城下の人間たち、地獄絵図とはこのことだ。

「無用な殺生は犯すなあっ！」

太郎が沓掛勢に発していた。その言葉を守って沓掛勢は放火を犯しているだけだったけれど、他の織田勢がやりたい放題だった。

「ひでえな」

クリツナの馬上からおれはただ呆然と呟いた。

「こんなものです」

さゆりんが兜の下で苦々しい表情を浮かべている。

「殿はおやかた様のいくさしか知らないでしょうけど、いくさは本来、こういうものです。だから、兵たちにためらっているものなどおりません」

獲得した領地を、その後平穏に治めるには領民の気持ちを掌握することが必要だ。だから、信長は規律を隅々にまで徹底させていた。

しかし、戦国時代の戦争とは、本来、強奪するものらしい。兵隊たちのほとんどは半農半兵だから、農作業を放ったらかして戦場に出かけてきている。だから、敵地では取れるものはなんでも奪い取る。

「だから、いくさは嫌いです」

それに兵隊は、半ば命を投げ出しているから、気が立っているし、倫理感がまるでない。どうせ死ぬのだから、何をやってもよし。い

い女がいたら犯し、イケメンがいたら殺す。何をやってもよし。
「拙者が生まれた大和もそうでした。大和武士団が互いに争い続け、物心ついたときは母親はおりませんでした。父親はいくさのどさくさであああいうふうに殺されました」
さゆりんが指差した先には背中を斬られて地面に這いつくばっている町人とそこにすがりついて泣き叫ぶ子供がいた。さゆりんは馬から降りると、煙が充満し、雑兵どもが暴れ回る中、そこに歩み寄り、太刀を抜く。
「おいっ！」
さゆりんは子供を斜に斬り伏せると、悶えている町人を一突きに殺した。
「何をやっているんだよっ！」
さゆりんは刀を振って血を払い、それを静かに鞘におさめる。
「鬼だな」
クリツナの口輪を取るねじり鉢巻きが呟いた。シロジロは青ざめた顔で震え上がっている。
おれはクリツナから降りると、さゆりんに駆け寄り、さゆりんを突き飛ばした。
「無用な殺生はするなって太郎が言っているだろうがっ！」
「生きるほうが地獄のときもある」
怒号と悲鳴が湧く中で、おれに向けてきたさゆりんの目は潤んでいた。
一日中、城下で織田勢が暴れ回ったというのに、浅井勢は一兵たりとも小谷城から出撃してこなかった。
明日も虐殺をするのかと思うと、おれはうんざりだった。そんな気分になっているのはおれだけではない様子で、虎御前山の信長の陣に召集される途中に出くわしたサルなんかも口数が少なかった。
「おやかた様の命令とはいえ、無実の人間を殺すのは忍びないだぎゃあにゃ」
いくさ狂いの半兵衛も、馬上でまったく動かずにむっつりしてい

ただけらしい。
ただ、いくさ慣れしている古参の将、ゴンロクや佐久間ヒゲオヤジなんかの顔には別段虐殺に応えている気配もなく、信長に焼き討ちの報告をすらすらと述べた。
「そうか」
信長は報告にそれだけを呟いた。あとは黙った。サンザが雲雀山に行っているので、軍議の進行役もいなく、沈黙がしばらくの間続く。
「おやかた様」
と、マタザが沈黙に耐えきれなくなったかのように口を開いた。
「明日は拙者と内蔵助が城下に参りましょう」
「いや、いい。朝倉が越前を出たとの報せが入った。同じく、徳川三河守にも早馬を出した。朝倉が到着するのと同時に徳川の援軍も来るであろう」
信長の言葉に一同がざわついた。キモブタ家康の援軍があるなんて軍議では一回も言わなかったし、そもそも、いつもみたいに一緒に来れば良かったんじゃないのって思ったけれど、
「最初から大勢で攻め上がると、新九郎は閉じこもってしまうからな」
という信長の言葉で納得。てか、味方にもそれを伏せておいて、キモブタの援軍があるなんてことを一切漏らさないようにしていたっぽい。
「今日の焼き討ちで、城内は野戦に持ち込むべきとの声が多いに上がっていることだろう。新九郎も、まさか俺がこのような所業に出るとは思いもしなかったに違いねえ。朝倉の重い腰を上げさせることもできた。朝倉が到着次第、会戦だ」
だが、と、信長は言葉を繋ぎ、大地図の前に立った。信長自らが棒を手に取るのは珍しいことだった。
「虎御前山にいては睨み合いが続くだけだ。よって、陣替えをし、決戦地を軍勢が展開できる姉川に持ち込む。明日、我らは虎御前山

と雲雀山を降り、横山城近くに陣を張る」
「恐れながら、おやかた様」
佐久間ヒゲオヤジが頭を下げた。
「横山城近くに陣替えということは、軍を後退するということ。敵方に背を向ける格好となり、小谷城から追手がでてくることも想像できます」
「確かにこの大軍を後退させるのは危険でございます」
と、ゴンロクもヒゲオヤジに乗っかると、信長は棒を地図の上にぽいっと放り捨て、腕組みをしながら椅子に腰かけた。
「ならばどうする。この山に陣取り、相手と睨み合うか？」
「そちらのほうが無難かと」
「ならん。ならば、いつまで睨み合うつもりだ。その間、摂津や伊勢はどうするつもりだ。織田のほとんどの兵をここに向けて来ているのだ。お前らはその意味がいまだにわかってねえのか？」
「おやかた様！」
と、突然、ウザノスケが椅子から降りて、地面に平伏した。何をやってんだ、こいつ。
「俺に五百の兵を分け与えてくだされ！　しんがりを務めましょう！」
まさか、こいつ、金ヶ崎のいくさでしんがりを務めて出世したおれやサルに負けまいと、名乗り出たんじゃ。
ふいに飛び出してきたウザノスケに、思わずといった感じで信長は口許を緩ませた。
「お前にしてはずいぶんと殊勝じゃねえか」
「お、おりゃあにも務めさせてくださいだぎゃあ！」
と、やっぱり、ウザノスケに張り合って、椅子から転げ降りたサル。ウザノスケと一度睨み合ったあとに、額を地面にこすりつける。
「おりゃあは金ヶ崎の実績がありますだぎゃあ。しんがりならお手のもんですぎゃあ」
「サルはいい」

「にゃっ？」
「確かに金ヶ崎のいくさぶりは見事だったが、どうせそれに慢心し、下手を打つだろうからな。それがお前の性格だ」
「左様、おやかた様の言う通りだ。調子に乗るな」
ゴンロクにまで罵られて、しょんぼりと椅子に座るサル。フヒヒ。さっきまで落ち込んでいたくせに、出しゃばりすぎなんだよ。
それにウザノスケはおれとサルが金ヶ崎で成功したから、安易に名乗り出たんだろうけれど、しんがり役ってのは相当やばいんだ。そのまま殺されちまえ。
「わかった。内蔵助、その心意気汲んでやる。しんがりを務めろ」
「しかし、おやかた様、内蔵助だけでは少しばかり不安も」
マリオがそう言って、ウザノスケが睨みつける。マリオも睨み返し、ウザノスケはそそくさと顔を背ける。
マリオとウザノスケのやり取りを目にしていた信長は、しばらくの間、しかめっ面で黙っていたが、
「だったら一人付けてやる。こましゃくれ、お前が内蔵助と共にしんがりを務めろ」
誰？　こましゃくれって。
「か、かしこまりましたっ！」
えっ。太郎が頭を下げているんですけど。てか、太郎って信長にこましゃくれって言われていたんだ。ワロス。
いやいや、ワロスじゃない。
「恐れながら、信長様。太郎はまだ小僧ですし、沓掛勢はぼろぼろの状態なんで、しんがりを務めても、多分、下手を打つかと」
「お前や沓掛勢はいい。こましゃくれだけを内蔵助に寄越せ。京での喧嘩の罰だ。内蔵助と共に死んでこい」
「おやかた様っ！」
マリオが血相を変えて飛び上がり、一同はびっくりして肩をすくませ、信長は眉をしかめた。
「太郎は、左衛門太郎殿はつい先日まで馬廻衆だった者ですぞっ。

このような者に一軍を任せ、まして、しんがりの大役を務めさせるとは甚だ織田の危機に直面します！」

「黙れ」

信長は目玉を剥き出し、獣のように唸った。その迫力にマリオは無念そうに腰を下ろした。

仕方ないからおれが行ってやる

太郎とウザノスケがしんがり役だなんて、予想外の組み合わせ。

「若、護衛に沓掛勢から何人か連れていきなされ」

さゆりんの助言に太郎は頷き、タコ入道や沓掛勢の精鋭を連れて、ウザノスケの元に旅立っていった。

「若君に何もなければいいんスけど」

シロジロが情けないツラをしていたけれど、おれはよくよく考えてみた。太郎とウザノスケのしんがり役は、もしも、浅井勢が小谷城から出撃してきたらの話だ。金ヶ崎のときの絶体絶命のしんがり役とは、危険度がまるで違う。

そもそも、今まで小谷城から出て来なかった浅井勢が、今になって出てくるのかよ。どうせ、ウザノスケのことだから、浅井が出撃してこなくて、手柄上げられなくて終わり。そんなもんだろ。

で、実際、そんなもんじゃなかった。

全軍が虎御前山を下り切ったあたりで、小谷城から浅井勢が飛び出してきたらしい。おれは隊列の前のほうにいたんで戦線の状況はよくわからなかったけれど、鐘や太鼓の音は小さいながらも聞こえてきていた。

「浅井が出てきたんなら、迎え撃てばいいんじゃ。どうして若君だけが戦うんスか。一気にとっちめる好機じゃないッスか」

シロジロが走りながらごちゃごちゃ喚いている。おれも同感だ。信長は小谷城から飛び出てくるのを手ぐすね引いて待っていたんだろ。じゃあ、なんでここで後退するんだよ。

と、思っていたら、さゆりんが口を開いた。

「四郎次郎、我が軍は三万以上の軍勢だぞ。こんな大軍を展開するには、この場では狭すぎる。逆に不利だ。おやかた様は決戦地を我らに有利な地に持ち込もうとしているんだ」

小谷城の目と鼻の先にある虎御前山と雲雀山に陣取り、城下で乱

暴狼藉を働いたのは、すべて朝倉の援軍を越前から引っ張り出すため。兵力が増えれば浅井は野戦に打って出る覚悟を決める。

「お前はわかっちゃいねえな、シロジロ」

おれはさゆりんの説明に乗っかって、馬上からシロジロを見下ろした。

「相手に危険を冒させるためには、自分たちも危険を冒さなくてはならん」

「はあ」

シロジロは不安げな顔つきで、競り合いに沸く虎御前山の麓を振り返る。

「若君、ご無事に帰ってきてほしいッス」

昼過ぎ、太郎とウザノスケのしんがり勢が追手を食い止めている間に、全軍が横山城近くに到着し、浅井勢が襲いかかってきてもすぐさま対応できるよう、小谷城に向けて陣を整える。それぞれの隊のそれぞれの将校が怒声と激励を加えながら、本陣の信長から届いた伝令通りの陣構えになるよう雑兵たちを整列させていく。

「簗田殿」

半兵衛がにこにことしながら歩いてきた。

「太郎は見事、浅井を食い止めましたね。本隊が陣を整えたと知れば、浅井も小谷城に引き返すでしょう」

とはいえ、太郎が無事に戻って来るかどうか心配だった。小谷城に詰めている浅井勢は八千人ぐらいらしいから、もし、そいつら全員が追撃に出てきたら、五百人しかいない太郎とウザノスケのしんがり勢の全員が無事だったら奇跡だろ。

「心配なのですか、簗田殿」

半兵衛に女のもののような微笑を向けられてちょっと安心する。半兵衛が余裕綽々の健全モードでいるってことは、太郎も無事ってことなんだ。

そりゃ、そうだ。金ヶ崎のしんがり戦と比べれば大したことない。越前から京までの終わりの見えない退却戦と、たかだか北近江の中

だけでのちょっとした退却戦では訳が違う。この程度で死なれては、今までおれを小馬鹿にしてきたのはなんだったんだって話だ。

「戻って来ましたね」

土煙をもうもうと上げながら、しんがり勢が幟の立っている信長本陣の方向に駆けていく。

「旦那様っ、行かれないんスかっ」

おれはむすっとしながらクリツナから降り、荷駄持ちの雑兵に椅子を持って来させ、ぶすっと座って腕を組んだ。

「いちいち、行ってられるか。死んだら死んだ。生きていたら生きていた。たったそれだけのことだ」

「ならば拙者は行かせてもらいますね。我が殿は佐々殿の帰還など見たくないと駄々をこねているゆえ」

半兵衛がそう言うと、

「では、拙者は殿の代わりに行きましょう」

と、さゆりんがおれに向けて口許をにやにやとさせる。フン。何を笑っていやがるんだ。太郎のことなんかこれっぽっちも心配してないもんね。

「あっしも吉田殿に付いていきます。いいッスか、旦那様」

「おれもクロが心配だ」

草をむしゃむしゃと食っているクリツナを放って、ねじり鉢巻きが半兵衛やさゆりんに付いて行こうとする。

おれは思わず腰を上げ、手で振り払った。

「お、お前らは残っていろっ。本陣の連中にそんなにぞろぞろと汚い顔を見せに行くなっ。いいっ。おれが行く。お前らがぞろぞろ行くんなら、仕方ないからおれが行ってやる」

シラーッ。

「なんだよ、その目は。お前らが鬱陶しいから、代わりにおれが行くんだからな。そもそも、こういうのはおれの役目なんだからな。わかってんのか」

「どうぞどうぞ、ご自由に」

さゆりんがあからさまに白けた顔をしてきて、鼻先を背けるおれ。
生意気な馬鹿どもを尻目に半兵衛と共に、雑兵たちの中を縫うように進んでいき、本陣へ。陣幕の外にはずたぼろに負傷した兵隊たちや、マントが破けた黒母衣衆などが、手当てを受けていたり、くたくたになって座り込んでいたりしていた。
「激戦であったようですね」
むう。しんがり役ってやっているほうもやっているほうだけれど、やってもらっているこちら側からすると、なんだか申し訳ない気持ちにもなるな。しんがり役が命を懸けている間、こちらは悠々自適と逃げているんだからな。
ま、おれもちょっと前はしんがりだったし。しかも、これ以上の。
「殿っ！」
声とともにどこからともなくタコ入道が駆け寄って来た。すごい爽やかな笑顔でおれに近づいてきたけど、見せつけるようにして右手に生首を掲げている……。何を考えてんだこいつ。思わず生首から目を背けてしまうおれ。
「やりましたぞ。これは首級ですぞ。これで俺も殿の与力に格上げしてもらえますよね！」
「あ、ああ……。そんなことより、太郎はどこに行ったんだよ。無事なんだろうな」
「若君なら、佐々様と共におやかた様にご報告に上がっております。そんなことより、殿、この手柄、岐阜の奥方様にもご報告してくださいよ。俺、すげえ頑張ったんですから！」
なんなんだよ、この無邪気さは。スキンヘッドに頬傷ありのドチンピラのくせに、子供みたいなはしゃぎようじゃねえか。
「首級ならば、簗田殿の与力どころか、おやかた様から褒賞があるのではないか」
半兵衛が余計なことを言ったけれど、タコ入道は首を横に大きく振った。
「褒賞などいりませんよ。俺は簗田家のために戦ったんですから」

何を言ってやがんだ。簗田家のためじゃなく、あずにゃん恋しさのあまり活躍したんだろ。このエロハゲ。絶対に報告なんかしねえからな。たかだかお前の活躍程度で報告なんかするもんか。

「新七郎！」

陣幕を捲りながら声を上げてきたのは太郎。

「太郎っ！」

おれはすぐさま駆け寄り、太郎の肩を掴んで前後にゆさゆさと振った。

「無事だったのかなんともないのか怪我はないのか大丈夫なのか」

「なんですか、父上。どうしたんですか、柄でもない」

甲冑や衣服のあちこちが擦り切れている太郎は、周囲を見回しながら苦笑する。おれははっとしてあわてて太郎から手を離し、フンと顔を背けながら、すたすたとその場から去っていく。

「おい、牛野郎！」

ぐうっ。ウザノスケ。やっぱり、来なければ良かったと悔やみつつ、振り返ると、ウザノスケは甲冑に矢が突き刺さったままで、兜の飾りも壊れているし、黒マントは引き裂かれているしで、太郎よりもぼろぼろだった。でも、にんまりと笑っていた。チッ。手柄を上げられたからご満悦ですか。嫌味でも言うに違いないな、この馬鹿。

「お前は卑怯者だな。こんなクソガキを養子にしやがって。こいつに感謝するんだな、下衆野郎」

ウザノスケはそうやって罵ってくると、太郎に顔を合わせ、妙に清々しい笑みを浮かべた。太郎は照れ臭そうに口許を緩める。なんなんだ、あいつら。おホモだちにでもなったのか。気色悪い。

その忠義良し

タコ入道が持っていた生首は、巻物ジジイが検分したところ、はしゃいでいた通りに浅井勢の足軽大将格の首だったらしく、タコ入道の主人であるおれも信長の前に呼び出された。

戦場の真っ只中とあって、上機嫌とまではいかない信長だったけれど、作戦が成功して頬をわずかに緩ませてはいた。

「こましゃくれ。こいつが首級を上げたゆえに相手方が狼狽したというのはまことか」

信長の言葉に太郎は平伏したまま答える。

「いかにも」

「牛、こいつには禄はいくらくれてやっているのだ」

「あ、いや、えーと」

「足軽兵の身分ゆえ、十貫でございます」

太郎がさっと答えると、信長は鼻で笑った。

「お前のところはしけてやがるな。おい、ツルッパゲ。二百貫の褒賞をくれてやる。ついでに権六の与力になれ」

えーっ？　なんでーっ？　なんで、ゴンロクに取られちゃうの。いつもこうだよ。笹の葉のサイゾーはサンザのところに連れてかれちゃったし、今度はタコ入道を取り上げられちゃうってさ。しかも、ゴンロクの与力だなんて。クソックソックソッ。

顔を伏せている太郎もしょんぼりぎみ。そもそも、お前がケチってるからじゃねえの？

「お言葉ですが、おやかた様」

タコ入道が平伏したまま声を発した。

「なんだ」

「拙者は立身出世のためにいくさ場に出てきたのではなく、簗田の家から受けた恩を果たすためにこの地にやって来ております。ゆえん、簗田以外の家に仕える気は毛頭ございませぬ」

おお、タコ入道！　よくぞ言ってくれた！　まあ、簗田家のためとか言って、あずにゃん目当てのよこしまな忠義なんだろうけどな。

ただ、信長が黙っちゃった。上目にちらと伺ってみると、信長はむっとしている。うーん。気難し屋さんだし、戦場で気も立っているだろうし、怖いな。

「おやかた様の命だ。黙って言うことを聞けい」

佐久間ヒゲオヤジが偉そうにしゃしゃり出てきたが、信長が唐突に扇子をパンッと開いたので、ヒゲオヤジは引っ込んだ。

信長は顔を仰ぎながらタコ入道を睨み下ろす。

「お前の言い分だと、簗田には仕えるが、織田には仕えんとも聞こえる。それはどうなんだ」

「左様でございます」

「言うじゃねえか。なぜ、そこまで牛やこましゃくれに義理を通す。恩とはなんだ」

「野盗に捕らわれていた拙者の妹を三百貫もの大金を支払って救ってくださったご恩でございます」

すると、信長はきゃっきゃっきゃと甲高く笑い上げた。久々に信長のその笑い声を聞いて、なんだか、おれだけではなく陣中全体がほっとした空気に包まれた。

「牛が三百貫とはな！　どこで手に入れた銭だか知れねえが、おおかた、その妹やらによからぬ気でも働いたんじゃねえのか！　違うか、牛！」

「あ、いや、アハハ」

陣中の幹部たちもげらげらと笑う。まあ、図星ではないけど、もしもあーやがいなかったら、タコ入道なんて追い出して、シロジロはぶっ殺していたから、あながち間違いでもないな。

ひとしきり笑い上げた信長はえらく上機嫌になり、扇子をぱちんと留めると、タコ入道に身を乗り出した。

「気に入った。ツルッパゲ、名をくれてやる。俺の信の字をくれてやろう。おい、五郎左」

「はいっ」
「名を与えてやれ」
「今ですか？」
「そうだ。今だ。さっさと名をつけろ」
むう。デジャヴを引き起こされた気分。もちろん、マリオはとんでもねえ名前を付けてくれるんだよな。禿にあやかって、禿信みたいなふざけた名前を付けてくれるんだろうな。
「良がよろしいかと」
なんだ、それ。
「その忠義良しということで。良信。良の字は御一門衆にもおりません」
「いい名だ。ならば、良信を名乗れ。そうして、これまで通り、簗田に仕えろ」
「有難き幸せにございます！」
なんだよ、その普通の名前は。なんなんだよ。おれは綱男だからっていう理由で政綱だぜ。なんだよ、その格好いい由来は。マリオの野郎、ふざけやがって。とことん、おれに嫌われたいらしいな。クソが。
で、そのまま軍議を始めると信長が言い出して、おれと太郎は陣中に残された。
各陣に散らばっている諸将を待つ間、信長が一旦、奥に引っ込み、幹部どもは雑談を始めた。ウザノスケがすでにやって来ていたマタザに浅井の兵の強さについて、真面目な顔で語っている。
盗み聞きしていたおれは、太郎にこっそりと訊いた。
「そんなに強かったのか」
「強いというよりかは、死に物狂いでした。それもそうでしょうね、六角や摂津のときとは違い、このいくさは復讐戦ですから。浅井勢も、ここで敗れたら皆殺しに合うということをわかっているのでしょう」
「でも、太郎は生き残ったじゃんか」

「それは、まあ、運が良かったのと、佐々殿が豪傑ゆえ」
しんがり役を務め果たした太郎なのだけれども、なんだか、けろっとしていて、相手が死に物狂いだったと言われてもピンとこない。ウザノスケはぼろぼろなのに、太郎は擦り切れている程度だし。
「お前、本当は逃げていただけなんじゃねえのか。鎧は綺麗だし、傷もないし、ずいぶん元気じゃねえかよ」
太郎はくすっと笑う。むう。いつもだったらむっとするくせに、なんだ、その余裕ぶりは。
「そういうことにしましょう。もっとも、父上が金ヶ崎で味わった苦しみほどではありませんし」
「左衛門太郎」
各々の雑談の最中、斜向かいに座っているゴンロクが呼んできて、太郎は応答しながら頭を軽く下げた。
「内蔵助に聞いたぞ。見事な戦いぶりであったらしいな。叔父として、わしも鼻が高いぞ」
何を言ってんだ、あのおっさんとおれは思ったが、はて、よく考えてみると、ゴンロクの妹のあずにゃんがおれの嫁だから、養子の太郎は、間違いなくゴンロクの甥っ子にあたるのか。
それもそれで、なんか、おもしろくないな。今さら、あずにゃんの血縁を引きだしてきやがって。今まで、一言も触れたことないくせに。
「いえ。これもひとえに佐々殿の勇猛果敢な武者ぶりがあったからこそ。拙者はただ馬に跨っていただけでございます」
太郎の謙遜ぶりにゴンロクはうんうんと嬉しそうに頷く。ついでにマリオも目を細めている。チッ。どこの馬の骨だかわからないみなしご太郎を引き上げたのはおれだぞ。おれが太郎の父親だかんな。おれが太郎の面倒を見てきたんだかんな。
おれと太郎がここまで来るのにどれだけ苦労したことか。まあ、太郎は馬廻衆になったときからエリート街道まっしぐらだったけれど。

でも、馬廻衆になるまでは、太郎はおホモだちにされそうになったり、実の母親が死んじゃったり、一人ぼっちで南美濃を歩き回ったり、苦労したんだからな。

それを今さら、叔父気取り、親父気取りですか。クソが。氏ね。

「それに比べて、この義弟は。いついかなるときも、どこで何をやっているのか正体不明だ。その様子が耳に入ってくるのは女房に追いかけ回されているときだけだ」

ゴンロクの言葉に笑い上げる諸将。なんなんだ、あの野郎。女番長のあずにゃんは織田家中では有名だから、冗談にもなってねえじゃねえか。

ぷるぷると震えるおれをなだめるようにして、太郎がこっそりと背中をさすってくるが、もはや腹が立つからゴンロクには死んでもらうことにしよう。

あの馬鹿はおれとあずにゃんが試練を乗り越えて今はラヴラヴだっていうことを知らないんだろうな。カスめ。あずにゃんにチクッてもう一度半殺しにしてやる。

絶対に負けられない戦いがそこにはある

梓殿

拝啓

ご恩があるという理由で、新七は信長様の命令に逆らって、簗田家に残った日のことなのですが、

んー、なんと申し上げてよいか、あっしは陣中にて、義兄上様に鞭を手にした女房に追いかけられている腐った牛と罵られたのです。

ろくでなしの織田の将たちにげらげらと笑われてしまい、あっしはとても

くやしかったです。

これがあっしのことだけなら構わないのですが、妹君である梓殿までを鬼の女房呼ばわりするとは、

ろくでもありません。

せっかく、あっしと梓殿は仲良く暮らしているというのに、こんなことを言われるなど、残念でした。

敬具　簗田左衛門尉政綱

フヒヒ。これでゴンロクの口を黙らせられる。恨みと憎しみをこ

めながら手紙を丁寧に折っていき、付き人のシロジロに渡す。
本陣の軍議では、浅井勢を更に焦らせるため、明日から横山城を全軍で包囲することになった。本拠の小谷城の最後の防衛線である横山城を攻め取られたとなると、浅井勢からすれば、たとえ、今回のいくさを凌ぎ切ったとしても、今後の展開を考えれば、喉元に刃を突きつけられっぱなしになるから、横山城だけはどうしても死守したい。
それに、織田勢の動きがあっちに行ったりこっちに行ったり、予定調和でなければないほど、優柔不断にも見えるし、かといって長政は信長をよく知っているから、単なる優柔不断とも思えず、心理的な不安が募る。
信長が野戦に持ち込みたいのは見え見えだけれど、どうしても、挑発に乗らざるを得ない状況にまで、浅井は追い込まれつつある。
我慢比べ。
「旦那様」
シロジロが突っ立っていた。
「何やってんだよ。早く飛脚に渡してこいよ」
「ごんろくころせって本気ッスか」
「なっ、て、テメー、何勝手に読んでんだ、コラッ！」
おれはシロジロの手から手紙を奪い取ると、思い切り拳骨を落とした。こいつ、本当に図々しいな。なんなんだ、まったく。
「ううっ。別にいいじゃないッスかあ。あっしは旦那様の文を見るのが楽しみだったんスよお」
「フン。適当なこと言いやがって」
「だって、いつも、奥方様に大好きってこっそり書いてあったじゃないッスか。今度はどうやって書いてあるのかって気になるんスよお」
シロジロの話を聞いて、おれは途端に恥ずかしくなった。あずにゃんにはわかってもらえないで、シロジロだけは知っていたとは。しかも、こいつは横読みに気付いていたくせに、それをあずにゃん

には教えない意地の悪さ。健気に横読みを続けるおれ、それに気付かないでいるあずにゃん、その滑稽さを密かに笑っていたに違いない。

そう考えると、更に腹が立ってきたので、もう一発、拳を落とした。

翌日から横山城の包囲が始まった。大がかりに攻め込むわけでもなく、たまに弓矢や銃を放ったり、雑兵どもがちょっかいを出しに行ったりするだけ。

兵隊が足軽隊ぐらいの規模しかない沓掛勢はなぜかゴンロク部隊と同行し、横山城を睨むだけの一日。ゴンロクは自分の近くに太郎を置き、おれは呼ばれない。ふざけやがって。このことも手紙に書いてやる。

次の日になると、ついにキモブタ家康の軍勢が到着した。信長はキモブタの三河勢には横山城の包囲には参加させず、姉川の南岸にある岡山というところに陣を敷かせ、信長本隊も姉川の南岸で岡山の南東、龍ヶ鼻というところに本陣を置いた。

明日にでも朝倉が北近江に到着するらしい。軍議でのサンザの発言だと、おそらく決戦は三日後になるとのこと。

信長が黙りこむ中、諸将が意見を述べ合い、結果、朝倉勢が到着したら、横山城の包囲には西美濃三人衆と丹羽勢だけを残し、他全軍は信長の龍ヶ鼻の本陣の前に縦にずらりと諸将を並べていくという構えに移行する計画になった。

小谷城の方角に先頭を向けて、キモブタ三河勢と織田勢が二列に構えるので、敵方も朝倉勢、浅井勢と二列に構えてくると予想。十兵衛の発言だと、兵力六千程度で士気の低い朝倉勢がキモブタ三河勢と姉川を挟んで相対し、大軍の織田勢とぶつかり合うのは浅井勢であることは濃厚。

「敵方の先鋒は間違いなく磯野員昌でしょう。浅井と六角がまだ争っていたころ、必ずといって、この磯野員昌が先鋒を務めており、数々の武攻を上げております」

金ヶ崎のあと、単独で諜報活動をしていたらしい十兵衛がそう言った。佐和山城主のカツオか。あいつとは一度会ったけれど、確かに武骨者といった感じで強そうだったもんな。

浅井の先鋒のカツオはかなり手強いということで、織田勢の縦列布陣は、先鋒が坂井政尚という中堅幹部が務めることになった。こいつのことは軍議でたまに顔を合わせるだけでほとんど知らないけれど、ほとんどは伊勢のほうに顔を出しているらしい。はっきり言って、強いのか弱いのかわからん。もしかしたら、盾なのかもしれないし。

その坂井勢の後ろに陣取るのが池田恒興。こいつはマリオレベルの重要な幹部で、おれがタイムスリップした前々からいる古参の武将。こいつのお母さんが信長の乳母だったらしく、そのおかげで家中でも格上。ま、強いのかどうかはわからんけど。

その次がサル。こいつはただの腹黒。四番目がゴンロク。こいつはただの偉ぶっている馬鹿。その次にサンザ、佐久間ヒゲオヤジ、信長本陣という態勢。

先鋒部隊が一度浅井勢を受け止めて、その間に番手の部隊が左右に広がっていき、取り囲んでいく作戦。

マタザやウザノスケ、十兵衛といった大軍の指揮権を持っていない連中や、おれみたいにうだつの上がらない連中は、各所の部隊に配置される。太郎もおれと一緒。侍大将の太郎は指揮権を持っているはずなんだけど、雌雄を決めるいくさではまだ若すぎるし、将としてのいくさの経験もあんまりないから、今回は除外ってことなんだろ。

で、おれと太郎の沓掛勢はゴンロク部隊に。ゴンロクが信長に言い出したから。一門だからとかなんとか言って。ふざけんな、クソが。何が柴田一門だ。テメーなんかと親戚になった覚えなんてねえんだぞ。氏ね。

軍議が終わると、ゴンロクは顎鬚を指でさわさわしつつにこにこと太郎に歩み寄ってくる。

「磯野とやらがいくら豪傑とはいえ、この備えであれば我らのところまでは届かぬだろうな。我らは奴等が立ち止まったところを一気に突き崩す。左衛門太郎、先日の退き口のような武勇、期待しておるぞ。柴田一門としてな」

で、表情をころりと変えると、おれに蔑むような視線を寄越してくる。

「貴様は足手まといになるだろうから、寝ててもいいぞ」

口端を歪め、自陣に戻っていくゴンロク。

「父上、あまり気になさらないでください。なんと言われようと、義弟なのですから」

わなわな。あまりのむかつきに言葉が出ない。

「気にするなよ、牛」

おれの肩にどこからか腕を回してきたのは赤マントのマタザ。こいつの赤母衣衆もゴンロク部隊に回されることになった。本当なら信長本陣の護衛なのに、ゴンロクの馬鹿がでしゃばったから。

「柴田様はお前が藤吉郎と仲が良いから気に入らないだけなんだ。別にお前を見下しているわけじゃない」

おれはマタザの腕をぐいとのけると、むかむかしながら沓掛勢のところに向かった。太郎があわてて後ろを付いてくる。

「父上、かっかしないでください」

何も聞こえない。何も見えない。一泡吹かせてやる。ぐうの音も出せなくさせてやる。もう一度、勲功第一の称号を手に入れてやる！

「おいっ！」

おれは退屈な城攻めのせいでだらだらしている沓掛勢に怒声を飛ばした。沓掛勢を黙って睨み回すおれの姿に、大島のおっさんは不安げな顔をしていて、さゆりんはしかめっ面。

「三日後、ついに決戦だぞ。おれたちは柴田勢の部隊に配置されるようになったけどな、お前ら、わかっているよな、このいくさは金ヶ崎に散った仲間たちの弔い合戦だぞ」

おれのいきなりの怒りに何事かと呆気に取られていた連中の顔つ

きが、厳しいものに変わった。
「いいなっつ！　死に物狂いで戦えっ！　柴田の連中なんかには絶対に手柄を取らせるなよっ！　後ろから刺してでも取らせるなっ！　わかったな！　勲功第一をもぎ取ることが、仲間たちへの報いだからなっ！」

勝とうとして戦う者たちよ（1）

朝倉勢が到着したとの伝令が入り、予定通り、軍勢は横山城を離れ、姉川の南岸に陣構えを整えていき、目の前にも背後にも織田の兵がぎっしりと並んだ。

翌日の昼過ぎ、姉川の対岸に浅井朝倉の旗指し物が並び始める。

本陣からの伝令が各部隊にひっきりなしに飛び交い、浅井朝倉を先に仕掛けさせるから、勝手な真似をしないよう信長の言葉が伝えられた。

「下手に動くと、敵方は策を張り巡らせているかもしれませんからね」

太郎が言っていたが、おれにはそんなものはどうでもいい。敵を一人でも多く殺し、ゴンロクを黙らせる。それだけだ。

浅井朝倉も同じように警戒しているのか、その日は動かなかった。

夜、いくさの最中とは思えない静けさの中、虫の音を聞きながら、各々仮眠を取った。川を挟んでいるので夜襲はないだろうという考えから、張り詰めていた空気は一時の間、解かれていた。

しかし、空が白むころ、周囲があわただしくなった。川沿いからは鐘の音や喚声が聞こえてくる。

「伝令！　敵襲！　直ちに態勢を整えよっ！」

おれは起き上がると、ねじり鉢巻きの掌を台にして、クリツナに跨った。傍らにはシロジロが槍を握りしめてぶるぶると震えている。

「おい、シロジロ、ここで男を上げろよな」

「ううっ」

凶暴馬に跨る太郎が槍を片手にぱかぱかと近づいてきた。普段はにこにこしたり、シラーッとしたりする目が、静かに燃え滾っている。

太郎は何も言葉を発さずに、ただおれの横に馬を並べ、姉川の方角をじっと見据える。

いくさが近いことを感じているのか凶暴馬は涎を滴らせながら、首を上下に振っている。クリツナは何を考えているのか草をむしゃむしゃ食べている。

「おい、鉢巻き」

「なんだ？」

「昨日、おれが言った通り、何があってもおれからは離れるなよ。絶対にクリツナにしがみついてこいよな」

「わかっているよ」

ねじり鉢巻きは肩に担いでいるアケチライフルをぽんぽんと叩く。というのも、おれは勲功第一をもぎ取る秘策を思いついた。クリツナにスイッチを入れて、浅井勢の部隊の中に突撃し、馬に跨っている偉そうな奴がいたら、至近距離でアケチライフルをぶっ放す。太郎に言うと、そんな危ない真似はよせって反対されるから黙っているけれど、さゆりんには言った。火縄銃の使い方をちゃんと教えてもらうために。

さゆりんはもちろん大反対した。馬上で火縄銃を撃ったら、その反動で馬から落ちてしまう。それに馬は敏感な生き物で大きな物音には驚いてしまい、さすがのクリツナでも制御不能になってしまう。だから、無理や。

おれはあえなく秘策を断念する振りをしてさゆりんの前から立ち去ったが、ねじり鉢巻きにこっそり相談した。

ねじり鉢巻きはクリツナなら轟音に動じないと言った。それに反動でひっくり返りそうになっても、自分がしがみついてやるから大丈夫だと、めちゃくちゃな荒技を言ってくるほどに乗り気だった。

ということで、万が一落ちた場合には、シロジロに護衛させることにした。シロジロにはクリツナにへばりついてこいとだけ言っている。途中、ビビって戦場から逃げ出すかもしれないので、最後までくっ付いてこれたら、横領事件のことを許し、更に摂津池田か堺で団子屋をやらせてやると言った。

ただ単にクリツナにくっ付いてくるだけで団子屋をやれるのだか

ら、シロジロは鼻息を荒くしたが、おれの本当の目的はおれが万が一落ちて、敵に狙われた場合、シロジロを人間の盾にする。さよなら。成仏しろよ。

さゆりんが馬をぱかぱかと歩かせてきて、おれと太郎の前を横切りながら、おれに睨みを与えてくる。

「殿、おかしな真似をしてはいけませんぞ」

「何を言っているんだい、キミは」

「父上、なんですか、おかしな真似とは」

「さあ」

首を傾げたおれを、太郎は怪訝そうな目つきでじいっと見つめてくる。

そのとき、見回りの斥候が馬を全力で駆けさせながら、軍勢に向けて声を上げてきた。

「敵方先鋒、坂井勢を突破！　敵方、第一の備を突破！　敵方は姉川を越え、第一の備を突破！」

斥候は沓掛勢の前を通り過ぎていき、一瞬、呆然と立ち尽くす太郎やさゆりん。

「ど、どういうことッスか、旦那様っ！」

おれにもよくわからん。ただ、まだ空は明けきっていないというのに、いくらなんでも展開が早すぎるだろ。いくらなんでも弱すぎるだろ、坂井政尚。

「突破とはどういうことなのでしょう。浅井勢は備を突き破ってきているということなのでしょうか。坂井殿の部隊がこんなにも早く壊滅とは考えられません」

太郎が困惑ぎみに顔を向けてくると、さゆりんが青に薄まった西空を見つめながら言った。

「敵方の狙いは本陣しかないのかもしれません」

「そんな無茶な。この備のすべてを突き破るつもりでいるのか。無能もいいところじゃないか」

「腹を括ったのでしょう」

「簗田殿！」
一人の兵が赤マントを翻しながらやってきて、おれたちの前で馬の手綱を引き絞り、
「柴田様からの伝言です！　我が部隊は正面突破をしかけてきている敵方に備えて、兵を陣よりに密集させよとのことです！」
「戦況はどうなっているのです」
さゆりんが訊ねると、赤母衣衆の男は顔をしかめつつ首を傾げた。
「拙者も詳しくはわかりません。ただ、坂井勢は敵のあまりの勢いに混乱しているようで、このままだと敵方が続けざまに送ってくる部隊を食い止めるのは厳しいかもしれないと、我が筆頭は言っておりました」
おいおいおい。織田勢と浅井勢の間にはどれだけの兵数の差があるんだよ。三万と八千だぞ。こんなんで負けたら、どう考えても天下の笑われ者だろ。
ま、カツオがここまで突破してきたそのときには、アケチライフルの餌食にしてやるけどな。むしろ、ここまで来いよ。カツオの首でも取ってみろ。勲功第一間違いなしだ。
とりあえず、ゴンロクの馬鹿が騒いでいるらしいから、沓掛勢をちょっと横に移動させる。
そのうち、東の空に太陽が昇った。頭上の空に雲は一つもなく、地上の草花のひとひらにまで朝日が降り注ぐ。滴る汗の玉が居並ぶ軍馬の体躯に浮かび上がり、夏の風がほとばしる喚声を運んできた。
「近い」
太郎が呟く。さゆりんが太刀を抜く。足軽兵たちが槍を握り締め、鉄砲兵が火縄銃を肩から下ろす。
前方に位置する、小指程度の大きさに映る木下勢の動きがにわかにあわただしくなった。
斥候が駆けてきて声を上げる。
「敵方、池田勢を突破！　第二の備を突破！　勢いはますます上がるいっぽう！」

「皆の者、聞けいっ！」
凶暴馬が首を上下に激しく振る中、太郎が大声を上げた。
「敵方が木下勢を突破したさい、雑魚には構うな！　馬上の将だけを狙え！　いいか、雑魚には構うなっ！」
太郎は手綱を振ると、首を振る凶暴馬をなだめるようにゆっくりと歩かせ、沓掛勢の一番先頭に出た。
「若君、血気はやってはなりませんぞ」
「わかっている」
さゆりんの声に背中だけで答えた太郎は、槍をくるくると器用に振り回し、背中で柄を受け止めると、槍先を地面へと斜に向けて構えた。むう。強そう。でも、先陣を切るのはおれだ。おれがカツオを仕留める。
「鉢巻き、準備しておけ」
おれが囁くと、ねじり鉢巻きは隠し持っていた火打ち石を取り出した。
「シロジロ、しがみついてでもクリツナから離れるなよな。摂津か堺だぞ。わかっているな」
シロジロは覚悟を決めたのか口許を引き結びながら、こくっと頷いた。
銃声と武者押しの声がすぐ前方で響き渡り、そのうち、木下勢の陣に立っていた幟の旗が倒れ、陣幕が崩れ、軍勢の中から閃光のようにして一気に馬や兵が飛び出してきた。
やがて、各所からも散り散りに兵馬が飛び出してきて、その数は次々と増えた。
柴田勢の陣から法螺貝が鳴った。太鼓と半鐘の音が空を割らんばかりに響き渡り、柴田勢、赤母衣衆が突撃隊に向かって一斉に駆け出す。
「我に続けいっ！」
太郎が声を上げると、凶暴馬が猛獣のようにいななきながら立ち上がった。うおーっと鬨の声が上がり、沓掛勢は一心不乱に走り始

める。
「鉢巻き、火をつけろ！」
「もうつけているよ！　ほらっ！」
ねじり鉢巻きに火縄銃を渡されたおれは、火縄の香ばしい煙を嗅ぎながら、クリツナの腹を蹴飛ばした。
クリツナが弟の凶暴馬にも負けない狂いようで前脚を高々と持ち上げる。
「シロジロっ、鉢巻きっ、絶対に離れるなよなっ！」
クリツナが前脚を地面に落とすと、首をぐいと前に踏ん張り、突撃隊目掛けて熾烈なまでに駆け出した。

勝とうとして戦う者たちよ（2）

おれには秘策と、もうひとつ、他の連中よりも一歩リードしていることがある。

磯野カツオに一度会っているということだ。すでに軍勢同士がぶつかり合い、揉みくちゃになっているが、カツオは部隊長だから馬に跨っている。馬に跨っている奴の中にカツオがいる。

一撃必殺！

「父上えっ！」

おれとクリツナは凶暴馬と太郎をあっという間に追い抜いた。おれは沓掛勢の中から一人飛び抜けて、競り合いに突っ込んでいく。

カツオォォッ！

でも、揉みくちゃすぎてここからだと何がなんだかよくわからん。黄色い旗指物が織田。白い旗指物が浅井。色で判別できるから、それははっきりとわかるけれど、ぐちゃぐちゃで、もうね。

とりあえずは、敵も味方も関係なく突っ込めや、クリツナァっ！

おれの心の咆哮を受け取ったかのように、クリツナは疾走の勢いそのままに軍勢に体当たりをかましていき、四、五人の浅井織田兵を吹っ飛ばすと、得意の前脚踏み潰しで白の旗指物を地面に薙ぎ倒し、旋回しながらの後ろ蹴りで雑兵どもの顔面を破壊。

「く、栗綱だあっ！」

え？　浅井の雑兵の一人が悲愴な声で叫んだんだけど。もしかして、クリツナって有名なの？

「放っとけえっ！　狙うは本陣のみだ！　構うなあっ！」

あ、カツオ、いた。黒い兜の下はまさしく佐和山城で相対した磯野カツオ。槍をぶん回して柴田勢を蹴散らしつつ、正面突破のカツオは、斜めに突っ込んできたおれとクリツナからは離れようとしている。

この機会、逃してたまるかあっ！

おれは奥歯を噛み締め瞳孔を開け広げると、火縄銃を握りしめ、銃口をカツオに向ける。
目標をセンターに入れてスイッチ。
目標をセンターに入れてスイッチ。
目標をセンターに入れてスイッチ。
死ねやあっ！
ズドーン！
ううっ。予想外の反動。踏ん張り切れないおれは、引き金を引いたと同時に後ろへと吹っ飛ばされるようにして落馬。何をやってんだよ、ねじり鉢巻き！
って、あれ。付いてきていなかったような。
「簗田牛太郎の首、もらったあっ！」
尻もちをついたまま見上げると、太刀を振りかぶる浅井の兵。
南無三。
と、思った瞬間、バコーンって吹っ飛んだ浅井兵。伸びていたのはクリツナの後ろ脚。普段はおっとりとしている目が吊り上がっている。馬素人でもわかる。なんてやつ。
「おのれえっ！」
「助太刀いたすうっ！」
おれに襲いかかって来た浅井兵と鍔迫り合いを始める柴田兵。
「殿ォ！」
と、浅井兵の悲痛な声が上がったと思ったら、おれの視界には馬上で顔を手で押さえるカツオの姿が入ってきた。え、え、え。殺ったの？　殺っていないの？
「磯野員昌ァ、覚悟ォ！」
悶えるカツオに赤母衣衆の槍が襲いかかる。お、おれの手柄が！
しかし、カツオはくわっと剥き出した両目を持ち上げると、手にしていた槍を振り、赤母衣衆の槍を払った。
「覚悟は存分にできておるわあっつ！」
雄叫びを上げるように咆哮したカツオの槍突きで、馬上から崩れ

落ちる赤母衣衆。ぐぬう。よく見てみると、おれの銃弾はカツオの兜の横についている吹返しの部分を割っただけで、カツオはその衝撃に悶えていただけっぽい。

「金ヶ崎の恨み、ここで晴らしてくれるうっ！」

這いつくばって刀と槍をかいくぐっていたおれのところへ、黒い影が突っ込んできた。凶暴馬が涎を撒き散らしながら白い旗指し物を薙ぎ倒し、太郎の振り回す槍が敵を一閃する。

「父上っ、早く脱出してくださいっ！」

なんだと？　助けてくれたのは有難いが、おれはまだ目的を果たしてねえぞ。

おれは太郎の言葉を無視して、再度、離れつつあるカツオに火縄銃の銃口を向ける。あ、でも、火をつけなくちゃ駄目なんだっけ。

「新七！　殿をお守りしろ！」

遠くからさゆりんの声。途端、銃声が連発され、おれの周りで暴れていた柴田兵も浅井兵も一気に吹っ飛び、おれの目の前にばたばたと倒れ、即死しているっぽい奴もいれば、膝をついて呻き声を上げている奴も。

おれの周囲が（おそらく、沓掛鉄砲隊が敵味方を構わずに放った四十発の銃弾で）駆逐されると、タコ入道以下、沓掛足軽隊がおれを取り囲んでガード態勢。

しかし、次々と溢れ出てくる浅井勢を今度は沓掛勢が身を呈して防ぐ羽目に。タコ入道の長槍が猛威を振るうけれど、浅井勢の数十人が沓掛勢と相手をするだけで、白い旗指し物のほとんどは赤母衣衆、柴田勢をぐいぐいと押し返していっている。

カツオの姿はすでに視界から外れた。

「前方の備は一体、何をやっているんだっ！」

槍を振るうタコ入道がしびれを切らしたかのように吠える。

「栗之介！　四郎次郎！　殿を連れ出せ！」

また、どこからかさゆりんの声が飛んできた。すると、今さら現れたねじり鉢巻きとシロジロに両脇を捕縛され、乱戦からずるずる

と引っ張り出されていく。ついでに、ねじり鉢巻きは指笛を吹いた。鞍の上を空っぽにして暴れ回っていたクリツナが、そのままこちらに飛び跳ねて戻ってくる。

結局、おれは乱戦からやや離れたところ、鉄砲隊が列を成している場所まで引きずり戻された。

鉄砲隊はさゆりんの掛け声の元、木下勢との乱戦を突破して出てくる浅井勢に銃弾を浴びせる。ただ、焼け石に水を打つ程度。

戦線から離脱させられたおれは、ねじり鉢巻きとシロジロを交互に睨みつける。

「お前らなあ……」

シロジロはしょんぼりと首を垂らしたけれど、ねじり鉢巻きは知らんぷり。いきり立っているクリツナに駆け寄ると、口輪を手にし、声をかけてなだめる。

「テメーが付いてこなかったせいで、なんの成果も上げられなかったじゃねえか」

「だって、あんな、無理ッスよお。なんなんスか、あれ。クリツナがあんなことになるなんて知らなかったッスよお」

「くそったれ！　お前はいつも言い訳ばっかりじゃねえか！」

おれは腰を上げると、やや興奮がおさまったクリツナの傍らに歩み寄り、

「鉢巻きっ！　もう一回だ！」

「いや、もうやめとけって。やっぱ、無理だ」

「何を言ってやがる」

おれは火縄銃をねじり鉢巻きに押し付けると、あぶみに足をかけ、渋々出してきたねじり鉢巻きの掌にもう一方の足を乗せる。

「シロジロっ！　言い訳はもう許さねえからなっ！」

「殿ォっ！」

鉄砲隊の指揮に専念していたさゆりんに気付かれ、さゆりんは馬に跨ったままおれを通せんぼしてきた。鞘から抜いていた太刀の切っ先をおれに向けてきて、兜の下の目を吊り上げてくる。

「殿はここで戦況をご覧になってなされ！」
物凄い迫力……。小谷城下で鬼の所業を取ったさゆりんの姿を脳裏によみがえらせてしまったおれ。
まあ、カツオの姿も見つけられなくなっちゃったし、なんだか、負けいくさの様相を呈してきたし、さゆりんの言う通り、ここで静観していようかな。
浅井勢は四十丁の鉄砲隊なんか無視して、どんどんと龍ヶ鼻の方角へと柴田勢を切り崩して行くだけだから、ここは安全だしな。
てか、カツオ率いる先陣は、柴田勢の陣も突破したっぽい。何をやっているんだか。でも、沓掛勢はおれを筆頭にして頑張っているもんね。百人しかいないのに頑張っているもんね。弱いのはゴンロクとマタザだもんね。
「本当にまずいんじゃないんスか。本当に負けちゃうんじゃないんスか」
こだまする銃声にかき消えそうな声でぶつぶつと呟いているシロジロ。おれはクリツナの上でただ黙る。同感だから。

勝とうとして戦う者たちよ（3）

「あっ」
シロジロがよそみをしながらふいに声を上げたので、視線の先に目をやってみると、縦列している陣構えとは別の東の方角に土煙が上がっていて、目を凝らしてみると織田勢の黄色い旗指し物が埋め尽くしている。
「え、援軍じゃないッスか」
「横山城に詰めていた奴等がこっちに回って来たんだ」
ねじり鉢巻きが言う。
ほほう。おれは思わず笑みを浮かべる。西美濃三人衆かマリオの軍勢が本陣襲撃のピンチに駆け付けてきたんだ。しかも、向かってきているのは調度、おれのいる辺り。
なるほど、縦列の構えを突破してきている浅井勢の横腹を突撃するつもりだな。
おれはクリツナから降り、ねじり鉢巻きから火縄銃を奪い取る。
「鉢巻き、クリツナに乗って、太郎に一旦退けって伝えてこい。あいつらと合流して、もう一度態勢を整え直すんだ」
ねじり鉢巻きは、ほくそ笑んでいるおれに一瞬びっくりしたが、すぐにこくっと頷くと、クリツナにひょいと跨り、乱戦のほうへ駆け出した。
「早之介っ！」
鉄砲隊を指揮しているさゆりんは、厳しく歪んだ顔を振り向けてくる。
「あれを見ろ。横山城からの援軍だ。態勢を整え直すぞ。無駄撃ちするな」
さゆりんはおれが指差したほうに目を向けたあと、鉄砲隊に撃ち方やめいの声を上げる。
おれは四十人余の鉄砲隊の前に歩み出ると、疲弊の色を表情に滲

み出している連中を鼓舞した。
「お前ら、まだまだいけるかんな。あれを見ろ。このいくさ、絶対に勝てる。勝ちいくさに乗り遅れるなよ。手柄を上げて、沓掛に帰るぞ！」
すっかり立ち昇った太陽が土煙を照らし上げる光景を目にして、口許をほころばせた鉄砲隊の面々。しかし、地獄の金ヶ崎をくぐり抜けてきたこの精鋭なる連中は、むやみに喜ぶこともなく、さゆりんに指示されたからというわけでもなく、各々、熱くなった銃身を水に浸からせたり、銃口の中に棒を突っ込んだりと、次の死闘に向けて顔つきを引き締める。
おれに向かってぽかんと口を開けて突っ立っているシロジロ。
「なんだよ」
「いや、はあ」
「いや、はあ、じゃねえよ。お前、次は絶対に離れるなよな。勝ちいくさだぞ。勝ちいくさで何もできなかったなんて、これほどみっともねえことはないからな」
ま、何度もそんな経験をしてきたおれだからこそ言えるセリフだけど。
「はあ」
「はあ、じゃねえよ。なんだよ、そのやる気のなさは」
「いや、やる気がないんじゃねえッス。ただ、なんか――」
「なんだよ」
「いや、その、旦那様っていくさ人なんスね。なんか、忘れていたッス。旦那様って、桶狭間で勲功第一の綱鎧の簗田牛太郎なんスもんね」
む。なんだ、急にあらたまっちゃって。気持ち悪いな。それに、一つ間違っている。
「おれは簗田左衛門尉だ。主人の名前を間違えるな」
「すいません」
両手で握った槍を地面に立てたまま、上目づかいに唇を尖らせる

シロジロ。フン。おれは籠手越しにシロジロの襟首を掴み上げ、鼻先をシロジロの生意気なツラに寄せた。
「商人に戻りたいなら、ここで男を上げやがれ。団子屋でも人助けでもなんでも好きなことをさせてやるからよ」
おれを見つめるシロジロの目がじわりと本気になってきた。
「父上、何をやっているんですか！」
沓掛勢を引き連れて一時退散してきた太郎がおれの前で凶暴馬の手綱を引き絞り、おれはシロジロの襟首から手を離す。
「何もやってねえよ。この馬鹿に喝を入れていただけだ」
「いくさ場に来てまでそんなことを！」
「違います、若君。あっしは本当に喝を入れ直されていただけッス」
槍の柄をぎゅうと握りしめながら、太郎にじいっと目を合わせるシロジロ。
「あっしはこのいくさで男を上げるッス。このいくさが終わったら、あっしはまた団子屋をやるッス」
引き締まったシロジロをしばらく見つめたあと、太郎は少しだけ笑みを浮かべた。
「四郎次郎、お主もいくさ人だな」
「そんなことはどうでもいいんだよ」
と、おれはねじり鉢巻きが降りたあとのクリツナに跨り、
「太郎、作戦を立てろ。お前は半兵衛の弟子だろ。やっぱり、合流なんていうみみっちい真似はしない。援軍が横腹を突いたら浅井勢は混乱する。おれたちは抜け駆けして姉川沿いで戦うぞ」
「何を言っているのですか。柴田様の陣から離れたら軍紀違反ですよ」
「軍紀でいくさがやれるか！」
おれの気迫にびっくりして口を噤む太郎。取り囲んでいた沓掛勢も唖然。
「しかし、簗田殿、わずか百人の手勢では」
「どこからそんな自信が湧いて出てくるのですか、殿」

大島のおっさんが情けない顔をし、さゆりんはしかめっ面。
「自信じゃない」
おれはさゆりんに諭すような眼差しを送る。そう。自信じゃない。織田勢は雑魚級に弱すぎる。カツオがいくら豪傑だからといって、三万の大軍がありながら、八千の浅井勢、まして、そのうちの千人ぐらいの突撃ごときにおおわらわ。どう考えても弱い。確かに横山城の援軍が横腹を突けば勝ちいくさが転がり込むだろうけれど、じゃあ、このいくさの手柄取りは一体誰になるんだ。本当の勝者は誰になるんだ。
「おれたちは勝つためにいくさをしているけどな、それだけの理由で戦っているわけじゃない。おれたちはそもそも五百人いたんだぞ！」
太郎が恨みを晴らすだの何だのと言いながら名乗りを上げていたけれど、おれだって、金ヶ崎の苦い記憶を忘れたわけじゃない。いや、太郎はその場にいなかったじゃないか。
死んでいった沓掛勢の連中を思い出すと、六角攻めのときがふいに蘇る。三百から五百に増え、無知な新参者がおれに悪態をついたとき、墨俣築城から参加していた古参の兵が新参者をぶん殴っていた。
テメーは俺らの殿様がどれだけすげー人だか知らねえだろうがっ！おれだってただ単にのらりくらりと生きているわけじゃない。そりゃあ、のらりくらりと生きられるならそれに越したことはない。けどな、のらりくらりと生きているおれをそうやって尊敬してくれていた連中が、こんなおれのために死んじまったことに対して、なんとも思わないほど、おれはノータリンじゃねえよ。
「金ヶ崎のときのように、今度もまたおれの勝手な判断で、生き残ったお前らまで失うかもしれない。だけど、お前らもおれと同じ気持ちでいると考えている」
おれの言葉に百人の沓掛勢は黙っていた。ただただ、燃え滾る眼差しでおれを見据えてきていた。

「父上」
太郎が幼さのない瞳でぎらぎらと睨みつけてくる。
「その道は修羅の道ですぞ」
「金ヶ崎のときから、沓掛勢は修羅道に入っている」
すると、太郎は手綱を引きながら凶暴馬を翻し、空に向けて槍を突き出すと、号令した。
「我ら沓掛勢は川岸まで駆け抜ける！　尾張沓掛勢の武勇、近江の人間の端々にまで知らしめてやろうぞ！」
うおーっと喚声を上げる沓掛勢。おれは太郎と沓掛勢の勇ましさに武者震いする。こいつらはもしかしたら、あのキモブタ家康率いる三河勢並みかもしれない。生きて帰れるかどうかの心配よりも、おれたちは強いという誇り高さだけが胸に沸き立ってくる。
「しかし、左衛門太郎殿――」
「大島殿。この者たちはそなたが育ててきた兵卒ではないのか」
太郎の言葉に唇を押し込めながら沓掛勢を眺めていく大島のおっさん。そうして、こくりと頷く。
「かしこまりました。しかし、丹羽の殿のお叱りはご覚悟してくだされ」
「そなたもですよ、大島殿」
「言うようになりましたな、太郎殿」
笑みを見せ合う太郎と大島のおっさん。
「新七郎！　先日のしんがり戦と同様の戦法で行くぞ」
「で、でも、若君。あのときとは相手の勢いも数も」
「構わん。それにあのときには鉄砲隊はなかった。早之介、拙者のすぐ後ろを付いてこい。敵方が射程圏内に入ったら、突撃前に銃撃せよ」
「かしこまりました」
「いいか、者ども！　これより、浅井勢に突撃を開始する！　我の後ろについて参れ！」
そうして、太郎はおれに振り返ってき、半兵衛のような柔らかい

微笑を浮かべた。

「父上の言う通り軍紀でいくさはできませぬ。戦略は気を長く、戦術は気を短く。戦局が混とんと変わる中で、軍紀に縛り付けられては何もできませぬ。父上の一言で目が覚めました。父上、クリツナとともに思う存分活躍させましょう」

頭カチカチのくせに、言うようになったじゃねえか、太郎！

勝とうとして戦う者たちよ（4）

沓掛勢は、浅井方と赤母衣衆、柴田勢の乱戦を横目に動き出した。黒光りする凶暴馬とともに太郎が先頭をゆっくりと走り、さゆりん率いる鉄砲隊がそれにぴったりと付いていく。クリツナの口輪を取るねじり鉢巻きとシロジロを従えて、おれは大島のおっさんと並走する。おれと大島のおっさんの後ろにタコ入道他、雀の涙ほどの弓衆と四十人ばかしの足軽隊。

太郎は瞳をらんらんと輝かせて、妙に自信ありげだったが、何をするかは知れない。でも、おれはクリツナの背中の上で揺れながら思った。まさに総力戦だ、と。太郎と共に戦場を駆けるのも実は初めてのことだし、シロジロまでいる。

おれって出世したな。桶狭間の戦いのときなんか、たった一人で槍を持ってあたふたしていたんだもんな。あのころは想像にもできなかった。どこの馬の骨だかわからない連中が知らず知らずのうちにおれの下に集って、気持ちを一つにして戦場を駆けるだなんて。

乱戦から遠ざかるように斜めに進む太郎だったけれど、木下勢の陣地が横一直線の位置に来たところで、太郎はカーブを描きながら凶暴馬の鼻づらを決戦地に返し、沓掛勢はそのまま斜めの角度で木下勢と浅井勢の争いの真っ只中へ向かっていく。

「鉄砲隊は我を追い越せ！　早之介！　近づいたら、浅井の旗指し物が密集しているところへ向けて射撃しろ！」

太郎の激が飛ぶと、さゆりんが馬を叱咤させて凶暴馬を追い越していき、鉄砲隊もさゆりんに続いて全力で疾走し始めた。

太郎はそれに付いていくわけでもなく、速度を落としたままゆっくりと走る。鉄砲隊は足軽隊との距離を徐々に離していき、白と黄の旗指し物の下で黒い塊がぶつかり合っている間近で横に整列していき、腰を下ろして射撃の構えを取った。

「父上、鉄砲隊が銃弾を浴びせたと同時に突っ込みますぞ。クリツ

ナを奮い立たせてください」
おれはねじり鉢巻きを見やった。鉢巻きは頷く。シロジロは槍の柄をぎゅうと握りしめ、血走った目を決戦地に据えている。
「者ども、行くぞっ！」
太郎が槍先を空に突き上げたと同時に、おれはクリツナの腹を蹴飛ばした。スイッチの入ったクリツナが例のように前脚を高々と持ち上げ、それに触発された凶暴馬が首をぶるぶると振り、やたらにいななきながら駆け始めた。
猛然と走り始めたクリツナに、結局はねじり鉢巻きもシロジロも付いてこられない。まあ、論理的に無理だったっていうことみたい。でも、太郎を乗せる凶暴馬だけはクリツナに馬体を合わせて併走してきた。
走っている間、凶暴馬は首を振りながら兄貴のクリツナの頭に噛みついてこようとしてきて、とんでもなかった。太郎が馬上から叱り飛ばして、事無きを得たけれど、多分、凶暴馬は自分よりも先に走られるのが大嫌いなんだろう。クリツナはＤＱＮな弟をまったく相手にせずに前方を睨みつけたまま。
併走するおれと太郎が鉄砲隊の横を抜けて行こうとした瞬間、銃声が連発された。右側に斜向かいにしている白い旗指し物の何本かが崩れ、どよめきが上がったのが駆け抜ける足音の中にかすかに聞こえてきた。
そうして、クリツナと凶暴馬がどよめいた黒い塊へと突っ込み、戦車のように数人を弾き飛ばすと、
「尾張沓掛勢、簗田親子なり！」
立ち上がった凶暴馬の馬上で太郎が名乗りを上げ、地表に振り落とされた凶暴馬の前脚が浅井兵を薙ぎ倒し、太郎の槍が八方の浅井兵をまとめて斬り伏せていく。
クリツナも負けじと暴れ出し、まあ、おれはロデオしているだけ。
「あわてるなっ！　落ち着けえ！」
浅井兵の組頭ぐらいの奴が声を上げたけれど、浅井の雑兵たちは

怪物馬の暴れっぷりと太郎の槍さばきにへっぴり腰で槍を突き出してくるのが精いっぱいで、ほとんどが後ずさり。

そのうち、怯んでいただけの浅井兵が次々に吹っ飛んでいく。怪物馬に追いついてきた沓掛足軽隊も参加し始め、どこからともなく飛んできた銃弾と、どこからともなく突っ込んできた沓掛勢に浅井勢は大混乱。

それに乗じて、木下勢の黄色い旗指し物が浅井勢の旗指し物を駆逐していき、ぐいぐいとこちらに近づいてくる。

「沓掛勢はこのまま突っ切るぞ！」

ねじり鉢巻きが混戦の中をかいくぐってクリツナの口輪を取りに来、おれの傍らに追いついたシロジロが喚き声を上げながら槍をぶんぶんと振り回す。腰が引けていて、すべてが空振りだけど。

浅井勢を斜めに分断するように突破した太郎は、

「退却！　退却だ！」

と、なぜか、そのまま敵を背中に駆け出し、沓掛勢も走って付いてくる。大混乱に陥れたのに、退却とは何事だよ。しかも、さゆりんたちを向こう側に残したまんまじゃねえか。

「なんで、退却なんだよ！　何を言ってやがんだ、お前は！」

「退却に見せかけただけです！」

ふむ。そういうことね。でも、これからどうすんの。鉄砲隊とはぐれちゃったじゃん。

すると、決戦地からやや離れたところまでやって来て、太郎は右手にぐるりと大きく旋回した。そのままの勢いで、再び軍勢の密集地に斜めに駆けていく。

∞の字を描くようにしているのか。

沓掛勢はせいぜい百人の小部隊だから、戦場の中心にはいてもいなくてもどっちでもいいような部隊。だから、どこかをほっつき歩いていても、敵はこちらを相手にしてこないし、むしろ、本当に逃げ出したように見えるし、そもそも、浅井勢は正面の木下勢とやり合わなくちゃいけないから、こんなゴキブリみたいにうろちょろし

ている連中を構っていられない。
合戦の鍔迫り合いの最中に、五千人はいる部隊をこうしてちょこまかと動かすのは難しいけれど、独断で勝手に動き始めた少ない沓掛勢だからこそ成せる戦法なんだろう。
もしかして、信長はこういう機転の利く太郎を見抜いて、指揮権を持つ侍大将に昇格させたのかも。
再び、浅井勢に斜行突撃を始める沓掛勢。反対側からは銃声も。混乱する浅井勢を前に木下勢が勢いづき、槍を振るう沓掛勢に木下勢が合流し始める。
「功名だ功名だ功名だ！」
チッ。どこかで聞いたことのある声だと思ったら、イエモンがしゃしゃり出てきてやがる。うじゃうじゃいる中でも、あの憎たらしい顔はすぐにわかる。どうせ、劣勢だった今まではどこかに引っ込んでいて、優勢になった途端に出張ってきたんだろ。あいつは昔からそうだ。
「引けえっ！　浅井勢は引けえっ！　本陣、おやかた様からの伝令だ！　本陣が三河勢に急襲されたぞ！」
「そんな馬鹿な！」
「朝倉は何をやってるんだよ！」
槍と太刀を振るいながらも動揺する浅井の兵たち。てか、今の声の持ち主って半兵衛だったんだけど、それがわからないほど、こいつらは混乱しているのか。
「今、引いてしまったら磯野殿の部隊を孤立させてしまうぞ！　何がなんでも続かなくてはならないというのに、おやかた様は何を言っておられ――！」
ブスッ。与力格の額に大島のおっさんが放った矢がヒットし、そのまま馬上から崩れ落ちる。そこにイエモンが飛びついていき、ハイエナで首をゲット。
「討ち取った！　討ち取ったぞ！　敵将、討ち取ったぞ！」
あの野郎……。

「雑魚に構うな！　沓掛勢はこのまま突き抜けるぞ！　敵本陣まで駆け抜け、三河勢を援護するぞ！」

太郎が半兵衛の虚言に乗っかって大声を放つと、隊長を失ってあわてふためいた浅井兵は一人、また一人と戦線から逃げ出していく。

その間、沓掛勢は浅井勢を斜めに突破し、鉄砲隊と合流する。太郎の操る凶暴馬は今度はUターンせず、そのまま斜めに突き進む。

木下勢が相手にしていた浅井勢が逃げ出し始めたので、次は池田恒興勢が相手にしている浅井勢に斜行突撃していくつもりらしい。

うむ。仲間を助けながら、浅井の兵どもを打ち破っていくなんて、このいくさ、一番の活躍じゃないか。

って、え？

後ろについてくる兵隊の数がいつのまにか倍増しているんですが。五百人から六百人近い。

「おみゃあらだけに抜け駆けはさせんだぎゃあっ！」

うわあ……。馬上にはためく陣羽織の襟が太陽の日差しを受けて金色にきらきらと輝いている。

サルは部隊の一部の兵を割いて沓掛勢を追いかけてきたらしいけど、まだ、半兵衛やらイエモンやらが浅井勢と正面でやり合っている最中、部隊長なのに陣を離れちゃっていいのかよ。

勝とうとして戦う者たちよ（5）

池田勢とやり合っている浅井勢の部隊は、先程の木下勢とやり合っていた部隊よりも兵数が断然多いのが傍目にしてもわかった。

それもそのはず、

「おりゃあの陣に届いた伝令によると、坂井殿の備は壊滅したみたいだぎゃあ」

ということは、池田勢は突破してきたカツオの部隊やそれに続いてきた部隊以外のほとんどを相手にしている。浅井勢が長政本隊も含めて一挙に到来してこなかったのは、池田恒興が踏ん張っていたおかげ。

三番手の木下勢、四番手の柴田勢に比べると、前面に突き出している一番手、二番手の連中はひどい激戦を耐えてきたのか。

更に、坂井政尚の嫡男、尚恒という十六歳の子供が討死したらしい。

むう。太郎はもうちょっと年上だけど、なんだかかぶるな。なんとも言えない気持ちだ。

「おりゃあが出した斥候によると、浅井の本隊前には遠藤喜右衛門尉の部隊がおるだぎゃ。半兵衛の話によると、こいつは磯野員昌ぐらいに手強いみたいだぎゃ」

「臆しましたか、木下殿」

太郎がにやっと笑うと、サルはつまらなそうに太郎を見つめながら鼻の穴をほじり始め、鼻くそを太郎に向けてぴんと弾き飛ばす。

「おりゃあは大出世者だぎゃ。おみゃあと違って、ここまで死ぬ気で突っ走ってきたんだぎゃ」

サルは腰紐から楕円形の軍配を抜き取る。また、無駄遣いして手に入れたっぽい。鮮やかな朱色の中に散っている金箔を日差しにきらきらと浴びせ、軍配を空に高々と上げると、

「突撃だぎゃあっ！」

と、密集地に向かって振り下ろし、予想通りの抜け駆け。どうやらサルは沓掛勢の斜行突撃をどこからか見ていて学習したのか、それとも、半兵衛から説明してもらったのか、やろうとしていることを把握しているらしく、斜めに駆け出していく。

「木下勢に遅れを取るなっ！　続けえっ！」

沓掛勢も一斉に駆け出す。さゆりん鉄砲隊は、サルが先に勇んで出ていってしまったため、突撃隊と進路を変えて別れていく。騎馬足軽が突っ込んだあとに、後方からの援護射撃に徹するらしい。

木下勢が特攻したあとに、クリツナと凶暴馬で浅井兵を蹴散らし、部隊に亀裂を走らせるように前進しながら、槍、太刀を振るっていくものの、さっきとは違って兵数が多く、なかなか突き抜けられない。また、後続から詰めてくる兵数も膨大で、混乱もそこまで波及していかない。

「押せえっ！　押せえっ！」

太郎が叱咤激励しながら奮迅し、タコ入道が敵方の槍を薙ぎ払う。おれはねじり鉢巻きからアケチライフルを受け取り、ねじり鉢巻きとシロジロに両足を掴んでもらってから、馬に跨っている奴目掛けてぶっ放す。外れ。しかし、至近距離での銃声にびっくりした敵方の馬が制御不能に陥って、馬上の武将が落馬。

「好機だぎゃあっ！　叩き潰すんだぎゃあっ！」

と、サルの声が轟いていたけれど、サルは後方の安全な場所で軍配をひらひら躍らせながら騒いでいるだけ。

そのとき、後方から黄色い旗指し物がわあっと押し寄せてきた。浅井兵はじりじりと押し込まれていく。織田勢の数はどんどんと増えていく。

その中で見え隠れする馬上の赤マント。

「我は赤母衣衆筆頭、前田又左衛門利家っ！　ひとまとめに討ち取ってくれるわっ！」

ううっ。なんで、赤母衣衆が追いついてきたんだよ。まさか、マタザも抜け駆けしてきたのか。

「何をやっているんですか、兄上っ！」
小一郎の声も。木下勢全員も追いついてきたらしい。
「浅井の者ども、よく聞けいっ！」
蜂須賀クマ男が爆弾みたいなでかい声を出した。
「磯野員昌隊は潰走したあっ！　このいくさ、織田の勝ちだ！　命の惜しい者はとっとと去れえっ！」
にわかに動揺する浅井勢。そこを容赦なく斬りつけていく太郎やマタザといった織田の猛将ども。
浅井兵が堰を切ったように逃げ出していく。
どうやら、横山城を包囲していた軍勢からの援軍、稲葉ガンコ親父の部隊が、思っていた通りに浅井勢の横腹を突いたらしく、戦局は一変、サンザ部隊をなかなか突破できないままに挟み撃ちに合った磯野カツオ隊はどこか明後日の方向へ逃走。
先鋒隊を失った浅井勢を、サンザ部隊、柴田勢、稲葉ガンコ親父部隊がブルドーザーのように排除していき、そこに木下勢も加わって、前線にまで到達。
ぐう。なんだか、それを聞いたおれは、おもしろくない。このままだと、一番活躍したのはガンコ親父ってことになっちまう。
それならば、サルが言っていた遠藤喜右衛門尉か、浅井長政の首を討ち取るしかねえ。
「太郎！　斜め戦法は終わりだ！　このまま正面に突っ込んでいくぞ！」
おれが呼びかけると珍しく素直にうなずいた太郎。しかし、その横を赤マント集団が猛然と斬り進んでいく。
「抜け駆けしやがって！　先に行かせてたまるか！」
「小六！　将右衛門！　おみゃあら、何をぼさっとしているきゃあっ！　牛殿にも又左にも手柄を横取りされるにゃあっ！」
ぐぬぬ。どいつもこいつも鼻息を荒くし始めやがった。しかも、戦闘地の両側を黄色い旗指し物がぞくぞくと走り抜けていっている。きっと、あれはサンザや佐久間ヒゲオヤジの部隊だ。あいつらは重

臣だから、部隊の兵数が多い。きっと、取り囲み作戦をする気だ。
むう。
劣勢を悟った浅井勢の将兵たちは、見ただけでもわかるほど士気が削げ落ちた。ぎっしりと詰まった大勢の織田勢に立ち向かってくる勇敢な兵卒も結構いたけれど、ほとんどの雑兵は逃げ出し、与力や足軽大将といった将校連中は次から次へと倒れていき、そこかしこから将を討ち取った歓喜の名乗りが上がる。
そのうち、姉川に着岸した。対岸には織田勢を待ち構えていたかのように白い旗指し物が並び、どちらからともなく水深の浅い川の中に踏み入れると、水をばしゃばしゃと跳ねながら決闘が始まった。
最後の砦と思われる遠藤喜右衛門尉の部隊は、逃げ出す者がほとんどいなく、精鋭揃いだった。
「ぬかるなあっ！　勝利は目の前ぞ！」
太鼓と半鐘とゴンロクの檄が背中を押し、最後のあがきを見せる浅井兵一人に対して三人ぐらいで襲いかかれば、こっちでは水の中に組み伏されて脇差を振りかざされる織田兵、そこをマタザの槍が一突き。
「殲滅しろ！　一兵たりとも逃がすな！」
サンザが両手で手綱を持ったまま、自らは戦わずに将兵たちに指示を飛ばし、その傍らでは笹の葉のサイゾーが槍術を繰り出す。
「浅井新九郎が弟、浅井石見守政之なり！　織田の将よ、我が首、取ってみせよおっつ！」
劣勢の中で名乗り出てきた若武者に、雑兵たちを蹴散らしながら襲いかかる凶暴馬と太郎。
「簗田左衛門太郎がお相手つかまつろうぞ！」
その槍先が若武者に振り抜かれる。が、若武者は太郎の槍を片手で受け止め、返す刀で襲いかかる。そのとき、銃声がこだまし、沓掛勢の数十の銃弾を一気に浴びた若武者は馬上から川面へと姿を消した。
「政之様ァ――！」

気を取られた与力らしき武将がタコ入道の槍に朽ち果てる。
もはや、勝者は決した。

勝とうとして戦う者たちよ（終）

キモブタ家康率いる三河勢は、そもそも最初から織田勢のように兵隊が多くなかったので、朝倉勢に苦戦したらしい。しかし、意を決したファイヤー兜の正面突破と榊原小平太とかいう豪傑が迂回戦法を取って、不利な戦局を打破し、朝倉勢を姉川から追いやった。

浅井勢は小谷城に向けて敗走を始め、サンザの号令によって追撃戦が開始。

数々の矢と銃弾が背を向けて走る浅井兵に放たれ、街道には死体がごろごろと転がる。鬼畜の追撃戦だけ無類の強さを誇る織田兵、積年の恨み晴らさんとばかりに今日一番の活躍。

しかし、長政の本隊が小谷城に入城し、堅牢な尾根に引きこもられてしまって、追撃戦は終了。

「伝令！　横山城、降伏！」

将兵はその報せにどよめいた。というのも、信長本隊は姉川の戦局が優勢と見るや、ちゃっかり横山城の包囲に回り、マリオ隊とともに横山城を圧迫していたらしい。

ウザノスケや十兵衛の姿がないと思ったら、こういうことだったのね。

ということで、小谷城を目前にして、織田勢は姉川へと引き返す。

やがて、更なる伝令が飛んできて、小谷城攻めは不要、横山城にて論功行賞をするとのこと。小谷城攻めなんかしてないけどさ。

いつのまにやら空の真ん中に昇っていた太陽が、激戦の爪痕が残る姉川の岸辺に日差しをじりじりと降り注いでくる。

「長かったな」

流血混じりの姉川の水面を馬にばしゃばしゃと跳ね飛ばさせながら、マタザが苦笑交じりに呟いた。本来のマタザなら、勝ちいくさにもうちょっとはしゃぎそうなものだけど、年齢の功か、単に疲れてしまったのか。

「腹が減った。まつの炊いた米を山盛り食いたいわ」
マタザの冗談に赤母衣衆が笑い、並列していた沓掛勢も笑った。
三度、斜行突撃を繰り出した沓掛勢だったけれど、精鋭だけあって死傷者はなかったみたい。さゆりんからそれを聞いた途端、安堵のあまり腰が砕けそうだった。あれだけの激戦の只中に突っ込んでいって、死傷者ゼロ。この強さは三河勢を超えただろ。
「走り続けて疲れちまったな」
行進を無視して急に姉川の水をがぶがぶと飲み始めたクリツナ。その鼻面を撫で上げるねじり鉢巻き。
おれはぽんぽんとクリツナの肩を叩く。
「こんな血の混じった水なんか飲むなよ。城に入ればいくらでもあるからよ」
クリツナはおれの言葉を無視。ねじり鉢巻きが口輪を引いて、ようやく歩いたと思ったら、今度は川岸の草をむしり始めた。
「こらっ、クリっ」
ねじり鉢巻きが口輪をぐいぐい引っ張るが、クリツナは頑として食事。おれは笑いながら、思う存分にさせろとねじり鉢巻きに言い、立ち止まっていた太郎たち沓掛勢を先に行かせる。
「旦那様、あっしも頑張ったッスよ」
シロジロがきらきらした瞳でおれを見上げてきて、おれは鼻で笑う。
「お前なんか、タコ入道や沓掛勢の活躍に比べれば下の下だ」
「そんなあ、あっしだって死ぬ気でやったんスよお」
「わかったよ！　今度、荒木信濃守か堺のタナカ辺りに話をつけといてやるよ！　せっかくの勝ちいくさだっていうのに、うだうだうるせえんだからよ！」
すると、にまにまと笑みを浮かべ出したシロジロ。まったく。ちょっとは勝利に浸れよ。
「何をやっておる」
ぐう。ゴンロク。柴田勢を引き連れているのにいちいち立ち止ま

って、むっつりとした髭面をおれに向けてくる。
「戦中、勝手に部隊から離れおって。左衛門太郎ともども、覚悟しておくんだな」
ぬう。太郎にはあれだけ優しい顔をしていたっていうのに、自分の言うことを聞かない人間は爪弾き者ってか。なんて、器の小さい奴。
「まあ、しかし、生きていてなによりだ。左衛門太郎も、お主もな」
そう言うと、ゴンロクは腰の太刀の鞘紐を解き、おれにぽいと放ってきた。両手で受け取ったおれ。
え？
「お主は将のくせに脇差しか持っていない体たらくぶりらしいな。義兄として見っともないからくれてやる。このいくさでの褒美だ」
え、え、え？　ど、どういう風の吹き回しッスか。
戸惑うおれを尻目に立ち去っていったゴンロク。まさか、本気で、御褒美を。
「なんだかんだ言って、心配してくれているんじゃないんスかあ」
なんか、あれだけむかついていたから複雑このうえないが、しょうがないから義兄として認めてやるか。おれとそんなに仲良くなりたいんならしょうがいないな。うん。
で、横山城に到着すると、庭には織田の家紋の陣幕が張られていて、お待ちかねのお楽しみ会。
だったんだけど、陣の外でお楽しみ会の開催を待っていたら、大手門の辺りが妙に騒がしい。木下勢がたむろっているところだ。ざわざわと不穏な空気が漂っていて、その中でサルが大騒ぎしている。
おみゃあは何をやっているんだぎゃ！　おみゃあ、正気かえ！
おみゃあは本当の本当に狂っちまったんだぎゃあにゃ！
「何事でしょう」
すでに下馬している太郎とおれはやんややんやと飛び跳ねているサルの様子に表情を曇らせた。
飛び跳ねているサルの脇にはこちらのほうへ向かって歩いてくる

縦長帽子の半兵衛。ぐえっ。両手にはそれぞれ生首を携えていて、陣羽織は鮮血で真っ赤になっている。

さゆりんが半兵衛を振り返りつつ歩み寄ってきて言う。

「どうやら、竹中様がお味方を斬り捨てたようです」

「な、なぜだ」

驚く太郎に怪訝な表情のまま首を傾げるさゆりん。大騒ぎするサルを無視しながらゆっくりと歩み寄って来る半兵衛に、太郎は駆け寄っていく。

「半兵衛様！　その首はどうされたのですか！」

半兵衛はいくさ狂いモードでもなかったが、据わった眼差しでぎろりと太郎を睨みつけた。

「この首は遠藤喜右衛門尉直経のものだ。検分役に見せればすぐにわかる。この者は味方の将の首級を持って忍びこんでおったのだ」

「にゃあっ！？　ほ、本当きゃあ、半兵衛っ！」

「拙者は浪人時代、この者に会ったことがありますゆえ、間違いありません」

嘘だろ……。遠藤喜右衛門尉っていったら、部隊長を任せられるほどの浅井家の重臣なんだろ。そんなやつが味方の首を持って、一人で忍びこんでどうするつもりだったんだよ。

「織田勢を装ったのでしょう」

さゆりんがそう言って、企みを理解したおれはぞっとした。浅井の将の首級を持っていれば、必ず論功行賞の場に入れる。そうして、信長と真正面で向きあったところで、刺し違えるつもりだったんだ。

その企みの恐ろしさよりも、重臣の身分の人間がそこまでして浅井長政を生き残らせようとしたことに、おれは身震いする。最後の一人になったとしても、あの生首は勝利を諦めなかったってことだ。

おれはこの勝ちいくさだっていうのに、一度も会ったことのない男の悲愴なまでの執念に、なんだか完敗した。

勝とうとして戦う者たちよ（終）（後書き）

第八章終わりです。どうもありがとうございました。

ちなみに、

合戦の場面の描写はもちろん作者の創作ですが、姉川の戦いで、浅井家の重臣遠藤喜右衛門尉直経が味方武将の首を持って織田兵になりすまし、信長を狙ったというのは記録に残っているようです。

（ただし、遠藤直経だと見抜いて斬り捨てたのは竹中半兵衛ではなく、半兵衛の弟です。弟は登場していないので、半兵衛がやったことにしましたw）

謝らんか謝らんか謝らんかっ！

「なにゆえ、兄上はそのように意地が悪いんじゃっ！　一体、亭主殿が何をしたというのじゃっ！　謝らんか！　頭を下げて謝らんか！　謝らんか謝らんか謝らんかっ！」

あずにゃんはゴンロクの髷を引っ掴んで、ゴンっゴンっゴンっと三度、頭を床に打ちつけて、デザイナ健在。

あわわ……。

「違うんじゃ、梓。わしはただ――」

「何が違うのじゃっ！　亭主殿を侮辱したのは事実なのだろう！」

「はい……」

「ならば、言い訳など無用じゃ！　謝らんか謝らんか謝らんかっ！」

鬼の形相で更にゴンロクの頭を叩きつけるあずにゃん。ううっ。今さら、太刀を貰ったなんて言い出せないおれは、苦痛に顔を歪めるゴンロクを直視できない。

「し、しかし、母上っ、し、柴田様は父上に――」

「なんじゃっ！　まだ何かあるのかっ！」

太郎はきっと太刀を貰ったことを言おうとしたのだけれど、怒髪天を突き上げているあずにゃんの恐ろしさに、

「いえ、なんでもありません」

と、肩を縮こまらせて、ゴンロクを見殺し。

「そもそも、亭主殿も太郎もいくさ場で無類の活躍を見せたというではないかっ！　それなのに、軍紀違反で何の褒賞も与えられなかったのは兄上の意地の悪さに愛想を尽かし、隊列を離れたからじゃ！　それを兄上はおわかりなのかっ！」

い、いや、ゴンロクはあんまり関係ないんだけど。で、でも、怖くて何も言えない。

「あ、梓、しかしだな、いくさというのは規律を守ってこそ――」

「なんじゃ。女風情がいくさに口を出すなと申すのか」

「い、いや。そういうわけ――」
ボコッ。梓ストレート入りました。更に梓キック。拳に足にと連打連打連打。サンドバッグ状態のゴンロクに危険が迫ってくるけれど、レフェリーはいません。誰も止められません。
で、あずにゃんの一方的な暴行が終わると、ゴンロクは狙撃された熊のようにぐったりと伸びてしまい、かすかな呻き声で生存をなんとか確認できる有様。
息を切らしながら、あずにゃんは実の兄を睨み下ろす。
「兄上。もう、せんと誓え。次はこれぐらいでは済まさんからな」
「ふぁい」
おれはとても胸が痛い。許したわけではないけれど、だけれど、太刀を御褒美に貰った手前、心の中でそっと詫びる。ゴンロク、ごめん。
ゴンロクは二人の従者に両脇を抱えられて簗田家を脱出していった。おれは改めて自分を戒める。麗しきあずにゃんは、デザイナという女番長でもあることを忘れないようにしなければ。おれが同じようにならないという保証はないんだから。つい春先までは同じ目に合っていたし。
「亭主殿、久々に茶を馳走してやるぞ」
さっきまでの怒りようが嘘のようににこにこと笑みを浮かべるあずにゃん。もちろん、断れないおれは、あずにゃんの茶室へ。
作法に口うるさいあずにゃんの視線に怯えながら、苦い抹茶をごくり。結構なお手前でした。
「亭主殿、いくさも一段落したところだし、そろそろ太郎とあいりの祝言を挙げねばな。今まで延び延びになっておったが、太郎もあいりもいつまでもこのままにさせておかぬわけにもいくまい」
「そうッスね」
「丹羽殿と日取りを合わさねばな。あいりを養女にしてもらったゆえ、家の人間だけでやるわけにもいくまい。丹羽殿と太郎、それに亭主殿が顔を合わせられる機会はなかなかなかったが、いくさが一

段落している今の時期であれば、都合も合わせられる」
「そうッスね」
「亭主殿、丹羽殿の都合を聞いてきなされ。善は急げじゃ」
えーっ。面倒だなあ。昨日、岐阜に戻って来たばっかりなんだから、ちょっとはゆっくりさせてよお。張り切りすぎちゃって体のあちこちが痛いんだからさあ。
でも、久々にデザイナを見ちゃったおれは逆らうこともできずに退室。渋々、クリツナのいる馬屋に行ってみたが、馬屋は空っぽ。
「どうしたんスか、旦那様」
庭であーやと一緒に草むしりをしていたシロジロが声をかけてきた。団子屋を召し挙げられてやることがねえからって、草むしりかよ。もうちょっと、ましなことでもしろよ。馬鹿が。
「クリツナはどこに行ったんだ」
「クリツナなら栗之介が散歩に連れていきましたよ。クロは若君がお城に登られるとかで跨っていきましたよ」
「早之介は何をしているんだ」
「城下に兵士を探しに行きましたよ」
チッ。タコ入道は尾張沓掛に戻る沓掛勢の引率に出かけちゃったしな。まあいい。仕方ないから一人歩いて城下の丹羽勢の宿泊寺に行くか。
「どこかに行かれるんスか。あっしが付いていきますよ」
「いいよ。あーや一人に草むしりをさせるなんて可哀想だから、お前は残ってろ」
「大丈夫ッス。もう、あらかた抜きましたから。それに、姉川ではずっと旦那様のお側から離れなかったんスから、いつだってお伴させてもらいますよ」
うぜえなあ。なんなんだよ、にこにこしちゃって気色悪い。いくさが終わってからずっとこの調子だし。邪魔くせえ。
まあ、簗田左衛門尉たるものが、馬にも乗らずに一人で城下を歩いているなんて見っともないから、連れて行ってやるか。

油蝉のかまびすしい稲葉山の山道を下っていき、賑わう城下に入るおれとシロジロ。
「旦那様、堺に行くことがあったら、今度はあっしも連れていってくださいね」
「それはいいけどさ、そんなことより奇進札はどうなったんだよ。そろそろ開催しろよ。春先にやったきり、どうなっているんだよ。また、悪いことしているんじゃねえだろうな」
「してないッスって。奇進札のことなら、今日、吉田殿がついでに願福寺に立ち寄るみたいだから、気にしなくて大丈夫ッスよ」
むう。そっちのほうが気になるんだが。どちらかというと、シロジロよりもさゆりんのほうがおれの言うことをまったく聞かないから怖い。
「それにしてもなあ、沓掛勢はあれだけ武功を上げたっていうのに、何の褒賞もないんスもんねえ。それに比べて、木下様は横山城の城主じゃないッスか。木下様より旦那様や若君のほうが活躍したはずなんスけどねえ」
シロジロはお楽しみ会に出席できない小者だから知らないが、正確に言うと、サルは城主じゃない。北近江の戦線を守る横山城の城番という扱いで、横山城を与えられたわけじゃない。
「ところで、どこに行くんスか」
「丹羽五郎左のところだ。太郎とあいりんの祝言の日取りを決めに行けってあずにゃんに言われちゃったからな」
「何を言ってんスか、旦那様。丹羽様なら磯野員昌が逃げ込んだ佐和山城の包囲に出ていて、岐阜に戻って来てないじゃないッスか」
あ。そうだった。
姉川の決戦のあと、信長は佐和山城の東に砦を建設し、マリオをそこに留まらせて佐和山城を睨ませるようにしたんだった。
横山城を奪い取ったことで、小谷城と佐和山城の間を分断した織田勢だったけれど、カツオにあれだけこっぴどくやられたものだから、小谷城よりも先に佐和山城を陥落させる戦略になったんだっけ。

うーん。佐和山城を攻略するまではマリオは帰ってこられないだろうな。太郎とあいりんの祝言はまたも延期ですか。ま、どっちだっていいけど。

どんっ。

「いってー。おいっ！　何、道の真ん中で突っ立ってやがんだよ！」

な、なんだよ、このガキ。自分がよそ見しながら走り回っているからだろ。だいたい、おれが何者だか知っていて言ってんのか。

「お前みたいなのが歩いていると邪魔なんだよ！　この野郎っ！」

痛っ。ちょ、このガキ、おれの足を蹴り飛ばしてきたんだけど、ど、どこの無礼者の小僧だ！

「この小僧っ子！」

と、ガキの襟を掴み上げたのはシロジロ。

「このお方をどなたと心得る。綱鎧の簗田こと、沓掛城主、簗田左衛門尉様だぞ！」

ほほう。戦場帰りとあって、なかなかさまになっているじゃねえか、シロジロ。

「沓掛城主ヤナダサエモンジョウ？」

「そうだ。旦那様を蹴り飛ばした罪、お前の親にきっちりとけじめをつけてやるぞ！」

「なんだい！　誰かと思ったら藤吉郎様の手下の牛太郎かよ！　野良牛上がりのくせに偉そうな口叩くんじゃねえ！」

な、な、なんだと！

クソガキはシロジロの顔を爪で猫みたいにしゃーって引っ掻くと、悲鳴を上げたシロジロにも蹴りを一発入れて、

「牛は牛らしく牛舎で太ってろ！」

と、あっかんべえを残して逃げ出した。

あのガキいっ！　悪態の様子といい稲葉山の方角に逃げ出すといい、きっとサルの奉公人だ。とっちめてやる！

そのすばしっこさのあまりクソガキの姿を見失ってしまったけれど、間違いなくサルの奉公人だから、シロジロと共にサルの屋敷にカチコミ。

「寧々さーん！　寧々さーん！」

玄関で大声を上げていると、奥から木刀を手にして飛び出してきたクソガキ。しかも、仲間のガキを一人連れて出てきて、そいつも木刀を握りしめている。

「何しに来やがったんだ、この野郎！」

「やっちまえ！」

おれはガキどもをビビらせてやろうとゴンロク譲りの太刀を抜こうとした。けど、脇差のアケチソードと勝手が違って、その長さになかなか鞘から抜けない。あたふたしているうちにクソガキどもの木刀が飛んできて、ううっ、ボコボコにされる。ガキどもは手加減知らず。滅多やたらに木刀を振り下ろしてきて、亀のように丸まるしかないおれ。

「だ、旦那様っ！」

「こいつもやっちまえ！」

「こらあっ！　何をしているのですかっ！」

遠山さんの声が飛んできたけれど、リンチをやめないガキども。寧々さんがガキどもの襟を掴んでおれから引き剥がし、頭を抱えて丸まっているおれにしゃがみ込んでくる。

「大丈夫ですか、牛殿っ」

「ウウッ。なんなんスか、こいつら……」

「こらっ！　夜叉丸っ！　市松っ！　客人に向かってなんてことをしているのですっ！　このような乱暴狼藉をするようでは二人とも清州に戻しますよっ！」

遠山さんの怒鳴りにしゅんと縮こまるクソガキ二人。ぐぬぬ。サ

ルの野郎、奉公人の教育もできてねえじゃねえか。太郎がこいつらぐらいのときは、おれの教育が行き届いていたから、礼儀正しい可愛い子供だったぞ。

おれは立ち上がると、しゅんとしながらも上目に睨みつけてくるガキどもに拳骨を落とした。

「何しやがんだ！」

「この野良牛野郎！」

木刀を振り上げてきたガキどもだったけれど、今度は遠山さんが拳骨を落とし、手にしていた木刀を取り上げる。

「どなた様にそのような口を叩いているのですかっ！　こっちにいらっしゃいっ！」

遠山さんは二人を引きずっていくと、庭先の木の幹にわあわあと泣き喚く二人を縛り付けたあとに、そのまま地面に膝をつけて頭を下げてきた。

「牛殿、当家の小姓どもの狼藉、申し訳ございませぬ」

「い、いや、寧々さんはいいんですよ。頭を上げてください。寧々さんにそんな真似をされると、あっしはどうしたらいいか」

それにしても、このガキども、木の近くにすでに縄があったことを踏まえると、悪さをして折檻されるのは毎度のことなんだな。

ガキどもを木に縛り付けたまま、おれとシロジロは屋敷の中に上がり、遠山さんや女中たちに手当てをしてもらう。

「藤吉郎殿が甘やかすので、小姓とは名ばかりの腕白小僧なのです」

遠山さんの話によると、最初に城下で悪態をついてきたのが市松というガキで、サルの従兄妹の子供らしい。清州で喧嘩になったとある足軽雑兵を刺し殺して、岐阜のサルのところに逃げてきたというとんでもない小僧のようで、おれはその超絶ＤＱＮの資質にちょっとビビった。

チビＤＱＮの助太刀で出てきたのが、名前からしてＤＱＮの夜叉丸というほうで、こいつはサルの遠縁の親戚の子供で、尾張中村で暴れ回っているガキ大将だったらしい。

こんな奴等を小姓にするだなんて、サルは本当にどうかしているな。マタザやウザノスケの予備軍みたいなもんじゃねえか。

いや、そんなことより腹が立つのが、こいつらがおれを野良牛呼ばわりし、サルの手下だと吐き捨てたことだ。

サルが家の中でそういうことを言っているから、このガキどもは真似しているんだ。ふざけやがって。それどころか、あることないことべらべらと喋り散らしているかもしれん。

おれは庭先に降り、縛り付けられてしょんぼりとしているガキどもの前に立つ。

「お前ら、姉川のいくさの話が聞きたいか」

すると、ガキどもは瞳を輝かせて食いついてきた。思った通りだ。こいつらみたいなＤＱＮ予備軍はいくさに出たくてうずうずしている。娯楽も乏しく、情報も聞き伝えのこの時代の子供は、城下で暴れ回るか、いくさ物語に聞き入るかの楽しみぐらいしかない。

「おとなしく聞くなら勘弁してやる」

二人揃ってこくりと頷き、おれは縄をほどいて縁側に正座させると、金ヶ崎と姉川で大活躍した沓掛勢の武勇伝を披露してやった。主人のサルが戻って来ていないので、特に姉川の話は身を乗り出して聞き入るガキども。フヒヒ。このＤＱＮ予備軍を今のうちに懐柔しておいて、行く行くはおれの手下にしてやる。

ガキどもはおれのことは馬鹿にしていたくせに、町娘の子供から侍大将まで伸し上がった太郎には憧憬の念を抱いているようで、斜行突撃で浅井勢を混乱に陥れた話まで来ると、

「それで左衛門太郎様は何人ぐらいを討ち取ったんだ！」

「黒連雀と栗綱はそんなに強いのか！」

と、少年ジャンプに夢中になる子供のように鼻息を荒くしたんだけど、クロレンジャクって何？　隣で武勇伝にうんうんと満悦していたシロジロに訊ねてみると、凶暴馬は巷では黒連雀って呼ばれているらしい。ふーん。知らなかった。

「いくさのときに逆立つたてがみと白い汗模様がたまたま連雀のよ

うに見えたってことで、馬廻衆がそう呼んでいるみたいッス」
「おれは黒連雀を見たことがあるぞ！　夜叉丸はないけどな！」
「見たって言ったって、いくさ場で見たんじゃねえだろ！　左衛門太郎様がたまたま登城するときに見たくせに偉そうな口叩くんじゃねえよ！」
「おいおい、お前ら」
おれはにやにやと笑いながら、興奮しきりのガキどもをなだめる。
「なんなら、今からおれの家に見に来てもいいんだぞ。クリツナもクロもどっちもいるんだからな」
「本当か！」
フヒヒ。無邪気な奴等だのう。大きくなったら沓掛勢に入れてやってもいいぞ。もちろん、足軽雑兵から始めてもらうけどな。
ということで、遠山さんに了承を貰い、ガキどもを我が家に連れていく。
「ちなみにおれは摂津池田のいくさのときにクロにも跨ったからな」
道中、自慢すると、おれを馬鹿にしていたのも忘れたかのように、二人ともきゃっきゃと馬鹿正直におれを崇め始める。
こいつらはどうやら強い武将や名馬のことには詳しいようで、兄貴のクリツナはおっとりしていて誰でも乗れる馬、弟のクロは凶暴すぎて乗り手を選ぶ馬だということも知っているらしい。
「おれはクロに跨って一騎駆けをしたんだ。相手を蹴散らしていったときって言ったらたまらなかったなあ」
「でもさ、市松、藤吉郎様が言っていたぞ。牛太郎は馬が強いから、弱いくせに活躍できるんだって」
ぐぬぬ。
「おいっ。強い馬に乗れるのは、おれの馬を選ぶ目がいいからだ。いいか。腕っ節が強いだけで活躍できるほどいくさは甘くねえんだからな。お前らのところの藤吉郎殿だって大して強くねえだろうが。あんなチビでサルみたいなやつが強いと思うか？」
「うーん……」

「槍を振り回すのなんか、雑兵だって出来ることだ。要は槍を振り回す奴等をどう扱うかが大将の仕事だ」

唇を尖らせるガキども。ま、このぐらいのガキにはわからないだろうな。

我が家の門をくぐると、そのまま馬屋までガキどもを連れていき、調度良くクリツナもクロも戻って来ていて、ねじり鉢巻きが体を洗ってやっているところだった。

「黒連雀だあっ！」

と、夜叉丸は飛び跳ねると、目を瞑ってじっとしているクロに駆け寄っていく。

「あっ、こらっ」

クリツナの体を洗ってやっていたねじり鉢巻きが駆け寄る夜叉丸を止めようとしたが、その前にクロが瞼をぎらっと開けて夜叉丸を射すくめ、いななきながら立ち上がった。

腰を抜かして尻もちをつく夜叉丸をねじり鉢巻きがクロから引きずり離す。

「眠っているときに近づいたら駄目だ。クロはただでさえ人見知りなのに、寝ているのを邪魔されたら怒るんだ」

目の前で首を振り回しながら暴れ狂うクロに怯えるガキ二人。ざまあｗ　むしろ、そのままクロの前脚潰しの餌食になっちまえよ。

一方、クリツナは暴れる弟をよそに、顔に伝わる洗い水をぺろぺろと舐めているだけ。

「何事だ！」

ねじり鉢巻きがクロの口輪を取ってなだめていると、さっきのいななきを聞いたんだろう、太郎が飛び出してきた。

すると、突如、ガキどもは太郎の前に膝まづき平伏した。

「お初にお目にかかります！　木下藤吉郎の小姓、市松と申します！」

「同じく夜叉丸です！」

ふざけやがって、こいつら……。おれには木刀を振り回してきた

っていうのに、なんだ、この豹変ぶりは。
「木下殿の小姓？」
「城下に出ていたところ、この者たちがクリツナとクロを見たいということなんで、旦那様が連れてきてやったんス」
「ああ、そういうことですか。それより、父上、探していたのです。ちょっと、よろしいですか」
太郎に手招きされて、庭の隅に連れていかれる。太郎が密談なんて珍しいなと思っていると、太郎は表情を厳しくさせて囁いてきた。
「今日、新七の褒賞を頂けるということで登城し、森様にお会いになったのですが、どうやら、摂津池田の池田筑後守が謀反に合って追放されたそうです」
は？

下心

「京都所司代の村井殿からの一報ゆえ、事実であろう」
腕を組むサンザは、眉間に皺を寄せて目をじっと瞑ったまま言う。
「届けられた密書によると先代領主の倅である池田九右衛門知正が、筑後守を摂津池田から追い出したらしい」
なんで、そんな下剋上をするんだよ。なんで、おれが関わっているっていうのに、そんな面倒なトラブルを引き起こすんだよ。
「牛殿、そのような兆候が池田にはなかったのか」
ううう。なかったと言えば嘘になるけれど、兆候というよりは、松永弾正が池田筑後守には気をつけろと言っていたぐらいで……。
それに、ヘタレ村重が三好三人衆と通じているって十兵衛が言っていたけれど、あのヘタレ野郎が筑後守をよもや追い出すような大それた真似なんかできないだろうし。
でも、もしも、疑わしきヘタレ村重が、その騒動に関与していたら、摂津池田は三好三人衆側に付くんじゃ……。
「とにかく、詳細を確認せねばなるまい。牛殿、早急に摂津に向かえ」
おれは溜め息をつきながらサンザの屋敷をあとにした。
姉川のいくさのあと、信長は十兵衛とともに京の足利義昭のところに建前だけの戦勝報告に行っており、今は岐阜に戻って来ている最中らしい。
今のうちに岐阜を逃げ出して、池田九右衛門ってやつから引き続き織田側に付くという意思を示させないと、信長に雷を落とされちまう。
我が家に帰って来ると、広間には夕飯の支度が整われていて、おれの帰りを待っていた。掌を合わせていただきまーす。
おれは大根の葉っぱの味噌汁を啜りながら、一度堺のタナカか今井会長に会ったほうがいいんじゃないかとか、摂津には誰と一緒に

行こうかとか、あちゃこちゃ考えた。
シロジロが姉川のことをべらべらと自慢げに話している。うっせえな。大して何もしてないくせに。
すると、今度はねじり鉢巻きがクリツナとクロの活躍をべらべらと喋り始める。いつもは口数が少ないくせに、馬のこととなったらこれだ。
女どもは岐阜に閉じこもって退屈な日々だから、目を輝かせながら聞き入る。
「太郎」
と、おれはくだらない武勇伝を遮った。
「明日、摂津に行くことになったからお前も付いてこい」
「拙者もですか？」
「なんだよ。嫌なのかよ」
「そういうわけではありませんが、沓掛勢の兵を増やしたいのもありますし、それにまたいついくさに呼ばれるか。そのときに拙者も父上もいないとなると、まずいような気も」
むう。確かに。おれとしては下剋上の起こった摂津池田で何が待ち受けているかわからないから、ボディガードとして連れて行きたかったんだけど。
「どうしたのじゃ、また出かけるのか」
あずにゃんが箸を止めて寂しげな顔。
「まあ、摂津池田でごたごたがあったみたいで。森三左衛門様に摂津に向かえっていうご沙汰を受けたもんでして」
「そうか」
あずにゃんは顔をうつむかせてしょんぼり。可愛いのう。おれも離れたくはないんだけどなあ。でも、岐阜に居座っていると口うるさい茶会でげっそりしちゃうからな。うん。
「あっしが行きますよ！」
満面の笑みで名乗りを上げたシロジロ。馬鹿が。遊びに行くんじゃねえんだぞ。カス。まあ、でも、言っても聞かないだろうから、

シロジロは万が一の身代わり役として連れてってやるか。
「早之介、お前も付いてこいよな」
こくりと素直にうなずくさゆりん。ふむ。素直すぎて逆に怖いけれど、さゆりんだけは岐阜に残すわけにはいかないからな。影でこそこそと勝手に動き回るからな。
「あと、あーや。キミもね＾＾」
急に振られてびっくりして瞳を大きくしたあーや。
「わ、私もですか？」
「何をおっしゃっているのですか、父上」
「何を考えているのですか、殿」
太郎とさゆりんが二人揃ってシラーッとした目。ぬう。さすがに魂胆が見えすぎているか。お貞もあいりんも怪訝そうな顔。ぐう。
「だ、だって、長いこと滞在するかもしれないだろ。摂津は池田だけじゃなくて、伊丹とか茨木とかの連中もいるし、それに松永弾正とかともいろいろあるし。だから、腰を据えることになるだろうから、身の回りの世話をする女中の一人ぐらいはいないと大変じゃないか」
「四郎次郎がいるではないですか」
ぐっ。
「シ、シロジロは、その、えーと、堺の商人とかに、会わせたいから……」
「本当ッスか！　堺に連れていってくれるんスか！」
ぐうっ。
「父上、そんなこと、彩を連れていく理由になりませんよ」
「よいではないか、太郎」
鼻先を突き上げながら静かに箸を置いたあずにゃん。な、なんか、極道の妻たちみたいな緊迫したオーラが背中に漂っているような……。
「変なことをしようものなら彩に告げさせればよい。男だけで畿内に行かせるよりは逆に好都合じゃ」

ドキッ。

「彩、亭主殿をしかと見張るんじゃぞ。亭主殿、もしも、変なことをしようものなら、その日から亡き父の跡目は太郎に継がせるからのう」

ううっ。な、亡き父って、お、おれのことだよね。殺すってことだよね。てか、あずにゃんの目が殺し屋の目だったし。

余計なことを言わなければよかったと後悔しつつ、緊迫する広間から逃亡して風呂浴び。くううっ。あんな可愛いあーやを前に指をくわえるだけしかないなんて。女中にしたのはミス。凡ミスだ。

どうせなら、シロジロとねじり鉢巻きだけの旅路でもよかったな。男だけだったらエロもあるしさ。まあ、勝手な真似をするさゆりんだけは連れて行きたいからな。あいつは男じゃないし、下手したらあずにゃんに告げ口しそうだし。

その夜、あずにゃんはおれの部屋に来なかった……（´・ω・、）

畿内の火薬庫（前書き）

＞ｉ１８９６２―２５２３＜
→摂津の勢力図ですｗ
文章だけだと作者もぐっちゃぐちゃで訳がわからなくなってきたので、作りました。参考にしてください。

畿内の火薬庫

岐阜から京へ。

とりあえず、京でのいつもの居候先の寺に行くと、なんでも、今井会長が二条城を訪れているらしく、情報収集にはこのうえないラッキー。

シロジロが自分も行きたいだとか抜かしていたが、誰がお前みたいな小者を会長のところに連れていくか。あーやと共に寺に残し、さゆりんと二人で会長の京屋敷へアポなし訪問。

会長は戻って来ていなかったけれど、そこは今井会長に二千丁の火縄銃で儲けさせた男、屋敷の中に上がって待たせてもらうことに。

「そういえば、寄進札の件、ちゃんとやっているんだろうな」

「大丈夫や。秋の中頃にまた銭が入ってくる」

「今度はくすねるなよな。隅々まで調べるからな」

さゆりんは顔を煙たそうに向けてくると、「はいはい」と、適当に頷いた。女狐め。

畳の客間で一時間ぐらい待つと、開いた障子戸から会長がのっそりと現れた。

「これは簗田殿。いつも突然ですな」

笑顔ながらに嫌味を忘れない会長は、おれとさゆりんの向かいに座ると、扇子でぱたぱたと丸い顔をあおぎ始めた。

「京は暑くてかないませんな。それで、本日はどのような御用件で。火縄銃を五百丁ならば、特価で引き受けますぞ」

にやりと笑みを浮かべながらねっとりと前のめりに顔を近寄せてきた会長。ううっ。相変わらず気色悪いゼニゲバモンスターめ。

「申し訳ありませんが」

さゆりんが手をつきながら言う。

「今日参ったのは儲け話ではございませぬ」

「存じております。摂津池田のことでしょう」

だったら、最初から言えや、たぬき野郎。
「そうですな」
会長は扇子をぱたぱたと動かしながら、遠くのほうを眺めるようにして草木に青々とした庭園を見つめていた。
「摂津は激動するでしょう」
「どういうことでしょう」
「摂津池田を訪れていた行商人の話によると、池田筑後守殿を追い出した池田九右衛門殿は、どうやら荒木信濃守殿の傀儡ではないかと」
おれは思わず腰を浮き上がらせた。
「嘘でしょうっ」
あのヘタレ村重が下剋上の黒幕だなんて、信じられるかよ。あいつに何ができるんだよ。あいつは茶の湯馬鹿のただのボンボンじゃねえか。
「いや、まあ、その者の憶測にすぎないでしょうが、しかし、筑後守殿に仕えていた者の中で、共に池田から追放されたのは、どれもこれも信濃守殿とは折り合いの悪かった将という話なのです」
まあいい。まあいい。仮にヘタレが黒幕だったとしても、結局は織田側につけばいいことだ。筑後守から九右衛門とかいう奴に頭がすげ替わったってことで、摂津池田が信長についていれば、おれにはなんでもないことなんだ。
「まあ、この裏に三好三人衆が動いているのは間違いないでしょうな」
ファック！
「北近江の浅井様の寝返りが織田様を苦境に立たせるかもしれませんな。浅井様が寝返らなければ、摂津の統治に専念できたのですから」
まずいよな。摂津池田の目付役だったおれからすると、本当にまずい。信長になんて言われるか知れたもんじゃねえ。まずい。本当にまずい。

さゆりんが首を垂らしているおれに溜め息をつく。
「殿、そう落ち込んだところで仕方ありますまい。逆に殿は信濃守と懇意にしているのですから、なんとかならないことでもないでしょう」
そりゃそうだ。なんとかならない話でもないわ。
「いや、簗田殿、事態はそう甘くないかもしれません。もしも、池田九右衛門殿が三好三人衆を後ろ盾にして足利幕臣の座を下りるとなれば、元々、仲違いをしている伊丹殿や茨木殿との火種が爆発するでしょう。それに摂津の高槻城には公方様直臣である和田惟政殿がおります。要は各地の豪族の思惑もあれば三好三人衆の思惑もあるし、織田様や公方様の思惑もあって、非常に複雑怪奇な情勢です。摂津は、三好三人衆方対織田方との二分化どころか、魑魅魍魎が跋扈する泥沼と化します」
もうね、会長の言っていることすら訳がわからなくておれの頭の中が泥沼だよ。結局はこのまま行くとめちゃくちゃになるってことなんだろ。ヘタレ村重だけがどうこうっていう話じゃなくなるってことなんだろ。
ただ、ヘタレ村重がその火種になりかねないってことだ。あの野郎。ヘタレのくせに余計な真似をしやがって。
とりあえず、会長の計らいで簗田御一行は京から堺に移ることになった。堺のほうが摂津との行き来が便利だし、情勢も早く把握できる。それに会長自身も摂津での混乱は都合上避けてもらいたいらしく、出来ることなら、おれになんとか摂津の混沌とした情勢をうまく取りまとめてほしいと言ってきた。
「まあ、正直さ、無理だろ」
会長に借りた堺の仮屋敷で腰を落ち着けると、おれはさゆりんやシロジロ、あーやの前で開き直った。
「信長様がうろちょろしている三好三人衆を叩き潰さないかぎり、いつまで経ってもこんな状態になるってことだ」
「諦めるのが早いですね、殿。ならば、岐阜に帰っておやかた様に

そう報告いたしますか」
「それは駄目だ」
絶対に駄目だ。信長が許してくれるはずがない。浅井長政の裏切りを知っていたにも関わらず市姫を嫁がせたことで激怒されたし、今の信長は虐殺を始めたりと魔王に近づいていっているから、ちょっとでも気に食わないとなると首をちょん切られる可能性は大きい。
そもそも、池田筑後守を助けなければ、こんなことにはならなかったんだ。あのときのうっかり発言がこんなことを引き起こしちゃったんだ。
「それではどうされます。出奔して堺に閉じこもっていますか」
「そんなことできるはずねえだろ。何かいい案を考えろや」
おれは深い溜め息をつきながら寝転がり、おれの梅干し脳みそではどうにもならんから、半ば知らんぷり。
「旦那様、とりあえず、団子屋を始めましょうよ。ほら、彩を連れてきたのもそのためなんスよね」
お気楽シロジロをおれはギロリ。
「お前は馬鹿か。団子屋なんて岐阜だから繁盛したようなもんなんだぞ。みたらし団子なんて京や堺では普通に売っているんだからな。本当にお前は馬鹿の一つ覚えだな。てか、お前はよ、せっかく堺に来たんだから、どこかで丁稚奉公でもして修業してこいや」
「ううっ。だって、団子屋をやらせてくれるって言ったじゃないッスか」
「言ったことは言ったけど、今はそれどころじゃねえことぐらいわかんだろうが！　このカス野郎っ！」
しゅんと小さくなるシロジロ。馬鹿馬鹿しい。こんな能天気野郎に怒鳴り散らす労力さえ勿体ないわ。
押し黙る空気の中、苛々と足を揺らすおれ。すると、唐突にあーやが口を開いた。
「木下様にご相談してみたらいかがでしょう」
なんだ？　申し訳なさそうにうつむき加減のあーやにおれは思わ

ず体を起こす。どうしちゃったの、急に？　しかも、出てきた名前がサル。

「あいりさんに聞いたことがあるんですけど、旦那様は美濃攻めのときに木下様とご一緒に明智庄の人々を助けたり、一夜城を築いたりしたんですよね。だったら、いつも知恵を分け合っていた木下様にご相談するのもいいんじゃないかと」

むう。あいりんやあーやは何か勘違いしているが、おれはサルと知恵を分け合ってなんかいない。サルの口車に乗せられていただけで、挙げ句には行方不明にまでなったんだ。

「彩の言う通りかもしれませんね」

と、さゆりんが言う。何を言ってやがんだ。

「まあ、木下殿はともかく、竹中半兵衛に相談してみるのはいいかもしれません」

さゆりんはふてぶてしい顔。半兵衛に頼るのを悔しがる感じ。ほほう。それでも、半兵衛に知恵を借りようと言うのは、さゆりんらしからぬ妥協だな。それとも、鎌刃城の寝返り工作を二人でやったおかげで仲直りしたのかな＾＾

萌えほっこり→きっちり稼げや！

半兵衛に摂津攻略の知恵を借りたい旨の手紙を出し、その間、会長に二千丁の火縄銃の受注を持ってきた男として会長の知り合いの会合衆の茶会に付き合わされたり、タナカにヘタレ村重は実際のところどうなのか訊ねに行ったりした。

摂津池田の出入り商人やタナカの話などを踏まえると、摂津池田というところは、そもそも池田筑後守勝正が先代から跡を継いだときから派閥争いがあったらしい。というのも筑後守は池田一族ではあるけれど先代の子供ではなく、でも、文武に秀でていたので、先代の遺言により跡目を継いだ（実際は腹黒い権力闘争があったっぽいけれど）。それが実子の池田九右衛門知正や反筑後守の家臣団にはおもしろくなくて、火種がくすぶっていた。それが、この前の金ヶ崎の退却戦で筑後守が勝手に決死のしんがり役に名乗り出たことで、無派閥でどっちつかずだったヘタレ村重やゼニゲバ瀬兵衛の不信感が募り、反筑後守の勢力が大きくなって、筑後守を追い出したということらしい。

「しかし、この話には裏がありまして」

と、タナカが身を屈めて声を小さくする。

「信濃守殿と仲の良い簗田殿だから申し上げますが、先日、信濃守様の茶会に呼ばれて出席したところ、たいそう立派な茶器がございました。しかし、その茶器は、三好三人衆の御一人、三好下野守政康殿が所有されていた茶器なのです。信濃守殿は私がそのようなことを知らないと思っていたのでしょうが」

なるほどね。あの馬鹿は茶器に目がくらんで三好三人衆の言いなりになったってことね。氏ね。本当に死ね。

「ただ、簗田殿。摂津池田は織田様に旗色をはっきりと示してはいません。足利幕臣であるかどうかもはっきりとさせておりませぬ。信濃守殿もその辺りのことは何も申さなかったゆえ、織田様に報告

するにも、しようがありませんでしょう」
　まあな。摂津の輩ってのは掌をすぐ返すような連中だから、おれの前では信長に付くって言っても、いざとなったら裏切る可能性大だからな。
「それと、信濃守殿から簗田殿に伝言が」
「なんスか」
「お時間があれば是非摂津池田にと。茶の席を儲けますゆえ」
　馬鹿にしてんのか、あの野郎。謀反を起こした経緯がだだ漏れなんだよ。だいたい、あの野郎、おれに一言ぐらい相談しろよな。そうしたら信長にこれこれこうなんですけど、どうしましょうって先に手を打てたのによ。ふざけやがって。
　まあ、無派閥だったヘタレ村重に茶器の賄賂があったってことは、ゼニゲバ瀬兵衛ともそれなりの金銭のやり取りがあっただろうからな。どちらにせよ、ヘタレを止められても、金銭欲に駆られている瀬兵衛は止められなかっただろう。
　それと、シロジロが商いをさせろとうるさいので、タナカや会長、会合衆などに商売をさせてほしいという渡りをつけておいたが、何をやるのかは未定。ゼニゲバ商人どもが集まるこの堺で商売をやるだなんて、地方でちやほやされているラーメン屋が東京の新宿とか渋谷にでしゃばって店を出すのと同じだ。そんなことがそううまく行くはずない。
　クソが。せっかく姉川のいくさが終わり、太郎も大活躍したことだから、これからの戦争はすべて太郎に任せて、おれは隠居（ニート）同然の暮らしを岐阜でのうのうとしてみたいなあなんて思っていたのに、このざまだ。いつ爆発するかもわからない火薬庫と化している摂津にはどう対処したらいいのかまったくわからないし、シロジロはうるせえし、あーやとデュフフできねえし。
　あーっ、もうっ。なんだって、おれみたいなうだつの上がらない人間がこんな難局を処理しなくちゃいけねえんだ！
「どうにかなっちまったらどうにかなっちまったでいいじゃんか」

屋敷に帰る途中、従者代わりのねじり鉢巻きが言ってきた。ちなみに堺の町中でクリツナに跨っていると雑兵にとやかく言われそうだから、徒歩。クリツナは屋敷の馬屋でごろごろと寝ている毎日。

「今までだって旦那はそうしてきたんだしよ」

このお気楽馬オタクが。いいよな、テメーは馬の世話だけしてりゃいいんだから。

でも、言われてみればそうかな。おれって行きあたりばったりでやってきたような感じがする。今回もどうにかなんだろ。どちらにしろ、織田家は本能寺の変まで生き残るんだから。放っておけばどうにかなるさ。シラネ。

で、屋敷に帰ると、なぜか、あーやとさゆりんとシロジロが呑気にお茶を啜って、みたらし団子を食べていた。ぐぬぬ。主人が頭を抱えながら奔走しているっていうのに、なんだ、この気の抜けた雰囲気は。

「あ、旦那様もどうぞ。おいしいですよ」

あーやがにっこりと笑ってきたので、その可愛さにでれでれしながらおれは着席。本当は怒鳴り散らしたいところなんだけど、あーやがそう言うならなあ。

それにしても、岐阜の屋敷とは違って、堺は伸び伸びできるわ。難問は抱えているけれど、鬱陶しい織田家中の人間は誰もいないし、厳しいあずにゃんの視線にびくつくこともない。それに比べて、堺は自由だし、天使がいるし、最高＾＾

む。

湯呑みを口につけたおれは、味のあるお湯に首を傾げた。

「なんだ、これ。お茶じゃんか」

しかも、抹茶じゃなく、普通のお茶。煎茶。

「ああ、それッスか。吉田殿に言われて作ってみたんス。大変でしたよ、茶葉を湯がいたり揉んだりで」

ちらりとさゆりんに目を向けると、さゆりんは一言、

「もう一度、口にしてみたかったんです。とと屋の番頭に頼んで作

り方を教えてもらいました」
　何をやってんだ、この女狐。何がもう一度口にしてみたかっただ、柄でもない。そんなことやっている暇があんなら、三好三人衆の一人や二人を暗殺してこいよ。元くのいちなんだからよ。
「旦那様、茶とはいいものですね。なんだか、ほっこりと落ち着きます。私も屑茶なら飲んだことがございますけど、まったく違いますね」
　湯呑みを両手で握りながら笑ったあーや。うんうん。おれもあーやのほっこりした顔を見ると萌えほっこりするよ。
「でもね、あーや、これは茶ではなくて煎茶だからね。おれがいつも奥方にしごかれている茶の湯のあれじゃないんだ。あれは作法とかいちいちうるさいから、キミたちはこのぐらいにしておきなさい。お金もかかるし、まずいし」
「へえ。でも、これを岐阜の団子屋で出していたら皆さん喜んでいたでしょうね」
「彩、それは言っちゃいけないよ。茶を作るのは本当に大変なんだから」
　キュピーン！
　シロジロがなんだか御託を並べているけど、簗田ホールディングスＣＥＯのおれは思いついた。
「おい、シロジロ、堺の商人連中には許可を貰ってきたから団子屋をやってみろ。ただし、このお茶を出す団子屋だからな」
「えっ？　で、でも、これを作るにはさっき言ったように手間暇かけて、それこそ朝から晩まで湯がいたり揉んだり――」
「手間暇かけろよ！　どうせ、テメーは暇だろ！　朝から晩まで働けや！」
　すると、隣のさゆりんもぽんと手を打った。
「ああっ。それは名案ですね。屑茶を出す店ならたまにありますが、このような茶を出す店は見たためしがありません」
「そんな、吉田殿まで。だってこんなもの、彩と二人でやれるわけ

が」

「誰があーやと二人でやれって言ったんだよ！　あーやは女中だぞ！　テメー一人でやるか、どっかの馬の骨でも雇ってこいや！　お前、約束通りちゃんと団子屋をやらせてやるんだから、きっちり稼げよな！　何がなんでも稼げよな！　わかったか！」

　ううっ、と、呻くだけで、うなだれるシロジロ。フン。自分であれだけ騒いでいたんだから、最後まできっちりとやれや。

とは言うものの、投資をするからにはきっちりと利鞘を上げることこそが簗田ホールディングスCEOたる使命だ。シロジロ一人にやらせ、給仕を雇ったところで、あいつのことだから本当に馬の骨と皮みたいなババアを雇いかねない。

岐阜の団子屋が成功していたのはみたらし団子の物珍しさもあっただろうけど、看板娘のあーやの貢献によるところが大きい。天使のあーやを店先に立たせればこの堺でも繁盛すること間違いなし。煎茶がどうのこうのなんていうのは二の次だ。あーやさえ立たせられれば、繁盛するんだ。

でも、いくら堺の商人どもの許可を貰ったからって、チンピラとかに絡まれたらなと思うと、あーやを店先に立たせるのは不安なのだ。だからこそ、岐阜ではタコ入道が用心棒としていたんだろうけど、あいにく、タコ入道は沓掛に行っちゃったし、岐阜に戻って来ていても、与力のあいつに用心棒をやらせるために堺に呼びつけるっていうのは、太郎が絶対に許してくれない。

可愛いあーやがチンピラに絡まれているのを想像するだけでも、腹が立ってくる。妄想の中のチンピラにあれやこれや――。

何かないかな、いい方法……。

「半兵衛から書状や」

腕を組んで考え込んでいたおれのところにさゆりんがやって来て、手紙を突き出してきた。受け取ってみたが、一人では読めないし、それどころじゃない。

ちょっと待てよ。さゆりん？

「なんて書いてあるんや」

せっかちなさゆりんに手紙を突き返す。代わりに読めということ。さゆりんは手紙を開き、ぺらぺらと喋っていく。おれは違うことを考えていたので、半兵衛の手紙が耳に入っていなく、さゆりんが黙

ったので訊ねた。
「要はどういうことなんだ」
「どういうことなんだって、聞いてなかったんか？　播州の小寺官兵衛考高を当たってみろって言ったやろうが」
なぬ？　小寺官兵衛？　誰？　黒田官兵衛じゃなくて？　てか、播州ってどこ？
「ちょっと、もう一回読んでもらえませんかね、さゆりさん」
さゆりんは深々と溜め息をつくと、手紙を再度読んだ。
半兵衛らしく実に長ったらしくて遠回しな文だったけれど、端的にまとめると、半兵衛は今、浅井の調略でそれどころじゃなく、摂津のことなんかに構っていられない。忙しい。無理。それに、摂津のことはよく知らない。誰がどう暗躍しているのかも不明だから、下手に手を出したくない。しかし、何もしないわけにもいかないから、播州姫路城城主に小寺官兵衛という豪放磊落の切れ者がいるという話を聞いたことがあるので、彼に相談してみたらどうですか。この小寺官兵衛は播磨国の西に勢力を持つ小寺家に仕えていて、この小寺家は播磨国の東の赤松家と小競り合いを繰り返しております。この赤松家と摂津池田は手を結んでいるようなので、小寺官兵衛としても、摂津池田の動向は気になるところ。なので、協力して知恵を与えてくれるでしょう。拙者からも文を書いてみますので、簗田殿も接触を図ってくだされ。
「遠交近攻ということでしょう」
？
とにかく、切れ者の小寺君が知恵を貸してくれるかもしれないってことね。じゃあ、早速手紙を書いてみようか。
「なあ、せっかくあんたは堺衆と誼を通じているんやから、田中与四郎か今井彦右衛門に間に立ってもらったほうが、小寺官兵衛もあんたに協力を惜しまんやろ」
それもそうだな。じゃあ、明日、タナカのところに相談に行くか。
会長のほうが名は通っているだろうけれど、なにぶんゼニゲバモン

スターだからな。金をむしり取られる可能性も無きにしも非ずだから、無難なタナカに話を持ちかけよう。

そんなことより、

「そんなことよりだ、さゆりん」

「なんや」

「さゆりんさ、お前も団子屋の給仕をやれよ」

「はあっ？」

「ほら、あーや一人に給仕をやらせると、何かあったとき困るだろ。それにお前、いい案だってはしゃいでいたよな。だったら協力しろ。もちろん、その格好じゃなく、町娘の格好でな」

「なんでやっ！　嫌やっ！　なんで、私がそんなんをしなくちゃならんのや！　それに四郎次郎に知られてしまうやないか！　何を言っているんや！」

「シロジロは団子屋のためだったら黙っている。それにあいつの前でうっかり口を滑らせちゃったこともあるから正体がわかっちゃうのも時間の問題だ。だったら先にあいつに団子屋のためだとか言って口封じさせておいたほうがいい」

「嫌やっ！　何と言われようと嫌やっ！」

「だって、あーやに何かあったらどうするんだよお。お前、責任取れるのかあ。それにさあ、タコ入道を用心棒にしようとしたって、太郎が反対するに決まっているだろお。だったら、吉田早之介はどっかに調略に行っているってことにして、キミが町娘になればいいことじゃんかあ」

それになあ、と、言葉を繋ぎながら、おれは腰を上げ、うろうろと部屋の中を歩き回る。

「本当は可愛い女の子なのにさ、おれのせいで汚い男の真似ごとをさせてさあ、たまには大っぴらに女の子のさゆりんに戻してあげたいなあって、おれも胸苦しいんだよな、いつもいつも。もう一回ぐらいさ、見てみたいよな、あの可愛いさゆりんを」

そうして、さゆりんをちらり。不服そうな顔でむすっとしている

けれど、別段、口答えはしてこない。
「元くのいちのさゆりんなら、看板娘になるのも簡単だろうなあ。あーやも確かに可愛いけれど、初めてあったときのさゆりんに比べたら、まだまだだからなあ」
「何を言っているんや。世辞ばっかりべらべらと」
「おいおい。言っておくけどな、何もただ単純に給仕をやっていろってことじゃないんだぞ。団子屋が繁盛すれば、この堺だ。ありとあらゆる情報が入ってきて、その辺の町娘ぐらいには口を滑らせるもんだろ」
「無理や。私はもう忍びやない」
「あーあ、じゃあ、あーやはごろつきに絡まれて嫌な思いをするのか。嫌な思いどころか、大切なものまで奪われちゃう可能性だってあるからな。あーあ、できることならおれが用心棒になってやりたいけど、おれは一応は織田の武将だし、かといって強いわけでもないから。あーあ。せっかく甲賀流から救ってやったのに、結局はそういうことになるのか。あーあ」
「うっさいわ！　やればいいんやろ、やれば！」
「いや、別にやりたくないんだったらやらなくてもいいんだよ。屋敷でゆっくりお茶を啜っていたっていいんだよ」
暇を持て余していることを皮肉ると、さゆりんはおれを一度睨んだあと、戸をばちんと閉めて出て行った。
フヒヒ。これであーやとさゆりんの二大看板が揃ったところで、団子屋はスケベな連中が集まってくる。なんだったらキャバクラみたいにしちゃってもいいんだけどな。まあ、あーやにそこまでやらせるのは忍びないし、さゆりんはそれこそ絶対にやらないからな。
ていうか、銭儲けするんだったら、そういう細々としたサービス業よりも、どかんと大儲けできる製造業とか金融業のほうがいいよな。元の時代の財界で偉ぶっていた連中っていうのは製造業とか金融業とかだったしな。
実際、今の時代も火縄銃製造の利権を牛耳っている今井会長がぶ

いぶいといわせているけどさ。
　まあ、あんまり、堺では目立たないようにしよう。既得権益を守りたくて信長にまで逆らったような連中だからな。団子屋ぐらいなら勘弁してくれるかもしれないけれど、あんまりでしゃばるとせっかく堺の連中と通じ合えるようになったのが、締め出されて水の泡だからな。
　とにかく、シロジロを馬車馬のごとくこき使うとして、もう寝よ。

もうちょっと紙芝居的に話せよ。

小寺官兵衛という黒田官兵衛のバッタものと仲良くなるために、翌日、とと屋のタナカのところへ相談に行った。

番頭にタナカに会いに来たことを伝えると、タナカは親しい商人に茶器の鑑定を頼まれて外出しているらしい。あいつって、本業をまったくおろそかにしているよな。とんだ道楽者だわ。

「あ、簗田さん、どうも。最近、よく来ますね」

ふんどし一丁の荷役の若者が軽々しく声をかけてきたけど、爽やかなので許してやる。

「簗田さん、金ヶ崎ではすごかったそうじゃないですか。今井さんから借りた火縄銃で二万五千の朝倉勢を足止めしたって、堺では持ち切りでしたよ」

二万五千じゃなくて一万人未満だけどね。だいぶ、話が盛られちゃっているけれど、そっちのほうがおれの武勇伝に箔がつくので許してやる。

「せっかくですから、旦那様が帰って来るまでいくさの話でも聞かせてくださいよ」

ほほう。そんなに聞きたいんなら思う存分話してやろうかのう。

「おい、簗田さんが金ヶ崎と姉川の話をしてくれるってよ！」

若者が呼び掛けると、倉庫にいた荷役の輩がぞろぞろと集まりだして、十五人ぐらいを相手に沓掛勢の武勇伝語り。沼地で甲冑を失ったことはもちろん喋らず、サルが屋根の上で騒いでいたことや半兵衛の的確な指令や、もちろん三段撃ちのこと。十兵衛やファイヤー兜の活躍だったり、キモブタ家康が泣いていたりしていたこと。

姉川の戦いでは我が息子がしんがりを務め、浅井の追撃を振り切ったことだったり、おれが放った銃弾が豪傑磯野カツオの兜を割ったことだったり、斜行突撃でクリツナとクロが大暴れしたこと。

「とにかく、激戦だったんだ」

ほーう、と、憧れる人を見る目で頷くマッチョな連中。なんなら、お前ら全員沓掛勢にさせてやってもいいんだぞ。どうせ、主人のタナカは道楽者なんだから、荷役なんかやめちまえよ。

って、なんで、こいつら仕事してねえんだよ。番頭のおっさんですら聞き入っているし。

「何事かと思えば簗田殿でしたか」

タナカがにこにことしながら歩み寄って来て、番頭があわててタナカの荷物を預かる。でも、経営者のタナカが戻って来たというのに、荷役どもは「あーあ、俺もいくさ場に出てえなあ」などと背伸びをしながら仕事にも戻らずにだらだら。

「簗田殿、何かご用がおありなのでしょう。こんなところではなんですから、一服点きますゆえ、どうぞお上がりください」

道楽経営者のお言葉に甘えて、屋敷の中へ。

茶の湯馬鹿のタナカに仕方なく付き合ってやり、茶碗の中の抹茶を飲み干すと、荷役どもの体たらくぶりを指摘してみる。

「ああ、これはこれはお恥ずかしいところを。しかし、今は暇なのです。瀬戸内からの荷物は滞りなく上がってくるのですが、畿内の物がなかなか入って来ませんで」

というのも、つい最近までは琵琶湖沿岸を牛耳っていたのは信長と信長に味方する浅井長政だったけれども、浅井長政が寝返ったことや、六角ゾンビ親子が挙兵したりと、情勢が緊迫しているし、摂津でもどっちに転ぶかわからない状態だから、琵琶湖から淀川を伝って摂津湾に出る水運行路が停滞しているらしい。

「諸将が商人の船に手を出すなど蛮行このうえありませんが、しかし、今の情勢ともなると、物品に手を出されたら適わぬということで、馬借による陸路で運搬しているようですが、これもまた難儀なものらしく」

ふーん。ま、どうでもいいけど。

「今のこの時勢であると、今井殿もおちおち寝ていられないでしょうな。なにしろ、今井殿は摂津の塩の代官権益と淀川の通行権を織

田様の計らいで得られましたが、淀川の水路が滞っているとなると、岐阜や尾張に物を運べませぬ。陸路で運べないこともありませんが、それですと日数もかかりますし、運賃も高い」

だから、あのゼニゲバモンスターはおれなんかにどうにかしてほしいなんて泣きついてきたのか。だったら、今度、どうにかしてやる代わりに金をせびってやろうかな。

「ところで、本日は何か御用があったのでは」

「ああ、そうそう。タナカさんの知り合いに頼んでくれてもいいんだけどさ、播州の小寺官兵衛って奴と仲良くなりたいんだよね」

「小寺官兵衛？」

「いや、あっしも摂津をどうにかしたいと思ってですね、北近江にいる竹中半兵衛に助けを求めたんですよ。竹中半兵衛は知っていますよね？」

「ええ、もちろん。諸葛孔明にも張子房にも匹敵するという智謀の御仁でしょう」

誰だよ、チョーシボーって。タナカってにこにこしながらも、いちいち頭いい自慢してくるからいけすかねえよな。

「まあ、その竹中半兵衛がですね、小寺官兵衛っていう切れ者の噂を聞いたことがあるから、そいつと仲良くなってみればって匙を投げてきたんです」

「はあ。小寺官兵衛ですか。ふむ。播州御着城の小寺藤兵衛政職殿の御縁戚でしょうかな。確かに、播州では去年、赤松下野殿が小寺殿の領する姫路城を攻め、織田様が東播磨の別所殿と池田筑後守殿に赤松殿の加勢を命じたそうですが、筑後守殿は直後に越前攻めに向かうよう通達があったため、姫路攻めから引き返し、その後、三千人はいたと言われる赤松殿は小寺勢三百人の奇策に打ち返されたという話を聞いたことがあります。もしかしたら、その奇策の将が竹中殿の言う小寺官兵衛かもしれませぬな」

赤松だの御着城だの東播磨だの別所だのいっぺんに言われたってわけがわかんねえよ。もうちょっと紙芝居的に話せよ。何がなんだ

かさっぱりだよ。腹立つな。

「しかし、播磨も播磨で摂津同様泥沼化しておりますしなあ。果たして小寺官兵衛なる御仁が摂津まで目を向けるか――」

「紹介してくれんスか、してくんねえんスか、どっちなんスか！」

「あ、あ、そ、それはもちろん、簗田殿が御所望なら、出来る限りのことは」

茶人気取りのカスが。御託を並べる前に体を動かせや。まったくよ。

でも、あんまり威張っていると反乱を起こされそうだから、今度、タナカから茶器を買ってやるか。ま、団子屋が繁盛したらの話だけど。

で、用も済んだことだし、帰ろうと思って腰を上げようとしたら、

「旦那様っ！」

と、さっきの番頭が戸の向こうから大声を上げてきた。タナカは眉をしかめ、おれはなんだか出るに出られない状態。

「何を騒いでおるのだ」

「織田様が軍勢を引き連れて岐阜を出陣されたという一報が入りました！　進軍先は不明ですが、入洛されるのは間違いないということです！」

げっ。ど、どこに行くつもりなんだろ。姉川のいくさが終わって半月も経ってないっていうのにまたドンパチする気かよ。

「なんともまあ」

タナカは拍子抜けするような間延びした声を発すると、茶器を木箱にしまいこむ。

「織田様は実にお忙しい御仁ですな。しかし、入洛するということは茶頭の私もお迎えしなければなりませぬ。簗田殿も御一緒されますか？」

「あ、いや、あっしは摂津のことを任されているので、信長様から何か言われしだい動きます」

と、適当なことを抜かし、ついでにお土産のお菓子を頂くと、と

と屋をさっさと脱出。信長の野郎、軍勢を引き連れて京に入ってくるだなんて、もしかして、摂津池田を攻め滅ぼす気なのかな。だったら、好都合だな。掌返しの危険な奴等は有無も言わさず滅ぼしちゃえ＾＾

おそらく、太郎も出陣しているだろうから、おれは不参加間違いなし。危ない思いはなるたけしたくないしね。

とりあえず、小寺君のことも頼んだし、今は戦争のことより団子屋だ。あいつらがちゃんとやっているかチェックしないと。

そういうことで、事前に会長から貸してあげると言われていた町通りの並びにある一軒の空き家へ。昨日の今日だから客は一人もいないけれど、中に足を踏み入れてみると、ふむ、茶葉を燻しているんだか湯がいているだか知らないけれど、香ばしい匂いが汚いボロ家に溢れている。

「あっ、旦那様！」

あーやが柱を布巾で磨いていて、ねじり鉢巻きも掃除の手伝いをしている。ふむふむ。一致団結していて良いことだ。

「あーや、あんまり働きすぎないでいいんだからね。とりあえず、お菓子を買ってきてあげたから休憩しよう」

ねじり鉢巻きに埃の被った縁台を磨かせ、そこに腰を落ち着けると、店の奥からあーやに呼ばれたシロジロがふてくされた顔で出てきた。

「旦那様ぁ、聞いてないッスよ、こんなの」

「何がだよ」

すると、シロジロの後ろから、目を奪われるほどの美少女が！

って、さゆりんか。

「こいつッスよ。なんなんスか、これ。信じられないッスよ」

「信じられなくても信じられても、吉田早之介は私や。見抜けんかったあんたが悪い」

泣き出しそうな顔で首を左右に振るシロジロ。むう。こいつ、おれが口を滑らせちゃったことがあるからちょっとは気付いていると

思ったんだけど、よっぽどの馬鹿だったんだな。

堺の中心で怒りを叫ぶ

あの勇ましかった吉田早之介の正体が、シロジロとおれに吹き矢を浴びせてきたさゆりんだと初めて知って、疑心暗鬼に陥っているシロジロにおれは何度も口酸っぱく言った。

「太郎とあずにゃん、それに岐阜の連中や織田家中の人間には絶対にこのことは言うなよな。もしも、早之介の正体がさゆりんって知れたらお前を真っ先に疑って、首を叩き斬るからな！」

「はあ」

「お前だって吉田早之介の活躍は知っているだろ。さゆりんは昔のさゆりんじゃないんだからな。早之介だろうがさゆりんだろうが、どちらにしろ簗田家の人間なんだからな。裏切ったらタダじゃ済まさないからな！　いいな！」

「はい。わかりました」

「ねじり鉢巻き、お前もだからな」

「俺は別にどっちだって構わねえよ」

「お前だってたまに口が軽いときがあるから気をつけろよな！」

「はいはい。わかったよ」

まあ、実際そうだからな。早之介の正体が女であれ、元くのいちであれ、元殺し屋であれ、早之介として金ヶ崎に姉川と貢献したのはれっきとした事実だからな。今さら、誰にも文句は言わせん。

女に戻ったさゆりんは、男装から解放されたおかげかにやにやしていて、おれが必死にシロジロに言い聞かせているっていうのに他人事。

それにしても、久々に女の子のさゆりんを見たけれど、やっぱ、可愛いよなあ＾＾　気が強そうな笑みを浮かべていて、小憎らしい感じ。でも、おれはヤッちゃったけどね。ジュルリ。

おっと、危ない。あんまりよこしまなことを考えているとあずにゃんに告げ口されるからな。さゆりんのくのいちフェロモンに惑わ

されないうちに退散。女さゆりんに関わるとろくなことがないからな。

ていうことで、おれは団子屋の仕事にはいっさい関わらず、仮屋敷でごろごろ。

商人どもの話によると、信長の軍勢は三好三人衆を叩き潰すために出陣したらしい。信長の上洛以来、三好三人衆は四国の阿波っていう三好一族の本拠地まで逃げていたらしいけど、近頃、息を吹き返したらしく、摂津まででしゃばってきたんだとさ。

もうさ、いい加減こざかしいからとことんまで痛めつけちゃえばいいんだよ。雑魚のくせにちょこちょこおれの邪魔をしやがってさ。目ざわりったらありゃしない。

それに、信長が本腰を入れて摂津に進軍してきたんなら、池田の連中もビビって信長側に付くだろうから、おれの役目はおしまい。帰ってこいって言われるまで、シロジロをこき使いながら堺でニートしているわ。

さゆりんは女に戻ってもごちゃごちゃうるさかったけど。

信長が三好攻めをするのに、こんなところで寝転がっていていいのかって。別にいいじゃんか、何も言われてないんだから。何かあったら早馬でも来るだろ。黙って給仕やってろ。

とはいえ、家でごろごろしているだけも退屈すぎるので、小者の商人に茶会に呼ばれない限りは、おれを崇拝しているとと屋に遊びに行く。タナカは茶人気取りだから京に出かけているし。

とと屋では荷役たちの仕事はあるにはあるけど、信長が上洛した直後の忙しさではないみたい。しかも、三好三人衆がでしゃばった辺りは淀川下流の近くだから、琵琶湖から堺の水運は完全にストップ。

「信長様が勝つから、そのうち忙しくなるだろ」

と、荷役たちに言うおれ。というか、番頭はともかく、荷役たちは忙しくなろうがなかろうがどうでもいいらしく、近頃、こいつらが忙しがっているのは、堺に新しく出来た団子屋の娘二人のこと。

「いやあ、簗田さんも一度行ってみたらわかりますよ。彩っていう娘なんですけどね、ハア～、溜め息がでますよ。もう、目もろくに合わせられなくて」

「いや、さゆりちゃんのほうがいいだろ。気立てが良さそうでさ、俺、あんなおなごを嫁にしたら仕事頑張っちゃうんだろうな」

フヒヒ。田舎者にしか通用しなそうな不安はあったが、都会の輩でもあーやとさゆりんにはメロメロのようだのう＾＾

庶民にはなかなか手が出せなかった煎茶が手軽に飲めるっていうことでスケベ野郎以外にも評判らしいしな。ぐへへ。簗田ホールディングスは常勝企業だわ。

それにそろそろ奇進札の発売が始まる頃だろ。シロジロとさゆりんは堺で忙しいから、おれが一筆書いて願福寺のクソジジイに釘を刺しておくか。

む。それとあずにゃんにも手紙を書かなければ。岐阜を出立するとき、ただでさえ疑われていたからな。

梓殿

拝啓

堺では皆仲良くやっております。

はじめて、ここ堺で秋の匂いを感じておりますが、毎日が騒がしいこの町でも

さびしい気持ちが胸に湧いてくるような

いささか、岐阜が恋しいような日々です。

こちらでは摂津の情勢に神経をすり減らしておりますが

うんが良ければ今年中には岐阜に帰れると思います。

敬具

追伸

堺の商人たちの茶会に招かれると、あっしのいずまいに皆様感心されます。これもひとえに梓殿のおかげかと。

うむ。おだてることを忘れなければ、たとえ遠距離でも夫婦円満、ハッピーハッピー。あずにゃんのおかげで商人たちから茶会に招かれるのは嘘じゃないしな。

で、シロジロの名を呼び、飛脚に渡させようとするが、そっか、あいつらは団子屋に行っているから、屋敷には誰もいないんだったな。ねじり鉢巻きに持って行かせてもいいけど、暇だから自分で出しに行ってやるか。

馬借屋に行って手紙と賃金を渡すと、退屈しのぎに町中を散歩。ついでに団子屋の様子でも見に行こうと思い足を進めていると、と屋の番頭と出くわした。

「簗田殿！　ちょうど良かった。今から簗田殿のお宅に伺おうとしていたところなんです」

番頭ごときがおれの家なんかに何の用だよ。ただ、番頭はぜえぜえと息切らしながらどこか焦っている様子で、おれの着物の裾を掴んで通りの端まで引き寄せてくると、ひそひそととんでもないことを言い出した。

「旦那様から届いた密書によると、池田勢は三好三人衆の援軍として野田・福島に向かったそうですぞ。いち早く簗田殿に知らせよとのことだったので」

……。

「ふざけんなっ、あのヘタレ野郎っ！」
　ううっ。でも、堺の中心で怒りを叫んだところで、何もならねえ。一体、どうすればいいんだ。このままじゃ信長に叩き斬られちまう。
　いや、逆に都合がいいんだ。ポジティヴシンキングだ。織田ブルドーザーが三好三人衆どころか、池田勢から摂津の鬱陶しい輩もろとも摂津湾に押し落としちゃえばいいんだ。
　とにかくとと屋の番頭と別れて我が家に戻る。団子屋にちょっかいを出しに行くような気分じゃないので。
　そういえば、ヘタレには甲冑を買ってもらった借金もあったな。あいつが死んじゃえばチャラになるしな。
　とはいえ、馬鹿な連中だな。せっかく、おれが命拾いさせてやったっていうのに、三好三人衆の浅はかな策略に引っ掛かって織田ブルドーザーに立ち向かうだなんてよ。
　まあ、おれは堺から高見の見物。この前、材木商の社長にもらったお菓子でも食べて、お気楽極楽。
　ところが、野田・福島でいくさが始まったという報せを受けてから数日後、火薬庫はついに爆発しちゃった。

覇権の価値

とんでもないことになった。

京から戻って来たタナカに呼ばれてとと屋に行くと、タナカはあるところから入手したというみみず文字の書状の写しを見せてきた。なんて書いてあるのかわからなかったけれど、タナカが訳してくれところによると、

信長が上洛してきたんだけど、それ以来すげえ迷惑だ！　難題難題難題だらけ！　挙げ句にはこの石山から出ていけってよ！　ふざけんな！　クソッ！　石山を出ていったら、おれたちは一体なんなんだ！　てことで、全国の門徒衆は死ぬつもりで仏敵信長を倒せ！　滅ぼせ！　潰せ潰せ潰せ！　これに逆らったら破門だからなっ！

みたいな感じの檄文を、一向衆の大ボス、石山本願寺の顕如が全国の一向衆門徒にばら撒いたらしい。

そうして、野田城・福島城の近くに拠点を構えていた石山本願寺は三好三人衆側に付いて戦争に参加。

足利義昭までをも引っ張り出してきて三好三人衆殲滅に燃えていた信長率いる織田勢は、鉄砲傭兵集団として天下に名を馳せている紀伊国の雑賀衆と根来衆、合わせて二万の大援軍を味方につけて三好三人衆及び裏切り者の池田勢をフルボッコし、ビビった三好側が和平交渉を持ち込んできたけど、信長は無視して更に攻撃。このいくさはブルドーザーの圧倒的破壊力で終わりだったはずが、戦況を見守っていただけの石山本願寺の参戦により、事態は急変、三好三人衆も調子に乗って、織田勢と五分五分の戦いまで持ち込む。

そうしたら、浅井と朝倉が挙兵して京に向かっているというとんでもない報せが。

「四方八方から難局がふりかかってきましたな。一向衆が全国で蜂

起するとなると、手がつけられますまい。まして、摂津の三好三人衆、北近江では浅井殿、越前では朝倉殿、それに比叡山延暦寺も反織田様に呼応しているようで」

信長包囲網完成か……。いや、ゆくゆくはこれに武田信玄も加わってくるんだ。オワタだろ。

でも、歴史の流れからすると、信長はこの包囲網を打破するんだ。でも、どうやって？　織田の兵は湯水のごとく湧いて出てくるわけじゃない。今は摂津にこれだけの軍勢を向けてきているんだから、伊勢や京の前線はもとより、岐阜、清州も手薄な状態だろ。

しかも、カツオにぶち破られるほどの弱小軍団。

ああ、これが本当に歴史通りにいっているのかどうか不安になってきた。もしかしたら、おれは歴史を変えちまったのかもしれん。本当なら摂津池田は滅ぼすはずだったけれど、おれがうっかり発言したものだから、摂津はぐちゃぐちゃになっちゃったのかも。

逃げようかな……。

「落ち着きなされ、簗田殿。震えた手では茶など飲めますまい」

ううっ。こ、これが落ち着いてられっかよ。

「気を静めるのも、また茶の湯の調べ。簗田殿、その手にされている碗をご覧ください」

おれはタナカの言われた通り、掌の中で茶碗を回しながらまじまじと眺め入る。百円ショップに売ってそうなただの土色の茶碗。

「先日、その椀をご所望されるお方がおりまして、五十貫を出すから譲ってくれと申してきました」

こんなものに五十貫かよ。馬鹿じゃねえの。

「簗田殿であれば、いくらの値をつけますかな」

おれはじいっとタナカを見つめた。タナカはにこにこしている。この野郎、こんなときにおれに恥を欠かせようって言うんだな。高い値をつけても高すぎると言われ、低い値をつけても低すぎると笑われる。どうせ、そんなところだ。

「遠慮なさらずに、簗田殿の率直な目利きで」

「じゃあ、はっきりと言わせてもらいますけど、びた一文にもならないッスね」
タナカは目を大きくして驚いた。
「それはなぜ」
「あっしはこんなもの欲しくないからです。もしも、あっしが茶器を買うんだとしたら、奥方のために買うんで、もうちょっと女が喜びそうな茶器を買います。だから、こんなものは価値がないッス。それが率直なあっしの意見です」
ぽかんとしているタナカを前に、おれは茶碗の中身を一息に飲み干した。まずい。まずさが喉から胃に沁み渡る。
「結構なお手前でした」
と、おれは茶碗を膝元に置いて、主人役のタナカに返した。タナカは黙りこくったまま茶碗を手に取り、杓子ですくった水で茶碗の中をゆすぐ。
フン。無価値だって言ったものだから、タナカは腹に据えかねているに違いない。
「簗田殿、この茶碗はとと屋の番頭の自作です」
は？
「しかし、私がこうしてこの茶碗を使っているという理由だけで、とある人は五十貫もの値をつけてきました。素人の男が片手間で作ったものだというのに」
「じゃあ、タナカさんはその茶碗にいくらの値をつけるんですか」
「もちろん無価値ですよ。ただ単に、番頭が私のために作ってくれたので、こうしてお客様にも出しているのです」
しかし、と、タナカは続けた。
「この茶碗に五十貫を出すとおっしゃられた方が阿呆だとは思いませぬ。それがその御仁の値なのですから。簗田殿のように奥方様が好まれなさそうなので無価値というのと一緒です。どんなに高価なものでもどんなに安価なものでも、誰が決めているのでもない、人々が決めているものなのです」

ふむ。ただの茶人気取りかと思いきや、たまにはいいことを言うんだな。ただ、番頭の作った茶器を五十貫で売ったら詐欺だけどな。

いや、そいつが欲しいんだったら、詐欺にもならないのかな。番頭が作った茶器だけど、タナカが使っているから欲しい。そういうことだったら詐欺にはならないな。

「私が思うには、摂津の今の情勢、織田様が今置かれている状況もそれと同じことではないかと思うのです。天下の覇権を握ることにどれだけの価値があるのか、それは織田様が決めている覇権の価値もあれば、各地の諸将が決めている天下への覇権の価値もあります。その価値をはっきりと見定められている御仁こそ、最後に残るものだと私は思います」

おれは腕を組んでうーむと唸った。

「私は織田様がただ単純に己の私利私欲だけで覇を争っているとは思えませんが、簗田殿はいかが思われますか」

おれは何も答えないまま、とと屋をあとにした。

覇権の価値ね。もしも、三好三人衆や足利義昭、浅井に朝倉にいたるまで、あいつらが覇権を握ることに金を出すとしたら何十億って金を出すだろうな。

でも、信長はびた一文出さないだろ。だって、あいつの場合、覇権を握ることが最終目標じゃないんだから。この国をぶっ壊して変革させることがあいつの目的なんだから。

正直、摂津を引っ掻き回しているこざかしい連中とはレベルが違う。

そう考えると、堺でせせこましく銭を稼いでいるだけのおれもちょっと情けない男だな。元は童貞ニートだったおれだけど、今では仮にも織田の将なんだからな。

てか、何をやっているんだろ。野田・福島では激戦が繰り広げられていて、しかも、浅井と朝倉が京に向けて出陣してきた大ピンチだっていうのに、おれはここで何をやっているんだ。

金ヶ崎で死んだ沓掛勢のために戦うんだなんて、姉川では偉そう

なこと言っていたけれど、いくさが終わったら堺で半ニート生活。
おれは屋敷に戻ると、庭先でゴンロクソードを鞘から抜くと、刃をじいっと見つめ、その後、アケチソードを抜いて、これもまた刃をじいっと見つめた。
馬屋の中ではクリツナが藁の上でわしゃわしゃと寝返りを何回も打ったりしてじゃれている。
「おい、クリツナ」
おれが呼ぶと、クリツナはぴたりと止まって、腰を藁の上に下ろしたまま顔をこちらにじいっと向けてきた。
「ヘタレ村重のところに行くか」
クリツナは腰を上げると、おれに歩み寄ってき、前脚の片方で鍵板をがつがつと叩いてきた。のんびりしているわりに、クリツナにはどうやら堺の生活は退屈だったらしい。

ちょっとだけ親父みたいなもんなんだ！

摂津に行こうと思い立ったおれだったけれど、誰を連れて行こうか迷った。さゆりんは看板娘になっているし、ねじり鉢巻きはシロジロの手伝いをしているしで、せせこましい銭稼ぎだとは言っても、稼げるものは稼いでおかないとね。

一人で行くのはちょっと心細い。

それなので、とと屋の荷役二人を従者に連れて行くことにした。もちろん、タナカに許可を貰って。暇だからいいだろってことで。

爽やかマッチョな青年二人を伴い、いざ、摂津へ。荷役の二人は二十歳と十七歳の兄弟らしく、兄貴が太郎といい、弟が次郎というらしい。なので、おれの息子も太郎だし、奉公人には四郎次郎がいるので、名前を変えることにする。

とはいえ、なかなか思いつかないのでクリツナの馬上で悩み通す。

「なんでもいいですよ。名なんてあってねえようなもんですからね」

ふむ。兄貴がそう言ったので、適当に格太郎とつけた。弟は助次郎にした。なかなかさまになっているじゃんか＾＾

武将に名前を貰えるなんて名誉なことだと兄弟揃って喜んだ。いやあ、いいね、見てくれはちょいＤＱＮだけど、素直でいいね。

あと、一応は戦場に行くので、格さん助さんの具足ぐらいは用意してやらなければと考え、物売るってレベルじゃねーぞっていうぐらい人でごった返している団子屋を訪れ、馬車馬のシロジロから売り上げを奪い取っていく。

堺の武具屋で安物の甲冑を与え、一応、おれのものも探したが、サイズがなくて断念。クソが。

準備万端となったところで、いざ、摂津へ。

あ、そういえば、どこに行くか家の人間たちに伝えていなかったから、置き手紙ぐらい残しておこうかな。

「簗田さん、あの団子茶屋と関係があるんですか」

弟の助さんがあどけなさの残る瞳で訊ねてきて、おれは頷いた。
あんまり、おれが経営者だということは堺の商人たちに言ってくれないように頼んでいるけれど、こいつらは今日からおれの下僕だし。
「ああ、そうなんですか」
「簗田さん、こいつ彩ちゃんに惚れているんですよ」
と、爽やか兄貴の格さんが助さんの肩を抱きながら言い、ち、ちげえよ、と、少年っぽく顔を真っ赤にする助さん。
……。
摂津から帰ってきたら、こいつらはとっととタナカに押し返すか。下僕にもさせることのできない不逞な輩だからな。
ということで、今度こそ摂津へ。
敵方に回っている池田勢のヘタレ村重に会いに行くのは不可能に近いけれども、池田勢を救ったおれだから、なんとかなるかもしれん。ただ、その前に信長に顔を見せに行かないとな。怖いけど。
信長は天満の森というところに本陣を置いていたんだけれど、近くまで来たおれはやっぱり帰ろうかなと思った。すぐそこの川から太鼓や鐘の音がしているし、見かける雑兵は負傷者だらけ。
激戦を繰り広げていたところに、今頃のこのことやって来たおれ。どう考えても印象悪いだろ。
とりあえず、信長本陣に行くのはやめて、誰か知り合いの家臣を探すことに。と、思ったけれど、クリツナを見かけた誰かがおれが来ていることをゴンロクに伝えたらしく、柴田勢に捕まってゴンロクの陣に連れられて行く羽目に。
めっちゃ気まずい。あずにゃんにボコられてから、ゴンロクに会うのは初めてだし、堺に閉じこもっていくさは知らんぷりしていたっていう引け目もあるし。
クリツナから下馬し、格さん助さんを外に待たせて陣幕を捲ると、小さい椅子に座っているゴンロクがひょいと手を上げてきた。
「よくぞ来た。牛太郎」
にこにこしている。ほほーう。こいつ、あずにゃんのボコりが相

当こたえたんだな。右目はまだ腫れているし。くくっ。あずにゃんパワーでゴンロクもおれの下僕かw

まあ、一応は平伏するおれ。

「遅ればせながら、信長様の苦戦と聞き、微力ながらも堺から馳せ参じました」

「ふむふむ。殊勝なことだ。し、しかしのう、牛太郎、い、いや、左衛門尉、堺におったから知っているであろうが、浅井と朝倉が兵を出してきた。それにこのいくさは本願寺の参戦で埒が開かぬ状態だ。今晩の軍議で決断されるであろうが、おそらくおやかた様は京に引き返すであろう」

「それならば、あっしは堺に残り、調略を続けたいと思います。御存知のように、あっしは堺の商人や摂津の豪族たちとは誼を通じているため」

「うむ。それがよいだろう。それと、左衛門尉、いずれ知ることであろうが、伝えねばならぬことがある」

そう言いながらゴンロクは腕を組み、腫れた瞼を閉じて、しばらくの間、黙り込んだ。なんだよ。勿体ぶらないで早く言えよ。

「森三左衛門殿が浅井朝倉勢を相手に討死にされた」

え……??

「森殿は琵琶湖の西北、宇左山城に入っておった。浅井朝倉の上洛途上だ。そこで、森勢は大いに奮戦し浅井朝倉を食い止め、今もなお宇左山城は陥落していない。だが、森殿は戦場で散った」

おれは頭をぽりぽりと掻く。よく、わからない。ていうか、嘘でしょ。あんなに強いサンザがやられるわけないじゃん。だって、サンザだぜ。

「おやかた様はそのせいで激昂されておる。会わないほうがよい。わざわざ参陣したところ忍びないが、このいくさは終わりだ。堺に戻り、牛太郎は調略に勤しめ。おやかた様にはわしが伝えておく」

嘘だろ嘘だろ嘘だろ。

なんで、サンザが。何をやっているんだよ、サンザの手下どもは。

サイゾーは何をやっているんだよ。おかしいだろ、サンザが死んだのに、まだ城は落ちていないって。

「誰か、左衛門太郎を呼べ！　前線には出ていないはずだ！」

おれは事態を飲み込めないままゴンロクの前で膝をついて呆然としていた。

サンザは織田の重臣の中で唯一最初からおれに優しかったよ。ときには怒鳴られたりもしたけど、怒っている信長を止めてくれたり、太郎を馬廻衆に引き上げてくれたり。

大声を上げながら、清州のボロ家に押しかけてきたのが最初だったか。そういえば、知らない間に大声をやめていた。

「父上っ、どうしてここにっ！」

かちゃかちゃと甲冑を鳴らしてやって来た太郎の顔を確かめたとたん、涙が一気に溢れ出て来てしまった。

「太郎ォ……。サンザが、三左衛門殿が……」

おれは地面に突っ伏してむせび泣いた。サンザに受けてきた恩が痛いほど胸に込み上げて来て、悔しくて悔しくてたまらない。

「父上……、父上、せ、拙者だって我慢しているんですっ！」

おれは太郎に陣の外へと無理やり引きずり出されていき、そこで一発ぶん殴られ、泣きべその太郎に怒鳴られた。

「いくさの最中ですぞ！　男の涙は母御が亡くなったときかいくさに勝ったとき！　父上ともあろう人がいくさの最中に涙など見せないでくだされ！」

「サンザはおれにとってちょっとだけ親父みたいなもんなんだ！」

クソがっ！　浅井朝倉の連中、絶対にぶっ殺してやる！

この国の真ん中で歴史を動かそうとしている

おれは一度堺に戻ると、夜、団子屋の仕事を終えて帰ってきた者どもに状況を説明した。神妙な顔持ちのおれに、普段は生意気な一同もじっと聞き入る。

「そういうことで、おれは太郎と合流し、浅井朝倉を皆殺しに行くことにする。さゆりんは早之介に戻っておれについてこい。あと、鉢巻きもな。シロジロとあーやには申し訳ないけど、二人で頑張ってくれ」

そう言い、おれはゴンロクソードを杖代わりに腰を上げる。

結局、太郎の話だと天満の森での軍議で退却が決まったらしく、信長本隊は京に戻ったその足で宇左山城の援軍に向かうことになった。

「明日、京に向けて出立だ。わかったな」

「そんな、いきり立ってどうするん」

さゆりんが薄化粧の顔をしかめ、半ば町娘の格好には似合わない強い眼差しで睨みつけてきた。

「あんた一人が行ったところで何になるんや。あんたにはやるべきことがあるやろ。復讐よりも先に、摂津をどうにかせなあかんやんか」

「黙れっ！　そんなのは後回しだ！　こんな気分のまま堺でだらだらしていられるか！」

「何を言うているんや。そもそも、あんたが荒木信濃守を侮っていたせいで招いた結果やないか。摂津池田が変なことをせんかったら、三好も動かなかったんや。三好が動かなければ、浅井も朝倉も動かなかった。あんたが三好三人衆の好き勝手にやらせていたから森三左衛門は死んだんや。あんたはぬるいんや」

「ちょ、ちょっとさゆりちゃん。言いすぎッスよ」

シロジロがさゆりんを止めるが、さゆりんは依然むすっとしてい

る。

「まあ、それは極端な話や。それだけが原因じゃない。けど、あんたが荒木信濃守を放っておいたのは今回のいくさの一因であることに間違いないんや。そんなら、岐阜で三左衛門に最後に言われた通り、ここでなんとかするのが筋やないんか。摂津をどうにかするのが三左衛門への報いやないんか」

おれはゴンロクソードをがつんと床に叩きつけると、自室に逃げ込み布団に埋もれて泣いた。さゆりんの言うことがもっともすぎて、もう悔し泣きするしかない。

ヘタレと三好三人衆が通じ合っているかもしれないっていうのを十兵衛から聞いたとき、何か手を打っていればどうにかなった。

でも、あのとき、おれを摂津池田に向かわせてくれなかったのってサンザだったな。おれはちょっと気になったから行こうと思ったんだけど、サンザが馬鹿にしてきて、結局姉川のいくさの支度に取りかかっちゃったんだ。

なんだよ。サンザのせいじゃねえか。チクショウッ。あの馬鹿。あのくそおやじ。

……。

信長は激昂していたらしいけど、どういう気分なんだろうな。あいつ、非情と見せかけて、なにげに思いやりがある奴だからな。激怒しながらも、気難しくなっているんだろうな。

何の犠牲もなくこの戦国の世を終わらせられるならとっくに終わっている。しかし、犠牲を払ってまでこの時代に終止符を打つ者が現れなかった。なぜならば、戦い続けることを恐れているからだ。

俺は一生涯戦い続けるぞ。浅井とのいくさの最中に三好が出てきたら、次の日には三好と戦う。三好とのいくさの最中に武田が仕掛けてきたら、次の日には武田と戦う。畿内、東海、北陸、毎朝毎晩駆け巡ってやる。

そんな俺についてこられない人間は、坊主になって高野山にでも行け。

浅井朝倉の軍勢が京に入ったら信長は終わりだ。おれでもわかる。だから、サンザは身を呈して奴等を食い止めた。じゃあ、もしも、おれがサンザの立場にいたら、そんなことできるか。

沓掛勢に守られながら逃げ伸びる。おれなんかそんなもんだ。

自分のちっぽけさに今さら気付く。掌をすぐに返すような摂津の輩はともかく、サンザ、それに遠藤喜右衛門。あいつらは掌を返しても、寝返り先に優遇されるような重臣だった。なのに、そんな安泰の将来もあると知りながらも、命を捨ててまで主人のために戦う。

この時代にはそういう連中が多い。

そういう連中に華を持たせてやるには、まず、おれは、掌をころころと返すような怪物どもを駆逐することなのかもしれない。

まあ、摂津で暴れ回っている連中にも、連中なりの考えなり正義なりがあるのかもしれないけれど、おれは織田信長の家来だ。サンザと同じ織田の人間だ。

これは殺し合いなんだ。生き残ったほうが正義なんだ。

「どうや、まだ、京に戻るつもりなんか」

さゆりんが勝手に入ってきて、おれは寝返りを打って背中を向けた。

「いや。とりあえず、堺に残る。確かにお前の言った通り、摂津をどうにかすることが三左衛門の命令だ」

「賢明や」

さゆりんはおれの枕元にアケチソードとゴンロクソードをそっと置いていく。

「でも、見直したわ。あんたがあんなことを言ったのは初めてや。見境もなく三左衛門の仇を討ちに行くだなんて、ほんの昔では考えられんかったことや」

「サンザは別だ。ゴンロクや五郎左とは違う。あいつは昔からおれの世話をしてきてくれたんだ」

そういえば、桶狭間の戦いのときのお楽しみ会で、あの野郎、おれにウインクしてきたな。なんだったんだろうな、あれは。気持ち

悪いだけだったけど、なんだったんだろうな。
ああ、もう会えないと思うと、目の前が霞む。会いたいと思ったときなんか今の今まで一度もなかったけれど、いなくなったってわかったら、なんだかむしょうに会いたくなってくる。
あいつ、重臣のくせに、最後までおれのことを「牛殿」だったし。
「あんまりめそめそしていると、左衛門太郎に叱られるで」
「もうすでにぶん殴られたよ」
ふふと笑いながら、さゆりんはおれの枕元に座り、おれの頭をゆっくりと撫でてきた。
「やめろよ。惚れちゃうだろ。まだ、何か企んでやがんのか」
「あんたは昔から私に惚れているやろ。その証拠に嫌がらないやんか」
「勘弁してくれ。もうおれはあずにゃん以外には手を出さないって決めたんだから」
「知っている。だから、慰めてやっているんや」
おれは目玉をちらと動かしてさゆりんを見上げた。
「なんや、助平牛」
「膝枕しろ」
「特別やで」
おれはさゆりんの膝に頭を乗せると、頭を撫でられながら目を瞑り、淡いひとときの中でいろんなことを思い出した。マタザが出奔した日のこと、サンザが押し掛けてきたときのこと、ウザノスケが遠山さんに追い払われたときのこと、チヨタン欲しさにマリオと喧嘩したときのこと、サルが墨俣城の屋根の上で踊っていたときのこと。
「おれは出世した。おれだけじゃなく、皆、出世した。尾張で泥を浴びていた汚い連中が、今じゃ、この国の真ん中で歴史を動かそうとしている」
「終わらせるわけにはいかんやろ」
「終わらないよ。この流れは。ただ――」

おれは目を開けると、さゆりんの涼やかな目元をじっと見つめる。
「さゆりんはやっぱり女でいたほうがいい。やっぱり、お前は女だ。もう、いくさ場には出るな。もう、ゆっくりしろ」
「聞かなかったことにするわ」
さゆりんの小さい手がおれの瞼の上に置かれ、泣き疲れてしまったのか、おれはそのまま眠ってしまった。
翌日の昼過ぎ、屋敷の玄関から殴り込みのような勢いの声が飛んできた。
「簗田左衛門尉殿おっ！　小寺官兵衛孝高が参ったぞっ！」
びっくりして玄関に駆けていくと、そこには鳶色の大きな瞳をきらきらと輝かせながらにんまりと笑みを浮かべる、背丈の高い青年が立っていて、おれを確かめるなり、
「簗田殿でいらっしゃいますかっ！」
「う、うん……」
「これはこれは！　小寺官兵衛にてございます！　拙者みたいな者に文を出していただき、いやあ、喜び勇んで飛んできてしまいましたよっ！」
うるせえなあ。そんなにぎゃんぎゃん大きい声出すなよ。だいたい、なんなんだよ、この馬鹿丸出しの感じは。

摂津三分の計

「いやあ！　うまいうまい！　堺は最高ですな！　簗田殿！」
小寺官兵衛は差し出した団子をねちゃねちゃと食べ、煎茶をずずずっと啜り、大きな声を張り上げるという、切れ者どころか、どこからどう見てもバッタもの。
半兵衛ともあろう奴が、こんな人間を掴ませやがって。
「あっ！　申し遅れました。拙者、小寺政職が家臣、小寺官兵衛孝高にございます！」
「さっき聞いたよ」
「あっ！　これはまた失敬失敬！　あっはっは！」
口を開くたびに唾が飛んでくるんだけど。なんて無教養なやつなんだ。クソが。半兵衛の奴、次に会ったときは説教してやる。
「天下の智将、竹中半兵衛殿から、まさか播磨の田舎者の拙者に文が届くとは驚天動地、ひっくり返る思いでありましたよ！」
おれは大声に顔を背けながらしーん。
「何か、お気に召しませんでしたか！」
「いや、そのですね、声が大きすぎないですか。十分聞こえるんですけど」
「ああ！　申し訳ございませぬ！　ただ、これは己への訓練の一貫でして！　拙者は子供のころそれはまあ大層頼りないやせ細った子供だったのですが、ある日、気付いたのです！　常に腹から大きな声を出していれば気力が湧いてくると！」
「ああ、そう。そうですか。じゃあ、お構いなく」
「して！　簗田殿！　いかがいたしましょう！」
「何が」
「摂津ですよ、摂津！　簗田殿はお困りなのでしょう！」
「いや、ちょっと待て」
おれは大声に押し出されてバッタ野郎のペースに持ち込まれそう

だったけれど、まず、バッタ野郎の思惑を聞かなくちゃ始まらないだろ。バッタ野郎は摂津の騒乱とはほとんど関わっていない。それなのに、どうして、しゃしゃり出てくる気になったのか。摂津をとりまとめることが、要は摂津を織田のものにすることは、果たしてバッタ野郎にメリットがあるのかどうかってことだ。

それを訊ねると、バッタはげらげらと笑い上げた。

「関係ありませぬ！　摂津がどうなろうと播磨には大きくは関係ありませぬ！　しかし、播磨は摂津と同様、騒乱続きで収集のつかない状態が拙者の生まれる前から続いているんですわ」

播磨っていう国は昔から赤松家が牛耳っていたところなんだけれど、足利幕府の力が急激に衰えた時期から、一族争い、家臣争い、豪族争いが激しくなり、一族同士、家臣豪族同士、昨日の友は今日の敵みたいな状態らしい。

「その中で我ら小寺家が生き残るためには織田上総介殿にお味方していただく他ありませぬ」

「なんでだよ。三好三人衆だっているだろ。それに、信長様は今、いろんなやつを敵に回して劣勢なんだぞ」

「知っております。しかし、織田殿しかおりませぬ！」

「なんでだよ。根拠はなんなんだよ」

すると、バッタはにこっと笑った。そうして、大声をやめた。

「尾張から美濃、伊勢、南近江、京、摂津と快進撃を続けてきた上総介殿がたかだか三好や浅井朝倉、一向衆ごときに、苦戦はすれど消し飛ぶような御方だとは思いませぬ。そのような御方であったら、ここまで来ておりませぬ」

まあな、そりゃそうだ。

「拙者はその先物買いをしたいのです。そのために摂津を織田方に塗りつぶしましょうぞ」

おれは思わず溜め息。塗りつぶしましょうぞってさ、塗りつぶせなかったから、信長は退却したんだろ。こいつは馬鹿にしているのか。それともただの馬鹿なのか。

怪訝な表情を浮かべたおれに、バッタはまた大笑いする。
「いやいや、拙者だって、そう簡単に摂津をひっくり返せるとは思っておりません」
なので、バッタは詳細を聞かせろとおれに言ってきた。これまでの摂津のいきさつと、摂津に跋扈するそれぞれの当主の名前から家臣の名前、各地の豪族、小者の端々まで、知っている人間はあらかた名前を上げていってくれと言われ、その通りに述べていくと、バッタはおれの言ったことを紙にすらすらと書いていく。
あらかたのことを言うと、バッタは腕を組み、書き連ねていった紙をじいっと眺め、やがて鼻をほじりだした。
人前で無礼極まりないなと煙たがっていたら、バッタはほじり出した鼻クソを荒木信濃守と書いたところにぴたとこびりつける。
「摂津の鼻クソ、池田の荒木信濃守村重！」
こいつはもう駄目だ。さっさと追い出そう。
「簗田殿、この鼻クソに力を与え、諸葛孔明の天下三分の計ならぬ、摂津三分の計といたしましょう」
バッタは懐から手書きの摂津の地図を出してきて、池田、茨木、伊丹、高槻、石山、野田、福島に丸をつけていく。
「まず、呉、これは石山本願寺ですな。して、蜀、これは野田と福島の三好三人衆ですな。そうして、魏はというと、池田知正！　こやつに茨木、伊丹、それに高槻をやっつけてもらいましょう」
「だから、なんだよ。池田に摂津の大半を占領させてどうなるんだよ」
「そうしたら、簗田殿の力で荒木信濃守を上総介殿に従わせればよいのですよ。荒木信濃守は簗田殿を親友同然に思っているのでしょう」
「まあ、多分」
「だったら、簡単ではないですか」
「でも、ちょっと待てよ。いくら信濃守が力を持っているからって、池田の当主は池田九右衛門知正なんだぞ」

「下剋上させればよいのです。摂津三分の計の続き、これは荒木信濃守に、曹氏から皇位を簒奪した司馬氏になってもらいましょう」

鼻くそを人差し指で潰しながら、おれに鳶色の目を上げて、にやりとほくそ笑んだバッタ。

ううっ。難しいことを言われても意味がよくわからんが、要は池田九右衛門に泳がさせておいて、機が熟したらヘタレ村重にいいとこ取りさせちゃうってことだよな。

こいつ、ただのバッタもんじゃねえな。ただ、義理だの信だのと躊躇する半兵衛とは違って、考えることが節操なさすぎ。

「で、でもさ、茨木も伊丹も織田方だし、高槻なんて、足利直臣の和田惟政が城主なんだぞ」

「ふむ、確かにそうですが、しかし――」

ごほごほと突然むせたバッタは、お茶をずるずると啜り、ふう、と一息ついてから口を再び開く。

「築田殿、いいですか、摂津がいつまで経っても内乱状態にあるのは、一つにまとまっていないからです。ならば、まとめてしまえばいいのです。まとめる方法として、三好三人衆に付いている池田勢に、茨木、伊丹、高槻まで勢力を拡大させて、三好三人衆よりも勢力を大きくさせるのです。そうして、池田、三好、本願寺の三分になったら、もっとも勢力を拡大した池田勢の頭を荒木信濃守にすげ替えて、お味方にしてしまうのです。さすれば、諸葛孔明や美周郎ほど優れた者たちでもない三好や本願寺など、織田上総介という曹操孟徳にかかればひとひねりです」

「でもさ」

おれは腕組みをし、汚い手書き地図を眺めながら首を傾げた。

「そんなにうまくいくもんなのか。そりゃあ、池田勢からしてみれば攻め滅ぼしたい気持ちは大いにあるだろうけれど、やられるほうは必死だろ。それに、信濃守が信長様につくかどうかの保証もないし」

「築田殿」

バッタは身をぐいと前に乗り出させてくると、鼻と鼻がくっつきそうなぐらいの距離でおれの目を覗き込んできた。

「それは貴殿次第です」

池田九右衛門知正に勢力を拡大させるためには三好三人衆の後ろ盾も必要だが、更なる援助が必要だとバッタは言う。

「築田殿が暗に荒木信濃守に援助しなされ」

バッタは声をひそめる。こいつは悪知恵を働かせるときは大声をやめるらしい。瞳はてらてらとしているけれど、口端の歪めようはダークサイドに堕ちていることを物語っている。

なんて危険な奴なんだろう。おれとヘタレ村重の仲がいいとはいえ、野田・福島の騒乱以来、敵同士だ。そのヘタレに、おれの味方である茨木重朝や伊丹親隆、それに足利直臣である和田惟政までをも滅ぼさせろって言う。しかも、その援助までしろと。

信長に対する背信行為じゃないか。下手を打ったら、おれの立場は相当やばいことになる。

松永弾正なんて足元にも及ばないほどの悪党なんじゃないのか、このバッタ野郎は。

おれは摂津の地図を眺めながら、額に手をあてて悩んだ。これをすることによって、バッタは何を得ようとしているのか計り知れない。

しかし、バッタはなおも言う。

「一向衆門徒の応援があるような本願寺とは違い、このような豪族などは兵力が限られていますゆえ、増兵しようとも一年や二年では如何ともし難いものです。だから、豪族が入り乱れる状況が続いております。なら、どのように信濃守の池田勢に軍備増強させるか」

バッタは地図をとんとんと人差し指の先で叩く。堺だ。

「火縄銃です。築田殿が火縄銃を調達したように、信濃守にも調達させればよいのです。さすれば、兵力は変わらなくても、軍事力は大いに飛躍します」

「どうやって調達させるんだよ」

「だから、簗田殿が調達したように、堺の商人に譲らせればよいのですよ」

なんなの、この陰謀……。堺は信長の直轄領だぞ。しかも、火縄銃の権益を牛耳っているのは信長の御用商人の今井会長だぞ。そんなこと、できるはずがねえだろ。口にするだけでも首が飛びかねない。

「まあ、拙者は姫路の人間ですから、客観的かつ、傍目からの考察です。ただ、堺はこの話に乗ると思いますがね。摂津の不安定な情勢は彼らの商売を大きく左右しますからね」

「わかった。とりあえず、わかった。ただ、官兵衛殿にとって何のメリットがあるんだ」

「？」

「あ、いや、おれにこれをさせることによって、官兵衛殿には何の得があるんですか」

「それは、先程も申し上げたように織田上総介の先物買いですわ。もしも、摂津が上総介殿の統治下になれば、天下布武とやらを唱えている上総介殿でしょう。播磨にも影響が及ぶのは必至ですよ」

バッタのいる今の播磨はほとんど摂津と似たような状態らしい。各豪族が拮抗し合っていて、その中で各々が外交に調略にと勤しむ毎日。

しかし、戦国乱世の風向きが一挙に変わりつつあるのは京から離れた地方も一緒。足利幕府の権威が崩壊した後、何十年も続いた豪族同士の領地争奪戦の小競り合いは、鬼謀を張り巡らせ、決死のいくさを勝ち抜き、下剋上を成功させた者たちが、拮抗し合っていた勢力図から抜き出てき、その勢いは各地の豪族たちを飲み込もうとしている。

「拙者が推測するに、播磨はいずれ東西からその者たちに挟まれます。東は織田上総介信長、西は毛利治部少輔元就。この小寺官兵衛がどちらかを選ぶなら、迷わず織田上総介です」

「どうして」

「織田上総介殿は能力に長けた者ならかつては敵であった者でも引き上げると聞きます。出世頭の木下藤吉郎秀吉なる者が百姓上がりだというのは播磨にも聞こえてきますし、それに、あの松永弾正忠にでさえ大和一国切り取り次第。拙者も男です。播磨の田舎でこの知謀を腐らせたくはございませぬ」

　このときのバッタの引きしまった表情はおれに訴えかけてくるようでもあった。野心、いや、自分も、サルや半兵衛、明智十兵衛やキモブタ家康、そういった天下を騒がせている諸将たちのように大きなことをしてみたいというぎらぎらとした夢をぶつけてきているかのようだった。

　自信家なんだろう。でも、その自信をひけらかす場所が播磨のつまらない争いの中だけでしかない。大海に出たい。俺は天下に名を馳せる智将、竹中半兵衛にも負けず劣らずの人間だ。だから、俺に下駄を預けてみろ。そう言わんばかりの眼差しの強さだ。

　この若い熱意に乗るか反るかは、簗田左衛門尉政綱の一世一代の大博打だな。

「とりあえず、様子を見る。様子を見るから、官兵衛殿はこの家に幾日か滞在しろ」

「かしこまりました。姫路の父元には堺見物をしたいと申してきましたので、一カ月ほどは戻らなくても大丈夫でしょう。まあ、元々がドラ息子ゆえ、戻らなくてもいいかもしれませんがな！」

　あっはっはっと、それまでの若者の格好良さをぶち壊すようにバッタ野郎は笑い声を上げた。

とんでもなく危ない橋（前書き）

>i19067—2533<

とんでもなく危ない橋

「今日、通りを歩いておったら実に模様の美しい手鏡を見つけて参りました。さゆり殿、こちらでその美しさにますます磨きをかけてくだされ」

「そんなん言われても、こんな高価なものを貰えんわ」

「何をおっしゃいます。さゆり殿の美しさの前ではどんな天下の名物も名物でなくなります。むしろ、こんな物を差し上げようとしている拙者が恥ずかしいほど」

「おいっ！」

おれは食べ終わったご飯のお椀を叩き置くと、軟派なバッタ野郎に箸の先を突き出した。

「官兵衛！　お前、国には嫁も子供もいるんだろ！　しかも、嫁はお前の主人の一族なんだろ！　ここで浮気しようとしているって姫路に手紙を送りつけるからな！」

「いやいや、簗田殿。拙者は贈り物をしているだけでございます」

バッタは薄ら笑みを浮かべながら言うと、あつかましくもさゆりんの手を取って手鏡を握らせる。そうして、にこりと爽やかな笑みを見せる。

「拙者が持っていても仕方ないゆえ、受け取ってくだされ」

「うーん。そんなら、有難く頂戴するわ」

「彩殿にはこちらの櫛を。明国からの舶来物らしいですぞ」

「で、でも」

あーやは戸惑いの視線をおれにちらりと向けてくるが、バッタはあーやの手も取り、櫛を握らせてしまう。

「おいっ！」

「そうッスよ、官兵衛殿！　うちのさゆりちゃんにも彩にも官兵衛殿から貢物を貰う義理なんてないんスからね！」

「あ、四郎次郎殿にはこれを」

「えっ？　なんスか、これ」
「南蛮から持ち込まれた金平糖とかいう菓子らしいですぞ。拙者も賞味したのですが、実に美味でございます」
「へえ。そうなんスかあ。こんな綺麗なものが菓子なんスかあ」
「栗之介殿には播磨灘の名産品、いかなごの佃煮を。栗之介殿は甘い物が苦手と聞いておりましたゆえ」
「へえ。言った覚えねえけど、よく知ってんなあ」
で、佃煮をご飯に乗せて、うまいうまいと食べるねじり鉢巻き。あっしも、私も、と、佃煮に手を伸ばし、うまいうまいと舌鼓を打つ者ども。
お椀の中が空っぽのおれ。
「播磨は瀬戸内の荒波に揉まれた魚がわんさか上がりまする。皆さん、今度、機会があったら姫路に来てくだされ！」
あっはっはと笑い上げるバッタ。
「おい。おれにはないのかよ」
「は？　簗田殿にですか？　簗田殿になら、すでにお渡ししたはずですが」
「貰ってねえよ」
「お渡ししたではないですか。摂津の地図を！」
ぐぬぬ。
バッタが忌々しくなったおれは苛立ちながら居間をあとにする。
あの軟派野郎はここに来て以来、情報を集めてきまするとか言って、毎日堺の町に繰り出していたけれど、実は団子屋に入り浸っているらしい。何が情報収集だ。さゆりん目当てかあーや目当てかわからねえけど、人の家の女に手を付けようとして、なんて不逞な野郎だ。しかも、シロジロやねじり鉢巻きまで懐柔している有様。
頭に来るから、姫路のあいつの親父に、息子は堺で遊び呆けているっていう手紙を書きつけてやる。会ったことも見たこともねえけど、姫路城城主小寺兵庫助様って宛名なら届くだろ。
机の上に和紙を敷き、筆を入れようとしたところ、当事者のバッ

タがぬけぬけと部屋にやって来た。
「そういえば言い忘れておりました！　伊勢長島で一向一揆衆が挙兵したそうですぞ！」
「知っているよ」
　このすっとぼけ軟派野郎が。おれだって家でごろごろしているだけじゃねえんだ。そんなことはタナカからすでに聞いているわ。
　浅井朝倉連合軍は宇左山城攻略を諦めて、そのまま京に向かって進軍を始めたらしいけれど、信長が摂津から踵を返したので、浅井朝倉の軍勢は坂本というところまで後退し、奴等に味方した延暦寺のある比叡山に籠城した。
　浅井朝倉との野戦に持ち込めなかった信長本隊は比叡山を包囲しているだけの状態。この隙に上洛を窺う三好三人衆をゴンロクと和田惟政が食い止めていて、石山本願寺とは足利義昭の使者が和睦を進めている。タナカの話によると、先々代の将軍でもある兄貴を殺し、自分をも殺そうとした三好三人衆を義昭は恨んでいるらしいけれど、本願寺とは仲良くしたいらしい。
　横山城では小谷城からの浅井勢が琵琶湖を南下しないようにサルとマリオが奮戦しているけれど、あの六角ゾンビ親子が一向一揆勢と結託して南近江でまたしても挙兵。まさにゾンビ。サルとマリオは畿内と美濃を遮断された交通路を回復させようとして、浅井勢とゾンビたちを相手に戦うも、織田の軍勢が各地に散らばっている状態なので、埒が開かない。
　しかも、伊勢では一向一揆衆。
　ちなみに太郎から手紙が来ている。太郎はタコ入道や沓掛勢とともにゴンロクの陣にいるらしい。姉川のいくさが終わったのち、沓掛に戻った沓掛勢だったけれども、またすぐに前線に引っ張り出してきてしまい、忍びない思いだと文中で嘆いていた。
　堺の連中が群がる団子屋で働いているさゆりんも、今の危険な情勢を把握している。けれども、今はじっと耐えるしかないと言う。
繰り返しになるが、摂津をどうにかすることだけが、自分たちの課

題だ。

戦略は気長に、戦術は気短に。各地の戦場を織田の同僚たちが死に物狂いで駆け巡っていることに対して、堺でのほほんとしていることに情けなさを痛感するが、その情けなさを今はぐっと噛み締めるしかない。

「この難局を上総介殿はどう凌ぐか」

バッタは口端を緩めながらおれの向かいに腰を下ろす。こいつ、当事者じゃないっていうのもあるけれど、まったくの他人事だな。

「団子屋に入り浸ってさゆりんやあーやのケツを追いかけているお前は、毎日がさぞかしおもしろいだろうな」

おれが皮肉を全開にしたというのに、バッタは怯むどころか、むしろにやりとダークサイドに堕ちた笑みを浮かべた。

「ええ、実に愉快です。まさか、簗田殿がくのいちに団子茶屋で情報をかき集めさせているとは思いもしませんでした」

うっ。さゆりんを働かせている意図はまるで違うが、さゆりんが元くのいちだと見破るだなんて。このバッタ野郎、表面ではふざけた真似をしているけれど、その腹の中に抱えている思惑が計り知れない。

しかも、その鳶色の目でぐいっと覗かれると、どこか見透かされているようにも感じてくる。

「簗田殿を訊ねて正解でしたわ。播磨では味わえない刺激を日々受けられまする。ただ、刺激を受けるだけではおもしろくない。拙者も、堺に来たなりに爪痕を残していきませんとな」

簗田殿、と、言いながら、バッタはおれの肩に手をかけ、耳元に顔を寄せてきた。

「ひそかに三好、本願寺と手を組みなされ。計はここから始まります」

バッタの囁きに背筋がぞくっと震えた。なんてことを言っているんだと思ったけれど、バッタの細くも冷め切った声音が、おれに言葉を出させない。

「無論、軍事的に手を組むのではありませぬ。それでは寝返りですから。暗に手を組まれるのです。堺の商人どもを利用して」

そうして、おれはバッタの計略を一通り聞いた。おれはこのふざけた軟派野郎に末恐ろしさを覚えた。ぶらぶらと遊んでいるふりをして、こいつは摂津の情勢どころか畿内の情勢、日本全国の情勢の隅々までを、この堺で手に入れていた。

バッタ野郎の計略はとんでもなく危ない橋だ。堺のゼニゲバモンスターどもを利用し、かつ、かつては松永弾正と並び称された大悪党の三好三人衆と、全国一向衆の上に君臨する大僧正、本願寺顕如を手玉に取り、摂津を意のままに操る。

本当にバッタ野郎を信じて大丈夫なのかと、何度も起こした不安に悩まされる。でも、このうだつの上がらない状態を打破するにはそれしかないのかもしれん。

「築田殿、天下の趨勢を決するのはこの一局にありますぞ。畿内の騒乱は天下の騒乱。しかし、畿内の平定は天下の平定です」

おれは覚悟を決めると、バッタを退出させ、さゆりんとシロジロを部屋に呼び出した。シロジロにはこの一カ月での団子屋の売り上げを訊ねる。

「奇進札と合わせると、全部で六百貫か。六百で船は買えるのか？」

「船っ？　そんなもん買ってどうするんや。火縄銃のときみたいに、また、ろくでもないことを考えているんか？」

「買えるのか買えないのかどっちだ！」

眉根をしかめてむすっとしたさゆりん。シロジロが代わりに口を開ける。

「一口に船と言っても、軍用なんスか、それともただの船ッスか」

「荷物を運ぶような船だ」

「それなら、六百貫もあれば十分じゃないんスかね。三隻か四隻ぐらいは購入できるんじゃないんスかねえ」

「わかった。だったら、さゆりんは団子屋はもういいから、いったん岐阜に引き返し、願福寺から売り上げを奪い取ってこい」

「ちょっと待てや。何に使うんや。船なんか買ってどうするんや」
「四郎次郎に船で運び屋をやらせる。まだどうなるかわからないけど、もし、やれることになったら団子屋と兼業しろ。いや、おれが奔走する間に誰か雇って、煎茶と団子の作り方を叩きこめ。わかったな！」
さゆりんは、また始まったと言わんばかりに溜め息をついたけれど、シロジロは、もしかしたら、水運業に手を出せるという期待で目を輝かせていた。
翌日、おれとバッタはこの話を持ち込みに、早速、堺の首領、今井会長の屋敷を訊ねた。

交換条件

おれたちの急な訪問にふてぶてしく現れた今井会長に、バッタは手をつきながら、自分はつい最近簗田左衛門尉に仕え始めた播磨生まれの黒田万吉であると名乗った。

「我が主、簗田左衛門尉に摂津騒乱の鎮火をご依頼されたとありまして、恐れながら、一つ提案させていただきたい所存でございます」

バッタはおれの前での態度とは打って変わって、立ちふるまいは実に好青年そのものだった。

「左様でございますがなあ」

会長は下膨れの頬をつまらなそうにぼてっとさせたまま言う。

「もはや、簗田殿お一人の手には負えない状態でしょう」

会長はふうと吐息をつき、

「愚痴にも弱音にもなってしまいますが、すべては浅井殿の寝返りから。あれを見越していれば、私は織田様に媚びへつらいはすれど、御用聞きにはなりませんでしたな」

よくもまあ、そんなことを織田家臣のおれの前で言えたもんだ。会長が織田家に見切りをつけ始めている証だ。

でも、堺の他の会合衆たちを出し抜いて、信長にいち早く接近した会長は今さら引き返せない。信長の武威を背後にして、あらゆる権益を牛耳れた今井会長を妬んでいる連中は少なくない。

そんな後戻りのできない今井会長をバッタは鋭く突いた。

「愚痴をこぼしているだけでは今井殿も織田上総介とともに叩きのめされますぞ」

「そのようなことはわかっております」

と、会長は仏頂面を更にむっとさせた。

「わかっているからこそ歯痒いのではないのですか。槍を持たない我ら商人は、指をくわえて戦況をただただ見つめる他ありません」

「だからこそ、提案を差し上げまする。商売人にしか成せない技を」

そうして、バッタは単刀直入に発言した。荒木信濃守に火縄銃を無償で提供しろと。

「貴方様は何をおっしゃっておられるのか」

会長は語気をほんのわずか荒げ、驚くというよりも、その目には半ば怒りをはらませた。拳をぎゅうっと握りしめ唇を震わせる。バッタはじいっと視線を据え置く。

「今井殿は三国志という史書をご存知でしょうか」

「ええ。商人とはいえ、書物は読んでおりますゆえ。それが何か」

バッタはおれに懐から地図を取り出させると、摂津を三勢力にまで絞り込むという計略をおれに説いたように会長にも話した。そのためには池田勢に軍備増強させる必要がある。だから、会長の援助が必要だ、と。

話を一通り聞き終えると、会長は吐息を震わせた。額には汗が浮かび上がっていて、唇を苦々しく噛みしめながら手拭いで額を押さえていく。

「今井さん」

おれは顔をキリッとさせる。

「あっしもこの話を聞いたときにはぶったまげましたし、さんざん悩みましたけど、やっぱりこれしかありません。運良くあっしは荒木信濃守と仲が良いし、あいつはあいつで茶器を貰っただけでころりと三好側に付くような男です。できない話ではありません」

「しかし、築田殿、これはあまりにも危険すぎますぞ。いや、陳腐としか言いようがない」

「じゃあ、このまま摂津を放っておきますか」

おれの言葉に会長は扇子を取り出し、ぱたぱたとあおぎ始めた。もう、季節は暑くない。でも、会長の頬には汗が伝わっている。

「仮にです。仮に、火縄銃を贈呈するのだとしたら、黒田殿、何丁なのです」

「最低でも三百丁」

「話になりませんな。いくら築田殿のお頼みとあれ、やろうとして

いることは危なければ、吹っ掛けてくる数も多すぎる。摂津のためにとはいえ、そこまで義理を果たす理由などありませぬ」
「ならば、今井殿」
会長の扇子を動かす手があわただしい中、バッタは例の覗きこむような目でぐっと会長を見据えた。
「淀川の航路の確保と引き換えとなればいかがでしょう」
「何をおっしゃる」
まるで、苛立ちを表すかのように扇子を動かす。もはや、風を送っているのではなく、落ち着けていないだけだ。
「本願寺と三好が川岸に陣取る最中で、どうして貴方様たちが淀川の確保をできるのか。むしろ、こちらこそ教えて頂きたい」
「訳を話すのは、この交換条件を呑んでいただけるかどうかを決めて頂いてからです」
「もちろん。淀川の航路が安全になれば、琵琶湖から摂津湾にかけての水運が開ける。堺から京、堺から琵琶湖への道が回復されれば、今、陸運で支払っている運賃も安くおさまり、一日も二日も早くなれば、京へ生ものも運べる。こんなことは私だけではなく、堺の商人ども、皆が手を叩いて喜ぶことでしょう。しかし、どうやってそれをやるのです。堺は織田様の直轄領。堺の商人の船が淀川河口を通過できるはずがないでしょう！」
屋敷中に響き渡るほどの今井会長の怒声に、一時、口を噤んだバッタ。ビビったおれ。
「これは失礼」
と、会長は取り乱したことを恥じたのか、頭を軽く下げてきた。そうして、お茶を啜って一息つくと、扇子を再び動かし始めた。
「ともかく、そのようなことができるならば、火縄銃三百丁など快くご贈呈差し上げましょう。淀川の水運は我々にとって死活問題なのですからな」
「それでは一つ、お許しを頂きたい」
「なんでしょうか」

「簗田殿の団子屋に船を持たせていただき、淀川河口と堺の間、つまり本願寺と三好の所領の通行権を一時、簗田殿の団子屋に預けさせて頂きたい」

会長は扇子をぴたりと止めた。瞳を黒々と光らせて、バッタとおれにそれぞれ睨みを与えてくる。

「つまり、本願寺にも三好にも堺の者ではない独自の船借と偽るつもりですな」

「はい。もちろん、彼らには通行料を支払います」

会長はじいっとバッタを見つめる。雀のさえずりが聞こえる沈黙の時間。おれはごくりと唾を飲み込む。会長がゴーサインを出さなければ、何も始まらない。

「かしこまりました。しかし、本願寺と三好に許可を得られるかどうか、すべてはそれからです。それまで私は何の援助もできませぬゆえ」

会長の屋敷をあとにし、帰路、バッタはおれに手を差し出してきた。

「あの化け物を説得すれば、あとは火縄銃を手に入れるまで大して難しくはないでしょう。本願寺と三好は商人に装わせたさゆり殿に任せ、あとは信濃守。簗田殿次第ですぞ」

バッタの清々しい笑顔を前にして、おれは手を出し、握手を交わした。

「拙者もそろそろ姫路に戻らなければなりませぬ。ドラ息子とはいえ、さすがにいつまでも留守にしているわけにもいきませんからな」

見上げた謀略家

バッタは播磨に帰った。

織田はなおも劣勢だった。伊勢で起こった一向一揆は放浪ゾンビの斎藤タツオキも参加し、数万の規模に膨れ上がって、長島城を攻め落とすと、ついで尾張小木江城が落城し、城主で信長の実弟の信興が自害、伊勢桑名城の滝川彦右衛門も敗走。

東近江では小谷城の浅井勢と六角ゾンビ親子を相手にサルとマリオが奮迅するも、一向に打破できず。

浅井朝倉連合軍は比叡山に閉じこもり、信長は延暦寺に比叡山を明け渡すよう通告していたらしいけれど、延暦寺はこれを無視。兵数が多くもないので攻め込むこともできずに包囲するだけ。

摂津は三好三人衆の上洛を食い止めるのに精一杯。

にっちもさっちも行かない状況の中で秋は深まり、吉田早之介扮するさゆりんがようやく岐阜から戻って来た。

「岐阜の城下は戦々恐々としておった」

ずっしりと詰まった頭陀袋を馬の鞍からさゆりんと馬借の男が二人がかりで下ろし、それを居間まで運ぶと、仕事を終えた馬借にチップをくれてやったあとにさゆりんは言った。

「反織田勢がいつ岐阜に来るか、そんなんばっかや」

さっきのチップの小判一枚がどこから持ってきた金なのか気になったが、おれは器の大きい男なので見過ごしてやる。

「それでも奥方は大したもんや。あの茶の湯道楽が、今では庭先で薙刀を手に鍛錬しておるわ」

さゆりんは苦笑とも微笑ともつかない笑みを見せながら、懐からあずにゃんからの手紙を取り出した。

亭主殿

拝啓

鈴虫の音が聞こえてくる今日この頃をいかがお過ごしか。

こちらは女ども三人、つつがなく過ごしております。しかし、萩の花を揺らす風に寂しさも募る日々でございます。

とはいえ、亭主殿たちは堺にて、太郎と新七郎はいくさ場にて織田家のために働いている中、寂しさうんぬん言ってもおられぬな。

もしも、おやかた様に逆らう者たちが岐阜に土足で上がり込んできたときには、この梓が槍を手に取りますゆえ、こちらのことは憂慮せずに思う存分働きなされ。

梓　敬具

追伸

亭主殿、思う存分とはいえ、わらわの気持ちを踏みにじるようなことを犯した場合には、この槍の先が向かうのは亭主殿ですからな。

おれは手紙を折り畳み、震える手で懐にしまいこんだ。一瞬、あずにゃんの吊り上がった瞼を思い出して、吐き気をもよおしてしまった。出張先でも女房の目に怯えて肩身がなぜか狭いサラリーマンの気分だ。

団子屋はタナカの紹介で三人ばかし新人を雇ったらしい。一人は給仕役の幼女で、この前の野田・福島のいくさでの戦争孤児。一人は団子を作る役の若い男でどっかの商人の家出息子。あと、なぜかスペイン人、ヨハン。南蛮商人が連れてきた使用人だったらしいけど、あーやに一目惚れして団子屋にいつまでも居座っており、どうやら身振り手振りでの話を聞いてみると兵隊上がりみたいなので用心棒として雇ったらしい。

そんなよこしまな奴を雇うなんてとおれはシロジロに猛然と抗議したが、彼は敬虔なキリシタンだということで、大丈夫ッス。彩に

は手を出すことがないッス。キリシタンは女を襲わないみたいッスから。

鼻クソを掴まされた商人の下に、忍者の妹、戦争孤児の幼女、家出息子、外人。ごった煮みたいな団子屋だな。

まあ、とにかく、金も準備できたことで、さゆりんには本願寺、三好三人衆との交渉に向かってもらう。さゆりんには三河出身で京の商人、中島四郎次郎清延を名乗らせ、あたかも、シロジロが経営者だということにする。シロジロ自身を交渉にあたらせても大失敗は目に見えているからな。

「どや」

石山に向かう朝、さゆりんはどや顔で商人に変装した姿を見せてきた。最初、誰なのかわからなかったぐらいに別人だった。スレンダーなさゆりんが今井会長みたいな恰幅の良いデブになっており、仕立ての良さそうな着物に、どうやって作ったのか不明なほうれい線と額の皺は、まさにゼニゲバモンスター。

これがさゆりんだと思うと、なんか幻滅だな……。

「いいんじゃないかな。うん」

さゆりんは意気揚々と出かけていった。また、ろくでもないことを考えているんか？　なんて言っていたくせに、えらいやる気じゃんか。元々が女狐くのいちだから、きっと、人を騙すことが好きなんだな、あいつは。

シロジロには中古の船を買いに走らせる。物凄く不安だったけれど、おれは武将という立場上、あんまり手をかけられないので、とにかく口を酸っぱくして何度も詐欺には注意するよう言い聞かせた。大丈夫ッスよ、大丈夫ッスよ、なんて、気軽に答えていたから、「その大丈夫がテメーの場合だと大丈夫じゃねえんだろうが！　いいか！　これはただの銭稼ぎじゃねえんだからな！　織田の命運がかかっている一大事業なんだからな！」

と、シロジロがうんざりするまで叩きこんだ。

それでもやはり不安なので、とと屋の番頭に同行してもらうこと

にした。
「船など、何にお使いにならられるんでしょう」
番頭がいちいち詮索してきたけど、美濃の木曽川の川並衆に頼まれたからとごまかした。
とはいえ、最大のポイントはヘタレ村重が下剋上を起こすかどうかだから、タナカには計画を伝えた。あの馬鹿はタナカを崇拝しているからな。
「なんともまあ」
タナカは例の間延びした拍子抜けの驚きを見せると、湯呑みを鼻先に寄せてすうっと煎茶の香りを嗅いだあと、それを啜る。
「小寺官兵衛殿はいやはや恐ろしい知謀の持ち主ですな。今井殿、顕如殿、三好殿を手玉に取って、しかも、織田様の手をわずらわせることもなく、摂津を織田様のものにさせる」
「他人事だからですよ」
「まあ、それもありましょう。ただ、それをやろうとしている簗田殿も見上げた謀略家だ」
タナカは微笑んでいる。しかし、目尻に皺を集めているわりに、おれに向けてくる眼差しには光もなければ闇もなく、ただ無としておれに視線を置いてくる。
「簗田殿を知れば知るほど興味が湧いてきます。尾張沓掛から今日に至る簗田殿の歩みは、貴方様の人生が時代を紐解き繋げ合わせているような、そんな感じさえしてくる」
何を言ってんだ、こいつ。
タナカは奉公人を呼んだ。格さん助さんの兄弟を呼び、あと、ナントカっていう茶器をここに持ってこいと伝えた。
「簗田殿が名を与えたあの兄弟を船借に使ってくだされ。こちらとしては二人も荷役が減るのは楽ではありませんが、簗田殿に仕えたほうが彼らのためでしょう」
「本気で言っているんですか」
「ええ。私も今井殿ではありませんが、簗田殿に乗ってみたくなり

ました。元来、人というのは謀りを好みます。私も俗人ですな、手を出したくなってしまった」

ふむ。タナカもにこにこしておきながら腹の黒い男ということだな。

タナカは部屋を訪ねてきた格さん助さんに、明日からは簗田家に世話になるよう伝えると、兄弟は戸惑って、すぐには首を縦に振らなかったが、

「これは簗田殿の一大事業です。お主ら、たとえいくさ人ではないとはゆえ、戦乱に生きる男として一つこの作業に噛みたいと思いませぬか」

しばらくすると、弟の助さんがこくりと頷いた。

「格太郎。お主はどうなんです」

「はい。俺もやってみたいです……。でも、旦那様には恩がありますし」

「格太郎。一人の人間に受けた恩よりも、この天下に受けた恩に報いることこそ男の務めですぞ」

「天下ですか」

「左様。簗田殿は天下を動かさんとしている。この事業は織田様が天下に武を布くための重要な転換点です。私に受けた恩などというせせこましいことを考えるべきではありません」

「かしこまりました！」

格さんはひれ伏した。タナカはにこりと笑う。黙って見ていたおれは、タナカがただの道楽者ではないと感じた。柔らかい口調ながらにその表情は威風堂々とし、格さんはまるでタナカの豪気さに有無も言えずにひれ伏したかのようだった。

タナカは兄弟を下がらせると、代わって奉公人を呼び入れた。彼が抱えていた木箱を傍らに置かせ、蓋を開けたその中から大きめの乳白色の茶碗を取り出す。

「簗田殿、こちらの高麗物を荒木信濃守殿に献上しなされ。以前から信濃守殿が所望している一品です。こちらを献上すれば、信濃守

殿は間違いなく簗田殿に賛同されるでしょう」
おれは手に取って眺めてみる。よくわからないけれど、茶の湯馬鹿には効き目があるんだろうな。
「その茶碗には二千貫の値がついております」
あわわ……。おれはあわてて茶碗をタナカに返した。

一人占めするのはおれだっ！

ある日、シロジロが船を探していることをどこからか聞きつけた材木問屋が、おれの屋敷にやってきた。こいつは茶会で土産にお菓子をくれたやつで、美濃や近江で伐採されたヒノキを買い占めて全国に売りつけているから、織田家中のおれには好意的。

おれの御用商人（ということになっている）のシロジロは団子屋をやっていたはずなのに、船など買い求めて何をするつもりなのかと訊ねられたので、淀川河口から堺にかけて船の運び屋をするつもりだと話した。いずれ、会合衆の連中には今井会長から話しがあるだろうけれど、火縄銃三百丁の代わりに淀川の通行の確保をする。だから、堺の会合衆ではないシロジロが運び屋をする。

「まあ、本願寺、三好とは交渉中だから、どうなるかわからないけれど」

「左様でおまんねんか」

ならば、是非、自分も協力したいと材木問屋は言ってきた。というのも、材木は重量があるため、陸路で運搬している今現在は品物が値上がりしてしまっていて頭を悩ませている。

もしも、淀川での船の往来が再開されれば、美濃近江から一気に堺まで運び込まれるようになる。

「会合衆の中には快く思わぬ人間も出てくるでっしゃろが、わいにも死活問題であるため、説得してみますわ」

ふむ。おれは材木問屋が帰ったのち、手土産に持ってきたカステーラを食べながら思わずほくそ笑んだ。

摂津を三勢力に絞り込むため、三百丁の火縄銃を手に入れるための交換条件として運び屋を始めようとしているけれど、実はなかなかどうして儲かるんじゃねえのか。

堺の会合衆に属していない地方都市の船も港には停まっているけれど、琵琶湖の周域のほとんどは、不安定な情勢とはいえ織田家の

領地。淀川沿いも足利領か織田領。河口だけが本願寺と三好三人衆のものだ。

つまり、琵琶湖の水系は信長が牛耳っているわけだけれど、それが仇となって、今の不安定な情勢から航路が滞っているっていうことだ。

おれのやろうとしていることは不安定な情勢を逆手に取りつつ、今井会長にも許可を貰って、無所属のシロジロが船を出す。つまり、淀川の水運は簗田ホールディングスが独占できるってことだ＾＾

バッタには副会長の座でもくれてやろうかな。フヒヒ。小寺家なんていうしょぼい豪族はそのうち潰れるだろうしな。

おれは立ち上がった。

これは何が何でも成功させなければならん！！

とはいえ、手出しの出来ないおれはシロジロとさゆりんに任せるしかないので、馬屋に行ってクリツナの世話をするだけ。ねじり鉢巻きは団子屋を手伝っているから、おれがうんこ掃除に寝藁の交換。その間、庭先に放していたクリツナは、木の枝からこぼれる落ち葉を鼻面で追いかけて遊んでいた。

やがて季節は冬。

団子屋は看板娘のあーやと、用心棒のヨハンの物珍しさのおかげで連日盛況。シロジロもとと屋の番頭のおかげで船を四隻、騙されることなく購入できた。

あとはさゆりんからの吉報を待つだけなんだけど、音信不通。

信長は各地の反織田勢と朝廷を介して講和を結んでいっている。浅井朝倉、本願寺、三好三人衆とも一時休戦となった。危険な状態は外交でなんとか脱出できたというわけ。なのに、さゆりんは何をやっているんだ。

もしかして、死んじゃったのかな……。

「大丈夫ッスよ、旦那様。さゆりちゃんが簡単に殺されることないッスよ」

シロジロは船も手に入れられてお気楽モードだけれど、箸が手に

付かないおれ。だって一カ月近く戻ってこないんだぜ。ただ単に交渉するだけだっていうのにさ。おかしいだろ。

「旦那様、姐さんは甲賀流のくのいちの中で一、二を争うぐらいだったんです。四郎次郎様の言うように、そう簡単に死んだりしないはずです。兄様でさえ姐さんには適わないんですから」

そんなこと言ったってさ、あのサンザでさえ殺されちゃったんだ。昨日笑っていた人間が今日には死んでいる。そんなことが珍しくもない時代なんだ。

思えば、さゆりんを手下にしてから二年。摂津の豪族調略から始まり、池田城でおぶってもらい、鉄砲隊の結成に奔走し、金ヶ崎、姉川、そして再び摂津。

おれを三度も殺そうとしたのが与汰話ぐらいになってしまうほど、あいつはおれの与力として働いてきた。

小谷城下を焼き討ちしていたときに言っていたな。元々は戦争孤児なんだと。

もし、そのとき、親を失っていなければ、さゆりんはその辺にいる娘と変わらずに日々を過ごし、その辺の男と結婚していたんだろうな。

「帰ったで」

突然、早之介の姿をしたさゆりんが居間に入ってきて、おれは思わず立ち上がった。

「遅いじゃねえか！　一体、どこで何をしてやがったんだよ！」

「なんや。出し抜けに大きな声を出して。あんたのために駆け回っていたっていうのに、ねぎらいの言葉の一つもかけたらどうなんや」

さゆりんは顔をしかめながらシロジロの脇に座り、懐から二通の書状を取り出して、おれの足元にぽいと放ってきた。

「顕如と三好日向守に書かせた証文や。通行料は本願寺と三好、千五百貫を年三回や。最初の分は正月までに持ってこいやって。えらい吹っかけられたわ」

千五百……。おい……。

「そ、それでも、さゆりちゃん、顕如が直々に会ってくれたんスか」
さゆりんはこくりと頷く。あーやがお湯を持ってきて、それをごくごく飲み干すと、長い吐息を肩からついた。
「三人衆の筆頭格の三好日向守は吹っかけてくるだけの男やったけれど、顕如は疑い深い人間やった。説得するのに骨が折れたわ」
それに、と、さゆりんは、千五百貫というべらぼうな額におののいているおれに視線を向けてくる。
「ついでに池田に寄ってきたわ。池田の連中は野田・福島でこてんぱんにやられた借りを返そうとして躍起になっておる。これで火縄銃三百丁、信濃守のところに持ち込めば、あんたの策通りに事は進む」
「そ、そんなことよりよ、千五百貫なんて、どうやって捻出するんだよ」
「今井彦右衛門と会合衆に出させればええやん」
「で、できるわけねえだろっ！　火縄銃三百丁のうえに千五百貫を年三回出せなんて言えるわけがねえだろうが！」
「何を言っているんや。今井彦右衛門は淀川河口が通過できることでどれだけ儲けられるんや。私らを使って淀川の水運を一人占めできるんやで。そうしたら、千五百貫ぐらい痛くもかゆくもないやんか」
「一人占めするのはおれだっ！」
何を勘違いしているんだ、この小娘は。おれが買った船が淀川を往来するんだから、儲けは全部簗田ホールディングスのものに決まっているじゃねえか。船だけ走らせて、儲けは会長だなんて、そんなボランティア事業できるか。
口をぽかんと開けているさゆりん。
「いや、さゆりちゃん、あっしが見ることになっているから、大丈夫ッスよ」
「知らんよ、もう。どうなっても。寄進札や団子屋とは訳が違うんやで。こけたら取り返しがつかんからな」

「知らねえじゃねえよ。千五百貫も正月までにどうやって捻出するんだよ。この前持ってきた銭なんて五十貫も残ってねえからな！　年末の寄進札だって千五百も集まらねえだろうが！　団子屋の売り上げと合わせたって無理じゃんか！」

「知らん」

あーやによそってもらった味噌汁を啜り、ご飯をぱくぱくと食べ始めた小娘。

「知らねえじゃねえよ！　どうすんだよ、おいっ！」

さゆりん、無視。

「旦那様、正月もそうスけど、年に四千五百貫も支払うんじゃ、四隻だけだとやってけないッス。もう四隻ぐらい増やさないと割りに合わないッス」

おいおいおいおい。なんなんだよ、おい。もう四隻増やせってことは、更に六百貫必要ってことじゃねえかよ。全部で二千貫近くを正月までに用意しなくちゃならねえってことかよ。おいおいおいおい。

おれはその場に膝をつき、人目もはばからずに頭を抱えてしまう。

どうしようどうしよう。やっぱり、さゆりんの言う通り、今井会長に払わせて、ボランティアするしかねえのかよ。ウウッ。

築田ホールディングスの理念

クソクソクソ。

さゆりんがまさかボランティア精神で動いていただなんて思いもよらない出来事だ。あいつがきっちりと築田ホールディングスの理念を理解していれば、通行料をもう少し引き下げ、最初の支払いは三月ぐらいに引き伸ばしてきたはずだ。

いや、さゆりんがいくら粘っても、あいつらは千五百貫だったんだろうな。足元を見られているようなもんだからな。

千五百貫か……。なんていう重税なんだろ。横暴だ。チクショウ。しかも、船の追加購入で六百貫。ファック。

昔は沓掛城の隠し財産が七千貫しかないことに、なんでそんなに少ないんだなんて騒いでいたおれだけれど、火縄銃の調達や堺での暮らしをしているうちにはっきりとわかった。七千貫も貯め込んでいたマリオは個人的にはむかつくけれど名君だ。

もちろん沓掛城の隠し財産に手を出してここを凌ぐなんてこともできん。太郎やマリオに許可を得ないと手が付けられないし、理由が理由だ。本願寺や三好三人衆に支払うための金だなんて口が裂けても言えない。

おれは部屋の隅に置いてある木箱にちらりと視線を向ける。タナカから貰ってきたあの茶器は二千貫の価値があるそうだけど……。

いやいや、駄目だ駄目だ。あれはヘタレ村重に下剋上を起こさせるための宝刀なんだ。あの茶器はヘタレ村重に無料であげる。そうすることによって、初めて価値が出る茶器なんだ。天下を動かす茶器なんだ。二千貫ごときでは代えられない価値。そう、プライスレス。

だからといって、どうしたらいいのか。

奇進札の売り上げから入ってくる金が、だいたい四百から五百貫だとして、年末に入ってくるおれの俸禄が二百貫、太郎の俸禄が四

百貫。団子屋の売り上げが二百貫弱。ぐう。足らねえ。てか、おれと太郎の俸禄から家の者どもに俸禄を支払っていて、なおかつ岐阜の生活もあるんだから、手を出せるはずがねえ。

築田ホールディングス、ジ・エンド。もう駄目だ。バックレて岐阜に帰るしかねえ。うん。そうしよう。どのみち、おれなんかには無理な仕事だったんだ。そもそも、摂津の騒乱をおさめるだなんて不可能なんだ。会長も言っていたしな。陳腐だって。

てか、顕如と三好の直筆の証文があるんだし、これを会長に見せて、火縄銃三百丁だけ貰って岐阜に帰っちゃおうかな。詐欺だけど。会長は私腹を肥やしているからいいだろ。たまには騙されろ。

火縄銃が三百丁もあれば、沓掛勢復活だ。どうせ、長篠の戦いも近いことだし、宿敵山県クソサブロウを殺さなくちゃいけないっていうのもあるしな。一丁七十貫もする火縄銃がタダで三百丁も手に入るんだ。詐欺だろうがなんだろうが関係ねえ。

……。

いや、待てよ。一丁七十貫もする火縄銃が三百丁ってことは、およそ二万貫。会長がそれだけの数の火縄銃を無償で提供するってことにもびっくりだけど、その火縄銃を無償でおれに預けるってことだ。信長の御用商人の会長が自分の名義で池田勢に火縄銃を渡せるはずがない。池田勢に渡すってことは、おれが密かに回すってことだ。

ということは、おれが池田勢に一丁七十貫で火縄銃を売りつけることが……。しかも、それがバレたとしても、会長は声を大きくしておれを非難することができない。

ほほう。お主もワルよのう、築田左衛門尉。いやいや、ＣＥＯに比べたら、私なんかとてもとても。

ぐへへ。

まあ、一丁七十貫なんていう今井相場で売りつけようとしても、池田勢は飛びついてこないな。破格の値段で提供しないと。一丁三十貫。それでもおれに入ってくる金は九千貫。

（、￥Д￥´）
税金を支払い、船を買ってもお釣りが残る。フヒヒ。
おれは鼻息を荒くしながらシロジロを大声で呼んだ。シロジロがやって来ると、おれは興奮でどもりながら訊ねる。
「お、お前、あ、あら、荒木信濃守に会ったことは、あ、あったか」
「いや、ないッスけど」
「そ、そうか。じゃ、じゃあ、ちょっと耳を貸せ」
ひそひそ。ひそひそ。
「ええっ！？　だ、旦那様っ、そ、そんなことをしたら、堺での信用を失いかねないッスよ！」
「そんなのはシラネ。背に腹は変えられねえ。どちらにしろ、バレなきゃいいんだ。いや、お前がうまくやればバレない」
「あっしがうまくやるだなんて……」
「シロジロ」
おれはシロジロの両肩をがっちりと握り締める。
「これは絶対に負けられない戦いだ。大丈夫、お前ならできる。姉川のいくさを思い出せ。あれに比べたら屁でもねえことだろ」
「でも……」
「大丈夫、お前ならできる。お前ならできるお前ならできるお前ならできる。お前も自分ならできるって十回言ってみろ」
「はあ」
自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる自分ならできる。
「旦那様、なんかやれそうな気がしてきました」
「ぐへへ。そうだろ。銭儲けしたいだろ？　ん？」
「したいッス」
「銭儲けしたいか！」
「したいッス！」
「銭儲けしたいかーっ！」

「オーッ！」
「勝てるか？　おれたちは勝てるか？　このいくさにおれたちは勝てるかっ？」
「勝てる！　勝てる勝てる勝てるっ！」
「よし。行くぞ。明日、今井のところに行って証文を見せてくるから、火縄銃を確保できたらすぐに池田に行くぞ。わかったな！」
「はい！」
おれとシロジロは悪の目をぎらぎらとさせながら、こくりと頷き合った。
次の日、おれは今井会長のところに行き、証文を見せつけた。今井会長は信じられないといった様子で手を震わせながら証文を何度も何度も読み返す。
「確かに、顕如殿と日向守の花押です」
会長は証文を丁寧に折り畳んでおれに返してくると、目を瞑り、眉間を固めながら黙っていたけれど、しばらくすると首を縦に振った。
「かしこまりました。約束通り、火縄銃を流しましょう。しかし、築田殿。くれぐれもご内密にしてくださるように」
あったりめえじゃーん＾＾

賄賂を掴ませば大丈夫なもんなんスよ

敵地に忍びこむのは美濃の調略以来。

さゆりんと摂津池田に行ったときは逆に堂々としていたけれど、今回は勝手が違う。敵にも味方にも簗田左衛門尉がうろちょろしているのを知られてはならない。ヘタレ村重以外の誰にも知られてはならない。

ということで、呉服屋で買ってきた仕立ての良い着物をシロジロに対し、おれはほっかむりを被って、清州時代を彷彿とさせるつぎはぎだらけの半纏という出立ち。

もちろん、徒歩。クリツナは目立って仕方ないから。

休戦中ではあったけれど、堺から摂津池田への道のりは検問が何度もあった。ほとんどが三好勢か、それに味方している小豪族の検問だった。

ノーリスクなルートは石山や野田・福島を迂回し、高槻城主和田勢の領地を通過し、山陽道を西進し茨木城経由で池田に入るルートだけど、味方の検問だとデブのおれはすぐにバレてしまうので、ハイリスクなルートを通るしかなかった。

おれの半纏姿は似合っているのか怪しまれることもなく、シロジロが三河出身の京商人、茶屋四郎次郎だと名乗るとすんなり通過できた。検閲はもうちょっと厳しいものなのかなと思っていたけれど、検問をしている連中が体たらくな雑兵なので、もしも怪しまれたとしても賄賂を掴ませば大丈夫なもんなんスよ、と、シロジロが得意気に言う。

しかし、池田への道中、引っかかる点があった。

茶屋シロジロってなんだよ。

「いや、それが、さゆりちゃんが三好日向守のところに行ったさい、屋号はなんだって訊かれて、思いつかなかったさゆりちゃんは、あっしが団子茶屋だから、とっさに茶屋ですって言っちゃったみたい

なんスよ」

ワロスｗｗｗ　ダサすぎｗｗｗ　シロジロにぴったりの屋号。さゆりんのセンスには脱帽だわ。シロジロは一生、ヨハンと団子屋やってろや＾＾

で、池田に到着。風がびゅうびゅう吹いていて寒い。土埃が舞い、城下には活気がない。雑兵どもが野盗のように肩をいからせながら闊歩していれば、女や老人は伏し目がちに道の隅を歩き、軒並みの商店は店を開けてはいるものの、出入りする人の姿はどこも皆無と言っていいぐらい。

初めて摂津池田にやって来てから調度二年ぐらい。そのときも賑やかではなかったけれど、ここまで廃れてはいなかった。

人々は疲弊しきっている。元々から平和な地域ではなかったけれども、この二年は摂津池田にとっては激動だった。信長が攻めてきて、その後は一時落ち着いたものの、城内ではクーデターが起こり、政情が不安定になったところで、今度の野田・福島での騒乱。本願寺の参戦で信長は攻めてこなかったけれども、一度、苦い思いをしているこの地の人々にしてみれば、もしも、今度信長がやって来たらただじゃ済まされないと思っているはずだ。

小谷城下の焼き討ちの件だってある。まあ、遠く北近江の出来事を摂津池田の民衆が知っているかどうかだけれども。

とはいえ、子供だけは元気だった。背丈がばらばらの男の子女の子五人ぐらいが、一つの竹とんぼを飛ばし、追いかけ、遊んでいた。

池田城の裏手にそびえる山はすっかり枯れて赤茶けている。

ヘタレ村重の屋敷の前には雑兵が二人、門を固めていた。あらかじめ用意していた差し出し人タナカの書状を雑兵に渡すと、雑兵たちは訝しい目を送って来たものの、シロジロがこいつらの懐を温め、雑兵の一人が屋敷の中に入っていく。

「これはこれとして頂戴しておくが、お前はどこかで見たことがあるな」

と、残った一人の雑兵がおれをじろーっと見てくる。偉っそうに

しやがって。
「どこかで見たことがあるも何も、おれは池田を救ってやった男だぞ。それがなんだ、この城下のざまは。お前らは恥ずかしくないのか」
と、喉元から言葉が出かかったけれど、こらえた。
「まあいい」
何がまあいいだ。民衆を騒乱に巻き込んでまで池田筑後守を追い出したかったのか。いや、こいつはただの雑兵だ。ただただ雇われているこいつに矛先を向けるのは筋違いだ。町が殺伐としていると、人々の心も荒むんだろう。
もう一方の雑兵が戻って来た。さきほどとは打って変わって、
「い、今、門を開けますので」
と、めっちゃへこへこしている。ふむ。誰に何を言われたのかはわからんが、主人も掌返し民だったら、下僕も掌返しか。
開け放たれた門をくぐると、ヘタレの配下が待ち構えていて、こそこそと近寄って来ると、声を小さくした。
「どうぞ、中へ」
通い慣れた家の中を、シロジロの付き人のようにして腰も低く行く。内心は廊下を行けば行くほど腹立たしくなってきた。いや、いかん。今日はヘタレを説得しに来たんだ。落ち着け、牛太郎。じゃなかった、左衛門尉。
居間に入ると、じきに主人が来るので待っていてくれと言い残し、配下は戸を閉めていった。
腰を下ろすと、シロジロがかちこちになりながら床の一点をじいっと見つめている。
「落ち着け。大丈夫だ」
おれが言うと、シロジロは真顔でうなずく。馬鹿が。ここまで緊張しているゼニゲバモンスターがいるかよ。会長みたいにもうちょっとふてぶてしくしてほしいけど、でも、まあ、無理だな。
やがて、戸が開き、振り返ると、ヘタレ村重がうつむきながら立

っていた。そろそろと足を踏み入れ、戸が閉まる。
「や、や、やな、簗田、ど、殿……」
ただでさえ自信なさげな口調だというのに、更に生気を失ったような声で、おれは思わず溜め息。
「まあ、とりあえず話しましょうよ」
おれの言葉にヘタレはすごすごとおれたちの向かいの上座に腰を下ろし、早速、額を床にこすりつけた。
「せ、拙者は――」
「いいッスよ、もう」
と、心にもない愛。だって、ヘタレにはおれの言うことを聞いてもらわなくちゃならないんだから。下手に攻撃するより、器の大きさを示さんとな。
本当は茶器ごときで、って言いたいところだけど、この後、おれも茶器を差し出すわけだし。
「別に村重殿をどうこう責めるつもりはないですから。信長様を裏切ったのは池田九右衛門殿であって、村重殿は主人の命令に従う他なかった。そうでしょう？」
おれがしとやかに言うと、ヘタレはしばらく微動だにしなかったけれど、やがて、こくっと頷いた。
ふざけやがって。お前が黒幕だなんてわかっているんだ。池田九右衛門は自分の野心だけで筑後守を追い出したのかもしれないが、三好三人衆側についたのは、ヘタレが茶器を貰ったからだ。
でも、今は言わない。下剋上を起こしたあとで思い切り罵ってやる。
「あっしは村重殿が裏切ったとは思っていませんよ」
口をぎゅうっと結んで、視線を伏せているヘタレ。後ろめたさ全開。
「村重殿が敵方だろうがなんだろうが、親友に変わりありません」
「せ、せ、拙者も、拙者も、簗田殿は、簗田殿とは、何も臆することなく、なく、茶を嗜みたい」

目が赤くなるヘタレ。むう。そこまで友達扱いされると、逆に腰が引けてしまう。おれのどこがいいのかわからない。

でも、今はそんなことをいちいち考えている場合じゃない。おれは堺から持ってきた箱の風呂敷を解き、中から例の茶碗を取り出した。

ヘタレの目の色が変わった。

「そ、それは……」

「村重殿が御所望されていたとタナカさんから聞き、無理を言って譲ってもらった。今まで村重殿には世話になったからな。甲冑もそうだし、堺のタナカさんを紹介してもらったのもそうだ。村重殿には数えきれない恩がある。もう二度とこうして会えないかもしれないから、生涯の友の証として、是非、これを受け取ってくれ」

おれは茶碗をヘタレの前に差し出した。ヘタレは震わせる手を茶碗に伸ばしていく。

「これは……、これは――」

ヘタレは血走った目を茶碗に注ぎ込みながら、乳白色のそれを両手で抱えるように手にした。

「ほ、本当に、本当に良いの、でしょうか」

遠慮もせずに、ヘタレはおれを上目遣いに伺ってくる。物乞いのようにぎらついている。単純なのか、無邪気なのか、それとも、欲望が充実しすぎているのか、二千貫もの名物をおれが無償でくれてやろうとしていることに疑いの余地もない眼差し。

ここまでひどいと、恩もへったくれも感じなさそうな人間に見えてきたけれど、じゃあ、茶碗の見返りに下剋上を起こせなんていう野暮ったい真似はしたくない。というか、下剋上の勇気と茶碗への欲望、ヘタレの中ではどちらが勝つのかどうかだ。

もしも、ヘタレが、「下剋上を起こすぐらいならいらない」と言われたらそこまでになってしまう。だから、とにかく、この茶碗はヘタレに持たせなくちゃいけない。

それでも、単にくれてやるだけだと、こいつは勘違いしそうなので、おれはヘタレと合わせる目に力を込める。この茶碗をくれてやることがどういうことなのかわかっているんだろうな、と、言わんばかりに眼光を鋭くさせ、声を低くさせる。

「ええ。どうぞ」

ヘタレの目は一瞬泳いだ。しかし、おれは間髪入れずに木箱もヘタレの前に差し出した。ヘタレはもう一度茶碗を見つめたあと、震える手で茶碗を木箱の中にしまっていった。

「それと、村重殿。紹介が遅れましたけれど、こちらは京で商いを営んでいる茶屋四郎次郎殿です」

「お初にお目にかかります。荒木信濃守様にお会いできて、あっしも光栄ッス」

おい……。おれがこれだけ凄んだっていうのに、なんなんだよ。あっしとか、なんとかッスとか、迫力ゼロじゃねえかよ。馬鹿が……。

「はあ。茶屋、四郎次郎殿……ですか」
　ヘタレの表情にシロジロへの怪しさが滲み出てきて、おれはあわてて口を挟む。
「いや、村重殿、今日、ここに茶屋殿を連れてきたのは、村重殿、あなたに摂津を治めてもらいたいからです」
「せ、拙者に？」
「そうです。村重殿にです。村重殿、本当にこのままでいいんですか」
「と、というのは」
「摂津池田の城下ですよ。ぼろぼろではないですか。なんなんですか、このざまは。民衆はいくさに怯えて暮らし、雑兵たちが肩で風を切って歩く。なんなんですか。あなたのような教養のある方がこの様子になんとも思われないのか」
「い、いや……し、しかし」
「主人がしたことだからと言うんですか」
　おれの舌鋒鋭さにおどおどと視線を伏せるヘタレ。
「領主や武将なんていうのは、そもそも、民衆から巻き上げる米や税で暮らしているんでしょ。だったら、そいつらの生活を守ってやるってのが筋じゃないんですか。それが領主のあるべき姿じゃないんスか」
　もはや、がくりとうなだれているヘタレ村重。
「村重殿、あんたは今まで遊びすぎた。茶の湯を学ぶのも大切なことだけれど、武将にしかできないこともやるべきだ」
「し、しかし、しかし、簗田殿。拙者なんかに、何が、何が」
「何ができるかなんかじゃない！　何をするべきかなんだ！」
　男、簗田左衛門尉の言葉に固まるヘタレ。ぽかんとするシロジロの馬鹿。
「男っていうものは、今置かれている自分の立場の中で、もがき苦しみ、のたうちまわりながらも、この立場の中で成すべきことを成せるまで血みどろになりながら自分自身と戦い続けることが男だ」

むう。自分で言って、自分に言われているような気がせんでもないけれど、確かに、今、おれは摂津をどうにかしようとして戦っているんだから、間違いではないよな。

「村重殿が成すべきことは、摂津に生きている者として、この騒乱に終止符を打つことではないですか」

おれはうつむいて固まっているヘタレ村重を尻目に、ちらりとシロジロに視線をくれた。ぽかんとしているだけだったシロジロだけど、おれの視線に目を本気にさせると、口を開いた。

「信濃守様、あっしは三百丁の火縄銃をとある筋から仕入れたんス。破格の値で提供します」

「村重殿、その火縄銃で伊丹、茨木、高槻を攻め滅ぼしてください」

途端、ヘタレは顔をがばっと起こした。

「い、い、い、今、今、な、なんと」

「織田方の豪族たちを攻めなさいと言ったんです。村重殿が池田勢の主導権を握り、池田勢を三好や本願寺よりも勢力を拡大させなさい。そして、村重殿、今度はあなたが池田九右衛門を追い出し、この摂津を治めなさい」

ヘタレは唖然としながらも、目の色を変えておれと向き合っていた。

「そのときになったら、織田上総介が荒木信濃守村重に味方するのはあっしが保証する。裏切ったのはあなたじゃない。池田九右衛門なんだ」

まあ、とにかく、と言葉を繋げながらおれは姿勢を崩した。

「今はまず、火縄銃三百丁で軍備を増強しなさい。兵数は増えなくても、最新の武器を備えればいくさには勝てる。だって、あっしが金ヶ崎で証明したじゃないですか」

「一丁、三十五貫でお譲りいたします」

「さ、さ、三十、ご、五貫！？」

飛び跳ねたヘタレにシロジロがこくりと頷く。こいつ。三十貫だって言っていたのに、五貫乗せやがった。なかなか、不逞な野郎じ

ゃねえか＾＾
「さ、三十五貫など、そ、そんな値で火縄銃が……」
「年末までにはお持ちするんで。そのときに確かめてください。粗悪品か、それとも実戦で通用できる品物か」
「村重殿、もしも、まっとうな火縄銃であれば購入されますよね。こんな話、今後一切ないと思いますよ」
「し、しかし、なな、なぜ、この池田にそのような話を。や、簗田殿が受ければよい話では」
「だから、言ったでしょう。あっしの今するべきことは、これなんですよ。摂津池田をもう一度救うことなんスよ。それに、村重殿、あっしはあなたが親友だからこの話を持ってきたんだ。なんの気兼ねもなく付き合いたい。敵同士だなんてあんまりじゃないですか」
ヘタレはまたうなだれた。そうして、ちらりと茶碗の入った木箱に視線をやった。
「どうッスか、信濃守様」
「か、かしこまりました。もし、それが、それが、れっきとした火縄銃だったら、そ、そのときに、一丁三十五貫と交換、交換しましょう」
キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――!!!!!
ぼろ儲けキタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――!!!!!
九千貫＋千五百貫の商談成立キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――!!!!!
フヒヒ。簗田ホールディングスの大躍進だ。一万五百貫が手に入ったら、追加の船は四隻どころじゃなくて、でっかい大型船を建造させちまおう。フヒヒ。
ただ、掌返しのヘタレ村重だから、シロジロと仮契約の証文を交わさせる。
池田勢が一万貫も持っているのかどうか不明だが、足らなかったら足らなかったで利息付きで貸してやるわ。簗田フードサービス、簗田商船に加えて、簗田ファイナンスも展開できるからな。とりあ

えずは目の前の二千貫だけ入ればいいんだから、残りの八千五百貫は貸してやってもいいんだぜ。
　む。年率１０パーセントだったら、利子は八百五十貫か。むむむ。
「それより、村重殿。池田には火縄銃三百丁を購入する一万貫があるのでしょうか」
「あ、あるには、ありますけど、い、一万貫を全部という、わけには。な、なので、百丁ぐらいなら」
「だったら、茶屋殿に借りればいいのではないですか。百丁分の三千五百貫は最初におさめ、残りの二百丁分は後々、年に三回ぐらいに分けて返済していけば。茶屋殿は両替商もやっていますから、えーと、年率は九分五厘ぐらいでしたっけ」
　おれはそう言いながら、急な事業展開にあわてたふうのシロジロをギロリと睨みつけた。
「そ、そうッス。九分五厘ッス」
「さ、左様ですか。な、なら、茶屋殿に借り受けして、三百丁を手にしたほうが、い、池田のためですな」
キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――――！！！！！
事業拡大キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――――！！！！！
ぷぷぷ。ヘタレはボンボン息子の道楽野郎だから何の疑いもなく交渉成立させてくれるぜ。なんて、ぼろい客なんだ。これからはお得意先として荒木信濃守村重様を大切にしていかないとなｗ

議事録

摂津池田の城下で一泊し、翌日、堺へと出立した。
「お前、なかなかやるじゃないか。三十貫だって言ったのに、五貫上乗せして」
「いやあ、なんか、旦那様が信濃守様をねじ伏せていたんで、信濃守様が言うことをなんでも聞くんじゃないかって思ったんスよ」
「ほほう。お前、見ているところはきっちり見ているんだな」
「いやいや、旦那様ほどじゃないッスよ。あっしはびっくりしましたよ。利子を付けて貸し付けるだなんて。前から考えていたことなんスか」
「違う。とっさに閃いた。一万貫なんて、摂津のしょっぱい豪族じゃなかなか用意できない額だからな」
「そうなんスか。旦那様って商売にかけては機転が利きますよね。あっしも見習いたいッスよ」
「おうおう。見習え見習え。おれを見習ってがっぽりがっつり稼げ稼げ」
しめしめと笑い合いながら、足取りも軽やかに堺に入った。早速、シロジロは火縄銃を運搬するために馬借屋に向かい、おれは今井会長やタナカに首尾よくいったことを報告。
「これで摂津はどうなるか。吉と出るか凶と出るか」
と、今井会長はビビって難しい顔をしていたが、とと屋に行くとタナカはにこりと微笑んだ。
「またこれで摂津は騒乱の渦ですな」
タナカ、お主もワルよのう。
仮屋敷の我が家に戻り、ご飯を食べながら会議。

第二回築田ホールディングス戦略会議

日時　元亀元年十二月十八日　酉の刻

場所　簗田ＣＥＯ別邸　居間

出席者　簗田政綱／簗田ＨＤ最高経営責任者　吉田さゆり／簗田ＨＤ執行責任者　茶屋清延／簗田フードサービス代表　石川彩／簗田フードサービスチーフマネージャー　鉢巻栗之介／ＣＥＯ付運転手

欠席者　簗田広正／簗田ＨＤ監査役　石川良信／簗田ＨＤ人材サービス部部長

議題

・摂津国池田勢との火縄銃受け渡し日と立会者の選定について

・簗田商船のマーケティング戦略と従業員確保について

・畿内の情勢及び、諸国大名の動向における簗田ＨＤの展開について

決定事項

・火縄銃受け渡し日は元亀元年十二月二十三日とし、堺への運搬途中、受け取った三千　五百貫のうちの千五百貫を本願寺及び三好に支払う。立会人は茶屋代表及び、ＣＥＯ代理として吉田執行役。

・簗田商船の営業開始日は元亀元年二月一日とし、それまでに船隻の確保、従業員二十四名の雇用を命題とする。

・簗田商船顧客の確保は、今井彦右衛門、とと屋と連携していくことで販促活動とする。

・摂津池田荒木信濃守村重の動向に注意しつつ、中川瀬兵衛清秀などにも贈呈物を送りながら、提携を深めていく。伊丹、茨木、高槻

などの配下武将等には吉田執行役が接触をはかり、摂津衆の足並みを乱していく。

・簗田監査役の動向に注意。

以上

「大したもんやな。商人になったほうがええんやないの。あんたの商売は小悪党向きや」

と、味噌汁を啜る不機嫌なさゆりん。

「お前も悪の徒党を組んでいるうちの一人だ。そこのところ肝に銘じとけよ」

さゆりんは鼻で笑う。

「なんや、悪の徒党って。かすり銭で商売している小者やないか。そもそも、左衛門太郎や岐阜の奥方に知られたら即座に終了のくせに」

「お前……。裏切ったらただじゃ置かないからな」

「はいはい」

まったく。女狐のくせに、おれがちょっとでもこざかしいことをしようとすると臍を曲げるんだもんな。まあ、今までもなんだかんだ騒いでも仕事はこなしてきたから、あとのことは執行役のさゆりんに任せて、そろそろ信長の顔でも拝んでおかないとな。いくら、何も言われていないとはいえ、いつまでも何の報告もせずにほっつき歩いていたらまずいからな。

ということで、翌日、おれはねじり鉢巻きとともに京へ。

ところが、京の市中に到着してみると、昨日、信長が軍勢を引き連れて岐阜に帰ったことを知り、おれは悩んだ。信長のあとを追って岐阜に向かうと、京との往復は一週間ちょっとかかる。今年の年末は簗田ホールディングスにとって非常に重要だ。さゆりんやシロジロに任せているとはいえ、ＣＥＯのおれもいつでも動けるように

しておかなければならない。
なので、信長に会うのは来年に持ち越すことにした。とりあえず、京で一泊し、明日、また堺に戻ろう。
ただ、一応のところ、京都所司代の村井ジジイに会いに行くことに。
「おお。牛太郎。息災であったかの」
ジジイは声も表情もはきはきとしていて、白髭もつやつやしている。
「おかげさまで、病や怪我などとは無縁の生活でございます」
「ふむふむ。元気でなによりじゃ。しかし、羨ましいのう。倅の左衛門太郎が出来た息子だから、隠居生活も安心しておられよう。わしにも息子がおれば、老体に鞭を打つことはなかったんだがなあ」
何を言ってんだ、このジジイ。
「いや、あっしは隠居なんてしていませんが」
「はて？　牛太郎はこたびの各地のいくさに参加していなかったと聞くが。代わりに息子の左衛門太郎が沓掛の衆を率いておったんじゃろう」
「いやいや、あっしは堺におりまして、摂津の調略に勤しんでいただけで、隠居なんてしていません」
「摂津の調略？　ふむ。ならば、成果はあげられなかったということかの。池田勢は寝返り、本願寺は挙兵し、おやかたはさんざんであったからの」
むう。なんだか、遠回しに非難されているような気が。
もしや、家中の連中にはそういうふうに見られているのかな。野田・福島攻めのときのゴンロクは優しかったけれど、あいつはあずにゃん怖さで優しくしてくるだけだしな。
これは、信長に会ってしまうと怒られそうな予感。
ジジイによると、明智十兵衛も京に残っているらしく、家中の連中の目が気になってきたおれは、それとなく訊ねようと十兵衛の屋敷へ。

日はすっかり暮れていたけれど、突然のおれの訪問に自ら玄関に出てきた十兵衛は驚きながらも快く屋敷の中に上げてくれた。
ただ、居間には先客がいた。袈裟を着ている禿げ頭。どっかの若い坊主。
「簗田殿、こちらは相国寺の承兌殿です。お若いですが、拙者も舌を巻くほどの学識をお持ちの方です」
「いえいえ、明智様にご教示を頂いている身分でございます。簗田左衛門尉様の噂はかねがね耳にしております。これを機会に是非ともこの若輩者にご鞭撻のほどよろしくお願いいたします」
爽やかにそう言って、軽く頭を下げてきた若坊主。ほほう。おれを左衛門尉様と呼ぶなんて、なかなか見所のある坊主じゃないか。
「それでは、お邪魔になってはいけませんので、拙僧はこのぐらいで」
と、腰を上げ、若坊主はおれと十兵衛に会釈を残して去っていった。

「あ。そういえば、簗田殿は下戸でしたな」
徳利の中を碗に注ぎ込もうとしていた手を、そう言って止めた十兵衛。
「一口ぐらいなら大丈夫ッス」
「左様ですか。ならば。拙者も大して飲めませんので」
と、目尻の皺を集めてにこりと笑った。
お互いに碗を顔の高さまで掲げて、ぐいと飲み干す。温かいけどまずい。十兵衛はほうっと吐息を漏らす。結構好きなんじゃねえのか。
「京は冷えますゆえ、燗をするに限りますな」
ほら。仕方ないから徳利を手にして注いでやる。十兵衛は今度はちびりと舐めて、ほんのりと赤らめた頬を緩ませた。
「今年は西に東にとまったく激しい一年でしたが、左衛門太郎殿にとっては飛躍の一年だったでしょう。簗田殿もさぞかし鼻が高いのでは」
また、太郎の話かよ。むう。いまだ、太郎はあいりんと結婚してねえしな。義父の座を懲りずに狙ってやがるのか。
「生意気で仕方ありません」
「はっは。まあ、そういう年頃なのでしょう。なにしろ、年頃の息子に手を焼いているのは簗田殿だけではない様子ですよ。上総介殿のご嫡男、奇妙丸殿もなかなか少年らしい頑固者だとか」
「へえ。そうなんスか。信長様が手を焼いているんスか。意外ッスね」
「いや、まあ、上総介殿はああいう性格ですから手を焼いているというほどではないでしょうが、あのような偉大な人を父に持ちながらも、父親の言うことを鵜呑みにしているというわけでもなく、ときには口答えもするそうで」

十兵衛はにこにこと言う。信長に面と向かって逆らえる子供がいるってことがよっぽど嬉しいらしい。ま、おれもおもしろいけれど。

「上総介殿のお子ですからな。蛙の子は蛙。奇妙丸殿も己の考えを捻じ曲げてまで人に従うような性分ではないのでしょう」

十兵衛って口が軽いよな。おれの前でだけなのかもしれないけれど。

「お子と言えば、森三左衛門殿の次男の勝三殿が元服し、森家の家督を継ぐようですな」

「えっ？　カツゾウ君がですか？　だって、あの子はまだ子供じゃ。太郎よりも子供だったはずですよ」

「ええ。齢まだ十二だと聞きます。しかし、三左衛門殿も討死にされ、ご嫡男の博兵衛殿も春先の金ヶ崎、手筒山攻めで討死にされてしまわれた。森家は十二歳の勝三殿、他は五歳か四歳の弟ばかりだそうで。戦国の世の習いとはいえ、なんとも胸が痛みますな」

ウソ……。手筒山攻めのとき、サンザの息子って死んでいたの……。でも、サンザって、そんな素振りを全然見せていなかったじゃん……。

おれは空の碗の中をしばらく見つめたあと、徳利を掴み、なみなみ注いだ酒を一気にあおった。

熱いものが体中を駆け廻り、押し出したような息が口からこぼれた。

「あの人は尾張武者の誉です」

おれが首を垂らしながら呟くと、十兵衛はうなずいた。

「戦国に生きる武者の誉でしょう。拙者も一度でいいからこうして三左衛門殿と酒を酌み交わしたかった」

十兵衛は手酌で酒を注ぎ、また、ちびりと啜る。鉄皿の上のろうそくの火がおれと十兵衛の影をゆらゆらと映し出す。

おれは言葉を失った時間の中で思った。織田家中の人間の目を気にしていただなんて愚かしいことだ。おれはおれのやるべきことをやっている。サンザに命じられた通り、摂津をどうにかしようとし

ている。
　今はその過程の中なんだ。今、どう思われていようと構わないじゃないか。結果を出せばいいんだ。
「話は変わりますが、簗田殿。堺におられるそうですが、今、何をされておられるのでしょう」
　おれは碗を握る手に力を込めた。
「工作です。兵を使わず、信長様の手をわずらわせることもせず、摂津をもう一度織田方に戻させてみせます。今はその工作をしているとしか言えません」
「左様でございますか」
「姉川でのいくさが終わったあと、摂津池田で謀反が起きたという伝令が岐阜に入り、あっしは三左衛門殿から摂津に飛べと命じられました。亡き三左衛門殿のためにあっしが出来ることは、摂津をもう一度信長様の手の内にすることです」
　十兵衛は黙った。床のある一点をじいっと見つめたあと、酒をちびりと啜った。そうして、また黙った。
　信長の手の内というおれの言葉に十兵衛はなんとも言えない気分になったんだろう。摂津は織田方という名目で足利幕臣の豪族がひしめく場所だ。高槻城の和田惟政に至っては義昭の元からの直臣だ。
「簗田殿は以前にも申されました。公方様と上総介殿の対立は決定的になると。もしも、そうなったら、拙者は上総介殿に付く他ないでしょう」
　酒に酔っているせいなのか、はたまた、言いたくて仕方なかったことなのか、十兵衛のこぼした言葉におれはちょっとばかり驚いた。
「どうしてですか」
「公方様に天下は任せられませぬ。恥ずかしいことではありますが、上洛してから初めてわかりました。足利義昭という人の凡庸さと、それに、足利幕府というものがこの時代にそぐわないことも」
「でも、義昭様が反織田に回ったら、信長様は四面楚歌になりますよ。それでも、十兵衛殿は信長様にお味方するってことなんですか」

「左様」
持ち上げてきた十兵衛の目が光った。口端を真一文字に結び、覚悟を示すような厳しい顔つきだ。
「日が経って腐った魚は捨てなければなりませぬ。同じように、腐った形式は捨てなければなりませぬ」
おかしい。十兵衛は間違いなく明智光秀なんだ。おれが知っている明智光秀とは革新的な信長に付いていけない古き良き時代を尊重する人物だ。
でも、目の前の明智十兵衛光秀はなんだか違う。本当にこいつが本能寺の変を起こすのか？
「まあ、築田殿の予言が当たったらの話ですが」
と、顔つきを緩ませて、酒を注いできた十兵衛。
「それはもとより、摂津での工作とは難儀なものでしょう。元から魑魅魍魎が跋扈している地域。本願寺も参戦してきてより複雑な情勢になってきました。これは拙者の考えですが、一人、知恵者を付けてみては」
知恵者？　そんなのバッタがいるからいいけど。大っぴらには言えないようなことをしているから、外部の人間は取り込みたくないし。
「先程の若い僧は修行中の身とは思えぬ見識の持ち主です。考え方もその辺りの坊主のように杓子定規におさまっておりません。築田殿、一度、承兌殿を訪ねてみては」
別にいいよ。なんて言えないもんな。
「そうッスね。そのうち、相談に上がらせてもらいましょう」
そんなことより、
「そんなことより、十兵衛殿、三左衛門殿の墓は岐阜にあるんですか」
「墓ですか？」
「はい。なんか、今年中に墓参りに行きたくなりました。あっしは霊だの仏だの信じないほうですけど、自分の気持ちとして、三左衛

門殿にお会いしたくなった」
「左様ですか」
十兵衛は口端を緩ませながら酒をちびりと啜った。

小一郎奮戦（1）

木下小一郎の元に一通の書状が届いた。

いつになったら貸した金を返してくれるのか。

京の商人からである。小一郎は頭を抱える。今に始まったことではない。兄の無頓着ぶりには呆れ尽くした。

小一郎は筆を取り、貸主に詫び状をしたためた。もうしばらく待ってくれ。

文を折り畳むと、自然、溜め息が出る。下げても下げても下げる頭は足りない。派手を好み、家臣を無計画に増やしていく兄。どれだけ言っても聞かないのだから、永遠に終わることのない悩みだ。

文を従者に渡すと、小一郎は兄のもとに向かった。とりあえず、催促が来たことだけは伝える。とりあえずは。

「にゃっはーっ！」

廊下を行っていると、兄の居室の障子戸が奇声とともにばちんと開いた。小一郎は眉をしかめてしまう。また、何かしら思いついて買い物でもするつもりなのだろうか。それとも、家臣を増やすのだろうか。

「にゃあ！　小一郎！」

と、弟の姿を見つけたなり、どたどたと子供のようなはしゃぎようで駆け寄って来た。

「何事なんですか、兄さん。もう、金銭は底をついておりますよ」

「おみゃあ、何をつまらんことを行っているだぎゃ。見るだぎゃ。これを見るだぎゃ！」

兄は自分より背丈のある小一郎に一通の書状を広げ出してきた。毎度毎度、何かにつけてはしゃいでいる兄だから、小一郎は訝りながら書状に目を凝らした。

佐和山城は織田に従う。磯野員昌――。

「こ、これは本物ですか、兄さん」

「本物に決まっているだぎゃあ。どうして、嘘っぱちをおみゃあに見せるんだぎゃ。これは本物だぎゃ。佐和山城は落ちたんだぎゃ！」

にわかには信じられなかった。確かに策を弄していた。小谷城に向けて、磯野員昌が木下藤吉郎に翻意有りとの流言を絶えず流していたのだ。

横山城の占拠によって北近江は分断され、佐和山城は孤立している状態であったが、琵琶湖を通じて小谷城からの支援輸送があった。もしも、それがなくなれば、佐和山城は木下勢に降伏するか、玉砕するか、そのどちらでしかない。

どうやら、小谷城は流言を信じ、支援を止めたらしい。姉川のいくさで獅子奮迅の活躍を見せた磯野員昌を切り捨てるとは、愚行にも思えてくるが、磯野員昌は古くからの浅井の人間ではないゆえ、信用しきれなかったのかもしれない。

ただ、磯野も磯野だ。もう少し骨のある男だと小一郎は思っていたが、打って出ずに降伏を申し出てくるとは、やはり戦国の世のあるべき姿なのか。

とにかく、兄ははしゃいでいる。なにしろ、この調略を仕切っていたのは竹中半兵衛ではなく、藤吉郎だったのだ。

「おみゃあ、これで浅井を弱らせ、滅ぼせば、おやかた様はきっとおりゃあに北近江の半分ぐらいはくれるに違いにゃあ」

と、瞳をきらきらと輝かせる。小一郎は力なく笑う。

「そんなことよりも、今は目の前のことを解決するのが兄さんの仕事じゃないんですか」

「にゃあ？　目の前のことは解決したぎゃあ。次は小谷城だぎゃ。小谷城だぎゃあ！」

にゃっはっは、と笑い声を上げると、小一郎を押しのけて、半兵衛、半兵衛、と、大きな声を城内に響かせながら去っていってしまった。

小一郎はやはり溜め息をついた。本気で北近江の半分を頂けると思っているのだろうか。いや、勝手に思い込んでいるだけだ。岐阜

のおやかたの口からそのような言葉が出たふうでもないし、そんな様子さえない。

横山城を守れ。

兄が命じられたのはたったそれだけだ。それなのに、兄はこの局面を、出世頭の自らが織田家中の中でついに抜け出す最大の好機だと勝手に位置づけている。勝手に浅井領を頂戴できると決め込んでいる。

横山城番を始めたときから、妄想に耽っている兄を小一郎は何度も諫めたが、岐阜のおやかたはそういう男だの一点張りである。

そもそも、おかしいのだ、と、兄は言う。自分はいまだ城を与えられていない。柴田・森・佐久間などは古い家臣だからわかるが、簗田左衛門尉はただの野良牛だったのだ。そんな野良牛が城を持っていて、大出世者の自分が城を与えられていないのはおかしい。

いやいや、おかしいんじゃないんだぎゃ。おりゃあには取って置きの褒賞があるんだぎゃ。それは北近江二十万石の半分だぎゃ。出世頭にふさわしい褒賞だと思わないかえ？

なんていう野心家なんだろう。飽くなき欲求である。手に入れても手に入れても次のものを手に入れようとする。それが木下藤吉郎秀吉だ。

もっとも、その尻拭いをさせられているのは他でもない弟の自分である。夢を見るのもいいが、たまには足元も見てほしいものだ。

結局、返済の催促が来ていることを兄には伝えられず、小一郎は自室に戻った。

「小一郎様、文が届いております」

従者から受け取ると、差出人は簗田左衛門太郎だった。正月の岐阜城への参賀の折りに顔を合わせたというのにまめな若者である。

小一郎は頬を緩めながら、書面を開く。

左衛門太郎は、姉川のいくさ以来、半年以上も戦線に身を置いている木下勢を慮りながらも、正月参賀のさい、各諸将は稲葉山に姿を見せたというのに、自分の父は戦線に出ているわけでもないのに

やって来なかったことに対して憤っていた。ひどく力がこもっている文面なので、相当頭に来ているらしい。

おやかたはなぜか気に留めていないが、重臣たちが怒り心頭で、息子の自分が皮肉に罵声にとさんざん浴びせられた。息子のしようを咎められるのならわかるが、父のしようを咎められるとは何て情けないことなのだろう。

その旨を文にして堺の父に送りつけてやったが、無視されている。母にも愚痴ってみたものの、母も母でおやかたが怒っていないのならばよいではないかと言う始末。

なんとも情けない。なんとも情けない。拙者はどうすればよいのでしょうか、小一郎様。

小一郎は読み終えて、くすりと笑ってしまった。健気であるなあ、と。そしてまた、自分と似ているな、とも。

小一郎奮戦（2）

膠着状態が続いた。

近江、摂津、伊勢の各戦線ともに、巣ごもりでもしている熊のように織田も反織田も冬の間、おとなしかった。

借金の催促もおとなしい。

「どうされました、小一郎殿。打つ前から首を傾げてしまって」

碁盤を挟んで向き合う半兵衛に言われて、小一郎はあわてて碁石を手にした。

「また、何か悩み事でもおありですか？」

「いや、悩みというわけではないのですが、なんだか近頃妙で」

小一郎は石を置いていく。半兵衛は間髪入れずに応戦してくる。

「妙と言うのは？」

「まあ、いつもの兄さんの借金のことなのですが、近頃、めっきりと督促がないのです」

半兵衛は手を止めると、小一郎に切れ長の瞼を上げてきた。

「小一郎殿はご存知ないのですか？」

「存じていない？」

「殿は借りた金を全部返しましたぞ。堺の簗田殿に無心して」

「えっ？」

そういえば、いっときの間、兄は横山城から姿を消していた。再び見かけた日は部屋にこもって茶器をしげしげと眺めていたときだ。また、無駄な買い物をしたのかと辟易したが、催促がなくなったのは、言われてみればその日からかもしれない。

「し、しかし、兄さんの借金は二百貫近くあったんですよ。そんな額を簗田殿が持ち合わせているとは」

「拙者も不思議に思ったのですが、簗田殿は百丁以上の火縄銃を突然手に入れたぐらいですから、おそらく、堺の商人たちに顔が利くのでしょう」

それに、と、半兵衛は苦々しく笑う。

「おおかた、殿は簗田殿をたぶらかしたか騙したのでしょうな。簗田殿から聞いたことがあるのですが、清州にいたときはさんざん利用されたらしいですから」

それはもちろん小一郎も知っていることだ。人手を増やそうと躍起になっていた兄は、妹のあさひに簗田左衛門尉の世話をさせて自分の家来にさせようと企んでいたが、左衛門尉がよもやの出世をしてしまったので、計画は頓挫した。

それに、仲が悪いようでいて良い。左衛門尉が兄に簡単に金を貸すとは思えないが、兄がしつこく泣きついたのだろう。

ともかく、同僚にまで借金をするとは情けない限りだ。

半兵衛との対局にぼろぼろに負けたあと、その足で小一郎は兄の部屋を訪ねたが、戸を開けた途端、溜め息がこぼれてしまう。

どこでどう拾ってきたのか、兄はにやつきながら女の着物の袖を掴んで、顔をしかめている女にしつこく言い寄っている最中であった。

「兄さんっ！　何をやっているのですか！」

小一郎はずかずかと部屋の中に上がり込み、助平な兄の手を女から引き剥がすと、女を部屋の外に逃がした。

戸を閉めると、兄はこちらに背を向けて寝転がっていて耳の穴をほじっている。

「いくさの最中なのですぞっ！　いい加減にしてくだされっ！」

「にゃあにゃあ。わかったにゃあ」

人差し指の耳垢をふうと吹き飛ばす兄。小一郎は思わず唇を震わせてしまう。いつもこれだ。尻拭いをさせておきながら、自分の言うことにはちっとも耳を貸さない。

「わかっておりません！　何度目なのですか！」

「何度目かと訊かれたら、そうだにゃ、六度目ぐらいだぎゃあにゃ」

小一郎は唇を噛み締め両拳を握った。藤吉郎からしてみると、いつまで経っても弟でしかないのだ。竹中半兵衛や蜂須賀小六などと

は違い、兄の中に木下小一郎という配下武将はいない。木下藤吉郎という男の活躍のおかげで引き上げられた弟でしかないのだろう。

だから、自分の言い分には耳を貸さない。

ただ、小一郎にも負い目はあった。元は尾張中村の百姓の小倅なのである。この兄がいなければ生涯百姓であった。実際、人材に欲していた兄の声がかかなければ、百姓でいるつもりであった。

「言いたいことはそれだけかえ？　だったら、とっとと引っ込むだぎゃ」

認められていない。多分、この先ずっとそうかもしれない。

小一郎は何も言えずに踵を返そうとした。馬鹿馬鹿しくなってしまった。偉大な兄にくっついてきただけの自分が物を言おうとしていることに。

「殿っ！」

部屋を出ようとしたとき、蜂須賀小六の大きな体躯が小一郎の前に立ちはだかった。蜂須賀の表情は切迫している。

「にゃあ？」

「北近江の民衆が一揆を起こし、鎌刃城に向かっているとの報せが届きましたぞ！」

「一揆かえ？　そんなの、堀二郎がなんとかするだぎゃ。放っとけばいいだぎゃ」

「そんな悠長なことを言っている状況じゃないっ。一揆勢の規模は三千人あまり。これに乗じて小谷城からも出兵されたという報告だ！」

蜂須賀の大声に兄は飛び起きた。

「こ、小六っ！　しょ、召集だぎゃあっ！　軍議だぎゃあっ！」

蜂須賀がこくりと頷いたあとに部屋を飛び出ていくと、兄はぶつぶつと呟きながら部屋の中をぐるぐると歩きまわった。

「こりゃあ、ただの一揆じゃないだぎゃあ。きっと、浅井が煽ったんだぎゃ。何か企んでいるだぎゃ。横山城が応戦するのは簡単だぎゃあけど、空にしたら、もしかしたら、佐和山城の磯野が――」

兄は突っ立っている小一郎にふいと顔を上げてきた。
「おみゃあ、何をやっているんだぎゃ。早く召集をかけるんだぎゃあ」
小一郎はしばしの間、無言のままに突っ立っていたあと、部屋を出た。
考えてしまっていた。いや、事態についていけなくなってしまった。自分が木下勢の与力として参加している存在意義の不確かさが、突如として襲ってきた事態との間に齟齬を生じさせてしまった。
木下藤吉郎のただの弟として存在している自分はここに必要ないのではないか。しかし、そうした疑問を考える暇もなく事態が急変してしまった。
蜂須賀の声が飛ぶあわただしい城内を一人黙って行き、小一郎は自室に戻った。
尾張に帰ろうか。
「小一郎様」
と、従者が部屋に入ってきて、書状が届いていると言う。誰かと思えば、筆まめな簗田左衛門太郎からであった。
「ありがとう」
「城内があわただしいですが、何事かあったのでしょうかね」
「大丈夫さ」
小一郎が笑みを見せると、垢抜けない従者は「へえ」と答えて去っていく。
「太郎か」
と、書状を開きながら小一郎は一人呟いた。彼のことはまだ簗田左衛門尉の小姓だったときから知っている。左衛門尉にくっ付いていたときは愛らしいあどけない子供であったが、そのときから光り輝く頑なものを持っている子供でもあった。
養父の体たらくぶりに愚痴をこぼす左衛門太郎には相通ずるものを覚えるが、齢が一回り違う彼との決定的な違いも小一郎はうすうすと感じていた。

彼は今や藤吉郎に次ぐ出世頭だ。しかも、この三、四年のうちにその武勇だけで駆け上がった。かたや、自分は兄の下でくすぶっている。

もしかしたら、自分は出世をしようとも常に礼節を忘れない左衛門太郎に甘えていたのかもしれない。家中の格から考えれば、左衛門太郎に大きな顔をされたとしても文句は言えないのだ。

軍神の加護でも受けているかのような左衛門太郎と自分を重ね合わせることで、いつのまにか自分を慰めていたのか。

文は几帳面な男らしい達筆なものであった。

木下小一郎様へ

薫風の候ご機嫌うるわしくお過ごしかと存じます。

このたび、拙者、簗田左衛門太郎広正は丹羽五郎左衛門長秀様のご息女、あいり殿と婚姻をいたしました。

現在の情勢において、父の左衛門尉や五郎左衛門様がおられない中ではありましたが、義母のすすめでささやかながらも祝言を挙げました。

新妻のあいり殿とは美濃攻めの前からの知己の間柄でありましたが、そのころを振り返ってみると、まさか、こうして一武将の子として、一武将のご息女を娶るなど思いもしませんでした。

これもひとえに小一郎様の普段からのご教示の賜物であるとの所存です。

墨俣築城のとき、小一郎様のお支えがなければ、今の自分はありませんでした。拙者にとって、小一郎様は兄のような存在です。拙者は生まれつき父がおらず、母を早くに亡くして天涯孤独の身でありましたが、父の左衛門尉や、義母はもとより、小一郎様のように周囲の人々が家族のように接してくれているおかげで、性根を腐らせることなく生きてこられました。

新たに妻という家族を作った拙者は、これからも己を見失うこと

なく生きていきたい所存です。
小一郎様はじめ、周囲の人々の中にあって、拙者は男としての生き方を貫くことができるものだと、近頃は感じております。
また再び、小一郎様と戦場を共に駆け巡ることを楽しみに思いながら、御報告申し上げます。

築田左衛門太郎

小一郎は文を読み終えると、唇を結んだ。
太郎は何歳だっただろうか。確か二十になったかならないかだ。なんて真っすぐな青年なんだろう。小一郎は忸怩たる思いであった。左衛門太郎は自らの人生を送ることにおいて、出世など二の次なのだ。己の人生をこの時代の中で、いや、人々の集いの中でどう立てていくか、それに対して実直に考察し、行動していく青年なのだ。
太陽のように輝く青年を前にして、与えられた立場の中で生きていくことに不満を抱いている自分が、小一郎はなんだか愚かしく思えてきた。
「負けてられないなあ」
小一郎は頬を緩めながら立ち上がり、軍議に向かった。

小一郎奮戦（3）

戦況はおもわしくない。

堀二郎秀村率いる鎌刃城の兵数は千人前後でしかなく、一揆と結託した浅井勢は五千近くの兵数であるとの報告であった。

浅井長政自らの出陣らしい。

「怨恨だぎゃ」

兄は眉をしかめていた。

姉川のいくさの前夜、堀二郎秀村は浅井長政の配下であったが、鎌刃城が織田方に降ったことで、姉川の戦端は開けたと言っていい。しかるに、兄はその怨恨による鎌刃攻めだと言った。

だからと言って、横山城の木下勢は迂闊に手を出せない。

「稚拙すぎるのが逆に怖い」

蜂須賀は見てくれに似合わず慎重肌である。

「怨恨に見せかけた浅井の企みかもしれませぬ。ここ横山城が織田方にある以上、浅井は鎌刃城を攻め取ったところで何の利益もない。それなのに攻め込むというのは、我らをおびき出し、佐和山城の磯野員昌をこちらに寝返ったと見せかけて、実はこのための策だったとも推測できる」

「半兵衛」

と、兄が呼ぶと、じいっとうつむいていた半兵衛は視線だけを持ちあげる。その眼差しは冷たく鋭い。

「おみゃあはどう考えるんだぎゃあ」

「蜂須賀殿と同じです」

それきり、彼は口を閉ざし、またじいと固まった。

「おみゃあ」

兄は顔を強張らせている。

「それだけかえ。おみゃあはいつも狂ったように進言するでにゃあか。なんなんだぎゃあ。何か策を述べるだぎゃあ」

「ありませぬ」
間を置かない半兵衛の答えに、与力たちの顔つきが変わった。半兵衛が匙を投げてしまうのはよっぽどのことである。六角親子が挙兵したときですらなかったことだ。
「ありませぬじゃにゃあっ！」
兄は血相を変えて立ち上がった。閉じていた扇子を握り締める手で震えている。
「どうにかせんといけんにゃあがっ！　ありませぬじゃ済むわけにゃあっ！」
「ならば進言いたしましょう」
半兵衛はそう言うと、一つ吐息を長々とついてから口を開いた。
「鎌刃は見殺しにし、その後、浅井勢の手に渡った鎌刃は岐阜のおやかた様に攻めていただく他ありませぬ。横山城と鎌刃城を天秤にかけるなら、横山城こそ敵の手に渡してはなりません。今、打って出るのは早急ということです」
どうやら、半兵衛がいつものように我を失っていないのは、見殺しにするしかないという策しか思いつかなかったからかもしれなかった。鎌刃城は半兵衛自身が身を呈して手に入れたものだ。
半兵衛の絶望的な意見に、兄は威勢のよさをなくし、しばらく黙って半兵衛を見つめていたあと、すとんと腰を下ろした。
「そんなわけにはいかにゃあ」
か細い声であった。むしろ、泣きそうであった。小一郎には兄の胸の内が手に取るようにわかる。そんなことをしてしまったら、岐阜のおやかたに面目がたたない。いや、兄はこの近江の戦線で家中の自分の序列を上げようとしているのだ。だから、おやかたの手をわずらわせたくはない。自分だけでやらなければ評価されない。
「鎌刃城を見捨てるなんてできるわけにゃあ。そんな義に反することなんかしたら、おりゃあは天下の笑われ者だぎゃあ」
心にもない言葉である。
「かといって、殿」

半兵衛が戒めるような厳しい眼光で兄を見据えた。
「横山城の兵を出せば、もしや、相手の思うつぼなのかもしれませんぞ。横山城を守ることが必須なのです。横山城を失ったら、それこそおやかた様にどうご報告するつもりか」
まるで、兄の胸の内を読んでいるかのような言葉に、兄はしゅんと首を垂らす。
軍議は停滞した。沈黙が続き、どの顔にも諦めが浮かんでいた。
「伝令！」
甲冑を装った兵が一人居間に飛び込んできて声を上げる。
「浅井勢及び一揆勢は鎌刃城下を焼き討ちしている模様でございます！」
場はざわついた。怨恨とも受け取れるが、おびき寄せているとも取れる。もしかしたら、半々なのかもしれない。
「佐和山城の磯野殿に念押しするしかありませぬ」
「そんなことをやったって無駄だぎゃあ。もしも、浅井と連携していなかったとしたら、かえって足元を見られるだけだぎゃあ。木下藤吉郎は大したことにゃあって」
「兄上」
と、小一郎は決心し、皆の視線を持ち上げさせた。
「拙者が打って出ましょう。百人の兵をくだされ。今晩、夜闇に紛れて堀二郎と合流いたします」
「な、な、な、何を言っているんだぎゃあっ！　そ、そんなこと出来るわけにゃあぎゃあっ！」
だろうな。たった一人の弟なのである。そんな無謀なことをさせるわけがない。だが、兄がこの戦線に情熱を賭しているように、小一郎もこの事態に身命を賭す思いであった。
焦っているのかもしれない。それでも、弟ではなく、一武将として木下家臣団の一員にならなければならない。いや、なりたい。
「小一郎殿」
半兵衛が凍てつくような眼差しを注ぎ込んできていた。

「勝算はおありか」
「ありまする」
ない。
「兵数は多いと言っても、相手のほとんどは一揆勢。金ヶ崎、姉川、そして南近江のいくさをくぐり抜けてきた木下勢の中の精鋭百人を選抜させていただければ、勝てることはなくても、退かせることぐらいはできます」
「駄目だ！」
と、言ったのは兄であった。顔つきが見たこともない真剣さであった。
「お前にそんなことができるわけがないだろう！」
目を耳を疑ったのは小一郎だけではなかったはずだ。口調もさることながら、どんなに切迫した状況でも呑気で居続ける兄ではなくなっている。
体をぐいと前にのめらせて小一郎に睨みを利かすそのさまは、巌のように大きい。
しかし、小一郎は拳を握った。
「できます。兄さん、いや、兄上、やらせてくだされ。拙者は木下小一郎です」
兄はうんともすんとも言わず、ただ睨みつけてくる。猛獣の迫力であった。これが本当の兄の姿かと思うと、小一郎は後ずさりしてしまいそうだったが、目で訴えるしかなかった。自分も賭しているのだと。
兄弟は長い間睨み合った。他の者は皆黙っていた。
「わかった」
ふいに兄は腰を上げ、小一郎を見下ろしながら言う。
「行かせてやるだぎゃ。ただ、おりゃあも出る」
「殿っ！　なりませぬっ！」
「黙れ！　策がなければ戦うだけだ！　おりゃあ自ら打って出て、名を上げてやるだぎゃ！　小一郎、おみゃあも名を上げるんだぎゃ」

兄は扇子をばっと開き、それで顔をあおぎながら、にゃっはっはと笑い上げた。

小一郎奮戦（4）

夜、木下藤吉郎・小一郎兄弟率いる百人の兵が横山城を密かに出立した。

浅井勢に確認されぬよう山道を行き、夜が明ける前には鎌刃城の堀二郎秀村、その家老の樋口三郎左衛門直房と合流した。

堀二郎は若い男で、最初、木下勢の来着に満面の笑みを見せてきたが、連れてきた数が百人そこそこだと知るや否や、怪訝な顔つきに変わった。

「なぜ、そんなに少ないのか」

小一郎はむっとしたが、兄は違った。

「少ないも何も、浅井勢を追い返すにはこれしきで十分だぎゃあ」

そう言って笑い飛ばした。堀はつまらなそうに姿を消したが、家老の樋口三郎左衛門が目尻の皺を寄せて微笑む。

「木下殿は言うことが違いますな」

「言うことだけじゃにゃあ。やることも違うところを見せてやるだぎゃ」

兄の目は爛々としている。法螺なのか本気なのか。弟の小一郎でも判別できないぐらいに、兄は勇ましい。

「兄上」

樋口三郎左衛門とあらかたの戦略を決めたのち、鎌刃城の一部屋が木下兄弟に分け与えられた。そこで、小一郎は率直に訊ねた。

「どうして、そんなに自信がおありなのですか。横山城ではあれだけ反対していたというのに」

兄はすでに布団の上に寝そべっている。甲冑の上に陣羽織を羽織ったままの姿で小一郎に小さな背を向け、うつらうつらと頭を振っていた。

「兄上」

と、小一郎はもう一度呼んだ。兄は顔だけをこちらに振り向かせ

てくる。
「おみゃあは馬鹿か」
蔑むような視線であった。
「やると決めた以上はにゃ、やらなければならないんだぎゃ。負けるつもりでいくさ場に出てくる奴があるきゃあ」
そもそも、と、言いながら兄は顔を背ける。
「おみゃあが言い出したことなんじゃないかえ？」
小一郎は押し黙った。何と答えていいのかわからなかった。そのうち、兄はいびきをかき始めてしまう。
木下藤吉郎がここまで昇りつめた事象は運によるものが大きいと言う人間もいる。小一郎もその通りだと思っていた。確かに偉大な男である。だが、それ以上に比類なき運に恵まれている。
違うかもしれない。兄は自らを強く律して運を切り開いている。やると決めた以上、自分の力を心の底から信じ切るらしい。いや、そうしなければならないのだろう。敗北は許されない。常勝であり続けなければならない。
しかし、常勝というものは兄にとって重圧ではなく、自らの運命を切り開くにあたってのもっとも簡単な方法なのかもしれない。
勝ち続けることは難しい。とはいえ、勝てばいいのだ。勝てば運は舞い込むのだ。
だったら、自分も勝てばいいだけらしい。小一郎は壁に背をもたせかけてままぐっすりと眠った。
短い眠りから覚めた朝、堀勢及び木下勢およそ五百人は鎌刃城下郊外に陣取る浅井勢との戦いに打って出た。
報せによると一揆勢と合わせて三千人余。
勝てばよい。
馬上の小一郎は自らに念を押す。そこに死はあるのか。否、あったとしてもない。そこにあるものは勝敗の行方のみであり、戦国の世に立ち向かう男の生き方でしかない。
「兄上、策はおありか」

「ないにゃ」
兄はあっけらかんと鼻をほじった。
「だけど、勝てるだぎゃ」
そう言い、人差し指で鼻糞を弾く。よく飛んだ。
「おみゃあらっ！　手柄を立てるんだぎゃ！　大将首を得た者には二百貫の褒美だぎゃあっ！」
指揮下の精鋭百名は口端で笑った。いきり立つこともなく、のぼせ上ることもなく、ただただこの獰猛な生物たちは勝利を欲していた。
ああ、そうさ。自分たちはたった五百人で三千人余の聳え立つ壁のような相手に向かっていく。何もない。でも、兄も、この兵たちも、何もないところから槍一つ、身一つで運を切り開いてきた。
立ち向かうことに意義がある。
よく晴れた空の下に薫る風が吹き、野原の草花が揺れている。向こうに並ぶのは浅井の三つ盛亀甲の紋が入った白い旗指し物。
「そんでも、少ないだぎゃ」
敵方をひたりと見据えつつ、兄は朱色の軍配を天に掲げた。日差しを受けた金の模様から光がきらきらとこぼれ落ちる。
勝つしかない。
「いざ、突っ込めえっ！」
軍配が前方に向けて振り下ろされたと同時に、鬨の声が上がり、小一郎、そして五百の兵たちは一挙に駆け出した。
火蓋が切って落とされる。敵方も大きな塊となってこちらに向かってくる。
小一郎は先陣を切っていた。鐙を踏みしめ、腰を浮かし、馬の躍動に合わせて体を揺れしながら、その頬に風を浴びた。兜の庇が日差しを砕く。
思い出した。小一郎は敵方を寸前に向かえたとき、ふいに姉川のときの光景が脳裏を閃光の早さでよぎっていった。浅井勢に備を突破されてもがき苦しんでいたとき、影が走るがごとく現れた簗田左

衛門太郎の戦いぶりが。

あいつ。小一郎は笑った。こんな気分だったのか。

何かができそうな気がする。

小一郎は疾走したままに槍を振り払うと、手綱を絞り、両軍がぶつかり合った中で名を轟かせた。

「我は木下藤吉郎が弟、木下小一郎なり！　浅井長政の首、貰い受けに来たあっ！」

小一郎奮戦（5）

簡単な時代だ。この時代に生を受けた自分は恵まれている。もしも、己の立場に疑問を感じたならば、槍を手に持てばいい。振るえばいい。そこから何かが見出せる。たとえ、命を失おうとも、それはこの時代を駆け抜けた証だ。

母は悲しむだろう。でも、皆が知っている。生きざまというものを。

自分に何が出来るかじゃない。何をするべきかだ。木下小一郎という人間は何をするべきか。

もがけばいい。死を恐れながらも、負けることに恐れながらも、そして負けたとしても、また、明日、勝つためにもがく。

そうしたら、いつの日か、自分は何をしてきたのかと己に問い詰めたときに、はっきりとした答えが出ているはずだ。

俺は生きた、と。

ああ、まだ、生き足りない。槍を振るえば振るうほど、足りない。もっと、俺は出来る。なにせ、知らなかった。自分がここまで槍を振るえることを。

苦戦している。そもそも兵数が圧倒的に違う。だが、不思議なことに、この無謀な連中は無謀ながらに腰を怯ませていない。

「押せえっ！　押すんだぎゃあっ！　目の前は浅井の当主だぎゃあぞ！　大将首だぎゃあぞっ！」

兄はいつものように騒いでいるだけだ。愉快になってくる。弱いくせに言うことは大きい。それでも、この兄に多くの人間が付き従ってくるのは、なるほど、戦いが有り続ける。そして、勝つ。騒いでいるだけの兄であっても、軍神のごとく勝利を与えてくれる。

その最上の喜びを得られることを端々の兵卒まで信じていることが、木下藤吉郎勢の最大の強さだ。

「討ち取ったぞお！　多羅尾相模守の首、取ったぞお！」

小一郎は籠手で汗をぬぐった。多羅尾相模守は樋口三郎左衛門の与力だ。負けるか。いや、負けない。小一郎は目を血走らせながら敵兵の首めがけて槍先を振り抜く。当たらない。

「おのれえっつ！」

馬上から槍を貫く。相手の腕を刺しただけで致命傷を与えるまでには至らない。限界なのだろうか。小一郎は前田又左衛門や簗田左衛門太郎のように腕前が達者なわけではない。彼らのような腕があったら、今頃、父親を抜いた左衛門太郎のように兄を抜いて一軍を任されている。

「うおおっ！」

味方の、堀勢の何者かが猪のように突っ込んでいった。一人、二人と斬り伏せていく。

「多羅尾相模守の仇いっ！」

男は凄かった。暴れ回っているというのが的確だった。槍を振り回し、相手は怯み、しかし、振り払われてしまい、槍を落とす。そこに敵の槍が飛んできて、腹を突き刺す。それでも、男は敵方の槍を掴んだ。相手は、ついさきほどに多羅尾相模守を討ち取ったと名乗った兵卒だった。男は刃にえぐられながらも槍の柄を振り回し、相手を倒し込みながら槍を奪い取ると、腰の脇差を抜いて、敵兵に獣のように飛びかかり脇差を振りかぶった。

「多羅尾相模守が配下、土川平左衛門だ！　よく覚えとけえっつ！」

土川平左衛門は仇を取った。直後、数本の槍の餌食になり、尽き果てた。

弓矢が馬の鼻面を射抜かれる。暴れてしまい、小一郎は振り落とされてしまうが、その落ちる瞬間、短いようで長いようなひとときの間、小一郎は葛藤した。終わったか。いや、俺は生きたか。ああ、木下藤吉郎の弟として生きた。でも、木下小一郎としては生きていない。

土川平左衛門、お前は生きたか。多羅尾相模守の配下として生きたな。でも、土川平左衛門としても生きた。生きざまだった。

小一郎は落とされたと同時に、打ちつけられた体に鞭打つ思いで横転した。狙っていた敵の刃を交わす。が、さらに襲われる。しかし、槍を捨てて掴みかかり、押し倒し、その相手は中年の兵。兄より若干年上に見受けられた兵卒の刀を持つ手を押さえこみ、揉み合う中で小一郎は首に思い切り噛みついた。

口の周りを鮮血に染めながら立ち上がり、槍を拾い、この世の人の目ではない鋼の眼差しで、敵兵たちを睨み渡す。

所業を突き抜けてしまっている小一郎の様子に敵方は後ずさりした。もはや、葛藤はない。生きるための欲求だけがほとばしっている。

小一郎は槍先で相手に襲いかかる。怯んでしまった相手はかほどでもない。豪傑と化したかのように小一郎は奮戦し、敵を倒していく。

いくさは腕じゃない。気迫だ。生きていく歩みとは技じゃない。気概だ。

木下勢は小一郎の戦いぶりに触発された。もともと、相手は軍人ではない農民が大半だった。勝利のために命を賭す軍人とは、まず、気迫が違った。人数が集まればなんとかなるという考えから起こったいくさへの心構えは、こうして燃え上ってしまった職業軍人との交戦には甚だ向かなかった。

敵方は気が乱れた。負けてしまうのか。死んでしまうのか。負けてもいいが、死にたくはない。

「今だぎゃあ！　押すんだぎゃあっ！」

木下勢は乱れを突いた。敵方は足並みが揃わなくなる。半ば、戦意を失いかけ始めた敵方を木下勢、堀勢は容赦なく斬りつけていく。いや、容赦がないということではない。彼らにはそれしかないのだ。殺人によって道を切り開く。それが軍人だ。

本来ならば軍人と軍人の殺し合いでなければならないのが戦争であるから、もはや、このいくさはいくさにならなくなった。

浅井長政本隊は小谷城に退いた。姉川、宇佐山、そして、この鎌

刃と、武勇に優れた青年当主が常に不幸であったのは、相手にしたのが織田上総介であったことだ。彼はその家に一人いれば十分であるぐらいの名将を何人も揃えていた。

そして、その名将たちもまた、名将を揃えていた。

「おみゃあ」

勝利からの帰り道、兄は口の周りを赤くしている小一郎の姿に顔をしかめていた。

「あんまり、そういう真似はするんでにゃあ。あんまり、前に出るんでにゃあ」

若干、語気が怒っている。小一郎はくすりと笑った。おそらく、いくさの最中、ずっと心配していたのだろう。

「これが拙者のやり方です」

フン、と、兄は鼻先を背けた。馬鹿モンだぎゃ、と、ひとつ呟いた。

理由なき反抗（1）

文をしたため、差し出し人の名を記すときにいつも思う。

なんて、ひどい名なのだ。

「きっと、可愛らしいお顔の方なのでしょうね」

名の不満を連ねたとき、妻は文でそう言った。

可愛らしいだと？　奇妙丸は逆撫でされたような気分になった。

しかし、妻は続けて言った。

「私も周りの者に奇妙姫と呼ばせることにしました」

どうやら、妻は変人らしい。いや、松姫はまだ、十一歳の子供であるから、おもしろおかしくそうしているだけなのかもしれない。

会ったことはない。正室と呼ぶ人は遠く甲斐の国にいる。奇妙丸と松姫の婚姻は、父の織田上総介信長が武田徳栄軒信玄にすり寄るために結んだ同盟の末の政略結婚である。

だから、松姫は岐阜に来ない。甲斐の虎の異名を持つ武田徳栄軒が愛娘を人質同然に岐阜に寄越すはずがない。

四年前の出来事である。奇妙丸は十一歳、松姫は七歳であった。形式だけの契りに年齢は関係なかった。

文が届いたのは婚姻の翌年からであった。夢見がちな幼い少女にとって、名に恥じぬ美少年との聞こえが高いまだ見ぬ夫に強い憧れがあったのだろう。拙い筆使いの中に恋心が満ち溢れていた。

端正な顔つきの父を持ち、母は馬借屋の娘でありながら、一目で父に見染められた吉乃である。

三歳のときに死んだが。

齢を重ねるごとに母の顔は思い出せなくてなっていったが、母が茶毘に伏されたときの父の怒りようならしっかりと覚えている。

ことあるごとに癇癪を起こす父だが、あのときほどの癇癪はこれまでにない。手に取った太刀で障子戸を斬り裂き、茶器を蹴飛ばし、奇妙丸はただ泣いた。

「なぜに泣く」
父は仁王のごとく奇妙丸の前に立ちはだかり、鬼のように睨み下ろしてきていた。母の喪失に悲しいのではない。父がただ恐ろしくて、奇妙丸は乳母の腕に抱かれたまま泣きじゃくっていた。
「怒らんのか。あ？　神や仏がいるならば、なぜにお前の母は死んだのだ。幼いお前を残して母を殺すのか、神や仏は。そんなものはおらん。だから、怒れ。神や仏などにすがりつく愚かさに怒れ」
そのときも父が何を言っているのかわからなかったが、今になって振り返ってみても、何を言っているのかわからない。滅茶苦茶だということだけはわかる。
「あれを見てみろ」
南近江、箕作城攻めのときである。陣中から奇妙丸を外に連れ出した父は、銃声轟く箕作山を指差した。
「あれを一日で落とすことがお前にはできるか」
「できまする」
「なぜだ」
「我が軍のほうが兵が多いからです」
「うつけが。話にもならん」
父はぷいと背中を向けると、陣中に入っていってしまう。奇妙丸は阿呆らしくて仕方なかった。父は何もわかっていない。奇妙丸はわざとそのようなことを言ったのだった。兵数の多さだけで攻城戦が早期に片付くことなどないと、当時、十二歳の奇妙丸でもわかっていることであった。
しかし、その問答のくだらなさに辟易して、奇妙丸は愚に徹した。くだらないのだ。自分をこうして戦場に連れてくることが。何がしたいのだ。己の雄姿でも見せたいのだろうか、父は。馬鹿馬鹿しい。
「お前が二十歳になったら織田の家督をくれてやる」
本圀寺の変のあと、二条城が落成された日であった。父は、本来ならば公方が座るべき広間の座にあぐらを組み、満悦な表情で言っ

た。
「そのときは岐阜と尾張をくれてやる」
「隠居されるということなのですか」
「違う。お前が当主となった織田の家をおれの支配下にするということだ」
反吐が出る思いであった。なんていう傲慢な男だ。やがては公方を追い出し、自らが将軍にでもなるつもりなのだろうか。
いや、違う。父は変人だ。自らの息子が継いだ織田家を配下にするということは、単なる支配者になるつもりなのだ。
神にでもなりたいのだろうか。死んだほうがいい。この世のために。
「若様」
いつの日か、森三左衛門が言った。
「おやかた様は若様が思うほど愚かなお方ではありませぬ。むしろ、偉大なお方です。若様は何もわかっておりませぬ」
「そういうふうに信じ込みたいだけなのだろう、三左は」
「信じるもへちまもありませぬ。織田家臣団の厳然たる総意です」
奇妙丸は鼻で笑った。
「気まぐれで癇癪持ちで好色なあやつに心底惚れ込んでおるとは、織田家臣団とはつまりお幸せ者の集まりなのだな」
三左衛門の目つきに凄味がかった。
「そのようなことばかり言っておりますと、実父を追い出そうとし幽閉された武田の若君のような企みを持っていると思われても文句は言えませんぞ」
「なら、投獄せい」
三左衛門は溜め息を深々とついた。
宇左山で彼が死んだのは、その二ヶ月後のことであった。
「我がもっとも頼りにしていた者が討死にしてしまった」
奇妙丸は松姫に宛てた文にそう書いた。
「なぜに、彼の者は我のために生きてくれず、父のために死んでし

まったのか。あの世に行けるものなら、今すぐにでも行って問い詰めたい」

「そう思うかぎり、その方は奇妙丸様のお心にいつまでもお住まいになられてくれるはず、きっと。尊敬されるお方がお亡くなりになられても、そのお方と過ごした日々や、そのお方との会話はなくならないと思います。私は奇妙丸様のお心にいつまでもそのお方がお住まいになられてくれると信じております」

それを読んだとき、奇妙丸は初めて松姫に会いたいと思った。

優しい。

理由なき反抗（2）

北近江の戦線で小競り合いがあったらしい。

「サルは強情だ」

父は上機嫌であった。木下藤吉郎は岐阜の父に頼ることなく、わずか百人の手勢を連れて鎌刃城の堀二郎と合流し、浅井勢を撃退した。

「よほど、北近江に賭けているわ」

父にためらいはないのだろうか。あれほど可愛がっていた妹、奇妙丸にとっては叔母である市が敵方なのである。

「それが戦国の掟なのです」

池田紀伊守恒興は奇妙丸の教育係かつ後見役である。紀伊守の母は父の乳母でもあり、のちに奇妙丸の祖父、備後守信秀の側室になった人であり、紀伊守自身も織田一門のような扱いで重宝されている男である。

いくさ映えするわけでもなく、智謀に長けているわけでもないが、実直な中年であった。姉川のいくさでは磯野員昌の突破を許したものの、その後に続いた浅井勢の攻撃を食い止めたことにより、尾張犬山城を父から与えられたばかりである。

「国を束ねる者はそうでなければなりませぬ。私情にとらわれてしまっては滅びを待つのみです」

紀伊守の話ほどおもしろくない。この者はまるで父、上総介を手本にせいとばかりに言ってくる。

「驕る平家は久しくない」

「おやかた様は驕ってなどおりませぬ」

「お主は何もわかっていない」

その点、築田左衛門太郎広正の話はおもしろい。

「こんな逼迫したときであるというのに、父は堺で何をしているのかわかりませぬ。摂津調略の名目でおやかた様からお許しを得てい

ますが、どうせ、遊び呆けているに違いないのです。今度、若様からも叱りつけてくだされ。おやかた様が言わなければ、父を叱りつけるのは若様しかおりませぬ」

左衛門太郎も実直な男に変わりなく、序列や礼節に従っているのがはっきりとわかる。それなのに、いつでも義父の牛太郎に憤っているから可笑しい。

「父となってくれた牛太郎に、お主は義理や恩を持っていないのか？」

と、奇妙丸は笑いながら訊ねる。すると、左衛門太郎はますます顔をむっとさせて愚痴る。

「もちろん義理や恩はございます。拙者はよかれと思って注進するのです。それなのに、父は拙者の言葉を無視します。よかれと思って言っているというのに」

そう言うと若者に似つかわしくない溜め息を長々とつく。奇妙丸は笑う。

左衛門太郎がまだ馬廻衆であったときから、奇妙丸は彼を好いていた。四つか五つ年上で、名馬黒連雀に跨る彼の姿には一種の憧れを抱いていたが、いざ、馬を降りてみると年寄りのような愚痴である。

「ならば、牛太郎に文をしたためてみよう」

奇妙丸がそう言うと、左衛門太郎は是非そうしてくれと切実な眼差しで訴えてきたので余計愉快になった。

左衛門太郎が退いたあと、奇妙丸は早速筆を手にしてみる。簗田牛太郎とは面識がない。昔は珍奇衆なる珍奇な役目を与えられて父の相手をしていたらしく、実母の吉乃にも珍妙な話を聞かせたことがあったらしいが、奇妙丸は一度も目にかけたことがない。

その通名のごとく牛のような男だそうだ。しかし、なかなかどうしてときに活躍するようでもある。桶狭間の勲功第一、摂津池田での一騎駆け、金ヶ崎での退き口、ただ、他のいくさ場ではどこで何をしていたか不明らしい。おおかたの人間の予想は逃げているだけ

だということだそうだが、大活躍もすれば行方不明にもなる。まこと、不思議な男である。

まあ、左衛門太郎があそこまで切実なのだからと、奇妙丸は文面においてやんわりと苦言を呈してみた。

数日後、牛太郎からの返書が届き、読んでみると思わず声を出して笑ってしまった。

「太郎は馬鹿息子です。何も聞かないでください。放り捨ててやってください。馬鹿で生意気でうぬぼれているだけなのです」

どうやら、仲が良いらしい。実に大切にしてやりたい親子である。

「うつけが」

しかし、父は、牛太郎と左衛門太郎の話を奇妙丸の口から聞いて、ぴくりとも笑わなかった。

「あいつらはただの親子じゃねえ。お前のような分際が高見から眺めているような口を叩くんじゃねえ」

意味がわからない。奇妙丸はこの父を憎んだ。ならば、自分たちはどんな親子なのだと。それを問いたい。それを知りたい。腹立たしい。

「奇妙殿」

父の正室であり、奇妙丸の養母となっている帰蝶は、空気のようなたたずまいのままに奇妙丸の鬱積をひとしきり聞いたあと、感情の消え失せたような眼差しを向けてきて、口端にほのかに笑みを浮かべた。

「そなたは織田の後継者なのです。そなたと旦那様の関係はそれ以外に何もありません」

「しかし、父と子なのです」

「もう、おやめなさい。旦那様はそなたがこうして周りの者に不満をこぼしていることをご存知なのですよ」

だから、どうした。じゃあ、投獄でもするのか。是非そうしてくれ。投獄でも斬首でもしてくれ。そのときに自分は大きく笑ってやる。俺は織田上総介の子なのだと。

しかし、隠遁同然の暮らしを送っている帰蝶にそのようなことを言ったところで、逆に胸が痛むだけであり、むしろ愚かしくなってしまう。

奇妙丸は熱っぽい吐息をつく。

ふふ、と、帰蝶は笑った。

「やはり、奇妙殿はどこか似ていますね。お若いころの旦那様に」

似ているものか。

理由なき反抗（3）

森三左衛門の次男、勝三は齢が奇妙丸の一つ下である。

「カツ」

と、呼んでいる。可愛げのある素直な少年で、奇妙丸はこの「カツ」と共に岐阜郊外にてよく馬を駆けさせたものであった。

であった――、過去形になってしまうのは、昨年末、「カツ」は三左衛門の討死により、元服し、森家の家督を継いだので、昔日のように自由気ままに過ごすことが容易ではなくなってしまったのだ。

「カツ」は父の名から一字を拝領し、元服後、彼は森勝蔵長可を名乗ることとなった。

奇妙丸に元服の話はない。三左衛門の死による急遽の事であったとはいえ、奇妙丸は勝蔵に先を越された気分になった。それに、自分はもしや元服をさせてもらえず、このまま出家をさせられてしまうのではないかという不安も抱いた。

織田の所領の各地で戦火があがっている時期である。勝蔵は明日にでもいくさに駆り出されるであろう。

それに、勝蔵は父の寵愛を受けている。

おもしろくない。とても。

だが、父を憎むあまり、勝蔵にまで憎悪が向けられ始めていた奇妙丸の屈折した性根は、すぐに消え失せた。

勝蔵が豹変したらしい。聞くところによると、岐阜の城下で乱暴狼藉を働かせている。まず初めに聞いて驚いたのは、勝蔵がとある武将の奉公人を槍で突き殺したという事件である。

勝蔵は十四という齢でありながら、岐阜城下の加納で女をはべらせながら酒を食らっていたらしい。そんな勝蔵の醜態を目にしたとある武将の奉公人が苦言を呈し、すると勝蔵は有無を言わさず奉公人を殺した。

勝蔵の仕出かしたことに父は怒り狂って城に呼びつけた。

だが、許された。処分はなかった。

次の日、勝蔵は加納にてまた酒を食らっていた。すると今度は、女郎茶屋の娘を無理やり襲っている最中に女を締め殺してしまい、裸のままに野外に捨ててしまったらしい。

重臣たちは騒ぎ立てた。森家の恥、いや、織田家臣団の恥だと。無論、父も憤った。父は今度こそ打ち首だと激昂し、勝蔵を二日連続で城に呼びつけたが、処分なく許した。

「手に負えん」

と、父が珍しく愚痴をこぼしたらしい。そこまで勝蔵を愛しているのかと、奇妙丸は薄気味悪くなったが、奇妙丸の後見人の池田紀伊守は

「違うのです」

と、溜め息をついた。

「おやかた様は森家を取り潰したくないのです。宇左山に散った三左衛門殿のためにも寛大な処置を取り、それどころか、おやかた様自ら、勝蔵を叱責するのですが、勝蔵はどうしてか狂ったかのようにおやかた様の言うことさえも聞きません」

ちなみに紀伊守は森三左衛門の存命中、自分の娘と勝蔵の婚姻を約束している。勝蔵の乱行は紀伊守にとっても放っておけない事態だ。

柴田や佐久間などがこの事件について騒いでいるらしい。

紀伊守は勝蔵を呼び出した。将来の義父である。亡き三左衛門の代わりとばかりに勝蔵に強く説いた。

しかし、

「何を言いますか」

と、勝蔵は澄ました顔で鼻先を突き上げ、不気味に笑う。

「貴公も殺してしまいますぞ」

狂気じみているとしか言いようがない。家督を継いでからというものの、箍が外れてしまったかのように何者にも見境ない。

更に、紀伊守どころか、前田又左衛門にまで悪態をついたという

話まで入ってきた。
「尻込み又左」
と、偶然すれ違った又左衛門を罵った。
「槍の又左などと言われているそうですが、拙者は貴公が活躍したという話を聞いたことがありませぬ。要は、尾張の中だけの話であったのでしょう。畿内には貴公ごときの武将などごろごろと転がっていたということなのでしょう」
又左衛門が相手にしなかったので事無きことを得たが、その無礼な振る舞いは瞬く間に家臣団、それどころか城下の人間にまで知るところとなった。
「あのガキいっ！　ここまできて三左衛門殿に義理立てする必要があるか！」
佐々内蔵助まで鼻息を荒くし始めたらしい。
奇妙丸は目を瞑って沈黙したあと、
「爺」
と、紀伊守の顔を上げさせた。
「我は森の屋敷に向かう」
「なりませぬ」
「黙れ」
紀伊守は唇を引き絞りながら奇妙丸に目で訴えかけてきたが、奇妙丸は紀伊守を冷ややかに睨み下ろす。
「お主はこれが父上であったらなりませぬなどと言わぬであろうが。お主は我を愚弄するのか」
頭を抱える紀伊守を尻目に奇妙丸は居室をあとにした。
奇妙丸は稲葉山を下った。紀伊守が後ろを付いてきたが、追い払った。織田の跡継ぎが一人、従者も付けずに城を出るなど言語道断であった。
そうでもしなければ奇妙丸は気が済まなかった。奇妙丸は勝蔵を殴り倒すつもりでいた。三左衛門の功績に泥を塗るような真似をしている勝蔵に、一人の男として腹が立っていた。

それに、勝蔵には主従関係以上の親しみを持っていたのだ。この人道に背くような有様は一体なんなのだと問いたい。

己の責務のような気がした。

稲葉山の中腹、森家の屋敷の庭先からは幼児のはしゃぐ声があった。門をくぐり、密かに庭先に回ってみると、勝蔵が上半身を裸にさせて幼い男子と相撲を取っていた。あれは勝蔵の弟だ。

「カツ」

奇妙丸が呼びかけると勝蔵は弟の体を受け止めたままこちらに振り返り、奇妙丸だとわかるや否や、目の色をすぐに邪険にさせた。

「若様、それは盗人の真似ですか」

「生意気な口を叩くようになったな。別人のように見違えたぞ」

「蘭丸」

と、勝蔵は弟の体を引き剥がす。

「家に上がってろ。俺は若様と話がある」

勝蔵の弟はぼけえと奇妙丸を眺めた。そうして、にこりと笑ったあと、ぺこりと頭を下げてきた。その仕草は幼いころの勝蔵を見ているようである。

弟が縁台から家に上がりこんで姿を消すと、奇妙丸は勝蔵に歩み寄り、出し抜けに頬を殴りつけた。

「織田の恥さらしが」

勝蔵は目玉だけを動かして奇妙丸をぎらりと睨みつけてくる。反抗的な眼差しには、共に野を駆け巡ったころの勝蔵の面影はない。

「お前がゆくゆくは我の片腕となってくれると思っていたのに裏切られた気分だ」

「何を言いますか、若様」

勝蔵はふてぶてしく口端だけで笑った。

「織田の棟梁にでもなったおつもりですか」

かっと血が立ち昇り、奇妙丸は勢い余って再度殴りつけた。しかし、思いのほか勝蔵はびくともしない。それどころか、奇妙丸は殴り返されて吹っ飛ばされた。

地べたに尻をつきながら、奇妙丸は信じられない思いで頬に手を当てた。今まで誰にも殴られたことがないというのに、父の家臣の、しかも、自分より年下の勝蔵に殴られたことで頭の中が真っ白になった。

「若様、拙者は自分より弱い者に仕える気などありませぬ」

勝蔵は奇妙丸を見下ろしながら笑っている。誰だ、こいつは。

理由なき反抗（4）

なんて拳の大きさだったろう。頬骨がじんじんと痛む。多分、勝てないだろうと思った。

「カツ」

奇妙丸は戦意を喪失したかのようなか細い声でゆっくりと立ち上がる。

「なんでしょう」

と、勝蔵が言った瞬間、奇妙丸は勝蔵の股間を不意に蹴飛ばした。勝蔵が呻きながら背中をくの字に折って悶えると、奇妙丸は勝蔵の髷を掴み上げ顔面に膝を入れる。二発、三発、四発、と、容赦せずに勝蔵の鼻柱を潰した。

とどめの右拳を見舞うと、勝蔵は地面に伸びた。

「これでも自分より弱いと申すかっ！」

勝蔵は鼻の下を血まみれにしながらも、屈することなく睨みを向けてくる。奇妙丸はその顔を右の足の裏で踏み潰した。興奮しきってしまい、ほぼ我を失っていた。勝蔵の頭を何度も何度も踏み潰し、まるで、父、上総介の所業のようであった。

やがて、気を取り直すと、勝蔵がぴくりとも動かなくなっている。やってしまった。

奇妙丸に焦りが生じて、とりあえず、伏している勝蔵に屈みこみ、耳を近づけてみる。と、気を許した途端、奇妙丸の首に勝蔵の腕が伸びてきて、そのまま締められた。

「お前なんかに負けてたまるか！」

勝蔵が目を血走らせながら唸った。奇妙丸は勝蔵の腕に思い切り噛みついた。勝蔵が叫びながら腕から力を失くし、奇妙丸は凶暴極まりない少年からひとまず離れる。

「何事だ！」

騒ぎに気付いて森家の奉公人たちが集まってきた。しかし、主人

の勝蔵の前に突っ立っている少年が奇妙丸と知ると、その場にあわてて膝をついた。
「こ、これは、奇妙丸様――」
勝蔵は戦意喪失してしまったらしい。顔を地面に突っ伏して、ぜえぜえと息を切らしているだけである。
「気にするな。持ち場に戻れ」
「し、しかし」
「戻れっ！」
奉公人たちは戸惑った表情を浮かべるまま、どうすればいいのかわからずに膝をつけたままである。
奇妙丸は勝蔵の襟を掴み上げた。外に連れ出そうとした。
「若様」
女の声に振り返ると、縁側には染尼を身に着けた勝蔵の母親が立っていた。無論、奇妙丸は彼女のことも知っている。しかし、最後に会ったのは三左衛門の存命中であり、尼僧ではなかった。
あの優美であった女性は、美しさをそのままに凛としている。素足のままで庭先に降りてくると、奇妙丸の足元に平伏し、言った。
「この馬鹿な息子をよろしくお願い申し上げます」
奇妙丸は胸を突かれたような思いになって顔を背け、何も言葉を残さないまま、逃げるようにして森家をあとにした。
稲葉山の山道に蝉の声が降り注ぐ。奇妙丸は殴られた頬の痛みを感じつつ、ひたひたとした足取りで城に戻っていく。
殴られたこともなかったが、人を殴ったこともなかった。痛い。頬よりも、この拳のほうが痛い。
力でねじ伏せるとはおもしろくないものだ。なんの解決にもならなかったような気がする。勝蔵が豹変してしまった理由など、結局はわからないままだ。
お前などに負けてたまるか、という勝蔵の喚きが、耳に残っている。あの言い草は、とっさに出たような言葉ではなかった。以前から自分を呪っていたような言い草であった。

自分はこれまでに人に呪われるような振る舞いをしたであろうか。
ひどく寂しい気持ちであった。
城では池田紀伊守が待ち構えていた。左の頬を腫らしている奇妙丸を見るなり大騒ぎしたが、
「子供の喧嘩だ」
と、奇妙丸が静かに言い放ち、紀伊守は口を噤んだ。
「そんなことよりも、爺。お主は犬山のこともあるであろうし、また、父上が北近江に出陣するという話なのだろう。こんなところで我の相手をしている場合ではなかろうが」
「それはそうですが」
「戦地でいつ死ぬかわからぬ身なのだから、我の相手をするよりも、家族と顔を合わせておけ」
紀伊守はぽかんとしている。
「去れ」
その言葉に紀伊守は素直に頭を下げると、奇妙丸の居室から立ち去っていった。
松姫から文が届いている。

奇妙丸様へ

厳しい暑さの中、いかがお過ごしですか。こちらは元気でございます。
先日、侍女たちとともに軒先に風鈴を吊るしました。山県三郎兵衛尉という父の配下の者から頂いた物で、ちりんちりんと心落ち着く音が鳴ります。
暮れる空を眺めながら、そよ風はいっそう涼しく感じられます。
この風が甲州の山を越えて岐阜にも届けばいいなと思い、軒に吊るしている物と同じ風鈴をお贈りしました。
同じ時に、同じ風に、奇妙丸様と同じ音を聞いていたいです。

松より

奇妙丸は文とともに置いてあった箱を開けた。鉄器でできた小ぶりな風鈴であった。

紐を手に取り、そっと振ってみる。ちりんと小さく鳴った。その健気な音に、遠く甲州の、まだ見ぬ妻がむしょうに恋しくなった。

理由なき反抗（5）

時をやや遡った季節のことだが、五月、父は伊勢長島で惨敗した。一向一揆衆の掃討に向けて父自ら岐阜を出立したが、作戦の遂行が失敗し、柴田権六郎がしんがりを務めて食い止めたが、同じくしんがり役であった西美濃三人衆の一人、氏家貫心斎卜全が討死にしてしまった。

父とはここ最近、顔を合わせていない。上洛までは常勝を誇っていた織田勢も、義叔父、浅井長政の寝返り以来、姉川ではなんとか勝利をもぎ取ったものの、いくさのたびに諸将が一人、また一人とこの世を去っていき、事態はかんばしくない。

あの父は、今、何を思っているのだろうか。

しかし、この夏、織田は再び北近江の戦場へと向かおうとしている。きりがない。奇妙丸は思う。このいくさはどこまで続くのだろうか。不安にもなる。

そして、もしも、父が死んでしまった場合、自分はどうなるであろうか。いや、無論、織田の家督を継ぐのであろう。

そのとき、自分は、尾張、美濃、伊勢、南近江を領するこの大勢力団を率いられるだろうか。

武田とも雌雄を決するときが来るのかもしれない。

奇妙丸はいてもたってもいられず、筆を手にした。松姫に胸の内を吐露した。織田は今風雲急である。いくさのたびに家臣が死んでいく。もしも、父が死んだら自分が織田の当主となるが、自信がない。そして、そなたのいる武田ともいくさになるかもしれぬ。

そこまで書いて、奇妙丸は紙を握りつぶし、ぐしゃぐしゃに丸めて捨てた。

風鈴がつつましく鳴っている。

「若様」

と、戸の向こうから従者の声が聞こえてきた。

「わかっておる」
奇妙丸は腰を上げた。出陣の見送りである。父は今日、軍勢を率いて北近江に向かう。
父の顔を見るのは伊勢長島への出陣のときに、同じように見送ったとき以来である。別段、かける声もなければ、かけられる声もない。
「行ってくる」
と、父が一言述べるだけの、半ば儀式である。
広間には一族の女子供たちが一同に列しており、当主、織田上総介がやって来るのを待っていた。
しばらく、座していたのち、父が広間に入ってきた。緊張が走る。南蛮風の変わった甲冑を身に着けていて、上座の床几に腰かけた父のいずまいには、独特の雰囲気がある。
父は一斉に頭を下げた一族連中たちを睨み渡していく。
「奇妙丸」
名前を呼ばれた奇妙丸はすぐに返事をできなかった。というのも、いつもは、睨み渡したあとに、行ってくる、だけを言い残して終わりなのである。
奇妙丸は唾を飲み込み、気を落ち着かせたあとに、顔を伏せたまま声を出した。
「なんでしょうか」
「勝蔵と喧嘩をしたらしいな」
「左様でございますが」
「それは男と男の喧嘩か。それとも、主従としての喧嘩か。どっちだ」
「どちらもです」
「どっちだ」
奇妙丸は板床をじっと見つめ、しばらくの間押し黙った。最上の答えを探した。だが、父は、有るか無いか、右か左か、単純ではっきりとした答えでしか納得しない性格だ。

「男と男の喧嘩です」
「うつけが」
そう言うと父は腰を上げ、一同に表を上げさせた。
「行ってくる」
父が広間を出ると、奇妙丸は一族たちとともに門前まで出て、馬に跨り隊列を率いる父、上総介を見送った。
南蛮風の黒塗りの甲冑が稲葉山の頂上から消え、奇妙丸は思う。
結局、二つの答え、どちらを選んでも、うつけと叱られただろう。
だが、もっと、怒られると思っていた。あれで済んだのが不思議だ。
隊列のすべてを見送ったあと、一族たちは城の中へと戻っていき、奇妙丸もそれに続いていったが、従者が駆け寄ってきたので足を止めた。
「森様が面通りを願っております」
「カツか？」
「左様で。いかがいたしましょうか」
「連れて参れ」
従者が門の外へと出ていき、奇妙丸はその場で待った。やがて、従者に連れられて、勝蔵が門の中へと入ってき、奇妙丸を確かめると地に平伏した。
奇妙丸は従者を先に戻らせ、勝蔵に歩み寄る。
「そのような真似はよせ」
勝蔵の腕を取り、体を起き上がらせた。勝蔵はうなだれるように顔を伏せ、一言も発さない。
「あれはただの喧嘩だ。父上にもそう申した。お互い、水に流そうではないか」
「拙者は、拙者は、若様に大変なことを――」
勝蔵は泣いていた。乱暴狼藉を働いていたはずの勝蔵の姿はここにはない。それもそうだ。勝蔵は性根の優しい少年なのだ。
「もうよい。よいから、馬を出そうではないか」

奇妙丸と勝蔵は馬を駆けさせ、長良川の畔で止めた。馬に川の水を飲ませている間、夏の日差しがきらきらと降り注ぐ水面を眺めた。

「あまり、酒は飲むな」

と、奇妙丸は言った。

「何事も嗜む程度がよい」

勝蔵は口を閉ざし、うつむいている。奇妙丸は笑いながら、勝蔵の肩をぽんぽんと叩いた。

「酒を飲みたくなったら、我の元に来ればよいであろう。一晩中付き合ってやるわ」

馬を木陰に移し、奇妙丸と勝蔵もそこに腰を下ろす。稲葉山の森にかまびすしい蝉の鳴き声を聞きながら、川に入って漁をしている男の姿をぼんやりと見つめた。

「拙者は」

と、勝蔵が口を開いた。

「どうにでもなってしまえと思っていました」

勝蔵は遠くを見るような目で綿雲の流れる空を眺めている。

「拙者は本来、家督を継ぐような立場にはなかったのです。兄が越前敦賀で討死にしたときは、覚悟しました。いずれは自分が森の家を引っ張って行くのだと。でも、父がこんなにも早く死ぬとは思いませんでした」

そのとき、初めて、奇妙丸は勝蔵の重責を知った。森家は足軽組頭や奉公人の家とは違う。織田の重臣家であり、更にいにしえに遡れば源氏の血を引く名門である。

その責務が十四歳の勝蔵に圧し掛かっている。奇妙丸は自暴自棄になってしまう勝蔵の気もわからなくもなかった。

「城下の不逞者に殺されてしまえば、どれだけ楽かと思いました。しかし、森三左衛門の子である拙者には誰も逆らいませぬ。おやかた様も見逃してしまいます。拙者が森三左の子だから」

「我も同じだ」

奇妙丸は手持無沙汰に足元の草をちぎった。
「誰も逆らわん。父上もよくわからん。我はどう生きたらよいのかわからん」
二人は押し黙った。風が通り抜けていき、草木の葉がさわさわと鳴く。
ついさっき、岐阜の軍勢が北近江に向かったばかりだというのに、稲葉山の麓はのどかだった。
「カツ」
と、奇妙丸は口を開いた。
「我はいつか甲斐の国に行ってみたいと思っているのだが、いつか、行けると思うか」
「甲斐には武田がおりまする」
「だから、武田のおる甲斐に行ってみたいのだ。甲斐の躑躅ケ崎には惚れている女がおる」
勝蔵が半ば驚いたかのように見つめてきた。
「松姫様ですか」
「そうだ。我は奥方に会いたい。会ったことも、声も聞いたことがないが、文を交わすうち、惚れてしまった。優しいおなごだ。きっと、愛らしい人に違いない」
馬鹿だなあと自分のことなのに思った。会ったことも、声も聞いたことがない女に惚れてしまうなんて、よっぽどの馬鹿だ。女郎茶屋の女を襲ったという勝蔵からすれば馬鹿らしくて仕方ないだろう。
案の定、勝蔵は笑った。
「本気で言っておるのですか、若様。女など星の数ほどおりますぞ」
「お主とは違う。お主のような好色ではない。そもそも、お主はいつからそんな不逞者になったのだ」
「煩悩のままに生きるようになったまでのことです」
勝蔵は腰を上げた。足元から石ころを見つけ出すと、川の真ん中で漁をしている男目掛けてそれを投げた。石はやや逸れて、ぽちゃんと落ちた。

怒った男が、こちらに向かって何事か喚いてきている。
「さっきから捕れてないだろうがあ！　やめちまえ！」
勝蔵はそう罵りながら笑った。奇妙丸は呆れる。煩悩のままにというより、これではただの厄介者じゃないか。
「若様、武田の奥方の件は拙者におまかせあれ」
と、目を輝かせながら言ってくる。
「何をするつもりなのだ」
「いずれ、拙者が一軍を率いて武田を滅ぼしてやりましょう。そして、奥方を連れ出して差し上げます」
「物騒なことを言うな」
奇妙丸は笑いながら腰を上げた。石ころを拾うと、勝蔵と同じようにして、川の男目掛けて石を投げつけた。石は大きく逸れて川面に落ちた。
「やめちまえ！」
すると、男がばしゃばしゃとこちらに向かってきたので、二人はあわてて馬に跨ると、大笑いしながら長良川から逃げ去った。

成り金

池田勢が摂津茨木に攻め込んだ。これに対抗して、茨木重朝はもとより、高槻城の和田惟政も打って出、ついに摂津三分の計のプロローグだ。ククッ。

実は池田勢の出陣をヘタレ村重からの密書で前もって知っていたおれは、さゆりんを使って茨木・高槻・伊丹に誤情報を流した。

池田勢、侵略の構え。その兵数七百人余り、と。

この誤情報を信じた茨木・和田連合軍の茨木川の河原に出した兵数は五百。ワロスｗｗｗ

本当は二千五百人なんだもの。しかも、火縄銃三百丁を装備。百姓娘に変装して観戦していたさゆりんの話によると、本当の兵数を知った茨木・和田連合軍は焦っていくさの引き延ばしにかかり、高槻城からの後続軍を待とうとしたけれど、さゆりんがヘタレ村重に、この引き延ばしが後続軍を待つものだと教えて、池田勢は河原の茨木・和田連合軍に突撃開始。

で、池田勢の圧勝。しかも、和田惟政が討死にした。首を取ったのはゼニゲバ瀬兵衛だと。

和田惟政の首を取ったら五百石の領地を褒賞にするというキャンペーンに鼻息を荒くして頑張っちゃったみたい。本当にゼニゲバ野郎だな。金ヶ崎ではまったくやる気がなかったのによ。

勢いそのままに池田勢は茨木城を攻めかかったみたいだけど、そこで簗田ホールディングス飛脚隊に渡した手紙でさゆりんを堺に呼び戻したので、池田勢が茨木城を攻め落としたかどうなったかはわからん。

さゆりんを呼び戻したのは、信長からの召集令状がとうとう来ちゃったから。

京に来い、だってよ。なんなんだよ、今さら。

「堪忍袋の緒が切れたんやろ。何も報告はせんし、登城もせんし、

今まで何の咎めもなかったほうが不思議や」
　ううっ。さゆりんが脅かすので、思わず手の震えで箸を落としてしまうおれ。
　今年の年賀の挨拶にどうして岐阜城に来なかったんだと、激怒の太郎から矢のように手紙が届いてきたけれど、おれは摂津の調略に忙しかったんだし、仕方ない。
　まあ、ちょっとまずいかなって思って、いつかは岐阜城に行こうとした。でも、ずるずると引きずっちゃって、そのうち怖くて行けなくなった。
　そうしたら、太郎のやつ、信長の息子に手紙を書かせやがって。ふざけてんな、あの馬鹿は。二十歳になって、結婚までしたっていうのにいつまで経っても生意気な野郎だ。
「もしかしたら、隠居しろなんて言われたりな」
　さゆりんがにやにやと笑いながらたくわんをぽりぽり食べる。
「だったら別に隠居のほうがいいけどな。堺で隠居生活して銭儲けだ。なあ、シロジロ」
「そうッスね。このさい旦那様は隠居して商売に専念したほうがいいッスよ」
　はっはっはと笑い上げるおれとシロジロ。
「阿呆か。戯言もたいがいにしい」
　眉根をひそめるさゆりんの隣で、あーやは失笑。これだから女ってのは。金持ちになったらなったで、今度はモラルだのなんだのですか。
　まあ、この時代ってのは金を持っていたって大して威張れないからな。借金大王のサルがぶいぶい言わせている世の中だもんな。
「たまにはいくさ場に出るのもいいんじゃねえのか。クリツナも退屈しているみてえだしよ」
　ねじり鉢巻きが言うので、おれは白々しく眺める。
「お前が団子屋の手伝いに飽きただけだろ」
「そうだ。飽きた。堺はつまらねえ」

「だから、京に行くって言っているだろ。うるせえんだからよ、まったく。さゆりんは堺に残って、摂津の情勢とシロジロの監督をしていろよ。何かあったら、お前の判断でやっていいから。ただ、金の出入りだけは勝手にさせないからな。わかったな」

「はいはい」

それにしたって、いきなりの呼び出しだもんな。

確か、タナカの話だと、信長は北近江の横山城と佐和山城を視察したあと、南近江に向かって六角ゾンビ親子と一揆衆を取っちめたらしいけど、京に来いってことは、その足で入洛したのかな。

でも、本当に隠居してもいいよって話だったらいいんだけどな。築田商船は社員数四十名弱、十隻の船を所有して、ここ半年の売り上げは八千貫以上。三好・本願寺のハゲタカに税金を納めてもお釣りが返ってくるほどの宝箱＾＾　団子屋はしみったれた額しか弾き出せないけれど、ファイナンス事業は池田勢から取り立てるのは利子だけでも年に六百貫近く。しかも、六千五百貫の貸付を五年間に渡って返済させるから、黙っていても池田勢からは年に二千貫徴収ｗ　しかも、宝くじ事業は年に千五百貫ｗｗｗ

飛脚隊は、まあ、いろんな奴との手紙のやり取りが多くなったんで、個人的に雇っているだけだけど、そんぐらいの余裕が出来てしまった大金持ちのおれ。

今さら、戦国武将なんてね～。

まあ、体裁だけは整えておかないとな。おれは世間には築田左衛門尉で知られていて、築田ホールディングスＣＥＯは影の姿だからな。

翌朝、クリツナに跨って堺を出たおれ。京に着いたのは夕暮れ前。夜になって信長のところに行くのは憚られることだから、とりあえず、宿泊にと相国寺の承兌のもとを押し掛ける。

相国寺は京でも五本の指に入るぐらいの由緒ある寺みたいだけど、実際は名ばかりのボロ寺。なんでも、百年以上続いてきた京でのいざこざのとばっちりを受けて、再建しても再建しても燃えちゃった

みたい。
　手紙のやり取りで承兌からそれを聞いた金持ちのおれは、仕方ないから五十貫だけ寄付してやった。なので、予約なしでも泊まらせるのは当たり前だ。
「築田殿が京にやって来るのは去年の暮れ以来ですね。突然、どうされたのですか」
「信長様に呼び出されたんだ」
「織田様にですか」
　カビ臭い居室に案内されて、おれは旅の疲れそのままに寝転がった。承兌は戸の前に正座し、浮かない顔。おそらく、信長が嫌いだから。実は相国寺は持っていた所領を信長に没収されてしまったせいもあって、物凄い貧乏をしている。
「言っておくけど、おれは織田の配下なんだからな」
「わかっております。しかし、拙僧は織田様と築田殿は別物と考えておりますから」
　この若坊主は住職でもなんでもない小者坊主なんだけど、相国寺を再建したいらしい。ただ、時勢を見る目もあって、今後、信長の時代が来ることも予想している。だから、おれや十兵衛に取り入って、神仏嫌いの信長の矛先をどうにか反らしたい考えだ。
　おれには承兌がそこまで頑張っている理由がよくわからないけどね。そもそも、おれだって信長と同じ考えだ。仏だなんだって言って、民衆から金をむしり取っているだけの寺なんか、経済的に必要ないだろ。中には力に物を言わせて商売を規制している連中もいるし、酒に女にとおぼれている愚僧のはびこる寺もあるらしいしさ。
「おれはお前が可哀想だから寄付してやったけれど、正直言ってさ、坊主なんかやめて、おれの家来にでもなれよ。お前みたいに頭のいいやつが、寺の再建だなんて、こんな意味のないことをする必要ないだろ」
「そんなことありません」
　と、むっとした顔で睨んでくる若坊主。

「寺がなければ学問が廃れます。学問がなければ、国は貧しいままです。よき教え、よき学問が、国を支える学者を作るのです。拙僧のしていることは無駄ではありません」
「はいはい」
おれは背中を向けると、手を振って承兌を追い払った。
「いつか、築田殿にも拙僧の考えがわかってくれると信じております」
何を言ってんだか。頭のいいやつって、お堅いから駄目なんだよねえ。

今まで何をやっていやがった

「今まで何をやっていやがった」
ううっ。やっぱり、怒っている。しかも、信長一人だと思いきや、妙覚寺の広間には諸将が勢揃い。佐久間ヒゲオヤジ、ゴンロク、池田紀伊守、マリオ、十兵衛、マタザにウザノスケ、太郎、それにサル以下ｅｔｃ。
そいつらのシラーッとした目を浴びながら、晒し者のおれ。
「何をやっていやがった！　ああっ？」
「い、い、いや、その、その、摂津の、摂津の工作をちょっとばかり」
「それなら、摂津はどういう状況だ。どう進展したのだ」
「あ、いや、何も変わってないッス」
信長が腰を上げた。あわわ。土下座のおれに歩み寄ってきて、髪を掴み上げて、パンチ。ウウッ。やっぱり、やっぱり、こういうことだったのね。
「役立たずがっ！　頭を剃れ！　もはや、テメーなど必要ねえっ！　消え失せろっ！」
え？　出家ってことですか＾＾　痛いけど、パンチ一発でさよならできるなら喜んで。
「おやかた様っ！」
む。ゴンロクが声を上げて前に出てきたんだけど。
「恐れながら、摂津の情勢は一年でどうにかなるものとは思いませぬ。もうしばらく、左衛門尉に猶予をお与えくだされ」
おいおい。何を言っちゃってんだよ、このおっさん。あずにゃんに怒られるからって、もうちょっと空気読めよ。
「拙者も柴田殿に同じく、簗田殿は懸命に勤めております」
十兵衛まで……。すると、マタザまでしゃしゃり出てくる。
「おやかた様、家中でもっとも摂津の情勢に明るく、摂津に人脈を

持つのは牛です。恐れながら、牛を外すわけにはいかないと思われます」

「左衛門太郎に監督させましょう」

と、マリオ。ぐぬぬ。どさくさに紛れてふざけたことを言いやがって。そんなことになっちまったら、簗田ホールディングスが……。

「フン」

信長は床几に腰を戻し、おれは額を床にこすりつけたまま。

「どうでもいいわ。だが、こましゃくれを摂津には行かせん。こましゃくれは戦場だ。牛は牛で好きにやっていろ。ただし、あと一年だ。一年中にどうにかしろ。わかったな」

「あ、はい」

チッ。好きにやっていろって、結局はどうでもいいんじゃねえかよ。クソッ。殴られ損だぜ。

「しかし、おやかた様、織田がこれだけの危機だっていうのに、こいつはいくさに出なさすぎなんじゃないですか」

ウザノスケが余計な一言。

「牛殿はいくさ場に出たって役に立たないだぎゃ。それなら、摂津に当たらせたほうがいいんじゃないんかえ。おみゃあみたいな腕っ節だけの猪武者とは違うんだぎゃ」

「なんだ、お前。何を肩入れしてやがるんだ。さては、金でも借りたんじゃねえだろうな、あ?」

「無礼なことを申すなぎゃあっ！　何を根拠のないことを抜かしているんだぎゃあっ！」

「やめんかっ！　おやかた様の御前だぞっ！」

マリオの怒声が飛んで、しーん。

「こましゃくれ、牛を連れて行くかはお前が決めろ」

「無論、連れて行きまする」

馬鹿が。何もわかっちゃいねえ。太郎は本当におれが堺で遊んでいるだけだと思ってやがる。なんて使えねえ息子だ。今、池田勢が暴れ回っていて、目が離せない状況だっていうのに、クソがっ。

とはいえ、摂津がこれこれこうだからなんてことは言えないので、おれは泣く泣くいくさに付いていく羽目に。

で、真ん中で晒し者にされていたおれは太郎の隣に移動して、軍議に参加。てか、いくさに向かうことすら知らなかった。

「敵は越前朝倉だ。金ヶ崎を取り戻す。以上だ」

信長はそう言うと、腰を上げて広間を出て行った。ふむ。軍議なのに、それだけで終わりですか。なんか、拍子抜けだな。

集まっていた連中もおれと同じような表情。え？　これで終わり？　みたいな感じ。

ただ、太郎だけがおれの腕を掴み、ぎろりと視線を向けてきた。

「話があります。もう逃げられませんからね」

諸将が雑談をしている中、おれは太郎に腕をがっしりと組まれたまま境内に引きずられていく。あーっ、もうっ、本当に、チクショウッ。うぜえうぜえうぜえ。

「父上、正直に答えてください。一体何をやっていたのです」

人目のつかない境内の隅っこで、目を血走らせる太郎。

「家中の人々は父上が堺で遊んでいると思っていますよ。拙者がどれだけ言われたか、わかっているんですか」

「言いたい奴には言わせておけばいいだろ」

「何を言っているんですかっ！　拙者だってその言いたい者の一人ですよっ！　何をやっていたんですかっ！　本当に遊んでいたんですかっ！」

「さあね」

「どうなっているんですかっ！　早之介にも四郎次郎にも、栗之介や彩にでさえ文を出したというのに、皆が素知らぬ顔ではありませんかっ！　皆で何をやっているのですっ！」

「いろいろだ。いろいろ」

「拙者に言えないことなのですかっ！　拙者に言えないことなど、どうせ、よからぬことなのでしょうっ！」

「そうだ、よからぬことだ。だから、お前は黙っていろ」

「黙っていられるはずがないでしょうっ！」
「わかったわかった。まあ、落ち着け。わかったから」
おれは太郎の肩に腕を回すと、掌でぽんぽんと叩いてこの馬鹿息子をなだめ、声を小さくして言う。
「荒木信濃守に調略をしかけているんだ。あいつに謀反を起こさせる。今、言えるのはそれだけだ。お前がしゃしゃり出てくると面倒なことになるから、お前は黙っておけ。調略の基本は味方も騙すことだ。お前みたいな鼻たれ小僧にはわからないだろうけど、おれはいろいろ考えているんだ。わかったな」
シラーッとした目を向けてくる太郎。
「信じていいのですか。そんなことを抜かして、女遊びに呆けていた日には、拙者は母上を止めませんからね」
「馬鹿野郎！　おれだって、あずにゃんが恐ろしいことぐらいわかっているんだ！　そんなことできるか！」
「それならいいですけど」
と、ふてくされたまま立ち去っていく太郎。まったく。正直、信長よりも厄介だぜ、あのこましゃくれ野郎。

逆ギレ

翌日、昼前に出陣。

おれは綱を巻き、沓掛勢と共に隊列にくっついていく。織田勢の兵数は約三万。なんとも、まあ、こんな時期にこんだけの兵力を集中させちゃって大丈夫なのかね。それとも、今回は絶対に朝倉を叩き潰すという意志の強さの表れかな。

で、沓掛勢も心なしか兵数が増えているような。

「三百人いますよ」

と、タコ入道が得意気な顔。戦場に出ていないときは、タコが沓掛で兵を集めたらしく、訓練も施したらしい。

「父上が何やらわからぬことをやっている間、我らは駆けずりまわっていたのです」

うるせえな。いちいちとげとげしやがって。

ま、太郎は何を言っても聞かないから無視。ヘタレ村重を織田方に寝返らせたその日には土下座させてやる。クソが。

ちなみに大島のおっさんはマリオ隊に戻ったらしい。マリオは北近江の戦線で忙しいので、太郎も成長したことだし、もういいだろうっていうことで。

まったく。沓掛城も沓掛の兵隊も、まるで最初から太郎のためにあったような言い回しじゃねえかよ。

それならそれでいいけどさ。おれはＣＥＯとして忙しいから、沓掛のことなんか構ってられないからな。

琵琶湖沿いを北上していき、坂本というところまで来て、行軍は停止。兵隊は待機し、将校たちは三井寺というところで軍議をやるから集まるようにという伝令が飛んできた。

「どうしたんでしょうね」

太郎がクロの馬上で言う。

「おやかた様にしては出立する時刻も遅かったですし、進軍もゆっ

くりとしていましたし」
「ここに寄りたかったんじゃねえの」
坂本はサンザが討死にした辺りだ。今年の一月頃、おれと十兵衛は山伏に変装して二人で比叡山にあるサンザの墓参りに行った。信長も墓参りとまではいかないまでも、胸にこみ上げるものがあったんだろ。
三井寺に到着したときは西の空が橙色に暮れていて、ひぐらしの声が境内に響いていた。
十兵衛が突っ立っている。何をやってんだ、あいつ。諸将が本堂に上がって行く中で、じいっとうつむいたままでいる。
「十兵衛様」
と、太郎が声をかけて、十兵衛ははっと顔を上げてきた。
「ああ、左衛門太郎殿」
「どうしたのですか。気分が優れないのですか」
「いや、そんなことはありません。ただ――」
「ただ？」
「いや、なんでもない。ちょっと、左衛門太郎殿、簗田殿と二人にさせてもらってもよろしいかな」
「はあ」
太郎が首を傾げながら先に本堂に入っていき、その間、十兵衛は口端を結びながらじっとうつむいていた。
すっかり光を失った空の下で、木々の葉が黒い影になっている。
「簗田殿、年初に森殿の墓参りに比叡山に行きましたな」
「そうッスね」
「実はあれは、上総介殿も知っていることなのです。いや、拙者が簗田殿と二人で比叡山に向かうという許しを上総介殿に得たのです」
というのも、浅井・朝倉を匿った比叡山延暦寺に黙って赴くなんて、信長の知ることになったらあらぬ誤解を受けそうだから、前もって信長に伝えたと、十兵衛は言う。
「そのとき、拙者は比叡山の構造、延暦寺の兵数や軍備を調べてく

るよう申しつけられました」
「ああ、そうなんスか」
「坂本で軍を停めたということは、上総介殿は比叡山に攻め入る気です」
十兵衛は眉間に皺を寄せながら、半ば訴えかけてくるような表情でおれを見つめてくる。
「伝教大師が開山した延暦寺に攻め入るなど、暴挙としか言えません。上総介殿は天下の信を失います。簗田殿、上総介殿を止められますか」
おい。止められるわけねえだろ。何を言っているんだ、このキンカ頭は。止めたいんならお前が止めろよ。
「十兵衛殿」
おれは目をぐったりとさせている十兵衛を睨みつけた。
「因果応報じゃないんですか」
と、ちょっと前に承兌に手紙で説教されたことをそのまま言った。おれは太郎がぎゃあぎゃあうるさいことを承兌に愚痴ったのだけれど、あの若坊主はそれは因果応報なのだと逆に説教してきた。簗田殿が左衛門太郎殿を無碍にしているから、無碍にしたぶんだけそれが返ってくるのです。親子の些細な喧嘩であれば大したことはありませんが、国と国との交流、人生と人生との交流となれば、返すものも返ってくるものも大きなものになっていきますから、気をつけなされ。
「比叡山延暦寺は仏に仕える身だというのに、政治にはしゃしゃり出てくるし、浅井と朝倉を匿って、信長様に逆らうし、そもそも、中立でなければいけないんじゃないんですか。いや、もっと、高いところから、俗世の行いを眺めることが彼らの使命じゃないんですか」
「しかし、そうは言っても――」
「相国寺の承兌を思い出してみてくださいよ。本当ならあいつみたいな坊主がもっと力を持つべきでしょう。力だけ持っていて、威張

っているだけの奴等なんか、いつか力で捻じ伏せられるんだ。あっしは延暦寺の肩を持っている十兵衛殿のほうこそ幻滅ですね」
「肩など持っておりませぬ！　拙者は天下の信を失うことに恐れているのです！」
　十兵衛のまさかの逆ギレにびびって後ずさりするおれ。
「じゃ、じゃあ、そうやって信長様に言えばいいじゃないッスか。あ、あっしはどっちだっていいんだから」
　で、すたすたと逃げる。危ねえ奴だな。普段はおとなしい奴ほどキレると何をするかわからねえからな。くわばらくわばら。
　本堂の広間にはすでにほとんどの将が集まっていて、おれは太郎の隣に座る。
「十兵衛様、気分が悪そうでしたけれど、何かあったのですか」
「疲れていたんだろ。あいつはもうおっさんだからな」
「近頃は隠し事ばかりですね」
　いちいちうるさい太郎に拳骨を見舞ってやろうとしたけれど、家臣団の前なので拳骨はやめて、太ももをつねる程度にしてやった。
「痛っ」
「いちいちうるさいんだ、お前は。おれはおれ、お前はお前、人のことを気にしないで職務をまっとうしろ」
「そんなこと父上に言われたくありませんよ」
　すると、太郎の隣で黙って聞いていたマタザが笑った。
「牛の言う通りだぞ、太郎。まあ、俺としてはお前たちが親子でこうして出席していることが羨ましいけどな」
　おれと太郎は二人揃ってマタザをじいっと見つめる。何を言っているんだ、柄でもない。おれと太郎は口端を歪めながら首を傾げ合った。

破壊へ

広間に入って来た信長は、上座に腰を下ろすと、諸将を睨み渡した。いつになく気迫のこもった眼差しで、佐久間ヒゲオヤジやゴンロクでさえも、委縮してしまっていた。

「敵は比叡山にある」

ぼそっと言った。途端、一同、目を大きくさせ、顔を引きつらせながら、信長に注目した。

「越前は中止だ。明朝、比叡山延暦寺の僧兵から女子供まで皆殺しにする」

「おやかた様っ！」

と、佐久間ヒゲオヤジが真っ先に騒いだけれど、信長はぎろりと目を剥き出し、

「キンカ頭っ！　比叡山の概要を述べろ！」

十兵衛は肩を震わせながらうつむいている。

「述べろっ！」

「はっ……」

腰を下ろしたまま、前に一歩出ると、十兵衛は震える声で比叡山の地形、道、本堂や建物の場所、僧兵が詰めていると思わしき場所を言った。

墓参りのときにそこまで調べていたことにおれはびっくりした。なんだかんだ、抜け目がないじゃんか。

「者ども、わかったか」

「わかりませぬっ！」

佐久間ヒゲオヤジが血相を変えて立ち上がった。

「何を申されておるのですか！　叡山は伝教大師が開いた鎮護国家の大道場！　そこに攻め入るとは前代未聞、後世、子々孫々末代に至るまで汚名を被る前代未聞のことですぞっ！」

「貴様、どこから俺を眺めていやがる」

信長の唸り声と睨みにヒゲオヤジは表情をはっとさせて、あわてて膝をつき、平伏した。
「申し訳ございませぬ！　しかし、しかし、叡山に攻め入るなど、お改めくだされ！　あそこにおるのは僧です！　兵ではございませぬ！」
「言うことはそれだけか」
「しかし、おやかた様――」
「黙れっ！　お前は何を勘違いしていやがる。鎮護国家の大道場なら、なぜ、国家は乱れている。あそこにおる者はこの乱れに何をしておる。肉食と淫乱をほしいままにし、金銀に目をくらませ、権勢を振るい、あやつらこそ天下の乱れの元凶だろうが。違うか！」
「おっしゃる通りでございます」
と、池田紀伊守が口を挟んだ。おっさん、目がぎらついているんだけど……。
「誰かがやらなければ、天下はいつになろうとおさまりますまい」
「池田！　お主のような無知無教養の人間に何がわかるか！」
「言葉を慎みなされっ！　佐久間殿！」
と、マリオ。
「今の言葉、おやかた様に言い放ったものと同じですぞ！」
で、重臣たちでぎゃあぎゃあと言い争い始め、信長はだんまり。マタザやサル、おれとか太郎の下っぱたちはなんとも言えない複雑な表情で静観。
すると、信長がゆるりと腰を上げた。そうして、急に機敏な動きで太刀を抜き、空を斬った。
しーん。
「勝手な口を挟むな。斬るぞ」
蝉の鳴き声も消えて、突き刺すような空気が漂う。おれは緊迫感に汗がだくだく。隣の太郎も拳を握ってガクブル。
「佐久間、俺は言ったはずだ。俺に付いてこられない人間は出家しろとな。お前は付いてくると決心したんじゃねえのか、あ？」

太刀の切っ先を向けられたヒゲオヤジは信長を唖然と眺めたあと、額をこすりつけて平伏。
「申し訳ありませぬ！」
「他に異論はあるか」
あるわけねえじゃん。あんなの見せられたら、誰も何も言えねえよ。だってさ、信長の場合、はったりに思えないんだよ。本当に斬り殺しちゃう恐れがあるもの。
「あるのかないのかはっきりしろっ！」
「ありませぬ！」
一同、ガクブルしながら平伏。汗がぽたぽた落ちる。暑いんだか寒いんだかわからない。
信長は太刀を鞘におさめ、腰を下ろすと、表を上げさせた。
「翌朝、叡山を包囲し、攻めかかる。容赦はするな。女子供まで皆殺しにしろ。織田に逆らう者はどうなるか、見せつけてやれ」
「恐れながら、おやかた様」
池田紀伊守がまた口を出す。
「包囲を翌朝に持ち越せば、叡山の者たちに気付かれ、逃げ出す輩がいるかもしれませぬ。特に天下騒乱の元凶たる悪党などは命惜しさに我先にと下山するでしょう。おやかた様、包囲をするならば、夜半、敵方に隙を見せずに軍を動かすべきです」
信長は口端だけで笑った。
「お前らしくもなく饒舌じゃねえか」
紀伊守、無言。フンと、鼻で笑った信長。
「その意見使ってやる。者ども、直ちに軍勢を動かし叡山を包囲しろ。翌朝、合図とともに攻城だ。先陣は明智十兵衛、お前が切れ」
十兵衛は引きつった顔を信長に向けた。
「お前がやれ」
「御意」
十兵衛がうなだれるように頭を下げ、軍議は終わった。諸将は唇を噛み締め、瞳を揺れ動かしながら、足早に広間を出ていく。

おれと太郎も沓掛勢のところへ行く。いつもだったら、何か言い始める太郎だけれど、足元の一点を見つめ続けながら押し黙って、ただ、かちゃかちゃと歩いていた。

「太郎」

おれは言った。

「小谷城のときみたいな甘い真似をしたら、信長様に殺されるぞ。あの人は本気だぞ」

太郎はこくりと頷いた。

日が暮れて、辺りは闇に落ちた。雲が銀色の月を撫でていく。おれと太郎は沓掛勢を引き連れて、ゴンロクの柴田勢と合流し、比叡山の麓に陣を張った。

罪から出た所業は、ただ罪によってのみ強力になる（前書き）

残酷な描写あり

罪から出た所業は、ただ罪によってのみ強力になる

早朝、小雨が降っていた。琵琶湖のほとりにこんもりと聳える比叡山には鉛色の雲が圧し掛かっている。

雑兵たちが持っているたいまつがぱちぱちと音を鳴らしながら、黒い煙をもうもうと立ち昇らせていた。

もちろん、明かりのためじゃない。焼き討ちだ。

織田勢の包囲に気付いた延暦寺は金五百両を用意するから勘弁してくれと本陣の信長に泣きついてきたらしいけど、信長は無視したらしい。

比叡山を包囲する織田勢は三万人。対して、比叡山に籠っている僧兵や雑兵の数は十兵衛の予想だと三千人から四千人。

数からして、信長は本気だ。それどころか、延暦寺を消滅させる気だ。

太郎は顔が真っ青になっている。目の下には隈がはっきりと縁どられている。太郎は頭の堅い馬鹿だから眠れなかったんだろうな。

なにしろ、信長は、軍勢が包囲に回ったあとも、しつこいぐらいに各将に檄文を飛ばしてきていて、皆殺しにしろ、老若男女、端々に至るまで容赦せず、兵たちには強盗強姦を免じろという、規律だけが取り柄の織田兵に乱暴狼藉を許可する鬼畜ぶり。

本当に甘い考えは許されないみたい。

どうして、こんなことになっちゃったんだろうなって今さら嘆く。最初、おれは参加しない予定だったじゃないか。堺にいるだけで、焼き討ちなんて、こいつらが勝手にやるはずだったじゃないか。

十兵衛には大きなことを抜かしちゃったけど、いざ、実際に殺戮の一歩手前までやって来ると、やっぱり、止められるものなら信長を止めればよかったなと後悔。

夏の終わり、雨が冷たい。

雑兵たちがふいにざわついた。信長本陣がある坂本で、煙が立ち

昇っていた。信長本隊が比叡山麓の町を焼き払うのが攻城の合図だ。
法螺貝が鳴った。それは柴田勢だけではなく、遠くのほうでも近くのほうでも、法螺貝が静かな琵琶湖の朝を破るように鳴り響いた。
「行くぞっ！」
太郎が鞭をしならせ、沓掛勢は柴田勢と共に、山道を、林の中を一斉に駆け上がった。
矢が降ってくる。銃声が飛んでくる。白頭巾で顔を覆った僧兵が待ち構えている。沓掛鉄砲隊が駆逐し、太郎が一閃し、タコ入道が斬り伏せる。
広い境内の数々の杜からはすでに火の手が上がっていた。老人や女、子供が逃げ惑う中、白頭巾の僧兵、雇われ雑兵が薙刀を槍を振るってくるが、織田勢の鉄砲隊にばたばたと倒れていき、燃え盛る杜から織田兵が何かの宝物をにこにこしながら抱えて出てくる。
「薙ぎ払え！　すべて焼き尽くせ！」
怒号と悲鳴と黒煙が境内に立ちこめる中、十兵衛が歩き回りながら織田兵の乱暴狼藉を率先して指示していた。
「お助けくだされ！」
逃げ遅れた若い女たちがクリツナに跨るおれの元に這いつくばって泣きながら懇願してきた。
「私どもはさらわれてきたのです！　何も関係がないのです！」
皆、あーやと同じぐらいの歳だ。
と、思った瞬間、一人が、飛んできた槍に突き殺された。太郎の手から伸びてきたものだった。
女たちは叫びながら逃げる。
「撃てえっつ！」
鉄砲隊の銃口が火を吹き、おれに泣きついてきた女たちは全員死んだ。若い僧が一人駆け寄ってき、女たちの死体に屈みこんで呻き上げると、こちらに怒鳴り散らしてきた。
「お主らに慈悲はないのか！」
太郎がクロを駆けさせて、若い僧は吹っ飛んだ。そのまま、太郎

とそれに続く沓掛勢は散り散りに立ち向かってくる僧兵を駆逐していき、赤ん坊を抱える女も幼い子供も、目に留まる人間は全員殺していく。

燃え盛る炎の中で、杜がばりばりと崩れていく。おれはどうすることもできず、クリツナの馬上に座ったまま目の前で起きている惨劇を眺めていることしかできない。

すでに先陣を切った十兵衛は本堂がある山上に向かった。沓掛勢も柴田勢も上がっていった。でも、境内では織田の三万の兵がひしめきあって暴れている。無抵抗な人間をへらへらと笑いながら殺していき、味方同士で宝物の取り合いで揉めている連中もあれば、三人がかりで女の衣服を剥いでいる輩も。

「旦那」

ねじり鉢巻きが泣きそうな顔で見上げてきた。

「旦那」

おれは言葉が何も出ない。

火柱が立つ中で、境内を埋め尽くす血と肉塊。黒煙にまみれながら虐殺をし、レイプをし、また殺す。

なんだか、壮絶すぎて、何の感情も湧いてこない。人ってここまで出来るものなのかって、すごく冷めた気持ちで眺めている。

因果応報で済まされるのだったら、おれにもいつか、跳ね返ってくるんだろうな。

なんだか、岐阜に帰りたくなった。

夕方になる頃には、比叡山から息吹がなくなった。

山から下りてきた将校たちの顔はどれも疲弊していた。一部の雑兵たちが声を大きくして騒いでいたけれど、それを叱りつける気力も失せている。

町も粉塵と化していた。以前から変わらないのは信長の宿舎のある三井寺ぐらいのもので、煤にまみれた孤児や老人が、焼けた町をうろうろと当てもなく歩いていた。

お楽しみ会とも言えない論功行賞が三井寺で行われ、おれと太郎

も検分の列席に加わされる。この首はナントカ上人、この首は学者のナントカと、信長の前に次々と生首が出されていき、おれは見ていられない。

「上総介殿」

検分が終わると、十兵衛が信長の前に出てきて膝をついた。

「生きたままに捕虜にした者が数百人おりまする。この中には呼び声高い僧もいれば、まだ幼い童子も――」

「斬れ」

信長の放った言葉に全員が息を呑んだ。

「すべて叩き斬れ」

「御意」

十兵衛は腰を上げた。眉間に皺を寄せ、唇を引き結び、太刀を鞘から抜きながら門の外へと出ていった。

一年振り

比叡山焼き討ちという大虐殺をした信長は、その慰めなのかどうなのか、先陣を切った十兵衛に坂本周辺五万石を与え、信長に逆らったはずの佐久間ヒゲオヤジには延暦寺が持っていた琵琶湖沿いの所領を、あと、マリオとゴンロクにもヒゲオヤジと同等の褒賞を与えた。

もう、信長っていう人間を考えるのはよそうとおれは思った。あいつは並の人間じゃない。虐殺をする鬼畜ぶりを発揮すれば、一番苦い思いをした人間の功を立ててやる。並の精神じゃできない。

おれは今回の件で疲れてしまって、岐阜で休養することにした。なぜかどうしても、あずにゃんの顔を見たくなった。池田勢の動向も気になったけれど、堺のさゆりんに、比叡山の焼き討ちで参ってしまったから、勘弁してくれ。摂津のことはよろしく頼むと投げ出しの手紙を送り、太郎とともに沓掛勢を率いて岐阜に帰った。

道中、太郎は口数が減っていた。なんだか、自問自答している様子だった。

「しょうがない。気にするなよ」

「はい」

あのクソ生意気なガキが浮遊霊みたいになってしまっていて、おれは少し信長に腹が立った。どうして、太郎には褒賞を出さないんだと。

でも、すぐに気付く。おれが足を引っ張っているのかもしれん。

おれと太郎は沓掛勢をタコ入道に任せて願福寺に押し込めると、お通夜に向かう気の沈みようで稲葉山の自宅の門をくぐった。

「旦那様っ！」

たまたま玄関の軒先に水を打っていたあいりんが、おれの姿を見て飛び跳ね、奥方様、奥方様と、家の中に駆け上がっていく。

「奥方様って、あいりんはお前の奥さんだろ」

おれが笑うと、太郎も少しだけ笑った。
「そうですね。でも、昔と変わらないほうが、拙者はいいです」
あいりんに呼ばれたお貞とあずにゃんが玄関まで出てきて、あいりんとお貞は足を洗う桶を出してきたけれど、あずにゃんはそこに突っ立ったまま、目をうるうるとさせる。
「帰りが遅いではないか」
「すいません」
「無事で、無事でなによりじゃ。さあさあ、早くお上がりなされ。風呂に浸かって、飯を食べて、疲れを癒しなされ」
調度、風呂を焚いていたらしく、おれはお言葉に甘えて、湯船に浸かった。
湯気が立ち昇る風呂場の天井をぼんやりと見上げていると、比叡山での出来事をうっかり思い出してしまう。日本中の野蛮人を集結させたような暴虐無尽の有様だった。そして、お楽しみ会で並ばれた生首の数々。信長の叩き斬れの一言で三井寺の外には死体が一瞬にして山のように増えた。
もう、なんか、嫌だ。おれはデュフフな生活を目指してここまでやってきて、堺では密かにディフフな生活ができるようになった。でも、殺戮者になりたいとは一度も思わなかった。いや、なるとは思わなかった。
刃向かってくる連中を倒すならまだしも、無抵抗の女子供に手をかけるだなんて。
あずにゃんに会いたくなったのはそういうことなのかも。だって、あずにゃんやあーや、あいりん、お貞みたいなのが次々と目の前で殺されていくんだもん。
まあ、さゆりんは、ちょっと違うけれど。どんな事情であれ、あいつは子供を殺したしな。
そう考えると、さゆりんは芯が強い奴なんだな。おれなんか、さゆりんの足元にも及ばないヘタレじゃんか。
もう、なんか、どうでもいいわ。いくさも陰謀もホールディング

スごっこも、もうどうでもいい。いい加減、平和に暮らしたい。
風呂から上がると、夕飯を食べた。でも、喉が通らなかった。あずにゃんが堺での暮らしぶりはどうなのか、あれこれと訊ねてきたけれど、適当な相槌でいっぱいいっぱいだった。
太郎も太郎でご飯をちょっと食べただけで、腰を上げ、部屋に閉じこもってしまった。
「どうしたのじゃ、亭主殿も太郎も、元気がないではないか」
おれは何も答えず、あいりんに茶碗を差し出した。
「湯漬けにして」
あいりんは目をぱちくりさせながらおれから茶碗を取り、お湯を注ぐ。
「何があったのじゃ。栗之介、何があったのじゃ」
ねじり鉢巻きは首を振りながら黙って味噌汁を啜る。さすがのねじり鉢巻きもこたえているらしく、いつものでしゃばりタメ口がまったくない。
「早之介や新七はどうしたのじゃ。四郎次郎と彩は何をしているのじゃ」
「新七は沓掛勢と一緒で、他の三人は堺にいます」
「そうか。団子屋を始めたんじゃろ。うまく行っているのか」
「まあ」
おれは湯漬けにしたご飯をかきこむと、腰を上げ、黙って部屋に戻った。真っ暗だったけれど、皿に火を灯さないままに布団の上に寝転がった。
りんりんと虫の鳴き声が入ってくる。静かで平和な夜だと思った。悲鳴や怒号、杜がばりばりと燃える音がまるで別の世界で起きた出来事だったみたいに、稲葉山は静かだった。
「亭主殿」
あずにゃんが入ってきた。火皿の蝋燭に火を落とし、部屋は明るさにほんのりと染まった。
おれはごろりと背中を向ける。

「何があったのか、梓に教えてくれんか」
あずにゃんの声は柔らかかった。ぱっつん頭のデザイナだったときが遠い遠い昔のことみたい。
「しくじってしまったのか」
「違います」
「それでは、どうしたのじゃ。太郎は気が難しい子だからわかるが、亭主殿まで元気がないとはよほどのことじゃ。わらわは聞くことしかできぬが、抱え込むのもよくはないぞ」
おれはずると鼻を啜った。
「あっしは地獄を見てきました。あっしの目の前で起きたことはこの世のものとは思えないものでした。あっしはもう、もう、こんなことから逃げ出したいんです。もう、頭を剃って出家したい」

なんていい嫁なんじゃー

おれは比叡山で起きたことをあずにゃんに話した。僧兵はもとより、槍を持たない僧、女に子供、老若男女、二本の足で歩いているものはことごとく根絶やしにしたことを。

「おやかた様がそのようなことを……」

と、言葉を失った。

もしかしたら、あずにゃんのほうがよっぽどこたえたかもしれない。以前、願福寺の住職を蹴飛ばしたおれに激怒したように、あずにゃんは信仰心はさほどでも、神や仏に仕えている連中を有難がっているのは事実だ。

あずにゃんは尾張と美濃、いや、清州と岐阜以外の世界を知らない。さゆりんやあーやとは違って、信長の絶対的な統治下の平和な町でしか暮らしたことがないあずにゃんは、雑兵や野盗、僧兵などが暴れ回り、民衆が貧しい思いをしているような全国ほとんどの町の在りようを肌で感じたことがない箱入り娘だ。

だから、全国の神社も寺社も、神や仏に真面目に帰依しているものだと思っている。

「そこまでせねばならぬことなのか。おやかた様は畜生道に堕ちたのか」

だから、延暦寺に女子供が大勢いたことに疑問を持たない。

あずにゃんのように多くの人々が織田軍のやったことに非難をするんだろう。十兵衛が言った、これが天下の信を失うってことなんだろう。

「だから、梓殿、あっしはもう隠居し頭を剃ります」

「ならぬ」

と、あずにゃんが目を吊り上げた。

「逃げることは許されぬ。家を捨てるだけで己の仕出かしたことを仏に懺悔するとは、こんな虫の良い話があるか。天下が安寧するま

で、亭主殿はもがき苦しまなくてはならぬ。出家をするのはそのあとじゃ」

おれは首を垂らした。だよな。あずにゃんは曲がったことが大嫌いだもんな。あずにゃんが優しくしてくれると思ったおれが大間違いだった。

「わらわも共に闘う。わらわたちは夫婦じゃ。離れ離れになろうとも、苦しみも喜びも一心同体じゃ。だから、辛いことがあれば、わらわにつつがなく話しておくれ。わらわは叱咤激励することしかできんが、亭主殿を心から好いておる」

おれはあずにゃんを見つめる。ウウッ。目から汗が。

「亭主殿が畜生道に堕ちても、わらわは亭主殿の女房じゃ。味方じゃ」

あずにゃんはおれの手を取り、ぎゅうと握った。おれはあずにゃんにすがりついた。なんていい嫁なんじゃー。なんていい嫁なんじゃー。あずにゃん菩薩様じゃー。おれは果報者じゃー。

で、一年振りにあずにゃんをぺろぺろして、あずにゃんの温もりを感じながらぐうぐう眠ったおれ。

次の日、朝飯を食べに居間に出てきたら、太郎がいない。ねじり鉢巻きによると、クロに跨ってどこかに行ってしまったらしい。

「家出か」

冗談半分でそう言うと、あいりんにきつく睨まれた。

「家出などしておりませぬ。あの方は散歩をしてくると私に申していきました。ちゃんと、朝ごはんも食べました」

むう。あの方呼ばわりとは。すっかり、あいりんも太郎の女房か。そもそも、この屋敷は奉公人やらが住めるような計算で作られたんだろうけれど、二世帯住宅じゃないからな。元々、あいりんは女中だったわけだし、なんか、変な気分だ。

「太郎はどんな様子じゃった」

あずにゃんが訊ねて、あいりんは表情を曇らせる。

「ひどく疲れている様子でした。でも、私に会えてほっとしたと申

しておりました」
　ほのかに笑みを浮かべるあいりん。うわあ、やだね、のろけちゃって。やっぱり、二世帯で住むのはやだな。太郎とあいりんのにゃんにゃん声とか聞きたくないしさ。
　てか、太郎とあいりんは結婚したけれど、ねじり鉢巻きとかシロジロもいつまでも独身にさせておくのは可哀想だな。ねじり鉢巻きなんかはとくにおっさんだし。
　さゆりんとあーやは是が非でもさせないけれど。
　お貞は、まあ、ババアだからいいんだろ。ずっとあずにゃんの侍女だったんだもんな。
　午前中、あずにゃんの茶会に付き合わされ、おれは苦い抹茶を呑んだあと、ねじり鉢巻きやシロジロのことを話してみた。
「気にすることもなかろう」
　と、あずにゃんは笑う。
「栗之介も四郎次郎も女のことより、今、自分がやりたいことをやっているのじゃ。武士ならまだしも、奉公人の彼らは周りがとやかく口を出すこともなかろう」
　そう言われると、なんか、おれの考えがすごい浅はかだったような気になってきたけれど、あずにゃんはくすくすと笑った。
「亭主殿が彼らの嫁の心配をするなんて、珍しいの」
「いや、まあ、やっぱ、あっしは梓殿がいてこそなんで、やっぱり、女房ってのは大切だなって思って」
「ずいぶんと世辞がうまい。彩を連れていったのがどういう了見なのかはわからぬというのに」
「い、いや、そ、それは、身の周りのこととか、だ、だ、団子屋をやろうとか、そういうので――」
「冗談じゃ。それより、栗之介や四郎次郎よりも、早之介や新七の世話を考えるべきではないのか」
　うっ。た、確かに言われてみれば、ねじり鉢巻きとか四郎次郎よりも、一応は与力の連中のことを考えるべきだ。でも、タコ入道は

ともかく、吉田早之介は、ちょっと……。だって、そんな奴、本当はこの世の中にいないし。実は女だし。

「なんなら、早之介も新七もわらわが見繕ってこよう。亭主殿は何かと忙しいであろうしな」

「あ、いやっ、大丈夫ッスよ。そんな、あいつらこそ、そんな気ないですから」

「そういうわけにもいくまい。彼らこそ、武士として家を立て、後世に伝えていかなければならぬのだから」

「いやいや、いいんですよ。あいつらは、その、新七はその、男好きなんで、なんか、男を買いあさっているとかで、聞く耳を持たないし、早之介は、その、あ、あーやに惚れているみたいなんで、ま、ま、まあ、遠くから見守ってやりましょう」

「そうか。しかし、新七が男色に耽っているとはまことなのか。そのようには見えんが」

「ええ、そりゃ、もう、大の男好きで」

「ならば、叱りつけなくてはならん。男ばかりに惚けていては行く末は目も当てられん」

「いやっ、梓殿からそんなことを言ったら、あいつは落ち込んでしまうので、あっしから言っておきますよ。梓殿は気にしなくていいですよ」

すると、じろーっと目を向けてきたあずにゃん。

「何か隠しておるな」

「いや、隠しては」

「まさか、亭主殿、新七とできているんであるまいな！」

「あ、いや、あ」

「汚らわしいっ！　なんて汚らわしいのじゃっ！」

あずにゃんは杓子をぶん投げてきて、ついでにお湯もぶっ掛けてきて、おれはあわてて部屋の隅に退散。

「その汚らわしい手でわらわを抱いていたとは、顔も見たくないわっ！」

「違うんです！　誤解です！　あっしはホモじゃないんです！」
「触るなっ！」
あずにゃんの蹴りが顔面に飛んできて、ノックダウン。あずにゃんはそのまま部屋をずかずかと出ていってしまった。
うー。なんてことだ。まさか、ホモ扱いされるだなんて思いもしなかったことだ。うー。もしかしたら、あの様子だと、他の女と寝ることよりもはるかにホモセクシャルをあずにゃんは忌み嫌っているのかもしれん。てか、ホモじゃないのに。やばいやばい。あずにゃんに嫌われたくないよお。
「どうしたのです」
お貞が駆け付けてきて、頭を抱えているおれの背中に手を当ててくる。
「どうして、仲睦まじかったのにまた癇癪を起こされるのです」
「違う。聞いてくれ、梓殿が大変な勘違いをしているんだ。おれが新七とおホモだちだと思い込んじゃったんだ」
「そんなわけありますまい。旦那様が男色を好まないのは知る人は知っております」
「そんなわけあったんだ！　どうにかしてくれ！」
ハア、と、溜め息をつくと、お貞は散らかった部屋を片付け始めた。

火事場泥棒、出陣

「母上、それは誤解ですよ。父上は男色を毛嫌いしておりますから」
いいぞ、太郎。もっと、言え。
「実は拙者が小姓になったのは、丹羽様の命で最初はそういう目的だったのですが、父上は拙者にまったく手を付けませんでした。拙者にも男を好むなと言っております。まして、新七郎が男色に耽っているなど聞いたことがありません」
「じゃあ、なぜ、亭主殿は新七が男色に励んでいるなどと申したのじゃ」
じろりと顔を向けてくる太郎。あ、いや。
「なぜです」
「そ、それは、だな。ふむ。そういう話を聞いたことがあったんで、つい」
「誰が言っていたのです」
「あ、いや、その、あーやが」
シラーッと見つめてくる太郎。
「俺はそんなの聞いたことねえぞ」
「おいっ」
ねじり鉢巻きの余計な口出しに、おれはうっかり声を出してしまい、太郎やあずにゃん、あいりんとお貞に更に怪しまれるおれ。
「ま、まあ、ね。あっ、なんか、間違えちゃったのかな～。誰かと間違えちゃったのかな～。アハハ」
「旦那は新七が奥方に惚れているからそんなつまんねえことを言っているんだろ」
「おいっ」
「馬鹿馬鹿しい」
あずにゃんは表情をむっとさせてご飯をちまちまと食べ始める。
「なんて器の小さい夫じゃ。新七がどうであろうと、わらわが亭主

殿を裏切るわけなかろうが。もう少し男らしくしたらどうなんじゃ」
「まことですか、父上」
太郎の目が若干笑っている。むう。おれの嫉妬からくるものがタコ入道のデマを流しているということになっているが、そういうことにしておいたほうが一件落着だな。
「ま、まあ」
ふふ、と、あいりんとお貞が揃って笑った。
とりあえず、誤解は解けたようなので、おれは部屋に戻ったが、それにしても、ねじり鉢巻きの口の軽さが危ねえ。あいつは早之介の正体を知っているからな。かといって、あいつには何度も注意しているんだから、もう駄目なんだろ。一カ月ぐらいはここにいたいけれど、早いところ岐阜を出ておかないと、いつバレるかわからん。
「旦那様。申し忘れていました。吉田殿と四郎次郎殿から文が届いております」
お貞が手紙を持ってきて、燭台の下で手紙を開いた。
四郎次郎からの手紙の内容は簗田ホールディングスの売り上げだった。ふむふむ。上出来だが、もうちょっと稼げるだろ。もっと働けという返事を書くと、今度はさゆりんからの手紙を開いた。
池田勢が茨木重朝を討ち、茨木城を落としたらしい。それに飽き足らず、池田勢は高槻城に向かった。更に大和の松永弾正が信貴山城から出兵し、高槻城攻略に参戦する構え。
至急、堺に戻られたし。
……。
は？　なんだよ、松永弾正って。おかしいだろ。高槻城は足利幕臣で、松永弾正も足利幕臣だぞ。
さゆりん、間違っているんじゃねえの。松永弾正は高槻城の援軍に向かったんだろ。何を言ってんだ。攻略に参戦する構えって、それじゃ寝返りじゃねえかよ。
……。
弾正の奴、寝返ったの？

ううっ。寝返った可能性大だ。だとすると、あいつが摂津の混乱に参加してきたら、摂津三分の計が台無しになっちまう。多分、あいつはどさくさに紛れて摂津を泥棒する気だ。

どうするどうするどうする。

さゆりんが至急戻ってこいって言っているのは、あいつだけじゃどうにもならなくなっているからだ。でも、おれが行ったところで何かが変わるかなあ。

放っておくか。

いや、駄目だ。今までやって来たことをここで台無しにするわけにはいかない。松永弾正なんかにおいしいところを持っていかれてたまるか。

おれはあいりんを呼んだ。む。あいりんは太郎の奥さんだから、あんまりこき使えないな。ということで、お貞を呼んだ。

「どうしたのですか、そんな大声を出して」

「今から堺に向かう。支度をしてくれ。ねじり鉢巻きにもそう伝えてくれ」

「今からって、もう、外は真っ暗ですよ。明日にされては」

「駄目だ。そんなちんたらしている状況じゃない。早く支度をしてくれ」

血相を変えているおれにお貞はようやく事態を察し、廊下を駆けていった。

岐阜から堺までは夜通し駆け抜けたとしても丸二日はかかる。ただそれはクリツナに早駆けさせた場合の話であって、ねじり鉢巻きの同伴がないと心細いおれだとどんなに早くても三日。寝泊まりしながらだと四日。

さゆりんが松永弾正の出兵の情報を手に入れるまでは早くても二日はかかっている。おれに手紙を出して、三日間。

最低でも、弾正の出兵からおれの到着までは一週間以上のロスがある。

池田勢と松永勢に攻められた高槻城が一週間ももつかよ。

信長のところに行こうかな……。弾正が裏切ったって。
「父上っ」
太郎が声を上げながら部屋に飛び込んできた。
「今から出立とは本気なのですか」
「うーん」
おれは額に手を抱えて悩んだ。
「何があったのです。そんなに危急の事態なのですか」
「いや、大したことじゃないけれど、とりあえず、おれが行かないとちょっとな」
てか、おかしいな。池田勢が摂津で暴れ回っているっていう情報は太郎なんかに入って来ていないのかな。
そういや、京の妙覚寺で信長にぶん殴られたときも、池田勢のことは口にしていなかったもんな。あのときは調度、池田勢が茨木城を攻めかかっていたときだろ。
なんで、織田の連中は何も知らないんだ。京都所司代の村井ジジイや十兵衛なんかは知っていて当然だろ。だったら、信長の耳に入っているはずだ。
やっぱり、信長のところに行こうかな。でも、やだな。また、怒られるかもしれないし。
「どうしたのじゃ、騒がしい」
「父上が今から堺に向かうと言っているのです」
「今から？　夜道は危険じゃ。亭主殿、明日にしなされ。何があったかは知らぬが、栗之介と二人で夜道を行くのは危険じゃ。事態よりも命を惜しみなされ」
「いや、とりあえず登城します。太郎、お前も付いてこい。とりあえず、ゴンロク殿の屋敷に行くぞ」
「え。どうして、柴田様のところに」
「一緒に連れて行くんだ」
ゴンロクがいれば信長に怒られても止めてくれるもんね。
「柴田様は岐阜に戻ってきていませんよ」

ぐう。仕方ない、一人で行くか……。太郎がいると面倒だし。
ねじり鉢巻きにたいまつを持たせて、急遽、稲葉山の山頂へと登り、門番に簗田左衛門尉が至急、信長に会いたい旨を伝える。
門番が城の中に入っていき、信長の小姓か従者なんかに通していいかどうか訊ねに行く。もしかしたら、信長はおホモだちとお楽しみ中かもしれないからな。でも、お楽しみ中だったら機嫌が悪いんだろうな。やだなあ。やっぱり、帰ろうかな。
しばらくすると門番が小姓を連れて来て、信長が許可していると言う。
おれは城の中に入り、信長の居室がある階に上がっていった。
「入れ」
戸の外から来訪を告げると、中から声がしたので、戸を開けた。
信長は白い着物の寝間着姿でいて、ううっ、股を開け広げて刀の手入れをしていた。
「お前が来るとは珍しい。何事だ」
「あの、その、堺にいる配下の者から手紙が届きまして、池田勢が高槻城を攻めているらしくて」
途端、信長は刀を立てたままぎろりと視線を向けてきた。
「今さらなんだ。池田が茨木を攻め立てていることをお前は知らなかったのか」
「あ、いや、知っていましたけど、まあ、お耳に入れることでもないかなと思いまして」
「ならば、今度はなぜ報せに来たのだ」
「その、松永弾正が出陣したらしくて。その、高槻城に」
「なんだと？」
さすがに信長の表情が変わった。ただのぎろりじゃなくて、怪訝そうに額に皺を寄せながらのぎろりだった。
でも、すぐに鼻で笑い、再び刀を打粉でぽんぽんと叩き始めた。
「あの悪党、火事場泥棒をする気か」
「寝返ったんじゃないんですか」

「誰が誰を寝返ったんだ」
「弾正が信長様をですよ」
「何を言っている。あいつは足利幕臣だ。おれの配下じゃねえ。あいつが高槻城を攻めたなら、それは足利幕臣同士の揉めごとだ。おれには関係ねえ」
「でも、弾正が高槻城を手に入れると、あとあと厄介なことになるんじゃ」
「放っておけ。口を挟んだところで、あの悪党にのらりくらりと交わされるのが落ちだ。俺が出ていったら、池田勢に攻め立てられた高槻城の援軍に出たなどと、どうせ白々しい文句を用意している」
むう。この野郎、何をのんびり構えてやがるんだ。弾正に高槻城を乗っ取られたら、摂津のパワーバランスが崩れて大変だっていうのに。
「そもそも、お前は摂津をどうするつもりなんだ。俺がいない間に三左の命で飛んでいったそうだが、お前が摂津をどうするつもりなのか、俺は聞いたことがねえ」
うっ。
「三好に占拠され、本願寺まで抵抗してきて、お前が飛んでいったときよりも状況は悪化している。今まで放っておいたが、お前が一人でどうにかなる状況ではないだろう。出来ぬなら出来ぬと言え。今は軍勢を回していられないが、この一年か二年で北近江がおさまれば、サルを向かわせる。強情を張るな」
「いや、出来ます」
ちょっと癪になったのでそうやって言うと、信長は手を止めてちらりと視線を向けてきた。
「お前、何か企んでいやがるな」

早馬

おれは冷静に分析してみた。

池田勢が摂津で暴れ回っていることを信長は知っている。でも、そのことについて、信長はおれに何も言ってこなかった。更に、松永弾正がしゃしゃり出てきたことを伝えても、放っておけと言う。

足利幕臣同士の揉めごとであって、織田には関係ない。

だったら、バッタの陰謀を話したとしても問題ないんじゃ。もちろん、銭儲けしていることは隠すけど。

「お前がそこまで固執していることがおかしい。何かがあるから固執しているんだろう。違うか」

「おっしゃる通りです。なので、今、松永弾正に高槻城を乗っ取られるわけにはいきません」

「なぜだ」

「結論から言えば、池田九右衛門の側近、荒木信濃守村重という男に謀反を起こさせ、信長様の配下にさせます」

おれは摂津三分の計を信長に（おれの考えた策のように）披露した。なので、今は池田勢を野放しにさせている。そうして、三好や本願寺にがっぷり四つに組めるぐらいの勢力になったら、ヘタレ村重に乗っ取らせる。

「だから、弾正を摂津に入れさせるわけにはいきません」

おれの話を聞いているんだか聞いていないんだか、信長は拭い紙で刀を拭いたあと、刀身を燭台の火にきらりきらりとかざして確かめる。

「弾正は危険な男です。何を考えているかわからない男です。だったら、扱いやすい荒木信濃守を手駒にしたほうが確かです」

「その荒木とやらは謀反の気があるのか」

「すでに通じ合っています。元々、あっしは摂津池田の目付けだったときから、信濃守と懇意の仲です」

すると、信長はきゃっきゃっきゃと突然笑い上げた。急に甲高い声を出したので、おれはびっくりしてひっくり返った。
「お前、見違えたじゃねえか。何があったんだ、あー？」
「いや、別に、あっしだって、そりゃあ」
「ついぞ忘れておったが、たまにはお前の話も聞くもんだな。よかろう。調度、南蛮の宣教師から高槻をどうにかせいと言われていたところだ。高槻には南蛮人の寺があるらしいからな。俺は放っておくつもりだったが、お前が言うなら、兵を出そう」
信長は甲高い声を上げて小姓を呼び出した。
「筆と紙を持ってこい」
小姓が言われた通りに持ってくると、信長はさらさらと何かを書き始め、それを折り畳むと、おれに渡してきた。
「京にいるキンカ頭に渡してこい。兵を出し、仲裁せよと書いてある。池田の肩を持つわけにはいかぬ。だが、悪党のいいようにもできんだろう。急ぎ、岐阜を出立しろ」
これはキタね。沸々とキターね。信長の援護射撃をゲットしたおれは、まさに鬼に金棒だわ。
おれは駆け足で城を下りると、ねじり鉢巻きに家に戻るよう伝えて、クリツナに跨った。
「支度が整ったら京に行くぞ」
いや、待てよ。夜道は危険だってあずにゃんが言っていたな。それに、おれが持っていくよりも、飛脚か早馬を出したほうが早いような。
おれは我が家を通り越して城下の飛脚屋に行き、手紙を京の十兵衛のもとに速達で届けてくれるよう伝えた。
「申し訳ないですう。今しがた、飛脚が全員出ていてしまっていて。明日の朝になれば何人か戻ってくるんですが」
「じゃあ、いいや」
「申し訳ないですう」
まあ、しょうがないな。武将から雑兵まで遠征しているご時世だ

からな。てことで、違う飛脚屋に寄った。
「すいません。うちは去年の秋から夜の注文は受けてないんですよ。ほら、織田様の領内でも一揆が起こったりなんだりで危ないでしょ。お客様は神様ですがね、うちはやっぱ少人数でやっているもんで、安全第一にやっているんですよ。もうちょっとねえ、治安が良くなればそんなことはないんですけど、こんなご時世でしょう。岐阜はまだ――」
話、長えよ。無駄口叩いている暇なんかねんだよ。まったく。
しょうがないから、馬借屋に行ってみるか。
「あー？　うちはそんなのやってねえぞ」
むっ。この田舎者め。堺の馬借はやってくれるのに、なんだ、このサービス精神のなさは。
「信長様の書状だぞ。やってくれたっていいだろうが」
「あー？　だったら、なおさらやりたくねえな。おやかた様の書状なんて、失くしちまったら首がすっ飛ぶぜ」
「金は弾むからやってくれよ。急ぎなんだ。頼む」
「んー。じゃあ、四十貫な」
ふざけやがって……。なんなんだ、その法外な額は……。
「駄目ならいいよ。どのみちやりたくねえし。だいたい、旦那が自分で持っていけばいいじゃねえか。後ろにいるのは栗綱だろ。どんな馬よりも早く届けられるじゃねえか」
むう。そんなこと言われたって、おれ一人じゃ無理だし。
「ま、他をあたってくれ」
で、戸を閉めてしまった馬借屋のオヤジ。カスが。
「旦那、おれがクリツナに乗って持っていってやるよ」
と、ねじり鉢巻きが言った。こいつは何もわかってねえな。
「おい。そうしたら、おれが京に行けなくなるだろ。手紙は先に出して、おれもあとから行かなくちゃならないだろう。もうちょっと考えろ。まったく」
「歩いてくればいいじゃねえか」

「そんなの嫌だよ。岐阜から京まで歩いて行けるかよ」
「贅沢言うなよ。急ぎなんだから仕方ねえじゃんかよ。だいたい、昔は馬に乗れなかったから歩いていたんだろ」
「あの頃は若かっただけだ。なあ、クリツナ。おれはお前がいなくちゃ駄目なのを知っているよな」
クリツナは目をとろーんとさせて無視。
「しょうがない。太郎に届けさせるか」
「それこそ無理だろうよ。若が岐阜にいなくなったら出陣の下知が来たときにどうすんだよ」
「おれがいるじゃんか」
ねじり鉢巻きはシラーッとした目。チッ。でも、まあ、大島のおっさんもいなくなっちゃったし、おれが一人で軍を率いたことってないからな。タコ入道がいるにしても、ちょっとな。
「でもな、沓掛勢は沓掛に戻ったろ。出陣の命令が来てもすぐには動けないんだから、どのみち同じことだろうが」
「そうは言っても、若を岐阜から離れさせるわけにはいかねえだろうよ。そんなこと、おれにでもわかるぞ」
うだうだうるせえな。こいつはいつからこんなにお喋りになりやがったんだ。黙って馬を引いてろが。まったく。
ん？
「そうだ！　クロに乗って行けよ。お前、クロに乗れただろ。それがいい。名案だ」
「そうしたら、若が乗る馬がいなくなっちまうじゃねえか」
「あいつはどんな馬でも乗れるから大丈夫だ。おれの場合はクリツナしか乗れないから駄目なんだ。お前がクロに乗っていけ。わかったな」
渋る顔で首を縦に振らないねじり鉢巻き。おれは信長の手紙を押し付ける。で、クリツナに跨ろうとする。
「早く乗せろ」
ねじり鉢巻きが渋々掌を出してきて、おれはクリツナに跨る。ク

リツナが眠たそうな足取りでぱかぱかと歩き始め、稲葉山に戻るおれ。

我が家の門前まで来て、クリツナから下りると、

「じゃ、よろしく頼むな。明日中には届けろよ」

「よろしく頼むって、若には言わねえのかよ」

「いいよ、そんなの。勝手に乗ってけ。あいつのものはおれのものだ。さっさと行け」

「また、若が臍を曲げるぞ」

「あいつはいつだって臍曲げているからいいんだ。無駄口叩いている暇があったらさっさと行け」

「知らねえぞ」

そう言い残し、ようやく庭先へと回っていったねじり鉢巻き。そもそも、火急の事態なんだから、太郎が文句を言うわけねえだろうが。それしか方法がないんだからさ。

やがて、ねじり鉢巻きは門前までクロを引いてくると、首を上下に振るクロにひょいと跨って、

「じゃあ、堺で待っているからよ」

「気を付けてな」

いななきながら前脚を高々と上げた漆黒の馬体は、ねじり鉢巻きの声がかかると、闇の中へ猛然と消えていった。

よしよし、これで高槻城はなんとかなるな。クリツナもそうだけれど、クロもどんな馬よりも早く駆ける名馬だからな。

「ま、おれたちはゆっくりしながら堺に向かおうぜ」

と、クリツナの鼻面を撫でる。クリツナはすでに半目。戦争のときは夜になってもこんなことないのに、今日は眠れる日だっていうのをわかっているのかな。

ん？

ちょっと待てよ。ねじり鉢巻きがいないとなると、おれはどうやって堺に行くんだ。てか、行けないじゃん。てか、堺で待っているからよって、おれ、行けないじゃん。

あいりんとのデート

馬屋に戻すと、すぐに眠りについたクリツナ。
ねじり鉢巻きがいないとなると、一人で堺への旅に出るか、岐阜にこもっているか、どちらかか。うむ。岐阜に閉じこもっていよう。
家の中に上がると、あずにゃん以下、皆がおれの帰りを待っていたらしく、今から堺に行くのかどうかと詰め寄って来る。
「あ、行かなくなりました」
「賢明じゃ。何かが起きてからは取り返しがつかん。命あっての物だねじゃ」
「栗之介はどうしたのです」
「あ。鉢巻きなら堺に行ったよ。クロに乗って」
「えっ？」
「信長様から十兵衛に渡せっていう書状を渡されたからな。急ぎで持っていけって。だから、クロを貸して、ねじり鉢巻きが早馬で行ったよ」
おれはごちゃごちゃと言われないうちに、面々の脇を通り抜けて、さっさと部屋に退散しようとする。
「クロって、栗綱はどうしたのですか」
「いるよ。おれの馬だし。てか、おれはクリツナにしか乗れないし」
「せ、拙者は――」
「お前はその辺の駄馬にでも乗っていろよ。まあ、言っておくが、信長様の書状なんだからな」
ぐうの音も言えない太郎。おれの勝ちだ＾＾
翌日、太郎は沓掛に出かけた。どこかから借りてきた駄馬でｗ
あずにゃんも、柴田家に用があるとか言って、お貞を連れて出かけていった。
おれは堺に到着すると思われるねじり鉢巻き宛てに、一度、岐阜に戻ってこいとの手紙をしたためる。

飛脚屋に渡しに行こうと部屋を出ると、庭先でたらいに屈んで洗濯をしているあいりんを見かけた。
むう。
「あいりん」
おれが呼ぶと、あいりんは腰を右手でとんとんと叩きながら立ち上がり振り返って来た。
「どうかされましたか」
と、笑顔。ほつれた髪を後ろに結い上げて、着物の袖を脇までたくし上げている姿は、まったくもって武将の奥さんじゃない。
「ちょっと、城下に手紙を出しに行くから、たまにはあいりんも一緒に行こうか」
「私もですか？」
「まあ、たまにはいいだろ。あんまり、あいりんに構ってやったときがないからさ。何か、好きなものを買ってやるよ」
「別にそんな、間にあっていますって」
と、笑顔。
「いや、たまには言うことを聞きなさい」
ふふ、と、笑ったあいりん。
「じゃあ、一通り終わるまで待ってもらってよろしいですか。すぐに終わりますので」
「うん。待ってやるよ」
おれは縁側に腰掛け、洗濯板相手に頑張るあいりんの後姿を眺める。
太郎は侍大将だからって格好つけているが、その侍大将の女房になったあいりんはまったく変わっていない。微笑ましいことである反面、ちょっぴり罪悪感。あずにゃんやさゆりんのことを考えてやることはしばしばあるけれど、あいりんやお貞がどんな状況なのか考えたことは、今までちっともなかった。
あーやを女中にしたとはいえ、堺に連れていっちゃったし、シロジロだって、団子屋をやるまでは自宅警備員だったからな。あいり

んやお貞の負担は以前より大きくなったっていうのに、不平不満をこぼすことなく、健気に働いてくれている様子を見ると、やっぱり、奉公人ぐらいは増やさないとまずいかもしれんと、反省するおれ。

あいりんの洗濯が終わり、クリツナに餌をやったあと、城下に出た。

「何か欲しいものはあるかい」

「欲しいものですか？」

うーん、と、にこにこしながら首を傾げるあいりん。なんだかなあ。今さらながら、この娘が太郎の女房にくれてやったしまったことが悔しい。

「じゃあ、お椀が欲しいです」

「お椀？　なんだよ、あいりんも茶道をやるのか」

「違います。お味噌汁やお吸い物のお椀が欲しいです。太郎様とお揃いのお椀」

「それは駄目だ」

唇を尖らせるあいりん。

「どうして、太郎様と仲良くできないのですか。いつも喧嘩ばかり。いくさのときは協力し合っていたと四郎次郎殿から聞きましたよ」

無視を決め込み、岐阜の加納に入っていく。

加納は天下に名を轟かせる信長のお膝元だけあるのと、人々が自由に商売を出来る楽市楽座を奨励している町だけあって、おれが見てきた町の中でも、堺や京に次いで栄えている。

飛脚屋に手紙を渡したあと、あいりんを連れて織田家臣団御用達の漆器屋に立ち寄った。

「なんでも、好きなものを買いなよ。二つ。太郎とお揃いのをさ」

あいりんはにっこり。

「旦那さまって、結局はお優しいんですものね」

「仕方なくだ。仕方なく」

あいりんはしばらく陳列する漆器を眺めたあと、ただの柄無しのお椀を指差した。

「これがよいです」
「なんだよ、こんなもの。もうちょっと、ぴかぴかしたやつにすればいいじゃんか。一応な、あいりんと太郎のお祝い品として買ってやるつもりなんだからな」
「毎日使うものですから、そんな派手なものはいりません。お気持ちだけで十分です」
かーっ。お気持ちだけで十分なんて言われちゃったよ。かーっ。金ならたくさんあるのに、気持ちだけで十分だってさ。かーっ。おれって金ならたくさんあるのになあ。かーっ。
で、あいりんご希望の椀を店の主人に包装してもらい、品代四貫の請求は堺の中島四郎次郎にあてておけと言って、その場で証文を書き、主人に渡す。
「大丈夫なんですか」
と、店を出たあとに心配されたけれど、おれはにやりと笑い返す。
「あいりん、おれは昔のおれじゃないんだよ」
「牛殿じゃないですか！」
聞き慣れない声がして振り返ってみると、この美人は誰？　って、おまつじゃんか。
「お久しぶりです。驚きました、牛殿とこんなところでお会いできるなんて」
おまつは侍女を一人従えていて、あと、昔の萌え萌えおまつを彷彿とさせるおにゃの子。どうやら、マタザとおまつの一番目の子供の幸。おれのケツをびしびし引っぱたいていたおにゃの子。
「幸、牛殿ですよ。よく遊んでもらったでしょう。ご挨拶は？」
幸はぽかんとおれを眺めたあと、
「お久しゅうございます」
と、礼儀正しく頭を下げてきた。ふむ。子供ってのは成長するのがずいぶんと早いものだな。おれのケツをびしびしと叩いていたＤＱＮ子供が、こうまで礼儀正しくなるとは驚きだ。
「牛殿は堺に行かれていると聞きましたけれど、岐阜に戻って来ら

れていたんですね」
「まあ、ちょっと骨休めに。今日は、たまには女中を構ってやろうかと思って」
「女中だなんて。あいり殿、言ってあげたほうがよろしいですよ。いつまでも、女中扱いするなって」
「いえ、私はいつまでも旦那様に仕える女中のつもりです」
「まあ。良かったですね、牛殿。太郎殿のお嫁さんが出来た人で」
む。なんか、おまつとあいりんが知った仲っぽいんだけど。
「あいりん、おまつ殿を知っているのか」
「知っているも何も、日頃からお世話になっております。おまつ様だけではありませんよ。千代様はもちろん、寧々様や家中の奥方様と仲良くさせていただいておりますよ」
ふむ。そうか。ということは、あずにゃんもあいりんも、尾張時代から繋がっている奥様連中の輪の中に入っているってことか。
なんか、おれの昔のことをよく知っているこいつらと仲良くしているのは頂けないな。
「おまつ様は幸様とご一緒にどちらに行かれるんですか」
「ええ。なんでも、加納に香木を出すお店が出来たということで城下に出てきてみたのです。岐阜や清州では滅多に目にかかれませんから」
「香木ですか？」
「ええ。そうだ。あいり殿もいかが。ご一緒に」
「行ってみたいです」
と、おれに顔を向けてきたあいりん。なんだよ、香木って。駄目駄目、そんな訳のわからないもの。奥様方のお付き合いに参加していられれっかよ。
「じゃあ、行きましょ。牛殿もご一緒に。堺や京におられた牛殿なら目が肥えていますでしょう」
「牛さんも一緒に行くの？」
と、おまつの娘。いやいや、牛さんって。左衛門尉だし。

「ええ。良かったですね、幸。牛殿にお会いできて」
「うん」
そうして、おれの背中に飛び乗ってきた幸。いや、あの、いや。
や、やっぱり、変わっていないかな。

きゃっきゃ

香木というのは中国とかからの輸入品みたいで、いろいろ種類があるみたい。店の中の居間に上がらせてもらい、店の主人が仰々しい木箱の中に入った汚い木の根っこみたいなやつをいろいろと見せてきたんだけど、試しに匂いを嗅いでみるとそれぞれ違う香りがほのかにした。

「近頃、茶道が流行しておりますが、京のお公家様の間では昔から香道というものが嗜まれていました」

実践してやると言って、主人は香道セットを持ってきた。

湯呑みみたいな香炉の中には灰がてんこ盛りで、それを火箸でほぐしていく主人。様子をまじまじと眺めるおまつや幸、あいりん。

ほぐしたあとに、ひとつまみの炭を入れて、また火箸でゆっくりとかきまわす。それで、変な棒でぺたぺたと灰を押さえると、香炉の中の灰の上にスライドガラスみたいな何だか小さい板を置いて、その上にようやく香木の切れ端。ほんと、小指の爪ほどの大きさもないほどに薄く切ったやつ。

主人は香炉を左の掌に持ち、右の掌で香炉に蓋をしながらおまつの顔に差し出してくる。

「お鼻を近づけてみてください」

香炉に鼻を近づけたおまつは、

「まあ」

と、一言。

幸とあいりんも匂いを嗅いで、きゃっきゃと騒ぐ。物は試しでおれも嗅いでみる。ほほう。汚い根っこだとは思えない甘い匂い。しかも、ナチュラルな感じ。ほんわかしていて、きつさがない。

「これは羅国という香木でございます」

ふーん。よくわからんが、あいりんが喜んでいるし、買ってやろうかな。

「その木はいくらするんだ」
「量にもよりますが」
「その根っこ一個でだよ。いくらするんだ」
「こちら全部となりますと、希少なので、四十貫は頂きませんと」
「四十貫！」
おれは思わず声を上げてしまう。こんな腐った木が四十貫だなんて……。でも、確かにいい匂いがした。だからといって、四十貫は……。
おれは呆然と根っこを見つめるしかない。
「やはり、お高いのですね」
「ええ。なので、切り売りしております。香木は匂い袋に使われる香料の練り物とは違って、香りを楽しむための嗜好品ですから」
「買った。それ一本丸ごと買った」
「え？」
「それを二つに切って、おまつ殿の分と、うちの娘の分にしろ。あと、その道具一式もな。代金は堺にいる中島四郎次郎に請求しろ」
唖然とする一同の中で、一人、きゃっきゃ騒ぎながらおれに抱きついてくる幸。
「牛さん、格好いい！　牛さんってお金持ちだね！」
十歳そこそこの幸に抱きつかれて、ちょっと萌え～。まあね、道具一式入れても百貫いくかいかないかでしょ。そんなの、簗田ホールディングスＣＥＯのおれにとっちゃ、はした金みたいなもんだからね。
「しかし、牛殿。このような高価な物を頂いては」
「いや、いいんです、いいんです。あっしの家は人数も少ない所帯なんで、金は余っておりますから」
「しかし――」
「そうです、旦那様、そんな無駄遣いをしなくてもいいではないですか。私ならさきほどお椀を買ってもらったばかりですし」
「いいのいいの。旦那、あとで稲葉山の前田家と簗田の家に届けて

こいよな」
と、言い残し、店をあとにしたおれ。
香りを楽しむためだけに百貫を捨てるとは無駄遣いには間違いないけれど、これでおまつや遠山さんたちの井戸端会議でおれの情けない昔話が出されることもなくなるはずだ。そして、たとえ無駄遣いだとしても、自分のためだけに散財しているサルなんかとは違う。築田左衛門尉は女子供に優しい男として、岐阜での評判はうなぎ昇り。デュフフ。
それにおまつと幸に買ってやった、すなわち、マタザに無理やり恩を着せてやった格好だしな。
「旦那様。太郎様にまた言われますよ」
「太郎には四十貫も使っただなんて言わなければいいんだ。そうだろ。ん？」
「それはそうですけど」
頬を膨らませたあいりん。でも、いちいちうるさいのはそれまで。香炉を嗅いだときにきゃっきゃと騒いでいたから、実は欲しかったのかもしれん。
夕方には香木と香炉セットが我が家に届いた。ただ、店の主人が、昼間に見せた聞き香りは慣れていない人間でないと香炉の扱いが難しいから、そらだきという香木の焚き方を教えてくれた。
香炉に専用の灰を入れ、そこに燃やした炭を突っ込み、あとは爪楊枝程度に切った香木を三切れぐらい置くだけ。
すると、居間にほんのりと香りが立ち込めた。
なんだ、こっちのほうが芳香剤みたいでいいじゃん。
店の主人が帰ってしばらくしてから、あずにゃんとお貞が帰ってきた。いい匂いがすると不思議そうな顔をしていたので、香木を買ってきたことを教えると、二人ともきゃっきゃした。
「やはり香木の香りは違うの。実に優雅な香りじゃ。これで移香をしてみたら最高じゃ」
「なんスか、移香って」

「衣服に香りをしみ込ませることです」
と、お貞が言って、ふーん。おにゃの子の中にはどうりでいい匂いのする人がいると思ったら、そういうことだったのね。
「なら、どうぞ、使ってくださいよ。これはあいりんや梓殿、お貞への贈り物です」
おれがそう言うと、女どもはきゃっきゃとはしゃぎながら早速、それぞれの着物を部屋から持ってきて、香炉の中に香木を焚いて、着物に香りを染み込ませた。

若殿小僧

おれが戦場に行っていたり、堺に出張していたりしている間、あずにゃんはよほど退屈な毎日を送っていたらしい。香りを染み込ませた着物を着込み、部屋でごろごろとしていたおれのところにるんるんとやって来て、

「嗅いでみてくれ」

と、袖を鼻先に伸ばしてくる。

くんくんすると、うむ、羅国のナチュラルセレブな香り。

「いい香りです」

「そうじゃな。香木を求めるとは亭主殿もお目が高い」

そうして、また、るんるんと部屋を出ていき、今度はあいりんかお貞に嗅がせに行ったらしい。

どうやらあずにゃんは、家事に忙しいあいりんやお貞の手伝いをしようとするらしいのだけれど、二人に、奥方様がするものじゃありませんと突き返されてしまうらしい。

なので、やることもなく、茶の湯などの道楽をするしかない。

まあ、元が柴田家の箱入り娘だから、窮屈に思っているわけでもなさそうだけれど、箱の中に閉じこもるしかない人生というのも、なかなか気の毒だな。

今度、堺に行ったら、いろんな珍しいものを買いつけて、あずにゃんに贈ってやろう。

それはそうと、摂津はどうなったものか。

秋の色が濃くなってきて、比叡山焼き討ち以降の織田勢はちょっとした休憩みたいな具合で落ち着いている。

あれからまだ一カ月も経っていないけれど、何かが起きるときっていうのは、岐阜はあわただしくなってくる。信長は進軍なら速攻だけれど、それまでが慎重派だから、いくさを決めたら軍備を十分に整えてから出陣する。

今、岐阜がこれだけ穏やかだっていうことは、当分は何もない。ま、摂津はもとより、横山城にいるサルとか、伊勢長島なんかはてんやわんやなんだろうけれど。

「旦那様」

戸の向こうでお貞の声。

「お城からお使いの方が見られております」

むう。呼び出しか。あんまり行きたくないな。

とはいえ、居留守を使うわけにもいかないので、玄関まで出ていくと、

「奇妙丸様がお呼びです」

と、使いパシリが言う。キミョウマルってなんだ。あ、信長の息子か。十兵衛が言うにはどら息子らしいけれど、おれなんかに何の用だ。どうせ、信長の息子だから、面倒な奴なんだろうな。チッ。

パシリに待ってくれるよう言うと、一応は信長の息子だし、会うのも初めてなので、礼服に着替えて家を出る。

「奇妙丸様があっしなんかに何の用なんスかね」

稲葉山を徒歩で登りつつ、パシリに訊ねると、さあ、と首を傾げられる。

「ただ、若殿様は築田殿に興味を持っておられるそうですよ」

フン。珍奇扱いか。

パシリに導かれるまま岐阜城に上がり、奇妙丸の居室まで案内される。

「若殿様、築田殿が参られました」

「御苦労であった。入れ」

障子戸の向こうから、声変わりしたて特有のあどけない低音が響いてきて、パシリが戸を開け、廊下で平伏するおれ。

「お初にお目にかかります。沓掛城主、築田左衛門尉でございます」

「急な呼び立てすまなかったな。さあ、入れ」

おれは頭を下げたまま腰を上げ、畳の部屋にそろそろと入る。表を上げろと言われ、顔を上げると、目の前には憎たらしいほどの美

少年が座っていた。
　信長にはあんまり似ていない。どちらかというと涼やかな目元に薄い唇の繊細な面持ちで、うーん、そういえば、昔、一度だけ会った信長の美人妻にそっくりだ。
「お主が噂に聞く牛太郎か」
　若殿小僧はそう言って微笑んだ。どら息子には全然見えない。むしろ、信長なんかより、ずっと爽やかで、ずっと好印象。小僧のくせに貫禄もある。
「左衛門太郎とは何度も会うておるが、不思議なもので、お主とは顔を合わせたことがなかったな。左衛門太郎が言っていたぞ。お主が堕落していると」
　そういや、手紙が来たことがあったな。あの馬鹿。
「恐れながら、倅は侍大将になり、姉川でも活躍してしまって、調子に乗っているだけなのです。若殿様から是非ともお叱りの言葉をかけてやってください」
「左衛門太郎も同じことを申していたぞ」
　ハハ、と、親父の信長とはまったく違う笑い方。
「お主たちは実に羨ましい親子だ。血が繋がっていないというのに、まったくの親子だ」
「まあ、どうなんスかね」
「お主の話を聞くたびに、我はお主に興味が湧いてくる。一介の素浪人であったお主が、小姓であった左衛門太郎を養子に受け、皆が恐れていた柴田の鬼娘を嫁に受け、左衛門太郎が出世を果たし、かつ、柴田の一門になりながらも、こじんまりと暮らしておる。もう少し威風をかざしても良いとは思うものだが、なぜにそう慎ましいのだ」
　どうやら、若殿小僧は勘違いをしているようだ。別に好きでこじんまりしているわけでもないし、むしろ、ＣＥＯだし。
　でも、勘違いしてくれていたほうがよさそうだ。
「あっしはそんなに能力のある男じゃないんで」

「しかし、父上はお主をかっているようだ」
「勘違いじゃないんスか。この前もぶん殴られましたし」
「それはお主だけじゃなかろう。皆、殴られておるではないか」
そうかね。殴られているのはおれとサルだけが多いような気がするんだけどな。佐久間ヒゲオヤジとかゴンロクとかが殴られたところを見たことがないぜ。
てか、おれとサルだけが多いっていうのは、お調子者だからかな。信長が気分屋なのは確かだけど、あいつってなにげに規律とかを重視するやつだからな。
「そういえばな、牛太郎。お主に聞きたかったのは武田徳栄軒のことだ」
誰？
「お主は徳栄軒に会ったことがあるのだろう。どんな人間だったのだ」
「トクエイケンって誰ですか」
「徳栄軒と言えば、甲斐の虎ではないか。武田徳栄軒信玄だ」
ああ。あのクソハゲオヤジのことか。まどろっこしい名前で言うからわかんなかったわ。
「やはり、噂に聞く将であったのか？」
「いやいや、若殿様。あんなのは化け物オヤジもいいところですよ。目がこーんなに小さくて、口髭がもっさもさしていて、にこにこしているくせに、腹の中では何かを企んでいる曲者ですよ」
「ずいぶんの言われようだな」
「若殿様、あんなのは信用しちゃなりませんよ。家臣も目立ちたがり屋の田舎者ばっかりですし、行儀も悪いし、まあね、いつかあっしがぶっさらってやりますよ、あんなやつら。沓掛鉄砲隊でね、皆殺しにしてやりますよ」
なんか、久々に思い出して、むかむかしてきたな。あんなやつらが持てはやされていると思うと、本当に腹が立つな。待遇も最悪だったし、殺されそうだったし、あーっ、クソサブロウの野郎、腹が

立つ。
「わかった。下がれ」
なんだ、急にふてくされぎみで。
「もうよい。下がれ」
若殿小僧はむっとしながら掌でしっしとやってきて、おれは首を傾げる思いで腰を上げ、部屋を出る。若殿小僧も、親父譲りの気分屋か。面倒なやつだ。

我が家にて一人……

岐阜城からの帰り道、ふと思い出して、家を通り過ぎ、城下に下りた。

サマージャンボ宝くじの売り上げが入っているはずだ。今のところ、シロジロもさゆりんも堺にいずっぱりだから、願福寺のジジイがちょろまかさないよう監視しているアピールをしておかないとな。

城下町郊外の願福寺にやって来て、紅葉の木の下で竹箒を手にしている小坊主に光才のジジイに会いに来たことを言うと、改修された本堂の奥、ジジイの居室に案内された。

「ああ、簗田殿。お久しぶりでございます。ご息災でございましたか」

ジジイは初めて我が家に来たときが別人かのように肌から禿げ頭までぴかぴかしていて、この野郎、いいものを食っていやがるな。

「そんなことより、夏の奇進札はちゃんと売れたんだろうな」

「ええ。開催するごとに評判が評判を呼んで、寄付銭は多くなっていく一方でございます。有難いことです。簗田殿の分はきちんと堺の中島殿に送っておきましたので、ご確認くだされ」

ふむ。どうやら、変なことはしていない様子だな。というより、ジジイはそんなに悪い坊主じゃなさそうだな。

「先日、奇進札を知った西美濃の同じ宗派の僧が訊ねて参りまして、もし、次に簗田殿か中島殿にお会いすることがあったら、我が寺にも出資してほしいとのことでした。如何でしょう、簗田殿」

「おいっ！」

おれが怒鳴り散らすと、びっくりして後ろに手をついたジジイ。

「お前、おれやシロジロの名前を出したのか！　何をぺらぺら喋ってやがんだ！」

「い、いえっ。簗田殿の名も中島殿の名も出しておりません。ただ、その僧には出資者とだけしか言っておりません」

「本当か！」
「まことでございます。名は出さないという最初の約束でございましたゆえ、出しておりませぬ」
「そんならいいけどよ」
仏のご加護があるだとか言って、一介の武士がこんなあこぎな真似をしているだなんてバレちゃうと、岐阜の連中の顰蹙を食らうばかりか、あずにゃんに半殺しにされちまうからな。
「まあ、西美濃の寺の件は考えておく」
と、ジジイの前から立ち去ったおれ。
稲葉山への帰り道、おれは奇進札のフランチャイズ化に悩む。
延暦寺が滅ぼされたのもそうだし、承兌のいる相国寺もそうだけれど、織田の目が届く寺社は信長の風当たりが厳しい。戦火のとばっちりを食らって、なおかつ、それまで持っていた寺の領地を信長に奪い取られちゃったのがほとんどで、どこもかしこも貧乏している。元気なのは本願寺の息のかかった寺ぐらいだ。
そんなご時世だから、奇進札を聞きつけた連中は、起死回生の切り札だと考えるかもしれないけれど、それに付け込んで調子に乗って派手にやっちゃうと、信長が立ち入り検査とかしそうだよな。
願福寺が奇進札をやっていることだって信長は絶対に知っているはずだ。でも、今のところ、宝くじに当たった岐阜の民衆が喜んでいる程度のレベルだから、あんまり、うるさくしないのかもしれない。
それに願福寺は天台宗だったよな。西美濃にある寺が同じ宗派だっていうことは、そいつらも延暦寺と同じ天台宗だってことだ。
いくら天台宗だからって、信長のお膝元の寺社が延暦寺みたいに凶暴なわけはないだろうけれど、信長の逆鱗がいつ襲いかかってくるかわからないから、今のところフランチャイズ計画はよそう。
摂津での背信行為の最中ってのもあるし、近頃、おれは危ない橋を渡りすぎているからな。
悪徳経営者とはいえ、簗田ホールディングスＣＥＯはそんなに馬

鹿じゃない。出るときは出て、引っ込むときは引っ込む。マネーに目がくらんで調子に乗った挙げ句、権力者たちに潰された連中なんてのは、元の時代でさんざん見たからな。

ま、やばくなったら、さゆりんを暗躍させた末に、全部をシロジロにおっかぶせるだけなんだけど。

家に帰って来ると、空っぽだった。あずにゃんぐらいはいるかと思っていたけれど、三人とも出かけているみたい。奥様方の井戸端会議にでも行ったのか。

クリツナを洗ってやり、うんこ掃除をしたあと、縁側に一人たたずみ、傾きかけた太陽が光の粒をさんさんと渡らせる空をぼんやりと眺める。

堺では一人でいることが多かったけれど、岐阜の我が家で一人になるのは久しぶり。いや、稲葉山の麓にこの家が出来てから初めてのことか。あずにゃんと結婚したあと、ここに移ったんだからな。

その前は城下の仮屋敷に住んでいた。あそこに住み始めたときは、確か、太郎と二人きりだった。太郎はまだ小姓だったけど、岐阜に来てからすぐに息子になったんだよな。あのときはまだ可愛げがあったけど、馬廻衆に上がったあたりから生意気さに磨きがかかっていったな。

太郎が足洗いの桶を担いできていたときが懐かしい。

そのあとにシロジロの馬鹿が鼻クソを持ってきて、チヨタンがあいりんを押し付けてきて、ねじり鉢巻きがクリツナとコンビでくっ付いて来て、さゆりんに殺されそうになって、あずにゃんと結婚して、お貞がやって来て……。

それが今では、シロジロとさゆりんはあーやと一緒に堺にほぼ定住。太郎はタコ入道と一緒なのかどうか、沓掛に出かけて、いつ帰って来るのか不明。あいりんは太郎の嫁さん。変わらないのはあずにゃんとお貞だけ。

でも、あずにゃんもお貞も寂しいのかもな。おれも太郎も出世をして、奉公人たちもそれぞれ自分のやりたいようにやり始めたけれ

ど、散り散りになっているもんな。
やだね、秋風って。もしくはおれもとうとうおっさんになっちゃったのかな。
おれは腰を上げると、すっからかんの我が家をなんとなく歩き回る。なんだか、太郎やシロジロとぎゃあぎゃあと喚き合っていたことが、もうやって来ないことのような静けさに感じる。
あずにゃんの茶室の戸を開けてみる。無駄使いの最たるものだけれど、仕方ないのかもしれない。あずにゃんはこうした寂しさを日頃から感じていたのかもしれない。だから、道楽に夢中になるしかなかったのかも。
茶室の戸を閉めると、また少し歩き、太郎の部屋を開けてみる。何もない殺風景な部屋だけど、漢字が並んだ掛け軸が掲げられている。
陽気発処、金石亦透、精神一到、何事不成
意味がわからないので戸を閉める。
また少し歩いて、あいりんの部屋の戸を開ける。あいりんはお貞と一緒に寝ていたけれど、太郎の奥さんになったので、あずにゃんから部屋を与えられた。もちろん、おれは何も介入していない。
あいりんの部屋はおれと同じような板床の部屋で、床の間に秋の花が飾られてあって、見覚えのない着物が掛けられている。金色の地に色とりどりの花が咲いているド派手な着物で、デザイナのときのあずにゃんが着ていたようなものだ。
てか、あずにゃんのじゃねえの。と、思いつつ、部屋に侵入し、着物の裾を手に取ってみる。結婚祝いで貰ったとかなのかな。
くんくん。ふむ。羅国のナチュラルセレブなかほり。染み込ませているみたいだけれど、どうせ、あいりんはこんなの着ないだろ。
ちらと、目を向けてみると、綺麗に折り畳まれた小袖が三、四着、平べったい箱の中に重ねて置かれてある。
あれはあいりんがよく着ているやつだ。
おれはそこに屈みこむと、一番上に置いてあった薄緑色の小袖を

両手でそろりと掌ですくい取り、鼻先を近づけてくんくんしてみた。

むっ。これは……。

羅国のナチュラルセレブな甘い香りが、あいりんの生活臭と融和して、甘優しい匂いに落ち着いているではないか。

くんくん。

こ、これは。香炉からただ染み込ませただけの香りは鼻に突き抜ける香りだが、この小袖から発せられている香りは、羅国の本来の香りを失わないままに匂いがふんわりと鼻の穴に広がっていき、やがて、甘さゆえの優しさが脳内を柔らかく刺激する。

ぬぬぬ。これは……、フェロモンだっ……。しかも、香りに増幅されたフェロモンだっ！

おれは小袖をいったん戻すと、廊下に出て、誰もいないことを確認する。大丈夫だ。どこで何をしているか知れないが、おそらく奴等が帰って来るのは夕方だ。もう少し大丈夫だ。

おれは小袖の箱に引き返すと、もう一度手に取り、まず、胸をドキドキさせながら、立ち昇ってくる微かな匂いを楽しんだあと、左右をちらちらと見てから、小袖に顔を埋めてスーハースーハーした。

HENTAI

あいりんの小袖、どうにかして手に入れたい。
でも、小袖をちょうだいだなんて、ただの変態だ。失墜だ。でも、欲しい。
ご飯を食べているときなんて、目の前にいるあいりんに貪りつきたい衝動を抑えるので必死だった。
でも、ちょっと待てよ。あいりんの小袖があの匂いだったら、あずにゃんは……。ぐへへ。
一度、部屋に戻ったおれは、しばらくしてから、そろそろとあずにゃんの部屋に向かった。昼間、あずにゃんに嗅いでみてくれと言われてちょっとだけ嗅いでみたけれど、あんなのは鼻先を近づけてみただけのことで、香りの本質を確かめていない。もっと嗅がなければ。もっと匂いに埋もれなくては。
こんこん。
「あ、あっしです。は、は、入ってもいいスか」
「亭主殿か？」
「はい。いいスか」
「構わんが」
戸を開けてみると、あずにゃんは白い着物に淡い桜色の帯。櫛でセミロングの髪を解かしているけれど、むう、風呂上がりか。これじゃ、羅国の魔力が削がれてしまっているじゃないか。
「どうしたのじゃ」
と、櫛を置いたあずにゃんは、突っ立っているおれをさらさらの前髪の下で見つめてくる。
「いや、まあ、その。あ、いや、梓殿と香りを聞こうかと思いまして。今、香炉を持ってきます。ちょっと、待っていてください」
そうだそうだ。湯上りの汗ばんだ体に羅国の香りを混ぜ合わせたら、更に強烈な魔力を発揮するかもしれん。一体、どんな香りがお

れを……、狂わせるっ……！

おれはすでに寝に入ろうとしていたらしきお貞を呼び出して、炭を焚かせると、羅国を小刀で削り取り、お貞の怪しい微笑を無視し、そらだき用の香炉セットを腕に抱えて、再びあずにゃんの部屋へ。

「わらわはもう眠い」

「いやいや、そんなことは言わずに。あっしは梓殿と香りを楽しみたかったのですが、城から帰ってきたらいないんですもん」

と、香炉に灰を詰めていき、熱々の炭を押し込む。

「今日は三人で紅葉狩りをしに行っていたのじゃ。亭主殿も誘いたかったが、城に呼ばれてしまったからの」

ふむふむ。あっそ。そんなことより、薄いきらきら板を香炉の中に置いて、羅国をセット。

燻された木屑が甘い香りをゆるゆると立ち昇らせる。

「なんだか、きつくないか。ずいぶんと香りが濃い」

そりゃそうだ。炭を多めに入れて余計熱くさせているし、木屑も教えられた量より多く置いている。

で、香炉をそっと押し出し、あずにゃんの近くへ。

「わらわは眠い。匂いがますます眠くさせる」

「どうぞどうぞ、横になっていてください。香道の基本はゆったりと、身構えずに香りを感じることです」

と、でたらめ。

「ならば、横にさせてもらうぞ」

あずにゃんは布団の上に寝転がり、最初はうとうととした目で香炉を眺めていたけれど、そのうち、目を瞑って寝息を立て始めた。

ふむ。おれはそっと部屋をあとにし、自室から扇子を持ってきて、再びあずにゃんの前に着座。すやすやと眠る可愛いあずにゃん目掛けて扇子を仰ぎ、じっとそのときを待つ。

いや、待てよ。今嗅ぐよりも、明日の朝、着物にたっぷりと染み込んだ匂いを嗅いだほうがいいかもしれん。それに、あずにゃんの寝汗が羅国の香りを絶妙に引き立たせるはずだ。

試しにくんくんしてみる。やっぱり。まだ、染み込みが足らない。楽しみは明日だな。そうして、あずにゃんの寝巻きをこっそりと盗み出し……。

おれはひとまず退散しようとしたけれど、ふと気付いて、部屋の隅に何段も重ねられている竹製の箱を開けてみた。思っていた通り、あずにゃんの服が。

わーい、宝物がいっぱい＾＾

おれはあずにゃんを起こさないように気を使いながら、箱を片っ端から開けていき、それぞれ匂いを嗅いでいく。でも、羅国の香りはない。他の雑な香料の匂いが染みついているものならある。

あずにゃんのフェロモンが感じられなかったが、しょうがない、今晩はこの水色の小袖で我慢してやろう。

おれは箱ごと小袖を自室へと盗み出し、布団に入ると、あずにゃんの小袖に顔を埋め、飽きることなくスーハーした。

朝、おれはパッと目覚めた。あずにゃんの寝巻き。あずにゃんの寝巻き。

とりあえず、盗み出した小袖を押入れの奥に隠し、部屋を出て、抜き足差し足忍び足、居間のほうから台所へ、あいりんとお貞が朝食の準備中、それを横目に台所から玄関を抜けて庭先へ、おれに気付いたクリツナが鍵板をがつがつと蹴っているけれど、無視してあずにゃんの部屋を外からチェック。板戸が開けられて、障子戸の向こうのあずにゃんは起きている様子。

おれは再び庭先を回り、散歩をねだってくるクリツナの鼻面を撫でたあと、玄関から我が家へひっそりと忍びこみ、太郎の部屋に入り込んで、あずにゃんが部屋を出るまでの時間を待つ。

あずにゃんは朝起きると、まず小袖に着替えて居間に向かい、お貞かあいりんが用意してきた桶で顔を洗う。泥棒チャンスは唯一そのときだけだ。それを逃してしまうと、あずにゃんがおれを起こしに部屋にやって来てしまう。

大丈夫。できる。ただ、唯一の不安は、脱いだ寝巻きをどこにし

まうかだ。もしかしたら、そのまま洗濯へとお貞かあいりんに渡してしまうかもしれない。不覚ながら、そこまであずにゃんの生活形態を察しているわけではない。

がらりとあずにゃんの部屋の戸が開いた。来たっ。待て、はやるな！　焦って飛び出していき、そこであずにゃんに見つかってしまうと、どうしたのだ、亭主殿、早いではないか、なんて、捕まり、早く顔を洗え、などと、そのまま居間に連れ込まれてしまう。

焦るな焦るな、左衛門尉。捕まるどころか、盗み出そうとしているところを見つかってしまったら、それこそ、どうなるか知れたもんじゃない。半殺しは避けられるかもしれないが、一生、冷ややかな目で見つめられる生活に追い込まれてしまう。

おはようございます、おはよう、という、声がかすかに聞こえてきて、おれは素早く太郎の部屋を飛び出した。そして、つま先立ちであずにゃんの部屋に侵入すると、左右を確かめ、部屋を見回し、寝巻きのありそうな場所を探す。

ない。クソッ。どこだかわからない。どこだ。クソッ。

あった！　ぱっと見ただけではわからなかったけれど、綺麗に折り畳まれた布団の上に綺麗に置かれてあった。チッ。帯と一緒じゃなかったからわからなかったぜ。

で、胸を高鳴らせながら一歩、また一歩と寝巻きのもとへ。キタ。これが、一晩かけて香りに熟されたフェロモンの化身、あずにゃんの寝巻きだ。

おれはそっと両手ですくった。そして、そそくさと脱出した。おれの部屋ではなく、太郎の部屋へ逃げ込む。

ハアハア。あずにゃんの寝巻き。あずにゃんの寝巻き。

おれはごくりと唾を飲み込み、ゆっくりとあずにゃんの寝巻きに顔を沈ませていく。

立ち昇った。鼻孔から昇った甘さが鼻の付け根まで一挙に広がっていき、この脳が、この胸が、官能のゆらめきに溶かされていく。洗練された甘美な香り、しかし、人妻の妖艶な酸い、そして、この

背徳感っ……！

まさに、骨の髄まで染み込んでいく。いや、堕ちていく。ハアハア。たまらん。あずにゃんの甘さ、あずにゃんの柔らかさ、あずにゃんという女の危なさ、この匂いはすべてを体現しているじゃないか。

「亭主殿ォ。どこに行ったのじゃあ」

やばいっ。ハアハア。もうちょっと楽しみたかったが、こんな変態行為を見られたら一貫の終わりだ。

おれは押入れに寝巻きを隠すと、部屋の真ん中に寝転がり、頬杖を突きながら声を出した。

「どうしたんですかー。あっしならここにいますよー」

「どこじゃ」

「ここですよー」

戸ががらりと開き、おれは背中を向けたまま。首だけを回してちらりと、なんにもしていなかったかのようにあずにゃんに振り向く。

「何をしているのじゃ、太郎の部屋で」

「いやあ、たまには太郎の気分にでもなってみるのもいいかと思いまして」

「何を言っておるのじゃ。わらわはてっきり亭主殿がいなくなってしまったかと思い心配したぞ」

「それはすいません。さてと、クリツナの散歩にでも行ってきますか」

と、おれは腰を上げ、あずにゃんの脇をすり抜ける。

「クリツナの散歩など、亭主殿がやるのか」

「いや、鉢巻きがいないんで、可哀想かと。口輪を引くぐらいだったら、あっし一人でも出来ますし」

そう言って、心なしか足早に庭先へと出ていった。

摂津も気になるけれど、香木も……

ねじり鉢巻きが戻ってきた。

おれは新たな香りを求めに密かに城下の香木屋を訪ねようとして門を出ようとしたのだけれど、クロに跨ったねじり鉢巻きが調度戻ってきてしまった。

「旦那！」

ひょいとねじり鉢巻きは下馬してきて、おれに手紙を突き出してきた。

「さゆりからだ」

「おいっ！　岐阜でその名前を言うな！　馬鹿野郎！」

おれはねじり鉢巻きから手紙を引ったくり、中を開いた。

和田惟政の跡継ぎ、高槻城和田惟長に対し、家臣団の一部に当主追放の機運有り。

現在、池田勢及び松永勢は高槻城下に着陣しているが、両勢お互いに牽制し合って攻城にまで至っておらず、高槻城下にて焼き討ちを繰り返す。

明智十兵衛の和解交渉は難儀なものと思える。

情勢は一刻の猶予も許さず、至急戻られることを強く望む。

おいおい。一体、どういうことなんだよ。高槻は滅茶苦茶じゃねえか。十兵衛は何をやっているんだ。交渉に入ったのか、入っていないのか、どっちなんだよ。さゆりんの手紙っていっつも言葉足らずなんだよ。

「おい、鉢巻き。お前が堺を出るとき、十兵衛は京を出たのか」

「わかんねえな」

使えねえ……。

ただ、手紙に書いてある通り、十兵衛の和解交渉がそう易々と事

が運べるとはおれも思えねえ。信長の命令だからって、悪党の弾正がすんなりと引き下がるとは思えないし、弾正が引き下がらないとなると、池田勢も引き下がるはずがねえ。

それに、高槻城の家臣団に当主追放の機運有りって、なんなんだよ。誰かが乗っ取ろうとしているのか？　それとも、当主を追い出して、池田勢か弾正かのどちらかになびこうとしているのか？

これだから摂津はめんどくせえんだよ。池田の連中もそうだったけど、すぐに追放したがる。しかも、攻められている最中だっていうのに、なんていう結束のなさだ。

最悪の展開は、高槻城から当主が追い出され、弾正になびくことだ。そうなったら、三分の計は終了してしまう。

十兵衛は弾正に転がされたことがあるし、思えば、弾正の説得にはなんとも頼りない人選だ。

だからといって、おれがあわてて行ったところで何になるんだ。まず第一に、間に合わない可能性が大だし、間に合ったとしても、欲望丸出しにしている弾正をおれが説得するだなんてとんでもない話じゃねえか。

そんなこと、さゆりんだってわかっているだろ。なのに、なんで、早く戻ってこいだなんて催促するんだか。

「とりあえず、鉢巻き、お前は疲れただろうから風呂に入って休め」

「わかった。だけど、その前にクロの世話をしてからだ」

ふむ。あの凶暴馬が鼻で呼吸を整えながらも脚を震わせ、いつもみたいに首を振っていない。駆け続けたのか。なんだか、ちょっと、申し訳ない気持ち。

いや、待て。太郎がいなくちゃ、クロの世話をする奴が誰もいねえじゃんか。

うわあ。結局、今すぐには岐阜からは出られないってことね。もう、ぐだぐだだね。奉公人のご利用は計画的にだよ、ほんと。

ま、そういうことならじたばたしてもしょうがない。高槻のことは十兵衛を信じる他ない。頑張れ、十兵衛。おれは香木屋に行くか

ら。

　ということで、ねじり鉢巻きを休ませて、おれは加納へ。

「あ、簗田殿。先日はどうも有難うございました。どうでしたか、羅国は」

「なかなか良かったぞ。家の人間も喜んでいる。でだな、旦那、他にも香木があったよな。なんか、おすすめはないかね」

「おすすめですか。ならば、やはり伽羅でしょうな」

「きゃら？」

「ええ。まあ、非常に希少で価値のあるものなので、こちらにはわずかながらしかございませんし、試し聞きも難しいですが、伽羅は、間違いなくご満足いただける品です」

「ふーん。ちょっと見せてくれよ」

「少々のお待ちを」

　と、奥に引っ込んでいった店の主人。やがて、持ってきたのは、やっぱり汚い木なんだけれど、進物台に敷いた紫の布の上に置かれてあって、なんていう仰々しさ。しかも、ちょっとだけ。コッペパンぐらいの大きさもない。

「こちらでございます」

　むう。こんだけ仰々しいと、くんくんするのもビビっちゃうな。

「これ一本、い、いくらなんだ」

「百五十貫になります」

　おれは店をあとにした。

　なんなんだよ、百五十貫って。いくら成り金のおれでも、百五十貫は無理すぎるだろ。百五十貫って言ったら、火縄銃が二丁も買えるんだぞ。くんくんしたいがために、百五十も出すだなんて。

　無理だよ……。クソッ。

　でもなあ、きっと、いい香りを放つんだろうなあ。あずにゃんの着物に染み込ませたら、おれ、イッちゃうんだろうなあ。あーあ、欲しいなあ。きゃら、欲しいなあ。

「や・な・だ・さん☆」

と、すごすごと屋敷に戻っていたら声をかけられて、背後を振り返ると、ううっ、チヨタン。

「どこに行っていたのお」

チヨタンは首を傾げながら無邪気な感じで目をくりくりさせているけれど、どうしてチヨタンが一人でこんなところをほっつき歩いているんだ。

摂津に比べれば何てことないこと

「い、いや、その、飛脚屋に」
「ふーん。簗田さんが一人でねえ」
にこにこと笑いつつ、どことなく怪しむような眼差しのチヨタン。
「ま、まあ、今、家には誰もいないんだ。奥さんと女中しかいないから、女の子だけで外を歩かせるのもちょっとね」
「そっかあ。そうだよねー。それはそうとさ、あいりちゃんとおまつ様に香木を買ってあげたんだってね。四十貫もしたんでしょ。ねえねえ」
「あ、いや、そんなしたっけかなあ、アハハ」
「すごいよねー。簗田さんって堺の商人の人たちとも仲良しなんだってねー。すごいよねー」
「な、仲良しだなんて、そんなもんじゃないよ、アハハ。じゃ、おれはこの辺で」
「じゃあねー」
おれは稲葉山へと逃げるようにして向かう。
久しぶりに会ってみたら、チヨタンから小悪魔臭がしたのはなぜ？　何かを狙われているような気がしてやまないんだけど。松永弾正と何かが似ていたぜ。
だいたい、チヨタンが侍女もつけずにどうして一人でいるんだ。もしかして、おれのあとを付けてきていたとか……。
いやいや、まさかな、アハハ。
稲葉山の山道に入って、我が家に戻る途中、馬を引く馬丁とすれ違った。あれは確か、クロを取り上げられた太郎がどこからか借りてきた馬。
なんだよ、もう帰ってきたのか。
読み通り、太郎は戻って来ていたんだけど、居間にはあずにゃんとあいりん、お貞が集まっていて、一同、何やら顔をしかめている。

「父上、ちょうど良かったです。お話があるんですが」
「なんだよ」
おれは居間の戸口に突っ立ったまま、中には入ろうとしなかった。何やらよくない雰囲気だったからだ。説教タイムではなさそうだったけれど、これ以上、厄介事には巻き込まれたくない。
「太郎がおやかた様から知行を与えられたそうじゃ」
あずにゃんがそう言って、おれは鼻笑い。なんだよ、そんなことかよ。だったら、いいじゃんか。と、居間の中へ上がり込み、太郎の隣に腰を下ろす。
「良かったじゃんか。まあ、お前は姉川でも比叡山でも苦労したからな。で、どこにどのくらい貰ったんだ」
「尾張の此壺に千石です」
コノツボ？　変な名前だな。しかも、千石って少ねえ。十兵衛は五万石だぞ。馬鹿にしてんのか、信長は。
「たったの千石かよ。二束三文にもならないじゃんか」
「父上、おやかた様から頂いた知行ですよ。言葉が過ぎます」
「はいはい」
「それに、拙者にというより、簗田家に対しての知行です。沓掛の千五百石と合わせて二千五百石になったのですから」
「十兵衛殿は五万石だぞ」
「それはだって、十兵衛様は京のお勤めやいくさ場でおやかた様に大変貢献されていますし、そもそも、十兵衛様は公方様の直臣なのですから」
あ、そっか。
「それでまあ、沓掛に赴くがてら此壺にも寄ったのですが、よくよく考えてみると、今の当家には離れた沓掛と此壺を統治するにしても人が足りません。新七を沓掛に置いてきましたが、此壺には早之介をやるしかありません」
「そんなの駄目だ。早之介は摂津の調略にいろいろと忙しいし、おれも明日には堺に行かなくちゃならん。一人たりとも堺からは戻さ

ん。駄目だ。てか、お前が行けばいいだけの話だろうが。だいたい、コノツボってどこにあるんだよ」
「尾張です。清州の北、小牧山の南です」
「ふーん。ま、お前が行け。それで終わり」
「しかし、岐阜に誰もいなくなってしまいます」
「だったら、誰か雇えよ。沓掛勢の中から与力に上げてやってもいいだろうが。千石増えたんなら、一人か二人は雇える余裕もあるだろ」
「それはそうですが、しかし、誰かを雇ったとしても、沓掛の足軽を与力に上げたとしても、そんな日の浅い者にすべてを任せるわけにはいきません。だから、早之介を戻してほしいのです」
「駄目だ。どうにかしろ」
「兄上に相談してみるかの」
と、あずにゃんが口を開いた。
「兄上の与力に目ぼしい者がいるじゃろ。それが良いのではないのか、太郎」
「そうですね……。それしか、ありませんね」
「ということだ。おれは何かと忙しいんだから、コノツボとか沓掛のこととかは全部お前がやれ。てか、元々、この家のことは全部お前が仕切っていたんだから、今さら音を上げるな」
「はあ……」
「やけに厳しいではないか、亭主殿」
「厳しいんじゃないです。そのぐらいで音を上げてどうするんだという話です。摂津に比べれば何てことないことなんですから」
おれは腰を上げると、お貞に明日の出かける支度をしてくれるよう頼んで、自室に戻り、押入れから竹の箱を取り出した。
あずにゃんの寝巻きをくんくんする。うむ。たまらん香りだ。でも、あんまり外の空気に触れると香りが失われていっちゃうからな。
さっさと蓋を閉める。もちろん、このコレクションも堺に持って行くから、どうしようか考える。おれは出張の荷物にはまったく手

をつけないからな。これも一緒に荷づくりしておけなんてお貞に言えるわけないし。

馬借屋に持っていくしかないか。でも、これっぽっちで金をかけたくないし……。

おれは部屋の戸から首だけを廊下に出すと、辺りを見回し、耳を澄ました。太郎とあずにゃんの声が居間から聞こえてくる。居間から出ているのはお貞だけで、あいりんはまだ居間にいるっぽい。

おれは竹の箱を持ったままそそくさと部屋を出ると、あいりんの部屋に侵入。あいりんの水色の小袖をゲットし、箱の中にあずにゃんの寝巻きと一緒にしまいこむと、障子窓を開けて、外に脱出。

竹の箱を抱えながら、裸足のままで稲葉山を下りた。

一将功成りて万骨枯る

ねじり鉢巻きとクリツナに導かれ、三日をかけて京に到着。
例のように相国寺へ。村井ジジイのところに行けば十兵衛がどうしたかっていうのはすぐにわかるだろうけれど、村井ジジイはいつもいらつくのでパス。それに承兌は情報のアンテナを常に立てているこざかしさもあるので、ジジイのところに行かなくても事足りる。
「明智殿は千人の兵を連れて摂津高槻に向かったそうですよ」
と、承兌。ふむ。なかなか頼りになる若坊主だ。弾正を相手にする十兵衛はちょっと頼りないけれど。
「しかし、松永弾正忠はまこと、抜け目のない男ですね。しかも、民衆が訝しがるようなことを堂々とやるとはいかにも悪党らしい行いです」
正直、と、承兌は言葉を繋げた。
「今回の件が明智殿の出陣でおさまったとしても、弾正忠を野放しにしておくのは、摂津に手をかけている簗田殿の将来によくはないかもしれませんよ」
「じゃあ、どうしろって言うんだよ」
「まあ、織田様は弾正忠に甘いため、どうにもしようのないのが現状かもしれませんが」
チッ。青二才が。能書きだけは一丁前なんだからよ。さすが坊主だけのことはあるぜ、まったく。
「それにしても、紅葉の綺麗な季節になりましたね」
と、境内のもみじに視線を向ける承兌。ごまかしているのか本気でのんびりしているのかわからない。承兌はそんな奴。
「沢国の江山、戦図に入る。生民、何の計あってか樵蘇を楽しまん。君にねがう。話するなかれ封侯の事を。一将功成りて万骨枯る」
意味不明なことを言うと、ぼんやりと境内を見つめる承兌。
「なんだよ、それ」

「曹松の詩です。ご存知ではないですか」
「おれは馬鹿だから」
「豊かな実りの地が、戦場になってしまい、民衆はどうして日々の生活を楽しめましょうか。お願いします。誰かが手柄を上げて知行を得た話はよしてください。一人の将が手柄を挙げた陰では幾万という人が屍となっているのだから。そういう意味です」
むう。
「泰平の世はいつになったら来るのでしょう。いや、我々の目の前には泰平も動乱もないのかもしれません。泰平の世の怒りや悲しみが動乱を生んだのでしょう」
「もう、旅路で疲れた。ゆっくりさせてくれ」
と、承兌を部屋から追い払い、一人、ひらひらと落ちるもみじの葉をじいっと見つめるしかないおれ。
能書きだけは一丁前なんだからよ……。クソ坊主め。
おれだって好きでやっているわけじゃないんだ。
相国寺に一泊し、翌朝、堺へと向かった。
いや、向かおうとしたけれど、高槻を回っていくことにした。堺に行って、さゆりんから情勢を聞いてどうのこうのするよりも、自分の目で確かめて、その場でなんとかしたほうが早いわ。
どうにかできる自信もないけどさ。
高槻は京の近くなので、昼過ぎには到着した。ぬう。町のあちこちから煙が立ち昇っているのが、郊外からでもわかる。池田勢と松永勢が焼き払いまくっているようだもんな。
街道を行き、町の方角から荷車を引いて戦火から脱出してきたらしき大家族に、足利家の紋か水色桔梗紋を幟にしている明智十兵衛の陣の所在を知っているか訊ねると、すぐ近くの寺にいるみたい。
で、十兵衛の陣屋を訊ねた。境内に桔梗紋の陣幕が張られていて、十兵衛の配下に来訪を告げると、すぐに中に通してくれる。
「簗田殿っ！」
と、おれを見るなり甲冑姿の十兵衛は床几椅子からがばっと立ち

上がって、かちゃかちゃと歩み寄って来た。
「御自らここまで来られるとは、上総介殿の命ですか」
「いえ。堺にいる配下の人間が堺に来い来いとうるさいのでこっちまで来たんですけど、ついでに寄ってみました」
「左様でございますか。それは有難い」
十兵衛はそう言ったあとにふうと一息つき、床几に戻って腰を下ろした。十兵衛の座っている前に従者が持ってきた床几が置かれ、おれはそこに座って十兵衛と向かい合う。
「五日前に高槻にやって来て、池田九右衛門と弾正忠めを説得しているのですが、埒が開きませぬ。どちらもお互い、相手が退けば自分も退くと言い、譲ろうとしません」
それは多分、十兵衛が弾正になめられているからだとおれは思った。信長直々に出てきたら、弾正は絶対に大和に戻る。でも、信長の命令でやって来た十兵衛の言うことは聞かない。弾正はおそらく十兵衛の言うことなんか聞きたくないんだろう。
十兵衛の話によると、弾正は高槻城を乗っ取りにきたのではないとほざいているらしい。池田勢が攻め込んできたので、援軍にやって来たのだと。
じゃあ、なぜ町を焼き払っているんだと十兵衛が詰め寄ると、南蛮寺のキリシタンが池田を扇動し、攻城に導こうとしているからだというとんでもない論理。
「虚言も甚だしい」
と、十兵衛は思い出して腹が立ってきたのか、話しているだけなのに怒り心頭。
というのも、弾正はまだ三好三人衆と仲間割れをしていたとき、クリスマスを理由に休戦を持ちかけたことがあるらしい。
かといって、南蛮寺が悪だくみをしているという言いがかりをつけて町を焼き払っているのだから、弾正がキリシタンだというわけでもない。
要は自分が有利になるなら、どんなことでも利用する悪党ってわ

けだ。

池田九右衛門は、弾正が退かないかぎり池田には戻らないと言い張っているみたいで、それもそのはず、高槻城に弾正が居座られたら、池田にとってはたまったものじゃない。高槻城を乗っ取るためにやって来た池田勢だけれども、逆に希代の大悪党を呼び寄せてしまって、ちょっとしたピンチになっている。

つまり、弾正が大和に戻らないかぎり、高槻の騒乱は収まらない。弾正に一切の主導権を握られてしまったってわけか。

「おそらく、弾正忠は高槻城の家臣団へ自らに降伏するようにけしかけているのでしょう。家臣団も弾正忠になどなびきたくもないと考えているに違いませんが、弾正忠は町を焼き払って城内を脅しております。このままだと、高槻城が弾正の手に渡るのも時間の問題です」

簗田殿、と、十兵衛は訴えかけてきた。

「何か案はありませぬか」

ハア。やっぱり、十兵衛じゃ駄目だよ。信長は十兵衛を過大評価しているんだよ。そりゃあ確かに京では幕府や公家との橋渡し役になっていて、金ヶ崎でも活躍したし、小谷城や比叡山でいつのまにか情報収集していて、信長に大いに貢献しているけどさ、弾正みたいな怪物と相手をするには頭が堅すぎるんだよ、十兵衛は。

十兵衛の前から退き、千人の雑兵が境内でごろごろしている中、おれは人目を避けるようにして、境内の隅をうろうろと歩いた。

弾正をどうにかしないと、摂津三分の計が破綻しちまう。どうにかできる自信なんてないけれど、どげんかせんといかん。

荷駄を腰から下ろしてもらったクリツナが、ひらひらと落ちる真っ赤な楓を鼻面だけで追いかけている。ねじり鉢巻きは木の幹に背中を預けて、無邪気なクリツナに目を細めている。

ふと思う。あいつらって、おれの子分なんだよなって。今更。

おれがいなかったら、あいつらはどうしていたんだろう。マリオの与力にでも仕えていたんだろうか。

でも、どちらにしろ、おれの子分なんだ。おれがいるから今の名馬栗綱がいて、それを育てた馬丁のねじり鉢巻きがいるんだ。おれが率いてこそのあいつらなんだ。

マリオや太郎がいてこそじゃない。おれがいてこそだ。

だから、おれはもうちょっとしっかりしないといけないのかもしれん。あいつらに、あーあ、牛太郎に仕えて良かったなあってジジイになったときに振り返られるように。

どげんかせんといかん。

この状況、半兵衛だったらどうするか考えた。弾正といえども、半兵衛の頭の良さには適わないはずだ。

でも、半兵衛の頭脳があったら、おれってとっくに名軍師だし。やっぱ、無理か。

いやいや、考えろ。何か糸口があるはずだ。半兵衛は誰もが諦める状況でも光を見つけてくるんだ。諦めないで考えるからこそ、半兵衛は名軍師なんだ。

じゃあ、今まで半兵衛はどうやって光を見つけてきたんだ。美濃調略のとき、六角攻めのとき、金ヶ崎のとき、鎌刃城の寝返り工作のとき。

六角攻めとか金ヶ崎のときみたいに戦争はできないよな。弾正と争うわけにもいかないし、池田勢を弱体化させるわけにもいかない。そもそも、十兵衛が持ってきた兵隊は千人しかいないし。

美濃調略のときは、半兵衛が何かしたわけじゃないけれど、おれの手助けをしてくれたからな。西美濃三人衆に説得の手紙を出したり。

てか、あいつって調略のときって誰かを頼ってないか。美濃のときは西美濃三人衆に頼っていたし、鎌刃城のときは、樋口ナントカっていう昔からの知り合いを頼っていたし。

なんか、難しいことはしていなくね？

いや、キーマンを見つけてきているってことで、簡単なようで難しいのかもしれん。この高槻で暴れ回っている連中の中でも、おれ

は弾正も知っているし、ヘタレ村重もゼニゲバ瀬兵衛も知っている。でも、誰を頼ればいいのか考えると、誰も頼れん。

うーん、どうすりゃいいんだ。弾正が退かなければ池田勢も退かない。池田勢が退かなければ弾正も退かない。ま、弾正のは建前だけどさ。あいつは池田勢が退いたら、ここぞとばかりに高槻城に攻め入るだろうから。

ん？

建前？

そうか。あいつが高槻城の援軍で来たっていうことが建前だなんて誰でもわかっていることだよな。ということは、あいつは建前を並べないと、高槻に居座る大義名分がないんだ。

池田勢が退いたら、本当に弾正が高槻城に攻め入るか？

あいつは最初から高槻城を攻め入るつもりはなかったのかもしれない。いや、攻め入れないだろう。同じ足利幕臣の城なんだから。

でも、弾正が高槻城を乗っ取ろうしているのは誰の目から見ても明らかだ。援軍に来ただけだったら、町を焼き払うわけがない。南蛮寺が悪だくみしているっていう滅茶苦茶な理由なんだし。

つまり、弾正は最初から高槻城の家臣団を分裂させて、攻城しないままに高槻城を乗っ取るつもりで出陣したんだ。

じゃあ、池田勢が退いたら、弾正はどうする。ここに居座る大義名分がなくなるだろ。

池田勢に先に高槻城との休戦協定を結ばせれば、弾正も引っ込むしかなくなる。

そして、おれには池田勢の説得ができなくもない。

おれは再び十兵衛のもとを訪れた。

「弾正は放っておいて池田勢に高槻城との停戦を持ち込みましょう。そうすれば、弾正は高槻に居座る理由がなくなります」

「それはその通りですが、池田九右衛門が納得しませぬ」

「あっしが荒木信濃守を説得します。池田九右衛門も信濃守の言うことなら聞く耳を持つかもしれません。十兵衛殿も一緒に来て下さ

」い

続・一将功成りて万骨枯る

おれは十兵衛と共に、兵も付けずに、高槻城南西の郊外に陣取る池田勢のもとへ乗り込んだ。

北摂津の山々に夕日が沈みこんでいっている。

池田勢の大半の雑兵が城下焼き払いを終えてぞろぞろと帰ってきていたところで、見覚えのあるクリツナを見かけると、足を止めてざわざわ騒ぎ始めた。

「簗田殿じゃないか」

隊列を率いているのはゼニゲバ瀬兵衛だった。チッ。見かけたくない顔だったけれど、まあ、話が早い。

「荒木信濃守に会いたい。瀬兵衛殿、取り次いでくれ」

「後ろにいるのは明智十兵衛殿だな。停戦の持ち込みに来たのだろう。それならば、ご遠慮願いたいがな」

おれはクリツナから下りた。ねじり鉢巻きに言い、クリツナが積んでいる荷駄から紙と墨を取り出させ、十兵衛の目に見えないようにその場で証文を書いた。

内容は、百貫をゼニゲバにくれてやる。代金は茶屋四郎次郎が立て替えるから、あとで請求しておけ、ってこと。

おれは証文を馬上のゼニゲバに突き出した。瀬兵衛は疑わしそうにおれを見つめながらも、籠手を装備した手で証文を受け取り、文面に目を向ける。

ふむふむ、と、頬を緩めつつ、証文を折り畳んで胴の下にしまい込む瀬兵衛。

「わかった。信濃守に会わせよう。しかし、おやかた様の前でな。当主を差し置いて簗田殿を通すなど、あまりにも怪しすぎる」

池田九右衛門も一緒か。ヘタレだけだったらどうにかなったけど、これぱっかりは仕方ないかな。瀬兵衛の言う通りだもんな。

おれと十兵衛は瀬兵衛の案内で池田勢本陣へ。

馬から下りて、先に陣内に入っていった瀬兵衛に待たされていると十兵衛が訊ねてきた。
「何をしたためたのですか」
おれはちょっと焦る。
「い、いや、大したことじゃないですよ。一将功成りて万骨枯ると書いただけです」
十兵衛はおれをじっと見つめてくる。ううっ。やっぱり、嘘丸出しだったよね。
「簗田殿、貴公という御仁は……、言葉になりませぬ」
と、籠手で目尻を拭っている。
「この状況下でその詩文を読み、なおかつ説得されるとは、凡人の考え及ばぬところです」
まともに受けとめちゃっているし。ぎゃ、逆に罪悪感が湧いてくる。証文に書いたのはお金を上げるからっていう、まったくもって俗人がやりそうなことだもんね。
瀬兵衛が陣幕を上げて顔を出してきた。
「面通りが許された。信濃守もいる。入ってくれ」
瀬兵衛の先導で陣の奥へ。
付いていった先には床几椅子に座った諸将が十人ぐらい居並び、上座に池田九右衛門らしき若者が。
ヘタレ村重が上座にもっとも近いところに座って、なんだか後ろめたそうに視線を伏せているけれど、ちょっと、話が違うんじゃねえの。おれが言ったのはヘタレと会わせろっていうことで、こんなにぞろぞろいるところに連れてけとは頼んでねえぞ。
とはいえ、仕方ないので、座の真ん中に置かれた床几に十兵衛と並んで着座
「久しぶりだな、簗田殿」
と、出し抜けに言ってきた池田九右衛門。久しぶりって、会ったことあったっけ。うーん。でも、池田城の軍議には何度も参加させられていたから、そこで顔を見ていたのかもしれない。

「遠路はるばるご足労であった」
「どういたしまして」
頭をぺこりと下げたおれだけど、なんか考えていたのとは違って拍子抜け。筑後守勝正を追い出して当主になったような奴だから、もっと野蛮人を想像していたけれど、なんだか、気のいい奴じゃん。優男だし。
「簗田殿はかつて摂津池田を救ってくれた御仁じゃ。このようなむさい場所で貴公を迎えるとは心苦しいが、会えて嬉しく思う」
「いやいや、とんでもございません」
おれは再び頭をぺこり。
なんか、おかしいな。九右衛門はずいぶんとおれに感謝している様子じゃないか。口だけで言っているような感じもしないし。
じゃあさ、どうしてそこまでおれに感謝しているのに、信長を裏切ったってことだよ。三好三人衆にくっ付いて、信長に抗戦したかってことだよ。
「して、今日は何用なのだ？」
何用なのだ、ってのんびりと言ってくれたけど、もしかして、こいつ馬鹿なんじゃ……。何用だも何も、十兵衛が何度も停戦を持ちかけているんだろ。その十兵衛が横にいるんだぞ。だったら、おれが停戦を持ちかけてきたのなんて、すぐにわかるじゃんか。
……。
なるほど。こいつの親父が息子に家督を譲らないで、親戚の筑後守を指名した理由ってこれか。
ただ、摂津池田の家臣のうちの誰かが、この馬鹿を操るつもりでいたんだけれど、思惑が外れて、当主は筑後守になっちゃった。
で、その誰かが、金ヶ崎で不信感を覚えたヘタレ村重やゼニゲバ瀬兵衛をそそのかし、筑後守を追い出した。
池田勢を操っている奴がこの中にいる。
「九右衛門殿、簗田殿はこたびのいくさに心を痛めておられまする。しかるに、すぐに兵を退きなされ」

と、黙っていたおれの隣で十兵衛が口を開いたけれど、九右衛門は眉をひそめて、うーむ、と、顎に手をかける。
「簗田殿は停戦交渉に来たのです。恩があるならば、簗田殿に恩返ししなされ」
「し、しかし、あ、明智殿」
ヘタレが突如出しゃばってきた。
「な、何度も、申しておるが、おるがな、まつ、松永弾正忠が退けば、我らも、わ、我らも退くのだ。ま、松永勢に退くような、ような動きはないではないか。さ、左様でございましょう、おや、おやかた様」
「左様、信濃守の言う通りじゃ」
おれは出しゃばっているヘタレをぎろりと睨みつけた。ヘタレの分際で出しゃばってんなという意味を込めた。
ヘタレはそそくさと視線を伏せる。
「九右衛門殿」
ヘタレを黙らせたところで、おれは言った。
「どちらにしろ、このままでいけば高槻城は松永弾正の手に渡ってしまいます。あいつは希代の大悪党と呼ばれるような人間ですよ。裏で手を動かし、高槻城を脅迫しているのです。このまま池田勢がここに滞在していても、高槻が弾正のものになってしまうのは時間の問題です」
「それはいかん。のう、信濃守」
「さ、左様でございます。た、高槻城が、まつ、松永――」
おれは再びヘタレにギロリした。ヘタレは口を噤んでうつむく。
なんなんだ、一体。ヘタレの独壇場じゃねえか。
まさか……。
「では、簗田殿は我らにどうされよと申すのだ」
瀬兵衛が声を上げたので、隣の十兵衛に振って、池田勢が先に退けば弾正の大義名分もなくなるということを話させながら、その間、瀬兵衛に視線を送り、足の下で親指と人差し指で作ったマネーマー

クを密かに見せた。
　十兵衛が話し終えると、
「確かにそうかもしれん」
　ゼニゲバ瀬兵衛は即座に賛同した。キャンペーンで五百石を貰ったっていう話を聞いたけれど、どこまでもゼニゲバな奴だな。
「し、しかし、た、高槻が我らのものになれば、なれば、い、池田勢は、摂津のしゅ、主導権を、主導権を握れ、握れるのだぞ、せ、瀬兵衛。も、もし、高槻が手に入れば、手に入れば、高槻は瀬兵衛に治めさせようと、お、おやかた様と話していたのだ」
「なんですと」
　こ、このヘタレ野郎……。何をほざいてやがるんだ。てか、やっぱり、摂津池田を操っているのは、このヘタレなのか。
　でも、こんなやつに誰が付いていくっていうんだ。
　いや、事実、付いてきているじゃないか。引っ張っているじゃないか、池田勢を。だって、池田勢との火縄銃三百丁の交渉がすんなりといったのは、ヘタレが池田九右衛門に話を通したからだ。
　それに、池田筑後守が追放されたのも、三好三人衆がヘタレに茶器をくれてやったからだ。
　どうして、こいつがそんな力を持っているんだ。
　もしかして、演じてやがるのか。
「それならば、高槻城を落とすべきですな」
　と、瀬兵衛がゼニゲバ丸出しにして言う。
「今、高槻を落とさず、いつ落とすのか。もしも、ここで退いてしまっては、高槻に猶予を与えることになり、いずれは報復に打って出てくるはずだ。ならば、今こそ、高槻城を攻め落とすときぞ！」
　瀬兵衛の大声に陣中は一気にヒートアップ。
「そうだ！　松永弾正いかなるものか！　奴が動かぬ退かぬなら、攻めてしまえばいい！　おやかた様！　もはや、動くしかありませぬ。松永勢と雌雄を決しましょうぞ！」
「左様！　このいくさは我ら池田勢が天下に名乗りを上げる時！」

「何を言っておるのですかっ！」
興奮した諸将につられるようにして、十兵衛が腰をおもむろに上げた。
「それこそ弾正忠の思うつぼではございませぬか！　そなたたちが松永勢と交戦をすれば、高槻城が弾正忠に付くのは明白！　しかるのちに、弾正忠は高槻城を我が物にするつもりなのですぞ！」
「明智殿！　そもそもおかしいではないか！」
と、瀬兵衛。
「そなたは幕府の直臣ではないか！　ならば、弾正忠に味方するのが必然であろう！　それなのに、なぜ、いくさを止めようとするのだ！　そなたは何か企んでいるのではあるまいな！」
「一将功成りて万骨枯るのだ！」
おれは怒鳴りちらすと、静まり返った諸将を睨みつけながら立ち上がった。そして、その視線を最後にヘタレに据え置き、言った。
「あんたたちのしていることは野盗同然だ。ああ、それは茨木勢とのいくさまでは良かった。だけどなあ、町を焼き払い、女子供に手をかけて、そんなことをして、どうして天下に名乗りが上げられようか！　あんたたちのしていることは希代の大悪党がしていることと何ら変わらねえじゃねえか！」
おれはぐっと拳を握った。
「そんなことで高槻を治められるか！　せいぜい、一揆を引き起こされて終わりじゃないのか！　違うか、村重殿！」
ヘタレは一度おれを恨めしそうに見つめたあと、しゅんと首を垂らした。
「退くも勇気。むしろ、先に退いたほうが勝利だ。高槻城の連中も、城下の民衆も、やがてはこのいくさを終わらせたほうになびくはずだ！」
静まり返る陣中。日はとっくに山の向こうに沈み込み、薄紫色に滲んだ空の下、諸将のそれぞれの顔には悩みに苦しむ影がくっきりと隈取られていた。

「そうかもしれんなあ」
池田九右衛門がぼんやりと言った。
「天下の人々はいくさを見るのではなく、人を見る。のう、信濃守」
ヘタレはしばらくじっと固まっていたけれど、やがて、こくりと頷いた。

使命

――民の生活を脅かし、天の下に動乱を生むこの不毛な行いから、我ら池田勢は下りる。松永弾正忠久秀、民心を失い、天に見放されたければ、暴虐の限りを尽くすがよい。

高槻の至るところに、そう書かれた札が池田勢によって立てられた。

「村重殿、機はまだ熟していなかったってことです」

無数のたいまつの明かりが夜空を燃やす中、おれはヘタレ村重に密かに言った。

「だけど、三分の計は必ず成功させる。ついこの間、あっしは岐阜の信長様の後ろ盾を得たから」

「ま、まこと、で、ですか」

どこからどう見たってヘタレ。でも、掴めない。本当は、こいつは相当の野心を秘めているんじゃないのか。

「本当だ。いずれ、ゆっくりと話をしましょう」

「わ、わかり申した。池田で、待って、待っております」

やがて、池田勢のたいまつの火は南西の自領へと消えていった。

これで弾正の大義名分はなくなった。城下に立てられた罵倒の札を知ってもなお攻め入るようなら、それこそ、弾正の行き場はなくなるだろう。

この期に及んで乱暴狼藉を働かせようものなら、きっと信長が許さない。それは弾正もよく知っているはずだ。

秋風がそよぐ地上の静けさとは裏腹に、頭上の大きな夜空は散りばめられた瞬く星が囁き合うように華やいでいる。

肌寒くなってきた。

「簗田殿。見事でした」

従者が灯すたいまつの明かりを浴びて、十兵衛を乗せた馬が歩み

寄って来た。ねじり鉢巻きとその手に引かれたクリツナもやって来る。

「どんな武功を上げるよりも貴い功であります。簗田殿の御名は世間に馳せていくことでしょう」

「そんなことはありません。あっしは何もしていません」

おれはねじり鉢巻きの掌に足を乗せて、クリツナに跨った。手綱を振るい、踵を返したクリツナは、ねじり鉢巻きの誘導のもと陣屋に引き返す。

「上総介殿に報告しておきましょう」

十兵衛は年甲斐もなく無邪気だった。この騒乱がおさまったこと、おれの口先三寸でおさまったことに、心から喜んでいる様子だった。でも、おれは素直に喜べない。そもそも、このいくさを、池田勢を裏で仕掛けさせたのはおれだ。

そのせいで、町の大半がまた焼土と化した。おれはその有様を直に見ていない。けれども、だいたいは想像がつく。少なくとも、小谷城下の焼き討ちぐらいはこの高槻でも行われていたんだ。

生きるほうが地獄のときもある。

殺される者たちよりも殺していく我らのほうが、抱えるべき苦しみは大きい。

実はおれって、そんなに残酷な人間じゃなかったみたい。てか、はしゃいでいる十兵衛すら頭がおかしいんじゃないかと思えてしまう。

翌日、松永勢は高槻から去った。

と、思いきや、弾正が数人の騎兵を連れて、寺に乗り込んできやがった。

「妙技でしたな」

寺の本堂、観音像にしっとりと見下ろされる中、弾正は影に色濃い微笑を浮かべつつ、睨みつけるような眼光の鋭さだった。

「あの食わせ者たちを池田の田舎に追い返すとは、お見事」

「なんのことでしょうかな」

と、十兵衛もまた微笑を浮かべつつまなこを光らせる。
「貴殿に申しているのではありませんが、明智殿」
「拙者も、お主など相手にしている暇などありませんがな」
すると、弾正はがばりとおもむろに腰を上げ、おれと十兵衛をしばらくの間、怒りを噛み殺すようにかすかに震えながら、見下ろしてくる。
腹の内を覆い隠しながら、常に爽やかさだけは振る舞っている弾正が、怒りを滲み出している。今回の件を相当、根に持っている様子。
「これで反乱軍は無事に追い返せた。簗田殿、いずれこの受けた恩に必ずや報いましょうぞ」
弾正は目を剥き出しにしていた。言葉とは逆の意志であることが明確すぎるほどに怒りを表したあと、弾正は去っていった。
「あやつをこのまま野放しにしておくと、いずれ取り返しのつかないことになるでしょうな」
弾正の姿が境内から消えてもなお、十兵衛はその軌跡を睨みつけている。
「どうにかせねば」
おれはなんだか、肌寒くなってくる。秋風のせいじゃない、それぞれの思惑渦巻くこんな謀略闘争の真っ只中に踏み入れてしまったせいで。
ようやく気付いた感じ。摂津には魑魅魍魎が跋扈しているという本当の意味が。
多分、天下の趨勢は摂津で決まる。ここにはありとあらゆる権力が絡んできている。織田を脅かしている長島一向一揆や、浅井朝倉も、摂津が混沌としているから信長に立て付くことができるんだ。長島は顕如の檄文によって発生したし、浅井朝倉が生き延びていられるのは、どころか、織田との小競り合いを展開できるのは、織田の背後に、隙あらば暴れ回る準備を万端にしている連中の爆弾が置かれてあるからだ。

でも、信長は半ば摂津を放ったらかし。弾正が怪しい動きを見せても無視。

いや、介入する余裕がないのかも。実は長島と浅井朝倉で手一杯の状態なのかも。

織田信長が切り開いた天下への道っていうのは、もっと爆走ロードまっしぐらなんだとおれは思っていた。実際、金ヶ崎では敗走したものの、姉川までは爆走ロードだった。

だから、長島や近江で火種が燃えても、大したことじゃないわっていうのがおれの頭の片隅にはあった。

どうやら、織田信長軍っていうのは無敵じゃないらしい。

信長はああいう性格だし、比叡山で魔王に覚醒しちゃったから、やばいっていう素振りはまったく見せないけれど、今の織田の状況を客観的に見ると、ギリギリなんじゃないの。

これで、足利義昭が信長に宣戦布告して、武田信玄が動き出したら、織田は終わりだ。だって、たとえ、歴史通りに武田信玄が死んだとしても、武田の出陣に触発された摂津が大爆発しちゃったらどうなるんだよ。

織田の人間は誰も摂津に構っていないじゃないか。

……。

おれって構っているような、いないような……。

せ、摂津がどうなるかで天下の趨勢は決まるんだぞ。

もし、もしもだ、おれが摂津を放り投げちゃったら、どうなるんだ。おれが摂津で何もできなかったらどうなるんだ。

各地に飛んでいる有能な奴等の中で、摂津に構っている余裕のある人間はいないぞ。あの半兵衛ですら匙を投げちゃったんだから。

てか、信長がおれに摂津を任せている理由ってそれなんだよな。人手が足りないからなんだよな。いずれはサルを向けるって言っていたけれど、それは浅井を倒したあとからだって言っていたし。

じゃあ、浅井をいつ倒せるんだよ。そんな悠長なことを言っていられねえぞ。一つ、小さな火がついたら、――池田勢と茨木・高槻

の豪族の争い程度が、弾正みたいな危険人物がやって来て大火事に発展させちゃうんだから。

これはだな、つまり、摂津三分の計が失敗したら、織田はやばい。いや、それどころじゃない。歴史が変わる。信長も秀吉も家康もいなくなる。

違う。そんなのはどうでもいいことじゃねえか。そんなのはどうでもいいんだ。

織田が滅びたら、あずにゃんも太郎も、家の連中みんなが――、終わる。岐阜が焼き払われる。

やらなければならないこと

堺に戻って来たおれにはやらなければならないことがある。

「あの悪党が退いたからって、明日はどうなるかわからんからな」

わかっている。いいか、さゆりん、言われなくてもわかっている。摂津は権力亡者を集める地だ。一寸先は闇。起こりうる出来ごとすべてを想定していなければ、三分の計は完成されない。おれはこの一件で痛いほど思い知った。わかっている。

「旦那様、高槻での騒乱で、船の往来が滞ったんス。本願寺も三好もそうッスけれど、高槻もどうにか押さえないと、売り上げが立たないッス」

わかっているよ、うるせえな。シロジロなんかに政治の口出しなんかされたくねえわ、カスが。鼻クソ商人のくせに、いっぱしの豪商を気取ってんじゃねえ。今、いの一番にやらなければならないことがなんなのかは百も承知だ、ボケ。

「高槻で南蛮寺が襲われたって本当ですか。ヨハンが気になっているようで。ひどく心配しています」

なんだよ、あーや。ヨハンって。あーやこそ何を心配しちゃっているのよ。ま、まあ、でも、あーやは天使だからな。わかっているわかっている。平和な世の中を作らなくちゃね。

「池田勢が茨木城を落としたまでは、築田殿に感服する思いだったのですが、やはり、世の中そううまくはいかないものですな。しかし、池田勢は領土を広げました。これで、三好殿や本願寺、それに弾正忠殿がどう動くか、見極めなければなりませんな」

見極めるって、どうせ会長のことだから銭勘定だろ。ま、信長の御用商人の会長だから、気が気じゃないんだろうな。大丈夫。おれはやることはやる。

「築田殿が言うほど、信濃守殿は凡才でありません。信濃守殿は強欲です。あの方の茶器の欲しようでおわかりでしょう。そして、何

が自分自身に適しているか、明晰に判断できるお方です」
　まあ、タナカは茶会でのヘタレしか見たことないからな。てか、そうだな、ヘタレって茶の湯に入ると賢者モードに豹変するから、実はあれが本当のヘタレなのかもしれん。
「ただ、信濃守殿が簗田殿を慕っていらっしゃることに偽りはないと私は思います。あの方の人の評価の基準は、まず、茶人であるか茶人でないかなのですから。簗田殿、信濃守殿には暇さえあれば顔を合わせたほうがよろしいですぞ」
　わかっているって。あいつがキーマンだってことはがってん承知の助だって。おれが今もっともやるべきことがなんなのかなんて、わかっているって。
　で、とと屋をあとにしたおれは、タナカに教えてもらった中国からの輸入品を扱っている雑貨屋へ。
　今、やらなければならないことをやらなければならん。
「何をお求めですか」
　主人がすり寄ってきて、おれは、とと屋のタナカに聞いてやって来たと伝えた。
「明国から輸入した香炉や香木を置いているみたいだな」
「ははあ。とと屋の紹介ならお安くしておきますよ」
「きゃ、きゃ、きゃらはあるか？」
「伽羅をお探しとはお目が高いですな、旦那。もちろん、伽羅も扱っております」
「い、一本、こ、このぐらいでいくらするんだ」
　と、おれが両手で幅を作ってみると、主人は目を大きくして飛び跳ねた。
「そ、そんなにですか。いやあ、うーん、しかし、とと屋の紹介ですからなあ、うーん、五十貫でどうでしょう」
　五十貫！　岐阜の半値以下じゃねえか！　さすが、堺。男気が違うぜ。
「よし、買った！　それとちなみにだが、羅国はいくらするんだ」

「このぐらいですか」
「そうだ、このぐらい」
「うーん。二十貫と言いたいところですが、伽羅と合わせて買ってもらえたら、十八貫にしておきましょう」
「買った！」
なんてお買い得。いや、岐阜のあの商人に吹っ掛けられたのかな。でも、岐阜の田舎と堺の大都市は大違いだからな。なにせ、中国からの直輸入だからな。
ついでに、香道セットとお洒落な香炉を買い込み、しめて百五十貫。うーむ。香炉が八十貫と、かなりお高め。でも、陶磁器だしな。赤い模様がびっしり書かれて、花とかも書いてあって、セレブリティの代物って感じ。
やっぱ、ナチュラルセレブな香りを楽しむには香炉もセレブじゃないとな。そもそも、おれがセレブだし。
百五十貫を茶屋四郎次郎に請求しろという証文を書いて、香炉セットを抱えて屋敷へ。高い物だから後で届けてくれるって言ってくれたけど、待っていられるか。
伽羅を手に入れちゃったしね。どんな香りなんだろな～。どんなミキシングがされるんだろうな～。さゆりんの匂い、あーやの匂い。おれは世界で一番この香木を待っていた！
ふむ。屋敷には誰もいない様子。さゆりんやねじり鉢巻きがいる恐れがあったが、さゆりんは何かと忙しいんだろう。ねじり鉢巻きはクリツナが馬屋にいたところを見ると、健気に団子屋を手伝っているのか。みんな、働き者だな。うん。
さてさて、築田家のボスは香りを楽しみましょうかな。さゆりんの部屋とあーやの部屋から着物を一着ずつ盗み出してきて。
ほほう。まだ、洗濯前の匂いだな、これは。てか、青色系の着物が多いな。さゆり嬢は青がお好みのようで。
あーやの着物は、どれどれ。
こ、これは、若干の湿りけが！　そうか、あーやは団子屋で頑張

っているからいつも汗だくなんだよな。あーや、キミは天使だよ。くんくん。うむ。彩嬢の汗の匂いが染みついております。

さてと、おれの部屋で着物を吊るし、香炉をセット。伽羅の切りくずをピットイン！　どんな香りがするんだ。最上級香木の伽羅はいったいどんな香りが。

ぬおっ。羅国とはまったく違うじゃねえか。鼻につんとくる、なんだ、この香りは。でも、なんだろ、自然の苦みにすうっと澄んでいる。そっと落ち着ける香り。

この香りがミックスされたら一体どうなるんだ。鳥肌注意だな。ま、着物に染みつくまでの間、面倒なことを片づけておくか。馬屋に行きクリツナのうんこ掃除をし、餌をやり、居間に入って、いろんな奴等に手紙をしたためる。ヘタレ、播磨のバッタ、承兌、あずにゃん。

拝啓　梓殿

あきの香りが深まる季節、

ずいぶんと肌寒くなってきました。

さきほど、香炉を買ってき、

だいぶ、香りに酔いました。

いい香りがするので、

すてきなこの香炉と一緒に

きもちをこめて岐阜に送ります。

敬具　築田左衛門尉

追伸

此壺のことで何か進展があったら教えてください。

そっか、コノツボがどうのこうのと太郎が騒いでいたから、太郎にも手紙を送っておくか。

太郎へ

コノツボっていう地名は馬鹿みたいだから変えろ。あと、屋敷を作るんなら質素なものにしろ。そんなものに金をかけるなら、おれのように優秀な人材を雇え。わかったな。

おわり　築田左衛門尉

さて、そろそろ染みついたかな～。どれどれ。まずはあーやの匂いから。くんくん。

鳥肌全開。

あの澄んだ苦みが、あーやの残り香とブレンドされたことによって、まったく別の、苦甘さを引き出しているじゃないか。これが伽羅の魔力か。これが自然の力か。作り物ではない、これこそが自然の産物。人間と自然との融合。

美香すぎる。

はあはあ。それでは、さゆりんの青い着物を。はあはあ。

くんくん。

やばい。母なる大自然の澄んだ匂い。吸い込まれていく。さゆり

んの匂いに吸い込まれていく。ふわふわするし、すうすうする。
駄目だ。気が狂って変態のキワミになっちまいそうだ。我を取り戻さなければ。取り戻さなければ。
とりあえず、真無双奥義・氷我炎如斬、アーッ！！！

ゆくゆくは徳川幕府の宰相だ！

亭主殿へ

木枯らし吹きすさぶこのごろ、いかがお過ごしか。わらわは遠く堺の亭主殿に思いを馳せながら頂いた香炉で飽きずに香りを聞いております。

太郎から聞いているかもしれぬが、あいりが子を身ごもった。気分が優れぬ日がときにあるようで、あいりとその子のため、家事は控えさせており、つい先日から、兄上の与力の配下の娘、かつが女中として我が家に奉公することになった。

太郎は沓掛や此壺のことで多忙であるが、あいりを気遣って、稲葉山になるたけ顔を出すようにしているそうじゃ。

まことにめでたい。亭主殿ももし時間が許せば、正月は岐阜に帰ってきてくれ。

梓

おれは手紙を読み終えたあとも固まっていた。太郎とあいりんの間に赤ちゃんだと……。な、なんか、なんとも言えない気分だ。まったく実感がない。あの小僧が父親になるだなんて。

てか、おれがおじいちゃんになっちゃうし。

ま、血が繋がっていないから、あんまり実感がないんだろうな。

それよりも、おれとあずにゃんとの間に子供ができないのは何か理由があるのかな。子供なんて欲しくないからいいけど。おれにそっくりなのが生まれちゃったら嫌だもんね。

ともかく、男だったら、簗田家の跡継ぎか。太郎に教育させると生意気になるから、おれが引き取ろう。堺に連れてきて、岐阜の田舎とは違った広い世界の中で育て、そうだ、承兌を家庭教師にさせ

よう。タナカに茶の湯の手ほどきを教えさせよう。武芸は……、どうでもいいや。戦国の世が終われば、槍なんか必要ないんだからな。

おれの孫は頭脳明晰な文化人か。ほほう。理想は十兵衛みたいな奴だな。でも、あいつは頭がお堅くて駄目だ。いや、平和な世の中になったら、十兵衛みたいな人間が一番いいのかもしれない。

礼儀正しくて、賢くて、太郎とあいりんの子供だから、顔つきも可愛らしいに違いないし。

いいなあ。いいなあ。そんな孫がいたらいいなあ。いや、そんな孫にさせる。

ゆくゆくは徳川幕府の宰相だ！

ならば、今のうちにキモブタにおべっかでもつかっておくか。金ヶ崎以来、ずっと会っていないからな。今年の正月はさすがに岐阜の信長に挨拶に行かなくちゃならないから、ついでに三河まで足を伸ばすか。

いやあ、楽しくなってきたなあ。くんくん。コレクションも豊富だしよ。この前、お気に入りの着物がなくなったってさゆりんが騒いでいたのが怖いけれど、まあ、おれの部屋をあさることはないだろう。

とりあえず、キモブタに手紙でも書いておこう。元気ですかって。夕飯の支度ができたとあーやの声がして、おれは居間に向かった。む。なんだか、連中がこそこそ話をしている。たくさんの紙切れを並べて。なんだ、なんだ。築田ホールディングス戦略会議なら、ご飯を食べ終わったあとだぞ。

おれが居間に入ると、さゆりんの無言の怖い視線がおれを追いかけてくる。まさか、着物泥棒がばれちゃったんじゃ……。

腰を下ろし、掌を合わせていただきますと言ったおれ。

しーん。

「なんだよ。食べろよ。ご飯はご飯、仕事は仕事、時間はきっちり守れ」

「なんなんや、この数は」

さゆりんが怖い顔で紙切れを指差す。なんなんやって、なんなの。目を凝らしてみると、なんだ、シロジロに請求してもいいっていうおれが書いた証文か。

「それがなんだって言うんだよ」

「使いすぎやないか。なんなんや、この額は。こんなに請求が来て、四郎次郎が潰れてしまうわ」

チッ。さゆりんって意外と金にうるさかったのか。それとも、シロジロが自分からは言えないから、さゆりんに泣きついたのか。

「旦那様、さすがにこれは使い込みすぎッスよ」

「どこが使い込みすぎているんだ！　お前の売り上げは年間一万貫は軽く越えているだろうが！　主人のおれにがたがた抜かすな！」

「あんたの使い方がおかしいっていうことや！　なんなんや、これは！」

と、さゆりんが突き出してきたのは、岐阜で香木を買ったときの証文。

「これもなんや！」

この間、堺で香炉と伽羅を買ったときの証文。

「銭以外には無頓着だったあんたが、どうして急にこんな店に出入りしているんや！　どこかの女に入り浸っているんやないやろな！」

む。何を勘違いしているのだ、この小娘は。匂いには入り浸っているが、女には入り浸っていないぞ。おれはさゆりんにさんざん騙されてきたから、女には警戒心が強いんだ。さゆりんにそんなことを言われる筋合いなんてないぞ。

でも、この調子だと、あずにゃんにあることないこと告げ口しそうな勢い。

「違う。ちょっと、香道に興味を持ってだな、それで、道具を買っちゃったんだ。でも、もう無駄使いしないから。ごめんね」

素直に謝ったおれに、戸惑うさゆりん。シロジロと顔を見合わせ、口の先を尖らせる。

「そういえば、近頃の旦那様はいい香りがします」

と、あーやが言って、眉間に皺を寄せるさゆりん。
「なんや、それは」
おれは香木のことを教えてやった。とてもいい香りがするのだと。だったら、ご飯を食べ終わったあと、お前たちのために焚いてやると言った。
おれは一度部屋に戻り、コレクションが見つからないよう押入れの奥に入念に隠したあと、買って来たばかりの安物の香炉と香木セットを持って居間に戻り、香木を燻した。
「わあ。いい匂いがします」
あーやが手を叩いて喜び、フヒヒ、染みろ、染みろ、もっと着物に染みろ。
さゆりんは眉根をひそめたままむっつりしており、シロジロが興味本位に伽羅に触ろうとしたのでその手を払いのける。
「くせえ。おれはもう戻るぞ」
田舎者のねじり鉢巻きは悪態を残して居間を出ていく。
「なんで、あんたが香りなんて楽しんでいるんや。おかしいわ。本当にそんなもんに執心しているとは思えん」
「じゃあ、お前は嗅ぐな。てか、さゆりんはこの香りがわからない野暮な小娘だってことだ」
「野暮で結構」
素直じゃないさゆりんが居間を出ていき、おれはあーやに香木と香炉をくれてやると言った。岐阜の女どもはこれを着物に染み込ませて楽しんでいるから、
「あーやもそうしなさい」
と、香道セットをプレゼント。あーやは天使の笑顔で大喜び。
「でも、旦那様、道楽もほどほどにしてくださいッスね」
「お前は黙ってろ。金が足りなくなったらもっと稼げ。お前の好きなようにやらせてやっているんだから、それでいいだろうが。黙って働け」
だいたい、シロジロなんかよりおれのほうが金銭感覚はよっぽど

マシだわ。鼻クソに五百貫も注ぎ込んだ馬鹿にがたがた抜かされたくねえっていうの。

とはいえ、くんくんしてばかりもいられない。ヘタレ村重が変な気を起こさないよう監視しつつ、この前のいくさで空中分解しかけている高槻城にも布石を打っておかないとまずいことになるかもしれないからな。

バッタを堺に呼び寄せるか。手紙のやり取りだけだと、もしも、飛脚が誰かにチェックされたか、自分で中を見たかした場合を考えると、突っ込んだことは書けないからな。

危なすぎる男

バッタは播磨で退屈していたらしく、手紙を出したらすぐに堺に飛んできた。

「摂津の情勢を耳にするたびに血肉湧き躍る思いでありましたわ！　築田殿がいつまた招いてくれるかと手ぐすね引いて待っておりましたよ！」

相変わらずうるせえけど、バッタ物とはいえ謀略だけは本物だからな。バッタの知恵に頼らないと摂津の状況を打開できそうもないので、おれが自ら茶を立ててもてなしてやる。

「はあ。築田殿は主人役も務めるのですか」

「滅多にしないよ。岐阜の女房相手にしているだけで、茶会なんてのは開いたことがない」

茶碗をバッタの前に差し出すと、大声がうるさい普段とは打って変わって、粛々と茶碗の中を飲み干すバッタ。播磨の田舎者のバッタなら大丈夫だと思って茶を立てたのに、バッタが意外と教養人でちょっと後悔。茶碗も大したものじゃないしさ。

「結構なお手前で。して、その後、荒木信濃守とはどうなんしょうかね」

「高槻以来、顔は合わせていないけれど、文のやり取りはしている。年が明けたら池田に行く、池田に来てくれ、そんな感じで。突っ込んだことは文には書けないから」

「まあ、そうでしょうな」

バッタは軽い口ぶりでそう言いながら、茶碗を回して眺める。チッ。どうせ、安物ですよ。はいはい。

「しかし、惜しかったですなあ。松永弾正めが出しゃばってこなければ、高槻は池田勢のものになり、あとは荒木信濃守に謀反を起こさせるだけだったんですもんな」

「惜しかっただけじゃ済まない。高槻城はあれから池田を警戒する

ようになって、家臣団はバラバラだ。幕府はまるで頼りにならないし、信長様も摂津の面倒を見られない状態だから、弾正に近づく一派や三好三人衆と近づく一派なんかに分裂しているし、池田勢も池田勢で茨木城は取ったけれど、伊丹が池田勢を警戒しているし、三好三人衆もきな臭さを感じているらしいから、下手に動けない状態だ」

「高槻城が分裂しているとは、内情は外から見るよりも複雑そうですな」

バッタは茶碗を置くと、置いておいた饅頭を食べる。宙に視線をさ迷わせ、もぐもぐと食べる。おれは茶碗を杓子ですくった熱湯ですすぐ。

吹きすさむ風が障子戸をがたがたと揺らしていた。

「おそらく、このまま放っておくと高槻は松永弾正の餌食になるかもしれませんな」

「それはどうしてだ」

「高槻城は上総介殿が上洛する前は、三好三人衆の一人、三好日向守の息がかかった地だったそうですが、上総介殿が三好を追い出し、和田惟政が城主になったさい、その配下にはかつて松永弾正に仕えていた高山飛騨守友照が付けられました。高山飛騨守は勇猛かつ文化人でもあり、熱心なキリシタンでもあるそうですが、高槻がキリシタンの影響の強い町なのは、飛騨守の力が大きい表れでしょう」

おれは腕組みをして、バッタを見つめつつ感心した。播磨にいるっていうのに、持っている情報量が半端じゃない。間接的とはいえ摂津工作に手をかけたものだから、情勢に敏感だというのもあるんだろうけど。

「弾正は飛騨守との脈を生かして高槻をものにしようと考えているはず」

「じゃあ、どうする。弾正に高槻を押さえられたら、池田勢はなすすべがない。それどころか、三好三人衆もどう出るかわからない。余計、摂津は混乱するぞ」

「左様。しかし、弾正の裏をかけばよいこと」
バッタは懐からいつか書いた摂津に絡んでいる連中の名簿を取り出した。
「和田惟政の死後、高槻城主となったのは若年の惟長。これを支えているのは叔父の惟増ですが、もしも、惟増まで死んでしまったら、今の高槻家臣団を押さえられる人間はいなくなりましょうな」
部屋の机に置いてあった筆を取ると、和田惟増のところに×印をつけたバッタ。おい。どういうことだ。おい。まさか、暗殺しろってことか。おい。
「こうなれば、弾正は易々と高槻を手に入れられるかもしれません。ただ、家臣の者の誰かが易々と下剋上を起こせるということでもあります」
「それが高山飛騨守ってことか？」
「左様。これはあくまで拙者の推測ですが、飛騨守は、南蛮寺が悪事を働いているという理由で今回の城下の焼き払いを行った弾正に、感情的になっているかもしれませぬ。熱心なキリシタンらしいですからな」
「だからといって、池田勢が動けないのは変わらないんだから、飛騨守が荒木信濃守と手を組まなくちゃならないことだろ。それに、弾正がそう簡単に見過ごすか」
「高槻は疲弊しきっております。飛騨守が謀反を起こしたとしても、単独では生きていけますまい。そのとき、頼るべき人間が荒木信濃守であればいいことです」
「そんなにうまく行くかよ」
「簗田殿次第です」
ぐう。三好・本願寺と裏で手を結び、ヘタレ村重をその気にさせて、ようやく一仕事終えたと思えば、また綱渡り謀略かよ。しかも、高槻の連中なんかとはまったく面識がないんだぜ。一から始めるも同然じゃんか。
しかも、和田惟増っていう奴を暗殺した上でという、とんでもな

い悪の道。
「松永弾正には高槻から目を逸らさせましょう。いや、このさいはっきりと上総介殿に刃を向けさせましょうか」
「な、何を言っているんだ、お前……」
「弾正忠に謀反を起こさせると言っているのです」
ちょっと、待て。バッタはかるーく言っているけれど、おれはかるーい気持ちで受け止められないぞ。弾正に謀反を起こさせる？なんてことを抜かしているんだ。こいつは謀反請負人か。なあ。
「あのなあ、おい。お前は織田家を滅ぼすつもりか。今の状況で弾正が裏切ったら、織田は終わるぞ。お前、ひょっとしておれを騙しているんじゃないだろうな」
「弾正忠ごときで織田は滅びませぬ」
と、眼差しをおれにしっかと据え置いてくるバッタ。若々しい艶のある顔に危うい影が差している。
「こ、根拠はなんだ。ええっ？　根拠はなんなんだよ。今でさえてんてこまいなんだぞ。弾正が裏切ったら、手が回らなくなるぞっ」
「根拠も何も、松永弾正に対して上総介殿が本気になれば、三日か四日で滅ぼせるではないですか」
いいですか、と、バッタは人差し指を振りながら語気を荒くした。
「松永弾正がこれほどのさばっていられるのは、上総介殿が弾正に甘いからなのです。しかし、弾正がはっきりと反旗を翻せば、上総介殿は弾正を潰す他ありませぬ」
「何を言ってんだ、お前はっ。そんなことは弾正だってわかっていることだろうがっ」
「それは勿論。しかし、錯覚させればよい。弾正に、もしや、上総介に勝てると」
「そ、そんなのどうやってだよ」
「三好三人衆と和解させましょう」
「ふざけんなっ！」
おれは立ち上がると、肩を震わせながらバッタを睨み下ろした。

何もしていないのに吐息が乱れた。なんてことを言っているんだ、この馬鹿は。それは、つまり、信長包囲網を形成させるってことだぞ！

「お前は、お前は、織田を滅ぼすつもりか！」

バッタは黙りこくって、ただおれをじいっと見つめてくる。

弾正を裏切らせるだけでなく、三好三人衆と組ませたりなんかしたら、信長に不満を持っている足利義昭がここぞとばかりに立ち上がるに決まっている。そうしたら、武田信玄も大義名分を得て上洛を開始し、浅井朝倉も時を同じく出陣して、たとえ、そこで歴史通りに武田信玄が死んで、東側は大丈夫だったとしても、その間、弾正と三好が暴れ回る摂津には兵を回せないってことじゃねえか。

池田勢も伊丹勢も高槻城も、摂津の全部が三好と弾正のものになったら、畿内を蹂躙されて終わりだぞ。

「そうはなりませぬ」

「なる！」

「なりませぬ！　池田勢が三好に楔を打っておりさえすれば、三好は動けませぬ！」

「池田勢は三好とつるんでいるんだぞ！」

「荒木信濃守は簗田殿とつるんでおります」

おれは目を瞑りながら宙を仰ぐ。なんて、途方もないことなんだ。本当にそれしかないのか。バッタは本当におれ側なのか。

苦難の年、幕開け

年が明け、摂津は平穏だった。

けれど、目の離せない状況に変わりはなく、太郎に何度もお願いして堺に来てもらったタコ入道を高槻城に潜伏させた。

「俺が一番得手としているところはいくさ場ではありませぬ。お任せくだされ」

妙に自信ありげなところが気になったけれど、元は甲賀忍者だから浪人になり済ますのは朝飯前で、奴には和田惟増暗殺の指令と高山飛騨守の謀反工作を託した。

で、弾正のことをさゆりんに相談したら、バッタの言う通りだとほざいた。

「もはや、松永弾正を泳がせるわけにはいかんやろ。けじめをつけなあかん」

おれは反対したが、さゆりんは信長の軍勢を摂津に引っ張ってくることが一番の目的だと言う。

浅井や長島に釘付けにされているように見えるが、野田・福島で三好や本願寺と争ったときのように、信長は朝廷を使って相手と和睦を結べるだけの力がある。信長の目を北近江や伊勢ではなく、摂津にも注目させることが必要だ。

「敵だけを騙しても仕方ない。味方も騙さなあかん。調略だけでは限界がある。力で捻じ伏せないかんときもある」

「その間に武田信玄が攻めてきたらどうするんだ、あ?」

「武田が攻められん時期にすればええ」

五月から九月の農政期なら、半農半兵が主な武田勢は甲斐を出られない。まさか、騎馬隊だけで西上してくるはずがない。

「今年の夏が、摂津の行方を決める勝負の季節や」

むう。ぎりぎりの岸壁を歩いているような気分になってくるけれど、謀略ってのはそういうものなのかもしれん。

「でも、弾正をどうやって裏切らせるんだ。言っておくけれど、おれは三好と組ませるなんて反対だからな。裏切らせるなら、弾正一人でやらせてろ。あとで手に負えなくなる」
「そんなら、考えたんやけど、三好左京大夫と繋げたらどうや」
「だから、三好三人衆とは駄目だって言っているだろ！　何がなんでも駄目だ！」
　すると、さゆりん、ハア、と溜め息。
　三好は三好でも、三好左京大夫義継は三好三人衆じゃないらしい。
「あんた、いつまで経っても何も知らんのやな」
　ぐう。そんな雑魚武将……。別に知っていても知らなくても……。
　三好左京大夫は、三好家を大大名に成り上がらせた三好長慶の甥っ子で、長慶の実子が早く死んじゃったから、左京大夫は三好家の跡取りだったらしい。
　でも、三好三人衆と松永弾正の力が強すぎて、左京大夫は傀儡当主。どちらかというと三好三人衆側だったけれど、信長が上洛してきて以降は、信長にへーこらして、今では摂津と和泉に接する河内国の若江城で勢力を持っているみたい。
「じゃあ、百歩譲ってそいつと弾正との手を組ませるとしよう。でもな、そんな日和見武将をどうやって裏切らせるんだ、ん？」
「彩を女中で忍びこませる」
「な、な、何を言ってんだっ！」
「何を言っているんだはこっちが言いたいわ。彩も元はくのいちや。ただの団子屋の娘とは違う」
　なんだと……。あーやがくのいちだっただと……。そんなの聞いてねえぞ。確かにタコ入道の妹で甲賀出身かもしれないけれど、ただの妹じゃないのかよ。あの天使あーやがくのいちだったなんて、ショックすぎる。
「てか、お前が行けっ！」
「私は私でやることがぎょうさんある。若江城だけに構ってられん。だいたい、私が若江城にいるようになったら、誰が新七に指示を出

すんや。誰が池田勢や三好三人衆の動向を見張るんや。あんたが岐阜で匂い馬鹿になっていたとき、誰が摂津の工作を仕切っていたと思っているんや」

団子鼻をつんと突き上げて、おれを忌々しくも見下ろしてくるさゆりん。くそう。チクショウ。何も言えないぞう。

「あんたは左衛門太郎の子供が産まれるまで、岐阜にでも戻っておったら？」

「戻るかっ！　チクショウッ！」

おれは居間を飛び出して、自室へ駆け込む。ウウッ。おれだって、おれだって、十兵衛なんかはスゴイって言ってくれるんだもん。弾正みたいなヘビー級の悪党に目の敵にされるぐらいなんだもん。それなのに、さゆりんったら、いつまでもおれを虚仮にしくさって。ウウッ。

おれは箱からさゆりんの青い着物を取り出し、涙を拭きながらくんくんする。香りも落ちてきちゃったし。ウウッ。さゆりんは着物泥棒を警戒しているから新しいのを盗めないし、クソッ。

あずにゃんのもあいりんのも香りが、香りが……。

あーや、君だけだよ、おれにくんくんさせてくれるのは。はあはあ。いい匂い。こんないい匂いをするおにゃの子を潜伏工作させるだなんて、さゆりんは鬼だ。

で、数日後、さゆりんに任務を託されたあーやも堺から旅立ってしまった。くそう、あーやまでいなくなったら、おれはどこから着物を仕入れてくればいいんだ！

「あんたも堺で遊んでばかりおらんで、摂津池田の信濃守に媚びでも売ってきたらどうなんや」

さゆりんに尻を蹴飛ばされるようにして池田に向かわされる。クリツナに乗っていると目立つので、ねじり鉢巻きと共に徒歩で。くそうくそう。築田ホールディングスＣＥＯにまで上り詰めたおれに、美濃攻略を思い出させるようなこんな泥臭い真似をさせやがって。

「此壺という地を知行に与えられたんですが、どうにも気に入らな

い地名でして。なんで、思ったんですけど、九右衛門殿から一字拝領頂き、九之坪と名付けようかと思うんですが、よろしいですかね～」

「おお。それはなんと喜ばしいかぎりだろう。断る理由など見当たらない。のう、信濃守」

「さ、左様で、左様でございます」

九右衛門に媚を売ったところで、ヘタレの自宅にて、茶を振る舞われる。

「簗田殿の進言通り、池田勢は茨木城を落としましたが、松永弾正忠殿の動向が気になります」

と、茶室に入るとキリッとした表情のヘタレ。むう。怖い奴だな。おれは高槻城の家臣団が分裂している最中だから、高山飛騨守に近づいてみてはどうかと言ってみる。

「高山飛騨守ですか」

「池田勢に付けば、高槻を飛騨守に与えると」

「そう簡単になびくものですかね」

「まあ、徐々に徐々にで。あっしも尽力いたしますので。村重殿が摂津の国主として君臨できるよう邁進します」

おれのごますりにヘタレは顔を伏せながらも頬をわずかに緩めて、茶碗を布でぬぐっていった。

強欲に火がぽつりと点っている様子。うむ。ヘタレはその気だ。

京では信長が自分の屋敷を建設しているらしい。京をたびたび訪れているタナカの土産話によると、将軍足利義昭の名前で信長邸宅を建築したいと、義昭が持ち掛けてきた。信長は断ったのだけれど、義昭がしつこかったので信長は折れ、畿内の幕臣たちが建設を取り仕切り、それを祝う町の民衆が太鼓や笛を鳴らしてお祭り騒ぎだったそうで。

本願寺顕如からも祝い品として掛け軸と茶碗が贈られたみたい。

なんだ、それ。仲直りしたってこと？

「それは違いましょう。公方様の名のもとで邸宅を建設したという

のもありますが、それでも顕如様の真意は計りかねますな。長島で一揆を扇動させながらも、新築祝いに品を贈る。友好の証か、それともその何らかの意志があるのか」

それとも、と、タナカは厳しくさせた目をおれに上げてきた。

「公方様が織田様討伐の文を密かに全国に送っているという噂をかき消すため、織田様を油断させるためかもしれませぬ」

タナカは言う。義昭が信長討伐の勅令を各地の大名に発しているのは確かであり、当然、信長の耳にもそれは入っている。

「しかし、織田様が公方様を追いやる大儀がありません。動くに動けぬのです。今や、公方様を操っていたはずの織田様が、逆に飼い殺しにされているも同然です」

そうなると、さゆりんの言うように今年の夏が勝負か。反信長連合が一斉に動き出す前に――、武田信玄が西上する前に、摂津を、弾正を片づけなくちゃならん。

頬冠りをした百姓娘の姿で、あーやが戻ってきた。
「松永弾正忠と三好左京大夫は半年ほど前から反織田の密約を結んでいたようです。ただ、左京大夫は公方様の妹御を娶っているため、公方様が態度をはっきりとしないかぎり、弾正忠の誘いにはなかなか応じきれないようです」
普段はほっこり垂れ目のあーやがキリッとした顔つき。獲物に狙いを定めるチーターみたいな眼光をしている。なんか、ショックだな。今まで騙されていた気分だ……。
「三好三人衆とはどうなんや」
と、女頭目のようなどっしり姿勢でさゆりんがあーやに訊ねた。
「三人衆と左京大夫との間には何やら因縁があるようで、両者が直接交わることはないでしょう」
なんか、口調とかもすげえ忍びっぽいし。天使のはずなのに。
「ただ、姐さん」
姐さん、って……。ウウッ。
「公方様が左京大夫と弾正忠に勅令を発しているのは間違いないようです。更に、甲斐の武田徳栄軒と弾正忠が密書のやり取りを交わしていると、左京大夫が口を滑らせていました」
「本当なんか、彩」
こくりと頷くあーや。
「あかん。それはあかん」
あかんな。それは本当にあかんな。どうして、あーやが左京大夫から直接その話を聞いたんだ。え？　なぜだ？　どうやって左京大夫に近づいたんだ？　もしかして、さゆりんがかつておれを誘惑したように、あーやも……。
ウウッ。
「何を泣いているんや。まだ、なんとでもなるやんか。おそらく、

公方が表立って上総介の討伐令を下すのは、今年の冬か、年明けや。その前に弾正をなんとかすればええ。弾正をおびき出せばええ」

さゆり姐さんは眉間に皺を寄せながらじいっと目を瞑る。正座をして、さゆり姐さんの指令をじっと待つあーや。目頭を押さえるおれ。

「左京大夫を篭絡する他ないな。今、兵を上げれば三好家の復興に繋がると。仮にも、左京大夫は三好家の当主や。夢を見させ、勇み足を踏ませるんや。ただ、高槻攻めはあかん。摂津がこれ以上混乱するのは避けな」

「河内を左京大夫と分割して治めている畠山左衛門督はどうですか。左衛門督は上総介様の妹婿です。左衛門督が左京大夫と弾正忠に攻められたら、上総介様は必ず出兵するでしょう」

おいおい。どうして、あーやが陰謀の片棒を担ぎ始めちゃっているのよ。怖いよ。

「あんたにそれができるんか、彩」

「できます。簗田家のために、旦那様のために実現させます」

ウウッ。そんなことしなくていいよお。おれのためだったら、おとなしく団子屋で働いていてくれよお。

でも、あーやに頼らざるを得ない現状のため、おれは泣く泣く再び伏魔殿へと向かうあーやを見送った。

てか、さゆりんが仕切っているこの状況はなんなんだ。おれが一言も口出ししないまま、計略が進んでいっているぞ。

存在価値が薄くなっていっているような気がするんだが。

「鉢巻き、明日、岐阜に帰るぞ」

おれの唐突な言葉に、食事中だった連中は揃って顔を上げた。

「何を言っているんや」

「今が一番大事なときじゃないんスか」

「岐阜に戻ったって、また堺に来るんだったら、こっちにいたほうがいいだろ」

馬鹿どもがやんややんやとうるさいので、おれはバチンと箸を叩

き置いた。
「どうせおれがいなくたって、どうにかなんだろ！　おれなんかいなくたっていいんだ！　いいんだ！　チクショウ！」
ウウッ。何が簗田家だ。何が旦那様だ。簗田家当主は実質太郎みたいなもんだし、おれは役立たずだし、皆が勝手に好きなことやっているし。だったら、おれは隠居して、岐阜であずにゃんの寝巻きをくんくんしていたほうが全然いいわ。
居間を飛び出したおれは、自室であずにゃんの寝巻を抱きしめながらしくしくと泣いた。
そもそも、おれは結婚しているんだ。怖いけど、おれが変なことをしなければ、めちゃめちゃ可愛い奥さんがいるんだ。それなのに、結婚してからずっと離れ離れじゃんか。おれはこんな、二十四時間働けますか？　ビジネスマン！　みたいな生活を望んでいたわけじゃねえ。デュフフな生活を望んでぜえぜえと働いてきたんだ。デュフフな生活が岐阜にはあるんだから、隠居させてくれ！　ウウッ！
「何をしとるんや」
やばっ。あわててコレクションを箱の中に押し込めて、押入れにぶちこみ、戸を閉める。
「今の、なんや」
勝手に入ってきて、勝手に歩み寄って来るさゆりん。おれは押入れをガードしながら、喚き散らす。
「な、なんなんだ、勝手に入ってきやがって！　去れ！　去れ！」
「あんたが心配で来たんやないか」
「だったら去れ！　おれはなんともない！　岐阜に戻らない！　帰れ！　帰れ帰れ帰れ！」
しかし、襟首を掴まれて、ぶん投げられるおれ。あわわ。さゆりんは押入れの戸を開けて、しばし固まる。
「こ、これは、これは、私の小袖やんか……」
「いやあ、アハハ、洗濯しようと思ってさあ。ほら、皆、忙しいじゃん？　だから、洗濯してあげようと思ってさ。でも、ついうっか

り、忘れちゃったんだよねえ」
「これはあいりのやないか。これは奥方の。これは彩の。これも彩の。これも彩のや」
視線をギロリと向けてきたさゆりん。オワタ。
「どういうことや、これは。なんで、あんたがこんなに着物を持っているんや。どういうことなんや。何のつもりなんや」
「いやあ、アハハ……」
「どういうことなんや！」
廊下から部屋の中を覗いてくる四つの目。
簗田家当主左衛門尉政綱の威厳がガラガラと崩落していく音が聞こえてくる。どんな言い訳をしても、どんな嘘をついても、もう、おれはただの変態だ。
「勘弁してくれ！　岐阜のあずにゃんや太郎には言わないでくれ！　頼む！　頼む！　ここだけの話、いや、見なかったことにしてくれ！　お願いします！　さゆりさん、シロジロさん、鉢巻きさん、お願いです！　どうか、この変態を許して下さい！」
おれはつまらない誇りをかなぐり捨てて、必死の土下座。さゆりんの足元に食らいついて必死のお詫び。
「要はあんた、泥棒していたってわけか」
「はいっ！　皆さんの着物が欲しくてついつい泥棒しちゃいました！　皆さんの匂いをくんくんしていました！　すいませんでした！　誰にも言わないでください！　お願いします！」
「いやああっ！　あんた、気色悪いっ！」
と、着物をぶん投げてきて、部屋から逃げ出していったさゆりん。
ううっ。ああ。やばい。もう駄目だ。
「シロジロ、鉢巻き」
さゆりんの青い小袖を被りながら、おれは廊下で怯えている二人に救いの手を伸ばす。
「助けてくれ。さゆりんの口を封じてくれ。お前らしか、お前らしかいないんだ」

しかし、ささっと視線を反らしたシロジロと鉢巻き。あわわ。そして、二人はおれを見捨てるかのように去っていってしまった。

「もう、おれは終わりだ」
「どうされたのですか。簗田殿にとって、今が一番大切な時期ではございませんか。それに、明智殿から聞きましたよ、高槻での出来事を。池田勢が高槻攻めから退いたのは、実は簗田殿が池田九右衛門殿を諭したからというではありませんか」
「そんなときもあった。でも、おれはもう終わりだ」
「何があったのです。拙僧は高槻での簗田殿の話を聞いて、胸が震えましたよ。簗田殿のような御仁に、これからの時代を担って頂きたいと拙僧は思っておるのですよ」
「何を言っているんだよ、承兌。おれなんか、何もやっちゃいない。何もできない。むしろ、何かやるたびに、おれは、おれは、ウウッ」
「何があったかは知れませんが、お話しされては如何ですか。話すことで気も楽になるものですよ」
「……」
「何があったのです」
「ひ、一人にさせてくれ。それと、おれがここにいることは誰にも言わないでいてくれ」
おれは承兌を追い出すと、布団にくるまって世間から遠退くように狭い暗闇の中で丸まった。
もう、おれに帰る場所はない。発狂したさゆりんはきっと岐阜のあずにゃん以下馬鹿どもに着物泥棒の正体を報せているに違いない。
そうしたら、おれはシロジロや鉢巻きが見せた、あの軽蔑の目を家のすべての連中から向けられるんだ。変態亭主、変態当主って。
いや、それどころか、簗田家解散の憂き目さえ。誰がこんな変態当主に付いてくるんだ。あの軽蔑の目がすべてを物語っているじゃないか。
挙げ句には太郎から絶縁状を叩きつけられ、あずにゃんからはボ

コられた挙げ句に離縁を突きつけられて、半死の粗大ゴミと化したおれは稲葉山の城下に捨てられ、奥様会議で暴露されてしまっているから、遠山さんやおまつに石を投げつけられ、サルの小姓たちに玩具にされ、

「にゃっはー、行く当てがないんなら、おりゃあが雇ってやるきゃあ？」

うわあっつ。絶対に嫌だ。絶対に駄目だ。もう、何処にも行けない。

簗田マーシーのわくわく戦国乱世物語――完。

家出したおれは相国寺から一歩も出なかった。外の世界には厳しい現実が待ち受けている。恐ろしい変態差別が待っている。

「何者かに追われているのですか」

一日一回、承兌が声をかけてくるが、おれは無視して境内を見つめる。

「別段、簗田殿は当寺に寄付していただいたので、いつまでいようと構わないと住職は言っておりますが、しかし、簗田殿のお役目を考えたらここでのんびりとしている場合じゃありますまい」

おれは無視して、ひらひらと飛んでいる蝶々を眺める。

何もやることがない日々を送っていたら、おれは何も考えなくなった。今までやってきたことも忘れていくようだった。春が過ぎて、木々の若葉が日差しの中に輝いていて、ふと気がついた。ああ、季節はこうやって移ろっていくもんなんだな。

「松永弾正忠と三好左京大夫が共謀して河内の交野城に攻め込み、周囲に砦を築いているそうですよ。簗田殿、よいのですか」

承兌が何か言っているけれど、おれには関係ない。さゆりんが思い描いた通りになっているということだ。だから、おれは必要ない。

「そんなことより承兌、見てみろ」

おれは境内の隅の木を指差した。

「あの楓の木は去年は赤い葉を散らしていたけれど、今は青い若葉を茂らせている。当然のことのように見えるが、実は当然のことじ

ゃない。一日一日、違う姿を見せてきた。この世は当然のように存在しているように見えるけれど、当然じゃないことが刻々と積み重なっていって、さも当然のように存在しているんだ」

「何をおっしゃっておるのですか」

むっ。

「世を捨てたつもりですか」

承兌は怒ったような顔。

「拙僧は坊主であれど、世を捨てたつもりはありません。坊主は坊主なりに、やらなければならないことがあります。今の簗田殿はご自身がやらなければならないことを放棄したも同然ですぞ」

「うるさい！　お前に何がわかるんだ！　何も知らないくせに偉そうなこと言うな！」

馬鹿が馬鹿が。

おれがやらなければならないことだと？　そんなものあるわけねえだろうが。

やらなければならないことってのは、すなわち生きる意義ってことなんだ。それをやったとしても生きる意義に繋がらなかったらやらなくてもいいことなんだ。自己満足みたいなもんなんだ。

わーい、おれは生きているぞー。やらなければいけないことをやっているぞー。おれのやっていることは、この世の中に生きている一人の人間としてやらなければいけないことなんだぞー。

自己満足、乙。

そりゃあね、おれにはあずにゃんがいるし、家の連中もいるよ。そいつらの健康な生活のためにやらなければいけないことはあるよ。

でも、それって、おれがやらなくても、誰かがやっているし。太郎とか、さゆりんとか。シロジロとか。

ええ、摂津の工作を任されましたよ。でもさ、信長がいるじゃん。おれがやらなくたって、信長がなんとかするじゃん。なんなら、サルもいるし半兵衛もいる。

おれが頑張らなくたって誰かがやる。そして、おれには、おれの

ためにやらなければならないことなんてない。
だいたい、おれには本当に奥さんがいるのか。息子がいるのか。
おれは一体何者なんだ。何も持ち合わせていなかったおれが未来からやって来て、どうして、戦国時代で生きていたら、いろいろなもんを抱えるようになっているんだ。
おれはなんのために戦国時代で生きているんだ。いや、生きてきたんだ。
おれはこの時代で何がしたかったんだ。おにゃの子の服をくんくんしたいがために生きてきたのか。セレブになりたいから生きてきたのか。デュフフな生活がしたいから生きてきたのか。
大金持ちになろうと、この時代にはおれが欲しい物は何もない。
いや、未来でも欲しい物はなかったかもしれない。
デュフフな生活だって、おれには無理。もう、とっくの昔に気付いている。あずにゃん、さゆりん、あいりん、あーや、こんだけ可愛いおにゃの子に囲まれているのに、現実はハーレムなんて夢のまた夢。服をくんくんするぐらいが関の山。しかも泥棒で。
マサシ「何を言っちゃってんの。激カワ奥さんのあずにゃんがいるっていうのに、何を贅沢なことを抜かしちゃってんの。おれなんかね、おにゃの子の服にすら触れなかったんだからな。てか、リア充氏ね」
牛太郎「馬鹿か、お前は。リア充なんてのはいないんだ。人間ってのはある程度のものを手に入れると、それ以上のものを求めるシステムなんだ」
マサシ「じゃあ、今、お前が求めているものってなんだよ。さっき、言っていたじゃん。おれには欲しい物がないって」
牛太郎「欲しい物はない。ただ、求めているものは何かしらある」
マサシ「なんだよ、その求めているものって」
牛太郎「不明」
マサシ「不明じゃねえだろｗｗｗ　見つからないだけだろ、バーカｗｗｗ」

牛太郎「お前に言われたくねえ！　そんなこと、世界で一番、お前になんか言われたくねえ！」
マサシ「は？　何を言っちゃってんのｗ　おれはお前でお前はおれだろｗｗｗ」
牛太郎「ぐぬぬ」
マサシ「所詮、変わってないんだろ。お前はおれから変わっていないんだろ。どんなにリアルが充実しても、くされ根性丸出し。所詮、お前はおれ。意義のない日々。意味のない人生。ねえねえ、なんで生きてきたの？　ねえねえ、死ねば？」
牛太郎「どちらにしろ、おれは帰れないんだ！　もう、犯罪者みたいなもんなんだ！」
マサシ「カッコつけんなよ、キモオタ」
牛太郎「なんだと？」
マサシ「開き直ってキモオタやっていたくせに、今さら、変態扱いされてビビっているのかよ。何を背伸びしちゃってんの？　明智光秀にスゴイなんて言われちゃっているから？　承兌に期待されちゃっているから？　あずにゃんに惚れられているから？」
牛太郎「違う！　違う違う違う！」
マサシ「勘違いしているなよ。お前がここまで来られたのは、お前の力じゃないだろうが。信長とかマリオとかマタザとか半兵衛とか太郎とかがいたからだろ。あと、サルとか……」
牛太郎「……」
マサシ「思い出してみろよ、清州にいたとき、美濃攻めのときを。あのとき、お前をカッコいいと思っていた奴、スゴイだなんて思っていた奴なんていなかったから」
牛太郎「……」
マサシ「でも、誰もお前を見捨てなかった。見捨てようとすれば見捨てられたはずだ」
牛太郎「お前、誰だよ。おれじゃないだろ」
マサシ「自分の人生のためにやらなければならないことがなんなの

かなんて、最後まで生きてみないとわからない。最後まで生きてみて初めてわかるもんだ。おれはやらなければならないことをやってきたのか、それともやってこなかったのか。満足するか、後悔するかは、死ぬときに初めてわかる」

牛太郎「お前、誰なんだよ！」

マサシ「それを恐れていたら何も始まらない。ただただ後悔して死ぬだけだ」

牛太郎「死ねっ！」

マサシ「お前が死ね！　死ね死ね死ね！　後悔しながら野垂れ死ね！」

「父上」

鎧兜を着込んだ太郎が仁王立ちしていた。一人、供も連れずにかちゃかちゃと音を鳴らしながらやって来て、おれの前に立ち止まった。

柔らかい風が境内に初夏の香りを運んできている。若葉が日差しを透かしながら、そよいでいる。

「ここにおられると、十兵衛様から聞きました」

太郎はむっつりとおれを睨んできていた。

「何をお考えで、隠遁などしていたのです。髪も髭もそのように伸ばしっぱなしにして。皆が心配しておりますぞ。母上などは父上を探しに行くと言って聞かなかったのですからね。覚悟しておいたほうがよろしいですよ」

「太郎」

「なんです」

「お前はどうして愚将だと言われるおれに付いてきたんだ」

太郎はじっとおれを睨んでくる。

「おれをさんざん馬鹿にしてきて、おれをさんざんのけ者にしてきて、そんなお前なのに、どうしておれを連れ戻しに来たんだ」

「父だからです」

「愚将なのにか？」

「拙者の父は簗田左衛門尉の他におりません」
「お、おれが変態でもか？　たとえば、おれがおにゃの子の着物を泥棒して、こっそりその匂いをくんくんしていても、お前はおれを父親だって認めるのか？」
「なんですか、それは」
「あ、いや……」
「なんなんです、それは」
「いや、違う。たとえだ。例えばの話だ。たられば の話だ」
太郎はシラーッとした目でおれを軽蔑してきたが、それ以上は問いただしてこなかった。
「ともかく、こんなところでぼんやりとしている猶予はございません。拙者は左京大夫と弾正忠を討ちに行かなければなりません。父上、とにかく母上に文を出してくだされ」
そう言ったあとに、太郎はいつのまにかおれの脇に突っ立っていた承兌に頭を下げると、背中をくるりと向けて、かちゃかちゃと門の方向に歩いていく。
「待てっ！」
おれは腰を上げて、太郎の足を呼び止めた。
「おれも連れてけ」

愛したいだけ、ただ、愛しいだけ

夫が行方を断った。

ある朝、突如として堺の屋敷から姿を忽然と消したらしい。

早之介から送られてきた文を読んでみて初めて知ったのだが、すでに行方をくらましてから一カ月経っているそうだ。

旦那様から奥方様に何か報せはないか――。

梓に心配をかけまいと、早之介や四郎次郎は岐阜に報せないまま各方面に当たってみたが、それでも見つからずに、梓に報告してきたということのようだ。

「恐らく」

太郎が言う。

「早之介か四郎次郎と悶着を起こしたか、摂津の調略がうまくいかなくなってしまって家出をしたのでしょう」

前にもそんなことがあったな、と、梓は思った。

何かおもしろくないことがあると、あの人は逃げ出す。以前に家を飛び出した時は、自分の思い通りに行かないことに腹を立てて家を出、いくさが終わって岐阜に戻って来ても、怒っている女房を恐れて我が家には帰ってこようとしなかった。

「まだ母上がこの家に来る前、拙者が小姓であったときにもこういうことがありました。あのときも調略が思うように行かずに、菩提山の竹中半兵衛様の庵に籠っていたのですが、父上は臆病なゆえ、一度、どこかに籠ってしまうとなかなか出てきません。熊が冬眠するようなものです」

とはいえ、夫は摂津で危険な思いをしているというじゃないか。

もしかしたら、最悪の事態も有り得るのではないか。

「父上は簡単に死ぬような人ではありません。そのような人であったら、とっくに死んでおります。父上は死にません。ただ単に家出をしただけです。いずれ、冬眠から目覚めるでしょうから、今はそ

っとしておきましょう」
「しかし――」
「父上は疲れてしまったのでしょう。ずっと走り続けてきましたから」
太郎は微笑を浮かべてそう言うと、梓の前から立ち去っていった。
それもそうなのだけれど。梓は夫から贈られてきた唐物の香炉を手に取り、鮮やかな赤の模様をしんみりと眺めた。
どうして、わらわではないのか。疲れたなら、わらわのところに帰ってくればよいではないか。
所詮、自分はいつまで経っても織田の爪弾き者なのか。たとえ、夫を持ったとしても、男をこの掌で休ませるほどの器量がないのか。
もう、季節は春を終えようとしているのに、夜の続きは昨日よりも長くなったかのようで、風がいつまでも強く鳴いている。
わらわは一人なのだろうか。
織田の重臣家の末娘として何の不自由もなく育ったが、あの日から何もかもが信じきれなくなった。
上総介に輿入れする目前であったのが、当の上総介が馬借屋の娘、吉乃に一目で惚れこんでしまい、織田上総介信長という憧れの美青年に嫁ぐ梓の夢は儚いものとして終わった。
まして、それがきっかけとなって、兄の権六郎が上総介を見限り、上総介の弟を織田家の当主として押し立てようと目論んだ。
なぜ、そうなるのか。兄は上総介に近寄りたいがためだけに、自分を嫁がせようとしたのか。
兄はもっと自分のことを考えてくれていたのだと思っていた。
それから十年が経ったとき、なんとも頼りがいのなさそうな男が梓の前に現れ、運命が赴くままに、牛太郎と婚姻することになったしまったのだった。
しかし、梓は覚えている。
あっしは斬られようとも梓殿を愛します。
愛されるとはどういうことなのだろうか。いや、梓は姉や兄に愛

されていた。だからこそ、何を好き勝手にやろうとも咎められることはなかった。

でも、自分を何も知らない男、まったく縁もゆかりもない男に愛されるとは一体どのようなことなのだろうか。

愛されたい。

そして、今、この香炉が教えてくれる。あの男は自分を愛してくれている。紆余曲折はあったけれども、この香炉は夫が初めて自分に贈ってくれた物なのだ。

あの人は今、どこで何を思い、明日をどう見ているのだろうか。行方をくらますぐらいなら、どうして、この香炉を贈ってくれたのだろうか。

梓はいまだ若々しく澄んだ目尻を袖で拭いた。

愛されたい、愛してほしい、そんな思いは今はない。この物言わぬ香炉が愛しい。言ってほしい。疲れたなら、辛いなら、香炉よ、その香りを自分に教えておくれ。そうしたら、わらわはたった一人であっても今すぐに岐阜を立ち、遥か遠く、何かに嘆いている愛しい人に教えてあげる。わらわはいつもこの香炉を抱いていると。

そう、約束したではないか。たとえ何があっても、自分はあなたの味方であると。

それでも、自分のその思いがあの人に届いていないとしたら、自分はなんて情けない女房なんだろうか――。

梓は嗚咽を耐えられず、うずくまりながら香炉を抱いた。

わらわは味方じゃ。誰が何と言おうと、そなたが何をしようと、わらわはそなたの女房じゃ。わらわは自分をそう信じているのじゃ。

「母上」

戸の向こうから太郎の声がして、梓は鼻を啜った。

「母上」

「なんじゃ」

梓が問いかけると、太郎は戸の向こうで押し黙った。梓はひとしきり鼻を啜り上げ、瞼を袖で拭うと、背筋を伸ばして戸の向こうに

声をかけた。
「どうしたのじゃ、太郎」
答えはない。
「何かあったのか」
「いえ、母上の……、声が聞こえてしまったので」
「戸を開けなされ」
梓が言うと、しばらくの静寂が養母と養子の間を遮ったあと、がらがらと戸が開いた。梓はこの繊細な子に嘆きの姿を見せまいとして、瞼を腫らしながらも儚く笑んだ。
「聞かれたくはなかったの。しかし、わらわもまた泣きたいときもある」
太郎は廊下に両膝をつけたまま、うつむいている。
「わらわは幸せじゃ。亭主殿と太郎がおって」
この母は気丈であった。
太郎は瞼からこぼれる涙を押さえようと袖で拭ったが、拭っても拭っても、涙は溢れ出た。
太郎の脳裏に小姓に上がってから今まで重ねてきた牛太郎との日々が思い出されていた。沓掛城で初めて顔を合わせた日、墨俣築城で泥まみれになっていたあの日、生意気な口を叩いて牛太郎に殴られたあの日、姉川で共に勝利を目指したあの日。
幸せ者はこっちだ。あのとき、あの日、このような人にこうも思われる時が来ると思っていただろうか。
自分も牛太郎も、ようやくではあるが、とてもちっぽけだが、もっとも求めていたものを手に入れたような気がする。
「なぜに泣いておるのじゃ」
「母上こそ」
「そうじゃな」
梓は拭うこともせず、涙を頬に伝わらせながら笑っていた。お母さんだなあ。きっと、この世を去った実母もそう思っているに違いない。

「母上」
「なんじゃ」
「拙者が父上を見つけて参ります。必ずどこかにおりますゆえ、引きずってでも連れて参りましょう」
ふふ、と、梓は声を立てた。
「そっとしておいてやるのではなかったのか」
「いえ、気が変わりました」
「そうか。ならば、こらしめてやるゆえ、それとなく連れてくるのだぞ」
太郎は頬を緩ませながら頷いた。この青年になく、無邪気な笑顔であった

愛したいだけ、ただ、愛しいだけ（後書き）

このふざけた小説を読んでいただいて、有難うございました。皆さんの応援でここまで書けました。とても、感謝しています。

続きの物語は……あります

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４９６８ｓ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5737o/

キモオタの国盗り物語

2011年11月10日12時34分発行